KAIZO

造改

新年號

1928

堀江歸一著

（四六版 總クロース）

定價壹圓 送料拾八錢

英國預金銀行論

昭和二年のパニックは我國銀行の不始末を遺憾なきまでに暴露した。徹頭徹尾預金銀行たるべき市中銀行が、或は獨逸の企業銀行も三舍を避くる危險な營業を企て、或は其の公共的任務を忘れて暴利の獲得を事としたのが我國銀行の常態ではなかつたか？ 著者は預金銀行の本質を明かにし、我國の銀行をして創立當初の精神に復歸せしめることは、銀行界改善の一策なるを信じ、茲に英國預金銀行を主題とする詳細な研究を公にした。銀行の運用に一大革新を要すべき今日、財界幷に學界に本書の精讀を望む。

最新刊

發兌

東京市麹町區内幸町
幸ビルデイング一階
振替東京八四〇二一番

改造社

日本の經濟を何れに導くべきか

最新刊

進の學者、維新史の研究に沒頭し、既に發表した幾多の研究は學界の注意を惹いた。今回研究の結果を纒めて本書をなし、添ふるに幾多得易からざる資料目錄を以てした。國史の徹底的研究、我が國社會運動に深き關心を持つ學徒の必讀書である。

〔內容〕第一章、序論——第二章、西洋帝國主義の東漸——第三章、幕末に於ける社會階級と其の鬪爭——第四章——開鎖の論爭と其思想的背景——第五章、幕末に於ける國家論の發達——第六章、明治維新政府の經濟政策——第七章、自由主義の衰滅と國家主義の全盛——附錄、(一、我國大學敎育の發達と其社會的意義。二、明治維新と國民革命。三、日本に於ける貨幣經濟の發達。四、明治廿五年の勞働問題論)——明治維新經濟史文獻——明治維新經濟史年表。——索引

改造社

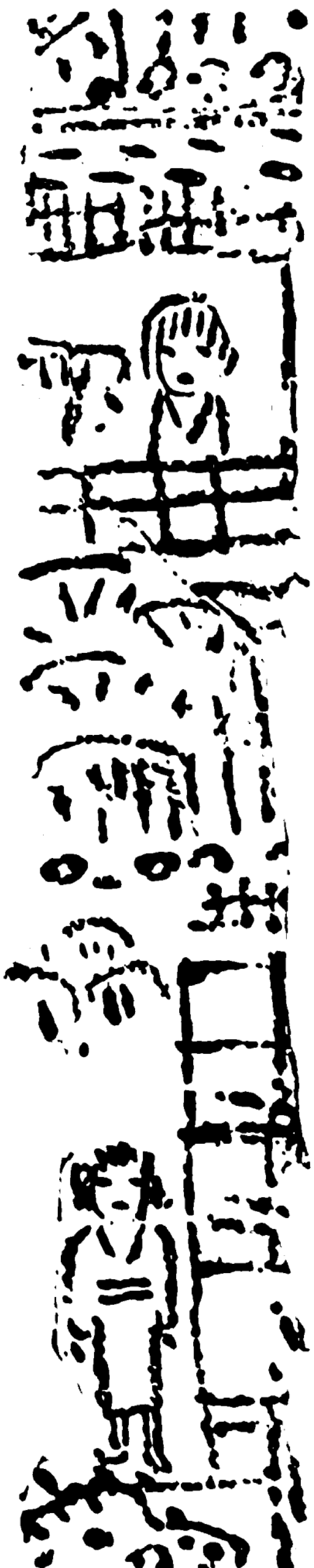




新聞紙、出版法改革案につき

現内閣の一枚看板であつた地租委譲もああしたことで一年延期となつた。我々は我々の關係深き新聞紙法案、出版法案に果してどれほどの誠意を政府が傾けつつあるかを思ふとき、そして警保委員會の顔觸れの殆んど總てが、現下の思潮に沒交渉の人々であり、そしてその有經驗者といふ委員側も現下の雜誌、新聞出版界及びその將來の傾向について殆んど色盲者のみであるを思ふとき――。これ等の時代おくれの人々によりてつくられる新聞紙、出版法案が我々の期待に添ひ得ぬものであることは明瞭な事實である。殊に本年に於ける我が國の出版狀勢の進展は目ざましいもので歐米のどこの國でも我に追隨の出來るものはない。今まではこの方面でも先進國であつた佛、獨、英、米の諸國も本年の我國のごとく大衆的に躍進した例は未だ曾つてなかつた。隨つて現時の出版諸法制及び慣例、その他附帶せるいくたの事情の變化に於て現在までの出版業者の夢想することさへ出來なかつたことのみである。そして諸種の變化がすべて多大に社會性を帶びて來たことを看取せねばならぬ。我々は今回の委員の顔觸れを見渡すとき、そこに舊法制に明るい人、雜誌出版界の舊事情を諳んずる人のみは數へ得るが、現時の社會狀勢に明るい人、そして現下の雜誌出版界の進む方向に見識を有つ人の全然缺如せるは奈何。とにかく轉換期の改革てふ意義づけをするに、殆んど舊法制定當時と大體變りのない頭の古い委員のみであることが我我を失望せしめる。政府者は此點に多大に留意し、現下の社會狀勢及び將來のそれに深く思を潜めて委員を更にこの方面に求め、以つて世の進運と並行する改革を斷行すべきである。そして議論はたいていにして必ず本期議會に提出すべきである。さもなくば地租委讓のそれの如く、政略案と稱されてもいたしかたないだらう。尚、我々はこれと同時に更に著作權法に對抗する出版權法の一日も早く制定せられることを當路に切望してやまないものである。

苦難十年のロシアを觀る



アンリ・バルビユス

ソウイエト社會主義共和國聯邦に於ける十月革命十週年を記念する數々の祝典は、モスクワの莊嚴なる大會をもつてその幕を閉ぢた。しかして、該大會は『證人たちの大會』とも呼ぶべき性質のものである。十月革命を記念するために派遣された代表者はその數無慮一千名を算したのであるが、この全世界からの參列者は社會の各層と、種々なる政治的傾向を代表するもので、共產主義者と稱するものは僅かその一割五分にすぎないのである。これらの人たちは、ほとんどあらゆる組織體、團體、運動を網羅したもので、その目的とするところはロシア革命の實驗的結果を明らかならしめるにあつたのである。

これらの觀察者は、ロシアの人々の慫慂を待つまでもなく（ロシアの人々はこの訪問者に對し、自由にあらゆる方面から、その國內生活の諸相を觀察させ、質疑に應ずることを役目としたのだ）自發的にその結論を齎らすべく參集したものであるが、道德的に、社會的義務に良心的である人たちは、この國の、、なる經驗の、心に命ずるところを結論とするであらう。

かの廣汎なる十月革命の捲き起した、思想的また物質的結果——今日に於てその安定を見、しかもなほ着々として進展しつゝあるところの——に對しては、すべての代表者たちはそれを直接に觀察し、記錄することによつていかにヨーロッパと世界の輿論なるものゝ、ソウイエト・ロシアの現實をあやまり傳へたものであつたかを實感したわけ

てゐる。

余は數日前、それら二三の代表者とはじめて接觸した時にも述べた通り、社會の根本基礎となるべき經濟的方面に於て、即ち、もつとも健實に、確實に、また具體的方面に於て、ソウイエト社會主義共和國聯邦は戰前のロシアのレベルを越してゐた、と指摘したのであるが、この確證はある種の、、を喚び起し、一部到來者の間にはさらに、ある種の疑惑をすら釀成したほどであつたのである。

かゝる確證はたしかに、、、なものである。そこには非常なる重大さが含まれる。何故なら、もしそれが事實とするならば、それは一國民ではなくて、古き世界に於ける一切の新らしい制度、すなはち社會主義制度の、、、、を意味するのであるからなのである。

しかるに、この日あつて以來、世界の隅々から來り集まつた人々はすでに他の人々がなしたやうに、また余自身が數ヶ月以來熱情をもつてなせしが如く、それを實證することを得たのである。この大會の期間に於て、世界の權威ある人々は、この歷史的××の報告によつて決定された否定すべからざる統計書類によつて、諸君にそれを實證し、するであらう。

次に余はそれらの概要についていささか觸れたく思ふ。それは、余が報告者として立ち入りし一切の討議の基調をなすところのものであつ

、、、、、、ならう。

帝政時代のロシアは御承知の如く、大農國であると同時に工業國でもあつた。これを農業方面に於て見るならば、一九一三年度の生産額は百十七億九千萬金貨ルーブルであつたのが、現在に於ては百二十七億七千六百萬金貨ルーブルになつてゐる。

更に、これを工業方面に於て見るならば、一九一三年度に於ける六十三億九千百萬ルーブルが、現在では六十六億三千七百萬ルーブルとなつてゐる。故に、ソウイエト・ロシアはその農業に於て十億、しかしてまた、工業に於て二億四千萬ルーブルの増加を示してゐる次第である。しかも、この單なる對照表の示す偉大なる雄辯は充分な説明とはなつてゐないのである。なぜかならば、この、、すべき立證は全努力に對する極く不完全な概要しか與へてゐないのである。

かくの如き努力の尺度を得んとするには、帝政時代の數字を以て發足すべきものではなくて、その以後の時代、即ち、ほとんど絶對的な破産狀態にあつた時代——そこから、、、、、、、、、、が新社會を建設したのである——に發足しなければならない。

思ひを當時に、めぐらすならば、當時ロシアは經濟的には瀕死時代にあつたのである。實際に近い極めて概略的な計算だけで——事實はそれではきかないであらう——帝國主義戰爭には四百億金貨ルーブル、

内亂には五百億金貨ルーブルを費やしてゐる。その上、一九二一年から二二年の兩年は、ロシア人民をしてその窮迫のどん底に陷ち入らしめたほどの不況時代であつた。更にその上そこには破壞以上のものがあつた。男子勞働力の三割は屠殺されてゐた。家屋、工場は破壞され、工具の大部分は全然役立たなくなつてゐた。かくして、まざまざと工業能力は戰前に比して一割七分、農業に於ては五割以上、畜産に於ては四割の遞減を見たのである。しかしてまた、運輸能力の如きも約五分の一に低下したのである。

勞働戰はかゝる狀態に於て――帝國主義戰爭、內亂の餘波をうけて開始され――雄々しくも、、を戰ひとつたのである。かるが故に、ロシアの復興事業はこれを十年にまたがると見るのは妥當ではなく、これを五年と見つもるべきである。

この點からいつて、工業は二億四千萬ルーブル、卽ち四割の增加を示してゐるといふのも穩當ではなくて、これは五ケ年で五倍になつたといふ方が妥當である。更にまた、この期間に於ける農業生產は二倍、海外貿易は三倍以上の增加を見たといひ得るのである。

さればこそ人民委員會議長ルイコフの公言は至當といへる。むべなるかな彼は先月レニングラードに於て『かくも[illegible]しき復興を示し

更にまた、經濟方面に亙る現在の數字は、ソウイエト聯邦の各方面に於て、常に不斷の、然して、迅速なる上向を示してゐることを見逃してはならない。われらはそれを統計の不斷の上騰と、時々刻々、年々歲々の迅速なる進行のリズムを以て、あらゆる方面に組織され、擴張されてゆくのを見るのである。今やソウイエト・ロシアの狀態は、面目を一新したと誰がいへないであらう。そは五年以前に入露せる人々の等しく認めるところであり、しかしてまた、五年後に於ては何人か今日の狀態を認めるものあらん。

その新建設、新企業に於ける眩耀するほどの改良は、步一步これを認むべく、すでにそれは國家五年計畫の將來に眼覺ましき躍動を與へてゐることを思はせるに充分なのである。かくして、ソウイエト・ロシアの勞働者並びに活動家たちは未來を把握し、各方面に於て實現の進展性を示してゐるのである。

ロシアの實現者たちは、かくも未來の事業を保證してゐるのであるが、そのプランなるものに示されたところによると、例へば、工業に於ては百八割の增進を計畫し、それの經濟的建設方面に七十億ルーブルを計上してゐる。國內市場に於ける商品に對する二十一割の値下げの斷行を目的とし、また、勞銀に於ては二十四割の[illegible]

くない。

だが、これら一切の說明をもつてしても、それをもつてソウイエト政府の建設的の、、明確なる概觀とはいはれない。ソウイエト政府のその建設的方面の最も、、を示すところのものは、それらの外に一切を徹底的に社會主義的傾向に盛り上げたことにある。二千萬平方キロメートルのこの國土が。――實にそれは地球の六分の一を占めるところのものである――今やそれは勞働を搾取された人々によつて、それらの人々のために、地方と都會のプロレタテールによつて、それらの人々のために、民衆によつて、民衆のために、しかして被壓迫民族によつて、それらの民族のために、完全に再建されたのである。

今こゝにその問題の方面を布衍するのは、余の役割ではない。といふのは外ではない。土地分配の手初めについてや（一億デシヤチンの廣さを有する）また、工場の國有、勞働管理の下におく工業機構、公益のための、、、、、、乃至はまた、一九二一年とその後個人のスペキユレーシヨンに重大な恐慌を齎らしたところのかの新經濟政策の問題、（今それは次第次第に改善されてゐるのだが、）社會主義的國產品の自由競爭問題、また、かの局限せられた富より出づることのできない有產農民、卽ちかのクラツクの狀態等に亘つて述べ立てべき役割を余はこゝには持ち合せないのである。

余はまた單なる證明としての以外に、最善の合理的耕作、農具の改良、新耕作の化學的實驗――より適合的で收益本位の――例へばまた、麥の生產能力を三倍に――、綿糸を二倍に――甜菜を三分の一倍にした等々の化學上の實驗等の成績についてはこゝに省略するであらう。

農民の利害、地方勞働者の利害、全ソウイエト聯邦の一般利害に割り出された、調和この上なきプランに基き、政府は技術的組織すなはち工業を目的とした政策によつて廣大無限なる農業地方を完全に工業化し、その上に、上記終局の目的の他に、政府はソウイエト聯邦内の特に地方民を苦しめるところの失業と戰つたのである。余は親しく中部ロシアに於て、ウクライナに於て、南部ロシアに於て、或ひはまた、トランスコーカサスの地に於て、無數の工場と工場のグループと數知れぬ大工事、道路、橋梁、電氣工場、乾燥と灌漑の大工事の施設されてゐるのを視察したのである。ドニエプル、スヴイル、リオン等の電力中心地、ドンからウオルガへの運河、シベリヤに於けるトルキユスタン鐵道等はこれらの廣大なる地方を活氣づけ、經濟生活を頻繁ならしめてゐるのであるが、それらは現下遂行されつゝある事業の最も大きなものとして代表的イメージといへよう。余の今こゝに試みつゝあるタブローをその全般的に於て完備せんとするには、賃銀の高騰についても一言せざるを得ないのだ。卽ち、一九一三年二五金貨ルーブル

だつたものが、一九二一年には八金貨ルーブルに低下し、更に、一九二七年には二八金貨ルーブルに上騰してゐるのである。更にまた、勞働時間制について一言するならば、資本主義ヨーロッパに於ては八時間勞働制を公然と撤廢せるもの、またサボタージユするもの、而してまた、それの正面攻撃をなすもののあるなかに、ソウイエト・ロシアに於ては七時間勞働制が發布されてゐる現狀なのである、更にまた、社會保險、勞働住宅、消費組合、敎化運動、技術もしくは社會の普通敎育、大學（三十一個の勞働大學）、圖書館、研究所、博物館、劇場、映畫、ラヂオ、古代とブルジョアの傳統的藝術を潑剌にし、再生するところのプロレタリア藝術の偉大なる進展について一言すれば、一切が新規だといふにつきる。更にまた、ロシアの學者が革命後世界の科學の稱讃すべきページの上に貢獻してゐることも忘れられない。ロシア革命の實際的事業は、また、完全なる建設にもその力を注いでゐる。健康と公衆衞生、施設の建設的方面の努力もまた忘れられない。この衞生施設の必要は、ロシアの一億五千萬の人口に對して一年々百萬の人口增加の要求に應じてなされたるものである。

最後に余は人道的にして論理的な方法によるソウイエト・ロシアの民族問題の實現に對しても一言するであらう。ロシアには帝政時代の暴力的同化の方法による四十箇國の被壓迫民族があつたのだが、中央政府はそれと關係を有する小共和國の諸國に對して財政的援助を惜しまない。しかして、かゝる待遇はこれらの諸國をしてかつての政府に見ることの能はざる、また、他のいかなる制度に於て知り得なかつたところの自由の發展に到達させてゐるのである。

こゝで余はしなくも、余のいはんと欲するところに達したのであるが、ロシアのプロレタリアはかの自力のみにて（ヨーロッパの無力は戰後アメリカから三百五十億ドルの借款をしてゐるのだ）しかも、全世界の敵對行爲と、憎惡の前に、更にまた見るかげもなき荒廢の上に、雄々しくも獨力で全人類の進步と平和の大陸的事業を建設し上げたのである。

こゝで余はちよつと說明に入りたいと思ふが、余といへどもロシアに對して無條件且つ盲目的讃美を呈するものではない。余としてはあくまで正當に、しかうして、場合によつては根本的な主要點、特筆すべきものと感動すべきものについては嚴密にお知らせするつもりなのである。それは無缺なもの許りとはいはれない。その敎育方面の如き、その勤勞階級の境遇の如き、特にまた、失業問題の如き（ロシアの失業者は百三十五萬と目されるが、その大部分は農民だ）これらの諸問題に對してはまた實現を要すべき幾多の進展が考へられるのである。

こゝでロシアの人々には、まづ第一に彼らのなしつゝある經濟的及び

社會的事業を過少視したがる傾向があり。彼らは口ぐせにいふのである、『まだなんにもできてない。やつと僅かしかできてない。』と。だが、事實は雄辯である――その事をはつきりとしておく必要があるのである。ロシアの事業は常に動的であり、非常に迅速な進歩を見せてゐるので、これを全體的に見るならば、、、、、わけではないが、今余が述べたやうにしか申上げられない。

その、、たる社會的には廣大に、國際的價値からいつて實に燦然たるものがある。

そは世界のプロレタリアの解放と、ロシアがこの地上に植ゑつけたところの被壓迫民族の解放といふ、、、なのである。

しかるに、余の極めて輪廓的にしか說明してないところのこの、、、しかして、その事業たるや現世を明かに風靡してゐるが如き―その事業は、世の誹謗と脅威とを一蹴し去つてゐるのである。

ソウイエト聯邦は帝國主義戰爭の侮どるべからざる脅威におびやかされてゐる。全世界の權力――人間による、、、、、、するところの一切の權力は――世界にたつた一つの民主主義の國として嚴として聳えてゐるこの國の周圍に怒號してゐるのである。ロシアの人々はそれを知り、またそれを知る故に、自衞するのである。

數日前モスクワのソウイエトが十週年記念會を大劇場で催した際、軍事人民委員會長ヴオロシロフは、『ロシアのプロレタリアは最初の十日にあつては建設する前に、まづ打ち破られたが、次に來るべき十日に於ては、ロシアのプロレタリアは、復興に先だつて、戰かはねばならぬことを餘儀なくされるであらう。』と述べてゐる。

西洋に於ても、東洋に於ても、われわれの間には近く大戰爭の勃發する可能性を信じないものがかなり多い。だが、我らはこの平穩な樂天主義者に要心しなければならないのである。と、いつてはつきりと見透された脅威に對しても輕卒に、それを信じていゝといふわけではむろんない。

世界の新らしい戰爭は、大衆の輿論の前にはほとんど眼に見えないほど無意識に動きかけてゐることは事實である。それはまたなぜだらう？大衆はそれを欲しないからだ。欲しないことが當然なことであるやうに！乃至はまた、もつとも先見の明ある人の中には、戰爭は論理的に必然なものであると假定するが、それを遠き將來のもの、すなはち、漠とした抽象的なものに看做してゐる趣もないではない。の種の輿論は、偶發事件が火急でない限り、それに手をふれさとはせず、隨つて、その存在を無視させる懷疑主義に誘らず知ひ込むのである。

更にまた、不和主義のイデオロギーは、この恐怖すべき現實を

なかの煙の如くぼやけさしてゐるのである。かうなつては、平和主義の宗教も、また阿片の如きたぐひと變りがない。かくして、人々は具體的事實から離れては曇つた、正義に眩惑するのである。かくしてまた、幻想の享樂にまどわされた人々は事實の進行に對してなんらの影響をも持たないのだ。そして、これらの人々は古い歌謠の調子に浮かれ、または空想的な大會のプログラムに醉はされ、或ひはまた、ロカルノやジュネーヴの御用テーナー共に、わけもなく聽き惚れてしもうのである。

しかるに、この雲を摑むが如き論據、花火の如き理論の前に事實は果して如何に？

今や、全世界のいたるところに於て、ソウイエト聯邦國々境の以外にあつては、かの驚くべき資本主義の機構は意想外の軍備を擁してゐるのである。イギリスの帝國主義はそれを代表し、且つ指導してゐる。今や、世界の帝國主義は戰爭を欲してゐるのだ。彼には戰爭が必要である。であればこそ、それの準備を怠たられないのだ。

ソウイエト聯邦はそれの障害をなし、眼をさへぎり、帝國主義の政策を時によつては痲痺狀態にする。その理由については、余は先ほど——一九一七年以來なした、、、、、、の沿革について前云つた通りである。この行動こそ限り知れない廣さに亘つた社會主義の經驗であり、また、その經驗こそは、、、、、してゐるものと看做さねばならぬ。かく觀じ來れば、赤色ロシアは自國の存在の唯一の理由のために、イギリス帝國主義及びその帝國主義と機械的に行動を共にせんとする他の諸國と排擠し合つてゐるわけなのである。そこには干渉がないのである。ただ模範がある。そして、その明快なる模範が大衆をひきつけさせ、、、させるのだ。

ソウイエト政府はその當然の立場から、他の國の內政には絕對に立ち入らないことを斷乎として誓つてゐる。ソウイエト聯邦は、陰謀をしないが、　、きわたつてゐるだけである。

故に、聯邦に對する攻擊は奈邊から來るか、よく呑み込める譯であらう。資本主義諸國は表面の見榮とはちがつて、經濟的、財政的に恐慌を來してゐる狀態にある。これは集合體の利害を個人の利害に、すなはち皆のものを二三のものに從屬せしむるのを驚くべきアノルマルの結果からなので、そして、ますます弱肉强食と、戰爭と、迫害の政策に威力を失つて行くのが資本主義國である。

それにはヨーロッパの現狀に眼を通しさへすればすぐわかるはずであるが、戰爭の危機は中には眼をつぶつたままそれが遠ざかつてゆくものと思ひ込む者もあるが。——いたるところにその前兆も見えてゐるのである。そして、その狀態は一九一四年と同樣に危險期にある。當

爭、人々は口ぐせにいつたものである『戰爭などは決して起るものではない』と。かうした狀態に或る點に於て、今も十二年前とほゞ同様なのである。そこには、遺憾ながら、あまりにもたやすく見すぎるところの、悲劇の對句を見出されるのではないか。

世界大戰後、戰勝の列國は、すなはち、アメリカを共犯者とする聯合國は、舊世界の地圖を改訂してしまつたのである。これらの列强は報復のためと、分捕品の、、のためと競爭區域の分配のためと戰術上、軍事上、統御するために好んで分裂政策をとつたのである。かくして古い國と新らしい國をして互に相對立せしめ、いくつかの步哨の國と憲兵の國とをつくつたのである。利害關係の係爭と敵愾心の煽動、それら一切が、戰爭成金のいはゆる外交政策なるものによつて、巧みに準備され、全然平衡を失つた斜面にあわや滑らんとする形勢を釀成しいかにしてみてもそれが一時的にしか保ちえない狀態におかしめるのである。

更にまた、われわれの記憶しなければならぬことは、世人の、戰爭は終熄したと、たわいなくも信じてゐることである。なるほど、その戰爭は、いかにも、六千キロメートルに亘る戰線を擴げ、また、五億の兵士を動かしてゐる戰爭はないかもしれないが、だからといつて、戰爭は終熄したとは看做されない。戰爭は現にそれをアフリカに於てアジアに於て續けられつゝあるのだ。戰爭はモロッコにこれを見、シリヤに、しかして、特にこれを支那に見るのだ。

すでに、イギリスは公々然としてロシアに挑戰を開始したのであつた。一九一八年イギリスは一萬五千の軍隊と、百四十の砲門と、九百八十九の機關銃を持つて北下したのであつた。イギリスはデニキンに二十五萬の銃と、コルチャックには六萬の銃、兩軍合して一千以上の砲門を供給したのである。

余は次に、諸君は御存知と思はれるが、イギリス政策がソウイエト聯邦にとつた政策の段階、かの暴逆にして僞善的な封鎖政策について述べるであらう。

その後封鎖の效力の薄きを知り、且つ、ヨーロッパの利害にとつてむしろ有害であると看做したイギリスは、一九二一年一月かぎりそれを撤廢することにしたのであつた。ロシアの新經濟政策が實施されるや、帝國主義の指導者たちは——ロイド・ジョージを急先鋒とし——新ロシアは革命の原則を裏切り妥協政策にうつつたといふ風に、彼らの腹の中では、それが漸次變形してゆくものと信ずるか、乃至は信ずる眞似をした。しかるに、ゼノア會議に於けるソヴイエト聯邦の抵抗（それはロシアの、、、、を放棄することを意味する點で、到底承認し能はざるところの難題であつた）また、獨露のラパロ條約の締結され

るに及んで、列強は、突如ロシアに對して暴逆と強迫外交政策とに早變りするにいたつた。かのカアゾン卿の有名なる最後通諜は威嚇政策の再開となつてローザンヌ會議に現はれ、イギリス外交はソウイエト艦隊の黒海に於ける覇權を自滅させしめんがために、ボスフオララス海峽の開放を獲得したのであつた。しかしてまた、ベサラビヤの奪略もこの時に於て容易ならしめたのである。同時に、イギリスやフランスの手先どもはその頃ほひからしてポーランドとバルチック沿岸諸國内に反ソウイエト聯合を結成せしめたのであつた。これらの手先たちは更に手をかへ、品をかへて獨露關係の友情をも之を破らんとし、一九二五年イギリスはドイツをしてロカルノ條約に調印せしめそれによつてまんまとドイツを引き入れることに成功したのである。

ソウイエト政府の承認時代は一九二四年に入つてから初まる。イギリス政府は目下ロシアとかの捏造文書を口實に手を切つてゐるのである。

フランスの政策にはやゝ煮え切らないものがあつた。フランスはイギリスの自個の利害から割出した支持によつて影響されたものであるが、その反露政策にいたつては敢て他にひけをとるものではない。かのルーマニアとの一九二六年の條約に示すとほり、その提携によつて、を與へてゐる。イタリアはやゝはつきりとイギリス側についてゐるが、最近の條約によつて同國はルーマニアの武裝をも引き受けてゐるの狀態である。

イギリスはピルスズキーのクーデターを助け、且つ、リトニア、エストニア、フインランドのフアッシイスト的クーデターを幇助してゐる。以上から推して、これらの國には常にあらゆる驚くべき方法によつて、その一貫した見通しを失なはれてないことがわかる筈である。かくて、列強は分捕ることの目的のために、手をさしのべることの實に巧妙な、やさしさを持つてゐる。假面ひと度落れば牙がむき出されてゐるのである。

イギリスは次ぎに何にを目論んでゐるのであらうか。

さらに、われらはイギリス帝國の現狀を直視するであらう。今やかの巨大なる帝國は現代のいはゆる歴史的混沌のなかにあつて、幾分困難、やゝ危險に瀕してゐるのだ、かつては海洋に、地上に、君臨を恣まゝにした彼のイギリスも、今やその權勢と活勞は一つづゝもぎとられゆくの段階にある。それは他ならない。他の今一つの帝國主義的强國が經濟的、軍事的に彼を凌駕せんとしてゐるのだ。アメリカである。かくして、英帝國は列強間の第二位となり、そ

國といふ名ばかりにすぎない。ドミニオンはすでに自治國となつてゐて、英本國との交渉に、その君主を一にするの外、わづか通商の協定とかいふ、それもかなりな稀薄な關係にしかない。かの手腕にかけたぼう大無限の支那もすでにイギリスの手からはまづ決定的にはなれたも同樣、インドは動搖し、その勢力を自覺しつゝあるもの丶如くである。また英本國に於ても、かの未曾有の階級戰に遭遇したのも最近の出來ごとで、イギリスの經濟界はこの炭坑の罷業で八百八十億からの損失を招いてゐると傳へられてゐる。

現今のこの帝國主義の、、、にあたつて、解放運動はますます固定化し、今やそれは世界的に結成を速進しつゝあるが、こゝで余はこの機に於て、社會主義の原則によつて指導されつゝある結合の結果たる本年二月ブリユクセルに開催された、反植民地大會について一言しておきたいのである。この會議に於て被壓迫民族の問題が明確に討議されたのであるが、この結成は勞働者の解放と植民地、乃至は半植民地解放戰における全世界的運動を意味したものであつたのである。

しからば、これらの動きが、帝國主義者の眼にいかに映じてゐるかといふに――余はくりかへしていふ――戰慄すべき破壞的手段をまだその掌中にしてゐるところの帝國主義の指導國は、武裝の對峙によつて一時的なりとも彼らのぐらつき出した權勢を維持安定しようとするのである。そして、また、彼らにとつて、、、、、、を屠り、且つ都に形成せんとしてゐる、、、、、の前に武力の堤防を築かんとしてゐるのである。戰爭は民衆にとつて、貪婪であり、反動である。

ここに改めて世界資本主義の、特にソウイエト聯邦に對する明白な利害について贅言するの必要はあるまい。例へば、コーカサスの石油のロシアの市場に於て、わけても重要なる點、また、ソウイエト聯邦の無盡藏とまでいはれる自然の富源の如き皆それであるが、こゝでは、ロシアはソウイエト制度の下に、勞働階級のためにそれを開發しようとしてゐるのである。外國の代表者たちはロシアにいたつて初めて、列國がロシア、、、、、、に對してあらゆる惡宣傳をなしたことの事實を知つた筈である。この人たちはまた、こゝに來るに及んではじめて、余自身もさうであつた、と同樣に、この種の驚くべき訛傳がひろまつてをつたことを目擊したわけである。なぜならば、これらの人たちはありのまゝのことをありのまゝ見たからである。であるから、われわれは今後まどわされてはならないのだ。それは實際に於ける戰爭の準備といふことである。ヨーロッパに君臨する似而非デモクラシーはたつた一つの實際上の進歩をもたらしてゐるのである。即ち、今後、支配階級と諸政府は、弱國の合併を目的と世界的掠奪の競爭を公然と表明しえなくなつたその事實である。だが、自國のみならず、ヨ

ーロッパの中心都市に於ける國際的通信網を掌握するイギリスは、それらの機關を通じて、スパイと僞造者の宣傳を撒布するの外、誹謗の組織的計畫をつづけてゐるのであるが、これこそやがて組織的武力手段と代るべき序曲ともいふべきである。なほ、イギリスはその外に、やゝもすれば挑發手段の擧に出づるのであるが、アルコス・ハウスの捜査事件などはその好例といふべきである。余は最近ロンドンの某紙上で、イギリスがリトアニアとソウイエト・ロシア間に締結した條約に對し、臆面もない威嚇的態度に出でゝるのを讀んだのであるが、その同じ新聞が一年以前には『支那人の無鐵砲な罷業にとつての良藥は斷罪政策に如くはない。』と、豪語してゐたことを記憶するのである。

と、また、さうかと思ふとイギリスは、その帝國主義的野望を全ふせんがために、かの老練な常套手段をもつて機會を巧みにとらへる。民國政府との係爭に於て、非常な衝動に打たれたイギリスの輿論は當初あるひは幾つかの活動的な委員會を組織し、『支那に手を下すな』をそのスローガンとしたのであつたのが、これは如何に！ 一たびかの南京事件なるものの惹起するや、百名ばかりの支那人と二名のイギリス人の死を傳へられるや、イギリスはこのイギリス臣民二名の死と、國旗の凌辱とを口實に、輿論の大々的宣傳に取かかり、果然、同國の輿論をして變節改論の硬政策に出でしめたのであつた。もとより、反ソウイエト政策の音頭取りであり、その指導者であるところのイギリスのみが、帝國主義國にかぎつたといふわけではない。そこにはフランスも控へてゐる。フランス、ヨーロッパ大戰の直後に於て不吉な役割を演じ來つたフランスは、常にプロレタリアの解放の運動に重壓を加へ、いたるところに於て反革命分子、並びに反動的、ファシスト的政府を幇助することに眼がなかつた。だが、フランスはソウイエト聯邦に對しては、どうしたものか割に怯懦である。さりながら、フランスの政策もまた、その大體方針に於てイギリスにあやつられてゐること、さらにまた、この國が一九一四年以來この國の資本主義閥によつて左右されてゐることを忘却してはならない。コルチヤツクを承認したのもフランスである。フランスはコルチヤツクに百三十八臺の飛行機と、四百二十四の砲門と、三百萬の彈丸を供給してゐる。フランスはまた、精神的、物質的にロシアの人民が敵とする白軍の將軍に援助を惜まなかつた。ロシアの反革命家、デニキンを初め、ペトリウラを筆頭にマクノ、ウランゲル、ジヨルダニアの輩にいたるまで（ジヨルダニアは英露の開戰をひそかに期待し、それを不可避なものと看做してゐる）…

かくて、パリは白色亡命政客、ダシユナキと、ムサヴアシトとそれの共謀者であるメンセキキたちの陰謀の巣窟の觀を呈してゐるのであ

る。そしてそれらの先棒に汲々として帝國主義に對してあつらひ向きの口實を與へ、憎惡の種を呈してゐるのである。

余の知るかぎりで、現在でソウイエト・ジョルジア共和國を承認してないのはフランスだけであると思ふ。しかも、フランスは人もあらうに、戰爭と虐殺の張本人であり、赤色革命により追拂はれた人間を同國の公の代表としてこれを承認してゐるのである。さらに、そのフランスはソウイエト聯邦との國交維持に反對であるところの反動新聞の、放縱そのものである惡宣傳を默過してゐるのである。

さて、これらの結論は必然的にいかなる結果をもたらすだらうか？不圖した張合が戰爭の問題にまで及ぼすことのあることはきまりきつたやうなことである。しかるに、かうした事件の一たび突發するや、それは、如何やうにも製造され得るものであるのである。しかして、かうした火急な手段による實例を知るためには現代史の古いところにまで遡のぼらずとも充分足りるのである。差しあたり、イギリスはどうしたか？ これだけのことでイギリスは——それ以上重大なことはいはずもがな——支那には原則として出兵をしない筈の列強をしてそれに參加せしむるために、上海と南京に戰艦を派遣するだけで充分でなかつたか？ しかして、他の列強のイギリスの行動を追つたのは潮前の權利を失權してはならぬといふ重要な理由があつたからである。

そこで、こゝが肝心なところである、事實が逆行された後に行動が開始するのである。しかるに、余の指摘したところの怠惰な、怯懦な樂天主義者たちは事實の不正確な點と、係爭の直接原因不備をたてにとつて信じたがらない。だが、事件のはつきりするしないは、その必要に迫まられてやつて來るものである。『戰爭は豫期しないところに勃發するものである』と、レーニンはいつてゐる。また、カール・マルクスは、『利益めがけて後退りをする資本家はゐない』といつてゐる。武器の重みかさなるだけで、事件を誘導し勃發させるに充分である。

イギリス、フランス、アメリカ、ドイツ、日本、イタリアの軍費は一九一三年の十四億弗から一九二六年の一躍二十一億四千萬弗に達してゐる。すなはち、七割になつてゐるのである。アメリカはゆうに千六百萬の軍隊を動員し得るといはれるが、そのうち三萬人は飛行家である。上記四列強の航空軍だけで一九一三年この方から約二十倍になつてゐる。しかして、こゝ三年の間だけで、約二倍になつてゐるのである。

さらに、ソウイエト聯邦を取卷く國々、フインランド、エストニア、リスアニア、レトニア、ポーランド、ルーマニア等に於てこれを見るならば、これらの國だけでも、一九一三年に於て全世界の分な[illegible]ものの四倍といふ航空力を示してゐるのである。

こゝで、余は簡單に結論をなすであらう。ロシアに於ては、內政的には革命の進路を阻止したり。變更したりする何物とてもないのであるが、外部に於ては依然として危機が存在し、且つ擴大しつゝあるのである。

そこで、われわれは、ソウイエト・ロシアの、、から學び得たわれわれの觀察を、これを、、、、、、、のために、、、にしなければならぬ義務をもつのである。しかり而して、我らは今そのはつきりした義務の形體を見るのであるが、それは他ではない。一に社會主義國家をそれの、、、、、、、、しなければならぬことである。

二に、それらの、、、、、、、、しなければならぬことである。しかり而して、この二つながらは切つても切れない共同の使命をもつのである。如何となれば、世界の各方面の勞働に從事する人たちが、眞に彼らがいかなる立場にあるかを自覺する時に、これらそのいよいよ伸びゆく實力と反省の點に於て未來の、、、、、、、、、、はその本心の命ずるところに行動するであらう。

モスクワの大會はそれに對し如何なる措置を採るべきやを決定した。余は信ずる。すなはち、この大會に參列した證人たちは彼らの歸國後、單なる宣言や修辭的發意に滿足することなく、自覺的な、進步的な人々の間にソウイエト聯邦共和國に對する正當な擁護運動を組織するだらうことを確信するものである。（於モスクワ、一九二七年十一月十五日）

新刊紹介

◆**半峯昔ばなし**（高田早苗著・定價三圓・東京市牛込區早稻田・早稻田大學出版部）

◆**論・想・談**（高畠素之著・定價一圓五拾錢・東京市牛込區矢來町六六・人文會出版部）

◆**蛙の放送**（澤田正二郎著・定價… 東京市牛込區矢來町六六・人文會出…

◆**小唄文庫第一篇 弦曲粹辨當**（湯朝竹山人選… 東京市小石川區表町一〇九・アルス）

◆**小唄文庫第二篇 浮れ草**（湯朝竹… 東京市小石川區表町一〇九・アルス）

◆**日本家庭大百科辭彙**（特價甲種二十二圓五十錢・丙種二十四圓神田區表神保町・冨山房）



貧乏の起原

長谷川如是閑

一　種々なる貧乏説

『世に貧乏神といふことあり、この神、いと小さきものにして小兒の如く倘小なりと。或田舍に貧窮なる農あり、又或人其の家農業の體を傍觀するに、彼の神、斂收の側にゐて、穀粒の入るものあれば手を以てまきちらし升俵の外に散失せしむ。傍觀の人おもへらく、貧困全く此の神の所爲ならん。竊に神を捕へ同村なる富人の家に持ち行き放ちたり、蓋しその富を惡んでなり。是より三四日經て、定めて彼の家損失のことあらんと又密に往て窺ふに、神斂收の側にゐて、穀粒の散出あらんとするものあれば一々拾ひて升俵の中に納め入れ曾て損失なからしむ云々』(甲子夜話)

貧乏神の性質に關してこれほど正確な記述はない。多くの貧乏神に關する記錄には、貧乏神の至る所、如何に富める環境に於ても必ず貧乏が發生するやうに記るされてゐるが、この貧乏神は、既に貧乏の在る所に於てその貧乏を增進せしめる働きをもつのみで、貧乏のない所では忽ちその威力を失ふのである。これは全く貧富に關する社會的事實に一致してゐる。

元來貧富の問題は、ヨーロッパ人とアフリカ人との何れが富み何れが貧しいかといふ問題ではなく、ヨーロッパなりアフリカなりの、一定の社會の裡に、貧しいものと富めるものとの對立が存在する場合の

問題である。即ち同一の生活典型を持つべき筈の同一社會に於て、一方に最高の典型をもつ群があり、他方に最低の典型をもつ群があるといふ問題である。一つ社會の內群として一方にヨーロッパ人あり、他方にアフリカ人があるといふ問題である。

されば同一社會內に異つた生活典型の發生した原因が貧乏の原因であらねばならぬ。貧乏なるが故に異つた生活の典型が生じたのではなく、生活典型の異るが故に貧乏が發生したのである。而して生活の典型を異にするものは必ず異る神をもつものであるから、同じ貧乏神が、貧と富との二つ異る社會的內群に通用する筈はない。貧者の神が富者を貧しくすることが出來ず、富者の群が貧者を富ますことの出來ないのは、天照大神がアングロ・サキソン人を如何ともすることが出來ず、オーヂンが大和民族に手がつけられないのと同じであらねばならぬ。

然るに、甲子夜話に於て貧乏神を捕へて富者の家に放つた男は、その神が富者の家に到つて變節した理由を次ぎのやうに解釋してゐる。

『貧乏神は其家の精神より生ずるならん。さればこそ富人の宅に移せば忽ち化して富神となる。恐るべし云々』（圈點筆記）

この見神家は、要するに、貧乏をもつて人間の心掛けから發生するものと解したのである。同一社會に於て異る生活典型の別々の社會群の發生したのは、もと〲同一生活典型に在るべき筈の人間が、誤た精神をもつことによつて貧乏群を形作るに至つたのであると解するものである。これは同一社會の群は必ず同一生活典型をもつ組織であるといふ社會學說――多くの社會學者の採用してゐる學說――に立脚したものである。これは古今東西の貧乏學者――貧乏を生活してゐる學者ではなく、貧乏を思索してゐる學者のことである。以下倣之――達の唱道し、今日の貧乏學者もそれを傳承してゐる『貧乏心掛け說』即ち貧乏の原因に關する『不道德說』。詳しくいへば、貧乏は、同一生活典型の下にある人間の中の道德的缺陷をもつものゝ運命であるといふ學說を採用してゐるのである。

凡そ貧乏の原因に關する學說には左の數種がある。

第一『不道德說』今云つたそれで、生活道德の破壞即ち生活行動の怠慢と生活意識の錯誤とが貧乏を生ずるといふもので、多くの貧乏學者の唱道する外に、一般的に敎師、敎科書、先輩、主人、兩親、地主、資本家、落語家、講談師等が、それ〲生徒、後輩、使用人、子供、小作人、勞働者、聽衆等に對して常に說いてゐる學說である。

第二『道德說』これは前說と反對に、貧乏は不道德に原因せずして道德に原因するとするものである。この說の文句は『富貴不道德說』

である。富まんがためには、あらゆる不道徳を行はなければならないといふことに、殆んど一般の常識となつてゐるが、道徳的であれば必ず貧乏するといふことを主張すれば多少非常識視される。されば、この『貧乏道徳說』を主張するものも、道徳的ならば必ず貧乏するといひ切るものは少ない。孔子も『不義にして富み且つ貴きは』といつて、義にしても富且つ貴きを得ることを半面に含ましめ、道徳的でも必ずしも貧乏しないことのあり得ることを暗示した。

宗教家には、この『貧乏道徳說』を採用するものが多いが、これは富者から寄附せしめるには、富が多くの場合不正であるといふ常識を構成せしめて、富者をして社會に賂ひせしめる――寺院に寄附することによつて――ためでもあらう。宗教家が『道徳必貧說』を固守すれば余りに富者に反感を起さしめる。それは教團にとつて致命的である。されば澤庵和尚の如きも、

『諸家の達者は皆財寶に富めるはなし。諸家にをいて何れなりとも、其家の達者といはれて富あれば道は達せぬと知るべし。陽虎が曰く。仁者は富まず、富をすれば仁ならず、道を學んで立身すべきと思ふべし、富人となるべしと思ふべからず。……富を願ふ人は、我本來の心公直なるを曲げて私をなし、我本來の心はもと清淨なるを不倫となしたるゆへに、有錢の家となるべし』

といつて『貧乏道徳說』を說いたが、しかしての間にも、

『立身は、我心の私曲を失ふて公直となし、汚穢を除きて清淨となりぬれば、名を求めんと思ふ心はなけれども、名世間に聞へて立身すべしと思はぬとも身を自から立つ、これ學者の力なり』

といつた。立身と富とは範疇を異にし、且つ澤庵は、立身について云つたのであるが、その反面には、やはり、孔子と同じく、不義でない富の有り得ることを暗示してゐると見ることが出來る。

この說の意識目的はいろ〳〵あるが、第一に說者自身の衝動としては、貧乏の地位を輕蔑せしめざるためである。大德も貧乏なるが故に侮蔑されては立場がない。これ達者の必ず貧なる事實を高調する所以である。より社會的の動機としては、前の「貧者不道徳說」や、後に擧げる『富者神權說』に對抗して、貧者の生存を主張する意識である。富の發生は、元來分配の不平均であるから、その事自體、社會的不安の原因である。これに對して多數の貧者は、アリストテレスのいつた通り『革命的』となる。この貧者の革命の衝動が意識化した時には、必ず『貧乏道徳說』となる。これは倫理學に於て『不德說』即ち『道德衝動說』の存する所以である。

第三『心理說』 これは貧乏をもつて生活事實ではなく、心理であるとする說で、前の不道徳說及び道徳說を『心理上說』と、

らば、これは『氣持ち說』といはれるものである。貧乏とは『氣持ち』に過ぎない。百萬圓の富者が九十九萬圓を損失して、一萬圓の生活に墮すれば、彼れは貧乏と感ずるであらう。一文無しが急に一萬圓を儲けたら、彼は大富者を以て任ずるであらう。而して共に間違ひではない。それは『氣持ち』を轉換せしめることによつて貧乏現象は忽ち消失する、これその心理的事實なる所以である。而してこの『氣持轉換』のメトドロギーを『知足哲學』と稱する。古今東西の哲學的貧乏學者の貧乏哲學は概ねこの『知足說』である。

第四『生理說』　この說は貧乏の原因を道德的の缺陷でなしに生理的の缺陷に基くものとする。生理的の缺陷のために、肉體的又は心的能力が低下して生活の能率を擧げることの不充分なるために貧乏するといふので、『道德說』と同じく、行動及び意識の低劣をもつて貧乏の原因とするものである。たゞこの說に於ては、その低劣を客觀的の原因に歸せしめて、本人を貧乏の責任から解除するのである。自然科學者は多く此說を採用する。

第五『素質說』　この說は恰も人間に人種に差別のある如く、同人種のうちにも本質的に優劣の別あつて、それがため同一環境に於いて生育しながら、性格的に、天才と凡才、智者と愚者、敏捷と遲鈍、狡猾と愚直、悧巧と頓間、等の區別を生ずる如く、經濟的に富者と貧者とを生ずるとするのである。この說によれば貧富は天分に應ずる報酬である、といふことになるので、從つてその哲學は『富者神權說』であり『貧者奴隸說』である。富者には富むべき天賦の權かあり、貧者には貧乏すべき天賦の義務があるといふのである。この說を國家としての貧富に適用したのが『優越人種說』即ち所謂『ゴビノー說』で白人中のある種は、他の人種を超越して富貴と權力とを獨占する素質を、從つて權利を、もつとするのである。

第六『運命說』　これは貧富は、全く機會であつて、機會はすべての合理的原因を超越した『自然』の不合理的決定である。人力をもつては勿論のこと、神力もこれを如何とすることは出來ない。機會が神力を超越することは左の有名な『天狗と樵夫との話』がこれを證する。

「北國にいやしき工の飛驒山にゆきて杉を採りてへぎて生業とする者ありき。ある時山中に杉をへぎて居たるに、ひとりの山伏の鼻の隆きが來りしを見て、心に不思議ものかな、天狗にやと思ふに、「汝はなにとて我れを天狗とおもふぞ」といふ。はやく去れかしとおもふに「汝など我をいとひて去れかしと思ふぞ」といふ。何にても心におもへばはやしりてとがむる程に、後には是非なく其の杉の枝の長くはへたるをつかね摘めて繩して括らむとしけるに、心ならず取りはづして枝剣ねけるほどに、その枝の末、天狗の鼻にしたたかにあたりしかば、「汝

は心ならぬものかた、おそらく[illegible]行き[illegible]ね。云々（貧乏童話）

即ち運命説は貧乏をもつて、天狗の仕業とするものである。この説は單説としてはとにかく、『知足説』又は『安分説』の實踐的基礎として一般に採用され、又貧乏の現象に對する本能的反抗を鎭靜せしめる意識目的をもつて主張されてゐる。宗教家の貧乏論は多くこの第五説に屬する。蓋し、宗教は不合理性をもつて一切を獨斷するものであるから、貧乏もまた不合理的獨斷に歸せしめねばならぬ。貧者は宗教的獨斷に盲從することによつて貧乏に安住し、身の皮を剝いでも『貧者の一燈』を宗教家に捧げるのである。

第七『人口説』　貧富は人間と生活資料との比例から生ずる。人間が少くして生活資料が豐富なれば富み、その反對は貧乏であるといふのがこの説である。マルサス説もこれに屬するが、古くはアリストテレスも此説を採つた。彼れは、プラトーの富の分配に對し、人口制限の問題を閑却することは貧乏の原因であるとその『政治學』で説いてゐた。今日の人口學者も、食料の生産と人口との比率を算出することによつて貧富を決定しやうとし、所謂『收穫の遞減』と『人口の遞增』とを貧乏の原因とするものが多い。然しその意味からいへば、敢て食料と人口との比のみから貧富が生ずるものではない。今日のやうに經濟的交通の自由な時代においては、所謂自給自足の社會とい[illegible]の社會は互に、生産物の交換を行ふのであるから、貧富に、食料の生産ではなく、一般の生産の多寡に原因するとせねばならぬ。で人口説はいひ換れば『生産説』である。人口增加が生産の增加を超へるところから貧乏が生ずると説くのである。然し、この人口説は、第五までの各説が貧乏の個人的原因を説くものであつたに對し、これは貧乏の社會的原因を説いてゐるのである。從つて此説は、人口と生産との比が社會的の貧富を生ずることをいつてゐるが、富んだ社會にも貧乏群が居り、貧乏な社會にも富裕群の居るといふ不思議な原因については何もいつてゐない。それをいつてゐるのは次ぎの『搾取説』である。

第八『搾取説』　これは所謂マルクス説である。これは、資本主義的生産組織に於て、生産者は自分の勞働を資本家に賣つて生活せねばならぬのであるが、それを買ふべき資本の增加率が買はるべき勞働の增加率即ち、勞働人口の增加率に及ばないところから、勞働の賣れ殘りを生ずる。それが貧乏である。これは然し、特に資本主義社會の貧乏の原因であつて、特殊の貧乏の説明である。即ちすべての富が商品の形でしか存在しない社會のことである。勞働もそこでは商品だから、それが賣れなければ、『勞働商』は勢ひ貧乏せざるを得ない。然し貧乏とは商品經濟だけの現象ではなく、すべての生活狀態に共通する

現象であるから、すべての貧乏は皆、資本と勞働との關係から發生する譯でないことはいふまでもない。

第九『掠奪說』 これは貧乏の發生學的見地である。國家は武力をもち教養をもち學術をもち藝術をもつ少數者が、多數の民衆を奴隷的に支配するところから起つたが、貧乏はさういふ社會形態の事實である。而してこの形態は、社會群と社會群との接觸より生じた戰爭の結果である。社會の內部にいろ〳〵の階級層が出來てゐるのは、その戰爭の結果が長く社會的分化となつて殘つてゐるのである、貧富は卽ちこの階級層として定められた一定の地位に伴ふ經濟的運命なのだから、その起原はつまり『掠奪』によつてゐるといふことになる。

かゝる見地を『人種鬪爭』と稱して、社會構成の自然過程と認めるのが、ラツエンフオーフアーやグムプロヰッツの社會學說である。これらの學說のやうに、國內の經濟的地位を決定してゐる群を『人種的』と稱すべきであるか如何うかは問題であるが、とにかく『人種鬪爭』說は、飽くまで發生的の原因を高調して社會の內的鬪爭を人種混合の現象から引離すことの出來ない現象とするのである。さればどこまでも、貧富が掠奪と關係してゐることゝならねばならぬ。此說によると、社會主義學說の『搾取說』も畢竟、一つの社會群が他の社會群から『搾取しなければならぬとなつた時に、他の部族が、卽ち少しでも異つた人間がこの搾取の對象に利用されたに相違ない』(グムプロヰッツ)の意味では平和的商業でも同じことで、『元來商業といふものは、その內的性質に於て、またその歷史的起原に於て、外國を搾取することであるから……商業は好んで常に異つた人種的社會要素、新規の異人種に對して行はれるのである』(同上)

貧乏は土地の獨占から起る、而して產業の進步は益地價を暴騰せしめるが、少しも賃銀を騰貴せしめないので、文明國ほど土地の獨占による利益が增進するのと反對に、賃銀は下る、從つて文明國ほど貧乏が增進するといふヘンリー・ジョージズムもある意味では掠奪說である。プラトンも、彼れの土地分配論がこの獨占を還元せしめやうとするものであるなら、土地の獨占を貧乏の原因とするものである。これらは、その獨占の歷史的過程を人種鬪爭の意味の掠奪に起因するものと認めた譯でないが、やはり廣義の掠奪說に屬するといへやう。

掠奪說も亦、社會群的に貧富の分かれる所以を說明してゐるものであるが、同じ社會群に於ける貧富の發生については明瞭に說明されてゐない。やゝ廣義の合法的掠奪說に於ては、その過程が賃銀と地代との社會的不公正によつて說明されてゐる。

二 生物學的條件

私は今こゝに、それらいろ／＼の貧乏說を批評するつもりではない。それらの各說は、貧乏を違つた角度から見たものとしてそれ／＼理由があるとも思ふ。然し始めにいつた如く、貧乏は異なる社會群が同一社會内に對立することに原因するものであるとすると、この對立關係の發生事情が貧乏現象の起原であらねばならぬ。貧乏はそれが社會群的特徵をなす時に問題となるので、一個の貧乏人の發生は問題ではない。從つて、道德說、不道德說、生理說その他、個人的特徵としての貧乏の原因は、その原因が社會的に支配し、全群的に影響した時の外、貧乏の原因として數へる必要はないものである。近代に於ける『社會的疾病』としての性格的缺陷も、それがために特殊の社會的の生活能力の減退となり而して現在の社會的貧乏群を發生せしめたのではなく、現在の貧乏群に於ては、それらの『疾病』は貧乏群發生の原因ではなく、その結果である。

然かも社會的對立としての富裕群と貧乏群との發生は、歷史的には前に擧げた『種族鬪爭』をもつてしても說明されるが、さういふ歷史の過程は、それに先在し、それの原因をなした所の特殊の生活現象に起因したものであることを知らねばならない。

種族鬪爭は、外群的關係——特定の社會を構成せしめる協同關係をもたないで、没交渉の間柄なる社會群同士の關係——にある社會群の接觸によつて惹き起される鬪爭說であつて、それが『種族鬪爭說』の主張する如く、後の文明社會における内群的關係にある社會群同士の鬪爭にまで、全くその性質を殘存せしめたものであるか何うかは疑問であるが、幼稚な社會が混合によつて尨大に發達する過程に於ては、確かにその鬪爭が種族的性質の衝突であることは疑ひない。それは確かにXの性質をもつた種族がYの性質をもつた種族と接觸して、XYの對立的社會を構成せしめる過程であつた。

社會群が接觸して鬪爭を生ずるには、その互の群の性質に必ず、一定の相違點のあることを——多少の例外はあるが——條件とする。それは丁度雌雄の接觸が、互の性格の相違から生ずるもので、その相違がないならば接觸をさへ生じないのと同じやうな事情である。性交は鬪爭とは違うが、然し鬪爭も亦接觸によつて互の性格的不足を充たし合ふ結果となる點に於て性交と似通つてゐる。鬪爭が極度の、、を伴ふことに於て性交に似てゐるのも、恐らくそれがある點で性交と共通の効果をもつものだからだらう。

然らば、社會群の接觸に於て鬪爭を生ずる條件たるXとYとの相違は、具體的には如何なる相違であるか。即ち内群的社會鬪爭を生ぜしめる生活過程の實質は如何なる性質のものであるだらうか。

それを私は、社會群の生物學的性質に於て見出すことを得ると考へ

る。生物學的性質とこゝでいふのは、生物の生態に於ける一定の行動の典型である。生物の特定の行動典型を生ずる過程に於て、人間の社會群の行動典型の構成過程が見出されるのである。

社會は人間群にのみ特有のものではなく、一般の生物群の現象である。形而上學的社會學者は、先天的超越的意志目的に於て、人間の社會を一般生物の社會と、本質的に區別さるべきものと認めるが、人間の『觀念』は、社會の所産であつて、社會を産むものではない。『範疇』が生活典型を産んだのではなく、生活の典型が『範疇』の意識を産んだのである。生活に先在して『規範』があつたのではなく、『規範』に先在して生活があつたのである。人間がさういふ意識の構成を始める以前に、遙か以前に、社會は作られてゐたのである。

それと同じやうに、社會が出來て後に發生したあらゆる現象――社會的諸現象――も、その現象形態の先天的約束を實現したものではなく、社會過程の機構の動的性質から、因果的に發生したものに過ぎない。それは、子供の産れることが、それを産む夫婦の存在に先立つて決定された約束でないのと同じである。

然るに、『先天性』の哲學は、生活經驗から抽象された意識を、生活現象の彼方に在る實在にして生活そのものを産む規範であるとする。即ち物差しが反物を産むと主張するのである。この哲學に於ては、動物の社會は社會ではない。何となれば動物の社會は『物差し』の産んだ反物ではないからである。

然し、禍福吉凶が夢によつて決定されるものでなく、あべこべに、夢が禍福吉凶によつて決定されるものである、といふ常識を失はない限り、物差しから産れた反物のやうな社會のある筈のないことは明かである。社會形態に先在してそれを決定すると信ぜられる『意識』が、意識それ自身をさへ決定し得るものでないことは疑ふ餘地もなく、從つて、社會形態は決して意識の狀態を決定條件とするものでないことも疑はれない。いひ換へれば社會過程は意識に反して過程し得る。否何人の意識にも決して一致しない過程をとつて來た。

貧乏群の發生は、決して一定の性格や一定の行動に必然的に貧乏なるべき因果關係が存在するためではなく、如何なる性格、如何なる行動も、ある社會關係の下に置かれることによつて、或は貧乏群たる條件をなし、又或は富裕群たる條件をなすのである。一定の性格、一定の行動に、先天的に貧富の運命が定着せしめられてゐるのではなく、その性格その行動がある關係に置かれることによつて、相對的に消極的又は積極的生活條件を――貧富――餘儀なくされるのである。

無論一定の歷史的期間に於ては、ある性格、ある行動は、恰も先天的に一定の生活條件を餘儀なくされてゐるやうに、それから脫れ難い

運命に置かれるのであるが、それは畢竟、その性格なり行動なりをその生活狀態に固定せしめる一定の社會條件が持續されてゐるからであつて、決して性格乃至行動自體の絶對的運命ではない。

然し、生物の生存條件には限界がある。ある性格、ある行動は決して絶對的に一定の生活狀態に固定せしめられるものでないとしても、それが生存條件の限界に達すれば、決定的に消極的運命を餘儀なくされる。怠惰の生活群は必ずしも絶對に貧乏に運命づけられるといふことはないが、しかしそれが一定の社會狀態に於ける生存條件の限界まで怠惰であつたら、その群は貧乏どころか必ず滅亡するであらう。故に、ある性格乃至行動は、社會狀態が如何なる變化を經ても決して生存の限界を踏み外づす性質のものでないが、他の性格乃至行動は、生存條件の限界を踏み出すことによつてその群の滅亡を招くべきものであることを推定し得るのである。

これらの事情を具體的に說明するものは即ち、先きにいつた、社會群の生物學的性質である。

社會の生物學的性質は社會構成の第一條件である。社會は、その構成のあらゆる他の條件を失つても恐らく直ちに解體することはあるまいが、その生物學的條件を失へば、忽ちその形態をも存在をも失ふのである。それに丁度、人間があらゆる他の生存條件を失つても直ちに死滅することはあるまいが、その生理的條件を失つたら一日も生存することの出來ないのと異らない。

然も社會にとつてその生物學的條件は、人間に於ける生理的條件よりも、更らにその二次的生存條件に喰ひ入つてゐる。例へば、人間の場合には『道德』の萌芽が生理的條件の中に胚胎してゐるとは認められないが、社會の場合に於ては、その生物學的條件のうちに社會的道德の萌芽が強度に存在してゐる。言ひかへれば、社會の生物學的條件は社會結合の機械的梃子たるばかりでなく、その有機的動因をなすものである。生物の本能による社會的行動の形態は、人間の社會的行動のそれと本質的に共通のものであつて、科學的に單純化された社會結合の行動的要素は、恐らく生物の社會結合のそれに還元されるであらうとさへ考へられるのである。二次的性質の行動要素は、個人に於ける道德意識のやうに、時代や環境やの變化によつて絶へず生滅するが、一次的のそれは遺傳學說の敎ゆる如く、永久に不變の性質をもつて、人間の社會結合の行動的要素を形作るであらう。

貧乏といふ人間社會の現象が、たとへ人間社會特有のものであるにしても、その如何なる部分に於て、人間社會に於ける二次的性質に規定され、如何なる部分に於て、生物社會に於ける一次的性質に規定さ

れたものであるかを知ることは、貧乏の社會的必然性が何ういふ性質に於て人間に絶對的のものであるか又はないかを知るために必須の方法であらねばならぬ。

それがためには、生物の社會狀態の單純なものほど、その方法に役立つ譯であるが、然し人間社會のそれと共通の何物かを求めるのであるから、或る程度まで進んだ社會であることを要する。それに適當な生物社會は、恐らく蜂又は蟻の社會であらう。しかも後者がより適切であることは一般に認められてゐるので、私は茲で、蟻の社會に關する專門家の研究に基いて卽ち蟻の研究に就て世界の權威たるホヰーラー教授の記述及びローマネスが有名なる『動物の叡智』に蒐集した諸家の記述並びにダーウヰン、ブウヴイエ等に基いて簡單に考察を進めて見やうと思ふ。

三　蟻の社會の特徴

對立的社會群の成立する過程卽ち生活典型を異にする社會群が內群的結合を生ずる過程について、生物の社會に於てその要素的性質として認められる現象は、蟻のある種と他の種との間に戰鬪その他の接觸が行はれることである。而して戰鬪の場合に於てはある種の蟻は攻勢をとり他の種の蟻は守勢的地位をとるのであるが、その場合攻勢をとる蟻は必ず比較的反社會的——孤獨的——の生活典型をもち、さうして肉食的であるに對し、守勢をとる蟻は、必ず社會的の習性をもち且つ菜食的である。

蟻は元來肉食虫であつたが次第に菜食となつたのである。それがため蟻社會の進化は人間のそれに比べられる。人類社會の進化の順序を、ある人類學者は、狩獵期、遊牧期、農耕期、商業期、産業期、知能期の六段階に分けるが、その最初の三段階は蟻の社會に於ても同樣である。蟻の最も原始的のものは全く昆虫を常食とし、狩獵期の人間に相當するのであるが、その最も幼稚のものは、食料を大量に得ることが出來ないので、大群を作ることが出來ず、極めて人口の少ない地下の生活を營んでゐるが、それが肉食の豐富な熱帶地方に於ては、發達して所謂『兵蟻』なるものとなる。これは領土を可たり大きく取ることによつて充分の食料を得る關係から大群を構成し、その猖獗なるものは、非常の大群をもつて遠征を試み、その道に當るあらゆる生物を襲ふて喰ひ盡し、人間もその群の來襲に遭へば暫時家をすてゝその蹂躪に委ねゝばならぬ程で、繋がれた家畜などは無論その餌食になる。

第二期の遊牧期に入つた蟻は、主として蜜汁によつて生活する。この蜜汁は直接木から吸ふか又は他の昆虫の吸つたのを蟻が貰ひ受けるのである。蟻は、蚜虫、蠟虫、葉蚕等の草食虫を觸角で叩いてその吸つ

た汁を吐き出させて飯ふのである。従つて此等の昆虫を蟻は全力を盡して保護し、その蛹や幼虫を、自分のそれよりも大切にする。ある種の蟻には、蜜蜂のやうに巣を作つて蜜を貯藏する。又ある種に於ては、群中のある蟻が、多量の蜜を吸ふて、その腹を身體不相應に大きく膨らして、歩くこともならず、巣の天井に喰ひ下つて、外の蟻に蜜を供給する役目を引受ける。かくして第二期に於て社會的性質が充分に發達する機會を得る。さうして他の昆虫さへもその社會に包容するに至る。

第三期の農耕社會を作つてゐる蟻の有名なのはアッタ一名パラソル蟻と呼ばれ、木の葉を喰ひ切つて、それを傘を差したやうな恰好で捧げて巣に運んで行く蟻である。この蟻は、その木の葉を細かく嚙み碎いて海綿のやうにして巣の床に置くと、その上に小さい菌類が生長する。それを彼等の食物とするのである。アッタにいろ〳〵の種があるが、その種が違ふと耕作する菌類も違つてゐて、定つた菌の外に決して違つた菌類を繁殖させない相である。

この種に發達した蟻は、大體に於て、非常に大群の生活を營み、その一群の人口十萬乃至六十萬の多きに達する。この程度に達した蟻の社會の『人爲』的農耕狀態は、殆んど人間のそれを凌駕し、北部メキシコのやうな非常な荒地で大規模の耕作を行つて莫大な食料を貯藏し、周圍の人間共を垂涎せしめてゐるといふことである。

かくて蟻の社會には、戰鬪的の侵畧民族又は遊牧民族と平和的な農耕民族とが存在することになる。而してこの事が、群の混合を引起す動機となるのであるが、その過程にはいろ〳〵ある。ホヰーラーはそれを左のやうに分類した。

（I）社會的寄生々活

A　複棲

一、强盜（Cleptobiosis）
二、竊盜（Lestobiosis）
三、隣人的（Plesiobiosis）
四、保護（Parabiosis, Phylacobiosis）
五、賓客（Xenobiosis）

B　混合群棲

一、奴隷（Dulosis）
二、一時的社會的寄生々活
三、恒久的社會的寄生々活

（II）Myrmecophily（蟻が主人となつて他の昆蟲を共棲せしめる生活）

一、受刑侵入者（Synechthraus）
二、寬容された客（Synœketes）

三、同卓會食者 (Commensals)

四、賓客 (Symphiles)

五、外部寄生々活者 (Ectoparasites)

六、内部寄生々活者 (Entoparasites)

(Ⅲ) Trophobiosis (蟻と他の草食蟲との交渉生活)

Ⅳ) Phytophily (蟻と植物との交渉生活)

今本論に必要の限りに於て説明すれば、『強盗』は、身體の小さくしかも慓悍た蟻が、他の種の職蟻即ち勞働蟻の貯藏食糧を掠奪することによつて生活するもので、この群はその棲家を被掠奪群の側に構へて、恰も富士山に於ける寳永山の如き形で、生産的の群の蟻塚の山腹に自分の蟻塚を作るものである。『竊盗』はより狡猾で從つて有利の生活法である。それは小さい蟻で、人口稠密の蟻群の巣に隣つて自分の巣窟を設け、その隣の巣へ間道を作る。それは自分は通れるが先方の蟻は通れない小さい穴なのである。竊盗蟻は自由に此穴から隣の巣に出入して食糧を盗んで來て、生活する『隣人的』といふのは、數種の蟻が組合つた巣を作るが、決して相通ずる廊下を作らないので、たゞ食物を融通したり、共同の敵に對して共同戰線を張つたり、所謂隣人的に生活をするのである。『保護』は、互助的の組織で、共同の巣を作

を定めて敵に當るのである。『賓客』は、異種の群蟻が接近して巣を作り、廊下によつて通坑を設け、その一方の蟻が他方の室を訪問して、そこの主人の背を叩いて蜜を吐き出させてこれを吸ふのである。これは全く片務的で、客蟻は、原則として常に隣家の主人の吐く蜜によつて生活してゐるのである。どこまでも御客であるから、その子供までも主人側の巣で育てさせることは許さない。でいつまでも混合群を生じない。然し、人工巣を作つて、別々の室を與へずに、同室に棲ましめると、主人も自分の子供と客の子供とを一緒に育てることを許して混合群が出來る。自然の狀態に於てどこまでも別箇の群形態を保つ。

以上は蟻群がいろ〳〵の形で互に交渉はするが、つひに混合群を生じない場合であるが。Bの『混合群棲』は即ち、外群が混合によつて内群關係に統一されるのである。

その第一は『奴隷』であるが、これについてはダーウキンが『種の起原』で可なり委しく記述してゐる。それによると、奴隷蟻の存在はフランスの動物學者ピエール・ユーベーが始めて發見したのであるが、それは Formica rufescens であつた。この蟻の生活は全然奴隷蟻に依頼してゐて、その助けを得ないとつひに死滅してしまうのである。此種の雄と多產の雌とは全く生活上の仕事をしないで、通常の蟻にあ

ない。巣を作れなければ子供を育てることも出來ない。巣を移轉する必要の生じた時にも、主人種の蟻は全部奴隷群に銜へられて移轉するのである。ユーベーは三十箇所の主人蟻を奴隷から引離して、食物を與へ仔蟲と蛹とを附けて置いた所が、自から食物を食う事も出來ないで大半死亡してしまつた。そこへ一箇の奴隷蟻（F. fusca）を投入れるとその蟻は直ちに生殘りの蟻を養ひ、巣を作り、仔蟲を保護し、忽ち形勢を挽回した。又ダーウヰンが同じくユーベーの發見した他の奴隷使役蟻（F. sanguinea）について實驗した所によると、この蟻は、たゞ少數の奴隷を使役し而かも主人が自から食料蒐集その他の勞役を負擔し奴隷は主として家内勞働に働くらしい。而して移住の際には主人が奴隷を啣へて行く。ダーウヰンはこの『奴隷』の發生について想像説を述べて左の如くいつてゐる。

『本來奴隷でなくとも、余の見たやうに、他種の蛹がその巣の近くに散在してゐれば、それを運んで行くであらうし、さうすれば、それを食物として貯藏してゐる間にこの蛹が發育することはあり得るであらう。さうして主人の何の氣なしに育てた蟻が生長すれば、自分の本能に從つて成し能ふ仕事をするであらう。もしその存在がこれを捉へた種にとつて、有益であることが確かならば、——もし職蟻を捉へることがこれを産むよりも遥かその種にとつて有益であるとすると——始めに食料として集められた蛹を捉へたことが、自然淘汰によつて、奴隷を作るといふ甚だ違つた目的のために一層努力され且つ永久的となるであらう。而して一度びその本能が得られた曉には、……自然淘汰はその本能を增進せしめ且つ變形せしめ——その變形がその種にとつて有益であると假定すれば——つひにその蟻は rufescens 種のやうな意氣地なく奴隷に依賴するやうに作り更へられるであらう』。

ダーウヰンが想像した奴隷發生の過程は、ホヰーラーの研究によつて始めて明かにされた。sanguinea 種の女王は、自分で獨立して群棲を作ることが出來ないので、その結婚飛翔の後に fusca 種の群棲を襲つてそこにある蛹を掻き集めて自分の身體で蔽ふてしまふ。もしこの侵入に對して反抗する職蟻があれば女王は忽ちそれを噛み殺してしまふ。そのうち fusca 種の繭が孵化して職蟻が生れると、それが侵奪者たる女王を恰も自分の親のやうに養ふのである。女王はまたやがて自分の卵を産むがそれは生長すればそこに sanguinea 種と fusca 種の混合群が出來上る。この前者の種の職蟻は母の性質をうけて隣近所の fusca 種を襲つてその子を奪つて職蟻とする。然し、この性質はやがて減退するので、久しからずして、先住の fusca 種は絕へて sanguinea 種のみが殘り、從て混合群は單純群になつてしまふ。これを短期、急性又任意型の奴隷制と呼ぶ。

Polyergus の種に屬する、ユーベー氏が『アマゾン』と呼んだ蟻は、Formica 種を奴隷とするが、此の奴隷使役者は全く自活の能力も子供を生育する能力もない。けれども戰ひには勇敢で、フスカ種はこの種の接近するのを知ると大急ぎで逃げ出してしまう。もし抵抗でもすれば忽ちアマゾンのために頭を噛み砕かれてしまう。此のアマゾンも亦、始めに女王がフスカ種を襲つて、そこの女王を殺して、その蛹を奪ひ、やがて自分の卵を産みつけて、それから出來た子達が掠奪戰を行ふのである。しかも此の種の掠奪は前のサンギニー種と違つて、永久に已まないので、これを慢性的、不隨意的奴隷制の創設者と呼ぶ。

Strongylognathus 屬の數種にも奴隷使役者があるが、その種の職蟻は、他種の幼虫を奪つて奴隷狩りの戰爭を行ふ。その場合には此種は奴隷を戰爭に伴つて行くが、その奴隷は、自分の種に向つて戰爭する主人のために働いて自分と同種の子を奪つて來てそれを養つて自分の種を繁殖させる。從つて主人の種は全く此の奴隷種を繁殖させる手段に使はれたことになる。奴隷と主人とが實際上の地位を顚倒せしめて、奴隷の方が主人たる實徵を占める。

次ぎに混合群に屬する第二の『一時的社會的寄生々活』であるが、これは一種特別の女王をもつ種の生活の發展である。フォルミカの數蟻の數倍の大さであり、中には職蟻の千倍も大きい女王がある。この小女王は、同じフォルミカに屬する他種の巣に紛れ込むと、小さいので氣づかれないでゐるうち、自分の卵を産む。それが主人側の職蟻に育てられて混合群を作り出す。然るに此の寄生々活者は、親の女王と違つて異種即ち主人側の種に對して遠征に出掛けることをしないので、やがて主人側の女王から産れた子達が死に絶えると、その群棲は、全く寄生々活者の群だけのものとなつて榮へる。ホヰーラーはそれを皮肉つて『これは賤しい、卑屈な寄生々活者が、數世紀を經て、華やかな堂々たる支配者となるといふ人間の組織に甚だよく似てゐる。』といつてゐる。

この類で甚だしい例は、Bathriomyrmex decapitans 種で、其の女王は Tapinoma nigerrium の群棲に接近して態と捕へられ、その巣に引ずり込まれると、忽ちそこの職蟻どもに攻撃されるが、ずるい女王は主人側の大きなタピノマ女王の背に乗つて脱れる。やがて主人群の臭氣に染みて攻撃を脱れるのだが、主人の女王の背に乗つてゐる間に、此の侵入女王は、私かに主人の女王の首を噛み切る仕事をしてゐる。そこから decapitans の名を得たのである。さうして主人の女王が死ぬと、自分がその代りになつて卵を産み、主人群の死に絶えると

第三の『恒久的社會的寄生々活』に、全然職蟻階級を失つた蟻の生活である。この種に甚だ多く世界の各地に亘つてゐる。此種の若い女王は他種の蟻の巣に入り込んで歸化して、前の一時的寄生々活の女王と同じやうに構へる。その場合主人側の女王は必ず自分の職蟻に殺される。侵入女王の子は互に交尾して繁殖するが主人側の職蟻のゐる間だけ生存が出來るので、それが死に絶えると、侵入した種も死んで、社會は滅びる。

ローマネスによれば蟻の世界の戰爭の最大の原因は奴隷狩りであり、さうして農耕的の種と戰鬪的の種との戰ひである。が、農耕民族同士も食料問題のために戰ふことがある。さうしてその場合は最も近い種の戰爭が最も激烈である。さうして期間も長い時には四十六日も續いた例がある。然しこの戰爭は食料となるべき植物の種子を爭ふもので、奴隷狩りと目的を異にする。従つて戰爭の目的も人間的で互の繁榮の爲めに戰ふと見える例が多い。マックックの擧げた例に次ぎのやうなのがある。

ある古くからある群棲から十數ヤード離れた所に他の種が新らしい都市を築いた。農蟻は一定の範圍を領土として他の侵入を許さないものであるから、十數ヤードに新らしい巣を作るときは戰爭の虞れが充分にある。果して、舊都の蟻から戰が仕掛けられた。その大群は新都に侵入して市民を引ずり出して虐殺した。若い植民軍も身體こそ小さいが勇敢に抵抗した。衆寡の差が著しいに拘らず新都の市民は攻撃軍を悩ました。組打の敵味方が市の入口の周圍十吋から十五吋の間に散らかつて、大地は殆んど死屍をもつて蔽はれた。新都の市民は大い敵の足を斬り、寄手の老兵は、敵の頭や腹を嚙み切つた。戰は二日に亘つて行はれ、無數の蟻の死屍と、斷ち切られた首や胴やが幾百となく大地にころがつた。

然し、マックックの觀察によれば、兩者の巣が、もつと近い所にあつても必ずしも爭を起さないのだから、領土の强弱以外に何か立場の相違が兩者の間にあるのだらうといふことである。さうして近隣同士の蟻は、丁度、文明人の隣國同士のやうに戰ふが、その戰爭の原因が何であるかを知らうとしても、人間の戰爭に於けると同じく到底解ることではあるまいといつてゐる。

次ぎに Myrmecophilis 即ち蟻と他の昆蟲との共棲生活について簡單に說明すれば、第一の『受刑侵入者』とは、ある小さい蠅の一種の幼生が蟻の幼生に寄生して、蟻が蛹を作る時には一緒にその裡に監禁され、蛹が虚になつて捨てられた時にそれから逃れるのである。第二の『寛容された客』は一種の客人で、二つの職蟻が相對して一方が蜜

を吐いて他方に吸はせる時に、その傾中に飛び込んでその蜜を吸つて逃げ出す客人である。主人公はそれに氣付かず、氣付いて追ひかけやうとしても、二人で抱き合つてキッスをしてゐるので、遲れて間に合はないのである。第五の『同卓會食者』は、一種の小さい蟲で必ず對を爲して蟻の身體にとりついてその蜜を吸ふのである。その對を爲してとりつくのは、重量を平均させて蟻の負擔を輕くしやうといふのである。蟻はそれにたかられた時には取り去らうとして閙くが、少したつと忘れてしまつて、平氣でその重荷を負つてゐる。第四の『賓客』は、小さい甲蟲で、その分泌物を蟻が非常に好む所から、蟻はその甲蟲を好遇し、その安全を保障して、その子供を、蟻は自分の子供よりも大切にする。その結果、自分の子供を粗末にして、種の大損害を來すことがある。第五の『外部寄生々活者』は、前記の寄生々活者の外部に寄生する者に名づた別名であり、第六の內部寄生々活者とは鱗翅類、膜翅類等で卵を蟻の頭部に產みつけて、それが頭の內部に喰ひ込んで行つたりして、內部に寄生するものである

（次號完結）

産業政策に於る社會主義の方途

――金融資本主義下に於る社會運動の活路――

蠟山政道

一　各國の無産政黨に産業政策ありや

現今の日本に於る社會運動に關する議論は、多かれ少かれ、「論爭」の形式を帶びてゐる。やれ「克服」だの、やれ「排撃」だのと言つて、まるで十六世紀の宗派的政論そつくりである。現在のやうに、無産政黨の陣營が數個のセクトに分立してゐる狀態からしては、それは「必然」な現象であるかも知れぬ。又社會主義のイロハを述べたり、社會運動のA・B・Cを說いたりする啓蒙時代の過ぎてゐる今日では、實際上そうした論爭に入るのは「當然」でもあらう。

だが、筆者は依然として吳下の舊阿蒙で、かうした論爭に浮身をやつす氣にならない。そこで、かうした宗派的論爭に超越した立場から、現在の歐洲諸國に於る社會主義が、その上を蔽ふてゐる金融資本主義の世界經濟的體系の中に於て、各自の立場よりして、その産業政策を通して、活路を見出さんとしつゝある方途に就て、聊か見聞し、思索したる所を述ぶることにする。かゝる高踏的立場は、無産階級の階級的立場が夫々尖銳的に對立しつゝある今日に於ては、徒に有産階級の肯定となり、援助となるのみといふ非難のあることも、先刻承知であるが、それはさう見る人の自由であり、勝手であるとして、筆者は暫く自己の是なりと信ずる所に從ふのみである。

ここに歐洲諸國に於る社會主義と言つても、總ての國の、總ての黨派に就て語らんとするものでもなく、又現實に諸國に於る最も有力な支配的傾向であるものに就て言はんとするものでもない。先づ、第一に、明瞭にして置かねばならぬことは、コウミンターンに屬する各國の共産黨に就ては、ロシア共産黨の對內政策を除き、全く當面の問題に就て語るべき何物もないことである。その實勢力から言つても、そのイデオロギーから言つても、彼等には未だ自己の政黨に大衆を引き入れんとする政黨的戰術と他の黨派の政策又は立場の意義及び限界に關して、一定の理論的信條による暴露的批判あるのみであつて、自己の積

極的案策を有たぬのである。即ち彼等に許さるべきは、資本主義が存續する限り、又彼等以外の社會主義諸派が之に代り得ざる限り、之を非難し罵詈し得る道德的根據のみである。即ち惱みある人の存する限り、天國を約束する說教者の存在が許し得られると一般である。然し乍ら、一歩を進めて、その說教の內容に至ると、政治的手段の萬能に就て語るのみで、その產業政策に就ては、ロシアの現に行ひつゝある對內政策に見るべきものある以外、何物も有たぬのである。この意味に於て、彼等の間から、この種の產業政策の提示の無き限り、全然之を看却して差支ないのである。試に、この提言の正當なることに疑を有たるる人は、コンミユニストの美德として唱えられる例の自己批判によつて、政黨組織の擴大や勞働組合の指導やに關する彼等の「誤謬」や「弱點」を擧げてゐる處を見れば、彼等の實勢力やその戰術の如何を知ることが出來よう。昨年の十二月コウミンターン擴大執行委員會に於て、產業の合理化に關する勞働組合內に於る共產黨員の立場に就て、ロゾウスキーの試みたレフエラートの中には、十箇の誤謬や弱點が擧げられてゐるが、何一つこの資本の攻勢手段に根本的に對抗し得る案策は數へられて居らぬ。總ては共產主義の政治上のイデオロギーの影響にあるが、組織的勢力の進展が見られぬ、と云ふて、それに對する術策が述べられてゐるに過ぎぬ。何故に、イギリスやドイツやフランスの勞働者階級の大部分が、資本に對抗する爲に共產黨の指導は勞働組合內部の問題では無く、勞働組合の經濟組織全般に對する政策に懸つてゐるのである。即ち勞働組合の產業政策なくして、カルテル、トラストの發展による產業の合理化などに對抗する方法は見出し得ぬのである。

この點に就て、共產黨と結果に於て同じく、その產業政策を持たぬものに、改良主義的勞働組合及び勞働黨がある。その最も極端なものは、先年英國に於る總同盟罷業に際して、完全にその黃色組合主義たることを示したハヴエロック・ウイルソンに率いられてゐる船員組合や炭坑組合聯合より脫したスペンサーに從へる一部の炭坑組合の如き、又ドイツ中央黨に屬する基督教勞働組合の如きがある。これらの勞資協調組合は、全く論外として之を除き、なほ一般勞働組合の支持を受けつゝ無產階級政黨にしても、改良主義的方策以外何等の產業政策を有たぬものが多い。最近に至るまで、英國勞働黨、獨逸社會民主黨、佛蘭西社會黨の如きも、大體に於て、改良主義的彌縫策以外何等の產業政策を有たなかつたのである、勿論是等の政黨が、社會主義を實現せんとする政黨であると言はれて來たからには、生產手段の社會化だとか、產業管理への勞働組合の參加だとか、種々な要求を陳列した綱領を有つてはゐる。社會主義と言へば、、、、、、、、、、、、、、を意味する位に考へてゐる位であるから、そうした綱領は、立派な產業政策ではないか、と云ふ人があるならば、その意味に於てなら、旅

[illegible]と同じく、[illegible]に今日まで綱領の政策として役立ち得ないものであることは[illegible]で、彼等の實勢力を以て無產階級の解放と向上とに貢獻し來つたのは、社會政策的方面である。勿論このことは、これら第二インタアナショナル——今日では正確な名稱は社會及び勞働インタアナショナル——に屬する諸政黨が改良主義的イデオロギーに全く支配されてゐると云ふ批判を正しいとするものではない。これらの諸政黨の中には、そうした批評を正當に受容れねばならぬ分子の存することは事實である。然し、そうでない分子もある。而して、それら改良主義的イデオロギーに滿足しない、それによつては無產階級の解放の到底期し得ないことを自覺してゐる分子——英國勞働黨內の獨立勞働黨及び獨逸社會民主黨內の舊獨立社會黨分子等が、從來の產業國有案やギルド社會主義的產業管理案を以て、今日の事態に相應しない、時代遅れの政策であると認めてゐることは、我々の注意しなければならぬ所である。この意味に於て、その綱領に於ては舊式な社會主義的方策を掲げて置いて、實際行動に於ては社會政策的施設にのみ努力してゐる幹部的勞働黨及び社會黨には、未だ產業政策なしと言つても過言ではないのである。

然らば、我々の研究に値するものは、その實勢力から言つて未だ幹部派となり得ざるものではあるが、その方策の理論的內容が眞に產業政策の名に値するものを有ち、漸次に勞働大衆の支持を得つゝあるものでなければならぬ。即ち、理論的に見て、それが現代の高度資本主[illegible]ものでなければならぬ。古き集產主義的社會主義が實行されたとしても、部分的な變化が生ずるだけで、大衆の生活を向上せしむるやうな經濟機構を可能ならしむるものでないことは、歐洲戰爭の結果として發生した種々の經驗によつて漸次に明白となつた。ロシアに於る產業の國有が經營困難であつて新經濟政策によつてその仕組を變更した事實、ドイツ革命の直後社會民主黨の社會化法案の失敗に歸した經驗、戰後に於るイギリスの工業不振の事實は、產業の生產組織のみに原因してゐるものでないことが理解されるに至つたこと等が、古き諸政策の役立たざることを教ゆると共に、新たなる方策を樹立するの必要を悟らしむるに至つたのである。そうして、これらの事實の因由は、總て、現在の資本制經濟の發展階段が、從來の諸政策の考案された場合に、未だはつきりと意識されなかつた金融資本主義的體系と帝國主義的世界爭覇なる事實の存在に發するのである。

然らば、この事實を最も明瞭に把握し、又理論的に基礎づけたものは、ロシアのマルキシストであるから、その政策に見るべきものがありやしないかとの質問が出よう。成程、レーニンは資本主義の最後の段階としての帝國主義なる概念的構成を試み、資本主義の沒落段階に入れることを證明した。而して、政治的方策として、この帝國主義的世界體系の連鎖を切斷することによつて、帝國主義的資本主義國への

打撃が與へられるといふ目安を置いた。そして、先づ、ロシア自身に於て、この連鎖が一部分絶ち切られた。この事實に、ドイツ共產黨の一理論家アレキサンダーによれば、全世界の六分の一の地域に於てプロレタリアートの獨裁が存續して居り、その覇權の下に全勞働大衆が根本的に新たなる法則、新たなる傾向並びに資本主義的諸國に於けるよりも異つた發展の範圍を以て一社會を建設しつゝあると、云ふ事實である。更に又、支那に於る國民革命の進展が、この帝國主義的連鎖を弱める可能性あるものとして、いろ／＼理窟がつけられ、實際にも助力が加へられた。所で、モスコウよりペキンを經て、更に今度はジュネーブへの道が開かれた。國際經濟會議や軍備縮小會議への參加はこの政治的方策の延長と見られよう。これらの諸行動が、どれだけ世界經濟の帝國主義網を切斷するに役立つたか、又役立つであらうかは、見る人の自由な判斷に委すとして、それらの諸方策が產業政策でないことは明かであり、帝國主義國における勞働者階級の運動をどれだけ有利なものに導いたかは全く疑問である。この外に、ロシアのマルキシストの有する、帝國主義への解放運動の政策のあることは、筆者は寡聞にして知らない。されば、これをしも充分な政策であり各國の勞働者階級殊に多年帝國主義的分け前に與つて來た熟練勞働者の支持を受けてゐる英、佛、獨の勞働諸政黨が採用するに足るものであると辯ずる者あらば、それは蓼食ふ蟲も好き／＼であると云ふの外にない。

ストとは異つた社會的條件の下に、異れる理論の下に組み立てられてゐるものである。地球の大きさの何分の一の國であらうが、世界全人口の何割に當る國であらうが、それは問題でなく、そこに行はれてゐる政策やイデオロギーのみが研究の對象となるのである。その點からして、我國と客觀的條件の異るロシアのマルキシストや支那のコムミュニストに筆者は學ぶべきものを有たぬのである。

二　過去に於る無產政黨の經濟綱領は何故に現在に役立たぬか

獨逸社會民主黨のエアフルトの綱領の解說を書いた後、カウツキーは一九〇二年に『社會革命論』を公にした。それを更に補足したものとして見られるのが、一九〇九年の『權力への道』である。これらの文書は、當時の彼が修正派と闘へる記錄であり、正統派マルキシストの經典として、今日の共產主義者がレーニンの文書に對するが如き取扱を受けたものである。當時彼はドイツの帝國主義様相を如實に認識し、社會民主々義のみが之に對立し得るものであることを力說し、勞働組合に對しては總同盟罷業の武器を使用し得る力の自覺を認め、議會政黨に對しては、ブルヂョアとの聯合內閣を自殺的行爲として絕對に排斥したものであつた。それから十數年が經過した。その間に歐洲戰亂の大きな經驗が與へられた。そして、彼は一九二一年にゲーアリッツ綱

あ、この三十年の間で[illegible]相違は、時代の變化が齎らしたものであつて、論理的に誤りしもので無いとし、ゲーアリッツ綱領の不備を前提として、寧ろエアフルト綱領の古き部分の修正とも見らるべき解説を試みたのである。エアフルト綱領の作者としてはさもあるべき事であるが、その如何なる部分が新しき事情に相應するものとして、新に加へられたか。それは凡そ三つの點が重大な變化と見られる。その第一は、產業の社會化のみを以てしては、勞働者階級の所得は增加せず、引いてその物質生活の向上は期し得ぬとする點である。このことは二つのことを意味する。一つは我々の物質生活を構成する諸要素の充足は、社會化された產業からの所得に據らずして、他の社會政策的施設の提供するものによつて間接に可能とされ得ると云ふことである。交通、衞生及び教育等に關する公の施設の發達これである。即ち社會主義の立場より見たる社會政策の重要性である。他の一つは、生產手段の社會化が現在の產業組織の態樣に應じて、出來るだけ廣く擴大されねばならぬといふことである。故に、その社會化の形式は複雜なるものとなるが、それによつてのみ社會化された各個の產業が維持せらるるのであつて、孤立した形式に於る社會化產業の維持は困難である。第二は農業に於る小經營の存續を容認し、それを社會化する方法に就て考案したることである。その場合最も困難なるは、消費形態としての家族と經營形態としての農場との分離を如何にして可能ならしむるか、である。なぜなら、小經營[illegible]をして家族の消費より離して[illegible]つて行けるやうにしなければならぬ。これに對して、カウツキーの意味する所は、國家管理の下にある組合組織であるが、これによつて都市の消費者階級の利益とも調節し得るものと考へてゐる。曾つて小農の一向らなる沒落を描いて、手工業のそれと同一視してゐたエアフルト綱領の場合と格段なる進步と言はねばならぬ。第三は、信用及び金融制度に關する意見を加へたことである。商業資本及び生產資本の統一的形態たる金融又は信用資本の職能に就ては、一九〇九年の頃ヒルフアデイングは既にその研究を試み、やがて『金融資本論』なる大著を公にしたのであるが、銀行制度の社會化の方法に就いて論じたものは、獨墺の社會民主黨中の文書としては、一九一九年のオットウ・バウアーの『社會主義への道』を以て嚆矢とする。彼は、銀行の社會化なる現象の他の生產手段の社會化と異なる處は、信用賦與の機關即ち理事者の社會化を企れば足りる點にあるとなし、その理事者の新なる構成方法に就て暗示深い意見を述べてゐる。そして、カウツキーは、バウアーの意見を受け銀行制度の國有を以て產業の社會化の前提條件となしゐることは、寔に注意すべき事柄と言はねばならぬ。これ第一の點として述べたる產業社會化の所得政策としての不備に對すると共に、從來の集產主義的政策に對する顯著なる相違と言はねばならぬ。

然し乍ら、カウツキーの議論によつては、この政策上の變化が果し

て奈邊に胚胎し、その全幅の意味が如何なるものかを知るを得ない。獨逸社會民主黨の合同後一昨年ハイデルベルヒ會議に於て新なる綱領が起草された。この綱領の起草者として多くの役割を演じた者はヒルファデイングである。彼は、この新綱領の中に、從來の綱領に曾つて現れなかつた政策を執り入れた。それは金融資本の成立に伴ふ、國內市場に於るカルテル、トラストの獨占的傾向と國外市場に於る帝國主義的傾向との兩面的樣相を有する、最近に於る資本主義發展の認識と之に對する社會主義的案策である。即ちこの二つの傾向は一箇の事實に胚胎するものであつて、決して異れる二つの事實ではない。從つて、先に述べたる如く、ロシアのマルキシストがコムミンターンの政策として、この後者の傾向を政治的に打破することによつて、前者の破滅を齎らさんと企圖せし如く、ヒルファデイグは專ら之を國內問題として前者の傾向を經濟的に阻止せんと試みてゐるのである。即ち產業の社會化に就いては、單に個々の所有權そのものの移轉のみを問題とせず、その相互の企業組織を中心として、その企業の內部經營は勿論販賣市場の組織化に力點を置いたのである。而して、その產業系統の重心が、その資本構成の關係上、國內市場の開拓を目的とせず、一向に帝國主義的發展を遂げんとする重工業より、食糧品工業、化學工業等國內大衆の購買力に依據すべき工業に推移せんとする傾向を歡迎し、ここに勞働組合の賃銀政策の槓桿を求めんとしてゐるのである。筆者は、尙ほその具體的細目に就て知るを得ないけれど、ヒルファデイングの見解が、ともかくも一箇の理論的背景を有する筋道の取れる案策であることを思はざるを得ない。ドイツ共產黨の理論家達が、彼の政策を批評する場合に、その議論は多く、この根本問題に觸れぬ支葉末節に就て、徒に彼の議論が資本家擁護であると罵つてゐるに過ぎぬ。

カウツキーやヒルファデイングの意見を通して見たる獨逸社會民主黨の最近に於る產業政策の一傾向とその揆を一にし、然かもその前提と內容とに於て一層獨創的であり且つ遙かに精微なるは、英國勞働黨の一分子たる獨立社會黨の『今日に於る社會主義』に現れたる產業政策である。資本主義の發祥の地として、資本主義制度の發展に就ても諸國に先んじてゐる英國に於て、その資本の構成狀態の發展よりして生じる失業者の增加、利潤率の低下を防がんとする賃銀の削減、及び各國產業の發達にある外國市場の喪失等、英國產業の生產力を維持發展せしめる消費力即ち大衆の購買力を減損する事實が、戰後に至つて發生し、漸く永久化せんとしつゝあるは怪むを須ひない所であらう。これが、何故であるかを説明する理論は容易に發見し得られる。しかし、それが對策は容易に樹立し得られない。ここに、獨立勞働黨の『今日に於る社會主義』の使命が存するのである。產業革命より大衆帝國の建設に至るまで、英國ブルジョアジーの播きたる種は次第に成長して、今や彼等の手に統御し得ざるに至つた。これを刈り取らねばならぬ運命に立つたものが、英國プロレタリーアなのである。

しかも、英國のプロレタリーアが、今から三十五年前ブラッドフォ

ード市に於て、その第一回の年次大會に於て[illegible]、その經濟綱領として示されたものは、社會政策的施設の列擧の外『生產分配交易の集產化』といふ一項だけである。それが如何なることを意味するか、又如何にして行はれるものであるか、に就ては皆目詳細は論議されて居らなかつた。一九〇〇年勞働黨に加入し、之が設立分子となり、爾後次第に黨勢を擴張し、勞働黨の指導分子を多く自黨より出した。マクドナルド、スノーデンの如きその代表的人物であるが、何れも此の時代の思想の如何なるものであつたかを語る人々である。彼等は、或る特殊の問題又は方面に就て專門的に堪能であつても、その經濟政策の基調は集產主義を中心として、後年サンヂカリズムやギルドソシアリズムの影響を多少なりとも受けて、工場の經營、生產の統制等への民主的要求を加味したに止まる。斯くの如き思想の下に、歐洲戰爭を迎へ、又之を送つたのである。而して、その爲めに蒙りたる激甚なる變化を思ひ合せたる時、勞働者階級の經濟狀態を改善するものとして、種々提案され來つたものが、今や悉皆空疎なものと化し終つた感が痛烈に經驗されたのである。そこで、一九一八年ライスターに開れたる第二十六回年次大會の際、新たなる事態に相應し、それらが、戰後長く持續すべきものなりや否やを考察したる上、いままで意識せられなかつた社會力を統制し得るやうな提案を作成し、新なる綱領と爲すべし、とする決議がなされた。その結果はどうであつたか。戰後に於て經驗したるデフレーションの事實、失業の增大等の現象を

[illegible]り表示された經濟綱領は今日では數國のパンフレットに[illegible]說明せられ、數冊の書物によつて敷衍せられるに至つたのである。實に面目一新とはかくの如き場合に使用せらるべき形容詞であらう。

ブレルスフォードは、この新產業政策の建設と普及とに貢獻せる人であるが、その著『今日の爲の社會主義』（一九二五年）『政權への道』、『家族と所得』等の著書及びパンフレットを一瞥する人は、その政策の基調の何處に存するかを知つて、それが甚しく往時のそれと異なるもののあるを悟るであらう。彼は生產手段の國有又は公有を以て依然として重要なる社會主義的政策であるとなしてゐるが、物價を支配する機構を統制し得ざる限り、我々が假令工場や農場を社會の手に移したとしても、現在の企業主がその工場や農場以外の外界の力に叩頭せねばならぬと同じやうな運命に逢着するであらう、となしてゐる。この事實を具に經驗した者として、此の點に想到するのは當然のことであるかくて、一連の次の如き政策が生じて來た。一般物價の安定を期する爲め、銀行信用の科學的管理、原料品、食糧品の長期契約に依る大量購買（國家の監督の下に於る產業組合）之れである。然し乍ら、物價の不安定より生ずる生產者及び消費者の困難は、之れによつて救へるとしても、市場の制限又は狹少より生ずる生產力の停頓は、如何ともするを得ない。大英帝國の科學的發展を以てするも、世界全體に於る帝國主義的分割の固定化は漸く英國工業品の市場に制限を與ふるに至つ

た事實は否定することができない。これに對する案策は、生活賃銀制度又は家族所得政策の實施による大衆購買力の人爲的增加を以てする國內市場の開拓に在りとするのである。この場合に於ても銀行信用制度の役割は重要であり、通貨膨張に伴ふ物價騰貴の抑制を如何にして實行し得るかが至難な問題となる。それは、生產の增加を確保することに依つて、インフレーションの事無きを得せしむるにある。ここに生產一般に亘る社會的管理又は統制の必要が生じ、重要なる產業の國有化が問題となるのである。卽ち生產手段の社會化は、アプリオリ的な目的ではなくして、生產增加の手段に外ならぬ。從つて、その實行方法は金融市場、交換市場の國家統制の下に於る組織化の行はれたる後に行ふを寧ろ便宜とする場合が多いと云はねばならぬ。かくの如き見解と昔日の集產主義とを比較するならば、その差異の顯著なるに驚かざるを得ない。社會主義と言へば、何か固定したドグマであるかの如くに思ひこんでゐる人にとつては、かやうな變化の意味が理解せられないであらう。進んで、かやうな主張の含蓄する意味とその根據とする理論とに就て、今少しく論述して見よう。

三　新產業政策は如何なる理論的根據を有するか

歐洲戰後相重つて發生した諸事件は、一般の人心をして、自國產業[illegible]

日く各國に於る保護關稅戰、日く中立市場の帝國主義的爭奪等の現象之れである。しかも、これらの現象は、詮じ詰めれば、各國に於る產業組織の生產力が充分に發揮せられると、その生產品の購買者の有效なる需要が存在してゐない、といふマルキシスト等に月並な生產力と生產關係との矛盾の一適例と見られるものに外ならぬ。早い話が、戰時中巨大な購買力を以て商品市場に立ち現れてゐた國家が休戰と共に忽然とその姿を市場より消したことなどは第一次に起つた現象である。それから戰時中懷の太つた中立諸國の需要もやがて消失して行つた。それが、外國からの需要が恢復することによつて、昔日のやうに注文が來れば問題でないが、そこには非常な變化が既に業に行はれてゐて、こちらの注文通りに行かなくなつたのである。さてこそ販路がなくなつたと云ふ叫びが何人の口にも上るやうになつて、勞働者階級も、この現象に對しては、如何に勞働組合の團結力を以てしても、如何ともすべからざることが分明となつたのである。これは、多かれ少かれ米國を除く各國產業の經驗した所であつた。そうして、この事態に對抗するものとして、前記の英國獨立勞働黨の產業政策の如きが生れたのである。之を周期的現象としての景氣循環の結果とするも、將又之に戰後特有の諸原因が加つてゐるとするも、それが資本制經濟に內在する機構的現象である限り、この現象の統制又は除去の方策を實現することが、より[illegible]

消費に制限されざる若干の一種の社會主義方策は、資本主義の經濟を（破る）得ざるものなることを判明したのである。

然らば、この消費の不足(under-consumption)なる現象は如何にして發生するか。之に對し、ホブソンは『失業經濟論』(一九二二年)に於て、二つの事情を原因として擧げてゐる。その一は、人間の消費なる習性的行爲を生産といふ機械的行爲と比照し、その進歩の速度に相違のあることである。その二は、現存秩序に於る所得の分配狀態がこの消費の保守性を一層强めることである。消費の保守性といふことは、現代の資本制機械生産の發生以前に於ては、社會進歩の維持者であり、貯蓄は生産資本の唯一の出處であつて、倫理的にも根據のある事實があつた。然るに今やそれが社會進歩と矛盾する現象となつたのである。から言へは今日のやうに不景氣時代に於て、消費の節約又は貯蓄の奬勵といふことが善いこととして認められてゐることに反對することになりやしないか、との疑問が出るであらう。これに就ては、ホブソンも言つてゐるやうに、現在の不景氣そのものを齎らした原因として、之を數へてゐるのであつて、現在のやうな不景氣に於て、これが有つ作用のことを言つてゐるのではない。このことは、他の一つの事情に就て語れば判明するであらう。卽ち、現存秩序に於る分配の、、、の結果、大なる所得は多く、消費物の購買にあてられずに、資本として工場の機械やその他の設備やに固定せしめられる。そうして、資本構成の狀態が變化する。ここに貯蓄の景氣循環に及ぼす著大な影響が存するものである。（消費の節約、）（又は）資本の蓄積といふことと消費が相對的に（或る）循環の（比例）であるといふのではない。それは、いつも消費に投ぜられる部分との相對的平衡が保れる限りに於て、それは生産の進歩への要素となるものであるが、その平衡を破る時に、生産の停頓への原因として作用し出すのである。こゝに貯蓄現象の經濟作用を媒介するのみならず、更に自己の能動的作用を以て、景氣循環の一要素なる銀行信用に言及する必要があらう。この點に就ては、理論的な研究が多いから、ここに多言を要しないが、銀行資本が好景氣時に於て、工業家や投機者流に柔順な從僕であるに反して、不景氣時に入ると、强硬な主人となる、といふ說明がその一斑の事情を物語つてゐるやうに、それは確かにこの循環を激成する一原因である。

ここに於てか、資本制經濟の發展の現階段に相應する産業政策の核心は如何にして大衆の購買力を增大せしむることを得るか、而してその購買力をして生産の動因たらしむる爲め物價に變動を與ふることなく、その效力を發揮せしむるを得るか、此の二點に存することが判明した。從つて、この見地よりする時、賃銀削減による生産費の低下策が如何に愚擧であるか、假令それによつて物價の下落を來さんとするもそれによつて勞働大衆の購買力を奪ふならば、利するものは企利所得者のみであつて、かやうた少數の不勞所得階級の懐中を肥やすことは、生産の逢着せる困難を打開するものではない。然し、これらの誤れ

政策が、本氣に企業家及びそれを支持する政府によつて遂行せられる眞の動機は、大衆の構成する國內市場を問題とせるものでなく、實は外國市場に於る競爭に堪えんとするに在る。かくて、帝國主義的政策が資本主義にとつて唯一の活路となる。卽ち自國に貧乏を生產しながら、外國に富を求めよう、とするのである。しかも、帝國主義國は一國ではない。又、中立市場は漸次に消滅し、今日に於ては、多かれ少かれ、何れかの國に分割されてゐるか、又は勢力範圍とされてゐる。ここに於て、各帝國主義國家の相互的自殺行爲が行はれることになり、資本主義は沒落の課程に入らざるを得ない。然しながら、資本主義の沒落に於て最も困難と災厄に逢ふものは、個人的生活の見地からすれば、それは資本家階級と言はんより寧ろ勞働者階級である。前者にとつては、利潤率の問題であるが、後者にとつては生活程度の問題である。ここに於て、かやうな事態を必然的推移に委せて置くわけには行かず、これが變革を企圖する社會運動の產業政策が發生するのである。

然らば、如何にして、第一に、勞働大衆の購買力を增進せしむべきか。獨立勞働黨の生活賃銀政策はこれが對策である。こは、社會主義的計畫の下に於ける消費者信用である。そは、直接賃銀所得の增加を企圖する積極的方面と社會政策的施設を通して生活費用の支出を倂減する消極的方面とがある。最近[illegible]

を減債基金に繰入れることに反對し、寧ろ社會政策的施設に投ずることを主張した根據は、かくして金利所得者の利益を企らんとする保守黨委員の企圖を打破し、勞働大衆の購買力の倂減を防止せんとしたものである。卽ち、ここに謂ふ消極的方面の政策の一發露である。この積極的方面の實際方法に就ては、モズレー一派の所謂バーミンガム派の硏究と宣傳とがあるが、それによればそは二方面に分れる。その一は、產業の國家管理であつて、その中心機關として經濟委員會が強大な權限が與へられる。この機關を通して、その管理下にある產業信用が與へられる。と同時に、勞働者に一定の生活賃銀が賦與せられることによつて購買力を增加せしめ、かくして發生した購買力に刺戟せられて生產の增加を確保せんとするのが、この委員會の任務の大綱である。その二は、失業者の救濟の爲に、その失へる購買力を恢復しむる爲に、職業紹介所又は郵便局を通して、給與金の額を增加せんとする方策である。その詳細なる行政上の細目に就ては、ここに述ぶる必要はあるまい。

次に第二の問題として、購買力の增加に伴ふ物價騰貴を如何にして抑止し得るか。これに就ては、前記經濟委員會の任務として需要の調節、卽ち生產の伴はざる需要を抑止する職能が與へられてゐる。然し乍ら、それ丈けでは不充分である。その外に考ふべきは、今日何れの[illegible]

利用するのである。又逆に需要の存在の見込立たざる場合に、企業者に信用を供與して生產を確保せしむる方法も改善されねばならぬ。今日の輸出獎勵金制度の如きを内地向生產にも一般的に利用することである。又、この場合に重大な關係のあるのは、外國からの輸入品である。即ち、外國貿易制度に就ての方策であるが、これは爲替制度並びに輸入業者制度の二方面から研究せられねばならぬ。即ち金本位制度の改革と國際貿易產業組合の設置を以て之れにあててゐる。

各個の提案に就ての研究は、他日に讓るとして、今かうした一連の提案を一箇の有機的關係に結合して、今日の帝國主義的金融資本主義に於ける社會運動の持つべき產業政策として次第に大衆の支持を得つつあることを我々は認めねばならぬ。この一方途が、普遍的なものとなるや否やは、未だ今日のところ斷言し得ないが、我々に示唆する所が甚だ多い。がしかし、いま、卒然として、かやうな問題を、現今の日本社會に提議するならば、その結果は容易に知られる。日本の產業社會は、極度の不景氣に沈淪してゐる。ここに問題とせる如き政策方針は、或は好景氣の場合には人も耳を藉すであらうが、今日では全くその餘裕がない。又そういふ氣分になつてゐない。しかも、そのことが、今日の不景氣を招來したものであることには氣がつかないでゐるのである。又日本の社會運動も全くセクト的感情に捕はれ、勞働大衆一般の問題を共通に考へる餘地を殘してゐない。又實際制度や政策に全く缺けてゐる。

然し乍ら、ここに起り易い反對論の一つ二つに就て豫め一言して置かう。その一は、帝國主義の打破は對内關係の諸政策によつてのみ可能となり得ないであらう、といふ議論である。それは云ふまでもない。ただ、筆者の云はんと欲する所は、帝國主義が對内的原因を有する限りにおいて、それの打破はコウミンターンの政治政策の如きによつてのみ可能とされるものでないと云ふにある。他の反對論は、外國貿易の重要性は勞働者階級にとつても考へられねばならぬ、對内市場の開拓にも限度があらう、と云ふ議論である勿論これも正しい。ただ筆者の展開した趣旨は決して外國貿易を無視したものではない。我國の自然的、技術的、及び社會的條件に叶つた、いはゆる主要產業、例へば生絲、紡織その他の外國貿易獎勵はいかなる時代にも重要性を失はぬであらう。問題となるのは、國内に貧乏を發生せしむることによつてのみ可能とされる帝國主義的海外侵略である。海外發展の美名の下にかゝる產業が助成されて居らぬか。勞働者階級は、活眼を開いて自己の產業政策を樹立せねばならぬ。

かくて、筆者は、本文に論述せるが如き趣旨が日本の社會の何れの方面にも容易に受け入れられぬことを信じつゝも、敢て自らの必要なりと考ふる所を紹介する所以のものは、やがては日本に於ても斯種の立場よりの議論の生じ來ることを希望するが爲めである。（十二月一日）

人類發達の過去と未來

駒井卓

一

「改造」の讀者に今更進化論の講釋も古いであらう。人類が他の動物と共同の先祖から起つたものであると云ふ事は中等教育を終つた日本人には誰一人知らぬものはなからう。此點では日本人は米國人たどよりよほど進んでをると云はなければならぬ。米國では此明かな事實を中等學校で教へる事を法律で禁じてをる州が五つ位もあり、紐育の公會堂で此問題に就ての大討論會が開かれたりする現狀である。日本では仕合せな事にかやうな事實を素直に受入れるのに邪魔になるやうな先入主がなかつたのと、先輩の學者たちの努力の御蔭で今のやうになつたのは喜ばしい事である。

何と云つても進化論を以て人間自身の尊嚴に對する許すべからざる侮辱だ等と憤慨して見た處で、其當人が燕尾服の尾の分れてをるあたり皮一重下にチヤンと尻尾を隱してゐるのだから致方がない。體一面にいくら玉の肌でも凝脂でも薄い乍ら毛が生えて居る以上犬や猫を毛物と呼ぶのも遠慮しなければなるまい。耳を見れば外側の縁の折れ返つた處の上の部分に一寸とび出た處がある人があるが、良くしらべて見ると、それが狐などの尖つた耳の先きと同じものであつたりする。又其耳の下の皮をめくれば馬と同じやうに前や後へピクピク動かせるべき筋肉が殘つて居たり、眼の中には其内側に沿うて獸や鳥にある瞬膜の殘りが立派に保存されて居たりする。絹の手袋や靴下で蔽うてをる手足の指の先にある渦卷きは樹の枝を握るときに滑らぬためだ等云はれる。まして未だ母の胎を出ないうち、宿つてから一個月目か二個月目のとき等は、人の子でも犬の子か豚の子かまるで見別けがつかない。

又獸類の中では猿が一番人に近い事はこれも昔から人の云ふ通りである。猿は獸類の中で樹の上の生活に適した者である。それで手足は枝を握るやうに出來てゐるし、爪は扁くて割合に眞直である。それから他の獸に比べると頭が大きく眼が前を向き、顏の中で口の部分がひつ込んで居る。人類の後脚は體の重みを支へる事專門になつてをるの

[illegible]事は[illegible]なくなつてをるが、此點だけは少し違ふが其他の點では人類は動物分類學上の猿類の特徴を完全に具へて無論猿類の中に入れられねばならぬやうになつてをる。

又猿類の中には多くの種族があるが、其中でスマトラとボルネオに居る猩々即ちオランダ、アフリカに居るゴリラとチムパンジー、東インドからボルネオ、スマトラ、ジヤバに棲む手長猿即ちギボンとこれだけの動物學上で云ふ類人猿類は猿によくある尻のタコがない（手長猿だけには小さなのがあるが）、それから尾がなく、食物の食ひ溜めをする頰袋も無く、歩く時には他の猿のやうに足の爪先だけを地に附けずに足の裏全部を附ける。　腦が大に發達し從つて頭が大きく額が廣くなつてをる。　此等の點では人間も彼等と全く共通であつて、人類だけを彼等の中から離して別物にして置くべき理由は更に無い。

ハクスレーは今から六十年餘前に其「自然に於ける人類の地位」の中で

「下等の猿類とゴリラとの違ひは、ゴリラと人類との違ひより甚しい」

と云つた。　これを後の人が「ハクスレーの人猿異同の法則」と云ふやうに名づけた。　之は主に解剖の上から云つた事であるが、今ではこれを生理の上からも云ふ事が出來るやうになつた。

其一つは血清反應の法によるのであつて、即ち人の血を兎に注射し、一週間程たつてから其兎の血を取つて其中から血清を分離し、之を試驗管の中で種々の動物の血に混ぜさせて見るのである。　こうすると其動物と人間との血緣（文字通り血緣）の程度が良く分る。　**かやうな[illegible]人の血に[illegible]**。　例へばはまるで之が起らない。　猿だと多少起るが、其中でも人間に一番遠いとなつてをるキツネザルでは或は全く沈澱が起らず或は極僅かに起る。　南米等の所謂廣鼻類に屬する猿であると弱い反應が見られ、東半球のアジアやアフリカの猿だと稍強く出る。　終に前云つた類人猿の血だと人間の血と殆んど變らぬ位に著しい沈澱が起るのである。　これは頗る明瞭な又精密な人類と獸類殊に猿類の種々の類との類緣の程度を知る方法である。

今一つ同じ血の事に就て分つてをる事は所謂凝集反應であつて、即ち人類は人種老幼男女等の別なく血の種類によつて四通りに分けられる。　例へば甲の人の血を取つて血清を分離しそれを乙の人の血と混ぜて見ると、時として其血の中の血球を凝集させる事がある。

此反應は類人猿の血でも起り居るものであるが、下等の獸類には全くそれがない。

それから黴毒の病原を猿に移植して見ると、チムパンジーは最も激しく冒され、オラングは之より弱く、たゞの猿は僅かに害を受けるだけである。　之等の事は皆人類と高等猿類と如何に近緣であるかと云ふ事を示すものである。

かやうにして人類は哺乳類の中の猿類に屬し、

の高等猿類と極めて近縁の者であると云ふ事が解剖上又生理上動かす事の出來ぬ事が證明せられた。此頃の新聞電報によると或ロシアの學者が人間の精子を以てチムパンジー(?)に受胎せしめて人とチムパンジーの合ひの子を造らうと計畫してをると云ふ事が出て居たが、適當な方法さへ用ゐれば或程度の成効は決して覺束ないと云ふ事は出來ない。

二

かやうに人類と猿類と似た處があり、又猿類から、地層時代から云へばほんの此頃進化し、なほ猿類時代の名殘を其體に多く殘してゐるに拘らず、今日吾等の眼前に見る人類の狀態は云ふまでもなく猿類と非常な相違である。動物學上から冷かに見ても僅かに一種類の動物でこれほど地球上にのさばつたものは動物と云ふものの此世に現れて以來確かに始めてである。勿論量から云へば或種類の單細胞動物とか昆蟲とか海の中の浮游生物とかには人類と比べものにならぬ程の大量になつたものはあるであらう。然し氣候及天然の障碍を破つて地球上南北極地方を除く至る處に分布し、且天然力及天然物を利用する事とてもビーヴアー等の比でなく、又多くの動植物を自分の都合で滅したり利用したりする事は動物界中僅かに蟻等に其匹儔を求める事が出來るばかりである。裸にしてほり込めば英佛海峽が渡れるか渡れない位だのに船と云ふものを造つて、醉ひ乍らでも大洋を渡り、此頃は先祖以來の空想を實現して鳥の眞似をして空を飛ぶ事も覺束ない乍ら出來るやうになつた。其上生存競爭の必要を乘越えて美術とか文學とか哲學とか云ふものを發明し彼等の所謂文化を樂しむやうな事もするやうになつてをる。

かくの如く人類の生活と他の動物の生活とを比べて見た時、其一番近い親類の猿類の生活と比べても所謂雲泥の違ひを生ずるやうになつた原因はどこにあるかと云ふ事を尋ねて見ると、ハクスレーの人猿異同の法則が眞であるに拘らず、やはり人類と彼等との體にある差異を求めなければならぬ。そして其第一は腦の發達の程度の差である。

一體腦の發達は人類ばかりでなく哺乳類全體が他の動物に優れた點であつて、哺乳類の旺んになつて爬蟲類を生存競爭で破る事の出來たのは此腦の發達と其體溫調節作用の御蔭であると考へられる。其哺乳類の中に色々の者が生じたが、其中水に入つた鯨等は水中の生活に適した魚の如くに墮してしまひ、又空中に飛び上つた蝙蝠等は鳥まがひの體になつてしまつた。陸上を走るもので割合に柔い處に適した類は駱駝とか牛とか云ふやうに二本又は四本の指を地につけて歩くやうになつたが、堅い乾た地の上を疾く走るものは中指の先だけを地につける馬となつた。或は生きた大きな者を殺して喰ふためには鋭い爪と鋭い齒を得た獅子や猫が出來た。

又此等種々の獸類の中に樹に登つた者もあつた。其中でも全然樹の上の生活專門になつた者はたゞ枝にブラ下つた切りで決つて地に落ち

[illegible]にも下りる時は[illegible]式[illegible]に第一手足[illegible]翼になつたり[illegible]や[illegible]爪に包まれたりしなくて、一番舊式の五本指のまゝで、地を歩く事も枝を握る事も果の皮を剝く事も出來る最も原始的の狀態に止まつた。

猿類がかく樹に登つた御蔭で其手は將來精密な技巧に適する人間の手に發達する事が出來たのであるが、更に樹に登つた事が偉大なる將來を彼等の前に展開したのであつた。其理由はかうである。先づ樹の上の生活は大に感覺器官の發達を要求し、從つて人の發達を促し、終に人類を生ずる機會を造つたのである。

先づ樹の上の生活が何故に感覺器官の發達を要求するかと云ふに、即ち地にくつついて居る間は鼻が一番大切な感覺器官である。地上の動物では食物を探すにも敵の近づいたのを知るにも異性の所在を見出すのも先づ第一に嗅覺による。それが樹に登るとなると、鼻よりは眼を多く用ゐねばならぬやうになる。樹の上では眼界が廣くなる。臭を嗅ぎ分ける力よりも遠目の利く利かぬが生存競爭に大切な役目をするやうになつた。だから鼻が退化して眼が發達した。すると自然に顏の形が變つて猿式になるのである。兎に似たムササビやモモンガ等でも前に云つた樹獺（ナマケモノ）でもカウモリザルと云ふものでも又カンガルーの類で樹の上に居るコアラでも皆そうで、顏が短く眼が大きくて猿に似た顏をしてをる。それから樹の上の生活は自ら觸覺にも影響し、又枝を握るため手足の觸覺も發達する。同時に體全體の筋肉が良[illegible]感覺器官の發達[illegible]る。かくして猿類は總ての哺乳類の中に於て最も腦の發達した分り易く云へば利巧な動物になつたのである。

かやうにして腦の發達が感覺器官の發達と密接な關係がある事は、例へば今エリオット・スミス教授等の唱へる處である。此說明によれば進化論で動物一代の器官の用不用が子孫に遺傳すると云ふラマルク主義を認めなければならぬやうである。處がラマルク主義には今之を信ずべき充分な根據がないから此點で此說は不完全なやうであるが、とにかくかやうな變化が起つた手續の眞の事は理解がむつかしいとしても、樹上の生活と感覺器官の發達と又腦の發達と密接な交涉のある事は認めてよささうである。

三

此猿の仲間の中で體が大きく又腦の發達したものが次第に樹上の生活から遠ざかつて再び地上の生活に親しむやうになつた。それが人類及類人猿類の祖先となつた。體の大きくなつた事は地上の生活をなすやうになつた事と關係があるであらう。それで類人猿の中で體の最も大きなゴリラは一番多く地上に棲み小さな猩々は殆んど全く樹の上ばかりに居る。

地上に下るやうになるに從つて前肢と後肢との分業が出來るやうに

なつて來た。そこで後肢は專ら體重を支へ又歩行に專門になり、前肢は餌を取つたり等する事ばかりに用ゐられるやうになつた。分り易く云へば手は體を支持する事から解放せられて空いて來たのである。類人猿では多くの場合は地上を歩く時には後足で體を支へ前足の指の外側を輕く地につけてにじり乍ら歩く。時々後足で立ち上る事はあるが先づ歩きかけの子供位の程度でよちよちした恰好である。處が人類になつて始めて完全に後足で立ち上る事に成功したのである。

人類が後足で完全に立ち上るやうになつて體に種々の變化が起つた。先づ足が手に比べて長くなり且強くなつた。類人猿では盡く腕の方が脚より長い。又足の指が短く且拇指が他の指と向き合はずして並ぶやうになつた。それから骨盤が發達して大きく強くなつたし、又脊骨が弓形であつたのが波形にSの字を二つつないだやうな形になつた。かやうにしてスフキンクスの謎にある通り四本足から發達した二本足の新動物の人類が出來上つたのである。

此人類の誕生はダーウヰンは恐らくアフリカで起つたらうと云つた。アフリカに現にゴリラやチムパンジーが生きて居り、又化石の類人猿の骨が幾種も發見せられたのが此說の根據である。然し他にアジアの中央の邊りではなかつたかと云ふ推定もある。紐育の自然博物館長オスボーン等は北アジヤ說であるので此頃前後三四回も探檢隊をゴビの沙漠に送つたのである。然し今迄の處では未だ確かな人類發祥の地をつき止めるところには至らないが、此探檢の成果には大きな興味と期待を持つて見て居る價値がある。

人類が樹上から下りて地上の生活に入ると共に其腦はずんずん發達していつた。一寸考へると樹の上の生活が腦の發達を促したのなら、樹から下りたら又腦が退化し眼も耳も退化し反對に鼻が發達するやうな事はなからうかと云ふやうな疑問が起り得る。然し一般に生物の進化は可逆的ではないのでつまり同じ道を後戻りする事はないやうである。却つて其反對に或器官が一度或方向に進化し始めると其方向に極端まで往つてしまつて終には其動物に有害だと思はれる程度迄發達すると云ふやうな事もある。例へば已に絕滅した虎の類の非常に大きな牙やマンモスの長い卷いた牙や、鹿の類の馬鹿に大きな角等は此種の例であると云はれる。人類の腦がかやうに著しい發達を遂げたのもやはり此類であるかも知れない。さうでなくても新しい身體の位置のために手を用ゐて細かな仕事をしたりする事等は腦を發達させるのに何程かの動機となつたかと思はれる。

かやうにして人類の腦は地に下りてからでも益々發達していつた。此事は今絕滅して化石となつて見出される所謂「ネアシデルタール人類」や「猿人」と稱へられる猿と人との間の者と推定せられる化石の頭蓋の內腔を計つて、之を今の種々の人種のと比べて見るとよく分るのである。例へば「猿人」のは凡八五〇立方センチ、「ネアシデルタール人類」は一二三〇、濠洲土人は一一八〇乃至一三五〇位、支那人は一四〇〇位ステーデン人は一五〇〇位である。

又腦其者の重さは化石の人類では勿論分らないから今生きてをる者を比べる外はないが男に就て云へば濠洲土人一二〇〇グラム位、アフリカ黒人一二〇〇――一三〇〇、ドイツ人一四〇〇、イギリス人及スコットランド人一四三〇グラム位であると云ふ。そして之を類人猿に比べるにゴリラは四二〇グラム、チンパンジーも猩々もやはり四〇〇グラムであつて、最も體の大きなゴリラさへ最も腦量の小さな濠洲土人の三分の一位に過ぎない。即ち腦の大きさから云へば人類の腦は其最も近緣の類人猿に比べても非常な著しい違ひになつた。

四

腦の大きさの發達と共に云ふ迄もなく其内部の細かな構造が精緻になり且作用が發達した。殊に人類の腦は所謂大腦の皮質部の量が特に多くなつたのであるため猿等と比較にならぬ程の作用上の相違が起るやうになつた。

此相違を分り易く云へば動物では其心の働きが本能によつて行はれる分量が多い。極めて複雜な又自然に叶つたやうな行ひでも皆そうである。例へば昆蟲等には生殖育兒に關係した事で随分複雜な一見すると明かな意圖があつてする事と思はれる事をするものが多くあるが皆本能によつてする。鳥や獸でも大體昆蟲と同じ事であつて、即ち子を産むと鳥ならば餌を取つて與へ、獸ならば乳を哺ませて育て、又敵から保護するし、子供の方では其乳を飲み空腹になれば鳴き敵が近づけば親の體の下に隠れる等、皆本能である。本能とはかやうに動物に生れ乍らに具はつてをるもので一度も經驗した事もなく教へられもせぬに可なり複雜な目的に叶つた事をなし得るものである。

人間にも此本能が可なりに發達して居る。殊に生れたばかりの赤ん坊が無事に育つてゆくのは全く此本能の御蔭であり、又母親が子を大切にして育てるのも大體此本能の力による。

本能はかやうに不思議な力のあるもので普通の場合には其教へる通りに從つてゆけば大體間違はないのであるが、本能に足りない處は變通自在の妙を缺いてをる點である。例へば母親が脚氣になつて居る時も、本能によればやはり子供に乳を飲ませ子供も乳を飲みたがるが、元よりよくない結果となる。ノルウェー等に居るレミングと云ふ野鼠に似たやうな動物は大群をなして移住をする習性がある。其途中に池や湖があればどんどん游いで渡るが、同じ流儀で海岸に來ても平氣で其中に跳び込んで游ぐ中に疲れて大群が殘らず死ぬ事があると云ふ。

かやうに本能にばかり頼り過ぎて居ると、少し當り前と違つた場合に出會はすと、普通の應用が利かないから甚しい間違を起すのである。

そこで若し其動物が過去に得た經驗を利用しそれを記憶から呼び起して變つた場合にも間に合はせる事が出來れば本能に頼るよりは一層其動物に取つては有効である。かやうな力を智能と云つてをるが、之は下等動物には先づ全くない能力で、高等動物に固有のものである。

しかもそれは明かに腦の發達に伴つて發達する能力で、哺乳類になると稍顯著に見え殊に類人猿には可なりに發達してをる。

類人猿の心理に就ては元は僅に旅行者の談話とか、見せ物に連れて歩かれてをるものゝ不用意な實驗位しかなかつた者で詳しい事は更に分らなかつたものである。處が世界大戰前頃から米獨露等の專門の動物心理學が特に熱帶地方に實驗所を設けたりして、非常な苦心をして動物を馴らし、又綿密な注意をしてなるべく誤の起らないやうに工夫した方法を用ゐて種々の實驗をやつた。今日では其結果の大分出版されたものが出來て稍確かな事が知れて來た。今此等の事を一々丁寧に紹介する事も出來ぬが、要するに此等の類人猿の精神生活には人類の精神生活によほど似てをると云ふ事である。たゞ發達の程度が著しく違ふだけで先づ手取早く云へば人間の三つ四つの子供のやうな精神生活であると見ればよい。即ち心理學上で謂ゆる觀念を造る事も出來るらしく、又人間にある推理の力の萠芽も彼等に見られるとの事である。又喜び怒り悲み嫉み等の情性も可なり良く發達して居るし物や人に對して同情を示す事もあれば嫌惡の情を現はす事もする。或人は類人猿の精神生活は人間のと其知能の點よりも却つて此等情性の方で良く似てをるのではなからうかと云つてをる位である。

然しいくら類人猿の心が人類と似た處があるからと云つて其發達の程度の相違は無論甚しいものである。彼等に比べると人類には所謂意識が明かになり又抽象推理の能力が著しく發達して居て、之が物事の原因を探り結果を豫想する事を得しめる力となつた。今日の文化發達の原因である科學は人類のかやうな能力を基として起つたものである事は多く云ふ必要もない。

五

尙腦の著しき發達と共に人類の進化に大きな原因となつたのは屢々云はれる通り其道具を使用するやうになつた事である。類人猿にも或目的のために或道具を使ふ事がある。手の屆かぬ處にある食物を取るのには棒のやうな物を使つたり、踏臺を引寄せてその上に登つたりする。かやうな事は他の種類の獸には無い事である。人類では此事が頗る發達してそれが今日見る文化の重要な原因となつた。

人間に此道具を完全に使ふやうになつた事は其枝を握つて居た手が體の重みを支へる事から解放されたからである。それから又其手が腦の發達と關連してそれが細かな又巧みな仕事が出來るやうになつたからである。之には又一方から云つて眼の働きが精巧になり動眼筋の作用によつてたやすく必要な物に視點を集める事が出來るやうになり、網膜には黃斑と云ふ者が發達した事とも關係してをる。そして物の形大さ色等の區別が明に分るやうになつた。それも勿論腦の發達を待つて始めて出來た事である。

人類は此道具の使用をする事によつて其肉體のあらゆる限界を超える事が出來るやうになり、如何なる動物よりも遠く又細かく視聽き、

良く感じ良く食ひ良く消化し、又困難な外界に適應して地球上に[illegible]廣く分布するやうになつたのである。

それから今一つ人類を今日の狀態にしたのは其團體生活が大に與つてをる。團體生活をなすものは動物にも甚だ多い。獸類にも多くなる。團體生活には云ふ迄もなく敵から自分を守り又一匹だけではとても敵はぬやうな動物を協力すれば捕つて食ふ事も出來ると云ふやうな利益がある。此團體生活が人類では非常に發達してをる。

一體類人猿にはあまり團體生活が發達して居ないもので、猩々は一匹づゝ別に棲みチムパンジーは雄雌二匹と子供とよりなる一家族が團體をなしてをる。ゴリラは一夫多妻で一匹の雄に數匹の雌が附き之に子供が一處に居る。それが人類になると數十百萬が一つの團體を造り、而も其中に種々の分業を生じ階級を生じてをる。

此人類の團體生活も亦云ふ迄もなく其腦の發達を俟つて今日のやうになつたものである。殊に言語の發達は此團體生活の發達に最も大きな動機になつたに相違ない。

猿の言語を研究した人は昔から多くある。此頃も前に云つた類人猿に就て言語の發達程度を研究してをる人があるが、要するに猿には言語は先づ無いと云つてよいやうである。唯喜怒等の際に或音を發する事は極めて多いがこれはたゞ感情の發表だけであつて、或物又は或事を代表する言語と云ふものは全く彼等にない。之は其精神生活の程度から考へると寧ろ驚くべき事である。

某良人の說によると類人猿に言語がないのは其等に思想がないからではなく發表の法を知らぬためである。固より彼等に語學の才のないためであると云ふ。彼等が若し鸚鵡等の如く物の音や人の聲をまねる習性があつたら言語も少しは發達したであらう。それだからチムパンジーか猩々に聾啞にするやうに手まねで其心を發表する事を敎へたら事によつたら成効するかも知れぬと云つてをる。

人類は幸にして彼等より語學の才があつたと見え言語が發達した。之も全く腦の偉大な發達の賜で、腦にある言語の中樞が喉や口腔や唇を精巧微妙に動かせて種々の音を發せしめ、それに種々の意味を持たせかくして言語が出來た。人類は此言語を用ゐて自由に又正確に他の同類に意見や感情を傳へる事が出來、更に進んで未だ生れぬ仲間にもそれを傳へるやうになつた。

此個體の意志なり感情なりを大勢の者に正確に傳へる事は、團體生活に極めて大切な條件である。されば人類に於ける社會生活の發達は此言語の發達に負ふ處が甚だ多い。更に言語並に之に密接な關係を持つて起つた文字の發達は個人の經驗を皆の者が利用する事を可能にした。而も此事は個體の生命を超越して代から代へと亘つてゆく事が出來た。か樣にして彼等の仲間の最も大切な共有物として智識の集積が出來引いて學問とか文化とかの發達を見るやうになつたのである。

此團體は共有の經驗智識の集積が出來るやうになつた事は人類の發達上非常に著しい事で、他の動物には全くない事である。種々の獸類

殊に彼等には他の者のする事をよくまねる。そして他の者の經驗を利用する事がいくらか出來るわけであるが、其經驗が蓄積されて團體共有のものになる等云ふ程度には中々發達して居ない。

　處が人類にこれが出來た。これは結果に於て丁度ラマルク主義の人の云ふ個體に受けた變化が子孫に遺傳すると同じやうな事になつた。即ち智力其者は別に進歩せずとも之に代る智識力があるによつて智力が進んだと同じやうな結果になつたのである。そして此事の多く出來た民族は謂ゆる文明人となつて榮え、僅かしか出來なかつたものは滅亡し又は野蠻人として僅かに殘つた。文明人と野蠻人とを一人づゝ比べて見る時、平均して其體は云ふ迄もなく智力にしてもそれほど違ふものでない。處が其持つてをる智識の量はとても比べものにならぬから、彼等が爭へば勝敗は譯なく定つてしまふのである。故に人類の發達を考へるには此智識の蓄積と云ふ事が非常な意義を持つてをる事を認めねばならぬ。

　要するに人類は今より數十萬年の昔始めて其永い間の故郷たる樹を棄てゝ地上に降つた。そして其腦の異常な發達により優秀な智力を得、體を支へる事から解放された手を用ゐて道具を造り之を利用する事を始め、且言語の發達した御蔭で團體生活が大に發達し、又智識を蓄積する事が出來、他の生存競爭に成効して今日のやうになつた者であらう。

　かく人類の發達は其言語による感が甚だ多い。それで言語の發達は道具の利用と同じく人類の文化の重大な動機になつたと云ふ事をなければならぬ。

六

　そこで人類の將來の問題になる。

　元より誰にも將來の事は分らぬ。今直ぐにも地球が戸惑ひして來た彗星のやうなものと衝突して粉微塵になるかも知れぬ。或は地軸の變動等で海陸の分布や氣候の寒熱が一變して人類も多くの生物と共に滅びるかも知れぬ。又先年の流行性感冒のもつとづつと惡性のものが流行して世の人類を一掃せぬとも限らない。

　然しかやうな事が假に善いとして地球の狀態も今のやうにつゞき非常な惡疫もないとして人類の將來はどうであらうか。

　或人は人類の進化發達は先づ此邊で行き止まりではなからうかと云ふ。人類はこれから後過去に地球上に現れて一時は大に榮え今は死に絕えた多くの動物、例へば巨大な爬蟲類やマンモス等のやうに絕滅する道を急ぐばかりだと云ふ。この說を信ずる學者は可なり多くある。

　どうせ人類も動物の一種である以上個體に壽命があるやうに種族としての壽命がある筈で、つまりいつかは絕滅するに違ひない。問題はそれだから人類は此上發達進歩する餘地はないだらうかどうかと云ふ點に歸する。

　人類は猿に比べると大分特化してをる。殊に其足などもはや枝を握

る事は出來なくなつてをる。最早到底樹の上で生活する事等は出來なくなつた。然し大體から見て人類の體には未だ多くの他の哺乳類に比べて原始的一般的である。殊に手がそうである 足も猿よりは特化してをるが、五本の指が殘つて居てやはり原始的である。齒もそうであり、消化器も肉食でも植物食でも雜食でも出來る。其上種々の外物を用ゐる事により如何なる境遇にも堪へ得る適應の能力を多く持つてをる。これはなほ其前途の多望な事を示してをるものと云はなければならぬ。

腦の發達は餘程著しい程度迄進んでをる。人類の進化の行き止りの恐れは確かに腦に一番多くあるであらう。或人は文明になるに從つて腦が重くなるのは子供の頭が大きくなるからだと云ふ。然しこの推定にはどれ程の根據があるか疑はしいと思ふ。且腦全體の大きさは大して變化なくとも其表面の皺が多く深くなれば全體が大きくなつたのと同じ結果になり得るから、腦の發達には此方向にも確かに餘地が大にあるのではなからうかと思ふ。

又腦の重さには野蠻人と文明人とに前云つたやうに大きな違ひがあり同じ人種にも可なり著しい差がある。殊に智力の點となると個人的に隨分優劣の開きがある。同じ人種の中にも二十以下の數を算へる事も出來ず抽象的の事は全く分らぬ者からカントやダーウキン迄ある。其間の違ひはとても類人猿と此等低能の人との違ひどころでない。かやうな事を見ると能力に於ても人類全體としてなほ進歩の餘地が多くあるではなからうかと思ふ。

又人類は全體として遺傳學的に見れば野生の動物とあまり變りない。良い遺傳質と惡い遺傳質が存在してをる。これで若し人類が其飼養動物に就てやつて來たと同じやうに人類の繁殖に干渉して合理的の淘汰を實行し惡いものを除き良い者を殖す事が行はれる者なら、僅かの間に著しい進歩が見られると思ふ。實際既に精神病や惡疾の者を隔離したり、又國によつては極めて不良の人間は之を去勢したりする事によつて此方向に多少の努力をしてをる。將來は今個人の衞生にも社會とか國家とかが干渉して惡疾を蔓延させぬやうに骨を折つて可なり成功して居るやうに、もつと多くの個人の結婚や生殖に國が干渉し、不良の遺傳質を持つた子を生ませないやうにし、良い遺傳質を持つた者を殖やすやうになるだらうと思はれる。これは人口問題の壓迫等によつて或は案外速く實行されるやうな機運にならぬとも限らぬ。

七

今迄人類の將來に就て論じた人の中には人類は既に進化の頂點に達して居る證據として方々に多くの退化の傾向が見えると云ふのがかなり多くある。

此等の人の人類の退化の徴候として擧げる證據は先づ吾々の體に多くあると云ふ。即ち其眼であるが、文明人には近眼が非常に多い殊に學生等の仲間には眼鏡をかけて居るものの數が實に夥しい。それが

歯にも若い中から義歯をしたりして居る人が少くない。一本も齲歯がない等云ふ人は百人に一人もない位であらう。皮膚の體溫調節の作用も衣服を着、室に煖爐を焚いたりするためにたしかに衰へて一寸寒い風に吹かれても風邪を引く。又少しの間裸體で夏の日に曝されても火膨れが出來たりするやうに弱くなつて居る。昔の女は非常に產が輕かつたが今では中々重くなつて人工的の方法を用ゐなければならぬ場合が多くなつたと云ふやうな事を擧げる。

いかにも此等は總て退化の徵候である。然し考へなければならぬ事はかう云ふ事が文明人の體に現はれたとしたところでそれを以て直に彼等の種族としての退化の徵と見てはならぬ事である。どうせ吾等の先祖が樹に登つたと同時に嗅覺は退化したのである。人間になつて嗅覺は確に一層甚しく退化したであらう。又耳等にしたところで吾等の耳殼なるものは殆んど形があるばかりで切つてしまつても聽覺には殆んど影響がない程になつてをる。又耳殼を動かす筋肉も前に云つたやうに退化して用をなさない。要するに之等は人類の聽覺の退化した事に伴つてをる事である。體中の毛にしてもそうで最早體溫を保護するに何の用もなして居ない。歯にしても猿のに比べて明かに全體として退化である。殊に犬歯は他の歯に比べて猿のやうに大きくなく、他の歯と同じ位で、これを以て肉を裂く等云ふ事は全く無くなつた。

此等は人類が文明になつてから起つた事でなく野蠻人でも同じ事である。之に反して前の眼の近くなつた事や齲歯の多くなつた事や皮膚の弱くなつた事等は文明人に限つた事ではあるが、其性質に於て前の人類に共通の退化現象と同種のものと見てよい。そして前云つたやうな事が人類の人類たる上に必然起つた現象であれば、後の事も文明人に必然的の現象と云はなければならぬ。

一體退化と云ふ事は或器官に就て云ふ時には差支ないが、其動物なり植物なりの全體について云ふ事は少くも多くの場合に穩當でない。例へば蝦の腹に比べるとヤドカリの腹は退化してをると云つてよいがそれを以て直にヤドカリを蝦の退化したものだと云ふ事は出來ない。動物の體の或部分が退化するのは多くは今迄と違つた新しい境遇に適應する際に起る事である。

殊に人類の場合には其推理力の御蔭でこしらへた種々の道具を以て完全に其肉體の足らぬ處を補ふ事が出來る。近眼には眼鏡をかけ齲歯には金やセメントを塡め體には衣服を著る。それのみならず望遠鏡顯微鏡を用ゐ食物は火を用ゐて調理し且消化劑をも飲むし、冬は煖爐を焚き夏は煽風機を廻すから、物を見る働きから云つても、食物を消化する力から云つても、體溫調節の能力から云つても野生の動物のどの種類とでもとても、比較にもならぬ位に優れてをる。

さればかやうな事は別に人類の將來を悲觀する材料とはならぬ。人類の中に眼や歯の悪い者が多くなつた事は要するに悪くても差支ないからである。人類の野蠻時代には眼や歯の良し悪しが自然淘汰の大切な標準となつたであらうが、今ではそうでなくなつた。それで此等の

器官に退化の傾向が見えるのである。「其理由に於て體の表面の毛が退化するのと同じ事である。

又産科の技術が巧みになつたので産が重くなつたとか治療法が進んだ爲めに病氣に對する抵抗力が減じたとか云ふやうな事も當然の事で已むを得ぬ事でもあり又それ自身大して憂ふべき事ではない。

八

或は又高等の教育を受けた者の繁殖率が減じたと云ふ事を擧げる者がある。例へば米國の大學の卒業生は平均二人餘しか子供がないと云ふやうな事を云ふ。之に反して低能者の繁殖率は非常に高いから、人類の平均の素質は次第に下落してゆく恐れがあると云ふ。

勿論此等の點は相當の考慮を拂ふべき問題ではある。然し又考ふべき事は大學卒業生の子供の少い主な原因の一は結婚の後れる事であるが、之は高等の教育を受ける者の已むを得ない事である。畢竟人類の文化が進み智識の分量が多くなつて來たのに反して智力其者は恐らく數萬年間大した進歩はせぬのである。それで此智識を獲得し或は其上に更に新しい者を加へやうとするものには其生涯の大部分を之が爲めに費さなければならぬ。從つて其生殖力を幾分時として盡く犧牲に供する事になつたからである。

そこで若し彼等大學の卒業生が眞に國民の最も優良な遺傳素質を持つて居る者で他にこれ程良い素質を持つた者がないと云ふ事なれば此現象は民族の爲め甚だ憂ふべき事である。けれども大學教育を受ける受けぬと云ふやうな事に其遺傳素質よりも其境遇等に因つてきまる事が甚だ多い。今のやうな社會狀態では彼等と同等以上の素質を持つた者が幾らでも現はれずに居るであらうと思はれる。

つまり高等の教育を受けると云ふ事と生殖力の減退と云ふ事は或程度まで必要的に伴ふもので、互に原因となり結果となつてをる。高等教育を受けたために生殖力が減じたと同時に、生殖力を犧牲にしたために高等教育が受けられたのである。要するに彼等は蜂や蟻の社會に於ける職蜂や職蟻をまねたもので、複雜な社會生活には當然起るべき階級である。

なほ分業の必要上社會には頭腦勞働者も必要なら筋肉勞働者も要る。少數の指導者と共に多數の被指導者がなければならぬ。それだから遺傳の素質も一律であつてはいけない。此やうな問題を考へるものには此點をも顧る必要がある。

尙人類の退化又は衰亡の徵候として團結心の衰へた事を擧げる人がある。昔は人間社會の中に明つきりした階級があつて、下の者は上の者の命令を絕對に服従せねばならぬやうになつてゐた。此事が嚴密に保たれて居たので人間社會の團結は極めて固く、それによつて生存競爭にも勝つて來て今日迄發展して來た。處が人間の個性と云ふ者の發達と共に此秩序が紊れ規綱が弛んで來た。これは人類退化の一つの徵候であると云ふ。

成程野蠻人や智力の進まない人々の團體の秩序を維持する方法は全然此法である。そして之は團體生活をする野獸と全く同じ事である。山羊等を飼つて見てると良く分るが、或群に新しい一匹を入れると元からのが一匹づゝ來て此新手と力競べをする。そして負けた方はそれからいつも負けて強いのが近づくと避けるやうにしてをる。かやうにして一通り力競べが濟むと強弱の順がすつかり定つてそれで山羊仲間の秩序が維持されてゆく。人間の仲間でも蠻人の部落や山賊の團體とか賭博者の親分子分の關係秩序は大體に於て全く之と同じにして出來上り又維持されるのである。そしてこれ等の社會の大きくなつたのが封建時代の藩とか國とか云ふものである。だから昔の日本の戰國時代や今の支那には山賊上りの大名や將軍が大分ある。

かやうな社會では王や大名や親分の言行そのものが法律である。フランスでは「、、、、國家なり」と放言した專制王もあつた。かう云ふ團體では王や親分がどんな馬鹿な政治をしても、無理を云つても人民や子分はだまつて從つてをらねばならぬ。それで始めて其團體の秩序がともかくも保たれてゆくのである。

然し前にも述べた如く此樣な仕方で秩序を保つてゆく團體は山羊や猿の下等動物の團體と全く同じである。とても智力が進んで物の道理を考へる人間に適しないのはあたり前の事である。それだから人民の頭が相當に進んでをれば如何程權力を用ゐて意志の自由の發展を抑へつけ樣としても必ず彼等の中から不平が起り權力に反抗する者が出て其勢力が大きくなれば革命や內亂となる。それで人類の中でも智進んだ人民の多く居る國では憲法や議會を造り、王や特殊階級の權力を制限し、人民の考へも行へるやうにし、たとひ暗愚な王や腐敗した閥族が出ても彼等のために其團體の生存が危くなるやうな危險を豫防するやうになつて居る。つまり立憲政治や議會政治は專制政治より一段進んだ政治で、人間の智力が進めば當然之によらなければならぬ。かやうな政治の行はれる團體は專制政治の行はれる團體よりも獸の階段より一段進んだ人間の團體として相當なものである。

要するに專制政治に對して不平を云ふものが出たり、特權階級の壓迫に反抗したりする者が出來るのは必ずしも人類の團結心の衰へた徵ではなく、個人の智力が進んだためより良い團體生活の形式に改めやうとする要求の爲である。即ち舊殼を脫して新衣を纏はうとする生長の要求であつて、やはり人類進化の一徵と見る方が至當であると考へられる。

九

かやうに云ふと人類の前途は極めて多望であるやうである。然したとひ私の云ふところが幸に正しくても、人類進化の前途は多望であると共に多難であらうと思ふ。しかも此多難であらうと思はれる理由がやはり人類を發達させるのに最も有力であつた智識の蓄積に基づいてをる。即ち人類の本來の性質と力量に比して餘りに多くの智識が蓄へ

かれそのため努つた團體などができて大きな團體が出來、其内容が非常に複雜になつた。處が此大きな複雜な團體を造つてをる個人には前と大した變りがなく、なほ多くの獸性を保有してをる。一口に云へば彼等の多くはなほ沐猴にして冠して文化生活をやつてをるものである。こゝに今ある人類社會の種々の矛盾も惱みも、又將來人類の進步の前途に横はるべき危難も其根源があらうと思ふ

即ち例へば產業組織にしても、人間の智識の蓄積の御蔭で生產が非常に增加した。處が此產業は相も變らず個人の利益の上に行はれてをる。即ち猿の社會に一つの桃の實が落ちて來た時に忽ち爭が起つて其中の一番强いやつが利得をするのと全く同じプリンシプルの上に立つてをる。殊に階級と階級との間、國と國との間には一層此事が著しく現はれてをる。國と國との間では各々の蓄積したあらゆる智識を傾けて同類殺戮をやつてをる。かやうにして兩方共に失ふ處が多くて得る處が全くない事を經驗して居り乍ら、なほ急にやめやうとしない。これは要するに智識の蓄積と個人の本性との間の大きな隔たりのためである。實に此國と國との間の戰爭は人類の前途の最大の危難であらう。

前に云つた立憲政治等にしても之は進步した人間の團體に發達したものであつて、彼等の間には極めて自然に運用せられ、專制政治よりは確に良いものであるが、之を進步の後れた國民の間に輸入して來ても中々うまくゆかない。又銀行の制度のやうなものをまねて見ても、各人が信用と責任とを重んずる程度迄進んでをらぬと、それを私慾のために惡用して、大勢の人が迷惑すると云ふやうな結果になる。既に吾し、、、等云ふ非常に、んだ制度を彼等の間に強制したところで、とてもうまく行く筈がない。却つて之を惡用する者が出來て恐るべき結果になるにきまつてをる。

要するに制度や組織も大切ではあるが、個人の發達が猿の時代とあまり變らぬやうな狀態ではどんなに立派な制度や組織も決してうまくゆく譯はないと思はれるのである。

とにかく此人間の本性力量と蓄積した智識の開きそれから團體の大きさとの不均衡、これがあらゆる人間世界の懊惱と危機の原因である。それであらゆる努力を以て此開きを埋める事に勉める事が吾等人間の前途を平坦にする所以である。教育は今ある方法の唯一のものであるが、若し優生學がもつと進步し、もつと實用されたら更に有効な法となるであらう。

何から始むべきか

——正統左翼主義の運動のために

猪俣津南雄

一　帝國主義の反動的支配

日本無產階級の運動は今や一つの歷史的轉期を孕むに至つた。一切の情勢は、無產階級を驅つて強大な政治的勢力の結成に向はせてゐる。そこに鬱勃として動く社會的諸力を誘導し、轉化し、動員し、編制することによつて我がプロレタリアートは、その歷史的任務遂行のための基本條件たる強力な階級的組織を有ち始めるであらう。また、その歷史的鬪爭のために不可缺なる勢力配備の、確乎たる礎石を置き始めるであらう。だが、日本資本主義の發展の歷史的條件によつて我が無產階級に課せられた任務は、全民衆を、帝國主義の反動的支配から解放することにある。此の任務の遂行は、此上もなく重要なるが故にまた多大の困難に伴はれ、最も、、、、、を重ねるとによつてのみ可能であらう。

日本ブルジョアジーは、早くから帝國主義ブルジョアジーとして、「歯をむいた、、、、、」、反動のブルジョアジーとなつた。かゝるものとして彼等は、自己の歷史的對立物なる封建的殘存勢力——、、、、、、群に對する鬪爭においても、正面衝突を敢行する氣力を缺いた。たゞ、當の、、、、、、群がそれ自身の物質的階級的基礎を喪失してゐたが故にのみ、彼等は、專ら「妥協苟合」を通じて政治的支配の實權を獲得し、確立するを得た。

甚だ普通ならざる我が「普通選擧」は、議會政治の形態におけるブルジョア的支配の道具として、有らゆる制限と變歪と不備とをもつて飾られ、ブルジョア民主主義の欺瞞を模範的に體現する。それは、如何なる意味においても民衆のものでなく、有らゆる意味において支配者のものである。

現代日本ブルジョアジーは、自己の、、を強めんがために努力すべき一切の理由と共に、自由とデモクラシーとを、憎むべき一切の理由を有つてゐる。かくして其の支配の基調は飽く迄も反動でなければなら

ぬ。

政治的支配の實權は確實にブルジョアジーに歸したにも拘らず、封建的遺制は尚ほ強度に殘存する。ブルジョアジーは、自己の支配に障碍たる限り、その「改廢」を怠らぬでもあらう。だが、それによつて強められるものがブルジョアジーの支配である限り、それによつて民衆の政治的地位は毫も高められない。否な、却つて低下する。だが、帝國主義日本の、、、ブルジョアジーは、自身の強き反動性の故に、封建的遺物を一掃することは出來ない。彼等は、殘存勢力をます〳〵自己の支配に從屬せしめると同時に、、、、、的主義イデオロギーは極力之れを自己の反動的支配の道具に轉化し利用するのみであらう。

現在の我がブルジョアジーの政治的反動は、彼等の存在のアルフアにしてオメガなる資本蓄積の必要の命ずる所である。日本資本主義は、戰時から戰後にかけて、獨占的な金融資本主義の段階に突入すると同時に、沒落期資本主義の世界的連鎖の一環となつた。獨占の資本主義は、強烈なる海外進出によつてのみ、「繁榮」を誣ひ得る程度の蓄積の速度をかち得なければならぬのに、調和ある順調な世界市場の發達は最早や望まれず、「開發」し掠奪し得べき半開未開の領域は急激に狹ばめられた。就中無產階級ロシアの強化と、、、、、、、とを併せ意味するであらう支那革命の展開は、日本資本の蓄積慾を脅すと最も大である。帝國主義政策の強行は、日露戰爭前後からこのかた常に日本資本主義の發展のための條件であつたが、異常に深大なる特殊の諸矛盾を內包するに至つた戰後日本の資本主義にとつては、それは旣に存立のための退ッ引ならぬ條件となつた。しかるに此の退ッ引きならぬ條件としての行動が、、、、、、を齎らすべきチャンスの大きさは、「軍縮會議」の記錄に上つた一語一句が語つてゐる。戰爭を準備するブルジョアジーは、自己の欲すると否とに拘らず、自由の敵、デモクラシーの敵である外はない。

「特殊國」日本の資本主義的發展の特殊性の一として、重要事業諸部門に發達した高度の獨占――特に國家資本主義的形態における獨占――と並んで、他方には極端な過小農制――それは家內工業的な「副業」と結びついてゐる――が發展し、また驚くべき多數の小資本經營が殘存した。九年恐慌以來、わけても最近の金融恐慌以來の資本の整理＝集中を通じての金融資本の制覇の過程が、如何に急速に中小商家及び中小商工業者を沒落せしめつゝあるかは、吾々の眼前の事實として論議の餘地を殘さない。農民と小市民の、、は餘りにも當然である。しかるに、支配的ブルジョアジーの政策は、獨占的資本の爲めの保護關稅の引上げと補助金の下附、金融資本の爲めの銀行合同の促進と「補償法」の制定とを行はしめ、小作人の支拂ふ地代を金融資本に與へんとする「自作農地法案」を案出せしめてゐる。それらの「施設」はみな、有らゆる資本群と社會層とを、支配的な獨占的資本に隸屬せしむるに役立つのみである。かくして、、、、の確立を目指す獨占的資本は、一切の民主主義的反抗を抑壓せずにはをられない。

だが、農民及び小市民の、、は、それがプロレタリア運動と結びつく時にのみ、ブルジョアジーへの脅威である。、、は無產階級の上に集注されねばならぬ。しかるにまた、、はプロレタリアートそのものにおいて最も强烈である。

廣汎な農民及び小市民の窮乏による國內市場の狹隘化と、沒落期を表徵する世界市場の不安定とに加へて、國際對立の尖鋭化によつて帝國主義的進出をはゞまれてゐる我が支配的ブルジョアジーは、カルテル化と生產制限と保護關稅と金輸出禁止とをもつて人爲的に物價を高め、辛うじて緩漫なる蓄積の速度を維持して來た。かくて彼等は、いまだに九年恐慌來の過剩資本を持て餘してゐる。「徹底的整理」の標語には靑黴が生えた。だが、「整理」を徹底せしめんとする甲斐なき努力は、經營の資本家的「合理化」の企てと共に、失業者の增大と勞働條件の惡化とを必然ならしめ、從つて爭議の頻發、擴大を必然ならしめる。而かもプロレタリアは既に鬪爭の組織を有ち始めてゐる。それは長閑な雰圍氣ではない。そこに、當面の政治的反動の根源がある。

だが、「整理」と「合理化」との一切の資本家的努力も、帝國主義的進出が蹉跌を重ねる限り、經濟危機を克服するに足らないであらう。しかるにまた、帝國主義的進出の强行は、民衆の肩に累加される負擔の增大と、死命的な戰爭の危機とを齎すのみである。

獨占的資本の强化を目指す帝國主義の、、、、、は、獨占的資本の利益のために全民衆を搾取し、、、し、、、しつゝ、全世界の社會的政治的進步のための×××鬪爭の主要勢力と抗爭し、それと諸軍との國際的連鎖を斷ち切らうとしてゐる。かくして帝國主義の反動的支配は、デモクラシーと自由と繁榮と平和との代りに、獨裁と隷屬と窮乏と戰爭とを與へる。此の支配から民衆を解放することを歷史的任務として課せられた我がプロレタリアートは、如何にしてその任務に堪えねばならぬか？

二　プロレタリアの階級的組織

日本プロレタリアートの歷史的任務の遂行は、少くとも二つの基本的條件が充たされる時にのみ可能である。

一、×××鬪爭に堪え得べき强大な階級的組織の確立。

二、廣大な貧農層との鞏固なる同盟。

日本資本主義の發展は、下層人口のプロレタリア化の速度について見れば緩漫であつた。我國の無產階級は、數において尙ほ人口の半ばにも達せず、その歷史的任務を獨力で遂行し得るだけの階級的地位を與へられてをらない。半プロレタリア化した廣大な下層農民との結合は、プロレタリアの、、の爲めの不可缺條件である。

我國の貧農大衆は、收穫の六割を寄生階級に貢入する社會層として、帝國主義的資本の爲めの低廉無比な勞働力の貯水池として、また、、主義的イデオロギーの培養地として、更にまた尨大な帝國主義的負擔の擔ひ手として、長く我が帝國主義的、、、、、、搾取物で

あつた。此の貧農大衆の覺醒と、、とき、プロレタリアートの階級闘爭と結びつけられる時、我が、、、、、、、、、、、、、、、、、、する。しかるに、着々として組合運動に進出した農民先進分子は、早くも土地問題の根本を見はじめてゐる。

貧農大衆の爲めに、眞に根本的なる土地問題の解決を敢行し得るものは、獨りプロレタリアートのみであるが故に、プロレタリアートこそは農民大衆をその同盟者として共同の闘爭を遂行し得るであらう。そして、帝國主義の、、、、、、、、、、を戰ひぬくものは獨りプロレタリアートであるが故に、プロレタリアートこそはまた其の同盟における指導勢力でなければならない。

だが、プロレタリアートが自己の指導力を確立し得るためには、プロレタリアートは先づそれ自身の强力な階級的組織を有たねばならぬ。

大正五六年來の、勞働者及び農民の運動の急激なる擡頭に面した帝國主義の反動的支配は、勞働者の罷業權、團結權の拒否、言論集會結社の自由の剝脫と、小作農民の耕作權確立のための運動に對する有らゆる干涉と抑壓とをもつて之れに答へた。そして「資本攻勢」の主力は、就中、勞働者の組織體の分裂と、勞働者農民の結合の阻止とに集注されてゐる。

歷史的、、、、ふプロレタリアは既に闘爭の組織を有ちはじめた。今や支配者の、、、、、、に對抗して何を爲すべきであるか？　一切

の努力を闘爭力の充實に向けなければならぬ。日常闘爭の不斷の遂行によつて所得の組織を大衆化せねばならぬ。と同時にそれを、階級戰爭の組織にまで引上げねばならぬ。××××××××の組織にまで高めねばならぬ。そしてその努力は、×××闘爭の爲めの一切の準備を含まねばならぬ。

では、當面の具體的情勢に即して正に何から始むべきであるか？

吾々は先づ、わがプロレタリア戰線の現狀を一瞥するであらう。我國の勞働者にして組合に組織され得る者のうち、實際に組織された者は二割に足らない。此の少數の組合勞働者の大多數は、中小經營の勞働者であつて、最も重要な大經營の勞働の大部分は組織されてをらない。此の未組織勞働者のうちには、職工五百人以上を雇傭する巨大工場の勞働者七十萬人の大部分があり、坑夫五百人以上を雇傭する炭坑の勞働者二十八萬人の大部分があり、更に鐵道における下級從業員十五萬人の大部分がある。之等の勞働者を含まない「組織勞働者」の階級的戰闘力の微弱さは多言を俟つまい。しかるに此の微力なる組織勞働者はまた、その大部分が、百個に近き單獨孤立の小組合に屬してゐる。爾餘の部分は聯合體を形成した組合に屬してゐるが、その聯合體がまた十數個の小聯合體に分裂してゐる。最も有力なりとされる「總同盟」、「評議會」、「組合聯合」と雖も、それ〴〵に組織勞働者總數の十分の一乃至三十分の一以下の少數を包擁するに過ぎない。だが、最惡のことは、之等の單獨組合及び聯合體が、正に排他的競爭的である

ことである。そして組織勞働者中の左翼分子をもつて任ずる者の多數は、此の排他的競爭的な小聯合體の一つの內部に完全に自己を隔離してゐる。

農民の組織率も、勞働者のそれに劣らず低い。昨年二月の調査によれば、地主と對立的なる組合に加盟せる小作農家は、總數の僅か八%餘なる三十萬人であり、更にその四分の一に足らない七萬二千人だけが「日本農民組合」に屬してゐた。然るにその日本農民組合は、周知の如く、昨年末に至つて四分五裂した。プロレタリアートの鬪爭の第一の同盟者たる農民の唯一の組織體としての農民組合を思ふ時、その分裂はプロレタリアートにとつて誠に致命的である。

最後に、プロレタリアの政治的戰線の一形態たる勞働者と農民の政黨は、勞働農民黨、日本勞農黨、及び社會民衆黨の三小黨に分裂し、更にその何れにも屬さざる地方的諸政黨がある。三つの全國的政黨は排他的抗爭的なる三つの勞働組合聯合體を基礎として分裂し、劣らず排他的抗爭的である。しかるに、三黨分裂の基體たる評議會、組合聯合、總同盟の三聯合體の分立は、その構成要素における質的差異──例へば、熟練工と不熟練工、產業上乃至職業上の別──に基づくものではない。それは「指導精神」の相異に基づくものだとされてはゐる。だが、マルクスは夙に、斯くの如き組合及び政黨の分裂を、『勞働者相互間の競爭による、階級的組織の破壞』と呼んでゐる！　そして吾々はその分裂が更に、帝國主義の、、、、、、、、、、、な働きかけの下に生じてゐることを知つてゐる。

プロレタリア戰線の斯くの如き支離滅裂の裏面は端的に何を語るか？　それは端的に、プロレタリアの鬪爭が單一の鬪爭力として反動的支配に對置集注されてをらないことを語る。吾々が、反動的支配の熾烈なる攻勢を思ふ時、吾々は先づプロレタリア戰線の統一から始めねばならぬことを知るのである。

三　戰線の支離滅裂

我が勞働者及び農民の組織の未發達と幼弱とは、決して階級的生長力の微弱さをあらはすものではない。吾々は、おの〳〵三十餘萬を算するの組織勞働者と組織農民とが僅々十年に足らぬ短日月の間に、而かも多くは組織キャンペーンに最も不利なる條件の下に得られたることを想起すれば足る。

戰線の支離滅裂は、一つには勃興期に當然なる渾沌と無秩序の表現である。二つには、旺盛なる自然生長力が、『勞働者相互の競爭による破壞』への、劣らず自然發生的な傾向に強く伴はれてゐた。然るに、鬪爭の經驗淺く、曾つて、、、、を有せざる我がプロレタリアートは、未だ强固なる階級的指導力を結晶せしめて之れを分裂破壞への反階級的傾向に對置するに至らなかつた。そして最後に、帝國主義の、、、、、は、プロレタリア戰線の混亂の促進を、勞働對策として强行した。

現在の勞働總同盟の若干指導者が、大正十三年頃から、反動的支配者の分裂政策に意識的に投合したことは周知のことである。支配的ブルジョアジーの意圖せる如く、「怪しからぬ共產主義者」として除名處分を與へられるに至つた總同盟內の左翼分子は、彼等分裂主義者の最惡の日和見主義と抗爭甚だ努めたとはいへ、それ自身遂に分裂の道を選ぶを餘儀なくされたのは、如何に餘儀なくされたとはいへ、少くとも分裂破壞への自然發生的傾向を克服し得ずして却つてそれに壓倒されたものである。謂ふ所の分裂破壞への傾向は、指導者の「繩張り」意識、勞働團體のギルド觀、等、ブルジョア自由主義の時代を經ざる我國勞働者階級に尙ほ根強く殘存する封建的イデオロギーと密接に結びついてゐる。ソシアリストの「目的意識」は、かゝる殘存意識に根ざす、、、、の徹底的克服をこそ命ずる。だが、分裂後の勞働組合評議會の指導分子の若干は、分裂への傾向と抗爭する代りに、却つて過去の行動の正當づけを希求する傾きがないでなかつた。

福本和夫氏の力說せる「結合の前の分離」の理論並びに「對立＝鬪爭＝發展」の理論とその適用とは、組合評議會の分裂行動の正當づけとなつた。更に『勞働團體の分裂の慫慂』となり、『實踐においては統一戰線の拒否』となり、宗派的分裂主義となつた。かくして氏の展開せる「理論鬪爭」は、理論を行動の案內たらしめ得ずして却つてドグマと化した點において、正に「辯證法」的性質を缺いたものである。それにあつて昂揚されたものは抽象原理であり、沒却されたものは特殊具體である。マルキシズムの最高一般の綜合を以て任ずる福本氏の多大なる貢獻にも拘らず、指導的理論における氏の[illegible]は、氏の亞流の頒つ所となつた。昨夏來の雜誌「マルクス主義」を編輯する者は、プロレタリア陣營內の共殺的な對立＝鬪爭が、プロレタリアートとブルジョアジーとの基本的な對立＝鬪爭を犧牲にして、極力高揚讃美されてゐるの奇觀に驚くであらう。

福本氏とその亞流の左翼主義は、「目的意識」と「指導力」と「政治的」と「戰鬪的」と「マルクス主義的」とを、言葉において極度まで強調したとはいへ、實踐においては少くとも日本勞働運動の現段階に特徵的なる分裂破壞の自然發生的傾向への追隨となつた點において、追隨主義的であり、經濟主義的であり、從つてまた非指導的、非戰鬪的、且つ非マルクス主義的たらざるを得なかつた。少くとも今日までの發展においてはさうである。

理論をドグマ化し、對立鬪爭を神性化し分離の意義を過大評價する傾向は、かの、プロレタリア運動の發展とは獨立に理論鬪爭によつてマルクス主義的意識を戰ひ取つてもつて「主體的條件」を確立し得るとなす信仰と共に、他の客觀的諸條件との結びつきにおいて宗派主義の傾向を生んだ。運動の「主體」は、『マルクス主義的に思考する個人』の結合體と考へられ、かゝる主體の指導に無批判的に追隨する分子を「獲得」して「主體」それ自身とその影響力とを擴大することがマルクス主義者の主要任務であり、左翼主義の精髓であると見做された

少くともそうした考へ方の顯著なる發現を見た。一方ではそれは、同一陣營內における見解の相異もしくは異見の所持者を「最惡の敵」視する專斷的偏狹となり、他方では對立的排他的な小規模のプロレタリア諸團體の只一つの內に自己を融合せしめつゝ大衆から自己を隔離することを正當視する態度となつた。

此の追隨主義的、分裂主義的、宗派主義的「指導精神」——それは斷じて正統左翼主義でない——を指導精神とする若干分子は、勞働農民黨をして進んで戰線統一運動の先頭に立たしめる代りに、統一運動の一形態たる政黨合同に反對した。かゝる指導分子の一人は、『我々が日勞黨大衆と共同戰線を張るのは、日勞黨をつぶして大衆を我々の方へとる爲めだ……』と率直に書いてゐる。

社會民衆黨は、その二三の有力指導者の「繩張り」意識に忠實に、且つは反動的支配者の分裂政策に響應し、終始一貫統一戰線を拒んだ。

單一無產政黨の結成過程において、勞働總同盟の若干幹部の明白なる日和見主義と抗爭して遂に總同盟から分裂するに至つた諸組合を主要成分として成立した日本勞農黨は、『階級的大衆統一主義』を『立黨の精神』とした。しかるに、此の精神の體現でなければならない、同黨內の左翼分子は、同黨に對する左右兩翼からの猛烈な排擊の下に尖つた對立意識の故に、且つは自然發生的なる分裂破壞及び自己隔離の傾向への追隨の故に、『立黨の精神』を高揚して流れに抗する力を示すことが出來なかつた。かくして日勞黨もまた、「勞農黨をつぶし衆を我々の方へとる」ことに歸著するところの「指導精神」の風靡する所となつた。

一言にすればこれは、共殺的な對立＝鬪爭の場面である。それは、一切の利を漁夫に歸せしめるが故に悉く反階級的でなければならない。階級的な正統左翼主義は、戰線統一運動への直進を命ずる。

だが、眞正の戰線統一運動への歷史的一步を踏み出すに當り、我がプロレタリア運動をして再び同一誤謬を繰返さざらしめんがためには、過去の誤謬の公然の淸算が急務である。指導分子が犯せる誤謬の自認は、之れを大衆に徹底せしめる時にのみ階級的意義を有つ。單なる自認と其の有耶無耶化は、、、、を欲するブルジョアジーのすることであり、盲從を求める宗派主義者のすることである。わけても選ばれたるマルクス主義者をもつて任ずる福本氏及びその一派は、追隨的分裂主義と宗派的傾向の誤謬に關する嚴酷公明なる自己批判の敢行によつて正路の所在を明示することにより、眞に階級の光をかゝぐるマルキスト的指導者としての自己を立證するであらうことを信ずる。かゝる特殊の場合における最惡の階級的罪過は、誤謬そのものではない、誤謬のゴマ化しである。

四　戰線統一運動の特殊の意義

では、旣成の勞働者及び農民の諸組織を、××××××××の大

衆的組織たらしめる過程の一段階として、實踐實體たる闘爭力を集中して强大なる單一の力たらしむべく、今ま正統左翼主義が命ずる所の、戰線統一の運動への直進は、特殊具體的には、如何なる意義を有ち、また有たねばならぬか？

吾々は先づ、現在の主觀的及び客觀的諸條件は、戰線統一の運動にとつて極めて有利なのを見る。歐羅巴諸國の多くにおける統一戰線の運動は、戰時から戰後にかけての直接の××的情勢の命ずる所に從ひ極度の尖鋭さをもつて日和見主義的右翼と對立したところの左翼が試みたる方向轉換――相對的安定期の新戰術として遂行され來たつた。しかるに吾國のプロレタリアートは、そうした對立狀態の體驗を經てをらない。加ふるに我國における右翼は、歐羅巴諸國におけるそれと異り、未だ結晶し固定した存在ではなくて尙ほ流動性のある過程的な結成體である。而かも盛んなる右翼の發展を來たさしむるに必要な經濟的基礎は我國において缺けてゐる。我が反動的支配は、右翼團體に對して差別的待遇を與へながらも、單なる組合運動そのものにさへ自由な發展を許す餘裕を有たない。（かくしてまた、統一運動に際し、謂はゆる「右翼大衆」に對してはもとより、「右翼指導者」に對する態度においても、歐羅巴諸國の場合とは異る特殊の考慮が拂はれねばならぬ）。

戰線統一への全運動において、組合の統一、特に勞働組合の統一は特殊の重要性を有する。我國における組合運動は統一された巨大な組合體へ合體の力によ[illegible]的に達した。これから組織されねばならぬ勞働者の大部分は、資本家階級の牙城たる大經營、巨大經營に在る。戰鬪意思と抵抗力との最も強大なブルジョア群――財閥トラスト、××トラストの支配下にある巨大工場鑛山等に向つて進まねばならぬ時、個別的、、、的、偶發的な、、はもはや用をなさない。僅々二三萬の組合員の僅々四五錢の組合費によつて立つ群小聯合體では力及ばない。既成諸組合の綜合による强大な戰線の確立と、廣大な規模における積極的、計畫的な組織キャンペーン、――それのみが、かの關鍵產業（キー・インダストリー）の、、を確實ならしめる。、、、、、、を含まざるプロレタリア軍の「階級鬪爭」は兒戲に均しい。組合の統一が、著大なる發展の不可缺條件となつてゐる點では、農民戰線にあつても全く同樣である。（例へば、「立入禁止」に對する鬪爭を一顧せよ）。更にまた、現在の我がプロレタリア戰線の支離滅裂の出發點が勞働組合の分立排他競爭に存し、その分立線が政黨分裂の基線をなすと同時に、組合の統一は政黨の統一より更に一層「無條件」的でなければならず又た「無條件」的に必要であることを思はねばならぬ。農民の場合にあつては特に、組合の統一が政黨の統一に先行し得る條件の存在を見るではないか。實に、統一戰線の運動は、工場と農村そのものに即し、そこに展開される日常鬪爭そのものに即して進められねばならないのである。

だが、言ふ迄もなく、戰線統一のための鬪爭それ自體が既に×××

×ブルジョアジーの、、、、、の現形態に對する最重要な闘爭を意味してゐる。それは先づ、反動的支配のプロレタリア戰線分裂政策に對する、、、、、である。此の闘爭は同時に、反動政治によつて相對的安定を强めんとするブルジョア的努力に對する抗爭を意味し、從つてまた××××そのものに對する闘爭を意味する。そしてかゝる闘爭を通じてのみ、プロレタリアートの諸組織は、××××××××の爲めの組織への一歩前進——だが大なる一歩前進——を遂げ得る。

現在の我がプロレタリア運動に於いて强く對立的に作用する二つの自然發生的な傾向として、一方には階級的組織結成への傾向があり、他方には『勞働者自身の競爭による組織の破壞』への傾向がある。後者の傾向は、他の諸條件との結びつきにおいて、「組合主義」、「日和見主義」への傾向の根本を貫いてゐる。更にまた、極左翼的分裂主義、宗派主義への傾向の根本をも貫いてゐる。戰線統一の運動は、此の反階級的、自然發生的な根本傾向並びに之れに追隨し之れを促進轉化利用せんとする一切の運動に對する執拗なる闘爭であり、またあらねばならない。かゝる闘爭にして初めてそれは反動的支配に對する闘爭であり、從つてまた我がプロレタリアートの××××××××××闘爭の正に現在の過程を代表するであらう。此の「眼目」の確乎たる把握において戰はれる統一運動のみが、正統左翼主義の運動である。が、それ故に正統左翼主義の運動は、如上の反階級的傾向との抗爭に於て、かの、該傾向の對立物にして而かも劣らず自然發生的なる階級的結成への傾向に、明確なる目的と指針とを賦與し、階級的傾向の尖端をば眞に戰闘的なる階級的指導勢力に結晶せしめなければならぬ。而も此の階級闘爭の前衛たるものゝの結成は、運動の現段階の特殊性の故に、正に戰線統一の運動を通じてのみ實現されるであらう。

五、階級的指導勢

一般的スローガンとしての戰線統一の高揚と、その階級的意義の撓みなき宣傳とは、現に何等かの形、程度において有らゆる組織勞働者に內在するところの、階級的組織への傾向を、最も有効に喚び起し、且つ漠然ながらも、既に共通單一なる行動目標に結びつける。而して個々の特定情勢に適應して與へられる個々のスローガンは、階級的組織への傾向を特に明確に代表する勞働者分子——比較的少數の先進分子の響應と率先とを促がさねばならぬ。かゝる分子の奮起、かゝる分子の增大と其の有機的結合と組織的闘爭、——それこそが、正統左翼主義の運動の實體である。「左翼」は常に全運動に於ける階級的傾向の意識的尖端を代表する。

これまで我國において試みられた統一運動の多く、特に謂はゆる「戰闘的統一」——（それは分裂主義がかぶつた假面の名である）——の運動は、根本的に間違つてゐた——

一、『大衆を吾々の方へとるため』に他の團體と『共同戰線を張る』のは誤りである。

二、相手が拒むのを見越し、故に相手の拒みうる機會、問題、題目を捉へて『共同戰線を持ちかけて、拒めば日和見主義で裏切りだと「暴露」するのは誤りである。

三、戰線統一の提唱なり支持なりが、「左翼」新聞紙上の活字や一部の團體幹部の決議に終つてゐたのは誤りである。

四、共同戰線の申込みが、排他的抗爭的な團體の幹部から、同樣に排他的抗爭的な團體の幹部――正にその排他的傾向を最も强く代表し易い幹部達――に向つてなされるのみで、全く同一條件の下に同一對象に向つて鬪爭しつゝある工場大衆相互の結びつきの促進の方が閑却されたのは誤りである。

統一戰線の戰術は、一の大衆團體が他の大衆團體を犧牲にして膨脹する爲めの手段であつてはならない。かゝる手段たらしめやうとする傾向は、『勞働者相互の競爭による組織の破壞』――即ち反階級的な傾向に屬する。

共同戰線の提議は、共同の鬪爭が可能なる機會、問題、題目に即してのみなされねばならぬ。然らざる提議は、ひとへにプロレタリア團體相互の「對立意識」を尖らせんがため、（如何にそれを反動的支配は熱望してゐることぞ）、そして惡罵を投げる「戰鬪的」氣分に自己滿足を見出さんがため、それと共にまた大衆の素朴なる戰鬪意識に投合しつゝ「戰鬪的」指導者として自己を僞瞞的に立證せんがために過ぎない。かゝる戰線には、共同の代りに排他が、統一の代りに分裂があるのみである。

共同、統一戰線の運動は、先づ、工場大衆それ自體の運動として現はれねばならぬ。工場大衆における共同の、、が既に現實に開始されてゐる時にこそ、團體間の共同戰線の提議も意義があり、實効があらう。工場大衆の行動にまで發展した共同鬪爭の要求を、尙ほも拒否せんとする幹部ある時にこそ、眞實に又た決定的に、彼れの日和見主義と裏切りは暴露されるであらう。頑强にして而かもそれ自身一個の力なる所の「現實」は、水掛論の連續や僞瞞的指導の横行を許さないから。

卒先して統一運動の戰列に就くであらう先進分子は、有らゆる工場に見出されねばならぬ。從つて有らゆる組合のうちに見出されねばならぬ、「左翼組合」にも、「右翼組合」にも、「中間的組合」にもまた「協調的組合」のうちにさへも。

だが、此の種の先進分子と雖も尙ほ、分裂排他の團體利己主義によつて故らに强められた對立意識に深く祟られてゐる。比較的に先進分子に富む團體によつてとられるであらう共同鬪爭のイニシアテヴは、深き猜疑をもつて迎へられるであらう。階級的誠意をもつてイニシアテヴをとる先進分子と其の所屬團體は、最も辛棒强き誘引を重ねつゝ、團體利己主義の清算を自らの行動によつて立證せねばならぬ。かくしてのみ今まで階級的組織への傾向の尖端を形づくる所の先進分子の結びつきによる統一運動は、大衆的基礎の上に置かれる。有らゆる組合に見出さるべき先進分子が、お互の鬪爭の應援、お互の運動の協議、連

絡のためにとる行動は、おのづから一つの新しき結合への端緒となる。かゝる結合は、プロレタリア運動の全體を貫いて眞の左翼傾向を代表する。全運動を貫いて而かも大衆的基礎を有するが故にそれは、全戰線を統一にまで高め行く所の挺子であり、楔であり得る。そして、此の先進分子を結ぶ端緒的な組織は飽く迄も合法的ならしめねばならぬ。言ひ換へれば、かゝる組織を違法化せんとする、、、、、、、、に對しては飽く迄も抗爭するを要する。

正統左翼主義の統一運動においてイニシアテヴをとる先進分子は、その運動を、「俺達の組合」、「我々の黨」の運動として遂行せんとする自分自身の傾向——未熟な過去の惰力——に對して自ら鬪ふであらう。先進分子は、組合意識、我黨意識を、階級意識に置代へ得るが故に先進分子なのだ。異る團體に屬しながらも、かゝる分子として端的に、、、、、と對立し、此の基本的な階級對立意識の强さをもつて團體利己主義を克服し得るが故に統一運動は可能なのだ。異る團體に屬しながらも、此の共通の特質の故に、ギルド意識の障壁を突破して互に接近し、字の如く隔意なき協議を遂げ、眞に階級的な協力に就き得るが故に、先進分子は相互に結びつく。

現に比較的多くの先進分子を有する組合は、左翼的な組合であり、政黨は左翼的な政黨である。かゝる組合、政黨は、まさに其の先進分子の優越の故に當然に統一運動において最も重要な役割を演ずる。だが、かゝる團體が對立的排他的に存立するところの現狀こそが、プロレタリア戰線の支離滅裂を意味し、從つてかゝる團體の獨立性を失はしめてもつて全運動を階級的に高める所にこそ統一運動の全意義があることを銘記する時にのみ、かゝる團體は自己に課せられた、、、、を演じ得る。此の役割を演ぜしめることは、優秀な先進分子の任務であり、その任務は先進分子それ自身の横斷的結合によつてのみ遂行され得るであらう。

六　横斷的左翼——全運動における

斯くの如き横斷的結合、即ち總ての團體内の先進分子を結ぶ端緒的な組織が、戰線統一の槓杆として作用しつゝ、幾多の困難なる鬪爭を通じてそれ自身の發展と成熟を遂げる過程、——それのみが、階級鬪爭の前衛、眞の階級的指導勢力を結晶せしめる過程であるであらう。

階級鬪爭における前衛部隊の重要性、その至要なる役割の一般は、玆に絮説を要しない。だが、前衛部隊の性質、構成、及び獨自の役割に關して一部の左翼分子がとつた見解に含まれる根本誤謬を明確に指摘する事は、正統左翼主義の統一運動にとつての現下の急務である。

一部の左翼分子によつて代表せられた分裂主義の宗派的傾向は、プロレタリア戰線の支離滅裂を表現するところの排他的競爭的な組合聯合體もしくは之れを基礎として成立した勞働者農民の政黨の只だ一つの内に前衛分子を隔離して之れを大衆から引離さんとする傾向を極度まで强めた。そしてかゝる組合聯合體もしくは勞働農民の政黨は、

[illegible]
位にまで引上げられ、そうした政黨を[illegible]しかる
に、日常闘爭の機關たる勞働組合や、プロレタリアートと其の同盟軍農民との結合の一形態たる勞働者農民の政黨は、如何に多くの前衞分子を含むとも、前衞部隊そのものの役割を演ずることは不可能であり、また演じようとしてはならない。加ふるに、排他的競爭的に分立する勞働組合もしくは勞働者農民の政黨の只一つ――縱斷的な一區分――の内に隔離されたる先進分子は、爾餘の大衆から分離してゐることによつて最早や前衞分子たるの役割を演ずることが出來ない。否な、戰線統一の挺子であるとさへ出來ない。先進分子が、前衞部隊を形ちづくり得るのは、、、、を横に貫ぬく一翼として大衆と密接に結びつくことにより、常に、、、の槓杆たる所の、、、、、、を演じ得る時に限られる。少くともかゝる方向への努力においてのみである。

自然發生的な分裂破壞への傾向に投合しつゝ、分立的な「左翼組合」もしくは「左翼政黨」の膨脹を、爾餘の團體の犧牲において遂行せんとする追隨主義者はまた、かくして前衞部隊が演ずべき、、、、、を過小評價するところの清算派的傾向を代表する。

現在の我が勞働者農民の諸政黨は、プロレタリアートが、その無二の同盟軍たる貧農層との鞏固なる結合を實現する爲めの組織形態の主要なるものである。かゝるものとしての勞働者農民の政黨がプロレタリアの全運動において演じ得る役割は、限られてゐる。此の限度を超え

[illegible]
ただまた、[illegible]ば、プロレタリアートに農民層乃至小市民層に追隨することを餘儀なくされ、自身の指導力が喪失する。茲においてか、プロレタリアート自身の闘爭を、、、、、、、、、に遂行し得る、、、、、の活動は、、、、、、、に必要となる。而して無產階級は、斯の如き部隊の、、、、によつてのみ、帝國主義の、、、に對する自分自身の闘爭を遂行し得るのである。

現在における先進分子を結ぶであらう端緒的な組織に出發して眞の階級闘爭指導勢力の結晶を見る過程の各段階は、必然にまたプロレタリア戰線の統一擴大の過程の各段階でもある。かゝる段階のおのおのにおいて、最も優秀な先進分子は、前衞分子のそれに該當する指導的役割を演ずる。かゝる分子は、彼等の運動を挺子とする戰線統一の進展において、或は聯合により、或は合同によつて增大する所の團體をば、常に彼等が多數派として指導權を握り得る程度の大きさに止どまらしめやうと企圖してはならない。斯くの如き企ては、宗派主義の延長であるであらう。階級的組織への傾向の「意識的」尖端を代表する先進分子は、統一運動の各段階の所產たる大衆的組織體の一つの內部に立て籠もる多數派として之の指導權を「確立」することによつて左翼たる自己を立證するのではない。彼等は、かゝる大衆的組織體をその一形態として有するプロレタリア運動全體の先頭隊として又た挺子

として、、、、を展開することによつてのみ、、、の左翼——言葉の眞の意味における左翼であり得る。かゝる左翼のみが無產階級のヘゲモニーを確立するであらう。大衆的組織體は能ふ限り廣大な大衆的規模のものたらしめねばならぬ。それにあつての左翼分子は、從つて多くの段階においては尙ほ少數派たるを常則とし、かゝるものとして常に彈力ある左翼傾向を代表するであらう。大衆的組織體內にあつての少數派ではあるが、而かも各段階において階級全體のうちの最も明確なる階級意識の部分、最も誠實にして献身的、、、な部分として、、、に演ずる、、、、の故に、、、、の上に獨自の影響力を及ぼしつゝ着々としてそれを擴大し行くであらう。かゝる左翼こそはまた、有らゆる社會層の先進分子——多くのインテリゲントを含む——を吸引し、全、、、、の社會的同情と支持とをかち得るであらう。

統一運動は、大衆動員による勢力集合の主要なる一形態である。私は八月號「社會科學」に寄せた一論文において次のやうに問題を提起して置いた——

××の結成、强大化、影響圏の擴大
{ 大衆的、政治的、協同戰線
勞働組合、農民組合の統一
未組織の勞働者農民の組織 }
大衆動員による勢力集合

これらの目的を鬪ひとらしむる諸戰術は、言ふ迄もなく、互に密接に關聯し、相互制約的であると同時に相互補足的である。今ま、そのおの〱を、それ〱に成功的に、遂行し得んが爲めに捉へねばならぬ楔機は何々か、——だが力點は就中どの戰線に捉かれねばならぬか、何づれに主力を傾注することによつて吾々は事件の歷史的連鎖の「、、、、」を摑むことが出來、それを摑むことによつて全連鎖を我物となすことが出來るか、例へば今ま、至難なる恐慌克服の爲めに鬪ひつつある帝國主義ブルジョアジーの、勞働者農民に對する攻勢が熾烈を極むる時、吾々は、まだ決してブルジョアジーに屈服しないところの「組合主義的政治鬪爭主義」を克服することに全力を盡すべきであるか、——それとも先づ、勞働者農民を改良主義と反動主義とに導かんとするところの「意識的指導勢力」に極度の、、を與へ得る如き勢力集合、大衆動員を敢行することを當面の任務とすべきであるか、——その何づれが今ま眞に帝國主義ブルジョアジーに對する鬪爭を意味し何づれの鬪爭が眞に「政治的」であり、また何づれによつて今ま、ヨリ確實に「××××××」を鬪ひとすることが出來るか、更にまた、——かゝる勢力集合、大衆動員の一手段一形態としての政治的經濟的協同戰線の範圍は、××分子の機械的統制絕對的指導力の及ぶ程度に局限すべきであるか、乃至はまた、遙かにその程度を超えて擴大し、從つて暫くは、××の直接指導下に立つて大衆をして全協同戰線體內のマイノリテイたらしめつゝ、從つてまた彼等による、爾餘のマジョリテーへの働きかけが、イデオロギッシュな、影響力的な統制、指導であることに滿足し

つつ、し[illegible]

學問適正との故に必然に大衆を獲得し得べき點から働きかけを

ば、有效に、直接的に、眞に、對大衆的ならしめることにより、鬪爭の發展の各段階において常に××それ自身の絕對的且つ相對的なる增大、强化の實現を期すべきであるか、――これらに對するマルキスト的解答は、「現段階」の分析究明によつてのみ決定的に與へられるであらう。（拙著「帝國主義研究」一七九――一八〇頁）

そうした解答を、私は今ま本稿において輪廓的ながら與へ得たと信ずる。

宗派的傾向を代表し來たれる一派は、左翼分子の資格としての「マルクス主義的意識」を極力强調し、理論鬪爭によつてそれを戰ひ取つたと揚言した。だが、それは可能であり得たか？ 斷じてない。理論鬪爭は常に極めて重要な役割を演ずるとは言へ、プロレタリアの全鬪爭の一形態に過ぎないそれは、個々人をして「マルクス主義的意識」を鬪ひとらしむる手段となることは出來ない。階級意識の最高形態としてのマルクス主義的意識は、幾多の困難なる階級鬪爭――、、――を通じ且つ、、に現はれつゝ次第に結晶し行くところの生成物である。一定の發展段階における左翼分子の資格としての階級意識は、、、に現はれる。、、に現はれない意識は、形而上學的「意識」に過ぎない。かゝる「意識」に關する特質の故に左翼分子は左翼分子であるのではなく、、、、において演ずる役割の、、、特質の故に左翼分子なのだ。

左翼[illegible]

分である。かゝる分子との結びつきにより、その階級に自己を同化してもつて個有の小ブルジョア的個人主義的自我を克服し得時るにのみ、例へば小ブルジョア出身のインテリゲントは、左翼分子であるであらう。

七　今や何から始むべきか

恰も本稿に筆を執り始めた時、我が無產階級の戰線統一のための劃期的な運動は、勞働者農民の諸政黨の合同の提唱といふ形をもつて具體的に開始された。今や、勞働農民黨と日本勞農黨は、イニシアチヴを爭つてゐる。だが、此の競爭のために却つて政黨合同の折衝は一先づ停頓狀態に陷つたかに見られる。戰線の支離滅裂を克服せんとする眞面目なる努力が既に始められたにも拘らず尙ほ、正に克服さるべき『我黨』意識、共殺的な對立意識の惰力は强く働いてゐる。

正統左翼主義の立場からは、玆に短き第一段階を終つた戰線統一への過程において勞農日勞兩黨のとつた行動は如何に評價さるべきであらうか？

勞農黨が、日勞黨に對してなせる合同協議會組織の提唱は、二つの點に於て、此の交渉を停頓に導くべき素因を有つてゐた。第一に、勞農黨の合同提議は、字の如く唐突であつた。提議は正式に日勞黨中央委員會に對してなされたものだが、その中央委員會をして好意的にそ

れを受取らしむべき一切の準備が缺けてゐた。反對に、提議に對して反撥せしむべき一切の準備がなされたかの觀さへがある。有らゆる機會において、而かも合同提唱の殆ど直前まで、日勞黨の幹部を無差別に排擊し、その救ひ難き『無能』と、全然誤れる『指導精神』との『曝露』を重ね來たつた勞農黨が、同樣に辛辣なる曝露を重ね來たれる『無產者新聞の提唱を支持して』突如合同を提議した時に、莞爾として之れを容れ得るほど、それほど日勞黨の幹部諸君が寛容ではないことは、聰明なる勞農黨の指導者諸君の豫見し得ざる所ではなかつた。たゞ、單なる一の可能性としては、幹部の反撥、拒否にも拘らず、日勞黨內の大衆が壓倒的に勞農黨の提議を支持するといふことはあり得た。だが、第二に、勞農黨は、此の唯一の可能性を實現に導くべき準備をも缺いてゐた。工場及び農村に在る兩黨の大衆乃至は先進分子の間の結びつきは殆ど出來てゐなかつた。反對に、双方から煽られた對立意識の下に、兩黨の大衆及び先進分子の大多數は、二つの「友黨」を最惡の敵視するほどの「我黨」意識にまで「高め」られてゐた。日勞黨の大會の總果が、それを證して餘りある。

勞農黨が、かうした條件の下に合同を提議しなければならなかつたのは、同黨內において一種の政黨官僚の役目を演じ來たれる宗派的分裂主義者の一派のマヌーヴァーに基づいてゐる。此の一派は、自己の謂はゆる「戰鬪的統一』への指導方針即ち宗派的分裂主義の完全なる破綻の到來に脅され、何等の準備もなく、何等の成算もなく、急遽、合同を提唱することによつて、自己の危ふき立場を有利に轉回せんと試みた。かゝる試みそのものが、何よりも雄辯に宗派的分裂主義の救ふべからざる誤謬を物語つてゐる。しかるに此の一派は、階級の爲めに自ら進んで此の誤謬を公然と淸算してもつて眞に左翼的指導分子たるに恥ぢざる自己を立證せんとする代りに、「情勢の變化」に藉口して從來の「戰鬪的統一」主義の誤謬を覆はんとしてゐるかに見られる。果して然らば、それがデマゴギー以外の何物であらうか?

勞働黨の合同提唱は、それが「戰鬪的統一」の分裂主義の放棄を意味する限りでは絕對に正しい。勞働黨の大衆及び先進分子は、統一合同への正しき運動を飽く迄も促進すべきである。だが、かゝる努力における諸君の任務は、速かに、直接的に、日勞黨及び社會民衆黨の先進分子及び大衆と結びつくことにある。そして今一つの任務は、自黨內の宗派的主義者の自己淸算を敢行せしめてもつて他黨における諸君の同僚をして再び勞農黨の「誠意」を云々し得ざらしめるにある。此の二つの任務の遂行によつて諸君は、諸君の小なる「我黨」意識を克服し、諸君並びに諸君の黨の階級に對する忠誠を立證し、諸君の黨をして統一運動の先頭に立たしめ得るであらう。

かゝる條件が充たされるであらうことを豫想する時、强大なるプロレタリア政治戰線の結成への劃期的な一步は既に勞農黨によつて踏み出されたと言へる。しかも、同樣な一步は既に日本勞農黨によつても踏み出された。日本無產階級運動の發展を叙する後世の史家は、その當

[illegible]

知れない。

だが、合同への意思表示の點では、勞農黨がその正しき機會を捉え得なかつたやうに、日勞黨もまた一つの誤を犯した。日勞黨が、無產黨統一協議會の組織の『單一絕對條件』として、『宗派的分裂主義（所謂福本主義）及同主義者の徹底的排除』を要求したのは、その『排除』が若し『除名放逐』を意味するならば、必然にそれは合同運動を挫折せしめるといふ技術的過誤を含んだばかりでなく、勞働者農民の政黨の合同の場合に條件たり得ざるものを條件たらしめた點において、原則上の誤謬を犯したことになる。謂ふ所の『宗派的分裂主義（所謂福本主義）及同主義者』の過誤は、指導方針における過誤として、階級を裏切る程のものではなく、裏切らんとする意思を含むものでは尙更らない。從つてそれは、公然の自己清算に適するものであり、それこそが絕對的に必要なのだ。而かもその過誤は、實踐では日勞黨の聲明書に謂はゆる『急角度を描いた轉換』をもつてなされた合同の提唱そのものに始まつて今や自己克服の過程にある。プロレタリアがその無二の同盟軍農民大衆と鞏固に結びつくための重要形態にして大衆動員の重要機關であるところから飽くまでも大衆的でなければならない勞働者農民の政黨は、その本質上、當然に種々雜多なる指導方針を信ずる分子を抱擁しなくてはならぬ。如何なる行掛りがあるにもせよ、かゝる分子の特定のものの除名を條件とする合同提議は、多くの場合、事

[illegible]合同を拒否せんとする。日和見主義的分裂主義は、社會民衆黨の若干幹部のマヌーヴァーに機會を供した。

吾々は飽くまでも二つの分裂主義と戰はねばならぬ。それは、單に個々人が偶然的に犯した過誤ではなく、日本無產階級運動の現段階における指導方針上の一傾向として、社會的基礎を有し、執拗に根氣よく戰ふことによつてのみ克服され得る性質のものである。またそれとの鬪ひを續けることなしには、强力な統一戰線の獲得は不能である。だが、しかし、その鬪爭は、先づ合同そのものをもつて始まらねばならぬ。排他分立狀態が續く限り、分裂主義は永久に克服せられないであらう。

スタートを切つた合同運動は、黨と黨との交涉においては一と先づ挫折した。だが、勞農、日勞、社民三黨の先進分子の多くは、明確に合同への意思を固め始めてゐる。吾々は、かゝる分子の接近と、隔意なき協議と、端緒的な結びつきが、急務であるのを見る。それのみが、戰線統一の運動を、その質を、力を、飛躍的に高めるであらう。正統左翼主義は、當面の合同運動が、眞の階級的指導勢力の結晶への端緒をつかましむる楔機であることを敎へる。日本プロレタリアートは、かゝる楔機の正しき把握から始めねばならぬ。

（一の特殊具體的な問題としての合同運動に對する批判は、中央公論に寄せた別稿に展開しておいた）

アリストテレースの『流通の正義』＝マルクスの其解釋に關する疑（其二）

附　河上博士等譯資本論中或重要なる不正確又は誤謬について

福田徳三

（七）

前段（五）の初めに於いて、資本論フランス譯序文の譯文を掲出して置いたが、其前後の文に誤植があつて、意味が全く反對となつてゐるから、玆にこれを訂正して置かねばならぬ。

前號四五頁上段一至五行は左の如くあるべきであつたのである。

『さて、私が當面の問題とすることに關しては、フランス譯文第一版序文――河上博士等の所謂序でない本當の序文――は、此論文の最初に開題文として掲げた原文第一版の序文中の一節――此文、カウツキー民衆版にも、英譯本にも、河上博士等邦譯本にもなし――を載せざる點に於いて、原本第一版の序文とは、著しく異るものである。其文左の如し。』（以下の註記は誤つて混入せるもの）。

更らに、四六頁上段第一行は左の如くある可きである。

『即ち、私が開題文としてあげた一條は、此フランス譯に掲げられた原文第一版序中にも、第二版跋文中にも見出されず、而して、此言は』

右正誤を特に玆に掲ぐるわけは、『資本論第一版序文』なるものについて、並に、『第二版跋文』なるものについて、マルクス自らを始め、

[illegible]く見ゆる河上博士たちの手に於いて、若干の混同、不正確が見出さる
る其事實を、特に明かにして置きたいが爲めである。

先づ第一からあげて見れば、既に、斷片的には、前段に於いて指摘して置いたことであるが、抑も、『資本論第一版序文』なるものには、不思議にも、マルクス自らの手に於いて、三様の異文が公けにされてゐることこれである。

三様の異文とは、左の如きものを云ふ。

(一)一八六七年刊の眞正の第一版の卷頭に掲げられた倫敦一八六七年七月二十六日付の第一版序文＝眞正の第一版序文。

(二)刊年不明　恐らく一八七五年　のロア譯マルクス親閲のフランス譯本の卷頭に掲げられた倫敦一八七五年七月二十五日付の第一版序文＝削り取り第一版序文。

(三)一八七二年刊　但し實際は一八七三年刊なるべく思はる　の第二訂正版の卷頭に掲げられた倫敦一八六七年七月二十五日付第一版序文＝削り取り並に日付錯簡の第一版序文。

[illegible]
でなく、夫れ〲多少異なるものであつて、而して、其差異の點に、私
が、今問題とするところに、直ちに關聯してゐるのである。從つて、
其異同について、事實を明かにして置く必要があるのである。

私が問題の開題文として、此の小さい論文の初めに掲げた『價値形態』を說いた部分に關するマルクスの讀者への注意言は、右の三様の第一版序文中、獨り(一)のみこれを掲げてゐるのであつて、(二)(三)共に、全くこれを削り取つてあるのである。此點(一)は他の二種の序文なるものと異るのである。

(二)は、國語の相違から來る差異の條々を除いて、大體に於いて、(三)と同じなる削り取り序文であるが、玆に異とすべきことは、其日付が、(一)とも(二)とも異りて、一八七五年となつてゐるのである。其月日は、故意か、偶然か、何れも、七月二十五日とせられてある。其他方に於いて、(三)は斯く、內容から見れば、(二)と殆んど同一物であつて(一)とは異るものであるに拘らず、其日付は、眞正第一版序文の日付其儘に、一八六七年七月二十五日とせられてある。

(三)に於いて異るところは、第一版序文の題に、直ちに註記して、『第二版跋文は後に掲ぐ』としてあることこれである。此文は、フラン

ス譯の（二）には見出されず、またドイツ原文の他の何れの版にも見出されず、獨り此の第二版のみこれを掲出してゐるのである。而して、（三）に於いては、卷末に、其の第二版跋文なるものゝ全文が掲げられてあるが、フランス譯本に於いては、卷末に『第二版跋文拔萃』と題して、初め四項其他若干部分を削り取つたものが、收められてゐる。

右の事實を眼の前にする我々は、世上に、マルクス資本論第一版の序文と稱せられるものは、一體、右三樣の異文中、其何れを指して云ふものなるかについて、惑なき能はざるのである。マルクス自ら三樣の異文を我々に與へてゐる。而して、第三版以後の編輯者たるエンゲルスは、右三樣の異文中（三）を其儘に掲出してゐる。幾多の點に於いて、エンゲルスの誤謬を訂したカウツキーも、此一事については、一言も辯ずるところなく、エンゲルスの先例を其儘踏襲するに止めてゐる。更らに、カウツキー以上に、細密の校訂を重ねられたかの如き河上博士たちも、『第一版への序文』として、眞正の第一版序文でない、削り取り並に日付け錯簡の第一版序文を、何の斷りかきなしに其邦譯に掲出して居られるのである。

換言すれば、高畠氏とは、其の臺本を異にし『同氏の譯本のすでに廣く行はれおるに拘らず、別に新譯を敢て』したものたるに拘らず、此點に於いては、河上本は、全く異るところはないのである。

此の一事は、恐らく、近頃刊行を始めたリヤザノフ氏の『マルクス、エンゲルス全集』中に於いては、詳しく考證せられて、事の眞相を明かに示されることであらうと思ふが、今日までのところ、而して、寡聞なる私の眼の屆く限り、未だ何れの學者――マルキシストも非マルキシストも――も、これを指摘したものがないようである。これは、むしろ一奇とすべきではあるまいか。

私は、偶々事が、私の當面の問題に關するものなるが故に、玆にこれを擧ぐるにすぎないので、其事自らには何等の重きを置くものではない。然るに、此事よりも、遙かに、末梢的な事柄について、神經敏感に是正的な學者たちが、此事に、些も言及しないのは可笑しなことだと感ぜざるを得ないのである。

其一例として、エンゲルスの不正確、而して其れを是正したカウツキー、其カウツキーを唯襲踏した河上博士たちを揚げて、カウツキーに倣はざりしの故を以つて、高畠氏譯本を貶する、三木清氏の近頃の一文をあげることが出來る。事は、前述第二の點に關する。

マルクスは、フランス譯本の卷尾に、第二版ドイツ刊本跋文拔萃なるものを譯掲せしめてゐる。其れは、前段にあげた通り、河上博士たちが、『全部書き變へた』云々の譯を着けられた箇所の前後四項に亘つて、これを削り取つたものである。削り取りは、其以外にも、多少は見出される。正確、綿密なマルクスは、從つて、其題を、單に『跋文』とせず、『跋文拔萃』としてゐる。ところが、マルクスの此の周到なる用意はエンゲルスによつて、裏切られてゐる。何となれば、エンゲルスは、斯く、文初の四項を削り取つた儘のものを『拔萃』なる文字を附せず、且つまた、『跋文』なる文字をも削り取つて、單に『第二版へ』と題せしめ、更らに、また其地位を卷末から卷頭へ移して、第一版序文——削り取り且日付錯簡の(三)——の次へ收めたまゝ、第三版一八八三年ハムブルグ刊以降の各版に刷出せしめてゐる。而して、更らに第三版には、一八八三年の日付で、『第三版へ』と題して、エンゲルス自らの序文を添へ、第四版には、更らにまた、一八九〇年附で『第四版へ』てふ序文をも添へてゐる。第五版以下は、エンゲルスの序文新加なし。

單に、『第二版へ』と題して、序文と云ふ文字は加へてはないが、卷頭に第一版序文に續いて、而して、第三、第四版への序文の前へ挾んで置いてある以上、エンゲルスは、右を、序文として取扱つたものと認めるの外にない。現にエンゲルス自ら編纂者として署名してゐる一八八六年刊英國版英譯資本論第一卷には、原著者諸序文として、『第一版へ』『第二版へ』と併掲してあるによつて、此事は疑ない。本邦英譯本も全く此例を踏襲してゐる。從つて、エンゲルス編纂本を底本とした高畠氏邦譯資本論が『第一版原著者序文』の次へ『第二版原著者序文』と題して、其文を譯掲してゐるのは、事元より當然である。氏は更らに、エンゲルスの第三版、第四版序文をも譯掲してゐる。河上博士等本には、此れを缺いてゐる。

尤もファン、デル、グースの和蘭譯本一九一〇年刊には、エンゲルスを其儘に、別に、『序文』なる文字を附せず。Bij de tweede uitgave（第二版へ）とのみしてある。しかし、これは、唯だ、『序文』てふ文字を附けないのみで、第一版序文に續いて卷頭へ掲げてあるから、無論エンゲルス同樣、序文と認めたものに相違ない。更らに、モリトル氏のフランス譯『マルクス全集本』の第一册一九二四年刊には、明かに、『第二版序文』と題して、初め四項を削り取らざる原跋文が其まゝに譯出されてある。

河上博士たちの譯出されたものは右、モリトル氏のと同じもので、

而して、其れは、カウツキー通り『第二版への跋文』と題してあり、其文を、マルクスの爲した如く卷末へ載せず、これを卷頭に置くと云ふ些事に至るまで、――其何故なるかは無斷にて――忠實にカウツキーに追從してある。無論文初四項は削り去らずにある。何となれば、カウツキーが削り取つてゐないから――であらう。

かくて、我々は、此點に於いて、忠實にエンゲルスに従つた高畠本、同じく忠實にカウツキーに倣つた河上本の二つの日本譯を有する次第であるが、マルクスの眞本其儘の日本譯は、未だ一つもこれを惠まれてないのであることは、玆に記して置かねばならぬ。

（八）

既に第一版序文の取扱についてすら、必ずしも神經過敏的に、マルクスの眞本其儘でなければならぬなどと考へざる私共は、第二版跋文の取扱の如き、より小なる事に於いて、マルクスの眞本通りでない故を以て、彼是咎め立てするの無益なるを感じつゝあるものであるが、玆に右云ふ三木氏は、其一方を棚へ上げ置いて、他のより小なることでカウツキー模倣の河上本を揚げ、エンゲルス通りの高畠本を貶して居ることを見て、甚だ笑止なことと覺えざるを得ないのである。即ち氏は、東京日々紙（二年十一月七月所掲）の一文に於いて、『第二版への跋文れは、事實、跋文であるに拘らず、高畠本では、「序文」となつてゐる」』と、恰かも、跋を序としたのは、高畠本に始まるが如きことを記してある。氏は、ハムブルグ版本も、數多き各國語の譯本も、殊に市中にゴロ〳〵してゐるモリトル氏の最近のフランス譯本をも、一瞥することなかりしものと見へる。さりとは、遼東の豕たるも甚しい。

氏の遼東豕は、更らに同紙に掲出した其の第二文（同月二十一日號）に於いて、『私が、カウツキー版に従つて、跋文とすべき處を、高畠本には『序文』となつてゐると注意したのに對し』云々の語に至つて殊に滑稽の感を呈する。高畠氏從つてエンゲルスの所爲の當否を討すべき基準なるものありとすれば、其れは、無論カウツキーであるべきではない。著者マルクス其人の外になかるべき筈である。『私がカウツキー版に従つては』は、噴飯に値する。高畠氏に注意する親切と綿密とを有するならば、何故マルクスの眞本に從つて注意せられなかつたのか。エンゲルス第四版が、決定版でない如く、カウツキー民衆版も、また決定版ではない。マルクスの本は、マルクス自らの眞本によつて決するの外はなかるべきではないか。カウツキー本に、幾多の遺漏があることは、知る人ぞ知る。河上博士達の底本たりしてふ事は、決して、カウツキー本に、何等の權威をも、附與する所以ではないのである。

若し、高畠氏に注意すべきことありとしたら、其は、原文が、序文となつてゐるてふ些事よりも、其は、マルクスの原文の全文でなく、初め四項が削り取られたものであると云ふ、遙かにより重要な一事であつたるべきである。しかるに、些事について注意する三木氏は、より肝要なことについて、何も言つて居らぬ。否、三木氏が、注意すべかりし、最も肝要な事は、エンゲルスによる此の改竄ではない、マルクス自らによる三種の第一版序文の併立これであらねばならぬ。而して其の注意を受くべき人は、獨り高畠氏のみではない、河上博士たちも、亦注意せらるべかりしである。三木氏は、河上博士たちには注意せずして、獨り高畠氏に對して、而も、遙かに、肝要の少いことについて、注意して、而して『邦譯二著の對立』などと云はれる。私は、氏の哲學者としての用意の周到について、惑なきを得ないものである。

否、高畠、河上兩氏よりも、更らに、より多く、三木氏の注意を被るべかりし人は、第二版跋文をエンゲルスの改竄から救ひ出して置き乍ら、第一版序文に關はるマルクス自らの爲すところについて、何事もせずに捨て置いたカウツキー氏其人でなければならなかつたるべき筈ではないか。

これを要するに、此くの如きことについて、特に注意を要するとすれば、第一に、注意せらるべきは、著者マルクス其人であり、第二に改竄を敢てした第三版以下の編輯者エンゲルスであり、第三に校訂の業を企て、錯亂、誤謬を出來る丈け訂したと公言する民衆版の編者カウツキーであり、第四に、マルクスの眞を得んとの熱心からエンゲルスを捨て、カウツキーを取つた河上博士たちであらねばならぬ。エンゲルス版第六版を底本としたと公言する高畠氏は、此等の詮索立ての些事については、殆んど何も注意を被むるべき點を有つて居らぬのである。殊に、『私の語學は、英獨二語に限られてゐる』又は『舊版は兎に角失敗であつた』と卒直に告白してゐる同氏に對しては、此等の些事は、元より何等問題とならないと信ずる。更らに、高畠氏が、資本論の邦譯に着手せられた頃は、カウツキーの民衆版は、未だ同氏の見ざるところであつた。小泉信三教授が三田學會雜誌で、此版本のことを紹介せられたのが、恐らく、同氏が、此版本の存在を知られた端緒であつたらしく思はれる。同氏が、エンゲルス版を底本としたことは、決めて當然なことである。之れに反し、一九二七年の今日、カウツキー版のみに追從して邦譯本を作る河上博士たちの方が、必ずしも當然とは思はれない。カウツキー版に據るは元より妨げない。しかし、其れと共に、各種の他國語譯本や、將たまたマルクスの眞本を、自由自在に見る便宜と特典とを有する河上博士たちが、カウツキー版に於け

る訂正丈けを以つて滿足するに止るは、――若しも、カウツキーが右の訂正をしてゐなかつたら、或は河上博士たちもエンゲルスの舊に從つたかも知れない、――決して、用意の萬全を以て許さるべきとは思はれないのである。

事の序に、三木氏の詮索立ての甚だ不思議なものであることの他の一例をあげて見たい。

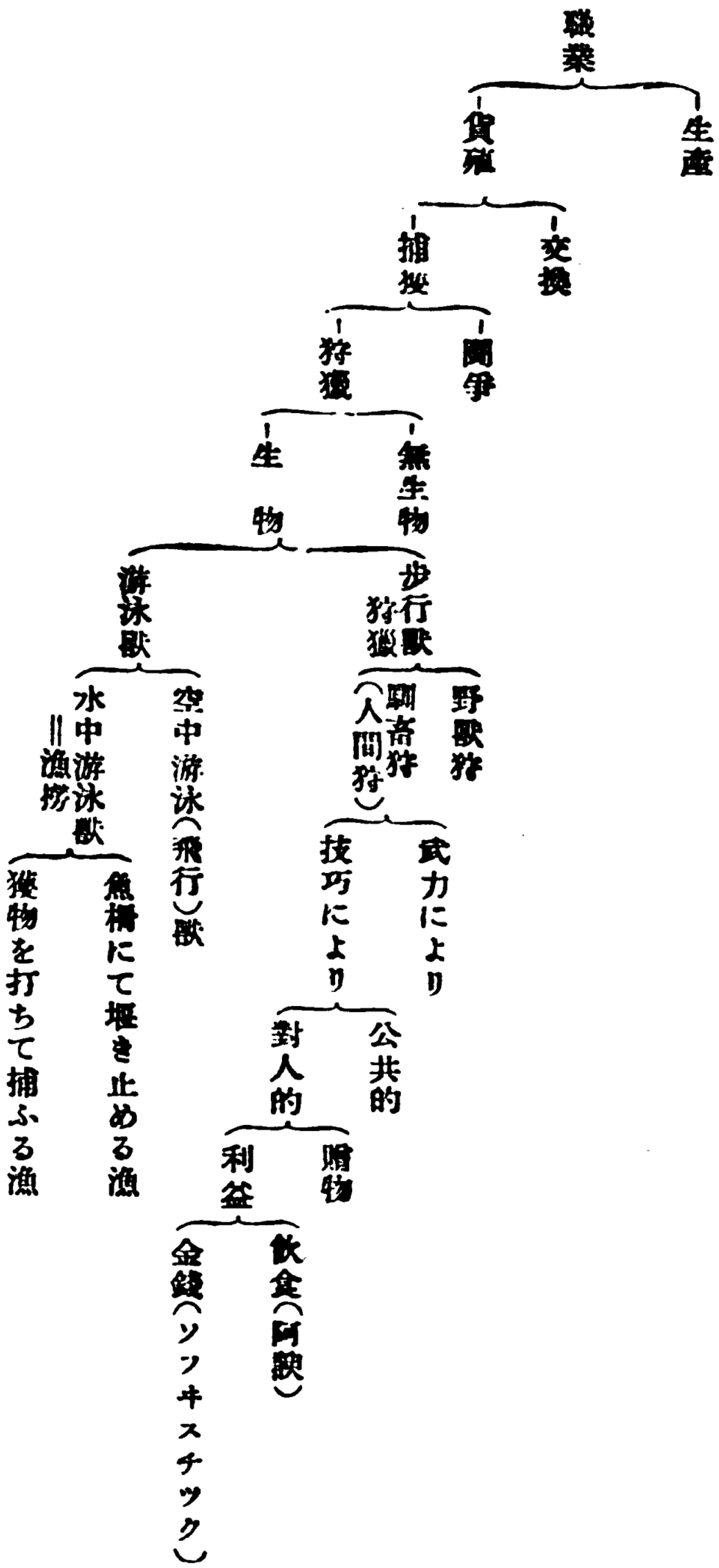
三木氏は、高畠譯を難じて『この場合 Das Materielle（物質的なるもの）を「物質世界」と譯し、Das Ideelle（觀念的なるもの）を「觀念世界」と譯するは（中畧）、假りに、通俗的になるとしても、それではヘーゲル的、マルクス的用語の特質は失はれ、そのために、讀者を誤解に導く危險がある。すべての獨自なる思想家、學者はその用語を嚴密にすることをつねとした。飜譯はこのことを、絶えず留意せねばならぬ』と、其第一文に於いて云ひ、更らに、石川氏の解嘲を難じた其第二文に『斯くの如き基準の誤認は、氏の方法上の誤謬と關聯してゐる。氏が高畠本の譯語なる「觀念世界」及び「物質世界」に對する私の批難を辯護されたところの方法は誤である。第一に、これらの言葉の出て來る個所は、マルクスがヘーゲルの觀念的辨證法に對して自己の唯物辨證法を述べたところであり、從つて、マルクスがヘーゲル對質のために、相手の用語法をここで用ひたのは、自然である。（中略）これら二人を混同するよりも、われ〳〵は、むしろマルクスの原文を忠實に飜譯すべきであらう』と、高畠、エンゲルスを混同して、跋序論を試みマルクスの原文を、忠實にも粗末にも、一向に顧みなかつた三木氏は斯く石川氏を難じてゐる。而して、此批難に於いて、氏は、再び其の忠實に飜譯すべしと、人に向つて說くマルクス其人が、如何なる飜譯を是認してゐるかを、一向考慮してゐないのは、笑止千萬なことである。

方法上の誤謬。マルクス用語法の特質。獨自なる思想家。その用語の嚴密。觀念的對唯物的辨證法。等。等。三木氏の此れらの陳列言葉朝めしに際して、一讀するに止る讀者は、同氏の如何にも博學なることを知り得ると共に、河上氏の譯本は、如何にも比倫を絶する底に高畠本に對して、優越なものであることを敎へらるゝ他方に、高畠本とは、如何にも、ヘーゲル的、マルクス的に、素人臭いものであり、其れを辯護する石川氏の方法上の誤謬（!?）とかは、如何にも許し難いものであることを悟得せしめられたことを、喜ぶであらう。讀者よ、一早まること勿れ。昔しプラトーン、アリストテレースの時代の希臘に、

一派の學者たちがあつた。其言は博安、其意氣は軒昂、容易く他を服じ、容易く他を服す。名けて、ソフキストと言ひ、其手段はソフキスチツクと呼ばれてゐた。私は、今端なく、其學者たちを想出さずにゐられない。乞ふ。プラトーンの言を聞くまで待たれたい。

(九)

プラトーンは、『ソフキスト』と題する對話一篇を殘してゐる。其中に甚だ興味深く職業の分類を爲して、ソフキストの面目を躍如たらしめてゐる。今讀者の便の爲めに、これを表にして掲げて見よう。



ソコデ、ソフキスチツクについての、プラトーンの第一の定義は、貨殖の術の中、捕獲に屬し、更らに、生物捕獲に屬し、其中で、馴畜狩に屬し、其中人間を狩るものであつて、金錢に換へる交換で、教訓の形式の下に、若くして富める人々を捕獲する術、これが、ソフキスチツクであるといふのである。

ステフアヌス頁二一九bから二二三nまで。マーチン・ハイデガー教授の一九二四ー二五冬學期講義に『プラトーンの諸對話篇。ソフキスト』の講篇があるが、殘念乍ら刊本はない。私は講義筆記を有つのみであるが、多分三

木氏は、親しく、其講義を聽聞するの特惠を享けた一人であつたらうと想像する。

三木氏の博學なる、遠い昔しの希臘のソフヰスチック的捕獲術を、其の資本論邦譯二種の對立論に應用して居られるものなるが如き感が惹き起される。これは、極めて博學なマルキシストや此頃のドイツ哲學祖述者らの間に、時には、見出さるゝところではあるが、三木氏の文に於けるほど、巧妙に應用せられた捕獲の例は、寡聞なる私の多く見ざるところである。但しプラトーンの『貨幣』は何か他の適當語によつて置き換らる可きは元よりである。

乍去、此のソフヰスチックの捕網から脱出することは、極めて容易なことである。其れはマルクス自らが、右當該の文を如何に外國語に譯出することを欲したかを、顧みさへすれば足りるのである。マルクスは、生前資本論の英語譯を準備しつゝあつたとのことであるが、其文は今ついて、これを知ることが出來ない。幸にして、フランス語譯については、マルクス親閲公認のロア氏の本がある。其本には、右當該の箇所は、實に、左の如く、譯出せられてあるのである。

Ma méthode dialectique, non-seulement diffère par la base de la méthode hégelienne, mais elle en est même l'exact opposé. Pour Hegel le mouvement de la pensée, qu'il Personnifie sous le nom de l'Idée, est le démiurge de la réalité, laquelle n'est que la forme phénoménale de l'Idée. Pour moi, au contraire, le mouvement de la pensée n'est que la réflexion du mouvement réel, transporté et transposé dans le cerveau de l'homme.

Extraits de la postface de la seconde édition allemande. P. 350 b.

『私のヂアレクチック方法は、啻に、其の根柢に於いて、ヘーゲル的方法と異るのみでなく、却つて、其の正反對ですらある。ヘーゲルに取つては、彼が、觀念の名の下に人格化するところの、思想の運動は、現實の創造神であり、現實は、觀念の現象形態たるにすぎない。私に取つては、其の反對に、思想の運動は、人間の腦中に移轉され、置き換へられた現實的運動の反射たるに外ならない。』

何處に、『觀念的なるもの』だの、『物質的なるもの』などの『ヘーゲル的』『マルクス的』嚴密な用語法などがあるか。若し、其んな嚴密用語法の特質を失つた爲めに、讀者を誤解に導く危險があるとしたなら、其危險を公認したものは、實に、マルクス其人ではないか。『すべての獨自なる思想家』の一人たるマルクスは、却つて、この用語を嚴密にせざる廉を以つて、三木氏から叱らるべき筈である。飜譯者に對して、絶へずこのことに留意せねばならぬといふ氏は、著者自らは、毫も此事に留意せずして、可なりとするものにや。怪かし、怪しきこ

とである。方法上とかの議論が三木氏に存するや否やは、今茲の問ふところではない。左様な七面倒な議論を、吹きかけられる前、三木氏自ら、フランス譯を一瞥せずして、輕々に、他を上下するてふ學問上の態度について、反省せらるべきでは、なかつたらうか。

三木氏の論ずることは、マルクス資本論の外國語への飜譯についてである。其以外の何ものでもない。マルクスの資本論なるものは、マルクスの書いたものである。三木氏の書いたものでも、河上博士の書いたものでもない。マルクス、エンゲルスの異同について、彼是云ふ三木氏は、無論、マルクスとヘーゲルとを混同するの非を知つて居られよう。ヘーゲル文の飜譯についてなら、或は、問題は自ら別であらう。今問題は、マルクスの物した其の資本論の外國語への譯出し方についてにかゝはる。マルクス自らが、フランス文への譯出し方について、親しく校訂した上公認した右一條の譯文について、三木氏は異議を提出する資格を、當然に有つものと自負せられるものではあるまい。氏は、此のフランス譯あるを知らぬ筈はない。知つて居乍ら、高畠、石川兩氏に對して、其の博詞宏辭を費やすは、鬼面――但し張子製――他を驚かして、高畠譯の如何にも、見すぼらしいものであるかを、朝めし前に急ぎ日刊新聞を一讀する何十萬の人々に吹き込んで、『馴畜狩』に成功しようと欲したものと推する外に、解釋の道はない。

[illegible]プラトーンの分配定義による[illegible]の一としての[illegible]ツタを、昭和の日本に輸入せられたものではないかと、茲に疑ふ所以である。

三木氏の文にヒントを得て河上博士等の譯本を、再度手にした私は、其の序文中に、三木氏のとは、趣きを異にしては居るが、其の所謂『綿密』又は『正確』なるものについての面白い一例を見出した。博士等は『マルクスは、或意味において文字の末梢にまで神經の敏感性を有し（中略）試にこれをこの第一分册の範圍についていへば、例へば、abstrakt menschliche Arbeit といふ場合に abstrakt を abstrakte としてゐないのは、たゞ、e 一文字の差であるけれども、そこには、方法論上重大な意義(!?)が――形式論理における抽象との區別が――含められてゐる。これをたゞ『抽象的人間的勞働』と譯出するが如きは、原著者の用意を全く看過することになる（序文五頁）』云々と云つて、高畠本に『抽象的人間勞働』としてあることを明示はしてないが暗に非難して、高畠譯は、此の方法論上の重大な意義を無視し、マルクスの用意を全く看過したものなるを諷してある。（但し博士たちは、高畠本を眼中には置かぬと辨せられるではあらう。其は、御隨意として置く。）三木氏の『方法上の誤謬、』河上博士たちの『方法論上の重大な意義』など、など、『方法論』若し靈あらば、斯くも、

屢々安價な讃美祭祀を浴せかけられることを、迷惑千萬に感ずるであらうと考へられる。兎に角、我々『方法論』に無學無知な非哲學的俗學者流は、かくして、何度も、膽を寒からしめられる。

しかし、河上博士たちのあげた此場合は、別に『方法論』の御神詫を開帳する必要の少しもない、極めて簡單明瞭な事柄に屬するのである。其れは、ドイツ語第一年生すら周知であるべき筈の文法上の事柄たるにすぎないのである。此の場合の abstrakt は menschlich といふ形容詞を形容する副詞である。而して、此くの如き場合、其副詞は、毫も語尾變化を被るものでないことは、第一年生もこれを知つてゐるべき筈の些細事——重大事ではない——である＝尤も、ドイツ語のみならず、英佛伊語は勿論、言語系統の著しく異る露語でも、比較の Steigerung の場合には、副詞は、全體變化を被むる。例へば、много（多く）, более（より多く）, более всех（最も多く）мало,（少く）, менее（より少く）менее всех（最も少く）＝、マルクスが、abstrakt を變化させないのは、單に、文法上の規則に從つたもので、方法論上重大な意義などを少しも有たぬのである。若しも然らずして abstrakte と書いたなら、其れは、『勞働』を形容する形容詞であつて、『人間的』を形容する副詞ではないことに、當然なる丈けのことである。

然るに、河上博士等は、此の簡明な一句を『抽象性における人間の勞働』と譯出して、『かゝる冗長なる譯語に書き替へることは、たしかに不手際に相違ないが、吾々はウォレースのヘーゲル譯に倣ひ（!?）、已むをえざる場合には、必ずしも原文の字數や語數などに頓着せず、むしろ偏へに原意に、忠實ならんことを努めたのである』と、事々しく說明して居られる。此れ丈けを承ると、河上博士たちの敏感性、正確性は、實に高畠本などの夢にも思ひ及ばざる驚く可き斗りのものであつて、『自から其の新譯を要する所以を明かに』し、其れと共に、日本語なるものは、斯くも、不手際な譯出方をしか許さぬ、憐れ千萬な語らしく見へる。しかし、私は左樣は思はない。イクラ日本語が貧弱なものであらうとも、副詞を副詞として譯出することの出來ない程甚しいものだとは考へられない。右の一句は、『抽象的に人間的な勞働』又は『抽象的人間の勞働』とでもすれば、原意は、誤なく傳へられる樣に感ずる。殊に、博士たちの樣に、小黑丸を惜氣もなく使用するとすれば『抽象的・人間的勞働』は、『抽象的』が形容詞なる場合と定めて置けば、其れと、混同誤解される虞はなかるべきではないか。否々、斯くの如き詮索立ても、河上博士たちの言があるからのことで、實を云へば、其れ丈けの敏感性はマルクスは、他國語への翻譯に於いて、必

ずしも要求しては居らぬのである。其露譯に、マルクス全集のロア氏フランス譯には、右の一句は、極めてアッサリと、le travail humain simplement となつてゐる。即ち、抽象的は、必ずしも、humain にかゝると云へず travail にかゝると見ても差支ないのである。若しフランス語で、河上博士流に、綿密に、原文を出さうとなれば、le travail abstraitement humain とすべきであつたらう。マルクスが、左様させてないところを見ると、e 一文字の有無の方法論上の重大なる意味云々、は自ら噴飯し出すではあるまいかと思はれる。河上博士たちの敏感性は、玆ではあわれ、マルクス自らによつて、嘲られた如くに見へるも、笑止とこそ申すべきであらうか。兎に角ロア譯と高畠譯との間には、何等方法論上重大な相違の横はつて居らぬこと丈けは、明々白々なことである。

何れにしても、三木氏や河上博士たちのマルクス禮讃中には、以上の様に最高度にまで引揭げられた詮索立て、綿密さ、正確性、而して其れを宣傳する博學振りが、含まれてゐることは、注目に値する特徴なるかの如く見へる。

（十）

用語体目。

アリストテレースの經濟說については、經濟學史の書物には、多少なりとも、必ず言及してゐるところであるが、大部分は、極めて簡單な紹介に止り、特に研究の跡を示めして居らぬ。特に古代希臘の經濟學說、經濟思想を取扱つた若干の書物に於いても、アリストテレースを稱揚する言は載せてあるが、何故に、其の經濟學說が重要視せらるべきであるかを適確に示したものは、甚だ少いのである。其反對に今日の經濟學に對するアリストテレース經濟學說の貢獻を、一掃的に否認する者も見出される。其甚だ著しいものとして、玆に、西洋と日本とから、各一例づゝをあげて見たい。

西洋のは、フランスの經濟史家スーションの『古代希臘に於ける經濟諸理論』巴里一八九八年刊。六―八頁 中の左の言である。

『我々の中、誰人にても、其の經濟學的信念に於いて、プラトーンやアリストテレースに、負ふ可き何ものを有つものは、一人もない。（中略）古代希臘の遠い過去にまで溯つて、我々の思想とは、餘りに緣遠いことが、慥かに疑ない若干の不明瞭な思想などを尋討することは、我々の現代的研究を、何等助くる見込のない、甚だ無益な業である。』

日本からの一例とは、近刊『社會科學研究』揭載の高橋誠一郎氏の

『アリストオ（？）テレス經濟學』の中の次ぎの言である。

『然るに、其合理的要素を古代哲學に求めたるスコラ哲學の拘束より解放せられんとする近世哲學の努力は徐々に實現せられたり。倫理的及び政治的科學の研究者は、彼れ等の問題の解決を思想界の暴君（!?）たる、アリストオテレスの權威に求めずして、人間性の直接研究に依賴せり。而して傲岸なる新興ブルジュワジーは又た、輕侮の眼を以て、商工業を觀たる古代哲學に學ぶ所なくして、只管自己の力によつて自己の問題を解決せんとせるなり。國民經濟學は「萬學の父」アリストオテレスに發せずして、却つて、アリストオテレス及びスコラ哲學に對する反抗の時代に萌芽を發したるものなり。』

右誌第一卷第三號
八一―八二頁

茲に、右諸例と對立せる最も際立ける正反對の例は、實に我がマルクスに於いて、見出されるのである。マルクスは資本論第一卷丈けに於いて三度も繰返して、最上級の尊稱を、アリストテレースに與へてゐる。卽ち、民衆版で云へば、第二四頁に、『偉大なる研究者』、第四五頁に『思想界の巨人』、第三五二頁に『古代の最大思想家』と云つてゐる。而して（一）價値形態について、（二）奴隷勞働について、（三）財の

いて、（六）人間の社交動物なることについて、（七）國城について、など數ヶ所に、アリストテレースの言をあげて、自說の吟味・參習・對照などに當てゝゐるのである。就中、彼が、最も深い尊敬の態度を以つてアリストテレースの說を引用し、論評してゐるのは、私が今當面の問題とする等價形態論中に於いてである。今其文を河上博士等の譯本から、次に引用して置く。此引用文は、私に於いて、一も手をふれず、原譯文其まゝ同譯本八二頁以下から引く。

『最後に展開した等價形態の二つの特徵は、價値形態をば、多くの思惟諸形態や社會諸形態や自然諸形態やとともに、始めて分析したところの、かの偉大なる研究者にまで吾々が遡るならば、なほ一層理解し易くなるであらう。それはアリストテレスを指す。

アリストテレスは先づ、商品の貨幣形態はたゞ簡單なる價値形態の・すなはち一商品の價値の任意なる他の一商品における表現の・より發展せる姿であることを、明白に述べる、彼はいふ、

『5枚の蓐＝1軒の家』（κλίναι πέντε ἀντὶ οἰκίας）

は『5枚の蓐＝若干の貨幣』（κλίναι πέντε ἀντὶ … ὅσου αἱ πέντε κλίναι）

と『異るところはない』。

彼は更に、かゝる價値表現を含んでゐる價値關係は、そのもの自體において、家は蓐に對し質的に平等とされることを・またこれら

測りうべき大きさとして互に關係しえないだらうことを・條件づけてゐるといふことを、洞察してゐる。彼はいふ、『交換は平等なくして存在しえない、しかし平等は通約性なくしては存在しえない』(οὔτ᾽ ἰσότης μὴ οὔσης συμμετρίας)と。しかし彼はこゝで立ち停つて、價値形態のより以上の分析を拋棄した。『かくも多種多樣なる物が同一單位で測られうるといふことは』、すなはち質的に等しいといふことは、『しかし實際には不可能である』(τῇ μὲν οὖν ἀληθείᾳ ἀδύνατον)。かゝる平等の取扱は物の眞の性質とは何等か無關係のものでしかありえない、從つてたゞ『實際的必要の應急手段』(二一a)たるにすぎない。

（二一a）〔アリストテレス著『ニコマーコス倫理學』十卷本、第五卷、第八節。——カウツキー補註〕

かくてアリストテレスは、彼れのより以上の分析がどとで挫折したかを、すなはち價値概念の缺亡を、彼れ自から吾々に語つてゐる。褥の價値において家が褥に對して表はすところの、ある平等なるもの、すなはち共通なる實體は、何であるか？ かゝるものは『實際には在りえない』とアリストテレスは云ふ。何故か？ けだし家は、褥と家との双方に存在するところの現實的に平等なる或るものを代表する限りにおいて、褥に對し平等なる或るものを代表する。そしてそれは——人間勞働である。

しかるに、總ての勞働が商品價値の形態においては平等なる人間勞働として、且つそれゆゑに相等しと看做さるゝものとして、表現されるといふことは、價値形態そのものからはアリストテレスの看取しえざるところであつた。なぜなれば、ギリシャの社會は奴隷勞働に立脚してをり、それゆゑに人間および人間の勞働力の不平等をその自然的基礎としてゐたのであるから。價値表現の秘密は、——あらゆる勞働は、それが人間勞働一般であるがゆゑに、またその限りにおいて、平等性と等一な妥當性とを有すといふことは——人間平等の概念がすでに國民的信念の固定性をもつに至つたとき、漸く闡明されうる。しかしかくの如きは、商品形態が勞働生產物の一般的形態であり、かくてまた商品所有者としての人間相互の關係が支配的な社會的關係であるやうな社會において、始めて可能である。アリストテレスの才の榮は、彼れが商品の價値表現のうちに一の平等關係を見出したといふ點にこそ、正に光り輝く。たゞ彼れの生活せし社會の歷史的限界は、この平等關係が『實際には』何において成立するかを發見することから、彼れを妨げたのである。」

右當該部分を、高畠氏譯本からも、引いて見よう。改造社刊本二九、三〇頁。河上博士文同樣に、手を觸れずに引く。

『これらの最後に述べた等價形態の二特色は、かの思想形態や、社會形態や、自然形態など幾多の形態と相並んで、更らに價値形態をも初めて分析したところの大思想家に溯つて考へるとき、ヨリ理解し易きものとなる。その大思想家といふのは、即ちアリストテレースのことである。

アリストテレースは先づ、商品の貨幣形態なるものが單純なる價値形態、換言すれば（任意に選んだ何等かの商品を以つてする一商品の價値表章）の更らに發達した姿容に過ぎぬことを明かに述べてゐる。即ち彼れは 5褥＝1家屋 は 5褥＝幾許の貨幣 と『異なるところがない』と言つてゐる。

彼れはまた、この價値表章を含む價値關係が更らに、家屋が褥と質的に等しいものとされること、並びに斯かる本質上の等一性なくんば、これらの感性的に相異つた物は、通約し得べき大さとして相互に關係せしめられ得るものでないことを認めてゐる。彼れは言ふ。——『交換は等一なくして存在し得るものでなく、等一は通約性なくして存在し得るものでない』と。が、彼れは茲で行き詰つてしまつて、價値形態のそれ以上に進んだ分析を放棄してゐる。『然し斯く種類の異つた者が通約され得るといふこと』換言すれば質的に等しいといふことは、『本當は不可能である。』斯かる等一は、これらの物の眞の性質には關係なきものであつて、『實地の必要に對する應急策たり得るに過ぎぬのである』と。

要するに、アリストテレースは、彼れのそれ以上に進んだ分析が如何なる點で頓挫したかをみづから語つてゐる譯である。即ち、價値概念缺如といふことがその頓挫の原因となつたのである。褥の價値表章に於いて、家屋が褥に比して代表するところの等一物、換言すれば、家屋と褥との雙方に共通するところの實體は何であるか？斯樣な物は『本當に存在し得るものでない』と、アリストテレースは言ふ。何故存在し得ないか。褥と家屋との雙方に於ける現實的の等一物が家屋に依つて代表される限り、家屋は褥に比して等一物を代表することになる。而してその等一物とは、即ち人間勞働のことである。

然るに、商品價値の形態に於いては、一切の勞働が等一なる人間勞働として、即ち同じ値打のものとして言ひ現されるといふ事實をば、價値形態それ自身の中から看取することを、アリストテレースにとつて不可能たらしめた原因がある。それは即ち、ギリシャの社會は奴隷勞働に立脚するものであつて、人類及びその勞働力の不等を自然的の基礎にしてゐたといふ事實である。一切の勞働は人間勞働一般であるが故に、又その限りに於いてのみ、等一であり同じ値

打のものであるといふ、價値表章の秘密は、人類平等の概念が既に固定して先入的偏見となつたとき、初めて解明し得るものである。然し斯かる事實は、商品形態が勞働生産物の一般的形態となり、隨つてまた商品所有者としての人類相互の關係が、支配的の社會關係となつてゐる社會の下に、初めて行はれ得ることである。アリストテレースは商品の價値表章の中に等一關係を發見した點に、天才の閃きを示してゐるが、彼れの生存せる社會の歷史的制限に依つて、この等一關係なるものが『本當は』如何なる事實に存してゐるかを見出すことを妨げられたのである。』

高橋誠一郞氏は、前掲文中、マルクスの此の一節について、左の如く記してある。

『後年カール、マルクスは、アリストオテレスの如き大思想家すら、交換せられたる物件が有するの觀ある通有的要素及び交易が、一見是れ等のものをして、等一の價値たらしむるが如き事實に由りて迷はされたるの事實に注意を向けたり。人は言ふ、五個の寢床は一個の家屋と相等しと。マルクス曰く「寢床の價値が家屋によりて表明せらるゝを許す等一なる或る物、共通なる實體は何ぞ。眞に斯くの如きものは存在し得ず（[illegible]）とアリストオテレスは言ふ。然らば、何が故に存在し得ざるか。家屋が寢床及び家屋の兩者に於て事實等一なるものを代表する限りに於て、寢床と對比して、それは等一なる或る物を代表す。而して之は人間の勞働なり」と。』（資本論第一卷一九二一年二五頁。）

高橋氏の此紹介は、決して、マルクスを正しく傳へたものでないことは、私に於いて、今これを辯ぜずとも、右掲出の兩譯文を、少しく注意して一讀した人々の、直ちに氣付くところであらう。高橋氏の態度は、玆では、全く單に彌次馬的である。何が故に、『アリストテレースは迷はされた』ものと認めざるべからざるかの理由は、寸毫も示されず、單に、マルクス注意の一事を、肯定的口吻を以つてあげてあるに止まる。地下のマルクスは、此の尻馬的ひいきの引倒しに、恐らく迷惑を感ずるものであらう。

マルクスは、先づ偉大なる研究者たるアリストテレースが等價形態の二特徴を、いみじくも看破したる業績を稱揚し、其所說を援き來つて、自說の最有力なる支持者となしたのである。而して後、彼れは自說の更らに、ア氏說に勝りて、價値形態をより徹底的に闡明するものである所以、價値表現に於いて表はさるゝ共通の實體が、人間勞働であることに、アリストテレースの思及ばなかつた所以、而して、其れは希臘社會が奴隸勞働に立脚した社會であり、從つて、人間並に人間勞働力の不平等を、其の自然的基礎としてゐた爲めであることを、論

明してゐるのである。

其は、高橋氏の紹介に表はれたところとは、學問上の意義を著しく異にするものであつて、三木氏等の言はるゝ方法論上の誤謬とは、むしろ、此場合の高橋氏の所言にこそ的中するものではあるまいかと考へられる。而も、其れが、マルクス禮讃文に於いて爲されず、アリストテレース其人の經濟學說を論究した一論文に於いて、爲されてゐるといふことは、私共の輕視し得ざるところである。

スーションや高橋氏やのアリストテレース輕視または無視說に對して、著しい對立を爲すものは、今、露國の經濟學界に於いて、ニコライ・オン氏以後の第一人者と認められてゐるゲレスノフ氏の『社會科學及社會政策季報』第五十卷第一册（一九二二年刊）に寄せた『アリストテレースの經濟學的思界』と題する一文である。其中（同上二九頁）に言ふ。

『アリストテレースの貨幣理論の缺點は、如何に大であらうとも、次ぎのことは、無條件的に認められねばならぬ。貨幣の成立の行程に關する彼の叙述——其れは、序に云ふが、事實的歷史的の過程を叙したものでなく、『理想的』のシェーマを描き出さんとしたものである——が、深くして、巨匠的であるのみでなく、彼の貨幣價値問題の捕へ方は、驚歎に値するものであると共に、之れに比肩すべき說を、近時の經濟諸理論家の間に、輙くは、見出し得ざるものであること、これである。彼の說に、最も多く類似するものは、恐らくマルクスの問題提出方これであらう。而して、茲に、注目に値することは、マルクスは、アリストテレースとは、——福田註。問題の提出方は同じであり乍ら——全く正反對の解答を與へたこと、並びに彼は、アリストテレースの貨幣理論を、可なり詳かに取扱つてゐながら（『經濟學批評』一、二〇、五一、一一二、一三七の諸頁。及『資本論』第一卷民衆版第二五頁に於いて。）アリストテレースの提案した解答を全く顧みなかつたこと、これである。』

ゲレスノフ氏の論文は、其長さに於いては、高橋氏文の半にも達せぬものであり乍ら、アリストテレース經濟學說の眞相を闡明するに於いては、恐らく其十倍以上にも力あるものである。而も、ヘネーやトリヴアー輩の雜書までも、無數縱横に列記せられてゐる——但し、其列擧の方には、疑しき點多々あり——高橋氏の文中、片言隻語も、ゲレスノフ氏の此文に及んで居らぬのは、甚だ惜しい次第と思ふ。兎にも角にも、かくて、『萬學の父』アリストテレースは、脆くも高橋氏によりて克服せられ終つてゐるのである。其れと共に、マルクスのアリストテレース評論の深甚な意味も、亦全く葬り去られてゐるのである——恐れ畏る可き者よ、汝の名は、萬學的經濟學史！

（十一）

さて、マルクスが、前段の引用文に於いて取扱つてゐるアリストテレースの議論は、其の『流通の正義』論の餘中に見出さるゝのである。

アリストテレースが、其倫理學第五篇中に、正義を分つて、廣義の正義、狹義の正義とし、二者共に正しき中間を守ることによつて得られることを説き、狹義の正義を更らに、配分の正義（τὸ δίκαιον τὸ διανεμητικόν）と、匡正の正義（τὸ δίκαιον τὸ διορθωτικόν）の二つとしたことは、人の周く知るところである。前掲高橋氏の論文にも、分配的正義、補正的正義の二つをあげてある。(三一頁) 此事は、今、私の當面の問題とするところでない。而してマルクスの評論も、毫も此事に關係して居らぬのである。マルクスの取扱つて居るところ、而して、私が今問題とするところは、狹義の正義の中、『流通の正義』についてのアリストテレースの所論これである。高橋氏は、『アリストオテレスは周到の注意を以て、正義を區別して分配的の其れと補正的の其れと做せり』と斷言し乍ら、數頁の後に至り(三七頁)突如として、『既述の如く、分配的正義は(中略)然るに、交換的正義は兩者より生ずるものなり』といつてゐる。然らば、氏は、『流通の正義』又は『交換的正義』の別について、何故ために區分[illegible]しや。又[illegible]中に前後何の關聯もなく、既にか第三に、正義たる交換的正義に兩者より生ず[illegible]と放言し、而して、毫も其の跡始末を付け居らず。右論文、三六頁最後第二行より三六頁第三行に至る一節は、アリストテレースの(ベッカー一一三二頁にて)第二十一行以下の一節を、支離滅裂に、恐らく何人かの惡譯について、つなぎ合せて作成された文であらうと想像せられるが、文中、ア氏の原文を引いて示めしたり、アルベルトス・マグヌスを引いたり、又たヘリオドロスのパラフラシスに基いて、教科書類につねに繰返されてゐる對角線圖を揭げたり、極めて博學的なものであることを見ると、ア氏の原文について、考證せられたるかとも思はれる。若し然るならば、其解釋の不透明なることは、驚く可きことと云はねばならぬ。氏は、一體、『交換的正義』なる分類ア氏にありとせらるゝものか否か。若しありとせられるならば、何故に、これを、根本的に否定するグラントを借り來りて、『此の難解なる章句に對してグラントは、下の如き解釋を下せり』と、何等の批評的吟味を加へず、其說に同ぜられたるにや。而も其解釋の半は、パラフラシスの解釋を、グラント氏が取次いだものに過ぎないことを、全く度外に置いてある。其の支離滅裂は、讀む者をして頭痛冬々たらしむるの外、何等教ゆるところないのである。讀者私の此言に疑あらば、乞ふ明窓淨几の下、心を靜かにして、氏の文を

一讀すべく試みられよ。恐らく讀過半に至らずして、長大息を發するに至るであらう。

抑も、アリストテレースの狹義の正義論は、其の倫理學よりも、むしろ、政治學に屬することこそ適當のものであることは、先覺學者の間に定論の存するところである。而して、其の『配分の正義』については、政府學者・經濟學者中、立入つて、これを考察したものも若干は見出される。例へば、シユモラーは、夙に、一八七五年刊の一論文に於いて、これに論及してゐる。(『法律及國民經濟の若干の根本問題』六一頁。)しかし、彼は、これを以つて、私經濟的流通の過程に關するものとなしてゐる。これは、私を以て見れば、冠履轉倒の論であつて、ア氏の『配分の正義』の本質は、公共的のものであり、其經濟的意義は、流通・交換の上にあるのでなく、公納・貢獻・公租等の公經濟的配分にかゝはるものである。之れに反して、シユモラーが、配分の正義の範圍と認めたところは、更らに、第三の正義たる『流通の正義』の領域に屬せしめられてあるのである。此點に於いては、マルクスは、遙かに、シユモラーよりも、遙かに精しく、アリストテレースの說に通じてゐることを示めしてゐるのである。

アリストテレースは、別に『配分の正義』てふ成語を用ゐては居らが、其の政治學第三篇に於いて、詳かに、此の問題を取扱つてゐる。其反對に『流通の正義』に就いては、右揭の倫理學第五篇中の一ヶ條のみが我々に殘されてあるのみであつて、此の眞珠を拾ひ上げて、特に研究したマルクスの篤學は、實に敬服に値するのである。『配分の正義』については、人の知ること甚だ周く、從つて、特別の注意を以てせずとも、其處に問題の橫はつてゐることだけは、これを知り得られる。『流通の正義』については、左樣ではない。否、配分の正義についてと雖も、シユモラーの學問を以てしてさへ、猶ほ誤あるを免れなかつた。其の經濟學的の眞意義を、始めて發見し、其れに基いて、租稅給付能力の根本原理を打立つべく奮鬪したのは、實に、或意味に於いては、其の偉大さの今日と雖も未だ秘れて居ると云ふ可きノイマン教授一人あるのみである。(前號所揭文献表を見よ。此文についても、高橋氏論文中、何の所見なし。而して、アリストテレースは評論せらる。吁。)教授は、流通の正義については立入つて考察して居ない。これは、實に學問の爲め殘念千萬なことではあるが、氏の問題の捉へ方に於いては、まさに當然の事である。かくて、マルクスは、最後まで其光明を失はざる最も輝ける學星として殘る。私は、此問題について、マルクスの示唆を得てから以來、可なり長い間、關係文献を涉獵して見たが、ついに、右の如く斷言するの外ないものである。偉

さる可マルクス！　私に記して、此に至り此[illegible]なるたきを得ざるものである。

（十二）

さて、先づ順序として、アリストテレースに、『流通の正義』などとの第三分類は認められぬと主張する説の一端を紹介せねばならぬ。

此の説を主張するものゝ中最も有名、有力なるは、ツエラー、ヒルデンブランド並に英國のグラントの三氏である。（書名何れも、前號の文献表に掲げあり。）

先づ、最も簡明なグラント氏の説からあげる。其れは、氏のアリストテレース倫理學（書名前掲）解説第二巻一一二頁註一中にかゝげてある。氏は、ア氏の次の一句を釋く。

τὸ δὲ λοιπὸν ἓν τὸ διορθωτικόν ὃ γίγνεται ἐν τοῖς συναλλάγμασι καὶ τοῖς ἑκουσίοις καὶ τοῖς ἀκουσίοις τοῦτο δὲ τὸ δίκαιον ἄλλο εἶδος ἔχει τοῦ προτέρου

『殘る一つは、匡正的の其れであつて、其れは、任意並に非任意兩樣の商取引と關聯してゐるところのものである。此種の正義に、前述のものとは異る特殊の性質を有つものである』

而して、グラント氏は云ふ。此一節に照して、アリストテレースは、前に『配分的正義』を述べ、而して、殘るところの正義は、唯一つ、即ち、『匡正的』の其れであると、明言してゐることは明かである。從つて、更らに、第三種として、『カタラクチツク』とか又は之れに類する名を以つて呼ばるべき正義ありとするものでないことは明かである。τὸ διορθωτικὸν δίκαιον とは、單に『規制的』regulative を意味するのみではない、却つて、嚴密に『補償的』strictly remedial なる正義を意味する。アリストテレース政治學第三篇十三の二十三に於いては、διόρθωμα は remedy（報償）を意味すべく用られてあると。

乃ち氏の意を推して云へば、『流通の正義』若くは『對償的正義』ent geltende Gerechtigkeit なるものは、當然 remedy の中に含まるゝもの、即ち『匡正的正義』に屬するものであると云ふにあると思ふ。氏は、此の『匡正的』を英語では corrective としてゐるが、同時にベーコンの commutative なる用語をも是認してゐるらしく思はれる。（同上頁第四節の總論中）然るに、更らに、右の解説によれば、これを remedial と爲す可きが如くに見へる。此點氏の用語は、稍々統整を缺いて居る

ように感ぜられる。

remedial とすれば、『對價的』の意に於ける『流通の正義』は、含まれてゐると云へよう。corrective としては、含まれてゐないとする方が、當然である。更らに commutative と解すれば、『匡正』の意味は、全く失はれて、純然たる『流通の正義』の義となつて仕舞ふように考へられる。これ私が統整を缺くと感ずる所以である。

ツエラー及びヒルデンブランドの說も、粗ぼ同樣であるかに見へる。曰く、アリストテレースは、『配分的』、『匡正的』二種の正義を認むるのみである。而して、匡正的正義の中には、私經濟的流通の諸關係は、同時に含まれてゐる。從つて、其は、グロチウスによつて συναλλακτική とも呼ばれ、グロノヴヰウスによつて contractoria と呼ばれ、ライブニッツによつては、commutativa とさへ呼ばれてゐるのであると。

而して、第三種の正義を認めない理由としては、(一)右グラント氏のあげた文を引いて、ア氏は明かに、唯二種の正義を認むるのみ、(二)アリストテレースは、『匡正的正義』を論ずるに方つて、ἑκούσια συναλλάγματα をあげ、就中、重なる流通行爲として、賣買・貸借・使用貸借等を指摘してゐるの二點を提出してゐるのである。

ノイマン教授は、右說に對して、自說をあげて、評論してゐる。私は、最も多くを教授から學んだ。更らに、ブラウン氏の英譯倫理學に於ける註解書名前に出づ中の若干言からも、示唆を得た。私は、また、ヘリオドロスの解說について、多くの時間を費して、考慮して見た。而して私は、『配分』『匡正』と互格的に對立するべきものとしてではないけれども、アリストテレースは、慥かに其の約束を一貫的に支持せず、更らに第三種の正義としての『流通の正義』なるものを說いてゐるものと考定するに至つたのである。

マルクスは、此問題に觸れてゐない。其は、何故であるかは、分らないことであるけれども、先づ、此問題に對する立場を明かに定めて置くのでなければ、アリストテレースの價値形態論は、これを正しく解釋し難いものと、私は信ずる。從つて、マルクスの解釋に關する私の疑は、彼が、此問題に對する立場を明示して置いて異れなかつたことに、尠からぬ關係を有つものである。以下其次第を順次に開陳する。(次號完結)

前號所掲文には本文に擧げた外猶若干の誤植あり、此論文の終末に正誤表を一括して掲出する。

大衆講座

アダム・スミスの「國富論」

堀江歸一

一、「國富論」の著作と環境

アダム・スミスの代表的著作と云はれる「國富論」は千七百七十六年米國獨立の宣言されたと同じ年に於て、An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations と云ふ題名を以つて、出版されたのであつて、實にスミスの五十四歳、思慮の最も圓熟し、知能の大に發達した時であつた。此書物は誠に出版當時に於て、早く經濟學に一新紀元を劃したと云ふ聲譽を收めたし、又實に經濟學はスミスの著書に依つて、科學としての存在を主張するを得るに至つたとも云はれる。經濟學の歴史に於てスミスの名と國富論とは萬代不滅の地位を占めるものであると共に、スミスが國富論に於て述べた學説は後の學界に大なる印象を與へたのみならず、其主張した政策は國富論の出版後幾年かを經て、着々實際に施され、爲めに所謂經濟制度の革新を成す機運を作つたもの少なしとしない。現にスミスは後に述べる如く、貿易の自由に就て、熱心に主張しながら、國富論の一節に於て「貿易の自由が英國に於て全然復興されるに至ることを望むのは、ユートピヤの來ることを欲するが如く、間違つて居る」と云つて、自己の所論の實現に就て、將來を悲觀する言を爲した。何ぞ知らん、スミスの「國富論」が出版されてから、數十年の間に、英國民の思想はスミスの教へる所に依つて、次第に啓發され、ピツト、ハスキッソン、ピール、グラッドストーンの如き歴代の政治家は揃ひも揃つて、スミスの忠實なる門弟子であり、貿易の自由は勿論、英國の經濟政策をして、自由のものたらしめることに努力して、遂に之を完成したのみならず、十九世紀の初期に於て、歐洲大陸諸國に同様の政策の行はれたのも、ス

ミスの學問的勢力に負ふもの大なりと考へられる。斯の如きはスミスがユートピヤの來るが如くに考へて居つた自家の所說は最も早く實際に適用された一例とす可きである。

スミスの學說の發生するに至つた淵源を求めるときには、吾人は何としてもスミスの環境を重要視しなければならない。スミスは蘇格蘭ファイフシャーの僻邑カーカルデキーに生れ、グラスゴー大學に於て正式の敎育を受け、オックスフォード大學のバリオル校に進み、成業の後エヂキンバラー、グラスゴー兩大學の敎職に就き、一貴族に隨從して、千七百六十三年から同六十六年まで諸外國に遊び、其間大に知見を開發し、生地カーカルデキーに歸つて後畢生の大著作を大成するに至つたのであるが、斯くスミスの修學し、研鑚し思索しつゝある三四十年間英吉利は經濟上に於て、社會上に於て、如何なる狀態に居つたであらうか。又其狀態は如何にスミスに影響を及ぼして、斯人の思想を釀成するに至つたであらうか。スミスの青年期から壯年期に至る三四十年間は英吉利は舊產業時代を終つて、新產業時代に進む過渡期に居つたと云へる。舊產業時代の特徵とする所は何であつたかと云へば、クロムエル以來の「マーカンチリズム」に基き、國家の定める制度又は規則の下に、國民の行動を束縛し、指揮し、左右し、國民は如何なる職業に就く可きか、如何なる物資を消費す可きか、其消費する物資の供給を如何なる國に就て仰ぐ可きかに關して、細大の別を問はず、盡く國家に依つて、束縛され、干涉を加へられ、自己の自由の如き、殆ど之を見るの術すらなかつたのである。而してスミスの思想上に於ける生長時代に於ては、是等の制度は早くも既に種々の方面に缺陷を暴露し、其實行力も亦弛緩しつゝある趨きなきを得なかつたのであるが、其れにしても尙ほ或る方面に向つては、頗る嚴峻なる支配と統制とを及ぼして渝らなかつた。之を製造工業に就て云へば、當時の所謂工業なるものは、家內工業であつて、一家の家長が家族や、徒弟を使役し、自己の住宅に於て、道具を用ひて、手工業を爲すに過ぎなかつた。而して職人は正規の期間徒弟の勞役に服し、同業組合の許可を受けなければ、仕事に就くを得ざる一方に、一の事業主が自家に收容するを得る徒弟の人數、其仕事に就く可き期間等は多くの都市なり、多くの職業なりに於ては明に法律を以つて規定され、然らずんば法律と同一の效力ある習慣を以つて、律されて居り、勞働者亦救貧法に於ける住居規則に依つて、一の敎會區から他の敎會區に移轉するの自由を持たなかつた。蓋し救貧費の負擔を公平ならしめる爲めに、必要なる規定であつたのである。即ち當時英國に於て、如何に國家の制令が工業の發展を妨害するものゝ大であつたかは、經濟的自由の認められた其後の狀態と對照して、了解されるであらう。

商業に就て、之を見るに、英國に於ては餘程以前から國內の通商は出來るだけ自由にする方針であつて、內地通過稅の如き、國內の諸領域に於ける內地關稅の如き、一般關稅政策の如何に拘はらず、夙に其賦課を禁止された事實に徵しても、其一斑を窺ふに足りる。唯斯く制

度の上に於ては、自由であつても、國内に於ける運輸機關の不備であり、幼稚であることが原因と爲つて、通商は廣き領域に亙つて、行はれるを得なかつた一方に、外國貿易に關しては、「マーカンチリズム」に於ける「有利なる貿易の差額」を獲得しやうと云ふ見地から、輸出を奬勵して、輸入を抑制する爲めに、煩瑣なる束縛や、制限の行はれること、言語に絶するばかりであり、苛重なる課税や、時に絶對の禁止は外國物資の輸入に適用される一方に、輸出貿易は税金下戻や、奬勵金の如き便法に依つて、奬勵され、殖民地を海外に開拓することも、輸出貿易を其所に獨占的に行ひ、他國を排除して、自國の輸出を奬勵すると云ふ見地に於て、是認された。

斯る厳酷なる國家干渉の制度が經濟生活の諸方面に行はれて、能く圓滿なる效果を奏することは、到底期待するを得ざる所であつて、世間に早くも斯る制度を非なりとする思潮の發芽を以つて目す可きものがあつた。アダム・スミスは夙に蘇格蘭に於て、自由を尊重する氣風の下に養成され、生育して居つた其上に、スミスの佛蘭西に客遊するや、當時佛蘭西に擡頭し來つた「フキヂオクラート」派の學説を信奉する諸學者と交遊したが、是等の人々は英國に於けるよりも、寧ろ大なる程度に於て、自國に行はれて居つた干渉束縛に依つて、一方に商業の發達を妨害すると共に、一般民衆から其最も神聖なる財産とも云ふ可き勞働を利用する自由を奪ふの不可なることを信じ、現存する人事上の制度は總て出來得る限り、人が平等であり、自由であつた當時に於ける自然の單純なる狀態に調和しなければならないとした。アダム・スミスは此一派の一主張たる農業を以つて、一國に於ける富又は所得の唯一の源泉とする説に對しては、其根本的誤謬を認めるに躊躇しなかつたのであるが、他の方面に於て、「フキヂオクラート」派の敎へた所謂自然自由の敎義に就ては、深き理解と同情とを持ち、玆に總ての偏頗制限を排除して、自然自由の明瞭にして、簡單なる制度を構成することを主張し、此主張に學問上の根據を與へる爲めに、廣く自己に先だつ諸學者の學説を參照し、其妄を發くと共に、其正しきを取り、極めて廣汎なる範圍に亙つて、經濟學を建設し、之を一貫するに自由の思想を以つてし、此思想を當時の狀況に適用して、組合の有する特權の打破、徒弟條例の廢止、居住法の撤廢等總て自然自由に對して、障礙を加へることの除却を主張するに躊躇しなかつたのである。スミスが經濟學に對して、如何なる見解を持つて居つたかは、「國富論」第四編の緒言に於て明にされて居る。即ち曰く政治家又は立法者の科學の一分科として考へられる經濟學は二個の目的を有す、第一は人民に向つて豐富なる收入又は衣食を供給する、更に適切に云へば、彼等をして各自の爲めに、斯る收入又は衣食を供へるに適せしめることであり、第二は國家又は公共團體に公共職務を爲すに充分なる收入を供へ、であつて、斯くて斯學は人民と主權者との双方を富裕ならしを計畫するものであると。

經濟學に對して下される斯る解釋殊に第二の目的として、

研究を包含せしめる解釋の當否に就ては、議論の餘地なきを得ないが、假にスミスの所謂第一の目的のみに限るとしても、斯る目的を有する經濟學は後日英國正統學派の學者が斯學を以つて、單に富に關する學問としたものに比較すれば、遙に經濟學の領域を擴張し、研究の資料を豐富ならしめるを得るのであつて、現に「國富論」が其後に刊行された經濟原論や之に類する著作に對して、研究の範圍も材料の種類も頗る廣く、其後に於ける經濟原論と經濟政策とを兼ね、加ふるに演繹歸納の兩方法を以つて、研究を進め、幾多歷史上の事實に徵して、理論上の斷定を考證した所以である。若しも經濟學がスミスの遺した儘の形を以つて、英國に於て發達したならば、斯學を以つて、乾燥無味のものとするが如き非難を蒙らず、却つて興味の津々たるの故を以つて、更に多數の研究者を吸引し、世人に感銘を與へるもの亦大であつたらうと考へられる

二、「國富論」に於ける分業論

「國富論」詳言すれば「國民の富の性質並に原因に關する考察」は其表題の示す如く、國の富の本質を明にし、如何にしたならば、國の富を豐にして、國民を富裕ならしめるかを研究の眼目としたのであつて、斯くて國の富を以つて貨幣地金であるとする「マーカンチリズム」の誤解も、國の富は農業のみに依つて、産出されるとする「フキヂオクラート」派の謬見も共に打破された。換言すればアダム・スミスは經濟學のシステムを分類して、「マーカンチリズム」を以つて代表さ商業制度（Commercial or Mercantile System）とフキヂオクラート派に依つて代表される農業制度（Agricultural System）との二者であるとし、前者を攻撃するに當つては、金銀以外に幾多の富の存在することを明にし、後者を非難するに當つては、技工、製造業者、商業家等土地の耕作に關係せざる者を不生產的とするの不可なることを述べ、從來の學者よりも、博大なる見地に於て、自家の經濟學に於けるシステムを樹立しやうとした。即ちアダム・スミスは「國富論」の開卷劈頭に於て、國民の富の源泉とする所の勞働に存することを明にしやうとし、「各國民の年々の勞働は其消費する生活の必要品並に有用品の總てを供給する資源であつて、而して此資源は其勞働の直接に生產する所のものなり、其產物を以つて、他諸國に就て、購入する所のものなりから存立すると述べた。而して此產物が之を消費する人に對して、如何なる割合を保つか、其割合の大小は國の繁榮に重大なる關係を有し產物を增殖して、右の割合を强からしめることを必要とするのであるが、此必要に副はしめるには、第一に勞働者の熟練、敏捷並に判斷を要し、第二に有用なる勞働に使役される人を多くして、斯く使役されざる人を少なくすることを要するとした。第一の點から、アダム・スミスの有名なる分業論が派生し、第二の點から生產勞働不生產勞働に關する議論が釀成されるのである。

右の如き關係から、アダム・スミスは彼の分業論を案出し、續いて

交換の自由[illegible]更に之を國家[illegible]關係に[illegible]して、[illegible]を唱道しやうとするのであつて、其後段の議論に及ぼす交換に關る說い。即ち富の生產に最も必要なる勞働の熟練、敏捷並に判斷は勞働の組織的に運用される結果であつて、而して此組織的運用は分業法の下に收められるとし、分業の種類と其利益とを擧げ、分業の利益を以つて、第一勞働者の敏捷を增進し、第二勞働者をして永く一種の仕事に從はしめる爲め、其仕事から他の仕事に移るに就て費される時間を節約し、第三勞働者をして勞働の省約に資する機械の發明を致さしめるの諸點に在るとした。アダム・スミスは分業の利益を述べるに忙はしく、之に伴ふ弊害に關しては多く之を看過するものゝ如くであつた。唯分業の下に、仕事の單調と爲ることはスミス自身も之を指摘したが、尙ほ之を分業の弊害とするに就ては、多くの辯護論を費して居る。

スミスの分業論を以つて、單に分業の生產增進に資する一の方便である、方便に過ぎないとする見地のみから判斷したならば、スミスの所說を誤まるの憾なきを得ない。スミスは分業の市場の範圍に依つて、制限されると云ふ一章を揭げ、「分業に對して、其行はれる機會を與へるものは、交換の力であるから、分業の範圍は即ち此力換言すれば市場の廣狹に依つて律されなければならない。若しも市場の範圍にして狹かつたならば、何人も自己の勞働に依つて得た產物の剩餘を以つて、他人の產物と交換するを得ないから、一の職業に自己の全力を傾倒するに至らないであらう」と論じ、分業をして盛に行はれしめ、其利益を[illegible]ばならないことを明にした。然らば[illegible]勞働の自由、交換の自由の[illegible]するには何ものを必要とするかと云へば、居住法、徒弟法若しくは徒弟に關する習慣、組合の特權を廢止し、人をして自己の適したとする職業に就かしめると共に、自己の生產した物資を以つて、他人の生產した物資に交換せしめることは、即ち是れであつて、分業論から多くの經濟政策上の主張の行はれるを見るのである。要するにアダム・スミスは經濟學を以つて、國民の富の本質と原因とを明にし、更に進んで國富增進の爲めに行はれる可き政策を考へ、又其是非を究めん學問であるとし、一方に國富を以つて、勞働と土地とより生ずる年々の生產物であるとするのであつて、斯くて勞働に於ては、生產勞働に重きを置くと共に、如何にして生產力を增進せしめるを得るかを工夫し、國富の增進に必要なる產業を維持するに就て資本の必要を認め、資本を增殖するには、節約を尊重して、浪費を戒愼しなければならないとし、遂に浪費者は公共の敵であつて、節約者は公共の恩人であると云ふ危言すら敢てするのである。

然らばアダム・スミスは何を以つて生產勞働と不生產勞働とを本質的に區別する標準に充てたかと云ふに、此點に於ては、スミスの議論必ずしも透徹して居るとは認められない。即ちスミスが此區別を爲すに就て、標準とする所は勞働が其加へられた目的物の價値を增進し、勞働の結果が具體的商品として殘存するか、或は勞働が何ものゝ價値

をも加へることなく、其行はれた瞬間に、効果の消滅を來すか、孰れに在るかを以つて之に充て、斯くて一國の產業中、農業、鑛業、漁業等に投下された資本は最も多量の勞働を利用し、隨つて最も多額の價値を產出するを得るが、之に次ぐものは工業、運輸業、物資配給に關する事業の順位に居るものであるとし、此議論の結果として、一國に於ける資本の供給の充分でない場合には、直に上記四種の產業を併せ行ふよりも、先づ一年を通じて最も多量の生產を擧げ、斯くて最大の貯蓄を行ふに至らしめるを得る農業に資本を注入することを以つて、國富增進の捷徑であるとしたのである。此所說たる、之をスミス以前に行はれたフヰヂオクラート派の農業に從事するものゝみを限つて、生產的とした偏狹なる學說に比較すれば、一進步を示した跡のあることは認められるが、尙ほ勞働の結果が、具體的商品として殘る場合を以つて、生產勞働とし、其以外の勞働を以つて、總て不生產勞働としやうとしたことの如き、後者に至つて、富の生產を以つて、效用の增進であるとし、此點に資する勞働を生產的とする所說に對して、大なる遜色ありとせざるを得ないのである。

三、國富論と自由貿易論

アダム・スミスは分業論から物資の交換の必要なることに入り、物資の交換に關聯して、價値價格の研究に及び、更に貨幣流通の理を說き、價格を構成する分子として、賃銀、利潤、地代の三者に就て、其れ〲研究し、資本の性質を述べて居るが、私はスミスが分業て暗示した所に從ひ、第四編經濟學のシステムと題する諸章の下に分業論を國際間の働きに及ぼして、自由貿易論を主張し、一方にフヰヂオクラート派傳來の自然自由の學說に據つて、輸出入稅若しくは禁制に依つて、貿易に加へられる制限を非難すると共に、他の一方に分業の領域を國境以外に及ぼして、貿易の自由を必要とした點に大なる興味を覺える。スミスは「國富論」の此部分に於て、特に峻烈なる攻擊を「マーカンチリズム」並に其政策に加へて居るのである。即ち「マーカンチリズム」に於ては富は、金銀より成ること、金銀は國內に金銀鑛の存せざる國には貿易差額のみに依つて、齎されることの二原則を確立し、斯くて內國に金銀鑛を有せざる國が國內に金銀を吸收し、增殖するには、外國貿易に依つて、有利なる差額を得るの外に、道はないのであるから、此差額を得るに就ては、宜しく外國物資の輸入を制限し、內國產の物資の輸出を增加するに勉め、輸入の制限と輸出の獎勵とを併せ行ふ可きものであるとした。此種の信念は從來英國に於て、多くの學者に依つて、主張され、說明されると同時に、政治家の間に多くの信奉者を有し、彼等の手に依つて、實際政治の上に、實行される所と爲つた。假令ひスミスの時代に於ては、聊か爛熟期に入つて居つたとは云へ、尙ほマーカンチリズムは其國內經濟制度に對する干涉と相俟つて、外國貿易に加へられる制限の嚴酷なるものを以つてし、容易に學問上に、實際政策上に威力を失はなかつたのである。

主張を排撃しやうとしたかと云へば、消極的方面と積極的方面との二様に分たれる。消極的方面に於ては、「マーカンチリズム」並に之に胚胎する諸政策を攻撃する議論の中心點を以つて、富の唯一の形態として金銀を充てるの誤まれる一事に置き、續いて國際間を通じて、金銀貨並に地金の流動する理由を明にし、更に積極的方面に於ては、分業の利益は決して一國領土を以つて限界とする狹き範圍に局限される可きものでなく、之を國際間の廣きに及ぼし、領土以外の廣きに亙つて、分業の利益を獲得することを有利であるとしたのである。

即ちアダム・スミスの意見を以つてすれば、一國が外國貿易に依つて得る利益は金銀の輸入されることに伴ふものでなく、寧ろ貿易に依つて、總ての種類の物資の輸入されることに存するものであるとした而して一國が內國に於て生產されると同種類の物資の外國から輸入される場合に、之に租稅を賦課したならば、其租稅は保護關稅と爲る。保護關稅は種々の理由の下に、支持されるのであつて、アダム・スミスの時代に於ても、其行はれるもの頗る盛であつたが、スミスは之に對して、「或る社會に於ける產業の總體は其社會に於ける資本の合計額に比例す可きものであり、隨つて或る特殊の產業を奬勵するが如き商業上の制度(即ち「マーカンチリズム」)が行はれたならば、以前よりも多くの資本並に勞働を其產業に移らしめるに相違ないが、然も此事に伴つて、從來資本勞働の用ひられて居つた事業から、是等を奪ひ去る費

放任に任ずるときを以つて宜しきを得たりとする、例へば各自をして自己に有利なる道を選ばしめることは、即ち社會に取つて、有益なる結果を生ずる、政治家は宜しく私人の利害關係をして其赴かんとする所に赴かしめる可きである。何人も低廉なる價格を以つて、購入し得られる物資を高き費用の下に、自ら製造するの愚を爲さゞるが如くに、一國も亦內國に於けるよりも、廉價を以つて供給される外國物資の購入を辭す可きものでない」と云ふ簡單なる道理を提げて國民をして自由に購入せしめることは、其收入を增加し、斯くて國の資本並に所得を增加せしめる所以である」と結論した。

更に之を積極的方面から云へば、國家は個人と同じく、先天的に、將た又後天的に、其國の地位、風土、氣候、國民の習慣、天性等に依つて、種々の特長を備へ、是等の特長に從つて、特殊の物資を製造するに適するものである。一個の勞働者、職業若しくは地方と他の當事者との間に行はれる分業にして、熟練の增進に於て、時間の節約に於て、共に資するものありとすれば、同樣の結果は正に國と國との間に行はれる分業にも期待し得られる道理であつて、貿易の當事者は其自由に行はれることに依つて、各自生產するに其れ〲適して居る物資の交換に依つて、利益を收めることを誤まらないと云ふのがスミスの主張である。

スミスの外國貿易に關して說明する理論の道程は頗る簡單であり、

明瞭であるが、既に富の本質が明にされ又分業の利益の解された以上は貿易上の政策に就て推窮する所の右の如くなるは當然である。而して此貿易に關する理論は他の諸方面に關して、スミスの述べた理論に比較すれば、最も早く英國に於て、實行的價値を有するに至つたのである。即ち前述の如く英國關税制度の改革は千八百二十四年時の商務院長官ウヰリヤム、ハスキツソンに依つて行はれた多少の税率低減、輸出入制限廢止に端を開き、千八百六十年の改革に依つて、完成されたのであるが、此改革を指導した根本原則は何であつたかと云へば、國民をして自己の好む所を選んで、最低廉の價格を以つて物資を購入せしめると共に、最高貴の價格を以つて、物資を賣却せしめ、國民が此判斷を下すに就て、國家は何等の干渉を加へず、何等の束縛を施さないと云ふことであつて、スミスの所說は此方面に於て最も能く具體化されたと稱するを得るのである。即ち英吉利は原料品や衣食資料に對しては全然課税をしない、製造品又は奢侈品に對しても何等の保護税を賦課しない、若しも國庫收入の必要上、彼等に課税することがあれば、斯る輸入税と均衡を保つ程度に於て、同種の內國生産品に物産税を賦課して、以つて輸入税から生ぜんとする、保護的效果を抹消する、關税則は勉めて之を簡單にし、納税者に對する手數の煩雜を免からしめると云ふ諸點は十九世紀の當初から英國に行はれつゝある關税政策上の根本方針であつて、其結果として英國は世界の製造工場として、經濟的繁榮を極めるを得た所以であるが、其本源はアダム、スミスの教へる所に發したものと云はなければならない。

アダム、スミスが「マーカンチリズム」を攻撃する一方に、自家の主張を明にする爲めに、用ひた一二の言を引抄したならば、スミスの外國貿易に關する信念の如何なる邊に存したかを知るを得るであらう。即ち曰く

偏頗又は制限を主とする總ての制度は排斥されて、之に代るものは自ら自然自由の簡單明瞭なる制度でなければならない。何人も公正の法則を蹂躙せざる限り、自己の可なりとする道を踏んで、自己の利益の存する所を追求し他人と競爭して、資本勞力を運用することを許される可きであると共に、國家の君主は私人の産業を管理し、社會の利益に最も適する職業の方に之を就かしめる義務――之を爲すに就て、無數の謬妄に陷り、又適當に之を遂行するに就て、人の知識と智慧とを以つてしては不充分である――から免かれる可きである。

更にスミスが同一の見地に基いて、英國輸出入税制度に論難を加へるや、論鋒は一層の鋭を發揮し、

英國に於て、輸入を抑制する爲めに、諸種の外國物資の輸入に賦課された高率の租税は多くの場合に於て、單に密輸を促すに過ぎなかつた。關税の算術に於ては、二に二を乘じて、四を得る代りに、時として唯一を得ると云ふドクトル、スヰフトの說は斯る重率なる課税に就て、正に其然るを見るのであつて、斯の如き重税は若しも彼の「マーカンチリズム」が吾人に租税を國家收入の方便とせず、獨占の方便と

[illegible]らう。

と云ひ、續いて將來の關税則に之を如何なる原則に據らしめる可きかと云ふ問題に進み、之に對しては、

社會に於ける多數の人民をして各自の費用に比例して、公共收入に供與せしめるには、彼等に依つて消費される各個の物資の悉く課税されることを必要としない。物産税に依つて徴收される收入は海關税に依つて徴收される收入と同じく、納税者の負擔に歸するものであり、而して物産税は最も廣く使用消費される少數の物資のみに賦課されるとしたならば、適當なる施設に依つて、海關税も亦少數の物資のみに之を限つて賦課し國庫收入に何等の減損を來さずして、却つて外國貿易に大なる利益を及ぼす可き道理である。

と斷定した。

四、スミスの經世的見地

斯の如くアダム・スミスは自然自由の法則に據つて、貿易上の自由を主張したのであるが、此主張を爲すに就て、スミスの議論は必ずしも其後繼者の爲したるが如き徹底的のものでなく、英國の狀況に徴して、或る除外例を承認しようとしたのは、吾人の看過する能はざる所である。蓋しスミスは國富論の多くの場所に於て、Opulence と云ふ文字を用ひ、國民の Opulence を增進するには、如何なる方策を以つ[illegible]繁榮に相當し、現代慣用される言葉に於て其位を求めたらば、國力[illegible] Power と同一義を有すると解されるであらう。然らばスミスは斯る[illegible]策を國民に與へる經濟政策に對して、一貫した信念を披瀝したかと云ふに、必ずしも然らず、當時世論の焦點であつた航海條例を論ずるや「國防は繁榮よりも多く重要である」と云ふ有名なる信條の下に、國防上の必要を理由として、自由貿易に對する除外例を認めやうとした。即ちアダム・スミスは「英國の國防は船員と船舶との數に關るものが頗る多い、航海條例は外國海運業の英國の貿易に干與することを或る場合に於ては、絕對に禁止し、他の場合に於ては、相當に重く制限し斯くて自國の船員と船舶とに之を獨占せしめるものである」とした。

航海條例が實行されて後、多年英國が貿易上當面の敵手とした和蘭の國運が衰微の緖に就いた一方に、英國の海運業が繁昌し、貿易亦旺盛と爲つた事實に徴すれば、航海條例に對するスミスの意見は價値あるものと爲るかも知れないが、國防上の見地から、船舶や、船員を多數に有することを必要とする事情が如何に緊切であるとしても、航海條例の如き、貿易其もの丶行はれる範圍を狹くして、一方に海運業の隆盛を求めやうとするに至つては、其間に大なる矛盾の存することが認められる。蓋し貿易と海運とは主從の關係を持ち、海運業あつての貿易であり、貿易業あつての海運と云ふ地位に居らなければならない。斯くして外國貿易の繁盛なる國に於ては、海運業の隆昌を見るのが自然

の關係であつて、而して之を求めるに就ては、必ずしも人爲的干渉を要しない。自由貿易の下に輸出入貿易を出來得る限り伸張せしめれば、之に附隨する海運業も亦貿易の發達に促されて、隆昌と爲らざるを得ざる道理であるからである。

然るにスミスが此點に於て、大なる矛盾に陷つたのは、何故であるか。假に外國貿易其ものを以つて、經濟上に不利益であるとする、少なくとも外國貿易が發達して、一國が經濟生活上、外國に依賴する趨勢の馴致されることに對して、之に制限を設ける必要の認められた場合には、航海條例の如き制限的立法に依つて、外國貿易の行はれる方便の利用を狹溢にし、斯くて貿易の方嚮を束縛すると云ふことも、自ら一理ありと認められるが、アダム・スミス本來の意志は貿易を制限するのではなく、却つて其發達を可なりとするのである。而して貿易が發達すれば、自ら海運業も振興する道理である以上は、航海條例の下に海運業と外國貿易とを併せ制限するが如きは、自由貿易論の正面から云つて許す可からざる矛盾である。現にアダム・スミス自身も或る場合に於て、明に此間の矛盾を認め、「航海條例は外國貿易幷に之より生ずる繁榮の增進に對して有利なるものではない、諸外國に對する通商上の關係から云つて、一國の利益とする所は多數の人々と取引を結ぶ商賣人と同じく、出來得るだけ、廉價を以つて購入した物資を高價を以つて、賣却することに存する。而して最も完至なる自由貿易に依つて、一國が總ての國をして、其購入しようとする物資を齎らさしめることが之を最も廉價で購入する道であり、一方に其市場が最も多數の購買者を以つて、充された場合こそ、最も高價に賣却する所以である」と論じた。唯此矛盾を辯解する一の道は國防が繁榮よりも重要であると云ふ一事に止まるのであるか、然も貿易の自由を束縛しないことが、却つて海運業を盛大にして、國防上の要件を充すを得る所以であることを知つたならば、アダム・スミスは他の方面に就て、辯護の餘地を求めなければならない。

斯くて其れに充てられるものは、當時の英國と和蘭との敵對狀態であつたのである。即ち此際英國に於ては、和蘭の經濟的勢力を壓倒せざる限り、自國をして國際經濟上に優勝なる地位に立たしめるを得ないと云ふ說が行はれて居つた。經濟上の思想の進んだと考へられる今日に於てすら尙ほ經濟戰爭と云ふ言葉が用ひられ、時に其趣きを見ることのある次第であるとすれば、アダム・スミスの時代以前に於て、經濟戰爭が行はれ、又其武器として、航海條例の利用されたことも、亦敢て異とするに足らない。即ちアダム・スミスが航海條例の諸規定を掲げた後に於て「航海條例制定の當時、英吉利と和蘭とは實際に戰爭に從つては居らなかつたが、最も劇烈なる敵愾心は兩國民の間に漲つて居り、隨つて此著名なる條例の或る規定が國民的反感に基いて生じ來つたことは、疑を容れない。然も此特殊の時期に於て、國民的反感は最も賢明なる知能の稱讚する目的卽ち英國の安全に對して唯一の脅威である和蘭の海軍力を削減することに用ひられた」と述べたのに徵

し一方[illegible]として、[illegible]にすることを得るのである。

然も自由貿易の見地から云へば、苟も國際間に經濟上の取引の行はれる以上は、必ず當業者に或る利益を與へる可き道理であり、而して其利益は自由競爭の下に、最も公正に當事者の間に分配されることを原則とする。然らば經濟戰爭と云ふことは、其言葉自身に於て何等の意味を爲さない、經濟上の取引の行はれる場合に、當事者の一方が他方を倒すが如き、事實に於て、不可能であるからである。アダム・スミスが一方に「コスモポリタニズム」に類する主張を敢てしながら、他の一方に國際間の敵愾心を基礎として、之を助長する法制を承認し、之を自由貿易に對する一の除外例に充てようとしたのは、何處までも矛盾であつて、後世の研究者をして惑はしめる所なきを得ないのである。若しもアダム・スミスにして、常に一個の學究を以つて、終始して居つたならば、斯る矛盾に陷らず、自己の議論を徹底せしめるを得たかも知れないが、スミスは一面に於て立法者幷に政治家に向つて、彼等の進む可き道を示すことを以つて、經濟學の一目的として居る爲め、總て議論をして實際の事實に即せしめ、又目前に現はれて居る事實に顧みて、之に調和を保たしめ。餘りに實際と隔絶した空理空論を弄ぶことを愼ましめた結果、遂に斯く妥協を事とする議論に墮したのではあるまいかと思はれる。

五、國富論に於ける財政論

國富論の第五編は即ち財政論であつて、經費、收入、租税、國債等節と國家財政の全般に亙る諸問題が序を逐うて、仔細に論述されて居る。スミス以前から國家が信用を濫用して、國債を起すことの徒に政府をして政治を荒廢せしめ、負擔を後世に遺して、次代の國民を苦しめる所以と爲るの故を以つて、之を不可なりとする說の擡頭しつゝあつたのは、著明の事實であるが、スミスの手に依つて、更に國債制度の缺陷が種々の方面から指摘されたのである。即ちスミスは國債の近代財政に起り來つた所以を以つて、第一非常準備金の依頼するを得ざるに至れること、第二國家財政に非常事變の發生して已まざること、第三租税の收入を以つてしては、斯る事變に伴ふ要求に應ずる能はざることの三點に歸したが、然も國債制度の成立するには、第一規律ある司法行政の行はれること、第二國民が財產所有の安全を得ること、第三契約上の信用が法律に依つて、支持されて居ること、第四國家の權威は債務支拂の能力ある者に對して、其支拂を强要する爲めに、用ひられると考へられることの四個條を必要とするとし、當時の實際問題として、歐洲諸國が國債發行に頗る不謹愼であつて、當初或る時期に收入の發生することを豫想して、國債を發行する、此豫想が的中して、收入の發生した際に、其收入を以つて、遂に發行した國債を償還すれば、宜しいが、此債務の償還されない間に第二第三の豫想を將來の收入に繋い

で、以つて國債の發行を試みる、斯る不謹愼なる豫想が結局國家をして永久的債務を負はしめる壞敗的效果を生ずるに至る所以であるとし、戰時財源として租稅と國債との優劣問題に就ては、租稅に依るの可なることを述べ、戰時國債の發行に愼重なる可きの必要を唱へたのである。而して其理由は多方面に亙つて居るが、要するに(一)國債發行は自國に當時存在して居る資本の破壞を招き、以前生產勞働者の扶持に供されて居つた年々の收益を轉じて、不生產勞働者の扶持に充てしめる、(二)租稅を戰時財源に充てれば、戰爭の終熄と共に、租稅廢止されて、國民の貯蓄心を刺戟するに至る、(三)國民は戰時租稅の負擔の重きを感じて、自然戰爭を嫌忌するに至ること の諸點に外ならないのであつて、後年ジョン・スチユーアート・ミルが勞働者に有害なる影響を及ぼすの故を以つて、國債發行を不可なりとした議論の如きはアダム・スミスに依つて、既に其一端を示して居るのである。

若し其れアダム・スミスが租稅論の劈頭に揭げた租稅四原則に至つては、其今日に至るまで、租稅政策を支配する點に於て、顯著なる地位を占めるものである。其要點は左の如くである。

第一、各國の國民は各自の能力詳言すれば自家保護の下に、各自の享受する收入に比例して、出來得る限り、政府を維持する爲めに、供與す可きものである。

第二、各個人の納付す可き租稅は確實である可く、決して專斷的のものであつてはならない。租稅納付の時期、納付の方法、納付される金額は納稅者に取つては勿論、他の人々に取つても、明瞭でなければならない。

第三、租稅は之を支拂ふ納稅者に取つて、最も便利であるとされる時期に於て、又同樣の方法を以つて、徵收される可きものである。

第四、租稅は其國庫に齎される金額を超過して、國民の財嚢に就て徵ふ金額を出來るだけ、寡小ならしめるやうに、徵收されることを必要とする。

以上四原則中、第一は租稅の負擔を國民に分配する根本標準を明にしたものである。スミス以前に於ても、能力を標準として、租稅の負擔を分配す可しと云ふ說を唱へた者はあつたが、尙ほ租稅利益說とか國家勤勞代價說とか云ふもの丶橫行することを免かれなかつた其際、スミスが敢然納稅力說を主張し、說明したことは、後の租稅に關する學說の硏究者に其進む可き針路を明にしたものであり、又第二以下の原則は課稅行政に關するものであり斯くて第一と第二以下との間に性質の異なるものがある。然も第二以下の原則と雖も、其課稅行政に關するの故を以つて、之を蔑視するは當らない。第二第三の原則は共に租稅の賦課徵收に依つて、經濟社會に及ぼす影響を寡小ならしめることを主眼したものであり、第四の原則は實に租稅の經濟卽ち徵收費の節約を主張したものであると共に、其適用を廣くすれば、實に保護關稅則を非難する資料にも充てられるのである。今日に於ても一の租稅の稅目としての良否善惡を知るには、其租稅が如何なる程度まで、右

[illegible]したならば、大體に於て大過なきを得るであらう。

六、結　論

此短かき論文に於て、スミス「國富論」の全斑を紹介するが如き、不可能事であつて、私は上述する所に據り、單にスミスの所說中の三四を引抄したに過ぎない。唯最後に英吉利の學界に於て特色を發揮したウオーター・バヂオットのスミスに對する批評を掲げて、スミスが如何に學問上に重んぜられて居るかの一端を示して、結論に充てたいと思ふ。

アダム、スミスは二個の職務を完成した。第一彼は抽象的學問としての經濟學を創設したと云へないまでも、尙ほ其建設される道を開いた一人者である。彼の人間性に對する見解は近代經濟學の假想する人に於けると略ぼ同様であり、隨つて彼はリカードー、ミルの正當なる先進であり、スミスの著作がなかつたならばリカードー、ミルの如きも、現在世間に現はれて居るが如き形體の著作を成すを得たかどうかは、疑問に屬する。第二にスミスは大なる實際運動の創設者である。彼が著作を爲すや、當時の實際家をして大なる興味を覺えて之を實行するに至らしめるが如き方面に就て記述することを怠らない。スミスの時代に於て、實に多くの實際家が就て學ばんとする眞理があり、スミスは之を彼等に敎へることを望んで居つた。スミス以前には新學說の實[illegible]の學說とを結合する讀者なく、單に書冊上の觀解に止まらず、其說く所の盡く眞實であることを明にする學者がなかつたが、スミスに於て始めて之を求めるを得た。

スミスの「國富論」は初版發行以來屢々版を重ね、又多くの書店に於て種々の形態の下に出版されて居るが、是等の内讀者に最も便利であると云はれて居るのは、所謂キヤナン版と稱されるものであつて、英國の經濟學者エドウキン・キヤナン氏が千九百四年發行した上下二册より成る版本であり、スミスの生前に出版された諸版本の異同や、「國富論」とグラスゴー大學に於けるスミスの講義との關係、スミスの佛國に於て受けた思想上の影響に就て記述した一文を序論とした上に、スミスの本文に就ても、各章各節に亙つてキヤナン氏自ら註解を施して居る。少々高價ではあるが、「國富論」を讀むには、此版本に據るのが一番宜しい。

日本には何れ程「國富論」が親しみを持たれて居るか。私は「國富論」の邦人讀者は千を以つて數へられるであらうと思ふ。日本譯の方を申すと、餘程以前嵯峨正作、石川暎作兩氏の譯筆に依り、田口卯吉氏校閲の下に、全部の綿密なる飜譯が東京經濟雜誌社から發行されて居つた。私の如き三十幾年前國富論の原書（ルートレッヂ版と稱する最廉價のもの）と此飜譯書とを對照して、兎に角國富論を讀了した記憶を持つて居るが、今日では勿論絶版であつて、圖書館へでも行かなければ見出されない、

であらうし、又學問上の譯語も當時と今日とでは餘程違つて居ると思はれるが忠實正確なる飜譯であつたと云へる。此外上記のキヤナン版「國富論」は近頃竹內謙二氏に依つて飜譯されて居ると云ふことであり、又三上正毅氏や氣賀勘重氏の飜譯もある。三上氏のはアシユレー氏の「國富論抄」本に據つたのであり、氣賀氏のは一小部分だけが出版されたのに止まると聞く。何れも私は右諸譯本を一瞥したことすらないのであるから、飜譯の適否に就ては、何とも申し兼ねる。然し英語の相當に解される方ならば、「國富論」位は原著に依つてスミスの意の存する所を正確に酌み取られるのが宜しいと思ふ。

次號は

唯物辯證法

山川　均

日本の經濟を何れに導くべきか

一新を要する我國經濟

阿部賢一

外なめくじの内辨慶——と云ふのが我國の經濟を最もよく形容した言葉のやうに思はれる。外國に向つてはカラッ意氣地がない癖に國内ではさも強さうな事を常々廣言したがつてゐるではないか。小さくは一會社にしても、内では鞏固がつてゐても世間の照魔鏡の前にはさつぱり睨みが利かないではないか。國を擧げての惰性經濟、今や一新の機運に際會してゐる、と云つて敢て過言ではないと信じてゐる。

内に崩れずんば、外から崩壞を強ひられんとする。外に對しては突張らんとしても内に崩れんとする。如何にして我が國民經濟を維持せんとするか。否、維持せんとする事が可能であるか。少しく考へてみたい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

過ぎ去つた年の我が國の經濟を回想して、本年の我が經濟を想望し、かねてそれが進むべき方針を考察するに當つて、吾々は先づ何物を措いても重要であると考へられる一つの點に觸れざるを得ないのである。それは我が國經濟の特質を明白に認識する事である。割増もせずに、さりとて割引もせずに我が國の經濟が現に持つてゐるところの先天、後天の特質をハッキリと見極めて、一體どの邊に我が經濟は進み——若くは迷ひ——つゝあるかを知る事であらねばならぬ。何故とならば去年や今年表面に顯はれるところの現象はその日に成るにあらずして、かなり遠い、そして深い因由あつての事なのだからである。無論のこと、我が國の經濟の本質や、因緣やをそう簡單に見定めて終ふ事は容易な業ではない事は最初から解つてゐるが、此の點を明にしなくては去年の事も本年の事も將來の事も、さつぱり解る筈がないであらう。

何はともあれ、我國の經濟の特質は何と云つても、その安價速成的の資本主義組織たる點にある。言葉を換えて云へば何の點から觀ても

封建制度的胎内に育つた月足らずの資本主義體たるの點にある。それが外觀は一かどの資本主義經濟組織で立派に完成せられてゐるやうに見えはしても、根が緣日の盆栽のやうなものであるから、英米で見るやうな、强靱な資本主義體成力を持つてゐないことは已むを得ない。例へば事業にしても經濟の發展の必然性から出たと云ふものよりか、何れかと云へば、外國人の氣紛れ根性に促されたものとか、火事泥式に急造した俄仕立とか、たゞしは何かの景氣に釣られて「一儲けしてやらう」ぐらゐの心算でもくろんだものが多いのは統計を俟たずして明かな事であつて、我國資本主義なるもの丶根據きはめて貧弱なのは當り前の事でもある。

この早生兒たる我國資本主義經濟が果して發育不完全で夭折するか、强がつてゐても內的新生兒によつて代位せられるか、若くは養生かなつてなほ長生するか。その診斷に預りとするが、たゞ今日のまゝではその運命も甚だ以て怪しいと云ふ事丈けは明言し得ると思ふ。

早い話が昭和二年の金融恐慌そのものは最も雄辯に現代我國資本主義經濟の力を――若くは無力を――物語つたものである。あの恐慌の原因から、經過と、その結末――まだ結末はついてゐないが、――に至る迄の、時間から云へば十ヶ年にも足らぬ世界大戰後の我國經濟界の步み方を調べて見れば、何千卷の經濟學書よりも、明確に我國經濟そのものを吾々の目の前に突きつけてくれるであらう。それはまるつきり危ない綱渡りであつた。何度內閣が代つても下手に手出しの出來ない爆裂彈でもあつた。一寸つゝけばグヮ／＼と崩れて終は ぬだらうところの組立玩具の家屋でもあつた。それがとう／＼財界問 題と云ふものに引かゝつて尠なからざる數の銀行は名實潰れて終ひ、大事業と云はれて曾ては世界に鳴つたものが木葉微塵に散つた。

金融恐慌などゝ云ふものは、もう過去の事實だ、と云つて安心し得るほど事實上、我國の經濟は强くはないのであつて、事をあれ程にまで運ぶに委せねばならなかつた事情は、そして我國經濟の弱點は、まだその儘に今日も殘つてゐると觀察せねばならない。私は今更死兒を墳墓に起そうとしてゐるのではない。が、後世の經濟史上に殘るであらう去年の恐慌の原因が何であつたかは、一應、將來の我國經濟の觀測上の一資料としても見極めてをくことの必要を感ずるのである。それで此の問題の研究に當つて最も必要なる點だけを簡略に論じて論を進めたいと思ふ。

* * * * * * *

戰爭景氣に浮かされて簇生した大小の成金企業が前後の分別もなしに狂舞した酬いが大正九年の瓦落であつた。若しあの際縮るときには思ひ切つて締つてゐたならば、よし震災はあつても去年の恐慌は、あれ程馬鹿氣たことにならずに濟んだ筈だつた。が、そこが、我國の經濟の痼疾であつて、引縮るべき時にそれが出來ず、一部資本家階級者の擁護のために、經濟體全部を危地に陷らしむることゝなつた。これと云ふのも全く支配階級の罪科である。この罪科を生ずる因素がまた、たま

たゞ我國經濟全局をして基礎の薄弱のものたらしめてゐる事であるが、今少しく研究してみやう。第一は政黨者流と虛業家の結託である。政權を以て一つの營業手段と心得て、この政權を掌握するを以て致富の道と考へた閥族政治家と、彼等と相結んだ資本家とが如何に我國の政治と經濟とを害したかはこゝに說くまでもない。また彼等と結托して法を曲げ法をくゞり、手段を擇ばずして巨富を私した謂ゆる大實業家なるものゝ行動も非議すべき斷が甚だ多かつた。これが明治大正を通じて觀たる支配階級の裏面であつて、これを打斷たなければ眞に民衆の厚生を基調とする經濟は決して伸張する氣遣ひはない。これは何人ももう認めるところであつて、例を引出すまでもなからう。第二は我國の實業家なるものが、從來の虛業家氣質をすてなければ我國經濟はもう前に進み得ないのである。彼等がその氣質を捨てなければ必ずや、捨てざるを得ざるの破目に、近い將來に於て必ず陷る事を覺悟しておかねばなるまい。彼等は巧慧であつた。併し乍ら聰明の點に於ては英獨米諸國の實業家の足下には寄りつけない。經濟的先進國の優秀なる實業家が天然資源の豐富を以てして尙ほ且つ時代の動きに敵し能はぬ現狀なのに、無力、無能の我が實業界を以てどうして內外重疊の波瀾を打開いて我國經濟を擔當する事が出來よう。我國の實業家はなるほど目先が利くやうだ。併し乍らその多くは目前の小利害に惑はされて長期の事業發達を念とする樣子さへない。遣り繰はうまさうではあるが、それは畢竟遣繰たるを出でずして根柢ある研究と調査を基礎としたものではないのが多い。事實その名のみを冠したものもあらうが、その多くは企業の成功よりか權利の獲得を念とする投機者流の如何に多き事よ。濡手に粟をつかまうと云ふ連中によつて組織せられてゐる我が經濟の基礎が如何にも弱いのは當然の事でもある。その故に銀行を營むものは民衆の善き資金管理者であるよりも、右手に掻き集めた資金を左手に自分の關係する危險な事業に注ぎ込む。然も動すれば國庫の損失と預金者の犧牲によつて、自からは免れて恥なき徒たらんとする。恰も白晝强盜の類であると云つて過言であらうか。つまり我國の實業一般の氣質はこのまゝでは自から墓穴を掘るやうなものだ。第三には、我國經濟の機構そのものが甚だ危險に、また無能卒に出來上つてゐる。これもその原因は謂ゆる政治家や實業家を含む意味に於ての支配階級の手によつて捏ね上げられ、維持せられるものであるから、その表現たる我國經濟一般の基礎がそれ相當に缺點だらけなのも當り前の事であらう。例を以て見れば金融制度一般は如何であるか。金融の中軸であるべき日銀が單なる大藏省の一出張所の感はないか。また金融の機構が利子を高く釣り上げて資本を掻き集め、之を危險な方へ投資して結局は回收の出來ない無價値な固定資本と無理心中をさせやうに出來上つてゐる。そして諸々の事業は個々利益ある場合に元價を償却して、また將來の事業の浮沈を想定して用意すべき筈であるのに、目前の利に迷ふ株主の要求に恐れて之に應じ、形勢一變するや蛸配に憂身をやつして其の日〳〵を誤魔化すと云ふことゝなる。これで如

して資本主義經濟とは云へ、其の堅實なるものを立て得るか。かく企業主體が輕薄であり、之を補助するところの金融機關があのやうな調子では彼等の力では何年たつても我國經濟を眞に力强きものたらしめる事は出來なからう。

まづ大體我國經濟を以て他の經濟先進國に比較して弱點と思はれる點を擧げれば以上の如きはその重なるものであらう。なほ天然資源のことや、科學的研究の不備のことや擧ぐべきものはあるが、直接に經濟機構を中心として云つても以上のものは重要なものと思ふ。

之等のものが過去久しきに亙つて我國經濟の堅實なる發達を害して來たものである。これ等の點を十分に認識せずしては本年及び將來の我國經濟の行方を見定める事は出來ない。

* * * * * * * *

資本家氣質に、從つて企業主體に、之と同時に補助機關としての諸々の機關に强點よりも弱點が、長所より短所がより多く巣喰うてゐる我國經濟である。云はゞ惰性に引ずられて動いてゐるやうな經濟である。そこには進歩的な創造的な經濟の希望があらう筈はない。そしてこの點は少くとも傑れた資本家自身さへが夙に認めてゐるところである。そしてこの痼疾は昨日や今日出來た譯ではなく、明治初年この方徐々に固まつて來たものであつて、病はすでに膏肓に入つてゐる。それであるから昭和二年から三年に暦が代つたからとてこの痼疾が紙をはぐやうに、そうさッぱりと治るものではなからう。だから今年に於てわが經濟界がどう云ふ風に進んで行くであらうか、と云つて[illegible]に今迄とはまるつきり風向が變ることは萬々なからうと想像する。自力では到底濟度の望みがなし、さりとて惰性はやはり一種の力であつて急に沒落と云ふやうに望み通りに行きもしまい。それで恐らく去年のまゝ、一昨年のまゝだらしなく營まれて行くであらう。

わが國の經濟が如何に速成であり、月足らずであるかは數字を擧げて證明するまでもなからう、がこれをこのまゝで行つて其の力の限りの可能性はもう見え透いてゐる。どうせ大した創造的躍進を之に希望することはできないやうに思ふ。だが、それはそれとしてだらしのない我國の經濟の動きの中にも資本主義の內在的傾向がかなり顯著に進みつゝあることを看過することは出來ない。例へば金融恐慌を通して幾多の銀行が潰れた結果として大銀行に預金が集中するが如き、また銀行の合併集中が大に促進されたが如き、更には休業銀行救濟の名によつて新たに出來た昭和銀行の如きも結局は投資者たる五大資本系統銀行の有利な別働隊となり終るにすぎないが如き其一面である。なほ他の方面には幾多の破産事業がより大なる企業者の餌食となり終る事である。例へば例の鈴木の倒産はそのまゝに三井に貪食せられたと云ふ話であつて、弱肉强食が露骨に行はれつゝある有様である。その結果として大企業系統は大金融系統と相結んで其れ等相互の間には經濟界に、また政治界に、虛々實々の術策を用ひて、見ぐるしき競爭をやつてゐるのは手にとる如く明である。そして比較的少數の資本的支配階

資本が我國經濟の中樞に位し、絶大の勢力を掌握するの傾向が最近益々顯著となつて來た。

善かれ惡かれ――多くの場合は惡いが――我國の經濟が國内に於ては漸時獨占的地位を固めつゝある少數支配者の手に歸してゐる結果、世上多くの論者の云ふが如く本當の意味に於ての自由競爭などゝ云ふものは空漠たる抽象論の外には見出されぬことゝなつてゐる。重要物産の價格などはその供給の要所に於て獨占化せられ、從つて物價が比較的に高く支へられ、結局民衆の生活を阻害するのみならず、貿易上に於て久しく自から不利に陷つてゐる。かやうに民間の經濟が獨占化せられてゐて、然も其の傾向が烈しい時に際して、よし多少の官業を民營に移しただけでは畢竟政黨の喰ひ物となるか、たゞしは大資本系統の獨占力を強むるを出でなからうと思ふ。

理論上から云へば獨占は必ずしも常に惡いものばかりではなからう。獨占の取り柄と認むべきものもないではない。併し、實際上に於ては獨占の利益は民衆に屆かない。營利業者の獨占が殆んど例外なしに民衆の不利と犠牲に終ることは各國の事例が具さに明示するところであるが、それが特に目前の利益に最大眼目を置くところの我國資本家にかゝつては如何して民衆の利益などを望み得ようぞ。外に伸び得ず、内に友食をせねばならぬやうになつてゐる現狀に於て彼等に將來の我國經濟を擔當せしめんとするは、豺狼を船長としてなほも航海を續けんと希望するやうなものだ。

現今の支配階級者に望むところにない。たゞ併し我國經濟を今後於て躍進せしめるの途を講じて行くことは何人にとつても必要でなければならない。無論それには世上の識者は種々の意見があらうと思し、またなければならない。私を以て觀るも色々の注文があるが、最も重要であると思ふのは、我國經濟をして諸外國に比較して何か一つでもよいから優越的生產力を持たしめたいのである。國際經濟に於て我國の存在を主張し得るだけの特色を發揮するの特殊能力を自己の中に發見したいのである。

何かの優越能力を持たずして國の經濟の發達を望むのは熟練なくして高き報酬を望むに等しい。人道主義的には望めても實際は望み能はぬ事だらう。そしてこの點は恐らく資本主義經濟制度に於ても、また理論上は兎も角實際上に於ては社會主義經濟制度に於ても變りはないであらうし、否、恐らく資本主義の制度より、能力中心の、職能分擔の社會に於て最も高調せらるべき經濟發達の原理であらうかとも考へるのである。

* * * * * * * *

經濟の發達は同質財の分量的增加か品質的向上か、または異質財の創造と增加に其の端を發することは云ふを俟たずして明である。……日に於ては企業が多く獨占化せられてゐる形であるから、……進の三因果の何れも狹い桝の中に閉込められてゐる。……産品が不足を告げつゝあることに何……

——少數有閑者階級向の奢侈品の製作に勞働も資本も多く向けられてゐる。また貿易について云つても國の剩餘を以て外國の剩餘に交換すると云ふもの丶、其の獅子の分前は仲介的資本者の壟斷するところとなつて微力なる多數の直接生産者は指定せられた價格の騰落に臍を上下し乍ら僅かに殘肴にありつき得るにすぎない。例へば我國の輸出貿易の大宗とまで稱せられてゐる生絲についてかくは云はれはすまいか、そしてかうやつてゐて眞の輸出貿易の發達を望み得るか、どうかは甚だ怪しいのである。

かやうな狀勢であるから、獨占の利益を吸收するに馴れて氣旣に萎えてゐるところの惰性階級に民衆の利益の爲の同質財の增加を望むことも出來なければ、況んや異質財の創造を希望することも無理である。然もこれなくば我國の經濟能力の限度が袋小路につき當つて終ふ。

國の經濟は或る觀點から云へば、其の最弱點から崩れ出すが、常には其の最强點に依つて立つてゐるものである。最弱點と云ひ、最强點と云ふも畢竟國柄によつて同一ではないが、前者については特に我國經濟の弱點として旣に論じたところであるが、後者卽ち國の經濟が依つて立つところの最强點を何處に求めるかについて少しく考へてみたい。

經濟組織の如何を問はず、英米たると露獨たるを問はず、國の經濟の依立する根據として何等かの特質を有せざるものはない。而してこの特質が外國貿易と相結んで一段の經濟的進境を示すことに俟たないのである。何となれば貿易は異質財を攝取する一つの方法からである。而してこの事は低き程度の自給自足しか出來ない我國の如き國柄に於ては特に考慮を要するものたるを失はない。言葉を代へて云へば外國品の吸收の爲に我に如何なる特種財の用意があるかどうかの問題である。

英國は云ふまでもなく資本主義經濟の先達として、特に鐵工業や織物の大量生産によつて依立する。最近獨米の脅威を受けてゐるが、なほ同種事業のカルテル組織に邁進し、英本國內の各種工業の聯盟的調査や行動を盛んにして只管從來の經濟的覇權の一角でもを維持しようと努力してゐる。而して之等の點に關しては極左派は無論反對であるが、勞働黨中心の右派勞働黨は大體に於て贊意を表せるもの丶如くである。是否の評は別として英國經濟は從來の自己過評價の夢から醒めて、他國に學び產業界に一轉機を期待するの有樣である。次に獨逸は夙に其の不斷の研究と化學工業によつて國際經濟上に鳴つてゐるものであり、またこの方面に於ける經濟的優越を有してゐた。天然資源の比較的に尠い獨逸は研究室のフラスコの中から財を創出して經濟覇權の一角を握らうとするの野心を有する。近くは人造樟腦の製作に成功して我國を從來の世界的獨占地位から驅逐しやうと云ふ力を示してゐる。其の研究力、其の技術力は、たとへドーズ案によつて多大の負擔を年々背負はされても之を彈ね返すだけの力を備へてゐる。次に佛國に

就て云へば何としても其の重工業に於て諸國に優る者を示すものであつて、近世的大企業の方面に於て強味を缺いてはゐても、この點に於て強味を多分に有するものと云はねばならない。

最後に米國に就て一言する。米國の經濟的優越とするところは他國とは異なつて、一に均製品の大量生産である。時計の如きまた自働車の如きその典型的のものであると認められる。この特色と共に吾々が看過してはならぬと考へるのは米國資本主義經濟の自制力である。最近の統計を観察するに物價は概して下落してゐるに拘はらず、事業界の收益は尙ほ高率を維持し、且つ賃銀は上昇してゐるのである。即ち物價下落するに景氣は上々なのであつて、吾々の日頃の考から云へば反對なのである。この一見逆説の如き現象が呈せられてゐるのは一には米國が現今世界の金の半分殆ど九十三四億圓の巨額を有するに拘はらず、忽ちにして之を貨幣化してインフレーシオンを引起すやうな事をせず、寧ろ金融制度上から自制して之を保有してゐることゝ大量生産による單價の低下と、且つは賃銀の引上を以て製品市場擴張の一部と看做してゐるにも因るらしく考へられる。吾々は米國の文化一般につき、また經濟組織についても批評の餘地の甚だ多いことを認めない譯ではないが、其の資本家的支配階級が我國の夫れに比較して遙かに自制あり、聰明あり、遠見あつて、米國の經濟を指導し、更には二百億弗餘の對外國債權を通して歐洲經濟の一角を支配しつゝある事を認めるに吝かなものではない。要するに能力ある者によつて擔當せられる點は云ふ迄もなく資本を多分に有することゝなつたのであらう。これで米國は世界大戰を經て資本の點と、資源を豊富に持つてゐたと云ふ點の利と而して人的能力の三要件を兼ね備へ此の力を合して均製品生産の經濟的特色を有するものと見る事が出來るのであつて、この力を以て世界を横行してゐる事は好嫌は別として、冷静に認識せねばならない。

以上の如く各國は國内にまた國外に經濟的特色若くは何等かの經濟的優越力を有する事によつて世界の文化に貢献し、かねて國の經濟的基礎を築いてゐるのである。この國際經濟の實際的必要から觀察して果して我國は何處にその國民的經濟力の發揮を求むべきであらうか。

海運界の發展によつて謂ゆる貿易外の收入の増加を計ると云ふ説も尤もである。我國の地理と國民性と將來の發展の可能性から云つて海運は比較的に適當なることは何人も認めるところである。或ひは纖維及び織染工業方面に於て他國に優る技能を發揮することは最も可能性があるが如くである。金額から云つて輸出貿易の大宗は纖維染織工業關係のものである。それに拘はらずこの方面に於て果して經濟的優越と稱するまでに技術的發達をなしてゐるか、どうか。何人もそう思ふまい。例へば生絲の如きは尙ほ昔ながらに原料として輸出し、然も養蠶農家は仲介商人により、仲介商人は問屋により、問屋は輸出業者により、輸出業者は外國、それも主として米國の輸入業者によつて利益を吸收されてゐる。組織も悪いから、之を改正せねばならぬが、

更にやゝ高級製品を安價に生産する方法でも講ぜねば、從來のまゝでは之を以て我が經濟の特色を發揮することは到底できまい。

何れにせよ經濟的優越品あつてのみ國の經濟は強き基礎の上に据ゑられるのであるから、何を以てかくなるかは一般國民が研究と調査と思索によつて決定せねばならぬ緊急の問題であると考へるのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

現代の經濟は何と云つても工業的技術を中心として之を補助する商業、金融、交通々信其他の諸々の機關を合して國の經濟の中軸をなしてゐる。而して天然資源の惠みの薄い我國では謂ゆる比較生産費の理法によつて何等かの點に於て經濟的優越力を發揮することによつてのみ對外貿易の利益を得べく、延いて民衆の生活の向上を計り得るものであるから、この特色を明確に發見することに眼を着けねばなら思ふ。そして此の點は何人が、またどの階級が政權を掌握するとも、其の道理に於ては何等の變りのあらう譯のものではない。

思ふに資本家氣質の一新は結局は望み少なきことであらうし、又財政經濟の根本的整理とか經濟機構の根柢的革新とか云つて之を支配階級者に希望しても到底實現すべき模樣もない。それで尠なくとも吾々は本年に於て、我國産業と貿易の依つて立つところの經濟的優越力の自覺と確立の爲に思考を凝らしたいものと思ふ。これは恐らく本年に於て我國經濟を如何に指導し、如何に轉廻せしむべきか、と云ふ目先の問題ではないが、本年來年…、つまり將來の我國經濟を民衆の厚生に繋ぐところの發端でなければならぬと考へる。

本年の景氣はどうなるか

武藤山治

近年の不景氣は全國津々浦々に至るまで其影響を蒙らぬところはないようである。私が過日來全國各地へ參りますと、到るところで不景氣は何時恢復するだろうかとの質問を受ける。然しながらそう言ふ質問をして唯ぼんやり不景氣の恢復を待つて居る人は、不景氣を天氣と間違へて居るからである。不景氣なるものは天氣と違つて、吾々人間の造つたものであるから、之を恢復するためには、吾々がそれがため努力をしなければならぬ。然るに天文や氣象のことをさへ熱心に研究されて居るのに、現在吾々を苦しめ惱まして居る此不景氣の問題さへ

研究せずに、唯嘆いたり、腹立つたりして居る人々の多いのは全く吾國民精神の弱いところに歸する外はない。

本年の景氣はどうなるであらうか、そう言ふ質問に答へることは、そう困難な問題でない。それは昨年内に起りたる財界の出來事や、現在の狀勢より略ぼ想像することが出來る。之を病人に譬へると、吾國財界の現狀は永い間氣分が勝れず、病床に横つて居つたものが、其體内に鬱積して居つた毒を排出して幾分重も苦しい氣分が去つたようなものであつて、容易に病氣全快、床上げの祝いをするには至つて居らない。長年月體内にあつて、周圍に炎症し健全なる部分をも侵しつゝあつた毒素は取去られたが、それがため侵された部分の恢復は容易でない。或は猶部分的に多少の毒が殘つて居るかも知れぬから、決して樂觀すべき時期でない。去りながら、又世間の人々が病人の體内より出でたる毒の多いのを見て、驚き騷いで一層悲觀に傾いて居るのは、病氣の經過を見誤つて居るのである。大體から言へば、病人は一歩恢復に向つたと言つて良い。それは明らかに財界に於ける金利の著しき下落が示して居る。財界の恢復は如何なる場合に於ても、常に此徑路を辿るものである。尤も金利の安くなつたのは衰弱せる病人の熱が下がり脈が少なくなつたと同じやうに、我財界が此病毒を排出して其毒素より受けて居つた炎症は止まつたが、それが爲め一時衰弱を來し、金利が下がつたのであつて、我財界に資本が増加して起つた現象ではないから、此金利が安くなつたのを見て、直ぐ我財界が健康を恢復したものと見ることは出來ぬが、[illegible]財界の眞相が暴露されたることに、恰かも病毒が[illegible]されたるも[illegible]ので、今や恢復期の第一歩に入つたものと見て間違ない。然しながらそれなら來年の景氣はどうなる。我重要國産なる生絲と紡績の前途はどうかなど、實際問題に就て問はれると之に答へることが容易でない。

第一生糸業に就て見ると、生糸の値段は米國に依つて左右されて居る。其米國が世界中最も富み榮えて居ることは、我國生糸の一大顧客として、吾々は喜ばねばならぬが、本年になつたら果して米國が生糸を今日以上高く買つて與れるだらうか。このことは一方人造絹糸業が益々發達し、次第に天然生糸に接近し來つて其精巧を競ふこと、又他方に於て米國以外世界諸國何れも戰後の疲弊で惱まされて居る今日米國の品物が海外へ高く賣れる見込がないとすれば、米國に向つて生糸の値段を上げることを望むは米國丈他國の品物を高く買へと言ふのと同じで、之を望むは無理な註文であることゝを思へば如何に米國が好景氣であつても、余り多く期待することは出來ない。殊に買方たる米國よりも賣方たる日本の方が一歩先きへ安く賣つて出る餘儀ない境遇に立つて居りはせぬか。それ等の事情を綜合して考へると、生糸の値段が以上大して高くなる見込は付けられぬ。そうすれば生糸業者は原料たる繭の値段が下がるか、製産費を大に低下する外に澤山儲かる見込がない。繭の値段の安くなるのは望ましいことであるが、繭

下がると繭を作る農村の人々が苦しむこととなるから、此場合は生糸業者も繭を作る農村の人々も共に、其生產方法に改良を加へることに最善の努力を拂ふ外ない故に、今後生糸業者及其關係者は大に苦心して經營を改むべき時であつて、大なる利益を擧げ得る時期でない。又綿糸紡績に就て見るも容易に樂觀することが出來ない。それは次のような種々の困難なる事情が本業を取卷いて居ることを見れば、容易に首肯することが出來る。第一本業は工場法の改正に依り、來年の七月より深夜業の操業を廢止せねばならぬことになつて居る。これが爲め操業時間が拾六時間となり卽ち二割減縮されることとなる。勿論能率の增進等に依つて、幾分操業時間の減縮を補ふことは出來るが、これが爲め生產費を高め對外競爭の上に不利を來すことは免かれない。然るに、此來年に來る深夜業の廢止を見越し、盛んに增錘計畫が行はれたるため、中途に於て不景氣に加ふるに一層製產過剩より惱まさるゝこととなつて、今や操業短縮を行ふの餘儀なきに至つて居る。此趨勢は來年深夜業廢止の時までは、寧ろ強くなる傾向があるから、此點より見ても、本年度の紡績業は常に壓迫されたような氣分の下に營業し行くものと考へねばならぬ。第二に我國紡績業は生糸業と同じく國內に供給すると同時に、輸出する仕事であるから外國の景氣が直接影響することは明らかであるが、就中支那の形勢は甚しく我紡績業の盛衰に關係がある。支那は國內が平和で秩序が保たれたら恐らく三十年を出でずして東洋の米國を現出するであらう。それだのに今日のように野心家の天下取りの競爭の爲めに少しも國運が發展しないのは支那國民の利益幸福の爲めに考へれば申すまでもないことであるが、吾國に取つても支那の此淺間しい近情は實に惜まざるを得ない。近來對支問題に就て種々の議論もあるが、私は其何れも當を得たものと思はぬ。我官民の支那に對する態度、議論は全く眞心から支那の爲めも思はぬか又は日本の地位をも考へぬ皮相のものであつて、吾々は今一層深く考慮せねばならぬと思ふが、それは本文の目的でないから支那の現狀は我國紡績業の上に惡影響を及ぼして居り、それが世間で見らるゝように當分繼續するものとせば、此方面よりも我國の紡績業は尠なからず不利を蒙ることを述べれば、足りるのである。加ふるに昨年米國棉花の作柄が良くなかつたため米棉の相場が一昨年よりも五割許り上がつた。印度は豐作と傳へらるゝが米棉の相場は世界の棉花相場を支配するから、本年度使用する原料たる棉花は高くなる。原料が高くなれば製品の値段は高くならねば引合はぬ。然るに製品の値段が原料の値段の上がる割合に高くなることは、國の內外共に不景氣に惱まされて居る今日に於ては、容易に望むことが出來ないから、此點も本年度の紡績業に取りては不利なる一つに數へねばならぬ。斯う言ふ風に觀察すると我國の二大產業たる生糸、紡績共容易に樂觀することは出來ないが、我財界を通じて考へれば本年の景氣は幾分宛良い方へ進んで行くと見るが、正常でないかと思ふ。然しながら吾々は我國の景氣を左右する上に普通常識で判斷の出來ない一つの要點のあることを知つて置かね

ばならぬ。それに我國の政界には政府と云ふ一つの黒幕が附いて其動きよう次第で景氣が左右されることである。

歐洲戰爭が和平克復の前後まだロイド・ジョーヂが英國首相をして居た頃に、或人が彼に「來年の景氣はどうなりますか」と訊ねたことがある。その時にロイド・ジョージは「それはとても豫測が出來ない、それは從前と全く違つた政治力が、國の經濟力を左右して居るからで、譬へて言へば荒海を行く船の上で玉突をやつて居るようなものだから」と答へたそうである。當時英國は全くそうであつたに違ひない。英國財界のバロメーターであると言はれて居る紡績業すら、戰時の必要上コットン、コントロール、ボードと言ふ政府の管理局が出來て、殆んど官業同様のものとなり、鐵道、造船、造機所等も政府管理の下に置かれて居たのであつて、かゝる場合には、どうしても政治力が經濟力を支配してしまう。素より政治家に向つて景氣の恢復如何を尋ねなくてはならぬような馬鹿げたことは、英國民の長く堪え得ぬことであつて、戰後間もなく、政府は民意を容れて、一時整理の爲め莫大な資金は要したが、すつかり諸種の政府管理事業や國營事業は、民間の手に還してしまつた。然るに我國に於ては英國の一時の變態的制度が常態となつて居る。從つて絶へず政治力が我國の經濟力を左右して居る。こう言ふ國柄に於ては、來年の景氣如何と問はるればロイド・ジョーヂの答へたる如く、荒海を行く船上の玉突同様だと答へた方が正直な返答かも知れない。事實過去及現在、將來の我財界の變遷を見たり、考へたりすると、日本經濟力は常に政治力に翻弄されて居る。我國民が一日も早く覺醒して之を改むるにあらざれば、我國經濟力は終にこの政治力に喰ひ倒されてしまうであろうと思われる。

大凡一國經濟界の景氣と言ふものには、多少共政治的原因が經濟上の諸原因と共に作用するものであつて、單に經濟上の事實のみを根據として、將來の景氣如何を豫測することは出來ないものである。で、我國では先づ政治的原因を考慮の中心とせなければ、經濟界の成行は到底正鵠なる豫測を下すことは出來ない。從つて經濟問題をば常に政治的に觀察したり、解決して行かねばならぬような變態的な事情がある。それは我國では民間經濟の力が政治を動かす強味を持たず、逆に政治力が民間經濟力を常に左右する珍妙な事情があるからである。言ひ換れば國民の經濟を基調とする政治が行われず、政治力を中心として民間經濟が不自然に操縦され勝ちであるからである。若し經濟力が我國に於て政治力を動かす事實がありとすれば、それは少數の富豪や政商の經濟力が政治力を動かすに過ぎない場合のみと言つてもよい。

英國の紡績業は全國景氣のバロメーターと昔から稱へられて居るほど、斯業は日本の生糸業以上に、英國の景氣を左右する大規模の産業であり、斯業が通商上に現わして來る數字そのものを以て、即座に將來一般の景氣をトし得るのである。それは綿製品の年産額は約二十六億圓の巨額で、之に要する原料棉花の輸入額は十二億圓前後である。而して其製品の約八割は輸出され、其額實に貳拾億圓に達し輸出總額

の三割を占むる大宗であり、其輸出力が英國民をして海外諸國から食料品其他原料を輸入し之を決濟する上に重要なる働らきをして居る。斯業輸出の振不振は直前に對外爲替の上に影響を生じ、國民生活費にまで關係を及ぼすと言ふ理由の外に、今一つの重大な理由がある。それは英國の政治力と言ふものが民間の經濟力と比べると極めて微弱で民衆經濟の力が政治を支配するから、民間の大經濟力である紡績業が現出する自然の數字は將來の一般景氣を豫測する上に、殆んど絕對的に信頼するに足る判斷の材料たり、そこに民衆の經濟を不自然に動かす如き政治力が介在しないと言ふことである。これは根本に於て、日本の政治と英國の政治とが異なつて居るからで、英國の政黨政治は民衆經濟の流れに棹し國政を料理するに反し、我國の政黨政治なるものは黨利黨略を先きにし、民衆經濟などは殆んど之を無視するが如き政治を行ふからである。例へば英國に於ては、民衆經濟を無視する如き政治家は、一日も其存在を許されないから、英國の政治は自然の輿論に依つて行はれるもので、政治家の手ではどうすることも出來ない。政治家は民衆經濟の先棒となり機關となり之を行ふに過ぎないのであつて、英國の紡績聯合會の如き議會（パーリメンタリー）委員會（コムミチー）と言ふ制度を持つて居り、其他重要の商工業にも亦同樣の制度があつて、絕へず民間の經濟と言ふものを議會を通して、國政に反射しつゝあるが如き是れである。然るに我國はどうであるかと言へば、少しも民間經濟の實狀が政治の上に現われて居ないばかりでなく、却つて逆に政治力が民間經濟を常に壓迫して居る。其實例は數へ切れぬほどであるが、其著しい一つの例は現在民間の小商工業者を始め、一般産業界は金利低下、生産費の減少を、旱天に雨を望むが如くにして居るに拘はらずその民意は少しも實際政治の上に現われないのみか、政府は國家の重要なる産業をば國家直接經營の手に移し、而かも不經濟極まることをして民間から莫大なる資本を吸上げ、之れを死藏し又は固定せしめて居るのである。現に中央銀行には八億圓以上に達する政府預金をして資金を睡眠の狀態に置いて居る。之を英國が我國より四倍半多き歲出入の財政を行ひながら、政府預金を僅かに貳億圓に過ぎず、我國の如く官營事業を行ふ佛蘭西政府預金も、壹億五千萬圓を過ぎないを見れば、如何に我國政府が民間の資金を吸上げて、之を死藏し財界の發達を妨害して居るかが分かる。又大藏省預金部勘定中貳億千參百四十萬圓は不良貸付となつて、其全部が元利共回收不能に陷つて居る。尙嚴密に調査したら此上にも不良貸付が尠なくないことは疑ひを通り越して居る。此預金部資金は郵便貯金拾五億が其主なるものであるから、我國の政黨内閣は郵便貯金すら喰ひ荒らすことが明らかに立證されて居る。民衆の汗の結晶たる郵便貯金を自黨に緣故ある會社抔に貸付けて、國民に損失を蒙らしむる政友會民政黨の諸君が、社會政策などと口に唱へる資格はない。斯くの如きは民衆經濟を旨とせず、黨利黨畧をのみ中心として、自己に都合よき政治力の增大を圖る不純なる政黨政治の結果として起る當然なる成行であつて、英國などでは夢想だ

も出來ないことである。そして之等貴族の新政策に、或は重要なる產業の國家的統一、、、、、、、或は低利資金の貸付などといふ美名の下に行はれて居るから、一見政府が發表する表面のみを見れば、國家經濟の眞相を極めて詳には行かない。例へば破綻會社の株主が其受取つた貸借對照表に依つて、其眞相を知り得ず、特種銀行及一般休業銀行の株主が、其銀行の損益計算書に就て營業の實績を誤り信んじ、投資して置いた正金、預け入れて置いた筈の現金が、事實に於て何時か知らぬ間に、大部分消へ失せたのを發見したようなものである。斯くの如き銀行會社の現在及將來の成績の眞相が、何故に其營業報告たる經濟上の數字から知れなかつたかと言へば、此種の銀行抔に於ては、預金者や株主の實益又は經濟實力を離れた所謂高等政策と言ふ一種の政治力が、惡用されて、表面的に計棲の合ふような、體能く數字を並べて營業狀態を粉飾し、所謂勘定合つて錢足らずの事實が裏面に伏在して居つたからである。

我國の經濟を一つの大きな銀行會社の營業として見るならば、恰かも前記同樣の不始末が、政府萬能主義の政治によつて行れて居る事實は、之を詳細に說明すれば、一册の書物となる位に澤山ある。玆に於て吾々は一時の景氣の起伏は別として、永遠に我國の經濟力を發達せしめんとすれば、此不經濟なる我國政治を根本的に改革することが必要であることを唱へればならぬ。

一國の盛衰は其國の政治が經濟を重んずるや否やに依つて決することは、古今の歷史が證明して居る。遠くは我國に於て徳川幕府が滅びたのは、主として幕政の局に當つたものが經濟の重んぜざるべからざることを知つて居ても、經濟の如何なるものなるかを眞に理解しない士であつたからである。然るに今日我國政局に立つものは、殆ど經濟の如何なるものなるかを知らないこと、恰かも徳川時代の士と均しくして、而かも士の如く德義すらも重んじない政治家が多い。斯くの如くして我國將來の運命が、どうして幕府同樣たるを免かれることが出來よう。今日は將に國を愛するものの憤起せねばならぬ時である。

然れども今日は立憲政治の世の中であるから、吾々は幕末に於ける志士の如く、徒らに、悲憤慷慨すべきでない。吾々は進んで如何なるところに、吾國の經濟力を摩損する政弊が伏在するやを示して、輿論に訴へねばならぬ。

依つて私は之より進んで景氣はどうなるかと言ふ問題を離れて、本當の好景氣は如何にして來るかと言ふ問題に立入つて、其對策を述べたい。私の對策は一言にして云へば、「政府を貧乏にし國民を富ませよ」に盡されて居る。言ふまでもなく、不景氣の恢復には潤澤なる資本を民間に實在せしむることが、必要である。國家の隆盛も國民の福祉も、民間に於ける潤澤なる資本の經濟的、合理的活用に依つて伴はるるものであることは、明らかである。そして民間の資本は何から引出されるかと言へば、現在の資本が生み出して居る餘剩即ち利益の蓄積たる民間預金から引出されるのである。この民間預金は單に餘つた金

として、銀行に預け入れてあるばかりでなく、銀行は資金の有り餘まるものから借り集めて、資金の足らざる者へ貸付け、毎日々々資金の活用を勸め、それより生じて來る預金を集め、更に同じ方法に依つて生産事業を促進して居るのである。從つて銀行の業務からしても、又銀行業の目的からしても、資本の回收は可成速かにせなければならぬのであつて、その回收の速否は延いて國富の增進にも影響し、又國民生活の上にも關係を及ぼして來るのである。過般米國マサチユセッツ州の國の役人が來ての話に、ボストンからニユー、イングランド地方の加工業者は、五割の關税を拂つて日本から羽二重類の絹布を輸入し、其上に高い加工費を拂つても充分な利益を以て賣れ行くとのことである。それは彼等の計算に依ると、生産費一〇〇中、輸入税支拂濟の原料絹布代が四〇を占め、三五乃至四〇の勞銀を拂ひ、殘りは諸掛りである。そして其都度資金の回收利益は五分を標準として居る。けれども回收を速かにするから、それで一ヶ年一割五分から二割五歩の純益を容易に擧げ得るとのことである。それは米國に於ては、勞銀なり原料代が非常に高くとも民間の資金が極めて潤澤であり、又仕事の能率が高いため資金の回收を促がすことが速かで、從つて廉價に供給が出來多大の利益を擧げることが出來るのである。英國では戰後民間の資金が前述べたように兎角缺乏し、大工左官等の建築勞働者の賃銀は米國よりも遙かに低廉で、米國では一時間一弗三〇仙、英國に較べて約二倍であるが、同じ家を建てゝも、米國の方が安く出來る。それは英國で一週間もかゝる家が米國では二日で出來るからで、聞くところによると米國の數階建の紡績工場などは、組立て棟上が僅か二日間で出來るとのことである。又資金が潤澤な上に、其回收貸出の度合が速かな爲め、所謂薄利多賣が行はれ、好景氣になるのは當然である。

何よりも我國の不景氣の大原因となつて居るのは、民間資金が政府の誤つた財政策に累せられ、政府の手に吸上げられた儘民間に還元されず、斯くして資金の偏在と死藏とが驚くべき程度に於て、景氣の恢復を阻害して居ることである。政府は八億圓に達する資金を持ち、十餘種の官業を經營し、不經濟極まる營業成績を示して居る。その上利益を民間に還元せず、かくして民間の資本を涸渇せしめ、已れ獨り資金に飽き之を濫費して得々として居る。實にこれほど間違つたことはないのである。

政府の財力は民力の上に立つものである。從つて政府の財力と民力とは反比例するから、政府が富んで民間が富む譯はない。加ふるに政府が強大なる財力資力を持つと言ふことは、政府をして非立憲なる行動を敢てせしむる誘惑となり、政治家を腐敗墮落せしむる導火線ともなるもので、既往幾多の事實は之を裏書して居る。國民中一部富豪や政商の爲め之に組みし、一般民衆の利益を無視し民間の經濟力を壓迫して居る。故に何よりも火急な一般景氣恢復策は、先づ政府の手より官業を取去り、其資金及政府預金を民間に還元せしめ、政府自ら仕事をすることを止めさせ、政府を一面から貧乏にすることである。而か

も之に事實に於て政府の借金を減少し、政府をも實に於て富ましめ其信用を増さしむる所以である。私は景氣挽回策として、政府が三つの大なる資力を民間に還元せんことを要求する。

第一、國有鐵道の純益金は壹億萬圓前後を國債の償還に振向けるか又は之を財源として地租と營業收益税を全廢すること。

第二、大藏省預金部資金中歳計の剩餘金は勿論郵便貯金も、將來は全部公債の償還に充當すること。

第三、官業を民營に移すこと。

以上三案を實行すれば國有鐵道の純益金丈を以てするも五ヶ年間に五億圓前後、民間に資金を注入すると同樣の結果を生じ、爲めに金利は順調に下がり產業振興上、大なる刺激を與ふること明らかである。之を以て公債を償還するも、又營業收益税五千五百萬圓地租六千五百萬圓合計壹億貳千萬圓を全廢する財源に供し、國民の負擔を輕減するも、其流るゝ川筋は違つても民間に資本を增す結果は同一で、不景氣恢復の上に大なる効果あるは必然である。

私は昨年の議會で、大藏省預金部資產勘定中、政府預金の事で片岡前藏相に質問した。私の質問の要點は、政府は無利息で日本銀行に政府預金をするよりは、其金で公債の償還をすれば利潤が儲かるではないか、何故之を實行しないかと言つたところ、片岡藏相は不得要領な答辯を試みたに過ぎなかつた。當時他の問題で忙がわしく、其儘此問題は他日に延ばしたが、當時政府預金は五億圓であつたものが、今日では八億圓以上に增加して居ることを、日本銀行の調査に依りて之を知るに至つた。今や民間は不景氣に惱み、資金は缺乏して居るのに、政府がかゝる莫大なる資金を抱いて之を日本銀行に死藏同樣保留して居るは、不都合千萬な事である。我國財界不振の尠なくとも一部の原因に、政府が不當に民間の資金を吸上げ、中央銀行に死藏同樣にし利潤をも損し、民間經濟の血液たる資本を嗜眠狀態に放擲して顧みないところにあることは最も見易いことである。而して此八億圓の內容をどんなものかと調査しようとしても、大藏省では之を祕密にして明かさず、議會の開會を待つて政府をして之を明示せしむる外ないが、方々より詮索して見たところを綜合すると、其內譯は略ぼ分かつた。卽ち其內、在外預金が大凡貳億圓、此分は三分の利息が付いて居ると聞くが、其餘の六億圓前後は中央銀行及全國金庫取扱代理店に預けて居る。而して此內約壹億圓までが無利息で、それ以上は二分の利息を付けさせて居るやうである。而して、此內五億圓は前年度の剩餘金のやうである。之れは政府當局者が祕密事項として取扱つて居るものであるから、又聞きの又聞き位で、全然正確なるや否やは保證出來ないが、大した間違はないものと思はれる。假りに無利息でなく二分や三分の利息を付けさせて居つても、こんな不經濟な國庫金の取扱はない、第一にかゝる多額の資金を國民の懷から取上げて死藏することは、それ自體が財界の不振を招來し、產業を衰へしむることを政府が求めて行つて居ると同然である。

現に政府は澤山の公債を發行して居る。又其上に毎年新に發行を續け、利廻りは時として安くなることもあるが、五分を下ることはない。さうすれば政府預金の利息が二分とすれば自ら好んで三分は損をして居る。こんな民間ならば誰れも敢てせぬ不經濟極まることを、吾政府は多年平然とやつて來り、今日不景氣の際に益々政府預金を増加し平氣で居る。試みに此政府預金の中から、五億圓丈公債を償還するとせば、それ丈けの資金は民間へ戻されることとなり、其結果恰かも貧血せる人體に新たなる血液を注射すると同様であつて、爲めに吾財界は直ちに振興の曙光を認めるであろう。更らに吾々の主張する通り、官業中即時民營に移し得るものを片つ端しより民間に移せば、仕事の能率丈けでも大に高めらるゝことは疑ひない。

以上は經濟上誠に簡單明瞭なることであつて、吾國民經濟發展の上に大なる妨害を爲して居る。我國の不經濟なる政治を改革せざれば、幾度幸運が我國に見舞ひ來つても、又國民が如何に勤勉努力しても、到底我國を富み榮えたる國たらしむることは出來ない。此見易い道理が猶未だ國民の多數に理解されないのは、全く吾國民が多年の因習で政治と經濟の密接なる關係を理解せぬ爲である。近頃或る地方に住んで居る私の友人が眼を患つて、或る眼科醫の治療を受けて居つたところが、誤つて瞳孔を開げる眼藥を注射して居つたため、段々視力を失ひ若しか今暫く此療法を繼續して居つたならば遂に全然失明するところであつた。幸ひに途中此間違ひが分かつて、治療法を改めたが爲め段々眼病が癒り一旦失はれた視力も回復するようになつたとのことである。今や吾國民は經濟を知らない政治家から誤つた治療を受けて、次第に病の重くなるのを氣付かずに居る。私は本誌を通して吾國民に勸告する。不景氣の病が癒したいなら既成政黨のような醫者に罹かつて居たら益々病が重くなるばかりであるから、速かに醫者を取替ゑることをすゝめる。

財界回復の祭壇飾らる

高橋龜吉

の差迫つた整理の荒療治を了へた。尤も、昭和二年の後半に、その整理の荒療治に伴ふ後患のために、未だ、治療の進行に基く元氣の回復を自覺し得なかつたけれども、しかし荒療治に伴ふ後患も、昭和三年の前半期中には、恐らく、一應片付くべしと考へられるので、此間、治療進行の好影響は、漸次に著しく自覺せられるに至るであらう。

斯樣なわけで、昭和三年の財界は、大正九年以來持ち越された財界の整理が、いよ〳〵、一應完了せられて（爲替回復の人爲政策を政府が採らないと云ふことを條件としての話であるが）、「財界回復」の時代に轉入した年と見ることが出來るであらう。無論、こゝに財界回復の時代が來たと云ふ裏には、幾多の非常手段が施されてゐる。また、ここに財界回復の時代が來たと云ふも、そのことそれ自身は、直ちに、「國民大多數の生活がこれからは樂になる時代になつた」と云ふことを意味するものでは決してない。これ等の點は、「財界の回復」と云ふ眞相を理解するために是非知つて置かねばならないことだ。がいまは之に觸れず、後ちにそれ〴〵詳述するであらう。

次に論點となることは、右述の通り、我が財界は、昭和三年に於て、整理期からいよ〳〵回復期に轉入するものとして、さて、問題はその回復の速度、その回復の高さ、はどうであらうか、と云ふことである。しかし、此の點に答へるためには、先づ、財界整理の內容、その程度、その性質、その今後に於ける作用等を詳かにせねばならない。そこで、これ等の點に對する觀測に就ても、これ亦便宜上、以下本論の進むにつれて、直接間接叙述することにしたい。

二、財界整理及び財界回復の意味

今日の「財界」に於て謂はれる所の「財界の整理」又は「財界の回復」とは、要するに、資本主義の生産的仕組みが、圓滑に運轉し得る狀態にあるか否か、を照準にして云はれてゐることである。だから、資本主義經濟がその社會の民衆を果して、より良く賄ひ得るに至つたか否かと云ふが如き、資本主義の社會的機能を基準にしての問題とは話は全然別である。然るに、實際に於ては、この兩者が屢々ゴッチヤにされて論議せられてゐるため、理論に少からぬ混線を起し、眞相を摑むに困難となる傾が多いやうである。

さて、資本主義の生産的仕組みが圓滑に運轉し得る狀態とは、いつたい如何なる場合を指すか、いま之を一の比喩を以て極く砕いて云へばかうである。例へば一の機械が圓滑に運轉するためには第一に蒸汽力、電力等の原動力が要る。第二には此の原動力の刺戟に由つて直ちに回轉し得る齒車が必要だ。その何れかの一つが缺けてゐても、不十分であつても、機械は圓滑に運轉しない。資本主義の生産的仕組みも丁度これと同樣にて、資本家に「利益」と云ふ原動力が無くなつては、如何に立派な生産機關が備はつてゐても、その生産機關は動かない。又如何に「利益」が約束されるとも、その生産機關が錆付いたり、破損したりしてゐたのでは、思ふ樣に財界は運轉すること亦出

ない。そこで、斯く原動力が涸渇したり、機關に破損を生じたりした場合には、財界は玆にその「整理」を必要とするに至るのである。

斯樣なわけで、「財界の整理」と一般に謂はれる場合には、二重の意味を含んでゐる。（一）は「利益」のなくなつた生產條件を、再び「利益」のある生產條件にまで整理することであり、（二）は生產機關が損失その他の故障で破損した場合に、之を修繕することである。無論、時に由つて、或は（一）のみが特に著しき場合あるべく、或は（二）のみが特に重大なる場合もあり、或は（一）及（二）双方共に重大なる場合があつて、その具體的なことは、個々の場合に從つて之を鑑別せねばならぬ。

然らば、右の財界運轉の原動力たる資本家の「利益」が消滅したる場合、再び此の「利益」を再現さして、財界の景氣を起死回生せしむる「整理」とはそもそも何か？　その方法は要するに、左の二點に關連する諸條件を、企業資本家の立場に出來るだけ有利になるやうに改變することである。

一、生產費を低下さすこと

二、高物價且つ多販賣の道を講ずること。

では、右の二點に關連する諸條件のドレを、如何に改變せばよいか、その具體的なことは、時と場合とに由つて、無論色々に異るが、いま最近の我國に於ては、それが如何なる生產條件に於て、いかなる「整理」が行はれたかと云ふに、之については、後に詳述するつもりである。が、要するに、こゝに利益再現出のための「財界の整理」と云ふ場合には、當該資本家以外の民衆に如何なる犧牲を强ひても構はない、兎にも角にも、資本家の採算に、「利益」と云ふバランスさへ附ける狀態を現出さすことに成功すれば、それで「財界の整理」——原動力の方面に關する限りに於て——は完了したのであつて、「財界の回復」が直ちに之に續いてゐるのである。この際、その財界回復の路蔭の下に、如何に多くの無產大衆が或は失業に由り或は收入減に由りて窮迫を加重してゐるかと云ふが如きことは、謂ふ所の「財界の回復」と云ふ言葉の關する限りに於ては問題ではないのである。

財界整理の次に意味する點は、生產機關そのものゝ破損の修繕であること已述の通りである。所で、こゝに生產機關の破損とは何かと云ふに、その破損の根本點は、主として、資金の缺乏と云ふ油の不足から、機關に故障を起したことに在る。而して、資金の缺乏は、或は損失に根因し、或はゴマ化し決算に由る「蛸配當」に基因する。ツマリ借金が累積し、損失が加重して、資金の缺乏を起し、如何に利益を約束するものあるに至るとも、原料を仕入れ、製品を販賣するに必要な肝心の元手の融通がつかなくなつて、二進も三進も出來なくなつたのである。そこで、此の點に關する「財界の整理」と云ふ場合には、或は債權者の讓步に由り、或は增資に由り、或は減資減配に由り、或は借金に由り、兎に角、その事業を運轉するに必要な資金が、完全に且つ有利に供給せられる狀態を再現せしむれば、それで「整理」は成つ

たのである。

右につき、此際、一言注意を要することは、或る一部の人々が考へる如く、（而してその中には濱口前藏相の如きもある）その事業會社乃至他人の、損失の穴埋めが完了せられなくては、整理は未了だと云ふわけのものでは決してないと云ふことだ。蓋しいま一般に、財界の整理と云はれる場合には、財界の圓滑なる運轉の能否、――それが即ち財界の景氣の如何そのものである――を照準とするものなること前陳の通りであるが、その財界の景氣は、事業會社の內部に如何に多くの借金（損失に關する）があらうとも、事業が儲かり、且つ必要な資金の融通さへつけば、茲に一大景氣を現出することは決して不可能ではないからだ。

即ち、茲に「財界整理」と云ふ第二の場合には、過去の大損失の穴埋めが問題ではないのであつて、問題は、事業の運轉に必要な資金の供給に在るわけである。それに關連する限りに於て、過去の損失の穴埋めが問題になつて來るに過ぎないのである。

以上の如く、財界の整理と云ふ場合には、「利益」の再現に關する方面と、「資金供給」の再現に關する方面との二方面がある。が、此の二つの部面は、時に、交互作用を有するものであつて、例へば、資金の供給豐かなれば、從來利益なかりし場合にも利益を齎らし得る。蓋し、或は有利に仕入れ、或は高利の負擔から免がれ得るからだ。更にまた、資金關係の整理は、必然に、基礎薄弱な事業を「淘汰」して甚[illegible]固なる事業を[illegible]す。この結果、從來、採算無理の經營を餘儀なくせられた事情から解放せられて、有利に生產し販賣し得られるに至ると云ふが如きことになるのである。轉じて又、「利益」の再現そのことが、直ちにその會社の資金供給の問題をも解決する作用をなす。即ち、或は增大したる利益を以て必要な資金を賄ふことも出來れば、又、利益增に基く信用回復に由つて、從來金融困難なりし事業も容易に融通の途が出來ると云ふが如きである。

以上、極めて簡單且つ粗略ながら、之に由つて、以下述べんとする今昭和三年に於ける「財界回復」の具體的意味を、より良く理解して戴けることが出來るであらうと思ふ。尠くとも、或る種の誤解に基く理解の混雜は避け得られるであらうと思ふ。

三、金融恐慌迄に於ける財界整理

昭和三年の財界の位地を知るために、こゝで一寸振り返つておくを便宜とすることは、金融恐慌までに於ける財界整理の概要である。先きにも云へる通り、財界整理には二面ある。その內、原動力たる「利益」の再現について、金融恐慌前に於ては、如何なる整理をやつたかと云ふに、專ら、賃銀の低下（割增の廢止、昇給中止、新雇入給料の低下等）、人員の整理等、人的方面に主力が注がれたのであつた。だが、生活必需品は依然として尙ほ高く、賃銀引下げに由る生產費の低下には限度があつた。然るに、利子は尙ほ高く、製品は安くて賣れぬと云ふわ

けで、「利益」再現の効果は尙ほ極めて限られてゐたのであつた。いかにも、此間、或は弱肉强食の淘汰が少からぬ程度にまで强行せられ、或は共同生産制限等に由つて、生きるか死るかの採算無視の競爭と云ふことは、餘程に緩和せられ來つたのであるが、しかし、その効果は、大觀して、僅かに損失を免がれ得たと云ふ消極的の程度に止り、進んで、積極的に利益の再現を齎らすと云ふの域にまでは未だ達しなかつたのであつた。

尤も、右の如く、金融恐慌前までの我が財界が、未だ利益再現の域にまで達せなかつたと云ふ主たる理由の一つには、資金融通の不圓滑、高利の壓迫などと云ふ、資本的原因がその主要部分をなしてゐた。而して、斯く、資本的要素が、我が財界の利益再現を阻みつゝありし根因は、要するに、財界整理の第二の方面たる資本の整理が、殆んど出來てゐなかつたと云つてよかつたからであつた。即ち、大正九年の反動、大正十二年の震災等に由つて、各事業會社其他並に銀行は何れも少からぬ損失を蒙りながら、その負傷を糊塗隱蔽して、有りもせぬ利益を、あるが如くに帳簿をゴマ化して、所謂「蛸配當」を續けたのであつた。云ふまでもなく、その結果は、各事業會社銀行其他の資金の缺乏である。一體ならば、大正九年の反動及十二年の震災に由る大損失に善處するために、利益があつても之をその穴埋めに使はねばならない場合である。だのに、反對に、ありもせぬ利益をあるが如くにゴマ化して「蛸配當」や重役賞與を取つたのだから、經濟機關の油たる資金が益々涸渇するに至るは必然だ。かうなると、資金の融通は段々難かしくなる。その業礎が危なくなるのでオイソレと融通して呉れ手がなくなるからだ。そこで、假令有利な仕事があつても資金缺乏の故に之に手の出しやうがなくなる。例へば川崎造船が、いま數百萬圓の設備をすれば儲かると云ふ工場部分を有しながら、その金の工面つかざるがために拱手してその利益を逃がさねばならなかつたが如きその一例である。更に又、かうなると、無理をして高い利子を出さなくては融通が出來ない、從つて金利が高いために、他の方面では儲かつても、金利のために皆喰はれて了ふと云ふわけで、利益は再現しないことになる。また、かうなると仕入れる原料にしても高く買はされる現金で買へるならば最安の所から……と云ふことが出來るが資金難のためそれが出來ないと云ふわけで……。又、賣る製品にしても、資金難を泳ぐためには、損をしても早く金に代へる必要に迫られる。

斯樣な狀態が、我が財界の各方面に於て、多く見受けられたのであつた。從つて又、之を財界全體から云つても、資金難、金利高で、儲かる事業も儲からないし、假令それでも儲かる場合があつても、肝心の資金が缺乏して油が涸れてゐるので、利益の刺戟に由つて直ちに經濟機關が活動するわけには行かなかつた。之れ金融恐慌前に於て、幾度か財界の整理は一先づ完了したと云はれながら、さて、財界は回復すべき筈であり乍ら一向に動いて來なかつたわけである。之を繰返して云へば、外部から見へる部分に於ては、一應「財界の整理」は終つた

ふに見へたが、事實は、眼に余る方面に於ける、從つて其等の人々には一寸見當のつかなかつた方面に於ける「整理」が一向に出來てゐなかつたからである。

四、金融大恐慌を震源とする財界の整理

去る四月の金融大恐慌は、要するに、以上の如き「蛸配當」的財界の行詰に基く破綻であつた。ありもせぬ利益をあるかの如く粉飾して、借金を質に居喰を續けた結果、會社には資金が涸れた、銀行の手許は帳簿の上だけには貸金があるが、その大部分は何時返金されるか分らない氷結したものだ。斯くて、日々の運轉に必要な資金にも缺乏して、いよ／＼動きがとれなくなつた。これでは、財界に一大破綻が來る外に途がない、と云ふので、之を未然に「救濟」しやうとしたのが例の震手法案であり、それが却つて動機となつて破綻の曝露を促進した結果が即ち過般の金融大恐慌である。從つて又、あの金融大恐慌を震源とする財界の整理は、（一）主として、資本の方面に一大荒療治が加へられた外觀をとつたのであつたが、しかし、それと同時に（二）「利益再現」の方面にも世人の餘り氣付かざる方法に由つて少からぬ追撃が行はれたのであつた。

あの金融大恐慌が、資本の整理を強行さしたと云ふ方面については、世人の注意が已に少からず拂はれてゐる。筆者自身又、之を已に前月（十二月）號の本誌に於ける拙稿「財界回復政策の正體と其行衞」に於て一應詳述してゐる。從つて、こゝには、其の點に關しては、單に、次のことを一言して、以て、全體との關係を鳥瞰するの便に供するに止めるであらう。即ち、金融恐慌に左の如き方法に由つて、資本に關する財界の整理を可なり大規模に強行さしたのであつた。

（一）二億七百萬圓の震手處理法、二億圓の臺灣銀行救濟特別融資法、五億圓の特別融資補償法、合計九億七百萬圓の巨大な金を國民の懐中より取上げて、或は之を資本家に惠與し、或は之を資本家に低利且つ長期に貸與して、以て、我が財界の資金の涸渇を少からず潤したこと。しかし、國民が右の負擔を感ずるに至るのは今後のことであつて、未だその負擔は國民を厭する時期に達してゐない。

（二）金融恐慌に由る不良銀行の淘汰、及び銀行に對する警告等のため、從來の如き亂脈なる資金の融通法を中止するの餘儀なきに至り、こゝに、各事業會社銀行等の資本の整理が強行せられた。例へば、

（イ）減資減配に由り、及び未拂込資本の徴收に由つて、從來の損失の穴埋めを餘儀なくせられ、斯くして、涸渇せる資金に新たなる供給の道を拓いたこと。

（ロ）債權者の元金及利子の減額乃至は返濟期限延期等の讓歩に由り、資金の涸渇を防ぎ得、併せて利子負擔を輕減したこと。

（ハ）以上の如き整理の進行に伴ひ、從來融資を危險視したる向も、こゝに、新基礎に立ちたること明かとなりて、新たなる資金融通の道を開き得たこと。

尤も、右の如き資本の整理に由つて、我が財界の資本的整理が全部完了したと云ふわけでは無論ない。しかし、以上に由る資本の整理の結果、これ迄、如何に財界運轉の原動力來るも、その回轉（圓滑なる域にまでは未だ達せない程度に於てすらも）することを阻止し來つた、所謂「財界の癌」は、一先づ切開されて了つたわけである。即ち、「利益の再現」と云ふ原動力さへ現はれゝば、財界の齒車は、何とか仕事の出來る程度にまで（未だ圓滑とは云ひ得ない迄も）回轉し得るだけに修繕も出來、油も差されたわけである。いまは最早、財界に利益ある採算さへ現出せば、それは、景氣のホヰールは、原動力を得て何とか回轉し得る事情にまで、「整理」の一面は進んだのである。

そこで、問題は、原動力たる「利益」再現のための財界整理の方面が、去る四月の金融大恐慌を震源として、其後、如何に進捗したかである。云ふ迄もなく、生産に、「利益」が現はれるには二つの側面がある。(一)は生産費の低下であり、(二)は生産物價の騰貴である。所で、去る四月の金融恐慌は、(一)の作用は可なりの廣範圍に亙つて果したが、それと共に(二)を反對に下落さして了つた。そのため、折角(一)の作用は行はれながら、(二)のために相殺せられて未だ利益再現の目的を達するの域に達してゐない。例へば、(一)の生産費の低下を齎らした現象としては、次の諸項を擧げることが出來る。

(1) 賃銀の引下げ
(2) 金利の低下
(3) 借金元利負擔の輕減
(4) 農産物價の著落
(5) 弱肉强食の淘汰に由る競爭者の減少

所で、(1)の賃銀引下げは、從來已に極力斧鉞が振はれてゐるので、且つ又勞働者の反對運動が强いので、表面から之を斷行し得る餘地は限られてゐる。そこで、此の(1)に對する整理の最大なる部分は、裏面から行はれてゐる。即ち、爲替の暴落がそれであるが、此の點は此際最も注目すべき「財界回復」の手品の種をなすものであるが故に、別に節を分けて後述するつもりである。だが、表面からの賃銀引下げ、昇給停止、解雇、新規雇入條件の低下等も、無論、極力敢行せられた。このことは、此の不景氣の際、各地に勞働爭議の頻發したことに由つて端的に說明し得るであらう。

(2)以下(5)の整理は、これ迄、餘り手の着けられなかつた部面である。蓋し、(1)が專ら無産大衆に關する整理であるに對し、(2)以下(5)は、主として資本家階級に對する整理を意味し、その故にこの方面に關する整理は、從來、出來るだけ彌縫せられ、回避せられて來たのであつたが、過般の金融恐慌に由つて、遂に此の部面に對しても少からぬ荒療治が敢行せられ、こゝに資本家階級の收入減（と申しても產業經營者の資格に於てゞはなく、投資階級乃至債權者の資格に於てゞある。此の點を區別することが必要である）に由る生產費の低下が行はれるに至つたのである。先づ(2)の金利について云へば、之を日本銀行の商

業手形割引日歩について見るに、最近次の如く低下してゐる。

大正十四年四月十五日　二錢二厘より二錢へ
同　十五年十月　四日　二錢より一錢八厘へ
昭和　二　年三月　九日　一錢八厘より一錢六厘へ
同　　　　十月　十日　一錢六厘より一錢五厘へ

即ち、最近二ケ年餘りの間に日歩七厘、年利にして二%五五の下落があつたわけで、市場利子に於てはその下落率は更に大であつた。いま之を假りに三%と見ると、一千萬圓の資金を利用せる場合には年三十萬圓の生産費の低下となるわけだ。が、金利低下の作用は單にそれだけではない、斯く金利が下落すると、いま迄は例へば年一割以上の利益がなくては事業を起す刺戟にはならなかつたものが今度は年七分以上の利益があれば、優に財界に景氣を起す原動力を與へ得ることになるわけだ。此の作用の方が更に大きな働きをなすのである。

(3)の借金元利負擔の輕減とは、例へば、川崎造船所の如きが、從來假りに年一割の利子で五千萬圓の借金をしてゐたため、年々その生産品が五百萬圓の利子負擔をせねばならないのでやつて行けなかつたとする。所が、過般の金融恐慌で、破綻を曝露し、或は震災手形法やその他で援護を受け、或は債權者が元金を半分に減じたり、利子を五分にマケたりして、川崎造船が何とかやつて行けるやうにしてやる、と云ふが如きを指すのである。此の種の整理も少からず進捗したこと、讀者の已に新聞紙で御覽の通りである。

次により農產物價の下落に由る生產費の低下であるが、その直接の作用としては、原料價格の下落であるが、しかし更に大なる作用は、一般生活費の低下となつて、間接に、賃銀の下落を促進さす點である。從來、我が農產品の下落は、已に或る點まで實現してゐたのであつたが、しかし、最近に於ける、米、繭其他の下落は就中多大である。此の農產品の著落は、要するに、地主の收入減となり商工資本家の利益増となつて、ケリが着くのが經濟の理であるけれども、實際は、地主が、更にその負擔を小作人に極力轉嫁せしめんとすること勿論である。而して、今日の法律關係其他は、少からぬ程度にまで、此の地主の運動を擁護してゐる結果、此の農產物價の下落につき、當面、最も大なる負擔を荷はされるものは、農村無產大衆である。今年度に、米も豐作であるに拘らず、各地に深刻なる小作爭議が頻發するわけは即ち之れであるが、之を謂ふ所の「財界の整理」又は「財界回復」と云ふ立場から云へば、右の犠牲の負擔を、農村無產大衆が荷はされやうが、將又、地代の下落に由つて地主が負擔しようが、そんなことはドチラになつたつて構はない。兎に角こゝに於ては、資本主義的生產機構以外の階級から犠牲を奉納さして、之を資本家的財界回復の祭壇に供發さしさへすれば、それで「景氣」の歯車は回轉し始めるのである。

最後に(5)の弱肉强食に由る「自然淘汰」であるが、過般の金融恐慌は、財的基礎の動搖せる多くの會社銀行個人を倒した。從つて、

だけ競爭者を減少し、殘存者の位地は有利になつたわけであつて、その結果は或は生產費の低下となり、或は物價の騰貴となる作用を有するものなること說明を要せないであらう。

斯く、過般の金融恐慌後、生產費の整理は少からず進んだ。だが、已述のやうに、生產費の低下を圖るには、必然に、國民大多數の收入を減少せしめねばならぬ。その結果は購買力の減少、賣行不振、物價下落と云ふヂレンマである。現に、物價は『整理』の進行と共に下落した。一方に生產費は低下しても、物價下落、賣行不振で差引利益は增大して來ない。斯くては、いかに生產費の方面の整理が出來ても、財界回復の齒車は運轉し始めない。その齒車が回轉し始めない限り、銀行は安心して資金の融通を圖らない。その結果が、昭和二年下半期に於ける不景氣である。

四、爲替下落のカラクリ

以上の如きわけで、昭和二年の財界は、之を財界の整理回復と云ふ立場から云へば金融恐慌後、マイナスの作用とプラスの作用とが相殺されて、依然、不景氣を續けたのであつた。だが、それは、國內的にのみに見た結果である。然るに、實際の資本主義經濟は、斯かる際には、外國貿易に由つて多大の刺戟を與るものである。即ち、以上の結果、或は輸出が增進し、或は輸入が減少して、內地產業の活躍を促がすのである。無論、最近の我が財界にも此の作用が働きかけてゐるわけだ。しかし、實は、此の作用が活潑に働き始めるには、未だ、物價の下落が足らない。外國品よりも安價に供給し得る所にまで、整理が完成してゐない。そこで、之を普通の狀態から云へば、いま一段、勞銀其他生產費の低下が行はれ、物價が下落し、輸出の增進、輸入の減少と云ふ刺戟を待たねばならないわけである。

だが、斯樣な「整理」は、一方には勞働階級の反對があり、一方には資本家階級それ自身の損失を覺悟せねばならぬ。こゝに於て、いま、斯樣な苦痛なしに、一方には資本家に直ちに利益を約束し、一方には勞銀その他無產大衆の收入を減少せしめると云ふ、所謂一擧兩得の方法があれば、資本家階級及び政府が、此の秘策を貪り採用するは當然であらう。爲替下落のからくりは、即ち、資本家に、右の二目的を同時に惠與する一石二鳥の秘策そのものに外ならないのである。

例へば爲替が一割下落する。それだけ、我が國の物價は騰貴しても、對外的には從來の値段と變らない。そこで、爲替が下落すれば、物價は騰貴しながら輸出は增大すると云ふ、ボタ餅で頰をたゝくやうな利益を資本家に約束する。だが、之を無產大衆から云へば、依然同一の賃銀乃至月給で、高い物價で生活せねばならなくなるから、要するに一割物價が騰貴せば、一割の賃銀月給等を減らされたと同一結果になるわけだ。しかし、今日の仕組みでは、斯樣な「物價」の側から來た賃銀や月給の引下げは、正面から賃銀月給の引下げをやる場合の如く反對せられない、することが困難だ。

斯樣なわけで、爲替の下落と云ふことは、目立たぬ裡に、一方で無

畜大衆の收入を減少せしめ（貿易上）、他方、資本家にそれだけの利益を約束する。　いま、我が政府及資本家は、此の秘策に由つて、我が財界最後の整理を促進し、景氣回復の注射を施しつゝある。見よ、金融恐慌の眞最中、政友會内閣成るや、彼等は直ちに一方には爲替回復政策の拋棄を聲明し、一方には盛んにインフレーション政策を行つて、次の如く、我が爲替相場を下落せしめたではないか。

金融恐慌前の最高對米相場	**四十九弗四分ノ一**
最近（十一月末）市場相場	四十五弗四分ノ三

即ち、差引三弗五十仙、約七分の下落である。換言せば、二圓の貸銀が一圓八十六錢に引下げられたと同じ結果を起したのである。しかも、此の爲替相場の下落は、已に落ち止つたわけでは未だない。否、前途、尚ほ少からず下落すべき事情に在るのである。その事情は、政府の財界救濟策の中に不可分のものとして包藏せられてゐる。と申す意味は、過般來の財界救濟のために已に放出せられ、乃至は今後に放出せられる通貨膨脹（インフレーション）の作用を指してゐるのである。

例へば、已述の財界救濟法三つ（合計九億七百萬圓）に由り、過般の金融恐慌後、日本銀行は已に約六億圓の巨額を貸出してゐるが、この貸出そのものゝ性質は、純然たるインフレーションである。なる程、未だそのインフレーション流通紙幣の增大と云ふ具體的な姿を現はさない。だが、早晩その姿は何かの形で具現し來らざるを得ぬ。現に、最近に於ける金融の緩慢、金利の低落の根因の一は茲に在る。尚ほ、**政府の財界救濟に由るインフレーションは右に止らぬ。總預金高約八億圓と云はれる休業銀行が開業するにつれ、その拂戾される預金の大部分は、「日銀特別融資補償法」に由つて日本銀行から貸出される。**これまた、その性質は純然たるインフレーションである。いま若し、八億圓の休銀預金の半分が拂戾され、その又半分が右の日本銀行よりの貸出に出るものとせば、その高は二億圓である。その上に、政友會は又、財界回復政策の一端として、別に所謂積極政策をやる。その結果、來年度に於て、**徵入すべき歲入以外に、公債乃至剩餘金繰入れに由り支出さるべき金高が三億二千餘萬圓に達する。**その中の少からぬ部分も亦、インフレーションの作用をなすや云ふまでもない。斯くていまわれ等は、**約八九億圓と云ふインフレーション政策を目の前にし**てゐるのである。

扨て、**その結果は如何**。普通なれば物價騰貴、輸入超過、爲替下落と云ふ順路を通るが常なれども、しかし、現在の我が日本の如き場合には、右の財政經濟事情を材料にして、先づ投機的に爲替が著落し、次いで物價騰貴と云ふ徑路をとる惧が多分に在る。現に、最近（十月乃至十一月）僅かの間に對米爲替が一弗ばかりも著落せし根因の一はこゝにあつたと云つてよい。

若しも、右の如き結果が、昭和三年の進行と共に現はれんか、我が財界は、こゝに、「利益再現」の少からぬ原動力を得て、
市は同時するに至

界回復の高さ等は、（少くとも之を昭和三年と云ふ期間に限つて云へば）、主として、右の爲替相場下落の程度如何に由つて左右せられるであらう。だが、今日、（十一月末）已に爲替は已述の如く下落してゐるのだから、これだけでも、その及す影響は可なりに著しく今後に於て現はれるであらう。恐らく、爲替相場は今日以上に著しく回復するよ云ふことは萬々あるまいから……。（政府の政策が現在の如くである限り）

加ふるに、いま世界の物價の大勢は騰貴の波に乘つてゐる。だから若し政府にして依然爲替回復政策を抛棄するに於ては、我が物價は、爲替の下落と此の外國物價騰貴の刺戟との二方面から、その騰勢を煽られつゝ、尙ほ輸出增を示す可能性があるわけだ。その曉に於ては、謂ふ所の「財界の回復」は、それだけ、速度に於ても高さに於ても、更にヨリがかけられて來るわけである。

五、財界回復の祭壇に供へられたる犧牲

以上が、昭和三年に於ける「財界回復」の位地であると思ふ。尠くとも、いま手にし得る材料からはさうであると考へられる。此間如何なる突發材料が飛び出して、右のコースを如何に歪めるかも分らぬこと無論であるが、それは神ならぬ身の豫測の限りでない。

だが、最後にモウ一度振り返つて纏めておく必要のあることは、右の如き「財界回復」の祭壇に捧げられてある犧牲の數々についてゞある。しかし、最早與へられた紙數も全部使ひ果してゐるので、こゝには、單に、その犧牲の如何に多くが、專ら無産大衆の生活から取り剝がれて來たものであつたかに注意を促すに止めるであらう。

例へば、勞働條件の積極的低下、農産物價下落に由る農村大衆の壓迫、爲替の下落、物價の騰貴と云ふ間接作用に由る一般大衆に對する生活難、九億七百萬圓の資本家救濟費の負擔、等々が即ちそれである。即ち、大衆の生活を削り下ろすことに由つて、而してその大犧牲を財界の祭壇に捧げることに由つて、財界回復の魔神は漸く笑顏を作り出さんとしてゐるのである。云ふまでもなく、斯くの如き「財界の回復を民衆が謳歌すべき筈がない。だが、われ／＼が、資本主義的仕組の下に、生産の歯車を運轉させようと云ふには、右の犧牲を強ひられる外にないのである。從つて又、輸出に由る外に、我が財界の景氣回復の途が無くなるのである

かつては、資本主義の景氣の波は、大衆の生活を向上さした。その限り、大衆は資本主義制度を謳歌した。少くとも之に積極的に反抗しなかつた。たま／＼反抗する者があつても、それは先きの先き迄を見透した一部先覺者のそれに止まつた。しかし、資本主義の安定、財界の回復は、最早、以上の如くその元氣の素を、專ら、その無産大衆の食卓から奪つて來る外になくなつたのだ。大衆が資本主義に反抗するに至るは必然だ。若しも、資本家にして、その資本主義の永續性、その永續價値を主張しやうと云ふには、右の如く、大衆の生活を犧牲に

することなくして、否、之を向上せしめつゝ、生産の自由を圓滑に運用せしめ得る方策を有せ[illegible]。（十一月廿日記）

農村經濟の行詰と其打開策

牧野輝智

（一）

農村經濟が行詰つてゐるといふことは、何人も唱ふる所である。然らば如何なる點が行詰つてゐるかといふと、人々のいふ所はまち〳〵で、中には何等據る所なく、漠然たる判斷にて何となく行詰つてゐるといつてゐるものもある。私は統計上の根據に立脚して、少しく農村經濟の現狀の將來を考察し、進んで其行詰りの打開策を研究して見たいと思ふ。

最初に攻究す可き問題は農業の前途如何といふことである。農村經濟の基調は農業である。それも我國にありては米穀經濟が農村振否の依つて分れる最大要素である。然るに農業の現狀及將來は商業工業等のそれと比して伸張性が著しく缺けてゐる。尤もこのことは農業其のものゝ産業としての本質にも基因してゐる。農業は商工業の如く、投下資本に對し或は又勤勞に對し、多くの收穫を擧げ得べきものではないが、それにしても我國の農業は國が古くて新發展の餘地が乏しいといふ樣な事情も重つて、餘程行詰つてゐることが種々の事實に現はれてゐる。

試みに商工業に比し、農業の發展が如何に遲々たるものであるかを示して見ると、第一に貿易は大正三年から昭和二年まで十四ヶ年間に四倍の發展をなしてゐる。即ち大正三年に輸出六億九千一百萬圓、輸入五億九千五百萬圓、合計十一億八千萬圓であつたものが、大正十五年(昭和元年)には四十四億二千萬圓で、約四倍に發展してゐる。昭和二年の貿易總額は本文起草の時までは不明であるが此の年は非常に不景氣であつたに拘らず、十五年前に比すれば大體四倍に近い金額に達す可きことは、十一月までの成績に徴しても明かである。他の一つの例として銀行預金はどうかといふと、普通銀行の預金は大正三年に十五億三千萬圓であつたものが、昭和元年末には八十八億圓で是は六倍の増加である。昭和二年は金融恐慌で普通銀行の預金は幾分減少し

同年十月末の預金は八十七億四千萬圓となつてゐるが、それでも大正三年と比較し、六倍に近い金額を示してゐる。

又工業はどんな實勢かといふと、我國工業の大宗ともいふ可き紡績業は、大正元年に二百四十萬錘であつたものが、昭和元年末には五百七十一萬錘に增加し、之は二倍の增加である。其産出高の激增は單に海外輸出の綿製品（綿糸、綿布、メリヤス類）を見ても分ることであるが、大正元年の輸出高は九千萬圓であつたものが、昭和元年には五億圓を輸出し、昭和二年は十一月末まで、四億二千萬圓を輸出してゐるから、此の間に五倍の進歩を示してゐる次第である。工業を代表する今一つの重要事實たる電氣事業も大正三年には投下資本（拂込資本金及社債借入金）が五億六千萬圓であつたものが、昭和元年末には三十六億圓となつてゐる。是は六倍の發展であることを示してゐる。

（三）

斯の如く商工業の發展は十五ヶ年間に四倍乃至六倍の進歩であることを示してゐるに對して、農業の狀況はどうかといふことを檢討すると進歩の見る可きものが甚だ乏しいことを發見する。

第一に米の産額はどうかといふと、大正三年の米穀收穫五千七百萬石であつたものが、昭和二年の收穫は非常な豐作と稱せられながら六千萬石を少しく超過してゐるのみである。平年作としては、大正五年の收穫も近年のそれも大した相違はない。左に累年の米穀收穫高を揭ぐ。＝農林省調査＝

米穀累年の收穫高

	作付反別	收穫高
大正三年	三、〇三三、三六八町	五七、〇〇六、五一〇石
大正四年	三、〇五六、五六四	五五、九二四、〇七九
大正五年	三、〇七一、一六五	五八、四五二、三八六
大正六年	三、〇八三、四四七	五四、五六八、九二七
大正七年	三、〇九二、七九三	五四、七〇〇、一六一
大正八年	三、一〇四、六三四	六〇、八一八、六八八
大正九年	三、一二六、五三五	六三、二〇八、五四〇
大正十年	三、一三四、八九四	五五、一八〇、四六八
大正十一年	三、一四〇、七六六	六〇、六九三、八五一
大正十二年	三、一四七、五六一	五五、四四四、〇八九
大正十三年	三、一四二、八一四	五七、一七〇、四一三
大正十四年	三、一五二、八二七	五九、七〇三、七八四
大正十五年	三、一五八、二七一	五五、五八二、六三二
昭和二年（第二回豫想）	三、一七二、一〇七	六〇、八一〇、一八〇

米穀の生産は作付反別を見ても收穫高を見ても十四ヶ年間に殆んど見る可き進歩がない。然らば麥類の收穫は如何といふに是亦同様發達の見る可きものはない左の通りである。＝農林省調査＝

麥類（大麥裸麥小麥）累年の收穫高

	作付反別	收穫高
大正三年	一、八二二、三〇五町	二一、二四四、三五一石

四年	一、八一一、八二九	二三、七八一、三八五
五年	一、七八六、六八三	二三、三三九、〇二五
六年	一、七四六、九二六	二四、一五三、四二一
七年	一、七三四、七八五	二二、五七七、二七一
八年	一、七二九、一四八	二三、八一六、六一七
九年	一、七五二、六〇二	二二、四七七、八〇八
十年	一、七一〇、八一九	二一、六六三、九五六
十一年	一、六二一、八九一	二一、六三〇、三二三
十二年	一、五〇九、三八六	一八、六四二、〇六九
十三年	一、四七二、二四〇	一九、〇七三、六三〇
十四年	一、四七五、三九六	二二、七二九、一八一
十五年	一、四五九、二九二	二一、九〇〇、八二六

麥類の生產にありては作付反別、收穫高ともに十數年前とは進步の**見る可きもののないばかりか、作付反別**は近年に於て二割內外の減少を**示し收穫高には何等增加の事實が擧つてゐない。**作付反別の減少に拘**らず、收穫高の減少してゐないことは品種や耕作法の**改良の結果であらうがそれとて大したことではない。

（三）

米作と麥作は農耕生產品中の主要品である。此の兩類の生產額こそ**農耕生產品の殆ど全部といつてもよい**程の重要である。然るに米作と**いひ麥作といひ上記の如く進步の**見る可きものは極めて遲々たる有樣で、其の生產額の大小は一に天候の如何により左右されるといふ狀態であるが、たゞ價格に就て見ると收穫の增加なきに拘らず金額は增加してゐる。即ち生產價格は大正三年に八億八千萬圓であつたものが、大正十四年には二十一億圓に達してゐる。それは米價昂騰の結果であつて大正三年には米價一石の平均値段十五圓四十六錢であつたものが大正十四年には一石の平均値が卅五圓七十三錢である。米穀の實際には何等增加なく米價の昂騰により今日の農家經濟は漸く維持されてゐる次第である。尤も貿易品や工業生產品に就て見ても金額の增加と數量の增加とは必ずしも增加するものではない。併し貿易品や工業生產品は金額の上に於てのみならず、量の上に於ても相當の增加を示してゐる。それは綿糸の生產額が大正三年には百六十六萬梱であつたものが大正十五年には三百六十萬梱を生產してゐることによりても大體を想察することは出來やうと思ふ。米作麥作が作付反別に於て殆ど增加なく麥作の如きは却つて減少してゐるのとは大に事情が違つてゐる。

（四）

農業經濟の根本的の惱みは此の點に存してゐる。如何に耕地整理を奬勵しても開墾助成法により開墾拓殖を奬勵しても是による耕地の增加は眞に微々たるものである。農耕地の總面積は大正三年に五百八十七萬町步であつたものが、大正十四年に六百六萬町步に增加してゐる程度である。僅に二十萬町步の增加である。此の開墾地や干拓地の製造は年一年に費用が高くなるばかりである。農業生產を不引合のも

となす理由にはなるが農家經濟を豐にする點に於ては希望を勵す餘地がない。既に農産品の産額は大した增加は望まれないとすれば農業による收入の增加は生産品の價格昂騰に待つの外はないが、今日にありても農産物の價格は他の商品よりも上り過ぎてゐるとの非難さへある。此の非難は物價指數を基礎としての主張である。即ち物價指數に現はれた農産品の昂騰は左の通りである。＝日本銀行調査＝

米價の昂騰率と一般物價の昂騰率

	米價	一般物價
明治三十三年(基準)	一〇〇	一〇〇
大正三年	一三七	一二六
大正四年	一一一	一二八
大正五年	一一六	一五五
大正六年	一六七	一九五
大正七年	二七六	二五五
大正八年	三九〇	三一二
大正九年	三一六	二四三
大正十年	二六一	二六五
大正十一年	二九七	二五九
大正十二年	二七八	二六三
大正十三年	三二七	二七三
大正十四年	三五三	二六八
大正十五年	三一九	[illegible]

の米價の十二ヶ月平均指數に三一九　一般物價の平均指數は二三六である。米價の昂騰率は一般物價のそれよりも著しく高率である。而かも此の程度の開きは例年に見る現象であるから、米價の昂騰率が一般物價より遙に高いといふ事實は何としても否み難いことである。米價が生産費に比し高過ぎるか否かに就ては賛否兩方とも相當の論據があるが、私は今日の米價が大體に於て安過ぎるとは思はない。たゞ米價は騰落が甚しいから適當の相場に安定せしむることは最も必要である。之が私が米價調節の根本趣旨に同意を表する所以である。然しながら農村經濟の根本義として是に於て豐作品の增加は容易に望み難く、此の上にも價格を引上げることにのみよりて農村の懷工合を補ふの外に道なしとすれば、農村經濟はいよ／＼行詰つてゐると斷定するの外はない。

(五)

此の他農業經濟の行詰りを思はしむる事實は澤山ある。農耕地の地價が著しく高いことなども、農業生産を不利ならしむる有力な原因である。我國は豐葦原瑞穗國と稱し、神代から農耕の業が行はれてゐたため、米國や加奈陀、濠洲などのやうな新開國に比し、耕地の價格が話にならぬ程高い。米國では十九世紀の中頃までは土地は殆ど無償

格は十五弗半に過ぎなかつた。其の後著しく騰貴したといつても一九二四年の平均地價は六十四弗である。(拙著「農業金融」參照)。

是に反し我國の農耕地の價格はどうかといふと昭和二年の普通田一反の平均値段が五百四十六圓、畑一反の値段が三百三十三圓である。

試みに我國の農耕地の價格を田畑別歴年別にて示せば左の如くである

＝日本勸業銀行調査＝

田畑賣買價格累年比較

	田地價格	田地指數	畑地價格	畑地指數
大正二年	三〇一圓	一〇〇(基準)	一六三圓	一〇〇(基準)
三年	二七七	九二	一四八	九〇
四年	二五四	八四	一三八	八四
五年	二七一	九〇	一五〇	九二
六年	三二二、	一〇六	一八四	一一二
七年	四三三	一四三	二四六	一五〇
八年	七〇六	二三四	四一八	二五六
九年	五九四	一九七	三二九	二〇一
十年	五九一	一九六	三四七	二一二
十一年	六二〇	二〇五	三六三	二二二
十二年	五八三	一九三	三四二	二〇九
十三年	五六八	一八八	三四一	二〇九
十四年	五六〇	一八六	三三八	二〇七
昭和元年	五七一	一八九	三五〇	二一四
同　二年	五四六	一八一	三三三	二〇四

米國の農耕地は我が四反廿四歩に相當する一エーカーが六十四弗即ち百廿八圓であるに對し、我國の同年(一九二四年)の地價は一反當り田地は五百六十八圓、畑地は三百四十一圓であるから、米國のそれに比し十數倍の價格に當る計算である。斯の如くに價格の高い農地に耕作することが農業生産上非常に不利であることは改めていふまでもない。然らば地味はどうかといふに、新開國の農地に比し、我國のやうな小さい土地の地味が豐饒でないことは之亦已むを得ざることで、勢い肥料代に多くの出費を要することになる。從つて此の點からも經濟的の不利を受けることは避け難い次第である。

(六)

農村經濟の行詰りの他の一因として看過してならないことは、農業生産品の市價の騰落の烈しいことである。前にも陳べた如く我國の農業生産品は過去十數年間、量の上に於ては見る可き成績がなく、農村經濟は主として市價の昂騰によつて維持されてゐる。ところが農産物の市價なるものは工業的製作品に比し大に騰落が異つてゐる。工業的生産品は需要供給の状況を考慮して生産額を調節することが出來るが米作麥作などは事前に需要供給の状況を考慮するの餘地殆どなく豐作たると凶作たるとは主として天候によりて支配され、人力の如何ともす可からざるものが甚だ多い。然らば凶作であれば農村經濟は必ず禍であるかといふに決してさうではなく、豐作のために農村の疲

却つて減少する結果になる。それは米價の騰落は其の生産額に比例せず、増收率或は減收率を遙に離れて暴騰し又は暴落するものであるからである。是を實例にて示すと、大正十年の米穀收穫高は五千五百萬石であつたが、其の價格は二十億二千萬圓であつた。然るに其翌年の收穫は六千七十萬石に達しながら、其價格は十六億二千萬圓に過ぎない。產額は五百五十萬石の増收であるに拘らず、農村の收入は却つて四億圓近くの減少となつてゐる。此の點は農業經濟の弱味であつて、政府としては是に對して適當の調節を加ふるの必要あること勿論だが、政府の人爲的調節に何程の効果を望み得可きかは甚だ疑問である。此ことは最も近い例として昭和二年の豐作に對する政府の市價調節策の失敗に徴するも明かである。

斯の如く擧げ來ると農業經營の不利、農村經濟の行詰りを證明する事實は幾何となく現はれて來る。從つて一方に於ては商工立國論などが頻りに主張される譯であるけれども、農業なるものは國民の食糧を生産する產業であるから、其經營が不利であるからとて是を廢棄し、一切他國の生產品に依賴するといふ譯に行かない。商工立國論者が常に引用するのは英國の實例であるが、英國には加奈陀のやうな、濠洲のやうな豐饒な農產地を植民地として所有してゐる。それでも一旦緩急ある場合のことを考へて、海軍々備の充實には最も意を用ひて來たかくて歐洲大戰當時までは一意商工業の繁榮にのみ力を傾注して來たが、昨今は餘りに農業を閑却したことの損失に氣がつき、農業振興問題が政治論としても經濟論としても喧しく論議されてゐる。我國は米英國とは事情が全く異つてゐる。本國朝鮮臺灣以外に米を產する領土としては一つもない。若し我國の農業が英國のそれの如く荒廢したならばどうであるか。是は國民經濟の問題としてばかりでなく、國民生存の問題として由々敷い重大事である。否我國の經濟的存在は根柢から破壞せられる次第である。

（七）

此の點に於て更に我等は大なる惱みを感ずるのである。農業經營は商工業の如く有利ではないに拘らず、是を助長して行かればならない絕對的の理由がある。農村經濟が行詰つてゐるのを見て大勢如何ともし難しと看過する譯には行かない。茲に於て如何にして農村經濟の行詰りを打開す可きかの問題が、經濟問題としては勿論、政治問題としても、社會問題としても、頗る重大意義を有する譯である。以下其の打開策に就て愚見の一端を陳べて見たい。

第一に陳ぶ可きことは農村金融の問題である。一般の金融に比し農業金融は期限に於ても、利率に於ても、不利であることを免れない性質のものである。長期低利の資金でなければ農業の經營には充當し難いからである。然るに今日の農村金融の實際はどうかといふと非常に高利な而かも短期の負債に苦しみぬいてゐる。それでも資金を借り得た人はまだ良い方で高利を拂つても資金を得るの道ないものが殆ど常で

ある。勸業銀行の調査によると、各府縣の個人間の仕借で、土地を抵當にせる債務の利子は約一割二分である。而して其の内の八割以上は期限六ヶ月以内である。土地を抵當とするために登記料其他の費用を掛ひながら期限は六ヶ月、利子は一割二分である。其の借換ごとに債務者が不利の條件を加重せしめられるは普通のことである。已むを得ない事情もあらうが此の無思慮の結果として土地の所有權を喪失しつゝあるものがどの位あるか分らない。土地抵當のものにして既に斯の如くに條件が不利であるから無擔保の借金に至りては、よし夫が出來ても如何に不利であるかは改めていふまでもない。而して其原因は何であるかといへば第一の原因は農村金融資金の缺乏であること勿論である。

然らば農村の資金は都市のそれに比し何が故に缺乏するのであるかこれは農村にて生産せられたるものゝ收入が農村資金として農村に止らず都市に向け流出して仕舞ふからである。さらば如何にして流出するかといへば其の一は國税の納付である。我國に於て租税の年額は八億八千萬圓であるが、地租所得税等の直接國税を始とし、此の關係から農村の資金が中央都市へ流出する額は尠少でない。其の二は郵便貯金である。郵便貯金總額十五億圓中、四割近くは農村の貯金であるから大ざつぱの計算で六億圓の金は農村から大藏省預金に吸收されてゐる次第である。其の三は普通銀行の預金である。普通銀行の預金八十七億圓中農村から吸收されて商工資金に充當されてゐる額は可なりな高である。特に近年の銀行合同促進は地方の資金を都市に集中せしめ農村資金をますます缺乏せしむるの結果を生じてゐる。其の外保險金の支拂、商工業品の買入、學資金の送附等農村の資金が都市へ流出する事情に際限となく存してゐる。

一體農村の一ヶ年の收入の概算はどれだけあるかといふと大正十四年の收入は米、麥、繭の三品だけでも左の如き巨額に達してゐる。

〔農林省調査〕

米作收入	二、一三三、七六二、三七七
麥作收入	三〇一、五〇六、五〇七
繭收入	八二四、二五五、六九六
合計	三、二五八、五二四、五七〇

即ち米穀、麥類、繭の三種だけで三十二億五千萬圓といふ巨額に達してゐる。農村資金を豐富にする根本問題は農村自身の生産した資金をなる可く都市に流出しないやうにすることである。例へば信用組合の如きものを十分堅實に發達せしめて郵便貯金や銀行預金として都市に集中せられるものを信用組合の貯金となし相互的に資金利用の道を講ずる如き其一例である。是には信用組合其のものゝ内容を十分改善するの必要あることは勿論である。斯くしても納税や生命保險等による資金の流出は已むを得ないが、政府としては預金部資金の運用に際して農村から吸收した資金を還元するの道を講ずることが肝要である。現内閣でも此の點には留意し昨春の金融恐慌の結果銀行貯金の一部を地方自治體の高利債借換のために地方に融通す

採つた。本來からいふと金融恐慌の結果增加した郵便貯金は、主として都市の小商工業者其他の住民が銀行から郵便局に預替へたものであるから、是を地方に融通するは如何なるものかとの非難も出る譯であるが、併し是までの郵便貯金の利用法なるものが、餘りに地方の金融といふことを閑却してゐた。であるから斯かる機會にありても地方融資を增加することは推賞す可きことである。一歩を進んで地方住民自身の金融難緩和に及ぶことが更に肝要である。又次に政友會の主張する地租の地方委讓の如きも地方資金の流出を防止する上から見て幾分かは効果あるべきものである。又生命保險の積立金の如きも是を農村金融(主として農地抵當の貸付)に充當することは、單に保險金の一部が農村から出てゐるといふ理由からばかりでなく保險積立金の運用を確實にするためにも有効であると思ふ。米國の農業地金融に就て最も多く投資してゐるのは生命保險會社である。此のことは我國に於ても大に學ぶ可き點があると考へる。

尙ほ農村金融に就て攻究す可きことは動產金融の問題である。我國では農業倉庫の制度はあるが動產金融としては未だ効果を擧げてゐない。米國のインターミヂエート、クレヂット、バンクが創設後間もないに拘らず農產物擔保の金融機關として着々實効を奏しつゝあるに比してである。

（八）

農村經濟の行詰りを打開する第二の策は副業を盛にすることで我國の農家經濟にて米作に次ぎ收入の大なるものは養蠶である。は一種の副業であるが、是は農家經濟を裕福するばかりでなく國民經濟上の重大產業となつてゐることは何人も知る通りである。養蠶のやうな大副業を他に求むることは不可能にしても手工業とか畜產とか此他種々の方面にて農家の副業たらしむるもの尠くないと思ふ。此の場合に市場との連絡を圓滑にし農家生產品の收益を輕減しないやうに努めることは最も肝要である。一例を擧ぐれば蔬菜類の如き即ちそれである。蔬菜類の元値(生產者の賣値)と小賣値との間には驚く可き開きがあるが、之は市場の連絡が甘く行つてゐないことに大なる缺陷がある。養鷄にしても養豚にしても市場との聯絡が巧く付いてゐないために農村の副業を不引合に終らしめてゐる場合が澤山ある。副業の奬勵に就ては種目の選定と共に生產品販賣の方面に十分なる改善を行はねばならない。

第三の問題としては農村の生活費の低減を圖ることが肝要であると思ふ。此の點に就て直に思當ることは公課の重いことである。近年地方財政膨脹の勢は中央財政のそれより更に甚しく、是か如何ばかり農村の經濟を壓迫してゐるか分らない。大正三年度の地方財政歲出は三億一千萬圓であつたが、それが大正十五年度には十四億九千萬圓即ち約十五億圓に激增してゐる。五倍に當る急增である。地租の如きも頻りに問題となつてゐる國稅は六千六百萬圓であるが、寧ろ看過されてゐる

る地租附加税（地方税）は一億二千萬圓である。是等の公課などの征収村經濟の行詰を助長してゐるか分らない。如何なる名儀であるに拘らず、農村の公課となる可きものを輕減することは農村生活の行詰を緩和する所以であると信ずる。農村の生活費の問題に關して考ふ可きことは外にも色々ある。既述の如く農村の生產品は賣崩し其他により農家の收益を減少せしむることが常であるに拘らず、農村に購入する加工品類の價格は不當に高價である。是は主として配給制度の不完全な結果であるが、衣類にしても、消耗品にしても都市を經由したる商品の價格は、農村に於て高價たるを免れない。肥料の如きは生活費の問題ではないが、購買方法其他の不完全なため農家では非常に不利な負擔をなしてゐる。農村經濟の行詰りを緩和するには是等の點をも十分に考慮する必要がある。

第四の策として私は農村の勞働力を今少し有効に利用する方法はないかと思ふ。農村の繁忙時は到底商工業と比較にならぬ程繁忙であるが一年を通じて觀察すると、其の勞働狀態は甚だふしだらである。特に二毛作の行はれない地方などは冬から春にかけての季節を何とかして生產的に費す方法はないかと思ふ。

農村經濟の行詰りを打開するは容易ではないが、農村人の自助的精神と國家の施設、多年の弊習の打破等により是を緩和する道は少くないと考へられる。私の所謂打開策は試みに其の三、四を擧げて見ただけであるが、世の有識者が倶に共に其の具體的手段を攻究し、農村經濟の改善に貢獻する所あらんことを希望して已まない次第である。

時評

協定と××

――歳末と小預金者――

山川均

銀座の街頭に、『革命的安價』や『爆彈的投資』の赤旗がひるがへり、四つ角に『慈善鍋』がお馴染の姿を現はす時になつた。ことしの歳末に、また一つ新しく加はつた問題は、いふまでもなく休業銀行の小預金者問題である。

さき頃の金融恐慌のどさくさから、つゞいていま尚ほ休業してゐる銀行は二十五行であつて、その預金が七億圓、預金者の數が、ざつと一百萬といふことである。今の世の中に、床の下に小判を埋めたつもりで要らぬ金を銀行に預けてゐる人もなからうから、みな要る金にはちがひない。しかし同じく要る金の中でも、それが無くては忽ち生活に差支へるといふ、現實に差し迫つて要る金を預けてゐる。謂ゆる小預

小預金者が、數においては大多數を占めてゐるにちがひない。

百圓二百圓の預金をしてゐる境涯の人に取つては、毎月の收入から、幾らかづゝを食ひ延ばすといふことは、決して容易のことではない。この社會層に屬する大多數の人たちに取つては、生活らしい生活をするためには、支出が收入を超過してゐるのが、ほとんど原則となつてゐる。そのうちから若干の貯蓄をするといふことは、算盤の上ではとうてい不可能なことがらであつて、文字通りの無理算段といふ算法で彈じき出したものにちがひない

かうして蓄へた僅かばかりの端た金――端た金であるからこそ虎の子よりも大切な金――これは銀行に預けておくのが一番安全だ、なほ

預金者にとつては、銀行の破綻に、暗大の、きたさであつて、これにはなか〳〵、單に預金をさらはれたくらいの事ではない。現に近江銀行の預金者のうちには、預金の拂戻しができないために、自殺した者が十二名、發狂した者が八十五名、行方不明になつた者が六百數人に上ほつてゐるといふことである。

　これはまさしく重大な社會問題の一つであつて、歳末の近づくにつれ、政府でも、その解決にやつきとなつてゐるらしい。しかし幾らやつきになつて見たところで、無い金は無いので致方がない。そこで最もよい解決方法のついた場合が、せい〳〵預金者が、預金の何割かを拂ひ戻される幸運に浴することなのである。かうして預金者は、預金の何パーセントかを利息として受取る代りに、預金の何十パーセントかを、銀行業者のふしだらの尻拭ひのために奉納せしめられること、そして百圓の預金を、たとへば七十圓にして返へして頂くことを、なるほど妥當なことと御尤もなことゝ認めて整理案に印形を押すことが、謂ゆる支拂協定なのである。

　この近代的な切り捨て御免に承諾の調印をした者には、預金者全部の協定がつかなくとも、そしてこれは堅苦しい法律の文面には抵觸するかも知れないが、そこは歳末の切迫と預金者の窮迫とにかんがみ、硬直な法律は少々はへし曲げても、年内拂戻しの便法を講じて下さるといふのが、政府の仁政なのである。

　しかしながら考へてみると、協定と、、とは、強盜が似寄つてゐるばかりでなく、その内容と本質とにおいても、極めてデリケートな關係がある。

　いま私は、差し迫つてその金が必要だ。百圓のうちの七十圓だけでも、返へして貰ふ必要に迫られてゐる。この時、七十圓で結構なら返へしてやる、文句を云ふなら何時返へすか分らない、と云はれたなら、私はこの協定に調印するにちがひない。誰れも私を、、した者も、した者もない！　私は私の自由な選擇で、當て途のない百圓よりも、現實の七十圓を摑んだまでゞある。たしかに、、でも何でもない！

　ところがいま、私の枕元に、覆面の大男が、拔身をさげて突つ立つてゐる。彼は私に向つて、命か財布かどちらかを引渡す協定に調印しろといふ。私はもちろん、臆病者である。そこで愼重に考慮をめぐらした結果として、財布を差し出すことにする。私の意志は、ぜんまい仕掛けで動らく仕組みでない。であるからこの強盜は、私の意志を勝手に動らかせた譯ではない。よし私の意志がぜんまい仕掛けであらうとも、少なくともこの強盜は、このぜんまいには、ちつとも手を觸れなかつた。私は或る一定の條件の下において、自分自身の意志により、自由な選擇をしたのである。實際、私は七十圓の財布の金よりも、百圓の命の方が欲しかつた。そこで私は、この強盜の提出した、問題の解決案に調印した。私は強盜に、、されたのではなくて、協定をしたのである。

　しかしこの強盜の解決案は、法律によつて禁止せられてゐる。

業者がその使ひ込みの尻を預金者に拭はせる權利は、法律によつて保障せられてゐる。こゝに、、と協定との區別がある！

たとへば、左右田銀行の場合を見ると、預金者の數一萬三千、その大部分が二百圓未滿の小額預金者であつて、それは『その日の生活の糧にする資金であるために、たとへ切り捨てられても、血の出る思ひで整理案に調印した』。新聞には、かう書いてある。もちろん、强盜に斬られて血が出たわけではない。かうして預金者のほとんど全部の調印を了へたが、たゞ横濱市內で二十一名、關西方面十五名、東京方面二十三名だけが、あくまで頑强に調印を拒んでゐる。新聞には、またかう書いてある。これらの未調印者は、『辯護士や前市會議員やら銀行の內情にも通じてゐるものなので、却々困難と見られてゐる』。これはたゞ生活の餘裕のある者は切り捨てに同意しないで、差迫つた必要に迫られてゐる人々が、『自由の意志』で切り捨てに同意したことを意味してゐる。この事實を見ると、百圓の預金をして七十圓の拂戾しに同意した人々の自由の選擇と、命の代りに財布を差出した人の自由の選擇との間に、果してどれほどの本質的な相異があつたかゞよく分る。少なくとも、彼らが現に選擇したもの以外のものを擇ぶなら、忽ち『血が出る』ことだけは、兩者が一致する。

銀行業は特別の法律に準據し、そして政府の特別の監督の下に行はれてゐる特殊な營業なのである。この銀行に百圓を預けておくと、七十圓になつて返へつてくるといふことは、いふまでもなく、、、、なことなのであつて、これを裏返へしにして見れば、銀行は百圓て、三十圓だけ頭を刎ねて返へす、、を、、、、、、、、せられてゐる、といふことにもなる。ところが百圓が七十圓になるのは、預金者に取つてまだしも結構な方で、中には、預金の一割しか拂ひ戾しのできない銀行さへもある。即ち、預金の九割を、、、、、、、、、、が、銀行資本のために、公認せられてゐるわけである。

この休業銀行の一つを、見事にめちや〳〵にして見せてくれた松方公爵は、その『責任』を明らかにするために、私財全部を放ふり出して裸一貫になつた上、公爵といふ榮爵を辭退したとかされたとかいふことで、天下の賞讃と同情の的になつてゐる。もと〳〵裸一貫の小預金者には、辭退に及ぶべき榮爵もなければ、この上、裸になるべき餘計なものも着て居らぬ。彼らは天下の賞讃と同情とを博するためには、生皮でも引きむぐほかに仕方がない。

先生の盲目？

＝ノート制度廢止運動＝

さき頃、ある新聞の一投書家が、中學校の課程から、外國語の如き不經濟な學科を減少し、速記を課目に加ふべしと主張してゐるのを見たことがある。その理由は、中學教育で速記を敎へておけば、高等敎育に進んで講義の筆記する場合に、非常に實用的だといふのであつた。たしかに、その通りにちがひない。いくら日永の暇つぶしのつも

りで、ゆるゆると朗讀してくれたるに過ぎぬ、速手までこの普通の文字で筆記するのは、非常な努力であつて、もしこれが必要條件だとすれば、吾々の如き遲筆の者には、教育を受ける資格がない。そこで中學教育で速記を教へておかうといふ。なるほど、よい思ひつきにはちがひない。しかし一そのこと、講義を筆記するのをやめたなら、面倒な速記を教へる必要もない。どうもこの方が、一そう上わ手のよい思ひつきのように思はれる。

ところが學校では、先生の講義を筆記することが、强制的に命ぜられてゐる。そこで最近、學生によつて、ノート制度廢止の運動が起こされた。新聞の傳へるところによると、『從來、各高等學校および專門學校などに行はれてゐる强制的ノート制度は、全く盲目的の筆記であつて、精神的に無收穫な上、無味乾燥なため、生理的疲勞と倦怠とを覺えしめる』といふ理由のもとに、第六高等學校文科生の主唱により、ノート制度改正同盟會が組織された。この運動は、直ちに學校當局者によつて禁止され、同盟は解散を命ぜられたといふことであるが、その後については、何事も報導せられて居らぬ。この極めて合理な學生の運動が、學校當局者の禁止によつて、わけなく消え去つたとすれば如何にも不思議であつて、全國的に學生間の運動とならぬことを、むしろ怪むべきである。

專門の學校においてさへ、老大教授といふものは、十年一日の如く、同じ講義のノートを繰返へしてゐるものだといふことである。眞理は不要であらう！　しかしここでは問題の眞理を、年々歳々、新しい學生が、新しい紙とインキを費やして筆記することは、インキや紙が勿體ないばかりでなく、千古不磨の眞理に對して、むしろ失禮なことでもある。

この先生の口から迸ばしり出る眞理を、學生は夢中になつて、一言半句も書き落すまいと、たゞ『盲目的』に筆記する。先生が咳き拂ひをすると、學生は驚いて筆記する。もとより學生には、その講義を批判し、玩味し、理解する餘裕などはない（或は、そのような必要がないのかも知れないが）。これはたしかに、『生理的疲勞と倦怠』以外に、何らの『收穫』もないものゝ如くに思はれる。先生の講義を盲目的に筆記する學生の方は、この事實に目を開いてゐる。たゞ先生が、この事實に盲目なのである。こゝにノート制度存續の根據がある。

しかるに人間は――老教授の經濟學の講義が教へてゐるやうに――『經濟的の動物』である。一つの地點から他の地點までへ、最も近い早や道で、最も骨の折れぬ歩るき方で到達しようとする。そこで五十人百人の血氣の青年が、先生の咳き拂ひを筆記することにその精力を浪費する代りに、誰れかに專門に筆記させ、內々そのプリントを買ふことによつて、最少の勞力で同一の目的を達しようとする。これはよく行はれてゐる實踐であつて、老教授の經濟學說に從ふと、これが人間社會の經濟生活を發達せしめる根本原則なのである。

しかし學校側の言分によると、『ノート全廢は、教授上の實際問題と

しては不可能のことで、大學なれば、教授が自分の著書によつて講義するのだから、あらかじめプリントを出すことも出來るが、高等學校では、教授の直前に講義内容が出來上るのだから、これを印刷して配布するといふやうな餘裕はない』といふことであるが、プリントを、『あらかじめ』配布する必要はない。あとから出せば澤山である。そしてこれほど容易なことはない。

ところが學校當局者は、學生の折角の運動に對して、『多數のものの調印をとる必要はない、學校側は一人の申出でも、よいことなら採用するが、多勢をたのむことは不穩當である』といふ理由で、同盟の解散を命じたといふのである。今日たいていの諸外國では、教員もそれぞれ組合を組織して、雇傭條件の維持改善の運動ぐらゐはやつてゐる時代であるが、わが國の先生たちは、依然として封建時代のノートを繰り返へし、苟も多數の人が共通の意志を發表したり、共通の意志にもとづいて行動することは、これ即ちお上に對する謀反の振る舞であつて許るすべからざる不穩の處爲だと考へてゐる。『一人の云ふことでも、よいことなら採用する』。これは如何にも立派な言ひ分のようではあるが、政治的には、封建時代、專制時代の謂ゆる『善政』の思想にほかならぬ。今日の時代は、全くこれとは正反對の方向を指してゐる。先生は依然として、丹念にこの封建思想のノートの朗讀を繰り返へしてゐる。學生はいつまで、これを『盲目的』に筆記してゐるだらうか？

マルクス思想の再勃興

マルクス主義が世界の思想史上に現はれてから今日にいたるまで、その『流行』には滿潮期と退潮期があつた。けれどもマルクス思想が大に勃興した時期は、いつでも、必ずそれに照應した社會上、政治上の形勢の存した時期であつた。マルクス思想の流行には、いつでも社會的な背景があつたといふことは、この『流行』が、單なる流行でない證據である。

わが國において、初めてマルクス思想の流行を見たのは、歐洲戰後の時期であつた。當時のヨーロッパには、××的機運が漲ぎつてゐた。各國の勞働階級は、前進をつゞけてゐた。この、、、、、、、、、、は、日本の沿岸をも洗はざるを得なかつた。大戰によつて資本主義經濟が一大飛躍をなし、資本家が例外的な利潤を累積してゐたわが國では、戰爭のために資本主義の經濟が危機に瀕したヨーロッパ諸國とは、それはおのづから異つた形を取つて現はれたのは當然であつて、勞働者は資本家の法外な利潤に對して、當然の配前を要求し、この鬪爭のうちから、急速に組合運動が勃興した。

かやうな社會上の形勢と相俟つて、ロシアとドイツとの、二つの革命の影響を受けたわが國の思想界は、社會問題と社會思想とにその全注意を集注した。新聞雜誌は、競ふて社會問題を取り扱ひ、猫も杓子

も、社會運動を論ずるといふ有樣で、出版界はこの種の著書で、文藝思潮の準備をしたといつてよい。

の展はひをした。この社會思想の波に乘つかつて、マルクス思想もまた、恐ろしい勢ひで押し寄せてきた。

しかし歐洲戰後に、わが國に打ち寄せた社會思想の波は、ヨーロッパにおける勝利の餘波であつた。また當時の勞働者運動は、大正九年の恐慌後は、漸次に守勢に轉じたとはいふものゝ、なほ攻勢時代の餘勢を保つてゐた。そこで當年の社會思想の勃興は、むしろ明るい威勢のよいものであつた。マルクス思想の流行にも、この特徴がくつ着いてゐた。そこでこの時期に輩出した遽か作りの社會思想家や、急ごしらへの社會運動批評家らは、舊式な武裝を厭棄し、多かれ少なかれ、社會主義的、マルクス主義的思想で艤裝したのであつた。

この時期における、マルクス思想の流行の程度と性質とは、高畠氏の譯本と競爭して、二つのいかゞはしい『資本論』の反譯が刊行せられた一事によつても知ることができる。

かように當年のマルクス思想の流行には、社會的な理由があつたにも拘らず、かなりに流行的な性質を帶びた上辷べりなものであつた。ことにその流行の範圍は、在來の讀者階級といふ狹い範圍に限られて居り、かつこの範圍においてさへも、マルクス思想が、果してどれだけほんとに、咀嚼せられたかは、甚だ疑はしい。けれどもこの時期にいたつて、わが國の思想界は、從來よりも遙かに廣い範圍にわたつて、初めてマルクス思想に親しみ、その輪廓を學び、次いで來るべき勃興の準備をしたといつてよい。

不景氣の襲來と、勞働者運動の沈靜と、社會思想流行の一過と共に、大急ぎで社會主義マルクス主義で艤裝した多くの學者や思想家は、ぼつ〳〵その艤裝を解き、おの〳〵その納まるべき本來の位置に納まつた。社會思想は一般に、もはや前日のような、流行的な性質を帶びたものではなくなつたが、しかしこの間を通じても、全く衰頽したことはない。出版界の最も沈滯した時期においてさへ、社會思想に關する著書のみは、著るしく變動のない讀者を持つといふ點で、最も危險のない出版物と見做されてゐた。

最近におけるマルクス思想の再勃興は、その流行性を帶びてゐる點では、往年のそれと若干の共通點をもつてゐる。しかしその背景となつてゐる社會相は、往年のそれとは全くちがつてゐる。今日は、わが國の資本主義經濟は、明らかに上向的な軌道の上に乘つてゐる。しかしそのためには、言ふべからざる犧牲と受難が拂はれてゐる。資本主義經濟の一大整理の過程のうちに、大資本はいよ〳〵ます〳〵強大となつて立ち現はれる一方に、有力な組織を持たぬ勞働者は、到るところで打ちのめされてゐる。農民の窮乏は、ます〳〵加はつてゐる。中小の商工業者は急速に沒落し、沒落せぬものも、沒落に瀕してゐる。社會の一般下層は、極度の不安にさらされてゐる。生產は增加し、輸出は增加し、資本主義經濟が確乎として上向の道を辿つてゐるにも拘らず、全社會には、言ふべからざる陰慘の氣がたゞよひ、息づまるよう

な重苦しい空氣が滿ちみちてゐる。これが最近におけるマルクス思想流行の背景となつてゐる社會相であつて、それは往年のような、明るい、威勢のよい、はしやいだものではない。

かようにマルクス思想に對する一般世間の關心は、外からの刺戟にではなくて、內から湧き出た要求にもとづいてゐる。それだけに、往年の流行に比して、遙かに深刻なものがあり、かつその範圍が、著るしく擴大せられてゐる。即ち最近のマルクス思想の勃興は、これを往年のそれにくらべると、遙かに廣大な社會層に基礎をおくところに、著るしい相違がある。

いふまでもなく、これは最近における出版界の新傾向が、從來の讀者圏を打ち破り、非常に廣大な新領域を、讀者範圍のうちにもたらしたことゝ、離るべからざる關係がある。いはゆる『圓本』の流行は、一方には、出版界の行詰り打開の企てゞあり、他方には、大資本による大量生產が、出版界にまで浸潤する作用として起こつたものであつて、その功罪はしばらくおき、從來の讀書圏を一擧に打ち破つた効果は、極めて重大な社會的影響をもつてゐる。マルクス思想に對する要求は、遙かに廣大な社會層の間に、遙かに深刻な性質をもつて起こつたものではあるが、さらにこの要求を刺戟し、さらにこの要求を滿足せしめたのは、出版界の大量生產であることは疑ひない。現に私自身の如きも、しばしばその必要を感じながらも、たゞ値段が高いといふ障害のために、高畠氏の『資本論』の譯本を持つてゐなかつた。

一時流行を極めた豫約全集ものが行詰り、これに代つて『同また漸やく行詰らんとした今日、マルクス思想の出版物は、行とする『圓本』の前途をさらに打開したかの觀がある。これは出におけるマルクス思想の最近の流行が、たゞ單に多量生產によつて刺戟せられた流行ではなくて、現在の世相を背景とするところの、根底ある一社會現象だといふことを物語つてゐる。

往年と今日との、マルクス思想の流行に見られる性質の相違は、その影響においても、大なる相異を豫想せしめるに足るものがある。往年にあつては、主として、マルクス思想の輪廓を知るに便利な解説的な出版物が要求せられてゐた。この點で、往年の流行は、より多くの人々をマルクス思想に案內し、これに親しましめる豫備的性質をもつてゐた。然るに今日は、この種の出版物のみでは滿足されないで、權威ある文獻が要求せられてゐることゝも、注意に値ひすることである。マルクス思想は、かつてよりも、一そう深刻に要求せられてゐるといつてよい。

もちろん、これは一面には、大きな矛盾をもつてゐる。大量生產によつて急激に讀書圏內に引き込まれた多くの人々にとつては、マルクスのクラシックな文獻よりも、却つてこれを通俗化したものが、一そう適切に、その要求を滿たすにちがひない。今日は、大量的な生產はなほ特殊な出版物に限られてゐるが、右の點からは、大量生產主義が、もつと一般化することが望ましい。

軍備縮小の『茶番』

―勞農代表の軍備全廢提議―

米國では、さきに海軍縮少會議を提唱した熱心な軍縮論者である舊のクーリッヂ大統領が、巡洋艦數隻の新造計畫を至急可決するように、議會に勸告する旨が發表された。ジュネーヴでは、國際聯盟主催の軍縮準備委員會、第四回の會合が開かれてゐる。

この軍縮準備委員會に新たに參加したロシア代表は、委員會の劈頭に、向う四ヶ年間を期し、各國の軍備一切を全廢する新提議を發表した。この軍備全廢のうちには、陸、海、空軍全部の解散はもとより、兵器、要塞、軍艦、飛行機全部の破壞、軍事教育その他の形による、一切の戰爭準備の全廢を含んでゐる。

この提案は、反露內閣の下にある英國において、最も多く反響を呼び起こしたらしい。ロンドン電報によると、翌朝のロンドン諸新聞は、『一齊に嘲笑的批評』を加へ、ロシア代表の主張を『奇怪至極』といひ、『茶番』といひ、『馬鹿でない限り眞面目には取扱はぬ』といひ、『じやう談の平和論も休み休み云つてくれ』とこき卸ろした。米佛の新聞紙も、ほゞ同樣の批評をしたらしい。

ロシアの提議に對するかような批評は、一應もつともに思はれる。もしロシアの代表者が、ジュネーヴに集まつてゐる帝國主義列國のお歷々たちが、リトヴイノフの演說に感服し、然らばこれより、早速軍[illegible]に[illegible]て、この提議に[illegible]といふ、[illegible]にもとにこの新提議を[illegible]したものがあつたとしたならば、なるほどそれは、茶番にちがひない。

しかし軍縮準備委員會のお歷々たちが、ロシアの代表から、そのような意味でこの提議をされるに値ひするものだと、自ら買ひかぶつてゐたのなら、その方が遙かに秀逸な茶番である。

さきにクーリッヂ大統領の提唱によつて開かれた海軍々縮會議が、どのようにして決裂に終つたかは、尙ほ吾々の記憶に新らたである。帝國主義列國は、この會議に臨んだ時と、果してどのように異つ[illegible]意をもつて、聯盟主催の軍縮會議に臨み、また臨み得るであらうか。準備委員會の三日目に、英國代表は、新聞記者に對して、『英國の軍備は、もはやこの上縮小の餘地がない』ことを聲明した。英國の軍備は、『必要なぎりぎりの點まで縮小してをり、今日、他の諸國に對して實行を求めてゐる事柄は、英國はすでに自發的に完了してゐる』といふのである。そこで英國の關する限りにおいては、軍備縮小とは、列國がお互ひに軍備を縮小する相談をすること（よしそれが小田原評定に終らうとも）でさへもなく、それはたゞ英國が、他の列國をして軍備を縮小せしめるための會議にほかならぬものなのである。

けれども、これはたゞ英國のみの立場ではなく、いづれの國も、みな英國と同じ立場に立つてゐる。いづれの國も、英國と同じように、その軍備を、ぎりぎり決着の點まで切り詰めてゐる！　いづれの國も、

英國と同じように、最大限度の軍備縮小を、誰れからも注意を受けないうちに、自發的にやつてゐる！そしていづれの國も、英國と同じように、他國の軍備だけが、世界の平和のために（！）縮小の必要があり、縮小の餘地があり、縮小の可能のあるものだ！かういふ立場にある國々が集まつて、世界の平和のために、そして國民の負擔の輕減のために、まじめくさつた顔をして、軍備を縮小する相談をするのが、即ち軍備縮小準備委員會と名づけるものである。そこで英國ばかりでなく、いづれの國にとつても、軍備縮小の事業とは、すべての國の（但し自國だけを除いての！）軍備を縮小する方法を案出することなのである。

かように、たゞ自國を除いての、すべての國々の軍備を縮小することが、世界の平和の必要條件であるといふ根本的な見解においても、またかような目的を、軍備縮小會議によつて、幾分かでも遂げようとして、わざわざジユネーヴに出掛けてきたといふ點でも、この軍縮準備委員會に集まつた帝國主義列國のお歴々たちは、完全に一致してゐるのである。

この世界が、第二の大戰爭の脅威にたえずさらされてゐるのは、お互ひが危險千萬な、牙を持つてゐるからである。世界の平和を維持する最も手近かな實現可能な方法は、この牙を、少しばかり切り詰めることである。この

ころまで切り詰めてある。この「自分」といふ個所さへ空欄にしておくならば、すべての狼は一致する。そして平和を熱愛するこれらの狼は、何時でも、この誓文に署名捺印する用意がある。

見解と目的との完全な一致！これこそは何時でも、またあらゆる性質の商議と會議とが必然に成功する根本的な條件なのである！だから軍縮商議の成功は、ゆめ疑ひない！たゞ殘されてゐる問題は、かの空欄に、誰れか自國の國名を書き込む優越權を持つかといふことだけである。これは平和の使徒たちには、もとより大した問題でない。それは自國以外の何國であつてもならないといふことが、きまつてゐるからである。

資本主義の發展する過程は、この過程そのものによつて、國際戰爭に點火する可燃物を積みかさねてゆく。國際戰爭の危險が高まるにつれ、各國の軍備競爭は、狂熱を加へてくる。それと同時に、軍備の縮小、ないしは制限の努力——お互ひに他人の牙を切り詰めようとする努力——が、いろくの形で繰り返へされる。さすがに自分の牙だけはそのまゝ殘しておいて、他國の牙は根こそぎ引拔けとは言ひかねるので、お互ひに、少しばかり牙を短かくしようといふことになる。そこでどのような形に一同の牙を切り縮めることが、自分の牙だけを安全に保存する所以であるかを考究し、そしてこの方法を、互ひにイ

る。ところがこの相談の出發點に、いつでも戰爭の豫想である。戰爭を豫想し、而もその上に、戰爭の場合における戰勝を豫想しつゝ、戰爭を無くしようといふのが、帝國主義列國間の謂ゆる平和の努力である。戰爭を追ひつゝ平和を追ふ。これはどこまで追ふても、平和が捉かまる氣遣ひはない。これこそほんとの『茶番』であつて、よく〳〵の馬鹿者でないかぎりは、『眞面目に取扱はぬ』にちがひない。

世界の平和を保障する方法は、戰爭をしないといふことを出發點としてのみ、初めて解決に近よることができる。戰爭の豫想の上に立つかぎりは、如何にしてこの戰爭に勝つかといふ解答以外には、當然の解答はあり得ない。

戰爭をしないといふことを出發點として考へれば、軍備を全廢することは、少なくとも軍備を縮小すること以上の空想ではあり得ない。たゞ資本家的帝國主義の上に立つ列國が、戰爭をしたいといふ出發點に立ち得るかのごとく眞面目に考へるなら、これが初めて、ほんとの空想である。

これに反して、戰爭の豫想に出發するならば、軍備の縮小は、軍備の全廢に劣らぬ空想である。たゞ實際にあり得るものは、平和を保障するための軍備の縮小ではなくて、國際政治の上に優越な立場を占める強國が、自國に都合のよいように、列國の軍備の割合を變更することである。この意味において、またこの意味においてのみ、軍備縮小會議は或は成功し、或は失敗する。

『劇化』せられた無產政黨合同問題

最近、無產者運動の間に一つの波紋を描いたかの無產政黨合同の運動を、『合同劇』として報導した新聞があつた。政治戰線の統一は、勞農大衆にとつては、當面の最もシリアスな問題である。このシリアスな問題を演劇化した責任は、もし新聞記者のジャーナリズムの負ふべき責任でなかつたなら、他の何人かが負ふべき責任でなければならぬ。

けれども今度の合同運動の場面には、少なくとも無產階級政治戰線の統一に對して、第三者としての關心しか持ち得ない人々に取つては、舞臺の上の演劇として見物するのが尤もだと思はれるような、場面のあつたことは爭はれぬ。しかもこの舞臺が、電氣仕掛けの廻り舞臺のように回轉したのだから、彼らの演劇的興味をそゝつたにちがひない。

合同問題が、この種の傍觀者の劇的興味をそゝつた事情の一つに、それが對立政黨の間で、合同提議の投げつけ合ひをやつてゐるかのような、奇觀を呈したことであつた。昨日まで日本勞農黨との合同にさへも反對し、その指導精神の徹底的な排撃を高唱し、無產政黨合同の主張に對して極度に神經を尖らせてゐた勞働農民黨の指導者たちは、天勝の奇術以上のあざやかさをもつて、この時手のひらを返へすが

如くに發展した客觀的情勢の現段階なるものに對應して、無産四政黨の合同を提議した。

無産政黨間の對外政策では、いつも受身になつてゐた日本勞農黨でも、この時すでに、四黨の合同を目的とする統一協議會を提唱する具體的な成案を決定して居つた。そこで日勞黨は、勞農黨の提議に對する答へとして、自黨の提唱を投げ返へした。

卒然として勞農黨指導者の主張した合同が、いはゆる無條件の合同であつたか否かは、今日にいたるまで明らかでない。もちろん勞農黨指導者の主張する合同論は、在來のありふれた、出來合ひの無條件合同ではないといふことである。しかし『無條件』でないといふ、その『條件』とは、そも〳〵どのような條件なのか、これは明らかにせられて居らぬ。過去一年間、別個の組織として生長してきた四つの政黨が合同するためには、何らかの條件の討議が、もとより必要にちがひない。まづ第一に、新たに形成せられる黨は、いかなる綱領と政策とを採用するかといふことは、最も根本的な合同の條件として討議せられる筈である。したがつて、何らの條件の討議もない合同といふ意味で、無條件の合同なるものは、もとより無意味である。

であるから今日、無條件の合同といふ場合には、いはゆる指導精神の相異について、何らの條件をつけないといふことである。たとへば日勞黨との合同についての、勞農黨の大會の決議は、『……日本勞農黨の現在の指導精神にして變更されざる限り、絕對に反對す』と云つてゐる。即ち日勞黨の指導精神の變更が、合同の絕對的な條件となつてゐる。けれどもかゝる條件のもとには、『合同』はもとよりあり得ない。『無條件合同論は何故悪いか、我々の共同戰線との違ひは何處にあるか……我々が日勞黨大衆と共同戰線を張るのは、日勞黨をつぶして大衆を我々の方へとる爲めだ……』。勞働農民黨の最大の指導者、淺野晃氏はかう云つてゐる。これを言ひかへれば（言ひかへるまでもなく）無條件合同なるものは、日勞黨をつぶして大衆を我々の方へとるのでないから、宜しくないといふのである。これは如何にも大膽な揚言のようではあるが、兩黨の指導精神を絕對に兩立しがたいものとなし、そして指導精神の一致といふことを、合同の條件とする以上は、當然に、また必然に、かゝる結論に到達する。そこで指導精神を條件とするといふ意味では、有條件――即ち無條件ならざる――合同はあり得ないと云つてよい。

勞農黨指導者の合同とは、一方においては、無條件合同ならざる合同と說明され、他方においては、『指導精神にこだわらぬ』合同とも說明せられてゐる。かゝる合同が、具體的には、どのような合同を指すものであるかは、今日はなほ、少數指導者の胸底に秘められて居り、何人もこれを窺知することができぬ。

この提議に對して、日勞黨が投げ返へした合同提唱の對案は、現に昨日まで、勞農黨を支配して居つた分裂主義――日勞黨の指導精神を徹底的に排撃し、日勞黨をつぶしてその大衆を我々の方にとること

が、この二つの黨大衆の結合する唯一の方法だとする『指導精神』——を、勞農黨の黨員大衆が自ら清算せよ、といふのである。これはたしかに、勞農黨の一部の指導者が註文する通りの、無條件合同ならざる合同の提唱なのである。

この兩黨の合同合戰の間に介在して、最も實用向きな態度を選んだのが、社會民衆黨であつた。民衆黨の目指したところは、合同會議の提唱に對する回答によつて、日勞黨の内部における對立を刺戟することにあつた。社會民衆黨の聲明書の全努力は、この一點に集中せられてゐる。たゞこの努力が、いかに報ひられたかは、明らかでない。

合同運動が、演劇的興味を引いた第二の點は、勞働農民黨指導者の、あざやかな——或はあざやか過ぎるほどあざやかな——合同論への旋回そのものであつた。

勞働農民黨は、昨年の第一回大會において、日勞黨の現在の指導精神が變更せられないかぎり、兩黨の合同に絕對に反對する決議をした。また今年の五月には、たまたま問題となつた謂ゆる無條件合同論なるものに關聯して、右の決議を『斷じて忘れるものでない』と聲明した。爾來、日勞黨の指導精神の『徹底的排擊』は、一貫した方針であつた。『わが黨の指導精神は純一であり、それは日勞黨の指導精神に對する對立物である』。『日勞黨の指導理論に對しては、飽くまで之を排擊すると共に、その傘下の大衆を勞農黨に獲得しなければならぬ』。『無條件合同ではなくて、無條件排擊だ！』。これが今日まで、勞働農民黨を支配して來た謂ふ所の宗派的分裂主義者の、威勢のよい掛け聲であつた。いな、これは單なる威勢のよい掛け聲ではなくて、この『指導精神』をマルクス主義的眞理として裏づけるためには、過去一年間における用紙とインキと印刷機械の消耗との莫大な出費によつて、『戰鬪的統一戰術』ないしは『實踐的分裂主義』のすばらしいマルクス主義『的』理論が、展開されたのであつた。

現に最近にいたるまで、勞働農民黨——精密にいへば勞働農民黨の諸機關、なかんづく中央機關——は、この『宗派的分裂主義者』の『實踐的分裂主義』によつて支配せられてゐた。であるからこそ、現に十一月一日に、來るべき第二回大會の準備として開かれた東京府支部聯合の大會には、日勞黨に對する徹底的排擊の決議案が用意されてゐた。またこれに先だつ東京府の各支部大會では、同じ決議がなされてゐた。これは東京府のみではない。第二回大會を前にして全國に開かれる支部大會を指導するために、日勞黨排擊を慫慂した黨本部書記局の指令（ないしは雛形）が、全國の支部に送られてゐる。そこで少數の例外（何らかの事故で、支部大會の開催がおくれた地方——たとへば秋田の如き——を除く大多數の地方では、一齊に、同樣の決議が採用せられてゐるのである。

この刹那に、疾風迅雷の如くに黨員大衆の横面を張り飛ばしたのが、合同協議會の提唱であつた。それは有りふれた、單なる日の合同論ではない。それは昨日まで、勞農黨の指導精神の『計

であつた。日勞黨との合同のみではない。それは昨日まで、『實踐的分裂主義者』によつて、ファシストの黨と敎へこまれて居り、『協同戰線の持ち掛け』の圈外にさへも放り出されて顧みられなかつたところの、社會民衆黨と日本農民黨をも含めての、合同の提唱であつた。

私はもとより勞働農民黨が、從來の方針を一變し、宗派主義者の『實踐的分裂主義』の理論を、事實上において放棄して、大膽に合同論に進出したのを見て、無產者運動全體のために慶賀するものである、けれどもかゝる急激な、手のひらを返へすような方向轉換は、いやしくも大衆的な團體においては、絕對に不可能なことを忘れてはならぬ。戰術上の轉換運動が、極めて遲緩にしか行はれぬことは、大衆的な團體に避くべからざる弱點の一つであると同時に、それはまた大衆的な團體に、固有な特質なのである。ことにこの場合の轉換は、單に戰術上の一小變化と見做さるべきものではなくて、絕對に兩立すべからざる指導精神、ないしは指導理論の相違が『有る』といふことから、『無い』、若しくは『無くなつた』といふ見解にもとづく戰術への根本的な變化である。現に十月廿四日廿五日の勞農黨第四回中央委員會では、日勞黨との共同戰線に關する活動規準の指令を發することが、議題に上ぼつて居り、これにもとづいて、日勞黨の指導精神の徹底的排擊と、『日勞黨をつぶしてその大衆をとる』ための共同戰線の持ち掛けが、大多數の支部大會で決議せられてゐることは、さきにも指摘した通りである。

勞農黨內における『實踐的分裂主義』の指導者が、中央の任務をして、かゝる不自然な急角度の旋回を敢行してまでも、合同論に猪突せしめねばならなかつた事情は、よく分つてゐる。しかし事情と動機とが何であらうとも、私は合同論への進出そのことは、無產者運動全體のために慶賀しなければならぬ。

けれどもそれと同時に、この事實は、勞農黨の內部的な問題としては、改めて重大な――然り、致命的に重大な――問題を提起したものである。即ち、わが勞働農民黨を支配してゐるものは、何者であるか？といふ問題である。それは黨員大衆であるか？それとも黨員の鼻づらをつかまへて、自由に引き廻はそうとする、黨官僚であるか？といふ問題である。かゝる急激な、しかも正反對の方向への旋回に、黨大衆が何らのこだはりもなく追隨してゆけたと假定したならば、それはその黨派が、大衆自身によつて支配せられてゐる大衆的な黨ではなくて、黨官僚によつて支配され、大衆はたゞこれに追隨するように訓練せられてゐる黨だといふ、最大の汚辱を暴露することになるからである。

かゝる慣行は、總裁專制が行はれ、黨が親分たる總裁と、物質的利益によつて狩り集められた一種の選擧傭兵たる黨員との關係で出來上がつてゐるブルジョア政黨にあつては、必ずしも珍らしいことではない。いな、これがブルジョア政黨の特徵たる慣行なのである。大衆的黨としての無產者の政黨は、この點においても、ブルジョア政黨とは全

く異つた性質を實證しなければならぬ。

わが勞働農民黨の黨首、大山郁夫氏は、本誌の十一月號において、合同の問題について次の如く言はれてゐる。

『我々は(『無産諸政黨は、その分裂によつて無力にされたものだが、その再合同によつて有力にされるであらう』といふ、進歩的ブルジョア新聞の『無條件的合同』の勸告に對して)少なくともわが勞働農民黨の立場からは、斷然否! と答へる。わが黨は、曾てそれの上に起つた分裂のために、すべての不純分子を淘汰し得たことによつて、純粹の無産階級黨となり、そしてそのために一層强くなることを得た…それだのに、若し我々が…一旦我々と袂を別つて以來まだ少しもその形質を變へてゐない不純な諸分子と再び手を握るやうな擧に出るならば、それから豫想し得られる結果は、果してどういふものであらうか? 少くとも、わが勞働農民黨がそのために一層有力な政黨となるであらうといふやうな突拍子もないロジックには、我々は斷じて耳を借すことは出來ないのである』。

吾々は、この大山氏の徹底したロジックを本誌によつて知つてから、三週間の後、この同じ大山氏が、『まだ少しもその形質を變へてゐない不純な諸分子』との合同を思ひ立ち、日勞黨の代表者との折衝において、ひたすらに『指導精神にこだわらない』合同、ひたすらに『誠意』によるところの合同これこそ、まさしく『進歩的ブルジョア新聞』の勸告してゐる合同である——の促進のために、驚くべき忍耐をもつて、反對側の設けにつとめられた事實を看過されたのであつた。

かゝる急激な態度の變轉に、合同に對する大衆の要求に、忠實になつたことに基づくものだといふことであつた。これを大山氏の言葉に反譯すれば、大山氏の麾下にある大衆が、かの『突拍子もないロジック』を盛んに唱へだした、といふことになる。そして大山氏は、斷じてこれに耳を借さない代りに、たゞにその耳ばかりでなく、その全心をも借されたのであつた。

これは多くの人々の目に、合同運動を『劇化』した主要な事實であつた。それは最もシリアスな問題を、たゞに演劇化したばかりでなく、なほその上に、操つり人形芝居化したのである。

私は固より大山氏の、合同論への勇敢な進出を慶賀する。ことに大山氏の場合においては、三週間前に公けにされた意見を、その後の行動によつて徹底的に淸算せられた比類の少ない勇氣に對し、滿腔の敬意を表するものである。

けれども公けな政黨が、ことに大衆的な政黨が、過去の見解を淸算する方法は、おのづから一私人の場合と異るものがなければならぬ。少なくとも無産政黨の運動に多少の關心をもつ一般大衆、なかんづく勞働農民黨に所屬する勞働者と農民との黨員大衆は、この『劇化』られた問題を再び自分自身のシリアスな問題たらしめるに足るの『ロジック』を聞くことを要求するにちがひない。

大衆的黨派としての無産政黨は、わが國においては曾て何物

ても歩ゆまれたことのない、全く新らしい道を歩み初めてゐる。吾々はあまりに久しい間、ブルジョア政黨の、醜惡な慣行を見せつけられてきた。無産政黨は、その綱領と政策とにおいて、ブルジョア政黨との相異を示すばかりでなく、黨官僚と傭兵との結合に過ぎないこれらのブルジョア政黨とは根本的に異つた行動の法則によつて、その大衆的黨派たる特質を發揮しなければならぬ。

無産政黨の合同は必要である。けれどもこの合同が、黨員大衆の意志を反映して行はれることは、或る意味では、合同そのことよりも、さらに一そう必要である。わが勞働農民黨は、今日まで、無産政黨の合同は、決して黨指導者間の取引きであつてはならぬと主張してきたのである。私はこの主張を、全心的に支持するものである。

それ故に、私は、無産政黨の合同の實現が、或る期間のあいだおくれることは、なほ忍ぶべきことであつても、黨員大衆が、黨官僚によつて愚弄的に引き廻はされることは、決して忍ぶべからざることだと思ふ。黨大衆は、ブルジョアジーと戰ふと共に、その陣營内にある、ブルジョア・イデオロギーに基づくブルジョア的慣行と鬪ふことによつて、眞實の大衆的政黨と、その行動法則とを確立しなければならぬ。

世界社會運動の現勢

何故にトロツキー、ジノヴィエフは黨から除籍されたか

荒川實藏

勞農ロシアに於いて聯邦共産黨中央委員並に同中央統制委員會がトロツキー、ジノヴィエフらを共産黨から除籍したとの報道が最近傳はるや、世界のブルジョア新聞（日本も同じだ）は例によつて勞農ロシアの內訌、指導者の個人的勢力爭ひといふ風に書き立てゝゐる。ロシア共産黨では、黨內において意見の相違がある每に火の出るやうな論爭が幾度も行はれたが、徹底的に論爭した後に、一方が他方に服し、多数派の決議に從ひ、その反對派も直ちに黨の嚴格な統制の下に返つたのである。これはボルシエヴイキの、、な傳統なのだ。この痛烈なる自己批判によつてボルシエヴイキの鐵の如き戰列が堅く築き上げられたのである。

現にトロツキー並にジノヴイエフ等の反對派は一九二六年十月十六日の日附で、黨中央委員會へ聲明書を發し、彼等は、彼等及び彼等の同志が第十四回黨大會以後、多くの場合、黨の規律を犯すが如き途に進んだこと、また彼等が黨によつて規定されたところの、黨の內部に於ける理論鬪爭の限界を超えて分派的な途をとつたことを承認し、且つ、この途を以つて全く誤れるものとなし、すべての分派的グループの卽時解體を要求し、黨中央委員會の決議に服從せんことを誓約した。かゝる方法は黨の統一を危ふからしめるとの見地に立つて。

またトロツキーは黨中央委員會總會に於いて、反對派に關するテーゼが大會によつて採用されたといふことは不可避的に反對派の幹部を黨から除名せねばならぬことになるであらうと述べたに對して、スターリンは次のやうに答へてゐる。同志トロツキーのこの主張は全く根據なきものであり、全然誤つてゐる。反對派に關するテーゼの採用は、たゞ一つの目的、反對派の原則上の誤謬を完全に征服さ

れるまで克服するといふ目的を追求し得るのみであると。

我々は、ロシア共產黨內の論爭がいかに白熱化し、いかに深刻にならうとも、それは眞面目な戰鬪的プロレタリアートの自己批判であり、自己の過誤について忌憚なき批判を行ひ、その誤謬を克服することによつて、黨の眞の統一が達成されるものであることを信じてゐる。トロツキーもジノヴイエフも幹部派といかに痛烈に戰はうとも、多數派の決議には服從し、よしそれを犯すことがあつても、その過誤を陳謝聲明し、黨そのものゝ統一を破らなかつた。

而るに、極く最近に至つて、トロツキー、ジノヴイエフ兩名の共產黨除籍の報道が傳へられた。ブルジョア新聞は再び「勞農ロシアの內訌」「分裂の危機」等々のデマゴーグを書き立てゝゐる。我々は、勿論、彼等のかゝるなる誤報でなくして、確かなる事實だ。だが、怪しむに足らない。それには、反對派の指導者らが除名さるゝに至つた重大なる本質的――許すべからざる――過誤、乃至、策動があつたに相違ない。

私は今反對派の最近に於ける進出が除籍に至つたまでの過程を述べることは無意味なことでなからうと思ふ。

だが、それに先だち、反對派（一九二三年末―一九二四年）新反對派（一九二五年十一月―一九二六年十一月）の擡頭の根據を知る必要がある。一九二一年に採用された新經濟政策を理解し得なかつたトロツキー、プレオブラシエンスキー等々は一九二三年十一月に於いて黨內デモクラシーの論爭を捲き起した。然らば、それはいかなる條件の下に於いて捲き起されたか？當時のロシアは內亂と飢饉を征服して、孜々として社會主義建設の大生產物の價格との均衡が全く失はれ、（トロツキーの表現を借りて云へば、所謂「鋏」である。）ソヴエツト紙幣の暴落は勞働者の得る實質的勞働賃銀を低下せしめ、農民の購買力を減少せしめた。かくて、工業生產物はそのはけ口を見出し得なくなり、遂に二、三の工場に勞働者のストライキさへ惹起された。茲に於いてトロツキーは、黨が大衆から隔離せんとしてゐるのは、黨の組織が惡いからであるが故に、黨の組織を民主化し、黨內に分派の存在を許すべしと主張した。之はレーニン主義的組織の方法に戾り、小ブルジョア的見解に過ぎない。

一方、當時の國際情勢を見るに、一九二三年秋にはドイツの革命が失敗したのであつたが、トロツキー、ラデツクらはその失敗を正確に批判し得ず且つ、其の後資本主義が一時的に安定したのを見て、悲觀的見解に陷入つ

策の問題とは離すことの出來ない問題
しつかりと繋がつてゐるものである。
に、國際的に重大なる意義を有してゐる
治的情勢は、その國內政策の上にも反映し
てゐる。これはひとりトロツキーの反對派の場合のみではなく、極く最近に於ける戰爭の危機に直面しての、トロツキー、ジノヴィエフ等の反對派の新進出に就いても同じである

前述した根據によつて擡頭した反對派は、理論的、實踐的に克服され、世界のブルジョアジーの期待してゐた共產黨の內訌沒落は單なる糠喜びに歸し、其後ソヴエット聯邦は政治的經濟的に異常なる發展を遂げることが出來た。だが、それと共に、都市に於いては、ネップマン、農村に於いては富農（クラーク）の勢力が增して行くかの如く見えた。一方、ソヴエット聯邦外の資本主義世界では、そのブルジョアジーの必死的努力によつて、世界資本主義は一時的に安定したかの如く見えた。茲に於いて、曾てはスターリン、ブハーリンと共にトロツキーの反對派に對して極めて勇敢に闘つ

てきたジノヴィエフ、カメネ
ズムに移行し、それと合流し、ア
と爭ふに至つた。このジノヴィエフ等の反對派（トロツキー主義的反對派に對して新反對派と呼ばれてゐる）は一九二五年十二月の第十四回黨大會に於いて、ジノヴィエフを先頭に立てゝ、痛烈なる論爭を行つた。そこでは最も重要なる原則的問題が討議された。例へば、一國內に於ける社會主義建設の問題、農民政策に關する問題、黨の內部的組織問題等である。だが、かゝる問題は十四回大會に於いて始めて提出された問題でなくして、これらの問題は今までにも討議され原則的には既に黨によつて解決されたかの如くである。しかし、これらの諸問題が更により鋭い形態をとつて現はれたので、猛烈な鬪爭となつたのである。

次に、反對派と新反對派との關係、そのブロック結成の發展段階を究明しやう。新反對派の進出した第十四回黨大會に於いては、トロツキー主義的反對派とのブロック結成の段

に鬪
レ…テー
…の四月の中央委
、新反對派とトロツキ
完全なる一致は當時に於いてな
…しなかつたとはいへ、ブロックの本質
すでに完成してゐたのである。更に七月の
央委員會總會に於いて、ブロックは形式的に
結合され、九月の終と十月の初めにかけて反
對派が黨に反對して公然と出現する段階まで
にいみじくも到達した。

そして今や彼等は班から班へと宣傳に浮身を窶すに至つた。だが、その活動の結果は、反對派にとつて慘めなものであつた。彼等は完全に失敗した。

かくして、遂に、上述した通りの、かの有名な十月十六日の反對派の指導者の「宣言」が發表された。

この「宣言」に於いて、反對派は、彼等
分派やグループをつく…

れるまで克服するといふ目的を追求し得るの。[illegible]

と。[illegible]

これに[illegible]等に、

[illegible]にせよ、[illegible]グループにせよ、或は他の如何なるグループにせよ、コミンテルンの見解に反してコミンテルンの各個の支部の中の或るグループの分派主義を直接若しくは間接に支持することを絶對に許されない」

ことを承認してゐる。同志ジノヴイエフは

なる誤報でなくして、確かなる事實だ。だ[illegible]

[illegible]た。

[illegible]反對派[illegible]に、[illegible]コミンテルン[illegible]コミンテルンに對し、黨に對して未聞の[illegible]た。そして、一九二六年十月十六日の宣言は、彼等自身によつて蹂躙されて了つた。同時に反對派の無數の文書が、その信奉者によつて複製され、黨員の間ばかりでなく、黨に屈せ[illegible]

生産物の價格との均衡が全く失はれ、(トロ[illegible]

[illegible]反對派はか[illegible]して、一九二七年八月、再び[illegible]決議に服從することを誓約した。けれども、この誓約も再び一反古一になり、彼等は更に從來通りの策動を續けた。彼等は再び出版其他の方法で活動しただけではなく、前述したドイツの極左派共産主義者[illegible]を結び、反對派首領の文書[illegible]成されない以前にドイツの

マスロフ、ルート・フイツシャー一派の出版物に現はれた。

それだけに止まらない。十一月七日の革命十週年祭の當日彼等は、無産黨員大衆に向つて十週年祭を前にして爲された全露中央執行委員會の宣言、黨の政策を攻撃さへするに至つた。

これは果して何を意味するか？　これは既に彼等がプロレタリア××に反對し、反ソヴエット陣營に移行したと云ふべきでなからうか？

されはこそ、曾てはレーニンと並稱され、世界に稀なる雄辯家として、また、絕世の精力家として、また赤軍の組織者として、世界のブルジョアジーに怖れられ、萬國のプロレタリアから囑望を寄せられゐた、かの颯爽たる革命家然たる風丰の持主である、トロツキー及び十月革命の翌年即ち、一九一八年に、革命の都モスコーに於いて第三インタナショナルが創立さるるや、執行委員長として、第五回大會に至るまで國際革命運動を指導し全世界の羨望をして、赤化の黨の手を纒る要本人として、彼の名を聞くだに恐れを抱かしめた、ジノヴイエフさへも假借することなく黨より除名したのだ。これによつてボルシエヴイズムの基礎を些少と雖も搖せなかつた。

我々は反對派の行方は何處であるかは今述べる暇がない。私が曾てモスコーに在りし日、トロツキー排擊の聲、喧々囂々たる最中に蔣介石によつて殺された陳獨秀の子息と、トロツキーズムについて話をしてゐた。その時彼は『若しもドイツの革命が失敗に終つて居なかつたら、彼は中欧の天地に得意然として活躍して居つたであらう。從つて、此度の論爭の如きは起らなかつたのに』と云つてゐたことを想起する。勿論、さうだとすれば、伯林で第三インタナショナル第六回大會が開催され、ジノヴイエフは執行委員長として、鮮やかな議長振を發揮してゐるかも知れない。

だが、、、運動は坦々たる大道を一直線に進むものではない。反動時代に處して動せず、幾年、幾十年の、、、、、、、、、、、、、、、とマルクスレーニン主義的理論の辯證法的發展によつて進み得るものこそ眞實のボルシエヴイキなのである。プロレタリアートは以上の教訓をより強く、より新しく、最近に於ける反對派の進出から學ぶことが出來ると思ふ。

英國勞働運動の「廻れ右」

田中九一

大戰後日沒の如き勢で進みつゝある英國資本主義の衰退を救ふ最後の手段として、資本家階級は勞働者階級に對して猛烈な攻勢を取り始めた。賃銀値下、勞働時間延長、首切

己の行動を『レーニン主義的であるとして拒否すること、及び、彼等が理論鬪爭の限界を超えて分派的な途をとつたことを承認し、更に、同じ宣言に於いて、トロツキー、ジノヴイエフ、カメネフ等は次の如く云つてゐる。

『コンミンテルン若しくはわが黨に加へられたるすべての批判は、憎惡に變はり、國際プロレタリアートの鬪爭組織としてのコミンテルンの地位、コミンテルンの前哨としてのソヴエツト聯邦共產黨、若しくはプロレタリアメ×の最初の國としてソヴエツト聯邦を弱める』

これによつて彼等は、

『ドイツのマスロフ、ルート・フイツシヤのグループにせよ、イタリヤのボルデイガのグループにせよ、或は他の如何なるグループにせよ、コミンテルンの見解に反してコミンテルンの各個の支部の中の或るグループの分派主義を直接若しくは間接に支持することを絶對に許されない』

ことを承認してゐる。同志ジノヴイエフはまた書いてゐる。

『我々は、ルート・フイシヤーやマスロフの如く黨及びコミンテルンから除名された人の活動を少しでも支持することは斷じて許されない』と。

だが、反對派は、この「宣言」の最初の第一句に於いて自分らは前に抱いてゐた立場を固守する。而かもたゞ固守するばかりでなく、「完全に」固守してゐる。我々は以上述べたこと總てを想起せずして、反對派の新進出、トロツキー、ジノヴイエフの黨除名を理解することが出來ない。

然るにその後、反對派の幹部は、國際情勢の變動を好機に今迄にない尖銳化せる鬪爭を再び開始した。コミンテルン執行委員會第八回總會に於いて、彼等はコミンテルンに對し、黨に對して未聞の罵詈を浴せかけた。そして、一九二六年十月十六日の宣言は、彼等自身によつて蹂躪されて了つた。同時に反對派の無數の文書が、その信奉者によつて複製され、黨員の間ばかりでなく、黨に屬せものゝあひだにも撒布された。而して、その際、それは多く彼等が黨に對して最も危險な方法で利用することの出來たやうな人達の手に這入つた。

だが、かゝる死物狂の進出も、その階級的立場を失ひつゝある以上は、勿論成功すべくもなかつた。けれども、時正に帝國主義列國から刄向けられた第二の戰爭の暗雲ソヴエツト國境近くに低徊し、ソヴエツト聯邦の情勢は益重大となりつゝあつた。黨の統一はその當時に於いて從來よりも一層切望されてゐた。從つて、彼等の進出に對する徹底的排擊の叫びは愈ゝ痛烈となつてきた。反對派はかゝる狀勢に直面して、一九二七年八月、再び連名を以つて黨中央委員會の決議に服從することを誓約した。けれども、この誓約も再び「反古」になり、彼等は更に從來通りの策動を續けた。彼等は再び出版其他の方法で活動したゞけではなく、前述したドイツの極左翼共產主義者 ;『を結び、反對派首領の文書版されない以前にドイツの

マスロフ、ハーレン、ヴイッシャー一派の出版物に現はれた。

それだけに止まらない。十一月七日の革命十週年祭の當日彼等は、無產黨員大衆に向つて十週年祭を前にして爲された全露中央執行委員會の宣言、黨の政策を攻擊さへするに至つた。

これは果して何を意味するか？ これは旣に彼等がプロレタリア××に反對し、反ソヴエツト陣營に移行したと云ふべきでなからうか？

さればこそ、曾てはレーニンと並稱され、世界に稀なる雄辯家として、また、絕世の精力家として、また赤軍の組織者として、世界のブルジョアジーに怖れられ、萬國のプロレタリアから囑望を寄せられゐた、かの颯爽たる革命家然たる風丰の持主である、トロツキー及び十月革命の翌年卽ち、一九一八年に、革命の都モスコーに於いて第三インタナショナルが創立さるるや、執行委員長として、第五回大會に至るまで國際革命運動を指導し全世界の[illegible]をして、[illegible]の手を[illegible]本人として、彼の名を聞くだに恐れを抱かしめた、ジノヴイエフさへも假借することなく黨より除名したのだ。これによつてボルシエヴイズムの基礎を些少と雖も搖せなかつた。

我々は反對派の行方は何處であるかは今述べる暇がない。私が曾てモスコーに在りし日、トロツキー排擊の聲、喧々囂々たる最中に蔣介石によつて殺された陳獨秀の子息と、トロツキーズムについて話をしてゐた。その時彼は『若しもドイツの革命が失敗に終つて居なかつたら、彼は中歐の天地に得意然として活躍して居つたであらう。從つて、此度の論爭の如きは起らなかつたのに』と云つてゐた[illegible]的[illegible]で第三インタナショナル第六回大會が開催され、ジノヴイエフは執行委員長として、鮮やかな議長振を發揮してゐるかも知れない。

だが、、運動は坦々たる大道を一直線に進むものではない。反動時代に處しても動せず、幾年、幾十年の、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、とマルクスレーニン主義的理論の辯證法的發展によつて進み得るものこそ眞實のボルシエヴイキなのである。プロレタリアートは以上の教訓をより強く、より新しく、最近に於ける反對派の進出から學ぶことが出來ると思ふ。

英國勞働運動の「廻れ右」

田中九一

大戰後日沒の如き勢で進みつゝある英國資本主義の衰退を救ふ最後の手段として、資本家階級は勞働者階級に對して猛烈な攻擊を始めた。賃銀低下、勞働時間延長、百萬以上の

失業者。之に對する勞働者の態度は只二つしかなかつた。資本家階級の倒れるまでこの攻擊に反抗し切るか、或はこの攻擊を甘受するかの二つだ。而して始めの中は、勞働者はこの第一の手段をとるかに見えた。一八二四年の勞働黨內閣八ヶ月の芳しからぬ業績は、一般勞働者をして議會を通じて彼等の地位を向上せんとする、、、、を感ぜしめ、彼等自身直接資本家と抗爭する方法に主力を向けしむるに至つた。一九二五年四月の英露委員會の組織、同年九月の勞働組合大會に於ける社會主義的綱領の採用（本誌第八卷第六號拙稿參照）等は、彼等がこの鬪爭のための陣容を整へんとしたものである。然しこの陣容は、政府といふ組織立つた權力を中心とする資本家階級の陣容に比すれば、余りに不整頓であつた。第一に勞働黨が勞働組合大會とは反對に右を向いてゐた。第二に、組合大會それ自

果は一九二六年五月の總罷業の失敗となり、更に同年末には孤軍奮鬪せる炭坑夫も八ヶ月の苦鬪に軍費を涸らして、屈服してしまつた事は周知の事實である。

炭坑夫組合は全組合員の二割強を占むる英國最大の組合であるのみならず、又最も鬪爭的な組合である。この强大なる組合に對して勝ち誇れる資本家階級は、その攻擊の勢を益益強め、一九二七年五月にはファシズム的な勞働組合法案を議會に提出し、難なく之を通過せしめた。この法律の骨子は次の三つである。（1）政治的ストライキの嚴禁、（政府は都合の悪いストライキは皆この「政治的」の刻印の下に禁止し得るのだ！）（2）組合の政治基金積立の妨害、（3）官公吏が政黨に直接、間接に加入するの禁止。（組合大會に加入することも、間接の政黨加入であるから許されぬ。）この對內的攻勢と共に、更に同じ

者とにらむロシア壓迫の口實をつくつた。さうして五月二十六日には遂にロシアとの國交斷絕を宣言した。

この攻擊に對して勞働組合總評議會は何をしたか。曰く、組合壓迫法は次の勞働黨內閣が出來た時に立憲的に廢止しやう、政府の英露斷交に對しては、組合總評議會も亦之と步調を合せて「英露委員會」の決裂をなす、——之が總評議會の採つた態度である。組合壓迫法に對する態度は後に譲り、英露委員會決裂に就て畧述する。

英露委員會は曾て（本誌第八卷第六號に）述べたやうに、國際的勞働運動の統一と英露兩國の組合運動の提携とを實現する目的を以て、一九二五年四月につくられたる兩國勞働組合の協議機關である。兩國の組合は之に依つて次第に接近しつゝあつたが、一九二六年五月の總罷業以來急に不和になつた。その原

對して、ロシアの[illegible]した事にある。イギリス側はロシア側のかゝる非難を、イギリスの組合運動に對する内政干渉であるとし、ロシア側は、批評は如何なる場合にも自由であるべき筈だ、と云つて譲らなかつた。其後昨年四月英露委員會は總罷業以後三回目の會合をなした結果、互に相手方の内政に干渉しないといふ申合せをなし、その活動をつゞける事となつた。然るにその翌月に至つて再び問題が起つた。それはロシアのトムスキーが、イギリス總評議會の勞働組合壓迫法案に對する生温い態度を手痛く攻撃した事から起つた。イギリス側はこの攻撃は明かに内政干渉であると言ふてトムスキーに抗議を申込んだのに對して、トムスキーは此時も亦批評の自由を主張した。そこでイギリス側は妥協の余地なきものとなし、其後度々ロシア側より英露委員會開催の申込を受けたが之に應ぜず、遂に昨年九月のエヂンバラ大會で、英露委員會を決裂する旨を決議したのである

次に勞働組合法に對するエヂンバラ大會の[illegible]政治的ストライキを止め、官公吏組合をして大會より脱退せしむる、然し勞働黨内閣が成立したらこの法律を廢止しやう、といふのであつた。

この内外政策共に『穩健』振りを見せたエヂンバラ大會は、更に『産業的平和』に關する決議に依つて、その穩健政策の錦上に花をそへた。産業的平和とは首相ボールドウィンが屢々勞働組合に申込める政策にして、要するに勞働爭議を止めて、勞資共に英國産業の發達に協力しやう、といふのであつて、資本家の攻撃の一形式である。之に對してエヂンバラ大會は、勞働者は他の如何なる階級よりも産業的平和を希望するが、只ボールドウィン政府の仲介に依つて之に應ずる事は、政府が壓迫的勞働立法を撤回せざる限り、不可能である、と決議したが、産業的平和そのものに對しては強い贊意を有する事は、大會の議長ヒックスの言葉にもよく現れてゐる。彼はこの大會に於て勞資兩者の代表者より成る協議機關に依つて、兩者の意志を疏通し、産業上の平和を招來し、以て『産業の能率を高め、且つ勞働者の生活標準を向上する』事の必要を力說した。勞働者の生活向上の前提條件として、現在のまゝの産業の能率を高める、之がエヂンバラ大會の根本的態度である。この根本的態度が何を意味するかは、この大會の直後ロンドンの株式相場を急に騰貴せしめた、イギリスの株屋が最もよく知つてゐる(『エコノミスト』九月十日號參照)

斯くして勞働組合大會は、勞働黨――昨年十月ブラックプール大會で、『次の勞働黨内閣では炭坑國有を實施しない』といふ事を決議し、以て自由黨の支持を誘つた勞働黨――と同一戰線に立つたのである。そうして二三年來の勞働黨の右傾と組合大會の左傾との間に起つた間隔を、組合大會の廻れ右に依つて、無くしたのである。

最後に是非一言しなければならないのは、左翼少數派運動である。之は組合大會に加入せる諸種の組合中の左翼分子が全國的に團結

したものであつて、組合大會内の少數反對派である。この少數派はモスコウの赤色勞働組合同盟に加盟し、大體に於て英國共産黨と歩調を同じくしてゐる。創立以來未だ四年にしかならぬが、その成員は一九二五年の七十五萬、一九二六年の九十五萬六千と年々増加し、特に總同盟罷業前後には急速に増大した。總評議會はこの勢に脅威を感じ、之を芽生の中に壓迫せんとして、昨年春全國の地方評議會に對して、左翼少數派に加はる事を禁止し、更に前述のエヂンバラ大會はこの處置を確認した。然し左翼少數派はこの決議にも拘らず、今尚八十萬の會員を有し——最近の勞働者の貧窮のため總罷業當時より減少す——組合大會の幹部の右傾に對抗して、階級鬪爭の立場を固守してゐるのである。

アメリカ無産階級運動の展望

薄　茂　人

一

一九二七年八月十九日の「プラウダ」紙（ロシア共産黨機關紙）の「五月小委員會以後に於けるコミンテルン執行委員會の活動の概況」によると、日本の×××運動について、

と、明確なる戰略が規定されてある。

此のプラウダ紙の文獻は、現下のわが無産階級運動に對する、天來の曉鐘となつたが、アメリカに對しても、輝しき明鏡であつた。

此の文獻は、アメリカと日本との興味ある

三には大衆的政黨の組織を絶對的必要と共通せる客觀的情勢である。

しかし、アメリカと日本の資本主義の發達のカーブは、成る程、上向線を描いてはゐるが、だが、文獻は、その相異點を見逃してはをらぬ。

日本の資本主義は、勞働者層から、勞働貴族をつくり出すことの不可能を斷言するところの、此の文獻は、アメリカに對しては斯く言ふ。

「決定（コミンテルン執行委員會幹部の）は、なほ比較的高度な生活水準の勞働者階級の著しき層を收容し得ると結論した。勿論アメリカには今や勞働者階級の『ブルジヨア化』に關するエンゲルスの言葉が適應される。どこにもアメリカの如く貴族的な勞働者の多數なところは無い。どこにもアメリカの如く墮落した勞働組合官僚はな

をなさねばならぬ……」

コミンテルンの如上の決定は、毫も事實を僞らない。

フォード的の勞資協調機關は、いよ〳〵繁榮するのみでなく、新案特許の競爭でもするかのやうに、新らしい定型が發明されつゝある。

曰くコンパニー・ユニオン、曰くバルチモア＝オハイオ・プラン、曰く勞働者株主制、勞働者銀行等々。

資本家と勞働者の同數の委員、或は資本家代表の上院、勞働者代表の下院によつて、所謂福利增進で、勞働者を誤魔化さうとするコンパニー・ユニオンは八百餘、百二十萬の勞働者を重工業の地域に於て眠り込ませ、勞働組合の監督のもとに、資本家と協定して、生産能率の增進を資本家のために昂めようとするバルチモア＝オハイオ・プラン、いはゆるB・Oプランは、バルチモア鐵道會社の範例に傚似て、狡猾さに於ては、バルチモア鐵道會社に負けないところの、各地の資本家によつて[illegible]らねばならぬ。

或は又、[illegible]のアメリカのブルジョア雜誌によれば、勞働組合によつて三十七の銀行が經營され、二億ドルの預金が運用される、勞働者株主制による勞働者の所有株券の總額面は、四億五千四百萬ドルに及ぶと、勞資協調の繁榮振りを書き立てゝゐる。

從つて、勞働者の、勞働組合への組織率は低く、組合も亦、勞働階級の多くは上層を組織したもので、從つて又、協調的なるを免れぬが、かゝるものの代表としては、いはゆる勞働聯合（エー・エフ・エル）を擧げねばならぬ。

二

エー・エフ・エルは、全米の組織勞働者總體に對しては、八割の巨大なる組合員を擁するも、全米の勞働者總數二千六百萬人に對しては一割一分、即ち九牛の一毛に過ぎない。

いふまでもなく、エー・エフ・エルは、地球上のいづれの組合よりも保守的、反動的である。

一七[illegible]

[illegible]主義に對しては階級鬪爭でなく、武裝的な鬪ひを遂行する」ことを、公然として聲明し、一九二七年の春には、組育の裁縫師組合の七割五分の左翼的組合員五萬人をバッサリと切りすて、鬪爭的な坑夫組合の大會では、暴力團と投票買收の手段に訴へて、幹部反對派を抑壓したほどである。

エー・エフ・エルは又、灰色のアムステルダム・インタナショナルをさへ怖れて、脫退したほどだが、――金屬勞働組合だけは、協調的國際金屬勞働聯盟に漸やく加盟した――カナダ、メキシコ、キューバ、ペルー、パナマ、ニカラガ等の勞働組合と、汎アメリカ勞働聯盟を組織してゐる。

聯盟の主命とするところは、「勞働のモンロー主義」に基く、外國移民と赤化思想の輸入防壓と、資本主義アメリカ合衆國の汎アメリカ帝國主義的政策への協力に基く、屬領、半屬領地の勞働者の革命化の鎭壓に在る。

一九二七年七月ワシントンに於ける第五回

大會は、此の主命を辱めざるべく「革命的勞働運動の排撃」に徹頭徹尾終始したが、でも共產黨から叩きつけた爆撃的ステートメントは、大會の民族代表者によつて喝采されたのであつた。

「プラウダ」の文献は、×××××の勞働運動に於ける、働き掛け、第一の目標をエー・エフ・エルへの未組織大衆の組織と、内部に於ける。フラクション運動にそゝいでゐる。

「×××は第一に劣惡な賃銀との闘爭をしなければならぬ。×××××はエー・エフ・エルの中に、理論的實際的にも資本主義的な職業同盟と名づけるやうなものと、闘爭してゐる活動的な勞働者を導かねばならぬ。×は之れと同時に未組織勞働者の組織とエー・エフ・エルの戰列に彼等を獲得する闘爭の爲めに働かねばならぬ。」（職業同盟内に廣大なる左翼の結成――之れが×××の中心問題である。之れと共に『あらゆる資本主義政黨に反對するプロレタリアの政黨――大衆黨の結成の爲めに』と、その煽動を强めねばならぬ」

エー・エフ・エルの量的衰退――一九二六年は一九二〇年に比べて組合員三割一分の減退である――は、勞働貴族と官僚による協調的指導方針の破綻であり、彼等の反動的傾向の强化は、×××による、かゝるフラクション運動の成果のあらはれでなければならぬ。

三

またエー・エフ・エルは、傳統的にしかも頑强に、政黨運動を拒否する。――ただ一九二四年の大統領選擧戰に、共和黨の左翼、進步的政黨の主唱者ラ・フオレツトに投票集中の決議をしたことは、一個の傳統の破棄ではあつた――それ故に、無產階級政治運動の微々振はざるは、一面已むを得なかつたとは言ひ得る。

進步的政治勢力としては、ノースダコタ、ミネソタその他に、地方的勞働、農民政黨、自作、小作農のノンパルチザン・リーグがあり、一九二〇年の總選擧にデヴイスを擁立して九十萬票を獲得した頃を絕頂とし、一九二五年シカゴの第三黨組織大會に於て、黨構要素の單なる組織問題で、參加を拒否し、デヴイス歿後、その存在をすら疑けれる秋風落莫たる社會黨がある、――此の黨の殘存的勢力は紐育、ペンシルヴアニア、イリノイ、オハイオ、コロラドに於て黨員一萬五千人と稱する――しかし無產階級の爲めに眞に闘爭し、勞働者、農民を政治戰線に動員し得るところのもの――サツコ、ヴアンセツチ事件に對する汎アメリカ的デモンストレーションの成功はなほ新しい――それは勞働者（共產）黨であり、ワアーカース（コムミニスト）パーテイこそは、唯一の戰鬪的無產政黨である。

勞働者（共產）黨は、合同共產黨（黨員五千七百人）とアメリカ共產黨（黨員六千百人）が一九二〇年合同したる單一のアメリカ共產黨（一九二三年解散）によつて、合法的政黨として一九二一年勞働者黨の名で、產聲をあげたものだが、その後一九二五年のシカゴ大會で「共產」（コムミニスト）の文字を挿入したものである。

[illegible]千人に增加し、黨員にあらゆる地方、又農場に、果敢なる「前衛」を形成しつゝあるも、紐育、シカゴ、デトロイトには深く根をおろしてゐる。

黨の禍根、即ち、大衆的勞農黨の組織を主張する少數派ルーセンバーク派と、勞働者（共産黨）の擴大を主張するセクト的多數派フオスター派との對立、コミンテルンによるセクト的多數派の淸算と、黨の細胞組織の再編制を完了するに到つたが、機關誌「コムミニスト」には、最近フオスターが名をひそめ、書記長ルーセンバークは一九二七年、多幸多難なるうちに逝いた。

なほ、ネグロの民族的運動の發展を逸することは出來ない。

アメリカのネグロ民族は、一千萬餘人、そのうち四分の三は農業地帶にあるが、農業恐慌後、彼等は不熟練勞働者として工業都市へ逆捲く勢で流入しつゝある。

ユニヴアーサル・ネグロ・インプルーヴメント・アソシエーション[illegible]解放團ではあるが、彼等の四十萬人を組織し、又十萬人は勞働組合のもとに結成されてある。

しかし、彼等の唯一の味方として、勞働者（共産）黨は、アメリカン・ネグロ・レーバー・コングレスのもとに、ネグロ・プロレタリア層を組織してゐる。

四

アメリカの强大なる帝國主義的資本主義は、いかにも、上向線を升騰しつゝある。それは必然に、勞働者の貴族層を養ひ、收容し得る力がある。

アメリカの無産階級運動はいかにも巨大なる協調的勢力のなかに少數の「前衛」の運動が、ぢり〳〵と展開されてゐるに過ぎない。

しかし其れにも拘らず、到底收容し切れないであらふところの失業問題が橫はる。外國移民、ネグロ民族の劣惡なる勞働條件は下降する一方である。勞働貴族と、――二萬五千ドルの年俸を貰ふ組合幹部さへある――熟練工[illegible]は、ます〳〵擴大されつゝある。

それは、ウオール街が、時ならぬ株式恐慌に襲はれることによつても、明らかなやうに、沒落期の世界資本主義による、避け得られない影響のあらはれである。アメリカ勞働者（共産）黨は、かうした資本主義繁榮の側面の投影、そこに必然に擡頭し來る被壓迫人民層の、貧窮、反抗、不平を、敏速に、大衆に誘導し、大衆的政治戰線への結成へ動員することを第一の指標とする「プラウダ」の文献は、次ぎにしるすが如く、明らかにかゝる方向を指示してゐる。

「コミンテルン執行委員會の幹部は、支那の如き活動的な政治問題と同列に、大衆的政黨（コンソリダーツエイ・パルテイ）との問題の關係、即ち×××は、再び根本的な尺度に於て、大衆の爲めに其の鬪爭を規定すべき問題であることを審議した。

アメリカの問題は、幹部によつて政黨の根本的問題を規定する見地から、即ち大衆

政黨の問題の見地から審議されたのである。

幹部の決定は、アメリカ合衆國が今日、最も强力なる帝國主義的國家、そこに現れる資本主義が、更らに上向線を描いてゐるといふ、その事實が決定された。

之等の事實は、第一の結論は×××の前に緩漫なる時期、即ち大衆のための鬪爭の問題、第二の結論は、非活動的なるアメリカ帝國主義との鬪爭の問題に、置かれるであらふ、……現下のアメリカに於ては、大衆的政黨が根本的な問題である、といふ此の幹部の決定によつて、それは急速に進行するであらふ」

然り、それは、多幸多難なる情勢のもとに進行しつゝある。

「相對的」安定と合理化との獨逸

嘉治隆一

一

かつては「勞兵會か憲法議會か」といふ所まで漕ぎつけ、又、一度は部分的にソヴイエットを建設したドイツ。賠償問題に、インフレーシヨンに、ルール占領に

づ安定期に入つた、而して此國の安定は大體に於てヨーロッパの安定を意味し、同時にそれは所謂世界資本主義の安定に通ずるのである。されば一九一九年春（第三インタナショナル第一回大會）には「ドイツの赤化は數個

たジノヴイエフ自身をして、一九二五年春（コミンテルン第五回擴大委員會）に至つて、世界資本主義の「相對的」安定を公認するの止むなきに至らしめ、又昨年（コミンテルン第七回擴大委員會）ブハーリンも世界革命の波が暫く引去つたことを明言した程である。

然りドイツは一先づ安定した。その條件をなすものは、商品生産販賣の增加、通貨及財政秩序の安定、ブルジョア國家機關の復興、世界的革命氣運の衰退、無産階級の衰微と分裂等であり、その機構を運用してゐるものは激增するカルテル、トラストであり獨占である。乍併、この形勢は果していつまで續くものであらうか。

社會民主義の一派（カウツキイ、ヒルフアデイング）は之を以て資本主義が新なる發展を遂げ、從來豫想せられなかつた新なる形勢

（コルシュ・フイッシャー・マスロフ）であつて、彼等は安定の事實を否認し、之を認めるものは日和見主義であると叫ぶ。然るに共產黨の人々は「マルクス的黨派は事實から出發すべく希望から出發してはならぬ。プロレタリアートの解放を妨げる障礙は之を直視することによつて征服し得べく、之に對して眼を閉ざす可きではない。一切の安定を否認する極左派は現實より逃避し、前提に災せられて黨の鬪爭條件と使命とを正しく決定し得ない。」（レンツ）といつてゐる。

事實を認めるに怯懦であつてはならぬ。然し同時に之を動的に看ることを忘れてはならぬ。安定は決して資本主義內部に包藏せられる矛盾を弱めるものではなく、隨つてそれは固定的なものでも永續的なものでもない。所謂安定は「相對的」であり、「比較的」であつて「絕對的」ではない。

二

內部的矛盾の第一として資本主義の安定は資本家國家の對立を撤廢せず、それ故に××は常に脅されてゐる。世界的軍備制限の不成、列國相互に他國の領土又は勢力範圍を覬覦し合ふこと、露支に對する列國步調の不一致、イギリス總罷業を利用してドイツが、又、ルール占領を利用してイギリスが巨利を博したこと等は之を證明する。第二に安定に力を得た支配階級は必ず階級鬪爭を彈壓するが、それが根絕出來ないものである以上、、、、、、、、、する結果となる。第三は帝國主義的國家と植民地半植民地族との對立の激化。印度、モロッコ、シリア、支那等の問題は之を示す。第四にソヴイエット共和聯邦の鞏固確立であつて、地球の六分の一を占める廣大な地域に於ける同聯邦の存在は一切の非共產世界にとつて永久に苦勞の種である。ドイツいぢめのために出來た國際聯盟がロカルノ條約でドイツの加盟を强要し、ヴエルサイユ會議以來禁止した武裝を聯盟の同意ある場合には（、、、、、、、、）之を許すことにした等はいかにも露骨である。

かくて、ドイツに於ける安定も他國との對立關係と國內の階級鬪爭の狀勢とによつてともすれば動搖させられて來た。例へば一九二三年末から一九二五年夏まで安定を保つて來たものが、同年秋に至つて危機大いに迫り、翌年始に至るまでかなりの慘狀を現出したのである。一九二五年十月から翌年六月までに一萬二千八百餘の企業は財政的に行詰り、やはり同じ十月から翌年一月までに失業勞働者の數は實に二百萬。その頃株式相場は平均六割以下に暴落した。而もその原因が爲替相場の「安定」から來てゐるのであるから、所謂「安定」が決して油斷のならないものであることが分る。即ち、爲替相場の安定によつてインフレーシオン中に盛に煽られてゐた商品の輸出が止つた結果、生產界は不況に陷つたが、就中、固定資本の多い重工業の衰微は貨幣資本の缺乏を招き、滯貨は動かず利率は高くなり產業界は益々沈滯した。加之、之に伴つてラムシユ コンツエルンの如き大經營の崩解は關係銀行に非常な痛手を被らせたのであ

る。

爲替相場の安定が財界、産業界の動搖を惹起したこの事實によつても安定の眞相が如何なるものであるかゞ察せられる。かゝる危機を如何にして脱出すべきであるか。資本家階級はこの問題を解決するために「合理化」を行つた。

三

危機を逃れるために資本家階級は生産組織と生産機關の改良、對外債務の支拂、弱小後進國への資本輸出等を計畫したが、戰敗以來ドイツは種々のハンデイキヤツプを附けられてゐた。例へば(1)賠償の負擔(2)ドウズ案に基く外國の經濟統制(3)植民地全滅(4)戰前國外投資の消滅(5)經濟的要求貫徹の最後手段たる武力の缺除、等々。之では對外的競爭に勝つことはとても困難といはなければならない。そこで資本家階級は國內産業に於ける利潤率を國際的水準よりも昂めることを考へた。之が卽ち「合理化」なるものであつて、その方法としては生産價値量の增大、價格の引上、生産費の節減等が擧げられるが、既述の如く、對外輸出止り、國內資本流動の少い場合に初めの二方法は到底行はれ難く、當然に第三の方法が採ばれたのである。

生産費節約といつても資本の固定を許さぬ事情が在る以上、勞働者の犧牲を直接に增大して利潤を高めなければならぬ。勞働時間の延長、勞働の集約化、現實賃銀の引下等がその手段となつた。それ故に生産の合理化は畢竟、勞働者搾取の增進であり、資本攻勢の一表現に外ならないのである。

合理化の促進によつて資本は合同、集中、獨占を遂げ、勞働は失業に苦しめられる。前者の優勢が續く限り搾取は極まり利潤は擧がる。米資輸入、英總罷業、佛白伊の爲替相場安定に基く輸出不振等を利用してドイツ資本の攻勢は着々成功を收めて行つた。それは合理化實施後、今年初までに總計四十億マルクの實收を擧げ、國際鐵鋼カルテル、佛獨加里工業トラストを作り、又、トルコに、イタリーに、ルーマニアに巨額の貸付を爲すにた。ドイツの新帝國主義的進出といふのれ等の事實を指すものである。

四

然らばこの形勢を各政黨は何と見てゐるであらうか。大地主、重工業者、貴族、官僚軍人より成る國權黨。專ら産業市民階級と金融資本家とより成る人民黨。重工業者及大地主の一部、並に一般舊教徒より成る中央黨銀行資本家及商業資本家並に精工業者を代表する民主黨。――之等の市民黨各派が之に大贊成であることはいふまでもない。(フアシストより成る國粹黨は既に無力である。)一方、社會民主黨は高級勞働者、小市民、知識階級、官吏、俸給生活者等を基礎とする以上(少數左翼的勞働者は別)大部分合理化を支持し、之を善用し、勞働者自らカルテル、トラストに參加してその運用を共にすべきであると説く。然るに唯、共產黨のみは、、、、に基くブルジョア的ドイツの社會秩序の下に於て現

、、、、、のために働くことの有害無益を唱へ、闘爭を經濟的領域にのみ限らずして進んで、、、、、、の方向に赴くために戰線の統一の必要を說く。そして彼等は現在に於ては反動勢力が確立し、中間層も之に對する信賴を失はず、又、革命的左翼がそれ自身多數となる可き見込なく、從つて直接に革命の起る可き客觀的條件を缺いてゐる。そしてかゝる狀態の下に於てなすべきことは、革命の決行には非ずしてそれがための準備であり、その目的に對する大衆の獲得であり組織である。やがて新なる形勢が展開するであらうが、それまでは準備をすべきであるといふのである。

ドイツの社會は全體として現在は一先づ安定してゐるが、やがて新なる條件の發生すべきことは必ずしも豫想不可能ではない。今年五月に於ける「黑金曜日」の株式市場の混亂、ライヒスバンクの金利引上と經育對獨外債延期とに因る九月の金融混亂、並にそれに伴ふ失業者の增加等の事實は「安定」が決して泰然自若たるものでないことを教へてゐる。

新帝國主義への進出か、矛盾の擴大による沒落か、それは一に懸つてドイツの經濟的發達と階級鬪爭との進展如何にある。前者は資本の攻勢となり間接に勞働の反抗を生み、後者は直接に勞働の反抗を激成する。直接か間接か、何れにしても落着く所は一つである。かくて「安定」は不安定であり、「合理化」は不合理化に走る。

佛蘭西に於ける統一戰線問題

平貞藏

佛蘭西の無產階級的分子千四百萬の中、工業勞働者は約八百萬、農業勞働者は約三百萬と見なされる。[illegible]組合に[illegible]として、組織勞働者は、CGTの七十萬、CGTUの五十萬、クリスト教勞働組合同盟十二三萬、アナルコ・サンヂカリスト同盟一萬乃至二萬其の他若干の黃色組合、獨立組合に分たれてゐる。この割合は恐らく今後も數年間保たれるであらう。こゝではCGTとCGTUの二派の間に起りつゝある統一戰線問題に就て瞥見しやうと思ふ。一九二七年に入つて一層喧しくなつた此の問題を述べるには、どうしても一應從來の經緯を顧みねばならぬ。

一九二一年、二者の對立を生じてから、CGTUは機會ある每に戰線の統一に努力した。一九二二年パリに於けるCGTの組合大會に於て、この問題に對するCGTの態度を決する事になつたが當時ジユウオーの勢力強く、合同は直ちに否決された。彼はCGTUが復歸する以外には合同なしとした。當時、アナルコ・サンヂカリストがCGTUの組合員を煽動して、下よりの統一、を實現せんとしたが、之は第三のCGTを作らんとする意

圓によるもので、失敗に歸した。CGTにあつても、下よりの統一を提唱したが、その心はCGTUがCGTよりも優勢なりし爲め、CGTUの地方組合員を自派に復歸せしめ、優越を恢復せんとするにあり、主にパリ・オルレアン鐵道の勞働者に試みられたが失敗した。CGTはかかる事をし乍ら、CGTUよりの統一提唱には常に反對し同じ事を繰り返しつゝ一九二五年に及んだ。

一九二五年四月、二派の全國委員會が開かれた折、CGTUはCGTの標語、下よりの統一、を奪つて自派から之を提唱した。しかも此の時はCGTに復歸しても可なりと申し込んだ。合併方法としては、二派の幹部の監督の下に先づ地方の組合が合併し、次に聯合が合併し、最後に全國的に合併せん、と言ふのであるがCGTは之を拒絶した。こゝでCGTの下よりの統一は尻尾を出し、CGTの眞意は、その地方的に優越な所でのみの合併である事が明かになつた。

同年八月、二派の大會が開かれた。CGTUはその豫定を變更してCGTと同じ時にしたのである。この時CGTの大會では、CGTUの代表者に演說をせしむべきか否かに就て大激論行はれ、CGTの一般組合員は下よりの統一を熱望する如くに思はれたが、ジュウォー等の幹部の壓迫奏效し、一九二二年の決議を再確認する事となつた。決議に贊成一六二七組合、反對一一八組合、棄權二三組合で通過した決議に曰く、CGTの門は廣く開かれてゐる。それにも拘らず統一の實現せざるはCGTUの責任なり、と。

この大會直後、强き威嚇にも拘らずCGT内の統一贊成組合の代表者二九名は、CGTUの代表者、ある獨立組合の代表者と共同會議を開き、地名に因んでシャテルロール統一贊成者團を作り、機關紙ユニテを出した。CGTは之を微力なりと笑ひ、CGTUは之を相當有力のものと宣傳する事例の如し。

然るにこゝに官吏組合同盟のCGT統一問題が起つた。該組合は成員二十萬、分裂後中立を宣して二派の統一に努力したが、政府の壓迫は組合を左傾せしめ、殊に間接官吏組合は革命的分子の支配する所となつた。但し教員全國組合の如くCGTに好意を有するものもあり、從來同盟の組合は何れにも屬せず個人としてのみ何れかに屬する自由を有したが、教員全國組合はこの約束を破つて一九二五年七月CGTに加入し、他の諸組合にも頻りに勸誘し、その結果一九二六年十二月の大會に於て、官吏組合同盟はCGT加入に決した。時に贊成四三二票、反對二二六票、棄權五五票、缺席五六票。少數にして破れた左翼は共にCGTに入る事となつた。ジュウォーは、革命的分子を排除せんが爲めに、加入せんとする者はCGTの原則──その中には、國際勞働局、全國經濟評議會に協力するといふ原則もある──を承認する旨を明言すべし、としたが、革命的分子はこの屈辱的明言を拒み、脫退もせず、といふ戰法をとつた。

斯く、統一問題は捗々しく行かぬので、CGTU内の步調が亂れ初めた。當時CGTU内には、統一運動を見棄つべし、といふもの

と、互合的活動を共にする如き條件を附せられても合併すべし、といふものと二つの對蹠的議論があつた。CGTUの幹部はこの二議論の克服に努力したが、かゝる狀態を見て共產黨は、改良主義的組織の中に入つて活動する事の必要を痛感し、CGTの左翼の勢力を增大せしめ、シヤテルロール統一贊成者團の運動を發展せしめる事に努力した。

かくして問題は一九二七年に入つた。

一九二七年一月、CGTUの執行委員會はCGTの執行委員會に對し、鐵道勞働者組合の間に統一問題が起りつゝあるを喜び、更に全般的に組合を統一する大同盟を作る事を提議し、統一の爲めに次の五つの條件を擧げた。一、組合は職業と主義に關係なく一切の賃勞働者を包容する。二、凡ての成員は組合の集會で、批評及自由な意見發表の權利を持つ。三、主義の相違を理由として組合より除名せぬ。四、組合員は組合集會の討論に參加するに當り、その屬する黨派又は哲學的團體の名に於て爲すべきでなく、唯勞働運動に關する意見發表の自由を有する一組合員としてなす。五、組合集會の決議を忠實に守る。なほ、統一は二派の同數の代表者よりなる委員會の監督の下に、二派の凡ての組合の合併によつて實現すべき事とした。

勿論CGTは例によつてこの提議を拒絶した。しかもCGTUは例によつて之に屈せず、CGTと同じく四月に全國委員會を開き、又統一の提議をし、五十萬の全成員を擧げてCGTに加入したい、と申し込んだ。その條件として、一、意見發表及批評の自由。二、意見の相違により除名の禁止。三、組合集會の決議遵守。四、CGTUの全成員を例外なく加入せしめ、加入後遲くも二週間内に地方及全國議會議の代表者を選擧する事。五、加入の形式はCGTUの組合員票に對し、無料にてCGTの組合員票を取替へる事、を以て十分なりとした。

この提議に對し、CGTの幹部は直ちに拒絶せんと主張したが、反對する全國委員も多く、爲めに一應CGTU代表者の意見を聽く事となつた。然し結局この委員會も拒絶せられ、CGTUの成員にして、CGTに加入せんと欲する者に個別的に交渉せよ、といふ回答が與へられた。

CGTとCGTUの上からの統一の提議と拒絶がかく繰り返されてる間に、前述の鐵道勞働者の統一運動は次第に有望となつて來た。五月十八日には、二派に屬する「パリ右岸」の鐵道勞働者組合は合同會議を開いて、次の決議をした。決議に曰く、CGTUの勞働者のCGTに復歸したいといふ希望を次の條件を附して、容れる。一、組合規約を是認する凡ての勞働者の加入を許す。加入の形式は組合票を取替へる事を以て十分とす。二、加入後、主義の如何に拘らず組合員たるを得。加入後、主義の相違を理由として除名するを得ない。三、加入後、出來得る限り早く、各組合、各組合聯合、全國同盟等の集會を開く。

以上の決議は、CGTUの執行委員會、同派の國有鐵道勞働者同盟、のみならず、CGT派の國有鐵道勞働者同盟―「パリ右岸」組合

の加入せる—も大多數を以て是認する所となつた。

下からの統一問題はこゝ迄進んで來た。然らばその後どうなつたか。

七月二十六日からCGTの第十九回大會は、一九五三組合を代表する九百名の代議員の出席によつてパリで開かれたが、その決議の一は、生產の勞働階級に關するもので、益々改良主義的合理化を認め、二は、教育改革、三は、家内勞働、四は、社會保險、五は、高等勞働會議、六は、組合統一、七は、官吏組合の加盟承認である。組合の統一に就ては、四月の全國委員會の決議を確認し、次の四項を再說した。一、組合統一は各加盟組合に於てのみ達成し得。二、統一を達成せんとする勞働者はその組織するCGT加盟組合並に職業團體を地方的同業組合、及CGT各縣支部に加盟せしむ可き事。三、統一を達成するにはCGT總會の決議、CGT、聯合及各組合の規約を條件とすべき事。四、勞働組合の各種の活動に對し、政黨又は外部の集團の干涉を受けざる事。この大會は、ジュウォーを主事に、ミリオン、及ラビエールを副主事に、ルノアールを常任幹事に、デュポンを會計に選擧した。

一方、CGTUも九月十九日より第四回大會をボルドウに開いた。組合統一問題に關する部分のみを見よう。モンムウソーは鐵道組合の統一問題の經過を報告して曰く、鐵道勞働者の統一はCGTUにとつて大なる讓步を意味するも、統一を欲する立場から之を是認した。CGTの幹部は革命的分子の加入を避ける爲めに、苟くもCGTの主義と異る意見を持つ者は直ちに除名す、と規約を改正したので統一の實現は延びた。然し吾々は統一運動を放棄するを得ない。吾々は大衆に向つてCGT幹部のサボタージュを暴露せねばならぬ。執行委員會は統一運動に對する決議をし、大會の承認を求める、その實際的提案は、從來のタクテクの固執、CGTU諸組合のイデオロギー的及數的强大を圖る事、未組織勞働大衆に對し加入を勸誘する事、CGT及CGTUに屬する諸組合の共同會議を大規模に發展せしめる事。である、と。

次に討論に入つて、或者は、CGTUの幹部が鐵道組合の統一運動に充分の努力をせざりしを遺憾とし、或者は、統一の前途を悲觀してこの運動をやむべしと論じた。モンムウソーは之に答へて、失敗を當然なりとし、CGT幹部の勞資協調主義の存する限り、下よりの統一に非れば望みはない。下よりの統一とは、プロレタリアの日常問題を中心として大衆を集める事である。CGTの幹部は日常鬪爭を欲せず、從て大衆は之を見棄てるであらう。何となれば大衆には本能的の鬪爭心があるから。吾々はこの鬪爭の效果を依然として疑はぬ。今や日常鬪爭のプログラムを作るべき時だ、と言つた。大會に於てこの統一問題は、帝國主義的戰爭反對、支那革命支持、ロシア支持、組織改造—組合よりサンヂカリスト的傳統を排除せんとする案—の諸案と共に委員附託となつた。

統一問題に關する委員會の報告は、ラムボ

ールによつてなされた。曰く、余は個人としては執行委員會の報告を批評した。然し大會は、執行委員會の原案を賛成可決せん事を望む、と。票決の結果、決議案は、サンヂカリスト同盟の者が二三の保留をなし、十人の棄權あつた外は全部の賛成を得た。

組織改造案の委員會の報告も、大なる反對があつたが十人の棄權を除き可決された。役員選擧にあたつても、一人の反對、九人の棄權を除き他の全部の賛成により、モンムウソー、ラカモン、デユデリウー、ペラル、アリス・ブリセ等を執行委員に選擧した。

大會で常に反對するサンヂカリスト同盟はサンヂカリスト的傾向の強い人々で、中央集會に反對し、CGTUは共産黨に對し獨立を保たざる可からずとする人々である。その中心人物のシヤンペランは、前共産黨員で、ヴイ・ウーヴリエール及ユマニテの編輯員たりし事あり、彼は、モンムウソーが過去一年に於てCGTUの勢力は增大せりと言へるは嘘だと大會で叫んでゐる。

要するに同盟内の統一問題に關聯するかぎり如くにして進展しない。しかも二派各々その内部に爆彈を抱いてるやうな状態である。CGTの幹部が、一部組合の加入を見、右派を以て我々とも左翼によつて迷惑かけられない如くCGTUの幹部も、そのタクテイクを以て左翼の笑ひによつて誇り一方には右翼によつて攻かねばならぬ弱味なきに非ずである。

ファシヨ獨裁下のイタリー

秋笹正之輔

一、イタリーの國際的地位

現下のイタリーに於ては、依然として鐵の如きファシヨの獨裁が行はれてゐる。このファシヨ政府の政策によつて、イタリー帝國主義は極めて好戰的な態度をもつてヨーロッパの政治舞台に登場し來つた。これがイタリーの國際政局に於ける地位も決定する。刻下の國際政局、就中ヨーロッパの政局は反サヴエート戰爭の危機の急迫によつて特徴付けられてゐる。そこにこそ、ファシズム・イタリーの「偉大」なる役割が生れるのだ。

現今の尖鋭化せる階級對立の段階に於てはブルヂョア政府による戰爭遂行は、勞働大衆の反抗運動に對するファシヨ的彈壓並びに戰時大衆動員の爲めのファシヨ的デマゴーグなくしては全く不可能である。さらに、國際ブルヂョアジーは、戰爭の終結的段階に不可避的現象として現れる政治的經濟的、、並びにそれに隨伴するプロレタリア××を克服せんがため、ファシズム運動を、最有力の反革命手段として、意識的計劃的に用意してゐる。斯くの如くにして、ファシズム、從つて、ファシヨの祖國イタリーは、國際ブルヂョアに

動の急先鋒として、世界政治の前面に現れて來たのである。

だが、廣汎なる小ブルヂョア諸層を踏臺にして、沒落に瀕した、金融資本の獨裁を維持し、更に確保せんとするファシズムの反革命は、有産者社會の矛盾をその、、、、、、に於て、、、にまた全體性的に解決し得ない。

ムッソリニー治下のイタリーに於ては、ファショそのものゝ内部に於ける矛盾と階級相互間の矛盾とが急速に激成されつゝある。このイタリーに於けるファショ政治の矛盾は國内的尺度に於ては寸分たりとも緩和されえない。さればこそ、ファショ政府の對外方針は、ガムシヤラなる帝國主義的侵略政策として、はた、極端なる反サヴエート政策として現れるのである。

かくて、國際反動のヘゲモニーを握るイギリス保守黨政府と國際ファシズム運動の樞軸をなすムッソリニー政府との慇懃なる結合が行はれ、此處に、反サヴエート聯合政策が用意された。イタリーはイギリス帝國主義の後援と協力により、バルカン並びにバルチック地方に、着々、反サヴエート政策の歩武を進めてゐる。フインランド、エストニヤ、リトワニヤ、ポーランド、ルーマニヤ、ハンガリーには、すでにファショ獨裁が確立されてゐるか、或はファショ的クーデターの危機が迫つてゐる。サヴエート聯邦に隣接する一帶の諸國は、イタリーの政治的指導とイギリスの總括的指揮の下に、反サヴエート聯盟に結成されてゐる。國粹主義、純イタリー主義の旗の下に生長したファシズムは、帝國主義ブルヂョアジーの國際的反動政策への進出に隨伴して、狹隘なる國粹主義の限界を越えて、反サヴエート、反プロレタリア世界聯盟の方向に進みつゝある。

二、ファショ治下のイタリー

ファショ運動は、政權獲得前期には、或る程度まではブルヂョア及び大地主の庇護の下に生長したとは云へ、廣汎なる中間諸層のヘゲモニーの下に於ける國民的大衆運動の形態を採つてゐた。然るに、ファショが政[illegible]するや、ファショは大衆黨としての役割[illegible]失し、單なるデマゴーグ並びに暴力の遂行の機關となり下り、たゞ嚴格なる最高幹部の獨裁、ムッソリニー政府の組織のみが絕對的支配者として存在した。然も、この政府は、舊來約束し來れるファショの綱領政策を實現することなく、また、中間諸層の利益を代表するものでもなく、大工業家、大銀行家の經濟的寡頭政治に安全なる自由を與へ、全勞働人民の絕大なる犧牲の下に、戰爭及その後の恐慌によつて破壞された資本主義經濟の再建、さらに引きつゞいては、資本安定を確保する徹底的搾取の構機となり勞働者階級の階級組織を全く解體し、全人民大衆の自由をすべて褫奪する絕對的武力獨裁の機構に轉化した。

かくて、全人民大衆のファショ並びにムッソリニーに對する憎惡は全イタリーに焔の如く渦卷いてゐる。だが、全人民は政治批判の自由、團結の自由のすべてを剝奪されてゐる。それ故に、全人民の組織されざる反抗は

個人的テラーとして到る處に發現する。昨年中にムッソリニーは三回の暗殺に怯かされた。

昨年十二月、ムッソリニーは遂にかのメッテルニヒ以上の思切つた彈壓法令を議會に上程した。而して、之に反對せる反對黨の全代議員百二十七名を强力によつて議會より放逐し、この彈壓法令を決定した。從つて、今やイタリーに於ては議會はファシヨの單なる委員會に外ならない。この彈壓令の一節に曰く、(1)現政府に反對する一切の出版物發行を無期限に禁止する。(2)ファシスト黨に反對する凡ての政黨、集會、結社等を解散する。(3)首相に危害を加へたるものは死刑に處す。

印度は何處へ行く

——民族解放運動の新段階——

上村正夫

一、英國の對印度政策の轉向

東印度會社支配の時代について、十八世紀末よりとられた英國の印度に對する政策は、市場及び農業植民地としての搾取であつた。マルクスは之を評して『英國は之れ迄、復活の徴候を少しも示すことなしに、印度の社會制度の全段階を破壞してしまつた』と云つた。それは、印度の手工業を組織的に破壞し、從つてまた、彼の封建制度の下層建築たる、小さな自給的、地方的集團内に於ける小農と手工業との結合の上に立つ村落制度を根底からくつがえした。しかも印度に於ける資本家的生産の發展は、英國の强權によつて絕對に禁止された。建設なしの破壞。英本國の近代工業發展のための一要因として遂行された跛行のブルジョア革命。手工業を奪はれた過剩人口の農業への流入——近代的工業の發展を阻止されてゐるがための——英國工業の獨占へ發展のための、意識的な印度工業に對する阻害政策、從つて印度の極端なる農業化、之等はすべて、在來の英國の對印度政策が、本國工業資本主義のために、印度を農業植民地として從屬せしめることにあつたことを物語つてゐる。

だが、かゝる工業資本主義的植民地政策は、工業資本主義自體の帝國主義への發展によつて變更されざるを得ない。資本主義の大規模獨占工業への發展、鐵道、機械等々の新たなる地方への輸出、かくして、近代的工業は、本國の支配下にある低廉にして無防禦な勞働者の搾取の上に容赦なくのびて行く。それは莫大な利子、利潤を本國の金融資本家に齎すから。

斯樣にして、英國の對印度植民地政策は世界大戰による本國軍事工業以外の工業に强く作用されて、世界大戰と

で、急速に、工業資本主義的植民地政策より、帝國主義的植民地政策へと轉向した。莫大なる資本輸出、防禦なき低廉なる印度勞働者の極度の搾取、英帝國主義の全體的發展のための世界政策の一要因としての印度の工業化――それは莫大な利潤をイギリス金融資本に約束する――之れが新たなる金融資本の對印度植民地政策である

　次の數字はこの事實を雄辯に物語る。

英國の對印度資本輸出の激增

一九一九年	一・四（單位百萬磅）
一九二一年	二九・五
一九二二年	三六・一

綿絲紡績業の發展

	錘數（千單位）	從業員數（千單位）	木綿消費料（百萬ダース單位）
一九〇〇年	四九四五	一六一	五・一
一九二三年	七九二八	三四七	七・五
一九二四年	八三一三	三五六	

印度工業委員會は

三、初等教育の普及（一九一八年）を主張し、英帝國の政策が此の方向に向つてゐることを物語つてゐる。

二、民族主義運動の發展過程

　英帝國の前述の如き、政策の轉向は、だが、印度を解放するものではない。それは、工業資本主義的植民地政策から帝國主義的植民地政策への轉向、從つて新たなる印度隷屬の手段が採用された事以外の何物でもないから。然しながら、此の新たなる政策の採用、そこから必然に生みだされて來る、印度の生産關係の著しい變化は、不可避的に、印度の民族解放運動を質的に變更した。

　工業資本家的支配の下にあつては、衰滅の外なかつた印度固有のブルジョアジーは、中間層を糾合して民族運動を指導した。從つて當時の民族運動の最も强力なる鬪爭手段は、英國商品のボイコットであり、鬪爭の目標

で生長し、その最高潮に達した。がそれは同時にまた、此のブルジョア的な民族運動の最後の火華でもあつた。かの、ガンデイが率ゆる數百萬人のボイコット、罷業、大示威運動の渦巻きこそは之れであつた。英帝國の强權は搖いだ。ガンデイの「非暴力主義」の宗敎的扮飾にもかゝわらず、その運動は暴力的であり、物質的な力であつたから。其れ故にまた、そのスワラヂ（自治）獲得のための非協同策は革命的であつた。歷史的に若い印度の勞働者及び農民は、此の鬪爭の過程に於いて著しく成長した。彼等は、ブルジョアジーの英帝國との卑怯な妥協屈服を見た、自らを解放するためにはいま民族運動の陣中にある此の印度ブルジョアジーをも倒さねばならぬ事を自覺し始めた、勞働條件の部分的改善の要求すら揭げない民族運動に不滿を有つて來た。かゝる形勢を見て恐怖したブルジョアジーは、「非暴力主義」の敎説に名を借つて、小

の交渉と仲裁とによつて解決すべしと命令するに至つた。ブルジョアジーは、斯くして、自らを勞働者及び農民から防衛するために、甘んじて英帝國主義のパン屑を甜めるに至つたのだ。彼等は、英國金融資本の印度工業化政策に追隨して、プロレタリアの血に汚れた莫大な利潤のおこぼれを頂戴し、英帝國の武力によつて、印度の勞働者農民を抑壓するに至つた。かくて闘爭を放棄して自ら退却したブルジョア的民族運動は、英國政府の大衆的虐殺の前に苦もなく壞滅した。

此のガンデイ主義の廢墟から、民族運動を代表するものとして、彼のスラワヂ黨が生れた。此の黨派はガンデイの消極主義を排撃して、勞働者及び農民に接近した。指導者モチラル・ネールは、大衆の組織、行動の政策を主張した。その目的とするところは、黨名の示すが如く、スラワジ(自治)の獲得にある。闘爭手段は議事進行妨害によつて政府を無力ならしめんとする所謂『革命的議會主義』である。だが此の黨派の憲法が私有財産の是認と個人的富の增殖の權利を決定してゐる事は、スラワジ派の階級的性質を暴露したものである。タータ補助金問題で彼等が勞働者の利益を裏切り、英帝國との『名譽ある協同』に沒落したのは、蓋し當然の歸結ではあつた。スラワジ黨は、革命的民族闘爭の政黨としてではなく、ブルジョアジーの特殊な利益を代表する政黨として大衆の前に馬脚を現はし、大衆から分離し、不可避的に英帝國主義の脚下に屈服した。

三、印度を解放するものは誰れか？

最近二三年間に於けるガンデイの英國への迎合、スラワジストのブルジョア政黨への發展は、だが同時に、急速に勞働者及び農民との階級的對立を尖鋭化し、今や勞働者階級が彼の裏切り的なブルジョアジーと分離して、眞實に英帝國主義の支配から印度を解放するための革命的民族主義運動の指導者として登場した。印度民族革命は新たなる段階に入つた。紡績(四萬五千)道、鐵(十萬九千)、金屬十一萬)、鑛山、郵便電信(三萬九千)、海員(七萬五千)の各勞働組合は全從業員の五十乃至十パーセントを占め、若き印度共産黨(一九二一年創立)は印度解放の尖頭に立つてゐる。彼等こそ、、の印度、、者だ。國民的統一戰線の禍根をなした彼のヒンヅーイスラム等の宗教的對立及び人種的對立も今や此のマルクス的指導精神に從つて進む印度解放の、、、、を擔ふ勞働者階級の登場に依つて解決されんとしてゐる。在來の懷古的な村落再建の代りに、農業革命(アグラールレボルーチオン)が全印度を席捲せんとしてゐる。打倒英帝國主義に勞働者階級が、農業革命の遂行によつて農民と同盟してのみ成就される。それは國內大地主及び資本家と英帝國とに對する勞働者及農民の反帝國主義運動であり、ブルジョア民主主義革命である。全世界のプロレタリア及び被抑壓民族は印度革命を支持する。數萬人勞働者のストライキは各所に起つてゐる決定的闘爭の日は近[illegible]く。東天は白んだ。印度がやがて、輝[illegible]解放の悅びにひたる日も遠くないで

おらが春

岡本一平

1、三土藏相『これからの總理大臣は財政の頭が無くてはいけませんよ。この新年の休暇には少しそろばんでも稽古なさい』田中首相『いゝおらもそう思うとる。だが國家の主計は仲々面倒いのう』





2、青木『われ〳〵は大分評判が悪いから軒の門松も遠慮して小さくしよう』水野『それがいゝでしょう。だが例の通り當分の



3、民政黨員『わしの黨には總裁が三人あるから年始廻りも一しほ骨が折れるテ』

4、日數經たおそなへ餅の如き無產各派のこまかき分裂もこゝで一寸合同に風向きが變りかけたやうでもある。共同の目的の爲めに眞に搗き直す意ありや。



九大法文學部事件の眞相

原田義藏

一

前九大總長博士眞野の計劃で、博士美濃部を唯一の創立委員として、九大法文學部が開學されたのは、大正十四年四月一日であつたが、文科の一部と經濟科の博士高田などを除けば、何れも少壯の教授揃ひで、學内行政に對しても、可なり自由で合理的なものにしやうとの理想が強かつた。

曾て心理助手に某女性採用の議が起つた時博士美濃部は總長眞野の意を承けて、稍もすれば世評に累せられる不利其他をあげて反省を求め、採否を票決に諮ふた。處が結果は美濃部の忠言を裏切つて、多數で採用に決して終つた。これは某女性の辭退で解決したが創立委員の美濃部と雖ども、其掣肘を受けることは、少壯教授連の好まない處であつた。部内の長老教授連に服せなかつたのはいふまでもない。多數少壯教授連に漲つた此空氣は、實に今回の事件に對する遠因の一であつたと見ればならぬ。

舊總長眞野が去り、新總長大工原を迎へて後、福高事件を經て、大正十五年京大事件の前後、九大でも社會科學研究問題に聯關し、前後二回の學生處分が行はれた。殊にその第二回目には三名の放學々生をすら出した。今回の事件は所謂思想問題とは、何等の交渉もないが、さりとて此等の事件を機縁として延脈し來つて居ることを見逃す譯にはいかぬ。

學生處分當時の學生監が教授松濤泰巖(教育學)で、法科評議員が教授東季彦(民法第一)であつたが、九大の慣例によると、學生處分は評議員會の決定で、當該學部の教授會に諮ることはなかつた。然し此第一回の處分は、博士美濃部の特別な請求で、例外として一應教授會に諮つて居た。けれども第二回の處分は、左傾教授側の反駁豫想もあつたのか、教授會には諮らないで發表された。少壯教授連の不滿は、此中にある左傾教授と共に甚だしく、評議員(部長代理を含む)學生監の攻撃となつたのは勿論で、今回の事件の中心人物であつた教授木村龜二(法理學)の如き、その急先鋒であつたことはいふまでもない。

二

學生處分事件が機縁となつて、少壯教授連の所謂合理的な學部組織運動は漸く熟して來た。教授大島(倫理學)の學部長代理辭任をうけて、博士四宮兼之(哲學)を擁し部長代理としたが、學生監の松濤も評議員の東も共に辭任し、東の後には當の教授木村が評議員となつた。これが實に昭和元年の十二月で、此時から九大法文學部は、大島(倫理)片山(獨文)春日(國文)長(西洋史)松濤(教育學)東(民法)等の長老派と、木村(法理)大澤(國際公法)山之内(憲法)等の少壯派とが分野を作り、多くの教官が此何れにか屬する形勢となつた。さうして教授木村はトン〳〵拍子に評議員豫算委員其他の要職を兼ぬるに至つた。第五十三帝國議會で、教授東季彦の養父、政友會の闘將東武が、九大教授の山之内一郎を始め、所

胃之例教授を壇上につらね、文相岡田に內訴した。當時の議會速記錄が、如何に爭つて此等少壯教授達に讀まれたか、文相岡田が此等教授を處分する意があると傳へられた時、多數少壯教授達が所謂學部自治を高調して他の容喙を遮斷しやうと努め、學部合理化の運動と聯關して、博士美濃部の掣肘よりすら離れやうとしたことなども、有意か無意かは問題として著しく目につくことであつた。唯博士高田の如く此等に超然たる一部の研究家のみが此圏內に入らなかつた計りであつた。

教授東と教授木村とは、外遊中既に不仲となつたといふが、然しこれは兩者の相反する性格で、双方の惡罵する如く、東が女性的の極めて惡辣な陰謀家であるとか、木村が反社會的の糺彈性に富む特異な人物だとかいふことは第三者よりして殆ど首肯し得られない。東は溫厚な人物に於て木村に勝り、木村は銳敏な頭腦に於て東の上にある。唯教授木村の人物が上品であり得ないために、其銳敏な頭腦は自負心と抱合し、氣品ある紳士に伍せられざるに至つたと見るべく、事は些細であるが、彼がカツフエードリンクアサヒで文科の矢田部助教授に皿を投げつけた事件の如き、彼の性格の一面と見るべく、さなきだに兩者對峙の狀態で、彼は長老連より憎まるべき位地にある。それが無遠慮に高校時代の恩師片山に楯つき、或は同僚の圖書購入に關する不正を面のあたり摘發するなど、無慚濟に富り散らして居る。勿論此間木村を誣陷した論書が舞ひ込んだ事などは事實である。それが或は東の一派であつたかも知れぬ。然し博士美濃部が講師として赴任さした杉之原（民法第二）を直ちに助教授に推擧し、教授候補者とするが如きも、亦木村派の挑戰或は應戰といはねばならぬ。

三

かくして遂に三月九日の教授會に於ける木村教授不信任案となつた。此不信任案提出者は、西山、風早、佐々、東、藤澤、武藤の諸氏で、西山は提出者として、木村が教授會で暴言を弄し、同僚の名譽を毀損する等の事實を指摘したが、出席者は當の木村を合して廿六名、贊成廿三名、反對は山之內一名で大澤は棄權したと傳へられて居る。

不信任案通過の結果、木村は評議員を始め二三委員を退いたが、不信任の範圍は將來に及ばず、教授會常任委員會の地位に觸れないといふのであつた。それで木村は事實遺憾の意を表して居た。處が五月十四日、法科協議會で教授風早（刑法）の刑訴講師推薦の手續が違法であつたといふので、大澤、山之內、杉之原と共に之を攻擊して不成立に終らしめ、曩の不信任案に對して反噬的態度をとるに至つたといふので、木村排斥は再び擡頭し、越えて十月文科の片山、春日、長、松濤其他十名、法科の東以下五名とは建白書を作つて、各教授に調印を求むるに至つた。然し教授大島が調印を拒んだので、議は一變して木村教授排斥教授會の請求となつた。

同學部の內規では、教授五名以上の請求あるときは、學部長は教授會を開くを要すとなつて居る。當時木村排斥熱は可なり熾烈で、多數を制する見込みは充分であつた。然し部長四宮は惡例を貽すといふのと不穩といふのを理由として頑强に之に應じなかつた。論難の結果、四宮も結局「教授の退職決議案を教授會に附議すべきか否かを議題として教授會開會を承諾せなければならなくなつたが、然し前日重ねて誓言したにも係らず、同夜十一時に至り、文書を以て「教授會は開會せぬが穩當とするので御相談する旨」を通知した。

此處置は四宮が自己を推擧してくれた木村を擁護するためとは排斥派のいふ處で、一教授罷免の端を開けば社會科學問題の如き、關係教授が悉く罷免せられるであらうとの恐怖が所謂大學教授地位擁護論となり、學部自治の高調による他の容喙遮斷法となつたと觀察して居る者もあるが、譬へそれが全部ではないにしても、或は一部を含んで居たかも知れない。

四

排斥派は教授會開會が不可能となつたので法科の事は法科自ら解決しやうといふので、十月十二日、東、藤澤、佐々、瀧川、風早の五教授が鬪將瀧川の筆になる建白書を作製し木村及び之を支持する山之內、大澤、西山、杉之原等を彈劾し、兩立し難いことを總長大工原に進言し、同時に部長四宮の不法を糺彈するに至つた。

此間懸案の同學部八講座增設其他の官制は公布され博士美濃部は事務取扱を免ぜられ、博士四宮は正式に法文學部長となつたが、形勢かくの如く、教授會は開會することが出來れども四宮は兩派に謀つて融和を試みるでもなく、手を拱いて荏苒日を送るのみで、事件は何等の意味もない行き詰りの狀態となつて終つた。

かゝる間に事は早くも外間に洩れて、各新聞は主として排斥者側の言分を公表するので木村、大澤、西山、山之內、杉之原は連署して聲明書を發表し、所謂內訌は双方より暴露せられるに至つた。博士高田保馬等、所謂經濟科の教官を中心とした、第三者の調停といふのが現はれたのは此頃であつた。然し排斥派の人々は、之を以て木村派の依賴によるものと解して居た。從つて之に耳を借さない許りか、排斥派と關係淺からぬ文科教授連も亦顧みない。

博士高田が、萬策盡きたとは言はないが、事實に於て施すべき道はないと總長大工原に進言したと傳へられたのは、事件發生後一ケ月餘を過ぎた十一月十三四日頃であつた。此時總長大工原は既に意を決して事務官大岡を上京せしめて居た。

大岡の上京と共に五教官休職は東京より洩れ、瀧川の四宮攻擊意見の[illegible]瀧川政次郎、風早八十二、被排斥派の教授木村龜二、山之內一郎、助教授杉之原舜一の六教官の休職は發表された。

五

此間總長大工原に解決を迫られて、徒らに教授地位不可侵の原則確立に努め、學部自治に努力したことは人後に落ちなかつたと稱して居る學部長四宮は、すべての責任と怨嗟とを自ら背負はなければならなくなつた。一時傳へられた彼の教授辭職說も、多數が承認せぬといふ名のもとにお流れとなり、然も學部長四宮の辭職も認められず、教授會の正式開會も未だに出來ない羽目に陷つて、全く八方塞りの狀態となつて居る。彼に公平がなく、融和の努力と手腕のなかつたことも、犧牲者を多くしたと認められ、曩に九大醫院事件に直面した、當時の醫學部長博士高山正雄の足許にもよれぬと評せられて居るが、世論は案外冷淡で寧ろ總長大工原の英斷を多とするが如きは、果して何を語るものか。

吾々は九大學內に於てすら、法文學部に人物なしと嘆ぜられるのを耳にして、頗る之を

大津事變

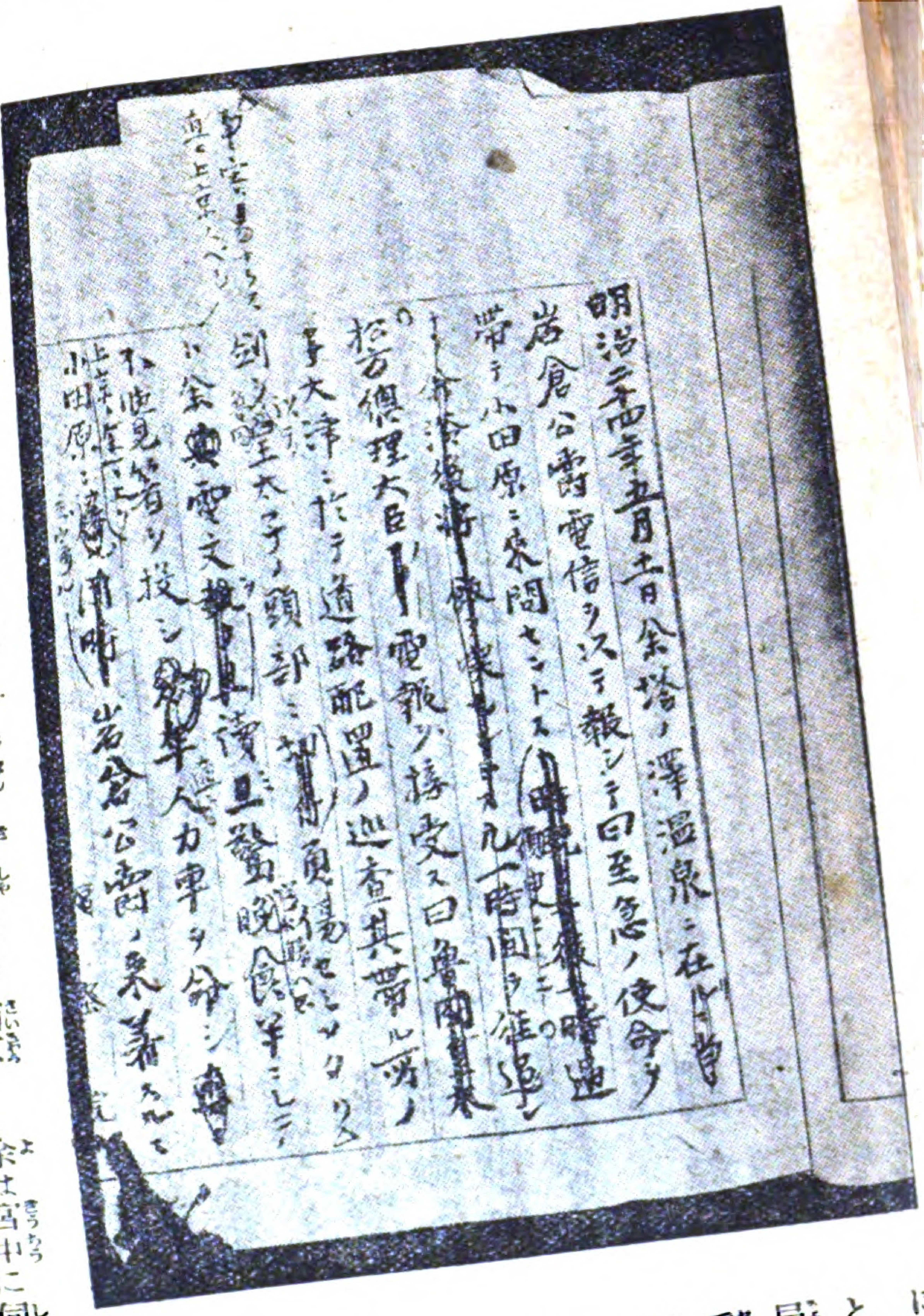
伊藤博文手記

此一篇は明治廿四年五月一日本邦來遊中であつた露國皇太子（後のニコラス第二世ロマノフ王朝最後の君主）が大津に於て沿道警護の任にあつた一巡査の爲に傷けられ、日本朝野は爲に愕然色を失した。その時のことを當時貴族院議長として勢威並ぶものなかりし伊藤博文公が親ら筆を取つて記述された貴重な文獻である。この一篇は伊藤家の秘庫から發見したものである、この一篇を讀むものは當時の朝野がいかに周章せしさまを看取し得。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。日露の風雲の急なりしは讀者の何人も思ひ浮ぶことであらう。伊藤公の親筆及松方總理大臣發の電報なぞ總て「大津事件」に關するものは伊藤公の手によりて一束とせられ、筐底に大事に緘められていた。(記者)

明治二十四年五月十一日、余、塔の澤溫泉に在り、岩倉公爵電信を以て報じて曰く、至急の使命を帶て小田原に來閒せんとす、須臾にして松方總理大臣の電報を接受す。曰、大津に於て、道路警備の巡査、其帶る所の劍を以て、露國皇太子の頭部に負傷せしめたり、事容易ならず、直に上京すべしと、余、電文を讀み、驚愕に勝えず、晩食中にして不覺箸を投じ、直に人力車を命じ、上京の途に上り、小田原に立寄る。岩倉公爵の來着するに會す。相伴て小田原を發す、蓋し即刻上京すべきの內旨を拜す、車を飛して國府津停車場に至り、最終汽車に乘し、翌十二日午前一時、新橋に着す　宮廷より用意の馬車にて、公爵と共に宮中に伺候す、既に御遭の趣を聞き、宮內大臣に面會す。侍從を以て、御寢所に伺候すべきの命あり、御床の下に拜伏し、聖慮を伺ひ、直に退出。內閣大臣に面會、事情を聞く、時已に三時過なり。

西郷、靑木兩大臣は、十一日夜汽車にて、已に西京に向へり。詔勅の發表は、十一日の事と見え、余は十二日の朝、新聞紙の發出しを、車中より一見して、之を知れり。

十二日午前六時、御發輦御供奉の爲め、新橋停車場に至り、龍車將に



發せんとするに臨み、宮内大臣勅命を傳へ、次便の汽車にて、西京に陪従せよとの事なり。

扈従の各大臣及び黒田伯余等は、松方大臣の案内に依り、永田町の官邸に至り、朝餐の饗應を受けたり、相會するもの、山田、後藤、陸奥、及び主人の四大臣、黒田及び余に[illegible]り。

に、皇室罪を以て擬すると、尋常謀殺[illegible]結果となり。余は今般の事變は、實に重大にして、其の結局豫め逆覩すべからざるものあるを以て、處置重きを取らざる可からず。萬一異説を百出し、處罰に困難なるに際せば、止を得ず戒嚴令を發するも可なり。國家の危險を防禦する爲めには、非常の處置も、亦た施さざるを得ざる旨を述ぶ、各大臣も別に異論あるを聞かず、山田伯急に裁判官等を呼寄せ、其の所見を聞き、且つ其の意を陳述すべしと。

余は黒田伯を促して、西京に同行せんことを勸む、伯も之を諾し、直ちに歸去旅裝を用意せんことを約せり。

余は宮中に伺候し、皇后陛下に謁し、西京への御用を伺ひ、退出して帝國ホテルに立寄り、預け置きたる荷物を携帯し、將に發せんとするに臨み、陸奥來訪して曰く、今朝松方邸にて談合の末、裁判官を呼出したるに、異論多し、暫時發途延引せば奈何と、余應へて曰く、

事。陸奥兩大臣來訪せり、曰く、某々の事由なれば、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、せりと爲すこと容易ならん、魯國においては、往々是等の處置あるにあらずやと、余曰く是れ決して爲すべきことに非ず、苟も國家主權の存する、豈かくの如き無法の處置を容さんや、人に向て語るも愧づべしと、云つて別れ、直に黑田伯を三田邸に訪ひ、同行品川停車場に至り、十一時の汽車に發す。

十三日午前六時西京に着し、中村樓に投宿し、喫飯後、黑田伯同伴、魯太子旅館を訪問し、魯國公使に面會し、遭難の不幸に際會せられし事の遺憾に堪ざる旨を陳す、公使余等兩人の來問懇篤を謝し、且痛く日本政府の安全を保證しながら、其の不注意より、異常の事變を出來せし事を批難せり、また靑木、山縣、山田に照會又は應答せし事を列陳せり。

暫時對話の後、旅館を辭し、行在所に伺候し拜謁す、龍駕は、前夜、即ち十二日午後九時半に、西京に御着輦、七條停車場より直ちに魯太子を其旅館に御尋問の豫定なりしも、聞く所に據れば、魯公使聖駕を、七條停車場に奉迎、拜謁を乞ひ、皇太子病床に在療養中、夜半聖駕の親臨を迎送するは、醫師の甚だ懸念する所なるを以て、明日午前に親臨を辱ふせんことを陳奏したるに依り、同夜の御尋問は、延引仰せ出されし趣なり。

余等、對話間なく、行在所に參內し、皇太子旅館に參候すべき旨を命ぜらる、太子と對話等は、當時兩陛下に記述する所と、大同小異なり、余等は行在所に在て、御歸館を待つ、十一時半頃御歸館あらせらる、接待員三宮義胤行在所に來り急報して曰く、魯太子本日京地を去り、將に神戸碇泊の軍艦に歸らんとす、魯公使は急に、靑木子に面會を求むと、靑木子曰く、其事は余も既に之を聞く、旅館の形勢は、魯人等恰も敵の圍繞中に在るの心地なり、我巡査は勿論、兵隊の警護を見るも、其の銃口より何時皇太子に向て發彈するも測り難し、今朝已に魯太子寢室の鍵、日本館の欄干に倚るを見て、侍從の武官、皇太子を擁抱して室內に引入れたり、如斯の形勢なるを以て、皇太子旅館の近邊にて、短銃一發の聲を聞くも、其國旗を卸して、退去せざるを得ずと、魯公使の語る所なりと、靑木子入つて御事情を奏聞す、須臾にして、靑木子出で來て、余に聖諭を告て曰く、之を東京に誘招せずして、此地を去らしむるは、容易ならず、如かず先づ伊藤をして魯公使に面し、皇太子を此地に留めしめんことを試むる可しとの聖諭なりと、余應て曰く、聖諭若し皇太子を強て此地に留め、然る後、東京に誘引せんとの叡慮にて、其の安全を保證することの委任を蒙らば、余は必生の力を盡して之を試むべしと雖、此事甚だ重大なり、然れば、余足下と共に先づ旅館を訪問し、公使に面會し、其の事情に依り、臨機の處置に出

の外なしと云て青木子と同件、魯太子の旅館に馳せ、魯公使に面會を求む。玄關にて倉卒の際、青木氏他室へ入る、余獨り公使と面會し、太子神戸へ去らんとするは如何の事情なるやを問ふ、公使曰く、本國よりの電音に接す、皇太子をして、其の安全を得せしむる爲めに、速に神戸碇泊の軍艦に避けしむ可しとの命令なりと、實は魯皇后非常に皇太子の身上を憂慮し、已に嚮に太子の印度に在るに當り、英人の新聞に、印度人等皇太子に不快の念を懷抱するもの多く、或は禍害を加へんとするものありとの事を掲載したるを以て、皇后は中路より、皇太子に回轅せしめんと欲せし程のことあり、圖らざりき、日本に於て、如斯の兇變に遭遇し、皇后の寢憂一方ならず、故に此の嚴命を下す時も、等閑に附する能はず、皇太子は、此の電音に接せしにも拘らず、是非東京に到り、日本皇帝に謁すべしと主張せらるれども、本官等本國の命令を重んじて、之を聽く能はずと、談話中青木子も室内に入り來り、三人談話中、公使曰く、翼くは日本天皇陛下、魯太子を天皇の親子と思召され、其の鄙翼の中に入れて、神戸港迄御連れ越しあらば、無上の恩澤なりと、涙を揮て語れり、余應へて曰く、好し、然らば逐一に閣下の談話を奏聞すべし、我皇上陛下の至仁なる、固より閣下の請を容させらるべ

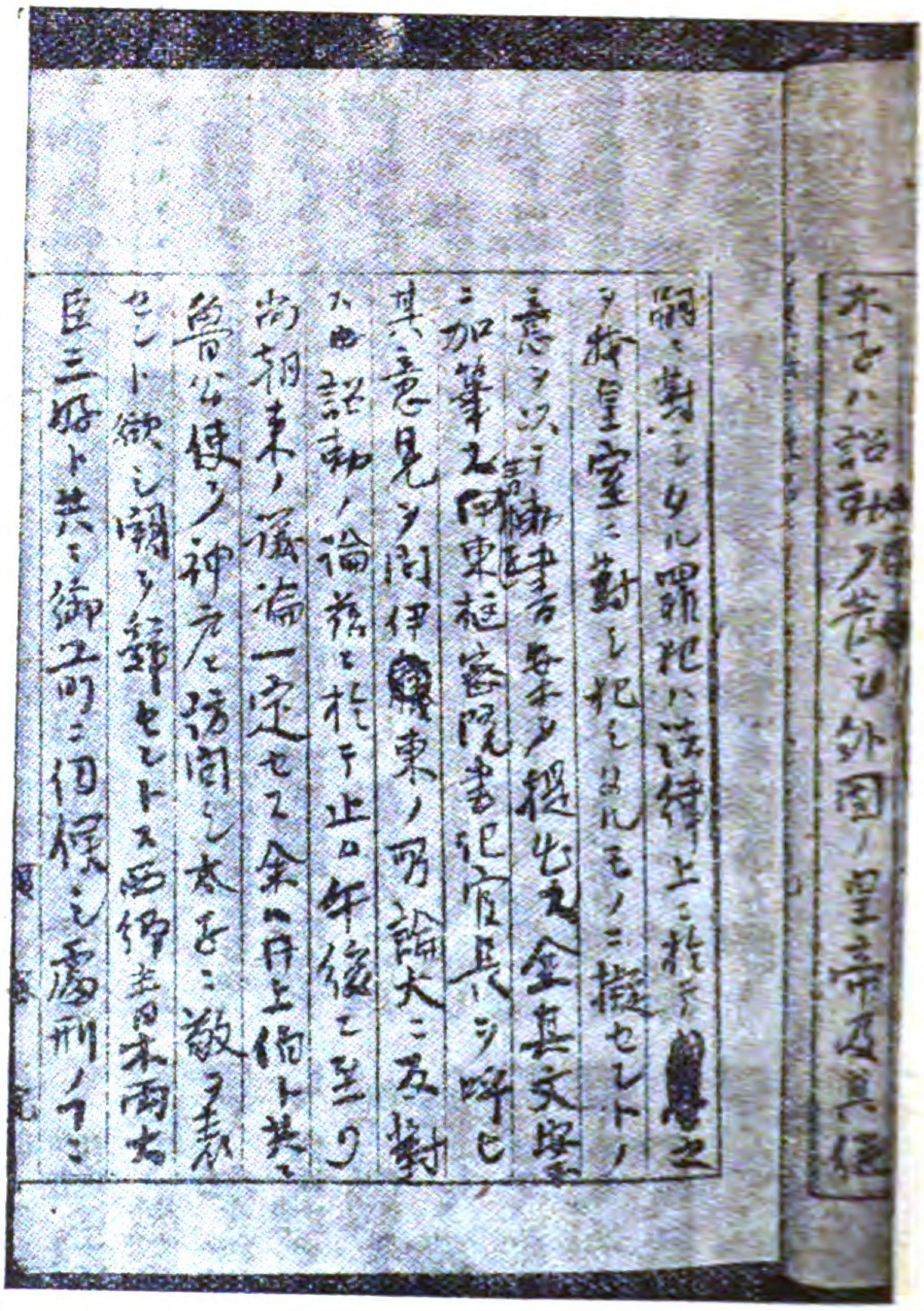
同日午後四時御出門、魯太子の旅館[illegible]停車場に至らせられ、四時三十分の特發汽車にて、神戸港に魯太子及びグリーキ親王を御同伴あらせらる、三宮停車場に着御、同所より御同馬車にて御用邸に入らせられ、同所にて暫時御休憩、御談話あり、余等陛下の側に侍して、初て魯太子に謁す、既にして海岸より、艀船の用意整ひたるを報じ、波戸場迄御見送りあらせられ、午後六時の汽車にて行在所に還幸あらせらる。

十四日午前十時參朝、西郷、青木、土方三大臣、黒田伯、及び余も亦候所に列す、處刑の論及び滋賀縣知事警部長等進退の評議あり、井上伯東京より内閣の意を受けて來る、三好檢事長も裁判起訴の命を奉じ來る。

魯帝及魯皇后よりの電報達す。

此間東京政府と行在所との事變に就ての往復は、一切余等與り知らず。

十五日午前十時參朝、列座の人員は前日に同じ、但し井上伯、野村子及び三好檢事長も參會す、前日來處刑の論あり、何れも皇室罪に擬するは異議なし、三好檢事長は、東京政府は各大臣大に盡力せられ、皇室


木子ハ詔勅ヲ發シ外国ノ皇帝及其継
嗣ニ對シタル罪犯ハ法律上ニ於テ之
ヲ我皇室ニ對シ犯シタルモノニ擬セントノ
意ヲ以テ勅書案ヲ提出ス余其文案
ニ加筆ス伊東枢密院書記官長ヲ呼ヒ
其意見ヲ問伊東ノ所論大ニ反對
ナリ詔勅ノ論議ニ於テ止ム午後ニ至リ
尚朝来ノ議論一定セス余ハ井上伯ト共ニ
魯公使ヲ神戸ニ訪問シ太子ニ敬ヲ表
セント欲シ闕ヲ辭セントス西郷青木両大
臣三好ト共ニ御前ニ伺候シ處刑ノコ

木子は詔勅を發し、外國の皇帝及び其の繼嗣に對したる罪犯は、法律上に於て、之を我皇室に對し犯したるものに擬せんとの意を以て、勅書案を提出す、余其の文案に加筆す、青木子伊東樞密院書記官長を呼び、其の意見を問ふ、伊東の所論大に反對す、詔勅の論玆に於て止む、其後に至り、尚朝來の議論一定せず、余は井上伯と共に、魯公使を神戸に訪問し、太子に敬を表せんと欲し、闕を辭せんとす、西郷、青木兩大臣、三好と共に御前に伺候し、處刑のことに付、東京及び行在所にての論旨の在る所を奏聞せんと云ふ、同時に余等は時刻切迫せるを以て退出せり。

木屋町吉田屋に立寄り、暫時休憩の後、六時五十分の汽車にて、井上伯同伴七條停車場を發し、九時半頃神戸に着、諏訪山常盤樓に止宿し、接待掛三宮義胤氏に托し、露公使へ面會を乞ふこと依賴せり、翌十六日午前なれば、都合克き趣を回報せり。

十六日午前、青木大臣來港の電音に接し、爲めに露公使を訪問することを延引せり。青木子は午前十時頃來港、余等の旅宿常盤樓に來り、露公使より面會を求め來れるに依り、尋問せんと欲す、願くは余等兩人先づ面會したる後に、青木自ら尋問せんとの事なりしも、余等は公務に關係あるにあらざるを以て、之を避け、午後に尋問せんことを陳し、青木子は直に露公使を訪問の爲、余等の旅館を辭せり、正午頃、青木再び旅館に來り、露政府より公使に訓示したる電報の英譯を示せり。

余等青木子に問て曰く、露政府今般の事變には、我に向て要求す

所なしとの事なれば、我犯人の處分に於ても、啄を容るることなく、彼れ滿足するの意なる乎と、靑木子曰く、犯人處罰は、死刑にあらざれば、到底彼の承服する所にあらずと、余等曰く、然らば現に擬律の事に就ては、東京に於て異議紛々、奈何の局を了するや、豫め測るべからざるに、魯政府現に要求するところなくして、暗に處刑上に求む所あるの意なりとせば、政府は萬一法律論の變遷するに際せば、中に彷徨し、國家をして容易ならざる困難の地位に立たしめざるを得ざるべし。若し今手強く魯公使に談判し、其の意嚮を開糾し、彼れ强て、、、、、、、、、、、、處刑せられんことを要求するとならば、公然書面にて照會せざることを得ざるべし、果して如斯の意氣込なるや、豫め探窮せざることを得ざるべし、然らざれば、再び困難に際會するなきを保し難きに非ずやと、靑木子此説を是認し、然らば今一應公使に面會して、之を確むべしとて、再應魯公使を訪問する爲め、辭し去りたり、凡そ一時間も經過したる頃、一書を携帶し來り、余等に示せり、其書の趣意は、罪人の性質に依り、罰せらるべきものなり云々なりしと記憶せり、靑木は余等に魯公使と談判の顚末は語らず、余等其の曖昧なるに疑惑せり、唯だ此書以外は、彼れ書する能はずと云て、直に汽車の時刻切迫なるを以て立去れり。

余は井上伯同伴、午後二時過ぎ魯公使を其旅館に訪ふ、恰も靑木子先づ座に在り、子暫時にして辭し去る、余等公使と對話、皇太子
過の模樣如何を尋ぬ、公使曰く、漸時快癒の趣なれども、未だ[illegible]を取換ざるを以て、明日取換ゆる筈なりと、且つ日本政府の皇太子に對する甚だ緜疎なるを痛談し、就中其の安全を保證したることより、太子自己の指揮に屬する軍艦八艘を率ゐ來るに就ては、海路各港に寄港することの豫め許諾を得んことを、外務に直話請求せし所、兩三日を經、書記官を以て、皇太子乘組艦の外、一艘を隨伴するを許すも、他艦は之を隨航することを許さずとのことなりき、然るに八艘の軍艦は、皇太子の指揮するものにして、水師提督も其命に隨はざるを得ず、之を如何ぞ二艦に制限すると云は、恰も二人に隨意旅行を許し、他は之を禁ずと云が如し、苟も魯國皇太子として待遇せられば、如斯回答なかるべし、若し日本政府不承知とならば、砲擊せらるるの外なし、萬國決して、箇樣なる不敬のことなかるべしと、書記官に返答せり、然るに數日を經て、皇太子引率せらるる軍艦は、各港に入港するも妨なし、前日の回答は書記官の誤傳なりとの事を報じ來たり、夫れ如斯、政府の魯太子を待遇する、、、、、の來遊を待つに異ならず、若し魯國皇太子を、日本に遊歷せしむるに於て、微行の體を用ふることを得ば、或は今般の事變の如きに、遭遇せざりしならん、然れども、魯帝は其の皇太子をして、敬意を日本皇帝陛下に表せ

しめん爲めに、暗に皇太子の資格を以て、來遊せしめられたり等の說話を聞けり、余等は此度の如き事變の出來せし事の、逆旅に歸へざる趣を述べて別れを告げ、再び諏訪山旅館に立寄る、恰も好し、坂本子來訪するに會す、子午後四時を以て、皇太子を其の軍艦に訪問するの兼約あり、余等子と試みに處刑の事頗る困難なるを談す、子曰く、本日時機を得て、公使と私に之を談す可しと、子は直ちに去て軍艦を問ひ、再び余等を旅店に訪ふ、子曰く、試みに日本の刑法論を提出して、既に謀殺未遂を以て、裁判官の擬律するところ假し輕し、左すれば其刑は終身懲役に止まるべし、公使忽ち顏色を變じ、終身懲役の罪を以て擬す、余は兩國の間、何等の大事の出來すべきを保せずと、子之を慰諭して、公談にあらず、怒氣を含む勿れと云て立ち去りたりと、如斯の事情なるを以て、子の見る所も亦た死刑にあらざれば、到底此事變の結局を滿足に了すること難かるべしとの意なりしなり。

(公の手記終り)

各大官間の公私電報

(事變突發と共に、朝野は愕然として色を失ひ、京都、大津、東京間は櫛の齒を引く如き電報の鈴のけたたましい幾日かを送つた。其間に於て、多少の史料ともなる可き數通を摘記する)

(一) 滋賀縣知事發、宮內大臣宛(十一日午後五時四十分)

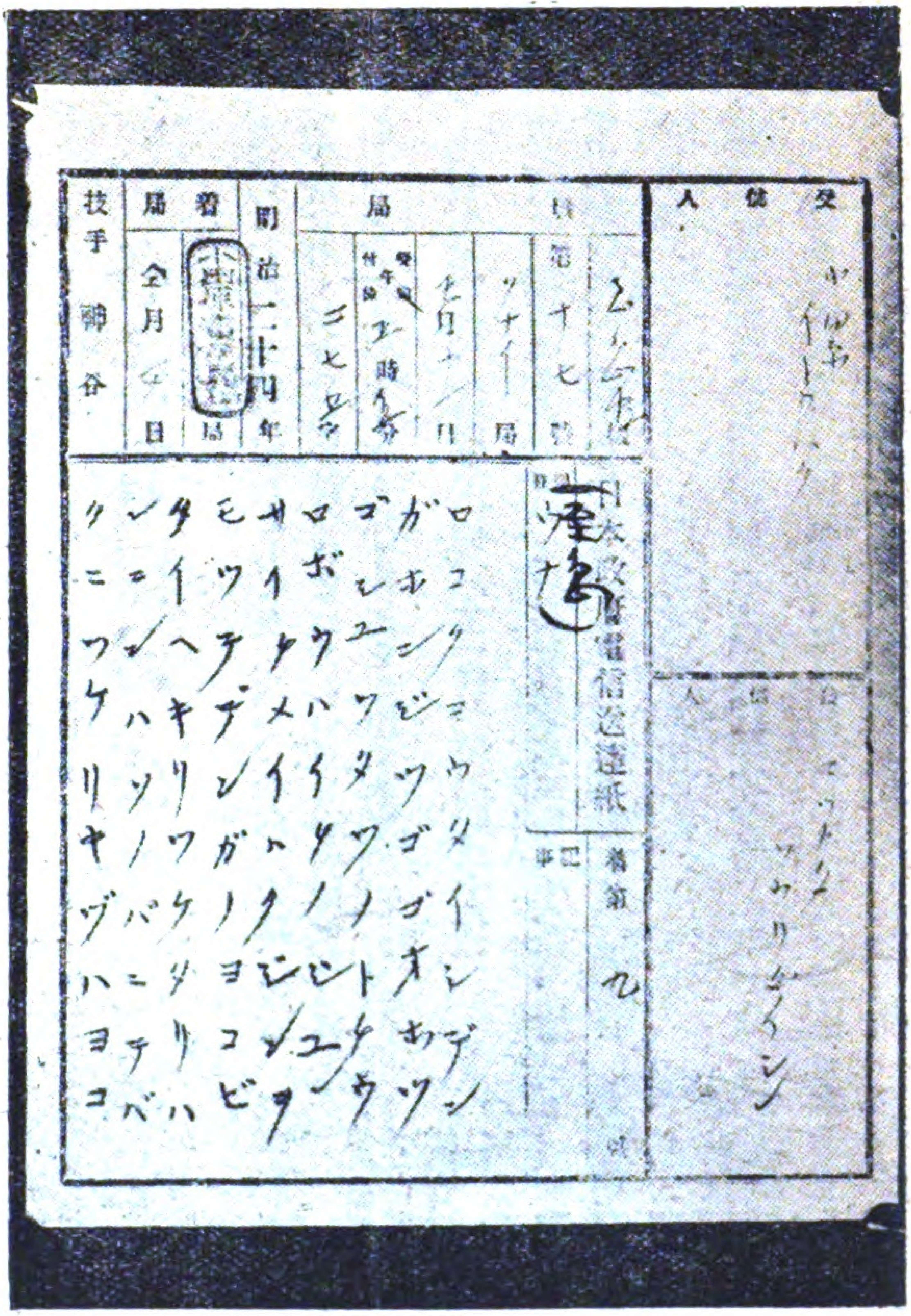
露國皇太子殿下、縣廳より人力車にて、馬場停車場三時五十分發、京都御着、顏色御變りなく、御步行ながら、侍從の者に御話にて、馬車に召されたり、

(二) 滋賀縣知事發、宮內大臣宛(午後八時四十分)

兇行者津田三藏を切付たるは、御先導警部なる旨電報致し置しが、右は警部に非ずして、露國皇太子殿下の人力車夫が、兇行者を引倒したる際、取落せし刀にて、他の車夫が切付たるものにつき正誤す、

(三) 京都にて川上中將發、宮內大臣宛(十二日午前一時)

露國皇太子殿下、本日八時京都を人力車にて御發し、大津所々御巡覽の末、滋賀縣廳にて御晝餐、午後二時前、縣廳を發し、纔かに六七町なる、大津京町御通行の際、右側にある途上警衛の巡査、津田三藏なる者突然拔刀、皇太子へ切掛け、帽子を透し、右の鬢の上部を、後ろより前へかけ、二ケ所の疵なり、察するに一ト太刀にて切れしものなり、暫く路傍の商店にて、出血丈けを留め、繃帶を纏ひたる上、靜かに縣廳へ引き戾り、暫らく御休憩、京都大阪等の醫者へ電報を發したり、夫れより馬場停車場より、汽車にて京都へ着、五時十分頃御旅館へ御歸り相成、直ちに治療に取掛りたるに、御負傷は頭蓋骨までは達せざるよし、疵口一ケ所



は長さ九サンチメートル、一ケ所は七サンチメートルとの診察より、只今療治濟にて、御氣分は至つて慥かなり、狼藉者は、希臘皇族杖にて打倒したる處へ、何者か狼藉者へ重傷を負はせたり、之は只今取調中なり、右上申す、外務大臣へも御通知ありたし、

（四）松方首相宛、大津市廳に於て、西郷内相、山田法相發

につき、兩人より充分意旨を通ぜしめたり、

（五）松方首相宛、西郷内相、山田法相發、

明日午後公判を開くに決す、此上は裁判官の意思に任すより外なし、

（五）井上伯より齋藤へ來電

犯罪人處罰は異論多く、決行むつかしきか、若し死刑に行はれぬなれば、國家危難の地位に陷るゆゑ、陸奥の盡力此時なり、内閣更迭論起りたりと見ゆ、如何の様子か至急報知あれ、右陸奥に通ぜよ、

（六）井上伯へ陸奥よりの返電

犯罪人處分の件は、裁判官實地に付き取調べたるに、何分前議の通り、貫き難き傾きある趣、三好より報告ありたるに付、山田、西郷は昨日より大津へ出張し、精々盡力中なり、内閣更迭のことは、新聞紙などには散見すれども、兼て御承知の兩三名の外は異狀なかるべし、

（七）榎本宛、西公使發（六月三日午後五時露部發、四日午前十一時東京着電）

露國外務大臣は、露國政府に於て滿足せる旨を公言せり。

存じたるに、露の政府も人民と共に、日本の皇帝政府も、亦之に對して、深く悲惜を表せられたるに因り、皇帝及皇后兩陛下は、今回の事件の成行きを以て、巳に充分滿足せられたり、現に皇帝陛下は、日本に於ては、其の犯に對す可き丈けの事は、既に之を盡したるが故に、最早此事件に關して、何等の要求を爲すに忍びざるなりと曰へり、又陛下は、威仁親王特派の事につき、余に問うて曰く、此の上更に惋惜の情を表するの證明を受く可きの必要なきが如し如何と、因て余も亦同一の思想を懐けるを以て、[illegible]りと[illegible]

以上に依りて公爵上官に告げし所なり、同氏は更に余に向つて語りたり、曰く『實は陛下は、使節を〇〇、不明ならん、然しながら陛下には要求を爲すの意あるを以て、若し使節を特派せらるる時は、陛下に面謁に止まらざるを得ざるの不便を生ぜん、況んや使節特派の目的なるや、獨り日本國政府の爲のみならず、双方の爲めに不愉快なるに於てをや』とれた以て、余は露國政府が、使節の特派を希望せざるものと思考す。

露國に於ける輿論

西公使報告の(一)、(五月十五日發)

本月十一日當國皇太子、大津に於て狙撃の難に遭はれ候電報達せし以來、今日迄、此地に於て、拙官の當國外務大臣と應接の大略、並に之に關して、當國人心感慨の狀態等は、追々電信を以て、申越候へども、猶左に日記を以て、其委細を陳べ候。

十一日晩凡十一時に、閣下より發せられたる第一の變報達し、右は早く通ずるに如かずと存じて、直ちに其用意を爲し、外務大臣ギルス氏方へ出掛けしは、夜十二時過に有之、偖て同氏に向ひ、甚だ殘念に存ずるも、思ひ掛けなき事到來せりとて、電文通りの趣を傳へ候處、同氏大に驚き、何を以て傷けしや、生命に御懸念なきや等、委細の間を續け候に付、是丈けの電文を得たる儘にて、御通知を急ぎし事なれば、遺憾ながら別には御答へも致し難しとて、電文の寫しを示し候所、同氏之を一讀の後、手を以て額を押へ、拙者には全く雷に擊れたる心持にて、何とも云ふを得ずと、暫くありて、此事甚だ重大なれば、帝へ奏せし後に非れば、何とも御答へに及び難し、最早夜も深けたれば、何れ明朝ガッチナへ出張して、奏上すべし、唯怪むべきは、貴政府に於て、ファナチックに對し、我太子を保護せらるる能はざりし事なり、既に前に此徒の我在東京公使館を亂暴せし時、帝にも太子の旅行を懸念せられしより、念を推してセーウヰチ公使に問ひ遣りしに、同公使は貴政府に於て、斯る懸念には及ばずと云て、安全を保たるゝに付ては、別に不安心の事もある間敷と答へしに、

り、御決着になりし次第の處、事此に及びしか、實に遺憾千萬なり、此より悪しき出來事とて、外に在るべきに非ず、なとと申て、深く感激の體に相見え候に付、拙官より、右は明日の話に致すべし、唯一言申置度事あり、夫は時を以て之を考ふるに、此の電信は、變報の東京に達するや否や、直に發電せしものと見ゆれば、或は慌忙の際、善く事を檢査することも待兼ねて、深手と認めたるも計られざるに依り、之を希望して後報を俟つべし、此事情をも注意して、御奏聞に相成度と云て辭去せしが、去るに及んで同氏より、此一件は、事實明白に分る迄は、秘密に致し呉られ度との依賴あり、此夜右の大略を電報す。

十二日、午後五時、ギルス氏を訪うて、其帝へ奏聞の樣子を尋ね候處、帝並に皇后にも初め非常の御驚きなりしが、幸にして此時太子より直に帝へ贈られたる電信達し、之に據れば、事は格別のことに非ずして、氣分も隨分好しとあれば、假令父母の情を慰する爲めに、輕く云ひ遣られしものと見ても、自ら夫程の事を傳へられし儀なれば、先づ生命には懸念も可無之と、少しく安心せられたり、唯奇に思はるゝは、セーウヰチ公使及びパリヤチニスキーより、未だ何たる報なし、今少しく委細の報を得たく、且つ帝より御沙汰も之有候故、貴下方の續報は、何卒晝夜を問はず通じ呉れられ度し、との依賴ありし故、わが外務大臣も此報を聞くや否や、直ちに出發せしとあれば今頃は其地に達し居る事と存ずるに依り、今夜中には後報も達すべしと申置、拙者にも稍々安心して歸り候、此夜我、天皇陛下西京へ御出發、並に太子の經過宜しき報達せしにより、何れも直に寫してギルス氏に送る。

十三日、官報を初め府下の諸新聞紙へ、露國皇太子、大津に於て巡査に狙撃せられ、希臘王子の防禦に由て、難を免れられたる趣見はれ、衆の驚き一方ならずして、感情甚だ悪く、就ては拙官にも甚だ疑念に存じ、ギルス氏へ面會して、拙者には獨事を秘し居たるに、本日忽ち巡査三人を添へて、布告せられたるには驚きし次第なり。

右の事實は、拙者方へは未だ通知も無之に何に據て出されしやと詰問候處、右はセーウヰチ公使及びパリヤチンスキーより申來りしにより、事實と認めしとの答に依り、然る上は余議なき次第ながら、假令夫は事實にしても、本日の布告は、我に對して無情甚しく存ずるなり、其譯は、拙者の第一に受けたる公報に、狙撃者はファナチクとある以上は、假令巡査たりとも、其發狂人たりしには相違なきこと、全體右は全く不意に出たる不幸の出來事にして、我邦の深く此の不幸を惜み、上下一同其感情を表するの切なるも、亦事實なり。然るに今日の布告に放任する時は、保護すべきの巡査、太子を狙撃し、之を殺

かしは[illegible]一[illegible]にて、[illegible]と
せざるもの丶如くに[illegible]はる丶は[illegible]なるに依り、明[illegible]の
官報と佛字新聞紙へ、拙者の[illegible]を[illegible]して、當國民の[illegible]を和
ぐる樣、致し呉られ度段、請求致し候、既に第一の布告[illegible]かなる以上
は、致方なしとて、初めは應ずる色なかりしに依り、若し然らば、明
日は一般の感覺猶惡くなり、人心激昂して、拙者には本職務を盡す能
はざるの地位に陷るべければ、自然此地に滯留も叶ひがたしと迄に申
し詰たる後、漸く之に應じ、然らば直に宮內大臣へ掛合て、其筋に取
計らふべしとの約束を得候へども、猶氣に掛り、出來る丈、知己間
へ、右は其實發狂者一人の所業にて、我邦官民一同、痛惜の感已まざ
る狀態なるを傳播し置候、此日我
天皇陛下京都へ御着の件、併に太子の容體益々宜き件の電報達し
て、之をギルス氏に送り、又前文の大略と、事情說明の必要ありとの
趣を電報す

十四日、官報及佛字新聞紙へ、昨日請求の布告載り、他の諸新聞紙
も、大抵皆な我邦のため善き方に說き成し、府下の感覺變じて復た巡
査を說かず、或は此事たる、當國虛無黨の所業ならんと云ひ、或は他
の外國人の賄囑に出でし者ならんと云ひ、區々の評判皆な咎を我國に
歸せしむるを欲せざる者の如くなりし。

[illegible]を代へられた、[illegible]一同
心痛を表し、太子[illegible]へ贈られ、我[illegible]下[illegible]され、[illegible]
王を[illegible]せらる丶等の電報達せしに依り、其寫を直にして、ギルス
氏へ出掛候處、本日は同氏も顏色打解け、今日の新聞紙には御滿足
なるやと聞ひつ丶、相迎へ候に付、厚意の厚きを謝し、諸通信を
傳へ、且特派使節の一條は、書面を以て陳ずる筈なるも、何分事情至
急ぎ、再する暇あらざるより、此寫しを以て、公文と認められ度しと
陳べ候處、右は何れも直に帝へ送るべしとの答に有之候、依りて
兩陛下の有樣を承り候に、我皇后陛下より當國皇后へ懇切なる電
信を贈られ、皇后にも直に之に答へられて甚だ御滿足なり、尤も皇帝
に同樣なりし等の話有之、夫より向後太子の御旅行に付ての意向は如
何と尋ぬるに、右は此犯罪たる、或は賄囑に出でし者に非ずやとの疑
問も起り居れば、何分犯罪の原因及び其の狀體等明かなるに非れば、
決せられ難しと申事なりし故、拙者に於ては、唯發狂者一人の所業に
して、別に連類者あるに非ずと信ずれば、向後の處決して御心配に及
ぶまじくと存ずる趣を申陳置候、此夜本文の大略並に諸新聞紙の
說を電報す。

十五日、本日は電信も達せず、別にギルス氏と相見ゆるの用も無く
して、初めて此報告を草するの暇を得候處、今回の事變は誠に意外

にて、當館員にも一同甚だ心配致候へども、幸にして疵も輕く、太子の身安全なる以上は、別に我邦の爲め慮る事も有之ましく、尤も拙官等猶此上に當國官民に對して、其の我邦に於ける從來の好意を失はしめざる樣、注意すべきは勿論の事に候處、唯遺憾に存するは、本邦より初發の變報稍々重きに失し、其内に生命には懸念なしとの一言無かりしことなり。此の一言無かりし故を以て、拙官等を初めとして、大に生命を危み、殊にギルス（希臘）皇帝皇后にも、之に由て初め大に驚愕せられ、皇后には一時氣絶せられしとの評判も有之候。

目下の論は、向後太子の進退如何に有之候處、右は到底當國帝に於て、此地彼地兩方の意见所望を折衷して、之を決せらるるものとせば、此地皇后に於ては、一旦驚愕の餘、殊に二子ジョルチ親王にも、病氣の事なれば、頻りに心配せられ、太子の急に日本を出發せらるるを切望の由に候得ば、太子彼地に於て自ら我國內の旅行を續けらるるの望切にして、且其の隨員及セーウヰチ公使等も、前途の安全なるを確言するに非ざれば、神戸より直に出帆に決せらるる方近かるべしと察せられ候。

本月十六日、外務大臣ギルス氏來訪、當國太子[illegible]官の盡力の勞を謝し、且つ申さるるに、今回の事件に付、當國皇帝皇后兩陛下、共に愛惜同感の情を表せらるるの深切なるには、我皇帝皇后兩陛下共に甚だ御滿足にて、感謝せらるる所なり。依て特派使節の儀に付ても、我帝の仰せに、貴國に於ては、出來る丈けの事は、皆既に盡されたり、早我より別に何も請求すべきことなし、然るに此上猶特派使節迄も煩はして可なるやと、就ては拙者にも既に其の必要なかるべき趣を申上置きしが、彌々御派遣になれば、我帝に於ても御請けに相成る可きは勿論の事ながら、右は猶相談事なれば、一先づ貴意も伺ひ度と、依て拙官申すに、貴國皇帝陛下の御懇意に辱けなし、特派使節の儀も、本と我が皇帝陛下に於て、深く此の不都合の到來せしを惜まれ、十分に同感の情を表せられ、親睦の交誼を盡さるるの誠意に外ならず、然るに既に盡されたる所を以て、十分に御滿足なる以上は、拙官に於ても、貴官と同意なるも、今一つ伺ひ度きは、內[illegible]の[illegible]賓なり、當國兩陛下にも、近々御旅行の噂さあれば、或は其途にも關係ある事に非ずや、如何、ギルス氏曰く、內體は亦た其の關係なきに

く、[illegible]に於ては、[illegible]は、[illegible]に、[illegible]より[illegible]可き所なれども、[illegible]なしに[illegible]十分と認めらるる以上に、[illegible]申すの外なしと存ずるにより、此趣は委細本邦へ申遣すべしと、夫より拙官話を轉じて、今回遭遇したる我國議院を初め、國民一同より太子の我內地旅行を續けらるるを切望する事に移り候處、ギルス氏其の隔なきを謝して、右は何れ帝へ奏聞すべしと申事なりしにより、拙官然らば、右は書面に認め、追て持參更に御相談に及ぶ可しと申置て相分れ、前條の電報に着手す。

同日夕方、別紙寫の通り、我國民の所望に關せし書面を以て、ギルス氏へ出掛け、之を一讀せしめて後、拙官申すに、我國民一同より、太子の我內地旅行を續けらるるを希望するの切なるは、此に盡しあれば、別に拙者より加ふる事も之れ無く、唯だ向後途中安全の事に至ては、我政府に於ても、注意に注意を加へ、各地嚴密に取締るべきは勿論なれば、決して御心配に及ばず、尤も若し此の出來事に依て、御旅行の日取に差支へを生ぜば、他所は兎も角も、東京迄は是非御出に相なり、斯く迄懇望の衆民へ無異に旅行を續けらるるの御容體を見せられ度、然る時は我帝室政府は勿論、國民一同も安心し、太子の御氣色も幾分か改るべしとの趣を縷述して、此の所望の遂ぐる樣、盡力致し呉られ度と依賴候處、ギルス氏暫らく案じて答ふるに、甚だ遺憾に存ずるに、[illegible]は東京公使館を[illegible]し[illegible]壯士と稱する者も「サムライ」たり、[illegible]の巡査も「サムライ」たりしと云ふ「サムライ」の數多しと聞けに、[illegible]後安全の點に於て、甚だ懸念に掛るなり、其譯は、前に壯士選擧の時に云云とて、前報告に陳べ置きしことを復せしにより、拙官之を辯じて、「サムライ」とは昔時士族の稱號にして、此の士族は、略々當國の士族に類し、我邦に於て、教育上尤も進步したる中間の族なり。故に政府の官吏も多く此より出づ、即ち拙者輩も之に屬するを以て、士族全部の危む可き者に非るを知るべし、又た彼の壯士と稱する者は、唯だ街頭の惡少年輩相集り、投石暴擧等の惡戲を爲すに過ぎざる者にして、決して此節發狂の巡査と關係ある者に非ず、其皆な士族に出しは、偶然たりし趣を申聞かせしに、同氏の疑惑少しは解けし樣子なりしも、全く合點したる風にも見えずして云ふに、若し他の諸親王たれば格別、然し太子の事なれば、拙者より押して申上る譯にも參らざれば、兎に角貴君の辯解をも添て、帝へ具申すべし、唯だ太子去留の論は、帝と太子との間に、通信往復に因て、決せらるるものと、承知呉られ度しと、夫より當國政府の頻りに太子の出發を急ぎ居らるる事等を話して、國民の其間に處する困難の情實あるを覺らしむるに意あるを認め候に付、然らば拙官直ちに此の懇望を、兩陛下に面陳致度存ずるに就

き、謁見の都合を取計らひ呉られては如何と問ひ候に、ギルス氏の答に、明日、明後日の兩日は祭祝日にて、帝にも相見らるるの暇なく、明後々日には、拙者ガッチナへ赴くに由り、其時帝へ伺ふ事と致度とて、賛成の風にも見えず候に付、之を強ひても無益と存じて、其意に任せ、唯本文の願意は、直ちに帝へ電報し呉れらるる樣依賴致し置き、歸りに旅居へ近き一知人の方へ參り、事の次第を內話して、何とか此の所望を遂せしむる工風はあるまじきやと、相談に及び候へども、知人の說に、此論の決して、他人中喙を容るべきは、唯ギルス氏一人なるに、同氏にして意見如此なれば、假令傍らより中入れても、其詮なかるべしとの事なりし故、拙官も此上は致し方無とあきらめたる次第に候、然る處其翌十七日夜十二時に至り、別紙寫の通りギルス氏より返答參り候に付、其趣は即夜電報致置候。

二十日、皇太子昨日ウラジオストックへ向け出帆せられたる趣、橫濱よりの電報諸新聞紙に出づ、依てギルス氏を訪ね、太子にも彌々神戶より出發せられたる趣に見ゆれば、貴君にも御安心なるべしと伺ひしに、同氏氣の據かりし顏付にて、拙者には唯今此報告を得し所なりとて、セーウヰチ公使、神戶より發したる電信を示し（此趣[illegible]

も今回の事件に付ては、貴君に於て、嘸て不愉快なりしたらん[illegible]儀なりと仰せられたり等の事を傳へ、且つ不幸の出來事反て兩方の親睦を厚ふせり抔申して、拙官を慰むる風なりしに由り、拙官に於ては、太子の無事に出發せられ、且つ貴政府に於て、我邦人情の誠實なるに滿足せらるるを見るを以て幸とする趣申述置候、此夜當國太子の出發並に威仁親王特派の儀御取止の電報達す、廿二日特派使節の儀に付、別紙寫し通り書面を以てギルス氏に報す。

廿三日、ギルス氏方に於て、外交官招待の食事あり、拙官にも其の招きに預り、主人ギルス氏と密話の機會を得て、昨日の通牒を領せられしやと尋ね候處、同氏之を諾し、其趣意はお互の望む所なりとの答に有之候。

拙官の當地に於て、太子遭難事件に付、ギルス氏と問答の大略は、前述の通りに有之候、太子我邦內の旅行を續けられざりし一事、甚だ遺憾に存じ候へども、右は兎に角狙擊者の巡査たりしと、前に壯士[illegible]の露公使館へ暴を加へしとに由り、當地の見當にては、禍源測られざるの懼れあり、向後安全の一點に於て、遂く子を思はせらるる御親[illegible]

氏の語に由て見る可き條に候へば、是れ又無理ならぬ事と存候。然るに
し太子の東京へも往かれずして、神戸より直ちに出發せられたるには、
當國[illegible]人、及び上中等社會は之を惜み、且つ非とする者多く、其
の急に軍艦へ立退かれしも同樣にて、右立退の事は、随員バリヤチン
スキー氏の所爲ならんなどと申者も有之候へ共、當國帝、五月十四日、
海軍一般よりの祝詞に答へて、太子の無事、新に我親愛の情深き忠臣
等相團結する海軍の艦内に歸られたるを知るは甚だ幸なりと云はれ
し事等を以て、之を考ふるに、右は此方より命令ありしものには相違
之れあるまじく候。

當國政府に於ては、今回の事件に付、本邦政府の御處分を以て、十
分に滿足せしは、拙者の證するを得る所にして、殊に我皇后陛下よ
り、當國皇后への御陳意最も著しき結果を呈したる次第は、當國皇
后に於て、伺候の人々へ、日本皇后より、毎日程、かやうくの電信
を下され、誠に御親切なり、此方よりも之に應じて、互に相往復すと
の御話屢々之れあり候由にて、我皇后陛下の御名、當地の上等社會
に著はれ、日本皇后陛下は、子を愛するの情深き御方なり、兩皇后之
に由て御親みなされしと、轉々相傳へ、此間、その事客間の流行談と
相成居候、又國民一般の感覺に至ても、惡しからざるは、初め犯罪人
の日本人たるを信ずるを欲せざりしを以て知るべし、その彌々日本人
たりしに[illegible]、[illegible]も、[illegible]に至ては、猶
はニコライ附、東京の[illegible]に[illegible]を建て、士民の[illegible]を評論し
て、遂に此に至らしめしとも云ひ、或は太子強て禁域の區域に入られ
しを以て、此禍に罹られし者にて、右は全く随行員不注意の致す所
なりし抔とも云ひ傳へ、事猶遂に定らざるが如くにして、大津出來事
の噂さも、大抵既に靜まり候。

今回の事件に付、拙官ギルス氏と數日間應接中、常に遺憾に思ひし
は、最初犯罪人の資格、姓名、年齢、出所及び車夫の太子を救ひし状
態等、即ち變後當地に於て最も早く知るを渇望せし事實の御報告皆後
れ、拙官の方より、第一番に當政府の所望を充たす能はざりしと、前
に在東京露公使館亂暴の始末、全く御通知になり居らざりしを以て、
辯明の際、不如意を覺えし事少なからず、尤も最後の一條は、拙官も
當時我新聞上にて之を讀まざりしにも非りしも、慥かなる事は何も承
知致さざる儀に付、最早必要も無かるべしとは存じながら、後日參考
の爲め御通知相成度候。

西公使報告の三（六月三日發）

去月三十日、御電報有之候。津田犯罪處分に關し候一條は、其
翌三十一日書面を以て外務大臣ギルス氏へ通じ置、一昨六月一日、

氏方へ參り、我刑法第百十六條の譯文をも示し、我政府に於ては、即ち此の條令適用の請求なりし處、其の通りには參らざりしも、刑法の許す限り、重罪に處したる趣を、面陳致候處、同氏の說に、セーウヰチ公使より、委細申來り、貴政府に於て、之に處せらるるの難かりしは、承知の事ながら、此の判決に由り、甚だ不快の感起る所以は、本御招待に應じて、貴地遊歷中なりし當國太子に、害を加へんとせし者を、平人に害を加へんとせし者と、同等の處分に歸せしめられたるの待遇に在り、去りとて必ず死刑の處分あるを望むの意には無之候へども、若し一旦死刑の判決になりて、我方より赦免を請ふの都合たりしならば、好結局したりしにとの趣意にて、頻りに遺憾を述べ、且つ當地新聞紙の此の不快を傳播するの恐れある等の話も有之、依て拙官はすに、我政府に於ては、十分に貴政府を滿足せしむる爲め、前に陳し如く、出來る丈けの術は、皆な既に盡したる末の事なれば、新聞紙家等も善く之を知り、且つ我國の法律を解せば、左程不快の感覺を陳べもすまじと存ずるも、貴君に於ては、猶別に我政府の之に處す可き方法あるべしと思はるるや如何と尋ね候處、ギルス氏の答へに、貴國の法律此の如くなる以上は、外に致し方なきは知れり、又固より人を殺し吳れられたしと云はるべきにも非ず、其意亦毛頭なきことなるに依り、我に於ては、之を以て滿足するの外なきは、我帝にも御同意ならんと存ずるに依り、右の意見を以て、明日帝へ奏し、該事に直ちにセーウヰチ公使へ通ずることに致すべしと申す事に有之、尤も其間に、貴國飛抜けて遙かに歐洲中の瑞西となりし結果は、實際、國の爲めに利益なるべきや等の刺譏の語をも承り候、後ち拙官新に話を續け、何れにしても幸にして太子も無異に御出發たされ、我邦に於て不都合の出來事も、今は殆んど忘却の時に至り、此の發狂者處刑の一事を以て、諸君の感覺を惡うするは、甚だ遺憾なるも、我方に於て、既に之を處するの法なきは、貴君にも御同意の事なれば、今少しく處刑の結果に付ても、貴國を煩はし度、凡そ非命の死を遂ぐる者は、其の所業の善惡を問はず、不思議にも愚民中之を豪傑視するの風あり、其影響太だ望ましからず、之の點より之を視れば、死刑より無期徒刑の方、却て勝れるものありと說く際、ギルス氏曰く、夫れは一理あり、セーウヰチ公使よりも、今度同樣なる趣を申越せりとて、態て長電文を取出し、之を讀み聞かせたり、其の大略に曰く、

大津に於て津田を裁判し、平常謀殺未遂の刑法に據て、終身徒刑の申渡しありたり。犯罪の目的は、單なるファナチク一筋にして、他より使嗾せられしに非ず、又黨類あるに非ず、政府は之を皇室に對する罪に擬したるも、右は虛勢を張りたる、一のデモンストレーションに過ぎず、拙者は是迄死刑の說を持ちたり、然も表向き面を以て申込みしに非ず、今滿足するや否やの問合せあり、未だ答ふる所

なく、一に[illegible]を[illegible]つ、忠烈たる、露國[illegible]之を[illegible]へば、日本をして犯罪人の宗旨の爲め、命を捨てたる者あるを知らしむるの利あり、青木外相は辭職し、内務司法兩大臣亦之に續くならん。

本日ギルス氏に返事を問ひ候處、同氏の答へに、帝にも御承諾なされしに付、我政府に於ては、此の處分を以て滿足致すに依り、左樣承知與れられよとの事に有之、依て拙官は、帝の御事に就ての感覺を尋ねたるに、ギルス氏は、帝も拙者同樣の御感覺にて、固より一旦死刑に決し、此方より赦免を請ふの結局たりしならば、上都合なりしも、是れ其國の成規に基くものとせば、滿足するの外なし、右は日本の利益にも非るべしとの仰せなりし旨に有之候。

右の次第にて、大津の不都合到來せし以來、我國上下同感の情を表したるの厚きに由り、一旦善くなり居たる、當國政府の感覺も、此の結局に由て、今日は又幾分か損傷したる氣味も有之、拙官に於ても、實は此判決を以て、快とせざる譯は、其本邦に於て、當國の太子を待遇せらるるの厚さと、寒暖相合はざるは勿論、國に憲法ありとて、新に模擬法に據り、強情を張りし處が、我國民自然の發達、他の憲法國の度に進まざる間は、一の理窟たるに過ぎずして、實際他人の信服すべき筈もなく、殊に當國人より之を觀れば、其の敍て相親愛する日本國人にとして、何を恨みて此の不親切を表するや。歐洲開化の形迹に[illegible]ぶて、國法を[illegible]ること、一に法に[illegible]れるを[illegible]なきに非ず、又[illegible]の[illegible]に處分を[illegible]す[illegible]にも[illegible]るべしと云はれしも、畢竟我を惜まるるの意に外ならざるべしと存じ居る事に候、然し當國政府に於て、前文通り、既に滿足を表したる上は、御配慮に及び候事も有之まじく存じ候へども、此の不快の出來も、此を以て結了とし此段申進候。

西公使がギルス外相に手交したる犯罪處刑公文の譯文

大津に於て開廷の大審院は、津田を以て、貴國皇太子殿下の生命に對し、危害を加へたる犯罪者と判定し、之を法律に於て定めたる最極の刑罰即ち無期徒刑に宣告せり。

我帝國政府は、皇太子殿下の高貴なる御身分に對し、被告を刑法第百十六條に據り處分せんことを深く希望せしに依り、大審院檢事總長に命じ、躬ら求刑の任に當り、該法廷に向て、該條を適用せんことを、辯論主張せしめたり。

大審院は、本件審判の上、政府の熱望と盡力とに反し、右刑法第百十六條の明文に據れば、今回の被告事件に向て、該條を適用する事を得ずとの意見を述べ、其の不羈の權力を實行して、津田の罪狀は、法に於て前陳の無期徒刑に該當するものと判決したり。

今般地方裁判所は、該被告事件の該當裁判所たるべきこと、大審院に於て明瞭となりたれども、同院にては、既に本件を處理せしを以て、其臨時院に於て之を終結せり。

日本政府の本件に關して施したる處置は、大審院に於て、法律の[illegible]中、最極の刑罰を以て、犯罪者を處分せる事實とは、此の悲痛す

犯罪の起りし瞬時より、絶えず貴國政府に對し、成る可き丈け充分の滿足を與へんと勉めたる眞誠の證據となし、露政府の酌量あらんことを、我日本政府の深く希望する所なり。

西公使報告の四（六月十日發）

去る五日電信を以て、今回の事件に付、拙官本務の速かにして、且つ適宜なるを認めらるる趣、御敕意に預り、甚だ快く存じ辱く御禮申陳候、又同日、當國政府滿足の趣未だセーウヰチ公使へは通知無之との御電報を請け取り候處、右はギルス氏より、當日即ち去る三日、同公使へ電報する趣、慥に承り候事ながら、念の爲め其翌六日、外務省へ參り、（ギルス氏は去る四日よりヒンランドの別莊に行かる、夏休なり）次官シーシキン氏へ承り合ひ候に、右滿足の返答は、愈々去る三日セーウヰチ公使へ電報に相成候に相違無之、また同公使より、ファナチク人氣穩かならざるより、希臘王子は横濱へ上陸せずして、船より船に乘り移らるる樣有之度趣勸め來りし事をも承り、就ては此地の想像にては、目下我邦斯る狀態なりとは思ひも寄らず、又三日にギルス氏の電報したる者を、五日迄もセーウヰチ公使の請取らざると申すも不審に案ぜられ、旁其趣は同日及電報候次第に候、然る處七日夜、右へ對する御返報を得、人氣の穩かならざる云々は、全く其兆候なきことにも非る趣を了し、唯電文の後段、セーウヰチ公使の通知中、我國の威風を甘かす個條有之との儀は解し兼ね、右は或は拙官より前報告中に傳へ置候ギルス氏の談話中、若し一旦死刑に決し、此方より赦免を請ふの結局なりしなら云々の意味にても可有之哉とも案じ候へ共、右は唯當國所望の内情話に止りし事なれば、之を照會文に載する筈もなしと存じ、今日はギルス氏出府の筈なりし故、之を問ふ心得にて候へ共、同氏儀本日は、ガッチナより直ちに田舍へ歸りし由にて、相見るを得ざりしより、亞細亞局長カプニスト氏へ面會し、去る三日當國政府より、我犯罪人處分に付て、滿足を表せられたる一條に付、セーウヰチ公使より、何ぞ伺ひ來りし事は無之哉と尋ね候に、同氏の答へに、何もなかりしと、依て又右の滿足を表せられし言詞中、何ぞ我邦の心に快からざる意味は之れ無かりしやと尋ねたるに、同氏の答へに、拙者の承知し居る限りにては、右樣なる意味は更に無かりし、唯始め右判決の報道せし時は、吾黨の感覺快くはあらざりしも、滿足を表する時に、右不快の意味を文通せしむる等の訓令は、決して之れ無かりしは、拙者の保つを得る所なりとの事にて有之、依て拙官には、右はセーウヰチ公使の何ぞ自ら言ひ添へたる事にても有之之歟と存じ候條、此段御心得のため申進置候。

御記憶も之れあるべく、當國の先帝、曾て巴里に於て狙撃に遇はれ

し[illegible]あり、其[illegible]に[illegible]て、[illegible]ポーランド人[illegible]に害したるに、其[illegible]地に達するや、[illegible]公衆とも大に不平を鳴らし、一[illegible]かしかりし趣は、兼て承り居る所、帝と太子との差別はあるものの、御承知の通り、當國民の太子を愛する深きに依り、衆説如何ならんと、拙官にも稍々案じ居り候へ共、當府に於ては、佛字新聞紙及びノーヴォーヴレーミヤ紙に、別紙切拔通りの電文を掲せある迄にて、何も云はず、他の諸新聞紙は、右の電文をも掲げずして、全く默過し、又た上中社會に於ても、之を知るを欲せざるものの如くにして、別に何の評判も無之、而して一般の感覺は、太子も幸にして無異なりし上は、犯人の運は問ふに及ばずと云ふ有様にて過去り、今回の事件に付ては、最早何も御心配に及ぶことは可無之と存じ候條、此段申進候也。

西公使報告の五（八月一日）

御申越に相成候御親翰捧呈の儀は、直に其筋へ申入置候て、去る七月廿八日ペートルホーフ離宮に於て、當國帝へ謁見致し、拙官儀大津の到來事を以て、甚だ遺憾に存ずる趣と、右に付、我天皇陛下の深く御憂慮遊ばされ、御親翰を贈らるるに至りし大略とを申陳べて、御親翰を呈し候處、當國帝には善き御機嫌にて仰せられ候に、[illegible]開[illegible]を、悉く[illegible]ざりしは[illegible]なるも、本人の日本に於ける[illegible]情は、少しも損せず、殊に陛下に於ては[illegible]たる[illegible]したる由にて、委細聽啓したりとて、其の大略をも仰せ聞かせられ、後ち島津公及び舊大名等の事に付て種々の御尋ね有之、二度も我兩陛下の御親切を謝せられて暇を賜りしが、謁見の大略に有之候處、當日當國帝の御待遇は、殊に御叮嚀なりしを覺え、拙官にも甚だ快く存候て、其趣は電報致し置候次第に候、拙官には、津田判決の一條、或は帝の心に猶慊らざる記憶存するも計り難く、存居り候へ共、本日の談話中には、前文通り其の意氣全く相見えず、且つ皇太子の我國に於ける好記念を保たるるは[illegible]と相見え候へ共、同太子不日歸着せられ、親しく當日の狀況を聞され候はゞ、假令帝の心中、猶ほ不利の感殘り居り候も、皆な消過して全く御落着に至るべしと、信じ居る事に候。

當國皇太子には來る十五六日頃來着の筈、其上は帝家御一同揃てコッペンハーゲンへ趣かせられ、彼地へ十一月頃まで滯在せらるる積りの由に候。

パテルノストロ氏の所論

(氏は當時我が司法省にありたる顧問外人で、此書は當時齋藤浩躬氏が、井上伯の命に依つて其の意見を叩いた問答筆記である。)

(問)魯國皇太子殿下に對する犯罪者に對して、刑法第百十六條を適用することを得るや。

(答)是れ了解し得べからざるの說なり、抑も刑法は內國を目前に置きて設けたるものにして、其の首節に內國君主に對する罪を置くは、各國普通の例たり、決して外國君主をも包含するものと解釋すべからず、伊國の如きは、外國君主に對する特別の罪條あり、(伊國刑法草案第百四十七條參照)全く此の特別規定あるが爲めに、普通の殺傷罪を適用せざるなり。今回事件に關する刑の適用に付ては、司法省に於て、各高等官及御雇外國人の會議ありて、予は司法大臣の下問に對し、「普通殺傷罪の未遂犯を適用すべし」と答へ、滿場一人の異論者無かりしなり。

(問)若し犯罪者にして、兩國の間に戰端を引起すの目的を以て、罪を犯したりと自白したる時は、刑法第百三十三條を適用し得るや。

(答)第百三十三條は、戰端を開き、又は其の豫備を爲したる場合を想定したり、今回事件には此事なし。

(問)外國に於て、今回事件の參考たるべき實例あるや。

(答)予は左に一二の例を示すべし、千八百七十八年、伊王ハンベルゲがナポリへ行幸のとき、街上に於て、小刀を以て伊王に切り掛ける者あり、同車したる宰相カイロリーは之を拒がんとして傷きたり、裁判官は、國王に對するの罪を適用して、犯罪者を死刑に處したりしに、國王の恩惠に依り終身懲役に處せられたり、また英國に於て、女王を害せんとしたる英王ありき、裁判所は之を狂人と認め、病院に送れり。

千八百十九年三月二十三日、獨逸の一書生サンドなる者、獨國に於て、魯國の參事院議官コーツブエを殺害したり、犯罪者は獨の普通刑條に從ひ、死刑に處せられたり。

伊國人オルシニーなる者、巴里に於て、ナポレオン三世に向ひ、爆裂丸を投じ、其の從者數人を殺傷したり、犯罪人及び其の從犯者は、佛國の普通刑條に從て處罰せられ、犯罪人は、君主に對するの罪を以て、死刑に處せられたり。

之は要するに、一個人又は人民の大部分が、外國君主又は王族に對し、敵意を表したる其例少なからず、例令ば、佛國に於て、波蘭復讐の爲め、魯帝に對し、示威運動を爲したるが如き、又先頃獨國皇太后に對して、同樣の擧動ありたるが如き、又伊國の一都に於て、墺帝に對して、都民群呼して、瓦石を投じたるが如き是なり。然れども此れ等の場合は、一も今回事件に同じきものなし、又先例相互の間にも、

一々證憑あり、當に今の事件に付ては何等の證據は不用なるべし、從となれば、此れ等の場合には、各々特別の歷史事情ありて、一の條を以て、他の例を律すること能はざればなり。(五月十三日)

レンホルム氏の國際法上より見たる意見

(レンホルム氏は當時わが政府の國際法顧問たりし獨逸人なり)

外國皇族に對する犯罪處罰に付ては、獨逸刑法及び其他各國の刑法は、特別に規定するところ無く、一般刑法の規程を適用するものとす、故に今般日本國に起りたる兇行事件の如き犯人を、魯國政府に引渡すべきや否やに付き、敢て問題は生せざる可し。

但し事の尋常一樣の場合と異り、賓客の身に拘るを以て、日本政府は須らく嚴密に搜査を爲すべきは勿論、犯人の身の上に付ては、監守を嚴にし、其の逃走自殺なき樣、司法者は特に注意すべきものとす。

國際法より論ずれば、凡そ外國の君主若くは君主の代理たる皇族を、賓客として迎へたるの政府は、其の貴賓の守衞に付ては、充分に注意を施すべく、既に此の注意ありたるに拘らず、尙ほ暴行危害を加へたる者ありたる場合には、政府は交際上の禮義より、速に貴賓を慰問し、他の外國政府に其の實況を報し、その行爲をして全國民の責任に歸せざらんことを以てすべく、又た電信を以て帝國皇室より貴國皇室に對し、謝罪を爲すことも必要なるべし。

また國家は民法に依て、被害者の損害を賠償す可く、或は其の國民の一私人の行爲に對しては、別に責任を有するものに非ず、之に反して若し政府の不注意より、犯罪を惹起したる場合に於ては、少くとも謝罪狀を差出すべきものとす。

其の例は千八百八十三年、西班牙國王陛下が、佛國巴里來遊の際、佛蘭西政府警察機關の不注意より、佛國暴民が西班牙國王陛下に、危害を加へたる場合に於て、佛蘭西政府は西班牙政府に對し、謝罪狀を送りたり。此の如き場合に於ては、謝罪狀は、君主より君主へ送る可きものに非ずして、政府より政府に送るべきを常とす。

日本政府は其他德義上及び國際法上の義務として、犯罪搜査の結果に就ては、充分の報告を爲す可く、其の報告には、其の犯罪者の犯行を爲したる、原因をも明示すべきものとす。故に犯行の原因は主として取調ぶべく、從て犯罪人の身分來歷及び交際の實況等は、取調べの根據となるべし。

かくの如くせば其の犯行は、犯人一箇の決意に依りて生じたるや、將た他人の教唆に出でたるやを知るを得べし、人或は魯國今日の形勢より、其の犯行或は虛無黨なるものの教唆に出たるやを疑ふものあらん乎、然れども其の取調の如きは、極めて之を秘密にするを要すべ

し、夫れ故此の如き點につき取調を爲すとの説、或は之を發表せば、露國のみならず、他の諸外國人は、日本政府が、犯人の罪を被害國の國民に歸せんとする意ありとの懸念を抱かしむるに至るべし、故に其犯行の取調べに付ては、先づ犯人より始む可きものとす。

人或は皇太子守衞のものを監督する官吏に責ありや否やを取調べんとするが如きも、そは其の官吏が警察官の選擇に付き、相當の注意を施さざりし場合ならざるべからず、則ち其の警察官が、其の平生の性行惡しきに依り、又は平生交はるところの友惡しき等、苟も警察官たる、重要なる職務を任す可からざるときに限る、然して以上取調べの結果は、之を露國政府に報告すべきものとす。予の終りに及んで特に望むところは、日本政府が相當の理由なくして、濫りに居留地等を捜索し、他の外國政府をして、今般の行爲は、一私人の狂氣に出たるものに非ずして、他の理由ありやとの念を起さしめざらんこと也。

■現代日本文學全集・既刊書目■

十二月配本

幸田露伴集

（第十三回）

内容

風流佛、運命、一口劍、五重塔、風流微塵藏、對髑髏、風流魔、一刹那、奇男兒、眞美人、辻淨瑠璃、土偶木偶、蘆の一ふし、太郎坊、付燒刃、寢耳鐵砲、名和長年、佐渡ケ島、雁坂越、術競べ、不安（其他）

一月配本

森鷗外集

（第十四回）

内容

即興詩人、舞姫、うたかたの記、雁、阿部一族、埋木、ヰタ・セクスアリス、高瀬舟、山椒太夫、文づかひ、金毘羅、玉篋兩浦嶼、生田川、日蓮聖人辻説法、百物語、蛇、細木香以、古い手帳から、あそび、心中、妄想、沙羅の木、我百首、長谷部信連（其他）

■尾崎紅葉集（第一回）
■樋口一葉集 北村透谷集（第二回）
■谷崎潤一郎集（第三回）
■島崎藤村集（第四回）
■國木田獨歩集（第五回）
■菊池寛集（第六回）
■夏目漱石集（第七回）
■有島武郎集 有島生馬集（第八回）
■里見弴集 佐藤春夫集（第九回）
■永井荷風集（第十回）
■德富蘆花集（第十一回）
■武者小路實篤集（第十二回）

改造社

ルイズ・フィスシャー著
荒畑寒村譯

石油帝國主義

（四六判上製）

定價壹圓五拾錢
送料拾八錢

最新刊

最近十年間の世界經濟の進展は歐亞兩洲に跨がる夥しき石油資源と此れを圍繞する帝國主義諸列强間の石油爭奪を外にしては理解し得られない。暗澹たる經濟的無政府と血腥き政治的紛亂とを國際政局の上にはらみつつ頭のテッペンより足の尖端まで武裝せる帝國主義諸國家間の石油奪爭戰は世界再分割の國際的伏魔殿たる、かのゼノア、デュネーブ其他無數の外交的紛亂の眞因であつた。世界經濟は今や資本主義凋落の深淵に戰慄した。　本書は此等石油帝國主義戰裡に於ける世界經濟……

發兌

東京市麹町區內幸町
幸ビルデイング一階
振替東京八四〇二番

改造

日本家庭大百科事彙

燦然たる時代化の縮圖

萬有知識を滿載する大百科事彙の出現

百科辭典は質・量共に群籍の上に卓出する出版界の帝王者、萬有知識の無盡藏の寶庫、最も廣い範圍の社會の爲に、自由簡易に開かれた一大民衆的殿堂であつて、正に學校教育の國民的延長ともいふべく、所謂大學普及事業や成人教育は何人も座右に一部の百科辭典を備へることによつて學校も教壇も、講堂も講師もなしに、いかなる所でも容易に完全にこれを受けることが出來る。寔にこれ以上徹底した社會教育はない。

今や二十世紀に入つて二十七年、一切の事純然たる新世紀の眉目を備へ來り、萬有知識の大改造時代に際してゐる、この時に當り、家庭といはず、社會といはず、新しき生活に適應する新しき萬有知識を滿載し、時代の全相を摑んで一切の書中に縮圖した大百科辭典の出現は現代文化を大成せしむる最も意味深き收獲でなくてはならない。幸ひにして我國百科辭典事業の先驅者たる榮譽を荷ふ富山房が、更により大に、より完全に大百科辭典の完成によつて、昭和出版界の劈頭に、第二の大辭典時代を導くことは、その當然で且光輝ある責任であると信ずる卽ち十箇年の繼續事業として、**富山房百科辭典編纂部**を特設し、その第一期事業として、二百五十餘名の各專門學者、技藝家及び精通者と、十餘名の專門編輯者が、協力一致、拮据五年、全力を擧げてここに「**日本家庭大百科事彙**」の編纂を完成し、**第一卷刊行**と共に、これが民衆化、普及化を徹底する爲に豫約特價提供を斷行する。詳細は内容見本の御熟覧を乞ふ。

二百五十名家執筆



内容見本 無代進呈

體裁、内容ともに最も充實完備せる三十二頁、見本はハガキにて御申込次第進呈。「**百頁大見本**」は全國各書店にあり、御立寄御覧を乞ふ。

豫約略規

定價金三十圓（各卷十圓）

特價

甲、金廿二圓五十錢（三回拂）
乙、金廿二圓五十錢（六回拂）
丙、金廿四圓（十二回拂）

申込金一圓（甲、乙、丙共）
最終御拂込に充當

體裁

全三卷、三千三百餘頁
裝幀、背及角革製竪八寸横五寸三分（國際的百科辭典版）金文字入、最上製本函入
着色版三百餘面、本文挿畫約五千

東京神田 **富山房** 振替東京五〇一番

謹賀新年

資本金六千五百九拾壹萬六千六百五拾圓

OJI PAPER MFG CO LTD

弊社は明治五年の創立（本邦最古）にして總ての洋紙製造に於て最も豊富なる經驗と熟練を有す

本社 東京府北豐島郡王子町

營業所 東京市麴町區永樂町郵船ビルディング内

王子製紙株式會社

工場所在地

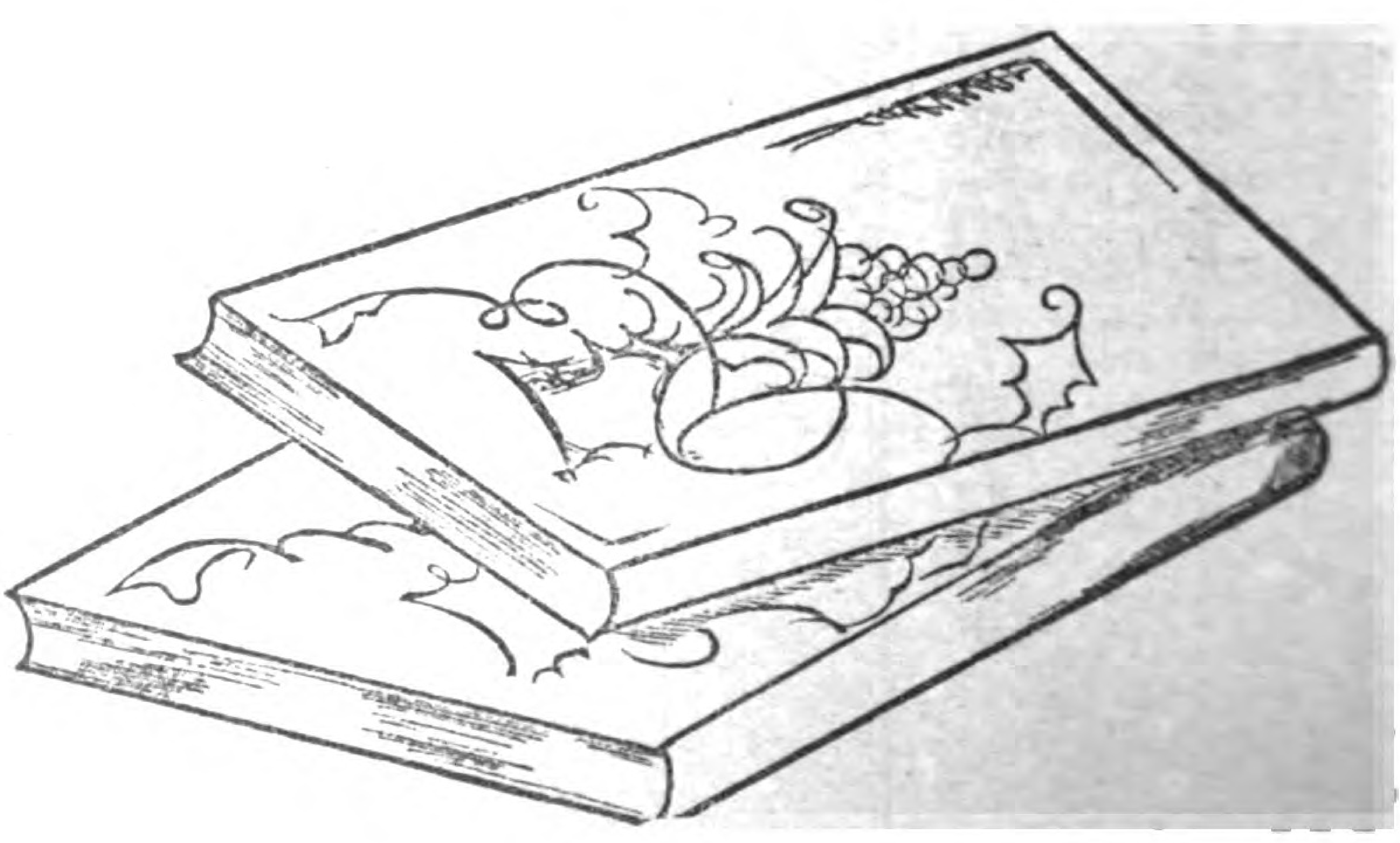
■東京府北豐島郡王子町 王子工場
■同町大字下十條 十條工場
■東京府南葛飾郡龜戸町 龜戸工場
■大阪市北區善源寺町 都島工場
■同市東淀川區北長柄町 淀川工場
■静岡縣庵原郡富士川町 岩淵工場
■富山縣伏木町 伏木工場
■福岡縣小倉市篠崎 小倉工場
■北海道勇拂郡苫小牧 苫小牧工場
■朝鮮新義州 朝鮮工場
■樺太大泊町 大泊工場
■樺太豐原町 豐原工場
■樺太野田 野田工場

主なる製品（◆上等印刷紙◆普通印刷紙◆新聞及び雜誌用紙◆其他諸紙◆諸包紙及び模造紙◆筆記用紙及び畫學紙◆卷煙草用紙◆製紙原料パルプ）

謹賀新年

小樽新聞

河北新報



賀正

東京市芝區南佐久間町一ノ一
電話芝一九七四番
青木兄弟製本所

東京市京橋區木挽町一ノ一一
電話京橋(56)七三三七番
牧野製本所
牧野留吉

1928

九州日日新聞

福島民報

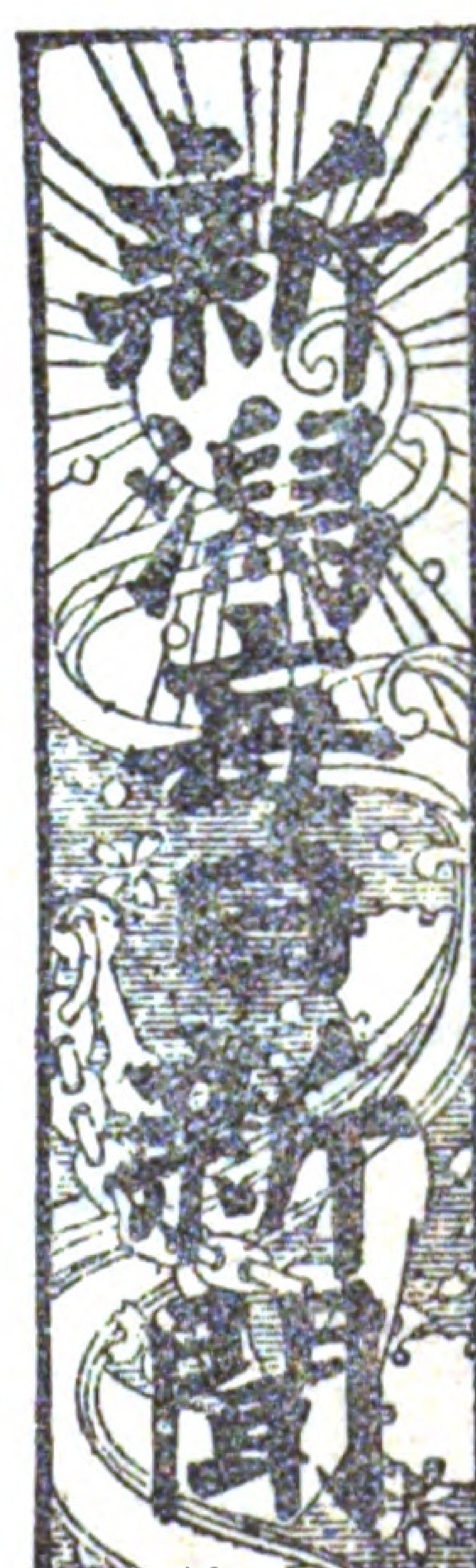
中國新聞




朝日新聞




朝鮮新聞



博

株式會社 博進社洋紙店

東京支店
東京市神田區駿河臺北甲賀町二七
電話(25)代表番號自一一七一
神田一一七二番至一一七七

大阪支店
大阪市東區瓦町二丁目
電話本局（長六五五番 六五七番
六五六番 六五八番

神戸支店
神戸市榮町六丁目
電話元町長一六六番 一六七番

名古屋支店
名古屋西區玉屋町二丁目
電話東長一八〇〇番 一八〇一番

福岡支店
福岡市博多行町
電話特長一九番

門司出張所
門司市仲町二丁目
電話長三三五番

新年の文運堂

特種嶄新先驅的使命を帯びたる
新時代の日誌!!!

貴下の記録を!!!

是非………

新らしい・珍らしい
文運堂の七大日誌

少年必携 スカウト日誌	定價四十五錢
青年日誌	定價四十五錢
女子青年日誌	定價四十五錢
豫定日誌	定價七十錢
家庭婦人日誌	定價八十錢
實用家計簿	定價六十錢
農業日誌	定價一圓二十錢

發行元 株式會社 文運堂

營業品目
學用品
萬年筆
紙製品
帳簿類
運動具類

本店 東京市神田區駿河臺北甲賀町 振替口座東京一一九七〇〇番

支店
大阪市東區瓦町二丁目 振替口座大阪八三六五番
名古屋市西區[illegible]町三丁目 振替口座名古屋三〇五〇番
門司市仲町一丁目 振替口座二〇二九五番



賀正

筆耕の御用は 信文社

東京市芝區神明町二五(小學校右)
電話芝一六九三

社主 大武三郎

謹賀新年

一月元旦

建築ハ一家ノ幸福ノ母タルベキモノデアル事ハ衆知ノ事實デアリマス

弊店ハ此處ニ特ニ留意シテ設計ニ工作ニ最善ヲ盡シツヽ參リマシタガ尚一層經濟的最新ナル建築技術ヲ研鑽シ親切丁寧ヲ主トシテ御期待ニ副フベク努力致シマス

何卒御引立ノ程ヲ願ヒマス

建築一般

吉田建築店

法學博士 堀江歸一著

金貨本位制の興廢

四六判總クロース
定價壹圓
送料十八錢

最新刊

歐洲戰前の金貨本位制は世界大戰によりて一旦破壞されたが、戰後經濟的秩序の確立と共に次第に復興しつゝある狀況を研究し、我國經濟界に囂々たる金輸出解禁問題に論及し、この間に金貨本位制の本質、眼目に就て博士の見解を論述す。博士は曩きに本社より「貨幣・銀行・外國爲替」上下二卷を出したが、本書は同書中の論題に對し本社より引續き發表せんとする特殊研究の一つである。

堀江歸一著

貨幣・銀行・外國爲替（上卷）

菊版上製
定價三圓
送料廿六錢

堀江歸一著

貨幣・銀行・外國爲替（下卷）

菊版上製
定價四圓
送料卌錢

發兌 東京市麴町區內幸町 幸ビルデイング一階 振替東京八四〇二番 改造社

美人畫雜論

鏑木清方

一

人間は生れながら美しいものを愛し、醜いものを厭ふ本能を有つてゐる、これはいかなる時世にあつても、いかなる境遇にあつても不變の事實である。

何か人生に異常な、突發的な事件が起るとすると、その當座だけは美を求むる心も一時影を潛めるかに見えるけれども、それはほんの僅かで、時が過ぎて平靜に復すると、美はいつも昔ながらの親しさをもつて人間に迎へらるゝ、歴史は常にそれを語つてゐる。

人が美を慕ふ心は、時と境遇とを越えての存在である。

美といつてもそれは宇宙のありとあらゆるものに含む、風景でも、植物でも、人間でも、そしてその美は必ずしも同じ標準を有てるものではない、綺麗な美もあれば澁い美もあるし、甘い美も、苦い美もある、女性に感ずる美とても一様ではないが、先づ甘美に屬する。

美に高い低いといふことはあるが、それも一つの概念であつて、その高低の標準はどうにでも動く、對象によつて高低を極めても、藝術の場合などになると、低い材料を取つても高い藝術と云へるのもあるし、高い筈のものを扱つても、その反對に低級だといふこともいくらもある。

私が今語らうとする、美人畫などは、その邊まことに入りこんだ事柄が多い。

美人畫といふ稱呼はいつ頃から生じたものであるか詳かでないが、今日では判然として一つの畫派のやうに扱はれてゐる。その發生はどうしても西洋の方が本場であつて、日本では徳川時代の浮世繪の發生からその存在が確立したものだが、西洋のやうに本格な藝術として遇されたのではなく、日影ものとして育つて來たのである。

西洋では十四五世紀の頃から立派に女性美を藝術の對象として堂々と扱つてゐた、ボッチチエリのやうな素晴らしい美人畫家が出現し

て、享樂の夢を畫いてゐたのだつた。

一體西洋の神話傳説に、美の神ヴイナスを有することが藝術に女性描寫の榮えたことを象徴するものであつて、日本には彼のヴイナスに當るやうな艶つぽい女神はない。日本神話の美人と云へば木花開耶姫であるが、姫は櫻花を象徴する神で貞淑の權化とされ、ヴイナスのやうた淫らな神ではない。

上代に佛教と儒教とが渡來して禁慾思想を植ゑつけられた日本は、極端に女人を卑しみ、女は陰のもの、表立つて人交りの出來ないやうに躾けられて、藝術に扱はるゝところの沙汰ではなく、僅かに藤氏全盛の時代に擡頭した女性描寫も續いて出づるものとてはなく、下級庶民の娛樂として榮えた浮世繪の出るまで、いはゆる美人畫は跡を絶つて居たのであつた。

二

自然の美にも男性的と女性的とがあるが、それは女性のみに就いて見ても、男性的といふのも變だが中性的な傾向のものはある。だが實際の女性の男性的、また中性的なのにはあまり美を感ずることはな

つた女性、乃ち中性的な[illegible]境地に立つものゝやうである、莊嚴、端雅、閑[illegible]の女性から斯かる人を求むることは、それは甚だ稀れなことではあらうけれど、在り得ぬことではない。

次には西洋のマドンナ、これは女性的であつて、處女性の有つ優美、純潔、純愛を表現する。

この二つの女性美は、憧れとしてもまた藝術としても本格な理想的たもので、最高なものだと答へるに躊躇しないが、宗教家や教育家でない我々は、必ずしも純潔や、莊嚴にのみ美を感じてはゐない、かなり不純なものにでも隨分深い美を認めることがある、然してそれらに藝術的感興を寄せる場合は珍らしいことではない

女性美といふのは元より肉體上のことであるが、色がよいとか、形がよいとか、眼が、口がといふことの他に、内在的の條件がかなり働きかけてゐることも考へないわけにはいかない、譬へばその人が[illegible]であるとか、聰明であるとかいふことに依つて我々の感じかたに多少の變化のあるのを否み難い。

云へるとしても、藝術の心から見れば矛盾しなくてはならない。それはちよつと何處かに矛盾があるやうだが、倫理から見れば心を先にして容姿を後にする、美術から見てゆくと容姿があつての心である。然かでも氣違ひでも美人なら美を感じさうなものであらうが、不快を感ずる心もちがあつては到底美を思ふ余地はない、お夏狂亂といふやうな題材はよく畫に扱はれるが、あれは戯曲、舞踊に藝術化されたものの再現で、一つの空想であり、毫も實感が伴なつて居らぬから醜惡を感ずることはない。

前にも云つたやうに倫理、道義觀と我々の美を觀るところとは、時に一致することもあるが、又た甚だ乖離することがあるのは已むを得ない。觀音やマリヤを美の對象とのみ觀てゐると間違ひはないがさうもゆかない。我々が女性に美を感ずるのは、決して最高の狹く限られた範圍のもの丶みではない、各々の好き嫌ひはあるけれども、時にはそれをさへ超越して美を認めることすらある。

神のやうな美、それは別にして現在地上の我々の周圍に見る女性を分類すると、

處女型

人妻型

娼婦型

このやうに分けられるが、しかしこれは三つの型で、處女、人妻、娼婦などに依つて分類すればもつと複雜になつてゆくだらうが、先づ大體この三つに分けて見ると甚だ概念ではあるが、處女型にはマドンナに見るやうな純潔、純愛と、それを基調とした優美がある、然してその美意識はどちらかと云へば單純なものであり、從つてスヰートな感じである。明快、羞恥もこの型の美を助くる。

人妻型といふのは頗る複雜であつて、その型の内に含まる丶ものは、成熟、情愛、貞淑などであるが、この型に於ける特長は既に矢あるもの丶みの有する成熟の美である、假の女性の美といふのは二十歳から三十歳ぐらゐまでの、少しも衰への來ない成熟の盛りをいふのであつて、只だこれは人各々に體力の相違があるから年齢のみで極めることは出來ぬけれども、それ以後の美は、美として感受は出來ても比較的デカダン趣味に屬する。

併しこのデカダン味は女性描寫の藝術にとかく付き纏ふ、古來美人の形容に雨を帶びたる海棠と云ひ、水あげかねし牡丹花と云ひ、なやましげたる風情を讃へてゐるのに觀ても、その間の消息は窺はれる。

娼婦型とは必ずしも文字通り色を賣る階級のものをのみ指すわけではない、人妻にも、處女にでもその型はある。風教から云へば人妻の娼婦型などは以ての外なことであるが、藝術としてはそれも許さる丶

ことであり、爛熟の美、淫蕩の美、神秘の美に對する惡魔の美の存在も亦た拒むべきでない。

女性美の中で大切なものであつて割に考へられてゐないのは健康の美である。浮世繪を見ると殆んど清長一人がこの美を把握してゐるかに見ゆる、實際清長のかく人物はたゞ錦繪の紙の色だけなのだが活々とした血色が偲ばれる、ルノアールの女もいつも精氣に滿ちてゐる、あの輝やく太陽の下に咲き誇る花王のやうな健康の血の色、不健康の美にやゝもすれば心を惹かるゝこともあるが、やはり健康の美は愉快である、然してこの美感はやはり本筋の美感だと思ふ、これは處女型に專らにして、人妻型にも及ぶであらうが、母性の美も健康の美から又た聯想される、歌麿はよく若き母をかいてゐるが、これは母性を扱ふ目的が違つてゐる、彼は寧ろ性的興味から來てゐるのだけれど、勿論美的價値は素晴らしいものには違ひない、あれはあれとして健康の方から見てもあぶなげのない眞の母性の美は更に讃ふべきである。

三

健康の美――健全な美、興味の沖淡は別としても美人畫の本道はどうしても此處にある。

よつて横町を選ぶ人もあれ
定するのではないが、否定ところか私としては
かも知れないが、本道はやはり見失つてはならないと思つてゐる、現代の美人畫では田邊至氏のものなどは正にこの本道を行つてゐるので、一昨年の帝展出品も、昨年の同じ出品もその立場を明らかにしてゐるではないか、光と力とは健康美の貴重な要素だが、田邊氏の作はよくこれを用ひて然も堂々とした風格を有つて居た、あゝいふ美の現はし方になると日本畫の傅彩は少し割の惡いところがないでもない、けれども清長のものなどには寫實以外の光が見えないとは云へない、方は充分ある。これが現代の人になると興味の充實がとかく本格の材料より價格の材料に惹かれるので、どうしても本道、本格が放擲される、これは現代ばかりか浮世繪作家でもさうである、彼等の多くは都會人であつて然も下町に生活してゐた、實生活が露次や新道に在つて親しむところは市井卑近の事物だつたのである。美術家はいかに想像に巧みであつても、やはり自分の養つてゐるものに感興も深く、またそれから生れるものが良いのも當然なことである。深い學究もなく、たゞ天分に依つて門から美を

ふ意は、これを強いと云つてゐるのではない、[illegible]

とてゐないのである。

本道、本格は貴重すべしとは思ふが、それだから傍道、破格は卑しむべしとは云はない、要するにどつちでも結構であり、良いものが出ればそれが偉いのである。

これは美人畫の中での本道、傍道について云へるばかりではなく、廣く美術の上で云へることであつて、彼の骨董いぢりの批評家、鑑賞家などが、宋元の古法に準ずればその畫は品格高きものと思ひ、眼前市井の畫家を擯斥すればその畫は卑しとする固陋の謬見こそ卑しむべきである。

四

異性の美が他を牽くと共に、そこに當然起つて來るものは愛慾の情である。美人畫の存在の一面はまた愛慾の藝術化されたものであることを認めなければならない。

愛慾の藝術化は繪畫や彫刻よりも、より多くこれを文藝に見る、殊に詩歌に見る。近代では更に映畫に見る。

繪畫がこれらの姉妹藝術程、立つ込んで行き得る性質を有てるや否やに就いては疑問であるが、繪畫の許されたる範圍に於いて愛慾が藝[illegible]

愛慾それ自らは常に美しいものだけではなく、醜い一面をも有してゐるし、近代の文藝では醜いものを醜きがまゝに描くことなく描寫してゐる、繪畫ではそこまで行くことも出來ないし、またその必要もないと思ふ。

繪畫をたゞ色彩と線との音樂とのみ見做して、文藝よりも寧ろ音樂の方に近づけて考へることも一つの見地ではある。さういふ場合には繪畫が文藝に近づく運命は全くなくなつて、接近することがあるとすれば、それは文藝の方から近づくことになるかも知れない。

けれども今日の繪畫の發現はやはり文藝と同じやうな境地から出發してゐるところも少くはないが、小説に比するまでもなく、短い形式をもつ詩に比べても、繪畫は著しく瞬間的であり、刹那的である。だから愛慾に根ざした美を現はすといつても、小説に多く見るやうに客觀的に愛慾の批判を試みるといふやうなことはあり得ない、その對象、それは個人の時もあり、架空、空想に依ることもあるだらうが、熾烈な愛をそれに感じて主觀的に表現するのである。

昔から畫家が愛人の姿を寫したといふローマンスはいくらも傳へられてゐるし、愛慾が畫を作さしめる例はいくらもある。愛慾をさう纏まつたものに考へずに、女の襟足の美とか、袂の振をこぼれる纏

裏とか、湯上りの薔薇色の踵だといふやうな蠱惑的な部分美に捉らるることは常のことである。

美人畫の作家でも全く愛慾を去つて制作の出來ぬことはない、理想に進んで行く境地もあるにはあるけれども、情熱の盛んな若い人にそれを求むることは無理なことである。

たゞ愛慾はその赴くがまゝに任せてよいものだらうか、一口に愛慾と云つてもそれは人性から獸性に亘つてゐる、獸性の愛慾も亦た畫いて構はないものだらうか、こゝに藝術と非藝術、美と醜との危い分水嶺が横たはる。

さういへば一體美人畫といふものは、常にその危い分水嶺に殿堂を築きつゝあるのではあるが、今のやうな破目になつて、これは美なり、これは醜なりと區分することは、實は多少の惑ひがある、たとへば浮世繪に附隨してゐる猥畫と、俗にあぶな繪と稱する際どい挑發的な作品は、その凡べてを非藝術として斥くべきものかどうかと云ふのである、風教から見れば勿論惑ふところはない、藝術の至上主義から云つても、その制作目的が藝術的でないといふことでやはり問題はない。

西洋では古神話を借りて性に關する藝術を多く作つてゐる、ヴイナスだのレダと白鳥だの、ニンフとフォーンなどを材として幾多の名作の殘した名作は美術館にも收められて居るが、日本の猥畫もあぶな繪も、外國の本には收載されてゐる、けれどもそれは國情が違ひ、習慣が違ふのだから已むを得ないことである。たゞ皮肉なことには日大のこの種の作は誰のでも平常の同じ人の作より必ず良い繪が多い。

若し日本でも信長、秀吉時代に開けた外國との交通がずつと續いて居たら、十五世紀前後の美人畫に接する機會もあつたらうし、性慾の玩弄物でなく愛慾を藝術化し得たであつたらうことも想像される。

猥畫系統のものを藝術として認容し難いものは、やはりその制作目的と、藝術化の意圖のなかつたのに歸する、とはいへ彼等は藝術であるの無いのと云はれることを定めし地下で迷惑に思つてゐることであらう、野暮な奴だと嗤つてゐるだらうと思ふが、良き繪の闇から闇へ葬られてゆくのはやはり惜しい氣がする。

五

浮世繪には美人畫と社會畫との二面がある、いづれも藝術として多難な立場に立つて來たので、立派なものもある代りには甚だしく低級なものも多い。社會畫のことは今言及するところはないが、日本に於ける美人畫の進んだ路はこの派の動きに見るより他はない。この派の初期から師宣、長春あたりまでは貴族の玩賞するところであつて、庶

民の藝術となつたのは版畫が行はるゝやうになつてからであることは今では誰も知つてゐる。

初期のものには貴族を寫したものもあるし、遊女、風呂屋女、當時のモガを寫したものも多い、今日傳はるところに依れば、後者の方がずつと多い。

彥根屛風の如きは何と云つても本格の正しい美を有つてゐる、けれども遊女を描いたためでもあるか遊蕩的氣分はかなり濃厚に出てゐるが、これがあの儒教のやかましい德川時代に、お大名の名物として傳はつてゐたのは面白い、併し今日までマクリで傳はつてゐたのはそんな遠慮で屛風にして飾るのを憚つたのだらうか、それとも餘り氣を廻し過ぎた解釋かも知れない。

下村觀山氏藏の宗達といふ二曲もいかにも暢かなものだ、今は浮世繪の批評をするのではないから多くを云はぬが、一體初期の美人畫にはルネッサンスの美人畫のやうに陶醉的甘味に誘ふものがない、却つて一味の苦澁をさへ味はされる、然してそれが初期浮世繪の一面のよさであることゝもなる、戰國の後を受けて、小牧、長久手の昔噺しが浮世繪屛風の影にきこゆるやうなところに時代の興味もある。

我々は傳說や何かで考へて、淀君などを非常に綺美なものに頭の中で作つて了つてゐる。クレオパトラや楊貴妃と三幅對にでもするやうな綺想でゐるだけに、その衣裳を飾す桃山時代といふものがいかにも豪華この上もないものに想像してゐて、狩野長信の六曲屛風、あれに別に淀君をかいたのだといふ定說はないが、圖様から推してこの推論はそんなに違つてはゐないと思はれるが、あれなどを見ても藝術として實に立派なものであるけれども、もつと派手に、もつと繡纈に美を欲するやうな欲望が禁じ難い。

元祿にしても西鶴の小說の方が師宣の繪より美しい。

一體に日本の美人畫では華麗といふ味を濃厚に出してゐるものは極つて乏しい、懷月堂一派や鳥居一派を算へて見たところで、初期浮世繪の尤品、松浦家の和蘭陀屛風などは先づ割合にその味の濃い方ではあるが、チチアンだの近くはルノアールのやうなところに比べるとぐつと地味だ、これは國土と人情の然らしむるところであらう。華麗な錦の美人畫でさへ日本のものには澁味といつたふうの味がある、小ざい甘さはあるけれども、大きな甘美の境には未だ到らぬところがある、澁味は日本の藝術の一つの良い味であるのに異議はないが、もつと徹した甘美の陶醉境が開けてもよいと思ふ、例へば土田麥僊氏にもつと若さを與へたやうな。

隣邦支那の古美術を見てもさういつた境地は寫されてゐない、之の女史箴、徽宗皇帝の搗練之圖などから降つて明の仇英のも

るまで、どちらかといへば淸楚の美を傳へてゐる、中では拘泥がやゝ嬋麗の美を寫してはゐるが、文藝の美人禮讃に比してはやはり物足りない氣がする、詩を讀んで想像する空想の美に限りはない、否でも應でも形をそこに現はさねばならぬ繪畫の方はどうも難かしい。

六

春信の美人はやゝ病的であり、優しいデカダンス味はあるとしても、淡きあきらめの世界、淸淨にして閑雅な畫境、あの畫境を推し進めればシヤヴンヌの聖ジエヌヴエーヴ巴里を護るの圖に往くかも知れない、更に進んではシモネ、フラアンジエリコにも通ずる一路がある。

春信が形に現はした畫境には限りがあるが、その未だ現はれざりし畫境を想像すれば何處までも、無限に美は求めらるゝ。

遺憾なことには浮世繪作家の多くがさうであるやうに、春信も直接自分の作といふものを殆んど殘してゐない、一つの綜合藝術であるとこの版畫を通じて知るのみなのは、たとへ版畫は浮世繪の眞の生命だとする議論を認めるにしても遺憾至極なことである。

彼の色摺もの―錦繪の名の起る始めだといふ言ひ傳へさへある―を見ると、褪色したものに言ひ難い味を感ずるけれど、保存の良いものには私はさほどに感銘を有たない。

墨摺もの、素描ともいふべきものから私は無限の美の世界への誘ひを受ける。

春信が誘つてくれる美の世界は、決して美人畫のみの境地ではない、云ふべくんば繪畫のみの境地でもない、そこには多分の詩が含まれて居り、前に云つた健康の美も、愛慾の美も殆んど歸るゝところがないかにも見ゆる。

中性的な觀世音か、處女型なマドンナか、その中に含むあるものを具へてはゐるが、私が春信に導かるゝところは、人體が自然の中に融け合つてゆく、何處までが人の美、何處までが自然の美、その境涯さへも分ち難いある境地、漱石の「草枕」の中の語を借り來れば乃ち非人情の境地とでも云はうか

私が本郷に居た時分朝夕不忍池畔を散歩するのを例としてゐた、夏の朝、觀月橋を渡ると手の屆くやうな眼の前にいつも蓮の花を見る、ふくらんだ蕾もあれば、今咲いたばかりのもあり、ガサリと崩れて片二片、銀露を湛えた蓮の葉の上に散つたのを見ることもある、支の人がこの花を愛するのを洵に故あることに思つた、淸艶！ 春信の美人、病癒えて浴みから出たら正にこの花のやうであらうと思つたりした。

白い蓮は貴く氣高い、それこそシャヷンヌの聖女に接するやうであるが、紅蓮の露を含み、綻びた蕾を披いた時の艶やかさは、これはシャヷンヌのものではない

七

日本の美人畫には旺盛な肉體を畫いたものがない、前に艶麗の美に缺くるところがあると云つたのを繰り返すやうではあるが……リユウベンスのやうな隆起した肉體感は、勿論裸體畫でなくても見當らない、リユウベンスのは健康美といふよりは性慾的の美で、北齋なら比較が出來る、北齋は九十の高齡を保つ程の旺盛な肉體を自分自身が有つてゐたからでもあらうが、精力そのものゝあらはれのやうである。淫婦、毒婦タイプで、江戸末期に悦び迎へられた變態美の大ものである。

さういつた美を擧ぐれば、溪齋英泉、五渡亭國貞、明治に入つて月岡芳年がある。

皆それぞれ背景にある時代が浮き出して見えるやうで、英泉の畫く巽藝者、國貞の畫く水茶屋女や蓮葉な町娘、芳年の畫いた權妻などいづれも珍重すべきものであつて畫品の高下を說く場合でない

卑俗は正に卑俗だけれども決して非藝術だとは云へない、あれはつくりものでない本物である、凡そ卑俗の美であれだけ強く心をうつものは偉なりとすべきである。

美人ポスター、安來節、劍戟、時代映畫と混同すべきでない。

旺盛な肉體といふよりは均整のとれた健康な肉體を畫いた第一人者としては清長を擧ぐべきである。

清長の畫はその當時でも一世を風靡したものであつたが、百年に餘る今日でも、本格的な美人畫として第一に推すものは彼を措いて他に無からう。

肢體はいかにも伸びやかに、頽廢的なところが少しもなく、山城の淨瑠璃寺の吉祥天女の木像の肩から腰へかけての肉付きの線から受ける卑しからぬ肉體感、清長の線もあれと同じものを有つてゐる、過不及なき成熟の美。

たゞ清長の畫く處女はあまりに成熟に過ぎて娘らしくないが、その年増こそ日本美人畫の至寶である。

女中を伴にして御高祖頭巾を冠つた年増が風に吹かれて冬の形をゆく、縮緬の頭巾と共にすべりのよい縮緬の褄、風に亂れてすんなりとした彈力に富む脛を見せても、その媚めかしさは決して賣色の媚い。からかふ者があつたら平手で横面をピシャりとやる意氣が生つ粹の江戸前の俠びの美、縮緬のきものゝ直線も仇ならず、一

枚繪の「風流東の錦」に依るのであるが、彼の作るところはいつも構へが手堅く、大々としてゐて、いろけはあるが色つぽくはない。歌麿のものになると娘も女房も娼婦型で、誘ふ水あらばの風情なきものはないが、清長は遊女を畫いても、子供に見せたら姐えちやんとは呼ばず、小母ちやんと呼ぶだらうと思ふ堅實さがある。

敢えて本格にこだはるわけではないが、何處から見ても推しも推されぬといふところであらう。

歌麿の美は頭からデカダン趣味である、その美はあまりに人に知られ過ぎてゐて、新たに加ふべき考へもない、久しい前に永井荷風氏の陸錦で讀んだものが、歌麿を傳ふるの名文だつたことを云へば足る。

八

私達現代に生を享けたものは、女性美藝術を展望する上に於いては、後代は知らず、前の時代には夢想だにしなかつた惠まれた時に出會してゐる、以上の如く東西先人の遺した仕事を眺め然して當代の女性美と、それに基調を置いた藝術とを一覽すると、當代の女性美を寫せるものについて未だ〳〵望むところが多い、好惡とり〴〵なりとはいへ彼のいはゆるモダンガールも善かれ惡かれ今は我々の藝術の對象として存在せることは事實である。併し未だこれを渾然として藝術化し、然も時代の粋を餘すところなく表現したものが出ないけれど、これは實は當然なことゝも思はれる。

挿繪のやうな即興を特色とする仕事には、割合に心易くさういふ印象を現はすことが出來るけれども、大作として扱ふには、あまり遠く隔たらぬ程度の將來に於いてその出現を期待すべきである。

明治に於ける女性美、大正に於ける女性美今日はそれの完成につとむべき時であると思ふ、但しこれは女性美を風俗畫に結びつけた時のことで、前に記述したやうに思ひ〳〵の境地に立つて、女性から受くる美の觀念をいかに表現しようとも、それは作家各々の自由であつて、現代に生れたるものは現代を寫せと云ふのも、私から云はせれば淺見だと云ふを憚らない。

久しい前の文展に竹内栖鳳氏の「あれ夕立に」といふ題で、京の四季を舞ふ舞妓の瞬間的の動作を寫したものがあつた。

あゝいふ作例は美人畫としては誠に珍らしいことで、ドガは好んで踊り子の瞬間的の美を畫いたが、竹内氏のあの繪はそれよりも更に刹那の美を捉へてあつた、あゝいふやうな瞬間の美を多角的に表現的に示さうと企てたものは滅多にないようである、もう十數年昔のことだのに拘はらず、その時受けた衝動は今に生々しく印象をとゞめてゐる。

これは前號扉繪にのせた、伊東深水の東京博覽會に出した「指」と題する繪は、昨秋帝展に出た長谷川榮作氏の「姿滿池浴後」に想を得たといふ木彫と相似したところを有つたものだつた。勿論後者の方が品は良かつたけれど、その愛慾感の强く對者に迫つて來る點に於いて傑出したことは一つであつた。

あの「指」なども愛慾感はそのまゝで然して氣品の加はらぬものだらうか、それは出來得べきことだと思ふが。

美術は云ふまでもなく氣品を尙ぶ、併し世俗謂ふところの氣品はとかく人を謬り易い、俗と云ひ、雅と云ふ、その差甚だ微妙なるもので槪念をもつてこれに臨むことは謬つてゐる、美人畫を鑑賞する人の留意を望むところである。

以上締まりのない雜論であるが、作家である私自身の立脚地は上記第六齣にあることを一言してこの稿を了る。

本年と太陽黒點

山本一清

一九二四年から增加し始めた太陽黒點は、豫想の如く、漸次其の平均數が上昇して來た。今の樣子から判斷すると、本年（一九二八年）の春頃に之れは頂點に達するだらう。從つて黒點に關連する多くの宇宙現象も、其の頃、最も花々しい活躍を見せるだらう。

しかし玆に豫め注意しなければならない事が數々ある。太陽は强烈な電離ガスの大集團であるが故に、日々我が地球へ向つて、光や熱と共に、多量の電子（エレクトロン）流を放射してゐるものであるが、此等の放射は黒點の消長と正比例するものと考へられる理由が多分にある。

尤も、黒點そのものがガス・イオンの旋回運動による强大な磁性を持つてゐるが、しかし、何ぶんにも彼我の距離が遠いため、此の磁性の直接な感應作用は地球に於いて認められない。しかし、黒點の影響としてはもつと間接であると同時に、太陽からの（廣義の）放射の影響としてはもつと直接な作用がいろんな形に於いて地球に感じる。例へば、地球上に於けるオーロラの異常な顯現、磁氣嵐の突發的な襲來、また、紫外光線の著しい增加など。さては、有線の電信電話系統に不意の機能妨害が起り、又、無線系の全世界通信網に「雜音」が增し加はると共に、時には「火星からの通信か？」と思はせるやうな不思議な感能がラヂオ技師たちを焦（いら）だたせることなど。——此等の諸種の現象は皆明らかに『黒點活動』に伴なふ太陽放射の變態として、來る一兩年間、特に注意深い世界人たちの心を惹くであらう。

此等の事は、決して自分の單なる推量で無い。右の何れの現象も、既に々々或る程度の異常性を、現に今（一九二七）年に現はしたのであるから、本年此等が今一層顯著となるであらうことは、可なり確實性のある豫測である。

しかし、世人よ、決して怖れ驚くには當らない。電氣通信の多くの方面にたづさはる人々を除けば、右に記した諸現象は、皆眞に深い興味と珍奇とを樂（たの）しむべきものであつて、微塵も之れを驚怖すべき筋合ひのものでは無い。殊に、北海道は勿論、新潟や福島邊に於いても見えるかも知れないオーロラの美々しい姿は、總ての人が之れを競ひ眺めて、友人への誇り話（ばなし）の種（たね）とすべきものである。

之れに反して、太陽黒點が、一年四季の寒暑風雪など、一般の氣象現象に影響を與へるか否かといふ問題は今尙ほ悉く學的論究の渦中にある未決のものである。此等について世に多少の結論をつかみ得た學究者も無いでは無いが、其等は皆非實用的な學術範圍内の興味に止まる。一般社會の人々のために此等の論結が全く役に立たないものであることは、過去一兩年來、或る種の學者たちの「豫言」なるものが、皮肉にも事實によつて悉く裏切られてゐるのによつてもわかる。——

約して言ふ。太陽黒點の影響として、樂しく面白い電磁現象は必然にある。しかし恐るべき天變地異の豫期は頗る不確實である。

調練圖繪

櫻井忠溫

一、兵隊屋敷

東京深川越中島が陸軍の練兵場だつたなど丶いつても、知つてゐる人はさう澤山はない筈である。

日比谷公園が練兵場であつたことすら、もう六十に手の屆く人でなければ知らぬわけである。

私はこのころ、何といふことなしに集めかけた、古い東京地圖や錦繪を見てゐると、東京の移りかはりがハツキリと頭に浮んで來るやうな氣がする。殊に練兵場や兵隊屋敷のあつたところを見ると一層この變化が明かになる。何も練兵場などを引出すにも當らぬやうだが、「東京」が打建てられる時西の方から引越して來たのが何かといふと、先づ兵隊屋敷だつたので、今日の東京を見るのに、練兵場なり、兵隊屋敷の跡をたづねることが、調法だと思ふのである。

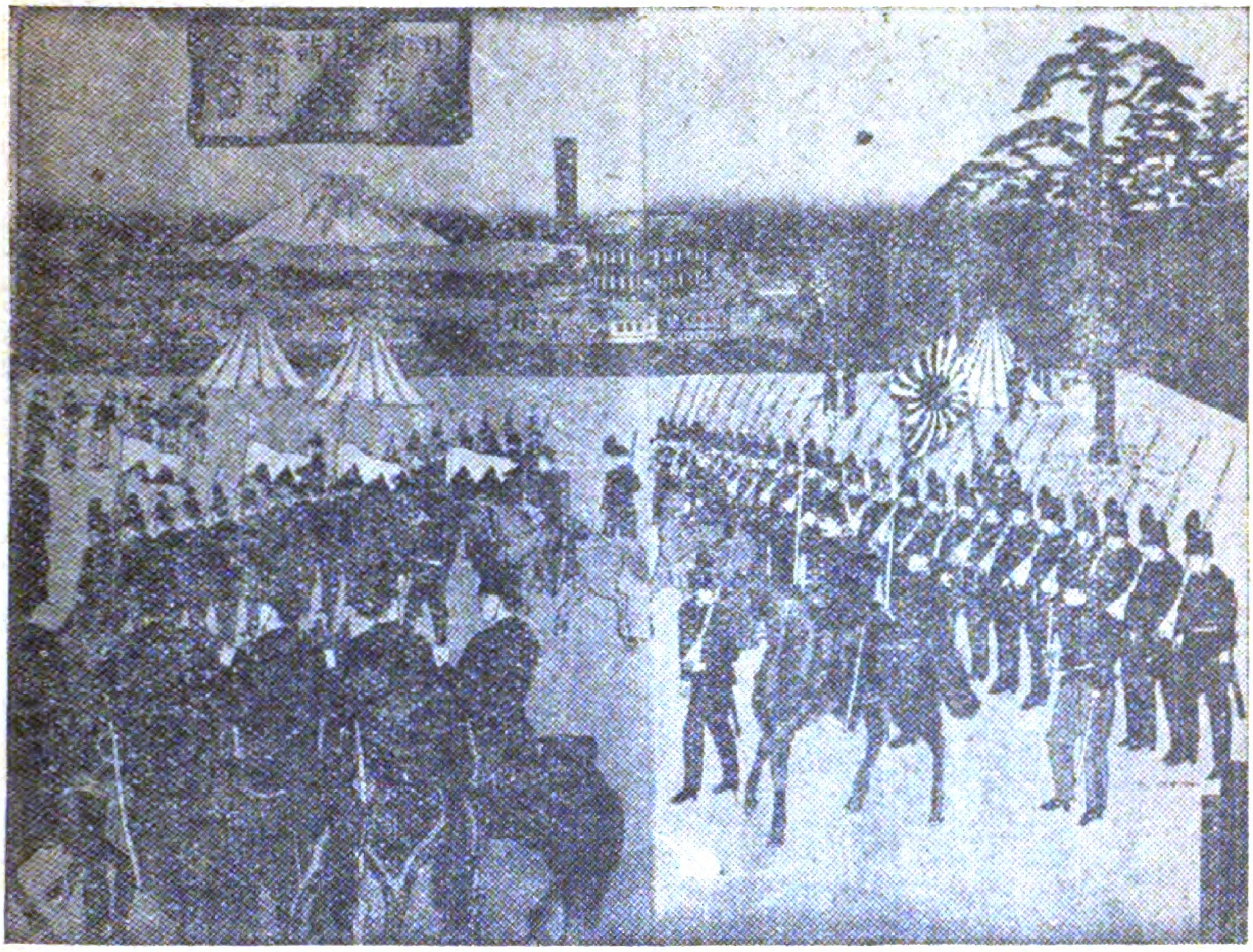
明治二十三年一月版の東京地圖を見ると、小石川水道橋內、越中島、日比谷、今の帝劇裏界隈、青山原に練兵場がある。二十三年以前のものと大した違ひはないやうだ。それが翌年二月の改訂圖には、日比谷はもう公園になり、水道橋內の練兵場は無くなつてゐる。

明治十三年三月版「東京區分明細圖」によると、青山練兵場といふものはない。今あるかないか知らぬが平長町などゝいふ町名が書いてある。

そして一高界隈にも廣い陸軍用地があり、調練場に使はれてゐたやうである。

宮城の周圍は兵隊屋敷で埋めてゐた。右の地圖によると、櫻田門、馬場先門內、二重橋前の今の廣場には、近衞騎兵、鎭臺砲兵の兵營があつた。

帝劇がもと陸軍裁判所、その裏手、池田備前侯の邸が陸軍省であつた。備前侯の一枚板の櫻の門扉が名代のものであつた。今の陸軍省は十年に建築を始めて十二年には引移つたやうた古老の話だが、十三年の地圖にまだ備前侯邸にあるやうになつてゐる。海軍省と兵學寮とは月島にあつて濱離宮と向ひ合せになつてゐる。



日比谷練兵場に於ける觀兵式の圖

菊の御紋章ある椅子に召されたるは明治天皇。背景右手三階建洋館は今の參謀本部。

今の東京會館が鎭臺騎兵營。東京驛あたりに步兵營があつた谷操練所の周りには近衞兵營、陸軍教導團などゝいふものがギッ建つてゐた。

教導團は下士の養成所で、明治六年に兵舍が霞が關に出來た。十九年國府臺に移つたので取拂はれたが、今でもそのころの赤煉瓦の家が一棟殘つてゐる。

「こゝは陸軍教導團、堂々五尺の益良雄が、冬は蹴られて雪に泣き……」といつた歌が有名であつた。

十七年一月、二代廣重の「日比谷練兵場陸軍諸隊整列式之眞圖」には、明治天皇が御椅子に腰を下ろされ、諸隊の分列を親閲して居られる。その背景に赤煉瓦の教導團——菊花御紋章のついた建物が並んでゐる。その右に參謀本部が今のまゝの姿で立つてゐる。

明治二十一年五月版「東京全圖」によると、もうこれ等の兵隊屋敷は皆取拂はれてしまつてゐる。たゞ教導團のみはそのまゝになつてゐるが、十九年に全部引越したものが、地圖の上には殘つてゐる。教導團は三十二年十一月に廢止された。

二、越中島調練

越中島では明治三年九月八日、鹿兒島、山口、高知、佐賀の四藩兵の操練を親閲された。

その時の達しの中に「練兵の節大砲は玉込、小銃は空發の事」とい



天幕の後の後方は教導團生徒舍。

ふ一節がある。大砲玉込とあるのは、實彈を込めて、海の方を向けて打つたものらしい。廣重、國貞の錦繪を見ても大砲方は海岸に並べて打つてゐる。

ところが、この日俄かに大時化となつて、海水玉座を浸さんとするに至つたので、調練を中止して御還幸あらせられた。途中新大橋の危險から、一時小名木川の高知藩下邸へ御立寄になつて、あらしの靜まるのを待たせられた。

十二日になつて、前日のやり直しとあつて、やはり越中島で調練があつた。然るところその日は御風氣のため行幸のことなく、三條右大臣に代閲を仰付られた。

天皇の調練親閲といふことは、明治二年五月、本丸跡で諸藩の調練を親閲されたのが最初のやうである。

三、洋式調練

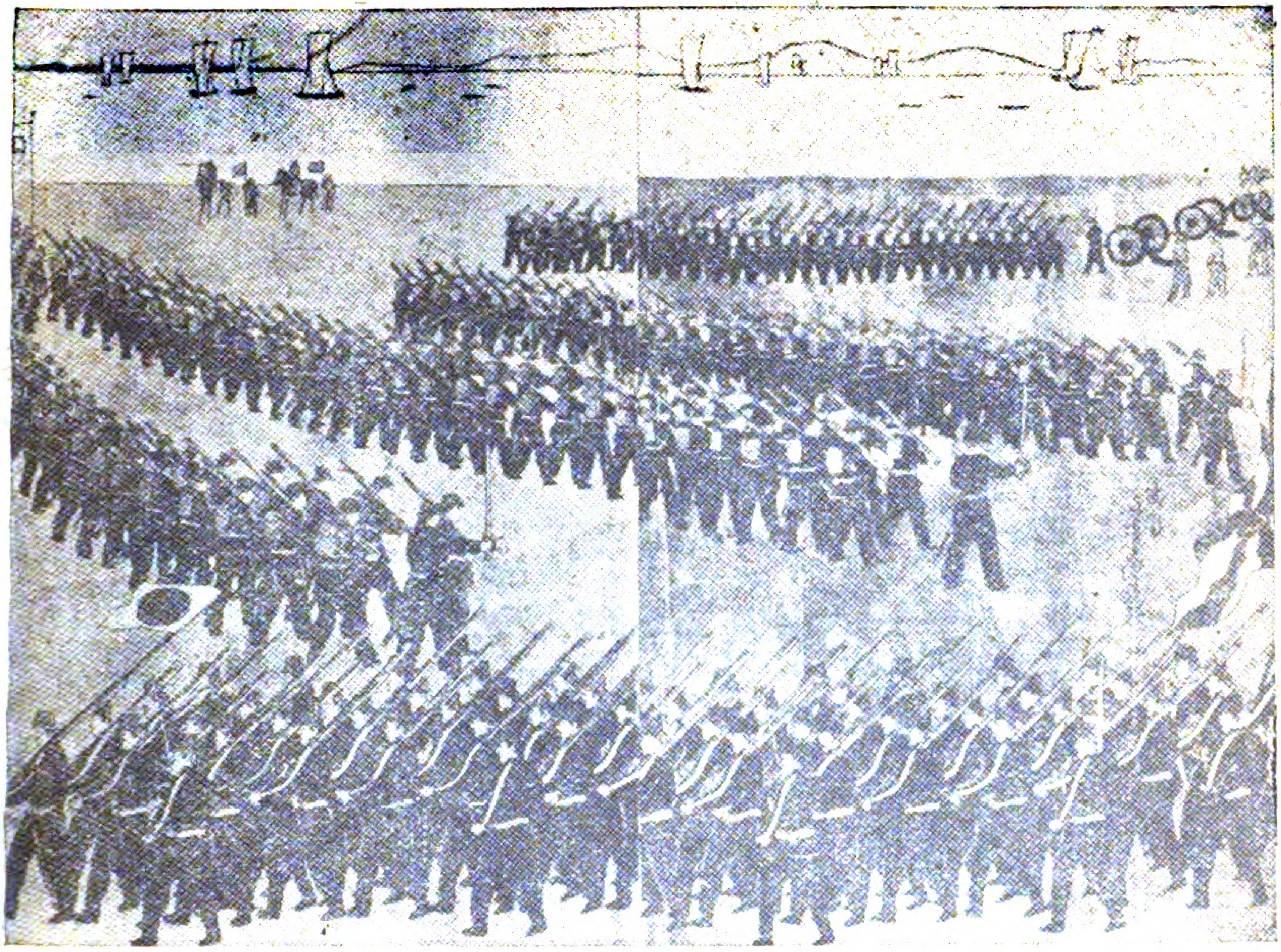
陸軍といはず海軍でも、その發祥地は大阪である。大村益次郎の意見で大阪に兵部省（陸海軍省）陸海軍兵學寮、營所などを設けた。そして佛式調練をやるやうになつた。

東京御遷都の翌年即ち明治三年の四月、駒場野の原で各藩の調練を親閲された。越中島より三月早い。その時やつた調練といふのが各藩まち／＼で高知、函館、彦根、米澤が佛式で、鹿兒島、佐賀、岡山、名古屋、熊本、などゝいふ主な藩が英式、水戸、前橋、福岡、などゝいふのが蘭式であつた。ひとり紀州藩だけは獨逸式であつた。

ピーヒヨロオツトツト、々々々々といつたやうな樂隊を聞いた古つはもの、今日幾人生き殘つて當時を回想するであらう？ もう古い古い昔になつたものだ。

「諸隊熟練、滿點に候、益々以可竭力候」といふ有難い御沙汰を賜はり、佐賀の池田彌一聯隊長として、天杯を戴き、上々の首尾で、駒場野の調練が終つた。これが兵隊らしいものの調練として見とめられた最初のものである。

其の時の命令書に「自藩の旗章一切差留めの事、禮式並運動の節は士官以上拔刀にて指揮可致事、兵隊一統沓相用可申事、從者一切召具し申間敷、騎馬士官は口取一人に限り候事、諸藩銘々飯器用意の



明治三年越中島調練天覧の圖

芳虎筆

事」などゝいふ箇條がある。

この日、一小隊を六人と定めて、髻に赤紙を結付けさした珍であつた。「令を不請して發砲禁止の事、兵隊休止の節は可成丈け右側に整列し、道路通行差支無之様心懸可申事、總而途上田畑等蹂躙すべからざる様堅く可相戒事、用事有之候共猥に隊伍を離るべからず候事」といふ注意書もある。進止總て號砲で定められ「一號砲一發を以て止り、二發を以て相進候事」だのといふ命令さへあつたさうである。

東京ではその洋式調練が、とても珍しいので、調練場にはいつも見物の黒山を築いた。筒袖ダンブクロを着た兵隊が鐵砲を擔いで一人の號令で手の平を返すやうに動くので、見るものたゞ驚異の眼を見張つた、と古老の話である。

當時出來た錦繪にも、兵隊が得意氣に市中を太鼓をたゝき〳〵歩いたりする繪がある。二代廣重あたりも調練繪を澤山書いてゐる。芝増上寺大門のあたりに、竹垣をめぐらし、見物は土下座して見物してゐる繪もある。「御小休」といふ高札が立つてゐるところは、そこで兵隊が一時休憩したところと見える。廣重の書いた調練圖には赤地に菊花の紋のついた旗を長い桿の先きにつけて練り歩いてゐる。さういふ旗があつたのか知らぬが、「御國旗」といつて日章旗を軍旗として用ひ、駒場野でも、始めてそれを使つた。しかし、そのころの日章旗といふのは、日の丸から劍尖のやうに後光が出てゐたので、一寸金米糖のやう



な形の日章であつた。後にその後光が逆になつて、今の軍旗や軍艦旗のやうな、光線が先き太りの日章になつた。

陸軍の徽章が星であるといふことについて、其の出所がしかとわかつてゐない。佛式帽の天つ邊に三角形を重ねた星形のモールが縫ひつけてある。それが大將が六つ、中將五つ、少將四つ、佐官三つ、尉官一つといつたやうなことになつてゐる。その式を見習つて星形を陸軍のマークとしたのではないかと思ふ。將官、以下の帽子のモールも全く佛式そのまゝになつてゐるやうだ。今でも將校の正帽の天つ邊に星形のマークが、一つ取りつけてある。

陸軍は明治六年に始めて帽子の徽章にした。それまでは日章であつた。

籠目形、星形は魔よけのしるしで、ファウストにも禁呪の印となつてゐるやうだ。安部晴明は魔よけとして籠目形を使つたといふし、赤兒の襁褓にこの紋を縫ひつけて、鬼の來ない禁呪にしたといふことである。ペンダラムマ（五角形の意味）が魔よけの印として、ファウストでも惡魔を封し込んだことになつてゐる。

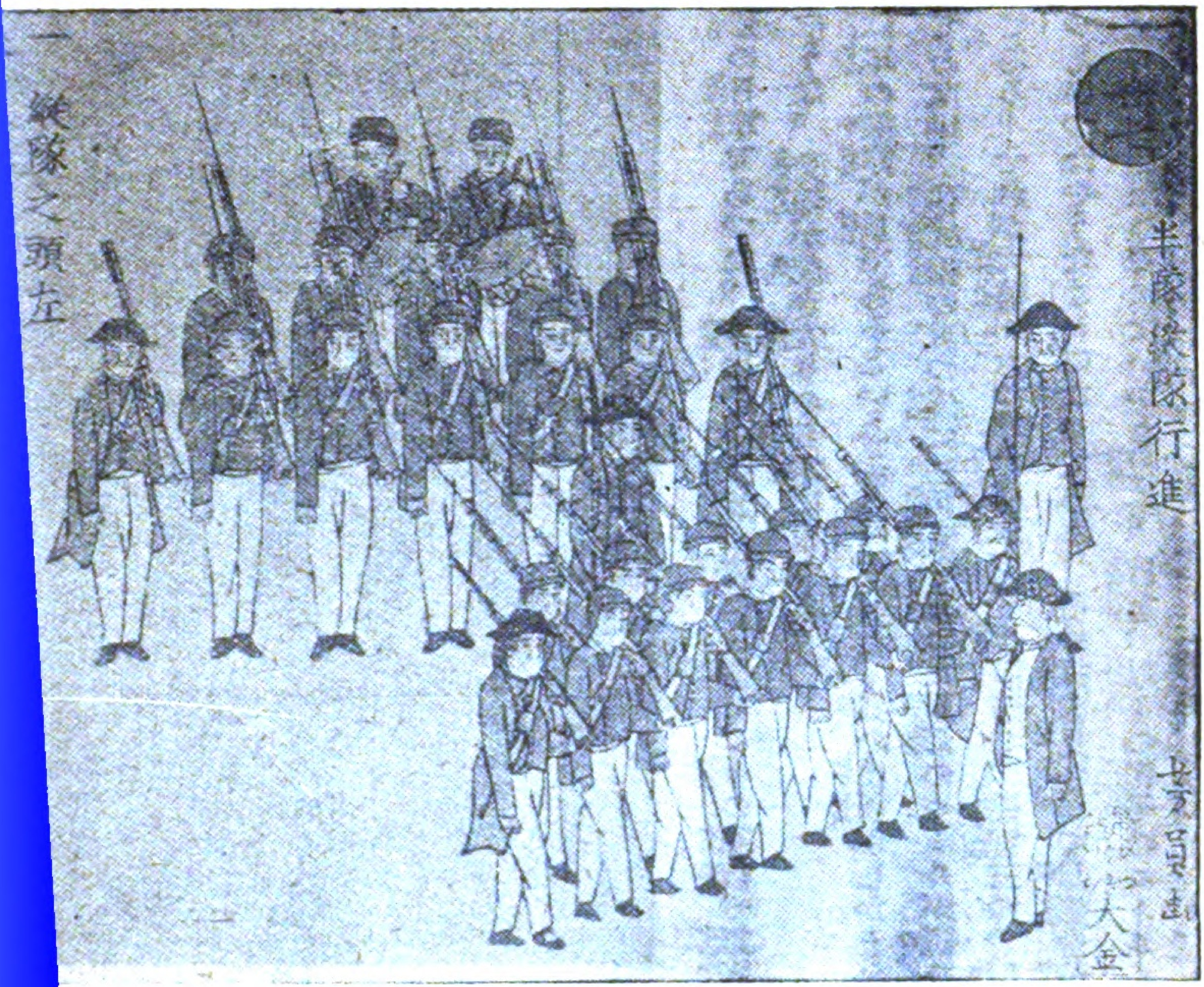
佛式帽に取りつけてある星形も必ず魔よけであつたらう。それを眞似た者が知つてやつたかどうか知らぬが、之れが日本陸軍のマークとなつたのも奇である。

四、珍號令

廣重の錦繪を見ると、兵隊の中に赤や紫のフロック形の服を着てゐるものもあれば、ブッサに、陣笠といつたものが交つて居り、中には赤毛布をマントのやうに、つまり「赤毛布」ソックリの兵隊もゐる。廣重がこの行列を見て書いたのかどうか、浮世畫家のことだから、アテにはならぬが、當時の服裝を調べて見ると、大した違ひはないやうである。

筒袖、タッツケ袴は慶應から明治にかけての軍服であつた。文久頃の繪を見ると、大ぶん樣子は筒袖股引風になつてゐる。そして背に「忠肝義膽」だのといふ大文字や、骸骨の繪が書いてある。

英式調練　　芳貞筆



芳貞の描いた岡山藩の「調練の圖」には白い垂れのある頭巾を冠つてゐる。それは帽子の上に冠せたものらしい。臺灣征伐あたりで着た日よけの頭巾のやうな。

廣重の繪には消防夫の冠るやうな黒頭巾を、國貞の「越中島大調練之圖」には、シャッポを冠つてゐる。廣重のには兵隊が皆朱鞘の落し差とある。

鐵砲の荷ひ方は文久頃は天秤棒のやうに擔いだり、銃の臺尻を上にしたり、右に擔ぐものもあれば左に擔つぐものもあり、といふ風で、背に日本刀を負ひ、肩に鐵砲を擔いでゐるといふ珍な恰好であつたやうだ。

鐵砲の擔ひ方は、古老に聞いてもよくわからぬが、佛式は今のやうに右に、英式は左に擔いだものでないかと思はれる。芳貞の描いた「小隊運動早見」といふ小さい折本がある。それは、小隊に二人の鼓手がついてゐるから、英式だらうが、それには鐵砲を左に擔いでゐる。芳虎の描いた明治三年越中島の調練を見ると、高知藩は右に、鹿兒島藩は左に擔いでゐる。高知藩は佛式で、鹿兒島藩は英式であつた。

號令もよくわからぬ。しかし芳虎の書いた「調練早合點」

隊伍の進め（小隊が二つの横隊になつて前へ進むこと）だのといふ號令が書きつけてある。

私共でも行進間停止する時「小隊ハルト！」だのといふ號令を聞いたものである。大山さんの彌助砲時代には「大つるべ打たつしやれ」だのといふ號令が殘つてゐたさうだから、この直譯號令がとても新らしい珍らしいものであつたに違ひなかつた。

五、あばれもん砲

持つ鐵砲といふのがまちまちだが、とも角も之れで立派に調練になつてゐた。明治四年にお上で引上げた時には洋式銃十八萬挺といふものがあつたくらゐどことなしに入つた鐵砲を各藩で持つてゐた。

鐵砲にはゲペール、ミニエー、エンピール、シヤスポー、アルビニー、マルチニー、スペンセル、ツンナール、といつたやうな名のものがあつた。皆口込め銃であつた。それを元込めにしたのは七年ころのことで、フランス人ルボン大尉の調査によつて鎭臺の銃を統一してからのことである。たとへば、東京鎭臺はスナイドル、大阪鎭臺はエンピール、ツンナールといつた風になつた時であつた。

これ等の銃は今でも中學生が引づつてゐたり、映畫撮影所の隅などに見出される。

大砲には四斤綫砲、といふ先込めが幕府以來唯一の大砲であつた。

鳥羽伏見の戰爭にも大山さんは砲兵隊長として、[illegible]を率ゐて出陣した。

その後大山さんが新式砲を發明した。長四斤砲といつて四斤砲同様青銅砲だが、西南戰爭には官軍にも賊軍にも使つて、お互大にこれに惱まされたものであつた。長四斤砲の發明は明治三年であつたが、その後大山さんは十二斤臼砲といふ大きな大砲を作つた。これを一名彌助砲といつてゐる。筆者は分らぬが、鳥羽伏見の戰爭に四斤砲の奮戰を描いた錦繪がある。それを見ると、陣笠や黒い頭巾を冠り、黒い筒袖股引を着て、コザックの帽子のやうな刷毛をつけた棍棒を振り廻して



慶應年間の服裝



少年鼓手、銃手、　　芳虎筆

ゐる恰好が、どう見ても消防夫としか取れない圖である。

徳川幕府の末世は、丁度歐洲ではナポレオン三世の全盛時であつた。

ナポレオンは好意を幕府に寄せ、十數名の將校以下に四斤野、山砲各一大隊分、シャスポー銃一聯隊分をつけて寄越した。これは當時佛蘭西の最新式のものであつたが、ナポレオンが英國と提携して清國を伐ち、安南を占領した

今は九段遊就館にある。

六、手向けの軍樂

ラッパといふものは三百年前、獨逸マグデブルクの要塞で敵味方共ラッパを吹いて突撃し合つたといふのが始まりとなつてゐるやうである。

私の持つてゐる調練繪には喇叭だけで練兵してゐるのがない。國貞の「越中島大調練之圖」には蓄音機のラッパくらゐな大きなのを吹き〳〵歩いてゐる。

既に慶應二年、幕府は、お傭教師として佛蘭西から將校以下十四名を聘し、横濱で歩騎砲兵調練を始めた時、三十二名の喇叭卒を養成したといふ記錄がある。この喇叭卒には苗字帶刀御免、年俸二十五兩を賜はつたとある。

調練繪には、よく子供が洋式の太鼓を叩いたり、笛を吹いたりしてゐるが、少年鼓手といふものは藩の調練には確かにあつたと見えて、芳員の「調練之圖」にも「小隊運動早見」にも二名の少年鼓手が太鼓を叩いてゐるやうになつてゐる。

樂隊として置かれたのは十九年近衞が始まりであつ

山縣參軍の命令が發せられた時のこと。それは二十四日午前四時に三發を相圖に各隊一齊に進撃するといふ時であつた。

中秋の明月は淺く白く陣營を照らし、寂として音はなかつた。

この夜のことである。官軍の陣地たる大明神山の頂きより、時ならぬ軍樂が靜かなる空氣を震動さした。

半歳以來大砲小銃の響きと、突喊の聲より聞かなかつた將士、敵も味方も壘壁に凭れて、その妙へなる音樂に聽き惚れたといふことである。

この樂隊は、官軍が陸軍大將近衞都督參議の要職にあつた西郷隆盛への別れの軍樂で、山縣參軍が鹿兒島灣にあつた海軍々樂隊を招致して、惜別の志を表したものであつた。

重圍の中にあつた隆盛等は皎々たる月光の下に、手向けの音樂を聽きながら、この世の名殘りと心行くばかり耳かたむけたであらう。

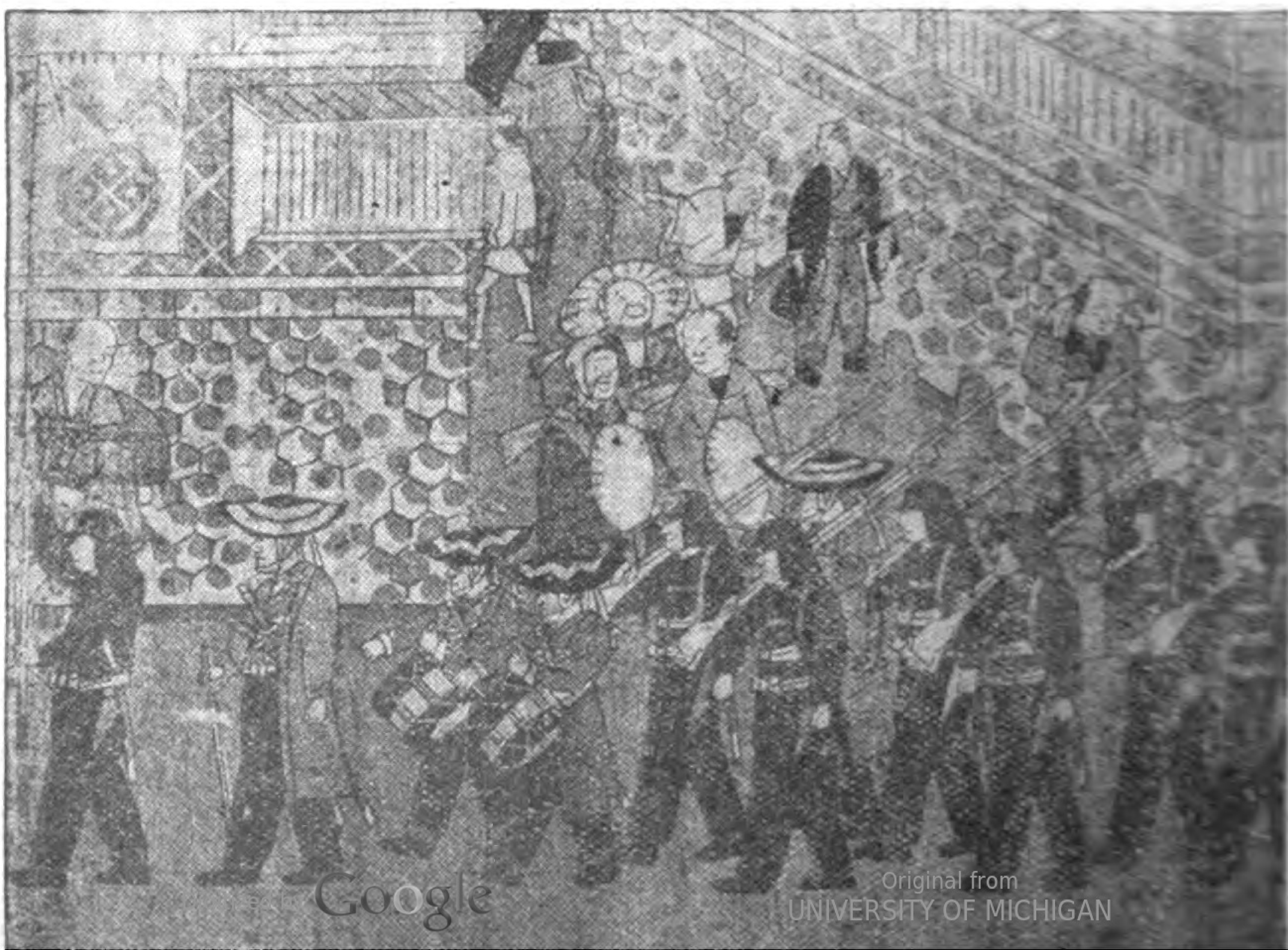
戰場での軍樂吹奏は、日本ではこれが始めてゞあるさうだ。

七、佛式より獨逸式に

聯隊をレジマン、歩兵大隊をバタイヨン、騎兵、砲兵大隊をエスカドロンなど〻日本式洋語を使つてゐた。

そのレジマンの演習が明治六年四月に鎌倉であつた。兵數千三百人、總指揮官曾我少將。

演習銃はシヤスポー、空包二萬發。



霞ヶ關今の外務省の門前を通行の兵隊　廣重畫



明治十三年七月大阪、名古屋鎭臺の對抗演習

陸軍大演習の最初ともいふべきものである。大隈參議の馬上姿も

防禦軍が鎌倉八幡を占領し、攻撃軍が「主上御出戰の合圖」にて攻撃を始めた。御野立所は鎌倉八幡にあつた。攻撃軍の一部が防禦軍の後ろに回はつたので、防禦軍が敗けといふことになつた。「オードラポー」の號音にて云云などゝいふ記錄もある。

同じ月の二十九日には、明治天皇親ら近衞兵を率ゐ、千葉縣習志野が原(當時小金が原)にて調練を行はせられた。近衞都督西鄕隆盛が大兵肥滿の體で、天皇に扈從した。

天皇には天幕露營まで遊ばされ、夜中雨がひどく漏るので、御起立のまゝ夜を明かされたといふやうなことさへあつた。

十三年七月名古屋、大阪鎭臺の對抗演習が伊勢四日市附近で行はれた。周延の繪を見ると、北白川、有栖川宮殿下の御姿も拜せられ、大隈參議の馬上姿も見える。この繪は「對抗運動大調練之圖」と銘が打つてある。大演習の起原ともいふべき演習であつた。

このころはもう調練が獨逸式になつて來た時で、佛式も英式も蘭式も漸やく影を沒するやうになつた。

それは桂太郎の意見であつた。尙武の風盛んに、國柄も人情も似通つたところのある獨逸の調練に見做ふことにさした異論もなかつた。

それは明治三年、丁度千八百七十年後で佛蘭西が獨逸に敗けたので調

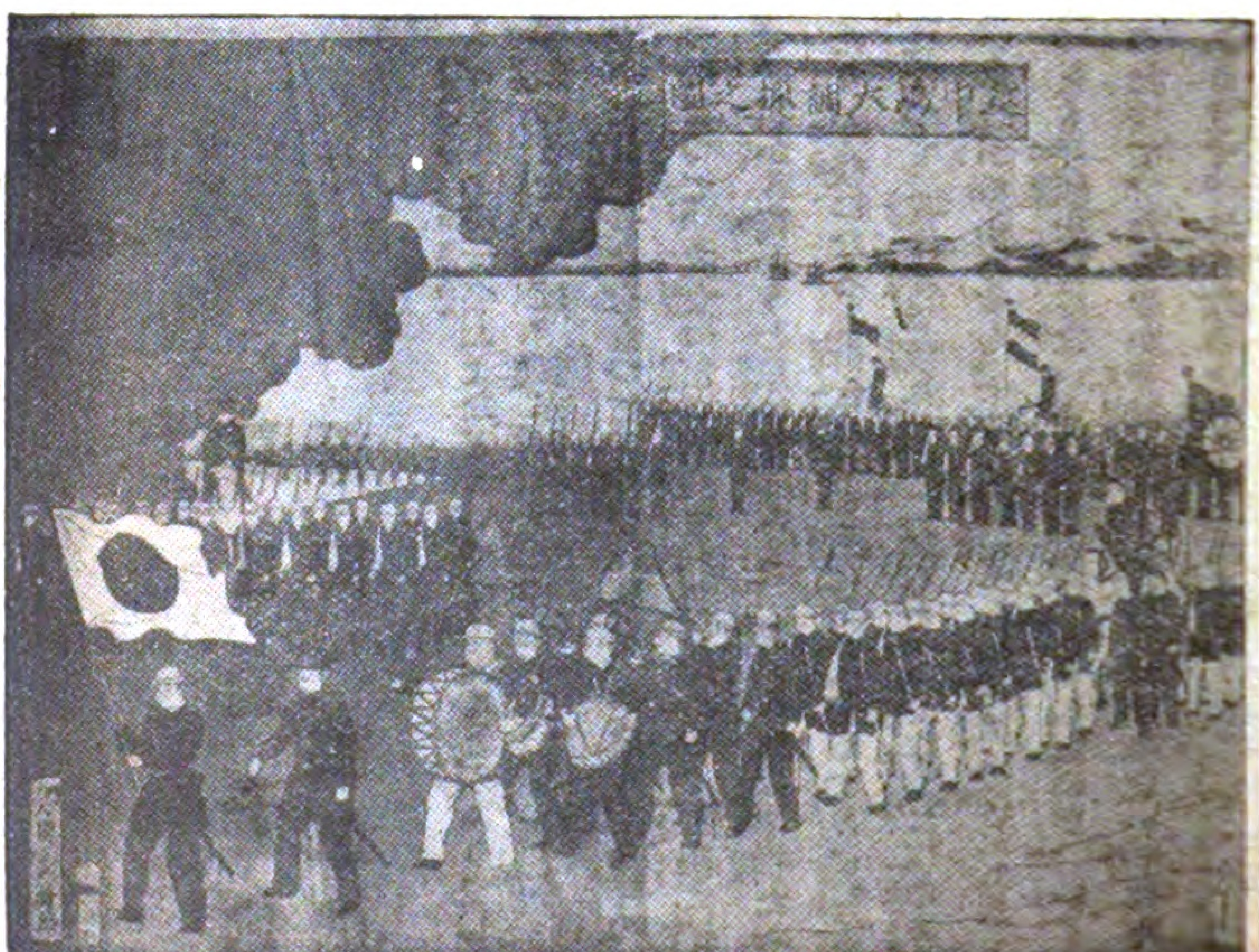
西鄕と山縣とが打連れて歐洲から歸る途中、印度洋で、普佛戰爭の起つたことを知り、勝負如何と互に議論し合つた時、西鄕は佛蘭西が勝つといひ、山縣は獨逸が勝つといつたといふ話もある。

山縣も萬更獨逸式に氣がなかつたわけではなかつた上に、桂が十一年の末歸朝してから、熱心に山縣大山を說いて廻つた末が、大山を動かし、三度目の洋行となり、そこで、桂が盛んに、獨逸式ならざるべからざるところを見せたので、十三年にはもう獨逸式萬能の時代が來てゐたのである。「小隊二段打ちかゝれ」などゝいふ密集の戰法はなくなり、間隔を開いた散開の戰法に移り變つた。普佛戰爭で佛蘭西の密集隊が獨逸の散兵にしたゝかやられたので、結局獨逸式が新式戰法として變らぬものになり、現今に至つた。

十五年にはメツケル少佐を招聘して獨逸式兵制の教授を受けた。



周延筆



越中島練兵場に於ける調練

お佛教師によつて傳習を受けつゝあるところ　國貞筆

漱石の思ひ出（四）

夏目鏡子述
松岡譲筆録

十六『筆の日記』

さてプロイセン號の客となつて出かけましたが、それから先きのことは、たまさかに貰ふ手紙などで知る外、人からの噂さへも聞くたよりがありませんでしたので、自然航海中や外國での生活の模樣などは私にはわかりません。其頃、私のすぐの下の妹の時子が、建築家の鈴木禎次さんのところへ嫁いで、大阪に新世帶をもつて居りましたので、船が神戸へつくと出迎へて、それから餞別に萬年筆を贈つたさうです。今でこそ萬年筆などは珍らしくもなく、酒屋の小僧さん迄が持つてるのですが、當時は中々珍らしいものでありました。それをポケットに入れて、どつか印度洋あたりでの話ですか、器械體操をしてゐたら折れて了つた。時さんによろしくとわびをいつてくれなどゝいふ手紙が來たことがありました。途々港々でよく手紙を書いてくれましたが、ロンドンについてからも、此の時さんのことでは、ロンドンの繪葉書を二十圓ばかり買つて送つてくれといつて來たが、時さんはいつも不相變の御大名だよなどゝいつて來たことがありました。

手紙のことをいへば、私が元々の筆不精のところへ、小いながらに切りつめた貧乏世帶をもつて、子供はあり、それも翌る年の正月には身二つになつて、次女の恒子が生まれましたので、何かと忙しいこともふえて、書かう書かうと思ひながらも、朝のうちは子供たちのお守りをしたり、午後になると針仕事でも出したり、そんなことをしてゐるうちに夜になつて、夜は夜で疲れて眠くなると云つた工合に、中々手紙を書くといふ時がありません。すると家郷からの手紙が待たれると見えて、ちよつとも手紙を寄さないぢやないか、どうしたのか、いくら忙しいといつたつて、たまさか手紙の一本位書く時間のない筈はないと言つて參ります。さうなると此方も、そんな事をいつたつて、これでもあれやこれやで中々手紙が書けない、さういふ貴方だつてあんまり此頃では書いて下さらないぢやありませんかなどゝ言つてやつたものです。すると夏目の返事が振つて居ります。おれは勉強に來て忙しいのだから、さう〳〵は手紙も書けないと、ちやんと最初から斷はつてあるぢ

[illegible]のこと、顧はらずに[illegible]のことは[illegible]
やし」とは一體何のことだ。一々あれやこれやを研究して御覧なさいと、かうなんです。そこで私も考へまして、手紙といつてさう〱書けるおやなしと、そこで思ひついたのが『筆の日記』です。

筆といふのは私どもの長女のことで、毎日床につく前になると、其日の日課の積りで、一日起きてから寢る迄の筆の行動を書きますのです。勿論甚だ面白くもないたわいのない記録で、朝起きてオバサンが何處へ連れて行つてくれたとか、こんなおいたをして遊んでゐたとか、泣いたとか笑つたとか、歯がどうしたとか、風邪を引いたとか、そんな他人が見たら一向つまらないことを根氣よく缺かさず書きました。それが一月もたつと相當にたまるのでロンドンへ送つてやることに致したのです。するとそれを大層喜びまして『筆の日記』が非常に面白かつたと、それからは送る度に禮をいつてくれました。

この日記は一年の餘も續いたかと思ひます。どうしてやめたか私もおぼえて居りませんが、いつの間にやら中絶のまゝになつて了ひました。歸朝した時はそれが全部纏まつてカバンの中から出て參りましたが、其後どうなつたものか今では行方が知れません。

其後手紙では、彼方へ行つて見ると、此方でそれ程とも思はなかつたことが氣になると見えて、よく私の頭のハゲのこと、歯並みの悪いことなどを氣にして、始めのうちは手紙の度にそれをいつてよこしたもので
[illegible]
た、とう〱終ひには[illegible]部分は自分である[illegible]の中に[illegible]、私のハゲのことを許いて了ひました。[illegible]氣になつたものと見えます。

それから歯並みの悪いことも始終文句の種で、西洋へ來て見るとそんな歯並みの悪いものはないから、父から借金をしてでも留守中になほしておくがいゝなどといつて來ました。と申したところで、當時の財政狀態ではうか〱歯醫者通ひも出來ず、一寸通つただけでもそれがすぐに借金になるといつた工合でした。其後手紙で何々小言をくつたものは、前にも一度申上げた私の朝寢坊です。十時頃迄寢てゐる女は、お妾か娼妓位のものだなどゝ大分油をしぼられましたが、どうやつて見ても早く起きるとあたまの工合がよくないので、自然朝寢になつて了ひます。そこで何々こんな會話が繰りかへされるのです。

「お前の朝寢坊と來たら、誠に不經濟で、第一見ともないこと此上なしだ。」

「しかし一二時間餘計にねかせて下さればそれで一日いゝ氣持で働かなりやります。だから無理をして早く起きていやな氣持で居るよりよつぽど經濟ぢやありませんか。」

すると夏目が申します。

「又理窟をつけて四の五のいふが、お前のやうな細君はだんな一人だからそれでもつとまるやうなもの、若し姑があつたらどうする。つ

とまりつこないぢやないか。」

「その時はその時で、外の方でちやんと埋合せをつけて、私でなければ夜も日もあけないといふ風にして見せます。」

私もまけては居りません。と夏目がこんなことを申します。

「お前はそれでいゝかも知れないが、第一お前の寝坊で、おれがどれだけ時間の不經濟をやつてるかわからない。おれは一時間も前から目をさましてゐるんだが、細君より先に床を離れるのは不見識だから、お前が起きる迄床を離れない。これを長い間に見積ると大變な損失だ。」

しかしかうしたお小言も色々のことではありましたが、とう〳〵死ぬ迄この御寝坊ばかりはなほりませんでした。

十七　留守中の生活

留守中私が居りました家は、本屋の離れで、獨立した一軒家になつて居りまして、玄關が二疊、次が四疊半、座敷が八疊で、女中部屋として三疊が二間ありまして、子供をかゝへて一人が住むには勿論充分だつたのです。實家とは庭一つを隔てゝ居りながら、入口は裏側に門がありまして、至極便利に出來て居りました。第一何より有難いことは、父の住居や

して人が住んで居られます。

私達は全くの無一文で、熊本を出て來る時でさへ、旅費や何かが足らず、私の父から六十圓か百圓かを借りて上京した位ですから、夏目が洋行するからといつて、文部省から貰つた留學費や旅費の外に、餘分の自分の金といふものは一文も持ちませんし、又後へ殘つた私の手元にも全く半錢の蓄へもございません。其頃の私の生活費といふのは、休職月給として下りる二十五圓の金許でして、その中から例の建艦費の二圓五十錢を差つ引いて渡されるのだから、いくら物價の安い當時にあつても心細いことといつたらありません。だから一寸した臨時費がかゝりますと、それはもうこの二十二圓五十錢の外へはみ出して了ふのです。これで家賃が出ないからどうやら助かつたやうなものゝ、子供二人を抱へて女中との四人暮らしでどうやらやつて來たのだから、隨分苦しい思ひも致しました。

そんなわけではありましたが、貰つてるのは貰つてゐるのですから、税務署に馬鹿正直に三百圓の屆出をすると、何故急にこんなに月給がへつたのだと叱られて笑つたことがありましたが、それでも年に三圓の所得税をおさめてゐたものです。

一體私達の住居

[illegible]のでせう、内緒で相場に手を出して、あべこべに懐加減が[illegible]くなかつたらしいのです。そんなことを此方は知らう筈もないので憤んだのですが、返事は芳しくありません。そこで仕方がない、夏目も自分は自分の留學費だけでやるより外に方法はないし、私にも休職給で暫らく辛棒してやつて見てくれないかといふことになつたのでした。

そこで私もその氣になつて日蔭者のやうな暮らしを致しました。第一着物などはこしらへるどころか、普段着なんぞはいつの間にやら着破つて了ひ、あとでは自分の着物ばかりでは追つかなくなつて、夏目の無けなしの大島なんぞを仕立てなほして、いかな普段着でも新らしいものを買つて、金を出すよりはと思ひましてそれを着ました。着たら最後代りがないのですから、惜しいとは知りながらみす／＼着破つたものです。夜具なんぞもそのとほりで、二年半たつて夏目が歸朝した時などは、それは／＼みじめなもので、着物なんぞ今迄あつたものは殆んど着破つて滿足なものはないといつてい丶位でした。それでも私一人のことはどうやらすむのですが、子供二人には元々何もないのですから、季節季節には何か買つてやらなければならないので弱りました。

父が官職を辭さなければならなかつたのはどういふ理由からだつたか私にはわかりませんが、何でも前の大隈内閣か何かの時大分盡くし[illegible]内閣に[illegible]せて了へとかいふので大分[illegible]があり、そこで當時の[illegible]さんから、一時どいたらよからうといふことになつて辭職したのださうです。さうしてしばらく遊んで居りました。相場などに手を出したのはその時でありましたでせうが、それからしばらくしてから行政裁判所評定官といふものに任命されました。これはたしか終身官かで、隱居仕事には丁度い丶といふので、自分でも氣が向いてゐたのですが、次に末松謙澄さんが内務大臣になられた時に、是非地方局長をやれといふことになり、末松さんには前々からお世話になつてゐたので、自分では氣に入りの行政裁判所で餘生を終る積りなのが、又義理で斷はり切れず浮草稼業を引きうけて了ゐました。これがどれ位續きましたか、一年か一年半だらうと思ひますが、後の處それから末松さんがおやめになる時、自分もやめて、又もとの無職にかへりました。父なども其頃はつく／＼官吏の浮草稼業にはこりてゐたやうでした。

それからといふもの運が向いてまゐりません。職はなし、前の相場の穴はあり、それを何とかして埋めなければといふので、手を出せば出す程よくない。さうなれば愈々あせるといつたわけで、其頃の父の懷加減は、最初のうちはわからなかつたのですが、もう私にも大體わかつてゐて、たとへ些細な金でも借りられない程[illegible]にな

つて居りました。しかしそこを何とかして彌縫はして出て居りました。

私がこんな貧乏暮らしをして居りますと、父も父でこんなみじめな工合になつて參ゐります。此時夏目はどんな暮らしをして居ましたかといふに、當時の留學費は一年に千八百圓、月割りにして百五十圓、それも英國なればこそそれだけなので、獨逸あたりはずつと安かつたかと覺えて居ります。何でも貧民窟見たいな安下宿を見つけて、學校へ正式に行くには金もかゝるし、又時間も無駄になるといふので、そこに籠城して本を買つて、時々教師のところへ通つたと申します。よく手紙に日本から行つたものが浴衣をかつたりしてゐるのを惜しがつて、その金を自分にくれたらなどゝ申して來て居りましたが、何もかも切りつめて本を買つては勉強したものださうです。自分も本を買はなければ、いま少しは上等の下宿に居ることも出來るのだがなどゝいつてよこしたことがありますが、隨分切りつめた上にも切りつめて、日本にかへつたら何かと用があつてゆつくり勉強も出來まいといふので、根限り勉強したものゝやうです。自分でも生涯のうちで一番勉強したのは此時だと述懷して居りました位です。さうして感心によく書物を買つたものゝやうです。下宿をかへた時かに、あんまり本を澤山持ち込んだので、宿のものが驚いたとかいふことがあつたさうです。

いつだつたか何誰かに伺つたことに、外國生活をしてゐると、語學が出來ないか或は女に近づかないか、そのいづれかで神經衰弱になるものだ。夏目の留學に行く船の中からほめられたといふ位だから大丈夫でせうが、すると品行も甚だ方正だつたのでせうなどゝいつて居られたことがありましたが、ともかく切りつめ過ぎた生活の上にあまり勉強が過ぎたのでせう、ひどく頭を惡くした樣子でありました。しかしこれはもう少し後でお話致しませう。

妹の梅子が大に激勵する積りであつたのでせう。ある時ロンドンの夏目のところに手紙を書いて、兄さん、是非博士になつて、えらくなつておかへり下さい、それをお待ちしてゐますとか書いてやつたものと見えまして、やがて程へてからの手紙に、梅子が博士になつてお歸へりなさい、それを待つてゐますといつて來たが、おれは博士なんかには決してならない。博士だからえらいなんて思ふのは大變な間違だ。博士なんていふものは、やつてることはいくらか知つてるでもあらうが、其外のことは一切知りませんといふ甚だ不名譽千萬な肩書だ。だから人はどう言はうと、お前はおれの女房なんだから、そんなくだらない博士の肩書なんぞ見てはいけないし、そんなものだからえらいだなどゝ誤解してはいけない。おれは生涯どんなことがあつても、そんな稱號は決して貰らはない積りだ、とこんな風な口調で言つて來たものです。すると折角好意を示したのに此のお小言なので、妹もすつかり怒つて了つて、

「私は博士になつておかへりなさいといつただけで、別に兄さんが博

出にか[illegible]といつて[illegible]て、大變ふくれたことがありました。

何しろ手のないところに、私がどつちかといへば極はない方なので、赤ん坊を危くないやうに放たらかしておいては仕事をしてゐます。とそのうちに赤ん坊が泣き出します。すると夜晝にかゝはらず、すぐ窓が向ひ合はせになつてゐる部屋に居る弟が、氣の毒がつて飛び出して來て、あやしたり抱いて行つたりしてお守りをしてくれました。弟の家内も居りまして隨分二人にお守りをして貰らつたものです。

ところがさうして二人にお守りをして貰ふ時には、私も赤ん坊も大に幸なのですが、時々例外の情ない時が出て來ます。其時はお猿さんのやうに赤ちゃんは簞笥の環に紐の先きで結いつけられてゐるのですが、其のうちに御馳走をたんまりして、おとなしくしてゐると思へば、それをこねまはして遊んでゐたとやらためたとやらで散々の有樣でした。何しろ子供も二人になつて見ると、主人が居らないのでやることもないやうなものゝ、それこそ何やかやで二年半の月日も殆んど夢中で過ごして了ゐました。

十八　白紙の報告書

夏目がロンドンの氣候の惡いせいか、何だか妙にあたまが惡くて、此分だと一生このあたまは使へないやうになるのぢやないかなどゝ、[illegible]かと思つて居ります。[illegible]深くも氣にとめてゐなかつたのですが、本人がさういつてこぼして來る位たから、側に居た人が變に思つたのは無理のないことでしたでせう。夏目が發狂したといふ專らの噂が日本にも傳はつて居たのださうですが、私は一向そんなことを知らずに居りました。事のおこりはかういふのだつたと後から聞かされました。

何でも留學生の義務として、文部省へ毎年一回づゝか、研究報告をしなければならないのださうですが、夏目は馬鹿正直に、一生懸命で勉強はしてゐるものゝ研究といふものにまだ目鼻がつかない。だから報告しろつたつて報告するものがない。しかも文部省の方からは報告を迫まつて來る。そこで益々意地になつたのか、白紙の報告書を送つたとかいふことです。文部省でも變だと思つてるところへ、丁度同じ英文學の研究で留學を命じられて彼方へ行つてゐた某氏が、落ち合つて樣子を見てゐるとたゞ事でない。宿の主婦にきけば毎日毎日幾日でも部屋に閉ぢこもつて、部屋をまつ暗にして、悲觀して泣いてゐるといふ始末。これは大變だ、てつきり發狂したものに違ひない。かういふので、いつ自殺でも仕兼ねまじいものでもないとあつて、三日ばかり其方が側についてゐて下すつたさうですが、經過は依然たるもので、見れば見る程益々怪しい。そこで文部省とかへ夏目がロンドンで發狂したといふ電報を打たれたといふことです。そんなわけで一高あたりに居

られたお友達や、それからどうして知つてゐたのか　姉の時子や鈴木たちも知つてゐたのださうですが、鈴木などはともかく暗であつて見れば、本當かもわからないか、又うそかもわからない。歸へつて來て見ればわかるのだから、其時になつて臨機の所置をとつたらいゝのだから、今から話をして家のものを心配させるにも當るまいとあつて、誰にも私に聞かせずに置いたものださうです。

或る時、もうそんな話が充分臘まつてからのことでせう、其頃一高の教授をして居られた菅虎雄さんにお會ひしましたので、此間ロンドンから手紙が來て、何だか病氣であたまが惡い、一生この頭はなほらないかも知れないなどゝ書いてありましたと申しますと、菅さんが妙な質問をなさいます。

「さうですか、それ以外どこも惡いとも書いて來ませんか。」

しかし私は別に深い存念があらうとは知る筈もないので、

「其外別に何とも書いて參りません。」

とお答へしますと、

「その手紙といふのは自分の手で書いたものですか。」

といふお尋ねです。益々變な質問なのですが、私はなほも平氣で、

「えゝ、自分の筆蹟でございました。」

と、[illegible]

ところ、かたかつたかとかたい、[illegible]考へて見れば、菅さんの方ではてつきりキ印になつたのだからとし頭で、あれこれとためをおして、遠くに居る友達の身の上を案じてゐられたのですが、私は知らぬが佛で、その珍妙な質問を變だとさへ思はなかつたのです。

夏目も自分のことで、それ程の騷ぎがあつたことは後迄知らずに居たやうですが、それでもみんなが氣狂扱ひにするのが心外だつたと申して居りましたから、全然知らなかつたのでもなかつたでありませう。この電報事件のことは後で聞いたと見えて、歸へつてからこんなことをいつてゐたことがありました。といふのは電報を打つた某氏が夏目と同じ英文學の研究者なところから、夏目が失脚すればその地位が自然自分のところにまはつて來るといふので、大した病狀もないのにそんな奸策をめぐらしたのだ、彼奴は怪しからん奴だなどゝ憤慨の口調を洩してゐたことがありました。しかしこれはどつちがどうなのか、私には全くわかりません。

下宿の主婦姉妹が大變親切にしてくれる。しかし[illegible]へ云はるとすぐに惡口をいふ。それから何かといふと直きに涙を流す。が、それも空言[illegible]だ。そんな[illegible]

もし〳〵泣いたりしてゐるのを知つては、自然どうなることかと案ぜられたつたことでありましたでせう。その又錢を取るのが夏目の神經に障はるといふわけだつたのだらうと思ひます。

其後當人から聞いたのですが、あたまの調子が少しづゝ變になつて來ると、これではいけない、こんなになつちやいけないと、妙にあせり氣味になつて、自分が怖くなるといふのか、警戒し氣味になつて、だん〳〵自信を失つて行く。それでなるべく小さくなつて、人に接しないやうにと心掛けて、自分を守つて行くのださうです。それが病氣の第一歩で、さてそれから自分が小さくなつておとなしくしてゐるのに、一向人がそれを察せず、いぢめやういぢめやうとかゝつて來る。さうなると此方も意地づくになつて、これ程おとなしくしてゐるのにそんなにするんならといふ氣になつて、無暗にむかついて癇癪を爆發させる。かういふ段取りになるのださうです。で後で考へて見ると、其時にはつまらないことが氣になつて、其間絶えず誰かゞ監視してゐるやうな追跡してゐるやうな惡口をいつてゐるやうな氣がするのださうです。此時にも英國人全體が自分を馬鹿にしてゐる。さうして何かと自分一人をいぢめる。これ程自分はおとなしくしてゐるのに、これでもまだ足りないでいぢめるのか。そんなら此方にも考がある。もう此上はおとなしくなんかしてないぞといつた氣持だつたらしいのです。かうしたことは其後も時々ありました。だから此の病氣がおこると、一番近くに居るものが一番迷惑するのです。が私はそれを最初のうち病氣だとは知らずに居ましたが、いつかそれは後で、お話しすることにいたしませう。

下宿の主婦姉妹はそんなわけで大變嫌はれて居りましたが、ひとりお醫者さんだけは大層親切にしてくれて、いつも訪ねて來ては馬車にのせて郊外へ遠乘に連れて行つて、さうして何かと心を盡くして世話してくれたと當人はいつて居りました。

こんなことをしてゐては自分でも苦しくて堪らなかつたのでせう！あたまを外へ向けたらと思つてゐる矢先き、醫者や宿の主婦がしきりに戸外の運動をすゝめるので、自分でもその氣になつて、勉強の方は一時そつちのけにして、宿の主婦のすゝめで自轉車乘りを始めたさうです。よくおつこちて手の皮をすりむいたり、坂道で乳母車に衝突して、以後氣をつけろとどなられたりして、それでもどうやら上達して、人通りの少い郊外なんぞを悠々と乘りまはしてゐるうちに、餘程氣分も晴やかになつたと見えて、大分あたまもなほりかけて來たさうです。夏目が自轉車を乘りまはしてゐる圖は一寸想像も出來ませんが日本へ歸へつて來て其話をしますから、此方でもおやりになつたらいゝぢやありませんかと申しますと、どうも東京はロンドンと違つて、道が惡くて、其上せゝこましくていかんと申しまして、とう〳〵乘りませんでした。其頃のことを書いて『ホトトギス』に載つた『自轉車日記』といふ文章がございます。

其頃いつか大塚武夫さんが、小笠原伯爵についてロンドンに行かれ

時夏目と同じ下宿に居られたことがあるさうです。滿二年の留學期も終りに近づいて、いよ〳〵日本にかへるといふ段になつて旅費を受取ると、無闇矢鱈と書物を買ひ込む。その無鐵砲さ加減、傍で見てゐてははらはらするので、今にあの分では旅費をみんな書物に代へて了ふに違ひないとあつて、犬塚さんが氣をきかして、郵船へ行つてその旅費のうちからともかくも船賃だけは拂つて切符を取つておいて下すつたといふことを伺ひました。其頃もまだあたまがいくらか、變だつたのでせう。犬塚さんは小宮豐隆さんの叔父さんで、後で小宮さんが大學に入られる時かなんか、犬塚さんからのお賴みで保證人になつたやうです。それから小宮さんが始終おいでになるやうになつたのです。

十九　子規の死——歸朝

子規さんが亡くなられたのは、明治三十五年の九月でしたが、その亡くなられる前に一度、お土産物をもつてお見舞に行つたことがありました。座には子規さんのお母さんと妹さんが看護して居られました。

死なれる年の春の末頃かとおぼえて居りますが、お顔や膝はまるで半紙のやうに白く、息遣ひが荒くて、見て居ても苦しさうです。全くじつと臥つたきりで、私が來たといふのでほんの一寸頭を擡げて挨拶なさいましたが、あれでよく[illegible]

そのことをロンドンへ書いてやりまして[illegible]ど、私なぞは一寸一目見ただけですのに、貴方は子規さんをお訪ねすれば、半日でも坐はり込んで平氣で話しておかへりになる、えらいものだと申しますと、よく見舞に行つてくれた、いゝことをしてくれたと喜んで參りました。お葬式の日には、十屋さんがそんなところには行かぬがいゝ、私が代理で何もかもやつて上げやうといつて、おくやみやら何やら一切十屋さんがやつてくれました。私がお見舞に上がつた時、子規さんが白いネルの繃帶なんぞをきて、さつぱりしてゐらしたのが今でも目に浮んで參ります。此間久々で根岸へお訪ねしましたら、入口のところが一寸變はつただけで、あとは其當時の儘のやうだつたので、大變懷しい思ひが致しました。

さうかうしてゐるうちに留學期限が切れて來る。もう歸つて來さうなもんだと噂してゐるのですが、いつ歸へつて來るとも、何といふ船に乘るとも、とんと音沙汰がございません。するうちに何日神戸入港の汽船で歸朝する人々といふ中に夏目の名が出てゐるといふのを誰かが新聞で見まして、そんなら一月の下旬に神戸へつくのだらうといふので、郵船會社へ問ひ合はせたりなどして待つて居りますと、一月の二十八日だつたかと思ひますが、今神戸へ上陸した、何時の[illegible]

明日の花

新居格

「人民」のクララ・ボウは elopment の場合でも、細卷の金口の灰がこぼれるほどの陰影をさへ落さなかつた。朝の風がさわやかに淸麗な河岸のプロムナアドを吹くやうに。あの魅力のある特殊の眼、曇りのない瑠璃色の鐵、これが浄化器(ピュリファイア)にちがひない。

自由なんだけれど香氣のあるリズムがある。澱みがないからフレッシュなんだ。昨日の薔薇を感傷しない。だから明日の花！明日の匂！

感傷には靑い酸性がある。それが物を腐さらせるんだよ。心と身體とに錆なんかをつけて堪るもんかい。

サローンの麗人がペルシヤ猫を抱いて、ルビー色のお星樣をその晩には數へやうと空想したつて、そんなのがモダンにはならない。どちらかと云へば、仕事服を鋏でちよん切つて、それで夜會服、有り合せの花瓶の花を無雜作に胸に挿して、「あゝこれでいゝんだ。」その夜のクラブがどんなに華やかでも、社交婦人(ソサイチーウーマン)の服裝が洒落れてゐても「何に構ふものか。陬つこに引込んでゐる必要なんかないわ。眞中へ行きませう。まん眞中の食卓へさ。あんな人達は今にあの服裝のあのまんまヴォルガの船を曳かせてやるんだ」と云つた格好で、貧民街からクラブに遠慮會釋もなく乘込んで行く「イット・ガール」のクララ・ボウが遙かに〳〵モダンなんだ。社會相の澱みを鋭い尖端の銀針で突つついて行くんだ、モダンなんて。

遠近描出法——明暗と幾何配景——をそれらは感覺の細線で聰明が自づからに規範してゐる。社會層の、都會の、人間の亂雜に見える交響樂の中から取り出だす新しい形貌と、新しい香氣と、新しい光線と、それから新しい韻律。新しい形型を含んだ破型。

だから摸倣はどんな精巧な姿態に於いてなされても、それは吸取用紙である。

吸取用紙で拵へた男と女のお人形達、では一足お先きへ。

淸快の風を呼べ。速力の快調を行動の血脈のリズムに置き換へよ。轉換期の空氣は奧から木ぎ〳〵に。……

近代風景は銀いろのスクリーンを走る映畫のテンポよりも急速調であるかも知れないのである。

感傷性をすつかり絞り出した淸新な斷面に すんだ明徹、澄んでゐて色もあるし、匂ひもある。無意味のほかに意味もあつて、退屈なんかを蹴り飛ばす。

人！よ！　花園の思想ではない。ペーブメントに動いて行く人造人間のパネ仕掛ではない。ジヤヅの酒場で「鶉のエス公」の擧げる氣焰ではない。

亂醉の眼に映つた逆立ちせる高層建築ではない。風速四十メートルの深夜の街にだつてまつ毛一本の微細な陰影にだつて、言葉の二つ三つにだつて、近代風景は映つてゐるものを、

道化役者のピエロがいつまでも泣き笑ひの象徴のやうに思つてゐるんでは、モダンも何もあつたものかい。

「では尖端」

幕末維新の英雄勝海舟翁

勝田孫彌

一　緒言

幕末の偉人であり、維新の英雄である、勝海舟翁が逝かれてから、本年一月は、恰もその三十年忌に當つてゐる。往時夢の如く、感慨更に新なるものがある。茲に聊かその一代を記して見たいと思ふ。

海舟翁は、堅忍不拔の精神を以て、文武の業を勵み、また身心の修養に勉められ、その識見の偉大にして、一世を洞見する達識あり、始終一貫、憂國の志厚く、君國の爲に盡瘁された人である。獨り德川氏のみならず、源頼朝以來の覇業を無事に收めて、王政復古の大業を翼贊されたのである。

要するに、海舟翁の如きは、立志傳中の人傑で、晩節を全うした大偉人であつた。

二　出生

海舟翁は、文政六年正月晦日、本所龜澤町の宅に生れられた。勝家の祖先は、少祿ではあるが、三河以來の旗本であつた。

德川氏の末造に當りては、地方から出府したものが、旗本の養子となる風習が行はれた。海舟翁の實の曾祖父は、もと越後の小千谷から江戸に出て來た盲人があつたが、非常に偉い人で、後には立派な富豪となりて、檢校の位を得、男谷檢校と、多くの人に尊敬される身分となつた。ところで檢校は、その孫に當る左衞門太郎を、勝家の養子となしたが、翁はその總領として、生れられたのであつた。

翁の伯父なる男谷下總守は、劍術の師範家であつた。父の左衞門太郎は夢醉と號し、磊落にして家道を修せず、翁が十六歳の時に家督を讓りて退隱した。而して翁は少壯の身を以て困難の間に一家を經營しつ

つ、文武の修業をさるゝことゝなつたのである。

翁は實に天資非凡であつた、嘗て、喜選院といふ人相見が、翁を見て、非常に偉大なる相を備へられ居ることを、豫言したといふ話が言ひ傳へられてゐる。

翁が七歳の時に、十二代將軍徳川家慶の子、初之丞公子の相手となつて、幕府の大奥に仕へられた。然るに翁が十二歳の時に、公子が他界されたので、翁は大奥から、退城されたのであつた。

若し初之丞公子が、成長されて、將軍の世嗣となられたらば、翁は幕吏として立身されたことであらうが、不幸にして公子の逝去と共に、其望は空しくなつたのである。然しながら、翁が幕吏として立身することの代りに、幕末の偉人として、又維新の英雄として門出されたのは、實にこの時であつた。

三　文武の修業

斯くて海舟翁は、仕途を斷念して、自立の精神を以て奮起さるゝに至つた。十二三歳の頃より、伯父の男谷下總守に就いて、劍術柔道を學ばれたが、後中津の藩士で、淺草の新堀に道場を開いてゐる、島田見山の門人となられた。この見山は、劍術の師範家ではあるが、一種の見識を具へた人であつた。翁は見山の勸めにより、劍術修業の傍、王子の權現、向島の弘福寺等に於て、禪學を修められた。斯くて翁が二十一歳位の時に、劍道の免許皆傳を得、斯道の師範家として、世に立つだけの身分となられたのである。

四　蘭學の修業

海舟翁は、その師島田見山の勸めに從ひ、更に蘭學をも修業さるゝことゝなつた。初め津山藩の蘭學者、箕作元甫に入門を願はれたが、矜乏のために拒絶されたので、筑前藩の永井青涯の門人と爲られたのである。

海舟翁の最も困難な時代は、蘭學修業の時であつた。家計が非常に窮境である上に、最も困難な蘭學を修められたので、その苦心のほどは、到底今日の者が想像だも出來ないところである

當時蘭學の教科書を得ることは、容易でなかつた。嘗て辭書を二部寫しとつて、その一部は依頼者に納め、一部は自分の用とされた。その寫された蘭學の辭書十卷は今尚ほ勝家に保存されてある、之を見ても、翁が如何に蘭學の研究に、困難されたかといふことがわかる。

五　兵學塾の開設

蘭學の修業に苦心された結果、非常なる進歩を來たし、遂に赤

既に、兵學塾を開設さるゝことゝなつた。當時兵學を修むる者には、[illegible]人望であつたので、極めて盛況たる塾であつた。

然るに、海舟翁の偉大なる人格と、堅忍不抜の氣象とは、旗本の士勝麟太郎の塾として、次第に世に現はるゝやうになつたのである。

その頃、諸藩の間に、大砲や小銃を鑄造することが行はれて、此等諸藩よりは兵學者に依頼して、それを川口の鐵工場で、鑄造せしめたのであつた。

ところが一般の兵學者は、依頼者と鑄造者との間に立ちて、賄賂を貪ぼり、不正なことが盛に行はれたが、海舟翁は是等の不正なことを、一切退けられたので、その名望益々現はれ、遂に翁の幕府に仕官さるゝ原因と爲つたのである。

六　幕府の仕官

海舟翁が塾を開かれたのは、二十八歳の時であつたが、幕府に奉仕されたのは、三十三歳の時であつた。

嘉永六年六月、米國水師提督ペルリ、浦賀に入港するに及び、對外の關係が益々困難となつた。幕府に於ては、老中阿部正弘等大に苦心し、薩摩藩主島津齊彬等と謀りて、對外の大策を講ぜんとする時であつた。大久保右近將監（一翁）は海舟翁のことを熟知し、翁を幕府に[illegible]

[illegible]幕府に仕へられたのであつた。

七　長崎海軍操練所

[illegible]を集めて教授することゝなつた。

[illegible]として、大に[illegible]た。[illegible]

守であつたが、海舟翁は實際に海軍の事に精通せられ、又海外の形勢に通曉されてゐたので、長崎海軍操練所における中心人物であつた。翁は文武の修業や、蘭學の研究に心血を濺がれたやうに、長崎海軍操練所における海軍の事に關しては、非常に努力されたのである。

海舟翁の一生を通じて、研究と努力といふことは、實に感激に値すべき人であつた。練習生を率ゐて、蘭教師と共に航海に出掛け、屢々危難に遭遇されたことが、日記に見えて居る。それ故に、幕府や並に諸藩の練習生から、益々尊敬されたのであつた。

この長崎海軍操練所は、實に我國海軍の創始で、蘭國教師ペルスレーケン、カッテンデイキ等は、我國海軍の恩人である。

海舟翁は一面において、精神堅固にして達識の士であると同時に、他面においては、極めて情義に厚い人であつたが、後年蘭國教師の肖像を油繪師に畫かしめ、現に勝家に保存されてあるが、之は我海軍の爲めに、永久に紀念すべきものである。

八 米國行

幕府は、米國と通商條約を訂結したので、その批准交換の爲めに、使節を米國に派遣することゝなり、外國奉行新見豐前守を正使に、村垣淡路守を副使に任命して、米國軍艦、ポーハタン號に搭乘し、渡航せしむることゝなつたのである。

然るに海舟翁等は、日本の使節を海外に派遣するに當り、日本人が日本軍艦を操縦して、航海することの出來ないのは、日本の恥辱であると、幕府に建言さるゝ所があつたので、幕府遂に其議を採用して、木村攝津守を軍艦奉行と爲し、海舟翁を艦長(教師方頭取)として、米國に渡航せしむることゝなつた。その軍艦は、蘭國から寄附した咸臨丸と云ひ、僅に百馬力で、二百五十噸位の小汽船であつた。

今日では、東京灣内を往復する汽船でも、三四百噸位のものである。然るに、僅に二百五十噸位の小艦を以て、太平洋を横斷したといふことは、實に大膽無謀の振舞であるが、當時における海舟翁等の意氣の旺盛なりしことを、想知すべきである。

萬延元年正月十三日、一行は品川海を出帆して、二月二十五日に米國に到着した。航海中非常な困難を嘗め、桑港に到着せんとする數日前には、艦員が同盟罷役を起さんとする形勢であつたが、長崎以來訓練されたる海舟翁の努力に對して、漸く無事に治まつたのであつた。

米國に於ては、日本人が小さい軍艦で、航海して行つたので、非常に歡迎して、軍艦の修理等も、喜んで致したといふことである。歸路には布哇に寄航した、當時、布哇は獨立の王國であつたので、

其策に民衆を教した。斯くて一個の学園、これは〔?〕であつた。之ぞそも／＼我日本軍艦の、外國航海の始であつたのである。

九　神戸海軍操練所

文久二年閏八月に至り、海舟翁は軍艦奉行並となり、後軍艦奉行に任ぜられたが、當時の幕吏としては、異數なる榮進であつた。

翁は品川大阪兵庫間を屢々航海し、又大將軍徳川家茂に隨從して航海されたので、その信任を受け文久三年四月終に神戸に於て、海軍操練所を設置さるゝに至つた。

翁は夙に海外の形勢に通じ、殊に親しく米國に航して、其海軍其他國勢の發達せる狀況を觀察され、歸來大に覺悟さるゝ所があつた。故に神戸海軍操練所のみならず、大に我國の海軍を擴張して、朝鮮支那等にも、操練所を設けたいといふ、大志を抱いて居られたのである。

即ち今日の海軍鎭守府を設置せらるゝ希望であつた。

神戸海軍操練所には、幕府旗下の士は固より、諸藩士が入塾したが又諸藩浪士にして、入塾する者も多かつた。即ち浪士坂本龍馬（土佐脱藩士）等を初め、薩藩士伊藤祐亨、浪士陸奥宗光（紀州脱藩士）中島信行（土藩脱藩士）等も入塾した、而して坂本龍馬はその塾頭であつた。

此の操練所は、既に述べた通り、一局部の戦乱を防ぐべき、軍備に寄与されたが、然るに前記の如く、諸藩士中に、薩藩の浪士等が多數入塾したので、元治元年十月に至り、幕府の嫌疑を蒙り、翁は其職を免ぜられ、江戸氷川の自邸に謹慎さるゝことゝなり、神戸海軍操練所は、爲めに閉鎖せらるゝに至つた。

若し、海舟翁の計畫にして、その目的を達することが出來たならば、我國の東洋における勢力は、非常な發展を遂げたであらう、之を思へば頗に遺憾の極みである。

翁は又當時の記念碑を建設されたが、幕府の嫌疑を憚り、慶應元年に至り、其碑を土中に埋められ、明治の世と爲りて、之を發掘された。今小野濱に殘つてゐるのがそれである。

十　大西郷との會見

元治元年九月、海舟翁がまだ、神戸海軍操練所に居られた時、大西郷は吉井友實等を伴ひ、大阪に到り、初めて、翁と會見した。大西郷は、海舟翁が有爲の人傑であり、達識の偉人であることに敬服したのである。當時大西郷が、會見の模樣を、大久保甲東に報じた手紙があるが、其中に左の如くいうてある。

勝氏へ初めて面會仕候處、實に驚入候人物にて、最初

叩賦にて差越候處、頓と頭を下申候、どれ程智略有之やら、知れぬ塩梅に見受申候、先英雄肌合の人にて、佐久間（象山）より事の出來候儀は、一層も越候半、學問と見識とに於いては、佐久間抜群の事に候得共、現時に臨候ては、勝先生とひどくほれ申候

この書面によりて、大西郷が海舟翁の人物に如何に敬服したことがよくわかる。

又海舟翁に、大西郷のことを、薩藩の明君島津齊彬から、豫ねて傳聞してゐられたのであるが、この時初めて、大西郷と會見して、その人物の偉大なるに服し、爾來肝膽相照して、意氣大に投合さるゝに至つたのである、後年海舟翁は、常に當時のことを話してゐられたのであつた。

二　長藩談判

曩に海舟翁は、神戸海軍操練所長の職を免ぜられ、慶應元年の年は、江戸氷川の邸に閉居されて、門を出られなかつたが、翌慶應二年に至り、幕府は諸藩に令して、愈長州再征の兵を出動せしむることゝなつた。

然るに薩藩に於ては、長州再征の不可なるを唱へ、出兵の名義なしとて、辭退の上書を幕府に呈出したのである、幕府においては、非常に其處置に窮し、同年五月に至りて、閑居中なる海舟翁を起して、再び軍艦奉行となし、急に上阪を命ずることゝなつた。

海舟翁は、薩藩における大西郷や、大久保等と懇意の間柄であるから、幕府は翁を起たしめて、薩藩との調停を計るべき、重要なる使命を傳へたのである。そこで海舟翁は、大阪から京都に上られ、大久保甲東等と會見して、薩藩の出兵辭退の上書のことに就いて、談ぜらるる所があつたが、上書を却下するでもなければ採用もしないことゝなつて、その儘に局を結んだのであつた。

當時幕府においては、佛國から金幣軍艦を借り入れ、薩長以下の諸大藩を討じて、國家を統一せんとする計畫があつたが、海舟翁は、外人をして我内政に干渉せしむるの端を開くものとなし、堅く其議に反對せられ、又閣老板倉勝靜に面して、大に痛論さるゝ所があつた。然るに海舟翁の意見は、幕府の省みるところとならずして、佛國から金六百萬兩を借り入れ、更に軍艦の製造方を依賴することゝなつたのである

海舟翁はその事を聞知して、大に憤慨されたが、この借款問題は、翌慶應三年に至り、薩藩の家老岩下方平等が、佛國に出張せると、又佛孛兩國の形勢必迫したるとに依り、幕府と佛國との國際關係に、大

なる變化を來たし、遂に不成立に了つたのであつた。

慶應二年七月に至り、大將軍徳川家茂は大阪に於て薨去した。海舟翁は將軍の爲めに非常に信任を受けて居られたので、號哭長大息されたことであつた。その後征長の兵は、將軍の薨去に依りて益悲運に傾き、九州より出征せる諸藩は、兵を撤して各自に歸國するに及び、幕府は策の施すべきなく、遂に海舟翁に內命を授け、八月十七日大阪に下り、二十一日藝州を經て嚴島に到り、長藩士廣澤眞臣、井上馨等と會見し、休戰のこと及諸藩の衆議を採用するの意を傳達せしめた。

そこで廣澤等は海舟翁の議に服し、又長藩の國情をも述べ、共に大に理解する所があつた。海舟翁は九月十日京師に歸へりてその顛末を復命し、長藩の處置については、公平至當を要すべき旨を建言さるゝ所があつた、斯くて十月に至り、歸府を命ぜられ、江戸に歸られたのであつた。

一二　徳川氏恭順

慶應四年正月十二日、前將軍徳川慶喜は、伏見鳥羽の戰に敗れ、江戸に歸着した。この時城內においては、恭順論と主戰論との大論爭となつたが、徳川慶喜は恭順の說を支持し、海舟翁等をして、大に盡力せしむることゝなつた。乃ち幕府は海舟翁と大久保一翁とに一任して、鎭定せしめたのである。

海舟翁に、新に陸軍總裁となり、恭順のことに就いて、朝廷に歎願書を呈し、又書を東海東山北陸三道の各藩主に贈りて、徳川氏恭順の意を告ぐる所があつた。

然るに、二月の初旬頃より、舊幕府の兵士等の間に殺氣充滿して、脱走を計る者、四方に續出するに至つた。徳川慶喜は大にこの形勢を憂へ、海舟翁に謀る所があつたが、翁は一身を賭して、鎭撫に盡力すべきことを揚言されたのである。

爾來東奔西走、屢危難を冒して、說得を加へ、大に努力されたが、殊に麴町三番町にある二大隊の兵士等が激昂して、脱走を企てたる際の如き、九段坂上において、夜半脱兵の說諭中、闇に乘じて狙撃せられ、從卒二名その場に斃れたが、翁は辛うじて無事なるを得られたのである。

是れより以後、從卒を廢し、單騎鎭撫に奔走された。その後翁は自ら請うて、陸軍總裁を罷められたが、又軍事取扱を命ぜられた。

一三　大西郷との談判

この時朝廷に於ては、徳川征討の議を決し、有栖川宮熾仁親王を以て、征東大總督となし、大西郷等をその參謀に任じ、その他東海、東

山、北陸三道の先鋒總督兼鎭撫使を命じて、東下せしめられた。

三月に至り、大總督宮は、大西郷等を隨へて、駿河の靜岡に到着されたが、海舟翁は、旗下の士山岡鐵太郎を使者となし、書を大總督府軍門參謀に贈りて、德川氏恭順の意を貫徹せしめんことを謀り、薩藩より海舟翁の手許に保護中であつた、薩藩益滿休之助を案內者となし、山岡を駿府に至らしめた、三月九日、山岡は駿府に到着して、參謀大西郷と會見し、海舟翁の左の書を呈示したのである。

無偏無黨、王道蕩々矣、官軍逼鄙府といへ共、君臣謹て恭順の禮を守るものは、我德川氏の士民といへ共、皇國の民なるを以而之故也、且皇國當今の形勢、昔時に異なり、兄弟牆にせめげども、外其侮を防ぐの時なるを知ればなり、雖然、鄙府四方八達、士民數萬來往して、不教の民、我主の意を解せず、或は此大勢に乘じて、不虞を計るの徒、鎭撫盡力、餘力を不殘と雖ども、終に無其甲斐、今日無事といへども、明日の變誠に難計、小臣鎭撫力殆ど盡き、手を下すの道無之、空敷飛丸の下に横死を決する而已、雖然、後宮の尊、一朝此不測の變に到らば、頑民無賴の徒、何等の大變牆內に可發哉、日夜焦慮す、恭順の道從是破るといへども、如何せん其統御の道無き事を、唯軍門參謀諸君、能く其情實を詳し、其條理を正されむこと、且は百年の公評を以て、泉下に辨ずる在る而已、嗚呼痛哉上下道隔る、皇國の存亡を以而心とする者少なく、小臣悲歎して訴ざるを不得所なり、其御處置の如きは、敢て陳述する所にあらず、正ならば皇國の大幸、一點不正の御擧あらば、皇國の瓦解、亂臣之名目、千載之下消する所なからん歟、小臣推參して、其情實を哀訴せむとすれども、士民沸騰、半日も去る不能、唯愁苦して鎭撫す、果して努するも、其功なきを知る、然れども、其志不達は天也、到于此際、何ぞ疑存せん哉、恐懼誠恐謹言

三月五日　　　勝　安芳

軍門參謀閣下

大西郷は、山岡を引見して云ふには、曩に上野宮、靜寬院宮、及び天璋院夫人等より、使を受けたるも、未だ要領を得たかつたが、今やこの書に接し、又足下の陳述により、能く實情を詳にすることが出來たとて、大西郷は、左の處分案を示した。

一　慶喜儀、謹愼恭順の廉を以て、備前藩へ御預被仰付候事
一　城明渡可申事
一　軍艦不殘可相渡事
一　軍器一切可相渡事
一　城內居住の家臣、向島へ移り、愼可罷在事
一　慶喜妄動を助候面々、嚴重に取調、謝罪之道、屹度可相立事
一　玉石共に碎之御趣意更に無之に付、鎭定の道相立、若暴擧致候

者有之、手に餘り候はゞ、官軍を以て可相鎭事

右の條々、實行急速相立候はゞ、德川氏家名之儀は、寛典之御處置可被仰付候事

靜寛院宮御儀、田安中納言へ御含相成候事件も有之に付、御趣意貫徹致し候樣、一向盡力之事

山岡はその箇條を閲見して、他の箇條は遵奉することが出來るが、主人を他藩に預けらるべしとの御命は、到底忍び難き所であると述べたのである。大西郷も、山岡の意の在る所を諒とし、德川慶喜の一命は、拙者において、保證すべしと答へたので、山岡は大に喜び、直に江戸に歸りて、復命するところがあつた。

この時、東海道の先鋒は、池上本門寺に屯し、進んで高輪の薩藩邸に、兵を派遣した。又東山道の先鋒は、一軍を新宿に、一軍を板橋に進め、三月十五日を期して、三方より、江戸城を攻撃することゝなつてゐたのである。

然るに、海舟翁は、官軍が若し恭順を容れずして、妄りに攻撃するならば、斷然決戰すべく、最後の意思を固め、豫じめ備ふる所があつた。そこで十三日に至り、左の書を、官軍の參謀軍門に贈りて、大西郷に面會を求められた。

昨年以來、上下公平、一致の旨あれども、各其中に私あり、終に今日の變に及ぶ者は、皇國人物之數に依る、就中伏見之一擧、一二の亂世を開[illegible]、我が最も[illegible]る所、堂々たる天下・皆に同胞相喰、何ぞ其醜なるや、我が[illegible]、一死を以て謝すべきも、既に其失前日にあり、今日何の面目ありて口を開かむ、然といへども不日にして一戰數萬の生靈を損せんとす、其戰や、名節條理之正敷にあらず、各私憤を抱藏して、丈夫の爲すべき所にあらず、吾人是を知れども、官軍猛勢、白刃飛彈を以て、漫りに威勢を假り、屈怯之士民を刧せば、我も亦一兵を以て、是に應ぜずんば無辜の死益多く、生靈の塗炭益甚しからんか、軍門當に皇國に忠するの志あらば、宜敷其情理を詳にし、後一戰を試みるも可たり。我邦も亦能く其正不正を恤み、敢て漫に輕擧すべからず、嗚呼、我主家滅亡に當て、一之名節大條理を持し、從容死に就く者無きは、千載の遺憾にして、海外の一笑を招くのみ、我輩是を知れども、力支ふるに能はず、共に魚肉せらるゝものは、深怨銘肝、日夜焦思し、殆ど憤死せんとす、憐れ其心理を詳察あらば、軍門に臨み、一言を談ぜむ、幸に熟考せられれば、公私の大公、死後猶生るが如くならむ。謹言

辰三月　　　　勝　義　邦

大西郷は之を承諾したので、海舟翁は、十三日に、高輪の薩藩邸に到り、西郷を訪問して談ずる所があつた。翌十四日、更に芝田町の同

邸に再會して、恭順の意を表する受書を呈出された。
この會見に於て、大西郷は、海舟翁の意の在る所を諒したるも、事頗る重大にして、大總督宮の許可を得なければならぬが、明日決行すべき筈であつた、江戸城攻撃の計畫は、之を見合すべしとて、直に三道の官軍に令して、進撃の擧を中止せしめた。而して話頭一轉、談一別以來の舊事に及び、未曾有の危局に臨めるの態なく、海舟翁をして、大西郷の大斷勇決と、偉大なる宏量とに推服せしめたのであつた。

翌十五日、大西郷は直に江戸を出發して、駿府に到り、大總督宮に會見の始末を言上し、更に上京して、徳川氏恭順の事情を奏上し、處分案の裁決を得たのである。斯くて大西郷は、更に勅命を奉じ、駿府を經て江戸に到り、江戸城の授受を了したのであつた。

海舟翁が、嘗て話して居られたことがある、官軍が江戸城攻圍の軍略を定むるや、參謀伊地知正治の議に依り、高輪新宿、板橋の三道から攻撃をなし、市街に火を放ちて、進撃する方策であつた相であるが、その時、幕府に於ても、若し官軍が飽まで、徳川氏の恭順を容れず、濫りに進撃するならば、已を得ず、江戸市中を燒拂つて官軍をし

萬の生靈をして、幸に無事なるを得せ
ば、府民たる者は、永く大西郷の高義を、記憶すべきであると云
たのであつた。

その後朝廷に於ては、海舟翁に江戸城市民鎭撫のことを命ぜられたが、其處置宜しきを得、七百年來の覇業であつたる幕府の終りを全うして、王政復古の大業を成就せしめ、尚ほ三百年來の舊主家たる、徳川氏をして無事なるを得せしめたのは、慥かに、海舟翁の達識と努力と、大西郷の達觀と襟度とによるのである。

一四　廢藩置縣前後の海舟翁

徳川慶喜が恭順の意を表したので朝廷に於て寛大の處分を爲す江戸城は官軍との間に、圓滿なる授受を終ることゝなつた。尋いで田安家達徳川の宗家を繼ぎ駿遠の地七十萬石を給せられ、靜岡の城主となつた。そこで海舟翁も、明治元年九月、家族を引連れ、靜岡に移住されたのであつた。

爾來朝命に依り、東京に出て、或は外務大丞と爲り、兵部大丞となられたが、

設けたる兵學校の監督に擢任された。次いで軍艦奉行に任ぜられた、維新後は[illegible]に叙せられたが、明治六年、征韓論の破裂以後、參議兼海軍卿に任ぜられたのである。

要するに海舟翁は、政府と舊幕府との連鎖となり、國内人心の統一を計られたが、明治八年に至り、官を辭せられたのであつた。

一五　赤坂氷川町の閑居

海舟翁は、官を辭して氷川町の自邸に隱退し、小室に起臥してゐられたが、内にありては、舊主家たる徳川氏の家政に注意し、外にありては、國家の施政に對する不平の徒を鎭撫して、傍ら著述に努力された、吹塵錄、海軍歴史、陸軍歴史、府城沿革、開國起源等の大著述は、その後の事業に成つたのである。

一六　再度の仕官

明治二十年五月、勳功に依つて、伯爵を授けられたが、二十一年四月に至り、再び仕官され、樞密顧問官に任じ、三十二年一月、薨去の時に及んだのである。

一七　薨　去

明治三十二年一月十九日、[illegible]、同月二十一日遂に薨去された、二十四日、特旨を以て、正二位に叙し左の誄詞を賜はつた。

誄　詞

幕府ノ末造ニ當リ、大勢ヲ審ニシ、振武ノ術ヲ講ジ、皇運ノ中興ニ際シ、舊主ヲ輔ケテ、解職ノ實ヲ擧ゲ、爾後顯官ニ歴任シテ勳績愈彰ハル、今ヤ溘亡ヲ聞ク、曷ゾ軫悼ニ勝ヘシ、茲ニ侍臣ヲ遣シ、賻ヲ齎シテ、弔慰セシム

翌二十五日、東京府下荏原郡馬込村洗足池畔に葬つた。

一八　幕末の偉勳者

幕府の末造に當り、滔々たる王政復古の氣運に反對して、幕府の勢威を挽回し、徳川氏の社稷を維持せんとするが如きは、誠に痛快なる議論であつたが、海舟翁は、國内の趨勢と、世界の大勢とに鑑み、一部幕臣中の主戰論を排し、徳川慶喜をして、斷然恭順の道を決行せしむることに盡力されたのである。

或は海舟翁が、舊幕府の遺臣として、明治政府に仕官されたことを云爲し、恰も外國の政府に仕へられたるかの如く論評する者もあつたが、之は眞に、海舟翁の心事を理解せざる皮想の觀察である。海舟翁

の精神思想は、王道蕩々、無偏無黨、徳川氏の士民といへども、齊しく王民であつて、又當時における、皇國の形勢と氣運とは、昔時に異なり、兄弟牆内に鬩ぐも、外その侮を防ぐべき時機なることを知られたのである。而してこの大主義と大精神とを達成せんとする爲にはあらゆる困難と鬪ひ、一身を犠牲に供せられたのであつた。

斯の如くして、海舟翁は、幕末に於ける不平の徒や、過激黨の鎮撫に努力された。即ち遠州金谷原に開墾地をトし、幕末旗下の士をして耕耘に從事せしめられたるが如きは、特記すべきことであつて、一には彼等に生活の安定を得せしめ、不平黨の爆發を未前に防かんとの、深謀遠慮に出でたるものであり、一には維新の大業と、明治の洪謨とを翼贊せんとする大精神から、出發されたのであつた。

斯くて幕府に於ける、不平過激の遺臣等をして、後年佐賀、熊本、山口と鹿兒島等に於けるが如き、爆發より免かれしめたのは、海舟翁が、斡旋盡力された結果、與かりて力あつたのである。

一九　徳川慶喜の參內

明治三十年三月、英明至仁なる明治天皇は、徳川慶喜が、戊辰以來消極的の勤務を嘉賞あらせられ、參內を命じ給うた。實に戊辰以來、慶喜が初めての參內であつたのである。慶喜は天皇皇后兩陛下に拜謁仰付られ、特に優遇を賜はつたので深く感激する所があつた。

この時慶喜は、海舟翁が戊辰以來の努力に省りみ、宮城退下の歸途、赤坂氷川町の邸に、海舟翁を訪問して、今日兩陛下の恩遇に接することを得たのは、卿が勤勞に俟つものありとの謝辭を陳べ、懷中より扇子を取出して「樂天理」の三字の揮毫を求めた、海舟翁は深く感泣されて、直に其需に應ぜられたのである。

戊辰以來三十年の後、前將軍としての慶喜が、初めて拜謁を賜はり、優渥なる御諚を拜したことは、獨り徳川氏の末を完うしたるのみならず、實に鎌倉以來の幕府の末期を、無事に收むることが出來たのである。

又海舟翁は、戊辰の年、幕府の末を無事に收むるまでは、徳川慶喜に面謁しないと誓て、別れられたのであつたが、今や舊主從の會見によりて、如何に海舟翁が心に感激され、又安心されたかといふことがわかるのである。翁は喜びの餘り、左の二首を詠ぜられた。

鎌倉にもとゐ開きしその末を
　まろかに結ぶけふにもあるかな、
むすぶ上にいや張りつめし厚氷
　春のめぐみにとけてあとなき

この二首によつて、海舟翁が、幕府の末と徳川氏の末路とを、無事

に秘められたることを、[illegible]その翌々三十二年一月、囊封されたのを見るに、全く安心されて、この世を去られたことであらう。

二〇　海舟翁と大西郷

前にも記したる如く、海舟翁は、大西郷の人物と偉勲とを、深く景慕してゐられたのであるが、明治十年の戰亂勃發し、城山に悲慘なる末路を見るに及び、追悼の情に堪へず、十二年六月、東京府下南葛飾郡大木村、上木下川淨光寺境内に、小地を購ひ、大西郷が、沖之永良部島に於て賦したる左の詩を、彫刻せる留魂碑を建て、永く紀念することゝした、その詩に曰く、

朝蒙恩遇夕焚坑　人生浮沈似晦明
縱無回光葵向日　若不開運意推誠
洛陽知己皆爲鬼　南嶼俘囚獨竊生
生死何疑天付與　願留魂魄護皇城

又その碑文には、左の如く記してある、

慶應戊辰之春、君率大兵而東下、人心鼎沸市民荷擔、我憂之、寄一書於屯營、君容之、更下令戒兵士驕傲、不使府下百萬生靈陷塗炭、是何等襟懷、何等信義、今君已逝矣、偶見往時所書之詩、氣韻高爽、筆墨淋漓如見其平生、欽慕之情不能自止、刻石次爲紀念碑、嗚呼君能知我、而知君亦莫如我、地下若有知、其將掀髯一笑乎

[illegible]

この石碑には、[illegible]東京府下荏原郡馬込村洗足池畔に於ける、海舟翁の墓所に移轉することゝなり、今は東京名所の一となつてゐる、而して海舟翁の墓表と、大西郷の留魂碑と相並んで、蒼松の下、長へに兩雄の高風雅懷を、追懷せしむるものがある。

明治十六年、海舟翁は薩摩琵琶の大家西幸吉氏の爲に、城山の歌を詠じ、琵琶に依りて、大西郷を追念する資料とせられた。この追悼歌は、普く人口に膾炙する所である。

明治二十年に至り、伯爵吉井友實は、大西郷と海舟翁とが、元治元年九月、大阪に於て、初めて會見せる當時の有樣を、大西郷より大久保甲東に報じたる手翰（一〇大西郷との會見の條參照）を、海舟翁の一覽に供したことがある。この手翰は、畏くも、明治大帝の乙夜の覽に入れ奉ることゝなり、今は御府の寶物となつてゐる。

海舟翁が嘗て云はれるには、大西郷は、實に大英雄であつたが、余の如き、西郷の眼には、喰へない親爺位に、映じたことであらうと考へてゐたのである。然るに今この手紙を一覽して、我輩を斯の如く見て呉れたかと思ひ、二十年後に至りて、感激に堪へない次第であると。

結尾

海舟翁は、非凡なる資質を備へ、壯年時代より、堅忍不拔の精神を以て、刻苦勉勵心身の修養を爲し、文武の業を修められた。

また、國家の大勢に鑑み、世界の形勢に注意し、幕府の維持すべからざるを看取せられ、外は明治維新の大業を翼賛し、内は君家の安全を計り、毀譽褒貶をかへりみず、終始一貫盡瘁されたのである。殊に海舟翁に最も欽仰すべきは、厚情の資質と、理性の發達との調和を得た人であつたことである。

古來東西の偉人を觀るに、情熱の人は、理性に缺けたる憾みがあり、また理性の發達したる人は、情義の念に薄き傾向がある。しかるに海舟翁は、實にその調和を得たる人で、立志傳中の英雄とも云ふべき、偉大なる人物であつた。

全日本のテニスマンに與ふ

ヴィンセント・リチャーヅ
福田雅之助 譯

一本のラケット、及びそれをトウナメントプレーに用ふる能力さへあれば、プレヤーは世界の何處へ行つても困る事はない。テニスの如く、學生々活を終へた後まで當時と同じ効益を與へるスポーツは他にはない。

ベースボール、フットボール、その他トラックの競技は、學生時代には非常に有益であるが、一度世の中に出てしまうと、これ等のゲームを行ふ機會は極度に制限されて來る。然しテニスに於てはこれと異り、實社會に入つた後にも益々親しみ得る唯一のスポーツである。

言ふ迄もなく、プレヤーがチャンピオンシップの位置を保持し樣とするならば、トーナメントテニスに、少くとも一年の中七ケ月を費す必要がある事は事實だし、又、その順位を保つと同時に、繁雜な事務にも携つて行かうとするのは、甚だ困難な問題である事も齊しく事實である。

かゝる理由からして、自立の人でない限りは、假令ゲームに向く天性を持つてテニスの最高處に達せんとしても、それは理想的位置にあるものとは云へない。

自立の人は何等將來の事を心配する事なく、自分の好むスポーツ（テニス）に七八年間も親しむことが出來る。けれども不幸にして、斯かる幸福な地位に居る人は極めて稀である。然し、我々がゲームの歷史のページを繰り擴げて見れば、多くの有名なチャンピヨンは、自立の人か、或は有福な兩親を持つた人々であつたことを知るであらう。

此理由は明白である。テニスは元來富めるものゝゲームであるから。いや、過去に於てはさうであつた……と言ひかへて、少し廣げた方がいゝやうに思ふ。

學校を去つて自活せねばならぬ人が一年間の內、八ケ月スポーツに身を委ねるなど、果してそれだけの機會を持つであらうか。否、私はそ

の權利を持つのは僭越であるとさへ思ふ。少し常識を持つ人なら誰れでも、この世でそんなことは絶對的に認めないと云ふに違ひないと思ふ。

幸福にもそれが過去のものであつたと云ひ得るのは、過ぐる二年間に於て、テニスゲームに著しい變化があつたからである。

即ち此二年の時機中に、プロフェッショナルテニスの出現があつて、テニスにまつはつてゐた種々の障害が除かれることになつた。例を云へば、庭球史上に於て最も偉大なる女性の代表者である、スザーン・ランダラン嬢、アメリカのデヴィスカップティームの一人であつたハワード・キンゼイ、アメリカのランキングに於てファスト、テンに入つたハーベイ・スノッドグラス、嘗つてナショナルチアンピヨンであり、そしてアメリカのゴルフのチャンピヨンシップのランナーアップであつたメリー・ブラウン、フランスのデヴィスカップティームの一員であつたポール・フエレー、以前のジュニヤーチャンピヨンであつたチャーレス・ウッド、ナショナルダブルスチャンピヨンであり、デヴィスカッププレイヤーであつたフレッド・アレキザンダー等――斯かる多數の有名な人物が、スポーツを更に一般化しようとする主旨と、そして同時に彼等の時間と困難とを償はんが爲めに、プロフェッショナル

この事は、過去二年間のテニス界

と私は考へる。これに比べたら歴史あるデヴィスカッププレイヤーに依つて獲得された事さへも、大したものと思へない。此點に就いては、英米のテニスの委員諸君を得心せしむる事は甚だ困難であらうと思はれる。一體、こんな役員などゝ云ふものは概ね淺薄な考へに煩はされ易いものであるから。猛烈なトーナメントの競技を經驗しない人に、プレイヤーが梯子の最上段に達せん爲めに拂はなければならない努力がどんなものであるかをどうして知る事が出來るであらうか。

プロフェッショナルテニスとゲームの一般の問題はこれ位に止めて愈々本題に入らうと思ふ。

私は大阪毎日新聞社の招聘に應じて日本に來た。それは日本のデヴィスカップ選手の主力である、原田武一君と過去二年間アメリカで親しき交りをして來たからである。私はアメリカに於て熊谷、清水、原田の諸君と幾度かテニスをした經驗がある。そして日本のプレイヤーは彼等の優れたドライヴでネットに出て、そして決定的ヴォレーを以つてラリーを決める事が出來ないのは、一體何故であるかと云ふ不審を連々抱いて居た。今度、

誤つた。

第一に、そして恐らく最も重大なる事はボールである。過去に於て日本のプレイヤーの大多數は軟球を使用して居た。實に此軟球こそネツトプレーに災し今後も亦災の種とならう。

このやうなボールを使用したることに據つて大多數のプレイヤーがドライヴを爲す際にトップスピンを用ひる様になるのだ。過度のトップスピンはライジングバウンスを打つ場合には不必要である。

若しラコスト、コッシエ、ジョンストン又はテイルデン等のプレーを注意して見る時は、必ず彼等はボールをコントロールする上に必要なだけのトップスピンを用ひる事を發見するであらう。然し日本の一流の、多くのプレイヤーのプレーを見れば、彼等はライジングバウンスを打つ事を避け、そして更に、ドライヴを打つに必要以上のトップスピンを用ひて居るのに氣が付くであらう。

日本のプレイヤーの、今日面接してゐる問題は實に此事である、と私は信ずる。

彼等は極端なトップスピンの使用を速かに捨て去り、そしてライジングバウンスのボールを打つ事を學ばねばならない。

此事は、ヴオレーの技術を磨くに與つて力あるものである。何となれば、ライジングバウンスの球を打つたなら、最後の止めを刺す爲に、其の位置ネット際に出さるを得ないところから

原田君が最初アメリカに來た時は、相手のミスを待つ與示的なバックコートゲームをして居た。彼はテニス界の或る地位を確保し様とするには、如何にしてもヴオーレーを完成しなければならないし、それが彼のドライヴを生かす所以である事を直ちに悟つた。そして彼はその目的を達せん爲めに着手し、僅々一年ならずしてネットゲームを會得し、それが爲にデヴイスカップ試合に於てラコストとコッシユとを破る事が出來た。

フオレストヒルスに於て昨年フランスのプレイヤーに對して勝つた時に、原田君はオールコートゲームを立派に實現して居た。彼のサーヴイスは確實で信頼し得るものであり、更に有力なものであつた。バツクコートプレーは安全にネットポジションに進ませるのに充分な強さを持つて居たし、彼の新に進歩したヴオレーを以てポイントを決めて居た。

一年以前にはネツトプレーに關して少しの觀念も持たなかつた人が、最後の障害に向つて突進し、そしてラコスト、コッシエの樣な經驗を積んだプレイヤーに對してヴオレーを應酬した事は實に稱讚に値する。

然し此事は若し正當な方法を採用さへすれば、日本に於ても出來る

と云ふ事を裏書するに過ぎない。

日本の一部のプレイヤーはネットプレーに對して才能を持つて居る。石井、安部、佐藤、松浦、三木及びジユニヤーの伊藤等斯かる人々は皆著名なスターに伸び行く素質を備へて居る。只問題は、正統な道を示す事と、斷えざる練習とに精進する事である。

須磨の伊藤はゲームに對して非常な天性を持つて居る。そして、彼が數年ならずして斯界の大立物となる事を私は期待して居る。彼は年齒未だ十六歳位である。かゝる年少であるに不拘、多くの點に於て實に著るしい良い癖を持つて居り、完全にオールコートゲームを會得して居る。現在彼は世界の一流プレイヤーに對して經驗を積む事が必要である。茲數年の内に歐洲と米國との大試合に參加し得る樣にし度いものである。

安部はシングルス、ダブルス共に彼の冷靜な均整を得たプレーで私に印象を殘したが、然し彼も亦日本人の特性である事に煩はされて居る。彼は兎も角も機會を掴むといふ事、それを敢てしない事は常道を逸して居る。その事は偶然にも多くの日本のプレイヤーが學ばなければならない事の一つである。彼等は練習の時或はトーナメントプレーに於てゲームを餘り眞劍にやり過ぎてはならない、若し幾分か與へら

[illegible]ある。練習試合に於ては[illegible]も、必ず悠然と自分のストロークを試みる[illegible]

庭球王國に君臨し、そして全ての批評家が等しくテニス界始まつて以來の最大なプレイヤーであると讃辭を惜しまなかつた「ビッグビル」チルデンは、十二年間の全ての大トーナメントに於ける敗北に辟易しなかつた。

然し彼はストロークを練磨する傍ら知識を貯へ、終に彼を斯界の最高處に位せしめ、更に牢固として拔けない基礎の上に立つた彼のゲームは、彼に長くその位置を保たしめたのである

其故過去一ケ月私と共にプレーした日本のプレイヤーの多くは斯かる經驗を知つて利する處が多いと信ずる。

日本のプレイヤーはスコアーを全然忘れ去つて、そしてストロークとタクテックの開拓に一心を捧げなければならない。

私が煉瓦壁に對してヴオレーを毎日四時間練習したことを聞いたならば恐らく多くのプレヤーは驚くことであらう。私は壁に十呎の高さにラインを引き、七呎から十呎離れて立ちボールを壁に打ちつけてヴオレーを練習したものである。約一時間程此の練習をしてから五呎ばかり後に退つて[illegible]に

してそれが二度と再び同じ機會に遭つて來ないと云ふ事を知つた。この事は高い處に達せんとするに費されなければならない時と努力とに就いてのほんの僅かな例である。然し此事は日本のプレイヤーに對して非常に利する處があると信じてゐる。

彼等日本のプレイヤーは眞にテニスに適する能力を持つて居るし、その上喜こんでテニスを研究し様と心掛けて居る。斯かる理由の下に私はデヴイスカップが今後六年間の内に日本に來る事を斷言し得ると思ふ

フランスはラコスト、コッシエ、ボロトラ、ブルニヨンの四大プレイヤーを持つて居るけれど、彼等は既に若人の域を越えて居るし、彼等とてテイルデン、ジヨンストンの支配が終に凋落した樣に、いつまでも強いと云ふ事は出來ない。

その時には日本は理想的位置に置かれる。

日本には彼等フランスの人々が衰退に向ふて進む時にそれに取つて代る事が出來る多くのプレイヤーが居る。

此稿を終らんとする前に私は日本のプレイヤーとファンに對して一言述べ度い事がある。それは私が嘗つて如何なる國に於てプレーしたよりも最も喜ばしい一ヶ月が費された後に滿腔の誠意を以つて捧げるものである

若し日本が若いプレイヤーに依つてデヴイスカップを日本に齎らさうとするには、彼等若いプレイヤーを外國における競技に參加さす事に全ゆる努力を惜まない事である。

デヴイスカップのトライアルに對しては少なくとも外國に於て三ヶ月間の準備を與へなければならない。

何故かと云へば選手が新しいコンデツションに馴れるには如何しても時が必要である。ハードコートしかなく、二三の異つたボールを採用して居るフランスに於ては殊に此事が眞實である。フランスはグラスコートを持つて居ないので來年の夏のデヴイスカップ試合はオリンピツクゲームが行はれたコ　トでプレイされるらしく思はれる。

其故日本のプレイヤーは氣候に馴れるため、そして異つたコートに親しむために早くフランスに渡つて充分に餘裕を以つてフオームを完全に出す樣に努力しなければならない

若し日本のプレイヤーがさうしたなら、一九二八年のデヴイスカツプ戰に於て日本は恐ろいし脅威として迎へられる事は疑ふ餘地がない。

（十一・十六、神戸にて）

寒草集

齋藤茂吉

折々の歌

いちはやくうらがれそめし草なかにけふも日もすがら小鳥のこゑす

つゆじもはしとしととしてしげけれど日毎にし見むわれならなくに

うらがれてしろくなりたる草叢にかくらふ鳥は心やすきか

北窓に目張をしつつこの冬を心しづかに我ありぬべし

うつしみの吾が目のまへに黄いろなる公孫樹の落葉かぎり知られず

雨のふれるがごとし

北びさし音するばかり吹くかぜの寒きゆふべにわれ默しをり

天龍川

ぬばたまの夜のあけがたの霜ぐもる國の平は川の音ぞする

信濃路や天のなか川に立つ波の寒きひびきを間近くに聞く

峽すぎて見えわたりたる石原に川風さむし日は照れれども

ぎくだりゆく

冬日てれる天龍川の川舟にしまらく音の言ぞ
たえたる

信濃なる天龍川のたぎちゆく寒きひびきの常
ならなくに

あしびきの山峽ひくく流るるときしぶきをあ
げて川波立てり

きはまりて晴れわたりたる冬の日の天龍川に
たてる白なみ

雨はれて寒きかぜ吹く山がはの常なき瀬々の
音ぞきこゆる

天龍川の中つ瀬にして浪だてりしぶきはかか
るわが額まで

ひたはれに澄みきはまれる冬空やきのふまで
こそ時雨ふりしか

奥やまの岑には眞白く雪ふりて麓は紅つづき
のひまに見えそむ

天龍をこぎくだりゆく舟ありて流ゆきしかば
水の香ぞする

おのづからなりのまにまにとどろきてくしき
山みづやうまし山がは

南へながるる川を漕ぎ來つる舟は走れりたぎ
つ瀬ごとに

永平寺吟。大佛寺途上

ひんがしにむかひいくたびか踏みわたる谷川
の香は親しくもあるか

ひるながら人のおとせぬ山なかに入りて來に
けり百鳥ぞ啼く

うつせみの苦しみ歎くこころさへはやあはあ
はし山のみ寺に

谷間はいまだ源に遠からし山みづの音のこもるを聞けば

葛の花ここにも咲きて人里のものの戀しき心おこらず

夏山のみちをうづめてしげりける車前草ぞ踏む心たらひて

永平寺吟。玲瓏巖

いにしへの聖はこひし山中のここに明暮れしことぞこひしき

大き聖この山なかの岩にゐて腹へりしときに下りゆきけむか

谷に生ふる高杉の秀のゆらぎをぞかく目ぢかくに見るは樂しき

谷川の音たえまなきあかつきにいにしへびと
ぞ

蟻地獄砂にこもりてゐるを見つかりそめのごと見てか過ぎなむ

この巖より滲みいづる水かすかにて苔の雫となりがてなくに

杉の秀のうごくを見つついにしへの聖のあとに吾ぞ居りける

きぞの夜にねむり足らはず覺めしかばこの岩のはざまにまどろみにけり

志比川の谷の入さへ白雪のふりつむころに道絶えぬべし

冬ふかみ志比谷川の奥谷に夜半はしづかに雪つもるべし

近詠

窪田空穂

旧暦八月十五夜

廊下の瓶の薄に月させり風來てゆするその光る穗を

家のもの月見てあれば若き友ふたり入り來て言なく並ぶ

蟬

久しぶりに蟬の鳴くよと腹ばひて本讀む我の顏もたげたり

あれあとの秋深き空に鳴きいでし一つ蟬あり忽ちやみぬ

或時

かへり見てむだ口つかむ人のほし友は離れ住めり子らはをさなし

相手ありて人はむだ口つくに馴れその値をば認めぬ如し

高雄山にて

山道を行くとわが踏む大き葉の黄に照りたるは朴の落葉か

新しき小家かこめる本疎の薄は白く穗の枯れにけり

土手の上につづく秋空ま青なりふとあらはれぬ自轉車と人と

小庭

錦木のもみぢせる葉のいささかの疎らに浮かぶ竹垣の上に

傳通院にて

御堂道はさむ銀杏の黄に照りて歩み入る我にこぼれて落つる

早稲田にて

大隈總長記念講堂の大時計秋ふかき空にさやかに鳴りいづ

曉霜

中村憲吉

今朝の霜いたく置くらむ宿驛にはひと起きしおとのいまだ稀なる

あかときの霜ふむ人は羨しかも昨夜のねむりのよく足りぬらむ

寢寐がたく昨夜もなやみぬ吾がくせの寢酒をやめし寂しさのみならず

日ならべてこころの憂さやかかりごと彼もこれもの捨て置きがたき

あきらめに似たる思ひを吾がもちてあかときがたの眠りに入るも

•

あかときと吾が待ち明けし西山に空ゆくからすはじめてきこゆ

いね足らぬねむりを續がむあかときの冷えし炬燵は火にぬくめつつ

早朝の宿驛路になにか言ひのこし行く旅びとをきけばさみしき

おしなべて霧のとざせる家並には板屋の霜のいちじるく見ゆ

宿驛路に枝をたれたる枯柳に霜の眞白きこの朝かも

朝霜に荷積みひさしき馬ぐるま馬のたてがみ霜おきにけり

朝日照り霧ながるれば馬斷きて宿場ぐるまが發ちゆくらしも

はつふゆ

若山牧水

松が枝に鴉とまりつおもおもと枝のさき揺れて枯葉散りたり

わが家を圍みてたてる老松よ高く眞黒く眞直ぐなる松よ

ほがらかに鵯啼く聞ゆ老松の梢の高みに鵯啼く聞ゆ

この頃の部室の障子にさす日影親しいかなや冬に入りたる

灰をならし心しみじみなりにけり夜半の圍爐裡に獨り向ひぬ

朝宵に圍爐裡にかざすもろ手なり痩せたるかなや老のごとくに

池尻の落葉だまりに水あびてあらはなるかも一羽の小鳥

池尻の砂を流るゝ水淸し蜆の貝を其處に飼ひなむ

植ゑよとて柿の木の苗を貰ひたり植ゑて四五年たゝばならむとふ

この朝よ木枯吹かむけしきなりひむがしの空に雲低く散り

述懐

與謝野晶子

こし方をよその上とも取違へわれのあるかな人のあるかな

人よりも多く恨むと見なしつるその心をば失ひはてぬ

日の光明るき方を草木よりのぞましくする人の身のはて

住み馴れし都の家を離れきぬその外のことさもあらばあれ

人の身のはてに及べばうら安し風動くとも人われを見ず

いにしへの日の涙落つ今日と云ふ時を忘れて淺はかに落つ

これなるは忘れし後と云ふ心初めも無しとなすに至らず

ことごとく昨日となれば百歳の人もおのれも異ならぬかな

自らを哀れ哀れと云ふことに滿たされつれどその胸を捨つ

落葉にも冬木立にも慰めど悲しみとなる人の文がら

よそ人をわれ小猿とも自らをはた人ぞともゆめなさぬなり

爐とわれと唯だありぬべし要なしや倚らん柱も人の心も

雜木

北原白秋

雜木こそうれしけれ、
そのもみぢも、
こもごもに日のひかり
さしかひつつ

雜木こそうれしけれ、
そのにほひも、
ほのぼのと霧と雨
なづさひつつ。

雜木こそうれしけれ、
そのこずゑも
さむざむと雀など
かい寄りつつ。

雜木こそうれしけれ、
そのしもとも
ほきほきとゐろり火に
折りくべつつ。

小閑

ながめあかるきをりをりも
ほそりと影は通るなり。
なにかわびしき日向ほこ、
物の穗などもはかなさよ。



醫學博士 佐野彪太

腦脊髓神經病

佐野内科病院

東京神田區駿河臺（明治大學筋向）電話神田三四八〇

胃腸病

外來診察毎日午前中

院長 醫學博士 杉本東造

杉本胃腸病院

東京神田錦町三の一（美土代町下車）電話神田三五八一番・三五九〇番

肥胖病
血壓亢進症
糖尿病
心腎臟病
X光線科

醫學博士 倉上由一

倉上内科

診察 自前八時 至後一時

東京赤坂區青山北町四の六六 電話青山二二七六番

神經衰弱
腦精神病

院長 ドクトル 齋藤紀一
醫學博士 齋藤茂吉

電話 青山六五二番 四谷六七一番

青山腦病院

東京赤坂區青山南町五丁目（市電明治神宮前）
東京府下松澤村松原（玉川電山下下車）

小兒科

東京市神田區駿河臺御茶の水 電話神田25・四四一番・四四二番

外科
内臟外科
慢性肺結核科
整形外科
泌尿器科
X光線科

院長 醫學博士 松永琢磨

松永病院

診察 前九―十二 後三―六

東京下谷區省線御徒町驛前 電話下谷一三三〇番

腦溢血
腦梅毒
腦膜炎
不眠症
腦脊髓神經科專門

診察午前
入院隨時

醫學博士 佐多芳久

虎の門 佐多病院

東京芝區明舟町一九 電話芝一九一五・二七二四

淋病專門

特に慢性淋病

東明堂醫院

院長專門 醫學士 管野憲一郎

東京市京橋區南槇町二高島屋向通 市電京橋又は中橋廣小路降

耳鼻
咽喉氣管
食道科

診察前九時より後七時迄

醫學博士 鍋谷傳次郎

鍋谷耳鼻科院

東京京橋區桶町十（市電中橋廣小路下車） 電話京橋（五六）六〇七番

内科

醫學博士 小峰茂之 醫學士 鈴木雄平

新世界の魅惑

ナイルの旅

田島正雄

埃及の生命

羅馬のヴァチカン美術館にIL NILOと題した群像がある。波を線彫した台座の上に、左の肘をスフィンクスの背に凭せ、兩脚を長長と延ばした一人の巨人が悠然と横はつてゐる、その肩から腰の周り足許の邊には、十六人の小兒が或者は巨人の軀に抱き着き、或者は感に堪へぬ面持で巨人の姿を仰ぎ見て居る、そしてその總べてが三々五五相顧て嬉々として騒ぎ居る。之が即ナイル河の象徴である。

ナイル河が青白兩ナイルの双脚を有し、其左岸にスフィンクスを擁して居る姿が、此の巨人に依て表現せられて居る事は謂ふ迄もない。そうすれば此の巨人を繞つて群り蒐んで居る可憐な小兒達が、五千年の昔から只一條のナイル河をば生命の源泉として活きて來た埃及人の姿を偲ばせる事も亦固よりである。

の關係に至つては、單なる因縁や交渉を超越した絶對的の宿命である。世界最古の文化の發祥を見て以來五千年後の今日迄、埃及はナイルに依て活きナイルに依て育つて來た、ナイルは實に埃及の生命である。

ナイルの漲落

太陽を廻る地球の運行と、之に依て生ずる四季の交代とは、五千年間渝る事莫く、此間ナイルは年毎に規則正しい氾濫を繰返して埃及を培い育てゝ來たのである。

本流白ナイルの水量は、その水源たるヴヰクトリア大湖に依て調節せられ四時著しい變動を見ないが、その途中から流入する青ナイルは其源をアビシニアの山中に發する爲め、夏季の溶雪に依て一時に

を齎らす、冬期に於て一度乾燥した後に豐饒肥沃した自然の沃土の上には晩春初夏に亘つて播種栽培が行はれ、そこに穀物は實り家畜は肥える。

このナイルの漲落は四季の循環と共に規則正しく行はれるが、年に依て増水に多寡を生じ從て收穫に豐凶を來す。ナイルの高潮二十呎以下ならば饑饉、二十三呎ならば不作、二十五六呎ならば豐年、更に之を超ゆるの増水は文字通りの氾濫となつて人畜に害を及ぼすと謂はれて居る。

埃及は地廣くして面積四十萬平方哩を越えて居る。然しその大部は雨に惠まれぬ不毛の砂漠である、只ナイルの水に潤はさるる地方にのみ生命が榮える。

水と人文

古代の埃及人はナイルを神格化して崇拜した、彼等に取てナイルは一の偉きな神秘であつた、彼等はこの偉きな流れの源が何處に在るかを識らなかつた、然し彼等はナイルの水が總べての繁榮の源である事を識つてそこに神の慈愛を感じて居た、死の沈默に閉された數千哩の沙漠を貫いて、悠々と流れ滾々と盡きず、人畜を養ひ草木を育てる、この偉きな河の姿と力に對して彼等は限無き畏敬の念に打たれて居た。

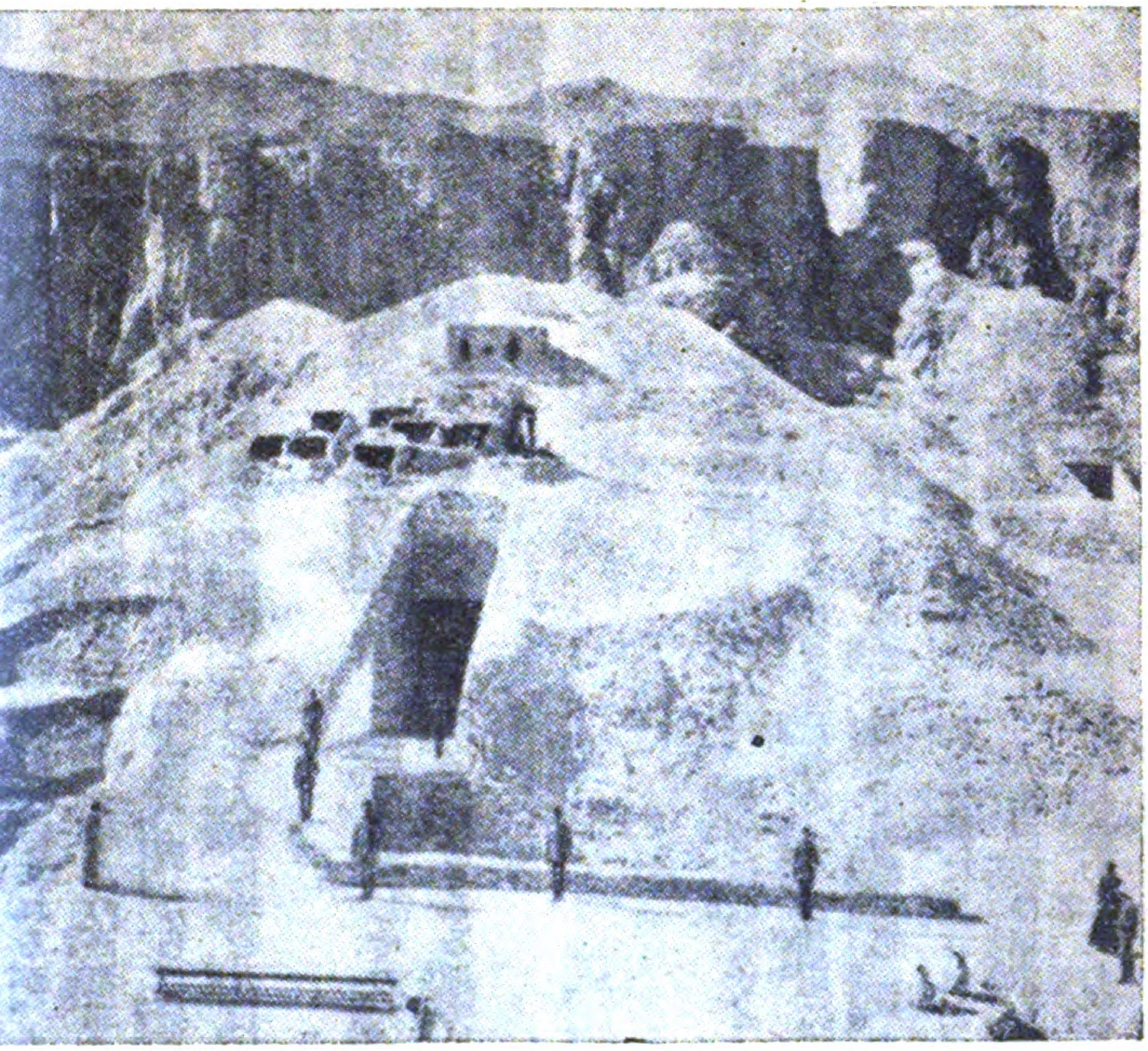
年々繰返されるナイルの漲落を注視する中に先づ測時の法が生れその發展として人々は定住した、定住が家族より部落へ國家へと進むに至つては耕地と土木の術が開けた、人口の増加に伴つて計數が進み度量衡が生れた、耕地とその産物の所有が複雜に進化すると共に其間の爭を裁く爲に慣習が生じ慣習は遂に法を編み出した。

斯くの如くにして埃及の文化はナイルに依て産れナイルに依て育つて來た。地中海が希臘の父と謂ひ得るならば、ナイル河は埃及の母と呼ばれねばならぬであらう。

ナイルを上下する船と車

ナイルを遡る旅はカイロを出發點とし策源地とする。三千五百哩の長流に沿うて、五千年間興亡の跡は、無數の史蹟となつて隨所に點在し、殆ど應接に遑無からしめて居るが、自ら下流に密にして上流に粗となる。之を訪ぬる旅行者は世界の各地から集つて四時其跡を絶たず、之に對する船車旅館の設備は至れり盡せりである。

埃及を發祥の地とするトマス・クック社と、之に對抗する英國ナイル旅客社とは各々善美を盡した遊覧船をナイル河上に浮べて居る、その航路はカイロからラクソアを經てアスワン迄最も名勝に富む六百哩の河上を二週間乃至三週間を費して優游するもので、十一月から三月へ掛けての季節中は毎週發船しその賃金一人五十六磅乃至七十磅である、之等の遊覧船は各室食堂展望室讀書室浴室等悉く備り宛然たる浮旅館である。此外更に贅澤な旅行者の爲めには貸切の小型



ツタンカーメン王墓

汽船と帆船とがある、ダハビアはファラオ時代の船に型取つた古式の帆船で、埃及名物の一として識られ、ナイル優游には誠にふさはしいものである。

アスワンから更に遡航して蘇丹國境のハルファ迄の二百哩は別にクック社と蘇丹政府の連絡船が航行して往復七日の旅程になつて居る。其賃金一人三十磅乃至二十磅である。

陸路はカイロからラクソア迄四百五十哩を埃及政府の廣軌鐵道が西岸から東岸に跨つて走つて居り、立派な寢臺車を運轉して平均卅五哩の速力で十三時間を要するに過ぎない。ラクソアからアスワン迄の百三十哩は狹軌鐵道で東岸に沿うて走り車行七時間、夫から先は鐵道の便なく前記の連絡船に依る外はない。ハルファから先には又蘇丹政府の鐵道があつて沙漠を横斷しカルツーム迄達して居る。

カイロからラクソアへ

古代埃及の首都として最も榮えたのはメムフイスとテーベであるが、前者はカイロに近く後者はラクソアに接して居る、從つて此間の地方がナイル流域の中でも最も史蹟に富み、ピラミッドの數丈けでも

第三王朝第三代の王に依て建てられ、年代に於ては最古のものに属して居る。謂う迄もなくピラミッドは古代埃及王の墳墓であつて、埃及芸術の特長と謂うべく、従つてメムフイスの遺趾に近い下流の地方に聚まつて居る。謂ひ得るならばメムフイスは埃及の奈良である。

更に南に進むとアビドス及びデンデラの古寺の遺跡があり、之を過ぎて間も無く河を越えて東岸のラクソアに着く。

ラクソアは即ナイルの両岸に跨つて栄えた古都テーベの地であつて、河の東岸には有名なカルナックの大寺が残つて居る、古代埃及に於て「神々の王」と称せられたアーメン・ラーを祠り、夙くより諸王の尊崇を聚め降つてはプトレミー朝の時代に至るまで歴々造営を重ねられたので、其規模の大輪奐の美を以てしたならば、ナイル河畔の古建築中結構第一と称せられて居る。

更に河を渡つた西岸にはクルナーの古寺があり、続いて其西北に連亘する「死の丘」には、古埃及を支配した王や妃や大臣等の古墳が夥しく存して居る。テーベ時代の後期王朝に至つては、金字塔建設の風既に廃れ、王墓は丘に拠て地下に造らるる様になつた。

カイロからラクソアへ〳〵謂ひ換へるならばメムフイスからテーベへ、地を隔つる事南北四百五十哩、自ら古代埃及の文化推移の跡を偲ばせるものがある。メムフイスを埃及の奈良と呼んだ私は茲に再びテーベを埃及の京都と称する事を許されるであらう。

「王墓の谷」

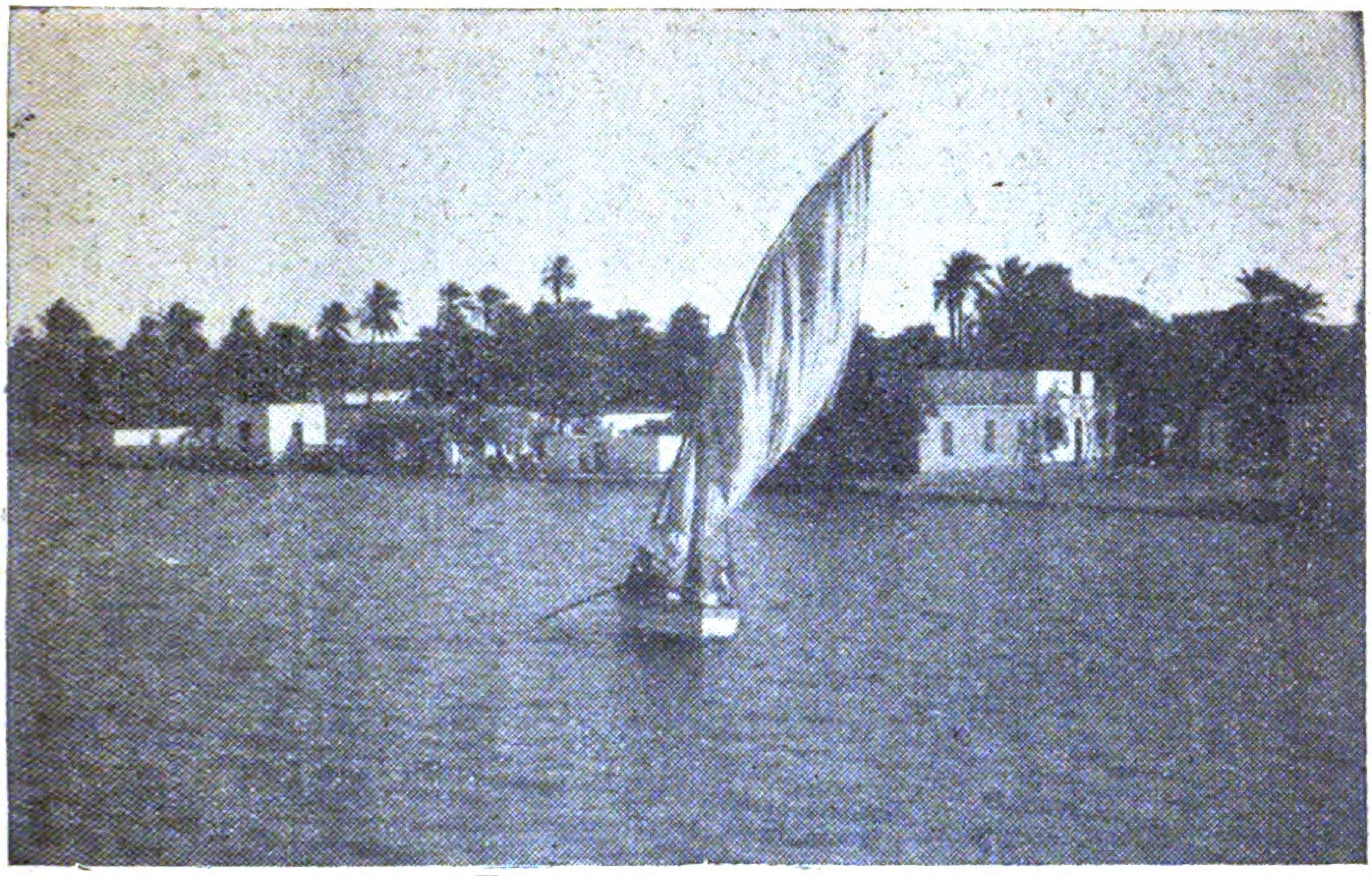
メムフイスの金字塔と謂ひ、テーベの王墓と謂ひ、総べてナイルの西岸に拠て建てられて居る。之は霊魂の再来を信じて木乃伊の術を創り出した古埃及人が、其王の遺骸を葬るに当て最も安全な場所を選んだ為であらう。

由来埃及の地は西にリビア、サハラの大砂漠を擁し、外敵の侵入に対しては海を控ゆる以上に安全を保障せられて居た、然るに東に当てはシリア、メソポタミア、ペルシアの地方に夙くより強大な帝国が現れ常に埃及に脅威を与へて居た、故に古埃及人は東に対してナイルを墻壁として衛り、王墓は総べて之を西岸に営んだものと思はれる。

然し中世サラセンの侵入に際しては、地中海に近く巍然と聳えたメムフイスの金字塔は真先に劫掠の目標となり、内室に納められた墳墓や財宝は跡方もなく掠め去られてしまつた。

此時遥か上流に退いて地下深く秘められて居たテーベの王墓は侵入者の蹂躙から免れ、爾後尚千年の間ファラオの夢を安らかに守り、十九世紀の中葉から今世紀の初頭にかけて埃及考古学者の発掘と研究に依て千古の神秘を現代に傳へ、古代史料として重要な文化的貢献を成したのである。

ラクソアからナイルを西に渡つてクルナーの村を過ぎると、一木一草も無い沙漠の突当りに、屏風を立て廻した様な砂岩の絶壁が延々連



ナイル河所見

亘して居る、之が即ナイル河溪の窮る所、リビア大沙漠の初る所、生命の國と死の世界との境界である。この砂岩の山を攀ぢ登つたならば、そこには再び降るべき途は無い、茫々漠々たる大沙漠が千古の沈默を守つて横つて居るのみである、リビアからサハラへ、二千哩の砂の海は一直線に太西洋に迫つて居る。

古代埃及の人々は、この魔の様な沙漠の彼方にこそ「あの世」が潜むで居るものと信じて居た、そこで死者の冥土へ行く旅を送る爲に、この絶壁の下、「この世」と「あの世」の境の土地に、王や妃の遺骸を葬つた、「王　墓　の　谷　」は斯くの如くにして造られたのである。

ツータンカーメン

「王墓の谷」は埃及考古學者の寶庫として前世紀の中葉以來數多の貴重な史料を世に與へたが、最近に於て全世界に亘るセンセイションを起したのは、一九二二年の冬、カーナヴォン卿とハワード・カーターに依て發掘せられたツータンカーメンの墓であつた。

TUT ANKH-MEN は十八王朝紀元前千五百年頃のファラオであつて、その前王にして岳父たるアーメネテップの信仰を承けて、テーベの北タル・エル・アマラの新都にアテンの神を祠り、後再び古來の傳統に復してテーベに還りアーメン・ラーの神に仕へた一種の理想家として埃及史上に名を殘して居る。

當の寫眞に三千五百年前の埃及の生活を其儘現代に再現した、第一室第二室と續いて神秘の扉が開かるると共に、そこには王の常用して居た車や玉座や寢台や精巧な裝飾や彫刻に飾はれた椅子の什器が在つた、鍍金の色は生々しく輝き三十五世紀の時の流れを信ぜしめぬ位の美しいものであつた。王が自ら手にして飲食を攝つたであらう所の透明硝子の如きアラバスターの鉢も現れた。王衣を納めた櫃の多數も見出されたが織物類は流石の蜘蛛の巣の樣に衰へて手を觸るればボロボロに崩れる許りになつて居た。死後の生活を養ふ爲には穀物の幾袋かが置かれてあり、モーゼの生れるまだ以前にナイルの岸邊に咲き匂うて居た草花の一束までも見出されたのである。この總べての品々と現代に活きる我々との間には三十五の世紀が横つて居る、夫が直に我々の視覺の前に持出されたのである。

斯くしてツータンカーメンの名は日常語の一となつて世界の隅々迄喧傳され、倫敦に巴里に、芝居の舞臺に百貨店の飾窓に、あらゆる場所と機會に於て、奇を好む近代人の好尚を煽り立てたのである。

ナイル河畔に果しもなく廣がつて居る砂漠は千古の沈默を守つて居るが、その砂の底に秘められた第二第三のツータンカーメンは何時の世にか再び現れて出るのであらう。

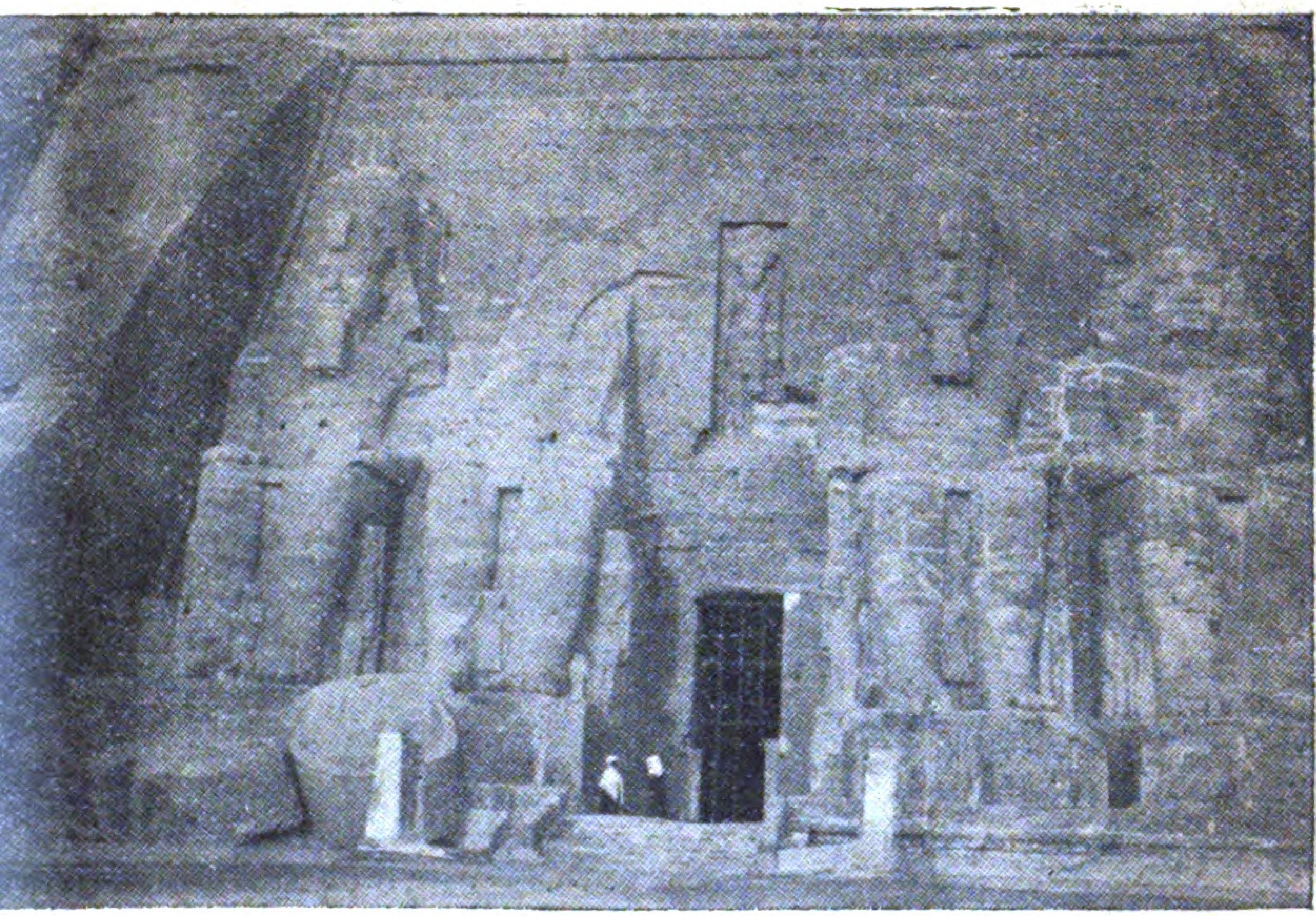
ラクソアからアスワンへ

ラクソアを出て更に南下を續けると、エスナ、エドフユ、コモオン等の古寺を經て、百二十七哩にしてアスワンに達する。この間ナイルの兩岸沃野の續く限りは、青々とした椰子林と麥畑とが續き、處々に集つて居る、その所々には農夫の貧しい小屋が點在して居る。雨の無い地方の事とて假四角に泥土を固めた壁を巡らした丈で、屋根は僅に椰の枝や枯草を敷き並べて日光を遮るのみである。驢馬や山羊が農夫と一緒に寢食を共にして居る、河邊の路を折々駱駝が荷を負ひ人を乘せて悠々と大股に歩いて行く、ファラオの世と餘り違もあるまいと思はれる樣な景色である。然しこの綠の野も帶の樣に幅狹く、東は直にアラビア砂漠に連つて遙に紅海岸の山脈を望み、西はリビア砂漠に接してあの「死の丘」の餘脈が延々と起伏して居るのを間近く眺められる。

ナイルの第一勝

河岸の此所彼所には、建石や自然の岩角に度盛を刻込んだナイロメーターが在つて、數千年前から今日迄渝る事なき河水の漲落を凝視して居る。又到る所に撥釣瓶の樣な仕掛になつたシヤドウフや木製の大きな齒車を利用して牛に曳かせて運轉するサキヤ等の原始的な汲水裝置が營々としてナイルの河水を汲上げては兩岸の耕地に灑いで居るが限に着く、埃及の生活の眞相がそこに窺はれる。

アスワンはカイロを去る五百八十哩の上流に在り、ナイルの第一急湍の直下に位して居る勝地である。



アビユ・シンベルの岩窟寺

アスワンから上流へ約六哩シエラルに至る迄の間は両岸直に山に迫り、河中には大小多數の島嶼巖塊が點在して、流域上下を通じ他に見る能はざる複雜な勝景を形つて居る。ナイルの大流はこの隘路に來つて急湍を作り、水勢頓に激して船を通ぜず、埃及からヌビヤに達する第一の關門を成して居る。ナイルは之より上流に進むに從ひ、第六急湍に達する迄尙五段の急湍を有して居るが、アスワンの第一急湍が最も著明であつて古代埃及人は此地を以て水源と考へて居たのである。

アスワンの町は河の東岸にあり、之に相對する河中の島は「ナイルの鍵」と呼ばれるエレフアンテイン島であつて、古來埃及に據つて南方ヌビヤを制する者に取つては第一の要衝とせられ、羅馬時代の築城の遺跡が今尙存して居る。ナイルを以てラインに比するならば、このアスワンの勝はかのローランドセツクに擬す可きものであらう。

カイロから遡航する遊覽船はアスワンに終航して引返すが、鐵道は更に第一急湍に沿うて山背を迂回しシエラルに達して其所から蘇丹行の遡航船に連絡して居る。

ホテル其他遊山地としての設備は皆アスワンに集て居り、シエラルは只湍上より蘇丹に通ずる淋しい船着場に過ぎないが、その勝景は敢てアスワンに讓らぬものがある、則その直ぐ下流に造つし

は特に注意しながら[illegible]ける如くに記した爲に、[illegible]るものがある。

進歩した近代的土木の技術を以てナイルの汚水を改善し灌漑の効率を増進する爲め、此の第一急端に堰堤を築造するに際し、最初の計畫では堤高百呎として八百五十億立方呎の水量を湛える事になつて居たが、夫ではこの美しいフイレーの寺が全く水中に沒する事になるので、色々と議論のあつた末遂に功利は審美に制せられ、堤高廿六呎を減じてフイレーの沈下を救ふ事になつた、其結果貯水量は三百五十億立方呎に減じたのである。其後再び功利論が勢を得堤高更に五呎を増した爲め、塔門も柱廊も今や其半を水中に沒して居るのである。ナイルの寶玉と呼ばるゝフイレーの島は言葉通りの浮沈の運命に弄ばれて居る。

シエラルからハルフアへ

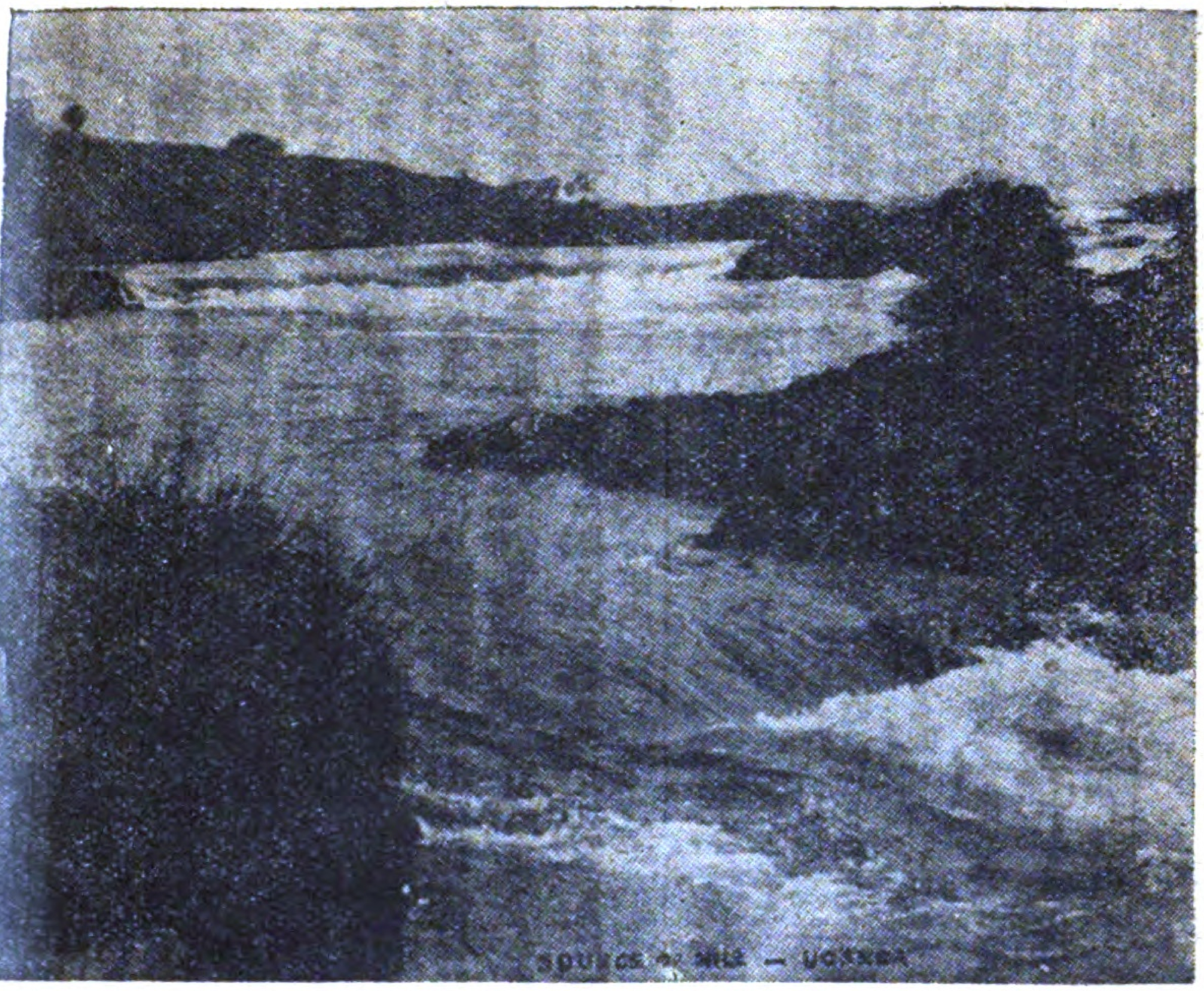
第一急端を越えて後、シエラル以南の上流に進むとヌビア一帶の風光は下流地方と趣を異にし、次第に荒涼と寂寞の氣を加へて來る。即ち河の兩岸には緑の耕地が途切れ勝になり、東岸のヌビア砂漠と西岸のリビア砂漠とは直に水邊に迫つて居る。南下するに從つて温度は漸く上昇し、烈々たる日光は漫々たる大河の水面に反射して天地は只管明るく平たく寂しく見える。夫でも時折は、荷物を一杯に積込み、三角帆を高く揚げて進んで行[illegible]ナイル[illegible]椰子の茂りを中心にして、幾戸かの土人の泥小屋が[illegible]點々と散在して居るのを見掛ける、そこには例のシャドウフがありサキヤがあり、人と牛と驢馬と駱駝とが營々として働いて居る、不毛無人の砂漠となり果つ可き土地にも、之丈けの活力を與へて居るナイルの力の偉さを、改めて強く印象される。

カイロを去る七百二十哩のイブリムは、北流するナイルが、一度屈折して南行する大きな屈曲點に臨み、河の東岸に屹立する高い岩山を擁して、上流下流を同時に制する景勝の地を占めて居る、ヌビア第一の要害で「ナイルのジブラルタル」と呼ばれ、山頂には羅馬時代の古蹟が今尚殘存して居るのを船上から明に眺める事が出來る。以て羅馬帝國の偉大さを窺ふ可きである。

尚此間隨所に點在する古寺の遺跡も亦尠くなく、ダンデュル、ダッカー、サブア、アマダの各地を數へる事が出來るが、最も著しいものとしてはアビュ・シムベルの大岩窟寺を擧げねばならぬ。

アビュ・シムベルはカイロを去る事七百六十哩の上流西岸の地に在り、古は大きな町が榮えて居たが夫は既に滅びて今は僅に河に臨んで小許の耕地を有するヌビア砂漠の一寒村に過ぎない。

有名な岩窟寺は河岸から數町、船上からも直に望見し得る岩山の中腹に在る、夫は紀元前約千三百年の昔、十九王朝の英主として埃及史上に最も有名なラメス二世が、シリアに於ける戰捷を記念すると共



ナイルの水源（リッポン瀧）

に、邊境ヌビアに勢威を示す爲め、非常な大工事を起して建てた所のものである。

總べての結構は天然の大砂岩山を其儘刳り拔いて造られたもので、先づ正面九十呎四方の岩壁を平く削つた上に中央の洞口の左右に二基宛合計四基のラメス二世の巨像を刳り出して居る、その各々は王座に腰掛けた坐像で高さ六十六呎、即ち奈良の大佛を拔く事更に八呎である。洞口から窟内に進入すると、第一室には高さ十七呎のオシリス神像が左右に四基宛相對して並んで居る、以て窟内の大きさを想見するに足るであらう。それから更に第二室第三室と奥深く刳り拔き、その最奥部は洞口から百八十五尺に迄達して居る。窟内は固より暗黑であるが、船のダイナモに連結した電燈を玆迄延長して臨時に點燈して觀光に便して居る。

アビユ・シムベルの岩窟寺はその規模結構の雄大なる事埃及第一と稱せられ、中期王朝最盛時の壯觀を偲ばしむるに餘りあるものがある。

アスワンの堰堤が上流水量の保持に及ぼす影響は遙にこのアビユ・シムベル迄及んで居るが、之から更に上流に進むと河床は著く淺くなり所々砂洲か水面に現れて居るので船は屢々コースを變へ、水深のある所を選んで右曲左折を繰返しつつ進んで行く。

沙漠を横斷する蘇丹鐵道

ハルフアはナイル廻航船と蘇丹鐵道との相會する水陸連絡の要地であつてカイロを去る事八百哩の上流に位して居る。

船から上つて形許りの旅劵手荷物の檢査を濟まして數十歩すれば直に蘇丹鐵道の停車場に達する、そこには純白に塗られた清楚なカルツーム行急行列車が上陸客を迎へて待つて居る。

寢台車は數個の小室に仕切られ、各室には二個の窓があつて燻硝子戸と其外側に下つた木製の庇で強烈な砂漠の日光と塵埃とを十分に遮つて居る、室内には廣々した寢台、籐椅子、洗面台等を備へ、ゆつたりとした居心地は車室というよりも寧ろ船室の樣な感じがする、各車は一側に廊下を有して相互に聯絡し、食堂車の設備も極めて整頓して居る、軌道は三呎六吋の狹軌單線であるが、列車全體の設備は英米の鐵道に比するも多く遜色を見ず、歐洲大陸の場末の鐵道に比べたならば寧ろ優つて居るかと思はれた位である。アフリカ内陸の砂漠の中心で、思も懸けぬ立派な車室に寛いだ私は「滿足な驚き」を感じたのであつた

ハルフアの停車場を後にした列車は、カイロ以來幾日幾夜を親み續けて來たナイルの流に別れを告げ、直にヌビヤ沙漠の眞中へ向つて突進して行く、それは地上を汽車で走ると謂うよりも砂の海を車の船で渡ると謂つた方が適はしい。見渡す限り無人無生の砂の連りで只所々に[illegible]があるのみである。七洋、大海には不斷の波の動きと響きがある、然し砂漠の「一大洋」に靜寂の不動と無限の淋しさに閉ざされて居る、薄黒く燻された硝子窓を通して凝視した眺めは地球以外の死せる天體に來たかと疑はれる許りであつた。

この玄奇な景色を飽かず見守つて居た私の眼前には忽然として不思議な現象が現れて來た、それは遙か向の地平線一帶に現れた一脈の紫色であつた、私は最初それを蒼空の一部であろうと思つて居た、然しよく見ると、その低さ平さ輝やかしさがどうしても雲とは思はれない、と、間も無く、その線の「水面」には點々として浮ぶ島影さへハツきり見えてきた、この砂漠の眞中にどうしてあんな大きな湖水があるのだらうかと私は自分で自分の眼を疑はずには居られなかつた。然し更に進んで近くに從つて、何時しか「湖水」も「島」も消えてなくなり、又更に遙か彼方に同じ樣な「湖水」と「島」とが現れてきた。斯くして私は幾度か物語に聞いて居た沙漠の迷怪を眼の當りに見た。然し幸にして、駱駝の背に身を託する隊商の一人でなく、鐵路を直進する廿世紀の汽車に身を載せて居た私は、この沙漠の妖異に誘惑さるる事もなく極めて安全快適な旅行を享樂する事が出來たのである。

この無人の砂漠にも鐵道沿線のみは一脈の生氣が通つて居り、地底百尺に近い深井から湧出する清水の在る所々は、一號から十號迄無名の小驛が散在して居て、列車は其驛々に停車して用水を汲み取るのである。



ニロ群像(ヴアチカン博物館藏)

ナイルの大灣流部を離れて一直線に二百三十哩の沙漠を短絡した列車は、アビユ・ハマッドに達して再びナイルの流に會し、夫より南へ東岸に沿うて走る事更に約三

丹の首府カルツームに達するのである。

蘇丹鐵道はカルツームから青ナイルに沿うて更に南走してセンナーに至り夫より西折してエル・オビイドに達し、蘇丹農産の中心たるゲジラ地方一帶の交通を通ずる外、別にアビユ・ハマッドからナイルに沿うて西へカレイマ迄、又アトバラから再びナイルを離れて東へ沙漠を横斷して紅海岸のポートスダン迄、夫々二條の支線を放つて居る。之等の諸線はハルフア、シエラル間の連絡船と共に總べて蘇丹政府鐵道汽船部の經營に屬し、ナイル上流地方の大交通網を形成して居るのである。

ナイルの水源を尋ねて

カルツーム以南のナイル上流は交通甚不備であるが、夫でも尙白ナイルの本流を遡る事約八百哩のジヤフ迄は二週一回の郵便船の航行があり日數約十五日で達する事が出來る、更に夫から上流に至つては行路愈々難澁ながら、徒歩、自動車、並に一部の舟運を利用すれば、ニミユールを過ぎてウガンダに入り、ブテイアバ、マシンデイ、ナマサガリを經て遂にジンジヤに到り、「アフリカの心臟」と呼ばれるヴヰクトリア大湖の一角から崩れ落ちる所のリッポン瀧に達する事が出來る、そこにナイルの水源が在る。

み之を育む源である。

五千年來神秘の流れと謳はれて居たナイルの、源の謎を解いたのは英國の大探險家スピークであつて、時は一八六二年七月廿八日、今を去る事僅に六十六年前である。

リツポン瀧は、ヴヰクトリア湖北岸の狹江ナポレオン灣の盡る所、兩岸相逼つた巖壁の一端から大湖の水が瀉落して生ずるもので、瀑布と謂うよりも寧ろ一個の急湍である。湍下に渦巻いて白沫を揚ぐる激流は即ち、「生れたるナイル」が遙かに地中海の潮の香を慕つて四千哩の旅の首途に勇躍して居る姿である、湍側の巖角にはスピークの紀念碑が刻まれ

SPEKE DISCOVERED THIS SOURCE OF NILE ON THE 28 JULY 1862

簡結な一句が誌されて居る。

半世紀前、大探險家の歡喜と感激の對照となつて初めて世に顯はれたこの神秘境には、今尚多數の河馬と鰐魚が群棲して居るが、水邊を去る事僅に數百歩の丘上に戻れば、そこにはフオードのエンジンが焦燥な爆音を轟し、ガソリンの烟が近代の匂を漂はして居る、自然と人文の交錯が強い印象を以て迫つて來る。

獨りリツポン瀧は、五千年來孜々として倦まず、夜となく日となくヴヰクトリア大湖の水を運び出してナイルの流に瀉ぎ込み、ヌビアとリビアの大砂漠に一道の生氣を與へて埃及の地と人を育てて居る。

ナイル大觀

ヴヰクトリア湖に發流したナイルは、チョーガ湖を經てアルバート湖の北東端に達する、此間の二百四十哩はヴヰクトリア・ナイル又はソマセット河と呼ばれて居る。アルバート湖から流出した後は北流延延七百六十哩にしてノー湖に達して西方から流入する羚羊河を合せる、此間のナイルはバール・アル・ガバル即ち「山の河」として知られて居る。

ノー湖から暫く東流する事六十哩でソバト河を合せた後再び北流に轉じ五百哩にしてカルツームに達する、此間が即ち白ナイルと稱せられる部分である。カルツームの附近では東南の方アビシニアから北流して來る九百六十哩の青ナイルを合せ、之より以北が即ち「ナイル」の名に呼ばるる本流となる。

水源リツポン瀧からカルツーム迄の千五百六十哩の間が大ナイルの上流であつて、森林山嶽の間を縫つて流れ、急湍瀑布する處に激奔して舟を行る事最困難である。

カルツームからアスワン迄の千百六十五哩は即ナイルの中流に當り、ヌビアの砂漠を潤しつつ一大S字型を描いて濶流し、此間カルツームの北方二百哩の所で東南から青ナイルに併行して北流してくる七百九十哩のアトバラ河を合せて居る。

アスワンから河口迄の七百四十八哩は即ちナイルの下流であつて、東にアラビア西にリビアの大沙漠を潤し、人文夙に開け農牧最も榮ゆる地方である。カイロの北十四哩の所でナイルは東西に分流して地中海に注ぐ、東なるをダミエッタと呼び、西なるをロゼッタと名け、各約百五十哩の長さである。

斯く如くにして、リッポン瀧から地中海迄、ナイル本流の全長は三千四百七十三哩に亘り、此間の水流に要する時間は氾濫期に於て五十日、減水期に於て九十日を要するものと測定せられて居る。

世界を通じて大河長流數多きが中に、ナイルに比肩し得るものとしては、僅に揚子江、ミシシッピー及びアマゾンの三者を揚げ得るに止る。只この三者が何れも豐富の水量を有して上流遠く巨船を通じ、交通運輸の効用に於て非常に重要な價値を有するに比した時、河床淺くして大船の運航を許さゞるナイルは遂に一籌を輸するを免れない、然し乍らナイル微りせば、その流域數千哩の地方は、永久に不毛の沙漠として死の沈默に閉さるゝの外は無かつたであらう、星霜幾千晝夜を舍てず、滾々として盡きざるこの「生命の水」の流るゝあつて、埃及は産れ埃及は活きる、その文化史的意義の深刻なる事、世界百千の河流を聚むるも尙一のナイルに及ばぬと謂はねばなるまい。

南北に流るゝ事四千哩、古今を貫く事五千年、この偉きな流れのには、世界の歴史を飾る人類の戲曲が幾度繰返して演ぜられた事であろうか、そこには三十の王朝が興亡した、蓋世の英傑アレキサンダーの後には絶代の妖妃クレオパトラが現れて史的ローマンスの悲曲を演じた、羅馬とビザンチンの勢威も遂に久しからず、コーランと劍を振り翳した砂漠の豫言者が遺した回教の傳統は中世の暗黒を照す一大炬火を輝かした、半月旗の影漸く薄れるや、コルシカから蹶起した一代の風雲兒は忽然として金字塔下に現れ「四十の世紀が諸士を見下して居るぞ」と叫んで三軍を叱咤した、それも束の間、北歐の孤島に據る老獅は鋭い爪牙を磨いて迫り進み、今や隱然たるナイルの主人公として四方を睥睨して居る。數奇の運命は幾變轉を重ねて來た、そして之から又如何なる大戲曲がこの舞臺の上に演ぜられむとして居るのか？默として語らざるナイルの流れは獨り悠々として「時」と共に進んで已まない。

ヴアチカンのＩＬ　ＮＩＬＯは水と人とを象徴して、偉きな愛と惠みの世界を暗示して居る。あの巨人と小兒の平和な世界がこのナイルの河畔に建設せらるる事は遂に永久の美しい夢となるのであらうか。

ニユージーランドの自然と人

木戸忠太郎

一　日本を半分にした樣な國

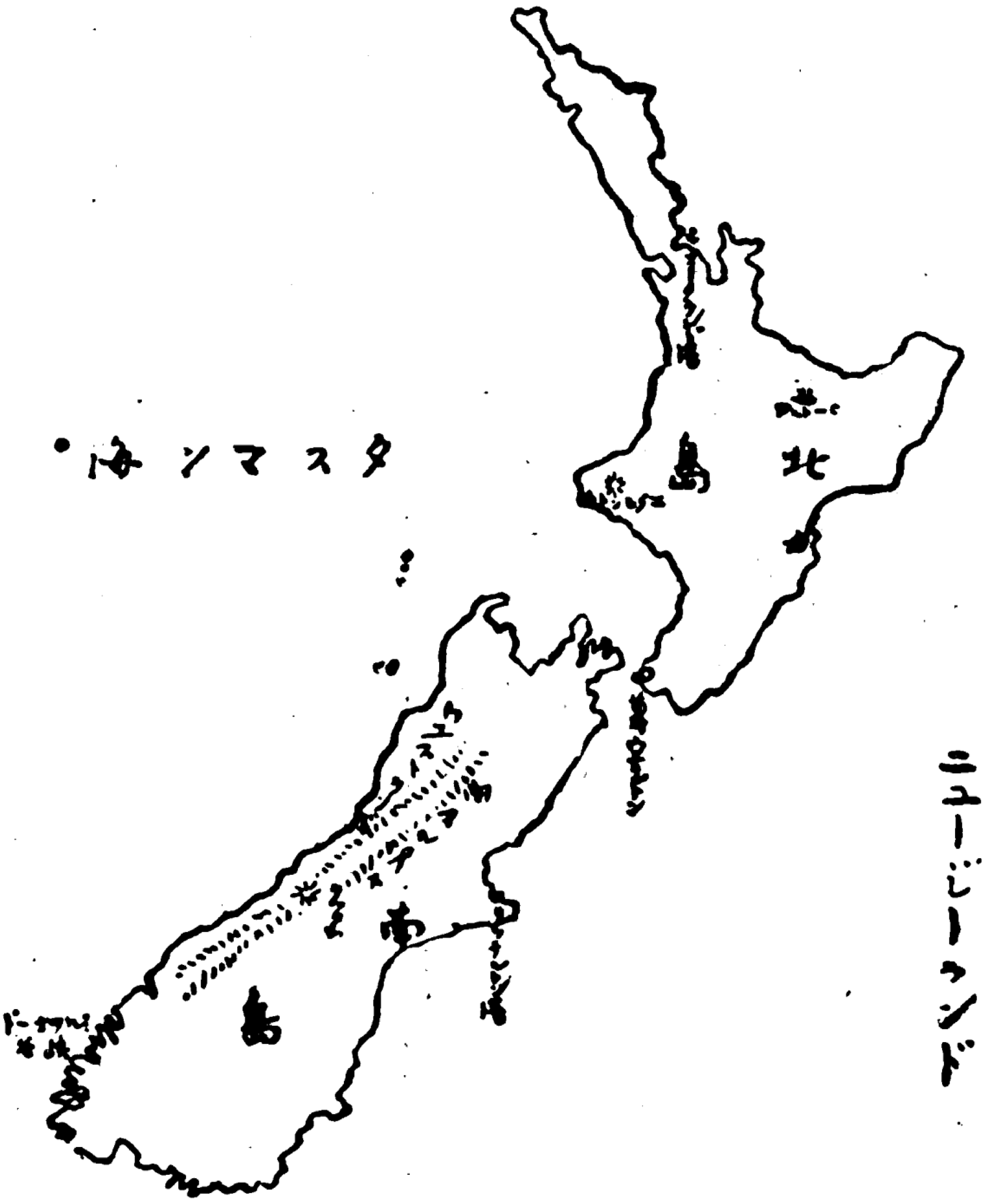
ニユージーランドは南大平洋上、南緯三十四度と四十八度の間、東經百六十六度と百七十九度の間に位する島國である。英國の領地で英國人が南洋の英國と呼んで居るのには何等の不思議はないが、位置地形及び其他の地理學的事項から云へば寧ろ吾日本島國に類似した點の多いことを見出すであらう。

經度から云へば日本よりも少しく東方に偏して居るが、緯度の上では南北の差こそあれ殆んど同一の位置を占め、吾等が北極星を見る眼を南に轉ずれば、正しく地平線上略ぼ同高の天空に南極星を見出し得るのである。地形及び面積を比較すれば、ニユージーランドは南北二島より成り、日本を半分にした樣な國である。其總面積二十七萬一千方粁は日本の四十四萬九千六百八十九方粁（朝鮮を除く）の二分の一強に當り、北島は十一萬六千五百方粁で、北海道と九州を合せたより稍大きく、南島の十五萬四千五百方粁は本州島の三分の二強である。其北島の形が北海道に似たところがあり、南島が本州島を富士火山脈線で横斷したその北の半分に類似して居るのも、偶然ではあるが面白い一致を示して居る。東北より西南に向つて細長く濠洲の東海岸と平行して居ることも亦日本群島が同方向にアジア大陸の防波堤の如く羅列して居るのと好一對である。唯後者が大陸との間隔僅に半日の航程に過ぎないのに、前者は濠洲を距ること千二百餘浬の遠きに達して居るの相違はあるにしても、之れを日本を半分にした樣な國と見ること餘り懸隔れた比較ではあるまい。大阪朝日新聞記者土居元作氏は嘗て此島國を形容して、恰も伊太利を逆さにして中部羅馬の邊に運河を穿鑿せるが如しと云はれたことがある。之れも面白い見方で、面積も殆んど同じだが、其他の點では日本と對照した方が一層適切であると思ふ。

氣候も亦日本と似て居る。北島の北岸にあるオークランド港の一月（南半球の酷暑）平均華氏六十六度六、北島の南岸なる首府ウエリントンでは六十二度六、南島の南端に近き都會ダニーデンの七月の

寒）平均四十二度を下らず。オークランドの年平均五十九度五は長崎のそれと相同じく、ダニーデンの五十二度は石巻と略ぼ等温である。大體に於て中部日本の氣候に近く、しかもその極暑嚴寒からは全く免れた温帶國としては日本人をも羨ましがらすに充分である。雨量は三十吋乃至百吋で北島の大部分は五十吋乃至七十吋、南島は二十吋乃至四十吋の間にあり。日本では、澎湖島の二十六吋、敦賀の百三十二吋を其最少最多量とし、東京の六十二吋を中位量とすれば、雨

ニュージーランド



ばかりでなく、火に於ても日本と同じく火山國であることは、更に項を別にして記載するであらう。

二　原住民族對英人

ニュージーランドの原住民族はマオリと呼び、ポリネシア種族に屬す。その土語では、此國の名をアオ・テア・ロアと云ひ、長白州の義である。此島國が始めて白人に知られたのは西紀千六百四十二年のことで、和蘭の西南部ジーランドより來航したタスマン提督が發見當時スターテン島と命名したのを、後ニュージーランドと改め、英國が占領してからも其儘襲用して居るのである。

マオリが大平洋上から此島に移住したのは多分第十三四紀の頃であらう。彼等は北島をテ・イ・カ・ア・マウイ（マウイの魚）と呼びて、マウイ神が海中より釣り上げたものと信じ、南島は、其西岸で發見された綠石（マオリ語ではポウナムと云ひ、硬玉の一種）を石斧や裝飾品として愛用するところから、之れをテ・ワイ・ポウナム（綠石の島）と呼ぶ。彼等が熱帶群島の椰子の葉蔭から、獨木船に搖られ〳〵始めて風光明媚な溫帶島に到着した時には、前途の光明を夢みつゝ、左に揭ぐる新鄉土の歌を聲高々と合唱し、足取面白く踊り興じたことであらう。

われは立ちぬ、この新しき國に、
わが祖先の如く、
地球の靈よ、吾人はその心を汝に捧ぐ。

然しこの新種族も、彼等には長く續けるアナ・テア・ロアたることを得なかつた。紀元千七百六十九年、英人クック提督が三百七十噸の小帆船を操縦して其沿岸を測量して以來、捕鯨船の來航は漸く頻繁となり、其儘土着となつた者もあつたが、千八百二十五年ハード提督が始めて永久植民を企てゝより、基督教傳道の功亦空しからず、千八百三十九年ニユージーランド會社組織せられ、其翌年一月二十九日ワイタンギ條約が土人との間に締結せらるゝに及んで、完全に英國の領土となり終つたのである。

斯くて先住民族は數百年間を夢の裡に、美なる環境の恩澤にも惠まれず、曾て文化の片影をだに創造することなくして、空しく白人種の治下に屈服するに至つた。彼等の中には遂に先住者としての權利を主張する熱血男兒が一人も居なかつたのであらうか。彼等は邇來の移民をして何の苦もなく我物顔に操縦はせたであらうか。其豐富なる天然資源を彼等に委ねて徒らに指を啣へてのみ居たであらうか。或者は巧妙なる基督教の傳道に歸依して神の祭壇に跪いた。或者は一として奇ならざるはなき舶來の文物に眩惑されて不利益な物々交換にも甘んじた。然し斯の如きは素より彼等の凡てゞはなかつた。其事々に感激し易い素質、戰に食ふを以て勇者とする殘忍性、慓悍にして爭鬪を好[illegible]た。加ふるに當時[illegible]膚の色こそ白けれ、故國を追はれた[illegible]い欲情は多くマオリに稀ならず、紛爭の絶えざるは寧ろ當然過ぎる位であつた。植民政府も亦先住民族を歸服せしむる困難さを是等の同胞に對する處置にも均しく感ずるのであつたが、千八百七十二年孰れ最後まで頑強に抵抗したテ・クーテイ一團の滅亡を以て、新領土平定劇の幕は閉ぢられ、今は唯各地に殘れるマオリ特有の保壘の跡が旅客に當年の筋書を物語るのみである。

英人が始めて此國に來航した頃には、マオリの人口は概算十萬人を下らなかつたが、多年繼續された戰鬪の結果と、新來文化の影響を受けて、生活上習慣の急變を來し却つて健康を害し、從つて死亡率を增加したことの爲めに、著しく減少して、千八百七十四年には四萬五千人を算するに過ぎなかつた。爾來少しづゝ增加の傾向を生じ、千九百十一年には四萬九千人、千九百二十一年には五萬三千人、千九百二十四年には五萬四千人以上に達し、明かに再興の兆あるを示した。由來低き野蠻の狀態から高い文明の境地に躍進せんとするには、どうしても一度は其傳來の習慣を打破して生活の調和を失ふ結果を生ずる。此急激なる變化の過度にも堪へることの出來る民族ならば、決して絶滅する憂はないのである。之れをマオリ族に徵するに、彼等も亦絶滅する樣な劣等種族ではなかつた。彼等は向上すべき素質を有つて居な

[illegible]

等が成人後も[illegible]其英語を善くし社交に当る[illegible]

らないことを念ずるのである。

三　マオリの民族性と其風俗

マオリの家は木造又は茅屋である。森林に富み[illegible]曲なき国ゆゑ、土石の類は殆んど建築に用ひられる場合がない。屋根[illegible]

[illegible]を討つたり、[illegible]

[illegible]彫刻に耽つたりし[illegible]る。特に木彫の巧妙なること[illegible]蛮人中[illegible]等の右に出づるものはあるまい。祖先を表象したプープーと



マオリの敬禮法

呼ばるゝ彫刻物は人體の奇形を刻んだもので、至る處に装飾として用ひらる。此國の名産の一なる翡翠玉（緑石）にも此形を彫刻したのが多い。それをマオリの女達は胸の飾にして居る。

渦巻は最廣く彫刻に應用せらるゝ圖案の一つであるが、彼等の顏面に施せる刺青にも此形をしたのが多く、額に寄る皺を誇張愛翫するかの如くに思はれる。日本の歌舞伎十八番などに登場する勇者の顏を彩る紅隈の様なのもある。女の口の縁には樂器の形などを細い線であつさりと入れる。彼等の鼻の概して扁平なことは其顏の美觀を損するのであるが、これは赤子の時に母體に壓しつけられた結果である。彼等の敬禮の表はし方は手を握ると同時に鼻と鼻とを觸れ合はせるのである。この甚面白い習慣には、鼻が平たくては距離が遠くなつて勝手が惡いであらう。

夜になると、一家團欒して昔話や系圖などを語り合ふ。未開人種で彼等ほど古き傳説を固執し、古き歌謠を保存して居るものはあるまい。大抵の白人は家の系圖と云ふとには冷淡で、漸く其五六代前位迄しか溯れないが、マオリは少くも二十四五代前迄の系圖を暗んじて居る。ポリネシアから獨木舟に乘つて此國へ渡來した頃迄の家の歴史は、傳説的にもせよ、容易に彼等の倒敘し得るところである。彼等は其系圖を貴ぶ結果郷土に對する執着心は非常に強烈である。森も小川も野も山も、住み慣るれば其處が直ちに彼等の生命の源泉となるのである。此感情はやがて彼等の詩歌に織り込まれ、常に熱烈な、情

燃え立たせて居るのである。彼等が其詩的なるボイ踊、朗敏たるハカ踊に、夜の更くるのも忘れる迄に興ずるとき、ポリネシアの珊瑚礁上、椰子の實の累々たる木の間の月影に、彼等の祖先が本能的に浮れ遊んだ太古の情趣が夢の樣に彼等の眼前に彷彿するであらう。

マオリの階級制度は自由の民と奴隷とに分れ、戰爭で、捕虜になつたものは皆奴隷として使役される。其制度は規律正しく、劃然たる上下の區別は全く優勝劣敗の結果である。財產は私有又は共有であるが、若し其所有主が自衞力に乏しく財產を保有することが出來ないと、彼よりも上級のものが欲求したときに之れを拒む權利がなくなるのである。然しさうした專制的階級制度も、彼等が歐化するに從つて次第に緩和さるゝに至つた。

四　築山の樣な火山の群

マオリの民族性に環境の影響があつたとすれば、日本と同樣に火山に富んで居ることは確に其一因と見做さるゝであらう。其分布の有樣を見るに、南島に甚少く北島に多い。マオリの人口も亦北島に其九十六%を算し、南島は僅に其四%を容るゝに過ぎないゆゑ、彼等の性格に影響した環境は主として北島のそれであらねばならぬ。天空を劈かんとする火山の雄姿、其地軸を動かさんとする爆發の偉力は彼等の心臟を鼓動からしめたと共に、數百年間に亘りて、感じ易く激し易き熾烈火の如き性情を彼等の心頭に醱酵たらしめたであらう。其鬪力に於てマオリがアイヌより一步を擢んづる如く、北海道に似た北其火山性に於て一段の優勢を示しつゝ、其門戶を太平洋上に開いて居るのである。

旅客のニユージーランドを訪れんとするもの、大半は北島の要港オークランドに向ふであらう。船は島國の北端を廻つて其東海岸に沿うて南下し、ハウラキ灣に入れば、左舷近く碗の蓋を伏せた樣なランギトト火山島が早くも遠來の珍客を港外に歡迎して居るのである。この山の名はマオリ語の血の空と云ふ義で、昔噴火の際天が燒けて血の樣になつたところから此名を得たのである。傳說によれば、此火山は灣の西岸近く底なき海と呼ばるゝタカプナ湖から投げ上げられて出來たもので、其跡が湖水になつたと云ふ。琵琶湖が一夜に掘れて富士山が出來たと云はるゝ日本の傳說と其着想を一にして居るのは面白い。さうして前者の方が一層學理的であるのは、タカプナ湖が低い火山の火口湖に外ならぬからで、富士山對琵琶湖に比すれば、距離も緣故も著しく接近して居るのである。

オークランド港を含むワイテマタ灣なる名稱も亦マオリ語の馨ける水、直譯すればマタツフナ即ち黑曜石に類する水と云ふ義に當り、マオリの祖先が其靜かな灣上を眺めたとき、黑曜石の劈開面の樣に輝いて居たので、斯く名づけたと云ふ傳說である。此形容はマオリが火山岩に關して若干の智識を有することを物語つて居る樣にも思ほれる。其眺望に最適當なアルバート公園は海岸の小高い丘にありて、其展望

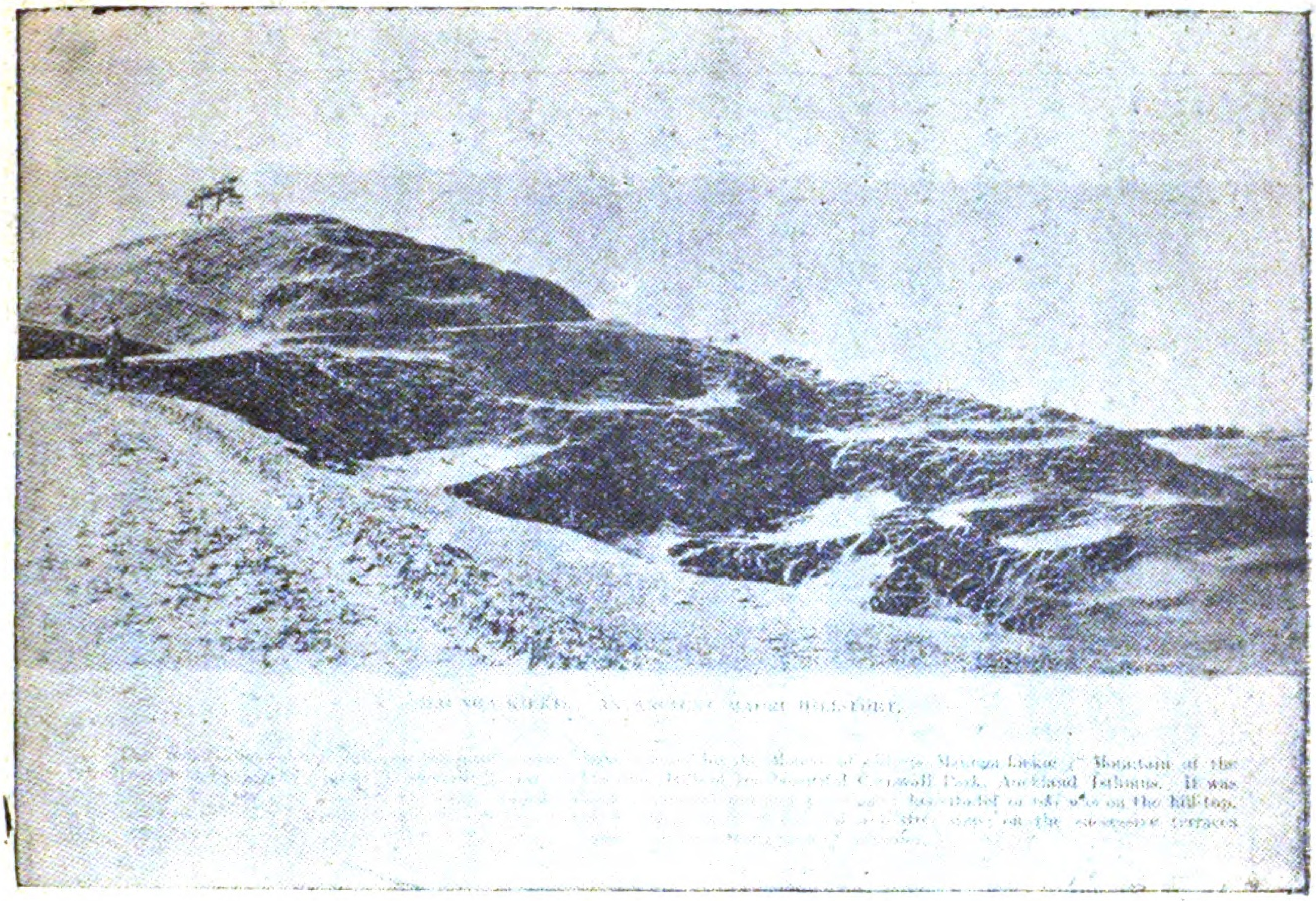
には官衙や銀行會社劇場などの大建築が並んで居るが、此丘は嘗て一個の獨立した火山である。幸にして其活動力は全く消滅して居るから、忽ち焦熱地獄と化するが如き惨劇の演ぜらるゝ心配は先づないとして、噴火山上の舞踏は絶えず行はれて居るさうである。

　オークランド市及び其近郊には、この公園火山の外に築山の様な小火山が幾つも散在して居る。市街を南に出外れた處にエデン山が聳えて居る。此地方での最高峯であるが、それすら海抜僅に六百四十七尺に過ぎない。火山灰層を被ふた山腹の熔岩の上には瀟洒な住宅が並んで居る。エデンの様な花園が地獄の上に平和な家庭を幾つも彩つて居るであらう。此火山の直ぐ東側にセント・ジョン火山（三百九十六尺）、ホブソン火山（四百三十尺）、少しく離れてマウンガレイ火山（三百五十三尺）あり。西方には三哩程離れてアルバート火山（四百尺）、西南にはスリーキング火山（三百九十三尺）南方には一哩内外の處にワンフリー火山（五百八十四尺）、其南側にスマート火山（二百九十七尺）あり。東南の方五六哩隔れるマヌカウ灣の東岸には、マンゲレ、プケツフ、プケイチ、オツアタウア、タケタケ、マヌレワマタカルア、オタラ等の火山ありて、いづれも高さ三百尺以内の小丘である。面積僅に二十方哩に過ぎない小區域内に斯く多數の火山が密集して居ることは、地球上他のいづれの地方にも見られぬ現象である。

　右の内、ワンフリー火山は市の南郊にあるコルンウオール公園の築山になつて居る。一名マウンガキーキー山とも云ふ。山腹には昔マオリーの築いた要塞の跡が今尚明かに残つて居る。マウンガ・キーキーとは綴樹の山と云ふ意である。其處から三哩ほど南行すると半島の西側すネハンガ港に達する。オークランドの停車場から此港まで僅に七哩の地峽をなして居るのである。港の西端に近い處に直徑二町許りの圓形の貯溜りがあつて、電車は其周圍の土手の上を走る。此貯水池は人工でわざわざ掘つたものゝ様に見えるが、何ぞ料らん、是れ有史前噴火口の跡で、此一部が海に開いて入江をなして居るのである。此火口港はホブアと呼ばれ、灰のみで盛り上つた極めて低い火山で、電車が走つて居る土手は其外輪山頂である。大抵ならば遠くの昔波に攫はれて居るべきのが、海抜十五尺の火山として兎も角も其形を保ち、其上に文化的施設を載せて居ることはどうしても自然の悪戯としか思はれない。斯くの如き小火口港は此外にマウンガレイ火山の麓に一つ、オークランド港の對岸に二つある。

　是等の火口港は地理學の教材として校庭へも移し得る好標本であるが、其規模の大なるものは南島クライストチヤーチ市に近きリツテルトン港である。東西北の三面は急傾斜の外輪山を以て圍まれ、南方のみ外海に通じて居る。火口港たることは云ふ迄もなく、隧道はその外輪山の横腹を貫通し、汽車之を過ぐるに四分十秒を要す。幸にして死火山のことゝて痛いとも何とも云はず、旅客は安全である。

五　温泉と地獄谷



マオリの堡壘を以て掩はれた死火山

火山作用の現に活動中のものは有名なロートルア溫泉地方に於てることが出來る。此溫泉はプレンティ灣の南方、オークランド港から鐵路百七十一哩の地點にある。此地は海拔一千尺の高地に在りてロートルア湖に臨み、周圍は火山岩より成れる屏風で取卷かれて居る。ロートルアが溫泉地として世界的であることに就ては原因は幾つもあらうが、氣候がよいのと、溫泉湧出量の豐富であるのと、殆んど同じ場所から性質の全く異つた數種の溫泉が出るのとは其主なるものである。殊に最後の事項は他地方に類例の少いことで、ロートルアが溫泉地として其聲明を轟かせたのは全く此特徴を具へて居るが爲めである。

浴客が此地に充滿する季節は一二月の候である。それは避寒の爲めではなく、避暑を兼ねての入湯客である。北半球からも其頃來浴するものが少くない。若し世界の交通が緯度上に於けるが如く經度上にも便利になつたら、この南半球の日本とも云ふべき火山國の溫泉へ、夏は冬を、冬は夏を求めに、北半球の日本からも出掛けることがあながち贅澤の沙汰とは云へなくなるであらう。林檎、凍肉、バタ、チーズなどが歐洲の夏へと輸出せらるゝ如く、マオリの富豪達がニユージーランドに似た北半球の火山國へ避暑避寒を兼ねての見物に來遊することも決して不可能とは云へなくなるであらう。

ロートルア地方より湧出する溫泉の量は實に莫大なもので、其豐富なる點に於て日本の誇とする別府溫泉も到底其敵ではない。此地方の

湯に分並の家に湧し、湧ることと考へば、いくら湧いても永遠の涸るゝことがない。それは此附近一帯の地質が軽石層から出来て居るためで、地表に落ちた雨滴は直ちに滲透して地下水になつて仕舞ふからであるが、此軽石層の存在が温泉の性質に大関係を有つて居ると同時に、過去に於て如何に大活劇の演ぜられたかを物語つて居るのである。

温泉は湧出する許りでなく噴出する量も亦頗る多い。それは間歇泉としてゞある。官立温泉場の前の小池内に小規模人工的のものが絶えず湯霧を庭の木立に送つて居る。其規模の大なるものはロートルアを距ること二哩なるワカレワレワに群集して居る。東西七八町南北三四町の面積は温泉の沈澱物で真白に輝き、其間を幾條ともなく瑠璃色をした暖かい流れが滾々として盡きざる地球内部の消息を齎らしつゝ、プアレンガ河へ注いで居る。其處にはワイロア、ワイキテ、ポフツ、テホロ、プリンス・オブ・ウエールス・フエザーなどの間歇泉が各其沈澱物によりて高められた噴泉塔を擁して相對峙して居る。ワイロアとワイキテとは其盛時に於ては三百尺の高さまでも熱湯を噴き出したものであるが、今では全く休止の状態に歸し、ポフツのみ獨り其活動を續け、一定の時間を隔てゝ間歇的に高さ百尺以上の湯柱を立てゝ居る。是等の噴泉の外、トルベドー、ポーリウデ、パレコフル、コロチオチ、テヒナウなどゝ稱へらるゝ温泉地又は熱泥池が散在し、いづれも沸々たる音をたてゝ熱泥を煮り上げてゐる。テヒナウの洞では、嘗て敗軍の酋長テワタフなる者が捕へられて、其遺骸を葬つたところであると云ひ傳へられて居る。

是等のいづれも皆日本にあらば何々地獄と名付けらるべきものであるが、このワカレワレワ大地獄に幾十倍せる火山力大活動の餘勢がタラウエラ火山を盟主とせる大地裂線に沿ふて、今も猶當年の大修劇を物語つて居るのである。此稀有の大爆發は千八百八十六年六月十一日午前一時頃大音響大地震に伴はれて、タラウエラ火山の北端に始まり、南々西の方向に海拔三千六百尺の山巓を僅ツ二つに裂き、黒烟濛々として天に沖すること僅に一萬五千尺の高さに達し、天斧の尖端は猶も南西に進んで大地を地球の中心までも断ち切らんずる勢ひ、其衝にあたれるロトマハナ湖は、数分前までは紺碧を湛えた昔ながらの満水を、擧げて奈落の底に委ねたと見る間もなく悉く水蒸氣と化し、嘗て紅の階なる美名を馳せた硅華の天工をも一瞬の塵埃と奪ひ去り、更に南西方オカロの湖畔までも地獄との通路を開き、漸く其爆發を收めたが、烈噴の猛威に九哩、深さ三百尺乃至九百尺、僅々瞬時間を出でずして穿ち去り、黒煙白霧相混濁して天地晦冥、雷電相極激して乾坤為めに覆るかと計り、眞に凄絶惨絶の極みであつた。

この未曾有の大活動は數日の後漸く衰へ、爾來鎮静に歸するに從ひて、ロトマハナは以前よりも廣き湖となり、紅の階のありし跡は、熱湯を湛へたる深淵に臨んで白煙濛々たる絶壁となり、地獄との通路は次第に塞がれて、エコー火口、フライイングパン、ブローホール、イ



ワイマング間歇泉

ソフエルノ火口などの小地獄を残すのみとなつたが、見渡す限り火山灰を以て蔽はれた荒寥たる有様は如何に其有史以來の大慘劇であつたかを物語るのである。併しそれも一時的平穩に過ぎなかつた。千九百年二月に至りて、俄然裂隙の中央部に抱ける一小火口より熱湯を噴出し、黒泥を奔騰せしむること數百尺、一大間歇泉を現出しワイマングと名づけられた。千九百三年には其威力頂點に達し、噴湯天に沖すること一千五百尺に及び、世界第一の大間歇泉と稱せらるゝに至つたが、其後一時平靜に歸し、千九百十五年其活動を再興し、現今は不時の噴湯を見るも到底昔日の面影を留めざる迄に衰微した。然しそれとても見掛けの無事に過ぎないかも知れぬ。あの眞ッ二つに劈かれたタラウエラが千八百八十六年六月十四日夜までは全く死火山として
き月光を浴びて居たではないか。

若し當年の大活劇の跡を精敍しやうとすれば、數百頁の筋書も猶足らぬであらう。故に今は一先づ此裂罅に別れを告げ、其終點なるオカロ湖より島國第一の大湖タウポに向はんか、君は其延長線上に於て更に數多の間歇泉噴汽孔など、火山力活動の今猶衰へざるを見出すであらう。啻に其等の小規模のもの許りではない。タウポ湖それ自身すら一大火口湖なりと云はれ、トンガリロ、ナウルホエ、ルアペフなどの活火山いづれも海拔六千尺乃至九千尺の絶巓を連ねて、覇を天國に稱へんとして居る。其西方には白扇倒に懸るが如きエグモント火山、一名タラナキ山と呼ばれ、八千二百六十尺の高距を擁して其崇高なる雄姿を南大平洋に蘸して居る。ヘンリー・ランドル氏は其麗容を激賞して、日本の富士山も及ばず、唯之れに匹敵すべきはフイリツピン群島のメーヨン火山あるのみと、お國自慢を發揮して居る。宛然たるニュージランド富士、本物と肩を並ぶれば低きこと四千尺、それでも甘んじてランドル氏の讃辭を受けるであらうか。

六　氷河と深峽(フイヨルド)

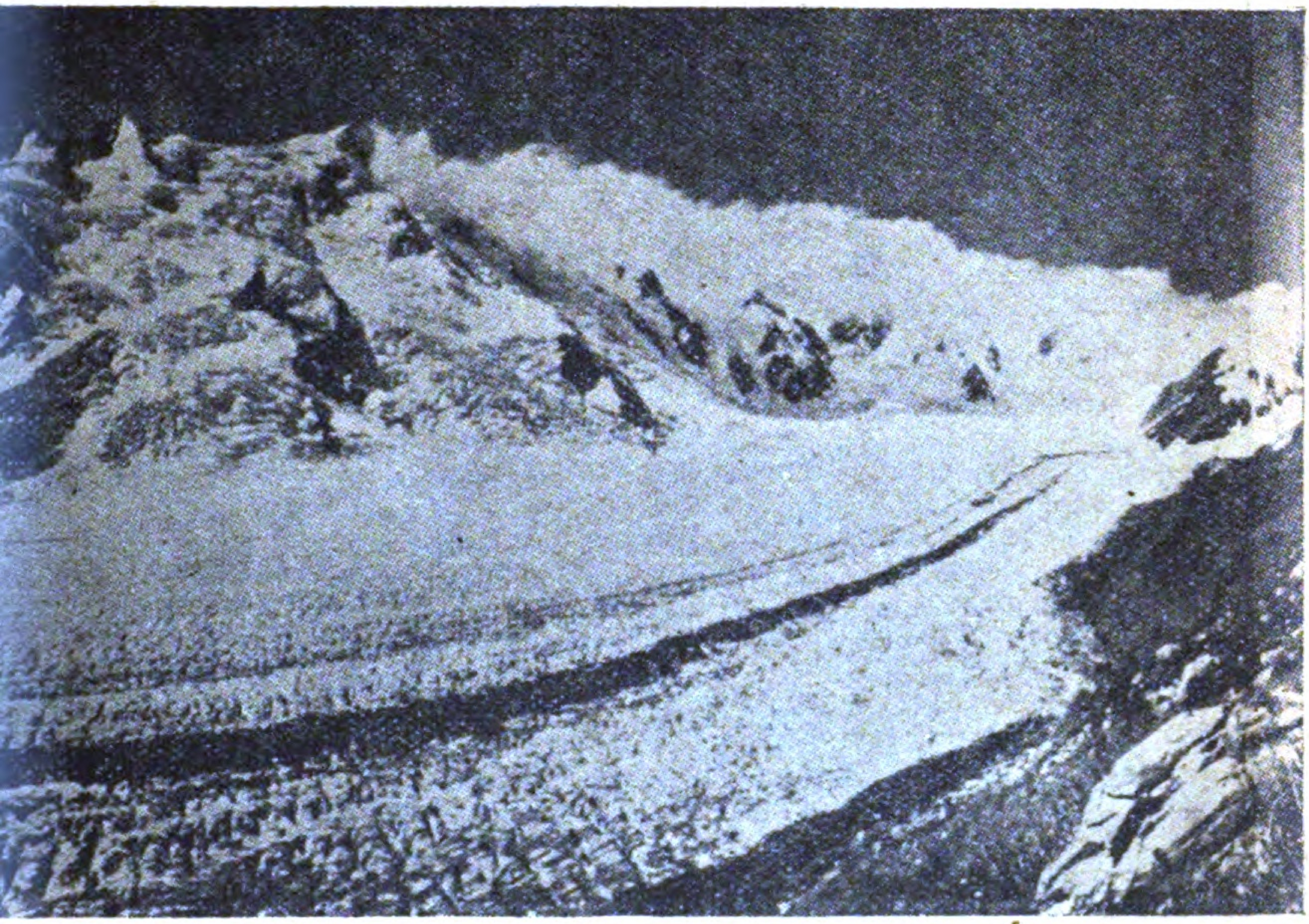
北島を火の島とすれば南島は氷の島と見るも可なり。北半球と反對に、北窓は日光を受けて陽氣に、南窓は寒風に襲はれて陰氣である。北面して火山の煙を望み、南面して水成岩より成れる連嶺の氷雪に對



エグモント火山

す。北緯と南緯、其度數は略ぼ同じくして然かも地理的現象の全く反する處に、記述の興味の更に加はるを覺けるのである。北島の地質構造の複雜なのに對して南島は比較的整然として居る。ニュージーランド・アルプス其西海岸に沿ふて東北より西南に連ること三百哩、本國第一の高山クック、一名アオランギと稱し海拔一萬二千三百四十九尺に達し、之れに亞ぐにタスマン、ダムピア、シルバアホルン等十二の高峯いづれも一萬尺を超え、萬古不滅の氷雪を戴いて居る。其西麓は大洋より送り來る水蒸氣常に白雲を搖曳せしめ、雨量時としては二百吋に上り、嘗て斧鉞を加へざる密林長く連り、東麓は牧場遠く開けて、數百萬頭の牛、幾千萬頭の羊が少數の人類に飼はれつゝ其日〳〵の世界を平和に過ごして居る。峯頭の雪は山側の氷河となり、融けて沃野を灌漑するもの、百哩内外に達するワイアウウア、ワイタキ、フルヌイなどの長流あり。絕海の孤島に遊びながら猶大陸なるやの感を抱かしめるのである。

氷河の最大なるはタスマン氷河で、長さ十八哩幅二哩、一萬四千エーカーの面積を占めて居る。其深さ二十尺乃至一千尺、其傾斜は一哩に平均三百尺の割合にて、流速處によりて異り、遲き處は一日僅に二吋四分を流下するのみ、迅き處にても十八吋を超えない。このタスマン氷河は本場のアルプス山中にも其匹儔を見ざるほど規模の大なるものである。之れに亞ぐ氷河はフーカー、ミューラー、マーチソンである。ミューラー氷河はブロドリック氏の計算によれば、一日に



タスマン氷河

吋乃至十二吋、二十六年間に一哩流下する割合となり、其長さは八哩であるから、其末端より融けて流るゝ水滴は二百年前峯頭に降下した雪片に外ならないのである。此國の氷河は瑞西のそれよりも低き處まで其形を保ち、フランツ・ジヨセフ氷河は海上僅に七百尺、フオックス氷河は六百七十尺の地點まで達し、其岸邊まで自轉車を乗りつゞけることが出來る位である。

ニユージーランド・アルプスは南するに從ひて其高さを減ずるが、西南岸に沿ふてノールウエーに見るが如き深峡が櫛の歯並に陸地へ穿入して特殊の地形を呈して居る。數ある中に規模は最大とは云へないが、ミルフオードと呼ばるゝ峡谷は出口より奥まで十哩、幅狹きところ四分の一哩に過ぎず、其兩岸は花崗岩若くは水成岩の絶壁峙て氷河の爲めに削磨されて鏡の如く直立すること五千尺内外、水深は更に千尺に達し、仰げば蒼空帶の如く山靈頭上に壓し來り、俯せば深淵底なく水神われを奈落に引入るゝかと訝り、嵩高森嚴の氣人に迫り、眞に天工の偉觀を極めたりと謂つべきである。之れを彩るに棕櫚の一種なるチトイ、羊齒類のママク、葉の長く尖つたキーキー樹など亞熱帶植物をも密生して翠微滴るが如く、點ずるにラタの花血よりも紅に、リボンウードの花雪よりも白きを以てするを見れば、何人も其咫尺の間に氷河の搔痕の生々しき巖壁あるを忘れ果てるであらう。

ミルフオード峡谷の奥


ミルフオード峽谷

中部は七百五十一尺下部は三百三十八尺合せて千九百〇四尺の斷崖に懸り、其高さに於ては世界第一と稱せらる。千八百八十年十月十日ドナルド・スザーランドと云へる老測量家によつて發見せられたので此名を得た。人形が泣く樣なウエカ鳥、キー〳〵聲のキー鳥、大鼓をたたいて居る樣なカカポ鳥などが鳴き止むと、スザーランド瀧の音が絶えず遠雷の樣に聞えて來る靜寂な一軒家で、其發見者は永遠の眠に就いた。

峽谷を海に出たところはアニタ灣であるが、峯頂錐の如きマイター山のつゞきに綠石の一種が露出し、マオリは之れをタンギワイと呼んで居る。[illegible]から來航した[illegible]の妻が一味の者共と謀りて彼れを振り捨てたので、其行衞を探しにタマは海峽から西岸に沿ふて南航し、ピオピオタヒ（ミルフオード峽谷のこと）に達した時、漸く彼等を見出したが、已に綠石に化して居たので、冷い妻の上に泣き伏した其涙が石に滲み込んだと云ふ。タンギワイは涙水の義で、其石の一片を取りて日光に透すと水滴の樣な斑點が見えるのは涙の結晶だと云ひ傳へられて居る。綠石の產地は此外に北方ウエストランドにもあるが、其處ではポウナム（翡翠玉）と呼ばれ、タマの一行及び其獨木舟が化石したものと信ぜられ、グレイマウス港に近き產地では、獨木舟の塗が化して綠石になつたと云ふ傳說がある。白皚々たる氷河の下流、未だ斧鉞の及ばざる太古の密林をくゞりて蒼茫たる大瀛に加はらんとする處、磨いて玉と光るべき綠石の露頭を發見した時の感情は、二百五十年前にウエストランドの豐富なる砂金層を發見した白人の狂喜と孰れぞ。

七　環境の影響

ニユージーランドの砂金が採取せらるゝ樣になつたのは千八百五十一年からのことで、今では產額から云へばオタゴ地方を最とし、ウエストランド、ネルソン地方之れに亞ぎ、又ワイヒ金山には有望なる鑛脈多く、總產金額は發見當時より今日迄已に九億圓以上の巨額に達した。石炭もウエストランド地方より優良なるものを產すること年々一

千萬圓を超えて居る。此外に當國特有の鑛産物にカウリゴムがある。之れは太古のカウリ樹の脂が土中に化石したもので、ワニス及びリノリアム製造原料に供せられ、今日迄に已に二億圓以上のものを産出した。

林産額は鑛産物と伯仲の間にありて年々三千萬圓内外に上るが、何と云つても國産の太宗は牧畜に在り、羊二千四百萬頭、乳酪用牛百三十萬頭及び其他の家畜二百五十萬頭を有し、年々八千萬圓の羊毛、七千三百萬圓の凍肉及び罐詰、四千萬圓のバタ・チース、二千萬圓の革を産し、水産、農産は自給自足、麻は海外に出で、年々輸出入總額五億圓に達し、一人宛四百圓を超過し、人口に比して貿易額の多きこと實に世界第一に位す。牧畜農業山林水産鑛物其他將來開發すべき範圍極めて廣く、加ふるに氣候温暖、生活の脅威を受くること少く、恐くは現在人口の十倍以上を包容し得て尚ほ餘裕綽々たるものがあらうと思ふ。

然し是等の富が僅々七八十年間に斯くまで開發されたことは全く英國人の物質的文化の應用と、異常なる冒險忍耐の努力の賜物で、先住民族マオリの秋毫も與らざるところである。彼等は數百年前ポリネシアから移住して以來何をして居たであらうか。火と水の島國、植物には亞熱帶性を現し、氷河は海拔僅に數百尺の地點迄も達して居るに拘はらず、氣候の温暖なることは日本も及ばぬほど恵まれた美しい都に

示さなかつたのは果して何の故であらう措に受けて居るに相違ない。彼等の大部分が北島に住んで居たからには、其火山的外界は彼等に火山國民に適有たる特性を與へずには措かなかつたであらう。彼等が移住して以來の歳月は、日本の建國に比すれば決して長いとは云へぬが、他の新興文明國の紀元に比すれば、此の進化をも不可能とするほど短くもあるまい。彼等が大和民族祖先の發祥地と餘り遠からぬ島國より起りて、南北の差こそあれ、殆んど日本と其緯度を同うし其他に類似の點の多い天産物にも富んだ新郷土に來りながら、其共通的素質は毫も磨かるゝことなく、文化の程度は日本と霄壤の差を生じつゝ、空しく英人の治下に屈服するに至つたのは誠に遺憾の至りである。

彼等は創造的腦力と分析的智能とに缺けて居る。彼等は模倣し得るが創造し得ない。直感はかなり鋭いが、事物を分析し之れを組織立てることが出來ない。故に彼等には未熟ながらも直感的文學はあるが、思索的傾向が少しも見られぬ。模倣することは出來てもそれを消化して自家のものとなす力をも具へて得たかどうかは疑問であるが、彼等には不幸にして模倣しやうにも模倣し得べき文化が第一手近かになかつた。亞洲は支那朝鮮の日本に於けるが如くニュージーランドと相對して居るが、其距離千二百浬以上に達し、航海術の幼稚な時代には彼

纔にたつたの僅々百五十年前のことで、ニュージーランドへ最初に押掛けて來た英人より以前に於て、マオリが文化の新要素に接觸することの出來なかつたのは當然である。ポリネシアから移住してより數百年に亘り、彼等は遂に何等の刺激も模倣すべきものをも得なかつた。彼等がそれを得た時は征服された時であつた。

日本は幸にして其祖先の來住が早かつた。其美なる環境、其島國的總態はニュージーランドに類似し、然かも夙に文化の花を開いた支那朝鮮とは一葦帶水の近距離に在り、其文化を模倣し消化して自家のものとなし、雜婚によりて不知不知の間に人種的改造をも良好に導くことを得、建國の大精神終始一貫して益々國威を發揚し、遂に世界大國の班に列するに至つた。然し吾等の祖先が萬一其原住地より南方に移動して、日本を半分にした樣なニュージーランドに永住して居たとすればどうであらう。彼等の子孫は其處に現在日本の有つて居る文化の半分でも創造し得たであらうか。若し又マオリの祖先がポリネシアから北航して日本島國に移住して居たものとすれば、彼等の後裔も亦吾等と同樣に光輝ある歷史を有ち得たであらうか。

印度のパラダイス

丸山晩霞

ヒマラヤを下山して、五天竺の風光を探うて、印度旅行の道程に上りしは、炎熱の絶頂に向ふ旱魃期の四月上旬であつた。印度は古來宗教國で、釋尊が降誕して佛教を流布した以來も、更に種々の宗教が生れた。印度は宗教のために興り、又宗教のために亡びた國である。印度人は今も尚信仰と瞑想と空想とに耽つてゐるのである。幾度か興亡ありし、曩昔の燦然たる文化の遺跡を辿り、更に廢墟殘趾の間に隆起したる新しき文化を眺め、古來創定されたる怪奇な社會制度に甘ずる彼等、其他人種の多きと、風俗習慣の奇異なるを觀察すると、先づ第一に不可思議といふ感に打たるゝ。印度の見聞は皆期待以上に驚かさるゝものが多い。そして又不可思議不可解のものが多い。我等は先づ佛陀の遺跡を探る可く、佛陀伽耶の靈塔及び菩提樹下の金剛座に詣し、尼蓮禪河とその河畔の苦行林、更に昔の婆羅奈斯國今のサルナートに行き、釋尊初轉法輪地鹿野苑の靈塔と發掘されし古寺院を辿る。印度には美觀を極めたる大伽藍多く、[illegible]

る丶ラヂプチナ獨立國の首府チャイプール市の觀察を書て見よう。

チャイプール市に着いたのは午後の八時頃であつた。停車場より自動車にてホテルに着いた。ホテルは、市の入口の巨大なる樹木の間にあつて、頗る閑雅のところである。宿は平屋造りで、客室の前は廻廊になつてゐる。案内された室は廣い庭に面して、涼しい風が吹き込んで來る氣持のよい室である。暑い頃の印度旅行は、早く寝て早く起床して、朝早くから見物に出かけ、午前十一時頃になると非常に暑くなるから宿にかへり、午後は四時頃から夕涼みに乘じて出かけるのである。吾等は寝るとき室の鎖を求めると、宿のマネージャーが、チャイプールの町々は、各家に錠前もなければ鎖もないから、そのまゝにて安眠してくれとの事である。

旅行といふものは、どんなところへ行つても心から全く安心するといふ事は出來ないものである。だが錠前も鎖も不必要の旅館に、自分は[illegible]

の思ひが達して今夜この平和の館に安眠して圓の夢を結ぶことが出來るので、自分としてこれ程うれしい事はなかつた。暑いのであるから戸を開放して寢てゐると、戸外の森ではいろいろの鳥が夜鳴きをしてゐる。其聲はアンミーン〳〵、又は太平々々等と聞える。電燈の光を慕うて飛び込む虫の音も平穩の調に聞える。自分はいつか安き眠りに就いたのである。カルカッタから連れて來たジヨンといふボーイは頗る正直な男で忠實に萬事の世話をしてくれる。翌朝四時半頃ジヨンに起こされて、圓の夢は覺めた。朝食前爽潤なる庭内を逍遙してゐると、遠くの方から園丁らしい男が、手に籠を持ち、その中より何か粉様のものを出してそこここにこぼしてゐる。近づいて見ると、蟻の巣に[illegible]これは蟻除けの粉なりと即斷して、[illegible]から出て來て、[illegible]するのかと思[illegible]

りしてゐる。忽ちけたゝましい叫ぶやうな聲が庭の空から聞こえる。その方を見ると孔雀の群が集つてゐる。これは飼育してゐるもので無く、野生のものである。人が近づいても人を恐れないのである。朝食が出來たと呼びに來た。食堂は館の中央にあつて天井が無い、圓狀に種々の花卉の盆栽が飾られて、その中に食卓が置かれてある。食事をして居ると野鳥は盆栽の中に來て鳴きつゝ、栗鼠と共に小鳥も食卓の上にやつて來る、宛然たるパラダイスである。

ラジプチナ獨立國の首府なるヂヤイプール市には藩侯の宮殿があり。この國は落てゐるものを拾はぬといふ程よく治まつて、その上宗教の方よりも殺生禁斷で、蚊一疋殺すことも出來ない掟であると。今日は藩侯の宮殿を見物すべく、自動車でホテルから大通りに出づると、兩側には樹木が鬱蒼と繁茂して[illegible]こゝにも一[illegible]



筆者等が象に乗つてチヤイプールアンバー古宮殿見物の光景

刻を風が吹きぬいて如何にも涼しさうである。後園

あげた大理石の泉池になつて、各所に彫刻を施した噴水器があつて、それから清い水が高く噴上られてゐる。泉池の間は廻廊的になつてゐる。泉池を廻らして花卉果樹園になつて、色彩の麗はしい小鳥が囀つてゐる。美はしき花咲ける園内を導かれて大樹林の間に行くと、そこには鮮緑滴るやうな盆栽が展列されて、極樂鳥の飼育された大きな籠も置かれてあつた。小高い丘の上から水が流下してゐた。暑い國であるから、總てが涼といふものを主として設計されてゐる。宮殿に接して水浴場がある。多くの宮女が大理石段の上から、こゝに飛び込むところを見物するのだといふ玉座もあつた。

後苑の盡るところに石の塀があつて、そこの門を這入ると可なり大きな湖水がある。旱魃期であるから水は大概枯れて一部に少し溜つてゐる。水の枯れたところは草原になつて、こゝばかりは全部緑の色を見ることが出來た。そこには鰐を飼育してゐるので、吾等參觀者のためにその生活狀態を見せようとて、園丁が奇聲を發して呼ぶと、各所に散在してゐたものは、聲に應じて水上を泳ぎながら園丁のゐるところに集まつて來る。集まつた鰐は大きなものは三間もあり、小さなものでも五六尺はある。湖畔に這ひ上つて園丁の側に寄つて來る。園丁は頭を撫でつゝ一塊の肉を大きな開いた口の中に投入すると、ぱくり

軍を迎ふる青年といふ[illegible]、[illegible]
する一年一回といふ民の大祭の行列に参列するためであると。當代の
藩侯は未だ若く、目下アジミヤの大學に學んでゐるとのことである。

宮殿を出で、カーペット織工場の見物に行く。途中汚穢の町を通る。忽ち何物の叫びかグワーンといふ一種異様の聲が聞えた。然して行く手に見えた森も家も恰度霞のかゝつたやうに淡くなつた。この不思議の出來事を調べると、吾等の乘つてゐる自動車に驚いて、兩側の數ない家に群れてゐる蠅が一時に飛び立つたので、異樣の音はその羽音で、行く手の霞んだのは、蠅の群れて飛び立つたためである。印度ならでは見られない奇觀である。こんなに蠅が居てもその蠅一疋も殺すことの出來ない、この國は傳染病等は非常に多いやうに思はるゝが、聞て見ると比較的少いのである。それは旱魃期等に、あらゆる病菌は皆死滅するといふ天與の賜であるからであらう。カーペット工場を見物する。カーペットを織るのは、十二三才位の小供が八九人並んで、各々いろ／＼に染つた糸を持つてゐる。うしろ側に織出す模様の圖案を手に持つた指揮者がゐて、一二三四と約百餘りの數があつて、一人が十餘りを受持つてゐて、指揮者は圖案を見ながら、一から四迄青と呼ぶと、それを受持つものは呼ばれた色の糸を結びつけて、小さな鎌のやうなものを持て糸を結び目より五分程のところで切る。それから順々に五から十迄は赤といふやうに呼んで行けば、受け持つのものは前の如くやつて、模様が漸々織り出さるゝのである。一枚何千[illegible]ものである。

歸途公園に立寄る。旱魃期であるから、[illegible]は[illegible]落ちて、吾國の冬の光景を呈してゐる。されど花の咲てゐる樹木が多く、黄紅白紫、見るもの皆珍らしき奇花である。實際この都は、アーサー王が晩年行つたといふ、アバロンの國にも例へつ可きか。花は散る事を忘れて四季咲き亂れ、花香常に滿ち、人々に爭論も無く、平和の雰圍氣はこの市にあふれてゐる。眞に現世の極樂土である。

正午に近い頃宿に歸へつた。宿は市外で、樹木の中にあるから涼しい、宿の庭の一部に綠の芝生がある。それは井水を日々灌漑するからである。ジョンがやつて來て、明日はこの市の古宮殿、こゝより五哩のアンバーの廢墟を見物するため、その許可を得るとて四時頃出かけた。ジョンの話によると、アンバーに行く途中は、山林原野の荒地で、山猫、豹、虎、等の猛獸に出會ふ事があるといふ。されどこの邊の猛獸は決して人に害を與へないといふ事である。又人も猛獸に對しても人に對するやうにしてゐるとの事である。

自分は今日迄多くの旅をやつた。小笠原島に先年旅行したとき、このジャイプールと等しく、各家に錠前も鍵もなかつた。人々は何れも善良で、父島の大村に牢舍が出來てゐた、そこには一人の入牢者もなく、所々破れて庭には雜草が繁茂して、荒れに荒れて居つた。この島は自分にとつて今日迄天國と思うてゐた。そして此の島に逗留してゐる

た安慰な平和な感じは今に忘れられないのである。こんどは印度に於て、小笠原以上の極樂土を發見した。第二日目の夜も心安く快眠したのである。

窓に來て鳴く小鳥の聲に眼が覺めて、冷たい水で顔を洗つて庭内に出ると、ニームの花香に混じて百合花の甘い香が吹かれて來る。合歡木の葉の緑と、あの軟かい葉と紺絲の花は、朝風にゆらくと動いて、東雲の空色と相俟つて特に涼味を覺えた。眞の涼味といふのは、印度のやうな暑いところに來て初めて味ふことが出來るのである。暑いときではあるが朝は涼しい。東の空に明星の光つてゐる頃が、千金の涼味を覺ゆるときである。

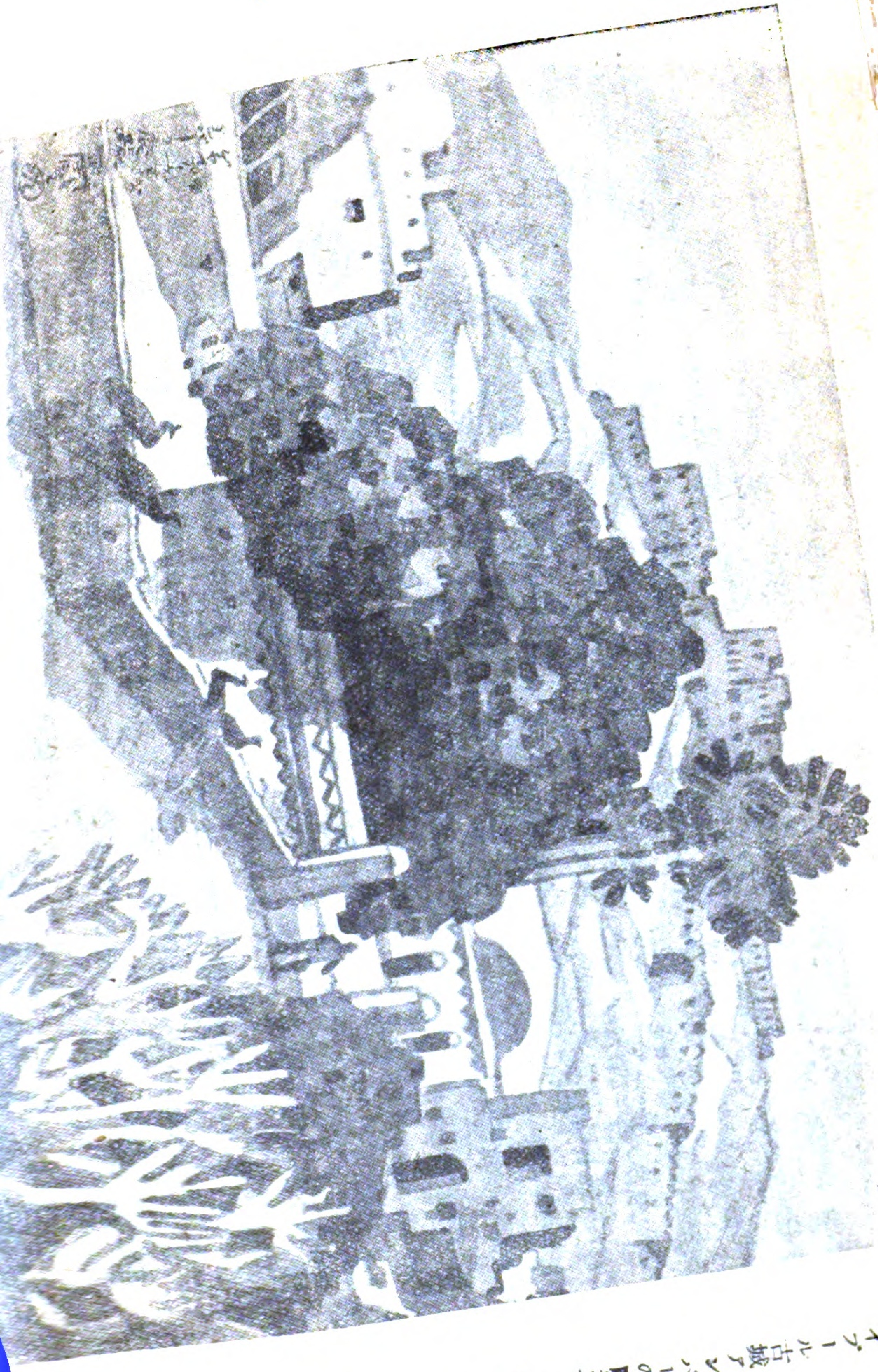
午前四時出發してアンバーの古宮殿に向ふ。アンバーに着けば、そこには象が待つてゐて、今日は象に乘つて廢城を見物するのである。チヤイプールの町を出ると、古い町があつて、そこの城壁の門をぬける。大きな仙人掌が茂つてゐる。その邊より荒地になつて、木の無い山が行く手にそゝり立つてゐる。ジヨンはこの邊に猛獸の居るところだといふが猛獸の姿を見ない。暫く進むと何人の棲み荒らしたのか家の殘趾が荊棘の中に昔の榮盛を語つてゐる。そこに黒い動物が群れてゐた。黒豹かと近づいて見ると、黒面の大猿の一群であつた。杜の中から青金色に輝く鳥が飛び立つた。漸く行くと山路になつて四十五度位の登りである。アンバーに近づいたのである。

い丘になつてゐる。古宮殿はその丘の上に

ぐらして、山から山に連れる二重の城壁がある。城門を這入るとアンバーの谷に下るのである。湖畔丘陵には古の市街寺院等の廢墟があつて、昔の壯麗を偲ばする。街路には仙人掌が茂り、湖水の水は皆枯れて、そこには美しい草花が咲いてゐる。殘趾の間にはバイヤン樹や菩提樹の巨木があちらこちらに立つてゐる。宮殿の入口に一廓がある。中に一軒の家があつて、その前に大きなバイヤン樹が立つてゐる、そこに吾等を今日乘せて廢城や宮殿を見物する象が待つてゐた。この象はチヤイプールの侯爵の宮殿より遣はしたものである。こゝのバイヤン樹の下に暫く待つてゐると、吾等に參觀を許可したといふ使者が、昔の武者姿で左腕に盾を附け右手に許可狀を持ち悍馬に鞭打ちてやつて來た。そこの事務所に居る役人は使者を迎へて許可證を受取り役人は領承したといふ返事を認めて使者に渡す。使者はそれを持つて歸へる。恰も昔の繪を見るやうな光景である、役人は吾等の案内役となつて、吾等より先に古宮殿に徒步で上つて行く。吾等はこれから象に乘るのである。象は馴れたもので、いよく乘るときになると象使ひの老人が命令すると、大きな脚を折つて座する。それでも高くて乘れないのであるから梯子をかけて象背の櫓に登る。四方に張つた綱につかまると、象使が又號令を下すと、象はむつくと立上る。それから

[illegible]うで、がくり〳〵とゆられて行くのである。第一の城門を過ぐる、途中樹木も草も無い赤土路である。第二の門も過ぎて漸く頂上の庭に達した。こゝで一先づ象背より下りて宮殿を見物するのである。城廓は赤色の石で出來てゐるが、古城は全部マーブルで拵へた壯大な美なるもので、他の宮殿と異るところは、この宮殿は地下室が澤山にあつて、それが皆美を極めてゐる。宮殿に這入るとそこは神殿になつてゐて、羊の皮を剝いだ贄が供へてあつた。自分はこれを見て驚いた。蚊一疋も殺すことの出來ない掟のある國で、羊を殺し、然もそれを神前に供へて置くとは何といふ矛盾である。案内者にこれをたゞすと、神に供へるので差支へが無い。そして毎日一疋の羊を贄として供へるのであるといふ。供へたあとはどうすると聞くとお供物として我々が頂戴するのであるというた。宗教上のことは常識で判斷の出來ない事が頗る多いのである。羊といふ動物は餘程神様が好きと見える。西洋の古い神様も羊を贄として供へ、又羊の肉を燒て香として讚美するといふ。神様のかふいふ點は東西一致してゐるやうである。古城とは言へど城内はまだ新しく、燦然として驚かすものが多い。無數の間があつて、皆印度的細かい彫刻が施され、マーブルに金銀珠玉を嵌めたモザイク等もあつた。中庭はよく灌漑されてゐるから、緑は滴るばかりに種々の花も咲て小鳥も囀づつてゐた。この宮殿も涼といふ事に重きを置て建設されたものである。宮殿を出でゝ又象に乘る、こんどは下[illegible]つて、人の住んでゐる七八戸の町に行て、その町で[illegible]を求め、元のところへ上つて象を下り、吾等の手からその[illegible]の端を象に與へたのである。役目をすました象は吾等より早くチヤイプールの町をさして、大きな鼻をふり〳〵悠々と歸へつて行く。

自分は古宮殿と廢墟の光景が如何にもよい畫題であるから、活き殘つたやうなさびしい町へ出で、その附近の日蔭で寫生してゐると、驚いたことにはどこに居たか寫生を始めると、七八疋の黑面猿がやつて來て、寫生をしてゐる僕を取圍んで寫生してゐるところを見物してゐる。別段害はしないが變つたお客さんの見物には氣味が惡かつた。そのうちに貧民町の茶目共に見つかつて、五六人やつて來たら、猿君は他に退いた。ジヨンは暑くなるから早く歸れとせき立てる。印度人の方が却つて暑がる。自分は尚二三枚寫生して歸途に就いた。何とかして野獸の遊んでゐる自然狀態を見たいと思うたが、終に見ることが出來なかつたのは遺憾であつた。ジヨンのいふには雨期の頃は必ず一疋や二疋は現はるゝというた。途中四方八方の部落から人が出て來て、今日の祭を見物するために、皆チヤイプールの町をさして行くのである。何れも美なる新しい物を着飾つて、耳にも、鼻にも、首にも、足にも金輪をはめて、妙齢の婦人等の着飾てゐるのは、輝ける觀音の姿のやうである。チヤイプールの町に着くと、朝の靜さに反して人をもつて埋めてゐた。群衆を縫うて車をすゝめ大通りに出ると、今行列



ヂヤイプール古城アンバーの廢墟、 鵬園生寫

[illegible]合するところである。[illegible]にはタランファン[illegible]の[illegible]、ラッパ、鉦、太鼓といふ鳴りもので囃したてゝゐる。その次に續いて槍を持てる古風の兵士の一隊、その次は騎馬隊、これも様に槍を持つて、赤青の色彩鮮麗の服を着けてゐる。それから化粧をして美装をこらした象は幾十頭、これは五六丁もつゞく。象の上には美装した貴人と、金襴の布にて掩はれたる輿には婦人が乗つてゐるとの事である。印度人の上流の階級になると、婦人は他人に會はないのをもつて美徳としてゐる。宮中等ではスクリンの小さな穴から他人を見る位で、他の人には絶對に見られないやうにしてゐる。そして外出のときは輿に幕を張り、その幕に小さな穴をあけて、そこより外部を見る位である。

象の行列はこれ又印度にあらざれば見られない奇觀である。そのあとは又先とは違つて音樂を奏する一隊、それから歩兵といふ順序であつた。この當時米國の觀光團が來てゐて、彼等は十臺程の自動車を連ねて行列に加はつてゐた。吾等の自動車もそれに割込んで行列に加はつた。兩側の軒下軒上二階屋根迄參觀人をもつて埋め、殆んど立錐の地も無い程である。老若男女が國歌のやうなものを歌ふと、その調子につれて若い男の一群二群は、竹で造つた樂器を兩手に持ち、がちやがちやと音をさせつゝ、踊り狂ふのである。かくの如くして大通りを練り歩いて、チヤイプールの町は煮えくり上るやうな騒ぎである。斯ういふ騒ぎになると喧嘩口論等が各所に起るのであるが、この町は頗[illegible]ヤイプールに、[illegible]代のパラダイスといふ[illegible]

チヤイプールの町は旅人の慰安所として、見物するところは[illegible]い[illegible]、悠々と安心することが出來るといふので、見物もしないで幾日も宿屋に逗留するとの事である。吾等も好奇見物は終つたが居心地のよい慰安所といふので五日間程逗留を重ねたのである。その間山にも遊び杜の中も辿つたが、雨期で無いから蛇にも會はないし、又猛獸にも遂に會はなかつた。仙人掌の下には毒蛇が棲んでゐるから注意せよと言はれたから、仙人掌の繁茂してゐるところには行かぬ事にしてゐた。酒を醸すといふ椰子の樹がある。この樹の葉の出てゐるところへ傷をつけると、そこから水が出て來る。その水は數日を經れば酒と變ずるとの事である、それ故この椰子は傷だらけになつてゐる。殺生禁斷といふ慈愛心を草木の上にも及ぼして、この椰子を保護したらといふ感が起つた。

パラダイスを去ることになつた。午後十時頃停車場に行くと、耳を聾するやうな鳥の聲が聞える。停車場の場内に無數の鳥が群れて、わや〳〵と鳴いてゐる。恰度吾國の椋鳥に似てゐる。これも珍らしい[illegible]觀であつた。

終りに印度旅行者のために一言述べて置く事がある。それは印度に於ける氣候である。三四五といふこの三ケ月は、印度に於ける最も炎熱の烈しい季節である。晝間の汽車内に於て、正午から午後

時二時頃は百二十度位に爲る。何故に三月四月五月の三ヶ月は暑いかといふと、印度は半島の大陸で、北方はヒマラヤといふ大連峯が天然の大障壁を爲して、恰も屛風を立て廻はしたやうになつてゐる關係上、雨期と旱魃期と二たつに分れてゐる。六月頃から雨期が始まつて九月頃迄毎日の如くに雨が降つたり晴れたりしてゐる。その雨の降る模様というたら、降るといふより大きな瀧のやうに水が落下するといふ程で到るところの河川湖沼が汎濫する。これが十月頃になると雨期が上つて、それから晴天がつゞく。その頃から一月二月頃迄は寒くも無し暑くも無しといふ好時期である。印度旅行はこの季がよいのである。要するに北風の吹く頃から印度は晴るゝのである。雨はヒマラヤといふ大山脈のために遮られて、降らぬのである。南風に爲ると、大障壁なるヒマラヤのために遮られて雨となつて印度は雨期に爲るのである。十月頃から雨が上つて、それから天氣がつゞくのであるから、印度の農業はそれからである。米も麥も豆も綿花もその他の作物は皆その頃から繁茂して十二月一月頃が收穫時である。この頃迄は雨期に潤うた土はまだ乾ききらぬのであるが、二月の末頃になると最早外部はすつかり乾いて、濶葉樹は葉に水分を上げなくなるから、吾國の秋の如く紅葉して、三月の初め頃は落葉するのである。土地に水分が無くなつてくわつくわつと照りつけるのであるから、暑くなる譯である。四月から五月初旬は最も暑い頂上で、小さな河や湖沼は皆水が枯れて、見渡す限りは荒凉たる灰色の原野で、緑の草等は藥にしたくも無い。路傍の並木や町の木等は一日に幾回といふ程水を注ぎて僅かに生を保たするのである。疏菜を作るに井の水を斷えず灌漑して作るのである。旱魃期には最も恐る可き毒蛇も棲む事が出來ない。印度では、旱魃に枯れた湖沼に魚を堀りに行く。土を深く堀ると、その中から魚が出て來る。雨期が過ぎて、水が漸く減水する頃、魚は泥中にむぐり、漸々水が減ずると更に深くむぐり込むので、表面はかち〱に堅くなつた土を堀て行くと魚が出る蛙が出る、時には蛇も出るさうである。

アブーといふ四千尺程の山に登つたとき、その山は皆落葉樹で、四月下旬に荒凉たる吾冬山の光景を呈し、谷には水は一滴も無い、中腹邊に行くとジージーと裸樹に蟬が鳴てゐた。旱魃期は暑いが、この季には傳染病その他の病氣が少いから、この期に旅行をするのもよいと思ふ。暑いといふのも一度は味ふのも趣がある。旱魃期の旅行には汗は出るが直ぐ乾くから、吾國のやうに、下着が汗で濡れるといふやうの事は無い。鼻の穴が乾く眼が乾くといふやうのこともある。(了)

大アマゾン

大石小作

廣袤二百七拾萬方哩を有する大アマゾン流域即ちアマゾニアは、古來蠻烟瘴雨、猛獸毒蛇横行し、到底文明人の生活する處でないと考へられて居つたのである。處が最近歐米人に依つてなされた調査探檢の結果、漸次其の眞相が明かとなり、其氣候風土も曾て想像せられた程の事もなく、其大部分は文明人の生活に適するのみならず、萬古斧鉞を加へられざる大原始林、耕地栽培地として可ならざるなき沃野千里、林產に農產に、寳に無限の富を藏する事が分つたのである。近來此の富源に着目せる歐米人は、連りに其開拓に志し、之の現世界に殘されたる唯一の大富源も將に其開拓の緒につかんとしつゝあるのである。彼の一九二四年、米國のハミルトンライスが多數の各專門家と學者と飛行機とを以てリオブランコ上流になしたる大々的探檢の如き、又駐伯米國商務官シュルツ博士がアマゾン内奥地にラバープランテーションのエキスパートとしてなしたる探査の如き(此の地帶ゴム栽培に依り世界全產の約七割を使用する米は英の獨占たる南洋ゴムより獨立せんとする意圖あり)又最近に於ては世界の自動車王フォードがゴム栽培の目的にて同地帶に土地收得を了したる報の如き、今や此の無盡の眠れる富源は世界凝視の焦點となりつゝあるのである。

然かも此地帶のアマゾン及パラー兩州政府の當局者は特に我同胞に對して、其投資と植民とを熱望して居るにも拘らず、我同胞はこの無限の富を藏するアマゾニアに關して甚だ識る處少き事は、最も遺憾とする處であつて、人口食糧問題が我國の重大なる社會問題、國家問題として囂々たる今日誠にアマゾニアは重大の意義を有するものと思ふ。

筆者昨大正十五年同地方を調査視察し、其見聞せる處を抄錄し、本誌を通して普く江湖に之を紹介するは、筆者としての義務であり且つ重要な意義のある事と考へるのである。

話は少し横道へ入るかは知らぬが、從來我國の海外移植民事業が、兎角失敗勝ちであつたと云ふ原因について考察して見たいと思ふ。筆者は其最大原因として次の諸項を擧げるものである。

A) 移植住地其ものが、日本人の獨占的ならざりし事……即ち我國の海外移植民が常に、歐米人の後塵を拜し、糟粕をなめたる位置は、丁度

工業界が、永らく歐米の模倣時代にありし如く、そこに何等の獨創的工夫なく、從つて絕對的の基礎なきを以て、一朝有事に際しては何の苦もなく、其勢力を覆へさるゝ狀態だつたのである。即ち常に歐米人が店を出した處へあとから、割込みをやつて居つたので、從つて絕對的の優先的基礎を缺いて居つたのであつた事。

(B)勢、資、技術、三拍子の中資本技術の二拍子を缺いて居つた事、我國に於ては、從來海外移住民と云へば、比較的智的方面にうとき、純農者のみを移住せしめ、之れに從ふべき資本及び技術の進出を缺きたる結果、農產物の加工等に依り、當然收得し得らるべき收益の大部分を、外人に勞せずして、せしめられたる事。

(C)移住民の質と其訓練に留意せざりし事、

筆者前後四ケ年のブラヂル滯在中、サントス港或はサンパウロ市等に於て、邦人新移住者婦人が上陸早く、其靴を手に提げ裸足のまゝ市中を逍遙し、又は路傍に踞り、胸もあらはに、其子供に授乳せる態を見て、赤面させられた事等が度々ある。かと思へば、社會局の厄介になつて旅費の補助を受けて來た事は棚にあげて、金ブチ目鏡に煙突式ズボンをはき、外國語のＡＢＣさへわきまへぬ者が、「我は日本男子なり、世界の一等國民であり、三等國のブラヂル夫れ何ぞや」と云ふた樣な嚴にもつかぬカラ威張りの青年をも見た。サンパウロ州内邦人移住者の狀態を視察し、其成績と本人の人格とを比較考察する時、優良

最も痛切に感じたのである。

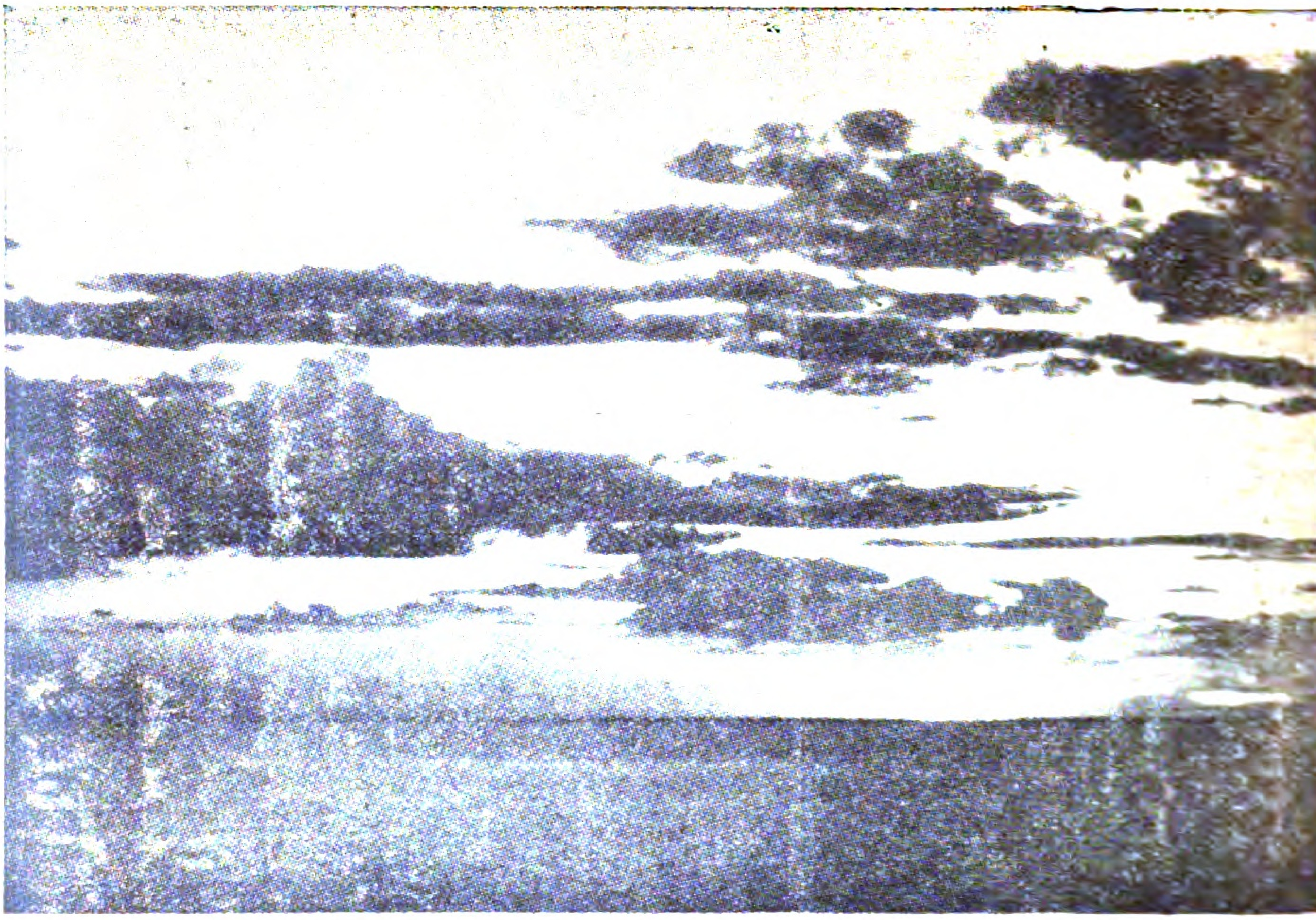
右の緒言を置いた所以は、アマゾン地帶はまだ何れの國の者も、開拓に手をつけて居ないので、之からのやり方一つで、どの樣にも根本的に作り上げて行く事が出來ると云ふ事を讀者諸氏に豫め、念頭に入れて置いて戴き度いからである。

アマゾン河

筆者はアマゾン河に關しては、中學時代に外國地理で、只南米の大きな河であると云ふ位の程度の極めて貧弱な考へしか持つて居なかつたのであるが、實際行つて見て今更に其大きいのに驚いたのである。

此の河の源はペルー國のアンデス山脈に屬するビルカノータ山に發し北東に向つて流れウカアレ河となり、更に向ひソリモンエス河となり左岸の一大支流リオネグロを合せ始めてアマゾン本流となつて大西洋に注ぐのである。其全長は約三千六百哩と稱せられて居る。河口の最も廣い處は約二百三十哩、即ち其河巾は東京名古屋間の距離がある。アマゾン本流は濁流であつて、流速は毎時約二哩、其水量は一秒間九萬立方米突と稱せられて居る。大西洋に注がれた此の濁水は海上百哩餘を淡水に、二百哩の間を黃色に變じて居るのである。一九〇九年、一千百餘噸を有する英國巡洋艦ベロラス號は、此の大アマゾン河を遡航

して遂に……



大アマゾンの落日

リバープール、北米の紐育から定期航路があつて六七千噸級の汽船が樂々と航行して居るのである。マナオス港に於ける水深は平水時にあつて四十米突を有するのである。之等の事實から推して如何に此河が大きいかと云ふ事は略想像つく事と信ずるが、實際行つて見ると、今自分が航行しつゝある處は、本流であるか又支流であるか、向ふに見える森は本當の岸であるか島であるか全く見當がつかない、行けども〳〵黄色の水と綠の森と云ふ狀態であるので、寧ろ其變化の乏しいのでアキが來る程である。然し時々水面に跳るボート（日本のイルカと稱する魚）、或は鰐、又森から森へ群れ飛ぶ澤山のオーム類、さては時々見える川岸の椰子の葉葺きの土人の家等に詩的情緒をそゝるものがある。之のアマゾン河は支流としても隨分重要なものを澤山もつて居る。先づ本流の右岸河口に近い方から擧げると、シングー（長さ、一、三〇五哩）タパヂョース（一、一九九哩）マデイラ（三、二四〇哩）プルス（二、二六八哩）チユルアー（一、七七〇哩）チヤワリー（八八二哩）等、左岸の方ではイサー（一、〇二二哩）リオネグロ（一、〇五六哩）トロンペータス（五四一哩）等は最も著名なもののみである。その中、リオマデイラの如きは其水量ミスシッピーに匹敵し、舟行距離は大形汽船の通ずる部分六百五十八哩、小形汽船の通ずる部分千〇五十六哩と云はれて居る。尚其他の支流も皆夫々非常に長い可航距離を有するのである。

河の汎濫　降雨量の處で申述べる樣に、此の地方では一ヶ年を雨

及乾燥期の二つに分つ事が出來るが其時期は處に依つて多少異るのであるが此の雨期に於ては、アマゾン河本支流は異常な增水を來たすのである。からして此の地帶を調査する樣な場合には先づ第一番に此の增水時に於ける狀態を基礎として出發すべきである。乾燥期即ち減水期に於ては立派な森林地帶であつても增水期になると、其土地の全部が數米突の水中に沒してしまふと云ふ樣な地域が可なりあるから此の點は特に注意を要すると思ふ。地方地方に依つて降雨期を異にして居るから、其各支流の增減水の時期及程度も異るのである。今其一班を知る爲めに本支流の主なるものにつき其增減水の時期及其水位差を示して見よう。

アマゾン本支流增減水の時期及水位差、

河名	增水期	減水期	增減水位差
本流（マラニオン、ソリモンエス、アマゾーナス）	六、七月及十、十二月	十月及二月	イキストスにて三〇呎—四〇呎 ブラヂル領域にて四〇呎—六〇呎
タパチヨース	六月末	十月	上流二〇呎—二五呎　河口同右
マデイラ河	四、五月	十月	上流三〇呎—四〇呎　〃
チュルアー	二月	九月	上流三〇呎—三五呎　〃
ネグロ	六月	一月末	上流三〇呎—四五呎　〃
プルス	四月	十月	上流三〇呎—四〇呎　〃
トカンチンス	四、五月	九、十月	パイヨン迄潮流を感ず

備考、右表はサウス、アメリカン、ハンドブックに依るものとす。

アマゾニア

アマゾニア とは、伯國パラー州及アマゾン州の兩州がまだ分離しない以前に於て、總稱せられたアマゾン河流域地帶一般の名稱である。其總面積は兩州を合して、日本全國の四倍半（パラー州が日本全國の二倍、アマゾン州が其の二倍半）に相當するのである。大體に於て赤道附近南北兩半球に亘り、其全部が大アマゾン河の流域區域に屬して、地形は大部分鬱蒼たる原始林を以て覆はれた、平坦なる一大平地である。

人種と人口 一九二〇年の調査に依るとアマゾン州の在人口は四十五萬人、其内一萬五千人のインデアンがあると云はれて居る。そしてアマゾン州住民の大多數は伯國セアラー地方から入り込んだもので、外國人系統としてはポルトガル系、シリア系が多くスペイン、イタリヤ系が之に次ぐのである。首都マナオス市は別として、州内各地方に於ては純粹の白人を見る事は極めて稀であつて、皆白人、黒人、印甸人の種々の組み合せに依つて生じた混血種であつて、其外貌日本人に酷似せるものが甚だ多いのである。上記の總人口を一方哩當りの密度に換算すると僅かに〇、六五人となつて、現在日本内地の一平方哩密度約四〇〇人に比すれば、約六百分の一程の稀薄な狀態にあるのである。

つたかといふ事は、吾人の等しく知らんと欲する所であつて、筆者が同地方に旅行した根本の目的もこゝにあつたのである、其理由は多々あらうが予は次の數項を擧げる事が出來ると思ふ。即ち、

(A)歐米人が南北緯二十度以内の低緯度圏内の生活に適せざる事。

(B)歐米人は各々、自國民が既に根本的の勢力を扶植せる地方、例へばサンタ、カタリーナ、リオグランデ・ド・スル方面に於ける獨逸、サンパウロ州に於ける伊太利及ポルトガル、アルゼンチンに於けるスペイン等の如く、新移住者に取りて、より便宜なる地區を有する事。

(C)日本人の入植を見ざりしは、之れまで同地帶を詳細に調査せる者なく從つて今日迄其實際を日本に紹介せる者なかりし事。

等が其の重なる理由であらう。

氣候風土　先づ此の地帶の中心と見らるべきアマゾン州首府、マナオスに於ける氣候風土に就て述べて見よう。此の地方では、緯度の低い關係上、夏と冬との差は殆んどないのであるが、一ヶ年を雨期と乾燥期の二ツに分ける事が出來る。即ち七月より九月までは乾燥期であつて此の間は比較的溫度上昇し、十月より六月までは雨期であつて、此の期間に於ては降雨多く溫度は稍々低下する。故に假りに夏と冬とに分けるならば前記の乾燥期が夏、雨期が冬と云ふ事になるのである。そして夏と冬との平均溫度の差は僅かに攝氏一、六度（華氏二、六）に過ぎない。之れ同地方に於て蜜柑にしてもバナヽ、パインアップル、コーヒー等が年中次から次へと結實する譯である。一九一四年から一九二四年に至る十一ヶ年間の平均溫度はC、二七、一[illegible]八一、度と云ふ事になつて居る。南緯僅かに三度八分二十七秒と云ふ殆んど太陽直下に位するマナオス市の溫度としては意外に低いのである。殊に夕方から夜分にかけ翌朝までは非常に涼しい。元來地理學的の赤道と、國際最高等溫線とが常に一致しないと云ふ事は周知の事實であるが、ドクトル、フンボルト氏の觀測に依れば、此の國際最高等溫線はアメリカに於ては、北緯十度乃至二十度の間、即ちパナマ地峽地方を通過して居ると云ふ事である。緯度の割合に溫度が低いと云ふ理由については、先づ此の地帶が世界一の大原始林を以つて被はれて居る、と云ふ事實を考へなければなるまい。それから此の地帶には殆んど無數の大小河川湖沼があると云ふ事も溫度を緩和する、一つの原因になるであらう。之等の點は彼のアラビヤやアフリカ地方とは非常な相違がある（備考、我學校の寮中に於ける七月中の氣溫平均は八二、六度である）。それから此の地方一帶が大平坦地であるから、晝間大西洋から來る貿易風、夜間アンデス方面から吹き下ろす冷風が、自由に通るので、從つて大いに溫度の調節に力があるのである。

次に雨量と濕度であるが、よく歐米人が、アマゾン地帶は雨量が多く、且つ濕氣がひどくて、とても文明人の住む處でないと云ふ樣な事を云ふて居るが、先づ之を論ずる前に次の表を見て戴く事とする。

1914年より1924年に至る11ヶ年間に於ける各年平均
マナオス測候所．南緯3度8分27秒．午前7時，午後2時及9時

年次	平均温度(℃)	降雨量m/m	濕度%	風向	風速
1914	28.0	1.809.0	77.4	E	3.
1915	27.6	1.491.2	77.7	E	4.
1916	27.2	1.699.2	77.8	E	3.
1917	26.8	2.060.0	82.8	E	4.
1918	27.0	1.505.4	71.0	E	4.
1919	27.3	1.618.6	77,8	E	2.
1920	26.8	2,138.4	78.8	N	1.8
1921	36.7	2.431.6	77.5	N	4.
1922	26.5	1.782.2	78.8	NNE	2.
1923	26.8	2.069.7	78.1	N	1.86
1924	27.3	2.004.0	79.4	N	1.99
平均	27.09	1.871.21	77.91		2.88

備考

地名	降雨量m/m	地名	濕度%
台北	2.119	山形	80.
敦賀	2.539	根室	81.
金澤	2.301	臺北	81.
高田	2.8[illegible]5	臺南	82.
高知	2.055	高田	79.
八丈島	2.091	青森	78.
東京	1.574	札幌	79.
紐育	1.057	鹿兒島	78.
パリー	608	銚子	78.
ロンドン	618		
桑港	543		
新潟	1.909		
秋田	1.[illegible]28		
青森	1.914		

右の表で見る如くマナオスに於ける十一ヶ年間の平均一ヶ年降雨量は、一、八七一ミリメートルであつて、日本の台北、敦賀、金澤、高田、高知、八丈島に於ける各二、〇〇〇ミリ以上をはじめ新潟、秋田、青森等より降雨量は少いのである。次に濕度の問題であるが、マナオスの平均濕度七七、九一よりもなほ濕氣多き都市を我國に求むれば、銚子、鹿兒島、台南、台北、札幌、青森、高田、根室、山形等は何れもマナオスより皆濕氣が多いのである。

以上述ぶる處に依つて、此の地帶が濕度、雨量、濕度の點より見て決して人類生活に堪へられないとか、適しないとか云ふ理由は更に認める事が出來ないと云ふ事が、ハッキリお分りの事と思ふのである。現に自分も旅行して直接的に、案外樂な處であると想うたのである。然し日中一時から先き、三時位迄の間は、炎天に寒暖計を晒せば百十三四度に上昇するのである。地方勞働者は平氣で此間でも仕事をして居るが、若し日本人が新たに入植でもすると云ふ樣な場合には、當分馴れるまでは、此の最も暑い二三時間の間は屋外勞働は差控へるがよいと思ふのである。

猛獸毒蛇 元來アメリカ大陸には、アフリカ等に見る如きライオン、象、虎、ゴリラ、河馬、等極めて獰猛なるものは居ないのである。此地方に居る比較的大きなものを擧ぐれば、オンサと稱するアメリカ豹、猪(山豚)、猿、鹿、河豚(カピバラと稱す)、位のもので之等とても其數が少いので、猛獸に對する危險は殆んどない。鰐は相當多數居るが、吾々が生活を脅かさるゝ等の事はない。北海道の熊の被害より猶は少い程度であらう。又毒蛇は森林中よりも叢に多いので、旅行中一日に數匹位射殺した事はあるが、其被害は丁度日本に於けるマムシ程度のものであらう。決して恐れるに足らないので、然も近頃では之に對する有効なる血清注射藥も出來て居るから猶更心配はない。

風土病 としてはマラリヤ熱、フエリーダブラボ、及十二指腸の三ツを主要なものとして擧げ得る事は、サンパウロ方面と代りはない。此のマラリヤは、日本では無暗みに恐れて居るが之はキニーネを使用する事に依つて、完全に治癒し得べきものであつて、往々之が爲めに斃れる

者あるは大抵此の病氣に對する智識の缺乏と、不衛生とに原因して居る者が多いのである。サンパウロ州等に於て我同胞が、農業等に際してマラリヤ患者が無理に、畑に就働して居つて、熱が出て來ると其場で蓑をかぶつてこらへて居つて、熱が去ると又仕事をやると云ふ例は澤山見聞した處である。一口にアマゾン州と云ふけれども、其面積は日本々州の約七倍余にも達する膨大のものであるから、其の衛生狀態も地方地方に依つて非常に大差があつて一言にして之を云ふならば、よくもあり惡くもありと云ふ外ない。その例として次の樣な事があつた。即ち、旅行中或處でいつもの通り、ハンモックに蚊帳をつつて就寢した處、夜通し非常にからだに痒みを感じたが疲勞の爲めそのまゝ翌朝になつて、目醒めて見ると蚊帳の中に十三匹のマラリヤの蚊（即ちアノフエレス）が、何れも滿腹する迄血を吸うて居つたのである。即ち蚊帳の破れ目から侵入して來たものである。いよ〳〵マラリヤにやられるものと覺悟してそれから數日間は發熱に注意して居つたが、とうとう出なかつたのは幸であつた。つまり此の蚊がマラリヤ菌をもつて居なかつたのであらう。かうした不健康な處があるかと思ふと、アマゾン州アウエス町の如きは一年中一匹の蚊も居らず從つて蚊帳の必要がないと云ふ樣な健康地もあるのである。フエリーダブラボと云ふ病氣は、日本には絶對にない南米特有の病氣であつて、四肢、顔等の露出部に出來る皮膚病である。學名をレーシマニオーゼと云ふて、レーシユマニア、トロピカと稱する原生動物の侵入に因る皮膚病である。本病は日本人には割合に少ない。病原はフレボトムスと云ふ昆蟲に多い蚊の一種が媒介するのである。從來殆んど不治とさへ云はれた本病は千九百十二年オスワルドクルース研究所に於て、青年醫師ガスパル、ビアンナ氏に依りタルタロ、エメチコの靜脈注射二十回前後に依つて全治する事が發見せられたのである。ブラジル人の約七十%が十二指腸に侵されて居ると云ふ原因は彼等農民者が多くは便所の設備を有せざる事、及就働に際して靴を使用せざる事に起因するのであらうが、衛生思想乏しき現狀にあつては是非ない事である。十二指腸が簡單なる治療に依つて全治せしめ得る事は勿論である。次にアマゾン地帶の産物に就て一言しよう。

（A）林産

（イ）護謨　アマゾン地帶が世界に於けるゴムの原産地であつて、其品質が世界一である事は周知の事實である。現在に於てもまだ之を人工的に栽培すると云ふ域に達せずに、昔の通り只自然野生ゴムの採集のみをやつて居る有樣であるが若しこゝで人工的ゴム栽培をやる事になるならば、原産地だけに、氣候風土が之に適して居るから非常な發展を見る事となるであらう。米國人は既にこゝに目をつけて既に地權を得て着々其實行に取かゝつて居るのである。ゴムの價格の移動甚だしき事は棉花と同樣諸氏御承知の通りであるが、此地方のゴム採集業者の數は、其價格の高低に依つて非常に増減があるので、此の地帶の農業の不振はゴム採集の爲めであると云ふも過言ではないのである。間

ちゴムの價格よき時は農作其他一切を打捨てゝ、吾も〳〵とゴム採集に向ひ、一朝ゴム不況の時は山から出て來ると云ふ狀態で、爲めに一定の農耕其他の事業を着實に安定して繼續すると云ふ事を得ないからである。けれども此の缺點はゴムを人工的に栽培する事となれば免がれ得ると思ふ。アマゾン護謨（又はパラーゴム）の品質が南洋ゴムに優つて居るのは、其の凝結方法（卽ち燻烟法）に起因すると云はれて居る。卽ち南洋方面ではゴムを凝結するのに、醋酸等の化學藥品を使用するのに反して、當地方では古來、ウルクリー、イナジヤー、ムルムルー、パツシウーバ、等と稱する椰子の實を燻べて生ずる煙に依つて凝結せしめて居るのである。此場合に起こる化學的作用は、之等各種の椰子の實を燻べて出る煙の中に在る、アセチツクアシツド、クレオソート、等がラテツクスに作用して凝結するのである。此地方のゴム採集の實際は處女林中に野生して居るゴム樹を辿りて環狀をなした約二キロメートル前後の細き道を作るのである、之の道をエストラーダと云うて居るが一エストラーダに約百二三十本のゴム樹があつて、每朝之のゴム樹に切り傷を入れて小さい茶腕を其下部にゴム汁受けとして付けて行つて二三時間の後、ゴム汁を集めて來るのである。此の邊のゴム樹は、六月始めに落葉し七月新芽を出し八月始めに花をつけ十二月結實するのである。其實は養豚の飼料としてよいと云ふて居る。一ケ年中でゴム汁を最も多く出す時期は五月六月及び十月である。

(ロ) **グツタペルシヤ**、（パラタと稱す）之は矢張りゴムの一種とも見るべきもので、此の地方では一九一二年頃からの產業で、比較的新しいのである。良絕緣體として海底電線、モートル製造等には殆んどなくてはならないものである。年々四五百噸を輸出して居るが、價格は常にゴムより稍々高位にある。

(ハ) **カスタニア**（アマゾン栗、又はパラー栗）其木は日本の栗に類し、高さ數十米突の大木となる。果實は直徑七、八寸に及ぶ一個の强靱な果殼の中に多數の栗を藏して居るが、日本の栗の樣にイガはない。此の地方一帶に野生して居るが特にプルス、トロカリー、ソリモンエス、マデイラ等は有名である。其採集方法は十二月より五月に至る間に熟して落ちたのを拾ひ集めるだけのことである。用途としては其儘テーブルに出だし、或は食油又は菓子製造の原料として盛んに歐米へ輸出せられて居る。其成分は脂肪六六、八%、プロチン一七%、水分五、三〇%であつて頗る滋養價値の高いものである。サプカイヤと云ふ種類は特に其味が美である。一九二四年度の輸出額は約五百四十萬圓である。

(ニ) **木材** 我本州に七、八倍する大面積を有するアマゾン州の九一、八五%が原始林のまゝ存在して居る處を以て見ても、如何に木材が豐富であるかといふ事は覗はれる事と思ふ。木材の種類は今迄知られたるものゝみにても二萬二千種の多きに達して居る。筆者は旅行前に於ては、此の熱帶圈内の樹木は、生育早き代りに其材質は概して軟弱であらうと考へて居つた處が、事實は全く之と反對で其大多數は極めて

硬質のものであつて、紫檀黒檀等と同質のもの、或は後のスネークウッドと稱するが如き貴重材を始め、斧の刃も立たざるが如き堅質のものが多いのである。今其比重が水即ち一より重いものを二三擧げると、アンゼリンラチヤード、イタウーバ、ムイラピニーマ、マサランヅーバ、パウサント等皆之れであつて、之等の木材を筏として出す場合にはパウバカブンダ（ウドの大木の意）と云ふ輕い木を、浮きの代りに組み合はせて流下せしめるのである。次に極めて一般的のものにして最も重要なものを一部分だけ書いて見よう。建築用材としては、アカプー、ロウロ、アンゼリン、セドロ、ジヤカランダートム、ロウロエスピリツトサント、パウローシヨ、マサランヅーバ、パウムラト、パウサント、ピキヤー、ペローバ等々、又家具用としてはムイラピニーマ（スネークウッド）、セードロ、パウサント、パウビオレツタ、パウローザ、ヂヤカランダートム、パウサン、等、又造船土木等の耐水用としてはピラニエイラ、イタウーバ、クマルー、ペローバ、マサランヅーバ等、最も著名なものである、無限の木材と、水運の便と、歐米市場が遠くないと云ふ點から考へれば、此の地帶が世界の木材供給地になるのも遠くあるまい。

(ホ)纖維植物 此の地方にある纖維植物は其種類非常に多く勿論其調査もまだ行屆いて居ないのであるが、最も普通に知られて居るものを擧げれば、クラウアー、ミリチー、エンビーラ、ピアツサーバ、アニンガ、マタマター、スマウーバ、ツクマン、シツポーアツスー、タウアリー、ウアム、等である、ヤウアーはサツク、[illegible]等に、ミーチーはハンモツク製作に、エンビーラ、アニンガは製紙原料として皆有望な材料ばかりである。殊にスマウーバは南洋に産するカポツクと云ふ木綿と同種類であつて澤山野生して居る處がある。がまだ利用せられて居ない面白い研究材料の一つである。

(ヘ)藥用及香料植物 之等のものに對して何等の智識を持つて居ない筆者は、旅行中路傍或は森林中にある植物について地方人から指示説明せられて、全く其種類の豐富なのに驚いたのである。伯國駐在大使館一等書記官野田良治氏は、其著「ブラヂル人國記」中に「ブラヂルの無數の植物中、藥用に供せられるものが果して幾千種あるかまだ充分なる調査は出來て居らぬけれ共、既に專門學者の研究を經て、其効用の知れて居る分のみについて云ふも、ブラヂル人は其の住家の周圍一里以内に、自然の一大藥局を有して居る。その藥局には都會に於ける最も完備せる藥舗にある以上に各種の藥品が備へてあると云ふも過言ではない云云」と云うて居る。然も此のアマゾン地方は其藥用植物の本場である。筆者がパラー州モチユー河探査中、僅か二三時間の間にモチユー郡々長ジヨゼー、マルケース、ダ、シルバ氏に依りて示されたものだけでも隨分ある。即ち、藥用及搭油等にする植物性油ではアンヂローバ及コツパイーバ油（之れは樹幹に上下二ツの穴をあけると下の穴から流れ出るのである）藥用香料用のス、キの類ではカツピンマリニヤ、パチシヨリン、アプリピオカ、の三種、ハツカの類でセド

レイラ、アルバツセデイラ、同カルミリタナ、の三種、肉桂の種類でカルネレイラ、クラボの二種、其他トリッペ、熱とり、咳の薬、頭髪洗料等多數に上るのである。香水原料、菓子調味料として歐米で多量に消費せられるバニラ（バウニーリヤと云ふ）の如きは森林中に野生として頻繁に見受けられる。之等は人工的に栽培すれば非常に有利なものと思はれるが誰もまだ試みた者はないのである。

（ト）**椰子の種類と其利用**　筆者は此の地方の旅行に依つて、實に多種多樣の椰子を實驗して其種類の多いのに驚かざるを得なかつたのである。日本で椰子と云へば、多數の者は皆彼のコ、アナツツを意味するものと、早合點するであらうが決してそんなに簡單には行かないのである。今筆者が同地帶に於て見た椰子（パルム）の種類と其用途について、其重なるもの擧げると次の如くである。即ち其實を食料又は飲料に供するものは、ピヤツサーバ、アサイ、アサイデカチンガ、バカーバ、パツターワ、バカーバミリー、ムリチー、カラナイ、マラヂヤー、ププーニヤ、ムクヂヤー、ツクマン、イウー、イナジヤー、コケイロ、等を數へ得る。又其實を食油燈油石鹸の原料にするものには、パタウアー、カイアウエー、バカーバ、ツクマン、アサイ、マラヂヤー、ババツスー、イナジヤーの諸種がある。次に纖維をロープ、ブラツシ等に利用するものにはピアツサーバ、クルワー、ムリチー、ツクム、カルナウーバ、ジヤワリー等がある。又英語のアイボリーナツトと稱するヤリーナと云ふ椰子の果實はボタン又はステツキの裝飾に賞用せられて居る。上記の中、カルナウベイラ、及ババツスーに關しては特に一言する價値があると思ふ。即ちカルナウベイラは北ブラヂル一般にあるがセアラー州が特に多い。フンボルト氏は此椰子を Tree of life. と呼んで居る。先づ第一に其葉からは植物性ワクス（比重〇、九九九溶解度八八度ビクリツクアシツドを呈す）を取るのである。そして其根は皮膚病藥に、其葉は枕、寢臺等の製造に、其實は食糧として美味、其材は家具其他の用材として耐水力も強く、若芽はパルミツトと稱して筍の味を有し、樹汁は多量のタピオカ（澱粉）を含有して酒を造り、少しも利用し得ざる處なきものである。次にババツスー椰子の實から取つた油の分析は、英人ピアース氏の說に依れば、水分四、一一%、油六六、一二%、アルブーメン七、一八%、カーボナイド一四、四七%、ミネラルマター二、〇三%、ウツドフアイバー五、九九%であつて、其用途は機械油として妙、石鹸原料、人造牛酪、植物性バター、蠟燭製造等として最も應用範圍廣く、然も其の搾り滓は養豚飼料として申分なく、外皮は燃料として火力が強いと云ふ重寶な椰子である。

（チ）**タンニン含有植物**　此地方の處女林中に、タンニン含有植物の多いのは一ツの特色とも見るべきものであつて、其最も著しきものを擧ぐれば、アカシアアンヂユの四〇、%、プラニエンの三〇%ムリシーグアスーの一五、乃至二〇、%、ケブラツシヨペルメリヤの四、乃至一六、%、アカシアジユレマの八、乃至一五、%等である。歐洲

に於て普通工藝的に使用せられて居るタンニン含有樹皮は、其含有量通常八%を超へないのである。

(B)**農產**　土地到る處豐沃なる原始林であるから、農作としては米、煙草、棉花、砂糖キビ、カフエー、マンヂヨーカ等何れもよく生育するけれども、勞力、資本、智力の缺乏の爲めに、未だ見るべき成績を擧げるまでに行かないのである。ゴム採集に依つて勞力を奪はれて農作がお留守になる事は前記の通りである、が最近爲政者も大いに覺醒して農作に意を用ひて居るから、漸を追ふて開發の緒につくものと見られて居る。其重な農產は、

(イ)**カカオ**　アマゾンはカカオ(チヨコレートの實)の原產地であるから之の栽培に適して居る事は言を待たない。然し其の現狀は栽培法加工法に何等の改良をなさず至つて、幼稚の域を脫し得ない。けれ共其品質の勝れて居る點では他の追隨を許さないのである。現在に於てはパリンチン、イタコアチアラ、バレリーニヤ、及ウルカラー等の諸郡を以て主要產地として居るのである。年々の輸出額は八十萬乃至百二十萬キログラムである。

(ロ)**グワラナー**　之はアマゾン州マウエス郡の獨占的特產物である。古くから此地方に野生としてあつたもので、マウエス種族のインデイアンの間に、不老長壽の靈藥、萬病の藥として賞用せられた有名の強壯劑で一種の蔓になる果實を、煎つて粉末として固めたものである。近頃ブラジルの有名な都市でビール會社が之を原料として強壯飲料を製する事になつて盛んに文明人間に賞用せられて年々其の需要を增して來て居る。製藥用としても其用途を擴大しつゝある有樣である。グワラナーに關しては筆者は親しく同地に約一ケ月も滯在して徹底的に調査したが、之の栽培は將來最も有望のものゝ一ツと思はれる。



ペシボーイ(牛魚)

右の外煙草、砂糖キビ、棉花等調査材料として取るべき實際的數字がないから之を略する事にして以下水產について述べよう。

(C)**漁業**　アマゾン地帶殆んど無數の大小河川湖沼に棲息して居る魚の種類は、全地中海に居る魚の種類の二倍餘、全太平洋に產する種類より多いと云はれてゐる程であつて、大小幾多のものがあ

れ共、特に食用魚類として有名なものは

（イ）**ピラルクー**（ピラとはグワラニー語の魚、ウルクーとは赤い、と云ふ意）其形は鯉に似て大きいのは二十五六貫にも達するが、普通十五六貫前後である。地方人は乾燥期に於て銛で捕つて、丁度我國の鮭又は鱈の様に鹽漬とし乾かして輸出するのである。此の魚の舌は非常に固くてザラ〱して居るので、鑢の代用又は大根卸しの様に使用する。前記不老長壽の靈藥グワラナーを卸すのに此の舌を使つて居るのである。此の地方一ケ年の總漁獲高は一千萬キログラム前後と云はれて居る。價格は一キログラム邦貨



チヤボチー龜

る。

（ロ）**ペシボーイ**（ペシは葡語の魚、ボーイは牛）即ち牛魚と云ふであつて、大さは百キログラムから三百キログラムに至るのであるが、其肉は生のまゝでも鹽漬としてもよい味であるが、之から多量の食油を抽出する事が出來る。此の油は豚脂の代りに廣く使はれて居る。其皮は乾かすと非常に強靱であるから、乗馬用の鞭等に使用して居るが工業的に機械のシヤトルの受け皮等に使用したならば申分のないものが出來ると思ふ。

（ハ）**龜類** タルタルーガと稱する龜は、其大さ甲の長さ二三尺のものであつて、其肉は此の地方でも珍味として重用せられて居る。地方の郡長其他有力者の招待に招かれると大抵此の御馳走を出されるが、其卵は又人造バタの製造に使用せられるのである。龜類では此外日本のスツポンに類するアペレーマと云ふ龜がある。又チヤボチーと稱する種類は山林中にばかり居る大さ七八寸のものであるが、食用としてなかなか美味である。之は野生のカチユウと云ふ果物を好んで食べるので、カチウの實が熟して落ちる頃になると、澤山その木の下に集まるので土人は一時に多數を捕へて來て屋敷に土俵の様な垣を作つて入れて置くので誠に面白い。

（D）**牧畜** 一年を通して殆んど四季の變化がないので、牧草の全然枯死する時がなく、地價が非常に安く、殆ど只と云ふ

と云ふ事は出来るが現状に於ては、牧草の改良、品種の改良、畜舎の不衛生等の為め不振の状態を脱し得ないのである。一九二〇年の調査に依ると、リオブランコ地方の一七七、五二八頭をはじめ、パリンチン郡の一九三四九頭等總計二八五、八五四頭である、(牛、馬、騾、驢、羊、山羊、豚の合計)。

(E商業及貿易　アマゾン州よりの輸出品目中ゴムは其最も重要なものである。一九一〇年前後に於ては一キロの價格五圓を稱へられ、黒色の黄金とさへ云はれた時代もあつたが、現今では一圓四五拾錢と云ふ相場を保つて居るのであるが、最近の輸出年額は一千萬圓乃至一千五百萬圓内外である。ゴムに次ぐ主要輸出物は一千萬圓のカスタニア(アマゾン栗)、其他カカオ、グワラナー、サルサパリリヤ、乾魚、木材、獸皮等である。そして輸入品目中の主なものは、諸種加工品、食糧品等であつて、織物類、鐵類、既製薬品類、米砂糖、諸酒及飲料等であつて、其總量二萬數千噸に達して居るのである。

(F)交通　一般にアマゾン地帶は非常に交通不便の地と考へられて居るが、筆者は世界に恐らく此地帶程自然的に交通の便に惠まれて居る處はないと信ずるのである。即ち大小無數のアマゾン本支流によつて全州殆んど到る處に舟行の便がある。殊にアマゾン本流マナオス迄一千哩は、ブースライン、ロイドブラヂレイロ、ランボルトホルトと云ふ様な外洋汽船會社の七千噸級の巨船が或はリバープール又は紐　育等から定期航路をなして居るのである、又アマゾン河汽船會社は主なる支流に定期航路をなして居る。

趣味のアマゾン

(A)ポロロカ　之はアマゾン河口附近の支流に起こる河ツナミであるが筆者不幸にして寡聞未だ他に聞いた事がない。滿潮の節廣い河幅が急に狹少となつた河に起こる現象で、從つて二月より四月に至る所謂大潮の期節、新月及滿月に相當する時期に出現するものであつて五呎乃至十呎位の高さの波となつて、速度一時間に四哩乃至十哩にも及ぶ事がある。此の期節に於て、地方土人が獨木舟で航行する場合は、彼等は常に極めて河岸に近く沿ふて行つて非常に之を危險視して居るが餘り他に見ない現象の樣に思ふ。

(B)珍魚類　を二三種紹介して見よう。先づプラケーと稱する電氣魚であらう、この鰻はアマゾン流域一般に棲息するが、テッフェ郡のクパカーと云ふ湖水に産するものは、特に其形が大きいので有名である。大きさは八呎、重量五貫目に及ぶものがあるが普通は三四呎の大さである。英國のファラデー博士は之について種々研究した結果、之は純然たる電氣で少しく装置をすれば熱をジエネレートし、スパークを發し、又スチールをマグネタイズする事を得と云ふて居る。大なるものに至つては馬等を一擊の下に致死せしめるに充分なショックを與へるのである。ベレム市の博物場にも二三匹飼養して居るが、吾々が十人位手を繋び合うて其一端の者が電氣鰻の からだに觸れるとそのショックは同時

に全部の者に傳はるのである。相當の調査準備をして行つたならば面白い冒險が出來ると思はれる。次に變つたものは、ピラーニヤと稱する日本の鯛に類する魚である。之はアマゾン本支流湖沼等殆んど到る處に澤山居る魚であつて、非常に鋭い、剃刀の樣な齒を持つて居る食肉魚である。牛馬等がアマゾン河に墜落した場合には瞬く間に之れが白骨になつてしまふと云ふのは、此の魚が無數に集まつて來て、其肉を食べてしまふからである。又牧畜業者が多數の畜類を追うて渡河せしめる場合、先づ一二頭の病弱なものを河中に投じてピラーニヤの餌として與へ、其附近のピラーニヤが全部此の好餌に集まつたすきを見て一時に他の多數を安全に渡河せしめるのである。然し此の魚の肉は頗る美味である、次にペシボーイと云ふ魚?が居る。ペシボーイとは邦語に譯すと牛の魚と云ふので、之の魚は其目方七八十斤に及ぶものがある。之は好んで河邊に叢生して居るス、キの如き草を食ふのが丁度牛が草を食ふ通りである。そして其齒の具合、舌の具合等もよく牛のそれに酷似して居るのである、我國の動物教科書にはまだ出て居ない樣に思はれる。それからカンヂルーと稱する細い小さい魚が居るが、之は往々婦人が河中で行水等をする場合に被害を受ける事がある少々風規上の問題にふれるから詳細は御免蒙る事にする。

(C) 鰐　アマゾン本流筋には割合見受ける事が少いが支流に入ると可なり澤山居る（殊に減水期に多い）アリゲーターに關しては中央の奥[illegible]

の人から最も恐るべき獰猛なものであ[illegible]よく鰐を見た時は、さすがにこわかつたが次第に分つて見[illegible]おとなしいので寧ろアッケなかつた程であつた。獨木舟で數間の近くに行くと鰐は悠々と水の中にもぐつてしまふのである。地方人に聞くと十月十一月頃鰐が子を持つ時期が最も危險である樣に云ふて居るが、それにしてもその被害は實際極めて稀で先づ北海道に於ける熊の被害よりは少いであらう。筆者の旅行中一人の土人の女が河で洗濯して居る時、鰐におそはれて一旦水の中へ引入れられた處、幸ひ片腕が切れた爲めに命は助かつたと其片腕の婦人が話して居つたが之れは確かな話である。

(D) **獸類の珍**　とすべきものは獏がある、あちらでは之をアンタと呼んで居る。蹄が三つに分れて居るのと、鼻柱が非常に長いのが特徴である。之は御承知の通り昔から夢を食べる怪獸と云はれて居つて、惡夢を食ふと云ふ意味から高貴の方々の塗り枕に大きく金文字で此の獏と云ふ字が書かれて居るのを見た事がある。大きいのは小牛位あるが、非常に皮が厚くて丈夫な爲めに鐵砲でも鉛の一ツ丸では丁度一錢銅貨の樣に、ペチヤンコになつて一向役に立たない。然しスチールの丸だとさすが中まで通つて仕止める事が出來る、森林中で之を射止めて其足へロープを通して三四人の土人に引張り出させる氣分は誠に

頭部四肢[illegible]に[illegible]る事である、[illegible]土人は之を[illegible]と呼んで其肉は食用として可である。時々二本足で立ち上がるのが面白い。タマンドーア、パンデイラと云ふのは蟻喰に属する[illegible]と称する獣で其尾はシュロの毛の如き長い荒い毛を持つて居る。何と云ふても此の地方で最も徹底した愛嬌者はナマケモノである、葡語でプレギッサと云うて居るが日本語の懶者と全く同意味であつて、其動作の悠々迫らざる態度と、人を人とも思はぬげなつらがまへとは、他に比すべき何物もない。この地方ではこんなに悠長にかまへて居つても生きて行かれるのかと思ふと、何か或る暗示を與へられて居る様に思はれるのである。又数十種の猿の中でポケットモンキー等は如何にも珍らしく思はれた。尚又二三種の螢の中で、頭部の光るのを見た時は、昔から螢は尻で光るものなりとしか考へて居なかつた筆者は異常な感激？に打たれた。

(E) **鳥類**　鳥類で一番目につくのはオームの種類である。葡語でパパガイオと云うて居るが専門家の話に依るとアマゾン地方のオームは世界中の他に産するものよりよく物を言ふ點で優れて居ると云はれて居る。最も小さいのはペリキヰトと称して日本の雀位の大さで色は深緑を呈して居る。飼養して置くと非常によく馴れて可愛らしいものである。最も普通のものは頭のテッペンが黄色いオームであつてよく人語をあやつる事は御承知の通りである。同じくオームの種類で、其形大きく尾も長く胸部から腹部は非常な鮮かな真紅で背部は緑青色をして居るアララ[illegible]と云ふ美しいのが[illegible]。[illegible]一[illegible]おないが随分立派なオームである。次に[illegible]の非常に大きい[illegible]黒等の[illegible]をして居るツカノと云ふ種類が居る。日本で何と読んで居るか筆者は知らない。鳴き声のよいので有名なサビヤーと云ふ種類が二三種ある。あちらの詩人小説家等によく唄はれて居るものである。又アマゾン河を航行する時其河岸の泥になつた個所に多数の直径二三寸の穴が沢山あるのを見受けるが之は皆川蝉の種類に属する小鳥の巣である。ガルサレアールと云ふ白鷺は欧米婦人の帽子の装飾にする美くしい羽を持つて居るものである。此の外鶴の類、鴨等は屡々見受ける鳥である。ワシ、タカの様なものも勿論居る。

(F) **観賞用の植物**　としては先づ蘭であらう。其種類も何百種か分らぬと云ふ事であるが、下流地方には割合少ないやうであるが、大きな木の上の方に大きな非常にきれいな花をつけて居るのを度々見た。専門家が行つたならば垂涎萬丈と云ふ處であらう。然し地方人は蘭の花は餘り縁起のよい花でないと云うて顧みない。睡蓮の一種で湖上の女王（ライニヤ、ドス、ラーゴス或はビクトリヤ、レヂア）と云ふのがあるが之は其大さ葉の直径一間にも及び花は白色で大さ一尺位ある見事な睡蓮である。且て英国の女皇ビクトリヤに献上した事があるので之が学名となつて居る。その種子は土人が食用にして居る。

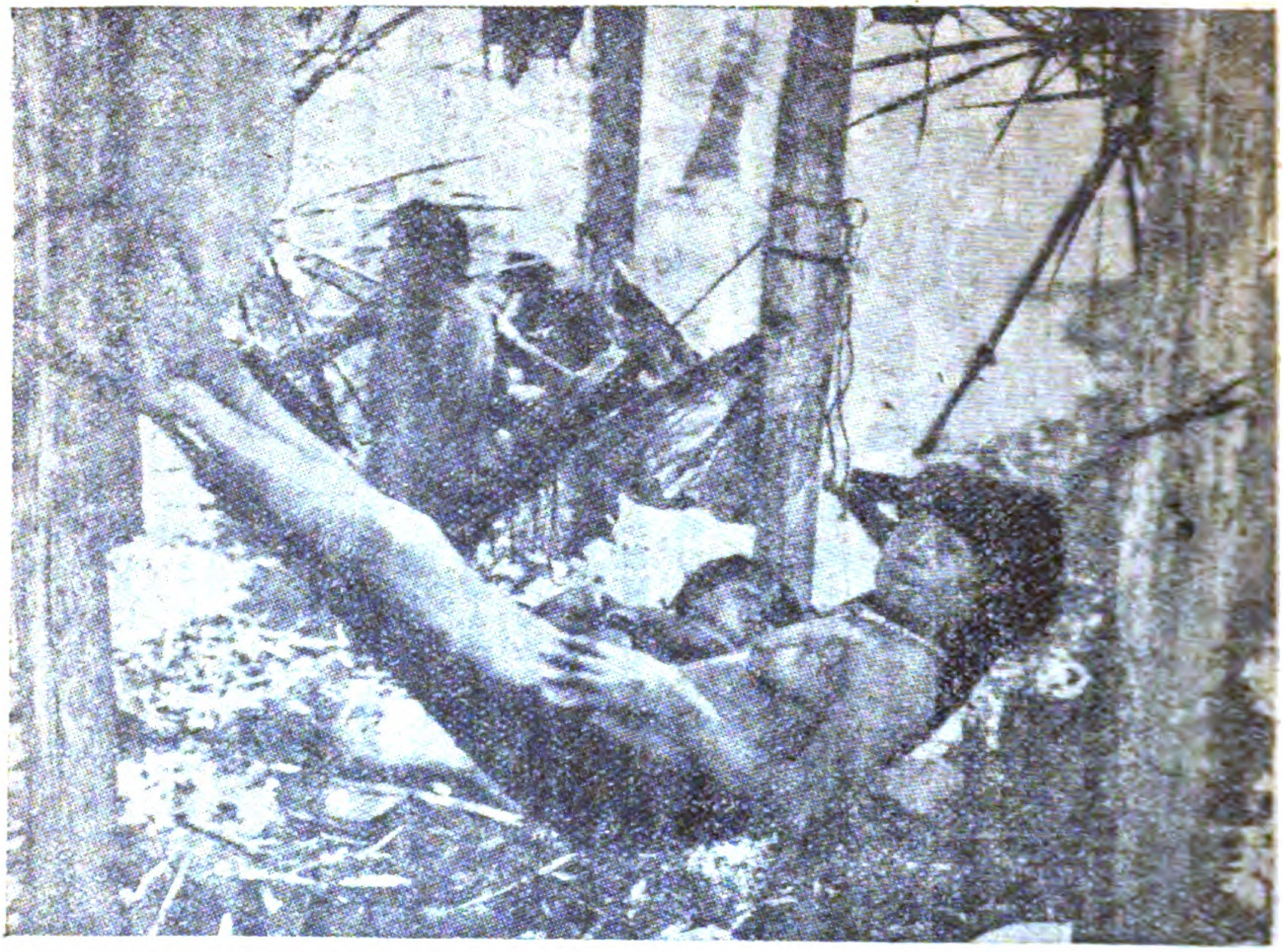
(G) **三年前に植ゑた稲**　筆者が一寸珍らしいと思うたのは、ベレム市から程遠からぬアマゾン河辺の、満潮に際しては少し水が乗るといふ[illegible]

な地形の處に、僅かばかりの稲が植ゑてあつた。出來工合等を見て置く必要があつたので上陸して其耕主（地方士人）に色々と尋ねて見た處此の稲はその時立派な穂をつけて居つたのであるが、之が三年前に植ゑた稲で毎年肥料なしで只收穫するばかりだと説明を聞いて少からず興味を喚つたのである、同道して居つた芦澤農學士も大いに感心して居つたが、植付後三年目の稲がまだ立派にみのると云ふ事はまだ見た事がなかつたのである、水の工合等も勿論よいのであらうが此の地帯が如何にも米作等に適して居ると云ふ事を雄辯に物語るものであらう

(H)**彼等が主食とするマンヂョーカ**　と云ふ事について一言しませう。此の植物の幹及葉等は丁度日本の麻に類する多年生のもので、高さは普通一米突から二米突位のものである。植付は其幹を五寸内外に切つて土中に埋めて置けばすぐ芽を出して、六ケ月目頃から其下部に出來た薩摩芋に類する球根を掘つて食べられる程度になる、が植付後一ケ年乃至二ケ年位のものが食べ頃であらう。約二十五%の澱粉を含んで居つて之は殆んど如何なる土質でも出來る最も有用な植物である、南米人が怠惰の風があるのは、かうした耕作が簡易で澤山取れるマンヂョーカに惠まれて居る爲めであるとさへ云はれて居る。之には有毒種（マンヂョウカ、ブラバ）と無毒種（マンヂョーカ、ドーセ）の二種に大別する事が出來るが有毒種の方も、三四晝夜水に浸して發酵させて後煎り上げて立派な主食物に用ひられて居る。無毒種の方は其使用法等は全く日本の薩摩芋と同じである。

(I)**煙草の巻紙代用品**　前記の通り此の地帯は其地質氣温共に煙草の栽培に適して良質のものが出來る。此地方では出來た煙草を適度に影乾して後、長さ三尺、太さ中央で二吋程の棒狀として、グワシマー、或はシポーチチカ等と稱する蔓を以て卷き固めるのであるが、之を使用する場合はナイフで薄く削り取つて、之を玉蜀黍の皮、或はタワリーと稱する樹の皮を紙の代用として巻いて吹ふのである。此の木の皮には二三種類あるが何れも非常にきれいな木の皮で紙の様に極めて薄くへぐ事が出來るのである。

(J)**インデイアン**　アマゾン州内に居るインデイアンの種類は、今迄知られて居るもの丶みで百四十二種類に上つて各々異る言語を使用し各々分離した部落に居住しては居るもの丶大體に於て其の體格容貌等より見てよく似通つて居るのである。此のインデイアンが吾々大和民族に非常によく似て居る事は人類學者の好研究題目であつて、今迄の學者の説に依ると往古ベーリング海峡が陸地續きであつた頃モンゴリアン人種が米大陸に渡つてパナマ地峡を通過して南進して來たものであらうと云ふ事になつて居るが、日本の學者が語學の上から研究したならば意外に大きな收穫がありはしないかと思はれる點がある様である。日本人が彼等に似て居るのか、又彼等が日本人に似て居るのか何れにしても何等かの關係はある様に思はれる。筆者はインデイアンとさへ云へば直ちに彼の臺灣の生蕃の如き猛惡なものと思ふて居つた



釣床に添乳せるインデアン婦人

が、當局は彼等に非常に寛大である。殊に吾々に對しては非常に親切にするよりより以上親切なものゝ如く見受けられたのである。百四十餘種族のインディアンの中只一種族のみが食人種である。即ちプルス河の上流七百六十哩にあるシパチニー河の沿岸に居住して居るイプリナンから來て居る族と云ふのがそれであるが彼等が人肉を食べるのは彼等の道徳的迷信の樣である。彼等の知人友人が死んだ場合に皆寄り集まつて其死人の新らしい肉を食ふのであるが彼等は斯くする事に依つて故人が生前有して居つた武力智德等を分けて貰ふ事が出來ると云ふ樣に考へて居るのである。其の子女は二才乃至四才位の間に於て必ず一旦村の醫師？の手に委ねられ此の醫師から苛酷な鞭の打擲を受けて之の苛責に堪へ得たものが始めて一人前のインディアンになつて耳鼻等に裝飾用の穴を開けられ美麗な鳥の羽子等で裝身するのである。之は丁度小供時代に聞かされた獅子が其仔を谷へ落して試練する話と同じ意味であらう。既婚男女に不義ある時は、酋長が直ちに鎗を以て成敗するのである。彼等の生活は極めて簡單であつて、主食としてはマンヂヨーカと稱する芋の粉を用ひ、魚類獸類等に依て生活して行くのである。丸太の柱にイナジヤーと稱する椰子の葉で屋根を葺き、寢具としてはミリチーと稱する椰子の葉で編んだハンモックあるのみで勿論何等の衣服はない。只ダンスを踊る時タンガと稱する小さい前掛樣のものをまとふのみで、晴れの衣裝を着ける代りにウルクー等と稱する木の實で赤黑等の模樣を丁度入れ墨の樣にからだに畫くのである。

(K)人類は鹽なくして生活し得るや　アマゾンのズッと奥地に居る彼等インデイアンが全く鹽氣なしに生活して居ると云ふ事實は最も興味ある問題の一ツと思ふ。彼等は鹽の代りにヂャラー、アッスーと稱する椰子の實を燒いて粉とし之を調味料として居るのである。之に關して一英人は次の如く書いて居るから摘錄して學者方の參考としよう。

レオポルディニャ・マイオール(ジャラー、アスー)高さ二十五呎。インデイアンは上記の椰子の實を多量に集め、之を燒きて粉末となし、彼等が鹽を得ること能はざる場合に、　鹽の代用として之を用ゐるのである。　併し、その實際の味は鹹きより寧ろ辛き味を有するを以て、この粉末が果して眞の鹽を含有するや否やは疑問である。　しかも、彼等インデイアンは、この粉末のみを以て、魚類、獸類を調理し、完全なる健康を保持してゐるのである。それ故に、恐らくかの鹽なるものは、吾々文明人が考へて居る如く、人類の生活に絶對必要のものではないのかも知れない。

同地方旅行の狀態は　本流及支流の重要なるものを除いては、獨木舟に依る外はないが、眞のアマゾン情緒は、大きな汽船の通らない支流奥地へ獨木舟を入れて始めて味ふ事が出來る。　ハンモック、蚊帳、ピストル、鐵砲、食料としては芋の粉及豚の油漬等を準備し、未だ人跡踏らざる千古の原始林に野宿し、鰐、トカゲ、龜等の珍味に舌鼓を打つ時、一種の神秘的な感に打たれ始めて眞の探檢家たる者の云ふに云はれぬ痛快さと愉快さを感ずるのである。

此の旅行は旅者としては決して逸樂や遊山氣分で行つ……

いと云ふ考から行つたのである。

發展地として充分の可能性ある事を確認し、先づ隗より始めよと云ふ信條の下に自ら第一線に立つべく其準備中で來春早々出發の筈になつて居る。

アマゾン州官民の日本人大歡迎

現アマゾン州統領エフイゼニオ、デ、サーレス博士は州議會の教書(施政方針)に「我州の開拓は日本人の入植に依つて始めて成し得らるべきものである」旨を公示し、又甞て我駐伯大使たりし田付七太氏に對して「若し日本人側の希望を知る事を得ば、之れに適合する樣に特に法律を制定しても、日本人の入植を圖り度い」と言明して居らるるのである。又同州マナオス市駐在日本名譽領事、コロネルレオポルド・デ・マット氏はアマゾン州政界に於ても大なる潛勢力を有する人であるが、此の地方への日本人入植に對し陰に陽に其ベストを盡し其實行の遲きにいらだんだ踏んで居る有樣である。こんなに眞劍に日本人を迎へて居る所は世界廣しと雖も決して他にはないのである。特に此の筆者は此の機會に於て學者、實業家、否全國民に向つて、進んで其の地帶に着眼せられて直ちに眞面目なる實際的研究と調査と、實行に着手せられる日の一日も早からん事を希望して止まざる者で、

ツンドラの國

吉澤正三

○

帝國の最北占守島の國端岬と六浬を隔てて相對する所に世界三大漁場の一たるベーリング海とオーツク海との限り無き寶庫に包まれ乍ら新しき人類の使命を待ちつつ靜に横たはつて居るカムチヤツカ半島がある。

其面積百十四萬三千四百十平方露里にして、吾が臺灣より千島に連なる火山脈の本系たるカムチヤツカ中央山脈と、北緯五十四度附近より更に別れ、ベーリング海に沿ひカムチヤツカ川に至る東部山脈とにより形成されて居る。何れも四時白雪を戴き乍ら常に炎炎たる噴煙を吐く高峯連立してゐる。後者の山脈は前者の山脈より一層高く、吾が富士山より四千尺も高いクリユチエフスカヤ火山（一六、一三一呎を始とし一萬呎を超ゆるクロノツカカヤ火山、シウエリチ火山、等聳え、海に瀕する所海岸砥の如く、岬崎よく突出して人に知られざる天然の良港を造つてゐる。奥深くして湖水に似、錨にかかりて灘の音を聞く。前者のカムチヤツカ中央山脈はオーツク海に沿ひ半島を蜿蜒し、一四の活火山と二四の死火山を藏する。之等の谷間に湧き出づる溫泉も亦其數、數へる事が出來ぬ。然して此の山脈には一萬呎以上もあるハオセン山などあるとは言へ東部山脈に比すべき高峯は少い。兩岸とも北行するに從ひ次第に幾々となりて低く、緩斜面の濕地平原を以て海に臨むのである。川は其西岸オーツク海面にそゝぐ物多く、兩岸とも北緯六〇度以北に至つて川らしき川を見ずして一帶のツンドラを以て被はれてゐる。此の地方に至れば都人士らが九十度を越す炎熱に惱まさるる眞夏でさへ四〇度内外を示すのみである。然して此半島の最南端たるロパツカ岬などは北緯五一度にして其南岸には割合に暖い所もあるのである。今カムチヤツカに於ける氣候を大別するならば概略三つの異なる氣候區域に分割する事が出來る。即ち海洋氣象を有する東部沿岸帶は暖流流るる太平洋より吹き來る風に著しく其氣溫を緩和されるが、ベーリング海の寒冷なる空氣に會ふため濕氣非

常に多く降雨降雪をよく齎らすのである。
又中部帶は溫暖の差、日を通じ年を通じて甚だしく所謂大陸的氣候を有する。又第三の西部帶、即ちオーツク海方面の氣候は海洋氣候を示すとは言へ、非常に寒冷で空氣乾燥し、北部に於ては冬季攝氏零下五〇度にさへ達する事があると言ふ。夏季と雖も地下三、四尺は凍結し、風向及び氣溫の變化甚だしく冬季以外に於ては過ぎし年軍艦新高がオゼルナヤで遭難したる如き猛烈なる暴風さへ襲ふ事がある。然してカムチヤツカに於ける氣候を四季に分けるならば六月は春、七月八月は夏、九月は秋で十月から翌年五月迄は冬である。ザラ〳〵した根雪の上や咲き後れた美しい高山植物の花の上にチラ〳〵初雪の訪れるのは八月の末頃からである。氣溫は次第に下り南方東岸アワチア灣に面せるカムチヤツカの首都ペテロパウロスクでさへ十一月の平均氣溫は攝氏の零下二度位となり、海も氷れば大地も凍る。寒氣は益々強く十二月には又平均零下七度を示し、夜は愈長く晝はわづかに三四時間となり一月には平均零下一一度に降下し時には零下二〇度位に達する事がある、況や其以北に於てをや。
斯くして野も、山も、海も、川も總てが硬い氷雪原と化し、最好なる交通季を實現するのである。

〇

即ち冬季カムチヤツカに於ける唯一の交通機關であり、又北方土人が部落から部落へと通ずる交通の使命を握つて居る犬橇の活躍は十一



オリユートル附近の山（カムチヤツカ東岸北方）

用かの差ある。雪には差があり、又其程度も使用の大小に從つて異る
が、一つの橇を曳くには普通五六頭から十二、三頭位までを使用す
る。彼は馭者の命ずる儘に右へ左へ先頭犬に協力一致し、巧に路を撰
び乍ら前進する。そして俐巧な犬になるとわざわざ路を外して放棄し
其上へ後足で雪をかけ、橇の滑走力を少しでも減じない様に懸念する
と言ふ。然して最も大切なるは先頭犬にして如何なる吹雪に襲はれよ
うとも、最も怜悧にして決して示されたる方向を誤る事なく、又最も強
健にして最も勇敢なる事を必要とする。從つて此先頭犬は價も高く普
通三百圓内外にて賣買されて居る。犬は各家毎に飼育され、其數貧富
によりて異るが、一〇匹より三〇匹位づつ有し、夏は海岸に鎖で括つ
て置き生鮭を與へ、冬は干鮭を之が餌として與へる。犬橇の最も活躍
するは一月より三月に至る雪の硬まる時期であつて、此季節には大な
る吹雪もなく、大旅行には最も適し、一日よく三〇里も走ると言ふ、
そして夏の間は餘り姿を見せない土人の女と言はず子供と言はず鈴音
高く部落から部落へと愉快な訪問旅行をするのである。一寸考へると
不思議の様ではあるが要するに一年間の生活資料を得るため、雪融け
の、短い間は山に獵し海に漁を努めなければならぬ上、夏は道無き山
や川、沼澤などを通過せねばならぬ困難があり、自然と交通は杜絶え
ざるを得ないのである。

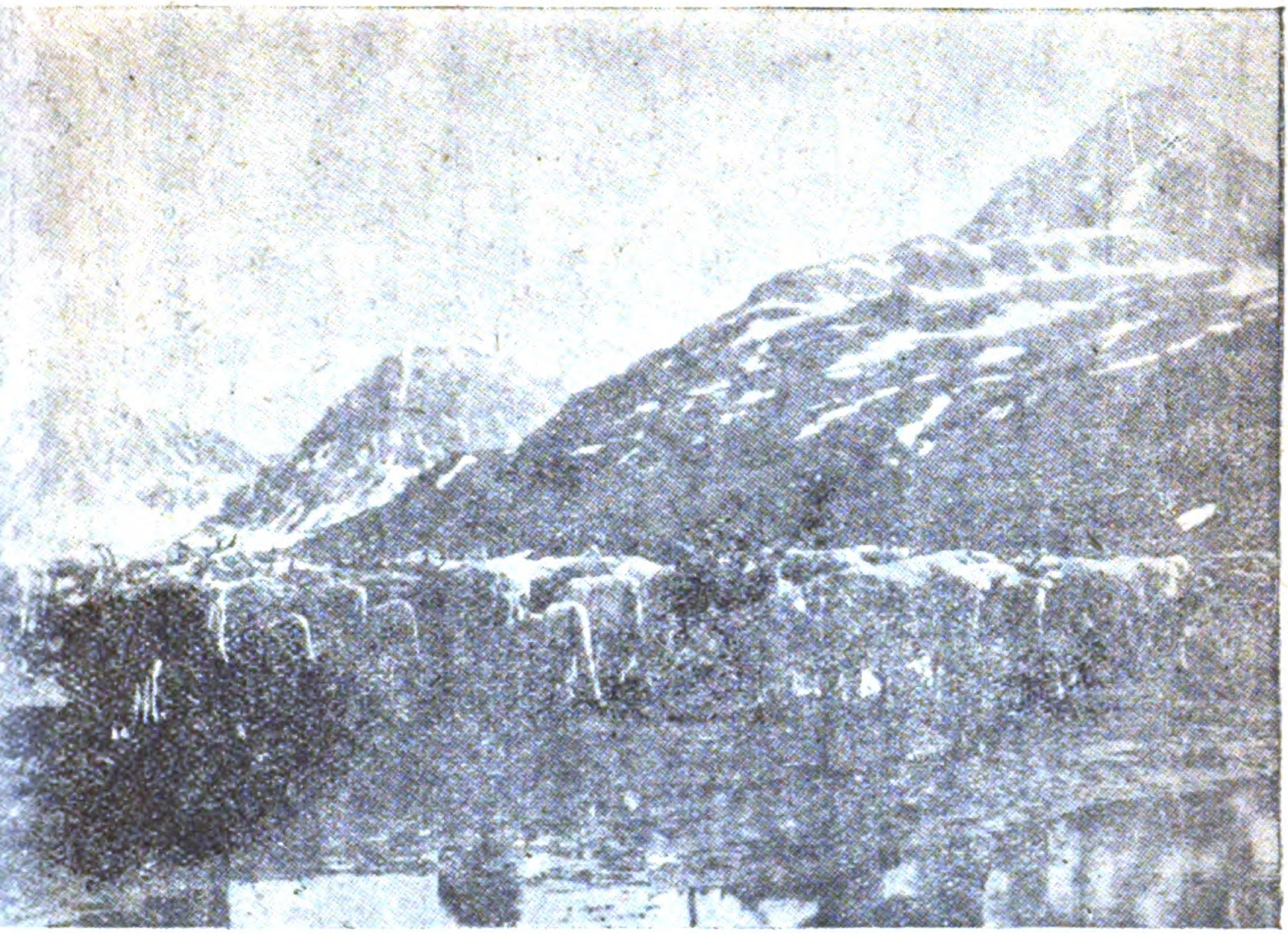
之に反して斯の如き道の心配を要せない冬は、漁は勿論出來な、く
加ふるに運動不足は恐るべき死に導く事さへあるから凡ての人が雪の
上に熟練を必要とする事である。

○

三月より四月に入れば晝は次第に長く、氣温漸く上昇し、ペトロパ
ウロ．クに於ては其平均氣温零下二度内となり、最初の暖かさを覺ゆ
るは五月中頃からであつて、降雪も少く、輝ける光に硬い氷雪が日毎
海から丘へ、南より北へと融け初めるのである。熊や狐、野鼠など永
い冬眠から醒め、雪の下、岩穴からノソリノソリ索餌に出るのも之か
らである。ベーリング海からは流氷類に北太平洋へ押出し、北の國に
もやがて間もなく朗な春が訪れる。

先づかうした喜ばしい報知を第一に持つて來てくれるのは南より群
り來る渡り鳥である。四月下旬から五月にかけて次から次へと翔を聯
して飛んで來る漂鳥の魁をなす優雅な白鳥こそ春の天使と言はなけ
ればならない。つゞいて大きな圓を畫きつゝ悠々大空を舞つて來る大
鷲、次いで竿になり鍵になつて羽音高く一連二連と月夜の空を掠め乍
ら鳴いて來る雁、何時も夫婦睦じい鴨や鷸の各種、詩人に旅情を詠は
れ、或はゆかしい都鳥と名付けられて居乍ら常に不秩序な群をなす貪慾
な鴎など、追ひつ追はれつ雪融の沼や入江を目がけて飛んで來る。凍
つた長い夜の冬が、永ければ永かつただけに世人の想像する事が出來
ない程の朗かな黎明が訪れる。

陽足も愈々長くなり半島の北部では十一時頃漸く陽は沒する。此地
方に於ける月は又何んとも言へない。ボーとした濛霧の地平線を出づ



グルボカヤ（カムチャツカ東岸北方）に於ける馴鹿

る時は上下に長い楕圓となり、又上が萎んで下が大きく、下が萎んで上が大きくなるかと思へば、いつしか長い楕圓の上部のくびれたものの様にもなり、時としては上と下は平かで中がくびれて鼓の様にも見える。そして此頃流氷盛んに流るるベーリング海に船を進め、薄い霧の中で月夜を迎へ、月を背にしてデッキに立てば、直ぐ近くにボンヤリ乍らも大きな圓弧の微かな虹をみとめる事が出來る。あれと言ひ之と言ひ、かうした愉快なめづらしい現象は靜乍らも雑多な氣流に惠まれたる北の國、北の海の夜でなければ見られないのである。然し乍ら夏の夜は甚だ短い、午前二時にはもう太陽が昇る。

かくして溢るるばかり暖い光に惠まれつつカムチヤツカ半島は七月を迎へる。

南部にある山々の白楊、赤楊、榛などは目醒むるばかりの緑葉を擴げ、雪融の丘は緑に包まれ花が咲き、黄白紫とりどりの美しい高山植物のお花畑と化す。燕も飛べば雲雀も囀る。

今余が南部西岸に於て採取せし植物の一端を示すと、「クロユリ」「チングルマ」「ヤマガラシ」「ハクサンイチゲ」「ゴゼンタチバナ」「ミヤマハタザヲ」「リンネ草」「キヂムシロ」「ツマトリ草」「マイダル草」「フデリンドウ」「ツガザクラ」「オヤマノエンドウ」「エンコウ草」「白山フウロウ」「千島桔梗」「シナノキンバイ」「トリカマド」「深山シホガマ」「深山ヲトコヨモギ」「タカネツメ草」「エゾホソキ」「コケモモ」「

ゲ[illegible]花盛にして、[illegible]に[illegible]いペテロパウロスクに於ては前記の如き高山植物様のものを見ず、其以外の點にはアヤメ咲き、丘はクローバ及赤いハマナス(薔薇科)の花盛りにして其間を放牧された牝牛が平和な暖い光を浴び(昭和二年七月十七日吾が攝氏寒暖計は正午に六〇度を示す。其前日は小雨にして五〇度なりき)首の鈴もゆかしく雑草を喰ひつゝあるを見た。

○

カムチヤツカ土人の大切な食用果實及草根として次の如きものがある。岩高蘭、大覆盆子(ゴルビッア)越橘子(チョールニカ)赤覆盆子(ブルースニカ)楊巣胡(チエレームーハ)モロシカ(黄色ないちご)等である。そして兩岸共に北緯六十度以上になれば樹木は勿論無く、地球の骨を想はしめる様な岩山と之を覆ふ雪と其裾に擴かるツンドラとを見出すのである。

ツンドラは丁度羽布團の様に柔かく、其表面には生毛の様な軟かい緑の草が一面に敷き詰められ、多くの小さい花を持ち、其美しさは如何なる名匠の織なせし絨氈なども及ぶべきものではない。

ツンドラも場所によつては種々になつて居て、海岸近くは五寸位であるが、奥地へ入るにつれ其厚さを増し、所によつては長靴さへ没する様になり、時としては五尺から一丈位の深さ(厚さ)のある所も珍らしくないのである。

勿論かかる所は人間の跋渉を許さないのであるが、世の中はうまく[illegible]して、[illegible]ツンドラの[illegible]に[illegible]様に走り[illegible]る[illegible]のトンネルがついて[illegible]。

又此地方に於ける野獣の代表的なるものは馴鹿である。

勿論飼育放牧されて居るものは多いが、又群をなして野生もして居るのである。彼等は二三月の厳寒の候には自分達の仲間の一匹を犠牲にし乍ら、凍た山陰に冬を送る。此動物も、四五月と暖い光が輝き始める頃は北方へと移住を始める。そして雪融の七月には南方の様に蚊や蛇の居ないツンドラの軟かな褥の上でお産をするのである。彼等は其所では何の迫害も受ける事なくツンドラを喰ひ樂しく成育し、やがて身を切る様な寒風が訪づれる頃大擧して南方へ移動し始める。然し其所には恐るべき運命が待つて居る事を彼等にはわかるまい。何故なら氷雪の中で凍る冬を過さなければならぬ土人に取つては、哀れ此動物の肉も必要であれば、又骨も皮も必要だからである。土人は此野生の馴鹿を獲るには、豫め其通過すべき川に到つて待伏をなし、彼等が大擧して渡河する時、河中に於て射殺し撲殺をなすのである。普通春に於ては牝のみを選ぶも、秋の南下するものに於ては牝牡手當り次第に殺すを常として居る。

然して土人は自分達が飼育して居る馴鹿を非常に可愛がり、口笛一つで自由に次から次へと淺いツンドラの野をゆるやかに追つて居る。然し自分達の食用にする爲には申すまでも無く次の方法をとるのである。即ち手がゝりとして先づ、首に輪にしてかけてある[illegible]

—（ツンドラの圖）—

を、目がけた馴鹿の首や角に引かける。其所には生きんが爲の戰が起る。時としてはツンドラの上を土人が曳廻される事もある。此の手綱の端は常に其腕にしつかり括られてあるから決して離れる事はない。そして終ひに大きなメスで心臓部を一刺しにされ哀にも一際も無く、往生して了ふ。かくして直ちに腹より裂いて皮を剝ぎ、内臓を取り出し、胴腔に溜る多量の血を皮の袋へ汲み取る（之は土人が製革用に供するもので彼等の着物の内側は毛であるが外側は血染めの赤黒いものである）それより二本の角を付けたまゝ頭骨の一部を切り取つて後、稍離れた小高い所へ運び其皮の上に内容物を擴げ、其上に角を眞直ぐに立ててお祈する。斯くして一通りの供養を終れば始めて血の滴る生肉を其儘喰ふのである。そして其、腦、骨髓軟骨は大好物である。

一方では渡鳥の多くは既に立派な巣を造り上げて沼澤に潜伏するが、鷗は益々多く、愈々海に騷ぎ始めるのである。そして眩い光りは次第に水を増し、川と言ふ川へは幾千萬の鮭鱒が今こそとばかり水も通さぬ勢で堰とは言はず瀧とは言はず跳越え飛び越え産卵境目かけて押寄せて來る、トワカリ（海豹）の群は子供を連れ乍ら之等の河口へ彼等の餌たる鮭を取りに來る。斯くして海は一帶に鮭、鱒、鱈、蟹の盛漁期となる。

○

沖（公海）には流氷の間を縫つて來た多くの大きな蟹が蟹工船は今や其大活動の時期にあり、一隻三千人の…

反を揚げ、約一萬五千匹の大漁場を擁し…間位の鑵詰を製造しつゝあつて、一隻一漁期に約百二十萬圓内外の漁獲をなして居るのである。そして昭和二年度に於ける蟹工船總漁獲高は三十九萬五千函約一千七百萬圓にして、大正十五年度英國其他歐米各國へ輸出せし蟹鑵詰は一千二百五十一萬七千圓に達して居るのである。

一方丘に建並んだ鮭鱒鑵詰製造各工場も今や晝夜兼行の勢で沖の蟹工船と相呼應し、濛々たる黑煙を中天高く吐いて居る。そして沿岸二露里（吾が約半里）おきに建てられた（西部）各漁場に於ては其盛漁期に一日角網一統にて一〇萬尾位捕れる事は珍らしくないのである。そして現今邦人が露國より租借せる漁區總數二百三十四ヶ所にして、漁場料年に百二十五萬圓づゝ納めて居て、此處に働く出稼ぎ邦人漁夫約三萬にして一ヶ年漁獲鮭鱒總計六十萬石也。其内二十萬石位鑵詰に製造してゐる。

鮭は八千尾を以て百石とたし、鱒は一萬六千尾を以て百石となし、兩者の比は八對二なる故、鮭五千萬尾以上鱒二千五百萬尾以上に及び、此金額四千萬圓に上れり。そして英國を筆頭として歐洲各國へ輸出さるゝ鮭鑵詰は一千萬圓以上に達して居るのである。

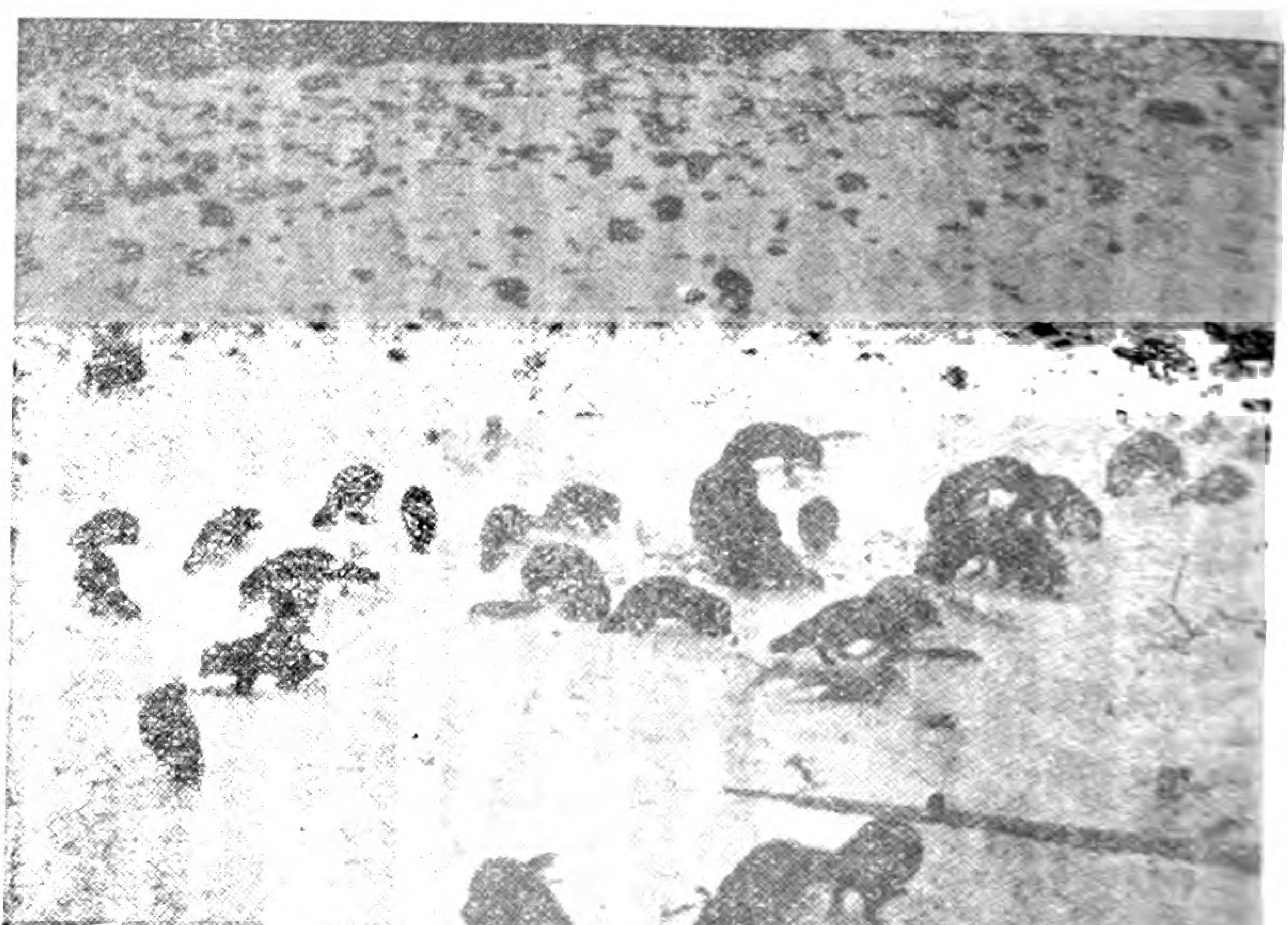
此他舳艫相ふくみ南の風に送られて、總帆白く輝し乍らオーツク海に

へ遊弋に飛來する…

てゐる鱈の臓腑を漁りに來る鷗の多い事は又非常なものであつて、鷗釣の愉快さは此海と此船で無くては味ひ得ないものゝ一つである。鷗釣の方法と言つても甚だ簡單で、唯小さい魚釣針に鱈の肝臓を餌として着け、之を麻の強い絲に括つて海へ投げ出せばそれで良い。鱈の肝臓は勿論海面に浮く、之を見つけた多くの鷗は吾を爭つて集り啄むから何の技術も要らぬ。可愛さうに口に釣を懸られた鷗は唯翅をバタバタさせ乍ら聲も無く釣上げられて了ふ。又此盛漁期に於ては膃肭獸の繁殖時期である。

○

カムチヤツカの東岸ベーリング海のアリユーシヤン列島の先端に當る所に、コンマンドルスキー群島がある。之こそ米國プリブイロフ群島と日本海豹島と共に世界三大膃肭獸繁殖場の一つである、六月から七月の始にかけてガス（霧）に立て込められた海岸の繁殖に適當なる所を求めて、先づ第一に這ひ上るのは成熟した雄である、其海中に居る時は甚だ活潑な擧動をなし、敵に襲れた場合など約十二三浬の速さを出して游泳するが、陸上に於ては非常に鈍い大きな肥滿した胴體を緩にヨチヨチ匐行するのみである。故に其繁殖場として適する所は海岸に近く、岩盤又は岩塊、圓石等を布ける海濱にして、傾斜を有し、潮沫を浴る事なく、常に乾燥したる所を良とする。一度此好位置を占めたる牡は他の牡と戰を挑まれ一敗地に塗れて追放されざる限りは決して移動する事無く、又他出して食物を漁らず、悠然此所に起伏し



コマンドルスキー島に於ける青狐

──(ツンドラの圖)──

雌の到來を待つのである。其うちに五六才以下の未熟なる牡や、成熟せる三才以上の牝などが續々集り來つて、繁殖場前面を群游し便宜なる海岸を選んで上陸する。彼等は極端なる一夫多妻にして雄は多數の雌を自己の領地内に誘ひ入れ、多くは二十匹位を有して一團を造る。之をハーレム(牧)と言ふ。成熟した雌は四尺内外にして非常に柔順で、上陸後七、八時間にして一兒を分娩し四、五日後に交接する。

そして姙娠後ハーレムを去り海中に飛込み索餌をなし、日に三、四回上陸し、多くの稚兒の間に居る吾が仔を見付け喫い乳を與へる、此時若し別の仔などが來ても見向きもしなく、母を失つた仔は終に死んでしまふ。斯くして生後一ケ月頃から始めて海に入り游泳を習ふのである。又此繁殖季を過ぎた雌も美麗の毛に生ひ變り遠洋に其餌を求めつゝ段々南下し、やがて雄もそも其後を追ひ、正月二月頃には其姿を銚子沖邊に迄現はす樣になる。壽命は共に十二、三才を普通とするが時としては二十一、二才に達するものさへある。然して今より百年前頃は年に八十萬頭も獵獲せられたと傳へらるるが、濫獲の結果終に其後を絶たんとするに至つたので、一九一一年ワシントンに於て日米英露四ヶ國の代表者相集り膃肭獸(之は同島に居ない)の保護に關する條約を締結し、其第一條に「北緯三十度以北の北太平洋に於て膃肭獸海上獵獲を禁止する事」と定められのである。此條約有効期は昨年にて終つたが、目下此條約の改正[illegible]協定中にして、今[illegible]豫て此條約[illegible]る。

る膃肭獸の數は約二百萬頭位にして[illegible]

又同島には青狐も非常に多く日中至る所に悠々人に恐れず索餌し遊歩しつゝあるを見る。之も昨年は一年に數百匹を獵獲したが濫獲を恐れ、ロシア政府では之を保護し之も亦昨年に八百匹づつ指定獵獲をする。そして現在約三萬五千匹位棲息して居ると言ふ。

同群島には土人約四百五六十名居住し、ロシア人の影響を受けて其文化の程度は遊牧の民より少しく進んで居るとは言へ、衞生狀態は非常に惡く年々人口が減じつゝある。然して此島には樹木も無く石炭も無いのであるから、彼等は夏の間は皮の船に乘つて遠くの島まで流木を拾ひに行くのである。昨年ロシヤ官憲が、白樺や松及び馬鈴薯野菜等植ゑて見たが育たず。唯植物としては「クロユリ」「櫻草科」「蘭科」ヒカゲノツツジ等あるのみである。

○

やがて夜を日に繼ぎ活動して居た蟹工船や、鮭船も八月の終りが近づけば各々滿船して歸國の途につき、各工場は引上の準備をなし、次で九月の降雪前には全部引上げて了ふ。其頃には熊や狐は冬眠すべく岩穴に歸り、渡鳥の多くは暖かき南を指して飛び去る十月が來る。

斯くしてカムチヤツカ半島に冬が北より南へと押寄せて來るのである

現在、カムチャツカ[illegible]、ツングース人約八千七百名、チユクチ人約七千四百五十名、コリヤーク人三千七百三十名、純露人約二千九百名、ヤークツ五百名、然して所謂遊牧の民を代表したる生活をして居るのはチユクチ人とコリヤーク人である。前者は皮膚銅色顔色黄白色にして、眼圓く大きく、鬚髯少く、頰高く鼻大にして高く、體の發育概して良く、膂力あり、米人との混血と言はれ東岸北部のツンドラ帶に南へ北へ馴鹿を追ひ遷住して居る。

コリヤーク人も前者と同じ樣に狩獵や漁業をなしつゝ遷住する原始の民にして、ナバリオン崎北方沿岸の丘陵には點々として建てられた彼等の部落を見出す事が出來る。卽ち彼等の家は圓く、毛皮で包まれた小屋である。其骨子として組立てられた細い木は夏季海岸に打上げられた流木にして一方に小さなドーアを設けて入口とする。此小屋は大抵九十呎位であつて、其周りの地に着いて居る所へは土をかけ暖を外にもらさない樣にする。

彼等は夏の間に海獸や野獸の皮をどつさり造り其中に備へ寢具及着物とする。

彼等の食物は第一に魚類（生魚及び凍魚）にして之に次で馴鹿、稀に野禽も食する。彼等は又冬の爲にユーコラと稱する干魚を造るのである。そして中流の家庭は一年の三分の一は鹿を喰ひ、其他三分の二は魚肉を常食として居る。一般に春と秋は鹿を喰ふ。

冬彼等の副食物となるものは馴鹿の胃及び夏蓄へた草の實と鼠の穴[illegible]ある。彼等は又食器を有せず、肉を載せる物が無いから、脂の付いた汚い[illegible]な肉片を口に銜へ一部分づゝ切れ[illegible]手傳はせて喰る樣は仲々面白い。

彼等は又大切なる財產としては皮の小舟に橇（彼等は馴鹿に曳かせる）及銃である、彼等は獵銃を非常に大切にし、いつも非常に良く手入をして置き、彈丸は皮の袋に入れ肌に着けて居る。之米人より獸皮と交換して得たるものである。

「ツングース人」蒙古人系統で丈低く多く毛皮を着假屋に住し、狩獵及び漁業に從事し、オーツク地方に最も多くカムチヤツカには西岸北部ツンドラ帶に居る。

「カムチヤダール人」ツングースに比し、丈稍高く顏色稍赤黑色、鬚髯濃厚にして同じく假屋に住し、山獵漁業に從事して居る。

ヤークツ人の生活も殆ど前者と同じい生活をなし、オーツク地方に最も多い人種であつて韃靼族である。

以上の土人と露人の混血人は主として南部に小屋樣な家を建て牧畜（牛・馬等）や漁業並に狩獵をして居る。

今一九一七年現在ペトルカムチヤツカ州廳の調査によれば牛、三一五九頭、馬一、五九三頭、馴鹿五七九、一七三頭、樺太犬三六、一〇二頭、豚一、五四九頭飼育されて居る事を知る。移民、一八五二年東部シベリア總督ムラヴイヨフ伯は極東防禦の根據地をアバチナ灣内のペトロパウロスクに定んとし、一方移民を奬勵し、他方アナン街道を[illegible]

き、ヤクートスク市とオーック沿岸を聯結し、此地方の發展に資し、二五家族をカムチヤツカ、一〇二家族をアヤン地方に移殖した。之を以て當地方への移民の嚆矢とする。

然しながら穀類は成熟せず、家畜は牧草の缺乏のため斃れ、加ふるに病氣等發生し成績は不良だつた。日露戰爭後政府の注意再び喚起し一九〇九年カムチヤツカ州制の施行を見ると共に、州行政の中心をペテロパウロスクに置き、一九一一年六月黑龍州より三十七家族と牛馬七十頭を其附近及カムチヤツカ川附近に移殖した。八月更に十四家族をペテロパウロスクに移し、政府は之に漁業權を與へ且つ漁類の買上をなして保護をなし、農牧養雞等を奬勵した。尚一九一〇年其郊外に農事試驗場を設け、大麥裸麥、燕麥、馬鈴薯等移殖試驗をなし其結果は良好ではないが、赤蕪其他の野菜のよく成育しつゝあるを見た。

○

ペテロパウロスクに於ける大正十四年末現在の人口は一、一五八名（內男六八二、女四七六）にして、其內在留外人（日鮮支人）一四一名に過ぎず、其家屋數約三百海岸に瀕せる山麓に散在して居る。今や當港には勞農政權のもとに立てられたる革命委員會を始めとし、憲兵兵舍もあれば軍艦も居る。凡ゆる官衙、學校（普通科）、病院、無線電信局、郵便局國營市場將又店頭に事務所に住宅に或ひは劇場の中央にさへ彼等の崇拜せるレーニンの肖像がかかげられて居るのを見る。然

に於ても碇泊船は動揺だにせざる如き良港にして、二三千噸の汽船か樂に橫付けし得べき棧橋を有して居る。そして國營商船部の配船により浦鹽と五月より十月終までの間に十一航海をなし、又本邦遞信省受命定期船は六月の始めより十月下旬の間に函館（小樽經由）と七航海の航路を有す。尚同地には吾領事館ありて出漁者其他に多大なる便を與へつゝあるのである。

然して此カムチヤツカの首府とも言ふべき港の西南に紅鮭跳るアハチア灣を隔てて遙に死火山ビリユーチンスカヤ山（一萬一千三百呎）及びアワンチスカヤ（八千九百呎）の二高嶺四時白衣をまとひつゝ靜に聳え立ち、新しき登山者、地文學者生物學者探險者の訪れん事を待つて居る樣に見ゆるのである。

キアナダロツキーより イエローストーンへ

上原敬二

米大陸を橫斷して東西に旅行する道筋は米領並にキアナダ領を通じて數條あるけれども、この長途の旅路を經度を追うて行つたとて左程に自然界に變化のあるものではない。然しながら一度南北のコースを取つてキアナダより米領に、殊にメキシコ灣に至る間の緯度に沿つて旅路を辿るならば、正しく驚異すべき自然界の變轉に目の當り大陸の大きさに唯々あきれるの外はない。然し文化的に又商業的に營まれた彼地の鐵道は、自然の遊子を慰めてくれる南北路よりは營利に敏き商業の人を運ぶ東西路に全力を注いで、競爭に次ぐに競爭を以て唯々時間の短縮を圖り、設備の完全を誇る外ないのであつて、南北の連絡は僅に數十哩でさへも數回の乘換を要するの不便がある。四千哩の長驅を居ながらにして車窓四日の旅路と云ふ程度には行かない。

殊にロッキー山脈は山高からずと雖もその包有する風景に、その代表する自然に、幾多の怪奇なるものあるに拘らず、これを南北連結するの道筋誠に乏しいと云ふのは遺憾である。

ロツキーの北端はキアナダロツキーの名を唱へるロブソン山彙である。人跡未踏を誇る處女峰もその中に幾つかはある。山は高からずと云へども氷河の美觀を添へて眞に歐洲アルプスの比にも譬へられる。

この山彙には二大氷河型あり、又米大陸の分水嶺なる——一は太平洋に、二は大西洋に、三は北氷洋に——峻峰あり、長さ六哩に亘る氷劫の氷河ロブソングレシアあり、中央にはロブソン峰海拔五千尺、右にチユコ氷河を分ち、ロブソン岩層の地質的時代を決定して居る。山彙の分流としてリアガート山及びプターミガン山が北面して聳えて居る。

ロブソンを東にしてジヤスパーの原始郷がある。これより南下して分水嶺を長驅し、西にコロンビア河の溪流を見、かくしてこの自然郷



キヤナダロツキー中のヴイクトリア氷河と冷店のルイス湖

の内に一抹の文化味を加へたる如きバンフ及びレーキルイスの清涼里を經、更に南下して米領に入ればグレシア國立公園、更にロッキーの中樞に向つてイエローストーンの中堅に入る。

キアナダロッキーを東西に見る時に南にキアナデアンパシフイック線ありて、北にキアナデアンナショナル線あり、相共にキアナダ風景觀賞の双璧である。然も同樣この兩線に連絡の少いのは遺憾である。

我等は今叙述の筆を進めて太平洋岸よりキアナダ南部ロッキーに進み入らう。漸くロッキー氣分の味はれるのは先づレベルストーク邊りからであらう。この邊より沿線約三百哩キアルガリーに及ぶ中樞區である。

コロンビア河を渡り海拔千五百尺レベルストークを去ると鐵道は漸く清涼の氣を帶びたる山間に進み入り、四千二百尺にしてロヂヤース峠を下る。南ロッキー第二分水嶺にして英領及米領のロッキー山脈連絡の大路を完成した爲に著名になつたセルキアーク山脈である。

この山塊を東に越えると再び海拔二千五百尺の高原コロンビア河の流域に出て、更に東して遂にロッキー山脈の分水嶺五千三百三十二尺に達する、太平洋を去る五百哩、鐵道はその中心驛ステフエンに停る。

この邊り空氣清涼に、

[illegible]
脈より西にかけては一萬一千呎級のテンペン、ギルマナイーム、ハンガビー、ヴイクトリアの四座からレーキリプタの流域かけて王座の如くに雲際を摩る。

この附近一帯は東西ロッキー路の連絡中樞である。一八八五年十一月七日に發見されたこの路線の歴史に纒る種々の縁由や口碑を傳へる所である。同時にこの邊は湖水溪谷に恵まれたる山境である。ロッキーとパーセル山脈との間にはコロンビア溪谷とウインダミア湖あり、セルキアーク山脈とその支脈パーセル山との山間にはクーテネー湖あり、セルキアークとゴールド山脈との間にアロー湖あり、ゴールド湖岸とカスケード山脈との間にはオカナガン湖あり、これ等の湖沼を連鎖して一つの河流系が出來る。その雄たるは北米有數の名河コロンビア河である。水源の一つをウインダミア湖に發し北に南に紆曲して幽邃神秘の境と云はれるアロー湖に注ぎその水を集めて太平洋に朝する。次の河流は餘り知られてないがクーテネーでコロンビア溪谷の南端に發し、合衆國領を經てキアナダに入る。

湖畔五千六百尺を下るとボウ河に入る。これを圍んで近景には七千尺乃至九千尺のセントピラン、ニブロック、フエーアヴイユー、サドル、ホワイト等が第二山彙をなす。

湖畔にはシヤトーホテルあり、二百六十の客室を擁し、湖に東面し六月より九月までの營業ではあるが全く別天地の如き感じである。

[illegible]
嘔の麗容を擁するバンフ國立公園即ちキアナダロツキー國立公園の中心である。壯麗にして中世紀の古城を見るが如き雄偉なるバンフスプリングスホテルはボー河對岸にそそり立つ。

キアナデアンパシフイック線に於けるバンフの稍文化的氣分にあるに反し、これに並んで北ロッキーを走るキアナデアンナショナル線に於てはジヤスパーが原始郷として永遠にキヤナダの往昔を物語つて居る。車窓より見る處女峰、溪流を横ぎる鹿の群れ、永遠の雪を堅めた氷河の景、驛路に遊ぶ狐の群れ、かゝる文化人には夢想だも出來ない景は全くキヤナダならでは目撃することは出來ない。驛路に停る汽車の窓にも、田舎びた村の宿にも純朴なボヘミアン風の乙女達が集まつて來て櫻桃の小籠を面はゆげに賣りつけて居る。

ジヤスパーは曾つて數年前細川護立侯の後援の下に東京日々新聞の手によりて槇有恒氏一行が前人未踏の處女峰を征服して以來その名は我國にも知られて居る。眞に北ロッキーの奥に北界を劃する一大神秘境である。ジヤスパーを語ることは北ロッキーそのものを物語ることとなる、その歴史と口碑とは直ちに北ロッキーの秘境を如實にすることゝなる。

ジヤスパーの小邑――全く言葉通り偏陬の小邑である――はこの山境の中心區である。エドモントンを西に去る二百哩、ミエテ河とアサ

バスカ河の合流點の下に横り、これを圍んで一萬尺内外の星座の如き巨峰に守られて昔しながらの幽寂に自然を探ぐる人を迎へてくれる。

　この一帶の地域四千四百哩、眞に我々の想像し難き空漠にして涯りなき廣袤を展げ今日ジヤスパー國立公園と呼ばれる、僅かにジヤスパーパークロツヂと稱するキヤンプ式ホテル一つあるのみで他は悉く人爲の手を絶したる自然そのまゝ、否寧ろ自然たりし前の自然であるかも知れない。鷲は喬木の枝に巣食ひ、熊は夜な〱徘徊して食をあさり、衆人環視の内に悠々と鹿は水を渡る。この一帶の地域を卜してキアナダ政府は一九〇七年一般國民の爲に保留の策を立て、現在の境界は越えて一九一四年設定せられ、次で名稱だけは公園と稱せられるに至つた。

　凡てのアメリカの景勝地、——今日の人の目してかゝる名稱を用ひ得る所も昔しは何れも非常な苦心を以て交通路の開拓に從事した歴史を持つて居る。ジヤスパーもその例に洩れない。然もこの幽境をして世に知らしむる動機をなしたものは一八一一年に於けるアサバスカ峠の發見である。この發見によつて初めてハドソン灣と太平洋岸との交易は開かれた。サー・ジエームス・ヘクターはその功勞者である。然も當時ハドソン灣よりこの新開拓路を辿つて太平洋岸に出づるには三ヶ月半の日子を要したのである。今日僅かに三四日にして達し得るに比べれば雲泥の差である。然も當時この早さは急行と稱せられて居つ



ロブソン山彙

　次で一八二六年にはエローヘッドの峠路が發見された。この路によつて獸皮、野獸、原始的産物等は續々として東西に交易されて居たのであつた。

　キアナダロッキーはかくの如くして開拓された。然も今日尚登攀の人もなく、太古の姿そのまゝに眠れる山河幾層重疊し、眞に文化人にのみ味はれ得る原始味に滿てる唯一の祕境として殘されてある所が少くない。

　キアナダロッキー及びこれに西面するセルキアーク山脈共に南北に連亘し、山高からずとするも然も東西アメリカを兩當分する一大山彙である、我等は今バンフーウインダミアの新道に記述の筆を載せて南下し、米領の境に氷河に飾られたる景觀に誇るグレシヤを一瞥しグレ



バンフより見たるルノース山

ートノーザン線を利用し東に路を取るとすれば我等のノーザ
ンパシフイツク線を利用し「眠れる巨人」に比されたるイエロースト
ーンに近づく、キアナダを出でし我等の大部は殆ど其の舊跡、河沼
何れも神秘さに於て劣れるかの如く思はれるけれども顔要素面里、雄
大壮的の景觀に驚歎される所も少くない。

イエローストンはその大部分モンタナ、アイダホ、ワイオミングの三
州に跨り、殊にワイオミングはロッキーの最も重要なる中軸を占めて
居る。この一團東西五十三哩餘、南北六十一哩餘、面積實に三千三百
方哩餘、ジャスパーに次ぐ世界第二の國立公園である。ロッキーを脊
骨に見してその兩端にこの美麗境の帯する所より一層と才べきであ
る。この公園に存する湖沼にして六千尺以上に在らぬものなく、こ
の外側に近く鎮座する高山は殆ど凡て一萬尺乃至一萬一千尺に達し、
海抜七千七百尺の高地にある湖、イエローストン湖は目下世界に最高
なるものなくその全を環する三十哩、長徑十六哩に渉るか百尺といふ
湖に稀く其れた水は遠に大滝となりて出て泉の特状を装へ
ズーリー、イエローストン、及スネクの大河川を生むのである。
する。この地の間歇泉は世界に冠絶するものと称へ、三千尺より
百五十尺までの高さで、間歇の時間も最小五分、最大十四日であ
る。グランドキャニオンは長さ二十哩、幅約二千尺、深さ約千尺余
の、ティーラスあり、自然の壯觀は種々な姿を呈して十五世紀以来の大地の
姿は斯くて居る。

今叙述の筆を載せて我等はこの大觀の詳細を眼前に展開したい。

ここに達するに最もよき順路は二つある。一つは最も普通の路であるノーザンパシフイツク線のリヴイングストンより分岐したる支線によつて北の入口なるガーデナー驛に達するもの、他はオレゴンショートラインになつて西の入口なるウエストイエローストーン驛に達する何れも公園區の境界に於て汽車は停るのでこの中には鐵道を敷設することを絶對に許してない。自用自動車を驅つて入園するには東の入口コーデー、南の入口ジヤクソンホールよりするもよい。

今ガーデナーよりする順路に從つてその景觀を叙述して見やう。

この入口に建てられたる石造の大アーチは一九〇三年時の大統領ルーズヴエルト氏によりて寄附されたもの、その扁額には有名なる左の銘が刻まれて居る、「千八百七十二年三月一日法律によつて創設され」「國民の恩惠と行樂の爲めに。」この入口を過ぎると僅かに五哩にしてガーデナーキアニオンの盡くる所、マンモス泉に出でる。

マンモス溫泉はテラースの上に流れる溫泉で湧泉、噴泉、流泉等質に石灰岩五彩の色に輝いた稀有なる一大溫泉系統であつてその悉くを詳細に見れば僅に數日の時間を要する。この邊りはまづ公園の中樞區で管理機關棟を並べてこの自然界に一團の人爲味を與へる。マンモスホテルはここにある。

このマンモス泉にはハイメンテレース、ミネルバテレース、クレオパトラテレース、ジユピターテレース、プルピツトテレース等の名で呼ばれるやうに色々な形がある。

總てこれ等は火山噴火の現象に伴ふものでこの溫泉の成層は地質學上極めて重要で又興味あるものとされて居る。

是等は純粹の炭酸石灰で地下の石灰層より溶解して流出し、溫泉の爲に熱せられた岩層によつてより以上熱せられた水は湯氣を立てゝ五彩の霧を半空に散じて居る。かゝる現象は今日ニユージーランドやアイスランドには珍らしいことではない。主なる色は黄、褐を基とし之れに暗綠と暗紅を交ぜた表面色を以てする。

マンモスとゴールデンゲートとの間のドライブを登ると三哩ならずして千尺の絕壁に直面する。ここがフードースと云はれ未だ何人も探り得ざりし原始にして、未開の境域である。石灰岩の特質に纒る自然現象として頗る興味ある成層がここに見られ、各方面よりこの理由を解明しようとして居る。

觀賞の旅は漸く進んでノーリスガイサーに向ふ。その途中ゴールデンゲートは最も美しい地點の一つである。ラステツク瀑布は高さ六十尺、高からずと雖もこのゲートの點景として第一に推稱したいものである。

ゴールデンゲートを去ること少しでスワンレーキ盆地に出る、ロツキーの高山草原として代表的なるもの、四周に永遠の雪を冠くロツキーの峻峰に圍まれ、アメリカインデアンの古代的なる生活振りはこの邊りに既に見られ得る。又秋より冬にかけては數百を數ふるエルクせ

[illegible]聳立する。左に聳ゆる山塞にはラチャン山、その西にはペくピーク、クォードランド山、一萬一千百尺のホームス山、何れも豆峻美しい雪を冠つて山巓に探險の勇士を俟つが如き姿態である。

北に距ること八哩、エレクトリックピークあり域内第一の高山一萬一千百尺の海拔高を有し、頂に北域の覇王とも云へる。

マンモス泉より直ちに南進すると二十哩、ここにノーリスガイサーベージンと呼ばれる大盆地がある。千八百七十五年に當時の公園長ノーリス大佐の手によつて探險されたものである。一八八一年以來この名稱が用ゐられる。六方哩の廣袤を有し、地質學的に見ても非常に興味ある地域である。

ノーリス盆地に於ける最も興味あるものはコングレスプールである。直徑四十尺、噴火の跡ではあるが靑磁色の滿々たる淸凉の水を湛へて一脈の淸新味を添へて居る。これに類したプールが幾つかある。エメラルドプール、ブラックグローラー等の如きである。

ノーリスガイサーと稱する間歇泉は著名なる泉の一つであつて七種の泉よりなり、高さ二十尺より百尺に及び、間歇時間十秒より四十分に及び、昇騰の時間は三十秒を最小とし、長きは三時間に達する。この一廓に於けるかゝる間歇泉の系統は實に奇觀とも稱すべく、ここより東西に道を岐つて東への一つは環狀廻遊路に、西への一つは前述したイエローストーン入口への一路である。

西入口は一九〇七年十一月に完成した最も利用率の多い入園驛であ

ミ、ゴールデンゲート[illegible]カノン[illegible]と云つてクリスマスツリーパークに[illegible]

この美しき盆地は西部の境界に沿うて幅三哩、長さ十哩、この間にしき黄松の疎林あり、その間にはメヂスン河と稱する清流を樹間に見る。その溪谷メヂスン谷の美觀は凡ての來遊者にこの國のグランドキァニオンと匹敵するだけの美しさとして知られて居る。

キボン河とファイアホール河との合流點にナショナルパーク山と呼ばれる山がある。これはメヂスン河の水源の地であつてこのメヂスンこそここよりメキシコ灣まで四千哩の長流の基點となる。

ローワーガイサー盆地は比較的廣い溪谷であつてファイアホール河の本流より初まり、廣さ三十乃至四十方哩、この中には無數の溫泉があり、その總數六百九十餘を數へ、就中その十七は間歇溫泉である。海拔七千二百尺、天を摩する密林である。

ここにファウンテンホテルと稱する優雅なる宿舍がある、溪谷の東岸に建ち、四周を大觀するに好位置である。

西入口より五十哩南してここに間歇泉の中心アッパーガイサーベーズンがある。四方哩を擁する三角形の地形ここに群る主要なる間歇泉二十七を數へる。この上部に亘つては四百の多數を數へるのである。

アルテメシア、モーニンググローリー泉、モーター泉等一々數へるに暇がない。一抱もある大きな黄松の樹林を前に、噴火の爲に死滅した悽慘な頃に焦熱地獄とも云ふべき熱泥の湖沼に濛々として立ち騰る白

煙の物凄さを眺め渡す時宜に地下に於ける地熱活力の威力に驚かざるを得ぬ。吹きこぼれたる熱湯の中に漂ふ石質の沈澱の爲に成層をなして湯垢の塔を堆め上げる。グロト間歇泉と云ふやうなのは正しくこれである。この近くにハンカチーフプールなど稱する湧泉がある。地中に生じたる洞穴の間を縫つて熱湯が渦を卷き環流してもとの位置に逆流するのを利用してこの泉の端に集るものは杖を手にしてまづハンカチを泉に投じ、一旦流れに押されて洞を一巡りしてもとの位置に戻つてくるのを待ち杖の先きで拾ひ上げる、一寸一興である。これに次でこの區域の最も著名なる間歇泉にオールドフエースフルと云ふのがある、世界有數の著名なるものである。六十五分毎に日となく夜となく、夏も冬もなく、昇騰する太陽の位置と風の吹き廻はしによつてその色彩の光景を異にする。月夜、星の夜、夕闇に入る前、日の出の前晴れたる日にも、曇れる午後にも、その景觀はいつも變つて見る目を喜ばす、吹き騰る高さ百二十五尺より百五十尺に及び、直徑二尺に達する、かくして三分を過ぎると再びもとの靜寂に歸り、ごと〱と音して地底深く姿を潜め行く。

この姿を正面より見得る所にオールドフエースフルインと稱する園内第一の木造建築がある。豪壯なる野趣滿々たる様式のホテルである。一抱以上もあらうと云ふ米栂の皮付丸太を凍に達するまでも高く立て並べ凡てが原始のまゝの姿を如實に見せて居る。殊に夜々をこの幽寂の天地に送る爲には唯一つの火床がある。寒い國の唯一の慰みは



ロツキー山脈中のアメリカインデアン生活振リ

[illegible]塊を以て積み上げてある。合宿の欄間も悉く動物趣味に[illegible]味に溢れて居る。その總工費二十萬弗一九〇四年に開設されたものである、夜は屋上のサーチライトによつて活動せる間歇泉は反照され愈々偉觀を加へる。

アッパーベーズンより道は東へ轉じこれより十哩にしてロッキー山脈の分水嶺を越えシヨンヨーン湖の溪谷に降り再び登り詰めた時に迂曲してこゝに再び分水嶺を越すので、更に十哩にして一路坦々たる高原を貫く大道をひた下りに下ると、遙に樹林の間碧紺を流した様なイエローストーン湖が「眠れる巨人」と稱せられる分水嶺の峻峰を背景にして眼前に展開する。蓋しこの邊りは雄大にして、壯觀、山と水と雪と森とに圍まれたる太古の姿そのまゝと云ふ感じがある、この分水嶺に東西に流出口を有する小な湖がある。一つはミズリー河の水源をなして太西洋に、他はコロンビア河の源泉となつて太平洋に注ぐ、共に彼の澎湃たる二大名河の源がかくの如き小さき湖であるかと思へば一種の不可思議を感ずる。

ウエストサンブはイエローストーン湖畔にあり、南入口ジヤクソンホールよりする道はこゝに於て相會する。

イエローストーン湖は海拔高の高きに於て世界有數である。南米ペルーに於けるチチカセア湖を除いては海拔七千七百尺の高度に於ける世界最大の湖であると云はれる。直徑二十哩、その形頗る不整、湖[illegible]に突出して對立する。

湖水には幾つかの島が連鎖をなして居る。ステブンソン島とフランク島とはその重なるもの、これを巡つてペリカン鳥悠々と遊ぶ湖水の北に沿つてイエローストーン河を切つて落すが如く北流させる。この分水口に近く東入口コーデーより相會する一路を併せたるジヤンクシオンがある。バーリントン線によつて東入口に達するには何れもコーデー目指して來るのであるがさして利用率多しとは云はれない。その分水口に臨んでレーキホテルあり、ウエストサンブよりここまで十五哩これよりイエローストーン河の大觀を擅にしつゝ十六哩の間を北上して河流に沿ひキアニオンジヤクシオンに至る。

キアニオンジヤンクシオンはイエローストーンに於ける自然美の大觀を擅にするに最も好適なる地域であつて西すれば前述したるノーリスガイサーに至り、北して本流を下れば有名なる化石林に至る。キアニオンに於てはイエローストーンの上の瀧あり、百十二尺の落差を有し、堂々として靜閑の境地に雄大なる素絹を展べる。これに隣つて數町の下流にはイエローストーン大瀑布あり、直下三百六十尺高さに於てナイアガラに倍し、水流豐富にして實にイエローストーン第一の壯觀と呼ばれるも過言ではない。これより下流一帶はイエローストーン大峽谷と稱し、モミ、タウヒ、マツ類の茂みを點景として、[illegible]、黄泥の砂流に飾られたる絶壁の下三百六十尺、殆ど垂直にたち切つたと思は

れる許りの底を悠々としてイエローストーン河銀箭の如くに流れて行く。アリゾナの大峡谷、ヨセミテの溪、ハワイのオロケレ大峡谷と併せて世界の峡谷美に於ける偉觀と稱せられる。これよりノーリスガイサーに至ればイエローストーンを一周してその景觀を盡したことになる。

ここより道を分つて二十五哩にして世界に於ける化石樹林の代表とも稱すべき珍奇にして再び人生に得難き天然記念物ヤンセーの化石林に至る。道極めて良好に、その景觀は平凡なりと雖もその化石樹の成因と當時地質時代のイエローストーンを追想する時に無限の感慨に誘はれるを覺える。マンモス泉よりすれば僅かに十八哩、同時にヤンセーは避暑地として唯一の好適地である。

化石林と稱せられ、化石樹と呼ばれるものは世界に類例かない譯ではない、然し天然の樹木の生育して居る場所にそのまゝ樹木か立ちなから化石したやうな例はこの外に絶對にない。地質時代に於てはロッキー山脈を蔽つて居つた樹種は明ではたいか、今日ではその斷片をカーネギー研究所に於て現に研究して居ると聞く。

かくの如き化石林で同じ研究中のものはイエローストーンの北界モンタナ州カラテン山脈である。その分布面積一萬四千町歩稍高い所ではリイオミング州の北イエローストーン河畔でこの河とラマール河との[illegible]

ペシメンリツチと云ひ化石樹の散生せる所の小[illegible]ーフオール、カツシエ、カルフイー、ミラークリーク邊にも散在する。この附近の河床を注意して散策する時は化石質の樹皮、木材の破片を得ることは難くない。

ラマール河の溪を横ぎると殆と垂直に切り立つた太く短い幹は點々として斜面に生へて居る。

ロツキー山の原生林に思ひのまゝの樹種か枯れては育ち、芽生へては枯れ交々と生ひ茂つて幾代かの蒙昧の霧に沈滯されたのは第三紀ミオシーン紀と稱する地質時代であつた。然もこの大森林は火山の爆發に會ひ灰と熱との爲に悉く埋もれ盡して地上は荒寥たる燒土に歸した。

然も植物の生育は一時的の天然災厄のみで中止されるべき筈のものではなく、燒土には再び蘚苔を生じ、下等植物を生じ、かくして幾百年をか經た後には再びもとの大森林を以て蔽はれる時代が來たものと云はれる。然るにこの大森林もまた再び火山爆發の災に會ひ再び燒土と化した。かくの如き地相と連續とを閲すること幾十代、マツ類の生育年限を二三百年とし、レツドウツドの如きを五百年乃至千年と計算し、かくの如き樹木層の重なるまでには少くとも一萬二三千年[illegible]たものと見做す、この繰り返されること十三回、かくして初めの[illegible]



ロブソン氷河

部分は空洞となつて化石する前に腐朽して終ふのでそのあとには美しいアメシストの結晶が出来て居る。アメシスト山塊の名の因つて来る所以である。

かゝる森林は今日こそは淋しげに廃墟の主人顔して立ち並ぶも昔は幾何の高さがあつたものか、これは興味ある一つの謎である。この謎を解くものは果して誰れであらうか。

今日のアブサロカ山彙は全くこの造山力によつて出來たものである。

然るにその後に於て又々幾度か火山爆發もあり、地殻の大變動もあり、曩に埋つた灰分の如き輕鬆なる成層は或は洗ひ流され、或は吹き飛ばされて、初期にこれ等の下に埋められて壓力と地熱との爲に木材が石化したものが初めて露出したやうな場合があつたものと想像してこの化石材を說明して居る。以上は大體ホームス氏の所說であるが必ずしも不當ではないらしい、附近のアメシスト山塊に就てこの發見者ウイリアム博士及び前ホームス氏の研究の結果である。

全區域を通じ最大化石樹幹は皮付にて直徑十尺、高さ四十尺、然し大多數は地上四五寸の處で折れ、伐根のやうな態である。樹體の中心

中條百合子著

定價 貳圓五拾錢
送料二十錢

長篇小說 伸子

四六版上製

最新刊

作品のうへに、かくも鮮かに、年輪のごとく作家の成育の痕跡を現はしたものは、稀である。「伸子もの」の力作を一纒めにし、中條氏の密接な關係にあつた生活の總決算が、卽ちこれである。夫と婦との愛の破綻、幻滅のかなた、人間精神の高き戰ぎに、暢々と大きな時代の轉機を感知したもの、萬人顧愛の長篇である。哀愛、切々の息吹、ヒロインの中のヒロイン、生ける伸子の苦患に泪なきを得ない。今、中條氏は勞農ロシヤの光の前に、旅姿の弧影を曳く。「伸子」一卷を手にしてわれら限りなき敬愛を惜しまぬ。

發兌 東京市麴町區內幸町 幸ビルデイング一階 振替東京八四〇二番 改造社

醫學博士 樋口繁次著

婦人の健康の爲に

四六版上製 三百十頁 數十葉圖解入

定價一圓 郵税十八錢

婦人は必ず一讀して下さい

產科婦人科の我國の泰斗、執刀術の第一人者たる樋口博士は信念と信仰に生きる人である、本書は氏が自分の病院に來る受診者に向つて一々懇切に說明する氣持で(一)婦人病の自覺症(月經、結婚、姙娠、分娩、產褥、帶下、出血、疼痛、腫物、尿利、遺傳)(二)診察(三)婦人生殖器の解剖(四)婦人病(發育異常、位置異常、損傷、炎症、腫物、正規姙娠、不姙症、異常の姙娠及分娩、子宮外姙娠)(五)婦人病の治療方針(幼女、處女、月經及月經時の攝養、精神、衣服、食物、運動、藥物、胎教、分娩準備、產褥、療病、精神療法、物質療法、理學療法、手術療法)、その他一切を圖解で嚙んでふくめるやうに說いた婦人生理書で、通俗で誰にも分り易く、すぐ處置の出來る樣にかかれてをる。處女たると、令夫人たるとを問はず、そして健康者たると婦人病者たるとを問はず、すべての婦人に必要な智識であります。病院に自分の診察を乞ふ前にこれ丈けの智識は持つてゐて下さい。でなくてはとりかへしのつかぬことになる恐れがあります。

發兌

東京市麹町區内幸町
幸ビルデイング一階
振替東京八四〇二番

改造社

三つの正月

神近市子

一

前文御免下され度候
娘澄へお手紙下され候處同人は一昨年病死仕り候に付お手紙は其儘返送致候間左樣御承知下され度娘在世中は御懇誼を蒙り居り死去の際御通知も不申上候段御海容なし下され度候

田澤熊江

十一月の始め、ある日私が受取つた一枚の葉書の文面はかうであつた。誰かの――恐らくは故人の兄弟の――代筆と思はれる文面に、差出人の感情を讀むことは不可能なことには相違なかつたがそれでもこの手紙の全部にどこか私は一抹私の感情を反撥するものが強ひても含ませてあるやうに感じない譯には行かなかつた。

が、その葉書をつかんで自分の机の前に坐わり煙草の煙を吐いてゐるうちに、私の心は何時かその薄つぺらな紙片を突抜けてその紙片が傳へる現實そのものに顏を向け始めてゐた。久し振りに人生の淋しさがシミ〴〵と身にしみるやうな氣がして來た。それは決して深くはないが、しかし深くないだけにもつと本質的な人間の悲しみであるがやうに感じられた。

私が吹く紫色の輪の向うで、キラリ白い齒が光つた。黒眼勝ちの美しい眼、スラリとした獄衣の後姿、丸味のある張りをもつた聲――

そして、そんなものがもうないのだ！

私は目頭が熱くなつて來た。

二

私は、二三日前に手紙を出す時、既にかうした豫感とも云へば云へる不思議な氣持の低迷があつたことを思ひ出さずには居られなかつた。長く疎遠に過ぎたことを詫びたり、自分の近況を報告したり、先方の動靜をたづねたりしてゐるうちに、どうしたハズミからであつたか受取人のない手紙を書いてゐるやうな心もとなさが心の底の方から

滲み出して來て、ともすると空虚な心でペンを運んでゐる自分を發見した。そして自分でそれに氣がつくと慌てゝ書きかけの手紙を結んだのであつたが、だがそれ丈けでもどこかに滿足の出來ない何かの氣持が殘つた。それで、

『是非生きて無事でゐるといふ返事を——それも一日も早く——書いて下さい。長く御疎遠に過ぎて來て、かうして思ひ出してお手紙を書いてゐると、マザ〳〵とした懷しさが涌いて來て、一日が尙ほ待遠しく感ずるのです。』と書き添へたものだつた。

その返事が、これであつた。

『あゝ、矢張り！』

手紙を書いて以來、打ち消しても打ち消しても去らなかつた不安がそこで現實の悲しみと入れ代つた。

先刻の幻影は、まだなか〳〵去らない。

稍々面長かの、全體としてのポーズがよく均整のとれた、美しい人であつた。稍々根上りの銀杏返しに髮を結つて、工場を出る時に慌てて穿かずにつかんで來た足袋を、紐のところで振り廻し乍ら、私が終日一人淋しく作業をしてゐる獨房の自分の監房に夕方戾つて來た。そしてかかりの取締りが三十に近い雜房の錠を下ろしてしまつてやつて來るまで、雄辯な口ほどに多くのことを語ることが出來る二つの黑燿石が、その寂寥と苦痛とを私に訴へた。

『おい、お前は泣いてゐるのか。』

こゝまで書いてゐると、夫が扉を開けて入つて來た。

『悲しければ私だつて泣くさ。』

夫はだまつて、私から葉書をうけとつた。

『なあんだ。ズウ〳〵鼻をならしたりすると氣になるぢやないか。』

夫はかうぶつきらぼうに云つて出て行つた。が、彼も悲しさうだ。

彼女は田澤滋子さんと云つた。

今はどうか知らないが、私共がゐる頃は八王子の監獄には獨房は十房だけであつた。その十房の中の向つて行くとつゝきの左と右に私と田澤さんとが向ひ合つてゐた。あとの八房には未丁年者だとか比較的に若い犯人が置いてあつた。

不思議な因緣で、私は田澤さんのあと、あと、と監獄を追つて歩いた。橫濱、東京、八王子といふ順序だつた。

橫濱の監獄には、もう七十からになる女の部長さんがゐて、この人が田澤さんの話を始終してくれた。シッカリとした人ではあつたが、決して骨つぽい人でもなければ杓子定規の人でもなく、深切によく皆の面倒を見てくれた。閑を見ては每日話に來てくれたが、その時よく『中根、中根、』と云つて田澤さんの噂をした。中根といふのは田澤さんの夫の姓で、田澤さんはその夫との間を引分けやうとした姑を怨んで傷を負はしたので、ほんの擦過傷位ゐの傷に、、年もの不當の刑を當てられて來てゐた。

監獄の名が出た序に三つの監獄を比較して見ると、何と云つても橫

瀧の監獄は一番よかつた。あれも地震で倒れたのだらうが、女監の私共が入つてゐた新築の方は廣くて綺麗で明るくて、それに役人達の氣風が一體によかつた。

東京には私は何故か一晩しか止めて置かれなかつた。多分若い典獄補が何か事面倒に感じて慌てゝ八王子に送つてしまつたのであつたと思ふが、そんな譯でこゝ許りは印象も何もなかつた。(つまりそれが典獄補の思ふ壺であつたのだらう。)收監者が多いと見え、只だザワ〳〵と騒がしく又廣々としてゐたやうであつた。大逆事件の時から勤めてゐたといふ部長さんはこれも極く老人であつたが、顏とは反對にやさしい深切な人だつた。

ところで八王子と來たら、何と云つてよいか全く『下の下』(いやな言葉であるが、分監長から囚人全體が貰つた形容詞であるから、それを返上しようと思ふので。)であつた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

田澤さんは、毎日工場に出るので、雜房にゐる刑期の長い人達から聞くと見えて、前の分監長の時迄は、囚人の夜業もなかつたし、食物なども遙かによかつたと話してくれた。さう聞いて見れば私達が入つてからも食物は質も量もドン〳〵落ちて行つたから、何か、、があるに相違ないと、んでゐたら、その分監長が止させられたと聞いたのは、出てからいくらも經たない頃だつた。

何でも監獄の増築問題にからんで、、をしたことが曝れさうになつて、僞がつかないうちに前より惡い地位に廻されて東京によび返されたと聞いた。、、と云へばもう一人累犯の人などゝそれは聞くに堪へない野卑な罵り合をすることのある取締りがゐたが、この人は監獄の、、、、、、免職になつたといふことだつた。この人はそれ迄も工場の、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、囚人に見られてゐたらしい。

『ヘン、、、、、、、だい!』と、、、の強の者にやられてゐたことがあつた。

こゝの部長は又いやな人だつた。矢張りお婆さんであつたが、繭問屋とかの、、、が内職だといふ惡い噂が監獄内で專らだつた。たゞ意地が惡くてこす狡くて、私や田澤さんのところに來た時の猫撫で聲とは反對に、廊下に立つてゐる年老の取締になど當つてゐる樣子は憎らしかつた。

その年老の取締は、鳥居素川氏の姉に當ると云つて居られた。元、京都で典獄を勤めた人の夫人であつたさうで、分監長など、昔はその部下に働いた人であつたといふことだつた。昔は何れ多くの叩頭と追従とで惱ましたことであらうに、この立志傳氏は少しも舊上官の未亡人を劬はるやうなことはなかつた。寧ろ媚たがつて止させやうとばかりするので、所長の情を知る部長その他の出樣が、自然鳥居さんに冷たくなるものゝやうに側で見てゐると感じられた

こんな譯であつたから、鳥居さんの親しみは、何時も囚人の方によ

り多く向けられてゐた。いゝ人で、上長の眼さへなければ、囚人がどんなことをしてゐやうと自分は居眠りでもして居ればいゝのであつたが、部長や意地の惡い同僚の眼の光るところに來合はせると、今迄囚人を劬はつて來たといふ自分の意識に照れて、急に突飛な大聲をあげて囚人を怒鳴り散らすことなどあつた。が、鳥居さんの好人物を知つてゐる囚人達は、何と云はれてもクスクス笑つて從順にその後をついて廻つてゐた。

監獄を出て少しして書いた『夜の謎』といふ戯曲は、大正六年の冬の情景を書いたものであつた。あの中に出てくる、頓狂でユウモラスな老人取締は、鳥居さんをモデルにしたものだつた。この人が夜勤をする時は、監獄は一番樂しかつた。忍び足をして來たり、立聞きをしたりして囚人を陥れ、分監長に精勤を褒められやうといふやうな殊勝な心掛けが少しもない人だけに、監獄全體が明るく騒々しかつた。私などもこの人がどうして居られるかを詳かにしない今、こゝに一々書くことは出來ないが、鳥居さんには忘られぬ好意をうけた。長い夜業に退屈すると、見廻りに來た鳥居さんを呼び止めて、一時間位世間話をしたものだつた。

この人は又田澤さんがペットの一人で、何かで氣のはずむ時には、『どうや、八ちやん!』などゝ云つて、窓口から覗き込んでからかつた。田澤さんの獄名が、八號であつたからだつた。

『今ね、自宅のことを考へてゐましたの。あゝ、早く歸りたい。そして牛の味噌漬がたべたい……』

田澤さんの故郷は、牛の産地の兵庫だつた。

『詰らないことを考へたもんだて……』

かういふ鳥居さんの聲は、しかし暖かだつた。

『そうら、神戸の牛の味噌漬け!』

かう云ふと一緒に、鳥居さんの右の拳が田澤さんの覗き窓の中に突込んであつた。それは單に戯談であつたか、それともその拳の中には何かゞ入つてゐたか、それは私は知らない。

もう一人、夜勤の時にはよく私のところに來てくれる金山さんといふ取締りがあつた。この人も鳥居さんと同じ位の年老であつたが、氣前も腰もシヤンとした、確り者だといふことは一見して知れた。この人だけは新聞をよく見てゐた樣子で、何かで大杉氏が檢束されたりなんかすると、手を切つてゐてよかつたと云つた風で、的違ひの慰撫の意を込めてすぐ知らせに來てくれた。どこかで大杉氏が丸焼けに逢つたと云つて、イソイソと教へに來たこともあつた。

この人も、分監長や部長には煙たく思はれてゐる派の方の人で、私のがゐる頃から恩給がつくとすぐに止すと云つてゐたが、震災の前年止したからと云つて訪ねて來てくれた。そして八王子の監獄で老人が激減されなかつたことには理由があると云つて、

『つまりさ、老人には勤務以外の、、、が出來なからうといふものですよ』と云つて、暗に分監長が若い取締り達の、、、、、して憚らな

かつたことを意味してゐた。が、それより更に新しい意味に聞いたのは あの監獄の高い部長が平取締りに落されたといふ話だつた。

つまり、前に書いたやうな譯から、分監長が交代すると後に來た人は綱紀を締めると云つた意氣込みからか、高いものを落し低いものを上げたりしたものらしい。そして部長は平取締りに落され、工場係りか何かであつた中年の親切な取締りが部長に擧げられたといふことだつた。

『あの、威張りくさつた部長が、夜勤なんかさせられてゐますよ。』

『止したらいゝでせうにね。新しい人はやり憎いでせうに。』

『愁から、噛ぢりついても居られる間はゐようといふのでせう。それに連れて他の取締り迄が二つに分れて、すつたもんだやつてゐますよ。』

私は、人生のことは偶には二一天作の五と割切れることもあるものだと思つて、スーッと胸がすくやうな感じがした。

多分鳥居さんも、さうなれば比較的氣樂に年限だけ勤め上げて、恩給を貰つて無事にどこかに引退してゐらるゝだらう。

三

私は大正六年十月の始めから服役した。無論同年の二月横濱で第一審で四年の刑期を云ひ渡されると同時に保釋になつて出てゐたので、それが第二審では二年になるし、少しの間の獄中生活で自分が進む道もどうやら見當がついたし、それ以前と比べて遙かに[illegible]に入つてゐたことは事實であつた。しかしまた何と云つても古い監獄の記憶がこびりついてゐて熱愛の小兒病から脱出することが出來なくて、心で人を怨み憎けることを止めてはゐなかつた。

私がこの小兒病を完全に脱離して、野枝さんの生涯などについても、どこか私からは遠いところに存在した生涯のことででもあるやうに、冷靜に客觀的に見ることが出來るやうになつたのは、まだこゝ一年か二年のことである。

『時は癒治者だ』といふ言葉があるが、私をこの心境に連れて來た者は、單なる時ばかりでもなかつたやうにも思ふ。こゝ二三年の間に、古い驕れる者を置去りにするやうな勢で進出して行つた無産大衆の行方を見て、何時かそれらの情熱の中に自分の全身を溶け込ませたいといふ希望を持ち始めた時に、過去の生活の記憶が古い鱗が落ちるやうに私の心から放れ落ちて行つた。

監獄で送つた三つの正月の中では、矢張り服役してから最初の大正七年の正月が一番辛かつたかと思ふ。

八王子は、武藏野の眞中にあつて冬は秩父颪が猛烈に吹きつける。監獄は町の南の端れにある小高い丘の中腹にあつて、この山颪を受けるには誂へ向きに出來てゐた。私は、この監獄の、冬は少しも陽の當らない北側の監房に監禁されて二年を過した。

『横濱ならよかつたな。』

私は、何度もさう考へ〳〵した。横濱の部長の見込みでは、私の犯罪では四年は輕い方で東京に行つても輕くなる見込みはないし、同じなら自分のところで服役させ、働はつてもやり、成績も擧げさせて一日でも早く假出獄にさせたいハラであることは充分見えてゐた。

『中根も私の云ふことを聞かずに行つたが、重くはなつても輕くはなりさうもなくて下りたのだけれど、下りる時はそれを悔んで手紙をよこしたつけ。』

部長は私の不信を詰るやうにかう云つたけれど、結局私は四年のものが半分に負かつて二年になつた。

田澤さんの部屋は南側で、冬はよく陽が當つた。私がそれを羨しがると、

『横濱もよかつた』と、田澤さんがいふのだつた。

『横濱にゐるとよかつた！』

『私も。二年にはなつたけれど、横濱にゐれば假出獄で乾度こゝでより早く歸れたと思ふ。』

一坪ほどの監房を背負つた蝸牛のやうに、私共は出ることの出來ない監房の中から顏だけ見合はせて憐み合つた。

その夜は、私は極つて横濱の夢を見た。明るい、よく陽の當る監房。海に近い空氣。おとなしいクリスチヤンの監獄醫。（八王子では、醫者まで、、、、のやうな男だつた。）私は今でも週期的に横濱に住んで見たいなあ、と考へることがある。

正月が近くなると、寒さは段々と強くなつ

い寒い年で、正月迄には三度も相當の量の雪が降つた。私は自分の監房の中にゐたから、冷たければ懷手はするし足は着物の裾の中にくるんで坐りはするし凌ぎよかつたが、工場に出る田澤さんは汲み置きの水で氷を割つて顏を洗つて、工場で素裸かになつて着物を着替へるのが辛いと云ひ〳〵した。

『さあ、皆お正月には御馳走があるぞ。シツカリ夜業をやれ。』

鳥居さんがかう觸れ歩いたのは年の暮の二十七日か八日の夜で、その日は炊場の方で終日餅搗きの音が絶えなかつた。

翌日の日曜は、午後は風呂と爪切りと顏剃りとで、監房の扉は開けつぱなしであつた。そんな時は取締り達は忙しくて居殘りの少ない人數では充分監視は出來ないので、囚人はお祭りの氣分であつた。獨房では向ひ合ひ同志が入口の際までにじり出して來て、話がはづんだ。私も田澤さんと腹一杯の話ができた。

『正月には、三ケ日こんな大きなのし餅を一つづゝくれる。』

『御馳走はある？』

『お菜が三度々々つく。』

『お正月がすむと二月。三月が早く來ればいゝ。』

『私は毎晩自宅に歸つてゐる夢を見る。』

『私は毎日一度づゝ、出る日が何曜日に當るか計算して見る。火曜日になることもあるし、金曜日になることもある。』

「私は、あと何度其様の正月を迎へるか勘定して見たことがある。」話は他愛なかつた。

その頃となると、夜は淋しい北風が手にとるやうに街の雑音を運んで來た。

晝は第一に工場の騒ぎがあり、役人達の往來も多く何くれとなく紛れてゐるが、夜監獄内がシーンと靜まり返つて來ると、反對に街がそのおどけた生々とした音響で監獄内に侵入して來た。賣り出しの樂隊がセカ〳〵とおどけた調子で譜を刻んで行くと、ワーツ、ワーツといふ聞衆の聲が起り、犬が鳴き子供が走る。

ごく稀れには人の不確かな話し聲も痰を切る音も聞へた。

社會にゐる人凡てが凡て、決して樂しい正月ばかりを迎へるのではないことはよく知つてゐても、私共はそれが高い塀一重向うにあるといふ丈けで、社會にゐて最も不幸な人でさへ、私共よりはどんなにか幸福である者のやうに考へ勝ちであつた。

大晦日には半日で仕事を休んで、午後は髪を洗はせて貰つて監房で本をよんで暮した。が、心を感傷的にしまいとしても、ともすると母の許で送つた頃の大晦日の忙しさ賑やかさが思ひ出されて、甥や姪が母をとり卷いてゐる郷里の爐邊がなつかしまれ氣持が滅入つてしかたがなかつた。

この日は、夕飯に祝煎りのうどんのお汁がついて來た。夜は教誨師は夜半まで居殘つてゐて、監房を一つ〳〵訊問して廻つた。平生はこの人のしつこさにホト〳〵閉口をさしたものであつたが、この夜だけはその信念の厚さ、その女らしい親切の深さに一寸頭が下つた。

四

翌日は、愈々元日だつた。朝起きて考へることは、一年の計でも一生の發端でもなく、いかにも懲役人らしく今日は餅が喰へるなあ、といふ位のことだつた。

が、それにしても今日は珍しく皆が朝から監房に揃つて食事が出來るので、それが又事變つてゐて私は心が浮々と樂しかつた。監房の扉が開いて掃除がすむと、何と思つたか舞踏病の無期囚が監房を全部年始に廻つた。無論役人に見付かつたら正月の朝から、、、を喰ふ位な私共の經驗によると、、、、罰ではないので、皆ハラ〳〵として見てゐたが、幸運にも朝食の分配に血眼になつてゐる取締りの眼を免かれた。その無期囚はこんな半ば狂つた頭から夫の行爲を誤解して夫を殺して來てゐる不幸な女であつた。私に三ケ月ばかり後れて八王子には來たが、私が歸つた年の冬に死んだといふことだつた。

愈々「炊場」が特有の騒がしさを先に立てゝ監房の廊下にやつて來た。

『お食事ですよ。』

聲をかけられて、私は慌てゝ立上つた。窓口を見てゐると、一合六勺の御飯と一緒に押し出されたのは、厚いボール紙よりは稍厚い位

巾一寸五分長さ三寸五分位ののし餅一切れと、竹輪蒲鉾一片とであつた。その他には味噌汁の實がさう思つて見れば平生より芋とか大根とか身につきさうなものが入つてゐる位のことで、畫いてゐた喜びが大きかつた丈けに、どこにも『正月』を見出せなくて、私はひどくガツカリしてしまつた。

が、どんなに、、、、、、され、、、、、、、れても、偶然より外にはこの問題に干渉を持つことは出來なかつた。囚人の聲は風が消してしまうし、長官がゐる東京は遠かつた。

諦めた私は、陽氣を持たぬ餅は味噌汁の中に摘み入れ、、、、、、、、や情なさと一緒に呑み下した。

晝は囚人が一番よろこぶ精進揚げであつた。何時もの四分六飯から、小豆も少し入つて居れば赤飯といふのだつた。赤飯に精進揚げとあつては一年に數へる程のデインナアであつた。

この夕方、ゴマメの煮附けが來てその煮汁がウンと餘つたのを、朝の食事の鹽分不足に懲りてゐた私は、返へすのが惜しくて湯呑みの中にとつて置いた。

無論監房内に食物を蓄へるなどゝいふことは、嚴禁されてゐるので、それが發見されたが最後、どんな懲罰を食ふか知れたことではないのであつた。私は醤油の匂が洩れるのを恐れて、湯呑みの上に小型の本をのせ、その上に土瓶をのせて棚の隅に役人から見えないやうに置いた。

二日の朝が來た時、私は今日こそは甘味しい餅が喰べられると、ソワ〳〵と喜んで差入口の窓の前に立つたものであつた。が、何と期待は見事にはづれたことか！『炊場』は何時もの朝の献立通りを投り込むと、サツサとすばやく通り過ぎてしまつた。

二日の午後は、初教誨があるといふので、囚人がゾロ〳〵と全部私共の監房の前を通つて教誨堂に入つた。最初のうちはどんな人が來てゐるかと思つて囚人の行列が通ると退屈まぎれに顔を擧げて見てゐたものであつたが、私だと知ると若い累犯の人などが悪口して通るので、（それが一種の好意からであることは、その時の私にはまだ理解できなかつた）その頃ではそれも止してしまつてゐた。が、その代りにその日は教誨師はと思はれる頃、退屈凌ぎにフトンを足臺にして窓の鐵柵につかまつて、心ゆくまで戸外を眺めた。久し振りに、拘束されることなしに眺める空だの太陽の光線だの木だの土だの、不思議な魅力をもつて私に迫つて來た。何時か自由になる日、これらのものが皆自分の所有になるといふ事實が、何だか嘘のやうで仕方がなかつた。

五

どうしたハズミであつたか、この時私は偶然この高い窓の鐵柵の間から小さな硝子の破片を拾ひ出した。餘り思ひがけない拾得であつたから誰かどこかに隱してでも置いたのかと思つて尚ほそこを探してゐたら、機械に使ふ梭の管をさすに用ゐる、よく磨いた細い竹の棒が出

て來た。この二つは、半年程して運動に出されてゐる間に、私の監房にきでも見付けやうとして入つたらしい生意氣な中年者の取締りに探し出されたが、それ迄は私の大切な玩具であつた。硝子の方はよく磨いて黒い本の表紙を裏にあてゝ鏡に使うし、釘さしの方は本の栞につかつた。半年後探し出された時は部長や教誨師からひどく迂論臭がられ、出處を嚴重に糺されたけれど、前云つたやうな譯で偶然探し出したのであつたし、又拾つた物を部屋に置いてはならない規則も一向聞いてはゐなかつたといふ譯で許された。

これもその時分であつた。隣りの監房にゐた四年の放火犯から、織機糸の屑で造へた小さな草鞋を貰つたことがあつた。どうした譯からか、監獄から持ち出した草鞋は安産のお守りになるといふ迷信が行はれて高い値段で買ふ人があるとかで、累犯の人など指の間に入れたり髮の毛の中に突込んだりして持ち出すと前に聞いたことがあつた。從つて囚人の間でも草鞋の製作が仲々盛んである樣子で、私が貰つたものなども實に精巧に小さくよく出來てゐた。

この草鞋の方は、仕事袋の中に入れて可なり長い間持つて樂しんだが、どうも見つかりさうで、又見つかると呉れた人に傷をつけることになりさうなので怖くて、何時か紙にくるんで便所の中に落してしまつた。

かうして餅も御馳走も不足はしたが、三ケ日と五日の新年宴會當日とは、晝と晩とはそれでも腹一杯食物は貰うし、私は平均して七分か八分以上の成績を上げてゐるといふので監房には本を入れて貰し、あとはノビ／＼と本でも讀んで居ればよいので、監房に居する時は滿更でもない位に思つて呑氣に構へる氣分になつてゐたやうであつた。その代り、それがすむとそろ／＼寒に入るといふので、一方では又ひどく悄氣てゐたことも覺へてゐる。

けれど、いざ寒に入つてしまうと、お天氣は毎日續くし、日は少しづゝでも長くなるし、氣持の上では晩秋から初冬にかけての頃より、陰慘な氣持でゐることがズッと減つて、愉快に晴れ／＼として來た。そして寒が半ばにもなると、もうあとは寒さも退く一方だと自分を慰めてゐたものであつた。

話は甚だ飛ぶが、次の大正八年の正月はこの七年の正月より萬事に陰慘な度が遙かに少なかつた。もう監獄の生活には慣れ切つてしまうし、これが最後の冬だといふ氣の張りもあり、前年ほどには深い感動も起さなかつたと見え、記憶してゐることは却つて前年のことが多い。

鳥居さんとも話の種もつきたし、田澤さんは晩秋頃から翌年の春迄ズーッと病監であつたし、隣りの放火犯も假出獄になる準備に炊場に出された。それで私は正月もほんとの獨りぼつちであつた。

が、この冬は流石に丈夫な身體もいくらか弱つて來たと見え、胃腸の障害のあと猛烈な神經痛が起つて來て、春が來る迄起居が自由でなかつた。そしてそれが私の痼疾となつて今でも油斷をするとそれにや

られることがある。

今考へて見ると、肺病だとばかり考へてゐた田澤さんの病氣も神經痛も出てゐたやうな氣がする。大變痛んで病監に移る時などは、立てなくて衛生係りの囚人に負はれて行かれたことを覺へてゐるが、この夏古いものを整理してゐたら、出獄するとすぐ田澤さんが自分では書けなくて看護婦にでも代筆をさせて書かせてくれたらしい手紙が出て來た。これで見ると田澤さんは私が出獄してから二ヶ月と一寸で出て來てゐる。日附は十二月二十五日としてある。

いよ〳〵おしつまりました。お變りは御座いませんか、お伺ひいたします。在監中はあなた樣に御同情申上げてお慰め致したいと存じましたが、何分御承知の通りで思ふ儘にならず殘念で御座いました。それで早く自由の身になつて、思ふまゝに悲しい思ひ出を語りたいと存じました。

あなた樣が放免なさる晩は、私は眠られずにのぞいて許り居りました。後は非常に淋しくて監房に歸つて來ると、毎日泣いてばかり居りました。……お蔭で假出獄になりました。早速お目にかゝりたいと存じましたが、官の命令された日に歸住地に到着いたさねばなりませんのでどこへもお寄りせず兄の迎へをうけて急行で歸りました。一家の喜びは筆にも口にもつくされません。本當にお察し下さい。母から伺ひましたら深切なお手紙を下さいました由非常に喜んで居りました……歸宅後は早速お手紙差上げたいでしたが、御承知の通りの病人ですから見舞客の應接などにつれ失禮して居りました。又昨年の病氣再發いたし只今にては仰臥のまゝ看護婦さんのお世話になつて居ります。今日あたりは熱も下り食事も少々頂けました。醫者はまだ一寸起して貰ふことも止めて居ります……あなた樣も獄中でお身體をお痛めですから尤分御養生下さい。何卒いつまでもお見捨てなく御交際を願ひます

………

尙ほその次に來た年始狀には、再生の喜びを細々と書き、私が書いたものを讀んだと云つてその感想を書いてよこしてあつた。

病氣は自體が肺病であつた上に營養不良と腸の障害とでよほど重患であつたらしい。どうしても四五ヶ月はかゝると醫者は云ふとのことであつたが、大正九年の夏一旦は起き上つたのが、冬が來ると又矢張りいけなかつたやうであつた。

『結婚の話も何回か持出されたが、前科者といふことが障害となつて、矢張り旨く話がまとまらない』と云つて來たのは、十年か十一年頃であつたらうか。それから又間もなく來た手紙は冬であつたがひどく絶望的で、恐らく永久に一年の半ば以上床の中で生活しなくてはならないだらうと書いてあつた。

『もう半ば廢人になつてしまつた。』

私はから書かれたのを讀むと、無性に悲しくなつて、夜通しに日記の手紙を書いたことを覺えてゐる。その後田澤さんを大變に愛して田澤さんも愛着してゐた兄さんが亡くなつて、急に寂寞を極めた田澤さん母子の生活を、私は遠くから思ひやつたものであつた。そのうちに私の方では一家が順々に病み、私はそれにかまけて二三年田澤さんを見失つてゐた。

『屹度社會で逢ひませうね。』

『屹度。待つてゐます！』

放免の朝、私共は長い友愛の決算をつけるものゝやうに、別れを惜しんでから言葉を番へた。だのに、何故あんなにも不信を敢へてしたらう。何故自分から進んで、飛んで逢ひには行かなかつたどらう。悔んで返らない過去である。生命を濺んで、何時か何時かと思つてゐる間に、かぼそい方の生命の火が、生存の嵐に揉まれて消へてしまつたのである。

私の心は暗い。

六

この原稿を書かうと思ひ立つた時、私は大正六年から八年迄の三つの正月を順に書いて行かうと考へた。ところが田澤さんの死を知つて見ると、監獄のことを考へてゐると自然田澤さんへの思慕が私の心の大半を占めてしまつた。そしてこんな大正六年の正月を中心とした思ひ出のやうなものが出來上つてしまつた。が、最初の豫定の三つの正月にあつたのであつて見れば、私はこゝで横濱の監獄ではどんな正月を送つたかを一寸書き添へて置きたいと思ふ。

暗い八王子から明るい横濱へ！　周期的に、私は今でも横濱に住んで見たいと考へることがあるといふことは、もう前に書いたと思ふ。それほどに、横濱での追憶は何もかも明るい。

これもこの間古いものを整理してゐた時に出たのであるが、大正七年の年末近くに、友人に當てゝ書いた手紙の一節に、私はこんなことを書いてゐる。

…………

監獄の凄じいほどに靜かな夜が來て、川端を走るらしい電車の音か街の犬の遠吠より外には物の音も聞えぬ頃になると、水を打つたやうな監房のどれからか、チ、と鼻をかむ音がよく聞えます。私はそれでも何かに紛れてゐても、夜が來れば親のこと子のことを思ひ出して、涙にくれてゐるのであらうなどゝ想像して、書物に讀み耽つてゐる時などでも、私は矢張りその悲哀に引込まれて涙を流してゐます。けれどもさうした發作が今日は私自身の上に來て、自分で自分を押へることが出來なくなりました。恐らく今夜は私の悲哀が、凡ての監房の人々の悲しみを誘つたでせう…………

多分この手紙を書いた頃は、横濱の未決監の十ばかりある監房は滿員だつた。それが年末近くなると、(役人も年末は氣が急くと見へて)服役するもの、保釋になつて出るもの、釋放されるもの、それ〴〵の自分達の道に出て行つてしまつて、私の外に殘つたものは二人の放火嫌疑犯だけであつた。一人は十六になる娘で、他の一人は七十餘りの老人であつた。私はこの二人と一緒に大正六年の正月を迎へた。

娘の方は、十七になると間もなく一年の刑に執行猶豫がついて歸つて行つた。田舍から蕎麥屋をやつてゐる横濱の親戚のところに來て手傳つてゐるうち、その家から火が出てどうしたことからか嫌疑をかけられたのだつた。前に書いた年老の部長はこの娘の無罪を心から信じてゐて、火は客が捨てたマッチから起つたものらしいと云つてゐたが、無論證據などあらう筈はなく、許されては檢事からの刑事理由立てゝ、一年近くも繫がれてゐた樣子だつた。悲しさうな顏が人を見る時僞しさうに瞬いて、若い經驗を持たない心が、どんなにか痛ましく傷つけられ、それを深い忍從の心がヂーッと堪へてゐるのがよく分つた。

老人の方は農婦だつた。若い時から苦勞をして造つた身上を、息子が粗末に扱ふのが不就であつたところに嫁との折合ひが惡く、そこに火が出たので嫌疑が彼女の上にかゝつたものだつた。『お祖母さんがつけた』と、嫁が近所の者に洩らしたのが嫌疑のかゝる原因になつたと云つてゐた。老先きの少ないことを知る無智な心が、絶望的になつて世を呪ひ自分を亡ぼす姿は、傍で見てゐられなかつた。が、これも法の拘束に驚いて、公判の時に檢事の前に自分の失言を泣いて詫び、決して腹からさう思つてゐたのではなく、火は多分老人が自分に賴まれて納屋の物搜しに入つた時ともして行つた松明の火が落ちて發火したものだらうと姑の爲めに辯護し、自分の失言で姑が罪に落ちるなら自分の方を罪に落してくれと土下座をして判事を拜んだといふ喜劇が、さすがの役人の心をうごかして、これも間もなく過失罪として輕い罰金で刑はすんだ。

けれど、そんな事はまだ後の事であつた。正月にはまだ誰れも一ヶ月か二ヶ月後にはそこを出られやうなどとは夢にも思はず、出て行つた人々が殘して行つた空虚を見詰め自分達の不幸を悲しみ合つて、不幸な正月を迎へることに自分達の心をむけてゐた。

正月には、娘の方は風邪を引いて寢込んでしまつた。そして可なり長く監房にばかり入つてゐた。それで午後一時か二時にする運動は、私と老人と二人切りであつた。

運動場は、洗濯場の前の日當りのよい暖いところにあつた。そこに老人と二人出て命じられた通りにグル〳〵歩いてゐると、老人の方が息を切らしてしまつて、枯れた芝生の上に居坐わつてしまうことがあつた。と、私も一人で歩き廻るのが馬鹿々々しくなつて、老人と並んで二人日光浴をして時間を潰してしまうのだつた。取締り達も、後に

は鐘とも干渉しなくなつてしまつた。

そこの運動場の隅には、何といふのか見慣れない種類の木が二三本一隅の方にあつた。それは餘り高くはならない種類の木で、かなめの葉とは又チヨツと小ぶりな葉が長く――十二月の頃までもついてゐた。

ある日、私はこの木の葉の落ちたもの丶後に、もう鮮赤な芽が形をも待たずにチヤンと出來て、今にも伸びようとして形を整へてゐるのを發見した。

舊い生命が終らないうちに、もう新しい生命が芽ぐんでゐた。新しい生命は、舊い生命の存續を憐んでゐた。

私は、急に自分自身を振り返つた。そして自分の中にも、その木と全く同じ作用が行はれてゐたことも發見した。私は、古い生活を踏み越したあとに、始めて新しく生きる道が内にも外にも開けかゝつて來てゐることに眼を開いた。

二月の後、私は保釋になつてそこを出た。

法被を着て

新村　出

昭和二年の八月、私ははじめて高野山に登つた。それは改造社の主催にかゝる文藝講演會の科外の小話をするためであつた。長男Ｈが遍照光院の大雅堂の襖繪をみたいから連れていつてくれといふのを同伴して、八月十四日の朝、大阪經由で高野電車で登山の途についた。山駕籠にゆられながら、涼しい山蔭を、古杉老檜のそびえたつ谷あひを見あげ見おろして登つてゆく氣持は、夏を忘れ世を離れさせて、なるほど時々はかういふ山岳趣味もすてたものでないなと思つた。紅葉谷あたりで、下山してくる阿部次郎君と山本社長とに出あつた。あちらは徒歩だ。二言三言ことばをかはして別れたのは物足りなかつた。古建築精華の著者として知られ又高野通なる岩井雍南君の先容を以て、私たち父子は親王院に投宿した。院主水原堯榮師は、高野版本の研究家として著名な學者でもあり、その說に從へば、當院は私の讚仰し奉る所の眞如法親王の御由緒のある名刹でもあつたからである。

夕かた風呂からあがつてくるや否や、院主はもう野山版のかずかずをもつてこられ、法親王の尊影と傳ふる一幅の掛物を壁間に懸けて、應接のひまなきばかりに、懇切に說明してくれられた。翌日の午後に私がするはずの講演は、「高野山上よりヰリアム・モーリスを想ふ」といふちと仰々しい演題であつたのだから、中世の高野版をかれこれと提示されて、それをゆつくり目睹攷究することの出來たのは何より珍重であつた。私はその夜三寶鳥をきゝにゆく風流氣を起さず、ひたすら野山版に親しみぬいた後、月さえてひえびえする初更のころ、兒と共に寢についた。二十五年來親子だけの旅行はこれが最初であつたから、老いゆく私にはこの行はうれしくてたまらなかつた。而もそれが高野の山中である。芭蕉の名句もおもへば、苅萱の故事も連想される。こんな由なきことを考へながら、私は安らかな眠りに入つた。

翌朝私は水原師に導かれて、舊臘炎上した金堂の跡をとぶらひ、靈寶館に入つて出陳の名畫や彫刻を見た。惠心僧都の彌陀來迎圖のあざやかさ、佛涅槃圖のうつくしさ。大師の名筆と西行の文書、それらにも飽かずながめ入つた後、私は院に歸り、午報のサイレンのひゞきやラヂオのおとなひやらに、いさゝか中古中世の夢を破られ、午食をした

ためて躊躇なく贅澤なる千疊敷ともいふべき大會堂に入つた。私はまづこの自然と藝術との融けあつた空氣を満喫したあとで、中世的ともいひ得べきこの聖境に於て、中世主義の權化ともいふべきヰリアム・モーリスに對する私の憧憬の情をのべる機會の與へられたのを喜び、大師讃仰の聲のうるはしき高野版の逸品を賛美し、歐洲中世期の書風乃至近世初代の活字本の流れを汲まうとしたモーリスのケルムスコツト版を鎌倉時代の野山の大徳の業績に結びつけつゝ、モーリスが社會主義に奔りながらも、當代の商業主義をのろつて中世を憧憬し、殊に古活字本の復興を十九世紀末に試みた高邁な意氣を敬慕し、一切の書物裝幀術のほか更紗ゴブラン織壁紙等あらゆる工藝美術に手を染めた偉大さを彰揚した。辭及ばず時足らず十分に意をつくすことは出來なかつたものの、モーリスに對するあこがれの念はほぼ満たすやうな氣がした。私は幸にまだ高野の俗臭をかゞずに、昨日は物すごくそゝりたつ古杉老檜を俯仰し、今日は金堂の燒跡と名寶の靈氣とに接したばかりであつたから、單に野山の寺々を遂に見ずにゐるカンターベリーの伽藍と連想しなどして、まつしぐらにモーリスの精神に觸んと欲して、夢を作つてたのしんだのであつた。挿話の最後のことばとして、私は改造社が更に進んで印刷藝術をおこしモーリス流に中世式書物の製作に力を竭くすの日の來たらんことを希望をのぞむがごとく夢想するといふことを述べてひきさがつた。私の夢物語は二時間近くつゞいた。聽衆は百にも滿たなかつた。山上の空氣はすゞしかつたが、さすがに午睡に適する一時から三時までの間であつた。私に自然に汗をかたるひまに聽衆も睡意に夢を見られるがよいと、あらかじめ聽衆にことわつておいたのであつた。

私は講演の後水原師の案内で正智院を訪うた。所藏の野山古版の三教指歸などを見せてもらふはずであつたが、住持不在のために果さなかつた。然し名高い古塔に入つて美しい佛像を見るの幸を得たので失望せずに院を出ることが出來た。みちみち高野の町の半分をも見た。私の夢はいくらかさめねばならなかつた。正智院にゆくまへ金剛峯寺をもたづね執事から野山境内の土地問題住宅問題などに關する現代的爭議の一端をもきいた。きかない方が幸であつたが、きいてしまつた。見ない方が仕合せであつた町を見てしまつたのは止むを得ずとして、こゝも亦浮世なりけりの嘆聲をもらさずにはゐられなくなつた。然しその浮世のおかげで、甲子園の野球戰の今日の勝敗が、郵便局か銀行かの前の掲示板に速報されてゐるのを見ると、私の郷里の靜岡中學がもろく負けてゐるのが出てゐる。私は郷里を顧みて苦笑したのであつた。私は私のモーリスの講演が、けふの町の散歩と翌朝奥の院參詣とよりも以前に行はれたことを感謝しなければならなかつた。銀行や郵便局を見たり警報や午報のサイレン塔を見たり建築中なる鐵筋の大學圖書館を見たりした後だと、私の夢物語はあれほどにもやりおほせなかつたかも知れない。

翌朝私は水原氏の嚮導によつて奥の院に參詣した。大師堂一帶張り

の長男はどうしても奥の院參詣を肯じない。彼は大師よりも大雅堂を崇拜するために高野山に登つたのであるから、あすの豫定の遍照光院にさへゆけばいゝんだと頑張つてゐる。私はあとで成程とおもつた。水原さんの指導で、左右に新古さまざまの墓碑を見つゝ、次第に奥ふかく歩み入り、或は嵯峨本考や訪書餘錄で一ころ鳴らした和田雲村翁の墓にまゐつたり、或は今秋全集が完成しかゝつてゐる契沖阿闍梨の碑を拜したり、或は父母を戀うた芭蕉の句碑をたづねたり、最後に御廟のまへにぬかづいたりして、さまざまの追懷や敬慕の情をつくし讃仰や趣味の念をみたし得たけれども、畢竟あくる日の赤不動や大雅堂の藝術には若かなかつたといへばいはれるかも知れない。

野山はまた私に新知の友三人をさづけてくれた。その一人は野口米次郎氏であつた。野口さんも令息をつれて來られたのであつたが、一度はわが宿坊親王院に於て、一度は明王院に於て、それぞれかなりの時間に同席會談するの機會を得た。その朗らなる音調で在米中の生活を快活にはなされたのは私たちに忘れえぬ印象を與へた。明王院に野口さんと私とが招かれていつた八月十四日の夜、そこの本堂の軒端に盆燈籠がたゞ一つ吊るされてぼんやり闇夜をてらしてゐた情趣も亦きえがたき印象の一つとなつてゐる。一ケ月まへ長崎で見た盆祭とは全くちがつた情致だと思ひつゝ私は暫くたゞずんでながめいつた。その夜大門あたりで三寶鳥がよく鳴いたといふ話をきいて、野口さんも私も人に促がされつゝもたうとう聞きにゆかずに明王院から直に各自に宿坊にかへつて寢てしまつたことを、翌日お互に殘念におもひあつのであつた。野山を下りがけのあわたゞしい十六日の午後、明王院廊下で佐藤春夫氏と片上伸氏とに出あつた。赤不動を拜するまぎはの刹那に簡短なる挨拶のことばをかはしたにすぎなかつた。私は京都に歸つてから、佐藤さんは改造社の濱本君を介して、私の近著たる船舶史考に拙筆の自署をせよと要められた。まゝよこれも記念だと思つて私は少々痛み入りつゝも歌の形にした文句を例の筆でなぐりつけて一笑を博したのであつた。今はつきり記憶せぬがこんな文句であつたかと思ふ。

不動見むと明王院のまへにたゝずみはじめて君と相知りしかな
大雅堂の名畫のまへにまた逢ひてまた別れにし君をしぞおもふ

とかいふやうな所謂たゞごとうたであつた。佐藤さんは見てさぞ笑はれたこととおもふ。もう一つ拙著に即いては、

熊野びと君が乘るべき船にあらず綱手あやしき船舶史考

とか何とか書いたかとおぼえてゐる。いづれも後日のおもひ出草だけである。

赤不動の靈感、大雅堂の洒脫、げにも人の高野の見るものにしてゐるのも尤だと嘆服して、やがて院主に謝し親王院を辭し去つた。遍照光院では高野大學に來講在宿中の木村泰賢博士とはからず相語るの機を得たが、同じく出講假寓中の老僚松本文學士にはまみゆるをりを失ひ、午後三時、再び山駕籠でかつぎおろされる身となり、京は東

に大文字の火ともる衢のころに歸つて來た。

何日かたつてから一新聞紙の茶話欄に、なにがしが高野山に隠棲の宣傳をしに出かけたとやら、宣傳ならいツそ法被を着てやつたらよいのにと言つた人があるとやら、寸鐵を打つてあつたのを見て、善いかな言やと私は微苦笑を禁じえなかつた。私は去年の春、これはちやんと私の名を掲げて、私がわかき人々が書くなる一文藝雜誌にさへ筆を執つたといふのをとらへて、ニキビざかりの青年に伍してとか何とかいふやうな冷笑を或紙上の六號欄にかいてあつたのを見て大に笑つたことを此際想起したのであつた。そのをり私はニキビ考といふ語源考證をこゝろみて、その同じ紙上に寄せようかと思つた。考證の材料はいさゝか集つたけれどもまとまらないうちに一年半ほど經過した。今度もハッピ考といふものを草して改造からの原稿の求めに應じようと企てたこともあつたが、材料はまだほんの少ししかよらない。昨秋になつて芥川龍之介集をよんだところ、そのうちの澄江堂雜記のはじめ方に、ニキビと題してほんの三四行の偶筆があるのを面白くよんだ。故人は中古にニキビを二禁また二君と漢字をあてゝあるのを發見し、「尤もかういふ發見は、僕自身に興味がある程、他人には面白くも何ともあるまい」とことわつてゐる。私がニキビ考を發表しないうちに、芥川君が先鞭をつけてあつたのを、私はおくればせに知つたのである。そこで私は私のハッピ考をなるたけ早く發表しておいてプライオリチーをとつておきたいと思ふ次第である。耶蘇教の方では、もし人あり、法の為めの〔illegible〕に人に〔illegible〕して〔illegible〕を附けよといふ意見があるさうである。私は、何か苦々しいことばを受けたら先づ語源をしらべることにしてあるので、法被を着て宣傳せばよかりしにといふ語をいはれた後には、その語の理否を究めたり解嘲の要の有無を考へたりする前に、直に先づ辭書に向つてハッピといふ語の出典と沿革とをしらべはじめて一の智識を增したのを喜んだ。これ嘲笑者に對して善いかな言やと受けた所以である。一語以て我師とするに足るのである。

私が法被に注視したのは決して今度の先賢の冷評にはじまるものではない。尤も東京に於て幼少のをり猶江戸傳統の火事裝束を見たり、長じて古く芝居茶屋などの裝を歌舞伎座や市村座で見物したりして以來といふほどではない。二十年前オックスフォード大學の或學寮、たしか、ベリオル・カレッヂかと思つたが、或教授の書齋にとはつたとき、壁間に麗々しく印半纏がかゝつてゐるのを見せられて驚かされたのが、私がハッピに對する感興の動きそめた抑々の初めである。その少壯な教授は、何でも當時東洋漫遊をしたとかで日本からそのシルシバンテン一名ハッピなる物を一着買求めて牛津にかへつて來て賞美しつゝあつたのであるらしい。それは明治四十一年すなはち西洋紀元の一九〇八年の冬のことであつたと思ふ。その頃から既に西洋人がハッピを珍重してゐたのであらう。然し、今日米國人などがハッピーコートなどといふ名前をつけてそれを呼んでゐるといふ事、さういふ名

前が當時存在したかどうかを私も知らなかつた。さすがのＮＥＤ（新英辭典）にも出てゐないから、それがキモノといふ語のやうな傳播弘遍と永續とを見ないかぎりは、ＮＥＤの編纂員も、未だ私のするやうな語原考究を企てはしまいと思ふ。從つて私の語史研究がＮＥＤに使はれるか否かは固より保證されるかぎりではない。今日米國の婦人などが、ハッピーコートなどとしやれて、それから模樣替をした衣裳を得々と着てゐるのは、厭はしく感ぜられるが、語呂のいゝのはさすがに言靈の幸はふ國のことばだけある。何しろ縁起がいゝ。

古くからハッピといふ語に法被といふ漢字をあてゝあるが、答はハンピ即ち半臂の文字が語原をなしてをるといふことである。半臂にハンピともハッピとも兩樣に振假名をほどこしてあるのは、遲くとも元祿時代にさかのぼり得る。書言字考がさうである、下つて倭訓栞にも半臂をハッピにあてゝあり、俚言集覽にも同樣である。されば言海には、半被が音便でハッピとなつたので、波被は當字であると見えてゐる。徳川中期の學僧たる妙心寺の無著道忠が著はした禪林象器箋の第二十八類なる器物門の服物の章をみると、法被は椅子を裹む被ひのきれであるとのことで、大法被といふのは、法堂座上に掛下するの被なりとある。宋元時代支那にてさう使つた樣に見える。由來は古い。然しその法被を俗服とした用語例は、少くとも禪林象器箋ではわからない。足利時代では往來物節用類みな僧堂の服物すなはち用具として法被の語があつた。庭訓往來や下學集、それ以下同樣である。法被が坊さんの服裝にもあつたか否かを私は知らないが、能裝束にはハッピといふものが用ゐられ、田樂や石橋や黒塚などの後仕手が着て出て來る。そのハッピは、中古の裝束の半臂の系統であるのか、それとも僧服の變形であるのか、これも亦故實家や能樂の研究者に質して見なければ判らない。上來半臂のことを引合ひに出したが、半臂は元來兩袖のない短衣で、束帶をするをりに、袍と下襲との間に着用するものだといふ。袖のある中世近世に於ける法被のハッピとは全くちがふ作りであるが、私の考へるやうに果して日本でいふ所の洋服のチョッキが英語のチヤッキ（チヤケット又チヤケッ）から出たとすれば、丁度袖のないチョッキと袖のあるチヤケッとの關係の逆で、袖のあるハッピと袖のないハンピ又ハッピとの關係についても、亦その名稱の轉用はあり得べきことと思ふ。ハンピと撥ねるのがハッピと促まるのは、日本語の轉音例で容るし得べきところである。寛永頃の版本の名目抄の衣服篇には半臂をハムヒと傍訓してある。この公家の故實書は東山左府洞院實熙の著述を明應慶長とそれぞれ時の貴族や學者が傳寫した本によつて出版されたのである。何時から半臂をハッピともいつたかは未だ明かにせぬが、古寫本のたしかなのを見ないと、その邊は明かにしがたい。ともかくも半臂の音訓ともに各々の轉用が許されるとせば、近世のハッピの由來は、僧侶の服裝からでなくて、貴族の束帶から由來したものとなるわけである。然し如何にして袖のないものから袖のあるものの方へとかはつて來たものかといふ説明はつかな

い。

まだ一々の原本にもあたる暇なく、なほ博く支那の群書をしらべる時間もないが、槇島昭武の書言字考に引いてゐる所によると、半臂は隋の大業年中から始まるさうである。隋書に出てゐるはずだが、遺憾ながら私は日本中古の半臂の服装の起源について考證を開始しない。また倭訓栞に、胴肩衣ともいはれる所の軍家に用ゐる半被なるもののことを擧げてあるが、この軍家所用のものは公家所用のものより起り、更に能樂家におよんだものであらうか、これ亦私の究めざる所である。近世の印半纏のハッピの起原は僧服だと小杉博士は述べたが、私のその變遷の經過を知らない。職人服のハッピの來歴の考證も亦難いかなである。

最後に例の長崎吉利支丹版の日葡辭典を參考すると、ハッピはアウト（演劇）に用ゐる衣服だと釋してある。アウト[illegible]はこの辭書の別條に能といふ日本語を譯したポルトガル語にも見えてゐる。アウトとは英語のアクトではたらき、しぐさであり、いはゆる所作でもある。即ち慶長時代ハッピは主として能樂に用ゐる一の服裝として知られてゐた。この辭書には半臂の名はさすがに出てゐない。故實にすぎるからであらう。半臂といふ文字は、倭名抄に見えるのを初見とし、それには蔣鮑といふ唐代の切韻が引かれてゐる。枕草紙あたりにみえるはんぴはそれであるから、ハンピが支那系統であることは間違ひはないが、それから近世の所謂ハッピにうつるまでの徑路は將來の研究に待つの外はない。とにかく新紀元を[illegible]たに[illegible]なかつたのである。又あの職人服が僧服から出たとするならば、私が高野山でそれを御用しつゝ高野版やケルムスコット版を説いたのも、萬更因縁がないでもなからう。句に云く、

波被着し講義姿や高野版

とにかく私が野山版の講説は、あのとき和服でやつたのは事實である。但しこの句は人口に膾炙せる嵐雪の名句とおなじく無季である。さりとて決してムキになつたわけではない。たゞ私としては、芥川君が嘗いておいてくれた如く、「僕自身に興味がある程、傍人には面白くも何ともあるまい」とおことわりしておかなければならない。

前か當時存在したかどうかを私も知らなかつた。さすがのNED（新英辭典）にも出てゐないから、それがキモノといふ語のやうな傳播弘遍と永續とを見ないかぎりは、NEDの編纂員も、未だ私のするやうな語原考究を企てはしまいと思ふ。從つて私の語史研究がNEDに使はれるか否かは固より保證されるかぎりではない。今日米國の婦人などが、ハッピーコートなどとしやれて、それから模様替をした衣裳を得々と着てゐるのは、厭はしく感ぜられるが、語呂のいゝのはさすがに言靈の幸はふ國のことばだけある。何しろ緣起がいゝ。

古くからハッピといふ語に法被といふ漢字をあてゝあるが、實はハンピ即ち半臂の文字が語原をなしてをるといふことである。半臂にハンピともハッピとも兩様に振假名をほどこしてあるのは、遅くとも元祿時代にさかのぼり得る。書言字考がさうである、下つて倭訓栞にも半臂をハッピにあてゝあり、俚言集覽にも同様である。されば言海には、半被が音便でハッピとなつたので、波被は當字であると見えてゐる。德川中期の學僧たる妙心寺の無著道忠が著はした禪林象器箋の第二十八類なる器物門の服物の章をみると、法被は椅子を嚢裹む被ひのきれであるとのことで、大法被といふのは、法堂座上に掛下するの被なりとある。宋元時代支那にてさう使つた様に見える。由來は古い。然しその法被を俗服とした用語例は、少くとも禪林象器箋ではわからない。足利時代では往來物節用類みな僧堂の服物すなはち用具として法被の語があつた。庭訓往來や下學集等、それ以下同様である。法被、

坊さんの服裝にもあつたか否かを私は[illegible]といふものが用ゐられ、田村や[illegible]、黑塚などの後仕手が着て出る。そのハッピは、中古の裝束の半臂の系統であるのか、それとも僧服の變形であるのか、これも亦故實家や能樂の研究者に質して見なければ判らない。上來半臂のことを引合ひに出したが、半臂は元來兩袖をのない短衣で、束帶をするをりに、袍と下襲との間に着用するものだといふ。袖のある中世近世に於ける法被のハッピとは全くちがふ作りであるが、私の考へるやうに果して日本でいふ所の洋服のチョッキが英語のチヤッキ（チヤケット又ヂヤケツ）から出たとすれば、丁度袖のないチョッキと袖のあるチヤケットとの關係の逆で、袖のあるハッピと袖のないハンピ又ハッピとの關係についても、亦その名稱の轉用はあり得べきことと思ふ。ハンピと發ねるのがハッピと促まるのは、日本語の轉音例で容るし得べきところである。寛永頃の版本の名目抄の衣服篇には半臂をハムヒと傍訓してある。この公家の故實書は東山左府洞院實熙の著述を明應慶長とそれぞれ時の貴族や學者が傳寫した本によつて出版されたのである。何時から半臂をハッピともいつたかは未だ明かにせぬが、古寫本のたしかなのを見ないと、その邊は明かにしがたい。ともかくも半臂の音訓ともに各々の轉用が許されるとせば、近世のハッピの由來は、僧侶の服裝からでなくて、貴族の束帶から由來したものとなるわけである。然し如何にして袖のないもの

い。

また一々の原本にあたる暇なく、ただ[illegible]支那の[illegible]をしらべる時間もないが、[illegible]鳥[illegible]武の[illegible]に引いてゐる所によると、[illegible]には[illegible]の大[illegible]年中から始まるさうである。[illegible]に出てゐるはずだが、[illegible]なお私は日本中古の[illegible]の[illegible]の起源について考証を試みはしない。

また[illegible]に、[illegible]肩衣ともいはれる所の[illegible]に用ゐる[illegible]るものの ことを挙げてあるが、この[illegible]のものは[illegible]のもの[illegible]り、更に[illegible]におよんだものであらうか、これ[illegible]ある。[illegible]にハタビに[illegible]と[illegible]、[illegible]のハッピの[illegible]いかな[illegible]。

最後に[illegible]するとハッピ[illegible]

[illegible]

つ[illegible]なかつたのである。[illegible]野山でそれを[illegible]し[illegible]を説いたのを、[illegible]ないで[illegible]、

[illegible]

[illegible]とに[illegible]に[illegible]つたのは[illegible]である。[illegible]

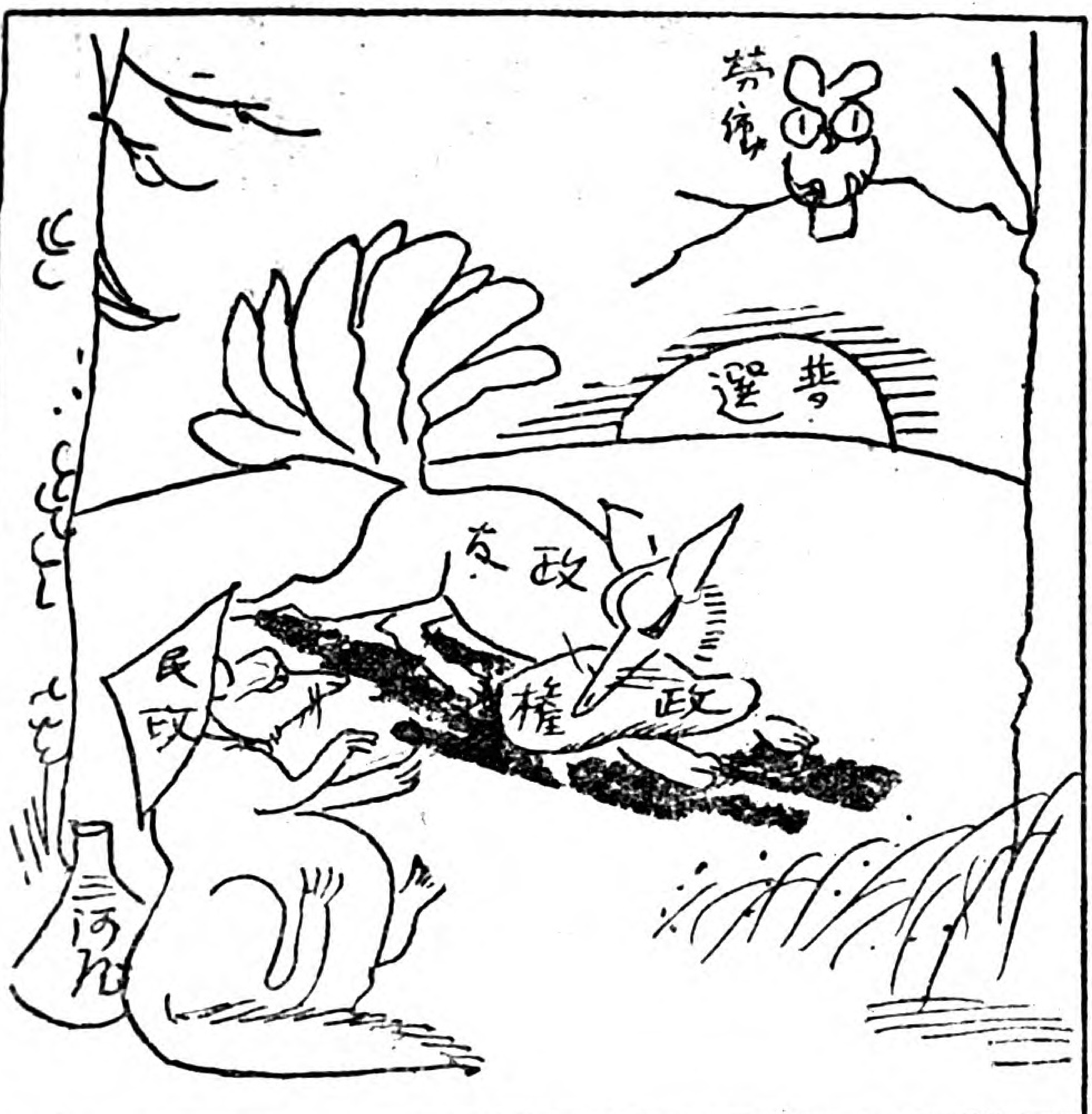
[illegible]

漫畫世相動物見立て

服部亮英

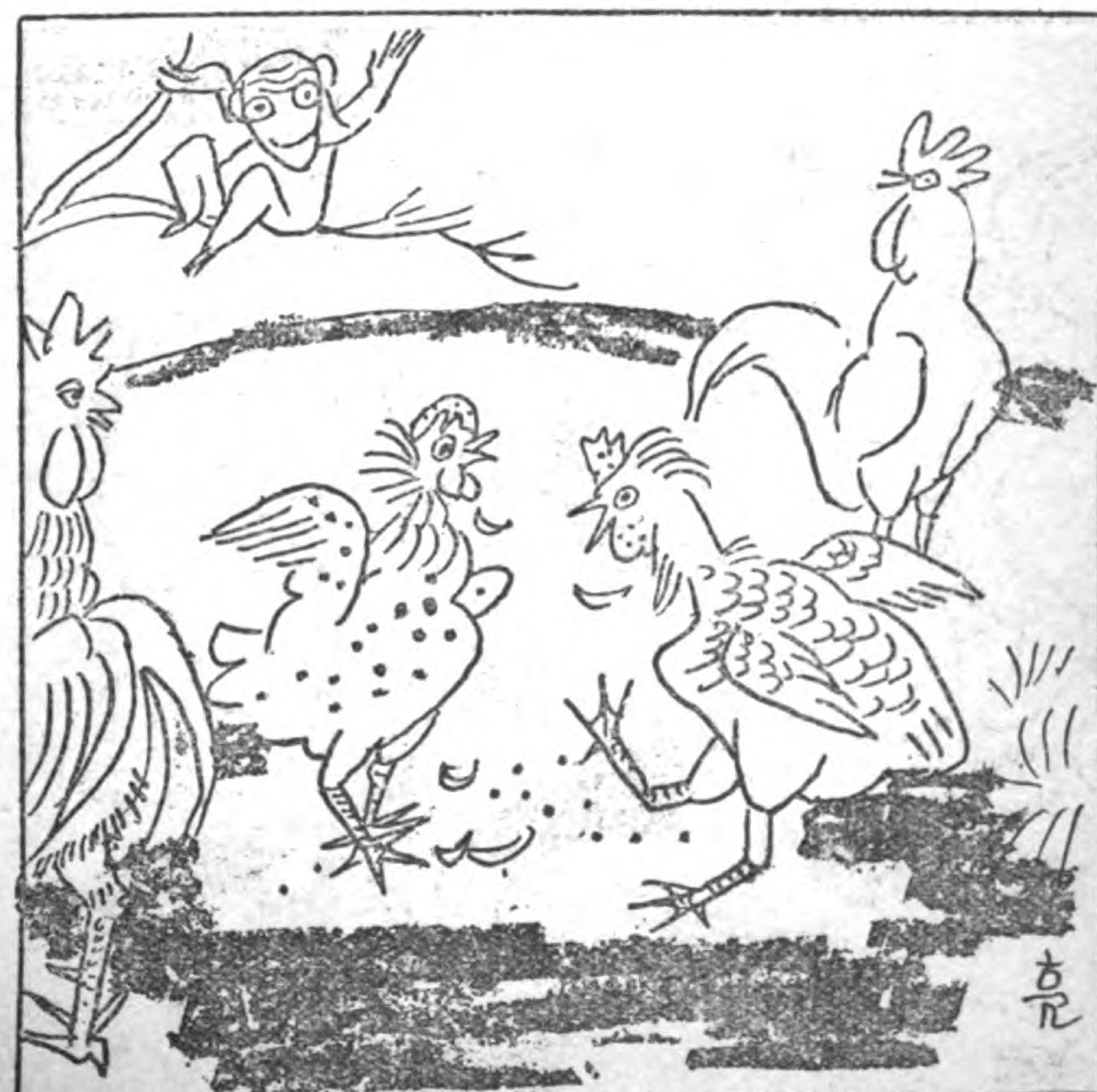
1

五十四議會の幕が開く、一塊の肉をくはへた古狐現はれ側に居る狸公にだまされまいと普選の月の前で爭奪戰を初める、夜は次第にふけて行く、フクロ「段々俺れの世の中になつて來たわい」



2

近代の雌鷄は如何にして雄鷄の目にふれんか、如何にして自分を知らしめんかと苦心の結果雌鷄の間に露出症と云ふ病が表はれた、此の病高じて雌鷄同志の鷄合ひとなり雄はたゞ傍觀。





3　文藝の庭には、花や小鳥を外に圓本や印税で作つた犬舍の中に納まつてるブル犬と、どこまでも主義に生きんと勇敢に戰ふプロ諸犬が相對してワン〳〵騷ぐ。

4　自己の志すまゝに、スポーツ、實力、學問等と青年の意氣を象徴化せる如き駿馬は互にいなゝいて決勝の踏を爭ふ。



勝てば官軍

江口渙

近來無產派文壇の强力な一勢力となつた雜誌「文藝戰線」を中心にして集結してゐた人々が、最初に小西伊之助、村松正俊の二人をアナキストであると云ふ理由でその集團から追放して以來僅か一年の間に遂に三度も分裂した。そしてその間に一方では「日本無產派文藝聯盟」「日本プロレタリア藝術聯盟」「勞農藝術家聯盟」「前衞藝術家同盟」「文藝解放社」の五個の集團の對立を見るに到つた。

世間の一部ではこの分裂と對立とを見て、無產派文壇に身を置いてゐる人々の度量の無さ加減と、勢力爭ひの醜さ加減とを嘲笑し、「そんなに小さく分派して終つてはどうして有力なブルジョア文壇に對抗して行けるか」と他人の疝氣を頻りに頭痛に病み始めた程だ。

無論、表面的に觀ただけでは、からまで多數に分派しては、全勢力が夥しく減殺されるとも考へられやう。然し、事實は無產派文壇の勢力が總量的に最近非常な增大を見たからこそ、そしてそれぞれ幾つかに分派しても十分存在して行けるだけの力を闘ひ取り得たからこそ、かく分派したのだと解釋するのが、むしろ正當ではないだらうか。殊に見逃す事の出來ないのは不景氣に依る印刷費の低下から、集團を背景にする小雜誌、中雜誌の經營が比較的容易になつたばかりでなく、經營法の如何に依つては十分採算的にやつて行けるやうにさへもなつたと云ふ一事が自然にから云ふ現象を導き出した一面の理由ではあるまいかと云ふ點である。そしてこの事實に從來所謂ブルジョア文藝雜誌にのみ獨占されてゐた文藝市場に對して、無產派文藝雜誌の進出が實力的に可能になつたためであり、從つて無產派文壇の勢力の著しい伸長の結果に外ならないと私は解釋してゐる。

だが、同時に他の重大な半面をも見逃してはならないのは云ふまでもない。だが、それは要するに無產階級運動の將來に對する見解の相違から誘導された對立。山川イズムと福本イズム。中間左翼と極左的宗派との對立。乃至は歷史的關係から結果された對立。舊「種蒔き」派と新「文戰」派。躰驗派と智識派。勞働派と學生派。作品尊重派と理論尊重派。と云ふ風な對立關係から、殊にその背後に控えてゐる勞農黨內の左右兩翼の對立關係から誘導された勢力爭ひと、その勢力の將來に對する打算の差違から結果された出來事であつて、然かもあまりにも知れ亙つた事實であるから、ここでは殊更省略しやう。

だが、殘留組と脫走組とのどちらが將來勝つだらうかと云ふ豫想は、私に多大の興味を與へる。無論、理論家同志の對立。殊に闘志を缺如してゐる靑野季吉と、稀代の惡文家田口憲一との對立などは、まるでユルフンといい、褌なしの角力みたいで私には格別の期待を抱かさせない。唯、興味は一つに懸つて作家の上にある。

片や前田河廣一郎。葉山嘉樹。小堀甚二。片や藤森成吉、林房雄、黑島傳治。里村欣三。村山知義の對立が將來どんな文藝陣を張るか。同時にどんな好き新進作家を養成し得るか。それに依つて勝敗は決する。

然し、元來が右翼左翼などと云ふ實際運動的區別の存在し得ない文學。唯、宣傳的か非宣傳的か、功利至上主義か、非功利主義か、そして優秀か、劣等かと云ふ區別のみが存在するだけの文學と云ふものの範圍內では勝利は要するに優秀な作品をより多く書いた者の手に落ちる。そして理屈はどうつからうとも有ゆる場合、必ず「勝てば官軍」である事を忘れてはいけない。（完）

社會民主黨所屬「アカデミカー」會總會覗き

（滯獨日記の一節）

高野岩三郎

今年三月二日より七日に亘りエッセンで開かれた獨逸共産黨大會を傍聽して、其の豫想外に面白かつたのに味を占めて、私は四月十六日より十八日に掛けニュルンベルヒで催される社會民主黨所屬「アカデミカー」會の總會へ見物に出掛けることにした。殊に又五月下旬キールで社會民主黨の會催あり、私はこれへも出張して見る氣であるから、其の前一應同黨關係の知識階級連中のお顔や氣焔をも拜聽しておくのは無益ではなからうと考へた。

總じて此種の會合を傍聽するのには、單にいくらかの入場料を拂ふ外には、別段これと云ふ手續や面倒の要らないことは共産黨大會の經驗で分つた所である。入口で警官のお目玉の前を通らなければならぬと云ふやうなことは無い、(否、警官共者の姿が、大會々場の内でも外でも、少しも見えなかつた、私服臨監の有無は知らないが恐らくこれも無かつたのであらう）併し「アカデミカー」會總會では、知り合ひのレーデラー教授の講演あることを知つたので、豫め出席の希望を傳へておいた方が宜しからうと思つたので、三月下旬同教授へ右の旨を申送つた。

レーデラー教授と云へば、數年前我東京帝國大學經濟學部のお傭教師であつた仁である。我國へ來朝前から既に社會黨に寓してをつたと記憶するが、歸獨後はハイデルベルヒ大學正教授として教鞭を執ると共に、好んで支那問題などを口にもし筆にもして實際問題を盛に論じてをる、兎に角社會民主黨内に於ける有數有力の學者である。獨りレーデラーさんに止まらず、嘗て同じく我東大法科に數年間經濟學の教授をしてをり又同大學の經濟研究室の創設に功勞のあつたエンチッヒさんの如きも亦近年は獨逸社會民主黨内で學者として中々活動してをり、更に最近には同黨より推されてサキソン聯邦に於ける重要の行政官に就職した模様である、我最高學府と獨逸社會黨との因緣淺からずとでも云ふべきであらう。と言つたからとて私は此等傭教師の蒔いた種が近來になつて熟して官學内に不穩分子が殖つたなどとはさらく

考へない。獨逸でも有爲少壯な學者の中には社會主義者が多いのであるから、有爲少壯の學者と目を着けた結果が偶々不穩教師を招聘することゝなつたに過ぎないのである、人物の選擇は中々思ひ通りに行かぬのが世の中の習ひであらう。

筆は思はず飛んだ所へ外れた。さてレーテラーさんへ書き送つた所が早速返事を呉れた。出席を歡迎する招待狀が來るであらうとの趣であつた。果してそれは屆いた。同會幹事を務めておる檢事マルクスさんの發したものである。これで總會出席の準備は出來上つた。即ち社會民主黨所屬國立大學教授の紹介で、檢事さんの手で拵らへて呉れた案内狀を持參して出掛けることになつた譯である。

四月十六日朝の急行列車でミユンヘンを出立した。春とは言へど南獨高原地方の空はまだ中々に薄ら寒く、殊に此の日は曇り勝の天氣に時時少雨さへ交へるので一層不愉快の感を覺へしめたが車中は宛ら春日和、疾走四時間、正午過ニユルンベルヒへ着、直ちに驛附近のホテル・ヴイクトリアに投宿する、小奇麗な氣の利いた宿、蒸氣暖房や冷溫水流出手洗器の設備等々一切新式、それで一日部屋代五マルク半は至て低廉と云へやう、少憩の後宿を出て市中見物に出掛ける。

ニユルンベルヒは何時來ても氣持の良い町だ、都會の空氣は人を自由にすると云ふ言葉は此の町のために作られたもののやうに感ぜられる。獨逸は勿論、歐羅巴全體の中でも、ニユルンベルヒほど中世時代の城壁や櫓などを其の儘保有してをる所は稀有だと云はれて居るが、其の堅固な城や櫓などが當時に於て自由市民の自由を確かと保證したものである。之と同樣に現今のニユルンベルヒも亦、新興勞働階級が其の權利に對して勇敢なる抗爭を試みておる土地である。市の人口は約四十萬を數へ、工業の隆盛を以てしては、戰前に於けると同樣に亦戰後に於ても、南獨地方で屈指の都、從つて勞働階級の勢力著しく、國粹主義の本場と目せらるゝバイエルン聯邦の中に在て、組合運動の本據社會主義の根城として萬丈の氣焰を擧げてをる處である。ニユルンベルヒよ健在なれ。

市の北方の舊城內公園に到り市街を眺めてこんな事を考へたから、やがて宿に歸り、夕食を認めたる後、八時會場へと急ぐ。會場は宿の筋向ふなる美術家會館內の小集會場である。參加料二マルクを拂うて入場する。見渡せば約百名の席が備へられてあり、正面一段高き演壇の左右にはカール・マルクスとフアーデナンド・ラツサールの半身像が飾つてある。社會民主黨ニユルンベルヒ支部の旗が其の傍に立てゝある。簡素で嚴肅、此の會合に似合はしい設備であると頷かれる。

會場では私は先づ幹事のマルクス檢事に挨拶する。三十代のてきぱきした仁のやうに見受けた。同氏の紹介により本部派遣の有名なヒルフアデイング氏と二三語を交へる。ヒ氏に學者と言ふよりも寧ろ中々食へない老爺のやうな氣がした。

追々と人が集まる。各地の會員並に其の夫人連など合せて八十名許りと思はれる。少しく遲れてレーテラーさんも見えた。早速握手して久

謝を叙し懇會を喜ぶ。氏はだ人—社會科學に造詣の深い「ドクトル—夫人—を伴はれず、余らが夫—家庭術に修練を積める?—を同道せず、相身互身、何故夫人を連れて來なかつたかと云ふ詰問的質問にも會はで濟んだのは仕合せと云ふべし。

八時半開會、先づニュルンベルヒ地方會員を代表して「ドクトル」ズュスハイム氏の歡迎の辭あり、次で會を代表して他の幹事である辯護士プアイフエンベルゲル氏の挨拶あり。引續き音樂や舞踏や詩歌朗讀など行はれ十時閉會、要するに第一日は會員の顔寄せに過ぎなかつた。

第二日は朝九時過會場に行く、九時半開會、先づ幹事マルクス氏の開會の辭を兼ねての報告を以て始まる。之によれば昨年ワイマールで開いた第一回の會合には五十餘名の會員の來會を見たのであるが、今回の第二回總會では獨逸二十二の都會より約九十名の參會者を見るに至つたとのことである。氏は又述て云ふやう、吾々「アカデミカー」は決して現實の實際問題に就て社會民主黨の採るべき態度を左右せんと企つるものではない。此の如きは宜しく責任ある黨の指導者達に任しておくべきことである。吾々は社會黨と云ふ大組織の中に於ける一分子として吾々相當の仕事、即ち大學的教育を受けたるものとして爲し得べき各種問題の理論的研究に共働し、以て全勞働運動に裨益すべきやう心掛ける積りであると云ふ意味を强調した。

總本部より特に派遣されたヒルファディング氏は其の顔貌を起して壇上に立ち、凡ての學上統計の上で、其の職とする所を務めて居りた、吾々は黨所屬の「アカデミカー」の會合を記述するものである、たとひ「アカデミカー」が黨内に於て智識的指導權を振はうと欲しても、それは決して、多年の經驗ある吾黨の勞働階級を支配することは出來ない、「アカデミカー」は宜しくそれ〴〵の專門學科の範圍内に於て深奥な研究をなし、黨のために又勞働階級のために役立つやう努力すべきであらうと述べて、前述マルクス氏の所說に裏書した。

斯樣にマ氏やヒ氏が會の性質に關して殊更言を費やしたのは、蓋し此の會の創立以來黨内に異論少なからず、甚しきは學士連が黨内に黨を立て、物識顔するは百害あつて一利なしとさへ論ずるものもあり、爲めに會の幹事は黨内より贊否の意見を集め之を編纂して今回の總會の紀念「パンフレット」として頒布したほどである。併し今度黨の本部より、幹部の一員であつて併も亦黨内切つての學者連の一人であるヒルファディングを態々派遣し、上述の言をなさしめた所を以て見れば、此の會も先づ黨の公認を經たものと認めてよいことになつたやうである。

さてヒ氏の話が終つて、いよ〳〵總會の本仕事たる會員の研究報告に移つた、第一席を務めたものはエミール・レーデラー氏である、其の長身痩軀を壇上に運んで、午前十時半から二時間に亘り、近代帝國主義に關し、其の起源發展並に特徴を、ローザ・ルクサンブルグとステルンベルヒの學說を比較對照しながら、諄々說き來り說き去つて滿

堂を傾聽せしめた。併し純然たる學究的理論的研究の發表であり、日概括的總論的の說明に過ぎなかつたので、午後の討議に於ても、ヒルファアディング其他數氏の發言はあつたが、大した議論も起らずに濟んだ。

當日會員の午餐會あり、私もこれに出席したが、挨拶抜きの肩の凝らない集まりであつた。晩には演藝會の催があつて、ニュルンベルヒ地方特有の劇などを見せるとのことであつたが、迚もよく分る氣遣なしと見切りを付けて御免蒙むる。又晩方午後五時から會員のみの會合を開き、事務や會計の報告、役員の改選などの外に、ニュルンベルヒ地方會員よりの提出に係る二の決議案を議した。其の一は會名を改めて「アカデミカー」及智的勞働者會とすべしとの案であつて、其の主旨は會員の範圍を廣めて學士運動のみならず其れ以外の智識階級をも包含すべしと云ふにある。此の案は討論の結果次回まで繰越さるゝこととなつた。恐らく立消になるのではあるまいか。其の二は本會は宜しく社會主義大學の設立に努力すべしとの案である。これは可決せられ、其の實行方法に就ては黨本部と協議すべく會の役員に一任せられた。最終の四月十八日の「プログラム」は研究報告第二席として伯林の政治學校々長「ドクトル」メンニツケ氏の倫理的思惟としての社會主義と云ふ題での講演であつた。私は朝九時過入場して約一時間拜聽したけれども、講演も內容も乃至講演者の態度も一も感服しなかつたので、もはや會の景況も分つたし、旅途中を失敬して退場した。後で承知した所では、氏の講演の論旨[illegible]であつたと云ふことであるが、左もあるべきことと考へ[illegible]

かくて私は此の日の午後には既にニュルンベルヒに別れを告げて（恐らくこれが最後の別であらう）、恰度祭り騷ぎた大衆に相應はしいやうな騷ぎ足らなさの感を抱いて、再びミュンヘン行の急行列車に客となつた。會の性質を熟知しなかつたがために過大の期待を有つて行つただけそれだけ又失望も多かつた譯である。それにしても餘りに靜かな餘りに活氣のない會合であつたことは爭はれない事實である。併し又退いて考へれば、時勢の變遷は此の學士運動中の會の上にも現はれてをる。戰爭前には大學教授で社會民主黨に黨籍を置いてゐるものは殆と絶無であつたと記憶してをるが、今日では學者で正面より堂々入黨したるものは其數二三に止まらない。況して學士運動中に至つては頗る多い有樣となつた。從て又黨內に此の種の會の成立をも見るに至つた次第である。併し何故教授ドクトル連が可成り強い異論のあるにも拘らず、敢てかゝる會を作つたのであらうかと云ふ理由に至つては、私は寧ろ下のやうに觀察してゐる。即ちカウツキー去りベルンスタイン老いたる今日、（是等二氏の議論の當否は暫く措き）社會黨內理論家に乏しきの觀あるを免れぬ。黨の勢力の世間的に大を加ふるに至つただけそれだけ、却て黨は、全體としては、動もすれば現實の問題や戰術に囚はれ過ぎ、其の結果妥協や迎合に傾き易く、黨の大目的たる新社會の建設に精進すると云ふ大切な本務に遠かる傾がないでもない。そこで然う

內の智識階級相集まり、それ〴〵專門の智識を基にして穩健なる理論を磨き、建設的な實行の方法を練り、以て內には幹部を刺戟し黨員を鼓舞し、外には益々智的な勞働運動者連を黨に引き付けやうと企てるに至つたものではあるまいか。黨の幹部も亦此の必要を認めて會の成立發展を歡迎するに至つたものであらう。私の此の觀察が果して當つてをるか否か將た又此の會が、右に偏し過ぎてをると批難される現時の社會民主黨を、左に傾かしめるに働くであらうか否か、何れにしてもそれは獨逸に於ける社會黨の現狀に關するものであつて、分裂に分裂を重ねておる我國の初期の無產政黨の狀態に直接關係することでは無い。併し我國の現狀でも官民大學の新思想家を中心として智識階級の團體を作り、理論の討究意見の交換を行ふのは全く無用の業ではなからう、などと、それからそれと入れ交つた取り止めのない感想に耽つて居る中に、列車はミュンヘン中央停車場に着た。直に車を驅つてギゼラ街二番の假寓に戻つたのは十八日の晩六時過であつた。

言論の自由と大和魂

山川菊榮

待合の四疊半での取引と議場の暴行沙汰とは、たしかにわが國の議會政治の異彩であり、それが單なる歐米のデモクラシーの皮相的な模倣でなく、大和魂の要求を十分に取入れた特殊的なものであることを證據立てゝゐる。四疊半の取引が、首尾よく纏まれば、議場は壹疑の床となり、さもなければ演武場となる。議場の空氣は四疊半の風向に支配され、それを反映する。議場は待合の延長であり、その影法師であるとしか見えぬ。

だから議場での言論の自由などは最初から問題でない。鬪はすべき意見は持たずにたゞ腕力だけを持ち合せてゐる議員たちは、四疊半から吹いて來る風のまに〳〵、右を向き、左を向き、鐵拳をふりかざして大和魂を發揮すればよいのである。

○

暴行代議士の公判に際して鵜澤聰明博士はこういふ意見を發表された。

『清瀨氏の言論が、言論自由の範圍を超え、議會における討論として許さるべきものでなかつたゝめ、各被告が議會の神聖を保つため之を留めたのは寧ろ公務であつて、之が公務執行妨害となるが如き議論は首肯し難い 各被告の行爲は寧ろ自治權の行使とも見られる。』（十二月三日、時事新報）

『清瀨氏の言論が議會における討論として許さるべきものでなかつた』かどうかは、議長の權限内に屬する問題である。然るに吾々は議長が清瀨氏の發言を禁じたことも聞かず、また清瀨氏がその言論のために告發されたことも、その演說筆記の公表が禁止されたことも聞かない。して見れば清瀨氏の言論は、『議會の討論として許さるべき』性質のものたるは勿論、わが國現時の峻嚴きはまる取締法のもとにおいてさへ、なほ『言論自由の範圍』をこえなかつたものだと認定するの外はない。然るに鵜澤博士によれば、國法が認めてゐる範圍内の言論の自由と、議長が許可してゐる發言の權利とを、個人的暴力によつて蹂躙することが、代議士の『公務執行』の一部分であり、その『自治權の行使』であるといふ。

法律家としての良心——もしさ
持ち合せてゐるならば——まで寶物にして、代議士の『公務』や『自治權』についての、こういふ解釋まで夢見することに苦心しなければならぬとしたならば、辯護士稼業の淺間しさは、娼妓のそれに幾倍してゐることを、人間なら感ぜずにはゐられまい。

○

しかし個人的武勇をもつて言論の力と競爭しようとする大和魂の要求は、決してブルジョア代議士ブルジョア市會議員の獨占ではない。久しい間、封建治下に言論の自由を奪はれ、大衆的討議の傳統と訓練とを缺いできたわが國では、國民一般を通じて言論の自由が十分に評價せられず、意見の對立を民主的、合理的に解決すべき手段としての討議の代りに、しば〳〵個人的武勇が發揮せられ、現在支配階級によつて認められてゐる範圍の、極度に制限せられた言論の自由をさへ犧牲にすることが稀でない。國民一般のこの言論自由の水準の低いことが、やがて國法に反映して、峻酷な取締ともなり暴壓ともなつて現はれるのである。論爭の中心たる問題の性質が重大なれば重大なるほど、互に十二分に意見を鬪はせ、その論點を明確にしておくの要がある。然るに反對派にその機會を與へ

すにその主張を暴力をもつて強迫しようとするのは、正當な言論の力では之を論破する自信のないことを證明するに等しい。暴行代議士の勇敢な『公務執行』や『自治權行使』――鶴澤博士の謂ゆる――が清瀨氏の論點を駁擊するどんな力となつたであらう？　國民は彼等の暴行によつて、田中大將のシベリア出兵がいかに當を得たものであり、その莫大な效果がいかに有意義に使用されたかを理解したゞらうか。

無產階級がその代表者を議會に送らうとしてゐる矢先、鶴澤博士の『公務』や『自治權』の解釋は特に注意を要する。大和魂か、大衆的討議の訓練か。わが國民の言論はどちらによつてその力をより多く發揮すべきだらう？(十二月五日)

路頭の賣卜

三石勝五郎

私は現在小石川區傳通院前大黑天境內に住んで居る。落葉した樹立の間から見上げる冬空は日々に寂寥を加へて行くが、お寺の屋根から舞ひ下りて來る澤山の鳩を相手に遊んでゐると、チリ〱と自宅顧門堂の玄關に立つて格子を開けるお客さんがある。

『身の上を見ていたゞけますか』

と御婦人ならば遠慮勝ちで控へる。

『はい』と答へて『どうぞ、お二階へお上り下さい』と招じると、

『先生はいらつしやいますか』

と、先生は時々見違へられる事もあつた。

早稻田大學の英文科を大正二年に卒業して私は放浪の生活に入り、一燈園にも顏を出して、その記念詩集『散華樂』が新潮社から出版されるまでは十年以上の歲月を夢にした。

歸京後かりそめに提灯を點じて路上の易者となつて現はれるや、讀賣新聞の三面紙上で寫眞まで掲載して紹介せられ、爲めに天下の紳士淑女を初め、小僧さん達の手相まで見せてもらつてゐる。

同じ早大出でも小西久遠君は白眼會で賣り込み、自宅專門だから上品の客許り扱つてゐるに反し、私は健康で大道商人の仲間入りも出來て、夜露を浴びてゐる。

紅塵万丈の都門よ。晝は往來忙しいけれど、夜に入りてやがて往け行く枯木の梢に三日月に、たまらなく懐かしいものはあるまい。然しながらと並び、バナヽやと共に啖呵を切る。やさしい娘さんの手を取りて、よい緣談のありやなしやを判斷して、輕く見上げる空の彼方よ。森羅万象は眠りに就いて、見よ、近くに未だ眠らぬ株がある。月がある。星がある。何處かで醉どれがどなつてゐる。運命の神が笑つてゐる。

見逃してならぬ世界は實にこれだ。私は神樂坂や本鄉の赤門前通りが近いので、チョイ〱出るが、水天宮や深川の不動尊の緣日にも出掛ける。未だ學者氣取りで、何處までも眞面目に、判斷を致すと、

『三石さんは商賣が下手だね』

隣りの易者仲間から惜まれる。聞けばお世辭がないからお客を喜ばすことが出來ない。從つて見料が十分いたゞけないんださうな。

それはよし。宅下ではやはり信用が大切で、眞面目にお客さんの相手をしなくてはならぬ。來客中七分は婦人。そしてお客さんの迷へる胸中を察しながら、親切に導いてあげるが、よく的ると泣き出されて困る。

私の近くに『玉ころばし』と言ふうらなひがある。安くて、はやる營業であつて見れば、利多賣主義がよいのかも知れぬ。彼方[illegible]

來た方が私の所にも來る。迷ふと人間は幾度でも迷ふものらしい。私の家が大黑天の境内にあるので緣起よいからとて來る客もある。實際の所では、易者は別に學問もいらぬらしい。私は人好き、話好きだ。又斯道研究が面白くてならぬ。只今は一週一度冤飲艱に應じて易經の講義をやつてゐるが、靜座や禪學は志す人達が集つてくれて隨分賑やかだ。

手相や人相、家相、方位又は姓名判斷等のお客さんがよく見える。暇の時は境内をぶらついて詩作に沒頭する。詩を作らうとあせるよりも、返つて自然に詩が生れさうだ。時々文學好きの青年達の訪問を受けても、餘談で長びき、肝心の來客を逃がしたりする。

大道易者から、大黑天の境内に籠城するまで三年。過去を顧ると幾千のお客に接したが、判斷の適否は問はず、易者はたゞ迷へる小羊の爲めに杖ともなれ、柱ともなれ。

迷　ひ

水天宮のおみくじを引くは紳士か
皆引いて
おまゐりする日の薄寒さ。

みくじ引く
人の顏に
吉と凶とが影見せて
羽ぐれ／＼の風ばかり。

十人の中
十一人は引いてゐた。

昨今の兜町

安田與四郎

東京株式取引所の新築が落成して、新年發會から新立會場が使用される。楓河畔に聳え立つ希臘式九百十二坪の新建造物は、大正十二年に起工されて、四ヶ年有餘の歳月と、約四百萬圓の工費とを要したものである。新會場は大理石張り六百坪といふ宏壯なもので、正に東洋第一の大市場たるに愧ぢない。斯樣に堂々たる建物を見るにつけても、昨今の兜町の寂れ方が、一層慘めに感ぜられる。世間では一口に兜町を黄金の巷と唱へる、何ぞ夫れ名實相伴はざるの甚しき。概算して一般取引員八十名、短期取引員百名と稱せられるが、その中には既に落伍したもの、將に落伍せんとしつゝあるものが、どの位あるか。詳しい記述は憚るが、兜町で高利貸の厄介にならぬ者は、數へるほどしかないと云はれてゐる。それは外間からは窺知し難き内輪の話、表面に現はれてゐる丈けでも、取引所からの震災に由る復興資金、整理資金、第三及び野村銀行からの借入れ、身元保證金の納入猶豫、その證據金流用等、數へ來れば夥しい金額に上る。是れ等は皆共同の借金であつて、個々の借金はその數倍か數十倍か。

顧つて大正九年の株式便覽に記されたる所を見よ、斯くの如く市場の人氣は警戒を專一としたるも、一方事業會社の實體は戰爭終熄の爲めに、何等の打撃を受けず、紡績、水電電鐵、製糖、石油、取引所は勿論の事、休戰條約の成立と共に、甚大の打撃を被りたる海運、化學、製鐵、造船、金屬等の諸事業も三四月頃より漸次形勢を見直すに至り、金融緩慢、金利低落の諸事情と相俟つて、諸株式は早くも二三月頃に底入れを爲し、相場の地盤は、恰かもコンクリートを以つて固めたる觀ありたるを以つて、烱眼なる放資家、思惑家の注意を起して、新規買物漸く増加し、日本銀行は十月と十一月とに兩度の利上げを發表したるも、熾烈なる買氣は一向に怯む處なく却つて反抗的に益々買進まるゝに至り、諸株は更に一段の新高値に躍進せんとす」と美文句は八年十一月末日に起草されたもので、意氣軒昂、鐵壁をも突き破らん勢を示してゐる。金庫の中には黄金が唸つてゐる、日銀の利下げも何のそのといふ鼻息の荒さ、懐ろが温かくさへあれば、師走の風も身に浸みないのである。

東山時代豪奢の極めは、應仁の戰亂を分岐點として、やがて數十年間に亘る暗黒時代を齎らした。イナ榮華の夢の尚ほ覺めざるとき、早くも衰頽の胚種は宿されてゐた。大正八年末は兜町にとつては、東山時代の末期であつた。

大正九年春以來悲風慘雨相踵いで到り、今に及ぶまで既に七年九ヶ月、一陽來復の曙光は未だ認められず、村の長老連をして、徒らに市場振興策に狂奔せしめてゐる。一種の望みは増資問題の解決に繋がれてゐるが、その成功も覺束ない。又假りにそれが成功したとしても、唯一時の昂奮劑たるに止まるであらう。

ヨッフエさんのことども

田口運藏

大正十二年の夏、有島武郎さんが輕井澤の別莊でアキ子さんとかと心中された記事が都下の諸新聞をにぎはしたときのことである。築地精養軒の卅五號室の病床によこたはつてゐたヨッフエさんは、

「日本ではよく自殺行爲が流行るやうだ」とつぶやきながら不思議らしいおももちで、なぜ戀の勝利者が自殺するのかを考へ込んでゐた。

ヨッフエさんにとつては自殺者の心情などは解されなかつたに相違ない。マルキシズムの理性で築き上げられた彼の强烈なる目的意識は、とても自殺者のもつ弱い人情味を解する餘地はない如くに思はれてあつた。

そのヨッフエさんがピストル自殺した。

去る十一月十八日、某紙の記者が、「ヨッフエが自殺したのです」と私に告げたそのせつなに、ある異樣な感じがピンと私の胸にせまつてきた。

「さうですか、おしいことです。ヨッフエさんが自殺されたことが事實なら私にはうなづかれる點がないでもない」

これが私の記者に對する最初の返辭であつた。

最近のモスコウ電報はロシア共産黨内の幹部派と反幹部派の對立闘爭を誇大的に告げてゐる。反幹部派の主將トロツキー氏の失脚は事實らしい。トロツキー氏と主張系統を同じくしてゐるヨッフエさんが政治的逆境にあつたことも想像にかたくない。彼の政治的苦境は持病の神經痛をいやが上にも惡化せしめたに相違ない。かくして革命的英雄(ヒーロー)として、はたまたプロレタリア外交家の元祖として、世界の舞臺にほしいまゝに飛躍した彼は自殺したのである。

「ヨッフエはマルクス及びレーニンの旗幟の下に立つた、吾々はこの旗幟を終局の目標にまで進めることを誓ふものである。」

これはトロツキー氏がヨッフエさんの葬儀に於ける追悼の一句である。そして會衆は口々に「吾々は誓ふ」と絕叫しながら帽子を振りインターナショナルを合唱したとモスコウ電報は告げてゐる。

一九一七年の三月革命が成功してケレンスキー政府が樹立された後で彼はサイベリアの流刑からペテログラードに歸つたのである。そして四月から十一月までの七ケ彼は革命的風雲兒の如くボルシエヴ軍事革命執行委員長と云ふ最も重要なる職についた。それからブレストリトブスクの平和會議の全權としてプロレタリア外交のために活躍した。今日までにわづか十ケ年の年月である。この十ケ年の超人間的の彼の努力は革命的ヒーローの如くに私には思はれてならない。そして、彼の最後の悲壯なるシーンはその感を尙ほ深くせしめるやうである。

大正十二年の六月、私が精養軒のパラーで反動的惡漢に暗打ちされたことがある。ヨッフエさんはその出來事のてんまつを秘書から聞いた後で、私に對して、

「田口、おまいは、非常によくがまんした。少なくとも共産黨員たるものは、革命の一兵卒を以て自から任じ、決して賣名的反動の無頼漢のトリックに乘ぜられないやうにしなければならない。」

私は頭を二ツ三ツ無頼漢からなぐられながらも、ヨッフエさんからほめられたのが嬉しくてその當時のことが、いまだにはつきりと記憶してゐる。

吾等が先輩、吾が恩師の不慮に對して追悼しながら拙ないペンを動かした。

革命家ヨッフエさんよ安らかに眠られよ。

(昭和二年十一月二十一日)

現代藝術家の階級的性質

青野季吉

一

私はレーニンのトルストイを評した極く短い一文を日頃愛讀してゐる。何もレーニンの書いたものだからと言つて、斷簡零墨でもこれを隨喜渇仰すると言ふわけではない。その一文の中でこの世界的な大藝術家が、冷たい解剖臺の上に横へられ、その骨組や心臓を一應調べ上げられた上で、更に當時のロシアの社會現實の鏡の前におかれ、その間の聯關が求められ、最後にロシア社會の變革の過程におけるその意義が追跡し、曝露されてゐるからである。もとより短かい一文のことであり、從つてそれは太い線で示唆的にしか描かれゐないが、しかしトルストイをマルクス主義の方法によつて取扱つたものとして、我々にとつて此上なく興味のあるものである。

何かの參考のためにその要旨を簡單に述べるとかうである。トルストイは天才的な藝術家であり、ロシア生活の無比な形像を提供した大作家ではあるが、その全體には『莫大な矛盾』が見出される。一方では社會の虚僞にたいする誠實な抗議者であるが他方では氣力の廢頽したインテリゲンチヤのヒステリー的な泣蟲であり、一方では資本主義的搾取を批判し勞農大衆の貧困・野獸化・苦痛の増大をさらけ出した曝露者であるが他方では惡に抗する勿れと説く愚劣な説教者であり、一方には醒め切つた現實主義者の眼をもつてゐるが他方には宗教的迷信の信者である。この莫大な矛盾はどこから來たか？　この偉大なる藝術家の魂に『内在』した矛盾は、ロシアの社會現實の何を反映したものであるか？　それはロシアの生活が十九世紀の最後の三分の一に經驗した矛盾に充ちた諸條件を反映したものである。當時ロシアの農民は一八六一年の農奴解放令によつてともかく一個の獨立農民となるにはなつたが、それと同時にその家長的村落へ資本主義が襲ひかゝつて來て、農民の貧困はつのるばかりであつた。そこで農民はその『惡』に抗する憎惡者、反抗者となつて隨所に一揆を起した。激しい抗議者、曝露者としてのトルストイはその農民の魂である。だが農民がその反抗の裏に隱見でゐたものは自由同權の小農共同團體であつた。…

してそれを實現する手段として、彼等は鬪爭を求めず組織を斬まず、たゞ祈り、訴へ、泣き事を言つた。而して無氣力な無抵抗主義者、廢頽した泣蟲、空虚な說教者としてのトルストイの魂はまた、その農民の魂を反映したものであつた。然らばトルストイはロシア社會の變革の過程にいかなる意義をもつたか？ それを要約してレーニンは言つてゐる「トルストイは稔りに到つた憎惡、ヨリ善きものへの成熟した努力、過去から自己を解放しやうとする希望を爆發したが、また生半可な夢想主義や、政治教育の非定や、革命的浮動性やを、再び提供してゐる。歷史的經濟條件は、大衆の×××××の成立の必然性や、その鬪爭の準備の缺乏や、惡に抗する勿れと說くトルストイ主義が、第一の×××××の失敗の、全體的な第一原因であつたことを明瞭にしてゐる。」

これは言ふまでもなくトルストイの藝術にたいする純粹な藝術批評ではない。トルストイの人間と藝術と教說の全體にたいする社會批評である。そしてまた私たちがいまの時期にこの批評に強く促されるのもこの點である。

私はこの一文でレーニンがトルストイに向つたと同じ方法で、現在の日本の謂ゆるブルジョアジーの作家を取扱つて見たいと思ふ。これが純粹の藝術批評であるか、それとも藝術批評の『邪道』であるか——そんなことの詮議に日を暮してゐる人もあるが—それは私にとつて微塵も問題であり得ない。それが大衆の前におかれた藝術である以上、それは大衆にたいして何等かの情緒的な支配力をもつてゐる。その支配力はあらゆる方面からの取扱ひに向つて開放されてゐる。私たちのやうに藝術としての藝術の完成——そんなことがあり得るとすれば——よりも、全體としての人間社會の完成、從つて先づ勞農大衆の解放を第一の目標とするものにとつては、それが有り得る唯一の藝術にたいする取扱ひである。私たちの唯一の藝術批評である。

先づ斷つておきたいのは、私はこゝに論究の對象として十人の謂ゆるブルジョアジーの作家を選び出して來たが、何もこれらの作家が日本の社會に最も大きな支配力をもつてゐるとか、最も優れた作家であるとか云ふ理由からではない。これまでその人の作品を比較的多く讀んで居り、その人の言動を比較的注意して觀て來た關係、即ち私の心にそれぞれの時期や場合に、比較的明確な焦點を結んだ關係からに外ならないのである。而して何故それらの人々が『比較的多く』さう云ふ關係をもつたかは、全然私一個の問題である。

二

島崎藤村氏は浪漫的な一個の懷疑家として我々の前にその大きな姿を現はした。次いで彼は大きな轉換を經て、人間生活の現實にたいする靜かな觀察者としての位置を選んだ。今日まで氏は大體においてその位置をしつかりと、着實に、謂ゆる『足を地につけて』保ちつゞけてゐると言つて差支へないであらう。彼の影響を經た藝術の發散する

客觀的に[illegible]、この[illegible]である。[illegible]作品一般[illegible]になつても、この位置は殆んど崩れてゐない。彼は『嵐』のなかで家の一隅に端坐して、若い時代の物凄く生長して行くのをじつと眺めてゐる情景を描いてゐるが、それは即ち彼の轉換以後の姿である。

然しかうした彼に、初期の浪漫的な要素が全然死滅したと斷定したら、それは恐らく誤りであらう。一個の靜かな人間生活のシーナーとしての姿を保ちつゞけてゐる彼にも、其浪漫的な要素は形を變へて潜んでゐる。極く些細な實例で言つて見るならば、この靜かな人生の觀察者は、嘗て私が指摘したやうにその愛兒を小ぢんまりした一個の自作農に仕立てて、それでホッと胸を撫で下してゐるほど、社會の現實にとつて非觀察者的であり、お人よしである。そして嘗て彼が法衣に身をつゝんで旅した心も、次いで異郷に草鞋をといた心も、而していま愛兒を田一枚と森一叢ひに托した心も、みな同じ心である。その靜かな觀察者としての彼と、この浪漫的な生活者としての彼とが一體となつて、そこに靜かではあり淋しくはあり窮屈ではあるが、一種の光澤を放ち深酷味をたゞへてゐるのが彼の藝術であり生活である。

彼は嘗て人間の生活にたいして、虚無的な眼を向けたこともなければ、反抗の叫びを投じたこともない。彼にとつては人間生活は、一個の小さな人間がさう云ふ態度をとつて向ふにしては、餘りに尊とすぎ、餘り深かすぎるのである。こゝに宇宙主義に似た一種の彼の思想がある。彼の人間生活にたいする觀察や描寫が自然的に暴露の實際をとら[illegible]である。かく靜かな觀察者であると共に、お人よしの浪漫家であり、生活への意義の探求者であると共に、人間生活の[illegible]であり、且つその行動において物堅い保守家であり、無抵抗者である藤村氏に、私らは何を觀てとるか？

私は氏において、日本における發生期のインテリゲンチャの典型を觀ないではをられない。發生時のインテリゲンチャは、まだ封建的な情感から完全に解放されてゐない。したがつて彼は、その行動の基準において保守節操から脫化することが出來ない。だが、既に彼の知識的目醒めと獨立自由な人間としての彼の自覺とは、彼を驅つて人間生活に浪漫的な眼を向けさせないではゐないのである。しかも彼の前に展開された複雜な近代生活の壓力は、更に彼を驅り立てて、一種の懐疑へと追ひやらないではゐない。しかし勿論彼は未だそれに絶望することも、それを否定することも知る筈はないのである。

この發生期のインテリゲンチャの眼前に展開された近代生活、委しく言へば近代ブルジョアーの社會機構は、彼等とは無關係な法則によつて廻轉し擴大して行く。そこでこのインテリゲンチャの浪漫的な姿は背後へ押しやられてしまつて、彼等は傍觀者としてそれに對する位置につかないではおれない。そしてその個人生活の基準は依然保守節操を脫出しない。彼は新生活の認識的傍觀者として立たず、周圍に廻轉する近代生活の追隨者として終始する。

我々は嘗て發生期のインテリゲンチヤであつて、而して今日、日本の社會の善良な聰明な市民となつて『敦厚な』美風を維持してゐる多くの人々を、我々の老いたる隣人のうちに見出すであらう。而して我々はまた島崎藤村氏がそうした隣人のうちにあつて最も目立つた姿をとつてゐる藝術家であることを見出すであらう。

彼等は内にも外にも吹き荒む『嵐』をかすかに感ずる。感ずるだけの知覺をもつてゐる。だが、『嵐』が吹き荒めば、眼を閉ずるだけである。次の時代のインテリゲンチヤの發展期の場合のやうに、積極的に嵐と抗することもしたければ、嵐を嵐と感ぜぬほど麻痺もしない。したがつて彼等は日本の社會の進行の過程においては、直接には殆んど作用するところがないと言つてよい。だが彼等の持つてゐる保守主義と、徹底的現狀維持主義と、更に無抵抗主義とは、社會の反動力の足場を築く石垣の一の動かぬ石であらう。

三

德田秋聲氏と島崎藤村氏とを對立させて考へて見ると、そこにおよそ藝術家の個人性の限界と、その社會的作用の範疇とについて、興味ある現象を觀てとらないではおれない。

秋聲氏も藤村氏と同樣に、人間生活にたいしてだいたい觀察者としての態度を持ちつゞけて來てゐる。だが、藤村氏がいかにも意識的に自分を靜かにして、自然や人間生活にたいして諦觀的觀察の態度を[illegible]たいのに反して、秋聲氏は[illegible]として反けてゐるやうに見える。藤村氏の人間生活の把[illegible]端正であつて、美醜を問はず深く吹込んで行くと云ふ態の深いのに對照して、秋聲氏のそれがやゝ粗野で、底の底まで潜入して行く力をもつてゐるのは、そこから來るものであらう。かの『醜』にまで潜入して行く徹底的な行き方は、これを藤村氏に求めることが出來ない。

思ふにこの差違は、この二人の老作家の個人性の差違以外の何ものでもないであらう。たとへばその藝術に表現されてゐる二人の中老年期の戀愛である。『新生』前後に觀る藤村氏の戀愛は、彼の端正な資性と、その謹嚴な道德律との故に、つねに内輪であり、つねに批判的である。それに反してこの一二年來の秋聲氏の戀愛は、人をして老醜を叫ばしめたほど徹底してゐる。客觀的な美とか醜とか云つたことは藤村氏の場合であれば問題となるが、秋聲氏の場合では問題ではない。どんなに姿をくずしても身をもつて人生を探求すると言つた行き方である。これはまことに二人の藝術の上における差違と照應するものであつて、その依つて來たところは旣にも言つた通り、二人の個人性以外の何物でもないであらう。

だが然らばこの個人性における差違は、彼等の社會的作用の範疇において、どれだけの差違を生み出してゐるか？　秋聲氏も藤村氏と同じやうに、發生期のインテリゲンチヤに屬する一人である。たゞ秋聲[illegible]

に特に濃厚にあらはれてゐるとは言へ、その秋聲氏にも現はれてゐるインテリゲンチヤの通有性が、色濃く見られるのである。

彼もまた藤村氏と同じやうに、一方において人間生活の冷嚴な、少くとも冷嚴であらうとする觀察者である。と同時に他方において浪漫的な人生の探求者である。そして現存人間社會にたいする一種の愛撫者である。そして後來のインテリゲンチヤの發展型に見えるやうな、人間生活にたいする虛無觀の把持者でもなければ、憎惡者でもない。この態度はたとへば文壇的な事象の上にも顯著に現はれてゐる。プロレタリア文學の主張や作品が提供された時、彼の最初からとつた態度は、さう言ふこともあり得ようと云ふ消極的ではあるが、肯定的な態度であつたのを私は覺えてゐる。つまり彼は人間社會の探求者として、その生起するものを靜かに見護ると言ふ發生期インテリゲンチヤの特性を、藤村氏と共に、多分に持つてゐるのである。そのほか彼がその徹底的な現實潛入主義にも拘らず、社會的現實の暴露者としても現はれて來ず、社會的惡への抗議者としても現はれ來ないこともまた、藤村氏の場合と同じである。

かくて彼等の個人生活及び藝術における濃厚な個人性色彩は、發生期インテリゲンチヤの社會的特性の前にあつて、極く狹い限界にとぢ籠められて仕舞ふのを見ないわけには行かない。したがつてまたその社會的作用の範疇において、秋聲氏の場合にも藤村氏の場合に言つたとほゞ同じことが言へるのである。

たとへ[illegible]れば、それはより多く主觀的な秋聲氏には、藤村氏にとにかく見られたイデオロギーへの積極的な貢獻をなさないことであらう。再び嵐のたとへを用ふるならば、藤村氏はどんな可能な場合を豫想しても、その嵐の正體を衝きとめるために、嵐の中へもぐり込んで行く場合があらうとは思はれない。が、秋聲氏の場合は必らずしもさうは斷定出來ない。彼の思ひ切つた逞ましい觀察者としての性質は、或る場合、彼を驅つてその嵐の中に驅け出させないとも限らないのである。

かつて秋聲氏の戀愛問題が世評の的となつてゐる時、或る新聞紙の一隅に、人の子の父としての藤村氏を賞讃し、他方秋聲氏の操行を非難した讀者の投書の掲載されてゐたのを私は記憶してゐる。この一些事は、藤村氏がいかに「敦厚な」美風の支持者であり、秋聲氏がさゝやかながら無意識的にその破壞者として役立つてゐるかを示すものと言つてよいであらう。秋聲氏が立派に發生期のインテリゲンチヤの特質や矛盾を反映しながら、藤村氏と違つてその典型的なものとして取扱はれない所以はこゝにある。

四

私は藤村氏を發生期のインテリゲンチヤの典型、秋聲氏をその多少變化した型と見て來たが、こゝで一寸、日本の當時のインテリゲンチヤと、ロシアの發生期のインテリゲンチヤとの相違を見ておくのも無

歟ではないであらう。

ロシアのマルクス主義藝術批評家ウォロフスキーはかう言つてゐる。「大衆的現象として先づ最初にインテリゲンチヤが社會的闘爭場裡へ進出した。インテリゲンチヤは、自立的な社會的力としての役割を演ずるまでは、不可避的に同伴する所の性格的に心理的な特質を身につけて來た。背教と生み環境からの離反といふ方法によつて自分を教育しながら、インテリゲンチヤは反階級的、超階級的存在の幻影を持つて來た。何一つ傳統を持ち出し得ない環境から出て、依るものといつては自分一個の力であり、自分の狀態が狀態であるために、頼むものはたゞ自分の才能と腕とに過ぎないインテリゲンチヤは、必らず自分の心理に明らかな個人主義的色彩を附け加へる。思想、たゞそのお蔭で平民的インテリゲンチヤは、社會生活の表面に自分の道を切り開き、この表面に留ることの出來た思想は、本質的に何かから絶對的で、全能的な力あるものゝやうに思はれ初める。平民インテリゲントは明白なる個人主義者となり、純理主義者となつた。」

これは六十年代のロシアのインテリゲンチヤの特質を説明したもので、この階級的特性の大部分は、發生期の日本のインテリゲンにも見出される。兩者共に、傳統と環境とからの離反で自分を教育しながら、反階級的の幻影を持つて現はれて來た。兩者共に、頼むものとてはたゞ自分の才能と腕とに過ぎないので、自個の心理に明らかな個人主義的色彩を附け加へた。兩者共に、社會生活の表面に道を切り開いて來て、その表面にとゞまつたが爲めに、自個を本質的な何かから絶對的で、全能的な力のあるものゝやうに思ひ初めた。もちろん兩者の間に度合ひや濃淡に差違のあることは説明するまでもない。ところでそう言ふ共通性の傍らに、兩者の間に著しい相違がある。ロシアのそれが、思想を武器として、明白な個人主義者となり、純理主義者となつて現はれて來たのに反して、日本のそれは何等そういふ思想的武器をとつて現はれ來ず、甚だ不徹底な個人主義者、浪漫的な情感主義者として現はれて來たのである。

これには兩者の發生の社會的根據が強く反映してゐると見なければならない。ロシア當時の平民的インテリゲンチヤは、バザロフにそれを鮮やかに見るやうに、最初から一個の反抗階級として生れて來て、その生育の過程と社會的闘爭とを切離して考へることが出來なかつた。したがつて彼等はいかなる他の階級も持つことの出來ないリアリズムと、それに基く思想を武器として立ち現はれて來たのであつた。ところが日本のインテリゲンチヤは、一個の反抗階級としてよりも、ブルジョアジーの隨伴階級として發生して來た。したがつてその發生期から決して社會的闘爭の中におかれず、自個を社會的に强烈に主張する必要もなかつたのである。彼等が明白な思想的武器をもつて現はれず、不徹底な個人主義者であり、浪漫的な情感主義者であつた、乃至はあり得たのはその爲めである。

この事情はその後における日本のインテリゲンチヤの

上に、[illegible]り西欧のそれのやうに、決してブルジョアジーにたいする否定者ではない。常にこれにたいする批判者である。ブルヂョア・クリスチャンにたいする嫌惡や憐憫は、日本の近代文學になつて可成り大きな部面を占めてゐる。或者はその嫌惡と憐憫の故に、遠く非近代時代の『粹』と『洗練』を謳歌し、或者はまた超然たる唯美主義を唱導さへした。だが、それは決してブルジョアーとの闘爭の實質を具へたものではなかつた。日本のインテリゲンチヤは曾て闘爭的階級として歴史の舞臺に登場したことはないのである。この傳統は、日本のインテリゲンチヤが社會的に窮迫の境遇に押しやられたその後の過程においても明白に作用してゐる。彼等は、階級的にその社會的壓迫に抗したことはない。たゞ默從し、たゞ泣事をならべ、たゞ空想し、たゞ動搖してゐる。而して多少とも闘爭的な部分は自己の階級を脱してプロレタリアートの闘爭と結ついてその階級的勢力の中に混入してゐる。これが日本のインテリゲンチヤの見すぼらしい歴史である。

五

正宗白鳥氏を問題の對象として考へて來る時、私はそこに、藤村氏や秋聲氏とは別個の、そして日本のインテリゲンチヤ發達の第二期の特殊相に面接しないではおれない。藤村氏を典型とするインテリゲンチヤは、發生期の、まだ獨立の階級としての生存闘爭を開始しないその[illegible]ヤに、[illegible]として擡頭して來たブルジョアジーの壓迫にたいして[illegible]ではある[illegible]階級としての生存闘爭――[illegible]に並べたやうな[illegible]をもつて――を開始したそれであつた。

正宗氏を考へる時、私たちは正宗氏がその中から歩み出た自然主義運動とその社會的意義を忘却することが出來ない。自然主義運動は日本の知識階級が、ブルジョアジーへの附隨物たる位置を離れて、いさゝかでもその眼をもつて周圍を眺め、その耳をもつて世界を聽かうとした運動であつた。さればこそ第一期のインテリゲンチヤが、ほとんど何等の顧慮なしにこの運動に參加して來たのであつた。ありのまゝに自然を觀るやうに、ありのまゝに現實に對さうといふ要求は、これを社會的な言葉に翻譯すると、それ自身の階級眼をもつて自然に接し、現實に向はふとする要求に外ならないのである。

この期の白鳥氏の藝術には、いかにも冷め切つた知識階級の形像が描かれてゐた。そこにはまた、現實にたいする、インテリゲンチヤでなければ加へられない、嘲諷があつた。それは明らかに、最も明白な形で具體化された當時のインテリゲンチヤの要求であつた。白鳥氏はまさにその旗手として登場したのである。

この當時の白鳥氏には、今日に觀るやうな藝術至上主義への傾向は、全然見られなかつたと言つてよい。『人生の姿を知るために』『生活の糧のために』とは、白鳥氏の好んで用ふる藝術觀上の熟語である

か、この要求は初期の白鳥氏に最も強かつたのではないかと思ふ。今日の白鳥氏と當時の白鳥氏との違ふところは、當時の白鳥氏にあつては人生の姿とは要するにかうしたものである、人間生活はかゝる醜惡なものである、と云ふ輪廓はあつたが、人間生活に向つて機械的にそれを押し付けやうとはしなかつた。また探求者の流動性を失つてゐなかつたのである。がその生活の幾段階を經て、その藝術創作の幾道程の後に、彼は漸くその流動性を失つて、機械的な人生觀察法にまで衰頽して來てゐる。彼の最近作『衰頽時代』や諸種の戯曲における人間關係の取扱ひはそれを明白に證據立ててゐる、と共に、彼の藝術觀が漸くにして、一種の藝術至上觀を混入して來た事實を見逃してはならない。最初に彼は藝術によつて人間世相を知らうと努めた。今や彼は藝術それ自らの中に、自分を托さうとする心境の發芽を自分の中に眺めてゐる。まことに最近の彼の藝術觀は、年來の功利的な藝術觀と、藝術至上的藝術觀との不可思議な混合物である。

藝術觀における白鳥氏のこの轉移は、曾て彼の代表し、今や新らたな展開を見せ周圍のインテリゲンチヤの世界に對する彼の關係を明白に語つてゐる。最初の白鳥氏はたしかにこの周圍の世界と、一種の相互的な關係にあり、同感的な關係にあつた。だが、近年の彼は、動きつゝあるその周圍の世界に對して、全く絶望的の關係にある。そこで彼の藝術觀は漸次に、藝術至上觀を混入して來ないわけにはいかないのである。

プレハーノフはその『藝術と社會生活』のなかに、この關係を正當にも、次のやうに言つてゐる。

『藝術にたいする謂ゆる功利的見解、即ちその作品に生活現象に關する判決の意義を附せんとする傾向、並びに常にそれに伴ふところの、喜んで社會鬪爭に參加せんとする覺悟は、社會の大部分と、多少とも藝術的創造に實際の興味を有する人々——との間に、相互的同情の存在する所に發生する。

『藝術家及び藝術的創造に直接の興味を有する人々の、藝術の爲めの藝術への傾向は、彼等と彼等を圍繞する社會的環境との間に、絶望不調和の地盤の上に發生する。』

正宗氏と彼を『圍繞する社會的環境との間に絶望的不調和』は、藝術觀の上ではいまも言つた通り、藝術至上觀の混入となつて現はれ來てゐるが、彼の人生觀及び社會觀の上では、一種の宿命觀、固定觀となつて現はれてゐる。彼はその藝術的活動において、今や人生を醜惡奇怪なものとして技巧的に塗りつぶさないでは滿足しない境地に入つてゐる。その社會的觀察においては、新興要素にたいして直接に反動的な呪咀を浴せかけないではおれない心境をたどつて居る。

かうして最初はブルジョア・フリスチンにたいする批判者として現はれた彼は、いまでは直接に爛熟したブルジョアジーへの奉仕者たらんとしてゐる。日本の社會の進行過程にたいする、彼及び彼の藝術の被支配者の演ずる役割は、この關係から自ら明白であらう。

六

いまの日本の文壇で、唯美主義に徹底してゐる作家を求めたら、谷崎潤一郎氏と佐藤春夫氏の右に出る者はないであらう。この二人はその藝術及び見解において、ほとんどその全部はその性格に基くところの相違が認められるけれども、その基準とするところ全然一致してゐると言つてよいのである。谷崎氏は惡魔的な美の探求者として現はれて來て、いろんな段階を經て、いまでは一切の技巧的なもののなかに美を見出さうとしてゐる。それが人間の理知または情意で巧んだものであればあるほどよろしい。自然なもの、生なもの、露骨なものは彼の最も嫌ふところである。それほど彼の要求する美は頽廢的の美である。佐藤春夫氏の要求する美はそれとは異つてゐる。尠くともそれほど頽廢してゐない。彼は或は異國の夢幻的な物語りの中に美をあさり求めやうとし、或は現實の複雜した人間關係の交錯の諧調のなかに美を求めやうとする。たゞ異ふところは谷崎氏がますます意識的に、現實との接觸を遠ざからうとしてゐるのに反して、佐藤氏は寧ろ現實に面接しやうとする。だが、その持つ基準のゆゑに、いかに現實に接觸しやうとしてもそれは空想的であり、彼の美の要求への異つた形の滿足でしかあり得ない。彼は曾て、プロレタリヤのために永遠に美しかる可き物語りを書き度いと云ふ意味のことを言つてゐたと、私は記憶する。プロレタリヤも亦美を求めてゐる。その認識はたしかに多かれ少かれ[illegible]、あるいは、[illegible]語りを語らうと云ふのは、プロレタリヤのためではなくて彼自身の美の要求の滿足のためである。

この二人の作家は現代の日本で最も喜ばれてゐる作家であらう。と言ふのは彼等のつくる物語りは、ひとりインテリゲンチヤの層ばかりでなく、社會のいろんな階級人の娛樂物として役立つ要素が多いからである。藝術は彼等において完全に娛樂化されたが、それは何も彼等の藝術の低級を證明するものではない。それは彼等の唯美主義の徹底の作用である。彼等の技巧の爛熟の作用である。

谷崎氏及びやがて佐藤氏が文壇に登場した時代は、自然主義の時代にともかくにもその階級的獨立性を獲得しかけたインテリゲンチヤが、一方にはブルジョアジーの支配の確立と、他方には近代プロレタリアートの結成擡頭によつて、一旦獲得しかけた階級的獨立性を失つて、動搖と分散とを示した時代であつた。だからこの期のインテリゲンチヤは、發生期のそれのやうに、靜かな觀察者の態度をもつて、近代生活に臨むことも出來なければ、自然及び人間の全體に向つて、一種の封建的な心理をまじへた愛撫をもつて對することも出來なかつた。その動搖と分裂とによつて生じた一部のインテリゲンチヤは、謂ゆるそれを「圍繞する社會的環境との間の、絕望的不調和」の關係に立ち、次第に現實生活から遠ざかつて行つた。他の一部はこの狀態にたいして、理知的な一種の攻勢をとつた。そして新らしい解釋と、それに基

く主張とによつて、この狀態を批判し改更しやうとの積極的な態度をとるにいたつた。更にまた別個のインテリゲンチヤは、動搖せる自己を抑制して、發生期のそれに見るやうな傍觀者的な、消極的な、現實探求的な、態度をとつた。而して更に別のインテリゲンチヤは、生活の現實の關係に直面して、大きな懷疑と、決死的な飛躍とを內に感じゐて、プロレタリアートの中へ混入して行つたことは云ふまでもない。自然主義運動前後のこの時期は、實に、インテリゲンチヤの分散時代と言つてよいのである。

谷崎氏及び佐藤氏が、この分散したインテリゲンチヤの、いま述べた順序で言へば、最初の傾向に屬することは言ふまでもないであらう。茲に一寸引用したウォロフスキーはバザロフとサーニンとを比較して、バザロフは現實型の人間ではあるが、サーニンは非現實の構成型の人間であると言つてゐる。そしてサーニンをもつて、頽廢したインテリゲンチヤの藝術的所產としてゐる。谷崎氏の作品、極く最近の例で言へば『青塚氏の話』にしても、その青塚氏は決して現實型の人間ではない。實に非現實的の人間である。また佐藤氏の作品にしても、そこに現實型の人間がその多面性において描かれてゐるやうなことは殆んど無いと言つてよいであらう。常にその一面が器用に捉へられて、多くの人間の一面と一面との接觸から來る美的な現實物語りが彼の藝術であつて、その全體において非現實的であり、構成型的であると言つてよいであらう。

佐藤氏はその個人的性格のゆゑに、いかにも神經に、いろんな現實の問題に觸れることを恐れないが、しかしその觸れ方の俗まで謂はゆる詩人的、非現實的であることは、かの問題となつた『文藝家の生活を論ず』の一文の內容でも分る。谷崎氏及び佐藤氏のこの唯美的非現實的傾向、それに反映されたインテリゲンチヤの一部は、然らば日本の社會の進行過程にたいして、どう言ふ役目を果すであらうか？　谷崎氏の場合も佐藤氏の場合も、一部のインテリゲンチヤの場合のやうに、積極的にその生活理想を主張することはない。要するに彼の場合は、インテリゲンチヤの怜悧なる逃避性の典型である。而して彼等の藝術的努力は、客觀的にはその逃避性の主張となつて作用する。藝術の持つ情緒的支配力の客觀的意義はそこに潜んでゐる。日本のインテリゲンチヤが今後の發展において示すであらうところの、動搖の諸々な變貌の中の逃避的一面、而してその一面の培養にはたしかに谷崎氏佐藤氏等一聯の唯美主義が、あづかつて力があるであらう。

話が藝術の持つ情緒的支配力の客觀的意義に觸れて來たから、簡單に附加へておかう。藝術家その人、作者彼自身は多くの場合自己の情緒的支配力の客觀的意義を創作衝動の計算には入れないであらう。否寧ろ、容れることをもつて創作態度の邪道と考へるであらう。

だが、藝術作品が一度び社會の中におかれゝば、その作品は優れた作品であればあるほど、讀者大衆の上により多くの情緒的支配力を持たないではをれない。作品の全體としての客觀的價値は、作者の主觀的

然しそれが如何やうにもあれ、そこを作品の如何によつて決定されるのである。今日ブルジョアジーの作家として取扱はれてゐる人々の多くは、その取扱ひを非常に不滿としてゐる。何故我々がブルジョアジーの作家であるのか？から抗議的に質問された場合は、私個人にも幾度びあるか知れない。そう云ふ場合、彼等は自己の作品の主觀的評價に終始してゐるのであつて、その作品の持つ情緒的支配の客觀的性質――それによる評價を微塵だも考量に入れないのである。彼等がブルジョアジーの作家と言はれる時、それは彼等が既成の大家であるとか、或はブルジョアジーの世界しか描かぬとか、或はまたブルジョア的環境に生活してゐるとか、等々の理由からではないのである。彼等の藝術の情緒的支配力が、或は彼等の意志に反して、或は直接にか或は間接にかブルジョア・イデオロギーの維持及び支配に役立ち、兼ねてブルジョア社會の維持及び支配に役立つからに外ならないからである。一切の書物はそれ自身の生命をもつてゐると言はれてゐるが、藝術はまことに、藝術こそ最も豐かに、それ自身の生命をもつてゐる。そしてその生命は作者その人を裏切る場合が、寧ろ多いのである。

（附言する。今日の藝術家はほとんど凡ての場合自己の主觀的評價しか持たないが、その心理それ自身も歷史的のものである。凡ての場合、凡ての藝術家がそうであつたわけではない。何等かの意味で自己の藝術の持つモラルを問題にした作家は、常に其の作品の客觀的評價を忘れない。トルストイもその一人であつた。現代ではバルビユースなどが[illegible]的に、[illegible]に[illegible]を持つべきだと言つてゐる。而して果してどこまで[illegible]性を持ち得るものであるかは、自ら別問題である。）

七

私はまへの一節で分散したインテリゲンチヤのとる方向を二三簡單に跡づけて見たが、その場合にも言つた通り、一方にブルジョアジーの支配が確立し、他方にプロレタリヤの擡頭があつて、その階級鬪爭の中に動搖したインテリゲンチヤの一部は、この錯綜し、摩擦し、不安に充ちた世相にたいして、積極的に解釋を下し、主張をかかげて、意識的に自己を支へないではおかなかつた。

その最も代表的なものは武者小路實篤氏である。彼は貴族出のインテリゲンチヤである。その意味において、これまで取扱つて來た平民インテリゲンチヤの諸文學者とは、傳統的に別個の心理を掘はされてゐる。彼の藝術及び言動における、この要素の作用は決してこれを見のがしてはならない。しかもそれはただに、彼の藝術や言葉の色彩や調子に現はれてゐるのみではない。彼の思想を決定してさへゐるのである。

彼はブルジョアジーにたいして、特にブルジョア・クリスチンに對して、激しい憎惡と輕蔑とをもつてゐる。しかもこの憎惡と輕蔑とは、決して自然主義運動前後の平民インテリゲンチヤの抱いたそれと

は同質のものでない。後者のそれは、或は漠然たる美的趣味の上から、或は人生にたいする輕浮淺薄な態度にたいする嫌惡から來たものであつたが、武者小路の憎惡と輕蔑とは、人間的價値の先天的な劣等者に對するそれを聯想させるものがある。彼は常に自己を一段優れた存在として自認し、眞理の把持者として時に敎化者の態度さへ執つて現はれて來る。こゝに彼の貴族性の作用を見てとらないわけにはいかない。したがつて彼は新興プロレタリアートにたいしても同樣な憎惡と輕蔑を示さないではをれない。問題はブルジョアジーが、それに値するものであるか、プロレタリアートが何故にそうであるかに關つてゐるのではない。彼の自意識が彼を驅つて眞理の把持者、乃至は眞理の闡明者たらしめてゐるからである。同じプロレタリヤにたいする侮蔑でも、平民インテリゲンチャであつた芥川龍之介氏のそれは、せいぜいのところ『憐憫に近い輕蔑』から先へ出ることが出來なかつたが、武者小路の場合はそうではない。かくて彼は、ブルジョアジーにも手頼らず――尠くとも表面的には――プロレタリヤの階級力をも無視して、彼の理想に基く地上の天國を建設しやうとする一種の近代的宗敎家となつてしまつたのである。

この過程の間にそのやうに彼の貴族的インテリゲンチャたる特殊的色彩が見られるとは言へ、やはり彼は、彼の文壇へ登場した時代の一部のインテリゲンチャの要求を具體化して現はれたものであつた。彼の人間、社會及び自然にたいする解釋は、それが或は平凡なものであり、或はあたりまへのものであつても、彼によつて語られる時に、一種の權威の響きをもつて語られた。その權威の響はまことに、動搖したインテリゲンチャの一部の心の上に、一種の安定と力強さとを感ぜしめた。これこそこの一部の求めるものであり、發生期のインテリゲンチャの無抵抗性や、それに次いで現はれたインテリゲンチャの懷疑性からは、求めて得られないものであつた。

武者小路の藝術はだから、そこに人間の現實生活の暴露がないからと言つて、またそこに細かい生活味の描寫がないからと言つて、或はまた藝術的技巧の美がないからと言つて、何等その價値を損ずるものではない。その讀者大衆にとつては、彼等の心に一種の安定と、力強さを與へるものがありさへすればいいのである。そこに眞理の響きを聞くやうな感銘があればいいのである。であるから、武者小路氏の藝術とその讀者との關係は、宗敎とその信者との關係に似たものがあると言つてよいであらう。新らしき村の會員と武者小路との關係は更に、その純粹な形におかれたものであり、それだけよくその特質を證明してゐるものである。

武者小路氏とは全く異つた環境から出たインテリゲンチャではあるが、やはり氏と同じ一部のインテリゲンチャの心理を反映したものに菊池寛氏がある。菊池氏は言ふまでもなく平民インテリゲンチャであり、その意味において、武者小路の貴族的傳統と對立して平民的傳統を色濃く持つてゐる。

だが、或る者は、或る者に與へられた不安と動揺とに對して、現代生活にたいして、或は享樂的な、或は懐疑的な、或は逃避的な態度をとることが出來たかつた。彼は、一種の理知の武器をみがいて、この紛糾した人生世相に對して、積極的にそれに解釋を下すことによつて、それと戰はうとした。而してそれが或る評家の言ふやうに、俗惰的な解釋であつたとしても、とにかく彼はその理知主義によつて一部のインテリゲンチヤの心にその出路を與へたのであつた。彼のテーマ小説なるものに含まれてゐるそのテーマは、實に人間生活の生々しい解剖や觀察によつて把握されたものであると言ふよりも、より多く彼が自己を、而して一部のインテリゲンチヤの心を、安定させ、落付かせるためのものであり、それに一種の機軸を與へるためのものである。例へば先頃舞臺の上におかれた『乳』といふ戲曲である。この戲曲に取扱はれてゐるものは決してプロレタリアの子供と環境の現實の姿ではない。プロレタリアの子供と環境の悲劇的現實感にたいする、作者の自慰的解釋以外の何ものでもない。一應この解釋を下した後、作者と彼の背後にあるインテリゲンチヤとは、尠くともその現實感からの脅迫をのがれることが出來る。そして自己を安らかならしめることが出來る。求めるものはそれである。

　また彼の傑作の一つと云はれる『仇討以上』をとつて考へてもよい。彼はこの戲曲において人間の精神力の強さ——それは人間の強い動物的衝動力をも克服するほどの強さである——を描いて來て、我々[illegible]のテーマが理知の工夫によつて案出された一種の自然[illegible]ることは、何よりもその作品の持つ感銘が物語つてゐる。讀者はそれによつて面白い物語を聞かされると同時に、その現實生活の困惑のうちに、一路の活路を見出すのである。狙ふところ、且つ、求めるところはそこである。

　これまでの説明でほゞ分る通り、武者小路氏及び菊池氏は、最早それ以前のインテリゲンチヤのやうに、近代生活を靜かに眺めたり、その意義を探求したり、或はそれを逃避してゐるのではない。『我等はいかに生くべきか？』と言ふ一部のインテリゲンチヤの問ひに積極的に答へて來てゐるのである。彼等のその積極的な答へが、果して本統に積極的なものかどうか、それは此處で問題ではない。とにかく彼等はその要求を反映した作家であり、また或る程度まで、それに成功した作家でもある。

　それならば彼等の藝術の持つ支配力の客觀的性質、したがつて日本の社會の進行過程にたいする意義はどうであらうか？　武者小路氏の場合も、菊池氏の場合も、その反動的の一面として、今日のプロレタリヤ化したインテリゲンチヤに、そのプロレタリヤ化の現實と、その現實の命令する闘爭とに向つて、眼を開かせないと言ふ特色を持つてゐる。だが、彼等の意識しない一面として、一部のインテリゲンチヤをして長い間の階級的無氣力性を脱却せしめると言ふ意義をもつて

ゐる。まことにロシアのマルクス主義批評家リウオフ・ロガチエフスキーが言ふやうに『藝術家又は學者の階級的思想は、決してその作品の内容の全部を蔽ふものではない。彼等が言はんと欲したことゝ、無意識に述べたことゝは屢々相違するものである。』武者小路氏及び菊池氏の讀者大衆たるインテリゲンチヤは、『眞理』と『幻影』を與へられたことの損失を、積極性に導かれたことの利益によつて取返へすであらう。

八

私は、廣津和郎氏、佐々木茂索氏及び岸田國士氏の藝術に親しむときに、それぞれに感觸の相違がありながら、いづれも同じクラスのインテリゲンチヤの心理を分け持つてゐると感じないではをれない。そしてそのインテリゲンチヤは、やはり前に述べた分散期のその一つのクラスである。

廣津氏の藝術は、そのデリケートな感受性において特色がある。しかもその感受性は偏感覺的な病的な印象を與へるものでなく、また偏中樞神經的なものでもない。いかにも全身的な統一性をもつてゐる。そして彼は、この感受性の指導のまにまに、現實生活にたいして或は心臓をドキつかせたり、或はその中に沒入して自己を忘れたり、或はそれに嫌惡を感じたり、或はそれを享樂したりしてゐる。彼の藝術は常に、この時々の心緒の變化の即興的記録であり、スケッチである。讀者はその一つ一つの作品に手際よく投寫された彼の心象を見せられる。そしてそれだけである。

藝術における廣津氏のこの態度は、一般的に言へば、人生にたいする觀察者的態度であり、そこに彼に作用してゐる自然主義傳統が認められるが、しかし彼は決して冷靜な觀察者ではない。彼は觀察者の立場にあると共に、共に生きる者の立場になる。彼は眺めると共に悲しみ觀ると共に憂鬱になる。その矛盾した、流動的な、無意力的點は、現在の一部のインテリゲンチヤの心理をそのまゝに反映して、遺憾のないものと言つてよい。彼及び彼等は、現實生活にたいして徹底した傍觀者の態度もとらず、それかと言つて現實生活にたいして強い懷疑をなげかけるほどの要求も持たず、また美的な世界への逃避を企てるほど現實生活を嫌忌しもしない。或はまたそれにたいして何等かの解釋を下し、主張を押しつけることもしない。たゞその赴くがまゝである。廣津氏はこの態度をもつて、藝術家の藝術家らしい態度とし、廣津氏の藝術を愛好するインテリゲンチヤは、それによつて彼の階級的動搖性と、階級的動搖性の肯定感を滿足させられて、人間の人間らしい生き方を感ずる。

佐々木茂索氏の場合は、廣津氏に比べると多少意力的である。彼も一般的に言へば廣津氏同樣觀察者の態度をとつてゐるが、彼は現實生活に一種の小さいが相當に鋭い批判を加へることや、徹底はしてゐないがこれも相當に斷込んだ暴露を加へることがある。

その作家におい、

ては[illegible]の態度に、より多く傾斜してゐると言つてよいであらう。だが、彼も亦、藤澤氏の場合と同じやうに現實生活にたいして、極めて動搖的な、行き當りばつたりな、無意力的な態度をとることによりて、頽廢したインテリゲンチャの心理をそのまゝ見せてゐる。たゞ彼の藝術や言動にあつて特色のあるのは、それが多少とも鋭角的な色彩をとつて來てゐることである。

この二人よりはヨリ鋭敏な新鮮な感覺をもち、その眼界が多少とも廣くて、現實生活の矛盾を暴露するといふ方面にあつても、多少とも意識的、意力的なものを見せてゐるのは岸田國士氏である。が、氏の藝術の持つてゐる一種の魅力は、恐らくはそこにあるのではなくて、そのいかにも明るく、輕快な、皮肉や暴露が、それとして露骨に作用しないところにあるのであらう。これが今日の一部のインテリゲンチャの心の動きをそのまゝ代表してゐるものであることは、容易に想像し得られる。例へば先頃讀んだもので、戰地に赴く將校の門出を取扱つたものを私は記憶してゐる。そこには戰爭と軍人生活の機構にたいする相當に衝込んだ觀察があり、馬丁とその妻君と將校の夫人との間の相互關係に、見逃すことの出來ない現實相の暴露を見せてゐるが、しかもそれらの全體が、一種の無苦悶的な印象を與へるやうな遣り方で、構成されてゐた。そして一種の明るい戲曲となつてゐたと思ふ。こゝに氏の藝術の魅力が潜んでゐる。

この三人の作家の藝術と態度に自らの心理的反映を見出したインテリゲンチャは、またこゝに、[illegible]インテリゲンチャと呼んでいいであらう。曾て彼等の階級的[illegible]には、その階級としての獨立のために多少とも藝術的闘爭のなかに立つた。またかつて彼等の階級的先行者は、ブルジョア・フリスチンにたいして挑戰を投げかけることによつて、別個の美の世界を築かうとした。更にまた彼等の階級的同胞は、自己の階級に新らしい立場を與へやうとして、『我等いかに生く可きか？』に答へやうとした。しかし今、このインテリゲンチャはそれらの意力を失ひ、その時その場の輕い動搖と、淡い情感と、淺い懷疑と、はかない享樂とに身を委せてしまつてゐるのである。そして彼等自身が、新らしい意味のブルジョア・フリスチンにまで轉落しやうとしてゐるのである。

彼等の藝術の持つ支配力の客觀的意義は、實に、その浮動性、情感性、感傷性、享樂性の傳染にある。日本のインテリゲンチャの今後の生存過程において、かうした藝術的支配の及した作用は、相當に大きな損害として現はれて來るであらう。

私はこれまで日本のインテリゲンチャのその時期、その場合の觀念的代表者として、多くの現存藝術家を選び出して來て、その間の關係をたどり、合せて日本の社會の進行過程におけるその作用を追跡しやうとした。が、私の企圖は殆んど果されず、筋書きだけとしても不徹底なものになつたやうである。それは今の場合仕方がないとして、もしこの論究が何等かの意味で、現存藝術家を非難し、その當傷を示唆

したものと解する人があればそれは誤りである。

それにたいしては私はプレハーノフの次の言葉を引用しておく。

『私は、有名な言葉の通りに、泣かず、笑はず、唯理解する、ことに努めるのみである。私は現代の藝術家は、プロレタリアートの解放的努力によつて靈感づけられ「ねばならない」とは言はない。否、若しも林檎の樹が林檎を生み、梨の木が梨を結ばねばならないとしたならば、ブルジョア的見地に立つてゐる藝術家は、上記の努力に反對して立たねばならないのである。頽廢期の藝術は頽廢的でなければならない。これは必然である。そして我々がこれに「氣を腐らす」のは無益のことである。しかし××××が見事に言つてゐるが如く、「階級鬪爭が終局に近づいて行くと、支配階級の圏内に於ける解體の過程は、舊社會の内部に於いて、非常に强烈な程度に達し、支配身分の或部分がそれから分離して、未來の旗を支持しつゝある××的階級に加擔するに至るのである。かつて貴族の一部がブルジョアジーと合體した如く、いまやブルジョアジーの一部、即ち歴史的運動の全行程の理論的理解にまで到達した所のブルジョア・イデオローグ達が、プロレタリアートの側に移りゆきつゝあるのである。」』（一二・四）

源實朝

齋藤茂吉

○

賀茂眞淵は、初心者のために書いた新學の中で、『奈良の朝までの人の心の高きを思へ。鎌倉の大まうち君の歌をもむかへ見よ。……鎌倉の大まうち君の歌は、今の京この方の一人なり』云々とかう書いてゐる。すなはち、歌を學ぶ者の手本となるべきものは、萬葉集の歌である。それから實朝の歌をもよく讀むといゝ。實朝は平安朝以後の第一人者だといふのである。然るに、香川景樹は新學異見のなかで、『鎌倉の右府の歌は志氣ある人決して見るべきものにあらず。……右府の如く盡く古調を踏襲ひ、古言を剽裂たらんには』云々と云つて居る。

ひとりの歌人、實朝の歌の如きものに關する評價がすでに斯のやうに違つてゐる。眞淵よりも後に生れた景樹は、眞淵の系統をひいた江戸派歌人にむかつて一爲事をしようとして、先づ眞淵の新學に對つて異を樹てた。それであるから景樹は實朝の歌を一々吟味したと云はうよりも眞淵の言葉に對する反感が先に立つてゐたと看るべきであらう。それでも景樹は年老いるにつれて、萬葉の註釋を書いたり、萬葉調を取入れたり、さういふことは、こそこそとやつてゐた。

明治になつて、正岡子規が景樹の言葉を評してかういつた。『自己の歌が盡く古今以下を踏襲剽竊した事を棚へあげて、却て創意多き實朝の歌を傷けんとは憎さも憎き振舞かな。泥棒が人に對して泥棒よばはりするさへ片腹痛きに、況して高潔清淨なる實朝の如きを泥棒に落

さんとす。盗人たけだけしとは荷樹の事なり。」その後、子規の言葉に對して、こそこそと云ふものがあつても、いまだ力強い駁撃の文章に逢著したことがない。

近ごろ實朝のことを、新らしく論じたものがありませんか。

一向知らずにゐます。新らしくとはどういふ意味ですか。

つまり新らしい頭、新しい看方ぐらゐの意味でせうか。

成程。そいつはむづかしいでせう。つまり征夷大將軍としての實朝を論ずるといふのでせう。さういふことは、達者な社會科學者なんかなら何とか說は立てませう。

歌からは說が出ませんか。

出ないとおもひます。歌の評價は、そんなにくらくらするものではないのです。

併し、新しい文學觀がありますから、新しい和歌觀もありませう。

私も一二聽かされたが、皆つまらなかつた。何だか眞似でしたね。

成程、さうして見ると實朝などは我儘で獨創のところがありましたね。

そこら邊を一つ聽かせませんか。

さうならないやうになさるのが、新しい感激でせう。歌人家に對する評價は、不斷のさういふ新感激に本づいたものでなければなりますまい。

さうですか。まあ、前人では、賀茂の眞淵はこんなことを云つてゐます。それに對して云つたのが荷樹の新學異見の言葉です。今なら、實朝は『將軍』だから、旦那藝、殿樣藝ぐらゐより下等だなどといひ勝でせう。それも實朝のものを讀みもしない癖にです。さういふ西洋眞似の說は駄目だ。

そのうち一人になつて私は部屋の中にゐたが、友のいつたことが私に、暗示でもかけたやうに頭のなかにこびりついてゐるやうでもある。

○

實朝は、建久三年八月九日に生れた。頼朝四十六歲。政子三十六歲の時である。吾妻鏡に、『九日。己酉。天晴風靜。早旦以後。御產所御產氣。御加持宮法眼。驗者義慶坊。大學坊等。鶴岳。相模國神社佛寺奉二神馬一。被レ修二誦經一……巳尅。男子御產也。……大河野上總妻室（阿波局）爲二御乳付一參上。女房大貳局。上野局。下總局等。可レ爲二御……云々。」

人物六七

鶴舞は斯くの如くにして殺せられた。[illegible]

も、豫定の行動であつたやうにも想へるし、公氏に對して[illegible]として[illegible]らう[illegible]

て現れたり、口出ていなば聞なき者となりぬとも悍婦の稱上杉を盛るで殺らしめたのであらうか。

な[illegible]といふ[illegible]首を咲んだりしてゐるあたりは、種々不徹な問はあつて

それから眞仁といふ女はどういふ女であつた[illegible]

『庚辰。御臺所依二御産氣一渡二御比企谷殿一。被レ用二御輿一。是兼日。被レ點二其所一云々。千葉小太郎胤正。同六郎胤頼。梶原源太景季等候二御共一。梶原平三景時。可レ奉二行御産間一之旨。被二仰付一云々。』とあるのは、産の約一月ばかり前に陣痛に似た證があつて一時は産があるのではなからうかと云つて諸人が氣色立つたところである。

八月十二日に頼家が生れた。『庚戌。晴。酉尅、御臺所男子(頼家)御平産。御験者專光房阿闍梨良遍。大法師觀修。鳴弦役。師岳兵衛尉重經。大庭平太景義。多多良權守貞義也。上總權介廣常引目役。戌尅。河越太郎重頼妻(比企尼女)依レ召參入。候二御乳付一。』といふやうなことも書いてある。

私は實朝のことを書かうと思つて、こゝに計らず頼家のことを挿入した。頼家は實朝の兄であるから、そこに何かの共通點があるとおもふのである。頼家は富士の卷狩に頼朝に連れられて行つたり、稍長じては頼朝が京都にのぼつた時にも一しよに行つてゐる。それが廿三歳の若さであんな工合になつて果てた。そこには北條家の云ふことを聽いてばかりは居なかつた性質があつたのであらう。

頼朝が一種の恐怖のために政略の一大方針として、身内の者でも何でも殺した。義經が生んだ男の兒を由比ヶ濱に沈めたのなどもその恐怖心に本づいてゐる。

の方針を學んだに過ぎない。さう觀察してくると、頼家等の人物をば、幾通にも割引して考へねばならぬ必要がおこつてくるのである。

○

實朝は、承久元年正月廿七日、八幡宮別當阿闍梨公曉のために弑せられた。その時の模樣をば、愚管抄の文に據つて記すと次の如くである。

『夜ニ入テ奉幣終テ、寶前ノ石橋ヲ下リテ、扈從ノ公卿列シタル前ヲ揖シテ、下襲尻引テ笏モチテユキケルヲ、法師ノケウサウトキント云物シタル馳カカリテ、下ガサネノ尻ノ上ニノボリテ、カシラヲ一ノ刀ニハ切テタフレケレバ、頸ヲウチヲトシテ取テケリ。ヲイザマニ三四人ヲナジヤウナル者ノ出キテ、供ノ者ヲイチラメ、コノ仲章ガ前駈シテ火ヲフリテ有ケルヲ、義時ゾト思テ同ジク切フセテ殺シテウセヌ。義時ハ大刀ヲモチカタハラニアリケルヲサヘ、中門ニトドマレトテトドメテケリ。大方用心セズサ云バカリナシ。皆クモノ子ヲチラスガ如クニ公卿モ何モニゲケリ。カシコク光盛ハコレヘハコデ、鳥居ニモウケテアリケレバ、ワガ毛車ニ乘テ歸リニケリ。皆散々ニチリテ鳥居ノ外ナル數萬ノ武士是ヲシラズ(下畧)

出來る。定家の『ケウナウトキツ』に『[illegible]』か、いまだ分家で
ないから、大方君子の教示をあふぎたい

私ははじめ、どういふ經過で實朝が弑害せられたか疑問にしてゐたのであつたが、これで見ると、數名の助手が居つた。それから一大刀頭上にあびせて斃れたのを、扈從の者どもが皆逃げたので、邪魔なしに公曉は實朝の首を斬取つたのである。『皆クモノ子ヲチラスガ如クニ公卿モ何モ逃ゲケリ』と云ひ、『皆散々ニチリテ鳥居ノ外ナル數萬ノ武士是ヲ知ラズ』といふあたりの文章はなかなか旨いとおもふ。

吾妻鏡にも、『軍兵空退散。諸人惘然之外無レ他』と書いてある。それから公曉は實朝の首を持つて、雪下北谷の家に行つた。そして食事する間もその首を側から離さなかつた。吾妻鑑に、『差レ膳間。猶不レ放二手於御首一云々』と書いてある。

『廿八日。戊辰。將軍家奉レ葬二于勝長壽院之傍一。去夜不レ知二御首在所一。五體不具。依可レ有二其憚一。以二昨日所レ給二公氏一之御鬢一用二御頭一奉レ入レ棺云々』

實朝は斯くの如くにして弑せられた。吾妻鏡の文章を讀んだだけでも、豫定の行動であつたやうにも思へるし、公氏に鬢一筋を記念として與れたり、『出でていなば主なき宿となりぬとも軒端の梅よ春を忘るな』といふ一首を咏んだりしてゐるあたりは、種々不審な點はあつても、實朝自身はすでに自分の運命を知つて人生に達つたと觀破して
よいだらう。

建久三年にあの如くに平和に生れた實朝は、承久元年に廿八歳にして、かくの如き悲惨な最後を遂げた。そして五體不具のまゝで入棺せられたのである。

○

頼朝はあのやうな、機敏であつてまた根強い政治家であつた。併し政子が實朝を懷姙してゐた頃は、奥州の征伐もすんで全く天下を平定してしまつた時である。加ふるに頼朝は、實朝の生まれる一月ばかり前に征夷大將軍になつてゐる。廿日。庚寅。大理飛脚參着。去十二日。任二征夷大將軍一給。云々とあるのは卽ちそれである。頼朝には、心細かく根強いところがあつて、いゝ加減に濟ましておかれない性質があつたやうである。私は歷史家でないから、一々立證することは面倒であるが、彼の一生の遣口から觀て、そんな氣がしてならない。頼朝が和歌を作つたのなども單になぐさみ、醉興ばかりではなかつたのであらう。京都と接觸しようとしてゐるうちに、その細かい性質がそこまで至らしめたのであらうか。

それから政子といふ女はどういふ女であつたらうか。一生の輪廓

からいへば、成程女丈夫であつたと謂つて好いであらう。けれども何處か鋭く、多感で、思ひつめる性質があつたのではあるまいか。それゆゑ、吾妻鏡に、御臺所御嫉妬甚之間などといふ文章がある個所に私は甚だしく興味をおぼえるのである。元久元年七月十八日、頼家は修禪寺で殺された。その時の吾妻鏡の記事は極く短く、『十九日。己卯。酉尅。伊豆國飛脚參著。昨日（十八日）左金吾禪閤（年廿三）於二當國修禪寺一薨給之由。申レ之云々。』とあるに過ぎないが、その時、政子は實はひどく歎いたに相違ない。承久元年に實朝の殺された時でも、やはり政子はひどく歎いてゐる。たゞその心情を外に露出し難い狀態にあつたので、寫經、供養などによつて、辛うじて心を靜めただらう。併しまたそれで濟まされるといふ強い　吾儘で執拗なところもあつたに相違ない。尼將軍、女丈夫などといふ名はそのへんから來てゐると思ふ。

頼朝が政子に生ませた子には、頼家、實朝のほかに、大姬、乙姬といふ二人の女がゐる。

大姬は木曾義仲の嫡子義高と許嫁の仲であつたのに、義仲の歿後義高は頼家のために殺されてしまつた。大姬はそれからといふものはしばしば病氣の發作を起してゐる。後、建久五年になつて政子は大姬をば一條高能に嫁がしめようとするも、[illegible]症は吾妻鏡に、大姬君御違例。太御苦之由。人群參。とか、姬君有二御不例之氣一とかいふのであるか、恐らくは官能性神經の症であつたのではなからうか。さういふ、いぢらしい、思ひつめる性質を私は大姬の場合にも想像することが出來る、當世にあつては、珍らしいとも思はぬが、鎌倉の昔にあつてはやはり一種の特色を有つてゐる女といふべきではあるまいか。建久五年八月十八日の條に。姬君御不例復本給之間。有二御沐浴一。然而非レ可レ有二御恃始終事一之由。人皆含二愁緒一。是偏御歎息之所レ積也。可レ令レ嫁二右武衞一（高能）給上之由。御臺所內內雖レ有二御計一。敢無二承諾一。及レ如レ然之儀一者。可レ沈二身於深淵一之由被レ申云々。是猶御懷舊之故歟云々。』とある。御懷舊とは義高の事をおもふ心情をいふのである。御歎息之所レ積也の句は平凡のやうであつて實は平凡ではない。なほ建久五年七月廿九日の條にも、『將軍家姬君自レ夜御不例。是雖レ爲二恒事一。今日殊危急。志水殿有レ事之後。御悲歎之故。追レ日御憔悴。不レ堪二斷金之志一。殆沈二爲二石之思一給歟。且貞女之操行。衆人所二美談一也』とある。志水殿は義高をいふので、吾妻鏡の作者もなかなか氣乘がして書いてゐる。近世フロイドの稱へた LIBIDOは、やはりこの邊にも淵源を求めて居るのである。私はそれをば必ずしもリビドのみには限局せしめないか。

つたことがいろいろと傳へられてゐる。[illegible]
て、邪氣の宗教に出で、つひに悲惨な最後を遂げたのであるが、やはり多感で、思ひつめ、熱烈なところの男ではなかつたらうか。少年の頃には素直に延びて行つた頼家の性質も、中ごろから北條氏のために壓迫せられるに及んで、そこに何か順直でない強靭な性質を出して來たものと看做していゝであらうか。私は秘かに頼家も暗愚な男ではなかつたと考へてゐる。頼家歿後、頼家に心服し同情してゐたいはゆる左金吾禪閤御家人のあつたことを思へば、それを單に北條氏に對する反感のみとは受取がたい。やはり頼家の死去に對して強い感動を持つた家人等と看做なければならぬ。

頼朝も政子も動亂の世に處して、飽くまでその力量をあらはした。頼家の弟には、義經、範頼の如きがある。義經の如きは尋常一樣の人物ではない。いつたい亂世に處して功成り名遂げたものを人は英雄といふ。之に反して、その後繼者であつた、頼家、實朝の如きになると、人はこれを稱して無能の士に過ぎないといふ、能く云つて、聰明ではあらうが亂世に處する器では無いといふ。けれどもさういふ説は、單に事蹟の迹を追うて論斷するに過ぎないので、さういふことは陳腐な歴史家に任せておいていゝ筈のものである。それゆゑ私の如き素人あまのじやく出でて、頼家實朝を論斷するのである。一體君等は頼家、

[illegible]

○

實朝の人物、性質はどういふものであつたか、これも古來二通りの見解があり、それは次のやうなものが本になつてゐるとおもふ。

一つは愚管抄卷六の文章で、『又ヲロカニ用心ナクテ、文ノ方アリケル實朝ハ又大臣ノ大將ケガシテケリ。亦跡モナクウセヌルナリケリ』といふのである。

一つは増鏡新島守中の文章で、『このおとゞは大方心ばへうるはしく、たけくもやさしくもよろづめやすければ、ことわりにも過ぎて、もののふのなびきしたがふさまも、ちゝ（代々）にもこえたり』といふのである。

この二つの看方は昔からあつた。その間にいろいろの人の折衷説も挿入せられるのである。古來から、かういふ二通りの看方があつたのであるから、よく參考して考察する方がいゝとおもふ。

愚管抄の『大臣ノ大將ケガシテケリ』といふことは將軍としての成迹から觀察した言葉であつて、さういふことにもなるのである。實朝は十三歳で將軍になつたが、母の政子、叔父の義時が諸事政務をとつたやうなものである。しかし實朝は長ずるに及んで、獨自の傾向をば

時々示した。それが義時等にとつて一種の恐怖ともなつたのに相違ない。この事は賴家の場合と同樣である。

實朝は京都の風習をばどしどし鎌倉に移したのに對して、賴朝在世中のことを回想しては、實朝のやり方を批難するものもあつたらしいが、かういふ事は世の中にありがちの事であつて、先代の事が偉く見え、當代がつまらなく見えるといふ下世話の現象と少しも變りはないのである。それから、京都との接觸の如きも賴朝時代からの方針で、何も實朝がはじめたのではない。

實朝は、政治上の事に全力をそそぐことが不可能の狀態に置かれたために、別な方面にその本領があらはれて行つた。それは短い年月であるが、和歌の方面その他にあらはれたのである。近時、森鷗外先生は伊達綱宗のことに言及されたことがある。その中でかういふことを云はれた。『綱宗は凡庸人ではない。和歌を善くし、筆札を善くし、繪畫を善くした。十九歲で家督をして、六十二萬石の大名たること僅かに二年。二十一歲の時、叔父伊達兵部少輔宗勝を中心としたイントリイグに陷いつて蟄居の身となつた。それから四十四歲で落飾するまで、一子龜千代の綱村にだに面會することが出來なかつた。‥‥綱宗はこれより前も、これから後老年に至るまでも、幽閉の身の上でゐた。綱宗の藝能は書畫や和歌ばかりではない、蒔繪を造り、陶器を作り、又刀劍をも鍛へた。私は此人が政治の上に發揮することの出來なかつた精力を、藝術の方面に傾注したのを面白くおもふ。面白いのはここに止まらない。綱宗は蟄居のために意氣を挫かれずにゐた。品川の屋敷の障子に、當時まだ珍しかつた硝子板百餘枚を嵌めさせた、その大きいのは一枚七十兩で買つたといふことである。その豪邁の氣象が想ひ遣られるではないか。かう云ふ人物の綱宗に仕へて、其晩年に至るまで愛せられてゐた品といふ女も、恐らく尋常の女ではなかつたらう』かういふのである。文は、全集第七卷、椙原品の傳中にある。綱宗の幽閉せられた本は、綱宗が吉原に通ひはじめたのにある。さういふ綱宗の一生は、大名としての成迹から觀て、實に凡庸人でなければならぬ。そして、いかにも今までその通りに評價されて來たのである。然るに鷗外先生は別な方面から綱宗を品評されたのを私はたいへん興ふかくおもふ。そこで私はこの文を愛し、折にふれて實朝を聯想することもあつたので、此に引用した。

實朝には、一面、我儘で、早熟で、豪華で、なかなか聽かない、思ひつめるところがあつたとおもふ。實朝が一躍して萬葉集の歌を手本とするやうになつたのなどで、

……題たこうとしたのであるといひ、或は外國哭を語らうしたのである……とまで云つて居る。然し、この點數を、要素で、[illegible]らず、[illegible]める氣象に本づくと解釋すべきである。[illegible]の文脈を見たくなつたのである。これは[illegible]士が、[illegible]巴を見たし、[illegible]を見たいと思つたのと同様である。[illegible]の文脈についていふ[illegible]もしこれに聽いて居る。そこに[illegible]りなどして、「[illegible]」[illegible]云つたので、一つ詩に入つて見たいといふ氣になつたのであらう。

[illegible]

いづれにしても、[illegible]れたといふことは、[illegible]

（）

[illegible]

が、これなども歌人とせば常のことであつて、京都の一流の歌人などはもつと苦吟慘憺したことが書物に見えてゐるのである。

それから、坪內博士は、名殘の星月夜といふ脚本を書かれたとき、實朝の口から、『あゝ併しながら、醉ふことの出來た彼は幸福であつたわい！　予は曾てまだ醉ふといふことの味を知らぬ』と云はせてゐる。この脚本では實朝は一種の醒めたる人になつてゐるが、恐らくは、實朝は、もつと情熱を內に籠らせた人ではなかつただらうか。

實朝は十三歲の時に結婚した。十二歲の時に征夷大將軍となり、その翌年のことである。はじめ足利義兼の女が選ばれてゐたのを、權大納言信淸の女を迎へた。これは政子の口添もあつたらしいが、實朝自身の意志に本づいたといふことである。

この結婚なども實朝の氣象を伺ふに足る一つの資料となり得るのではなからうか。御臺所は、どういふ女であつたか。京都公卿の女でありながら、政子のやうに感情のはげしい女ではなく、極くしとやかな女のやうな氣がしてならない。吾妻鏡には尼御臺所政子の記事は所々に散見するが、將軍實朝の御臺所の記事は殆ど無いといつてい丶。これは表立つた働きをせず、殿向につゝましく暮らした證據であらう。それでも京都文化に育てられた女であるから、和歌の上などでも實朝の相手となり得たと想像してい丶。

實朝が死んだ時、御臺所は髮をきつた。正［…］令落飾御。といふのは即ちそれで、後の八條禪尼である。この御臺所はいつか文士の制作の對象になり得ても差支はないとおもふ。

實朝と朝廷との關係、特に後鳥羽上皇との關係も對象になり得るし、實朝の性格もそこから覗はれるとおもふ。太上天皇御書下預時歌、三首。それから官打の說。大江廣元の諫言その他である。けれどもこの方面の事は、概ね專門の歷史家によつて說かれて居るから、もはや贅言はやめなければならぬ。ただ三首の歌の解釋について少しくいふ必要があるぐらゐに過ぎない。

○

實朝はどういふ容貌をしてゐたか、それはよく分からないが、坪內博士の『名殘の星月夜』や、林氏の『唐糸物語』などを芝居にやるときに出て來るやうな、顏の蒼白な、瘦せてひよろひよろした人物では無かつたと私は想像する。私は一度『唐糸物語』の芝居を見たときに實朝に扮した役者は確か勘彌であつたらしい。併し多くの日本人は、あゝいふ顏の人に實朝を想像してゐると見える。そこが私の不服におもふところなのである。

うに、これも、瘦せてかよわさうにしてゐるのではない。よく似た[illegible]本にも載つてゐる頼朝の畫像は、壯年の時のものであるが、口が大きく、顔が肥つて鋭い目付をして居る。この頼朝の彫像はやはり實朝の容貌を想像するうへの參考となるに相違ない。それから、このごろは頼朝に關する著書は大分出來てゐるやうである。さういふ書物には、頼朝の容貌に關する文章が載つてゐるであらうから、實朝の容貌を想像する補助方法として讀むといゝ。

實朝は十七歲の時に疱瘡に罹つてゐる。吾妻鏡承元二年二月三日の條に、『將軍家依二御疱瘡一無二御出一。』の文字があり、二月十日の條に、『將軍家御疱瘡頗令レ惱二心神一給』といふ文字がある。

ついで建曆元年（實朝二十歲）二月二十二日の條に、『將軍家御二參鶴岡宮一。去承元二年已來。依下令レ憚二御疱瘡之跡一給上無二御出一。今日始有二此儀一』かういふことがある。つまり十七歲の時に罹つた疱瘡の跡が氣にかかり、鶴岡社に參詣するやうなことがなかつた。それが二十歲の二月廿二日にはじめて參賀の儀があつたといふのである。

想像するに、實朝の背はさう高くなく、ひよろひよろとしてはゐなかつたであらう。體は餘り瘦せてはゐなかつたであらう。そして十七歲以後は痘痕を有つた顔をして居たたらう。京都の大通寺に、長さ三尺一寸の實朝の木像がある。大通寺は實朝の後室八條禪尼が、實朝の[illegible]したところである。その像を見るに決してかよわさうなひよろひよろした所ではない。ことに沈痛の面持をしてゐる點を世人は見のがさぬがいゝ。

實朝は病身であつた。將軍家御違例。將軍家御不例などの文字が吾妻鏡に散見するのは即ちそれである。併し實は誰でもそれくらゐの病氣はしてゐるのである。ただ頑健の身でなかつたことだけは私も承服する。鎌倉の僧が實朝に宋渡來の茶を献じて、その功德を云々してゐるのなども、實朝の身體が餘り頑健でなかつたことの一つの證據と看做してもいゝだらう。

頼家は二十三歲で死んでゐるが、三人の子があつた。之に反して實朝には一人の子も無かつた。歷史家はそれをば過淫の結果だらうと云つてゐる。また荻生徂徠などは、「政子の淫亂の迹傳はらぬは廣元の諱みしなるべし。頼家・實朝・時政・義時・和田・秩父までも終をよくせざるは、しるせる外に仔細あるべし。淫欲にあらざりしかば、かゝるいはれなき事はあらじ」（南留別志）などと說さへ立ててゐる。

實朝には妾のあつたことは史家も云つてゐる。金槐集の中に、女房のことを詠んだ歌があり、情緒のこまやかな點から看て、關係のあつたと考へてもいゝが、その當時にあつてそれくらゐの事は當りまへであつたたらうとも思ふ。また相當の數の妾があらば庶子の一人二人あ

つてもいゝ筈である。それのないところを見ると、實朝は世の人々の考へてゐるほど淫欲をほしいまゝにしたとは私は考へない。又夫婦の間の交情に取り立てていふべきことも無かつた。實朝が殺されたとき、御臺所は髪をおろして居り、これは單なる形式ばかりとは考へられない。

○

實朝の歌人としての略歴を記すと次のやうなものになる。漢文は吾妻鏡の文章を抄した。

十四歳（元久二年）『將軍家令レ詠二十二首和歌一。內藤兵衞尉朝親。自二京都一下著。持二參新古今和歌集一』

十七歳（承元二年）『兵衞尉淸綱 御臺所侍 昨日自二京都一下著。今日參二御所一。是隨分有職也。仍將軍家有二御對面一。淸綱稱二相傳物一令レ獻二古今和歌集一部二』

十八歳（承元三年）『將軍家依二御夢想一被レ奉二二十首御詠歌於住吉社一。內藤右馬允知親爲二御使一。以二此次一去建永元年御初學後御歌撰二三十首一爲二合點一被レ遣二定家朝臣一也。』『加二合點一返進。又獻二詠歌口傳一卷一』

廿二歳（建保元年）『京極侍從三位獻二相傳私本萬葉集一部於將軍家一。……御賞翫無レ他。重寶何物過レ之乎由有レ仰。』

ざつとからである。も一度繰返していふと、實朝は十四歳の時にはじめて和歌を味じたことになつてゐる。これは實朝は早熟で、はやくから京都の文明にあこがれ、室にも自ら京都公卿の娘を選んだほどであるから、和歌といふものを作つて見ようといふ一種の好奇心、名譽心から出發したものである。それに、その當時すでに家臣のうちにぼつぼつ和歌を稽古してゐるものも居り、さういふ侍臣から手ほどきをして貰つたのであらう。

それから、其年に侍臣が京都に行つたついでに、新古今集を持參した。新古今集には父賴朝の歌も入選して居り、出來て間もない勅撰集であるから、實朝はそれに據つて稽古をなし、ずゐぶん思切り模倣もし、句や言葉もどしどし取つて使つた。

それから十七歳の時に古今集を見てゐる。これは御臺所の侍臣である淸綱といふ者が京都から持參した。この淸綱はいろいろの事を知つてゐたので、實朝は淸綱から學ぶ處も多かつたに相違ない。實朝は古今集を見てからどしどし古今集の影響を受けた。金槐集を讀むと、實朝は、隨分細かいところまで古今集の模倣をし、言葉を採り用ゐてゐることが分かる。その模倣は單に古今集の初の方ばかりでなくしまひの方の東歌の影響までも隨分受けてゐる。

ついで十八歳の時に藤原定家に教を受けてゐる。これは、實朝が御

[illegible]によつて、[illegible]することになり、その使は内藤右馬允知親であつた。この知親は吾妻鏡にも『好士也。定家朝臣門弟』と註してある如く、前から定家に和歌の道を習つてゐた者である。そこで、それを好い機會とし、實朝が十四歲の折から今まで作つた歌のうちから三十首を選んで、定家に評點を乞うたのである。この知親といふ者は朝親と同じ人間で、實朝十四歲の時、新古今和歌集を京都から持つて來て呉れた者である。

すると約一ケ月餘を經て、その詠草に合點を加へて返進すると同時に、詠歌口傳一卷を獻じた。この詠歌口傳といふのは近代秀歌とも、定家卿和歌式とも、承元和歌式とも云つてゐる。詞は古きを慕ひ心は新らしきを求め及ばぬまでも高き姿を願ひて寛平以往の歌にならはばおのづからよろしきこともなどか侍らざらむ」といふやうなことを教へたものである。或は『しかれども大納言經信卿、俊賴朝臣、左京太夫顯輔卿、淸輔朝臣、近くは亡父卿、即此みちを習侍ける基俊と申ける人、此ともがら、末の世のいやしき姿を離れて、つねに古きをこひねがへり。此人々の思ひ入て、すがた勝れたる歌は、高き世にも及てや侍らむ』からも教へてゐる。一言にしていへば、時流に染まずに、古歌のいゝところを學べといふことになる。實朝はそれを實行した。これは實に偉い點であつて、古歌を模倣し得たといふ點がすでに實朝の偉い點で[illegible]。[illegible]定家の[illegible]に、一[illegible]に於きても[illegible]ふ」などといつてゐながら、その實行は出來なかつた。[illegible]實際は定家も實朝のやうに萬葉流に行くべきことに氣がついても、もう老境に入つて駄目であつたといふ。『これにおもむきたまひなむを、いと老たまひて日なきなるべし』といつてゐるが、やはり、定家には實行する氣はなかつたのである。

實朝廿二歲の時に、定家が相傳私本の萬葉集を獻じた。これは實朝がかねて近侍のものから萬葉集といふ古歌集のあることを聞き又近侍の和歌を稽古してゐるものが、たまたま萬葉集のことを云々したものと見える。それで實朝はその萬葉集といふものが見たくなつて、二條中將（雅經）の手を經て定家に尋ねたのである。定家が相傳私本萬葉集を實朝に贈つたといふことは、隨分思切つた贈物で、いかに定家が實朝を重んじたか、又當時の將軍といふものは縱ひ若年であつても威勢のあつたものだといふことが、かういふ方面からも觀察することが出來る。この時實朝二十二歲、定家五十二歲である。

實朝はそれ以來萬葉集の眞似をしてゐる。けれども此時から廿八歲の正月に公曉のために殺される時まで、漸く滿五ヶ年ぐらゐた年月に過ぎない。當時の歌人が萬葉集を云々しながら少しも萬葉集を模倣し得なかつたに反し、實朝は直ちに萬葉集に肉迫して行つてゐる。そして

金槐集中の十數首の如き立派な萬葉調の歌を殘してゐるのは、實に不思議な歌人と謂ふべきである。その當時に萬葉集の歌の妙味が分かつたといふだけでも、いかに實朝の心境が尖鋭であつたかの證據になるとおもふ。

それに定家は實朝の歌を褒めてゐる。そして、『鎌倉右府はたけたる歌人と覺え侍る。古人の詠作に並べたりともすべて劣るべからず。實にたぐひ無き事とぞ思ひ侍る』とまで云つてゐる。或は、『鎌倉の右府はたけたる歌よみとぞおぼゆる。此歌を見るときは、歌はものらくなりぬ』(眞淵抄)ともいつてゐる。この如き定家の態度はどのくらゐ實朝を勵ましたことであつただらうか。後代の私はいつも此等の言葉を思出して感謝をしてゐるのである。

定家のさういふ態度は新敕撰集にもあらはれた。そこで新敕撰集はその當時の人々からもいろいろ批難されたらしく、自分の兄弟の越部禪尼(俊成女)が新敕撰集を評した消息に、『新敕撰はかくれごと候はず候。中納言入道殿(定家)ならぬ人のして候はば、取りて見たくだに候はざりしものに候。さばかりめでたく候御所たち(後鳥羽・土御門・順德)の一人もいらせおはしまさず云々』とあるのを見ても分かる。卽ち自分の兄弟が撰んだ敕撰集であるから手に取り見るやうなものの、若し他人が撰んだ集であつたら見向もしたくないといふ意味である。また増鏡にさへ、『心よからぬにはなとかや』などと書いてある程である。

かういふことは後代の人々の間にも殆ど定評の如くになつてゐる。あれほど實朝ひいきの賀茂眞淵でさへ、新敕撰集の撰者の態度を評して、『おもねりしなり』と斷言してゐるのみでなく、『此撰はそのへつらひのみかは、歌にも甚あやまり多きものなり。すかたも卑し極まりたるは、王殿鎌倉に移りて京家附物の時ゆゑに、おのづから京人の心窮し邪意のみに成て、いよいよ古き此御殿の摩なもせねば、さる時の心にて咏めらん歌、さる心にて撰みなん歌いかでよき樣の有べき』云とまで評してゐる。私は定家の阿諛の分子について何時かも考へて見たことがあつた。そして私は定家に同情し、他人が考へる程定家に邪念があつたとは考へない。定家は人も許し自らも任ずる一代の巨匠である。縱しんば明月記で官位の事などをくよくよ云つて居るにせよ、歌のことにかけては動せない自負心がなければならぬ。特に敕撰集は千載に殘るべきものであり、定家は古今集以來の敕撰集を見てそれを知つてゐる。また敕撰集の撰者の名譽大きく責任の重いことをも知つてゐる。茲に於て、新敕撰集に於ける定家の遁口をば幾分割引して私共は批評しなければならぬのではあるまいか。

[illegible]の歌を讀むやうになつたのであるが、それも[illegible]家の功の存することを見のがしてはならぬ。[illegible]を讀み、萬葉歌人に私淑するに至つたのは先丈の偉い處であるが、自分の師で先輩である定家が實朝を褒めたのに實朝が秀歌を詠むに至つた一つの好刺戟と謂はねばならぬ』云々とかう書いたことがあつた。この文章は十數年後のけふ顧みても矢張り好い文章であるとおもふ。

以上が歌人實朝の略歴である。實朝は十四歳ごろから歌を習ひ、廿八歳の正月にはもう死んでゐる。そして本稽古に入つたのは漸く五年ぐらゐと看做していゝ。師の定家は八十歳まで長命し、死ぬまで作歌を勉強した。西行法師の如きも七十三歳まで長命してこれも吟詠を棄てなかつた。九十の齢を越えた俊成の如きさへある。さういふ専門歌人に較べると、歌人實朝の一生の如きは誠に果敢ないものである。實朝は偉大な歌人としての初途で死んだといふことが分かるであらう。

○

『たまくしげ箱根の海はけけれあれや二やまにかけて何かたゆたふ』

といふ實朝の歌があるが、この歌なども實に驚くべきものであつて、かういふ重厚素朴な歌がどうしてその當時出來たかと思ふくらゐである。

『けけれ』は[illegible]といふ[illegible]であり、この歌は古今集の『甲斐が嶺をさやにも見しかけけれなく横ほり伏せるさやの中山』といふ歌の影響を受けてゐるのであらう。併し實朝の歌の方に、古今集の歌よりも深い、何處となく象徴的なところがあつて、常識的ならしめない何かがある。然かも、『何かたゆたふ』（どうしてためらひ湛へてゐるのか）といふあたりは、一種戀愛的情調をこめた、古代民謡の特色をあらはしてゐる。

古今集のこの歌は、集の終の方に載つてゐる東歌の一つである。普通古今集を讀み、古今集を手本として歌を稽古しようといふ者は、一體東歌の一首などを手本とする氣になり得るであらうか。それは斷じて出來ない。またその當時の有名な歌人の誰もがさういふことを爲遂げてゐない。口では古風を慕ふなどと云つても、かういふ歌の前をば皆素通りして行つてしまつてゐる。然るに實朝は、この東歌の一首に眼をつけて、それを模倣してゐるのは、その見識に驚くべきである。

凡俗の批評家は、實朝の歌に本歌があるから、實朝は獨創の歌人でないなどといふが、そもそも實朝はどういふ歌を見付けてそれを本歌としてゐるかを少しく調べたなら、實朝は第一流の獨創歌人たるべき資格者だといふことが分かる。若し分からぬ者があるなら、それは低級浅薄の徒だからである。

實朝の人物は、この一首の歌に就て最も明瞭に出てゐる。實朝は決して凡庸の人物ではない。ないのみでない。實に非凡のところがある。私は、上に實朝の性質に就いて云々したから、こゝに實朝の作歌の上からそれを立證したのである。

この歌は貞享本金槐集所載のものに從つたが、群書類從本の金槐集には、『玉くしげ箱根のみうみけけれあれや二國かけて中にたゆたふ』になつてゐる。箱根の湖は、何か心があるからか、このやうに二箇國にまたがつて、いづれに附くともつかず、その中ほどに、ためらつてゐるといふ意味になる。貞享本の歌は、箱根の湖は、何か心があるからであらう、二つの山にまたがつて、なぜか、ためらつてゐる。といふ工合になる。二つの歌の意味は幾分ちがふのは寫傳の相違であるか、或は二ざまに作つたものか瞭然とはしないが、私は二つとも鄭重して讀味へてゐる。短歌の如き短い形式の詩は、一語一句を重じて讀味へなければその妙味の分からぬ事が多い。その細かいところから人物をも覗くことが出來る。單に歌の意味合のみからはそれの分からぬ事が多い。

○

『大海の磯もとゞろに寄する波われてくだけてさけて散るかも』といふ歌は金槐集雜部にあり、「荒磯に波のよるを見てよめる」といふ詞書がある。この緊張した強い歌も、金槐集中の傑作であるとおもふ。然るにこの歌にも吟味すれば本歌があるのであつて、實朝は、『伊勢の海の磯もとゞろに寄する波かしこき人に戀ひわたるかも』『聞きしより物を思へばわが胸はわれてくだけて鋭心もなし』『大海のいそもとゆすり立つ波の寄らむと思へる濱のさやけく』かういふ萬葉集の歌から影響を受けてゐるのである。

この影響の受けかたも、仔細に考へると實朝の特色が隱なく出てゐるのであつて、本歌をさがして實朝の歌を非難しようとする輩は、ただ本歌だけを並べるから、實朝は、先づ本歌をさがして置いて、言葉を都合の好いやうに補綴して一首にまとめるやうに思ふかも知れぬが、實朝の作歌の態度は實はさうではない。萬葉集の歌を幾度か讀んでゐるうちに、その言葉がもはや自分のものと成つてゐる。それを驅使するのである。

それであるから、縱ひ本歌があつても實朝の歌は無論獨立の權利があるばかりではなく、飽くまでも作者の性命を吹きこんでゐるその得も言はれない味ひを一首一首に就いて受取り難ければ、實朝の歌の研究はむづかしいとおもふ。

本歌を見つけて直ぐ反感を持つ人、例へば香川景樹のやうなものは、

實朝の歌の味ひを鑑賞しようといふよりも、その外形だけを本歌と比較して云々しようとするのであるから、差向けられる對象は、歌として如何に優れたものであつても、それを素直に受納れることが出來ない。さういふ人々は無縁者であるから實朝などをずつと離れて、銘々の好きな歌人でも見つけてそれと遊ぶ方がいゝ。

○

『もののふの矢並つくろふ小手のうへに霰たばしる那須のしの原』この歌は實朝の歌としてはなかなか有名になつた。賀茂眞淵なども、『軍に立ちて負ふ征矢の亂れを直すとて肩の上にやりたる其小手を霰の打たばしらむさま人丸のよめらむ勢也』と評してゐるほどである。

この歌はどこか題詠のやうなところがあり、流動の氣に乏しい點がある。或人は、屛風の繪か何かに題したものではなからうかと云つたが、或はさうかも知れぬ。また賴朝は嘗て那須野で狩をしたこともあるから、さういふ光景の繪などから思浮んで作つたものと解しても差支はない。

金槐集中の歌は、不思議にも題詠でないのがある。併しそれは數へるほどで、これを萬葉集の歌などに較べると、やはり新古今時代の歌人の態度に屬すると謂つていゝのである。この『もののふの』の歌の如きも先づ歴然だらうとおもふ。

この歌などはこれまで餘り本歌をさがした人はないが、それでも、定家の、『大空にたがぬく玉の緒だえして亂みだるる野べのさゝ原』といふ歌や、萬葉集の、『わが袖に霰たばしる卷かくし消たずもあらむ妹が見むため』といふ歌などを參考歌として數へてもいゝとおもふ。そこで實朝は、題詠くさき歌であつても、時流を抜いて萬葉の古調に迫らうと欲したことが分かる。さう欲したうへは餘りためらふ樣なことは無かつたやうに見える。晩年の歌でも萬葉調でない歌のあるのは、誰でもさう容易に萬葉調にはなれないといふ證據になるに過ぎない。

○

『世の中は常にもがもな渚こぐ海士の小舟の綱手かなしも』この歌は、私は小倉百人一首以來いくたびか讀んだ。それから此歌を定家は新勅撰集にも採つてゐるところを見ると、大體に於て萬葉調である此歌を定家は認容したといふことになる。定家が實朝に向つて古風を慕へと敎へた。實朝が一躍このやうな歌を作ると、定家はそれを認容したといふことになるのである。

『綱手かなしも』に就いて契沖の改觀抄の追考のところに、『渚こぐ海士の小舟の綱手ひくさま、中々外にもとめぬ心なく愛すべく面白き

よりて、嗟嘆のこうじて哀にかよふ所なり。さてこそ世の中は不變にてあれかし。されど不變にては無きと受けたり』と書いてあるのはなかなかいゝ文章である。

この歌は、『河の上のゆつ岩群に草むさず常にもがもな常少女にて』『世の中は常なきものと今ぞ知る奈良の都のうつろふ見れば』といふ萬葉集の歌や、『みちのくのいづくはあれど鹽釜の浦こぐ船の綱手かなしも』といふ古今集の歌にその類似を有つてゐる。恐らく實朝は、さういふ歌を讀んで、それのいゝところを理解し、それを心に記銘して居たに相違ない。併し斯の如き本歌とも看做すべき數首の歌を知つてゐても、この一首の如きは堂々たる風格のものではあるまいか。特に小倉百人一首の中にあつて讀味へると、特別の光を放つやうに思へる。

○

私は上に實朝の歌數首を抜き、その本歌となつたものを證明した。それと同時に、縱しんば實朝の歌には本歌があつても、獨自の風格の害せられないこと、それがやがて實朝本來の面目であることを云つた。それ以上いふとうるさくなるから、一寸此處で休止しようと思ふ。

さて、なぜ實朝は古歌に本歌をもつ歌を澤山に有つてゐるだらうか。實際金槐集を讀み、國歌大觀によつて類似の句を有つ歌をさがすときに、思なかばに過ぎるものがある。實際實朝はさういふ事ばかりしてゐるのであつたならば、景樹が評した如く『ことごとく古調をかすめたる剽竊歌人に過ぎないといふ事になるとおもふ。そんなら當時の歌人は本歌取はしなかつたか。若し本歌取をしてゐるなら、實朝とどう違ふか。この事について前年考へて見たことがあつた。このことが分かると、實朝をば第一流の獨創歌人だとする私の說にあへて矛盾をば來さないのである。

本歌取といふことは當時歌壇の一つの風習でもあつた。定家は實朝に敎へて、『古きを慕ふによりて、昔の歌の詞を、あらため詠み加へるを即ち本歌取と申す也』と云つて居り、源顯輔の『君來ずば獨りや寢なむ笹の葉のみ山もそよに騷ぐ霜夜を』『難波人すくも焚く火の下こがれ上はつれなき我身なりけり』や、基俊の、『あたら夜を伊勢の濱荻折敷きていも戀しらに見つる月かな』の歌を書き、『かやうの歌を本歌にとりて、新しき歌に詠めるが誠によろしく聞ゆる姿に侍る也。是より多く取れば我が詠みたる歌とは見えず、もとのまゝに見ゆるなり』(近代秀歌)と云うて居る。これは初學者として實朝を遇したものであるが、それでも、本歌を取るといふことを默然と認容してゐるのである。

『本歌とり侍るやうに、(中略)本歌の詞を餘りに多く取る事は有るまじきにて候。其の中に詮と覺ゆる詞二つばかり取りて、その歌の上下の句に分ち置くべきにや』(毎月抄)からも云つてゐる。係り澤山詞を取るのは惡い。詞二つばかり取つて、上の句と下の句とに旨い工合に配れといふのである。

『於古人歌多以其同詞詠之已爲流例。但取古歌詠新歌事、五句中及三句者頗過分無珍氣。二句之上三四字取之。猶案之以同事詠古歌頗無念歟』(詠歌大概)からいふことをも云つてゐる。要するに大同小異である。

さて、さういふ工合に本歌取を認容した歌壇にあつて、當時の歌人はどういふ歌を詠み、どういふ本歌取をしてゐるか。試みに一二首を此處に書くならば、

みよしのの山の秋風さ夜ふけて故里寒く衣うつなり(本歌取)　(新古今。雅經)

みよしのの山の白雪つもるらし故里寒くなりまさるなり(本歌)　(古今。是則)

さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫(本歌取)　(新古今。定家)

さむしろに衣かたしき今宵もか我を待つらむ宇治の橋姫(本歌)　(古今。讀人不知)

ざつとこんな工合である。かういふ一二例を以てしても略その手段を推測することが出來るとおもふ。

實朝が本歌取をしたのは當時の教育によつたのである。さういふ作歌の態度は無論作歌の大道ではないが、實朝はさういふ時代に生れたのである。さういふ事情が分かつたうへは、實朝はどういふ歌に飛ついてそれを本歌としたかを吟味すれば、實朝が非凡であるか凡庸であるかがおのづから解決がつくのである。それを略私が解決したとおもふ。

も一度ここで約めて云へば、實朝は優れた歌の句を見抜く眼力があつた。それから、それを本歌として自己本來の歌を作り得る力量を有つてゐた。かくの如き歌人を褒めずに後代の吾等は誰を褒めるか。

○

『もののいはぬ四方のけだものすらだにも哀なるかなや親の子をおもふ』これには『慈悲の心を』といふ題がついてゐる。この歌になるともはや背景に粉本を豫想しなくともいゝ、洗滌無礙の風格を見ることが出來る。

線が太く豐かであつて、さうしてゐて、波うつ響が飽くまで緊張し

保ち、字餘りの技巧でゆとりを賑り、一首の字面から、何か知ら息吹のやうなものが感ぜられる。第四の句で、『哀なるかなや』と強く詠歎したのなぞも、實に自然で旨い。それから、結句では、『思ふ』と現在格にいつてゐるあたりも、安定の据わりのうちに、奥々の方に餘韻をこもらせて居る。

一首の意味も自然順直で分かりよく、定家の歌に見るやうな、幽玄ばりでむづかしいものではない。また、かういふ人情味をうたふ抒情詩は、一歩滑れば通俗になり、さもないと乾燥したものになるので、その道の達者でも決して容易な道ではないのである。然るに、實朝はかういふ種類の抒情詩をば、いかにもあぶなげ無く、ずばりずばりと爲し遂げてゐる。後にいふ、『旅をゆきし』の歌などもさうであつて、これも萬葉集からの悟道であり、それがつまりは實朝の氣稟に本づくといふことになるのである。

實朝は佛教の信者で、夙く聖德太子をも讃崇してゐるし、葉上房榮西、その弟子の行勇からも親しく法談を聽いて居る。それであるから實朝の心の中には人生無常のことわりが強く根ざして居たと見るべく、また幼年の頃から、周圍の事情をまのあたり實驗して、心中に常に何ものかが結ばれつゝあつたのである。そこでたまたま、『慈悲』といふ如き題にて題詠の歌を成すに當つても、おのづから深い生が一首とし

て出[illegible]

たゝへて、それをあるが儘にあらはすことを成就して居る。

○

『箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ』には、『箱根の山を打いで見れば浪のよる小島あり供のものに此海の名は知るやと尋ねしかば伊豆の海となん申すと答へ侍りしを聞て』といふ詞書がある。

この歌も有名になり、實朝の歌をいふものはこの歌をいふやうになつた。そして實際この歌は金槐集中でも傑作であり、沈痛の響などのない、自然風光に對した時の素直さが、豐かな調べで出てゐるところ、前出の『ものいはぬ四方のけだもの』などの調べとは別途に出てゐるところ、さういふ點が歌人としての實朝の複雜性を指示して居る。

この歌と、萬葉集の『逢坂をわがこえくれば近江の海白ゆふ花に浪たちわたる』とを比較して論ずるのを常として居る。先師伊藤左千夫先生は、實朝の箱根路の歌は到底萬葉集の近江海の歌には及ばないといふ説を立てられたことがあつた。今味つてみると、やはり萬葉集の歌には及ばないやうである。併し

至誠から出て、實朝の秀歌は眞淵の秀歌には既にないのであるから、あへてこの歌ばかりについていふことが出來ない。

『伊豆の海や』の『や』は詠歎の『や』であるが、俳句の方の切字などとは大分ちがふ。先師はこの種の『や』をやはり第三句で活かしたことがあつた。私は、この『や』で餘り長く休止させず、上の句と下の句との間に隔りを大きくさせまいとして、『伊豆の海や、沖の』と極く一寸の息を切つて直ぐ續けて讀むやうに注意したことがある。

この歌は、箱根の驛から鞍掛山を經て伊豆山の方に通りかかつた時の吟で、沖の小島といふのは初島であることは確かである。今でも熱海溫泉から十國峠の方に行くと、初島は目の向うに手に取るやうに見える。

○

『旅を行きし後の宿守おれおれに私あれや今朝いまだ來ぬ』といふ歌には、『二所下向後朝にさぶらひども見えざりしかば』といふ詞書がある。『後朝』は『ごてう』と訓ませるのであらう。貞享本一本の詞書には、『同詣下向後の朝にさぶらひども見えざりしかばよめる』となつてゐるのもある。

箱根、伊豆山の二所權現を參拜をはつて、夕方に鎌倉に歸館し、一夜あけて、侍どもゝいまだ出仕しないといふ時の吟である。『おれおれ』といふのは、愚かしくといふ程の意味で、さう重く意味を取らなくともいゝ。『おろそかに』ぐらゐな意味にとれば充分であらうか。

かういふ複雜した人事の歌をば、實朝はかくも無造作に、しかも蒼古重厚な調べに一首を爲あげてしまつて居る。そして一見いかにも素朴で無造作なやうに思へるが、讀味へて居るうちに感味の複雜さが追々に出て來て、驚くべき力量を感じさせられるのである。此の歌の如き實際の吟は、容易に出來るものではない。それを實朝が爲遂げてゐるといふことは、實際實際と行つた萬葉集の歌に共鳴し、その感化を受けたのに本づいてゐること無論であるが、これが出來るといふことは天稟の非凡をあらはして居ること、前言で屢々言つた如くである。

正直にいへば、この程度の歌が十首もあれば大歌人なのである。それが容易にあるやうで、實はなかなか無いものである。實朝も晩年になつてこの種の歌が出來かかつたところで、歌人としての爲事が終になつたのである。

○

實朝の歌は萬葉調のがあるから偉いといふことを前言し、その萬葉調を理解し得たのは偉い性質があるからだといふことも繰返して云つ

た。

併し、こゝで實朝が萬葉調の歌を詠むに至つた誘因に就いて、定家の、『詞は古きを慕ひ』云々といふ事以外に、當時の京都歌壇には萬葉集のことを云々する傾向があつた。これは歌合などの時に、故事來歷を誇るために云々したに過ぎず、直ちに萬葉調の歌を模倣しようとしたのではなかつた。

『和歌を學問して、種々の難儀どもを沙汰して、才學をわかつことは人によるべし。世の常には、ただ萬葉集ばかり讀みたるやうを心得ておくべし。さほどの事も用なしとて沙汰せねば、人の萬葉集の言葉をとりて詠じたるを得讀まぬなり。それは無下の事にて有。時に文字のうへばかりをよみすゑんため、一友人にも問きくべきなり』(後鳥羽院御口傳)といふのを見てもその間の消息をうかがふことが容易である。『凡そ歌の子細を深く知らんには萬葉集に過ぎたるものあるべからず』(八雲御抄)などの文章もそれを證據立ててゐる。

そこで實朝は、定家から贈られた萬葉集をば、非常に熱心に讀んだだらう。そして讀んでゐるうちに萬葉集の歌の妙味が分かつたのであつた。それからあとの事はしばしば前言した。

鎌倉は京都から離れてゐるために、實朝は中央歌壇の渦中に投ぜられることなく、心靜かに萬葉調の歌に沒頭し得たといふ。これも一說である。けれども[illegible]御臺所も公卿の女であり、京都の文明に[illegible]に、中央歌壇から遠いものほど、中央歌壇の皮相の模倣をする場合か[illegible]多い。それゆゑ、ここの決論は、私の說の方がやはりいゝとおもふ。

○

實朝は和歌が好きで十四歲から習ひはじめ、稍長じて中央歌壇の巨匠定家を師匠としたが、定家贈るところの萬葉集によつて直接稽古したので、不思議にも偉大な萬葉風の復興を見ようとした。併しさういふ方嚮の歌幾つかを殘して、實朝は死んでしまつた。決論していへば、實朝は歌人としてまだまだ初途で死んだと看るべきである。

嘗て正岡子規が和歌革新の聲をあげたときに實朝に言及した。そして、『實朝といふ人は三十にも足らで、いざ是からといふ處にてあへなき最期を遂げられ誠に殘念致候。あの人をして今十年も活かして置いたなら、どんなに名歌を澤山殘したかも知れ不申候』と云つたことがある。私なども同樣の感慨をもつてゐる。

然るに、或る專門歷史家がゐて、『彼に壽を假したならばといふ說の如きは、論理的に何等の根據を有せざる愚論であつて、文學史上の功績より論ずれば、彼は如何にしても定家等の下風に立たなければなら

ないものであると思ふ」と論じたことがある。

なるほど實朝は初途で死んだのであるからそのあとを云々するのは歴史家には僭越かも知れぬが、藝術の大道を、時の流に從つて縱に考察しようとする場合には、人麿も實朝も生の連續と見て毫も間違つてはゐない。間違つてゐないのみではない。さう考察すべき性質のものである。寒山が文殊であり、拾得が普賢であるのはこれがためである。和歌の大道が末世の今日にだても、活々として蘇つてくるのは、實朝の如きもの丶生の連續を許容するがためにほかならぬ。

○

實朝は、京都文明にあこがれ、結婚も京都公卿の女となし、萬事さういふ傾向を示した。和歌も京都の第一流の定家を師とし、溯つて新古今集、古今集、萬葉集といふやうに手本を求めて行つた。そして、盛に本歌取の歌を作つてゐる。

そして、その結果は、計らずも鎌倉將軍の歌風を建立した。あとにも先にもない、實朝一流の歌風をば、ぽつりとそこに殘したのである。

一體、和歌は思想を盛りがたいものである。古今集をひもといて、例へば釋教の部になると、そこにいろいろの歌が列んでゐるけれども、あゝいふ釋教歌からは作者の風貌・氣宇を想像することは出來ない。作者の風格・氣象といふものは、一首の姿、一首の調べから暗指せられるのである。

實朝は京都風にならうとしたが、不知不識のうちに、武士の和歌を建した。かういふことは興味あることでもあり、大切なことでもある。

嘗てカアル・リイプクネヒトの遺稿を求めたことがある。ルッカウの牢獄で増補し、補筆したものであつた。リイプクネヒトも、多くの社會主義者のやうに、藝術を論じたところに、"Parvenu-Bürger"などの字を使つて、さういふ藝術を輕蔑してゐた。さういふ眞似が計らず、日本現今の和歌壇の一部分にも及んで來たのを見たことがある。

けれども和歌では、さういふ主義などいふことは底ひに潛めて、おのづから歌ひあぐべきものである。無態度の態度に歸著すべきこと、これが鎌倉の實朝の例に見るべきである。

『さういふことは、例へば、新葉集などがよい例でせう。新葉集に南北朝の動亂を背景とし、天子様も、親王様方も、侍どもも皆さういふ世相に觸れての作であるから、歌に特色があるといふのです。

『しかし實際讀んで見ると、どうも贈詠ばかりでたまぬるくて、到底實朝のものなどとに比較にはなりません。これになぜですか。つまり當時生活にはさういふ動亂の世に處してゐても、歌人としての生活が其

に行つてゐないからなのです。短歌の領域に、生活者の歌だの、無産者の歌だのと、男たけび叫んでも、出來た品物は、極々甘い、少年少女のしろ物に過ぎないのと同じです。

『それから、幕末志士の漢詩なども、考への種になりませう。勢があるとか、動いてゐるとかいふが、所詮は書生流の、衣は骭に到り、袖腕に到るの程度なんです。さうなれば、公卿のなまくら和歌とちつとも違はないではありませんか。

『そこに行くと、實朝は和歌の大道を歩んでゐます。眞淵が金槐集附言でいつてゐる。いかにも一ふしいふべきところを、わざとふしを捨て、ただにいひながされたるなど、似るものなく高し。又一つの巧みも節もなくて、つゞけなされたる詞どもの調の、世にたぐひなきなどもおほし。といつてゐるのなどがつまりそれです。眞淵の文はなかなか好い文ですが、實朝は、さういふ大道を歩きかけて、初途で死んだのです。大道を歩いてゐますから、ひとりでに實朝が沁み出、鎌倉があらはれるのです。和歌の革新とか何とかいつても、この根本を措いて途は無いのです

○

遠國にまかれりし人八月ばかりに歸り參るべき由を申して九月まで見えざりしかば人のもとに遣し

　こむとしもたのめぬうはの空にだに秋風ふけば雁は來にけり

　今來むとたのめし人は見えなくに秋風寒み雁は來にけり

この二首は、吾妻鏡の建永元年十一月十八日の條に、『東平太重胤自二下總國一參。是無雙近仕也。而給二白地之暇一下向之處。在國及二數月一仍遣二御詠歌一雖レ被レ召レ之猶以遲參之間蒙二御氣色一籠居。』とあるのと一致するとせば、實朝の十五歲の時の作である。から思つてこの二首を味ふとたいへん興味がある。言葉が單純素朴で、稚いところがある。やはり初期のものとおもふ。

　建保六年十一月素暹法師胤行千時下總國に侍りし頃のぼるべきよし申し遣はすとて、

　戀しともおもはでいはば久方のあまてる神も空に知るらむ

これは金槐集には第三句『いかが』となつてゐるが、吾妻鏡によつて訂した。建保六年十一月廿七日の吾妻鏡の文は、『東平太重胤無雙近仕也。其男胤行又相並父（又イ）夙夜在レ君與（而）。去比下二向下總郡海上庄一。久不二歸參一間。將軍家被レ遣二御書一。最早可レ令二歸參上一之由也。以二此次一給二御詠一』である。

建保六年は實朝廿七歲の十一月であつて、弑せられる二ケ月ばかり前の歌である。十五歲の時に父重胤に歌をつかはし、廿七歲の時に、

重胤の子胤行に歌を遣してゐる。

私が此處に是等の歌を抽出して來たのは、實朝の歌風の變遷を一寸示さうとしたのであり、金槐集には作歌の年代が明瞭に書いてないのが多いから、縱ひ一首でも年代の明瞭なのが必要なのである。

是等の歌を讀むと、晩年の廿七歳の時の作は、『久方のあまてる神』あたりは、おほどかで、高い調であるが、十五歳の時の作でも『見えなくに秋風寒み』といつて、萬葉調に近い。十五歳の時の作は近侍の手が入つたと假定しても、大體は實朝のものであるだらう。

かういふ初期のものと晩年のものとの間に、新古今流の綺麗な歌をはじめとして、段々萬葉調になつたものが挿入せられる訣である。しかし晩年のものは盡く萬葉調であつたとは云はれない。やはりしまひまで混合體である。これは、實朝の如き、獨自の境に恣に進みうるものでも、歌風の急變のむづかしいことを證するものである。現代では手早く手際よく模倣しうる者もゐるが、さういふものは本物ではない。自分のものになり本物になるには容易ではないといふことを、證明しようと欲したのである。

坪内博士は、實朝みづからに、『所詮、和歌は女子か、隱遁者か、大宮人かの假初の玩びぢや。大丈夫の心を惱むる料にはならん』と云はせてゐるが、これは實朝は陳和卿に對して韜晦してゐるのであるから、是は實朝の本心でないつもりなのかも知れぬが、實朝は吾妻鏡にも明記してある如く、歌道を好んだために周圍からひどく批難されたくらゐに作歌を好んだのである。

實朝はかくの如く和歌を好んだが、初途でたふれた。歌人としては初途であつたと謂つていゝ。それであるから、金槐集の歌は到底いまだ萬葉集の歌には及ばないのである。然し實朝の歌は時代の新しいところがあるから、やはり千載新古今等を念中に置いてこれを味はねばならぬ。

大通寺の木像は時として私の眉間に髣髴としてあらはれて來ることがある。さうして實朝が三十歳四十歳五十歳六十歳乃至七十歳八十歳、俊成のやうに九十歳までも生きたなら、その歌風はどういふ鹽梅であつたらうかとおもはしめることがある。(昭和二年冬稿)

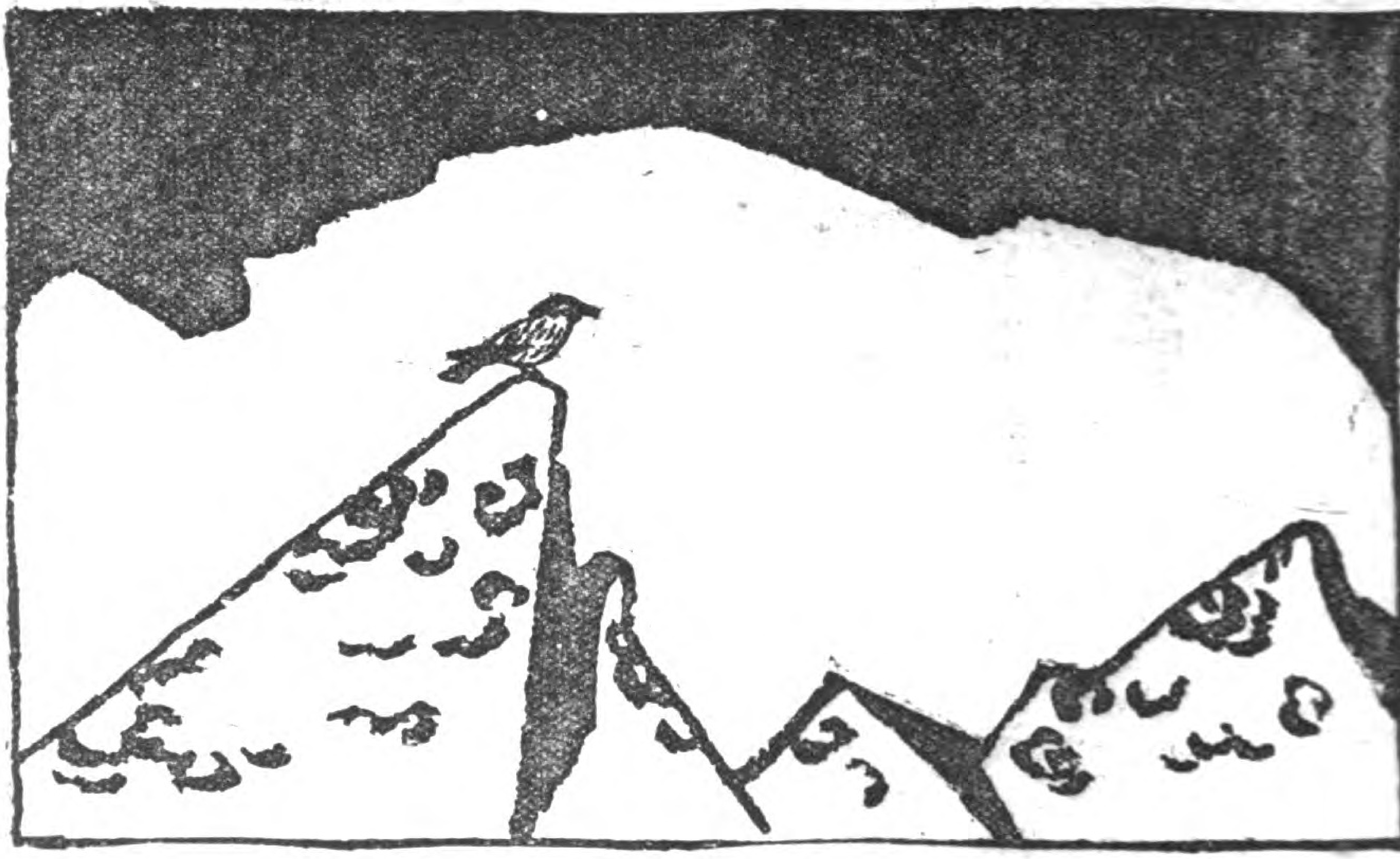
改造社新刊

著者	書名	體裁	定價・送料
澤村康著	小作農と自作農創定法	菊判布製	四・八〇 ・二七
大山郁夫著	大衆に呼びかける	四六判並製	・二〇 ・〇四
ルヰズ・フヰッシャア著 荒畑寒村譯	石油帝國主義	四六判上製	一・五〇 ・一八
有川治助著	ヘンリー・フォード	四六判並製	一・〇〇 ・一八
堀江歸一著	金貨本位制の興廢	四六判クロース上製	一・〇〇 ・一八
廣津和郎著	生きて行く	四六判上製	一・五〇 ・一八
眞山青果著	鼠小僧次郎吉 桃中軒雲右衞門	四六判上製	一・五〇 ・一八
武者小路實篤著	母と子	四六判上製	二・〇〇 ・二〇
池谷信三郎著	橋・おらんだ人形	四六判上製	一・八〇 ・一八
瀧井孝作著	無限抱擁	四六判上製	二・〇〇 ・二〇
有島生馬著	海村	唐本綴美装 上下二冊	二・五〇 ・一八
山本有三著	西鄕と大久保	四六判上製	一・五〇 ・一八
眞山青果著	盲魚	四六判上製	一・五〇 ・二〇
エリイザ・オルゼシュコ著 清見陸郎譯	寡婦マルタ	四六判並製	一・二〇 ・一八
フイルソン・ヤング著 村上啓太郎譯	クリッペン事件	四六判並製	二・〇〇 ・二〇

東京市麹町區内幸町一の三　改造社

振替東京八四〇二番　電話銀座 五五八・一七三三 四五五八・五〇四六

新年號創作特別附錄



ムッソリーニ（十場）

前田河廣一郎

はしがき 本篇に於ける登場人物にして、ダヌンツイオ、ムッソリーニ等の著名なる主要人物は、原名のままを採用して居るが、その他本篇の構成上比較的小さな役割をはたす Minor characters は假名を用ゐることにした。事件と雖も、劇的に配分する必要から、一部分の集中や歪曲や散大――文學的修正を試みたことを告げなければならない。本篇を經緯する諸事件に關する資料は、主としてルイジ・スツルツオ、ウイリアム・ボリソオ、スペンサア・ジョンス、ルイジ・ヴイラリ、ギユリオ・アキラ等の著作、ペディカーの一九〇九年版、ジイノヴイエフの報告、太宰施門、大類伸、下位春吉氏等の著作、ユスタス・ペルテス地圖、其他、内外の諸雜誌、殊に『自由評論』の『フアッシズム號』や『ネーション』誌に負ふ處が多大である。

（登場人物）

議長サラリノ
書記ギヨラノ
代議士モドグリ
同　トラチノ

同　ノフリ
社会党員ナバロ
同　ゴーリ
同　ギイド
同　カーセラ
ベニト・ムッソリーニ
ロッソニ
ジョワニ
印刷業者ステファニ
ビアンチ
共産党員ボンバルキ
ファリナ
ザンボニ
ガブリエル・ダヌンツイオ
憲兵一、二
兵卒一、二、三、四及び外に七八名
バスコ中佐
ネボロ中尉
ロカテリ少尉

トニノオ中佐
労働者一より十二まで
デ・ニコラ
ファッシスト団員二十名
兵士大勢
市民及び婦人二十名ほど
学生一、二
婆さん
ファクタ
従者一、二
士官
群集
城門内の武官
ファッシスト団員大勢
一皇族及び侍従武官等
幻想的な人物十二三人
文部大臣ゼンチロ
海軍中将フエデリヲ
大蔵大臣アントニオ博士

逓信大臣チザーレ
驛官及び下役人數名
勞働者三人
ファッシスト義勇兵數名
造船工多數
市民、勞働者、廢兵、浮浪人、女等多數
暗殺者
ムッソリーニ夫人
活動寫眞技師及び監督、新聞記者、寫眞班
農夫六人及び驢馬

(時代)

現代

(本篇は、構成派或ひは表現派的誇張の惡るい部分を避け、努めてリアリズムの演出法に準據すべきことが希望される)

第一場

一九一四年、イタリーが戰爭に參加する前の冬。

首都ローマ市に於ける社會黨大會の會場。灰色、無裝飾な壁によつて舞臺右と正面とが包まれてある。壁は、斜めに左端まで走り、そこにはまだ[illegible]があつて、多數の黨員の殺到せる處。壁には三つの大きい窓があり、どす黒い亂雲に壓迫された黄昏の空が見られる。さほど高からぬ丘陵の斷截と、シイルエットになつた圓柱やゴシック風の建築の間に、遠くのサン・ピエトロの伽藍が、甲の鉢盤のやうに金色に燦めいてゐる。都市線と雲との間には、赤銅色に燃える餘映が、一と巾亂れ墜ちる暗黑を支へながら光つてゐる。右の壁は、正面のそれと直角に、從つて看客の方へは稍横向きに突出てゐて、その上に掛けられたマルクスの肖像を見せながら、舞臺前方で、鋭どく曲がると、一つのドアを見せる。その壁の前は五角形な演壇、それに二つのテーブル、椅子等。演壇正面の階段を三きだほど降りると後方に書記席がある。ゆるい馬蹄形に列べられた粗末な椅子が、舞臺右まで不規則に續いて、演壇を取卷いてゐる。演壇の右横手にも小さな階段があつて上へ昇れるやうになつてゐる。天井に電燈三つほど、壁の隨所に支部旗、戰爭反對のビラ、ポスターなど。あかりのまだともされぬ室内には、煙草の煙がもうもうと立罩めてゐる。妙にくすむだ夕陽の反映の下に、すべての物がどす赤く入り亂れて、奇怪な影を曳いて動く。

寺院の鐘の交響。遙かに湧き上がる群集の動揺めき。室内も騒然としてゐる。

議長サラリノしきりに槌を叩らして議場整理の任に當つて居る。牛の如く肥つた老人、秘飾有髯あり、眠むさうに垂下した瞼の下に、小さな鋭どい眼を働かす。四五の空席を殘した黨員達、亂雜に手や肩を動かして勝手にしやべり立てゝゐる。社會黨代議士で領袖株のトラチノ、モドグリ、ノフリ等の顔も見える。書記ギョラノ何かを議長に囁き居る。

黨員一　戰爭になるのか？

黨員四　この頃の天氣は變だぞ。赤い空が急に黒くなつちまふ。早く電燈をつけろ。

黨員二　戰爭になつて堪るかい。俺達は政府と共同戰線を張つてるんだ。

黨員一　叱ツ、そんなこと大聲で云ふ奴があるものか！

黨員五　ムッソリーニを呼んで來い！　いつまで待たせるのか！　フロレンスから此方は氣が短かいぞ！

黨員八　あの男はミラノから來るのだからね。

黨員十　もう來てる筈だ。同志ナパロとゴーリとがテルミニへ迎ひに行つてる。

サラリノ　諸君、靜粛に！（書記降壇）

黨員三（窓を覗いて）やつてる、やつてる！　コルソの通りは大變だぞ。國旗を見ろ！（黨員四五人窓より外部を覗き見る）

黨員四五人　赤シャツだ。――インテルヱンチスタの馬鹿ども！　戰爭狂め！

黨員三　花火をあけてやがるぞ。（爆竹の音）今日は聖徒何様の御祭かの？（笑聲）おい、何とかして此奴等を食ひ留めんと大變だぜ！

サラリノ　諸君、只今、同志トラチノから黨の積極的方針についての質問がありました。……どうぞ、靜粛に。……尤も、今日の臨時大會は、ベニト・ムッソリーニ君の査問會といふことになつて居りまするが、まだ當人が見えませんので……

黨員五（窓から振りかへり）來た、來た！

黨員三　ナパロは右の腕を、ゴーリの奴左についてゐる。逃げたら敲きのめす覺悟だな。そら、ドアを這入つた。

（黨員の大半は『ムッソリーニ！　ムッソリーニ！』と連呼しながら、異常な昂奮を示す）

サラリノ（立つ）では、議事の進行上、同志トラチノの質問は一時保留いたしまして……直ちにベニト・ムッソリーニの査問會を開きま

す。（着席）諸君、御着席を願ひます。どうぞ、靜粛に！

（ベニト・ムッソリーニ及び社會黨員ナバロ、ゴーリの三人、右端のドアから入り來る。ムッソリーニは、黒ずむだ服裝に、色褪せた帽子、外套を腕にす。憔悴した顔色、眼だけが警戒的に輝る。筋骨の逞ましい大男のゴーリは、その腕を取つて、議長席の下の空席へ、看客へは斜めに向かせて掛けさす）

間

（電燈ぱつと點る。）

サラリノ（起立）では、これから、ベニト・ムッソリーニ君の査問會に移ります。猶、私から一言御注意申上げたいことは、現在私達は優柔不斷なサランドラ内閣の對外政策下にありまして、イタリー全國を擧げて、トリプリテ・アルレアンツアとトリプリテ・インテーザとの間に迷ひ抜き、今日は戰爭か、明日は國境に兵を送るかと、實に國家の運命が危機一發に懸つて居る際、我が社會黨は敢然と戰爭反對、イタリー中立のスローガンを掲げ、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、廣くヨーロッパ全國の平和を招來する所以であると主張して居るものであります。で、かういふモメンタスな時機に於ての、我々社會黨の一提案一決議事項と雖も、直ちにそれがヨーロッパ大陸の被壓迫者及び社會黨のソリダリテーに影響する所が大きいので御座いますから、假令どういふ問題を議しまするについても、同志諸君に於かれましては、世界の運動を眼の前に置かれるやうな決心をもつて、冷靜に――この冷靜といふことは遺憾ながら我々イタリア人の間にはカモラ黨員の計畫的暗殺の場合にしか通用してゐないやうですが――そして、十分に調査して、しかも黨としての統制に背いた行爲は斷乎として糺彈する勇氣を持たれんことを希望致します。今宵ピアッツア・コロンナに聚まつて、軍國主義の血の臭ひに醉つてゐる群集にとつて、我々がこの場で議決したことが直ちにそれ自らのデモンストレーションになり、それによつて盲目的なショービニズムを牽制し、そしてイタリー社會黨のもう一段の戰略的飛躍となること、これが偏に、この臨時大會の重大な意義であらうと存じます。

（拍手――窓が閉される。）

黨員十（擧手）議長。

サラリノ　はい、同志ギイド。

ギイド　本員は議事の進行について一言申上げたい。本査問會は、既に三日前に黨の機關紙『アヴァンテ』に於て、變節者ムッソリーニの罪科を列記してありますところから、ほかに特別に重大な詰問

事項のない限りは、該記事をもつて直ちに質問の形式に移し、トリポリ戰爭反對以後のムッソリーニ氏の行動より先月『イル・ポポロ・デイタリア』といふ名目は社會主義新聞といふことになつてはゐるが、その實非社會主義な反動新聞を創刊するに至つたまでの顛末について、當ムッソリーニ氏自身の一應の辯明を聽取したいと存じます。

サラリノ　只今同志ギイドの『アヴアンテ』紙の詰問記事に附加するものなしとして、直ちに、それに對するムッソリーニ氏の答辯を要求すべし、といふ案が出て居りまするが、この動機に對して御異議がありますか？

黨員の多數　異議なし！

サラリノ　別に附加すべき詰問事項●とか、外かに詰問の方法に關しての御意見は？

黨員の十三　贊成！

サラリノ　はい、同志カセーラ。

カセーラ　私は同志ギイドの動機に贊成するものであります。が、一昨日『アヴアンテ』紙に於てわづかにその暗示に止まつて居りました『イル・ポポロ・デイタリア』紙と今回約千五百萬リラの株式資本をもつて設立されようとしてゐるブローネ兄弟の重工業會社及びその金融機關との間の秘密提携に關する具體的[illegible]り得たものでありまして、主義思想上の問題よりもこの方が一層と重大であると認めますから、ムッソリーニ氏に本員の質問に對する回答を先づ要求致したい。(着席)

黨員一　そんな惡辣なことがあるのか、殺しちまへ、あの野郎！

サラリノ　私語を禁じます。同志カセーラの動機によりまして、然らば、目下問題のパンカ・デスコント系の興業者と『イル・ポポロ・デイタリア』社とに聯關係ありとの摘發に對して、ムッソリーニ氏に對決的回答を要求することになりまするが、それに御異議はありませんか？

黨員の大多數　異議なし！

(小間)

サラリノ　然らば異議なしと認めます。議長は、ベニト・ムッソリーニ氏の答辯を促がします。

黨員四　愚圖々々せんでそんなものは早くつまみ出してしまへ！

(ムッソリーニ登壇。遠くに群集歡呼の聲。)

黨員二十(隅から)犬、氣をつけろ！　河は近いぞ！

サラリノ　靜肅に願ひます。では、同志カセーラ！

カセーラ(起立)然らばムッソリーニ氏に質問いたします。當市の有名

大なる某新聞の編輯長某氏（姓に差支へなき限りに於ては本名を明かします）の巧妙なる検査と的確なる觀察とによると、『イル・ポポロ・ディタリア』紙主筆の二ケ月前、即ち、ムッソリーニ氏がまだ黨の機關紙『アヴァンテ』の編輯に従事してゐる頃に、グランド・オテルに於てブローネ兄弟財閥の代表者ウムブリノ氏と會見した形跡があります。それは戰爭の宣傳費として――

ムツソリーニ（起立のまま、初めて發言す）やかましいワ！　わかつてる！　俺は、今日、君達の前にわざわざ案内人のやうに辯解に來たんぢやないんだ！（彼はあらゆる名譽心の強い人間のやうに、話してゐて自己の雄辯に陶醉する癖がある）俺は、ミラノからローマへ、宣言をもたらして來たのだ！　俺の宣言には、イタリー五千萬の民衆の支持がある！　聽け、先づ、俺の宣言は、君達のやうに意氣地のない社會主義者に挑戰することだ。――

カセーラ　議長！

黨員四、五、六、七　議長、議長！（連呼）

ゴーリ　この野郎、夫にはエマヌエレ三世の支持があるとぬかすんだらう！

モドクリ　議長、緊急動議！

ナパロ（演壇を指さし）緊急動議なら此奴の鼻へ見舞へ！

ゴーリ　やつつけろ！

（黨員七八人演壇へ驅け上がる。後脇の者一度に耳を聾して押寄せる。代議士トラチノ、モドガリ、ノフリ等しきりに手をあげて鎭めんとす。議長鈴を亂打す。）

ゴーリ（ムツソリーニの喉を締める）畜生！　さあ、ぬかせ！　吐け、泥を吐け！

ナパロ（背後からしたゝかに毆ぐる）貴樣の主戰論を今役立てゝ見ろ！

ギイド　云はせろ、云はせろ！

黨員一（矢庭に面部を毆ぐる）このブルドッグめ！（ムツソリーニの顏から血が流れる。）

サラリノ　諸君、諸君！

（亂鬪は續く。ゴーリのために、ムツソリーニ演壇から突き墜され、一時昏倒する。ナパロ抱へ起こす。カラーも服もめちやめちやになつてゐる。黨員四五人、唾を吐きかける。何か云はうとしてムツソリーニ空しく口を開閉する。と、突然、室外に群集の歡聲擧がる。爆竹の音。黨員二三人窓から覗く。日全く沒す。）

黨員二　何でもない、愛國狂の行列だ！

ムツソリーニ（ドアの前によろめきながら辛ふじて身を支へて、肉迫

して來る黨員達を睨め）あれだ、あの聲を聽いたか――あれがイタリー國民の聲だ！　諸君の如き、徒らに、、、、、、、、、、、、、、勞働組合からさへ侮蔑されてゐる日和見主義者に、イタリーの、、が出來ると思ふか！

黨員多數　何だと、この野郎！

ムッソリーニ　俺は闘ふ！　俺は、今日この場限り、軟弱なる諸君と終世末代までの決闘を宣明する。いいか、窓を開いて、あの眞劍な市民をここへ呼べ！　彼等眞にイタリーを思ふインテルゲンチスタの前でこそ諸君と俺とは始めて對決しよう！　それまで、諸君のうちの一人でも、俺に指一本觸れることは斷じて出來んぞ！　その理由は、俺はイタリーを率ゐようとしてるからだ。俺はイタリーそのものだからだ！（胸を叩く）さあ、ゴーリ、それから、ほかの蛆虫ども、やつて來い！　本當の、、に抵抗して見たければ、來い！

（黨員達すこしたぢろぐ。表には群集歡呼の聲。跫音。）

群集　戰爭だ、戰爭だ！（稍近く）

ムッソリーニ　然り、戰爭だ！――トレントとトリエステ！　祖國のためにこの際進まぬ奴は、皆臆病者だ！　すべては敵を殲してからだ！

代議士トラチノ（壇の上から）もう、澤山だ！　似而非、、の線香花火と、カリバルチーの猿眞似と、工業團の衛生先だは街へ出てやつて貰はう。――諸君、本員は、これだけで、この惡辣なる變節漢ベニト・ムッソリーニの立派な除名處分に該當すると信じます！（ドアを指差す）去れ！

――幕――

第二場

一九一九年の早春。

北伊ミラノ市に於ける「イル・ポポロ・デイタリア」紙の編輯室。

近代建築術によつてさらに起工される種類の、安手な、洞穴のやうな二た間續きの貸事務所。

中央に壁と仲仕切のドアがあつて、二室を右と左とに區分してゐる。但し、二室ともに、色褪せた薔薇模樣の壁紙や黄ばんだカーテンや古雜誌新聞の山、永い間の貧乏に對する耐久力によつて辛ふじて救はれた、手擦れのした僅少の家具類を共通してゐる。電燈には青い笠が掛けてある。八時を指した八角時計。壁に四五點の額。右室の壁に、二口の長劍が交叉してあるが、裝飾用として用ゐられた以外には意味をなさない。階下からの入口は、左室の端のガラス戸。裏口は右室から。夜。前場との時間の懸隔を暗示する爲めに、

壁のどこかへ『一九一九年』三月何日かのカレンダーを掛くるも嫌げず。

ムッソリーニ、右の部屋で社説を書いてゐる。もとサンヂカリストの印刷工であつたロッソニ、左室で糊と鋏を使ひながら、記事を製作してゐる。ジョワニ、ロッソニと同じ室で、牛のやうに頭で壁を小突きながら、無聊のあまり矢鱈に煙草ばかり喫つてゐる。どこかにギターの響がする。中央の戸は開け放してある。ムッソリーニ、時折左室の方を苛立たしげに眼を上げて見る。

ジョワニ　（ロッソニへ）から、、、、、ばかり起つては、これからどうなるこつたらうな？

ロッソニ　、、、、、になるのさ。

ジョワニ　貴様の『、、、、、』は聞飽きたよ。

ロッソニ　馬鹿に飽きつぽい奴だ、もう少し辛棒しろ。だんだん世の中が面白くなつて來てるぢやないか。

ジョワニ　ふん、根つから面白くもねえな。親方もさうだが、俺たつて同じことさ。戰爭へ出て彈丸の二つも喰つて、生命を半分グラッパの砲彈へ捨てて歸つて來ると、どうだい、國の中あまるで茹で過ぎたスパギェイテ同様。、、、、、、も糞もあるもんか、政治屋は政治屋でてんでの泥仕合に夢中になつてやがるし、役人に袖の下を使はねえと何も取上げてくれん、戰爭に出るまでは歸へつたらきつと場所をとつてやると云つた工場は片つ端からぺしやんこに潰れてやがる、おまけに、その邊の人足どもまでが、、、、、をやつてけつかる。一體全體、組合だ、俺達から何のために組合費を取つてゐたんだ、と云ひたくなるね。一體全體、俺達は何のために戰爭へ行つたんだ、と訊きたくなるね。俺達から見ると、その邊の女どもを揶揄つて歩るきやがるイギリス人だとか、ヤンキーだとかの兵隊は殿様みたいなもんさ。いけ面白くもねえ。

ロッソニ　それが、お前、國に金がないからさ。

ジョワニ　ああ嫌だ、嫌だ。俺アあのお山の廢兵守護の聖母へ御願ひして、アメリカへ移民にでも遣つて貰ふよりほかはないぜ。――何かさせてくれ！　何でもいいや、かうなつたら罷業破りだつて何だつてするぞ！

ムッソリーニ　やかましい奴だ、おい、靜かにしろ！（ペンを措いて書きかけの原稿を口の中で讀む）

（ドアをノックする音。ムッソリーニ誰かを期待してゐるらしく、耳を峙たつ）

ジョワニ　誰だ？

（印刷業者ステファニおづおづ長い頸を差入れる。ムツソリーニと顏を合はせる）

ステファニ　今晩は、今晩こそ旦那は御留守だなんて云はせませんぞ。

ジョヲニ　又來たか？　うるさい男だな。

ステファニ　わしだつて、別にあがりたくて參るわけでもないでな。へ、へ、へ――。どうぜこんな物騷な區域ですもの。

ムツソリーニ（わざと聲高に朗讀す）……ええと、かくして内治に外交に危機を激成したる現内閣は、徒らに、我が神聖なる半島祖國をして、地中海とアドリアチツクとの間に、焦燥的な長靴の如き足掻きを演ぜしめるだけである。五十萬人の死靈を拂ひ、五十餘萬の廢兵を出せし世界大戰に、祖國イタリーの得る處、絶大なる負債と……
……。

（ジョヲニ指揮をもつて、ムツソリーニの部屋をステファニへ差し示す。ステファニ恐る恐るムツソリーニへ近づく）

ステファニ　今晩は、ムツソリーニの旦那。

ムツソリーニ（讀み續けつゝ）……急激なる社會主義者の跳梁のみ――誰だ？（向きなほる）

ステファニ　どうもお邪魔さま。旦那――のことですが、旦那、どうでせう、例の方は？

ムツソリーニ　あ印刷屋さんか？　まあ這入り給へ。お掛け。――と云つて、俺んとこには椅子が二脚しきあない、その一脚へロツソが掛けてるから、俺が立たう。――で、何かね、用件といふのは？

ステファニ　へえ、結構で。いや、實はな旦那、職工が云ふことを聽かんのでしてな。何しろ三週間も前から給金を拂つてないんで。いやはや、どうも職工といふものは、誠にうるさいものでしてな。第一、その組合といふ厄介が後に控へてますので、始末に終へませんよ。で、今日びは何です、その、機械の方は一台しか廻つてないんですよ、結構でな。これで今晩中にいくらかでも金の顏を見せないと、旦那、貴方んとこの新聞も當分出しかねまするでな。

ムツソリーニ　ははア、ストライキでも起こしさうた形勢かね？

ステファニ　ええ、もう、奴等はとつくから話合つてるのですが、外ならぬ貴方の新聞ですからね。それに以前はそんなこともなかつたんだとわしが云ひなだめて、漸くまあ今日までからやつて持つて來てるやうなわけでしてな、――

ムツソリーニ　よし、よし、わかつた。

ステファニ　あ、さうですか。さうでせうとも。――では、これが先

月分の間代、それから先々月の間代りがこれで。

ムッソリーニ　いや、金はないぞ！

ステファニ　でも、おわかりになつたと仰有つて、――

ムッソリーニ　わかつた、確かに承知した、だから歸へれ！（椅子へ掛ける）

ステファニ　旦那、ねえ、どうぞ助けると思つてひとつ今夜のところ幾何でもよろしいんですから――それが二十フランでも三十フランでも結構なんで、へえ。金の顔さへ見せてやりあ、あんた、職工なんて正直なもんで御座いましてね。――

ムッソリーニ（無言でペンを取り上げて原稿を訂正しにかかる。ステファニ、袖を曳く）

ステファニ　ねえ、旦那、世の中あから不景氣になつちきひますし、職工達にあ泣きつかれますし、紙屋の方も御立替してゐるし、旦那、そりあ、貴方わしの身になつて考へてみて戴きますよ、ほんとに。ねえ、旦那！

ムッソリーニ　えッ、うるさいな！　おい、（立ちあがる）こらッ、君は、このムッソリーニは伊達に愛國主義を標榜し、道樂に日刊新聞を出してると思ふのか！　君だつて、ロンバルヂヤの赤い血を享け繼いだイタリー人だらう、國家多難の際に國を愛する忠節がないのか？（帽子を取る）おい、愛國心を持て！　印刷屋、たしか君の住んでる町はピヤ・デ・ミルレだつたの？　ピヤ・デ・ミルレに住んでゐて、その町の名の意味がわからんでどうする？　いいか、今を去る六十年前、ガリバルヂー將軍が國を思ひ自由を愛する赤シャツ組一千人の義勇隊を率ゐて、イタリーを獨立させた、その千人といふ意味だぞ！　更らに、その千人のうちには君のやうな印刷屋も混入つてゐたんだ。――その名を取つた町に住む市民が、何だ、その醜態は？　まるで猶太人の古着屋みたやうに、六百や七百の端た金を、國家の一大事でもあるかに我鳴り立ててゐるとは！（いきなり次室へステファニを突飛ばす）金は出來次第拂ふ。ムッソリーニは内に烈々の火を燃やしてゐるからこそこの赤貧にも甘んじてゐるのだ。俺のやつてることは、イタリー國民全體の仕事なんだぞ！　ジヨワニ、お前、先刻から仕事がなくて退屈しとるやうだから、セニヨレ・ステファニを戸口まで御送りして上げい。決して手荒なことをしちやいかんぞ。（大きく笑ふ）

ジヨワニ（ステファニの襟首を摑んで押し出す）さあ、どうぞあちらへ。御歸へりはこのドアで。

ステファニ（爭ひながら）でも、愛國心なんて今のイタリーぢや、に、、、もない――そりあ話がちがひます。

ムッソリーニ　君の工場でストライキが始まつたら、その首謀者を一應こゝへ連れて來い。俺がよつく話して聽かしてやる。

ステファニ　ちがふ、ちがふ、先月の約束は――そりや話がちがひますよ。(叫びながら去る。ジョワニ戸を締め切る)

ジョワニ　親方、親方の愛國主義、、、、、、、、がありやすね。

(笑ふ)

ロッソニ　(壁の時計と自分の腕時計をくらべて見る)先生、そろ〳〵ビアンチが歸へつて來る時分ですぜ。

ムッソリーニ　(ペンを捨て)お、そんなになるか？　ぢや、わかつたな、お前とジョワニと別々に行くんだ。集まつたらあまり騷いで來ちやいかんぞ。すべて洩れるやうな計劃ぢやあ計劃でなくなる。這入るのも裏口から。結構だよ、きつと、旨く行くと思ふ。さうしたら、明日から機關車のやうに活動するんだ。ともかく、今夜で最後の決定だ。

ロッソニ　はい、わかりました。(ジョワニと連れ立つて右室のドアから退場)

(ムッソリーニ右室へ錠をおろして、テーブルから何かの文書を取り出しちよつとあらためて、ポッケットへ入れる。書きさしの原稿やペンなどを取片づけ、椅子を二つ据ゑる。落ちつかぬ風。不圖、歩きだから、壁のナポレオンの像を見る)

ムッソリーニ　ボナパールト、この男のために、パリの市民は一時も脊が低くなつたのだな。(ナポレオンを眞似て、胸を張り、左手を胴着へ挾んで濶歩す)ふむ、人間、わからんもんだな！――俺は近代的ボナパールトだ。――あの、トラチノや鈍感なモドグリの奴等あ、今に徹底的に、この掌の中で粉みぢんにしてやるぞ。――さうだ、ボナパールトの手もこんな手だつた。昔から英雄の手は小さい、圓い、膨れてゐる……

(ノック)

ムッソリーニ　誰？

聲　ビアンチです。

(ドア開かる。ムッソリーニの編輯助手ビアンチ、伊國共產黨員ボンバルキを誘ひ來る。ボンバルキは一見ロシア人のやうに濃い髭を蓄へてゐる。黑い鳥打、質素な身裝。ビアンチは、容貌がよくムッソリーニに似てゐる)

ビアンチ　どうぞ、此方へ。これがベニト・ムッソリーニ氏です。(ドア閉さる)

ムッソリーニ　ロシアからの同志、ボンバルキ氏ですか？(手を差し出す)

ボンバルキ（冷かに目禮）御手紙は拜見しました。それから、今日はわざわざ御使ひを有難う。ボルデイガ氏からも御話はありました。

ムッソリーニ（右室へ入りドアを閉ぢ、椅子を差出し）どうぞ。（二人着席。ビアンチ左室に留まりソーフアに掛く）實は、前後二回、委細の事情を申上げましたやうに、同志の結束は成つて居るのですから、事を擧げるとなると、直ちに決行出來るわけです。どうです、早速ですが、私を入黨させてくれますか？

ボンバルキ　御待ち下さい。――先づ、その前に、私は黨の一員として、直接貴下にお訊ねしたい二三の點があります。第一に、貴下の提出された諸條件は別として、どうしてこのイタリーがさういふ狀勢に轉じて居るか、それについての御意見が承りたいのです。

ムッソリーニ　オリーヴの果のやうに機は熟してゐます。ボロニア、フエララの諸工場の狀勢は手に取るやうに私の處へ來てゐます。ボロニアは私が曾て鐵道罷業をやつて成功した土地です。エミリアの農村爭議の徴候は、大地主との對立によつてたしかに、、、、、、、、、、、です。このミラノに於ては、私の指紋よりもはつきりと、コントロールすべき重要地點がわかつてゐます。ともかく、イタリーは、、に飢ゑてゐる。それだけは事實です。

ボンバルキ　どうして貴方は「機が熟してゐる」と斷言されますか？昨年十二月ボロニアの社會黨大會の分裂で、トラチノとモドダリ、ノフリ等の右翼とセラッチ、カセーラ、ゴーリのやうなマキシマリストとは對立しました。そのカセーラ一派の掲げる處の、、、、、、、、は、成る程、或る點まで、、、、、、、、、、の面影を傳へてはゐます。しかし、彼等には、、、、、、、、から要求された一つの事さへ斷行出來ないやうな弱味があるぢやありませんか？――それは、現在のマキシマリストのうちの有力なフラクションを排除することです。セラッチ一派を、ロシアでは「ブルジョアの代理人」と呼んでるんですよ。この一派を除くことなしに、その內部的矛盾を克服することなしに、假令、ボロニアがどんな攪亂狀態にあらうと、ロンバルヂヤに、、、、、、、、が出現しようと、我々はマキシマリストと提携してコムミニスト運動の第一歩を踏み出すわけには行かんのです。失禮ですが、ムッソリーニ氏、そのマキシマリストと無條件で提携し、その經濟鬪爭主義と、社會黨の議會主義との中間に、、、、、、なさらうとする、貴下は一介の、、、オポチユニストに過ぎない。いや、それよりも明白にすべきことは、現在の貴下の立場ですよ。どうして、ついこの頃まで政府や軍工業系の官僚部を受持つて居られて、今日が日まで愛國主義を説かれる貴下が、さうも急激に思想的轉換をなさるのですか？――間際、

私は、今日といふ今日は驚きましたよ。御伺ひする筈ではなかつたのですが、あれほどまでに貴下が仰言るので、本部とは關係なしに單獨で御意見の在る處だけ聽きに上がつたわけです。――いや、失禮いたしました。では――（立ち上がる）

ムッソリーニ　まあ、一寸待ち給へ。ぢや、どうしても僕と提携して運動は出來んと仰言るのですね？（稍激昂して）

ボンバルキ　ジョールジ・ソレルのプロテイチの貴下とは、ね。

ムッソリーニ　僕は云ふことが下手です。僕にマルクキシアンのデイアレクテックスで物を云へと云ふなら、僕は駄目です。しかし、これだけははつきり言明します。――諸君が僕と提携されなくとも、僕は立派にやつて見せる。その時後悔しないやうにして欲しい。腕でやる！　この腕でやりますよ。君のレニンやトロツキーやジイノヴイエフへよろしく云つてくれ給へ。序ひにして、僕には二つのプログラムがあつた。今、その一つをボンバルキさん、君の前で引裂いて御目に掛けますよ。（ポッケットから文書を取り出して引裂く）これが、君達との決裂です。ピアンチ、御客様の御歸へりだ！（ピアンチ室へ入る）

ボンバルキ　ムッソリーニ氏よ、貴下の有名な博奕打なことは能く知つてゐます。今貴下の手の中にどんなカードが隠されてゐるか、それは私の知る範圍ではありませんが、[illegible]ないのですよ。これだけは、私からの忠告です。さよなら！

ムッソリーニ　君はイタリーを知らぬ馬鹿者だよ。（ボンバルキ去る）

ピアンチ、ロッソニ等を呼んで來い！

ピアンチ　先生、大丈夫ですか？

ムッソリーニ　俺には伏せ札が二枚あるんだ！（ピアンチ、裏口より去る。ムッソリーニ壁より劍を外づして、劍撃の構へを試みる。ロッソニ、ジョワニ、ファリナ、ザンボニ、ピアンチ等二十數名の青年、右端のドアから靜かに入り來る。ムッソリーニ高く揮劍を振り翳す）

ムッソリーニ　諸君、同志の者よ、集まれ！　愈々時は來た！――俺はここに、、、、、、を起草して持つてゐる。諸君のうち俺と共に第一戰線に立つことを忌避するものがあつたたら、もう一本の劍を外づして、先づ俺を斃せ！

（沈默）

ムッソリーニ　ないか？――なければ云はう、時代は力を求めてゐる！　正當な目的のための、、が必要だ！　俺達はこれから黑襯衣遠征隊を組織する。綱領はかうだ。讀まう。讀れ！（ムッソリーニもう一葉の文書を取り出して擴ろげる。青年達密集する）

第三場

—幕—

一九一九年の晩秋。

フイウメ。詩人ダヌンツイオの率ゐる義勇軍によつて占領されたるフイウメ市のピヤザ・ダンテの一角。

左稍中央にルネッサン式な鼠色の石で築かれた大邸宅の玄關口が斜めに開いてゐる。玄關の柱に貼り出してある通り占領軍の參謀本部である。そのほか壁の處々に貼札がしてある。玄關の頭上に飄然としたバルコニイ。そこから大きい、色褪せてしほたれかかつたイタリー國旗が、前の廣場へ垂れてゐる。國旗の傍に、赤黄ろくなつた立木が二三本、時折、その葉がほろほろと散り落ちる。舞臺正面中央に一基の大理石の圓柱。正面から右端まで、がらんとした廣場。空にはむやみにイタリー國旗が釣るしてある。正面奧に市街の遠景。

小春日和。天空一碧、斜めな日光が、強く照らしてゐるが、どことなくすべての音響に空洞な虚無的な反響がともなふ。上空に飛行機の音しきりにす。附近にマンドリンの響、酒場に於ける兵士等の騒音など。

武裝した衞兵二人、玄關の兩傍に立つてゐる。軍規はさほど嚴粛でない。

衞兵の一　かうやつて立つてばかりゐると腹が減るな。

衞兵の二　立つてゐなくたつて腹が減るんだ。何しろ大將が御手元不如意と來てるからな。

衞兵の一　全くあの炊事ぢややりきれない。

衞兵の二　ピアベの塹壕にゐたときの方が食べ物はよかつたぜ。

衞兵の一　考へりや今から二週間前に、ここへ進軍して來たときの威勢つたらなかつたね。

衞兵の二　さうさう、町の奴等ア有りつたけの牛でも豚でも出してくれたからな。今となつちや、些か擯られ氣味だね。見ろ、この國旗だつて、安物だから色が禿げつちまつた。

衞兵の一　ここは海からまともに雨や風が吹きつけるから、内地で拵へた國旗なんざあすぐ色が落ちてしまふんだ。

衞兵の二　そりやさうと、俺はここ二三日考へ込んでるんだがな、——どうも、この分ぢや、フイウメ占領も何の意味もないな。いいか、俺達はこれでざつと九千人からゐるだらう。それが、お前、毎

日一人頭について五リラづつはどうしてもかかるんだ。それで、四萬五千リラさ。今の世の中では、戰爭は金だからな。指揮官が持つて來た金といふのは百萬リラしかないんだ。それも集められるだけは押借りしても渫つて來たんだからね。十日駐屯してると四十五萬リラさ。二十日であらかたそれがなくなると云ふもんだ。

衛兵の一　お前も仲々數字のやかましい男だ。して見ると、今日で十五日、籠城もあと五六日しきあ持たぬといふわけだな。

衛兵の二　當り前さ、俺は市の稅務局の書記をしたことがあるんだ。

衛兵の一　どうも、俺等の大將もすこし無謀過ぎるね。

衛兵の二　いや、あの人は大體あんなもんさ。あんまり大きい聲ぢや云はれないが、指揮官は、例の薔薇色小說を書いてゐる頃からの借金が大變なもんださうだ。パリでもウインでも、あの人の借金は、買ひ取つたお城よりも大きいもんださうだ。それで、あの通り、戰爭となると、やけ糞でカルソの爆彈隊へ加はつたらう、それから次にはウインの飛行さ、最後にフイウメの占領と來てゐる。俺は何も俺達の大將の揚足を取るわけぢやないが、その一つ一つの華かな冒險はつまり借金を踏倒す算段だね。

衛兵の一　叱ツ、誰か來たぞ!

（兵卒の一、右から登場。衛兵の前で敬禮）

兵卒の一　只今飛行場へ派遣された指揮官

衛兵の一　認可證は?

兵卒の一　（ポッケットから紙片を出す）はい。

衛兵の二　通れ。（兵卒の一玄關へ入る）

（醉つた兵卒の二と三がやく云ひ合ひながら登場。衛兵の前へ來て、仰山に敬禮）

衛兵の一　おい、そろく勤務交代ぢやないか、しつかりしろ!

兵卒の二　何もすることがないから、そこへ立つて彫刻の獅子みたいに威張つてるんだらう? よせやい、それより、俺達みたいにちつとは甘い酒の一杯も飲む算段をしろ!

衛兵の二　どこで飲んだ? どうして?

兵卒の三　天機洩らすべからずだ。大將からはじめモルラツコーの血てい奴は我々遠征軍にはつき物だからな。

衛兵の一　貴樣人民を掠奪したな!

（パスコ中佐、及び士官二人、兵卒五人、本部から急いで出て來る。衛兵及び兵卒等敬禮。醉つた兵卒等去る）

パスコ中佐（士官の一人に向ひ）では、ネポロ中尉は、直ちに海岸から陸揚に從事されたい。（ネポロ中尉、兵卒五人と共に左へ去る）それからロカテリ少尉は、輜重兵監部へこの旨を通達されたい。（ロカ

チリ[illegible]へ去る）へ[illegible]に向ひ）[illegible]に？

兵卒の一　はい、その旁に置いてあります。

パスコ中佐　何故本部へ直接につけんのか？　そのために、この間そこの營造物を取毀はしたのではないか！（横頰を毆ぐる）

兵卒の一　はい。（二人右端へ退場）

（ムッソリーニの使者ロッソニ、兵卒一人に護られて左から登場）

兵卒の四　ミラノのベニト・ムッソリーニ氏の使者ロッソニ、指揮官に至急面會のため來られました。

衞兵の一　ムッソリーニ？　何だ、それは？

兵卒の四　海岸警備のニコロ大佐よりの認可證を持つて居ります。

衞兵の二　どれ見せろ。（兵卒の四示す）

衞兵の一　一般會議室へ案内して置け。（ロッソニと兵卒玄關へ入る）

（左奥からうわーッといふ掛聲。右端に自動車留まる。自動車の中からダヌンツイオ、韋皮の飛行將校服を着け、短かい劍を佩びて出て來る。禿頭、隻眼、よぼよぼの小柄な爺さんである。パスコ中佐、飛行士官、その他數人の兵卒彼に從ふ。右中央から輜重兵隊登場。ぱつたりダヌンツイオと出遇はす。（敬禮）

ダヌンツイオ（手を擧げ）アララ！　トニノオ中佐、愉快、愉快！（細い女性的な聲）海賊をやつたよ！　僕が空中から探がしたん

だ[illegible]へ來るときから、[illegible]

だつたよ。——誰か、酒を持て！（兵卒の一人承諾して去る）久しく闘はんからな。僕も闘はうとはするが、對手がないのには閉口してみた。敵の御物船だ！　殆ど何の抵抗もなく、掌の甲虫のやうに押へてしまつたよ。（兵卒酒盃を運び來る）注げ！（士官達へコップが廻はる）我等の籠城のために祝はう！　イタリー萬歳！

一同　イタリー萬歳！

ダヌンツイオ　我々の戰線内に流れついた、ネプチューンからの水色の贈物、麥と重油と罐詰と牛肉と金庫とのために！

一同　萬歳！

（ネポロ中尉、左奥から大勢の兵卒に車を曳かせて來る。種々な荷物が、それからそれへと廣場の隅へ置かれる。最後の車は大きい金庫を運んで來る）

ダヌンツイオ　これ、これだ、この美人を見ろ！メデュウサの瞳のやうな光り！（金庫を指差す）

衞兵の一　只今ミラノのベニト・ムッソリーニなる者からの使者として、ロッソニといふ男が會議室で御待ちして居ります。

ダヌンツイオ　何、ムッソリーニ？ふむ、あの散文的なフオルリ人か？ここへ呼べ！

衛兵の一　はい！（去る）
ネポロ中尉（輜重兵隊へ）この金庫はどうしませう？
トニノオ中佐　太繩でふんじばつて本部の二階へ釣り上げるんだ！
（ネポロ中尉、部下に命ず）
（ロッソニ衛兵の一と共に登場）
ロッソニ（敬禮）ファッシストの盟主ベニト・ムッソリーニから、フイウメの指揮官閣下への使者で御座います。
ダヌンツイオ　さう、さう、ファッショを作つたのは、君達の指導者であつたな。歡迎！（握手）
ロッソニ　これが書面で御座います。（封書を差し出す）
（ダヌンツイオ無言で受取り、封を切つて讀む。その間、兵卒達金庫へ繩を卷く。二階のバルコニーにも六人ほどの兵卒あらはれて、下から投げた繩を受取る）
ダヌンツイオ　よし、返事は今書く。アララ、勇敢なる市民軍よ！今日は何といふいい日だらう！吉報！　吉報！　諸君金はいくらでも來るぞ！
（兵卒達大聲で金庫を釣り上げる。一同はしばらくそのために忙しく立騒ぐ。金庫が中空まで昇つたと思ふと、突然、繩が切斷されて、兵卒の一人とネポロ中尉が、その下敷になる。一同驚きあわてて金庫の周圍を取卷く）
ダヌンツイオ（目を双手で掩ふてよろめく）おお！（俄かに兵卒達を掻き分けて、金庫の前へ行き、その胴腹を長靴で蹴りながら）怪物！怪物！怪物！　こいつの存在は、いつも俺のローマンスを破壞する！　天下の貨幣をアドリアチックの底へ、最後の一ブロンゾまで、沈めてしまへ！（ロッソニを顧みて）――、君、新しき市民軍を組織しつつあるドラマテイスト、ムッソリーニ君へ傳へて呉れ給へ。僕のフイウメ占領に對して、ヴエルサイユの、、と、葉卷のレッテルのやうなローマの、、、、、、したなら、次に、僕は世界の貨幣制度に對する一大義勇軍を起こす、と！（兵卒等に）二人の負傷者を助けてくれ。注意深くその醜くい怪物の臓腑を剔ぐり取つたあとで、海の上に咲く大理石の花、ヴエネーチアの都へ向けて、その屍骸を捨て置け。明日、呪ひを籠めたわが飛行機からの爆彈は、美事、怪物の體の最後の一片までも粉砕するだらう！

――暗轉――

第四場

一九二〇年の夏。
ミラノ市に於けるロマノ製鐵會社の一部分。

右處に突當りの工場の入口がある。戸は閉鎖されたまゝになつて、外部の壁へ縦に立てかけられてある。舞臺正面奥から左端へかけて、低い混凝の灰色な壁。左端、壁の曲がつた處に門。この壁の圍んだ場所は廣場になつてゐて、種々の鐵材が積んである。

日光の加減で、工場の大煙筒が舞臺へ斜めに、ピザの斜塔みたやうに陰影を投げてゐる。煙筒のそれと共に、その傍らに揭げられた、、の影もひらめく。

間斷的に機械が轉廻して、急に油切れのしたやうに磁と音響が終熄する。これが、時折この場の演出中に繰返へされる。油罐の聲。

労働者五人、、、を壁の曲がり角へ据ゑつけてゐる。續いて、鐵柵の門をぴしんと閉める。

労働者一　やはり壁へ孔をあけた方がいいと思ふがな。

労働者二　大丈夫だ。おい、誰か繩を持つて來て奥れ。

労働者三、四　よし來た。石油箱でいいな？

(工場の裏手へ廻はり去る)

労働者五　今に、、も据ゑつけんといかんやうになるだらう。

労働者一　野郎云ふたな。ファシストにそんな旗があるもんか！　そのうちにはカマンベーのファルマジョみたよに『──』と洒れよ。

(労働者三、四、各自に『スタンダード石油會社』の石油罐を二罐づつ持つて來る。續いて労働者六、シャベルを持ち汗を拭きながら登場)

労働者六　おい、石炭がない！　作業中止だ！

労働者五　スタンダード石油會社が、地中海を越して工場へ這入つてるんだからな。、、、、、、といふものは恐ろしいもんだね。

労働者三　それが俺達の工場委員會の戰鬪準備に役立つんだから皮肉なものさ。

労働者六　石炭を送らねえのはイギリスの奴等だ。おい、こりや、呑氣に構へてゐちや逃ぐる駄目だぞ。もし俺達がこの工場を運轉して行かなかつたら、折角、、して監視してゐる意義がないぢやないか！

労働者四　ロシアが、、、、、、され、ペラ・クーンのハンガリアが兵糧攻めにされたのは、他人事ぢやないな！

労働者一　ここへ旗を立てよう。

労働者三　旗はデ・ニコラが本部へ取りに行つてる。

(労働者七、八、九、十工場内から、巨きい鐵材を擔いで來る)

労働者六　おい、それをどうするんだ、まだほとぼりもさめないほど

の鐵を？

勞働者七、八　賣りに行くんだ。軍資金が必要なんだ。

勞働者九　管理は俺達に任しておけ。君達は防備の方をやつてくれ。

勞働者一　したが途中でファシストの奴等に行當つたら大變だぞ！

勞働者十　何、來るもんか？　あいつら、どうせ團結なんかしてはしないんだ。あんな嚇しを云つて來ただけのものさ。おい、行かう。

勞働者七　門を開けろ！

（四人鐵材を擔ぎ去る。勞働者一、二、三、四土を掘り足場を拵へる。勞働者十一と十二、巨大な、、をころがして來る。一疋の犬それに戯れながら趁り出づ）

勞働者十一　畜生ッ、ふざけるなよ！

勞働者六　又來たぜ！　おい、それも食つちまふのか？

勞働者十二　いやこいつは誰も引取りてがあるまい。門の傍へ威嚇のために立ててやるんだ。（門の傍へ行く。犬を叱る。犬、廣場の旗の影の動くのに飛びついて吼える。と、それをやめて、急に尻尾の尖端に痒みを覺えたかして、自分の尾に咬みつかうとする。幾度も尻尾を追ひかけても容易に目的を達することが出來ない。しまひに、犬は躍起となつて一つ處をくるくると獨樂のやうに廻はる）

勞働者五　やい、畜生ッ、自分の尻尾を追ひかけてやがる。

勞働者六　何だか、俺達のやつてることによく似てるぜ。

勞働者一、二、三、四、五、十一、十二　何故？（つめ寄る）

勞働者六　まゝ待て！　それはかうだ。この間も、、、、、、、、、、、からの指令があつたらう。我々には、、、、は早いッて。しかし、マルテスタ一派が、、、にとつつかつて、三月の會合以來から、いふ戰術に出たんだが——そこだよ、イタリーは諸君も知つての通り天然の物資に乏しい國だ、それを俺達だけが無理矢理に、、げをして見ても、折角の原動力たる石炭や石油を封ぜられるし、、、、、の提携で今に食物さへ缺乏して來るにちがひないんだ。見ろ、俺達イタリー勞働者は、、、、、、の壁（壁を指差す）に取圍まれて、自分で自分の尻尾（犬を指差す）であるところの貧弱な資源を追ひ廻はしてゐるんぢやないか！

勞働者一　君はいやに、、、、、物の云ひやうをするね。ははア、わかつた。、、、、の感化だな。

勞働者二　俺達の統制を紊すやうな言葉はやめて呉れ。

勞働者三　そんな御說敎はサン・ロレンツオの廣庭ででもやつて呉れ。

勞働者五　ともかくこの犬を追拂はう。（無理に首輪を掴んで門外に追ひ遣る）

（デ・ニコラ先頭に立つて、二十人ほどの勞働者が、大きい、、の

下に隠れながら階段から顔を掛ける。、、の下の労働者達の眼に見えない）

デ・ニコラ　旗だ！　門を開けろ！

労働者十二　よし、來た！

デ・ニコラ　旗をかぶつて、町中を示威運動をしながらやつて來たよ、

（旗の下の労働者達急速に場内へ入る）

デ・ニコラ　旗を捨てろ！

（労働者達旗をかなぐり捨てる。労働者と思つたのは、實は黒いシャツを着、無帽で、太い棍棒を下げたファシスト團であつた、工場委員達愕然として退がる）

デ・ニコラ　イタリーの、、は誰か？（團員に向つて）

團員一同　我々！

デ・ニコラ　ローマを、、、者は誰か？

團員一同（もつと大きい聲で）我々！

デ・ニコラ　國家のために何時でも死を辭せない者は誰か？

團員一同（棍棒を振り翳し）我々！

デ・ニコラ　然らば、諸君、突撃せよ！　最後の一人のボルシエヴイキまで毆ぐり飛ばせ！

（それまでに、工場の入口に逃げ込んでゐた數名の中から、、する者がある。ファシスト團團員達、身を低く地に匍はせながら一時二時と進む。内部から器物や石片や煉瓦が飛んで來る。それを拾つて、ガラス戸を毀はす）

労働者の一人（階から）デ・ニコラ、貴様、よくも俺達を裏切つたな！（一發の銃聲と共にデ・ニコラ斃る）

ファシストの一人　貴様等、この工場をそつくりそのまま引渡さばよし、さうでないとこの、、、、、、向けるぞ！　降れ！　、、を捨てて出て來い！（砲聲）

ファシストの他の一人　裏口へ廻れ！（團員の半分、右奥へ驅傳ひに去る。あとの半分は矢庭に戸口から闖入する。、、、、、。、、。ファシストの一團。裏手から數人の労働者を縛つて來る。それと呼應して、戸口からも數名の労働者が、廣場をめがけて、、ばされる。ファシストの一人、斃れてゐるデ・ニコラの死體から、一枚の大きい紙を取り出して、工場の入口に貼る）

ファシスト一（讀む）我々ファシストは比例代表選擧制の實施を要求

する。

ファシスト二　婦人の投票權並に選擧權。

ファシスト三　選擧人被選擧人に對する制限年齢の低下。

ファシスト四　、、、、、、、。

ファシスト五　政治議會と並んで經濟議會の設立。

ファシスト六　、、、、、、、。

ファシスト一同　萬歳！

（勞働者數人入隊を見て門外に脱走する。ファシストの一隊喊聲を擧げて逐ひ出づ。他の一隊は、殘つた勞働者を、、、、、、、）

勞働者六　俺達はあまりにムツソリーニを見縊つてゐた！

（方々に銃聲、突貫の聲。）

——幕——

第五場

一九二二年十月三十日。

戒嚴令下のローマ市。クリイナル宮殿附近の都門の城壁。正面に白灰色の大きい壁。中央にアーチ型の大きい入口がついてゐる。入口からむかうには建物。大理石の石疊みに、壯麗な彫刻が施してある。木立稠茂ばんで、樹を城壁から覗はす。壁上は広ろく、歩けるやうになつてゐて、、、、、、、、。都門外は大廣場。午後。

イタリー王室の衞戍軍の本據が、壁内に置かれてある。通行人は、すべて入口の向ふへは這入れない。衞兵二人、門の左右に立つてゐる。門内には、、、を擬した一隊の兵士達が見える。壁の上方の歩道には、、、、、、、、兵士二人ほど左右から歩み出て、中央にて出遇はすと、再び取つて返へす。雑話の音しきりなり。號外賣の聲諸邊にかまびすしい。市民（若干の婦人をも加へて）二十名ほど珍らしさうに門を遠巻きにしてがやがや云ひ合つて居る。

市民一（大きく『ムツソリーニ、ローマへ、、、！』と書いた號外を擴ろげて、市民二へ示してゐる）どうです、たうとうやつて來ましたな！

市民二　こりや、この分では世の中はどうなることでせう！

市民三　カムパニアの野は黒シヤツで煙草畑のやうにまつ黒ですよ。

女一　、、が起るんですか？（市民四へ向つて）

市民四　僕たちかわたし[illegible]今度、いつもの通

りにトムまうの音樂を買はうと思つて、叩き抜けに出て見るとこの騒ぎなのですからね。

市民五　これは、貴下、一昨日から始まつてる騒ぎですよ。

市民四　いや、その、實は私は一昨日からずつと呑み通しだつたのでね。

市民五　ははア、飛んだところで[illegible]といふ奴ですね。

女一（ほかの一團の男達に向ひ）、、でも始まるんですか？

市民七　、、の前かこの通りぢやあ、、、、、、ですよ。

市民八　いつたいこの黒シャツつてのはなんですか？

市民九　茲二三年の間、方々の工場や新聞社が叩き潰はされて途方もない損害を蒙つたでせう、——あの連中ですよ。、、、だね。それが、貴下、、、、、でやらかすといふんだから凄いもんですよ。

女二　ムッソリーニていふ男はオルヴイエットのお寺にある、、のやうな恐ろしい男ですつてね？

市民十一　そりあお前、、、の親玉だもの。今に見な、、、、、、、しなさるぜ。

市民十二　いつたい總理大臣のファクタは何をしてるんだらう？

市民十三　何しろディアズ將軍なら、どんな黒シャツでもひとたまりもなくやられますよ。

市民十四（市民十五に向ひ）この連中は、町のお社で警鐘に上つてらこおつけるんだそうだね。

市民十五　あの新聞へ出てゐる綱領なんぞを見ると、なかなか、、、、、なところもありますな。

學生一（學生二に向ひ）青年よ、青年よ、美の泉よ！　なんていやに文學的なマーチでやつてるんだが、やることはかなり惡辣だつてね。

學生二　黒シャツだけでなくて、青シャツつて奴もいつしよになるんだつてね。

學生一　さつきの號外では、ガルダでダヌンツイオと會見したそうだよ。もう來るだらう、テルミニからコルソの通りまで、ヴイア・ナツチヨラレは出迎ひの人間で一杯だよ。

婆さん（駆け出しながら）こりあからして居られぬわい。『嘆きの聖母様』にお願ひして家財を疊んで、又實家へでも歸へりませうわい。

市民達（異口同音に）來たぜ！來たぜ！（市民達一様に視線を右に轉ず。左より入り來たる群集と一團になつて、右端・を凝視す。彼等の呼び聲、驚嘆の聲、唸り聲など太い複線になつて舞臺一圓に渦を卷く。その音圏の上に、遠くの方で多數の人員が聲高に合唱する唱聲が聞える。城壁の上下及び内部に當つて、俄かに緊張せる號令の聲、

軍人の跫音など。、、、の内部には、、、、、、、、を護りながら、一隊の兵士がぴたりと地上に匍伏す。一人の将校、双眼鏡を持ちてその後を徘徊す。彼れの背後にも一隊の兵士等隊伍を整へ居る。電話のベル、時折、群集からの雑音の途絶えた合間に、緊張せる音線を曳く、うわーツと物凄い喊聲——それは市民の歡呼の聲である。自動車の警笛左端に聞え、正装せる総理大臣ファクタ、慌てて群集を従者二人に押退けさせながら登場す。ファクタは、酒肥りのした、蚤取眼の、カイゼル髭を生やした、態度の落ちつかぬ男である。

従者一（、、、の前へづかづかと進み）開けろ、開けろ。

従者二　総理大臣の御入でだ。

士官（づかづかと進み出で）総理大臣が何であらうと上官の命令には誰一人この門を通すことが出来ないことになつてゐます！

ファクタ　こら、御前は予の顔を見覚えぬか。

士官　一と目に二人も要る総理大臣のお顔はちよつと覺えにくう御座います。

ファクタ　新聞や雑誌の寫眞版に發表され過ぎるほど發表さして置く予の顔を知らぬとは不埒な奴だ！　予は、直ちにこれから、、、、、、、、、、、、、、、、、。強つて、、、を踏かんとならば、予の自動車で押通つて見するぞ！

士官　総理大臣閣下、、、、といふものは、カルツの戦場以来、、、、、、を通はす習慣になつて居るので御座います。いか様に閣下が仰せられるとも、上官の命令のなき以上はお通し申すことは出来ませぬ。強いて御遣入りなりたければ、陸軍大臣閣下へ御交渉になつて然るべき命令のあり次第取計ひませう。但しは、商人達の通用門になつて居ります、街角の小門からお這入りになるか？

ファクタ　うむ、うむ——怪しからん、不届きな、予の浮沈にも拘る一刹那を、遮ぎり止めるとは！（脱いでゐた白き手袋を取つて烈しく、、、を打ちながら、足踏みする）よし、ダンテ、無念だが商人用の門へ廻はれ！　こんな陸軍大臣なら、今日から早速免職だ！

（従者彼と共に去る）

士官　色男め、陸軍大臣を免職する前に自分の、、、、、、、、、、、さ！（冷笑す）、、も、この頃は、、、、で脅されてゐるんだ。ムツソリーニが來て、、、、、、、、、はりでもしたら、どうなると思ふか！

群集（右端より雪崩れを打つて左端へ退き來たる。女子供の金切聲。男達の『ファッショ萬歳！　萬歳！』の聲。次第次第に集木の如く左へ引き退くと、城門を鮮かに見せる街衢の出現する間。——

兵隊、多數の軍旗と共に、ベニト・ムツソリーニ、黑服黑シャツの姿で先頭に現はれ、胸を張りて城門へ向つて進む。あとから四列縱隊にて、夥しい黑シャツ黨員が舞臺へ流れ込む。舞臺は忽ち幾重にも疊まれ四列縱隊のファッシスト團員によつて充たされる。所どころに槍のついた國旗。ムツソリーニ左手を高くさし擧げて大呼す。

ムツソリーニ　我等は、玆にファッシスト團員一百萬人の總動員を行つて、ローマへ進擊して來た。我等の主張は簡單である。――我等は、、、、、、、、、、、、、!(その時博士アントニオ何かをムツソリーニの耳へ囁く。ムツソリーニ頷く)諸君、諸君は玆數時間のうちに腐敗せる、、、、に代つて、眞の、、、、を持たんとしつつあるのだ! 門を開け! 門を開いて、この黑シャツのままで、、、、、、、を乞ふこのベニト・ムツソリーニを入れよ! 我等はイタリーを滅亡の淵から救ふ爲、津々浦々から徹宵ローマへ進軍し來たつたイタリー國民である。我等の目的の爲めには、今や身命を拋つても、、、、、、の下に働かうとしてゐるのだ! 再び云ふ、門を開け! 開いてイタリーの運命を泰山の泰きに置け!(博士アントニオ再びムツソリーニに囁く)見よ! 諸君は、、、、、、を護りつつある。我等は、國を思ふ赤忠のほかこの胸を掩ふ楯はない、我等の敵は不義である、我等の敵は卑怯である、――、、、、、、、、諸君は我等の同胞は滅ぼし得るとも、見えざる我等の樽、見えざる我等の爪、見えざる我等の爆彈を防ぐことは出來ない! 三度、我等は叫ぶ、門を開け!――(城門内に威かめしい軍服を着た將軍の姿が見える。一二三語の命令ののち、、、、、、、が速かに撤去される。城壁の上に一人の軍服を纒ふた、、の姿が、多數の、、、、を從へて現はれる)

ムツソリーニ(叫ぶ)、、、、、、、、、、、、、! イタリー萬歲!

ファッショ萬歲!

ファッショ團一同　萬歲!

(ファクタきよときよととして現はる。シルクハットを取りて恭しく城壁に向つて敬禮す)

城門内の武官　ベニト・ムツソリーニ、、、には直ちに、、、、、、はられる! そのままで苦しからぬ、歩み入れ!(ムツソリーニ高く左手を擧げ、低く片膝を折る。ファクタ愕然たり)

ファッシスト一同　萬歲!

(左端から驟雨の如き花と花環が一同の上へ降りかかる。ムツソリーニ大きく第一歩を踏み出した途端に軍人達捧げ銃にて)

――幕――

第六場

或る架空的な、長い廊下。

六つほどのドアのある廊下である。壁には無數の太い大きい棍棒が立て掛けてある。うす暗らい怪奇的な廊下の長さに、整列された棍棒だけが、ぎらぎらと光る。

一人の男、ドアの一から靜かに、音を竊んであらはれ、前後左右を見廻はしたのち、左端へ遁げて行かうとする。ドアの六からあらはれた一人の男、無言で第一の男の前へ立塞がる。二人は頻に接吻して、互に笑ひ合ふ。しかし隙を見て、第二の男、いきなり棍棒を取つて、第一の男を殴り仆ほす。第一の男斃る。ドアの二から、第三の男あらはる。第二の男、再び第一の男に對すると同樣に、叮嚀に接吻して、殴ぐる。二人の屍體は行儀よく左端にならぶ。第三のドアから、第四の男出で、同じやうに撲殺される。第四のドアの第五の男、第五のドアの第六の男も同じ。五人の死體を眺め居る間に、第一のドアから第七の男あらはれ出て、接吻したる上に、第二の男を殴ぐる。第八の男、第二のドアより出で、やはり第二の男に殴ぐられる。かうして、第九、十、十一の三人も同じやうに撲殺される。廊下にならべられた十人程の死體の列を見て、第八の男、微笑む。すると、第三のドアから第十二の男出て來て、接吻の

を撲殺す。同じことの無數の反覆のうちに、舞臺全く暗らくなつて、幻影は忽焉として消え失す。……これらの行動の合間々々に狂的な大醉の哄笑が聞える。

第七場

一九二四年の春。

パラツツオ・キギにおけるムツソリーニの官邸の一室。室の壁は淡い灰色に塗られてある。中央に大きい楕圓形のテーブル。高價なる椅子十五脚ほどテーブルを圍み居る。その他、室内のシャンデリア、窓などよろしく。『勝利』の女神の像が隅に在る。

肅然とした空氣の中に、ムツソリーニ、テーブルの首席に立ち上がりながら、並び居る人達十三人ほどを熱心に指さし廻り居る。舞臺面一樣にもうろうとしてゐる。唯テーブルの周圍だけ死色のやうな神秘な光が漂つてゐる。

（注意。これより會議の場に至る迄は、大臣達太い腕を振り廻はしたり、亂暴に卓を叩いたりする必要がある）

ッソリーニ（感情的な動作で）おい、マリアノ、主筆マリアノ、お前、何の恨みがあつて會ひに來たのか？――ムリッツオ、いくらそんな顔をしたつて、俺は怖はくはないんだ！（並び居る人達を一々指摘する。指先に烈しい顫ひあり）代議士のコリント、お前は見出されたときは首がなかつたつけな、犯人はあがつてゐる、――俺ぢやないんだ、俺ではない！ ドミノといふ奴は、お前のために丸一年の刑期を言ひ渡されてゐるんだ。ゴーリ、貴樣はそんな恐はい顔をしたつて、俺には、地獄へ墜ちたダンテよりもおそろしくはないぞ！

十三人の人間（蒼白い顔を擡げて、一齊にムッソリーニの方へ詰め寄る）、、の政治を止めろ！ 、、――、、――、、を止めろ！（その聲、不思議な餘韻を曳いて地の底までも沁み徹るやう）

ムッソリーニ（大聲にて）、、は、、のやうなものだ！ 或る期間は、絶對に必要な、、だ！ 、、を否定する奴は、皆、、のために仆れるぞ！ 、、がなくてイタリーが救へると思ふか！ 、、！――、、だッ！（ムッソリーニ憤然として十三人の人間の包圍するうちに、拳を振るひ足を上げて亂鬪する。人達次第にムッソリーニを襲うて、彼れの軀を[illegible]の大椅子の上へ運び込む）

（突然、頭上に燦然としてシャンデリアの光が點もる。まんどうに暗くなつた會議室の中に、十三人の[illegible]されながら、ムッソリーニ僅く頭の前の何物かを拂ひ退けるやうな手付きで、慄然とした恐れを表情す）

ジョワニ（現在はイタリーファッシスト總本部の幹事である）親方！ 親方！――どうなすつた？ 眩暈ひでも起されたのか？

ムッソリーニ（はつと氣がつき）おい、ジョワニ、『親方』だけは止めてくれよ！ どうも貧乏くさくていけない！ 統率とか、閣下とか何とかほかに威風堂々とした呼び方がありそうなものぢやないか？（苦笑）

秘書官長ロッソニ　どうもこの田舍者には全く困るな。お前、そんな立派な身裝をしてゐる癖に國訛りをむき出しだなんて、ムッソリーニ内閣の恥だぜ。まるで昔の鐵道驛夫をやつてゐた氣持がまだ拔け切らないんだな！

陸軍大將バスコ　ジョワニもそうだが、首相閣下もあまりむき出しぢやありませんか？

ムッソリーニ　――と云ふと？

文部大臣ゼンチロ（胡麻髯の老人）こなひだ、アメリカの特命全權大使チャイルド氏に御會見の折などは、些か脫線のやうでしたな。

勞働大臣ビアンチ　僕は考へるがね、先生はもつと民衆に恐はがられ

るやうに、——つまり睨みを利かせるために、微妙な群衆心理を、、、、、があると思ふね。

海軍中將フエデリオ　わしも同感ぢや。つまりもちつと、、、がして戴きたいな。譬へば朝の散歩の折には、ちよい〳〵動物園へでも馬を乘り入れられて、幸ひ彼處には、今年生れたばかりの獅子の仔がゐるから、あれをでもひとつ手馴づけられて、イタリーの首相ムッソリーニ氏は、、、、、、に當られて居るから、常々、、、、、、、、、として、ローマの古武士のやうに、アレナに猛り狂ふ猛獸をも恐れぬちうな、、を、早い話が、あんたの弟さんにでも、、、、、、書いて貰ふんですな。

文部大臣ゼンチロ　わしの方でも新しい小學校の讀本を拵へさせますについては、種々とナポレオンとの比較や、ガリバルヂー將軍との類似點などを、手際よく書かして見るつもりですよ。

陸軍大將バスコ　幸ひピアンチ君が首相によく似て居られるから、一つ決死的な勇氣をもつて、譬へばナポリからローマへの飛行とか、新しい軍艦の進水式とかいふ場合には、ムッソリーニさんそつくりな身裝をして民衆の前で輕業師のやうな冒險をやられたら、どうでごわせう？

勞働大臣ピアンチ　それは引受けますが、いつそ首相の株までわしに譲つて下すつたらどうでせう？

ムッソリーニ（笑ふ）おい、君達、馬鹿もいい加減に休み休み云ふがいい。——それよりも、俺は擊劍の方をちと勉強しようと思つてゐる。鐵のやうなこの腕も、決鬪で負傷して歸へつてからといふものは、何となく冴えがなくなつたやうだよ。それに十二指腸もわづらつてゐる。誰か、この場で一つ俺の相手をして見るか？

文部大臣ゼンチロ　ははあ、それだけは御免蒙ります。——何故と云へば、私達一同は首相にはきつと負けることに相談し合つて居りますからな。

大藏大臣アントニオ博士　冗談はさて措き、今日の閣議の方からきめて行かうぢやないか？

遞信大臣チザーレ　今日は、特別にわしと警視總監のザンボニ君との問題ですがな。——

ムッソリーニ　諸君着席して下さい。ザンボニ、何か又あのスツルツヲの奴が煽動でもし居つたか？　それとも外國へ逃げた筈のサルバニ博士でも歸つて來たのか？

警視總監ザンボニ　いや、そんなのなら何でもないんですが、實は秘密出版の増えたことですよ！

ムッソリーニ　あれほど猿轡を嵌ませて置いても、まだ亡者共がぐづ

くづ扱かしてるのか？　それから思ふと、昔のローマの何とかいふ司法官、おいファリナ、あれは何と云つたつけな、――殘忍な、すべての違警罪者は死刑に處すと云つた奴よ？

司法大臣ファリナ　――ドラコマでせう？

ムッソリーニ　さうさう、その男だ。どうだい、ザンボニ、もう少し手厳しくそのドラコマ式をやらうぢやないか。――凡ゆる出版物はファッシスト宣傳部の直轄下に在るべし、なんていふのはどうだ？

司法大臣ファリナ　秘密出版は發覺と同時に、裁判なしに無期徒刑、なぞは如何です？

警視總監ザンボニ　首相、實はその秘密出版書類を押收して、先刻次ぎの部屋へ持たして參つてあるんですが、驚いちやいけませんよ、二噸積みのトラックに十臺もあつたんです。それが、貴下、この一昨日の檢擧だけの分ですよ。ローマだけでね。ちよつと取寄せて御目に懸けませう、――そのサンプルをね。（ベルを鳴らす）

次室から屬官一人現はる。警視總監彼に命ず。屬官退場）

文部大臣ゼンチロ　ボルシエヴイキですか？

遞信大臣チザーレ　赤、黑、ピンク、薄桃色、灰色――實に各種類の思想が交つてゐるのですよ。

文部大臣ゼンチロ　まるでダヌンツイオ氏の初期の小說のやうですね。

（屬官下役五人に命じて、山のやうな秘密出版書類を運ばせる。書類うづ高くテーブルの上に山をなす）

ムッソリーニ（その一册を手に取り）や、マキシマリストのカセーラの奴めが、今度は愈々ボル臭い眞似をし始めたな！

司法大臣ファリナ　最も困るのは、閣下のファッシスト團組織以前の内情をあばくための秘密通信ですよ。これがさうです。（一束の書類を手渡す）

ムッソリーニ　誰だ誰だ、こんな馬鹿な事をしやがる奴は？

秘書官長ロッソニ（覗きこみながら）これは非道い！よほど先生の内情を知つとる者がやり居るんですな？

ムッソリーニ　ザンボニ、目星はついてないか？チエカは何の爲めに月給をむさぼつて居るのか、手が足りなけりや、憲兵を派遣してもいいぢやないか！

ザンボニ　どうも、もと活版屋をやつてゐたステファニといふ老爺らしくも思はれるのですが、家宅搜索をしても、活字一ケース出て來はしないんです。尾行は附けて居りますが、奴、近頃自動車の仲買をやつとるもので、軍用自動車のやうに素ばしつこくて、往々にして何處かへもぐり込んでしまふんです。

司法大臣ファリナ　そんなのは證據の有無に拘らず、わしの方から逮捕令を出してやるよ。

大藏大臣アントニオ博士　どうもそれは少し非道過ぎはしないか？——民間の評判も、近頃は君達があまり苛辣な政策をせるもんで芳んばしくないよ。わしはいつも諸君の行動の辯護者となつて居るので、隨分苦しい立場にあるんだ。諸君、もし諸君が政治的に事を運ばれようとするなら、もうちつと頭の方を働かして貰ひたいね。それに、モルガンの方の國債だつて、悪るく民衆の意見が反映すると、重大な破綻を來たさぬとも限らないからね。あのサルワニ教授なんぞの國外同志との文通などは、よく取締らんといけませんぞ。

ムツソリーニ　博士、富鐵の方はだいぶ上がりますかな？

大藏大臣アントニオ博士　あれは、まあ、さう問題ぢやありませんよ。それよりも、一つ人氣を煽るために、ムツソリーニ閣下が御自分で出馬されて、鳴り物入りの活動寫眞でも撮られたら如何ですか？それを、ファッシスト系の組織を持ちたがつてゐる、アメリカとか、イギリス、それから、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、相當に勞働運動なども發達しかかつて居るやうです、——ですから全然國情は異つてゐましても、滿更縁いことでもない類似點、つまり人間の野獸性ですな、それも、、によつて推しすゝめられた、、、、、——それを煽れば自然とロンドンの爲替相場だつて有利になりますし、モルガンとは犬猿の間にあるロックフェラア系の金融機關でさへも動かせますよ。

司法大臣ファリナ　何でも、、、、をやつつけるに越したことはないよ。それはナポリの向ふにヴェスヴィアスがいつも噴火してるよりもたしかなことだ。第一、奴等をやつつけて俺達に損のある試しはないよ。

ジョワニ　、、、、、、なら、コルチヤロタ、デニキン、ユーデニッチ、ウランゲル、セメヨノフ、ペトルガ、ホルセー、ピルツスキー、マナアヘイム——ああ、息が塞る——そいつ等の發狂軍隊よりも、俺等のファッショ青年團の方が遙かにでつかい、、振りを見せてやるよ！——なあ、親方？

秘書官長ロツソニ　おい、いつお前はそんな學者になつたんだい？、、、、、、に失敗した最も奇妙奇天烈な標本を、お前、田舎の婆が念珠の玉を數へるより良く呑み込んでゐるぢやないか？　偉らい、偉らい。

ジョワニ　いや、白狀するが、實はこのパンフレットを讀み上げただけの話さ。（一同失笑）

ムツソリーニ　これから僕は、會見を望んで來た外國人四五名を引見

することになつてゐるので、この際話はまあこれぐらゐにして、重要事は司法大臣と、遞信大臣と、それから總監と、なるべくならアントニオ博士にも意見を貸して戴いて、緊急に取締法案をでつちあげては呉れまいか。そして見つけ次第、ぴしぴし、、、でやつつけることだ。(起ち上がる)では——今日はこれで散會としよう。ついでに、その先頭の、俺の昔の事を暴露してる奴な、ザンボニ、そいつを至急捕へてくれ。(一同敬禮して起ち上がる。彼等靜かに二三人づつ連れだつて正面奥へ退場。シャンデリアの光突然薄くなり、秘密出版文書の前に、腕組みをしながら坐つてゐるムッソリーニの姿を夢のやうに浮き立たせる光が何處かから發散するだけである。ムッソリーニ急に起ち上がつて、秘密出版文書の束を摑み取ると、いきなりその一つびとつを天井目がけて、驚くべき速さをもつて投げ上ぐ。動物的な呻吟。暫くして部屋中に散らばつた秘密出版文書のため、ムッソリーニの體の全部が掩はれ、首だけその間から出てゐる……その首は、大きく鰐のやうな口を開いたと思ふと、粗野な態で欠伸をする)

ムッソリーニ(跳ね起きる。と、同時に、シャンデリア再びまぶしく點る。ジョワニ奥より登場)あ——ア！

ジョワニ　親方、何を貴下はしてますか？　アオスタ公爵が、社會政策的要素事業を廢止して、ファシスト政府の赤十字社を視察する爲でお目に懸られようつて、只今これへお見えになりますが——あの方はいつも美人だね、親方！

ムッソリーニ(烈しく肩をゆすり)あ、いまのは夢か！ジョワニ、貴様、その『親方、親方』だけは止めねえか？　夢にまで、貴様の親方がついて來やがる！　止めなかつたら、最近覺えたメリケンで、一つピザの塔の展望樓の映つてゐる方を拜ましてやるぞ！

(ムッソリーニ拳闘の眞似をしながら、逃げまはるジョワニを追ひかけ、稍威嚴を缺きたるポーズにて)

——幕——

第八場

一九二四年の冬。

北伊ゼノヴァに近いセストリ・ポネンテの汽船ドック。

右端に太い木材を組み合はせた櫓が聳えてゐる。その木材の格子を透して、先下がりに海へ半ば浸つてゐる汽船の龍骨の一部が見える。櫓の或る部分に『禁煙』の札。その邊一帶に、木屑やロープ、鐵線などが散らばつてゐる。重油の斑點。正面奥は廣いゼノヴァ灣、雪もよひの空の下に、流動する鉛のやうな冬の海。アルプス下ろし

の朔風が烈しい。正面中央は海岸になつてゐて、太い杭が亂雜に打ち込んであり、それらにケーブルが絡ましてある。町から吹き飛ばされるあらゆる塵埃新聞鉋屑など吹き寄せられて居る。左端は木造の見張小屋、そこにも『禁煙』の札が貼られてあり、機械の破損したパーツや、古るい道具類などがその横手の壁へ立てかけてある。舞臺の前方は廣場。いろいろな機械の運轉する音、汽笛、鋲を打ちこむハンマアの音、勞働者の掛聲などで幕が開く。波の音。

舞臺しばらく空虚。

浮浪人一、マドロスパイプを燻らしながら左から登場。暫く海を見廻はしたりドックの方へ歩いて行つたりする。浮浪人二、寒さうに肩をすぼめながら右より出て來たり、途中にて浮浪人一と出遇はす。

浮浪人二　やり切れねえな、かう寒くちやあ、お前、すまねえが、一寸一服喫はして呉れねえか？　他人の喫つてるのを見ると、生命を三年縮めても喫ひたくなるでな。

浮浪人一（パイプを渡さうとして）おお、お前はドミノぢあねえか？

浮浪人二（驚き）さういふお前はフオルニだつたか？

浮浪人一　どうしてそんな乞食のやうな身裝をして、處もあらうにこんな造船所へ流れ込んだんだい？

浮浪人二（旨さうに煙草を喫ひながら、四邊を見廻はして）俺も此んだ事にかかりあつてな——二た月前にやつと牢屋を出たばかりさ。お前知つてるだらう、あのマキシマリストのゴーリを殺つつけた罪でさ。——それがお前、大きな聲ぢあ云はれないが、親方の命令でなんだぜ。當り前ならば、骨折としてたんまり金でも貰つて、地方の役員にでもされるといふ寸法なんだが、俺がそれ、お前も知つてる通り少し口喧ましい方だらう、だもんで、牢屋を出るといきなり、誰の差し金かは知らねえが、五六人のファッショの奴等が尾けねらつて來て、すんでのことに頭を鉢割られるところさ。——仕方がねえから、俺あいろいろに姿を變へて、こいつは何でもファッショに恨みを持つてる土地へ逃げこむに限ると思つて、貨物列車へ乘つてからに、ゼノヷまでは落ちのびたが、彼處はボルシエヴイキが旺んなもんだで、運惡くムツソリーニが、わざわざローマから乘り込んでお祭り騷ぎをおつぱじめるところへ出遇はしたわけさ。

浮浪人一　それでお前がここへ來たわけか？

浮浪人二　それが一週間前さ。仕事もなし、かうなつたら掻つ浚ひでも盜人でも、何でもするつもりではゐるんだが、ムツソリーニの野郎の遣り口で、イタリー中は空家同然になつてやがるし、ちつと目星しい處といひやどれもこれも憲兵や巡査が見てやがるし……

浮浪人一　それに、このドツクだあ、今にもストライキが始まらうとしてやがるんだしな。

浮浪人二　でも、ここに働いてゐる奴等はみんなファッショの勞働組合の連中ぢあないのか？

浮浪人一　ファッショの勞働組合だつて、賃銀は下げられるし、八時間勞働は止めてしまひ、ほんとのところは十時間も十二時間も働かされて、・・・・、だとか、・・の高度の利益だとか、妙なことを云つちあ、その造船會社の親玉の懷ろを肥やしてるんだからなア――いくら造船工だつて、生れるとからファッシストになつて、胸へ勳章をぶら下げたり、黑シャツを着たりして來るものであるめえ。

浮浪人二　さうか、道理でこの町は變梃にさびれてゐると思つたよ。路傍に小便の臭ひこそすれ、マカロニ一と片れ落つこちてはゐやしねえ。酒場もはしやくちやなし、料理屋に乾酪の匂ひもしねえ。

浮浪人一　今に見ろ、どえれえ事がこの邊でおつぱじまるにちげねえから。

（武裝したファッシスト軍人團十人ばかり急いで右から右端へ通り過ぎる。浮浪人二慌てて海の方を向く）

浮浪人一　大丈夫だよ。この邊の軍人團は、皆ムッソリーニに忠實なんだ。さうだ。――お前、一つ何か持ちあがつたら[illegible]

皆へしてやれよ！

浮浪人二　しかしお前、ほんとに大丈夫かい？　俺たん組合にとつくに通じてゐるんだぜ。

浮浪人一　大丈夫とも。このボッティチェリの[illegible]すれ、そこへも、かうやつて隙にあつたら造船工へ近づかうとして、[illegible]ツクをぶらぶらしてゐる[illegible]

（突然右端に[illegible]一群の勞働者[illegible]

勞働者一　ギアコモに話させよう！

勞働者二　これがあ云はう。

勞働者三　あの煙へ[illegible]

勞働者四　さうだ、ローマの[illegible]

勞働者二　諸君、俺は千九百[illegible]デ・コンパッチ[illegible]ムッソリーニは[illegible]ツトナを[illegible]の[illegible]――[illegible]な、[illegible]

、を建設する。その爲めの、、だと云つた。ところが、ムッソリーニが、ローマへ這入つて、あのシルクハットを被りやがつてから、たつた七ケ月、諸君、いゝか、たつた七ケ月で奴は今云つた綱領の一つびとつを、パラッツオ・キヂの紙屑籠の中へ投り込んでしまつたんだ。見ろ、今日、俺達は『能率的な八時間』だなんて變な名目の下に、物を食ふ時間も、晝の休みも抜きにした。ほんとうのことを云へば、ずつと十時間以上の、勞働を要求されてゐるのだ。それから、資本家税どころか、それは止めてしまつて、勞働者に税金を出させて、あの變挺な勲章やら制服やら、妙な帽子などを被らせるお祭り騒ぎの費用にしてやがるぢやないか！　諸君はファッシストだ。しかも最初からのコムバッテメントなのだ。しかし、諸君・ナポリのファシスト鐵道從業員は、ストライキを起さなかつたか？　ナポリで首を切られた四百人の憲兵隊は、ムッソリーニの目の前で示威運動をしようと騒つて、ローマへ進軍した時、軍兵の爲めに鎭壓されなかつたか？　ムッソリーニの野郎が勝手にきめやがつた『階級協調組合』に、、するために、モンファルコーネの勞働者はストライキを起さなかつたか？　ノバラの百姓達は、、、、、、して地主に叛逆さなかつたのだが、諸君、あれはやはりファッシストだつたのだぞ！　又ナポリのボスコリーレの百姓達は、ムッソリーニへの面當てに、、、、、、、し、、、、いふファッショ内部の内訌を數へあげると、百も二百も並べて……が出來る。俺達はファッシストであるからと云つて、紛擾な蹂躙つた、、。俺達を裏切つてまで己れが獨り樂な事をしてやがる變節漢、プロレタリアの、、の仇によつて、小ブルジョアの支持を得ると、いきたりブルジョアの、、に旗色を變へた卑劣漢を排斥することに」躊躇しちやいかん！

勞働者多數　ブラボー！

勞働者二　話が少し大まかになつたが、もつとムッソリーニのことをあばき出すとなると。俺はムッソリーニの片腕とたのまれた、創業以來の親友ロッソニを知つてゐる。この男は、諸君は知るまいが、今『追憶記』を書いたために、危く殺されるところを、やつとロシアまで逃げのびたんだ。かういふ風に、ファッショの名を藉りて、俺達の、、、、、、、、とプロパガンダだけで、イタリー國民が無事平穏に治まつて居るやうな體裁をつくつてゐるんだ！　見ろ、今日ファッシストの機關紙でない新聞が、イタリーの何處にあるか？　あつたとしても、暴徒の襲撃に遇つて、虫の息であるだけの話だ。毎年ファッシスト團の結成記念日に、どの都會で擧行される閲兵式でも、威勢のいい附景氣の掛け聲以外に、そこには何かある

か！　あんな、、、、、、の貧賤た負債事の數に横はる俺達勞働者の搾取、、、、、、、、、、、、、、、地方農民の零落、——それらを諸君は見まいとしても見ぬわけにはいかない。今、俺達は、戰爭以來のストライキ又ストライキ、クーデターにクーデターを重ねられ、幾十度かサンヂカリストの唆かしに遭つて、サボタージュやメリー・ゴオ・ラウンドのやうな、、、、をやり過ぎるほどやつて來た。慘敗に慘敗を重ね、幾度か死にかかつて土壇場の瀬戸際まで追ひ詰められた俺達は、苦が苦がしい多年の經驗から何を得たか？　それは、カセーラや、ギイド一派のマキシマリストの説く經濟闘爭の戰術ではない！　何となれば、あの經濟闘爭こそ俺達を今日の悲慘な境遇に導いたのだから。——諸君よ、ここだ、俺達は政治的に闘はねばならないんだ！

勞働者多數　政治的だ！

（ファッシスト軍人團右から現はれ、勞働者と一團になる）

勞働者二　今俺達の仲間へ、軍人も加はつた。軍人諸君よ、俺の話を聽く前に、諸君は諸君の兄弟である俺達勞働者と、一旦非常な場合になつたら、いつしよに手を繋いで闘ふ勇氣があるか、それを聽かせろ！

軍人團　ある、ある！

勞働者二　よし。それならもつと話さう——。

浮浪人二　待て、俺にも話さしてくれ。

勞働者三　お前は誰だ？

浮浪人二　俺はマキシマリストのゴーリを、ムッソリーニに頼まれて殺ろした、そして今ムッソリーニに殺ろされようとしてゐるドミノと云ふ者だ。

勞働者四　やれ、やれ！

勞働者二　よからう、俺達がこれからストライキをやる前に、もう少し唐辛子を撒りかけるのもいいかも知れない。上がれ、代らう！

（浮浪人二と入れ代る）

浮浪人二（手を振りて正に發言せんとする刹那、何處からかピストルの音がして櫓から轉ろげ落ちる）

（ファッシスト憲兵士官左の見張小屋から現はれる。續いて憲兵數名。その一人手にした旗を高く振ると、右端からファッシスト軍人團及び多數の憲兵、、、して一團へ襲ひかかる。勞働者達と反逆組の軍人團は、どやどやと右奥へ逃げ込む。憲兵士官は烈しく下知しながら、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。勞働者二銃を揮つて、船のケーブルを截る。士官の放てるピストルによつて射落さる。勞働者の三彼に代る。勞働者の

三同じく仆る。勞働者の四再び鋤を取る。偉大なる音響と共に巨船ずるずると滑べり行き、烈しい水音と共に、檣の一部を顚仆しながら海へ墜ちる。船内より勞働者達の歡呼の聲。陸上の兵士憲兵達の狼狽するがまゝに)

——幕——

第九場

一九二六年の春。

ナポリの街上。

左に廣場へ向ふ數段の石段。舞臺正面奥にはホテルの壁。二階一階の窓八つほど、皆鎖されて、カーテンが下りてゐる。右端から正面の前方へかけて凸字形の大理石の欄干。その上にギリシヤ式の花鉢があつて、適宜な彫刻が施されてゐる。ホテルの壁と欄干との間は廣い通路。ホテルの入口は、町角を曲る心にて、前方からは見えない。イタリー國旗及びファッシスト團旗がけばけばしく舞臺の上方に交叉されてある。電車の音、自動車の警笛、都會の漠然とした雜音など。

市民六七人賑かに話しながら右より左へ通過し行く。勞働者四五人欄干に凭れながら、ひそひそ囁き居る。浮浪人に變裝した憲兵一人市民の後を追ひ、半ばにして、

市民一　あなたは運がいいんぢや。わしなんざあ幾度買つても政府を儲けさすだけのものさ。

市民二　なんの、それが行き當りばつたり主義でね。政府の政策ぢやないが、がむしやらに當つて見るだけですよ。

市民三　いや、がむしやらは、イタリー人の特質でせうつて。高い聲ぢあ云はれないが、富籤の番號とムッソリーニの政治は、どつちもイタリー人らしい、、、、、、、、、ですよ。

市民四　『統率』は、愈よ陸海軍の大臣も、外務大臣も、獨りで兼任することにしたんだつてね。

市民五　（階段を昇りながら）しかし、わしは、あの精力には感心しますね。朝は六時から起きて馬に乘るし、動物園へ行つちあ獅子の仔を撫でるし、八時からは外務省で國事を見るし、それがあんた夜の十二時頃までも續くんださうだからね。

市民一　そりあさうですよ。何せ元は新聞記者だつたんだから、每晩山のやうな新聞に眼を通さぬと氣持が惡いんださうだからね。

勞働者一　叱ッ！（背後の浮浪人を指さす）

勞働者二　行かう。また（わざと大聲にて）統率閣下にはお見えにな

らんようだから。

勞働者三　おつつけ兵隊が出始めると混み合つてとても歩けぬやうになるかも知れない。

勞働者一　さうさう。歸へつて今日はゆつくり骨休めをしよう。(勞働者達右へ去る)

市民三　あれ、やつて來ましたぜ。急いで通らないと、今にふさがれてしまひますよ。

(左へ去る。浮浪人に變裝した憲兵、勞働者の後を追うて右へ去る)

(黒きヴエールを垂れた黒裝束の暗殺者、急ぎ左より登場、右奥へ素早く歩み去る。遠くに合唱の聲。憲兵二人右より左へ横切り去る。フアッシスト團員二十人ほど團旗を持ちて左より右へ四列縦隊にて通り行く。爆竹の音。萬歳の聲四方より響く。團員達片手を差し上げて『萬歳』を叫ぶ。ホテルの八つの窓が急に開かれて、カーテンを分けながら市民や女達の顏が現はれる。その中に、二階の一つの窓から、先刻の黒裝束の女顏を現はして、頻りに左方に狙ひ居る。その窓には、外に人影はない)

(ムツソリーニ、フアリナやザンボニやバスコ大將及びアントニオ博士その他の幕僚に圍まれながら、左端より階段を下り來たる。シルクハットに、美々しきモーニング、胸に白薔薇をつけ、手に白手套を握り、頻りに群衆の歡呼を氣にしながら歩む。一としきり萬歳の聲つゞく。窓の人達熱狂して手を振る。ムツソリーニ片手を擧げてこれに答へる。先刻の勞働者達再び右端より現はれ、何やら新聞紙に包みたる物を手から手へ渡し銘々頷き合ふ。浮浪人に變裝した憲兵、他の憲兵五人と共に彼等を追跡し來たり、勞働者一が片手を擧げて『フアッショ萬歳!』と叫んだのを合圖に、勞働者二が突進せんとした刹那、背後から捕へる。この時、突然とピストルの音が、ホテルの窓から響き、黒裝束の女姿を消す。勞働者達と憲兵との格鬪とに氣を取られてゐたムツソリーニは、顏をそ向けたために、危く狙撃を免かる。この瞬間、舞臺のあらゆる方面から軍人、憲兵、警官、フアッシスト團員、市民達など無數に集まり來たり、中央のムツソリニー等を取り圍む)

フアリナ　統帥、やられましたか?

ザンボニ　おい、馬鹿々々してゐちやあいけん、早く犯人を捕縛せい!(憲兵達右へ急ぎ去る)

ムツソリーニ　(手を顏部へ當て暫くピアンチに抱へられたまゝ苦悶してゐる。ピアンチ彼れのポケットから手巾を取出して渡す。手巾みるみる赤くなる)

市民一　顏をやられた!

、を建設する、その爲めの、、だと云つた。ところが、ムッソリー
ニが、ローマへ這入つて、あのシルクハットを被りやがつてから、
たつた七ケ月、諸君、いゝか、たつた七ケ月で奴は今云つた綱領の

に、、、、、、、し、、、、、、かけたかつたか？
いふファッショ内部の内訌を數へあげると、百も二百も述べること
が出來る。俺達はファッシストであるからと云つて、約束を蹂躙つ
達を賣つてまで己れが獨り樂な事をしてやがる變節漢、
よつて、小ブルジョア の支持を得ると、
變へた卑劣漢を排斥することに」
ソリーニのことを
のまれた、創業
るまいが、
とロ

俺はか

だ。さては共産黨一味に示唆されたにちがひありません！

暗殺者（極度の昂奮にヒステリックになつて喉口を開閉して荒い呼吸を吐くだけである）

ザンボニ　閣下、どうもこの女は、多少精神に異狀があるやうに見受けられます。

（新聞記者數人人を分けて近づく。ムッソリーニに敬意を表しながら、幕僚の誰彼に事件の顚末を訊ねる）

ムッソリーニ　俺は醫者へ行くほどのことはない。神聖なローマのためには、いつも生命は捨ててゐるつもりだ！　鼻が何だ！　これからナポリの市民に對して、この由を告げよう。——その婦人は直ちに拘引しろ！

新聞記者達（欄干より落された勞働者を發見しまた憲兵等によつて捕はれ居る他の勞働者達をも見て）これらは同犯者でせうな？（記者の一人キヤメラを向けて勞働者一の死骸を寫す）

ザンボニ（慌てて新聞記者のキヤメラを奪ひ取り）こらッ、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、！　、、、、、、、、、、、、、、、！　醉つぱらひだ、仲間同志で喧嘩してそこへ落つこちたのだ。今日のパレードに治安を紊す奴なので、な、一寸抑へたまでさ。——解つたか？　それよりも、その女のことを、、、、、、！（新聞記者一同顏を見合はせながら去る）

ムッソリーニ　然らば予は直ち
う！（右端へ歩み寄る。幕僚達慌
リーニのシルクハットとを取り換へる。
鯨波のやうな萬歳の聲。憲兵達勞働者達を押
退場。ファッシスト團、幕僚達、市民の群
場）

暗殺者（手錠を下ろされ警官達に押しやられ
聲にて）私はジュピターの像で鼻の缺けた
神の巨像には首がない！

警官達　えいッ、歩め！

第十場

程遠からぬ過去。

曠野に立てる古ローマの廢墟。秋。右奧から
とした古壁。不規則な角度に缺け落ちた岩に、紅蔦
絡んでゐる。壁の中央は、ぎざぎざになつた、古の
奧に曝れた圓柱、それに遮られながらも、朦々とした秋の

市民二　撃つたのは誰ですか？

市民三　彼處の窓からですよ。私は確かに見ました――女です、黒い帽子を被つた女です。

市民四　ありあホテルぢやありませんか？

市民五　逃げたかな？　女とは――不敵な奴もあるものですな。

ザンボニ　（憲兵達と爭ひ居る勞働者達を見て）何だそれは？――そいつが撃つたのは？

憲兵一　（勞働者二の持てる紙包みを取り上げ）これは違ふんです、この野郎は、、で統率を暗殺しようとしたんです。

憲兵二　共謀者にちがひありません。

浮浪人に變裝した憲兵　僕は朝からこい奴らを社會主義新聞社から尾けて來たんですが、確かにやらうとしてゐたにちがひありません。

ムッソリーニ　（鼻に手を當てたまま）何人と雖も俺を殺ろしてはならない！

（ムッソリーニの聲に應じて、幕僚達を先立てて團員憲兵等猛然と勞働者達に肉迫し、或る者は欄干に押仆して首を絞め、或る者は短刀を閃めかして刺さうとする。その時、ザンボニ大聲にて叫ぶ）

ザンボニ　（新聞包みの中の林檎を取り出し、高く振りながら）待て、待て！　こりや違つた！　待ていつ！

（一人の團員勞働者の一を刺す。勞働者一欄干の上に仰けざ　絶叫しながら前へ落ちる。ムッソリーニ人々の差し出す手巾を受取つて、續けざまに取り換へる）

市民八　その血の附いた手巾を下さい！

市民五　尊い統率の血だ！

ファッシスト團員一　キリスト樣の聖血よりも有り難い記念だ！

パスコ大將　ですから今日はピアンチが行くやつてくれゝばいゝと思つたのに！

ムッソリーニ　鼻だ！　鼻だ！　鼻を撃たれただけだ！

ジョワニ　取り敢へず醫者の家までお入で下さい。

（一同右へ流れ込む途端に、右奧から數名の警官、暗殺者を拉して來たる。一同『殺ろせ！　私刑に處せ！』と叫ぶ。暗殺者ずたずたに裂かれたヴエールの間から、緊張した蒼白い顏を向けて、顰めてムッソリーニと對面する）

ムッソリーニ　何だこれは？

警官一　英國の婦人です。――貴族だそうです。ギブソンと云ふ者で、閣下にひどく敵意を持つとるらしいのです！

ムッソリーニ　こら、お前は外國人の身を以つて、このイタリーの復興者に何の恨みがあるのか？　云へ！　予はお前の國語は解るん

だ。さては共産黨一味に示唆されたにちがひあるまい！

暗殺者（極度の昂奮にヒステリツクになつて唯口を開閉して荒い呼吸を吐くだけである）

サンボニ　閣下、どうもこの女は、多少精神に異状があるやうに見受けられます。

（新聞記者數人人ごみを分けて近づく。ムツソリーニに敬意を表しながら、幕僚の誰彼に事件の顛末を訊ねる）

ムツソリーニ　俺は醫者へ行くほどのことはない。神聖なローマのためには、いつも生命は捨てゝあるつもりだよ。鼻が何だ！　これからナポリの市民に對して、この由を告げ上う。――その婦人は直ちに拘引しろ！

新聞記者達（欄干より落された勞働者を發見しまた憲兵等によつて捕はれ居る他の勞働者達をも見て）これらは同犯者でせうな？（記者の一人キヤメラを向けて勞働者一の死體を寫す）

サンボニ（慌てて新聞記者のキヤメラを奪ひ取り）こらッ、、、、、、、、、、、、、、、、！　、、、、、、、、、、、、！　醉つぱらひだ、仲間同志で喧嘩してそこへ落つこちたのだ。今日のパレードに治安を紊す奴なので、な、一寸抑へたまでさ。――解つたか？　それよりも、その女のことを、、、、、！（新聞記者一同顔を見合はせながら去る）

ムツソリーニ　然らば予は直ちにナポリ市民へ身自ら立つて告げよう！（右端へ歩み寄る。幕僚達慌ててピアンチの山高帽子とムツソリーニのシルクハツトとを取り換へる。ムツソリーニ退場。右端に鯨波のやうな萬歳の聲。憲兵達勞働者達を押しこくりながら同じく退場。フアツシスト團、幕僚達、市民の群、兵士等どやどやと退場）

暗殺者（手錠を下ろされ警官達に押しやられたから、振りかへつて大聲にて）私はジユピターの像で鼻の缺けたのを見た！『勝利』の女神の石像には首がない！

警官達　えいッ、歩め！

―幕―

第十場

程遠からぬ過去。

曠野に立てる古ローマの廢墟。秋。右奧から正面奧へかけて峨々とした古壁。不規則な角度に缺け落ちた岩に、紅葉した蔦かづらが絡んでゐる。壁の中央は、ぎざぎざになつた、古の凱旋門の跡。奧に隱れた圓柱、それに遮られたかなも、廣々とした秋の野が遥か

に地平線まで擴がつてゐる。所々に燒けこげたやうな土の斷層が見え、ひよろ長い絲杉と笠松とが濃緑の點綴を見せてゐる。ほどよき場所に取崩された礎の根が殘つてゐる。舞臺の左右に、同じ絲杉の木立が聳えてゐる。

烈しい秋の日ざしが晶々と照らしてゐる。蟲の聲。風の音。

映畫監督と撮影技師二人二脚の活動寫眞機をかつぎながら正面から出て來る。

監督（中央にて立ち停まり、メガフォンを望遠鏡代りにしてそちこちと檢分する）統率閣下の厳命だから、一寸でも變な事があつたらハンドルを止めて貰ひたい。いゝか、こりあ與太な探偵物なんぞとちがつて、外國へ宣傳のために送る寫眞なんだから、お互ひにしつかりしなきあいかん。

（技師達頷きながら連れ立つて右端へ退場。農夫五人左より歩み來たる。）

農夫一　どうも觀兵式だの、分列式だのと云つて、あの妙な身裝をしやあがつた若輩ともにから畑を荒らされちやあやり切れねえな。

農夫二　さうよ、おらあとこの麥畑や麥よりも兵隊の靴跡の方が多かつただよ。

農夫三　外國から小麥やよこされねえちう譯ぢやあねえか？

農夫四　アメリカぢや、えらくムツソリーニに腹立てゝ、小麥を送らんちうもんだそうだね。

農夫五　このぶんぢあ、戰さがなくとも、毎日戰さしてゐるやうなものだ。

（がやがや云ひ合ひながら農夫等去る。中空に飛行機の音しきりにす。勞働者三人蒼白き顏にて右端より入り來たり、何かを待ち居るもの〻如く、その邊を見廻す）

勞働者一　また來ないな？

勞働者二　川を越したのを見たから、もう追つつけ來るこつたらうよ。

勞働者三　何だかお前、、、、、、、、してやがるぢあねえか？

勞働者二　ほんとの事を云ひあ、、、もするよ。

勞働者一（勞働者三に向ひて）さういふお前だつて、、、、てるぜ。

勞働者三　俺等恐ろしい、恐ろしいが、この恐ろしさは、、、、、、、一般に對する恐れだよ。

勞働者一　その、、と、、、とへな—。

勞働者二　しかし、どうしても、、、、、、、、、、、、、、。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、!

勞働者三　、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、!

勞働者一　、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、。

勞働者二　兎も角この邊の木蔭へ隱れてゐることにしよう。(勞働者達左端へ退場)

(ムッソリーニ、ムッソリーニ夫人と何か云ひあひながら正面凱旋門の中から現はる。幕僚達數歩さがつて續いて登場)

ムッソリーニ　解らない人だね。――今日のは外國へやる映畫なんだから、そんなに無理な事を云はないでくれ。

ムッソリーニ夫人　だつて、貴下、今まで一度も私は貴下と御一緒で寫して戴いたことはないぢやありませんの? ねえ、後生だから一度撮らせて頂戴な。

ムッソリーニ　君は、あのアメリカの大統領ウイルソンのことでも考へてゐるんだらう? あのにやけた人道主義者なら二度目の妻君を何處までも引つ張つて出たんだが。

ムッソリーニ夫人　あの方は特別なんですよ。奥さんがおつきにならなければならないやうな理由がおありになつたんでせう。この場合はちがひます。

ムッソリーニ(少しいらいらしながら不機嫌に)おい、昔からローマの婦人は男性のための美しい奴隸に過ぎなかつたんだぞ!――そして、今でも! 女は、美しくて、男を内助さへすりあいいんだ。俺の人口政策を見るがいい。生めよ殖えよ、永遠の都ローマをして世界の冠都たらしめんがために、女性は先づ良き子を生み、偉大なる男兒を育て、偉大なるファッシストたらしめるだけの任務を持つてゐるのだ!

ムッソリーニ夫人(足踏みしながら)よござんす、又貴下の御演説ですのね!

ムッソリーニ　それよりは、ね、アオスタ妃殿下の赤十字の方でももつとお援けして上げてくれないか?

ムッソリーニ夫人　よござんすわ。歸へります。――ああつまらない、せつかくここまでお供して來たのに。ぢあ、あの自動車は後ほど又差し上げますから、私あれへ乘つて歸へります。

ムッソリーニ　べつにそんなに腹を立てて歸らんでもいいのだよ。唯フイルムの中へさへ這入らなけりあ立つて見てゐたつて構ひやしないよ。

ムツソリーニ夫人（歸りかかつて）どうせ私たんぞはものの數ぢやないんですものね（婦人の居場所はホーム）でせうよ！　おゝ、お大事に――騷ぎをよく出しておかきにならないと、又ボロニアで狙はれたように大變なことにおなりですよ！（正面より去る）

ムツソリーニ　し樣がない奴だ（舞臺右方へ向つて手を擧ぐ。四方より萬歳の聲起る。、、、、、、、、、、、、、）

勞働者三人　、、、、、、、、、、、、、、、！（、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、）

ムツソリーニ　、、？　――、、、、、、？

勞働者一　、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

勞働者二　、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、！

勞働者三　、、、、、、、、、、、、、、？――、、、、、、、、、、、。

勞働者一　、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

勞働者二　、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

勞働者三　陛下も以前は勞働者でいらつしやいましたよ、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、！

勞働者一　あの者達、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

ムツソリーニ（暫く三人の者達が小腹を踏めて、、、、、、、、りながら）お前達は、お前達のその貧弱な瀆話のために、今この、、、の時間を差し止め、そのために莫大た費用を浪費してゐるのを知らんのか？　しかも、今日の、、、は、いつものようにファッショの訓練といふだけではない――外國へ向けてのイタリー復興の實寫としての大映畫を製作するために、かくいふ予が自ら先頭に立つて、、、、、、、、、、、、、敢行する勇氣のない、一大官僚フイルムを映出する場合なのだ。國家にとつての一大事、此上もないイタリー國民の光榮の場合に、見れば、ファッショの服裝もせず、わざわざ勞働に從事すべき貴重なる時間を浪費して、遙るばるとこんな場所へやつて來るとは何事だ？　予が勞働者であつた、サンヂカリストであつた、それに一々拘泥して國務を處理して行つたたら、この光榮あるイタリーの國家は、二日にして爆彈の製造所に變化して居るだらう。――それに、、、、、、、、、、、、、、、親しく「アバンテ」社に出入してゐた、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、――――、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。――

ザンボニ、この、、、共を引き離れ！

（ザンボニ數名の憲兵及び警官に三人を捕縛せしむ）

勞働者一　、、ムッソリーニ！

勞働者二　ネロよりも非道い奴だ！

勞働者三　ボルヂアの惡黨だつて、貴樣の前では善人だ！

勞働者一　ベニトあんまり大きな顏をするな。かうなつたから云つて聽かせるが、俺達は一人ぢやあないんだぞ！

勞働者二　仲間あ川向ふに待つてゐるんだ。俺達の歸へりが遲けりあ手筈がちあんときめてあつて、電報一つでイタリー中の、、、、、、、、、、、、、、、をやることになつてゐるんだ！

勞働者三　俺達は、、、だ！たつた三人の貧弱な勞働者だが、この三人の後ろには、、、、、、、、、、、、、、、、、、、機會を待つてゐるんだ！

勞働者一　それでも貴樣は、、するつもりか？

勞働者二　やるか？

勞働者三　、、、、、、、、、、、、、、、、、？

勞働者三人（異口同音に）やるならやつて見ろ！

ザンボニ（憤然として）この、、、め、憎んでもあまりある奴等だ！ファッショの一大組織に、、、、、、しようつたな！引けい！統率は生ぬるい、俺の獨斷で、、、、、、、、！それも、、、、、、！

（憲兵警官達三人を引き行かんとす。この時撮影監督と二人の技師右端から現はる、監督は寂びた聲をメガフォンで號鳴しながら一同へ訊れる）

監督　これも映畫の中へ這入るんですか？

ムッソリーニ（振りかへり）邪魔ぢあない、こんな事を映されてたまるものか！

アントニオ博士（監督へ向ひ）お前、すると先刻からの、ムッソリーニ令夫人とのお話の方も映して居るのか？

監督　ええ。門をお出になると、もうあれでいいのだと心得たものですから、ずうつと連續撮影に取りかかつて居りますでな。

ゼンチロ　そりあ大變だ、皆カットせにあならんぞ！　いいかお前が映していいのは、飛行機だとか、軍艦だとか、閲兵式だとか、ファッショが何十萬となく集まつて、統率閣下の熱烈な愛國的御演說で氣も狂はんばかりに燃え上がつた瞬間とか、なるたけさういふ場

的大事件——平たく云へば、景氣のいい場面、それを映すのぢや。その方も懇々と係りの者から云はれて居る筈ぢやないか。

監督　實はさう仰日られると私の方も困る事があるんです。——他でもありませんが、その方（ピアンチを指さし）と統率閣下と、どちらがほんとの統率閣下であるやら、大映しにでもしなければ一寸失禮なお話でございますが、見分けがつかないのでございます。これは昨日も係りのお役人へよく申上げまして、なるたけ統率閣下だけはお獨りで、ほかの方々から多少お離れになつてお映しなさるやうにお願ひ申したのでございます。ところが今のやうな場合でございますと、皆樣がごたごたお集まりになるもので、キャメラ・ウァークが殊の外困難なのでございます。

ジョワニ　いけすかない野郎だな。親方がピアンチに似てゐる、ピアンチが親方のやうな風をしてゐる——、、、、、、、、、、、。手前らの知つたこつちあない、下らぬことを云ふとファッショ、、、へ引渡すぞ！

監督（蒼くなつて縮み上がり）そ、そ、それは、それだけはどうぞご勘辨！　生きながらヴェスヴィアスの噴火口へ飛び込むも同然でございます！

撮影技師一　だから、貴下は口が多いといふんですよ。いくら監督だつて、まるでメガフォンのやうな口をしてゐるのだ

ムツソリーニ　ああ、かうごたごたしてはやり切れん！　皆退け！　寫眞屋、新しくやり直せ！　それから、ザンボニ、その三人は、お前の判斷に委せるとしよう——憎むべき奴等だ！

（一同それぞれの場所へ引き返へす。——活動寫眞技師と監督は右へ、ムツソリーニと幕僚達は正面奥へ）

ザンボニ（憲兵伍長へ向ひ、三人の捕虜を引渡しながら）ではしかと、この火喰鳥を渡したぞ！　醜いものがキャメラへ這入るといけないから、そこの森の中で、、、、、、、、！　、、、、、、、、、、、俺は、南京虫が三匹潰されたものと思つて、安心するよ。（憲兵伍長、警官を殘し、手下の憲兵三人を引き連れて、勞働者三人に繩を打つたまま引つ張り行く。左へ退場。ザンボニ、見返りながらせせら笑つて警官達と退場）

間。

（ムツソリーニ正面の凱旋門より氣取つた態度で歩み出て、左手を高く差しのべ）

ムツソリーニ　アララ！　ファッショ萬歲！　イタリー王國萬歲！（右端遠方へ向つて）おーい、始め！（牡鷄の如く歩み出す）

（幕僚達四列縱隊になつて、勇ましくあとから歩み出づ。無數の[illegible]

嘗。續いて出征軍人團、ファッショ青年團など團旗銃劍を閃めかして、武裝狀態にて進み出づ。ムッソリーニ幕僚達と共に、舞臺中央に後向きになつて片手を高く擧げながら閲兵する。百雷のやうな萬歲の聲)

ザンボニ　(左端へ歩み寄り、耳へ手を當てて何かに傾聽してゐる) はて、變だな——もうそろそろ、つてもいい頃だがな。(警官の一人に向ひ) おい、お前一寸そこの森へ行つて、あの火喰鳥共を、、、、、、、、、、、、、、! もし愚圖々々してゐたなら、お前が、、、、、、、苦るしくないぞ。

警官の一人　はい、かしこまりました。(去る)

(分列式尙續く。農夫六、一臺の貧弱な馬車を、よぼよぼな驢馬に曳かせながら右端より登場。驢馬群集の物音に愕いて、しきりに耳を振りながら後方へ退り、後足にて馬車の車體を蹴る)

農夫六　何だつてお前そんなに氣が弱くなつたんだ。——ありあ、やつぱり俺達と同じやうな人間だよ。文句を云はずに進め、進め。

ジョワニ　これ、どん百姓、貴樣ここは何處だと心得てゐる?

農夫六　こゝかえ? 玆はおい等の麥畑の近くの原つぱだよ。

ジョワニ　貴樣ムッソリーニ統率閣下のそこに居らるゝのを氣がつかんか? ファッシストの親玉樣だぞ!

農夫六　あれが、ムッソリーニどんかの? わしは始めて拜むだが、えらい金持らしい面付きしてなさるだな。

ジョワニ　下らん事をぬかさんで、行列の濟むまで其處に待つて居れ!

警官　(慌てゝ左より登場ザンボニへ向ひ) 閣下、逃亡いたしました。憲兵隊と共謀の上このどさくさに紛れて逃げたのでございます!

(一同愕然とする)

ピアンチ　そりあ大變だ! 追跡しろ! 自動車は、電話は、飛行機は、電報は……?

ザンボニ　合憎と皆手許にない。今日のは徒歩調練だからな! (ピアンチ農夫の馬車を見付けて乘る。烈しく驢馬を亂打すれば、驢馬反對の方へ退き行く)

農夫六　あれ、あの男もムッソリーニどんかの? よくまあ似てゐるもんぢや!

ザンボニ　えゝ面倒だ、俺が跣足で行つて見る。

ムッソリーニ　ピアンチ、それは全く反對の方へ行くんぢやないか!

ピアンチ　(腹立ち紛れに) ええツ、先生、すべての道はローマに通じますわい!

——幕——



おさだの仇討（二幕四場）

岡本綺堂

登場人物

同心　貝塚藤五郎
和泉屋　伊兵衛
和泉屋の忰伊之助
京屋の番頭　文吉
石原の寅藏
寅藏の女房　おさだ
花賣　與右衛門
和泉屋の抱へ女　お駒
和泉屋の若い者　庄八
お駒の弟　德松
手先　長次郎
ほかに寺男。湯灌場買ひ。町役人。番太郎の男。自身番の男。和泉屋の若い者。和

飾屋の娘おへん。手先。乞食。會式まゐりの男、女。町の男、女、子供など。

第一幕

（一）

江戸の末期。十月十二日の曉。

品川宿の往來。正面は旅籠屋――その時代の遊女屋――にて、出入り口には和泉屋と染めたる柿色の暖簾を垂れ、左右は千本格子、格子の外には用水桶を積んであり。ほかに床几一脚あり。家は二階作りにて、二階の欄干は往來に向ひ、内には障子が閉めてあり。遠く浪の音、題目太鼓の音きこゆ。

（店の前には和泉屋の若い者二人、ひとりは水を打ち、ひとりは箒を持つてゐる。）

若者甲。けふのお會式はどうか降らしたくねえものだな。

若者乙。夜の明けねえうちから太鼓の音が威勢よくきこえるやうだ。こゝらぢやあお會式は一年中の書き入れだから、降られちやあ形無しだ。

若者甲。まつたく降られちやあ形無しだ。（空をみる。）好い鹽梅に天氣は持直しさうだよ。

（池上の會式詣の男四五人、前に法華の萬燈をかけ、團扇太鼓を持ちて、向うより走り出づ。）

男一。お捕物だ、お捕物だ。

男二。そば杖を食はねえうちに通りぬけてしまへ。

（一同はあとを見かへりて、わや〳〵云ひながら上の方へ急ぎ去る。）

若者甲。（向うをみる。）なるほどお捕物がこつちへ追ひ込んで來るらしいぞ。

若者乙。かゝり合にならねえやうに引込んでゐようぜ。

若者甲。さうだ、さうだ。

（若い者二人は暖簾の内に入る。向ふより石原の寅藏、三十二三歲、やじり切りのお尋ね者、旅すがたにて逃げて來るを、手先二人が追つて出づ。）

寅藏。人ちがひでございます。人違ひでございます。

手先甲。えゝ、そんな事はあとで云へ。

二人。御用だ、御用だ。

（手先は寅藏を抑へようとする。向うより八町堀同心、貝塚藤五郎、三十五六歲、十手を持ちて追つて出づ。）

藤五郎。逃すな。逃すな。（寅藏に。）神妙にしろ。

（藤五郎は聲をかけながら見張つてゐる。寅藏は隙をみて逃げようとするを、手先は追ひまはす。和泉屋の若い者は暖簾のあひだより首を出して窺ふ。二階の障子をあけて、抱へ女郎お駒、ほか三四人の女が欄干に縋りながら見おろしてゐる。そのうちに、寅藏は懐中より匕首をぬき出して手先乙の胸を突けば、乙は倒れる。手先甲もつゞいて小鬢を斬られる。）

藤五郎。えゝ。手向ひするか。

（藤五郎は十手を把り直して立向へば、寅藏は必死になつて斬つてかゝる。このとき二階に見物してゐたるお駒は自分の穿いてゐる草履の片足をぬいで、上より寅藏の顔に打ちつける。それが恰も寅藏の眼に中りて、思はず立ち竦むところへ藤五郎は踏み込んでその眉間を打てば寅藏は倒れる。）

藤五郎。さあ、じたばたするな。馬鹿野郎め。

（藤五郎は寅藏をおさへ付ければ、手先甲も手傳ひて繩をかける。）

藤五郎。（甲に。）どうだ。ひどく遣られやしねえか。

手先甲。（ふところ紙で小鬢を押へながら。）なに、大したことでもありません。（とよみがへる。）こいつが胸を遣られたやうです。

藤五郎。早く手當をしてやれ。

手先甲。（店の内に聲をかける。）おい、誰かみねえか

（若い者甲乙出づ。）

手先甲。この怪我人を連れ込んでくれ。

（奥より若い者丙出で、甲乙と共に手先乙を介抱しながら奥へ連れ込む。二階の女等も障子をしめて内に入る。）

藤五郎。（店さきの床几に腰をかける。）どすなんぞ振り廻しやあがつて飛んでもねえ奴だ。貴樣もまんざらの素人でもねえくせに、野暮な眞似をするな。一體どこの何者だ。

（寅藏は俯向いて默つてゐる。）

手先甲。さあ、素直に申上げてしまへ。

（寅藏はやはり默つてゐる。）

藤五郎。（笑ふ。）はゝ、こりやあうつかり云へねえかも知れねえ。それぢやあおれの方から教へてやる。貴樣は石原の寅藏だな。

（寅藏はぎつくりする。）

藤五郎。けふは池上のお會式だから、お詣りながらぶら〳〵出て來ると、高輪の茶店に休んで草履を草鞋に穿きかへてゐる奴が、どうもお尋ね者の寅藏らしいと思つたから、聲をかければすぐに逃げる。追つて來れば刃物をふりまはす。それで人違ひもねえものだ。さあ、痛い目をしねえうちに早く云つてしまへ。

寅藏。（覺悟して、）恐れ入りました。
藤五郎。む丶。たしかに家尻切りの寅藏だな。草鞋を穿いてどこへ行を伸さうとしたのだ。
寅藏。江戸は御詮議がきびしいので、當分は草鞋をはいて、東海道から大阪の方を廻つて來る積りでございました。
藤五郎。それを品川の出口で擧げられちやあ些と氣の毒だつたな。貴樣は今までどこに巣を食つてゐた。
寅藏。友だちの家なぞをごろ付いて居りまして、別にきまつた宿といふのもございません。
藤五郎。む丶。それはまあ追つての詮議として……。（左右をみかへる。）内の奴等は誰もゐねえか。
手先甲。（奥に向つて呼ぶ。）おい、おい。みんな隱れてゐねえで出て來い。

（暖簾の内より若い者甲乙出づ。）

藤五郎。これ。（落ちてゐる草履を指さす。）あの草履の主はなんていふ女だ。
若者甲。はい、はい。（草履を拾つてながめる。）間ちがひの無いやうに、よく調べてまゐりませう。しばらくお待ち下さいまし。

（若い者甲は草履を持ちて奥に入る。）

手先甲。なるほど二階からあの草履を擲り付けた奴がありましたね。
藤五郎。いづれこ丶の家の女だらうが、氣のきいた奴だ。
寅藏。旦那方の前でこんなことを云つちやあ濟みませんが、あんな加勢が出て來なけりやあ何とか斬り拔けることも出來たんですが……。（殘念さうに二階をみあげる。）なにしろ二階からだしぬけに眼つぶしを食つたので、流石のわつしもまご付いてしまひました。
藤五郎。それがいはゆる運の盡きだ。未練らしく人を恨むな。
寅藏。まつたく運の盡きで誰を恨むこともございません。お捕物の加勢をした女に、たんと御褒美を遣つてお與んなさいまし。
手先甲。（若い者をみかへる。）なにをしてゐるのだ。まだ判らねえのか。
若者乙。はい、はい。

（若い者乙は奥へ行かうとする時、暖簾の内より若い者甲はお駒を連れて出づ。）

若者甲。どうもお待たせ申しました。
藤五郎。む丶。その女か。前へ出ろ。
お駒。はい。（躊躇してゐる。）
手先甲。旦那があ丶仰しやるのだ。遠慮なしに出ろ、出ろ。

（お駒は進み出づ。）

藤五郎。おまへの名は……。

お駒。駒と申します。

藤五郎。むゝ、お駒か。年は幾つだ。

お駒。十八でございます。

藤五郎。なんと思つて、二階から草履を投げたて

お駒。(口籠りながら。)なんと云ふこともございませんが……。朋輩衆と一緒に二階からお捕物をみて居りますうちに……。(寅蔵をみかへる。)その人が刃物をぬいて、お捕方をみんな斬つたやうでございましたから、思はず知らず草履を把りまして……。飛んだ出過ぎたことを致しまして、なんとも恐れ入りましてございます。

藤五郎。いや、恐れ入ることはねえ。氣の利いた女だと褒めてゐたのだ。捕方に加勢して首尾よく罪人を取押へたものにはお褒めがある。その働き方に因ては御褒美を下さることにもなつてゐる。ましてお前は男でない、勤め奉公の女の身で、御用の加勢をしたといふのは奇特のことだ。

若者乙。では、お駒さんにお叱りはございませんか。

藤五郎。叱るどころか、この事を上へ申立てたら、奉行所へお呼び出しの上で御褒美を下さるかも知れねえ。なにしろ奇特の女だ。よく稼いでやれと主人にも云ひ聞かせろ。

若者。はい、はい。(二人は頭を下げる。)

寅蔵。(お駒に。)おい、姐さん。お駒さん。おれは決しておめえを恨んぢやあゐねえ。おめえは全く感心な女だ。お上に對して忠義者だ。たんと御褒美を遣つて下さいと、今も旦那にお願ひ申して置いたぜ。(お駒を睨む。)

藤五郎。なぜ怪な眼をして睨むのだ。それがやつぱり未練といふものだぞ。貴様も江戸ッ子ぢやあねえか。さあ、男らしく立て、立て。

寅蔵。わつしも石原の寅蔵でございます。決して未練は申しません。

手先甲。未練がなければ早く行け。

寅蔵。えゝ、まゐります、まゐります。(起ちあがる。)

藤五郎。(若い者に。)朝つぱらから店さきの邪魔をしたな。如才もあるめえが、浄めてくれ。

手先甲。すぐに又出直して來るから、怪我人をもう少し頼むよ。

(藤五郎は先に立ち、手先甲は寅蔵の縄を取つて向うへ引立てゝゆく。暖簾の内より和泉屋の亭主伊兵衛出づ。あとより若い者丙は盆に鹽をのせて出づ。)

伊兵衛。まだ御挨拶に出ないうちに、旦那方はもうお引揚げになつたのか。

若者甲。たつた今お引揚げになりました。

伊兵衛。[illegible]しい。

若者乙。はい、はい。([illegible]方へ[illegible])

お駒。(すゝみ寄る。)[illegible]

伊兵衛。なんだ。

お駒。わたしに悪いことをしたのがありませんかねえ

伊兵衛。なに、悪いことがあるものか。お上に[illegible]し[illegible]に[illegible]を歎めたのだ。あんな奴等はお[illegible]りにさせるのがお天下の[illegible]だ

お駒。わたしが草鞋をぶつけなければ、あの人は[illegible]に[illegible]かも知れませんねえ。

伊兵衛。それだからお[illegible]の手[illegible]だといふのだ。おまへのお[illegible]で、おれも世間に鼻が[illegible]い。又それがお[illegible]になつて、おまへも[illegible]になるだらう。まあ、なんにしても[illegible]いことだ。

若者甲。まつたくお[illegible]さんは大[illegible]でございました

伊兵衛。しかし、[illegible]きの[illegible]

若者丙。はい、はい。

(若い者は[illegible]に[illegible]を[illegible]、[illegible]の一[illegible]を[illegible]に[illegible]て、男女[illegible]き立てたから、[illegible]へ[illegible]る。)

[illegible]

(二)

[illegible]

は差荷ひの棒を持つ。）
與右衛。やれ、やれ、これで安心した。
おさだ。（男どもに。）どうも色々ありがたうございました。（紙につゝみし銀を出す。）ほんの少しですけれど、これでまあ一杯飲んでください。
男一。これは有難うございます。（男二に。）おめえもお禮をいへよ。
男二。姐さん、どうも有難うございました。
與右衛。皆さんも御苦勞でした。（聲をひくめる。）云ふまでもないが、この事はどうぞ内分にな。
男一。そりや如才なく呑み込んでゐますよ。
（男二人は挨拶して下のかたへ去る。）
市助。お弔ひはもう濟みましたかえ。
與右衛。おゝ、市助さん。さつきから來てゐなすつたのか。
市助。なんだか差荷ひの投げ込み……。（云ひかけておさだに遠慮する。）いや、日が暮れかゝつてお弔ひがあるらしいのを遠目に見たから、何か商賣はないかと思つて、すぐにあとを追つかけて來ましたのさ。
おさだ。おまへさんは……。
與右衛。これは湯灌場買ひの市助さんと云つて、わたしとは久しいおなじみだ。（市助に。）あの早桶には新しい浴衣がかけてあるから、早く行つて重さんに相談するがいゝよ。
市助。ところが、あの穴ほりめ。欲張つてばかりゐるので、なか〳〵相談がむづかしい。まあ、なにしろ行つてみませう。
（市助は門内に入る。）
おさだ。あの人も拔け目がないね。
與右衛。人間は好い人だが、商賣にかけちやあ拔け目がない。（云ひかけて。）時におまへさんは寒くないかえ。
おさだ。今までは暑いか寒いか知らなかつたが、落付いてみると急に薄ら寒くなつて來たやうですよ。もう三月で、土手の櫻もそろ〳〵吹き出すといふのに、今年はどうも陽氣が悪いやうですね。
與右衛。取分け今日は陰つてゐるので、日が暮れかゝると猶さら薄ら寒い。ちつと圍爐裏の火でも焚くとしませうか。いや、それよりも燈火をつけなければならない。
（與右衛門は障子をあけて奥に入る。おさだも縁にあがり、佛壇に線香をそなへて拜んでゐる。やがて奥より與右衛門は煤けたる行燈をとぼして出で、おさだが一心に拜んでゐるのを見て、ほろりとしながら無言で爐の前にゆき、粗朶を折り焚べてゐる。蛙の聲きこゆ。おさだは拜み終りて、爐のそば

に來る。)

おさだ。あゝ、もう日が暮れてしまつたねえ。をぢさん。(招寄る。)

與右衛。なんだね。

おさだ。今夜はさびしうござんすねえ。

與右衛。どうでこゝらの寺門前だから、夜はいつも寂しいにきまつてゐるが、わたしも今夜は一倍さびしいやうだ。併しおさださん。おまへさんのおかげで寅藏めのお仕置骸を引き取つて來て、このお寺の隅に埋めて貰ふことが出來たので、わたしはどんなに嬉しいか知れませんよ。

おさだ。去年の十月品川でお召捕りになつてから、どうで寅さんの命はないものと、疾うから諦めてゐたものゝ、先月いよ〱お仕置がきまつて、引きまはしの上獄門と聞いたときには、あたしも今更のやうに戀しくなりましたよ。(眼をふく)

與右衛。(聲をうるませる)あんな厄雜者はさうなるのが當り前だと、あきらめて見てもやつぱり涙の出るのが叔父甥の人情だ。ましてお前さんの身になつたら悲しいのも無理はない。それにしてもお前さんがしつかりしてゐるので、仕置場の番人に渡りをつけて、小塚ツ原からこつそりと死骸を引き取つて來てくれたので、あいつの死骸は野良犬の餌食にもならず、たとひ投げ込み同樣でも人間並の弔ひが出來たといふものだ。

おさだ。なにが仕合せになるか判らないもので、おまへさんがこゝの花屋をしてゐるので、お寺の和尚さんにおねがひ申して、墓場のあき地へ内證で埋めて貰つたのですが、叔父さんが傍に附いてゐてお呉んなされば、お線香やお花の絶える心配も無し、寅さんもどんなに喜んでゐるか知れません。これもやつぱり叔父甥の縁が深いんでせうね。生きてゐるうちに散々御苦勞をかけて、死んだあとで御面倒をかけちやあ、あんまり義理が悪いやうですけれど……。ねえ、叔父さん。寅さんに代つてあたしが幾重にもお願ひ申しますから、お墓のまはりに草が生えないやうにどうぞ氣をつけて下さいよ。(しみじみ云ふ)

與右衛。生きてゐるうちは世間に迷惑をかけ、親身の叔父にも苦勞をかける、憎い奴だと思つてゐたが、お仕置をうけて死んでしまへば、あいつの罪は消えたも同然だ。おまへさんに頼まれないでも、わたしに取つても唯つた一人の甥だから、朝に晩に香花をそなへて、吃と後生を祈つてやります。それは心配しなさらないがいい。

おさだ。何分おねがひ申します。

(おさだは眼をふいてゐる。門内より市助が鐵砲笊に浴衣を入れて出づ。あとより穴ほりの寺男與太が鍬を持つて追つて

出づ。)

重太。やい、やい。この泥坊め、生け太てえ奴だ。

市助。なにが泥棒だ。人聞きの悪いことをいふな。

(重太は笊のなかより新しい浴衣をひき出して、市助に突きつける。)

重太。これ、見ろ、この新しい浴衣を唯つた六十四文とは何のことだ。いくら湯灌場買ひでも、賣りもの買物には相場があるものだ。唯同様に人の物をかつ攫つて行く奴は泥棒に違げえねえぞ。

市助。世間の相場で物を買ふくらゐなら、誰が湯灌場なんぞへ商賣に來るものか。貴様こそ死人の上前を取りやあがつて、泥棒よりも悪いぞ。

重太。えゝ、貴様こそ泥棒だ。それが口惜しけりやあ、もう三百出せ。

市助。べらぼうめ、だれが三百出す奴があるものか。さあ、おれの思ひ物をこつちへよこせ。(浴衣をひつたくる。)

重太。まだ賣りやあしねえぞ。

(市助は浴衣を持つて行かうとするを、重太は渡すまいと争ひ、たがひに引き合ふうちに浴衣の袖は千切れて、ふたりはそれを摑みしまゝにて倒れる。)

おさだ。仕様がないねえ。(縁を降りる。)もし、お前さん達も随分欲張つてゐるぢやあないか。もう好い加減におしなさいよ。

重太。姐さんはまだこゝにゐなすつたのか。お施主の見てゐる前でこんな喧嘩をしちやあ、ちつと極まりが悪いが、この野郎があんまり人を踏み付けにしやあがるから、つい腹も立つたのさ。

市助。今までは斯うでもなかつたが、こいつ此頃は死に欲がかゝいて來やあがつた。

重太。そりやこつちで云ふことだ。

(ふたりは又詰めよるを、おさだは隔てる。)

おさだ。まあ、いゝと云ふのに……。こんなところを見せられると、あたしはこの着物を人に渡すのが何だか忌になつて來た。

二人。え。

おさだ。と云つて、おまへさん達に損をさせちやあお氣の毒だから、これはあたしが買ひ戻しますよ。

(おさだは一朱銀を二つ出して、重太と市助に分けて遣る。)

重太。お前さんにはさつきも貰つて又貰つちやあ、あんまり氣の毒だな。

市助。わたしも一朱といふ金を、唯貰つちやあ何だか氣が濟まないやうだ。

おさだ。なんでもいゝから、それで穩かに歸れて下さい。その代りに、これはあたしが受取りますよ。（浴衣をかゝへる。）

重太。それぢやあ遠慮なしに貰つて置くかな。どうもたび〳〵有難うございました。

（重太は極まり惡さうに、門内へ早々に立去る。）

市助。（鐵を眺めながら。）それぢやあわたしも貰ひませうか。おかげさまで一日の立ち前になりました。與右衛門さん、おまへさんからもよくお禮を云つてください。

與右衛。はい、はい。なんだか空模樣がをかしくなつたやうだ。降らないうちに早く歸りなさい。

市助。皆さん、御免なさい。

（市助は下のかたへ立去る。時の鐘きこゆ。蜩の聲。おさだは袖のちぎれたる浴衣をかゝへて縁に腰をかける。與右衛門も爐の前を離れて出る。）

與右衛。あの人たちに一朱づつは多過ぎる。ふたりのあたまへ一朱で澤山だつた。

おさだ。それもみんな佛への御供養だと思へばいゝんですよ。

與右衛。小塚ッ原の番人へ渡りを付け、それから外ひや何や彼やで、隨分の金を使つたらうが、お前さんはどうしてそれを工面したのだ。

おさだ。寅さんの一件が落着するまでは、どうなることかと出來させんから、今日までは賣り喰ひ、ちつとばかり殘つてゐた頭の物や賣るものを一纏めにして拂つてしまつて、どうにか斯うにか無事にお葬ひも出來ましたのさ。

與右衛。（ため息をつく。）それぢやあもう何んにもないのか。

おさだ。お恥かしいが着たきり雀で……。（さびしく笑ふ。）かうなると、女はいくぢがありませんねえ。

與右衛。（眼をしばたゝいて。）それほどまでに寅の奴めを思つてくれたのか。

おさだ。叔父さんの前ですけれど、これが惡緣とでも云ふのでせうよ。

與右衛。押借り騙りから家尻切りと、惡事をかさねた人間に、不憫を加へるのはこの叔父ひとりかと思つてゐたら、おまへさんのやうな立派な娘さんがそれほどまでに……。あいつもよく〳〵の仕合せ者だ。

おさだ。なにが仕合せなもんですか。おたがひに因果同士が寄合つたのでせうよ。

與右衛。さうして、お前さんはこれからどうする積りだね。身の振方

の付くまでは、こんな穢い家でよければ、いつまでも泊つてゐなさいよ。

おさだ。御親切はありがたうございますが、寅さんの型が付いてしまつたら、これから又、次の仕事に取りかゝらなければなりませんから、もうすぐにお暇にしませう。（云ひながら浴衣をみる。）早桶の上へ着せて來たものは穴掘りの儲け物で、どうで湯灌場買ひの手に渡るとは知つてゐながら、眼のまへで賣り買ひをされると、あんまり心持がよくないから、一朱づつ遣つて引取つたが、こんなものを抱へてゐても仕様がない。いつそ思ひの殘らないやうに、こゝで燒いてしまひませうかねえ。

與右衛。燒いてしまふのも無駄なやうだが。お前さんがさう思ふなら、それも好からう。（爐をみかへる。）こゝで燒くかね。

おさだ。家のなかぢやあ何だから、表で燒くことにしようぢやありませんか。

（おさだは縁にあがり、與右衛門に手傳ひて、粗朶の火を店さきに持ち出して積む。蛙の聲。）

與右衛。陽氣が惡いの、寒いのと云つても、やつぱり時節は爭はれない。どこかで蛙が鳴いてゐるやうだ。

おさだ。去年向島へお花見に行つた歸りに、寅さんと一緒にこゝの家へ寄つたことがありましたが、その時にも蛙がさう〴〵しく鳴いてゐましたねえ。

與右衛。むゝ。あんまり騒々しくつて話が出來ねえと云つて、寅の奴め、むやみに怒りやあがつたつけ。あいつも我儘な奴だつたな。お前さんにもさぞ我儘を云ひましたらうね。

おさだ。あたしの方でも隨分我儘を云ひましたよ。（ほろりとして。）さあ、叔父さん。（ちぎれたる片袖を出す。）

與右衛。わたしがこれを燒くのか。あい、あい。

（與右衛門は浴衣の片袖を焚火に入れる。その燃える烟を二人はぢつと眺めてゐる。薄く雨の音、蛙の聲。）

おさだ。この浴衣は去年の夏あの人にこしらへて遣つて、どうしてか一度も手を通さなかつたんですよ。やつぱりこんな事になる知らせだつたのかも知れませんね。

與右衛。さうかも知れないな。

（おさだは抱へてゐる浴衣を火に入れる。浴衣は燃えあがる）

おさだ。なんだかお迎ひ火でも焚いてゐるやうですねえ。

與右衛。まつたくお盆でも來たやうだ。（口のうちで）なむ阿彌陀佛。

（ふたりは思はず手をあはせて、その烟を拜む）

おさだ。あゝ。どう考へてもさびしいねえ。（再び縁に腰をかける）

（與右衞門は井戸端より手桶を持ち來りて、柄杓の水を焚火にかける）

與右衞。これぢやあいよ／＼お遯ひ火だ。

おさだ。（たち上る）叔父さん。あたしはもう歸りますよ。

與右衞。もう歸るかえ。（空をみる）たうとうぼつ／＼降つて來たやうだ。番傘でも貸してあげよう。（椽にあがる）

おさだ。なに、ようござんすよ。こんな着物を着てゐるんだから、ちつとぐらゐ濡れたつて構ふもんですか。

（おさだは身仕度し、頰かむりをする心にて手拭を出す。）

與右衞。わたしはさつきから考へてゐるのだが……。お前さんはこれから次の仕事に取りかゝると云つたが、一體これから何をする積りだね。

おさだ。亭主を見送つてしまつたら、これから尼にでもなる筈でせうが、あたしのやうな者にはそんな悟りも開けませんからねえ。（笑ふ）

與右衞。さうだ、さうだ。今の若さに尼なんぞになるのは止めた方がいゝよ。

おさだ。（思案して）なんにも云ふまいと思つてゐたんですけれど……。叔父さんがそんなに心配して下さるなら……。いつそお前さんだけには……。

與右衞。云つて差支へのないことなら、どうぞ聞かせて貰ひたいな。

おさだ。かならず他言は御無用ですよ。

（おさだは摺寄つて與右衞門の耳にさゝやけば、與右衞門はびつくりする。それを突き退けるやうに、おさだは衝と起ちあがる）

おさだ。さよなら。

（云ひ捨てゝ下のかたへ足早に立去らうとするを、與右衞門はあわてゝ追ひかけて引き戻す。）

與右衞。まあ、待つてくれ、待つてくれ。

おさだ。話はもうそれぎりですよ。

與右衞。いや、その話がいけないのだ。まあ、ちよいと戻つてくれ。（無理におさだを引き戻して來る。）お前、そんな心得違ひをしてはならない。寅があゝなつたのは自業自得だ。決して人を恨んではならない。第一おまへの爲にもならない。そればかりはわたしが頼むから、どうぞ止めてくれ、やめて呉れ。

おさだ。大方そんなことだらうと思ひながら、ついおしやべりをしてしまつて、悪いことをしたねえ。叔父さん、まあなんにも聞かない積りで歸してくださいよ。

與右衞。ほかの事とは譯が違つて、一旦聞いた以上はどうして聞き流しになるものか。これ、今もいふ通り、眞があゝなつたのは自分の心柄で、人を恨むのは間違つてゐる。まして其の仕返しをしようなぞと云ふのは、世のことわざにもいふ外道の逆恨みだ。

おさだ。逆恨みでも何でもかまはない。あたしはもう鬼になつたんですよ。

（おさだは突き退けて行かうとするを、與右衞門は又ひき戻す。おさだはじれて與右衞門を突き倒し、手拭をかぶりて向うへ走り去る。與右衞門は倒れながらにあとを見送る。淋しく雨の音、蟲の聲。）

―幕―

第二幕

（一）

第一幕第二幕とおなじ年、十月の夜。

品川、和泉屋の二階、お駒の部屋。平舞臺にて、正面の上のかたに床の間。それにつゞいて袋戸棚、その下にはきめ込みの簞笥、茶簞笥などあるべし。よきところに長火鉢を据ゑ、衣桁には脱ぎ捨ての部屋着がかけてあり。屏風の外に行燈あり。屏風をたて廻して、そのなかには寢床あり。上のかたは襖にて仕切り、隣には他の部屋のあるこゝろにて、前づらの障子には灯の影が映つてゐる。下のかたはお駒の部屋の入口にて、簾骨の障子を閉め、障子の外は廊下にて、火の用心と記せる掛行燈あり。下の方に階子のあがり口あり、かすめて騒ぎ唄きこゆ。

（お駒の客文吉、芝の糸屋の番頭、四十歳くらゐ。寢まき姿にて長火鉢の前に坐り、長煙管で煙草をのんでゐる。廊下傳ひに若い者庄八は油さしを持ちて出づ。）

庄八。御免ください。（障子をあける。）お油をさしに參りました。（行燈に油をさしてゐる。）

文吉。庄どん。今夜はあんまり賑かでないやうだね。

庄八。どういふものか、今夜はさびしうございます。なにしろ賣れつ子のお駒さんに名代がないくらゐですからね。

文吉。わたしも隨分足を近く通つて來るが、お駒に廻しの無いといふのはめづらしいことだ。

庄八。かういふ晩はまつたく珍らしうございますよ。（屏風の方をみて）そこで、お駒さんは……。

文吉。よく寢てゐるやうだ。

庄八。おまへさんがあんまり飲ませたんぢやありませんか。
文吉。お駒は酒が弱いね。
庄八。おとなしい人をつかまへて、無理に醉はせちやあいけません
よ。（笑ひながら。）まあ、おやすみなさい。
文吉。いや、もうそろ〳〵歸り仕度だ。（笑ふ。）お店者は辛いよ。
庄八。お察し申します。
文吉。酒がさめたら何だか薄ら寒くなつて來た。やがてもう九つだら
うな。（起つて廊下へ出る。）
庄八。お手水でございますか。
文吉。むゝ。
（文吉は便所へゆく心にて階子を降りてゆく。庄八も廊下づ
たひに去る。時の鐘。ほかの座敷の歌澤の聲きこゆ。）
唄へよるの雨、もしや來るかと胸算、紙でかへるの呪ひも、虫が
知らせて、ともしびの、丁子も飛んだ今時分、氣まぐれさんす
か、ぬしの聲。
（この唄のあひだに、廊下づたひにおさだが忍び出づ。おさ
だはこゝの店の内藝者の風俗。お駒の部屋をうかゞひて忍び
入り、行燈をかた寄せて屏風のうちを覗き、衣桁にかけたる
お駒のしごきを取りて屏風のうちに入る。やがて文吉は階子
をあがりて部屋の入口に來る。おさだに屏風一つ間にて、文吉
と顔を見合せてはつとする。）
文吉。おゝ、おさだか。
（おさだは顔をそむけて默つてゐる。）
文吉。わたしはもう歸るから、下へ行つて駕籠を呼ぶやうに頼んで呉
れないか。
おさだ。はい、はい。
文吉。もうすぐに仕度をするから、お駒も起してくれ。
（おさだは度胸を据ゑて進みよる。）
おさだ。歸るにしても、まあ上り花の一杯も飲んでおいでなさいよ。
お駒さんは今起しますからさ。
（おさだは文吉を長火鉢の前に坐らせ、茶をいれる仕度をす
る。）
おさだ。今夜は大層急ぐんですね。
文吉。今夜はいつもより少し遲くなつたのだ。もう九つだらう。
おさだ。九つでも八つでもいゝぢやありませんか。お前さんに少し話
したいことがあるんですよ。（茶をついで出す。）ちつと温いかも知れ
ませんよ。
（文吉は茶をのむ。おさだは起つて部屋の外をうかゞひ、又來

引返して來る。

おさだ。ねえ、お前さんはあたしのやうな者をつかまへて、ふだんから何の彼のと冗談をお云ひなさるが、ありやあ本氣ですかえ。

文吉。(笑ひながら。)本氣だよ。

おさだ。からかふのぢやありませんか。

文吉。なんでお前にからかふものか。

おさだ。だつて、お前さんはそこにお駒さんといふ可愛い人があるぢやありませんか。

文吉。お駒はこんな稼業をしてゐる女のやうでもない、野暮堅いので面白くないよ。

おさだ。うまくお云ひなさるなよ。(そこにある長烟管をふりあげる。)それだからお前さんは憎らしい。

文吉。いや、本當だ。おまへも知つてゐる通り、あのお駒は去年の十月、石原の寅藏といふ家尻切りがこゝの店の前でお捕物になつたときに、二階から草履を叩きつけて、その寅藏に眼つぶしを食はせたといふので、お奉行所へお呼び出しになつて、青緡二貫文とかの御褒美を頂戴したことがある。

おさだ。(うなづく。)お奉行所から御褒美を頂いたのが大層な評判になつて、宿場の女にはめづらしいといふので、よるも晝もお客の絶え間がなく、年は若くつてもこゝの店では、二枚目より下にはさがらない賣れつ子になつてしまつたんですよ。お前さんもそれで斯うして通つて來るんでせう。

文吉。わたしもお駒の評判を聞いて、話の種にと一度遊びに來たのが病みつきで、この春頃から隨分通つて來たのだが、なんだか野暮堅いところがあつて、長く附き合つてゐるとだん／＼に面白味が薄くなる。そこへお前のやうな粹な年増が……。まつたくお前のやうな女をこんな宿場の內藝者なんぞにして置くのは、掃き溜めに鶴といふものだ。

おさだ。およしなさいよ。又からかふのは……。

文吉。おまへも疑ひ深い。からかふのでは無いといふのに……。

おさだ。乾度ですか。

文吉。あゝ、乾度だよ。

おさだ。ぢやあ、おまへさん。

(おさだは文吉の手を把つて、屏風の外へ連れて來る。)

おさだ。あたしのやうな者にどんなお見どころがあるのか知りませんが、お前さんは乾とこのお駒さんを振捨てゝ、あたしを可愛がつてくれるんですね。

文吉。かうなればお駒なんぞはどうでもいゝ。きつとお前を可愛がる

よ。併しそんなにわたしの方ばかりに念押しして、おまへの方は大丈夫かえ。

おさだ。大丈夫か大丈夫でないか。さあ、確な證據をみせますよ。

（おさだは文吉の手を引いて、屏風のなかを覗かせると、文吉はあつとおどろいて逃げかゝるを、おさだは押へる。）

おさだ。おまへさん。逃げちやあいけませんよ。

文吉。（ふるへながら。）こ、これはどうしたのだ。

おさだ。見れば判るぢやありませんか。

文吉。おまへが殺したのか。

おさだ。（落ちついて。）はい。あたしがお駒さんを殺しましたよ。

文吉。（いよ〳〵顫へる。）な、なんでそんな怖ろしいことをしたのだ。

おさだ。お前さんのせゐですよ。

文吉。え。

おさだ。お駒さんはこの店でも評判の賣れつ子、あたしはしがない內藝者の身分で、どう張合つたところで勝てる筈は無し、そんなことが御內所に知れゝば、あたしは逐ひ出されるに決まつてゐますから、いつそ一と思ひにお駒さんを殺して、おまへさんをあたしの物にしようと思ひつめたんです。（泣く。）定めて怖ろしい奴だとびつくりしたでせうが、もう斯うなつたら仕方がない。飛んだ者にみこまれたと諦めて、おまへさんもわたしの[illegible]

（文吉は顫へながら默つてゐる。）

おさだ。いやですか。（屹と睨む。）それならあたしを引摺つて行つて、和泉屋のおさだは人殺しをしましたと、代官所へでも何でも訴へてください。さあ、どこへでも連れて行つて下さいよ。

（おさだは身を摺りつける。文吉はやはり默つてゐる。）

おさだ。その代り、覺悟しておいでなさい。お前さんが何と云はうとも、あたしの口一つで屹とおまへさんを道連れにして行きますよ。

文吉。途方もない。な、なんでわたしが……。

おさだ。いゝえ、いゝえ、あたしの云ひ取り次第で、屹とおまへさんを同類にしてみせます。それを覺悟なら、さあ、お訴へなさい。どこへでも連れておいでなさい。

（おさだは文吉の手を取りて引立てようとすれば、文吉は途方に暮れる。）

文吉。まあ、待つてくれ、待つてくれ。

おさだ。それぢやああたしの味方になつて、今夜のことを隱してくれますか。

文吉。（ため息をついて。）隱し負せるだらうか。

おさだ。別にむづかしい事はない。おまへさんが手水場へ行つてゐる

留守に、だれかゞ忍んで來て絞め殺したと云へばいゝぢやありませんか。あたしが前から趣向して、二階の櫺子窓を毀して置きましたから、そこから誰かゞ忍び込んで來たと思ふに違ありませんよ。

文吉。(不安らしく。)それで濟むだらうか。

おさだ。濟むも濟まないもお前さんの口次第でさあね。あたしが出て行つたあとで、おまへさんが大きな聲で人を呼ぶんですよ。さうして、自分の留守のあひだに、お駒さんが絞め殺されてゐたと本當らしく云ふんですよ。誰だつて真逆にお前さんが殺したと思ふ者はありますまい。ましてあたしが殺したと氣のづく者はありませんよ。

文吉。さうだらうか。

おさだ。あたしは不斷から人一倍にお駒さんと仲好くしてゐたんですから、誰もさう疑ふ者はない筈です。細工は流々、まあ度胸を据ゑて御覽なさいよ。ようござんすか。

文吉。(絶對絶命で)むゝ。

おさだ。しつかり頼みますよ。そこで少し待つてください。

(おさだは部屋の簞笥のひきだしを明けて、服紗につゝみし草履を出す)

おさだ。御免なさい。これは去年の十月、お駒さんが二階から擲り付けた草履で、それがためにお奉行所から御褒美を頂戴したといふので、かうして大切に服紗につゝんで、お寶物のやうに仕舞つてあるのを、あたしも一度見せて貰つたことがあります。女のくせに、よせばいゝのに、これを泥坊の顏へ叩きつけて……。(行燈の火で草履をぢつと見る)その泥坊も定めてお駒さんを恨んでゐたでせうねえ。

文吉。(氣のないやうに)さうかも知れないな。

(おさだは草履を持ちて屏風のうちに入る。文吉は唯ぼんやりとしてゐたるが、やがて少しく驚いたやうに屏風のうちに耳をかたむけて、そつと覗かうとする時、おさだ出づ。)

文吉。おまへは屏風のなかで何をしてゐたのだ。

おさだ。なんにもしてゐやあしませんよ。

文吉。その草履でお駒をぶつてゐたやうだぜ。

おさだ。これであたしがお駒さんをぶつて……。(笑ふ)とんだ鏡山のお茶番ですね。なんであたしがそんな馬鹿な事をするもんですか。お駒さんにまだ息があるか何うだか、もう一度たしかに見とゞけて來ただけですよ。

文吉。もうどうしても生きないかね。

おさだ。おまへさんは生かしたいのかえ。それだから不人情だと云ふんですよ。(睨る。)

文吉。いや、さういふわけでも無いが……。

おさだ。さうでなければ默つておいでなさいよ。

（おさだは草履を服紗につゝみて、もとの通りに簞笥に入れる。）

おさだ。ぢやあ、あたしはもう行きますからね。後生だから巧く遣つてくださいよ。

文吉。（よんどころなく）むゝ。

おさだ。下手なことをすると、暗いところへ一緒に連れて行きますよ。

（おさだは嚇すやうに念を押して、部屋の外へ出ようとする時、廊下の方にて時まはりの拍子木の音きこゆ。）

男の聲。時ですよう。

（おさだはそれに驚いて内へ引返し、入口の障子をぴつしやりと閉める。これにて幕を下ろし、すぐに再び幕をあける。）

（二）

高輪の自身番。上のかたには杉戸の出入り口あり。下のかたは壁にて、その前に爐を切り、太いなる茶釜がかけてあり。家主の前は一段低き板の間になつてゐる。下のかたは臺所のこゝろにて、腰高の障子二枚をしめてあり。上のかたには半鐘をかけたる火の見梯子あり。

（前の場の翌朝。八丁堀同心貝塚藤五郎は黒の羽織、着流し、下のかたに町役人が羽織袴にて坐り、爐のそばには自身番の定番と下番の男が控へてゐる。板の間の上のかたには和泉屋の番頭文吉、下のかたには和泉屋の亭主伊兵衞が控へてゐる。そのそばには番太郎の男が控へてゐる。浪の音遠くきこゆ。）

藤五郎。おい、番太。店先にほこりが立つてならねえ。少し水でも撒け。

番太郎。はい、はい。

（番太郎は手桶にて水をまく。）

藤五郎。和泉屋の亭主伊兵衞は其方だな。

伊兵衞。左樣でございます。

藤五郎。あらためて云ひ聞かせるまでもないが、品川は郡代の支配で、町方の係りぢやあねえ。しかし事件が事件だから、町方も立會つて詮議をする。殊に和泉屋のお駒にはおれも縁があるから、取りあへず詮議に出て來たのだ。

伊兵衞。お役目御苦勞に存じます。

藤五郎。芝源助町の糸屋の番頭文吉は其方か。
文吉。(恐る〳〵答へる。)左様でございます。
藤五郎。年は幾つだ。
文吉。四十一歳でございます。
藤五郎。こゝでこれから吟味をする。上役人の前で些とでも嘘いつはりを申立てちやあならねえぞ。(懐中より十手を取出す。)これ、文吉。和泉屋のお駒がゆうべ何者にか絞め殺された。その晩の客はお前だな。
文吉。はい。
藤五郎。(伊兵衛に。)ゆうべの客は文吉ひとりで、ほかに名代は無かつたのだな。
伊兵衛。お駒は手前の店の賣れつ子で、毎晩大抵二三人のお客があるのでございますが、ゆうべは珍らしく、このお方おひとりでございました。
藤五郎。文吉の申立てでは、用足しに下へ降りて歸つてみると、その留守のあひだにお駒は死んでゐたといふことだが、それに相違ないな。
文吉。(一生懸命に。)それに相違ございません。
藤五郎。屹とさうか。
文吉。はい。
藤五郎。(十手を膝に突き立てゝ嚇すやうに。)屹とさうかよ。
文吉。(どもりながら。)は、はい。
藤五郎。よく考へ直してみろ。嘘をつくと承知しねえぞ。分別盛りの年をしながら、女郎買ひをするやうな奴だから、なにを仕出來すか判つたものぢやねえ。貴樣はお駒にふられたか、それとも何かのやきもち喧嘩で、腹立ちまぎれに女を絞め殺したのだらう。さあ、隱さずに申立てろ。
文吉。恐れながらそれはお見込み違ひで、わたくしは決してそんな覺えはございません。
藤五郎。亭主、どうだ。お駒はこいつが殺したとは思はねえか。
伊兵衛。(迷惑さうに。)さあ、それはどうでございませうか。わたくしにも一向わかり兼ねます。
藤五郎。長次郎はどうした。まだ何か調べてゐるのか。和泉屋へ行つて呼んで來てくれ。
町役人。はい、はい。(番太郎をみかへる。)それ、早く〳〵行つて來い。
番太郎。はい、はい。
(番太郎は下のかたへ行かうとする時、下のかたより手先次郎はおさだと庄八を引立てゝ出づ。あとより男、女、子供

（たゞ一ト八だけ開いて來る。）

長次郎。えゝ、見るものぢやねえ。行け、行け。（男女等を追ひ拂ひて。）どうも遲くなりました。（二人をみかへる。）さあ、下にゐろ。

（おさだと庄八は板の間に坐る。）

藤五郎。今おまへを呼びに遣らうと思つてゐたところだ。何か手がかりは付いたか。

長次郎。この女は和泉屋の内藝者で、おさだといふ者でございます。男は油さしの庄八といふ者で……。

藤五郎。その二人に迂亂なことでもあるのか。

長次郎。おさだはふだんからお駒と仲よくしてゐたさうですから、ちつと取調べてみたいと思ひます。庄八はお駒の殺される少し前に、その部屋へ油さしに行つたさうですから、これも調べて置かなければなりません。

藤五郎。さうか、これ、おさだ。顏をあげろ。

おさだ。はい。

藤五郎。おまへはいつ頃から和泉屋に奉公してゐる。

おさだ。この六月天王樣のお祭の時からでございます。

藤五郎。それまではどこにゐた。

おさだ。神奈川の方に居りました。

藤五郎。何歳だ。

おさだ。廿六でございます。

藤五郎。亭主はあるか。

おさだ。ひとり身でございます。

長次郎。年増ざかりで女は好し、まして商賣が商賣だから、どうで無事に暮してゐる筈はあるめえ。表向きの亭主はなくつても、何か係り合の男はあるだらうな。

おさだ。いゝえ、こんな稼業は致して居りますが、わたくしに限つてそんな浮いたことの無いのは、御主人もよく御存じでございます。

藤五郎。（笑ひながら）まあ、いゝや。おれたちの前で、わたくしには可愛い色男がございますとも云はれめえから、それはまあそれとして、おさだ。お前はお駒と仲好しだつたといふが、今度の一件について何か思ひ當ることはねえか。

おさだ。それがなんにもないのでございます。わたくしはまるで夢のやうで……。（泣く）あんなおとなしいお駒さんが人の恨みを受ける筈は無し、なにが何やらさつぱり判りません。

藤五郎。庄八。お前がお駒の部屋へ油さしに行つたときには、お駒は無事でゐたのか。

庄八。さあ、それはわかりません。わたくしは唯そこにゐる文吉さん

と一言二言お話をして出ましたばかりでございます。

藤五郎。文吉は起きてゐたのか。

庄八。火鉢のまへで煙草を呑んでゐまして、お駒さんは酔つて寝てゐるといふやうなお話でございました。

長次郎。文吉だけが起きてゐて、お駒は屏風のなかに寝てゐたといふのだな。

庄八。左様でございます。

（藤五郎と長次郎は顔をみあはせる。）

藤五郎。（文吉を頤にて指す。）よく調べてみろ。

長次郎。おい、文吉。庄八の云ふ通りか。

文吉。お駒は少し酒をのみ過ぎまして、正体もなく寝入つて居りました。わたくしはもうそろ〳〵歸り仕度をしなければなりませんので、火鉢の前で煙草をのんで居りますところへ、庄八さんが油をさしに参つたのでございます。

（藤五郎は眼で知らせれば、長次郎はうなづく。）

長次郎。この野郎。うそをつくな。お駒は酔つて寝てゐるなんて云やあがつて、貴様はもう其時にお駒を締めてしまつたのだらう。どんなに酔つてゐたか知らねえが、馴染の客が起きて歸るといふのに、相方の女が平気で寝そべつてゐる筈がねえ。なあ、庄八。さうぢやあねえか。

庄八。（返事に困つてしまふ。併し二階のれんじ窓が毀れてゐましたのを見ますと、下手人は外から忍び込んだやうにも思はれますが……

……。

長次郎。櫺子窓をこはして置いて、外から這入つたやうに見せ掛けるなどは、よくある手で珍らしくねえ。それも文吉が遣つた仕事だらう。横着者め。

文吉。（あわてゝ。）先刻も申上げました通り、それは皆さま方のお見込みちがひで、わたくしは決してそんな覚えはございません。

藤五郎。いつまで同じことを云つてゐやあがるのだ。（長次郎に。）そいつに縄をかけろ。

長次郎。さあ、神妙にしろ。

（長次郎は文吉に縄をかける。）

文吉。（いよ〳〵慌てる。）たとひ何と仰しやいましても、わたくしは全く覚えのないことで……。お縄は幾重にも御勘弁をねがひます。

長次郎。えゝ、やかましい。ぐづ〳〵云やあがると、引つぱたくぞ。

藤五郎。さあ、痛い目を見ないうちに、素直に云つてしまへ。

長次郎。さあ、野郎。引つぱたくぞ。（十手をふりあげる。）

文吉。それでも覚えのないことは申上げ様がございません。これ、お

さだ。お前、なんとか申譯をして呉れないか。

おさだ。(冷かに。)あたしは何んにも知らないんですもの、どうにも申譯をして上げやうが無いぢやありませんか。

文吉。でも、わたしは無實のぬれ衣をきて、かうしてお繩にかゝつてしまつたのだ。

おさだ。あたしもお氣の毒には思つてゐるんですけれど、お役人樣の前で自分の知らないことを何とも云ひやうがありませんからね。

文吉。(恨めしさうに。)おまへは知らないといふのか。

おさだ。(平氣で。)知りません、全くなんにも知りませんよ。

(藤五郎はおさだと文吉の樣子に眼をつけてゐる。)

文吉。わたしが縛られて牢屋へ送られて、どんな拷問を受けるやうになつても、お前はどうしても知らないといふのか。

おさだ。いくら何と云つても、知らないものは仕方がないぢやありませんか。

藤五郎。えゝ、埒が明かねえな。長次郎、かまはずに引つぱたけ。

長次郎。ほんとうに往生際の悪い奴で、餘計な手數をかけやあがる。さあ、云へ。云はねえか。

(長次郎は十手にて文吉を二つ三つ打つ。)

文吉。(叫ぶ。)申上げます、申上げます。

長次郎。早くいへ。(又打つ。)

文吉。云ひます、云ひます。申上げます。(息をついて。)お駒を殺したのはわたしではございません。そこにゐるおさだでございます。

伊兵衛。(おどろいて進み出づ。)え、おさだが……。(おさだに。)これ、おさだ。お前はほんたうにそんな恐ろしいことをしたのか。

おさだ。飛んでもない。なんであたしがそんなことをするもんですか。あの人が切端つまつて、自分の罪を人になすり付けようとするんですよ。もし、お役人樣へ申上げます。わたくしは女の身で恐ろしい人殺しなぞを致す筈がございません。まして不斷から仲よしのお駒さんを殺すなぞとは、思ひも付かないことでございます。この儀は幾重にもお察しをねがひます。

文吉。いえ、その女が殺したに相違ございません。わたくしが手水にまゐりまして、それからお駒の部屋へ戻つて來ると、おさだが屏風のなかから出てまゐりましてお駒はわたしが殺したのだと、自分の口から申しました。

おさだ。(屹となつて。)まあ、呆れた。おまへさんは途方もない云ひがゝりをする人だねえ。あたしに何の恨みがあつて、そんな濡れ衣を着せよう とするんですえ。

文吉。え〻、おれこそ飛んだ濡れ衣をきて、こんな情ない目に逢つてゐるのだ。これ、頼むから正直に白狀してくれ。

おさだ。いくら頼まれたつて、覺えもないことを白狀が出來るもんですかね。今まではよもやと思つてゐたが、そんな云ひがゝりをする以上は、やつぱりお前さんがお駒さんを殺したに相違ない。(泣聲をふるはせる。)お前さんはまあ見掛けによらない怖ろしい人だ。あんなおとなしいお駒さんをむごたらしく絞め殺して、まあ何といふ鬼のやうな人だらう。もう一度、お役人樣に申上げます。唯今までは默つて居りましたが、この文吉さんはお駒さんとは年も違ひますし、お店者のくせに酒の上は惡し、おまけにお金遣ひも惡いので、ふだんからお駒さんに嫌はれ拔いてゐたのです。それはわたくしがよく知つて居ります。ゆうべも屹とお駒さんに手ひどく振りつけられて、その口惜しまぎれに手暴いことを致したものと思ひます。お駒さんのかたきはわたしの仇も同樣でございます。どうぞお上のお力を持ちまして、わたくし共のかたきが討てますやうに、何分おねがひ申します。

(藤五郎はおさだにぢつと眼をつけて、なか〱しつかり者だといふ思入。)

文吉。いえ、その女の申すことは皆いつはりでございます。お駒はたしかにおさだが殺したに相違ございません。お役人樣の前でよくもそんな白々しいことが云はれたものだ。

おさだ。い〻え、おまへさんが殺したに相違ない。

文吉。おまへこそ白々しい。そんな女とは今まで些とも知らなかつた。

おさだ。あたしもお前さんがそんな怖ろしい人とは、今まで夢にも知らなかつた。

文吉。え〻、なんであらうともお前が殺したのだ。

おさだ。い〻え、おまへさんが殺したのだ。

藤五郎。さう〱しい。控へろ、控へろ。

長次郎。おたがひになすり付つてゐちやあ仕樣がねえ。とんだ對決だ。どつちが仁木彈正だか、おれたちが今捌いてやるから、靜にしろ、靜にしろ。

(おさだと文吉は控へる。藤五郎と長次郎は顔をみあはせて、おさだも怪しい奴だといふ思入。)

藤五郎。これ、庄八。おまへが油さしに行つたあとで、おさだがお駒の部屋へ出這入りしたのを見なかつたか。

庄八。先刻も申上げました通り、お駒さんの部屋で文吉さんとお話をして、それからだん〱にほかの部屋をまはつて居りましたので、

それからあとの事はなんにも存じません。

長次郎。おめえは文吉かおさだから何か鼻薬でも貰つてゐやあしねえか。

庄八。どう致しまして……。決してそんなことはございません。

長次郎。隠してゐると、貴様も飛んだことになるぞ。

庄八。まことに困りましたな。（伊兵衛に。）もし、旦那。何とか云つて下さいませんか。

伊兵衛。いや、わたしにも何とも云ひやうがないのだ。

（下のかたより和泉屋のせがれ伊之助、廿二三歳。お駒の弟徳松を連れて出づ。徳松は前髪にて、農家の子。）

伊之助。申上げます。

藤五郎。お前はなんだ。

伊兵衛。これはわたくし方のせがれでございます。

長次郎。（藤五郎に。）和泉屋のせがれの伊之助といふのでございますよ。

藤五郎。その倅がなんの用だ。

伊之助。お駒の宿許は目黒でございますので、取りあへず知らせて遣りますと、母はあひにく病中で、弟の徳松といふのが駈け付けてまゐりましたので、兎もかくも一緒に連れて出ましてございます。

長次郎。そこで、その弟に何か心當りでもあるといふのかえ。

伊之助。いえ、さういふわけでもございませんが、わたくしに少々心當りがございますので……。

長次郎。それはどういふことだ。

（伊之助は云はうとして躊躇し、長次郎にこつちへ來てくれといふ。長次郎進みよれば、伊之助は紙につゝみたる銀のかんざしを出して、長次郎にそつと見せ、これはおさだの物だと囁く。）

長次郎。むゝ、さうか。

（長次郎はかんざしを取つて眺めたから藤五郎の前に置く。）

藤五郎。このかんざしがどうしたのだ。

（おさだはそれを横目に見て、ぎつくりしながら黙つてゐる。）

長次郎。それがお駒の寝床のなかに落ちてゐたさうでございます。

藤五郎。伊之助が見つけたのか。

長次郎。旦那の前ではつきりと云はなけりやあいけねえぜ。

伊之助。（思ひ切つて。）實はお駒が死んでゐると聞きまして、わたくしが眞先に駈け付けてみますと、死骸の倒れてゐる夜具のなかに、銀のかんざしが落ちてゐたのでございます。

伊兵衛。そんなものが落ちてゐたのか。それならなぜ早くに云はなかつたのだ。

伊之助。自分の店から縄つきを出したくないと、一旦は隠して置きましたが、どうもそれでは濟まない事だと存じまして、改めてお屆けに出ましたのでございます。
藤五郎。では、この主は判つてゐるのだな。
伊之助。わたくしには見おぼえがございます。
藤五郎。女の物だから外の奴が落したのぢやあるめえ。内の者かっ
伊之助。はい。(躊躇してゐる。)
藤五郎。見覺えがあると云つたぢやあねえか。
伊之助。はい。
藤五郎。小じれつてえ奴だな。(十手で疊を叩く。)早く云へ。
長次郎。(引つ取つて。)それはおさだの品ださうでございます。
藤五郎。さうか。(おさだを屹と見る。)
おさだ。いゝえ、違ひます。それはわたくしの物ぢやあございません。
藤五郎。伊之助。これは確におさだの品だな。
伊之助。今から半月ほど前のことでございます。わたくしが下の廊下でそのかんざしを拾ひまして、これは誰のだと申しますと、おさだが駈けて參りまして、それはわたしのだと申して受取つて行きました。おゝ、さうだ。庄八もそのときに見てゐたな。
庄八。(かんざしを覗いて。)さうでございます。それはおさださんの品に相違ございません。
おさだ。(向き直る。)おまへさん達は寄つて集つて、あたしを罪に落さうとするんですかえ。そのかんざしはあたしの物ぢやありませんよ。
庄八。若旦那のいふ通り、そのかんざしはお前の物だよ。
おさだ。おまへさんは何んにも知らないくせに、若旦那と口を合せて餘計ないことをお云ひでないよ。そんなかんざしは世間に幾らもあらあね。
庄八。それぢやあお前のかんざしを見せて貰はう。お前のはどこにある。
おさだ。あたしは初めからそんな簪をさしてゐたことはありませんよ。若旦那がそんな物を何處からか持ち出して來て、好い加減な嘘をこしらへて、お役人達をだまさうとしても、皆さんにはちやんと眼があるから、嘘か本當かはすぐに判りますよ。
伊之助。これおさだ。わたしが好い加減な拵へ事をして、お役人達をだまさうとするとは何の事だ。現在自分のものを眼の前に見せられながら、まだづう〳〵しくシラを切つてゐるとは、呆れ返つた大膽者、なるほどこれでは人殺しも仕兼ねまい。ふだんは正直さうな顏

をしてゐながら……。もし、お父さん。この女ばかりは案外でした。

伊兵衛。おれも實におどろいた。これ、おさだ。もう斯うなつたら仕方がないから、身に覺えのあることならば、素直に白狀してお慈悲を願つたらどうだ。

おさだ。旦那までがそんな事を……。どの人も、どの人も、みんなあたしを惡者にして……。口惜しい、口惜しい、どうしたらよからうねえ。(泣き伏す。)

藤五郎。(笑ふ。)そんな芝居をしても始まらねえ。この頃は御見物が悧口になつてゐるぞ。(長次郎に。)それ、繩をかけろ。

長次郎。手前はなか／＼しつかり者だな。

(長次郎は立寄つて繩をかけようとすれば、おさだは慌てゝ叫ぶ。)

おさだ。まあ、待つて下さい、待つてください。まだ申上げることがございます。

長次郎。なんだ。なんだ。

おさだ。たとひ三日でも奉公すれば、自分の主人でございますから、その人の恥になるやうな事は云ふまいと思つてゐましたが、もう斯うなつては云はずにはゐられません。若旦那にはお雅さんといふ嫁さんがありながら、大勢の人の眼を忍んで、わたくしに無理なことをいふのでございます。

伊之助。(おどろく。)わたしがお前にいつそんな事を云つた。

おさだ。いつと云つて、それはもうたび／＼のことでございます。おれの云ふことを肯けば、一軒の家を持たせて圍ひ者にしてやるの、一生面倒をみて遣るのと、色々親切らしく云つてくれましたけれど、わたくしはこんな性分でございますから、いつも好い加減に受け流して居りますと、このあひだの晩なぞは無理にわたくしを土藏のなかへ連れ込んで、手籠めにしようと致すのでございます。

伊之助。(いよ／＼驚いて怒る。)こいつ實に途方もない奴だ。お役人樣、こんな氣ちがひの申すことは、決してお取上げにならぬやうに願ひます。

おさだ。お取上げにならうが、なるまいが、云ふだけのことは皆んな云ひます。なんぼ主人の威光でも、孱弱い女を手籠めにしようとは、あんまりな致し方でございますから、わたくしも一生懸命になつて大きい聲をあげますと、その庄どんが駈けてまゐりました。

庄八。嘘をつけ。おれがそんなことを知るものか。

おさだ。いゝえ、おまへさんは確に知つてゐる筈です。それでも人が來たもんですから、若旦那も流石に極まりが惡いとみえて、そのま

ゝこそ〳〵と行つてしまひました。わたくしも其時にいつそ暇を取つてしまへば好かつたのですが、こんな商売をして方々を渡りあるくのも忌だと思ひまして、まあ辛抱してゐたのでございます。すると、今度のお駒さんの一件が降つて湧いたので、若旦那はふだんの意趣晴らしに、ありもしない事をこしらへて、わたくしを科人に落さうと巧んだものに相違ございません。もし、若旦那。(泣く。)なんぼあたしがお前さんの云ふことを肯かないからと云つて、人ごろしの罪を塗り付けるとはあんまりぢやありませんか。こんな事であたしが萬一お仕置にでもなつたら、屹とおまへさんを執り殺すから、さう思つておいでなさいよ。

伊之助。馬鹿をいへ。貴様は空涙をこぼして、口から出任せによくよくもそんな事が云へたものだ。お役人の前だと思つて、さつきから胸をさすつて我慢してゐたが、もう料簡がならないぞ。うぬ、どうするか。見てゐろ。

(伊之助は羽織をぬいで、おさだに掴みかゝらうとすると、伊兵衛と庄八は支へる。)

伊兵衛。これ、これ、ほかの場所とは違ふぞ。こゝで無暗なことをしたら、理を以て非に落ちるやうなことになるではないか。

伊之助。でも、あんまり憎い奴で……。

庄八。お腹も立ちませうが、まあ、まあ、御料簡なさいまし。あんな病犬には構はないが宜しうございます。

おさだ。なにが病犬だよ。お役人様、御覧ください。自分にうしろ暗いことがあるので、とても口ではかなはないと思つて、あの通り手出しをいたします。それが論より證據ぢやありませんか。

伊之助。えゝ、なにを云やあがるのだ。

(伊之助は急いで又立ちかゝらうとするを、庄八は抱きとめる。)

おさだ。こしらへ事をして人を訴へたものは、重いお咎めを受けると聞いて居ります。(長次郎に。)どうぞあの人にお縄をおかけ下さい。

長次郎。よし、よし。縄をかけてやるから覚悟しろ。

(長次郎はおさだの腕を捉へて、うしろへ捻ぢ廻さうとする。)

おさだ。(ふり拂つて。)あれ、あたしぢやありませんよ。あの人ですよ。

長次郎。まあ、だれでもいゝからおとなしくしろ。

おさだ。いけません、いけません。あたしはお縄をうける覚えはないんですよ。

(おさだは突きのけて逃げかゝるを、長次郎は追ひかけて無

理に繩をかける。）

長次郎。どうもしぶとい女だな。

藤五郎。そんな奴は行儀の惡いことをして困らせるかも知れねえ。前をはだけねえやうに縛つてしまへ。

長次郎。（番太郎に。）繩はねえか。

番太郎。はい、はい。

（番太郎は臺所より繩を持ち來れば、長次郎はおさだの前の開かぬやうに、着物の上から兩膝をくゝる）。

おさだ。おまへさん、一體あたしをどうするんですよ。

藤五郎。どうするものか。これから貴樣を吟味するのだ。（長次郎に。）もう判つたから、そつちの繩を解いてやれ。

（長次郎は文吉の繩を解く。）

文吉。はい、はい。ありがたうございます。これ、おさだ。女の猿智惠でどう云ひぬけようとしても、お役人さまの眼は曇らぬ鏡だ。恐れ入つて何も彼も白狀してしまへ。

おさだ。幾度云つても同じことで、覺えのないことが白狀出來るもんですか。（泣く。）あたしは何の因果でこんな目に逢ふのか。大勢の男が女ひとりを云ひ締めて、無理無體に繩をかけて……。弱い者いぢめにも程があります。

長次郎。なにが無理無體だ。どつちが無理か、今にわかることだから待つてゐろ。もし、旦那。

（長次郎は藤五郎の顏をみて、引つぱたかうかと問へば、藤五郎はうなづく）

藤五郎。女だと思つて甘くしてゐると方圖がねえ。小ッぴどく撲れ、なぐれ。

長次郎。さあ、おれたちは冗談にこんな事をしてゐるんぢやねえから、さう思へ。

（長次郎は十手にておさだの脊を打つ。おさだはあつと叫んで倒れる）。

長次郎。大方そんなことだらうと思つた。（番太郎に）こいつを引摺り起せ。

（番太郎はおさだを引き起せば、長次郎はつゞけて打つ。）

長次郎。さあ、白狀しろ。

藤五郎。和泉屋のお駒は貴樣が殺したに相違あるめえ。痛い思ひをするだけ損だぞ。早く云へ。

長次郎。云つてしまへ。

（長次郎は又打つ。おさだは転げながら叫ぶ。）

おさだ。お慈悲でございます。お慈悲でございます。

長次郎。お慈悲をねがひたければ、素直に云へ。
おさだ。なんにも存じません。知りません。
長次郎。知らねえことがあるものか。早く申上げろ。(又打つ。)
おさだ。申しません、申しません。まつたく無實の罪でございます。
長次郎。強情な奴だな。こん畜生、水を喰らはせるぞ。(番太郎に。)手桶を持つて來い。
(番太郎は臺所より手桶に柄杓を添へて持つて來る。)
藤五　。まあ、待て、待て。往來の庭先でそんな騒ぎをするのも見つともねえ。いくら強情を張つても、そいつの仕業にきまつてゐるのだ。大番屋へ引摺つて行つて、改めて調べることにしよう。伊之助、庄八。
二人。はい。
藤五郎。文吉。
文吉。はい。
藤五郎。みんな引合ひだから、八町堀まで一緒に來い。
三人。はあ。
長次郎。さあ、立て。(おさだを引起す。)
(徳松は先刻より默つて窺ひゐたるが、このとき少しく進み出づ。)
徳松。(伊之助に。)では、いよいよこいつが姉さんを殺したのでございますか。
伊之助。むゝ。かたきの顏を一度見せてやらうと思つて、お前をこゝへ連れて來たのだ。よく見ておけ。
徳松。こいつ、よくもおれの姉さんを殺しやあがつたな。
(徳松は穿いてゐる藁草履をぬいで、おさだに打つてかゝらうとするを、長次郎は十手にて支へる。)
長次郎。とんだ大坊丸だ。いくら仇でも、むやみに手出しをしちやあならねえ。
おさだ。(見かへる。)まつたく飛んだ大坊丸だね。おまへはその草履で、あたしをぶつ氣かえ。眼に一杯のなみだを溜めて、お前はそんなに口惜しいのかえ。
徳松。口惜しいのは當りまへだ。お前はなんで姉さんを殺したのだ。譯をいへ、譯を云へ。(詰めよる。)
おさだ。勿論殺すだけの譯があつて殺したのだが……。おまへとしては恨むのも無理はない。あたしも實に恨んだからねえ。(徳松の顏を見る。)今までは根かぎりに強情を張り通してみたが、さすがにお役人の眼は高い、どうしてもあたしの仕業と見きはめられてしまつたらしいから、所詮あきらめるよりほかはあるまい。いつそお前の見て

ゐる前で、さつぱりと白状しませうよ。

伊兵衛。白状する……。では、やつぱりお前の仕業に相違ないのだな。

おさだ。はい、相違ありませんよ。（長次郎に。）この通り白状いたしましたから、どうぞ膝だけをお弛めください。

（長次郎はおさだの両膝の縄を解く。）

藤五郎。（笑ふ。）たうとうお前もあきらめたか。随分世話を焼かせたな。

おさだ。恐れ入りましてございます。

藤五郎。そこで、お駒をなぜ殺した。

おさだ。昨年の十月、和泉屋の店さきで石原の寅蔵といふ者がお召捕りに相成りましたを御存じでございますか。

藤五郎。石原の寅蔵……。むゝ、知つてゐる。それはおれが召捕つたのだ。

おさだ。え、あなたが……。（今更のやうにみる。）これも何かの因縁とでもいふものでせうねえ。

藤五郎。ではおまへは其の寅蔵の身よりの者か。

おさだ。わたくしは寅蔵の女房でございます。

藤五郎。むゝ。（うなづく。）それでお駒を殺したのか。

おさだ。おわかりになりましたか。

藤五郎。判つた、わかつた。

おさだ。筋違ひかは存じませんが、わたくしと致しましては亭主のかたき討でございます。鬼の女房に鬼神とやらで、女だてらに人殺しをするとは、定めて怖ろしい奴だとの思召しもございませうが、よく〳〵本意を遂げるまでには、たみ〳〵の苦勞ではございませんでした。（涙をうかべて。）どなたもお察しくださいまし。かたきを討つて、すぐに名乗つて出れば宜しいのでございましたが、やつぱり女の未練から色々のお手数をかけまして、重々恐れ入りました。

藤五郎。よく白状した。亭主のかたき討と申しても、おまへは罪人の女房で、人を恨むは逆恨みだぞ。殊に上に對して御奉公を相勤めた和泉屋のお駒を殺害した以上は、おまへにも覺悟はあるだらうな。

おさだ。それは覺悟いたして居ります。なにとぞ御法通りのお仕置をお願ひ申します。

伊之助。今まで些つとも知らなかつたが、お前は亭主のかたき討であつたのか。

伊兵衛。さう聞くと、又なんだか可哀さうにもなるな。

（伊兵衛親子は顔をみあはせて、ため息をつく。）

徳松。（伊之助に。）では、わたしの姉さんの方が悪かつたのでございます

か。

伊之助。いや、姉さんが悪いといふわけでもなし……。わたしにも何と云つていゝか判らなくなつて來た。

おさだ。やつぱりあたしが悪いんです。（徳松に。）たとひ姉さんを殺されても、お前のかたきはお上で立派に討つて下さるから仕合せといふもの。あたしのかたきは誰も討つてくれる人がないので、悪いと知りつゝこんなことに……。（ほろりとして。）いや、そんな愚痴はよしませう。さあ、お連れ下さいまし。

藤五郎。重罪人とはいひながら、夫婦の情愛はおれにもまんざら判らねえことはねえ。せい〴〵勞つてやるからさう思へ。

おさだ。ありがたうございます。

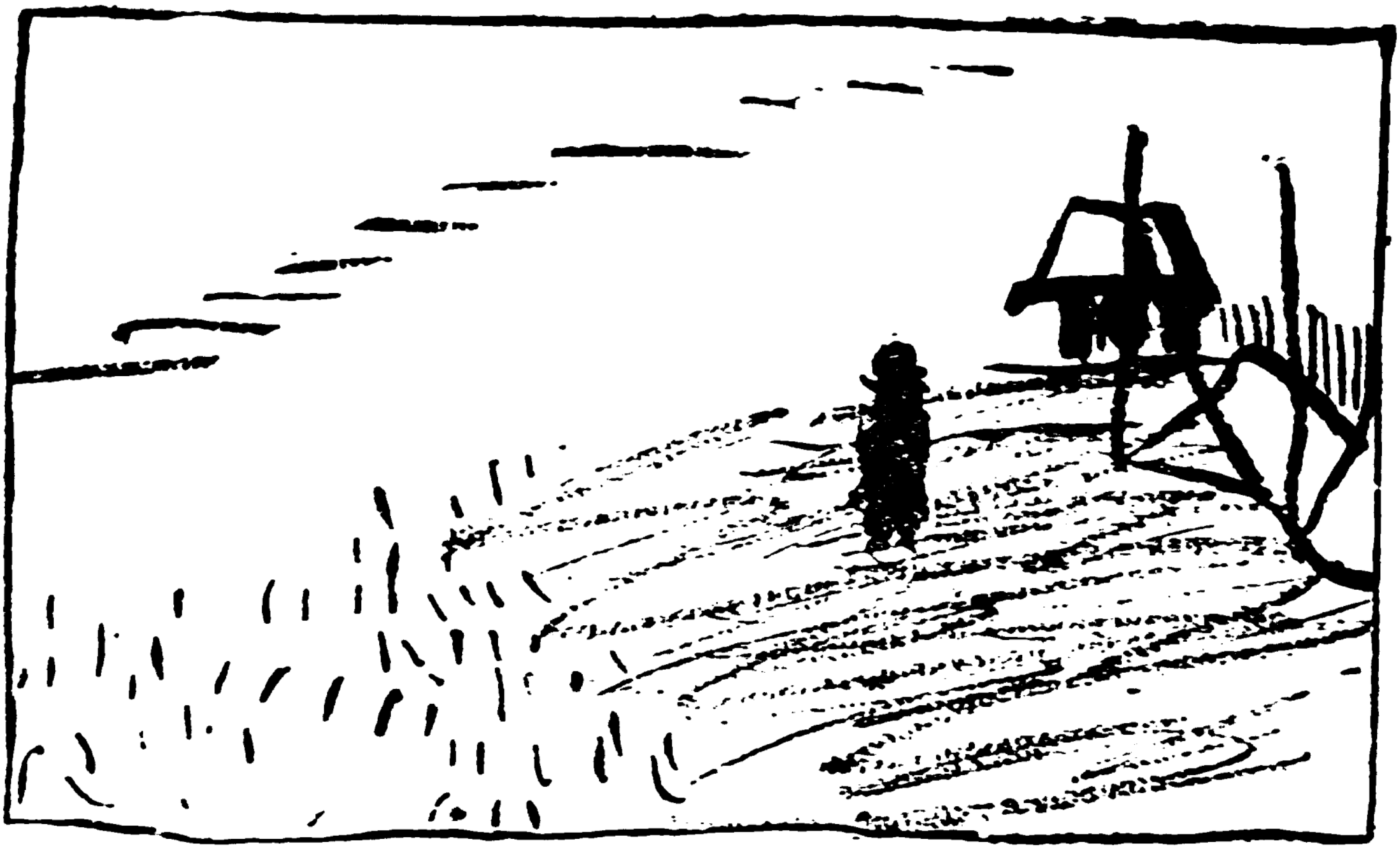
伊兵衛。いよ〳〵傳馬町へ送りとなつたら、わたしも出來るだけの世話をしてやりますよ。

おさだ。何分おねがひ申します。

藤五郎。（長次郎に。）さあ。

（長次郎は縄を取つておさだを引立てる。伊兵衛等はみな頭を下げる。時の鐘。浪の音うすくきこゆ。）

——幕——



暗夜行路

志賀直哉

丹塗りが剥げ落ちた大鳥居の傍に宿屋がある。二人は其所で暫く冷水にありついた。車夫は寺まで尚五六町あると云ひ、

「此宿は気に入らないかね？」と小声で訊いた。謙作は黙つて首を振つた。

車夫は少し荷に参つて来たらしい、約束より賃金を増してやらうと謙作は思つた。

絵葉書と巻煙草を買つて出た。

大山寺村への道から径へ降り、石のごろごろした広い河原へ出た。河原はかなりの傾斜で森と森の間を経蔵の方へ下つてゐる。

「地獄の切分け」といふので、河の溢れ出る時が恰も切りさいたやうに断崖が二つ分かれてゐる。

二人は河原を越し、急な坂路を薄暗い森の中へ登つて行つた。左に金剛院、右が蓮浄院、そのもう一つ先の寺が不二門院だつた。

庫裡の土間へ入り車夫が声をかけると、四十前後の顔の角張つた女が出て来て、謙作と荷とを見較べながら、

「暫く御滞在ですか」と云つた。

庫裡の爐傍で白い単衣を着た若い和尚が、伯楽風の男を対手に酒を飲みながら高聲に話合つてゐるのが見えた。

「暫く御厄介になりたいんです」

女は心元ない風で後を向き、

「ちよいと、どうです？」と和尚へ呼びかけた。

「ようこそ」酒で赤い顔をした和尚が出て來て、立つたきゝ坐つてつけたやうなお辞儀をした。

「泊めて頂けますか？」

「お泊めせん事も厶いませんが、此寺の先住が少し悪いといふので實は明日江州の坂本まで出掛ける事にして居るのですが、人手が足らんので……………、が、兎に角お上り下さいませ。若しお世話出来んやうでしたら、他の寺を御紹介しますで」

謙作は離れに通された。それは書院作りの座敷、次の間、折れて玄關といふ、何れも四疊半ばかりの家だつた。先々住の隠居所に建てたもので、長押から長押へ竹竿を渡し、それに桟のない障子が何枚も積み重ねてある。それは寒中、その高さに障子で座敷を劃る、一種の煖房装置だつた。

小さな座敷の書院作りは少し重苦しい感じもしたが、結局三間共に貸して呉れるとの事で謙作は満足した。

車夫は此寺に一泊し、翌朝帰つて行つた。

十四

長年人と人との関係に疲れ切つて了つた謙作には此所の生活はよかつた。彼はよく阿弥陀堂といふ三四丁登つた森の中にある堂へ行つた。特別保護建造物だが、縁など朽ち腐れ甚く荒れはてゝゐた。然しそれが却つて彼には親しい感じをさせた。縁へ登る石段に腰かけてゐると、よく前を大きな蜻蛉が十間程の所を往つたり來たりした。そして両方に強く翅を張つて地上三尺ばかりの高さを眞直ぐに飛ぶ。或る所で向きを變へると又眞直ぐに歸つて來る。翡翠の大きな眼、黒と黄の段だら染め、細くひきしまつた尾の強い線、――みんな美しい。殊にその如何にもしつかりした動作が謙作にはよく思はれた。彼は人間の小人、――例へば水谷のやうな人間の動作とこれと較べ、どれだけか此小さな蜻蛉の方が上等か知れない氣がした。二三年前京都の博物館で見た鷹と金鶏鳥の双幅に惹きつけられたのも要するに同じ氣持だつたらうとそれを憶ひ出した。

彼は石の上で二疋の蜥蜴が後足で立上つたり、跳ねたり、からまり合つたり、軽快な動作で遊び戯れてゐるのを見、自らも快活な氣分に

なつた。

彼は又此所に來て鶺鴒が匍け歩く小鳥で、決して跳んで歩かないのに氣がついた。さう云へば鳥は歩いたり、跳んだりすると思つた。

よく見てゐると色々なものが總て面白かつた。彼は阿彌陀堂の森で葉の眞中に黒い小豆粒のやうな實を一つづゝ載せてゐる小さな灌木を見た。掌に大切らしくそれを一つ載せてゐる樣子が、彼には如何にも信心深く思はれた。

人と人と人との下らぬ交渉で日々を浪費して來たやうな自身の過去を顧み、彼は更に廣い世界が展らけたやうに感じた。

彼は青空の下、高い所を悠々舞つてゐる鳶の姿を仰ぎ、人間の考へた飛行機の醜さを思つた。彼は三四年前自身の仕事に對する執着から海上を、海中を、空中を征服して行く人間の意志を讃美してゐたが、不知全で反對な氣持になつてゐた。人間が鳥のやうに飛び、魚のやうに水中を行くといふ事は果して自然の意志であらうか。かういふ無制限な人間の慾望がやがて何かの意味で人間を不幸に導くのではなからうか。人智におもひあがつてゐる人間は何時かその爲め酷い罰を蒙る事があるのではなからうかと思つた。

嘗つてさういふ人間の無制限な慾望を讃美した彼の氣持は何時かは滅亡すべき運命を持つた此地球から殉死させずに人類を救出さうといふ意識的な意志であると考へてゐた。當時の彼の眼には見るもの聞くもの總てさう云ふ無意識的な人間の意志の現はれとしか感じられなかつた。男といふ男、總てその爲め焦つてゐるとしか思へなかつた。そして第一に彼自身、その仕事に對する執着から苛立ち焦る自分の氣持をさう解するより他はなかつたのである。

然るに今、彼はそれが全く變つて居た。仕事に對する執着も、その爲め苛立つ氣持もありながら、一方遂に人類が地球と共に滅びて了ふものならば、喜んでそれも甘受出來る氣持になつてゐた。彼は佛教の事は何も知らなかつたが、涅槃とか寂滅爲樂とかいふ境地には不思議な魅力が感じられた。

彼は信行に貰つた臨濟錄など少しづゝ讀んで見たが、よく分らぬなりに、氣分はよくなつた。鳥取で求めて來た高僧傳は通俗な讀物ではあつたが、惠心僧都が空也上人を訪ねての問答を讀みながら彼は涙を流した。

「穢土を厭ひ淨土を欣ぶの心切なれば。などか往生を遂ざらん」

簡單な言葉だが、彼は惠心僧都と共に手を合はせたいやうな氣持がした。

彼は天氣がよければ大概二三時間は阿彌陀堂の森で暮らした。夕方はよく河原へ出て、夏柑位の石を大きい石に力一杯投げつける遊び

をした。かあんと氣持よく當つて、それが更に他の礼から礼と幾度にも
彈んで行く。それがうまく行つた時は彼はわけもない滿足を覺えなが
ら歸つて來るが、どうしてもうまく行かない時は意地になつて根氣よ
く投げた。
彼は大山の生活には大體滿足してゐたが、たゞ寺の食事には閉口し
た。彼は出掛けに食料品を送る事を斷つた位で、粗食は覺悟してゐた
が、其所まで豫期出來なかつたのは米の質が極端に惡い事だつた。彼
はそれまで米の質など餘り氣にする方ではなかつたが、食ふに堪へな
い米で我慢してゐると不知減食する結果になり身體が弱つて來るやう
思はれた。
寺の上さんは好人物で彼の世話をよくした。出獨活の奈良漬を作る
事が得意で、それだけはうまかつた。
鳥取へ嫁入つた寺の娘が赤兒を連れて來てゐた。十七八の美しい娘
だつた。座敷へは餘り入つて來なかつたが、彼のゐる窓の下へ來てよ
く話した。
「やゝ兒のやうな者にやゝ兒が出來てどうもあたりません」娘はこんな
事を云つて笑つた。人から云はれたのをその儘眞似して云つてゐると
しか思はれなかつた。母親一人で忙しく働いてゐるのに娘はいつも赤
兒を抱いてぶら／＼してゐた。謙作は此娘に對し別に何の感情をも持

たたかつたが、娘がよく窓の外へ來て立話をして
がらに既に人妻となつたといふ事で男を恐れなくなつたのだと思つ
た。そして彼は亭主の過失も亭主がまだ若し處女であつたら、或はあ
あいふ事は起らなかつたのではなからうかと考へたりした。
或る日、寺の上さんが手紙を持つて謙作の所へ相談に來た。四五十
人の隱居の申込みだつた。
「どうしませう」
然し謙作には分らなかつた
「炊事は出來るんですか」
「出來ん事はありません」
「そんなら引受けたらどうですか。——尤も私はたんにも手傳へない
が」
上さんは尚迷ふらしく少時考へてゐたが、遂に引受ける事に決心し
た。そして獨言のやうに「お由がもう少し役に立つといゝんだけど」
と云つた。
「赤ちゃんが居るからそりやあ駄目だ。それより隱居さんをお頼みなさ
い」
隱居さんといふのは龍の町の屋根屋で、今度徴兵にとられ、暫くは山
の仕事が出來ないと、大山神社の水屋の屋根の葺きかへに來てゐる若

約だつた。板葺の厚い屋根で、山の木を伐り、その材から作つてかゝるのを一人位の事では容易な業でなかつた。宿泊食事は寺の方に仕て貰つて、その勞力を奉納するのだといふ話だつた。

謙作は引受ける返事の端書を書かされた。

二三日して謙作は机に倚り、ぼんやりしてゐると、下の路から上さんが「來ました、來ました」とせかせか石段を駈登つて來た。如何にも大事件らしいその様子が可笑しかつた。珍らしくもなさゝうな事を何故こんなに騒ぐのかと思つた。然しいつもは和尚も働くらしく、上さん一人ではそれは大分重荷だつたに違ひない。上さんは仁徐になつて何度か坂の上まで見に行つたが、今、四五十人の人がぞう〳〵河原を渡つて來るのを見、そんなに興奮してゐるのであつた。

間もなく團體の連中が着くと、寺の方は急に騒がしくなつた。謙作は手傳へるものならば手傳つてやりたく思つたが、出來ないので、其儘散歩に出た。

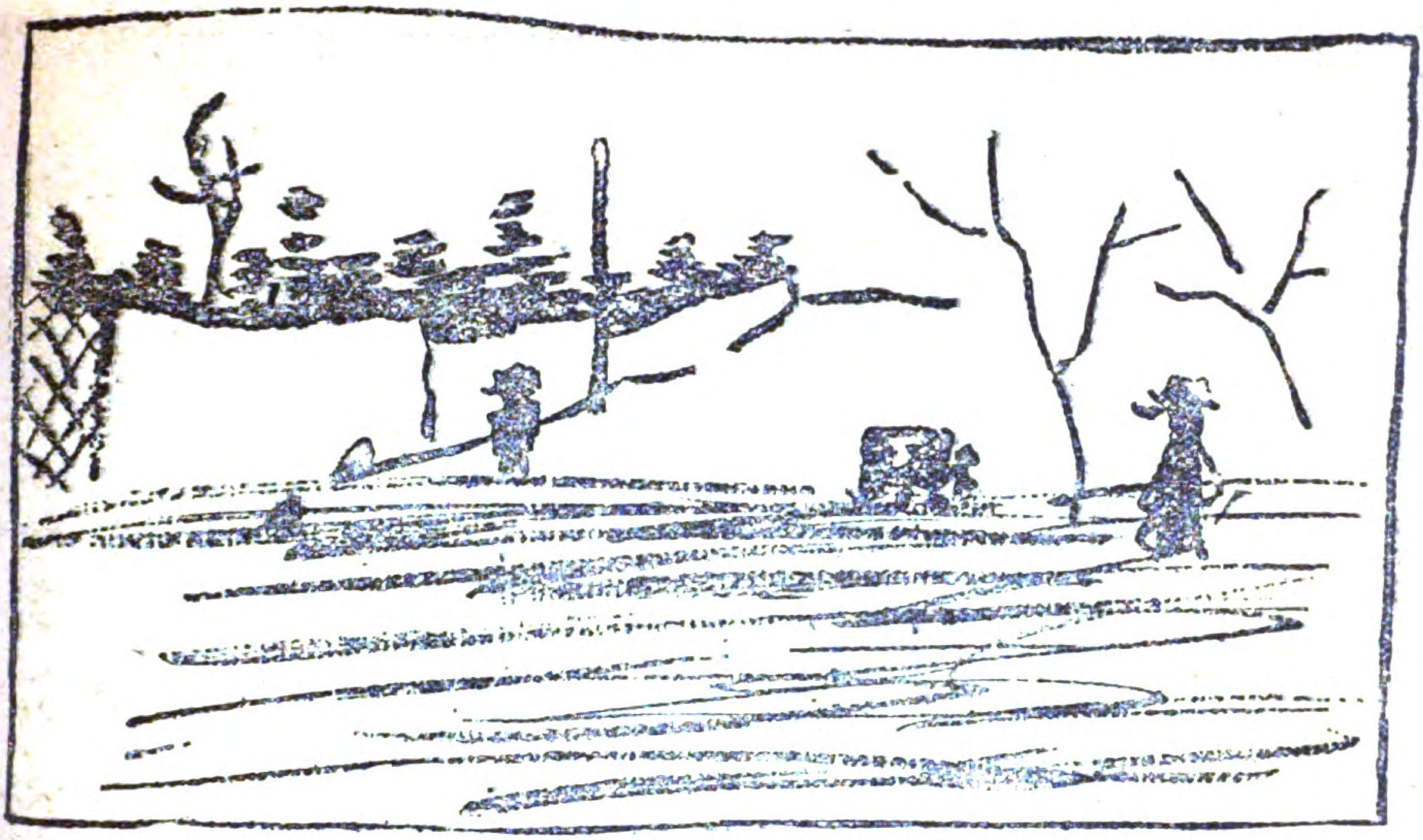
日が暮れ、彼が還つて暫くして漸く晩飯が赤児を抱いた娘の手で運ばれた。

「自分でつけるから構ひませんよ」

「どうせ何もしないんですから」そして娘は笑ひながら「今夜は旦那さんの傍に寝させて貰ひます」と云つた。

謙作は一寸返事に困つた。勿論侍と云ふのは[illegible]れの玄關の間の襖だらうとは思つたが、乾度蚊帳など吊りたくなつてゐるに違ひないので、多少まぎらはしい氣もするのであつた。

其夜、謙作はいつものやうにして寝た。娘はそれきり顔を出さなかつた。それで當り前なのだが、彼は娘が何故不意にそんな事を云ひ出したか不思議な氣がした。



相戀記（五幕八場）

藤森成吉

第一幕

人物

通行人 ABC。
喬生。若く貧乏な讀書子。
淑芳。若く魅力に富む美人。
金蓮。侍女。

時

盆祭の夕。

所

（古代）支那。

舞臺

中央、喬生の小部屋へ邇め、その壁一重上手に、第二幕隣家の靈老人の小部屋を

置くがいい。その歌客に向ふ戸口は任意に開閉、又は照明を以て區別するがいい）下手に入口。その面する往來は花道へ。(全舞臺を構成的にすれば、舞臺的自由と適合は更に増大する。)

喬生、無飾の質素な部屋で、小さな盆燈籠の下に讀書してゐる。そとはやや霧を帶びた月光。奧から通行人A B、各々灯の點いた燈籠をさげながら出る。

A。賑かな燈籠祭りだッたな。

B。久しぶりで、ほんとにいのちの洗濯をしたよ。方將軍の政治のなかで、此の御祭りが一番の善政かも知れない。

A。誰でも一人殘らず燈籠をさげる事、ッて思ひつきがいい。こんな(手で形にして)ちッちやな子まで提げてたぢやないか。そこへ又、どの街路にも軒並みでかい奴が點いてるんだから素晴しい。

B。おまけにいい月夜でさ。

A。こんな晩にやあ月なんかないほうがいい

B。いや、あつたほうが餘計浮き立つ。

A。ないほうが引き立つ。

B。月だつて燈籠の一つだ。

A。人間の燈籠の時にやあ、ほかの燈籠なんか邪魔で餘計だら

B。餘計ぢやない。

A。だ！

B。ぢやない！

二人舞臺から去る

喬生「月」の叫びで注意を惹かれる。机から立つて戸口へ出、月を仰ぐ。

喬生。(呻くやうに)いい月だ。(間、半ば吟じるやうに)明月自ら來り還自ら去る……か。(亡妻の追憶に堪えずに)あれは月の馬鹿に好きな女だッたが——。(眼に映る月光)

C、同じく(但しA Bとは型の變つた)燈籠を持つて通りかゝる。

C。(戸口の喬生へ)今晩は！

喬生。今晩は！

C。(氣がついたやうに)おお、點け忘れてゐた。(灯を吹き消して去る。)

遠く鐘の聲。月、いよいよ霧を帶びて來る。喬生ゆつくり數へる。鐘止む。

喬生。隨分更けたな。

金蓮、月の光に生れたやうに奥へ現れる。片手に、頭へ美麗た牡丹の花二つ飾つた(點つた)燈籠をさげてゐる。背後に淑芳。

――どつちも割合質素な清楚な服裝。

靜かな足どりで、默つて喬生の前を通り過ぎる。彼、視線を廻轉させる。淑芳、四五步行き過ぎてから、振り返つてにツこり笑ひかける。そのまゝ步いてゆく。喬生無意識に(見えない網に引ッ張られるやうに)あとを追ふ。金蓮、花道(又は構成的舞臺)を行き盡そうとする時、淑芳呼ぶ。

淑芳。金蓮さん。

金蓮。はい。(立ちどまる。)

淑芳、向き返る。喬生、物におどろいた悍馬のやうに凝然と立ちどまる。淑芳默つて頭をさげる。喬生、やつぱり無言の挨拶を返す。

淑芳。此の邊に御住ひでいらつしやいます？

喬生。え――

淑芳。どこら？

喬生。(落ちつかない樣子で自分の家を指して)そこです。

淑芳。(うれしさうな叫び聲を擧げて)あら！　あたし大へん疲れましたけれど、あの、一寸休ませて頂けません？

喬生。え？

淑芳。(おつかぶせるやうに)御いや？

喬生。(面喰つて)御休みになる？　僕の家へ？

淑芳。え、――でも失禮でしたら……。

喬生。(まごついて)いや、構ひません。あなたさへ御構ひなければ……

……(少し云ひ澁つて)が、とてもきたない處なんです。

淑芳。あら、ちつとも構ひませんわ。あたし、あなたの御家でさへあれば結構ですもの。(金蓮へ向つて)ちや、ちよつと休ませて頂きませう。

金蓮。はい。

淑芳、半分呆然としてゐる喬生へ進み寄つて、片手を取つて接吻する。喬生おどろく。

淑芳。(彼の手を握つたまゝ)ぢや、どうぞ……。

喬生先きへ立つて戸口を入る。金蓮つゞく。

喬生。(椅子を勸めて)どうぞ。

淑芳。(うれしさうに)かけてもよう御座います？

喬生。きたなくてもよろしければ。

淑芳。あら又あんな事。

喬生。でも、御覽のとほりです。(突然氣づいて)こんなにさせておい

て……。(起きッ放しの亂れた寢臺を、いそいで片づけやうとする。)

金蓮。(寄つて)御かたづけしませう。

喬生。(びつくりして)いや、いゝんです。いゝんです。(振り拂ふ。)

淑芳。(微笑しながら)そんなつまらない事、もし御よしあそばせ。

喬生。(催眠術でもかけられたやうにやめて、金蓮へ椅子を勸めて)ぢや、どうぞ。(突然氣づいて髮をつかんで)一つきり椅子がない!

淑芳。ぢや、(金蓮へ)これへ御掛けなさい。あたし、こゝらへ掛けさせて頂きますわ。(寢臺の一部へ腰を移す。)

喬生、面喰ひながらその横へ腰をかける。

金蓮。(淑芳へ)此の牡丹燈籠は、もう消しておきませう?

淑芳。そうね。

金蓮吹き消す。

喬生。あなたも町へいらしつたんですか?

淑芳。え。あなたは?

喬生。僕は一日家にゐました。

淑芳。まアどうして? ああ云ふ賑かな處御嫌ひ?

喬生。嫌ひツてわけぢやありませんが――。

淑芳。もつと御本のほうが御好き?

喬生。べつに、本と燈籠と較べたわけぢやありません。行く氣がしなかつたたけです。

淑芳。氣がむすぼれて?

喬生。(不思議さうな顏をして)どうしてそんな事を?

淑芳。(嫣然微笑しながら彼の手を取つて)知つてますわ。

喬生。(びつくりして)知つてらつしやる?

淑芳。え。

喬生。(身體を進めて)誰から御聞きになつたんです?

淑芳。(はづすやうに、彼の紅づいた頰へ輕く指を當てながら)ちやんとこゝに書いてありますわ。

喬生。(咎めるやうに)お孃さん!

淑芳。(わざと眞面目くさつて)はい?

喬生。(氣先きを折られて)だが、僕、ほんとにそんなに淋しさうですか?

淑芳。隨分。

喬生。が、今は僕、ちつとも淋しかありません。

淑芳。(聞かないふりで獨り言のやうに)そんなにいつまでも思はれてらしつて、なくなつた奧さんはおしあはせね。

喬生。でも、今年なくなつたばかりですから――。(始めて氣づいたやうに、釣りさげた初盆の燈籠へ眼をやつて大聲で)ア、あなたはこ

れを見てそんな事を仰つたんですね？
淑芳。（おどろいたふりで耳を抑へて）まあ大きな御聲！
喬生。御免なさい。でもそうでせう？
淑芳。（口へ手をやつて笑ひ出す）ほほほほ………。
喬生。（眺めて）あなたは見かけによらない人の惡いかたですね。
淑芳。ぢや、そうしておきますわ。――でも、あたしまだいろんな事を存じてますわ。
喬生。（好奇心に驅られて）どんな？
淑芳。（ふざけたやうに）第一、あなたが有名な秀才でゐらッしやる事。
喬生。（苦笑して）それは、進士の試驗に及第した事ですか？
淑芳。そんな事位、あなたには朝飯前でいらつしやいませう。それより、知事の政治を攻撃なさつた御文章。
喬生。（再び苦笑して）それは頭のいい惡いより、考へかたの正しいいか正しくないかの、いや、むしろ社會階級的の問題です。
淑芳。でも、あの理論の立てかたの御美事さには、ヤッつけられた知事さへ感心してゐたッて云ひますわ。
喬生。然しあの御蔭で、ひどい罰金は取られる。あぶなくフン縛られそうにはなる。おまけに、もうどこの役所でも學校でも僕を使つてくれなくなりましたよ。そのくせ、政治も取り扱ひもテンデ改まりやしない。（忌々しそうに舌打ちをして）ちェッ！　感心て、そんなもんですよ。（再び不思議に堪えなくなつたやうに）そんなに、いろんな僕の事を知つてらッしやるあなたは、どなたです？
淑芳。（にッこりして）前から存じてゐる女。
喬生。前から？――でも、僕はちッとも知つてません。
淑芳。あなたが知つてゐらッしやらなければ、あたし知つちやいけません？（不意に眞面目に）そうかも知れませんわ。
金蓮。（そのあいだ燈籠の牡丹をいぢくつてゐて、顔をあげて）お孃さま、お疲れがなほッたらまゐりませう。
淑芳。（氣づいたやうに）ア、ほんとに長いことお邪魔いたしました。（立ちあがりかける。）
喬生。（彼女の手をつかんで引きとめて）もう少し。――切角寄つて頂いたのに、御茶もあげずにゐました。………今、一杯差しあげます。
淑芳。休ませて頂いたゞけで澤山ですわ。お茶なんぞ頂いてると、あんまり晩くなりますから………。
喬生。（遮つて）晩くなり序でにもう少しゐらしッて下さい。今すぐです。（奥の、小さな帷を懸けた臺所へ走り込む。）
金蓮。では、わたし致します。（追つて入る。）

喬生。（帳の陰で）おゝ、どうか此の柴を焚いてわかして下さい。
金蓮。はい。
喬生。濟みません。（再び出て來て）さぞ御渇きでせう。――おなかも御空きでせう？（髪をつかんで）生憎何もない。
淑芳。いゝえ、ちッとも空いておりませんわ。
喬生。御免なさい。どこの店もあら戸を閉めてるだらうし。――（淑芳の傍へ來て再び腰をかけて）然し不思議ですね。
淑芳。何が？
喬生。だつて、あなたのやうなかたが此の邊にゐらしッて、今日まで僕がマルキリ知らずにゐるなんて。
淑芳。（微笑して）あたし、前お目にかかつた事もありますわ。
喬生。え！――いつ？
淑芳。去年の暮。
喬生。どこで？
淑芳。人の群の中から……。
喬生。ぢやァわかりッこない。
淑芳。その時から、一度しみじみ御話を伺ひたい、伺ひたい、と思つてましたわ。
喬生。ほんとですか？
淑芳。いゝえだつたら、あたし幾ら疲れたつて、今夜休ませてなんか戴きませんわ。
喬生。（思はず彼女の手を取つて）お嬢さん！
淑芳。はい！
喬生彼女の眼を見入る。つゞいて、、、、、、、、、、、、、。――金蓮の焚く柴の微かにはじける音。その煙、うす青く帳からなびき出る。
喬生。（しばらくしてから）何て思ひがけない晩だ。こんな事と知つたら、今まで家にゐるんぢやなかつた。……が、今夜かうしてゐなかつたら、やつぱりあなたに御目にかかる事は出來なかつたんですね。
淑芳。（彼の顏を見あげて）あたしも、やツと永い望みがかなひましたわ。
喬生。信じられないばかりだ！
淑芳。これから、いつまでも愛して下さつて？
喬生。いつまでも。
淑芳。こんな御轉婆でも？
喬生。いゝ、とても好きです。
淑芳。ほんと？

喬生。ほんと以上だ。

淑芳。うれしい。（力をこめて彼の手を握る。）

喬生。でも、まだあなたのお名前を伺つてません。どうか教へて下さい。

淑芳。名前なんか構ひませんわ。

喬生。でも――戀人の名前も知らずにゐるなんておかしい。教へて下さい。

淑芳。お前つて仰つて下さりや澤山。

喬生。それぢやあ頼りない。

淑芳。いやなかた。

喬生。云つちやいけない事でもあるんですか？

淑芳。そんな事ありません。ぢや、あたし申しますわ。

喬生うなづく。

淑芳。（俯いて指を弄びながら）淑芳。

喬生。淑芳？

淑芳。字は麗卿。

喬生。麗卿――いい名ですね。

淑芳。お氣に入つて？

喬生。とても。

淑芳。そう？（男の胸へ顔を寄せつける。）

喬生。（彼女の髪を撫ぜてやりながら）淑芳さん、で、あなたは今どこにゐらッしやるんです？

淑芳。ここ。

喬生。住んでらッしやる所です。

淑芳。又。

喬生。又？

淑芳。（半分顔をあげて）どうしてそんなにいろんな事、御聞きになりたがッて？

喬生。聞きたがるが當り前でせう。あなたの事はどんな事でも知りたいんです。外の人にはどんなにつまらない事でも、知つて知り抜きたいんです。云つて下さい。

淑芳。（彼の熱情に壓倒されたやうに）ぢや申しますわ。今ゐる所は湖の西。

喬生。ほう、湖西ですか。

淑芳。えゝ、父は此の先きの鄮州の裁判所の判事を勤めてゐたんですけれど、此の春急に轉任になつて北の方へまゐりました。でも今年の初めにあたし一度遊びに來て、すつかりここいらの景色が氣に入つたもんですから、父や母に賴んで、あの金蓮と二人で當分此の近

所に住むやうに許して頂きましたッ（チラと男の顔を見て）それと、あなたの御傍を離れたくなかつたんですの。その遊びに來た時、初めてお目にかかりましたのよ。丁度奥の前にたり後になり、どこか御爺さんの御友達のかたと、夢中になつて話していらッしゃいましたわね。その御話や議論を横の蔭で聞いて、あたし、すつかり驚きつけられましたの。

高生。（赤面しながら）ああ、それで僕を御覧になつたわけですかなつた。そのお爺さんは、（隣の室を指して）隣りにゐる道教の學者です。

淑子。あら、そうでございましたの？

高生。（突然當惑したやうに額を押へて）然し貴方は、あなたは、た身分のある御嬢さんなんですか。

淑子。（彼の肩へ手をかけて）そんな處の娘相ぢやない？

高生。（當惑して）さうぢやないが……。

[illegible]

（又は暗く。）

第二幕

第一場

人物

喬生。

復考。

金蓮。

張老人。

時

前幕から一週間ばかり後の細雨の夜。

所

前幕に同じい。が、奇麗に室が片づき、山水の圓い額などが懸り、寝台には青い（又は紅い）薄帷が掛つてゐる。

喬生、戸口を出たり入つたりして、そはそはと落ちつきのない様子でゐる。

喬生。（室へ入つて）まだ來ない！ どうしたんだらう？ もういつもの時間なのに。（戸口へ行つて暗い往來を見廻して）雨が降つてるから遅れたのか？ ——もしかしたら、今夜は來ないのぢやないか？（打ち消して）いや、そんな筈はない。あの人に限つて約束をたがへるなんて事は考へられない。此の一週間てもの、一日だつてちがへた事はない。それに、あんなに固く今朝約束して行つたんだ。（すぐ又不安になつて）然しおそい！ 實におそい！ どうかしたら、急に身體の工合でも悪くなつたんぢやないかしら？ そんなら、金蓮が何とか云つて來るだらうに。………いや、あいつも來られない位悪いんぢやないか？ ——湖西の方へ行つて見ようか？ ……だが湖西ツてばかりで、どこら邊だかまるきりわからない。それに、出かけたあとへでも訪ねて來たら行きちがひだ。（突然新たな不安に襲はれて眼を見張つて）もしかしたら、途中で悪者にでもつかまツたんぢやないか？ ああして、若い女が毎晩おそく二人で歩いて來るんぢやあ、全く危険だ。ああ、どうしたらいいだらう、もしそんな事があつたら？ （強く胸を叩いて）馬鹿！ 何を餘計な取り越し苦勞ばツかりやつてゐるんだ！ 喬生の馬鹿め！ 馬鹿め！ 落ちつけ、落ちつけ、もツと落ちつけ！ （室へ入つて來て、下腹へ力を入れて腰かける。が、又たまらなくなつて髮を掻く。）まるで地獄だ。來さへしてくれれば、こんな苦しみにみんな疾

所に住むやうに許して頂ひましした。(チラと男の顏を見て) それと、あなたの御傍を離れたくなかつたんですの。その遊びに來た時、初めてお目にかかりましたのよ。丁度與の前になり後になり、どこか御爺さんの御友達のかたと、夢中になつて話していらッしやいましたわね。その御論や議論を簾の蔭で聞いて、あたし、すつかり惹きつけられましたの。

喬生。(赤面しながら) ああ、それで僕を御覽になつたわけがわかつた。そのお爺さんは、(隣の壁を指して) 隣りにゐる道教の學者です。

淑芳。あら、さうでございましたの？

喬生。(突然當惑したやうに額を押へて) 然し弱つた。あなたは、そんな身分のある御孃さんなんですか。

淑芳。(彼の肩へ手をかけて) そんな處の娘御きらひ？

喬生。(溜息して) きらひぢやないが……。

淑芳。が？

喬生。お父さんが結婚を許しちやあ下さらないでせう。

淑芳。くれなかつたら、ひとりで飛び出して來ますわ。

喬生。(ハキッと彼女の眼を見て) それが出來ますか？

淑芳。いくらでも。

喬生。(よろこんで) 出來れば、他人からいろんな故障をされる心配がなくて、僕もどんなにいいか知れない。――(不安さうに) が、來たッて御覽のとほりの貧乏世帶ですよ。今までのあなたの生活とは何から何までちがつてます。此の寢臺からしてドッサリ南京蟲がゐて、今だッてきッと食はれてゐらッしやるんです。それを覺悟してゐらッしやる？

淑芳。(笑ひ出して) ほほほ……そん事、とッくに覺悟してますわ。あたし、今までのお孃さん生活には倦き々々しましたの。いいえ、そんな物第一、生活なんて云へませんわ。いつ迄もあんな世界にゐるんだッたら、あたし死んだほうが增しですわ。だッてうそばッかしで、眞劍な事なんて(小指を立てて) これッぱかしだッてないんですもの。あなたの御力で、あたしほんとに生き甲斐のある新しい生活へ入れるかと思ふと、うれしくて仕方ありませんわ。

喬生。(懷疑的に) でも、それはあなたの御孃さん風なロマンチシズムでは……？

淑芳。(遮つて强く) 信じて頂けません？

喬生。(感動して) いや、淑芳さん。

淑芳。信じてね……。

喬生、彼女の手を取つて引き寄せる。柴の青い煙。急速に幕

喬生。僕は、こんな時期が自分の身の上に起らうとは、今まで夢にも考へませんでしたよ。此の頃、矢鱈、思ひも寄らなかつたいろんな事が思ひついたり、感じられたりして困ります。まるで、どこからか大きな白い蛾でも飛んで來て、僕の頭へ矢鱈卵を生みつけて行くやうに。

淑芳。どんな思ひも寄らない事？

喬生。たとへば――いや、そんな事を口にするのは馬鹿々々しい。

淑芳。仰つて？

喬生。云ひません。

淑芳。どうぞ仰つて！………あたし、あなたの考へてらつしやる事を伺ふのが、何よりのたのしみなんですもの。

喬生。でも、男には口にしていい事と、よくない事とあります。

淑芳。そんなによくない事？

喬生。そう惡い事でもないでせうが……。

淑芳。ぢや話して、――ね。ね。(見あげながら彼の胸をたたく。)

喬生。(思ひ切つて)そんたら云ひませう。僕ね、子供が欲しくなつちやつた。

淑芳、おどろいたやうにうなだれる。

喬生。(彼女の手を握りしめて)あなたの生む子供なら、どんなに可愛い顏をしてゐるでせう。きつとあなたに、そして少し僕に似てゐますよ。そんなあなたを小さくしたやうな奴が出て來たら、僕はもう可愛くて々々々、きつと食べるやうに大事にするな。

淑芳默つてゐる。

喬生。(情熱的につづけて)どうしてこんな考へが頭の中へ這入り込んで來たんだか、わからないんです。早くお父さんになりたいなんて、まだ若い男の癖に、全くなんておかしな空想だらう。………ね、變でせう？(彼女の顏を覗き込む。そしてにがく淋しい顏つきにびつくりして)アツ淑芳さん！………。

淑芳いそいで顏を蔽ふ。

喬生。(彼女の肩へ手をかけて)どうしてそんな顏をするんです？

淑芳、咽び泣き始める。

喬生。(再びびツくりして)どうしたんです？僕の言葉が氣に障つたんですか？

淑芳。(首を振つて)いゝえ。

喬生。ぢやあ何故？

淑芳。…………。

喬生。何故？

淑芳。どうぞ何にも聞かないで。

喬生。(アッケに取られながら) 子供なんぞ欲しくないんですか?
淑芳。いゝえ。
喬生。おや、そんな事を云ふ僕がいや?
淑芳。(首を振つて涙聲で) いゝえ、いゝえ。……[illegible]に
うれしいか——。
喬生。(途方にくれて) ちツともわからない!
淑芳。でもあたしは子供なんか——。
喬生。出來ないツて云ふことか[illegible]
淑芳。[illegible]
喬生。[illegible]と
[illegible]
淑芳。済みません。……(彼の顔を見ながら) 子供はお好き?
喬生。好きです。
淑芳。おや、前の奥さんの時もそう御思ひになつたんでしよ?
喬生。子供を欲しいつて?
淑芳。えゝ。
喬生。まるでない。
淑芳。うそばつかり。
喬生。うそぢやない。
淑芳。だつて、隨分奥さんを愛していらしつたんでせう?
喬生。そりやあ可成り可愛がつてはゐました。でも、不思議と子供を欲しいなんて考へた事は一度もない。
淑芳。きつと邪魔だつたから——。
喬生。それ[illegible]ぢやない。
[illegible]

喬生。ア、消えちまッた。
淑芳。風が出ましてね。
喬生。どうしてあんな處が開いてゐたんだらう？　一寸待つて下さい。（火打ち石を探り取つて、打ち始める。）

× × × ×

幕あいて間もなく、壁一重隣りの張老人が奥から室へ出て、古い本を讀み始める。淑芳達が訪ねて來ると、微かに聞える聲に耳をそばだてる。

張老人。又來た。これで一週間、毎晩誰かやつて來ては、おそくまで話聲や笑ひ聲がしてゐる。細君がなくなつてから、いや、なくなる前からも、こんな事はついぞなかつた事だ。一體誰だらう？（土壁のヒビ入つた所へ蝙蝠のやうに吸ひつき、ピッタリ耳を當てる。間。）えゝ、わからん。思ひ切つて、穴をあけて覗いてやれ！（奥へ行つて、長い錐を持ち出して來る。それを壁のキズの一部へ直角に揉む。喬生達に氣づかれないやうにゆッくり、用心深く。――やがて穴を穿つて覗いて見る。）駄目だ。もつと大きくしなくちやあ……
……（更に熱心に揉みひろげる。再び覗く。）

丁度喬生の室の燈が消えてゐる

張老人。眞ッ暗だ！

やがて燈がつく。と、喬生の傍に、淑芳の着物を着た骸骨が立つ。

喬生。もう秋らしい風ですね。（窓を閉める。）

女の骸骨、燭臺を身體で蔽ひながら見あげる。

張老人。あッ！（叫んで尻餅をつく）

暗黑。

第二場

人物

張老人。
喬生。

時

前場の翌朝早く。

所

前場に同じい。

雨後の朝のほがらかな外光。が、喬生の家の戸口は閉り、彼は暗い沈黙の中にグッスリ眠つてゐる。

張老人、自分の家から出て彼の家の戸口に立つ。手をかけて開かないので、力任せに叩く。

張老人。(同時に呼ぶ) 喬生さん! 喬生さん!

喬生起きない。老人繰り返し呼び又叩く。

喬生。(やがて首をあげて) どなた?

張老人。わしぢや。早くここをあけて下さい。

喬生。(獨語) 張ぢいさんの聲だ。――おお、ねむい。……(戸口へ向つて) 何か御用ですか?

張老人。用とも。大至急の用ぢや。

喬生。大至急?――朝ッぱらから何だらう。……えゝ、面倒くさいな。(戸口へ) 今あけます。(不精々々寢衣のまゝ起きて行つて戸をあける) 御早う!

張老人。御早う。あんたにはね。……が、わしには一向早くない。わしは、昨夜ッから碌々寢てないんぢや。

喬生。やつぱり?――(氣づいて、急に笑ひ出して) それぢやあ早過ぎますよ。

張老人。早過ぎるどころか、(指で[illegible]して) 殷岡々々してゐやうもんなら、あんたは破滅ぢや。

喬生。え?

張老人。(大聲で) 破滅ぢや。

喬生。(アッケに取られて) 何の事です、そりやあ一體?

張老人。今話す。その前ここを閉めておくから、あんた、そこの窓を開けなさい。おお、その昨夜の窓ぢや。

喬生ギクリとして、默つて天井窓をあける。老人戸口を閉める。

張老人。喬生さん、まあ腰をかけなさい。

喬生。おぢいさんこそ。(椅子を勸める。)

張老人。わしも掛ける。

老人は椅子へ、喬生は寢臺へ掛ける。

張老人。わしはな、喬生さん! 今日は忠告に來たんぢや。

喬生。(俯れて) わかつてます。

張老人。わかつてる?

喬生。(跪いて) おぢいさん、いつも御懇意にしてゐるあなたに隠してゐた事を勘辨して下さい。僕にもあまり不意で、それに、散々御世話になつた女房がなくなつて長くもない事で、どうも云へなかつたんです。

張老人。何だ、そんな事か。わしはそんな小言を云ひに來たんぢや

い。いや、それも云ひたいが、もつと恐ろしい事件だよ。

喬生。恐ろしい？

張老人。とても恐ろしい問題ぢや。

喬生。あの戀人についての外、僕は今恐ろしい事は知りません！

張老人。(怒鳴る)馬鹿！ その女が恐ろしいのぢや。

喬生。え？

張老人。あれはただの女ぢやないぞ。

喬生。(落ちついて)無論有りふれた女ぢやありません。

張老人。(業を煮やして)そんな事を云つてるんぢやない。あんたとも
あらう若者が、何てたぶらかされかたぢや！

喬生。(愈々落ちついて)ぢや、どう云ふ女です？ ヴァンパイアだと
でも仰るんですか？

張老人。ヴァンパイア以上ぢや。骸骨ぢや。肉も血も吸ふ女骸骨ぢ
や。

喬生。えつ？

張老人。そうとも知らず、毎晩あんたは、、、、、、、、、、
あるんぢや。

喬生。(キッとして)いくら氣もちを悪くしたつて、あまり變な言葉は
よして下さい。そんな譬喩や皮肉は古くてまづ過ぎます。

張老人。(喬生の腕をつかんで)喬生さん！ 何の
か。正直正銘の事實ぢやぞ。

喬生。事實？

張老人。此の二つの眼が證據ぢや。

喬生。ゆふべ窓から見たつて仰るんですか？

張老人。窓ぢやアなく、壁へ穴をあけて覗いたんぢや。そう云ふわし
の不禮はあやまる。が、わしは一つ、、あやまりを云ふわけには行かん。
(壁のところへ行つて穴を示して)これぢや。

喬生。(つづいて行つて見る。)なるほど——。

張老人。ここから覗くと、あんたは燭臺へ火を點けて、傍に着物を着
た骸骨が立つてるんぢや。それからあんたが「もう秋らしい風です
ねっ」とか何とか云つて窓を閉めると、骸骨も一緒に見あげるぢやな
いか。わしはそれを見て、思はずあッと云つて尻餅をついちまつ
た。

喬生。そう云へば、あの時あなたの室で何か音がしたと思ひました。

張老人。それで疑ふ餘地はあるまい。

喬生。(疑惑に堪えないやうに)ただ、信じられない事實だ。あまりに
信じられない事實だ。(言葉を變へて)僕は決してあなたの言葉を疑
ひはしません。あなたはいつでも正直だ。あなたがさうまで仰る

のにいふだとは思へない。が、僕はあなたの眼を信じていいか知ら。

張老人。年寄りの眼は信用出來ない、ッて云ふのかな？

喬生。いや、然し幻覺では……？

張老人。馬鹿な！ 七十年間、一遍も不名譽は犯した事のない此の眼ぢや。

喬生。が、なぜ僕には骸骨に見えないだらう？

張老人。（笑つて）はははは……幽靈や妖怪と會つてゐる時は、他人の眼のほうがずッと確かぢや。戀人と會つてゐる時も大抵そうぢや。戀人と幽靈と重なれば、いよいよ他人の眼の方が確かぢや。

喬生。でも、あの人は死人にしては生き々々し過ぎてゐます。生きてゐる女にだッて、あんなに生き々々した自由な人は滅多――いや、一人もゐない。もしあの人が死人なら外の女は死人以下だ。

張老人。それが惚れた慾目と云ふ奴ぢや。いや、此のわしにも昔隨分覺えがある。惚れて了ふと、誰でも相手にばかり生きてゐるやうな氣もちになる。從つて、相手の女が矢鱈生き々々して見えるんぢや。

喬生。そればかりぢやありません。あれは確かにあの人の特色だ。

張老人。もし特色や個性なら、死んでからだッて通用せんかな？

喬生。あなたは揶揄ひの上手だ。いや、そんな事を云ふのに[illegible]に
よくあの女を御存じないからだ。

張老人。喬生さん！ もしほんとにそんな素ばらしく生き々々してゐる女だつたら、その點も曲者ぢや。此の不自由な今の世の中に、然も女で、一體そんな自由な生き々々した者がゐると思ふかな？

喬生。それは全くです。僕もその點はびつくりしてたんです。（不意に思ひついたやうに頭を兩手で押へて）あッ！

張老人。どうしたんぢや、喬生さん！（彼の肩へ手をかける。）

喬生。（しばらくして蒼い顏をあげて正面看客席――を見つめて）そう云へば、まだわからない事がある。あの、子供の話をした時の樣子が實におかしい。赤ん坊を欲しいッて聞いて、なぜあの人はあんなに泣き出したらう？ いや、その前に、あのおそろしい淋しい顏つきは一體どうしたんだ？ あんな顏つきを、今までまだ一度も人間表情に見た事がない。そいつは、死人の爲め赤ん坊を生む可能性がないからぢやなかつたか？ おお、まだその前にあたし死んで……ッて云つたぞ。いよいよ變だ。そう云へば、あの盆の晩初めて牡丹燈籠をさげて來て、それから毎晩同じやうにさげて來るのも、鈴の音を合圖に來るのも、自分の家をどうしてもハッキリ敎へないのも變だ！

張老人。それ御覽。そいつは無論みんなあの女の死人の證據ぢや。そんな死人と一緒にふざけてゐれば、あんたの生命は忽ち燃え盡きて了ふぞ。今のうちわしが見つけてよかッた。もう少ししたら、もう取り返しのつかない事になるところぢやつた。

喬生。（つづけて正面を見つめて）と、あれは一體何者だ？　やつぱり盟州の判事の、今は死んでゐる娘の淑芳か？　それともどこか外の家の女か？

張老人。ほう、そんな事を云つてゐたか？　そして、今はどこにゐるとなつてゐたな？

喬生。湖西。

張老人。湖西か。それより詳しくは云はんかな？

喬生。云ひません。

張老人。ふむ、………いや、そう云ふ言葉にまづうそはあるまい。が、もしなほハッキリ知りたければ、盟州までは、とても遠くて駄目ぢやが、何なら今日湖西まで行つて調べて來ればいい。

喬生。（老人の方へ向いて）おぢいさん、行つて來ます。きッと行つて來ます。そうしなければ、僕の氣もちはとても靜まらない。

張老人。ぢやあ行つて來なさい。ぢやが喬生さん、誰の幽靈にしても幽靈に變りはない。からハッキリ わかつた上は、もう今夜から決して、そんな者に會つちや駄目ぢやぞ。いゝか？

喬生。えゝ――（口ごもつて）が………。

張老人。が――何ぢや？

喬生。が、も一度會つてきいてみたい。

張老人。何をきくんぢや？

喬生。どう云ふわけで、死人のくせに僕のところへなぞわざわざやつて來たか？――あれは自分では、おぢいさんと一緒に僕が歩いてゐるところを見て、話をきいて、思ふやうになつたッて言つてるんです。が、ほんとにそうなのか？　それともそいつは作り事で、まるで僕をだましてゐるのか？　だましてゐるとすれば一體何の爲めか？………

張老人。馬鹿ッ！――そんな事が何の足しになる？　そんな事を云つて今夜會ひでもしたら、あんたはどんな目に會はされるかも知れんぞ。多分もう今夜限り生命を取られちまふかも知れんぞ。それでも眞實がわかるッて云ふならまだしも、今迄でさへ何にも知らずに欺されて來たあんたぢや、幾ら會つたッて、向ふが云ひくるめやうとさへ思へばどうして實を吐かせる事なぞが出來る？　問題は簡單ぢや。あんたは、あの女について一番大事な點を欺され、又は匿されてゐたんぢや、そして幽靈の證據でも引つ張るやうに、ぐんぐん

死の穴のはうへ引きずられてゐたんぢや。

喬生。(俯れて)うむ、そうかも知れない。

張老人。會ふ限り、あの女はあんたの破滅ぢや。あんたのまだ若い生命と仕事と才能を大事に思つたら、今後一切あんな者に會つてはいかん。思想はちがふが、わしはもとから深くあんたの人となりを愛してゐるんぢや。あんたが不遇で不幸であればあるだけ、年上の友人の一人としてしんみに増して愛してゐるんぢや。こんな事でわしはあんたを亡ぼしたくない。絶對したくない。な、わしの眞ごゝろを汲みなさい。

喬生。おぢいさん……ほんとに御禮を云ひます。

(固く老人の手を握る。)

幕

第三幕

第一場

人物

喬生。

時

前幕の午後

所

湖心寺。(月湖の中に建つ。)

正面に「湖心寺」と大書の、蒼古とした金地の扁額が懸る。

喬生、下手から疲れ切つて歩いて來て、寺の階段にグッタリ腰をおろす。

喬生。(獨語)疲れた。(額へ手を當てゝ)隨分歩いた。——だが、どうしてもわからない。長い堤の上、高い橋の下、白花荘の軒並み……朝から今まで、人に訊いたり探したりして散々歩き廻つたが、てんで知れない。みんな、そんな女の名前さへ聞いた事がないつて云ふ。お寺も隨分訪ねた。だが、此の最後の湖心寺にもそれらしい墓がないとすると、もう探す場所はどこもない。——と、淑芳だの湖西だのッて云ふのは、あれはみんな出鱈目か？　そいつが出鱈目なら、ほかの事も一切出鱈目の出まかせか？　一生に一つッきり出來ないつて云ふほんとの戀、……そう自分が考へてゐたのは、一切欺瞞だつたのか？　自分の幻想と自惚れに過ぎなかつたのか？　空へ浮んだ蜃氣樓だつたのか？　おお、どうかそうでなくてくれ。から

喬生。ほんと以上だ。

淑芳。うれしい。(力をこめて彼の手を握る。)

喬生。でも、まだあなたのお名前を伺つてゐません。どうか教へて下さい。

淑芳。名前なんか構ひませんわ。

喬生。でも——戀人の名前も知らずにゐるなんておかしい。教へて下さい。

淑芳。お前つて仰つて下さりや澤山。

喬生。それぢやあ頼りない。

淑芳。いやなかた。

喬生。云つちやいけない事でもあるんですか？

淑芳。そんな事ありません。おや、あたし申しますわ。

喬生うなづく。

淑芳。(俯いて指を弄びながら) 淑芳。

喬生。淑芳？

淑芳。字は麗卿。

喬生。麗卿——いい名ですね。

淑芳。お氣に入つて？

喬生。とても。

淑芳。そう？(男の胸へ顔を寄せつける。)

喬生。(彼女の髪を撫せてやりながら) 淑芳さん、で、あなたは今どこにゐらッしやるんです？

淑芳。ここ。

喬生。住んでらッしやる所です。

淑芳。又。

喬生。又？

淑芳。(半分顔をあげて) どうしてそんなにいろんな事、御聞きになりたがツて？

喬生。聞きたがるが當り前でせう。あなたの事はどんな事でも知りたいんです。外の人にはどんなにつまらない事でも、知つて知り抜きたいんです。云つて下さい。

淑芳。(彼の熱情に壓倒されたやうに) おや申しますわ。今ゐる所は月湖の西。

喬生。ほう、湖西ですか。

淑芳。え、、父は此の先きの慶州の裁判所の判事を勤めてゐたんですけれど、此の春急に轉任になつて北の方へまゐりましたの。でも今年の初めにあたし一度遊びに來て、すつかりここいらの景色が氣に入つたもんですから、父や母に頼んで、あの金蓮と二人で當分此の近

所に住むやうに話して聞かさした。（チラと男の顏を見て）それと、あなたの御傍を離れたくなかつたんですの。その遊びに來た時、始めてお目にかかりましたのよ。丁度輿の前にたり後になり、どこか御爺さんの御友達のかたと、夢中になつて話していらッしやいましたわね。その御話や議論を轎の蔭で聞いて、あたし、すつかり惹きつけられましたの。

喬生。（赤面しながら）ああ、それで僕を御覽になつたわけがわかつた。そのお爺さんは、（隣の壁を指して）隣りにゐる道教の學者です。

淑芳。あら、さうでございましたの？

喬生。（突然當惑したやうに額を押へて）然し弱つた。あなたは、そんな身分のある御孃さんなんですか。

淑芳。（彼の肩へ手をかけて）そんな處の娘御きらひ？

喬生。（溜息して）きらひぢやないが……。

淑芳。が？

喬生。お父さんが結婚を許しちやあ下さらないでせう。

淑芳。くれなかつたら、ひとりで飛び出して來ますわ。

喬生。（ハキッと彼女の眼を見て）それが出來ますか？

淑芳。いくらでもね。

喬生。（よろこんで）出來れば、他人からいろんな讒誣をされる心配がなくて、僕もどんなにいいか知れない。——（不安さうに）が、來たッて御覽のとほりの貧乏世帶ですよ。今までのあなたの生活とは何から何までちがつてます。此の寢臺からしてドッサリ南京蟲がゐて、今だッてきッと食はれてゐらッしやるんです。それを覺悟してゐらッしやる？

淑芳。（笑ひ出して）ほほほ……そん事、とッくに覺悟してますわ。あたし、今までのお孃さん生活には飽き々々しましたの。いゝえ、そんな物第一、生活なんて云へませんわ。いつ迄もあんな世界にゐるんだッたら、あたし死んだはうが增しですわ。だッて、うそばッかして、眞劍な事なんて（小指を立てて）これッぱかしだッてないんですもの。あなたの御力で、あたしほんとに生き甲斐のある新しい生活へ入れるかと思ふと、うれしくて仕方ありませんわ。

喬生。（懷疑的に）でも、それはあなたの御孃さん風なロマンチシズムでは……？

淑芳。（遮つて強く）信じて頂けません？

喬生。（感動して）いや、淑芳さん。

淑芳。信じてね……。

喬生、彼女の手を取つて引き寄せる。柴の青い煙。急速に幕。

（又は暗く。）

第二幕

第一場

人物

喬生。

淑芳。

金蓮。

張老人。

時

前幕から一週間ばかり後の細雨の夜。

所

前幕に同じい。が、奇麗に室が片づき、山水の図い額などが懸り、燈台には青い（又は紅い）薄帷が掛つてゐる。

喬生、戸口を出たり入つたりして、そはそはと落ちつきのない様子である。

喬生。（室へ入つて）まだ來ないし！　どうしたんだらう？　もういつもの時間なのに。（戸口へ行つて暗い往來を見廻して）[illegible]るから遅れたのか？　——もしかしたら、今夜は來ないのぢやないか？　（打ち消して）いや、そんな事はない。あの人に限つて約束をちがへるなんて事は考へられない。此の一週間ても、一日だつてちがへた事はない。それに、あんたに固く今朝約束して行つたんだ。（すぐ又不安になつて）然しおそい！　實におそい！　どうかしたら、急に身體の工合でも悪くなつたんぢやないかしら？　そんなら、金蓮が何とか云つて來るだらうに。……いや、あいつも來られない位悪いんぢやないか？　——湖西の方へ行つて見やうか？……だが湖西ッてばかりで、どこら邊だかまるきりわからない。それに、出かけたあとへでも訪ねて來たら行きちがひだ。（突然新たな不安に襲はれて眼を見張つて）もしかしたら、途中で悪者にでもあつかまッたんぢやないか？　あゝして、若い女が毎晩おそく二人で歩いて來るんぢやあ、全く危險だ。ああ、どうしたらいいだらう、もしそんな事があつたら？　（強く胸を叩いて）馬鹿！　何を餘計な取り越し苦勞ばッかりやつてゐるんだ！　喬生の馬鹿め！　馬鹿め！　落ちつけ、落ちつけ、もッと落ちつけ！　（室へ入つて來て、下腹へ力を入れて腰かける。が、又たまらなくたつて室を往く。）まるで地獄だ　來さへしてくれれば、こんな苦し[illegible]

んでッちまふんだ。來ないうちは、てんで解決がつかない。

鐘が遠く鳴る。喬生氣づかない。二つ目へ來て初めて氣がつく。

喬生。あッ、鳴つてゐる。鳴つてゐる。どうしたんだ！　さつきもう鳴つたぢやないか？　あれは聞き違ひだつたか？　それとも幻聽か？　おれは氣がちがひ出したのか？…………(又耳を澄ます。途端、三つ目の鐘ひゞく。)あッ、やつぱり鳴つてゐる。鳴つてる。

(いきなり戸口へ飛び出して行く。)

奥から金蓮、前幕どほりの牡丹燈籠を持つて現れる。つゞいて淑芳。——今夜は各々彩りの傘をさしてゐる。喬生、雨の中へ出て彼女の手を握る。

淑芳。あら、お濡れになつてよ。(傘を差し出して彼を入れる)。

喬生。なに濡れたつて。

淑芳。風邪でもお引きになつては……。

喬生。あなたこそ、雨で大へんだつたでせう？

淑芳。いゝえ。——お待ちになつて？

喬生。とても。

淑芳。そう？

金蓮燈籠を消し、三人室へ入る。喬生、淑芳を寢臺へ腰かけさせる。

金蓮。(喬生へ)御酒は召しあがります？

喬生。少しどうかつけて下さい。こんな濕つた晩には酒が欲しい。

金蓮。はい。(台所へ去る。)

淑芳。あなたは、前から御酒を御あがりになつて？

喬生。もとはちつとも飲まなかつたんです。でも、いろんな不平の味と一緒に酒の味を覺えたんです。此の頃は又、戀に醉ふと一緒に醉ふのを知つて來ました。

淑芳。(彼の肩を輕く打つて)口上手なかた！

喬生。いや、ほんとです。僕は生れて初めて生活に醉ふ事を知りましたよ。實際僕は幸福だ。變に幸福すぎて、何だかこれでいゝのかつて氣もちがする。

淑芳。ほんと？

喬生。何だか墮落したやうた氣もする。

淑芳。墮落？

喬生。えゝ、——あなたが來て下さるやうになつてから、御蔭で室ぢうが奇麗になつて、こんなに額や帷まで懸るやうになつて、少し僕の社會に對する不平の氣もちが鈍つて來たやうですよ。

淑芳。(笑ひながら)まアなさけないかた。——でも、そんな時も必要ですわ。長く闘つていらつしやる爲めには。

喬生。僕は、こんな時期が自分の身の上に起らうとは、今まで夢にも考へませんでしたよ。此の頃、矢鱈、思ひも寄らなかつたいろんな事が思ひついたり、感じられたりして困ります。まるで、どこから か大きな白い蛾でも飛んで來て、僕の頭へ矢鱈卵を生みつけて行くやうに。
淑芳。どんな思ひも寄らない事？
喬生。たとへば――いや、そんな事を口にするのは馬鹿々々しい。
淑芳。仰つて？
喬生。云ひません。
淑芳。どうぞ仰つて!……あたし、あなたの考へてらつしやる事を伺ふのが、何よりのたのしみなんですもの。
喬生。でも、男には口にしていい事と、よくない事とあります。
淑芳。そんなによくない事？
喬生。そう悪い事でもないでせうが……。
淑芳。おや話して、――ね。ね。（見あげながら彼の胸をたたく。）
喬生。（思ひ切つて）そんなら云ひませう。僕ね、子供が欲しくなつちやツた。
淑芳、おどろいたやうにうなだれる。
喬生。（彼女の手を握りしめて）あなたの生む子供なら、どんなに可愛い顔をしてゐるでせう。きつとあなたに、そして少し僕に似てゐますよ。そんなあなたを小さくしたやうな奴が出て來たら、僕はもう可愛くて々々、きつと食べるやうに大事にするな。
淑芳默つてゐる。
喬生。（情熱的につづけて）どうしてこんな考へが頭の中へ這入り込んで來たんだか、わからないんです。早くお父さんになりたいなんて、まだ若い男の癖に、全くなんておかしな空想だらう。………ね、變でせう？（彼女の顏を覗き込む。そしてにがく淋しい顏つきにびつくりして）アツ淑芳さん!………。
淑芳いそいで顏を蔽ふ。
喬生。（彼女の肩へ手をかけて）どうしてそんな顏をするんです？
淑芳、咽び泣き始める。
喬生。（再びびツくりして）どうしたんです？　僕の言葉が氣に障つたんですか？
淑芳。（首を振つて）いゝえ。
喬生。ぢやあ何故？
淑芳。………。
喬生。何故？
淑芳。どうぞ何にも聞かないで。

喬生。（アツケに取られながら）子供なんぞ欲しかつたんですか？

淑芳。いゝえ。

喬生。ぢや、そんな事を云ふ僕がいや？

淑芳。（首を振つて涙聲で）いゝえ、いゝえ。………わたし、どんなにうれしいか——。

喬生。（途方にくれて）ちッともわからない！

淑芳。でもあたしは子供なんか——。

喬生。出來ないッて云ふんですか

淑芳。えゝ、その前にあたし死んで……。

喬生。（抱きしめて）何を馬鹿な……何故あなたが死ぬんです？　どうしてそんないやな事を云ふんです？

淑芳。（涙に濡れた顔を手帛で拭きながら）生みますわ、生みますわ。きつとあなたに似た赤ちやんを——。（突然笑ひ出して）あたし、姉が前に赤ちやんを生みそこなつて死んだのが頭に殘つてゐるもんですから、ついあんな口をすべらせてしまつて、どうぞ勘忍してね。

喬生。何だ！　その爲めですか。

淑芳うなづく。

喬生。なに勘忍も糞もあるもんか。でも、隨分あなたは子供らしいんですね。お蔭ですつかりびつくりしちやつた。

淑芳。済みません。……（燭の灯を見ながら）子供はお好き？

喬生。好きです。

淑芳。ぢや、前の奧さんの時もそう御思ひになつたんでしよう？

喬生。子供を欲しいつて？

淑芳。えゝ。

喬生。まるでない。

淑芳。うそばつかり。

喬生。うそぢやない。

淑芳。だつて、隨分奧さんを愛していらしつたんでせう？

喬生。そりやあ可成り可愛がつてはゐました。でも、不思議と子供を欲しいなんて考へた事は一度もない。

淑芳。きつと御弱かつたから——。

喬生。それはかりぢやない。

淑芳。ぢやあ、まだ御若かつたから？

喬生。あなたほど若くはない。

淑芳。ぢや何故？　——うそ、うそ！

喬生。淑芳さん！

途端、少し開いた天井窓から急に風が吹き込んで來て、燭台の燈が消える。室暗くなる。

喬生。ア、消えちまッた。

淑芳。風が出ましてね。

喬生。どうしてあんな處が開いてゐたんだらう？　一寸待つて下さい。(火打ち石を探り取つて、打ち始める。)

×　×　×　×

幕あいて間もなく、壁一重隣りの張老人が奥から室へ出て、古い本を讀み始める。淑芳達が訪ねて來ると、微かに聞える聲に耳をそばだてる。

張老人。又來た。これで一週間、毎晩誰かやつて來ては、おそくまで話聲や笑ひ聲がしてゐる。細君がなくなつてから、いや、なくなる前からも、こんな事はついぞなかつた事だ。一體誰だらう？（土壁のヒビ入つた所へ蝙蝠のやうに吸ひつき、ピッタリ耳を當てる。）思ひ切つて、穴をあけて覗いてやれ！（奥へ行つて、長い錐を持ち出して來る。それを壁のキズの一部へ直角に揉む。喬生達に氣づかれないやうにゆッくり、用心深く。——やがて穴を穿つて覗いて見る。）駄目だ。もつと大きくしなくちやあ……。（更に熱心に揉みひろげる。再び覗く。）丁度喬生の室の燈が消えてゐる

張老人。眞ッ暗だ！

やがて燈がつく。と、喬生の傍に、淑芳の[illegible]つ。

喬生。もう秋らしい風ですね。(窓を閉める。)

女の髑髏、燭臺を身體で蔽ひながら見あげる。

張老人。あッ！(肝んで尻餅をつく)

暗黒。

第二場

人物

張老人。
喬生。

時

前場の翌朝早く。

所

前場に同じい。

雨後の朝のほがらかな外光。が、喬生の家の戸口は閉り、彼は暗い寢室の中にグッスリ眠つてゐる。

張老人、自分の家から出て彼の家の戸口に立つ。手をかけて開かないので、力任せに叩く。

張老人。(同時に呼ぶ)喬生さん！　喬生さん！

　喬生起きない。老人繰り返し呼び又叩く。

喬生。(やがて首をあげて)どなた？

張老人。わしぢや。早くここをあけて下さい。

喬生。(獨語)張ぢいさんの聲だ。――おお、ねむい。……(戸口へ向つて)何か御用ですか？

張老人。用とも。大至急の用ぢや。

喬生。大至急？――朝ツぱらから何だらう。……えゝ、面倒くさいな。(戸口へ)今あけます。(不精々々寢衣のまま起きて行つて戸をあける)御早う！

張老人。御早う。あんたにはね。……が、わしには一向早くない。わしは、昨夜ツから碌々寢てないんぢや。

喬生。やつぱり？――(氣づいて、急に笑ひ出して)それぢやあ早過ぎますよ。

張老人。早過ぎるどころか、(指で嚇して)愚圖々々してゐやうもんなら、あんたは破滅ぢや。

喬生。え？

張老人。(大聲で)破滅ぢや。

喬生。(アツケに取られて)何の事です、そりやあ一體？

張老人。今話す。その前ここを閉めておくから、あんた、そこの窓を開けなさい。おお、その昨夜の窓ぢや。

　喬生ギクリとして、默つて天井窓をあける。老人戸口を閉める。

張老人。喬生さん、まあ腰をかけなさい。

喬生。おぢいさんこそ。(椅子を勸める。)

張老人。わしも掛ける。

　老人は椅子へ、喬生は寢臺へ掛ける。

張老人。わしはな、喬生さん！　今日は忠告に來たんぢや。

喬生。(俯れて)わかつてます。

張老人。わかつてる？

喬生。(跪いて)おぢいさん、いつも御懇意にしてゐるあなたに隱してゐた事を勘辨して下さい。僕にもあまり不意で、それに、散々御世話になつた女房がなくなつて長くもない事で、どうも云へなかつたんです。

張老人。何だ、そんな事か。わしはそんな小言を云ひに來たんぢやな

い。いや、それを云ひたいが、もつと恐ろしい事件ぢや。

喬生。恐ろしい？

張老人。とても恐ろしい問題ぢや。

喬生。あの婦人についての外、僕は今恐ろしい事は知りません！

張老人。（怒鳴る）馬鹿！　その女が恐ろしいのぢや。

喬生。え？

張老人。あれはただの女ぢやないぞ。

喬生。（落ちついて）無論有りふれた女ぢやありません。

張老人。（業を煮やして）そんな事を云つてるんぢやない。あんたとも あらう若者が、何てたぶらかされかたぢや！

喬生。（愈々落ちついて）ぢや、どう云ふ女です？　ヴァンパイアだと でも仰るんですか？

張老人。ヴァンパイア以上ぢや。骸骨ぢや。肉も血も吸ふ女骸骨ぢや。

喬生。えつ？

張老人。それとも知らず、毎晩あんたは、、、、、、、、、、、、、ゐるんぢや。

喬生。（キッとして）いくら氣もちを悪くしたつて、あまり變な言葉は よして下さい。そんな臂喩や皮肉は古くてまづ過ぎます。

張老人。（喬生の腕をつかんで）喬生さん！　[illegible] か。正直正銘の事實ぢやぞ。

喬生。事實？

張老人。此の二つの眼が證據ぢや。

喬生。ゆふべ窓から見たつて仰るんですか？

張老人。窓ぢやアなく、壁へ穴をあけて覗いたんぢや。そう云ふわし の不禮はあやまる。が、わしは一つもうそを云ふわけには行かん。（壁のところへ行つて穴を示して）これぢや。

喬生。（つづいて行つて見る。）なるほど——。

張老人。ここから覗くと、あんたは燭臺へ火を點けて、傍に着物を着た骸骨が立つてるんぢや。それからあんたが「もう秋らしい風です ねっ」とか何とか云つて窓を閉めると、骸骨も一緒に見あげるぢゃないか。わしはそれを見て、思はずあッと云つて尻餅をついちまつた。

喬生。そう云へば、あの時あなたの部屋で何か音がしたと思ひました。

張老人。それで疑ふ餘地はあるまい。

喬生。（疑惑に堪えないやうに）だが、信じられない事實だ。あまりに 信じられない事實だ。（言葉を變へて）僕は決してあなたの言葉を疑 ひはしません。あなたはいつでも正直だ。あなたがさうまで仰る

のにうつゝだとは思へない、が、僕はあなたの眼を信じていいか知ら。

張老人。年寄りの眼は信用出來ない、ッて云ふのかな？

喬生。いや、然し幻覺では……？

張老人。馬鹿な！　七十年間、一遍も不名譽は犯した事のない此の眼ぢや。

喬生。が、なぜ僕には骸骨に見えないだらう？

張老人。（笑つて）ははは……幽靈や妖怪と會つてゐる時は、他人の眼のほうがずッと確かぢや。戀人と會つてゐる時も大抵そうぢや。戀人と幽靈と重なれば、いよいよ他人の眼の方が確かぢや。

喬生。でも、あの人は死人にしては生き〳〵し過ぎてゐます。生きてゐる女にだッて、あんなに生き〳〵した自由な人は滅多——いや、一人もゐない。もしあの人が死人なら外の女は死人以下だ。

張老人。それが惚れた慾目と云ふ奴ぢや。いや、此のわしにも昔随分覺えがある。惚れて了ふと、誰でも相手にばかり生きてゐるやうな氣もちになる。從つて、相手の女が矢鱈生き〳〵して見えるんぢや。

喬生。それぱかりぢやありません。あれは確かにあの人の特色だ。

張老人。もし特色や個性なら、死んでからだッて通用せんかな？

喬生。あなたは老耄の相手だ。いや、そんな事を云ふのに、みんなよくあの女を御存じないからだ。

張老人。喬生さん！　もしほんとにそんな素ばらしく生き〳〵してゐる女だつたら、その點も曲者ぢや。此の不自由な今の世の中に、然も女で、一體そんな自由な生き〳〵した者がゐると思ふかな？

喬生。それは全くです。僕もその點はびつくりしてたんです。（不意に思ひついたやうに頭を兩手で抑えて）あッ！

張老人。どうしたんぢや、喬生さん！　（彼の肩へ手をかける。）

喬生。（しばらくして蒼い顔をあげて正面看客席——を見つめて）そう云へば、まだわからない事がある。あの、子供の話をした時の樣子が實におかしい。赤ん坊を欲しいッて聞いて、なぜあの人はあんなに泣き出したらう？　いや、その前に、あのおそろしい淋しい顔つきは一體どうしたんだ？　あんな顔つきを、今までまだ一度も人間表情に見た事がない。そいつは、死人の爲め赤ん坊を生む可能性がないからぢやなかつたか？　おお、まだその前にあたし死んで……」ッて云つたぞ。いよいよ變だ。そう云へば、あの last の晩初めて牡丹燈籠をさげて來て、それから毎晩同じやうにさげて來るのも、鐘の音を合圖に來るのも、自分の家をどうしてもハッキリ教へないのも變だ！

張老人。それ御覽。そいつは無論みんなあの女の死人の證據ぢや。そんな死人と一緒にふざけてゐれば、あんたの生命は忽ち燃え盡きて了ふぞ。今のうちわしが見つけてよかッた。もう少ししたら、もう取り返しのつかない事になるところぢやつた。

喬生。(つづけて正面を見つめて)と、い、あれは一體何者だ？ やつぱり豐州の判事の、今は死んでゐる娘の淑芳か？ それともどこか外の家の女か？

張老人。ほう、そんな事を云つてゐたか？ そして、今はどこにゐるとなつてゐたな？

喬生。湖西。

張老人。湖西か。それより詳しくは云はんかな？

喬生。云ひません。

張老人。ふむ、……いや、そう云ふ言葉にまづうそはあるまい。が、もしなほハッキリ知りたければ、豐州までは、とても遠くて駄目ぢやが、何なら今日湖西まで行つて調べて來ればいい。

喬生。(老人の方へ向いて) おぢいさん、行つて來ます。きッと行つて來ます。そうしなければ、僕の氣もちはとても靜まらない。

張老人。ぢやあ行つて來なさい。ぢやが喬生さん、誰の幽靈にしても一體に變りはない。から ハッキリ わかつた上は、もう今夜から決して、そんな者に會つちや駄目ぢやぞ。いゝか？

喬生。えゝ——(口ごもつて)が……。

張老人。が——何ぢや？

喬生。が、も一度會つてきいてみたい。

張老人。何をきくんぢや？

喬生。どう云ふわけで、死人のくせに僕のところへなぞわざわざやつて來たか？——あれは自分では、おぢいさんと一緒に僕が步いてゐるところを見て、話をきいて、思ふやうになつたッて言つてるんです。が、ほんとにそうなのか？ それともそいつは作り事で、まるで僕をだましてゐるのか？ だましてゐるとすれば一體何の爲めか？……

張老人。馬鹿ッ！——そんな事が何の足しになる？ そんな事を云つて今夜會ひでもしたら、あんたはどんな目に會はされるかも知れんぞ。多分もう今夜限り生命を取られちまふかも知れんぞ。それでも眞實がわかるッて云ふならまだしも、今迄でさへ何にも知らずに欺されて來たあんたぢや、幾ら會つたッて、向ふが云ひくるめやうとさへ思へばどうして實を吐かせる事なぞが出來る？ 問題は簡單ぢや。あんたは、あの女について一番大事な點を欺され、又は匿されてゐたんぢや、そして[illegible]の[illegible]でも引つ張るやうに、ぐんぐん

死の穴のはうへ引きずられてゐたんぢや。

喬生。(俯れて)うむ、そうかも知れない。

張老人。會ふ限り、あの女はあんたの破滅ぢや。あんたのまだ若い生命と仕事と才能を大事に思つたら、今後一切あんな者に會つてはいかん。思想はちがふが、わしはもとから深くあんたの人となりを愛してゐるんぢや。あんたが不遇で不幸であればあるだけ、年上の友人の一人としていゝしんみに増して愛してゐるんぢや。こんな事でわしはあんたを亡ぼしたくない。絶對したくない。な、わしの眞ごゝろを汲みなさい。

喬生。おぢいさん……ほんとに御禮を云ひます。

(固く老人の手を握る。)

幕

第三幕

第一場

人物

喬生。

時

前幕の午後

所

湖心寺。(月湖の中に建つ。)

正面に「湖心寺」と大書の、蒼古とした金地の扁額が懸る。喬生、下手から疲れ切つて歩いて來て、寺の階段にグッタリ腰をおろす。

喬生。(獨語)疲れた。(額へ手を當てゝ)随分歩いた。――だが、どうしてもわからない。長い堤の上、高い橋の下、白花荘の軒並み……朝から今まで、人に訊いたり探したりして散々歩き廻つたが、てんで知れない。みんな、そんな女の名前さへ聞いた事がないつて云ふ。お寺も随分訪ねた。だが、此の最後の湖心寺にもそれらしい墓がないとすると、もう探す場所はどこもない。――と、淑芳だの湖西だのッて云ふのは、あれはみんな出鱈目か? そいつが出鱈目なら、ほかの事も一切出鱈目の出まかせか? 一生に一ッきり出來ないつて云ふほんとの戀、……そう自分が考へてゐたのは、一切欺瞞だつたのか? 自分の幻想と自惚れに過ぎなかつたのか? 空へ浮んだ蜃氣樓だつたのか? おお、どうかそうでなくてくれ。から

なれば、たとへ幽靈でも骸骨でも何でもいゝ。彼女が自分を思ひ自分が彼女を思つてゐた事だけは、どうかほんとであつてくれ。おれの考へまで幽靈だつたなんて笑はないでくれ。此の戀愛の眞實だけは否定しないでくれ。でなかつたら、おれはあんまりみじめだ。(頭を垂れて兩手を握る。)――だが、どこにも事實が見つからない。その限り、おれはどこまであの人の眞實を、あの戀愛の眞實を信じていいかわからない。おお何て地獄だ！ もしかしたら、これはおれの信じる力が足りない爲めか？ もしあのおぢいさんの言葉が間違ひだつたら？………いや、そんな事はあり得ない。湖西にそんな名前の女が存在しない事が、いよ／＼事實を證明してゐる。――が、一體何の爲めにあの女はおれの前へ現れて來たんだ？ おれの精神と眞實の薄弱の證據の爲めにか？ その嘲笑の爲めにか？ そんなら、それは一體何の爲めに？ (間。頭を抑へて) 氣がちがひそうだ！ 生れて今まで、おれはこんなに滅茶苦茶に混亂させられた事は一遍もない。おれは一度に、物を考へる力をすつかり失して了つたやうだ。認識の根抵からグラツキ出したんだ！ (立ちあがつて)が、これ以上どうする事も出來ない。おれの力では駄目だ。仕方ない、歸つておぢいさんに報告して意見を聞かう。(二三歩歩き出して、急に立ちどまつて) 待て、まだここの位牌壇を見てゐない。どうせそんな處に何にもありつこはないが、おぢいさんに訊かれた時の用意に、ともかく見ておかう。(戻つて、階段をあがる。それから前面の扉をあけて入る。)

しばらくして出て來る。

喬生。ない。――どこに此の寺の位牌は置いてあるんだ？

上手のモ一つの戸(正面へひらくやうになつてゐる)をあけやうとする。あかない。喬生、力一杯把手をひねる。と、急に獨り手のやうに大きな戸が右へひらく。それは薄暗い小室で、その中に一個の旅櫬(埋葬せずに假りに寺で預つておく棺)が据ゑてある。その正面へ白紙が貼られ、「故奉州判事女淑芳字麗卿之柩」と大きく書きつけてある。紙の横手に大きな美麗な葬ひ人形を一つ立てかけ、上へ前幕の牡丹燈籠が懸る。

喬生。(思はず叫び聲をあげる) あツ――。(自分の眼を疑ふやうに、又確かめるやうに讀む) 故奉州判事女淑芳字麗卿之柩……。

喬生。(つづいて) おお、燈籠！ (一時愕然。やがて氣づいたやうに、いきなり人形を取りあげて見る。その背中を返して、書いてある字をよむ)――金蓮！ (突然そこへ抛り出して、殆んど夢中に階段を驅けおりる。そこで再び無意識に立ち留つて、靜かに光つてゐる紙や燈籠を見あげる)

喬生。やつぱり死人か！　死人と夢中に話をしてゐたのか？　こんな所にゐたのか？……何ておそろしい眼だ！（頭を抑へて走り去る）

燈籠かすかに動く。

ゆつくり幕（又は暗轉）

第二場

人物

張老人。

喬生。

淑芳。

金蓮。

時

前場の夜。

所

第二幕に同じい。

張老人（家で燈籠を持ちあぐんで歩き廻つてゐる）喬生、まだ戻つて來ん！　幾ら四明山まで距離があるにしても、もう戻つて來ていい時間ぢや。あんなにいそいで飛んで行つたんぢやから。――生憎道人が留守だつたのぢやないか？　そんならそれで、明日又出なほすとして、早く戻つて來ればいいのに、いつまでも待つてゐるんぢやないか？　それとも、昔から頑固の評判の高いあの道人の事ぢや、もしかしたらきいてくれなかつたのぢやないか。そうだッたらコトぢや。戻つて來る途中で、きッとあの骸骨達に取ッつかまるにちがひない。取ッつかまつて、抱きつかれたり泣かれたりしたら、幾ら逃げやうと思つても、若い男は又ヘタヘタになるに定つてゐる。そうなつたら、もう今夜があれの最後ぢや。自分の苦心も水の泡ぢや。可哀そうに、あの將來を持つた男をどうか助けてやりたい。おお神仙や三千の諸佛！　此の年寄りの身體に換へて、どうかあの若者を救つてやつて下さい。（跪いて祈る）

張老人。（しばらくして立ちあがつて戸口へ行き、そとを見る。）まだ見えん。まつたくどうかしてゐる。もうそろそろ幽靈達の訪ねて來る時間ぢや。來たら、いよいよ取り返しがつかん。（肝積を起して）ええ、若い男つて何て年寄りに氣を揉ませる畜生ぢやらう！（腕を振つて）若いものなんか、いつそ一人殘らず此の世の中から消えてな

くなッちまへ！（次の瞬間、堪へ切れず暗がりへ向つて呼ぶ）喬生さん！喬生さん！……（耳を澄ます。）

やゝ遠く五位鷺の聲。

張老人。（愕然として）あの聲は何だ？

再び五位鷺が答へる。

張老人。五位が鳴いてるのか？　不吉な鳥ぢや。ああ、もう駄目か！（絶望して戻つて來て椅子へ倒れかゝる。）

喬生、その時下手から、自分の閉ぢた家の前を驅け拔けて來る。

喬生。（戸口へ立つて、渇いたかすれた聲で）おぢいさん！

張老人。（聞えずに、頭をかゝへて呻く）駄目か！

喬生。（飛び込んで老人の肩へ手をかけて）おぢいさん、歸りましたよ。

張老人。（顔をあげて）おゝ、喬生さんか！（うれしさの餘り抱きつく。）

喬生、もたれながら荒い息を吐く。

張老人。おゝ、息を切らして。

喬生。一所懸命飛んで來たもんで……。

張老人。そうか！　わしも心配し切つてゐたとこぢや。――道人はゐたか？

喬生。ゐました。

張老人。祈禱はして貰へたかな？

喬生。貰へました。

張老人。おお、それはよかつた！

喬生。護符もくれました。そら。（二枚の朱の護符を懐から出して見せる。）

張老人。（表の字をよんで）四明山、鐵冠道人。……まちがひなく道人の護符ぢや。よかつた、よかつた。（喬生の身體を兩手でさすりながら）で、これをどうしろと云つたな？

喬生。一枚を戸口、一枚を寢臺の上へ貼つておけッて云ひました。

張老人。ぢやアすぐ貼つて來なさい。もう來る時間ぢや。一分間でも愚圖々々してゐて貼り遲れたら大變ぢや。サ、ここに糊壺がある！

喬生、壺を持つて飛び出して、自分の家の戸口へ一枚貼り、あけて室へ入つて、寢臺の上へ一枚貼る。又戸をしめて、いそいで老人の家へ戻る。

張老人。（緊張して待つて）やツたか？

喬生。えゝ。

張老人。（腕を擧げて）もう安心ぢや、もう安心ぢや。――さあ百足の骸骨でも千足の鬼でもやつて來い。もう喬生は大丈夫ぢやぞ！

喬生。おぢいさん、みんなあなたの御蔭です。あなたがゐなかつた

ら、僕はもういつそ此の世間から逃れる事は出來なかつたんです。

張老人。何がわしの力なもんか。みんなあんたに生きられる運があつたからぢや。ぢやが、その運の手傳ひが出來たかと思ふと、わしはほんとにうれしい。

喬生。道人は、僕を見るなり、何もきかずに、おお、お前は何て死の影の濃い奴ぢや、ツて云つて、臭い物でも脇へ來たやうに、傍の香を一抓みつまんで香爐へ投げ込みました。

張老人。さすがは道人ぢや。……ぢやが、あんたの此の頃の痩せて來た顏つきを見れば、誰だつて少しは感づけるよ。道人は、で、氣もちよく引き受けてくれたか？

喬生。少うし不機嫌のやうでした。そして、もうこれからは決して死人達に會はないつて誓へるか、誓へないなら祈禱はしてやれない、ツて云ひました。

張老人。ふむ、さすが行き屆いてる。で、あんたは誓つたんぢやな？

喬生。えゝ。

張老人。まだ外に何か云つたか？

喬生。護符をくれてから、此の後忘れても湖心寺へは行つちやいけない、ツて云ひました。

張老人。それも誓はせられたか。

喬生。えゝ――（反撥的に）誓はなくツたツて、どうして二度とあんな所へゆくもんですか。

張老人。さうとも。

喬生。（決心的に）これから、僕はほんとに生れかはつたつもりで又生活を踏み出します。仕事もします。此の一週間、あの女の事ばかりで僕は夢中になつてゐました。外の事はみんな忘れちまつて何てざまだ！　こんな事は生れて初めてだ。

その時、鐘の音が遠く響きはじめる。

張老人。（喬生を遮つて）鳴つてるぞ。

喬生身ぶるひする。老人と一緒に耳を澄ます。鐘つづいて鳴る。二人、別々に緊張し切る。瞬間的深寂。

と、下手いつもの所から金蓮と淑芳が現れる。

金蓮。（燈籠をさげて戸口へ近づきながら、振り返つて）いつも出迎へて下さいますのに、今日はどうしてでせう？（やがて戸口へ行つて）御免下さいまし。（云ひつつ、初めて頭上の朱符に氣づく）。あツ！（あぶなく燈籠を取り落しそうにしたから、うしろへよろめく。）

淑芳。（おどろいて）どうして？

金蓮、無言で片手に朱符を指さし、片手で燈籠を擧げてそこへ明

りを送る。

淑芳。（叫ぶ）あッ！

二人しばらく顔を見合はす。

淑芳。（やがて呼ぶ。）喬生さま！

老人の家の喬生、さつきからの緊張へ刺戟を加へられて、思はずそとへ驅け出そうとする。

老人あわてて引きもどす。

淑芳。（再び呼ぶ。）あなた！

喬生戰慄する。

淑芳と金蓮、ちつと耳を澄ます。か、何の應答もないのを見て、再び顔を見合はせ、急に一緒に笑ひ出す。

ほほほほ………。

喬生と老人戰慄する。

金蓮。（淑芳へ）あのかたは、わたし達の事を御存じになつて、怖くおなりなさいましたのねえ。

淑芳。そうよ。（再び笑はうとして、突然顔も身體も痙攣する。そのまま倒れかかる。）

金蓮。お孃様！（いそいで彼女の身體を片腕に抱きかかへる。）

淑芳、金蓮の膝へ顔を當てて咽び泣き始める。

金蓮。お孃さま、お泣きなさいますな。決して――。

淑芳。でも、――でも長いあひだの思ひがやつとかなつたと思つたのに………。（あとはむせんで了ふ。）

金蓮。ほんとに、死ぬほど御思ひになつた戀ですのにね。（間。）でも、もうこんな物が貼つておつては仕方ありません。

淑芳。あのかたも中にゐらつしやらないやうね。

金蓮。ゐらつしやれば、こんなに御呼びになるのに出ていらつしやらない筈はありません。

淑芳。（又咽びながら）たつた一週間ばかりで……。

金蓮。ほんとに、………でも、又きつと御會へになりますわ。とにかく今晩は戻りませう。

淑芳うなづき、金蓮に扶けられながら去る。

喬生と老人、一言も洩らさず始終を聞く。喬生は自分を忘れて時時苦しそうに手を額へ置く。

張老人。（淑芳達が去つたのを知つて）おお、あんたは救はれたぞ！（呆然とした喬生を抱く。）

急速に幕

第四幕

第一場

人物

喬生。

金蓮。

淑芳。

時

前幕から一月足らず後の夜。

所

湖心寺。（第三幕第一場に同じい。）

蒼涼たる半月の夜。淑芳の棺を置いてある部屋から、戸を透して牡丹燈籠の明りが薄く射してゐる。陰氣なふくろふの鳴き聲。

喬生、醉つた足取りで下手から現れる。

喬生。（獨語）とても我慢出來ない。それをやッとかうして酒で我慢してゐる。いや、我慢ぢやアなくて胡魔化しだ。飲めば飲むだけ、心の底ではいよいよ淋しく、いよいよあの人が戀しくなつて來る。そいつを、ただ上ッつらだけ胡魔化してゐるんだ。自分でちやんとそれを知つてるんだから餘計みじめだ！（石ころへ躓いて倒れ、そのままベッタリ坐る）

喬生。お痛い！――何てダラシのなさ加減だ！――だが此の頃の酒の苦さはどうだ！ああ、甘露のやうにうまく、心の底までも胡魔化してくれる酒はないか？　いや、それより、何でもいい、おれを又もとへ引き戻してくれる物はないか。學術、事業、文藝、娛樂……何一つおれを救つてくれるものはない。幾ら自分を叩きつけても叱りつけても、てんで駄目だ。死の恐怖？　破滅？――そんな單語を、幾ら經文のやうに繰り返しても何の役にも立たない。いや、繰り返せば返すほど、餘計戀しい氣もちが增して來る。まるで、脂肉へつけた辛子だ。死だの破滅だのッて觀念がくッつけばくッつくだけ、一層戀愛が魅惑的になつて來る。死よりも强し、ぢやアなくて死によつて强しだ。………（嘆息して）あの晩から、おれはすッかり自分の生活を洗ふ決心をした。女房が死んでから少し取りとめがなくなつて來たおれの生活を、これを機會に新しく建てなほそうと誓つた。實際、又あの女から離れて了ひさへすれば立派に出來ると思つたんだ。それがどうだ！反つてあらゆる力をおれはなくして了つた。何の元氣も

なければ張りもなく、毎日ただ鬱々と、白いクラゲのやうにほんやり暮すだけだ。仕事どころか、食べる事や寢る事さへも時々忘れて了ふ。まるで魂の脱けた殻だ。生きた屍だ。もうあの一週間のあひだに、おれはすツかり自分の生命を奪はれちまツたのか？（不意に追憶して）あの一週間！――ああ、だが、あの間だけは、とても忘れられない。まるで昨日のやうな生き〳〵しさと樂しさだ。あの一週間をもう一度持つ事さへ出來れば、おれは一切の物を泥の中へ叩ツ込んでもいい。（急に自分に返つて頭をなぐりつけて）馬鹿め！　誰が一體あの一週間をブチ切つたんだ？　あの朱の護符を貰つて來たのは、そして貼つたのは、一體誰だ？　此のおれの外の何者でもないぢやないか？　それにあのおぢいさんのしんみな親切！　おお、それを考へたら、こんな馬鹿々々しい事が考へられた義理か！――へツ、何が眞實の戀愛だ？　あの女は、おれを愛してゐるの慕つてゐるのツて云ひながら、實は死の穴へズンズン引ツ張り込んでゐたぢやアないか？　おれにヨリ多く生命を與へる爲めぢやアなく、破滅させる爲めに戀をしてゐたぢやないか？　もしほんとうにおれを愛してゐたなら、どんなに會ひたくたツて、見す見すおれを破滅のはうへなんか引き摺つて行く筈はない。行ける筈はない。然もその大事な點を、あの女はまるきり匿してゐたぢやないか。これが立派な奸計でなくて何だ？　奸計でないにしたところで、少くも何物の[illegible]ある筈がない。　幽靈の惡ふざけか、生きてゐる時滿足出來なかつた女の肉慾的執念か？　そんな戀愛に夢中になるなんて然もその眞相が暴露された今になつて、まだかうして思ひ切れずにゐるたんて、おお、何ておれは馬鹿者だ！　今までおれはそんな意氣地無しだつたのか？　おれの今までの自信や思想は、そんな安ツぽい脆いものだつたのか？　それとも、おれはもうすつかり變つた人間になつてゐるのか？（頭をかかへる。いきなり猛烈な思慕に襲はれる。）――會ひたい！――會ひたい！　焦きつくやうに會ひたい！　もう一度淑芳の顔が見たい、あの聲を聞きたい。金蓮の燈籠の、あのほのほのと軟かな光を眺めたい。その爲めには死んでもいい。もう一度會へさへすれば！――　一度だけでもいい！　うむ……。（呻きながら閨へ倒れる）

（しばらくして起きあがつて）一體ここはどこだ！（四邊を見廻す。間。）お寺へ來てゐるのか？　いつの間にこんな處へやつて來たんだ？（階段から上を見上げて）おお、ここは見覺えがある處だ。はて、何寺だつたかしら？（首を傾けて突然愕然とする。）潮心寺だ！――あツ、あそこは棺のある部屋だ。（思はず上手へ駆け出し、植ゑ込みへぶツつかつて、下手へ向ふ。）

その時、水室の戸が音もなくひらいて、牡丹燈籠を片手に持つた金蓮が現れる。淑芳背後に立つ。

金蓮。喬生さま！

喬生、ブレーキをかけられた車のやうに立ちどまる。

金蓮。（頭をさげて）まあよくいらッしやいました事。……今御聲がしましたから、もしかあなたではないかしら、それとも又うつかしら、ッて、お嬢さまと御話してゐましたんですよ。（背後を向いて淑芳に）やつぱりそうでしたわ。

淑芳うれしそうにうなづく。

金蓮。（燈籠を持つたまま階段を走りくだッて、喬生の手を取つて）散々お嬢さまがこがれてゐらッしやるのに。どうしてあんな薄情な真似をなさいます？　男のかたつて、ほんとにひどう御座いますのねえ。

喬生。（力のない聲で叫ぶ）放して下さい。よして下さい。僕は道をまちがつてやつて来たんです。

金蓮。道を？――でもお嬢さまへの道は、ちッともまちがッてをりませんわ。（笑ひ出して）まア面白い喬生さま。……なぜ又そんな云ひわけを仰いますの？　そんな駄々をこねずに、さア早くいらッしやいましッてば。

（喬生の手を取つて引く。）

喬生、踏みとどまらうとあせりながら、夢遊病者のやうに引かれて階段をあがる。

淑芳。（いそいそと迎へて、金蓮に代つて彼の手を取りながら、軽く頭をさげる。）しばらくで御座いましたのね。

喬生思はず挨拶を返す。

淑芳。あたし、きッと来て下さると思つておりましたわ。切なく思ひながら、でも一所懸命今まで御待ちしておりましたわ。とうとう……。ほんとによく来て下さいましてね。（彼を室へ導き入れやうとする。）

喬生。（聲をふりしぼつて）放して下さい。

淑芳。（静かに振り返つて嫣然と）なぜ？

喬生。なぜでも。――（責め問はうとして真ッ直に彼女を見つめる。が、すぐ敗北して横――看客席のはう――へ顔を向けながら）僕を、あなたはたましてゐたちやありませんか。

淑芳。（頭をさげて）堪忍してね。……あたし、ほんとに少しづゝうそを吐いてをりましたわ。でも、それもみんなあなたに向ひたいりでしたの。――御わかりになつてね？　どうぞ堪忍して

喬生。だが、なぜあなたはこんなにたつてる罪を……

匿したんだ？
淑芳。どうしてそんな事を御きゝなさいます？
喬生。どうして？
淑芳。それより、あなたをこがれたばかりに死んだあたしの事を、なぜ聞いては下さいません？　あなたは奥さんが御ありになり、あたしは無理矢理政略結婚を勸められて……いゝえ、それより何より、世の中の馬鹿げた窮屈な階級の差別なんかに繩のやうに縛られて、どんなに思つたところでとても御一緒になれる道はないと知つて、此の世を怨んで泣き死に死んだあたしの事を、なぜ聞いて下さいません？　でも、死んでも思ひ切れずに、かうして又此の世へあがつて來て御目にかゝるあたしを、なぜ可愛さうとは思つて下さいません？
喬生。(見つめて)ほんとですか、そいつは？
淑芳。今になつて、あたしうそなんぞ云ふと御思ひになつて？
喬生。(唸つて)うむ、……でも――。
淑芳。わかつてますわ。それはそうとして、ほんとにあたしが愛してゐるんだつたら、なぜおれを一緒に死ぬはうへなんか引つ張つて行つたんだ、つて仰るんでせう？　そのとほりです。
喬生。(強ひてつよく)そうだ。
淑芳。それはあたしの罪ですわ。如何にも、あたしの若さの誤りと無謀ですわ。その事で御責めになるなら、あたし泣くばつかりですわ。(片手の袖で顔を蔽つて)……どうぞ堪忍してね。あなたを一緒に死なせたいなんて、あたしどうして矢鱈に思ふもんでせう。此の世の中の何よりも愛してゐるあなたを――それどこかあなたの爲めにならあたし二度でも三度でも死にますわ。いゝえ、何十度でも何百度でも。……でも、あたしを死の世界からさへ引つ張りあげた情熱が、その事實の矛盾をあたしに考へさせる事を許さなかつたんです。いゝえ、考へる事はどんなに考へても、あたしの願ひを貫く爲めには、どうしてもかうしなくてはゐられなかつたんです。その切ない立場の矛盾を、惡く御思ひにならないでね。(こみあげて來る涙を拭いて。間。)でも、どうしてもあなたが此の世に生きてゐたいつて仰るんでしたら、あたし立派に心を定めますわ。今夜かぎりもう思ひ切ります。……これから後、決してあなたを誘惑したりはしませんわ。あなたのはうから、たとへ又今夜のやうに訪ねていらしつても、もうきツと御目にかゝりません。今まで御目にかゝれただけでせめて滿足して、あたしのキリのない慾ばつた心を殺しますわ。キット殺しますわ。でも――でも――今夜一晩だけは許してね。かうしてしばらくぶりで御目にかゝつたり、御聲をきいたりして

は、あたしとても此のまゝ御返しする氣なんか出來ませんわ。あたしを可愛さうに思つて、今夜だけ御話をして明かさせてね。

喬生。(感動させられて)そんなに迄、あなたは僕の事を思つて下さつてゐた……ゐるんですか？

淑芳。(うなだれて)えゝ。(又顔をあげて)それが今まで御わかりにならなくッて……？

喬生。(追憶に輝かされながら)わかつてゐました。あなたの氣もちがうそだなんては今までも思へなかつた。でなかつたら、どうして僕だつてこんなに苦しんだりするもんですか？　でも——でも——今までわからないところがあつたんだ………。

淑芳。今はおわかりになつて？

喬生。わかりました。何もかもわかつた、あなたがすッかり正直に打ち明けて下さつたお蔭で。………(歡喜につつまれて)ああ、やつぱりほんとうの戀だつたんだ。二度と獲がたい珠だつたんだ！(熱情に燃えあがつて淑芳を抱きしめる。)

淑芳。(よろこんで)苦しいわ！——(喬生を見あげて)ぢや、今晩だけは話し明して下さつて？

喬生。今晩？——なぜ？

淑芳。(悲しそうに)やつぱり駄目？

喬生。今晩どころか、明日の晩だッて、明後日の晩だッて………

淑芳。でも——。

喬生。此の後いつの晩迄だッて。

淑芳。でも——。

喬生。死ぬのが怖かつたのはもう前の事です。一遍あなたから離れて見て、僕に取つてあなたがどんな價値のある人かッて事が、それまで考へてゐたよりまだ何百倍價値のある人かッて事が、わかりました。あなた無しにこんな世の中に生きてゐたッて、どうするもんか？死んで初めて生きるんだ。一緒に死んでこそ、僕達の戀愛は成就するんだ。

淑芳。(見上げて)それほんと？

喬生。ほんと以上だ！

淑芳。あなた！

二人しッかり抱き合ふ。

金蓮。(燈籠を持つて柩のはうへ行く。)ではお孃さま。

淑芳。ぢや、あなた。

喬生。淑芳さん！

淑芳と喬生一緒にそッちへ行く。と、柩の蓋自然にひらく。喬生脚を中へ入れる。つゞいて淑芳。——二人中へ這入り込む。と、

蓋又静かに自然に降り、喬生の着物の裾僅かばかりを残して閉ぢる。

あと、金蓮ひとり棺側に立つ。瞬く燈籠の光。

金蓮。(正面を向いて嘆息する)ああ、ほんとによかつた。……(間)あたしにも戀があつたら……。

見る見る燈籠の光消える。室の中しんとした暗黒。

全舞臺静かに暗くなる。

第二場

人物

張老人。

湖心寺の和尚

時

前場の數日後の晝。

所

前場に同じい。

明るくなると、張老人下手から現れる。

張老人。(大字の扁額を見あげて)ここが湖心寺か?——棺の置いてある所はどこぢや?(上手へ行かうとする。)

薔薇色の豚見たやうに肥つた和尚出て來る。

張老人。(頭をさげて)あなたはここの御住持かな?

和尚。(怪訝さうに)さうです。

張老人。それはよかつた。そんなら遠慮なく伺ふが、淑芳つて云ふ娘さんの棺を置いてある室はどこですかな?

和尚。(一寸首をかしげて)淑芳?

張老人。左様。何でももとの興洲の判事の娘ぢやさうぢやが。

和尚。(理解して)ああ、あの、北のはうへ御轉任の時棺を頼んでおいでになつたかたの?それなら、そこの室にあります。(指さす。)

張老人。おお、さうか?(いきなり階段をあがつて行かうとする。)

和尚。(老人の袖を引きとめて)もしもし、どこの御老人か知りませんが、一體何の御用ですか?

張老人。(片足は階段へ掛けたまま)用?わしはな、一寸その部屋を拜見したいんぢや。

和尚。(よろこばしさうに)ぢやア判事さんの御親類ですか?

張老人。いやいや。

和尚。(失望して)御親類ではない?——ぢやア御親戚になりたいわけ

は？
張老人。それを話せば長くなる。見てから、それは御話しやう。(立あがつて行かうとする。)
和尚。(引き留めて)それは困ります。愚僧は此の寺を預つてゐる責任者です。その承諾なしに勝手に部屋の中へなんぞ入つて頂いては、迷惑千萬です。それに、その部屋には錠がかかつてゐて、愚僧の鍵がなければ開きません。
張老人。ぢやあ鍵を貸して下さい。
和尚。その前にわけを話して下さい。
張老人。それはあとから……。
和尚。(頑として)いけません。
張老人。(憤慨して)何て面倒な和尚さんぢやらう。實に官僚式ぢや。
和尚。(冷かに)愚僧は、預けられたかたに對して重大な責任を負つてゐますからな。
張老人。(我を折つて)ぢやあ仕方がない。話しませう。わしの隣りに、極懇意な窩生と云ふ若者がゐてな、それがその棺の主に惚れられたんぢや。そして毎晩會ひに來るのを、わしが忠告して思ひ切らせたんぢやが、どうもやつぱり心底から思ひ切れんと見えて、それからは毎日酒ばかり飲んで暮してゐる。はて困つたもんぢや、ぢやが、なに會はずにさへあれば、そのうちに思ひ切る時も來るやらう、と思つてゐると、三四日前の晩から、不意にどこかへ行方がわからなくなつて了つたんぢや。わしも心配してな、あつちこつち心當りを探して見たが、どこにもおらん。で、こりやもしかしたら、あの娘にたぶらかされてここへ來たんぢやないかと思つて……。
和尚。(遮つて)一寸待つて下さい。一體その御話はいつの事です？
張老人。いつ？
和尚。その三四日前とかッて仰るのは？
張老人。無論今日から三四日前ぢや。
和尚。(吹き出して)戯談ぢやありません。それぢやあ、此の棺の主は疾くに死んでるぢやアありませんか。
張老人。無論ぢや。
和尚。何が無論です？　失禮ですが、あなたは少し頭がどうかしてゐらつしやる。でなければ、愚僧をからかはうとしてゐらッしやるんだ。どッち道、その御相手は御免蒙りませう。(去らうとする。)
張老人。(慌てて和尚の衣の袖を引きとめて)戯談でもボケてゐるんでもない。正眞正銘の事實ぢや。
和尚。さう仰るのが證據だ。
張老人。(肝癪を起して)えい、ぢやから、わしはあんなにあんたに話

さんと云つたんぢや。あんたは、死人の取り扱ひが專門家で、おまけに人へは始終地獄だの極樂だのと御說教をして聞かせてゐるくせに、何て想像力の足りない、凡俗的な常識家ぢや。もッとも、ぢやから今時坊さんなんぞが勤まるんぢやらう。

和尙。(憤つて)ぼけてゐるくせに、人を侮辱するのはよして下さい。

張老人。自分を侮辱なさんな。

和尙。(益々怒つて)いよいよひどい侮辱だ。――(思ひ返して)では、あなたはたしかに、その喬生とか云ふ御知り合ひがそこの棺の主と會つてゐたと仰るな。

張老人。たしかとも。これがたしかでなかツたら、世の中にたしかな事は一つもなくなる。

和尙。そうして、もしかしたら今あそこへ來てゐるのではないかと仰る?

張老人。そのとほり。

和尙。(突然頤をかかへて、鵞鳥のやうな聲で笑ひ出して)はツはツはツはツ、これはすばらしいロマンチシズムだ。なるほど、此の支那には昔からそう云ふ傳說や物語が澤山ありますよ。愚僧も今まで幾つかよんだもんだ。だが、眼のあたりそれを信じ切り、然かも白晝その信仰を主張して憚らないなんてかたには、愚僧此の年になつて初めて御目にかかりました。いや、これは仲々面白い。立派に話の種になる。どうせ愚僧も用のない身體だから、ぢやヤそのあなたの古風な白晝夢がほんとかどうか、一つ慰みに試驗して見ませうかな。(先きへ立つて階段をあがり、腰へつけた鍵の一つで錠をあける。)

扉ひらく。

牡丹燈籠、葬ひ人形等、第三幕第一場に同じい。ただ棺の蓋の一部から、喬生の裾が少し現れてゐる。

和尙。(中を一見して老人へ向つて)さア篤と御しらべなさい。

張老人。(室の中を見廻す。)なるほど、喬生の話したとほりの部屋だ。(不意に、喬生のハミ出した着物に目がとまる。)(おや、これは何ぢや?(手に取つて見る。)あツ、あれの着物ぢや。(ぶるぶる慄へながら棺の蓋を持ちあげて覗く。そして)おお!(叫んで尻餅をつく。)

和尙。御老人、どうしたんですな?(つづいて蓋を跳ね開ける。同じく叫ぶ。)あツ。(もう一度見て)これは一體どうしたんだ?若い男が××××つてゐる。(眩暈を感じたやうに、横へよろめいて壁へ倚りかかる。)

張老人。やつぱりさうぢやつた。おお可愛そうに、やつぱり負けて破滅したんぢや。(呻きながら立ちあがつて又棺を覗く。)どつちも、ま

だ生きてゐるやうな髪々とした顔つきぢや。まるで眠つてるやうぢや。

和尚。(急に憤慨して)怪しからん。實に怪しからん。まぎれもない××。(俄かに老人へ取り縋つて、懇願的な口調で)御老人。後生ですから、どうか此の事は誰へも話さずにおいて下さい。仕方ないから、愚僧は自前で此の二個分の死骸を埋めてやります。その代り、此の事件は一切二人だけの胸へ收つて置きませう。もしこんな事が世間へ知れ渡つたら、それこそ此の寺の、延いて愚僧の評判——(胸を指して)名譽に係はります。

張老人、彼の聲も耳に入らずに、涙をこぼして死體を見る。

和尚。(重ねて)いや、全く盗人に追錢てのは此の事です。此の春、娘の遺言にまかせていづれここへ葬りに來るから、ッて云ふ約束で預けられたまんま、未だに判事さんからは一言の音沙汰もないんです。こりやあテッキリ置き逃げです。葬式料は取れず、コッちから持ち出して埋めるなんて、いや、人間生きてゐるといろんな思ひも寄らない災難に出ッくはすもんです。さすが法律家だけ、こいつ新手の詐欺だ。それだけでもかなはないのに、もし此の上世間の噂にでものぼつた日にやあ、全く泣きッ面に蜂です。愚僧だッて、極樂へ行かないあひだは食べなくてはいけません。その唯一の財源がこんな事になるなんて……。(胸を打つて)御老人、きッと約束して下さるでせうな。(老人の手を握る。)

張老人。(涙にくれて)おお畜生!

和尚。御老人、御老人!

急速に幕

第五幕

人物

張老人。

和尚。

鐵冠道人。

その附添ひの童子。

喬生。

淑芳。

金蓮の人形。

神將二人。仰々しい鎧を着け、長い戈を握り、眞ッ黒な鬚髯を生やした厳めしい恰好の大男達。

大勢の見物人。

時

前幕よりも一ヶ月ばかり後。

所

樹を持つた御心寺墓地風景の前。

幕あくと、正面に數段の嚴めしい壇。その一方の横に、牡丹燈籠と金蓮の人形。前に頻りに燃えてゐる木組み。

その左右には澤山の見物人。前方の椅子に貴人や豪族や富んだ商人達、背後に勞働者や農民達立つ。その中に張老人が混る。

豪族A。何しろ今日は珍しい觀物です

老富商B。こんな事は、私も生れて初めてですよ。

貴人C。(憤慨に堪えないやうに)ああ云ふ、階級の尊嚴を無視する奴は、實際極刑に處する必要があるです。

貴婦人D。ほんとに、わたし達を侮辱しておりますのね。おまけに死んでまで貧乏書生とイチヤつくなんて、まア何ていやらしい……。

好色らしい貴人E。(彼女へ向つて)だが、淑芳つてのはすばらしい美人だそうぢやありませんか。

貴婦人D。(口惜しそうに)何だか美人なもんですか。――もつとも、わたくしまだ見た事は御座いませんけれど。

勞働者F。淑芳ツて娘、一寸型を破つてるたア。

勞働者G。全くさ、判事の娘なんかにしちやア大出來よ。だが、そいつを又何だつてこんな大袈裟な裁判にかけるんだ?

勞働者F。(椅子の連中を指して)此の御連中が癪にさはつて堪らねえんだとよ。

農民H。ほんとに書生と淑芳は出て來るだらうかな?

農民I。(迷信的な口調で)鐵冠道人さまの法力だもの。出て來ねえもんか!

急に群集ざわめき立つ。

そら、道人さまだ、道人さまだ、道人さまのおいでだ!

上手の、自然にひらいた群集のあいだの道を、和尚の案内で道人現れる。黄巾をかぶツた嚴しい顔つきの中老人。朱の衣の童子あとに從ふ。

群集頭をさげる。

和尚。(壇の横手に留まつて)どうぞ――。

道人、椅子の人々に輕く會釋し、壇にのほつて椅子にガツシリ腰をおろす。童子傍に立つ。

和尚。(改めてその下へ立つて腕を拱いて)名譽あるかたがた、並びに

慇懃の聲びを御きき下すつて、わざわざ今日四明山から御來臨下さいまして！　一同に代り厚く御禮申しあげます。

道人鷹揚にうなづく。和尚横へ退く。

道人、童子に目くばせする。童子かしこまツて、壇上に用意された紙と筆を取つて渡す。道人、紙へ呪文を書いて卷き、默禱して下の火の中へ投げ込む。紙、白煙を立てて燃えあがる。と、忽然として神將二人、煙の中から現れる。

神將。(直立不動の姿勢で、道人へ一齊に擧手の禮をし、粗野なドラ聲で)道人殿、何の御用でありますか？

道人。此の墓地に埋まつてゐる、喬生と淑芳と云ふ二人の若い奴を連れて來い！

神將等。はッ、(聲を揃へて復誦の調子で)此の墓地に埋まツてゐる喬生と云ふ二人の若い奴——きツと連れて來るであります。(機械のやうに直線的に背後の墓地へ去る。)

道人瞑目する。群集、緊張したザワメキと沈默。間もなく、神將等、喬生と淑芳を鐵鎖に縛つて引き立てて來る。立つてゐる群集、感嘆の聲をあげる。背後の婦人達のあいだには、憤怒と痛快の表情。

老張人。(手を擧げて)おお、可哀そうな喬生！

喬生。(老人を認めて)おぢいさん！

張老人。喬生！

神將等。(喬生達を壇下に引き据ゑて)道人殿、御命令[illegible]連れて參[illegible]たであります。

道人。よし。

神將等、鐵の鎖の一端を持つたまま横へ退き、[illegible]

道人。(喬生達へ向つて)顏をあげろ！

喬生。ちやんとあげてゐる。

道人。女はあげておらん。

うなだれてゐた淑芳、喬生と顏を合はせ、[illegible]

[illegible]しそうな[illegible]

勞働者の聲。なるほど美人だなあ。

トテシヤンだ。

(淋ましそうな聲)[illegible]

道人。こら喬生、[illegible]

喬生答へない。

道人。此の[illegible]

は[illegible]

喬生、[illegible]

道人。湖心寺へも二度と來んと誓つたな。その言葉をどうした？
喬生やつぱり無言。
道人。（荒く）なぜ返事をせん？
喬生。返事が出來ないから。
道人。なに出來ない？　なぜ出來ん？
喬生。誓ひを破つたから。
道人。ふむ、まだお前にも多少の廉恥心が殘つてゐると見えるな。
喬生。廉恥心なんか、今も昔もあり過ぎるほどある。
道人。（大聲で）うそを吐け！　そんなに有り過ぎるなら、なぜ二つとも誓ひを破つた？
喬生。べつに二つ破つたわけぢやアない。一つ破つたら二つになつただけだ。
道人。減らず口をきくな。そんならなぜ一つ破つた？
喬生。破るつもりぢやアなく、無意識に破つちまつたんだ。その點、濟まない事は濟まないにしても、やむを得なかつたんだ。
道人。自己辯解をするな。
喬生。自己辯解ぢやアない。眞實を云つてるんだ。もつと大膽に云はせて貰へば、有意識でした約束は、無意識の行動まで制限する力はないと思ふ。
道人。馬鹿を云へ！
喬生。馬鹿ぢやアない。今から考へれば、あんな約束をしたのが間違ひだつたんだ。その誤りから、必然ああ云ふ結果が生れたんだ。
道人。（怒つて）ああ云ふ結果？必然？‥‥何と云ふ云ひ草だ！
喬生。僕は、あなたの處へなんか行くんぢやなかつたんです。
張老人。（突然叫ぶ）お　お喬生！
喬生。（一寸そッちを見て）張おぢいさん。あなたの親切は今も感謝してゐます。僕はあの時たしかにびつくりして、見苦しく度を失ひさへしたんです。それは、然しあんまり思ひがけない事實を發見した爲めと、此の戀人の心がよくわかつてゐなかつた爲めです。
道人。（一喝する。）餘計な人間へ向つて餘計な事をしやべッちやアいかん。
喬生。餘計な事ではなく、答辯のつづきのつもりだ。
道人。變にお前は理窟張つた奴だ。そしてゾンザイな言葉を使ふ奴だ。――すると、結局お前は誓ひを破つた事を悪いと思はんと云ふのか？
喬生。それ自身悪かつたとは思はない。むしろ、自分のほんとうの道へ進んだ事をよかつたと思つてゐる。
道人。馬鹿！　恥を知れ！　恥を！

喬生。知つてゐる。だから、あなたへ話しては濟まなかつたと始めから云つてるんだ。

道人。濟まないだけでは濟まされないぞ。おれは一體、最初からこんな醜聞事件に關係するのを好きぢやアなかつたのだ。同時に、お前が躊躇なんぞ爲てさうな氣がして、書くのが當に氣が進まなかつたんだ。

喬生。お氣の毒さま――だが、そんならさう仰つて下さればよかつた。

道人。誰がお前になんか遠慮するもんか？ おれはただ、見す見す前途ある若者の破滅を見るに忍びなくて、誓ひを立てさせて聞き屆けてやつたんだ。それをお前は見事に破つた。誓ひには必ず酬ひと云ふものが附いてゐる事を、お前は知つてゐるか。

喬生。知つてゐる。身を以て知つてゐる。その酬ひに僕は死んぢまつたんだから。

道人。よく先き走つた物の云ひかたをする奴だ。お前はたとへそれで濟んだにしても、おれへ掛けた手數と面倒はどうする？

喬生。どうともしやう。もしそれが大へんあなたに面倒をかけたんなら。

道人。よしよし、おれは充分その償ひを請求してやるぞ。……が、その傍にモウ一つ重大問題があるぞ。今日おれがかうして大勢に揉まれて來た事件が、それだ。お前達――お前と云ふ男と云ふ、此の稀な[illegible]で滿足に墓へ埋られながら、なぜまた時々此の世の中へ出かけて來るんだ？ なぜ雨の降りさうな夕暮や、月の明るい晩なぞ、矢鱈に二人連れ立つてそこらをブラつき歩るのだ？ そのお蔭で、此の邊一帶の人達が大迷惑をしてゐるのを知らないのか？

喬生。（不思議さうに）迷惑？――どんな迷惑？

道人。お前達を見かけた者は、みんな氣ちがひになるのだ。

喬生。（おどろいて）えッ……ほんとか？

道人。ほんとともさ。――みんなお前達見たいな氣ちがひになるのだ。今までおとなしくて、何でも親や目上の者の云ふ事をきいてゐた娘が、急に猫のやうに云ひつけを聞かなくなつて、どうしてもおやじの定めた結婚を承知しなくなつたり、自分の好きな男と勝手に駈け落ちしたり、それどころか、女房のある男とくッついて見たり、甚だしきに至つては貞淑な細君が夫を振り棄てたり……。

椅子席から謹聽の叫び聲。さうだ、そのとほりだ。

道人。更に甚しい奴は、お前達見たやうに身分や階級や年齢の違ふ男と女と、平氣で一緒に同棲したり……。

椅子席の叫び聲。さうだ、そのとほりだ。

背後の黑衣の中から[illegible]するやうに[illegible]

道人。或はお前達を眞似て一緒に死んだりさへする……。
椅子席から興奮した聲々。全く怪しからん。
秩序紊亂だ。
風俗壞亂だ。
そんな手本を示した奴は、假に極刑に處する必要がある！
貴婦人達の聲。ほんとにわたし達の面よごしですわ。
わたし達共同の敵ですわ。
勞働者農民達。（あとへつづいて）惚れるに上下の區別があるもんか。
おんなじ人間でえ。
今までが窮屈過ぎたんだ。
無理があるから死ぬんだ！（等。）
椅子席の人々。（その呼び聲に憤慨して）以ての外の雜言だ。
聞き棄てにならん。
あんな連中があんな事を云ひ出すやうになつたのも、やつぱり爾生と淑芳の手本のせゐだ。
から騷がれては道人の新聞の邪魔になる。
道人。（人々へ向つて）靜かに。
なほざはめく。
道人。（神將等へ向つて）神將達！
神將等。はッ！（飛び立つて、兩側の勞働者農民達へ戈を指し向ける）騷ぐとこれだぞ！
勞働者農民達。おれ達ばかりぢやアねえ。その椅子の人達もだ。
椅子の人達のはうが先きだ。
不公平だ、不公平だ！
椅子の人達。おれ達は道人に敬意を表してゐるんだ。
お前達は新聞の妨害者だ。
勞働者農民達。おれ達ア、べつに道人を御賴み申したわけぢやアねえ。だが、ここへ來てゐていいなら、批評だツて一緒にしていい筈だ。
道人。（荒い聲で）此のうへ騷げば、神將の武器がものを云ふぞ！
群集急に靜まる。
椅子の人達の滿足そうな呟き聲。それ見ろ！
いい氣味だ！
道人。（つづけて爾生達へ向つて）そう云ふ淫蕩な亂倫な行爲が、お前達が死んでから、又そうやつてぶらぶら歩き廻るやうになつてから、滅茶苦茶に多くなつたんだ。そこで恐慌を起して、お前達を罰するやうに、又二度とお前達が出て來ないやうに、此の土地の主立つた人達が和尚を使ひにしておれへ賴みによこしたのだ。

和尚。（立ちあがつて、慇懃丁寧に）感謝に、此の籠つてゐる寺の名譽の爲めに——その恢復の爲めに、進んで使者の光榮を獲させて頂きました。

喬生。（淑芳と顔を見合はせて）ほう、で、今日からして縛られて、引ッ張られて來たわけか？

道人。そうだ。お前達はその自分達の起した流行病を——熱病を知らずにゐたのか？　迂濶者め！　ここの人達は、一口に喬生病だの淑芳熱だのとまで呼んで、赤痢やコレラよりもこはがつてゐるのだぞ。

喬生。知らなかつた。

淑芳。まア、そんなにあたし達の散歩が影響してゐたんでせうか？

道人。（淑芳へ）散歩とは何だ？　支那には、昔から男と女と一緒に街を散歩するなんて習慣は絶對ない事を知らんか？　一體お前が悪いんだぞ。お前が不埒な非常識な戀をした御蔭で、此の一切の事件が起つて來たのだ。お前のやうなアバズレ女を生んだのは、此の大支那帝國の最も大きな誤りだ。

椅子席の人達。ヒヤヒヤ。

淑芳。（獨り言ふうに）あたし知つてますわ、裁判官てどんな人か。……あたしの父もやつぱりそうでしたのね。みんな龍の[illegible]ずやね。

道人。こらッ！

勞働者達一齊に喝采する。

道人。（喬生へ）だが、知らなかつたとあれば仕方がない。これからは恐縮して、二度と再び二人で此の世へ現れて來たりしてはたらんぞ。いいか？——素直に今までの行ひを後悔するなら、今日は神將に鞭を二三十打たせるだけで勘辨してやる。もしきかなかつたりすれば、極刑でなくては濟まされん。

椅子席の人達。二三十位の鞭ぢやあ輕すぎる！

老富商。こりやア全く安すぎる。

道人。（喬生達へ）特別の計らひだぞ。無論異議はあるまい。（童子へ向つて）紙と筆を喬生へ渡してやれ。

童子。はい。（二つを取つて喬生の前へ置く。）

道人。ついでに、二人の鎖を解いてやれ。

童子。はい。（寄つて、喬生の腕を縛つた鎖を、次に淑芳のを解く。）

喬生。（道人へ向つて）どうしろと云ふんです？

道人。誓書を書くのだ。これからはもう決して此の世の中へ出て來ないと云ふ證文だ。……そして各々名前を書いて、下へ印を捺すの

だ。印を持つてゐなければ爪印で勘辨してやる

喬生。(決然と) 書かない。

道人。(おどろいてきびしく) なに？

喬生。たとへどんな目に會はうとも書かない。

道人。馬鹿め！——お前は、それほど二人で散歩したいか？

喬生。散歩もしたい。冥土ツて云ふ所は、靜かは靜かだがそれツきりの所で、僕のやうに若くて、然も有り餘る情熱を持つて死んで行つた者には、とても單調で我慢出來ない。いくら不合理や矛盾だらけの世の中でも、僕達にはやつぱり此の世の中こそ世界だ。

道人。幾ら此の世が戀しくても、もうこれからは、どッち道お前達は出て來る事はならん。おとなしく證文さへ書けば、ただお前は餘計な罰を受ずに濟むだけだ。これはおれの慈悲の計らひだ。

喬生。(冷笑して) 書かなければどんな罰を受ける？

道人。書かなければ、二人とも地獄の獄屋へ送つて、永久の水火の苦痛を嘗めさせてやる。

喬生。(急に笑ひ出して) よろこんでその苦痛を嘗める！

道人。(あきれて) 馬鹿！……お前はあんまり恐ろしくて氣がちがつたか。

喬生。(首を振つて) 決して。

道人。ぢやあ、お前は、おれがきびしい

のか？

喬生。そうでもない。——いや、それもある。が、それより何より、僕は自分のした行爲、又蒙らせた影響の一切を惡いとは考へられないんだ。むしろ、大いにいい事だと信じてゐるからだ。

道人。馬鹿を云へ！

喬生。そう云ふあなたこそ馬鹿を仰るな。一體僕達の運命を此の世で悲劇に終らせた原因は何だ？、、、、、でなくて何だ？ 馬鹿げた階級の區別や因習でなくて何だ？ その御陰で、僕達はあたら此の未練の多い地上に生きる事が出來なかつたんだ。その、、、や差別や因習を、僕達の果敢ない散歩が幾分でも破る役に立つとしたら、いや、立つたとしたら、僕達に取てこんな愉快な事はない。これこそほんとの復讐で、又生きてゐるあいだ何の價値のある仕事も出來なかつた僕のせめてもの埋め合はせだ。その愉快と功績を、どうして此の世界の人達の前で遠慮したり否定したりする必要があるもんか？

勞働者農民等。(大聲で) そうだ。そのとほりだ。

喬生、決して遠慮するな。

證文なんか承知するな。

喬生。(彼等へ向つて) 勞働者農民諸君！ 諸君の手で、どうか此の世

をほんとの世界にしてくれ給へ！
勞働者農民達。よし、引き受けた！　きッとする！
椅子の人達。何て男だ！
　實に不逞極まる奴だ！
　おそるべき危險人物だ！
貴婦人。(おどろきの餘り感心したやうに)隨分勇敢な人ね。
人々の聲。極刑だ！　地獄の牢屋だ！──放免だ！　無罪だ！──地獄の牢屋だ！　無罪だ！
道人。靜かに！
　神將等、又戈で背後の群集を脅す。
聲々。神將不公平！　不公平！
道人。(改めて喬生へ向つて)喬生、では、どうしても證文を書かないか？
喬生。書く代り地獄の牢屋の底へ行く。
道人。きッとか？　あとで後悔しても追ッつかんぞ。
喬生。決して。
道人。よし。(淑芳へ向つて)淑芳、お前はどうだ？　お前は女の事でもあり、そんな目に會ふ位なら無論書くだらう。な。勿論一人だけ書いてもいいぞ。

　淑芳一寸考へる。
道人。(童子へ向つて)紙と筆を淑芳へ廻してやれ！
童子。はい。(それらを彼女の前へ移す。)
道人。早速書け。
淑芳。(顏をあげて)もしあたしだけでも書いたら、此の人(喬生のほうを一寸向いて)の水火の罰を許して下さいます？
喬生。(彼女へ向つて咎めるやうに)淑芳！
道人。それは出來ん。
淑芳。ぢや、あたし達二人はべつべつになりますの？
道人。そうだ。
淑芳。二人とも書かなければ？
道人。どつちも永久の火責め水責めだ。
淑芳。いゝえ、それより二人一緒にゐられます？
道人。牢屋で苦しむなら、一緒だらうが何だらうが勝手だ。
淑芳。まアうれしい！(いきなり喬生へ抱きつく。)
喬生。(抱き返しながら)一緒に行つてくれる？
淑芳。行きますとも。一緒にさへゐられるならどんな處へだッて。
　緊密な抱擁。
　椅子席と背後の群集を通じての唸り聲。「おう──」。

椅子席の聲。(暫時して)氣ちがひだ！

勞働者等。えらいぞ！

道人。(神將等へ向つて)あきれ返つた奴どもだ。二人を打ちこらせ！

神將等。はッ、二人を打ちこらすであります。(いきなり腰に挾んでゐた節竹の鞭を拔いて、二人を一つの塊りの如くに打ちまくる。

張老人。おお……。(見るに堪えられず卒倒しやうとする。)

群集、老人の身體を支へる。

喬生と淑芳、見る見る、、、く染められて行く。一緒に微かに唸る聲。

道人。(やがて)よし、やめろ！

神將等。はッ、やめるであります。(、、、を收める。)

道人。(倒れ呻いてゐる二人へ向つて)どうだ、苦しいか？　地獄の責苦は、だが、これどころの騷ぎではないぞ。少しは懲りたか？　懲りたら書け！　今書いてもおそくはないぞ。

淑芳。喬生、どこ迄も。

喬生。おお、いつ迄も——。

貴婦人の、困惑と讚嘆を混交した叫び聲。

まア——。

道人。やむを得ん。(神將へ向つて)地獄の獄屋へ二人とも曳け！

神將等。はッ、地獄の獄屋へ二人とも曳いてゆくであります。(再び大股に二人へ近づいて、音を立てながら鎖を掛ける。)

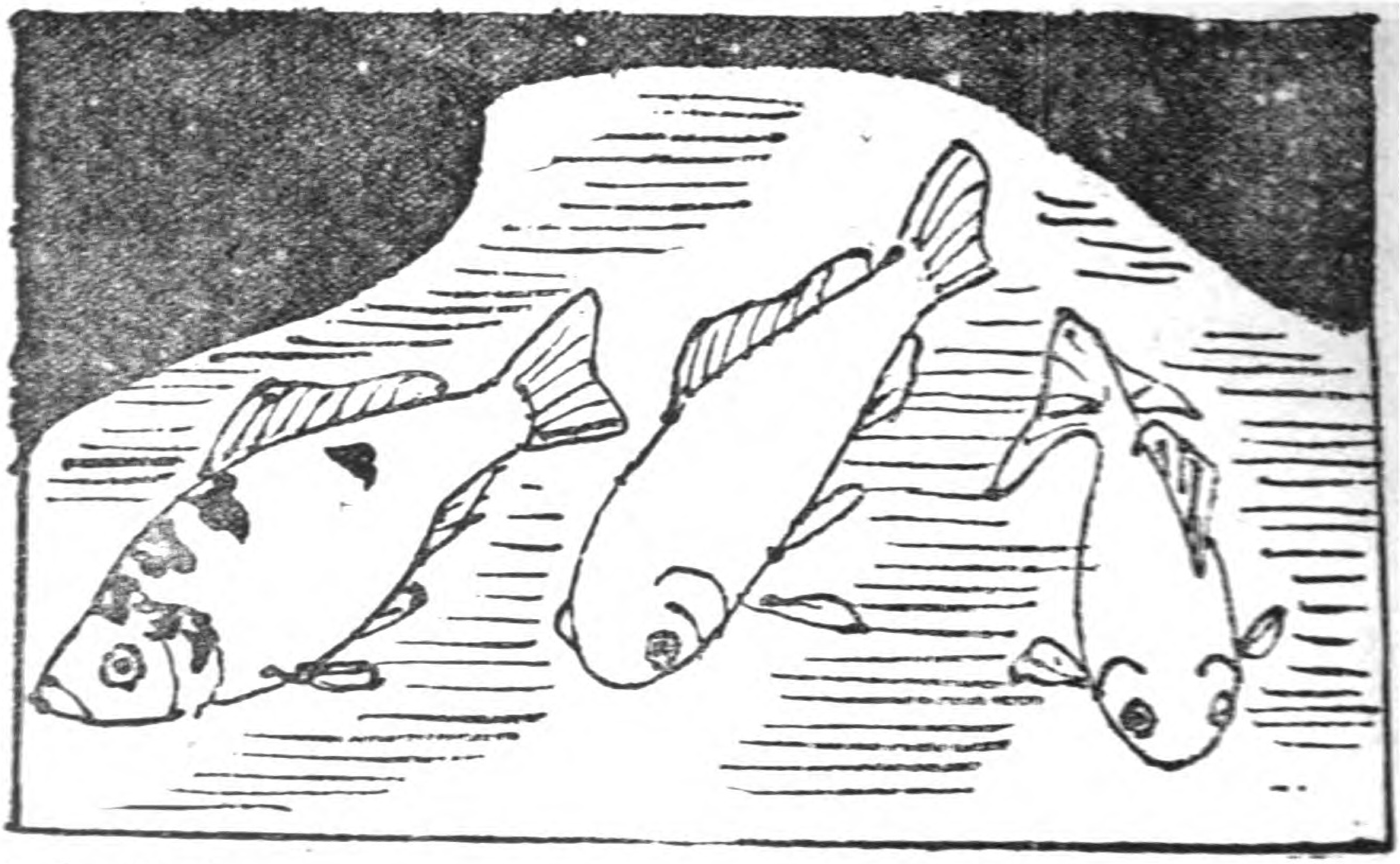
道人。(童子に)此の不都合な人形や燈籠を燒き棄てろ！

童子。はい。(牡丹燈籠と金蓮の人形を火の中へ投げ込む。)

燃えあがる火と煙、群集の叫ぶ聲の中に——幕

1927・12

作者附記。眼ある讀者は、剪燈新話中の『牡丹燈記』と比較されん事を。了意、圓朝の如きは敢て云はず。



明日は天氣

岸田國士

夫
妻
宿の女中

一

眞夏――雨の日
ある海岸の旅館――海を見晴せる部屋

夫（腹這ひになり、泳ぎの眞似をしてゐる）
妻（繪葉書を出す先を考へてゐる）
女中（はひつて來る）
夫（泳ぎの眞似をやめて、新聞を讀んでゐる風をする）

女中。ほんとうに毎日お天氣がわるくつて、御退屈で御座いませう。
妻。えゝ。でも、海へは何時でもはひれるんだから、かうして、靜かな處で、雨の音を聽いてゐるのもいゝわ。どうせ避暑に來たんだから、凉しいのが何よりよ。
女中。それやもう、お凉しいことは、なんて申しましても、お天氣の日よりはね。これで、海岸と申しましても、日が照りますと、なかなか、ぢつとしてはゐられないんで御座いますよ。
妻。さうでせうね。でも、かういふ風だと、お客さまも少いでせう。
女中。はあ、もう、これで、ぽつぽつお引上げになる方もありますんですよ。東京の方も、お凉しいさうで御座いますね。昨今は…………。
妻。そんなことはないでせう。あたしたちの來た日なんかは、少し曇つてたけれど、隨分蒸し暑かつたわ。早くどつかへ行きたいつて、忙しいところを逃げ出して來たんですもの。
女中。さうで御座いませうかね。昨晩、こちらの番頭さんが東京へ參りましたんですよ。一寸、用が御座いましたもんですからね。その番頭さんから、今朝、電話で、東京も昨晩から大雨で、浴衣一枚では寒いくらゐだつて申して參りましたんですよ。
夫。おい、君、東京の話はよしてくれ。折角、仕事の事を忘れて二三日ゆつくり頭を休めに來たんだから……。
女中。おや、とんだ失禮を……。何か御用は御座いませんか。
夫。あつたら呼ぶから、まあ、君は引下つてくれ。
妻。なんですよ、あなたは……そんな無愛想なことをおつしやつて……。
女中。どうも、失禮いたしました。(出で去る)
妻。およしなさいよ、そんなに八ツ當りをなさるのは……。いゝぢやないの、雨が降つてたつて……泳いでらつしやいよ、そんなに泳ぎたければ……。
夫。雨が降つてゝも泳げ……? 人が見たら氣違ひだつて云ふぜ。
妻。疊の上で泳いでる方がよつぽど氣違ひだわ。
夫。いつそ、東京へ歸らうか。
妻。もう一日ゐて見ませうよ。なんだか、向うの空が明るくなつて來たようだわ。若しかしたら、明日はお天氣よ。
夫。東京は隨分凉しいさうね。こちらは毎日暑くつて、海へ一度もはひりませんつて、さう、書け、端書に。
妻。あたし、百合子さんに、かう書いたの。——東京はさぞお暑いことでせう。こちらは、朝夕の散歩に羽織がいるくらゐにて……。
夫。朝夕の散歩……?

妻。まあ、聴いてゐらつしゃい。――猟師がいるくらゐにて、日中は、海にはいり通しですから暑さ知らず……。
夫。やれやれ……。
妻。二三日の間に、恥かしいほど黒くなりました。
夫。おい。
妻。黙つてらつしゃい。――今日あたり、船で沖へ出て見ようかと相談をしてゐるところです。
夫。煩いな。そこにある端書、みんな、おんなじ文句か。
妻。大同小異よ。
夫。だれだれへ出すの。
妻。これは百合子さんでせう。それから、これが、母さん。これが、お孝ちゃん。これが、お隣の奥さん。これが、裏のお神さん……。
夫。おれは幸にしてお前と一緒にゐるから、さういふ端書は受け取らずに濟むわけだね。全く、避暑に行く女を友に持つ勿れだね。おや、ほんとに明るくなつて來たぜ。
妻。小止みになつて來たわ。うれしい。
夫。これ、なんていふ泳ぎか知つてるか。
妻。蛙泳ぎでせう。
夫。よし、さうだ。これは……？
妻。それで、やつぱり、泳ぎなの。
夫。泳ぎさ。水府流だ。これが、抜手……。
妻。あたしには、どれを教へて下さるの。
夫。まあ、蛙だね。これが一番楽で、易しい。一寸、此處でやつて御覧。
妻。いやよ、こんなとこぢや……。
夫。稽古をするのにや、此處の方がいゝんだぜ。
妻。いや。
夫。可笑しな奴だな。お前は一度も海へはひつたことはないつて云つたね。
妻。えゝ。
夫。怖がつちや駄目だよ。水に親しむことが一番大事だ。泳ぐ泳がないは別として、波にからだを浮かす時の氣持ちは、これや、一寸、類がないぜ。強いて類を求めれば……。さうさな、おれたちがはじめて戀を語つた日の、あの夢心地……。
妻。キザなことは云はないで下さい。
夫。どうしてキザなことだ。お前は、なんでも、それだからいけないんだ。物事を散文的にしか考へない。なるほど、われわれは、平生、無味乾燥な生活をしてゐる。おれは朝から晩まで、紙とインキ

と算盤の中に頭を突つ込み、お前は、朝から晩まで、綻びと七輪の間を往復してゐるのだ。おれたちの間に、もう、夢といふものはなくなつてゐた。いや、夢どころぢやない。おれたちは、もう、自分自身の姿さへ見失つてゐたのだ。

妻。………。

夫。たまたま得た僅かの金と、僅かの暇とが、おれたちを、今、あれを見ろ、あの海のやうに、限りなく廣い希望の前に立たせてゐるのだ。おい、聴いてるか。

妻。………。

夫。おれたちは、今迄、これほど太陽に憧れたことがあるか、近頃、おれが、これほど物に執着をもつたことがあるか。お前も女だ。おれの心の中に、恐らく永遠に消えようとしてゐた情熱が、今、再び、燃え上りつゝあるのを感じないのか。え、感じないのか。

妻。………（ちらと夫の方を見る）

夫。どうして、そんなに不思議さうな顔をしておれを見るのだ。おれは、三日この方降り續く雨の爲めに、氣が狂つたのではない。

卓上電話の呼鈴が鳴る。

夫（平氣で）おれは、電話などに用はな

………。

呼鈴が、更に、けたゝましく鳴り續ける。

夫。えゝい、やかましい。（受話機を取り上げ）もし、もし、なんの用ですか。えゝ、さうです。え、東京から……。東京の誰から………？　早くつないでくれ給へ。あ、もし、もし、さうです。あゝ、君か、………。なんだ、どうした。え、うん、なあに……そんなでもないさ。

妻。どなた？

夫。小林さ。

妻。小林さん。

夫。いや、いや、そんなこたないがね。馬鹿云ふな。は………。うん、なかなかいゝとこだ。あゝ、海は奇麗だよ。え、あゝ、ゐるよ、ゐるとも…………。嬶を連れてちや、臺なしさ。

妻。なんですつて………。

夫。こゝにゐるんだよ。こつちを睨んでやがるよ。

妻。なんのお話………。

夫。なんの話だつて聞してるよ。は………。東京は暑いかい。さうか、昨夕からね………。こつちは、もつと涼しいよ。なに、海は平氣だがね。あゝ、今も出掛けようとしてゐるとこだ。

妻。あたしから奥さんによろしくつて、さう云つて頂戴ね。

夫。へえ、わからないもんだね。そいつあ、大變だらう。今ね、家内から、君の細君によろしくだとさ。うん、適當にやつてるよ。大將は出てるかい。ちえツ、うるせえな。歸る時にや歸るつて、さう云つてくれ。ゐない時だけ追ひ廻すつていふ寸法だね。や、さよなら。え、あ、あ、わかつた。さよなら………。

妻。なんの御用………。

夫。用事なんかあるもんか。なんだ、雨が止んでるぢやないか。さ、今のうち、早く行かう。(慌てゝ浴衣を脱ぎすてる。下にはちやんともう、海水着を着込んでゐる)

妻(これもいそいそと座を起ち)そんな風をしていらつしやるの。

夫。あたり前さ。海は、お前、すぐそこだよ。地續きだよ。自動車へ乘つてゞも行くつもりか。

妻。ぢや、あたしは………。

夫。お前だつて、それでいゝさ。

妻。だつて、あたし、まだ海水着を着てなくつてよ。

夫。おや、早く着ちまへよ。

妻。あなた、外へ出てらつしやい。

夫。それより、海岸に着物を着替へる小屋がある筈だ。そのまゝ持つて行けばいゝ。

妻。人が見てやしない。

夫。愚圖々々してると、また降り出すかも知れない。さ、早く………
………。

二人は あたふたと外に出る。

それが、やがて、梯子段を降りてしまつたと思はれる頃、また、急に雨が降り出す。

何處かの部屋で蓄音機をかけてゐる。

その曲に足並を合せる如く、悄然として、夫婦が歸つて來る。二人は、默つて、部屋の中にはひり、思ひ思ひに自分の座につく。何をするでもなく、ぼんやり、空を眺めてゐる。かすかに溜息。

長い沈默。

やがて、夫は、鞄から旅行案内を出して、頁を繰りはじめる。

妻は、枕を持ち出して、晝寢の用意をする。

夫。おい、寢るのはよせ、此の上、お前に寢ちまはれちや、おれはどうしていゝかわからん。

妻。あなたもおやすみになつたら……。

夫。昨夕七時から、今朝九時まで、十四時間ぶつ通しに寢たものが、また寢ようたつて、それや少し無理ぢやないか。いくら、寢るより外にすることがないと云つたつて、おれたちは、遙々汽車に乘つて、大枚五圓の宿料を拂つて、名にし負ふ湘南の海水浴場に來てゐるのだ。少しは、氣の晴れることもして見ようぢやないか。

妻。だつて、海水浴が駄目なら、仕方がないぢやないの。

夫。海水浴が駄目なら仕方がないと云つてしまはずに、そこを、なんとか誤魔化せないもんかなあ。

妻。あなたは傘をさして散歩でもしてらつしやい。あたしは、かうして、横になつてますわ。(寢轉がる)

夫。傘をさしてか。傘は持つて來ないぜ。

妻。借りてらつしやいよ。

夫。お前は横になつてるのか。

妻。えゝ。

夫。夫は傘を借りて散歩をなし、妻は横になつて退屈を味はふか。洒落にもならないや。

妻。だから、あたしが、こんな處へ來るよりは、[illegible]へた方がいゝつて、あれほど云つたのに……。

夫。もうわかつた。おれはこれから、旅行をして來る。

妻。何處へいらつしやるの。

夫。氣の向いた處、日本國中だ。

妻。……………。

夫。一つ、別府あたりへ行つて見るかな。

妻。旅行案内だけもつてね。

夫。勿論……。これほど金のかゝらない旅はない。旅行案内といふものは妙なものだね。汽車の時間を順々に見て行くと、からだも一緒に動いて行くやうな氣がする。一種の錯覺かも知れんが、こいつを應用して、何か一つ、どえらい發見でもしでかすかな。

妻。……………。

夫。辨當と書いてあると、あの上等辨當の折の香までして來るから面白いぢやないか。

妻。何が面白いもんですか

夫。面白くないか。お前にはそれが面白くない。だから、足の裏なんか、蚊に嚙まれるんだ。まだ痒いかい。

妻。知りませんよ。

夫。大沼公園といふのは、なかなか景色がよさゝうだね。北海道へも、一度ぐらゐ行つたつて惡くないな。えゝと、時間はどうなつてるかな。

妻。旅行をなさるなら、默つてなすつて頂戴ね。

夫。默つて旅行をしろ……？　所謂、啞の旅行といふ奴だね。

蓄音機の音止む。

夫。いろんなことを云ふやうだが、お前は近頃、何が食ひたい？

妻。………。

夫。もう眠つたのか。

妻。………。

夫。そんな筈はない。たつた今、欠伸を噛み殺してゐたぢやないか。

妻。………。

夫。あくまで狸を粧ふつもりだか。

妻。………。

夫。お前がびつくりするやうなことを云つてやるが、それでもいゝか。

妻。………。

夫。ようし………。云ふぞ。大きな聲を出すな。

妻。………。

夫。おれは、さつき、十年前の戀人に遇つたよ。おれにそんな戀人のあつたことはお前も知るまい。今迄その話はせずにゐた。お前の心を不必要に亂したくなかつたからだ。しかし、たうとう、お前にそれを打ち明けなければならない日が來た。そんなに息を殺さなくつてもいゝ。

妻。………。

夫。向うはまだ獨りでゐるらしい。純潔そのものゝやうな眼をもつた女だ。その眼が、昔と少しも變つてゐないやうに、おれに對する氣持も、そのまゝ昔と變りはないといふのだ。おれの方はどうだと云ふから、おれは云つてやつた。なんと云つてやつたか知つてるか。

妻。………。

夫。おい、安心してる場合ぢやないぞ。

妻（脇の下をゴシゴシ掻く）

夫。そんなところを掻いてる場合ぢやない。おれはなんと言つたと思ふ。おれはかう云つた。――あなたが、それほどまでに僕のことを想つてゐて下さるのは有りがたいが、僕はもう自由ではありません。すると、そんなことは存じてをりますわ、と云つた。昨日もお

二人が睦じさうに、廊下を歩いておいでになるところをお見かけしたんですもの。優しい上に、聰明な方らしいわね、奥さまは……と云ふんだ。おれは返事に困つて、あんな女はざらにありますと云つてやつた。

妻（大きな息をする）

夫。ざらにあると云つただけでは、まだ云ひ足りないと思つたので、あれくらゐ鈍感な女は、一寸類がありませんよと云ひ直した。お前の前だが、それやほんとだからね。

妻（枕を直す）

夫。すると、向うはなかなか如才がない。——でも、あなたのやうなお方と一緒にゐるには、その方が結句幸福ですわと云ふぢやないか。なぜですつて白ばくれた聞き方をすると、笑つてゝ返事をしないんだ。

妻（かすかに鼾をかく）

夫。怪しげな顔は手紙へのあつた證據だ。さ、なんとか云へ。

妻。……………。

夫。なんにも云ふことはないね。それぢや、先を續ける。——二人は、それで急に、昔しの親しみを取り返した。その證據に、いろいろ細かい話もあつたが、それは略して、要に附く、東京へ歸つたら遊びに來てくれと云ひ出した。淋しく遙々と暮してゐるとまで附け足した。そこで、おれは、東京へ歸つたらなんて云はずに、今、これから、あなたの部屋へ行つて、ゆつくりお話をしたいと切り出して見た。どうせなんにもすることはなく、退屈しきつてゐるところだと云つて見た。毎日見あきてゐる女房の側を、さうして一つ時でも離れてゐたいとまで云つて見た。すると、その女の云ふことが振つてゐるぢやないか。——いゝえ、それはいけません。あなたの奥さまといふ方を、あんまり近くに感じてゐるところでは、寛ろいだおもてなしもできません。その氣持にもなれません。東京の住居は、それや靜かな、奥まつたところにありますのよ。知らない人は、尋ねあてるだけに三時間もかゝりますわ、といふことで、話は一寸途切れた。湯上りの、透き通るやうな手を、椽側の手摺りに置いて、それとなく、何ものかを待つてゐる形だ。結ぶでもなく、開くでもなく、紅つ氣なしに赤い唇が、心もちふるへてゐたよ。眼は無論、渺茫たる水平線の彼方、思ひ出の花咲く國に注がれてゐるのさ。

妻（寢返りをうつて、夫の方に向き直る。が、これこそ、口は自然に開くに委せ、鼻の孔は、耳鼻咽喉科の診察室に於ける如く、ヤヽあふ向き加減に奥の方まで見通せる姿勢である）

夫（これを見て、思はず顔をそむけ）圖々しく寢返りをうつたな。

廊下で、突然「おきんさん」と呼ぶ女中の聲。

妻（はたと眼を覺し、或は眼が覺めた風を裝ひ、むつくり起き上り、寢ぼけ聲で、或は何食はぬ顔で）もう、お風呂湧いてるでせうか。

夫（たぢたぢとなり、それでも、疑ひ深く）眠つてたのか。

妻（これには答へず、起ち上つて、手拭、石鹸、化粧道具など取り上げ、ふらふらと出て行く）

夫（さも氣拔けしたやうに、その後を見送る）

——幕——

二

翌日の夕刻。

夫（ワイシャツ姿で鞄の支度をしてゐる）

妻（火鉢で手拭をかわかしてゐる）

女中（勘定書をもつて來る）まだ上りまでは大分時間が御座いますから、御ゆつくり……。

夫（勘定書を引き寄せ）また近いうちやつて來るから、よろしく……

……。

女中。どうぞ、是非……。でも、折角明日は御天氣らしう御座いますのに、もう一日御延ばしになることはできませんのですか。

夫。あゝ、どうも、忙しいもんでね。なに、充分保養にはなつたよ。東京を離れるといふことが第一の目的なんだから……。天氣の悪いのは何處にゐたつて同じだ。おや、これで……（勘定を渡す）

女中（會釋して去る）

妻。いくらになつてますの。

夫。案外かゝらなかつたよ。

妻。豫定通り……？

夫。まあ、そんなところだ。茶代でも奮發しとかうか。

妻。およしなさいよ、そんな無駄なこと……。それくらゐたら、もう一日ゐた方が氣が利いてるわ。

夫。それができれば文句はないさ。あれ見ろ、あの空を……。今迄雨が降つてたなんて嘘見たいだ。

妻。會社の方は、もう一日、どうにかならないか知ら……。

夫。さつきの電話さへなけれやね。——丸で頸に繩をつけられてるやうなもんだ。しかし、今度で、このおれが、如何に會社に取つて、重要な人物であるかといふことがわかつたわけだ。おれは明日の

朝、少し遲れて行つてやるよ。さうして、少し不機嫌な顔附をしてゐてやる。係長の奴、きつと、そばへやつて來て、なんとか御世辭を云ふからね。おれは、無愛想に、鼻で返事をしてゐてやるよ。

妻。あなたはそれでお氣が濟むでせうけれど、あたしは、歸つて、みんなに何んて云ふんですの。どうかしたはずみに、一度も濡らしたことのない海水着でも見つけられて御覽なさい。いゝ恥さらしよ。

夫。恥さらしなんていふ言葉を使つてくれるなよ。お前が さう思ふなら、その海水着を、一寸鐵瓶の湯で濡らして置けばいゝぢやたいか。――第一、海にはひつたことが、さう自慢になると思ふかい。

妻。でも、いまいましいぢやないの、

夫。同感だ。しかし、物は考へやうでね。折角工面をして海岸へ出掛けたけれど、雨に降られ通しで、たうとう五日間一度も海へはひれなかつたなんていふ話は、人が聞いたつて、そんなに不愉快な話ぢやない。それどころか、聞く人間によつては、涙を流してよろこぶかも知れない。

妻。誰が涙なんか……。

夫。ましてこつちが、少し悄げてゞもゐれば、なほさら滑稽でいゝぢやないか。

妻。だつて、出掛ける時の景氣つたらなかつたんですもの。

夫。いゝぢやないか。實際景氣のいゝ話だ……とはよくあるもんだ。豫め、かういふことを慮つて、始めから悄然として家を出て見たところで、誰も感心しやしない。一體、お前に限らないが、お前の家の人達は、お母さんにしろ、姉さんにしろ、お孝ちやんにしろ、みんな、さういふところがあつていかんよ。

（足音がするので話をやめる）

女中（現はれる。つりをもつて來る）どうも有りかたう御座います。

夫（そのうちから、幾らかを取つて）あ、これ、少しだが茶代……。

女中。いゝえ、こちらは、御茶代は頂かないことになつてをりますから……。

夫。さう。そいつはどうも、なんだな。それぢや、これは、色々御世話になつたから、君に……。

女中。恐れ入ります。

夫。えゝと、もう一人の女中さん、ちよいちよい、こゝへ來た、あのひとはなんて云つたつけな、どしどし音を立てゝ歩くひと……。

妻。まあ、あんなことを……。

夫。いゝぢやないか、ねえ、靜かな方ぢやないよ。あのひとを呼んでくれ給へ。それから風呂番の若い衆もね。匠かい、あれや、君……

………。

女中。いゝえ、あゝいふ風なんで御座いますよ、餘つぽどのことでもなければ、誰とも口を利かないんで御座います。

夫。あゝいふ風ぢや、餘つぽどのことなんかありつこないや。

女中。では、御荷物がおできになりましたら、どうぞ……。（出で去る）

妻。女中にいくらかおやりになつたの。

夫。一々心配することはない。お前は、東京へ歸るまで、重役の夫人になつたつもりでゐろ。

妻。東京へ歸つてからも、そのつもりでゐたいわ。

夫。ゐるがいゝさ。お前は、根性まで安月給のお神さんだからいけない。

妻。だから丁度いゝのよ。

夫。丁度いゝとは………？　おれを侮辱したつもりかい。そんなことを云ふなら、また御說敎をはじめるよ。

妻。御說敎はもう澤山………。

夫。さうだらう。だが、なんだぜ、此の機會に、お前に相談するんだが、もうそろそろおれの氣持がわかつてくれなくつちや困るよ。お前は、世にも稀なる善良な女だ。どうしてロをそんなに曲げるんだ。

妻。………。

夫。お世辭でなく、お前は、おれの爲めに此の世に生れて來たやうな女だ。

妻。ありがたう。

夫。だから、さう云つてるぢやないか。その美、おれは果報者だと思つてゐる。

此の時、どしどし足音を立てる女中と、猫背の風呂番とが前後して姿を現はす。

夫。あ、君たち、いろいろ御世話さん……これは、ほんの少しだけれど……。

女中。どうも………。

風呂番（默つて頭を下げる）

女中。何か御用は御座いませんか。

夫。有りがたう、もう別に………

女中（會釋して去る）

風呂番（これも起ちかける）

夫。あ、君は一寸待つてくれ給へ。君は、此の土地の人かい。

風呂番。（ぼんやり相手の顔を見てゐる）

夫。此の土地で生れたの。

風呂番（輕く頭を下げる）

夫。どうだい、何か變つたことはないかい。

風呂番（にやにや笑つてゐる）

夫。君はなかなか評判がいゝぜ。

風呂番（訝しげに相手を見上げる）

夫。おい、何んとか云ひ給へ。

風呂番。……。

夫。君は、何か、決心をしてゐるんぢやないかい。

風呂番。……。

夫。あなた、もう時間でせう。

夫（風呂番の顔を見つめてゐる）

妻。ほんとに、もういゝのよ。

風呂番（會釋して立ち去る）

妻。（いまいましげに）恐るべき沈默派だ。

長い間。

妻。あなたは、まあ、なんていふ方でせう。

夫。（突然自嘲的に笑ふ）

妻。（夫の顔を見る）

夫。あれで、あの男、おれをどう思つたらうね。

妻。普通の人だとは思つてませんわ。

夫。何んでもないことが思ふやうにはいかんね。

妻。うつかり人を馬鹿扱にすると、あべこべに輕蔑されますわ。

夫。はじめはそのつもりぢやなかつたんだ。あゝいふ風に默つてる男が、何か云ひ出せばきつと素晴らしいことを云ふだらうと、實は樂しみにしてゐたんだ。しかし、あの男は、きつと、素晴らしいことを考へてゐるよ。おれなんか勿論眼中にあるまいが、例へば、おれたち夫婦の生活について、何か、誰にも氣のつかないやうな秘密を嗅ぎつけてゐるかもわからない。——おれたち自身にさへ氣のつかないやうなね。どうも、そんな氣がする。

妻。またそんな勝手な想像をしてらつしやるのね。

夫。さ、ぼつぼつ片づけろよ。忘れものはないね。

此の時、番頭が現はれる。

番頭。もうおたちで御ざいますか。生憎どうも御天氣都合が……。
夫。いや、立つ時に晴れたから、まあいゝさ。
番頭。もう、これで大丈夫だと思ひますが……。
夫。さうありたいもんだ。おや、この繪と、そのバスケット、それから、その細々したものを持つて降りて貰はうか。
番頭。勘定は……。
夫。(紙幣を出し)これで買つといてくれ給へ。
番頭。畏こまりました。東京驛二等……。
夫。三等だ。
番頭。へえ。(會釋して去る)
妻。歸りは慘めね。
夫。馬鹿云へ。今夜の豫定を聞かしたら、そんなことは云へない筈だ。東京には何があると思ふ。オーヴアーランドがあるぜ、千疋屋があるぜ。お前の夏のショウルがある。
妻。どのショオル……?
夫。それから、まだ、いろんなものがある。
妻。いろんなものがあるわ、手の屆かないところにね。
夫。また始まつた。手が屆かなくつたつていゝぢやないか。今度の海水浴だつてさうだ。此の間までは所謂手の屆かない計畫だつたんだ、それが、かうして實現できたぢやないか。
妻。實現できたと思つていらつしやるの。
夫。雨さへ降らなければね。
妻。それより、もう少し長くゐられゝばですわ。
夫。さう取るのか。成る程、不平は絶えない筈だ。しかし、お前、かうして、あの海を眼の前に眺めてゐれば、海へはひつたのも同じぢやないか。此の五日間、毎日、海へはひり通しだつたと、思へば思へないこともあるまい。
妻。…………。
夫。海の水は、たゞ鹽からいだけで、冷たい風呂へはひつたと思へば大した違ひはない。
妻。でも、廣さが違ひますわ。
夫。廣さは、手足を縮めてゐれば、おんなじだ。眼をつぶつて、頭の上に蒼空を頂いてゐるつもりになればいゝ。
妻。あゝして、あとからあとから打ち寄せて來る波の感じがしなければ……。
夫。波の感じは、からだを前後にゆすぶればわけなく出る。兎に角、海へはひるといふことは一つの冒險だからね。毎年、何處の海水浴場でも、二人や三人の溺死者がないことはないぢやないか。それ

に、川上見たいに、下手なモグリ込みなんかやると、金鎖の眼鏡を失くしたりするし、金田の奥さんだらう、眞珠の指環を波に浚はれたつて云ふのは……。

妻。安物だつたんですつて……。

夫。何れにしてもさ。それから、貝殻で足の指を切つたり、鹽水がはひつて、中耳炎になる奴なんかいくらもゐる。

妻。さういふことをおつしやるのは、負け惜みつていふのよ。あんなに海岸行きの効能を並べ立てゝ置きながら、今更、そんなこと、よく恥かしくなくおつしやれるわね。

夫。お前を慰めようと思つてさ。

妻。そんなら、あべこべに、もつとがつかりしてゝ頂戴。さういふ見えすいた氣安めは、云ふ方でも、云はれる方でも、くすぐつたいばかりよ。殘念なことは殘念なことにして置かうぢやありませんか。二人だけでね。

夫。おや、おや、お前がその氣ならわけはないさ。それぢや、今度は、殘念なことにして置いて、何時かまた埋合せをしよう。それでいゝだらう。よし、だが、おれは、飽くまでも、今度、お前と一緒に泳ぎの眞似なんかしなくつて仕合せだつたと思つてゐる。

妻。……!

夫。どうしてつて、お前はその

妻。わかつてますわ。

夫。わかつてるなら云つて見ろ。

妻。云はなくつても、わかつてますわ。

夫。お前は勘違ひをしてゐる。それぢや、かういふことがお前にわかるか。――何時か、そら、隣から蓄音機を預かつたことがあつたらう、旅行中、使はないと錆びるからつて……。

妻。えゝ。

夫。毎晩のやうに、有りつたけのレコードを、よく飽きずにかけたもんだ。「ヴォルガの船歌」を空で覺えたのもあの頃だ。

妻。それから「スーヴニール」……。

夫。それさ。おれは、豫々、朝起きがつらいたちだ。

妻。起しやうが惡いつて、毎朝お怒りになつたものですわ。

夫。毎朝、人間が、こんな風にして、折角の夢を破られるなんて殺風景の骨頂だ。せめて、枕もとで、例へば女學生の歌ふやうな歌でもいゝ、さういふ歌の聲で、何時とはなしに、自然に、眼を覺まして見たら、さぞ幸福だらうと、おれは、かねがね思つてゐた。お前にそれをやれと云つても、どうせ、はいと云つてやる氣遣ひはない。丁度、蓄音機が手許にあるのを幸ひ、一度、その空想を實現させて

やらうと思ひ立つた。

妻。さうさう、そんなことがありましたね。

夫。先を云ふな。おれに終ひまで云はせろ。それで、ある晩、おれは、お前に頼んで置いた。――あすの朝、おれを起す時に、「もう時間ですよ」なんてガミガミ呶鳴らずに、默つて、枕もとで蓄音機をかけてくれ。蓄音機で、「スーヴニール」かなんか掛けてくれ。おれは、その一曲が終るか終らないうちに、むつくり起き上つて見せる。さう云つて、おれは、床の中にもぐり込んだ。自分で自分の氣むづかしい神經を持てあましてゐる矢先だ。なんでもいゝ、早く夜が明けてくれ、空はなるだけ明るく、夢はなるだけ深く、かう心に祈りながら眼をつぶつた。一本のビールがやうやく廻りかけてゐた。

妻、翌朝、ちやんと、おつしやる通りにしましたわ。

夫。あの時ばかりは、感心に、おれの云ふことを一度で聞いたね。忘れずに、お前は、おれの枕もとで、「スーヴニール」をかけた。

妻。一度終つたら、もう一度かけろつておつしやいましたわ。

夫。うむ。だが、あれは、もつと寢てゐたい口實でもなんでもない。夢現に聞えて來るあのヴアイオリンのメロデイーが、おれを、果して、幸福の絶頂に押し上げた。と思つたのは瞬間で、だん〳〵耳がはつきりして來るにつれて、つまり、お前がおれの枕もとで、蓄音機をかけてゐるのだといふことがわかつて來ると、おれの心は、段〳〵か、かう、痺れるやうな痛みを感じた、しまつたと思つた。おれは蒲團をかぶつてしまつた。

妻。泣いてらしつたんでせう。

夫。泣いてたと思はれてもしかたがない。それほど、おれは、激しいショックを受けた。蓄音機がもう一度「スーヴニール」を繰り返してゐる間、おれは、おれたちの幸福について考へた。おれたちの夢について考へた。おれたちの生活について考へた。

妻。あの日は、ほんとに晴々した顔をして御飯を上りましたわね。

夫。さうか。こんなことなら、毎朝でもかけて上げますつて、お前も云つたね。おれは、しかし、それを斷はつた。

妻。でも、あの明くる朝から、一度叫べばきつとお起きになるやうになりましたわ。尤も、近頃は、また駄目になつたけれど……。

夫。かういふことは、お前に云つてもわかるまいが、おれは蒲團をかぶりながら、つらつら考へた。――こんなことをしてゐては大變だと……。おれは、もう少しで、蓄音機を蹴飛ばし、お前を連れて、何處か人のゐない、山奥かなんかへ隱れてしまはうと思つた。それは、大きな罪を犯した後の、自責にも似た心の動揺だ。恐ろしい悔

似だ。惨めな自己欺瞞だ。しかし、この氣持は、お前に知らせたくなかつた。おれはぢつと心を鎭めた。

妻。あなたのおつしやることは、本當なのか、冗談なのかわからないのね。

夫。おれにもわからない。

長い沈默。

妻。もうなれつこになつたから、近頃はあんまり氣にかけませんけれど、それでも、なんだか解りたいことがありますわ。

夫。氣にかけることはいらんさ。今にわかるよ、おれが何をしようとしてゐるか。おれはたゞ、お前を幸福にすることしか考へてゐないんだ。

妻。またそんな……。

夫。信じないと云ふのか。冗談だらう。そんなら、おれの新しい計畫を話して聞かさうか。お前は何時か、鎌倉へ行つた時に、芝生で圍まれた家を見て、かういふ家に住んで見たいつて云つたことがあつたね。

妻。どんな家でしたつけね。

夫。忘れたのか。そら、若い細君が、犬にじゃれつかれて困つてゐたぢやないか。此の春だよ。

妻。あゝ、家を探しに行つた時……。

夫。さうさ。あの家は、たしか四間ぐらゐだつたね。いくらで賣つと思ふ。

妻。…………。

夫。あれで二千圓だよ。

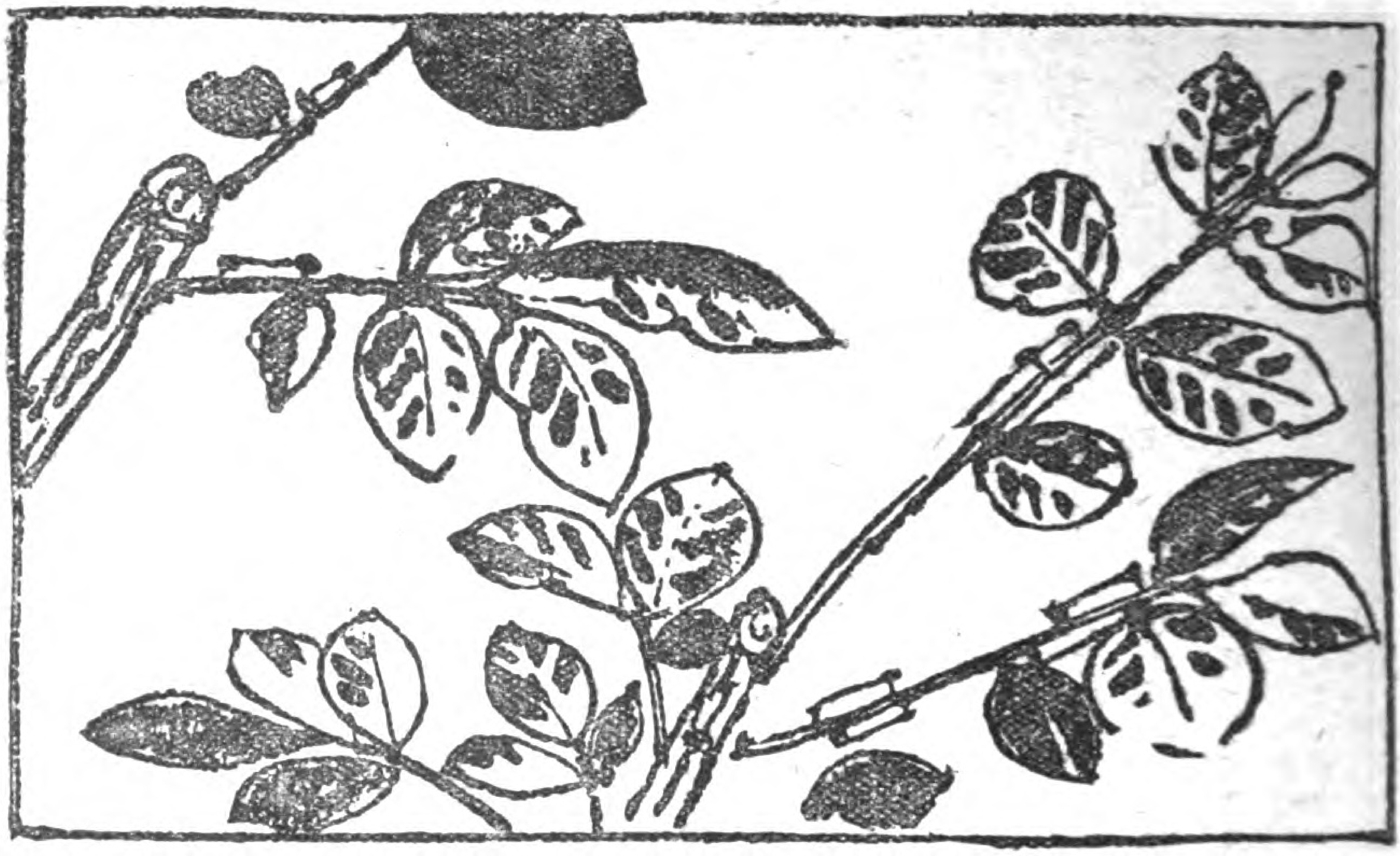
此の時、最前の女中が現はれる。

女中。あの、もうお時間で御座いますが……。

夫。あ、さう（かう云つて、機械的に立ち上る）

妻（ぼんやり、暮れて行く表の方を見て居る）

―幕―



別れ

徳田秋聲

一

今年の夏は別けても長い暑さが續いた。Ｇ―は長女以下三人の子女を海岸にやつた留守を、廣々した思ひでＩ子と一緒に暮らしてゐた。次男は諏訪湖の畔の親類の家へ行つてゐた。長男も諏訪へ行つたり、輕井澤の友人を訪ねたり、時には弟妹達のゐる海岸を見舞つたりしたが、東京にゐても家にゐるかと思ふと、ふらりと外出したきり幾日も姿を見せなかたりした。彼のゐるときは、融達は彼を誘つて一緒に散歩に出たりした。

「二三日どこかへ行きたいな。」

融はよくそんな事を口にしたが、Ｉ子は格別暑さを苦にもしなかつた。勿論旅行慾もなかつた。それほど彼女の氣分が大きい子供達のゐない家には親しめるのであつた。彼女は此の頃擧げることになつてゐる結婚披露式の準備などについて、時々融を急き立てたりしてゐた。勿論先きへ寄つての生活の不安が、Ｉ子は勿論Ｇ―自身にも全く無い譯には行かなかつた。それは重もに、Ｇ―に多勢の子供があるところから來てゐた。

長男の姿がまた暫らく見えなくなつてゐた。Ｇ―はあのそよ〳〵した冷やかな風の流

れる湖畔のEを想像して見た。

「達次の問題を此の際一つ取極めようと思ふ。二三日のつもりだから、諏訪へ行つて見ない？」Gーは I子に謀つた。

「行つても可いわ。でも、お澤さんの親類だから……。」

「けど去年は二人で來てほしいと、I子の行くのを待つてゐたくらゐだからね。」

「さう！ ぢや行くわ。でも其の家にゐるのは私厭よ。二人きりの宿屋なら……。」

I子は普通世間人と、ぐちや／＼と世間話などしたり、女達にお愛相を言つたりすることが餘り好きではなかつたし、氣詰りな思ひをして、餘所の家にゐることも嫌ひであつた。

「そんな氣兼なやうな家ぢやないのさ。それに商賣柄に似合はず、お品の好い方なんだからね。」

その細君は先年東京へ出て來て、一緒に芝居を見たこともあつたので、I子に取つては既にお馴染であつたけれど、勿論氣分の合ふ氣遣はなかつた。しかしそんな事よりも、Gーには次男の養子問題があつた。この夏の初め以來彼れ次男の達次の取つた行動は、その理由がたとひ何んであるにしても、一家の主人として、多勢の子供を扶養すべき責任を持つてゐる父として、殆んど堪へがたいほどの横暴であつた。それも忍んでも可かつた。彼れ達次の感情が父の行爲によつて激發されたものとすれば、物質上の損害などは多く言ふに足りないものかも知れなかつたけれど、酒や女や惡友によつて、そこまで荒んで行つた彼の素質と、其の前途については、窃かに恐れを懐かない譯に行かなかつた。少年期から、平氣で多量の酒の飲める彼の素質に何んなものが潜んでゐるかを、彼は今面たり見せつけられたやうな氣がすると同時に、長いあひだ恐れてゐた無思慮な結婚の不幸が、今明かに彼に酬つて來たことを感じないではゐられなかつたからであつた。

彼の結婚や妻の性格や氣質が何うのかうのと言ふのではなかつた。Gーにはその當時目に見えなかつた不幸が胚胎してゐたからであつた。性質が善良であるに拘はらず、飲酒と懶惰と、末梢的な頭の小器用に働くことなどが、達次達の母の血統から來た遺傳であることが、その重もなるものであつた。

「酒だけは飲んでくれちや困るよ。」Gーは機會ある每に子供達の前に、幾度それを言つたか知れなかつた。

勿論妻の兄弟には、學問處世に優れた頭腦をもつてゐるものもあつた。他人の手によつて薫陶されたからでも人としての素質の好いことも確かであつた。達次達の母がGーを良人としての二十五年の生活が又た、彼女の好い素質を十分に發揮せしめたと言つても可いのであつ

た。長いあひだに知らず知らずG—の雰圍氣に染みて行つたところも無論多かつた。それは又多分お互ひに年を取り、子供が成長するにつれて、征服し征服されると共に、釣り合ふやうになつたことにもなるのであつた。

「兄弟のなかでは、まあ自家の御母さんが一等人が好かつたですね。」

彼女が死んでから、長男は屢々父のG—にそれを言つた。勿論G—にもそれは頷けた。

その妻も病氣の出ないうちは、酒が嫌ひではなかつた。そして又酒を飲む人をも好きであつた。後年年中醉拂つて、親類中迷惑をかけてまはる弟の一人——良人の——と彼女とがその中でも何彼の場合に尤も多く祟られたのは言ふまでもなかつた——を世にも憎むべき咀ふべき存在のやうに思ふやうになつてから、酒呑みはふるく〳〵だといつては、滅多にそんな事に手數のかゝるやうなことのないG—に感謝してゐたけれど、子供の小さいうちは、春にはきつと一斗樽を臺所にすゑて、年始の賀客に酒の肴を拵へるのが家庭婦としての彼女の趣味の一つであつたが、それも寧ろ酒好きな彼女の弟を待つための用意であつたことは爭はれなかつた。次男と三男とは、屠蘇のあとで、お銚子の酒をぐい〳〵飲んだ。そして醉ひがまはると、燥ぎまはつて父や兄を笑はせたりした。

「達太も顔三も飲めるんだよお父さん、いくら飲んでも醉はないんだ。」

「冗談ぢやない。もう止せ。」G—は言つたが、妻はむしろ興味をもつてゐるやうにさへ見えた。酒の呑めないG—が、彼女に取つて聊か寂しい感じのした時期のあつたことから言へば、子供の飲酒を見て見ない振をしてゐるのに不思議はなかつた。

新年の二日に腦溢血で死んだG—の妻は、其の前夜G—の留守の間に、裏の家にゐるT氏の遊びに來たとき、到來物のキユラソーを三杯ばかり如何にもお旨しさうに飲んだのであつた。彼女はウヰスキイーのやうな強い酒をも、心から旨さうに呑むのを、G—も見て知つてゐた。勿論元日の晩に飲んだキユラソーが彼女の不幸の原因だとは思へなかつた。けれど、若し其の前夜キユラソーを飲まなかつたとしたら、そんなに遽かに死なゝくとも可かつたかも知れないのであつた。酒が彼女の持病に大敵藥であることも兼々承知してゐる筈であつた。それに其の時は尤も健康狀態の悪いときであつた。G—が若し側にゐたら、うんと愁しめたかも知れなかつたが、彼女も恐らく盃を口にするやうなことはなかつたに違ひなかつた。

G—自身はといへば、彼も其の當酒の味と趣味とをよく解してゐた。美酒の二三杯は彼に取つては、恐らく世の中の尤も旨いもの〻一

つであつた。五合も一升もの分量を貪飲するには、酒は旨過ぎる飲料だと思はされた。

夏の初めから最近へかけての達次の行動は、彼が若し酒を飲まない學生だつたら、そんなにも無謀に盲目にならなくとも濟んだらうと思はれる種類のものであつた。飲酒の動機又は口實が何であるにしても、若い彼の體に何か惡いものが潜んでゝもゐるのでなかつたら、學生として青年としての彼自身の生活が、もつと何うにか支へられて行けさうなものであつた。年取つたGーが、妻を亡くしてから間もなく、若い愛人をもつたことが、子としての彼等の年頃の青年に衝動を與へずには濟まなかつたであらうが、しかも彼は作家としての父の生活――ペンの勞働によつて育ち盛りの多勢の子供を見て行かなければならぬ立場や、愛人關係が、双方の特殊な事情や性格や仕事のうへから見て、普通一般の放蕩的な享樂と違つたものであることも、子供への愛と愛人への愛とを一つものにして、家庭と戀愛とを相互的なものとして、妻の死によつて餘りにも煩雜であつた家庭に新しい風を入れると同時に餘りに無自覺すぎた子供を子供としての商人的の立場や生活に徐々に目覺めしめようとして焦慮してゐる父の惱みやを相當理解してゐる筈であつた。たとひGーの爲てゐる事が、許すべからざる道徳はづれの不檢束であつたとしたところで、若いものには若いもの自身の生活の悩みが、なければならない筈であつた。Gーは達次の飲酒と放蕩が、そんな悩みから來てゐるものとしては、餘りにも單純で無神經過ぎるのに、絶望的不安を懐かずにはゐられなかつた。

二

達次が夜々友人達と、學生達の入るには相應はしくない下等な家で、頭胸にわるい濁酒を飲むやうになつたのは、さう近いことではないらしかつた。

Gーは身のまはりの用事を達してくれてゐる青年Kーから、暗示を與へられた時、どきりと胸にこたへた。彼等皆んなで心配してゐた彼の遺傳的飲酒性が、そんなにも早く、そんなにも惡い傾向で發きらうとは思ひ設けなかつた。

「達次が外で酒を飲むんだつて？」Gーは長男の郁夫にきいた。

「えゝ、さうらしいんです。それも好い酒なら可いんだけれど、下等なところで惡い酒を飲むんで、頭腦を惡くするから止せと言つてるんですけれど……」郁夫は心配さうに眼を熱らせて、

「周圍が何うも惡いもんで……。達次といふ奴は頭腦は惡いんぢやないけれど、物の見方が單純で……。」

「己に不滿があるのか。」

「いや、それもあるでせうけれど……、まあ色んなことを言ふ奴があるらしいんです。」
「馬鹿な。默つて勉強してゐたら可いぢやないかな。」
「さう言つてるんですけれど。」
「金をやらないことにでもするんだな。」
　Ｇ―の想像し得る限りでは、彼はまたさう云ふことに、年に似合はず、都會人らしい、しかも其處いらの町つ子らしい才能をもつてゐて、おでんや鮨屋なぞに馴染を拵へたり、三圓五圓といふ借りを拵へたりするらしかつた。それは彼の母方の祖父や叔父が、さう云ふことによく働く頭腦をもつてゐるのと能く似てゐた。彼のすらりとした體つきや、先づ普通に美しいと言つていゝ色白の顔や、一應は内氣で温順しやかな性質なども祖父に似てゐたが、同時に潔癖の惡いことも、意氣地のないことも似てゐるやうに思へた。
「藝術に興味はもたんだらうね。」
「解るんです。ちやんと解るんだけれど、その解り方が……何らいふんだか知らんが……。」
　大分前にＧ―は長男に又藝術的傾向のあるのに失望した揚句、爲方なし其れを容認した形になつてゐたけれど、次男には全然別の道を歩んでもらひたいと望んでゐた。勿論彼にはさうした匂ひがありさうに思へなかつたので、
「達夫はまさか小說なんか讀みはしないだらうね。」
「いや、讀むんですよ。己は文章の天才だつて威張つたことがあるんです。」
　それはさうした惚けたことを言つて、屢々人を笑はせるやうな少年でもあつたけれど、Ｇ―は呆れるより外なかつた。
「冗談ぢやない！」Ｇ―は本當に笑つた。
病氣で高等學校の入學が三年もおくれたり、漸と入つて一ト安心したかと思ふと、眞面目に通學したのは一年くらゐで、それからは背廣に中折を冠つたりして、制服を着たことのない長男に、前後六年ばかりはＧ―は思ひを惱ませられた。彼は活動通になつたり、音樂好きになつたりした。銀座喫茶店にも親しんだ。彼は何時の間にかブルヂョワの坊ちやん風に、自身の生活形式を作りあげてしまつた。文學の智識や批評眼も相當進んでゐた。Ｇ―の解れ得る範圍でも、東洋畫や書に對する批評も一寸して直覺的に來るものがあつた。歌舞伎の鑑賞にしたところで無下に幼稚だとする譯には行かなかつた。それはそれで可いとしても、藝術家として、彼は實際生活のうへに、彼は何んな經路を辿るであらうか。藝術家の衒ひに生きることと、藝術家として生きることとは、其れ自體が實際のうへに遠い間隔のあることをも思は

ない譯に行かなかつた。その彼に取つて、父に若い愛人の出來たといふことは、藝術を解する故の理解や興味が父やI子に持てても、生活の上では權威でなくてはならなかつた。G—が愛してゐるやうに、彼は父G—を愛してゐた。彼は父を心から好いてゐたが、I子にも個人としては好意をもつてゐた。しかし愛人と子供との關係では、父は彼に取つて區々頑强なイゴイストのやうにしか思はれなかつた。しかしG—に取つては又、長男としての紹夫の家庭に於ける地位や態度—否其れよりも彼自身の氣質が、子として愛すべきものばかりとは言へなかつた

しかし其は其で可かつた。彼は藝術的傾向の近代青年として、自からなる新らしい感觸と氣格とをもつてゐた。が、達夫は何うだらう。今まで單純な一筋道を辿つて、少しもけ—の目にもふれず、心をも煩はさなかつた彼が、父や兄と同じやうな空氣に觸れたとしたら、それはG—に取つて、第二の叛逆者が現はれたやうなものであつた。達夫には本質的に先づさうした危險がなささうに思へたのであつたが、しかし學問が厭になつたり、飲酒の癖が募つて來たりして、今年は去年に比べて、づつと學生氣分の薄らいで來たことは、寧ろそれ以上の恐怖であつた。彼の飲酒には、青年の喫茶店入りなどとは又違つた、趣味性の低さと、氣分の鄙さがあるからであつた。今のG—の家庭氣分から見れば、寧ろ反對のものであつた。

それ以來G—には達夫の外出がひどく氣遣はしいものになつて來た。出てゐればゐたで心配だつたが、歸つてくれば來たで、醉つてゐるか何うかゞ氣になつてならなかつた。機會があつたら諭して見ようと、彼の出入りに氣を配つてゐたが、彼の性質として、幼い頃から親や兄弟達に餘り親しまなかつた。人見知りをしない紹夫とちがつて、G—やけ—のところへ來る人達の前に現はれるやうなことは、殆んどないと言つていゝくらゐ臆病であつた。それは亡妻の父がG—前では猫のやうにおとなしかつたと同じだと言つても可かつた。

G—は或時彼を側へ呼びつけて、諭して見た。

「親爺のことなんか何うでも可いぢやないか。お前にはお前の生活があるんだから、その本分を忘れないやうにしてくれなくちや困るぢやないか。己は教育家や普通世間の頭腦や生活に餘裕のあるお父さんとちがつて、一々子供の行動を見張つてゐることは出來ないんだから、中學も出たら、自身に氣をつけてくれなくちや駄目ぢやないか。己に不滿なら不滿でもいゝ。青年らしい氣概がなくちや困るな。」

酒氣を帶びた彼は、しかし柔順であつた。紹夫が動もすると父を凌ぐやうな態度に出るのとちがつて、彼の目にはG—が恐いものに見えた。彼はきちんと兩手を膝に支いて萎れてゐた。

「お父さんにお話なんて、別にそんなことはありませんが、僕は駄目です。駄目な人間なんです。迚も學問なんかに適しないんです。」

「入學試驗が今年駄目だつたら、來年もう一度やつて見れば可いぢやないか。折角お前達の勉強し易いやうに、家も取擴げたり何かしたんだし、己も更に勉強してゐるんだ。兄さんとちがつた意味でお前は早く現實にふれて、學校なんかに幻滅を感じたとでもいふんなら仕方がないが、誰よりもお前達を愛するものは矢張り己なんだから、異常な才分がない限り、己の希望通りにやつて行つた方が可いんだよ。己の家にゐる以上、己の節度に從つて、餘り勉強の邪魔をしないやうにしてくれよ。己も台所の隅々までも氣にしてゐたんでは、讀むことも書くこともできないんだから、各々自分のことは出來るだけ個人でやることにして、己のことなんかには餘計な氣をつかふ必要はないんだから、學問や不斷の生活について、はつきり自己を掴んでゐなけあ駄目ぢやないか。兎に角酒が一等悪い。叔父さんたちのことを見ても解るぢやないか。」

逢次は頼りないほど氣弱であつた。G——は苛々しくたつてそれ以上を言へなかつた。感傷的な氣分の父の前を、逢次はやがて引退つた。

「お勉強が駄目だつたんで、しよげて居るんですよ。何だか可哀さうのやうだわ。お酒を飲む人は、本當に可哀相なものよ。」I子もひどく感傷的になつてゐた。

「でも貴方も心配しない方がいゝわ。あの年頃には誰れでも悩みがあるんだから。私の弟なんか酷かつたわ。」

三

或時劇場で、G——と初夫と逢つた。Gは自分の輕擧から、I子を社會的にひどく惨めな位地に陥いれたところから、暫らく海岸の彼女の家へ同棲することになつてゐた。そして其の晩二人はI子の子供を託してあるS・F——女史の舞踊を見に出て來たのであつた。そして廊下でひよつこり初夫に出逢つた。

「やあ!!」といつた、にこやかな顔をして、暫らくぶりで見るI子の前に、顔と顔とを突合せて、若々しい初夫の背廣姿が立つてゐた。

「どこにゐらつしやるの?」I子も愛相よく話を交へてゐた。

G——も暫らくすると初夫と話を交へる機會があつたがK青年につれられて末の娘の蝶子も來てゐたので、I子に暫らくぶりで逢つて嬉しさうに手を引かれてゐた。彼は海岸にゐても家が心配になつてゐた。

「變つたことはないの?」

「え、別に……。初夫は勉強がゐたくて捌つてのう〳〵してゐると云

つた風であつた。

「己は暫らくＩ子と一緒にゐなければならないんだから、家はお前に頼んだよ。ちやんと遣つてくれなくちや困るんだ。可いかい。」

「可うございます。遣ります。安心して行つてらつしやい。」初夫は易々と引受けた。

それから其の次ぎの幕間にも出逢つた。

「街子ちやんが矢張一等しつかりしてゐる。」初夫はＩ子の子供の舞踊振りを讃めてゐたが、やがて少しけ－－の顔に顔を寄せて、

「こんな事はお話しない方が可いやうだから、黙つてゐようと思つたんですけれど、何うもね……」彼は言ひ辛さうに、

「私のことと違ひますから、お父さんにだけお話しておきますけれど、誰方か少しお金を使つたんで……。それも小遣錢くらゐの程度のものなら何でもないけれど、少し嵩つた額だもんで。」

少し家をあけてゐると、直ぐそんな事が始まる！　け－は思つた。

「どのくらゐ使つたんだ。」

「三百圓ばかりですけれど。僕も預金帳を渡さなけあ可かつたんだけれど、色々入ることがあつて、五百圓だけ出さしたもんですから。」

「それをもつて行つたの。何に使つたんだらう。」

「まあ女でせうと思ふけれど、こんな事は餘り人に話さない方が可いと思ひます。」

「困つた奴だね。金を家において來たんだからね。ふみ子つて、しつかりやると言つたから二三日前に百圓おいて來たんだけれど。」

ふみ子と云ふのは、・－の　か、　であつた。

「さあ、それは能く解りませんけれど……。」

け－は何だか苛々して來た。何か厭だと言つて彼は自身で金錢を取扱ふことくらゐ厭なことはなかつた。性來鄙吝に生れついてゐるからだと思はれたが、いくら持つてゐていくら使つて、いくら殘つてゐるかといふやうなことを考へるのが寂しいのであつた。色々やつて見ても、[illegible]自身の散漫なことに、淡い悔ひを感ずるだけであつた。

「それから××××から稿料が來てゐる筈だね。」

「それは有ります。」

それから二人はＩ子から隠れるやうにして、二階へ上つて、そこで暫らく逢次のことについて話したが、け－には明確なことは解らなかつた。初夫の話もさう一々事實のデテールズに渉ることを避けてゐるやうに見えたが、この場合け－は初夫を信用するより外なかつた。

初夫の話によると、田舎にゐる彼等の母方の叔父が上京してゐて、急に金の入用が生じたので、それにも百圓ばかり用達てたといふので

あつた。その叔父が日本橋の或親類の未亡人が氣が狂ひ出したところで、其の財産の始末について、彼を中心に爭ひが起つてゐることは、Gーも仄かに耳にしてゐた。

「だつて陽吉は死んだ阿母さんにも借りがあるといふぢやないか。女中がお前達の話を傍聴きしたんだらう、この間そんな事を言つてゐたぜ。それは何のくらゐなんだ、お前知つてるだらう。」

「さあ。」初夫は父がその問題に觸れるのは何うかと思つた。

「三百圓だつて？」

「もつと多いかも知れませんけれど……。」

「可けないね。」Gーは心臓が小さいので、忘れてゐる時は忘れてゐても、何かの機會にそんな事に觸れると、一時に腹が立つて來て爲方がないのであつた。そして言出すと兎角それに拘泥りがちであつた。

Gーは陽吉から彼としては可なり大きな額の金の借用を、妻にまで申出でたことを、妻から聞かされて其を拒んだことがあつた。いつも困つてゐる妻の外の兄弟達には、長いあひだに隨分盡くしたこともあつたけれど、それはGーの勞作から辛々産れる金を溝へ棄てるに等しいものであつた。彼等は世にも珍らしい惰けもので又た酒呑みであつた。一人は殆んど無頼漢にも等しい荒み方であつた。しかし陽吉だけは身分が好かつた。そしてその金も商賣人筋の女を家へ入れたについての負債の埋合せだとか聞いてゐた。Gーは醉漢の弟には長いあひだ惱まされて來た。彼はよく酔拂つて臺所へ暴れこんで來た。その兄よりも母や姉に愛されないところから來てゐる僻みや嫉妬もあつたが、管を捲きだすと、山國の育ちらしい捻ねくれと、市井の無頼漢らしい屁理窟とが、屢々ヒステリカルな感傷癖と一つになつて、不思議な芝居を演ずるのであつた。曾ては彼も善良で頭の小器用に働く商人のやうに見えたこともあつた。そして事ある每に駈けつけて働いてくれたりしたが、酒癖が彼を次第に荒ませて行つた。最近では落ちて行つた田舎をも喰ひつめて、殆んど救ひがたいものになつてゐた。そしてGーの不在中近所で呑んだ酒の醉ひを借つて、茶の間へ入りこんで兎角姉の亡くなつたあとのGーの家庭について、何彼と拘泥をつけたがるのであつた。一ト晩中彼は女中や子供達を惱ませた。初夫が居合して彼を擊退しない限り、彼はいつ迄も其を續けるだらうと思はれた。それは彼に取つて、生きることの總ての興味だかも知れないのであつた。

其の弟の陽吉だけは、全然教養と性格を異にしてゐた。長くは生きないであらうGーの死後、彼だけが妻や子供達の力になつてくれさうに思へた。そしてそんな金を用立てようとした妻の氣持も理解されないこともなかつたが、Gーに取つては何と言つても重荷であつた。

それに妻はG—の甥達にも屢々泣きつかれて面倒を見てゐた。彼女はG—の苦しみを、眞實には感じてゐないやうにさへ思へた。勿論彼女は自身不檢束ではなかつた。そして物質の扱ひ方に温かい人情味をもつてゐたけれど、相當物質的に惠まれてゐる陽吉に、やつぱり秘密で金を融通してゐたのだと思ふと、それに類似したやうな色々の場合が、G—には不愉快に思出せて來るのであつた。

「もつと質の悪い秘密はなかつたか。」G—にはそんな疑問すら起つて來るのであつた。

「貸してある上に又貸して還してくれるか知ら。己は今苦いのだからね。」

「解つてゐます。返すには返します。」

I子のところへ戻つて來ると、敏感なI子は直ぐG—が初夫と話してゐたかを氣にした。

「何を話していらして。」

「いや、別に何でもないんだよ。」

「さう！」

その晩家のことを初夫に頼んで、見物中舞台をしまつた街子とも一緒になつて、始終笑顔さうにI子の傍に坐つてゐた蝶子にも別れを告げて、暗い心を抱いてG—はI子と二人きりで海岸へ歸つた。しかし

今夜の初夫の話には、現實的には[illegible]あることには、さう氣がつかないで、不安を感じながらも、[illegible]もしさを感じた。そして其をI子にも語つた。でも、彼の表情は時々曇つた。

「何を話していらして。何か心配なこと[illegible]たいの。」

「いや、疲れたんだよ。」

「さうでせうね。聞き度いと思ふわ。」

「それは好いんだがね。達夫が金を少し大きい金を使つたらしいんだよ。」

「さう—澤山？」

「まあ、ちよつと……。」

「何につかつたの？」

「遊ぶらしいね。」

「さう！ 先生も心配が多いのね。」I子も悲痛な表情になつた。

「でも氣持を暗くなさらない方がいゝわ。どこの家にもさういふ事は有りがちなのよ。でも預金の通ひなんかは、先生がもつていらした方がいゝのよ。」

自動車のなかで、そんな話をしたから二人は佗しい海岸の彼女の家へついた。

四

そして其から、達夫によつて齎された色々の被害の、まだ中學を出たばかりの青年にしては、少し大膽すぎるほど大きいものであると同時に、ちよつと始末の惡い性質のものであることに氣がついた頃には、彼も嚴しい女と同棲してゐた。

G—は舞踊の夜郁夫に別れてから、二三日たつて東京へ還つて來た。そして其のちよつと前に、郁夫が妹に注意しておいた用箪笥の金を、達夫が素早く持出してしまつたことに氣づいた。G—は××××から來てゐた小切手や、達夫が持つて行つた金の殘りについて、その時郁夫を詰つてゐた。金を引出さうとして通ひを弟に渡した郁夫の氣持にも無論不明な點があつた。大膽に於て何うにか辻褄が合はないこともなかつたけれど、父に斷りもなしに、そんな無理をしてまで陽吉に用立てたことは、一應責めておかなければならなかつた。

「そんな事はお前の權限ちやないちやないか。海岸へ行くとき、經濟のことはお前にあれほど頼んだちやないか。ちや、今度は僕がしつかり遣りますと立派に引受けたんだからね。陽さんだつて還してくれやしないよ。」

一刻なG—はかん〳〵言つた。郁夫の相が其の刹那遽かに險惡になつた。

「そんな事を言ふから……」彼は眉根に皺を寄せて、暗い目をして父を睨んだ。

郁夫に取つては、或場合には、若し手當てさへしてくれるならば、父がゐない方が、却つて勝手の好いこともあつた。彼は自分や兄弟達の家を、よく守つてゐるとは言へなかつた。夜家をあけてゐることは珍らしくなかつた。總ての日常生活に於て、幾十年勞苦して來た父と、其の結果何うにかかうにか人並の體裁を具へてゐる現在の家庭生活の雰圍氣のなかに、生れながら呼吸してゐる自分との區別を、まるで感じないやうに思へた。父の結果が直ぐ自分の出發點のやうに思へる—いや、それよりももつと冷らしい態度をさへ彼は取つてゐた。G—は彼が父を愛し、好いてゐるやうに、何の子供よりも郁夫を愛し、好いてゐたけれど、その性格には時代や年齡や思想の問題でなしに、本質的に自分とはまるで勝手のちがつたものゝ潛んでゐることを屢々見せられた。後天的のものはG—には其の相違はむしろ悅ばしかつたが、本質的に何か知ら自分よりも底力の強いものや暗いものゝ潛んでゐることを感ずるとき、彼の存在に何うにもならない壓迫を感じた。勿論それは妻が存生中から彼を苦しめたところの、立場とか利害とかいふものとは、全く別種の氣質的のものであつた。そして氣質のやうなも

別——

のすらが、何かある場合に相互の悩みについて深い理解あるべき藝術家としての父と子の觸れ合ひを、不愉快なものにした。

しかし不斷は彼もGーには好い話相手であり、散歩の好い伴侶であつた。Gーも彼によつて慰められ力づけられる場合が多かつた。母の死後、五人の弟妹の兄として彼の味はつて來た苦惱が、どの位深いものであるかは、Gーにもわかつてゐた。彼と離れてゐるとき、Gーは彼の寂しげな姿を憐れまずにはゐられなかつた。

しかし初夫は初夫だけの思惟と、責任感をもつてゐた。差當つての脅威は、今まで少しも父の心の煩ひとならなかつた達次の行動であつた。それはGーの氣づいた彼等が、最初考へてゐたものより、遙かに範圍の廣いものであることが、日を經るにつれて、機會あるごとに直接彼に知れたり、初夫や女中によつて告げられたりしたからであつた。そして其の最後に、一ト月ほどたつてから、或る出版書肆から、千圓ばかり引出して行つたことが、ふとしたことから其の店員の口から洩れるまでには、原稿料の先取りや、印税の先借りの、そつちこつちにあることが、明白に一々知れてからであつた。そして其よりも一層ひどいのは、或る書肆の方が總てGーによつて封じられてから、書畫や衣類や書籍を持出したり、知つてゐる化粧品店からダイヤの指環や帯留のやうな飾類を十數點、Z海岸にある父の名によつて買つたことであつた。Gーの厳重な吩咐によつて、妻が心かけておいた妹達の郵便貯金や、妻の指環や帯止や、夫から夫へと、彼の手が迹づけられた。

——れ

初夫やK青年や女中の話によると、重もに彼をさうさしたものは、多分は或る遊廓の女であつた。彼はそのうちの幾分かで、彼女を泥水から救ひ出したらしいのであつた。

夏が來た頃には、しかし彼も漸く行詰つて來た。そして疲れ切つて、Gーと往來してゐる若い作家の家へ立寄つたり、妻が嫁を世話したことのある或る大きな雜誌取次店の店員にたよつて行つたりした。

そして其等の取做が一々Gーによつて拒まれたところで、彼は初夫の口添によつて、山國の母方の親類へと落ちて行つたのであつた。

Gーは徹底的に彼の行詰ることを望んでゐた。彼は子供のために憂へもしたが、何よりも生活の脅威を感じた。

最近Gーは別府の温泉から來た、達次の手紙を受取つてゐた。それは今迄の亂暴を詫びると同時に、海外へ渡るための多額の旅費を要求したものであつた。勿論Gーはそれを信ずることが出來なかつた。Gに取つては、彼の爲してゐることは總て叔父から蒙つた災害の延長としか思へなかつた。

お……」

Gーは貴女が來て[illegible]能女の[illegible]すものに、私共がゐた方が、双方に都合が[illegible]と思つた。

一緒に[illegible]たつてゐますか知ら」

[illegible]と[illegible]つて、

[illegible]

五

Gーは久しぶりで、郊外の古跡を見たり、一足早く旅館についてから、傍にI子と[illegible]つて、[illegible]、[illegible]に朝の食事を取つた。

[illegible]

[illegible]

ふんです。達次も方々行きつまつて、初めていくらか自分といふものに打つかつたでせうから。」

「大分弱つてはゐますがね。いづれ後程謝罪らせますが……。やいやい、誰か達次さんを探してこいや。上の家へでも行つてゐるづら。」

彼を見に行つた細君が勝手の方から戻つて來た。

「お湯にいらしたんですて。」

二人きりになつたとき、I子が甘へるやうに、

「私湖水が見たい。行きません？」

「行つても可い。」

I子は着替へをした。そこへ細君がやつて來て、離れたところでI子の身仕度するのに見惚れてゐた。

「帶でも羽織でもほんとに好い柄ばかり。」

「いゝえ、何にもないんですのよ。」

自動車を驅つて、湖水のほとりを上の町まで行つた時分には、もう日が落ちかゝつてゐた。G―はI子と棧橋へ出て見た。ボートが幾つも浮いてゐた。

「月夜が好いんだ。」

「さうでせうね。でも思つたより水が汚ないわ。」

そこから引返した。I子にはこの湖畔から出た作家のF氏や、女流評論家のY女史のことなどが興味があつた。自動車のなかで彼等の噂をしながら、公園へ行つて見た。もう日が暮れてゐた。赤いお濠の蓮が、夕闇に浮上つて見えた。二人は荒れた公園の中へ入つて見た。

「野趣があつていゝわ。こんな處好きよ。」

縄手を通つて、停車場前へ出て、そこから引返した。

晩飯がすんでから、抱への音曲なんかを聞いた。そして夜更けてから、細君と三人で町を散歩した。

翌朝店の方の夫婦の居間で、G―は達次に逢つた。彼はすつかり變つてゐた。憔悴もしてゐたが、姿や態度がまるで變つてゐた。髪など分けて、學生らしい意氣も坊つちやんらしい氣分も失せて、柔弱な田舍の町の若い衆か、新派の下廻りかと言つた風であつた。G―は其の服裝からが氣になつた。

G―は罪人のやうに小さくなつてゐる彼に、十五分ばかり説教したが、達次の本來が、さう云ふところにあるのかと思ふと、可哀さうになつた。この家にぴつたり板についてゐるやうにしか見えなかつた。

「己達についてこれない男だとすると、引上げようとしたところで無駄かも知れない。それで幸福に暮せばそれでも可いのではないか。」

G―は服裝まで小言を言つたことに、寧ろ空虚を感じた。

午後主人と三人で、山手の方へ行つた歸りに、G―の好きな古祠の

建築を見に行つたりした。そして其の歸りに、料理屋へ立寄つて、細君に電話をかけた。

やがて細君がお化粧をして、いそ〱やつて來た。養女と達次とをつれて。

G—は達次の來たことが、それが初夫のやうな批判的な別の自己を兎に角持つてゐる男とちがつて、彼の場合では氣にくはなかつた。

そこを出たのは晩方であつた。

G—はこゝへ來てから、自分の方から養子問題に二度ばかり觸れて見た。それは主人夫婦が、いつまでも彼の前に、それを言ひ出しかねたことを知つてゐたからであつた。

「私の勝手から言へば、長男を上げた方がいゝんです。それはあの男が、物を書かうとしてゐる人間なので、私の迹を繼いだのでは隨分苦しむだらうと思ふからですが。」

細君は初夫を好いてゐた。

「え、初夫さんなら……。」

しかし主人は達次を心から愛してゐた。

「初夫君はなか〱社交家で。」主人はけそりとしてゐた。

「さうね、あれは少し難しく出來てゐる人間ですから、ちよつと扱ひにくいかも知れませんね。」

しかし函館では話は極まらなかつた。G—は席を避けてゐた—Iの傍へ寄つて行つた。

「今夜どこか外へ行かない？」I子はそつと言つた。

「こゝは厭？」

「厭ぢやないんですけれど、一日でも好いから旅の氣分で暢びりしたいわ。」

「さうね。第一僕ぢや肝腎の話がきまらないんだから。」

G—も少し苛ついてゐた。そして遽かに支度に取りかゝつた。達次の小使として、少しばかり細君にあづけたりして、彼のことを頼んで其處を立つた。彼は久しぶりでM町の溫泉へ行つて見ようと目論んでゐた。

ステイションへは達次も見送りに來てゐた。そして汽車が出ると、彼はI子にもいつにない叮嚀なお辭儀をした。

二人はクッションに落着いた。I子は初めて目が晴々して來た。

「達次さん何だか可哀さうだつたわ。私に大變叮嚀にお辭儀したわ。」

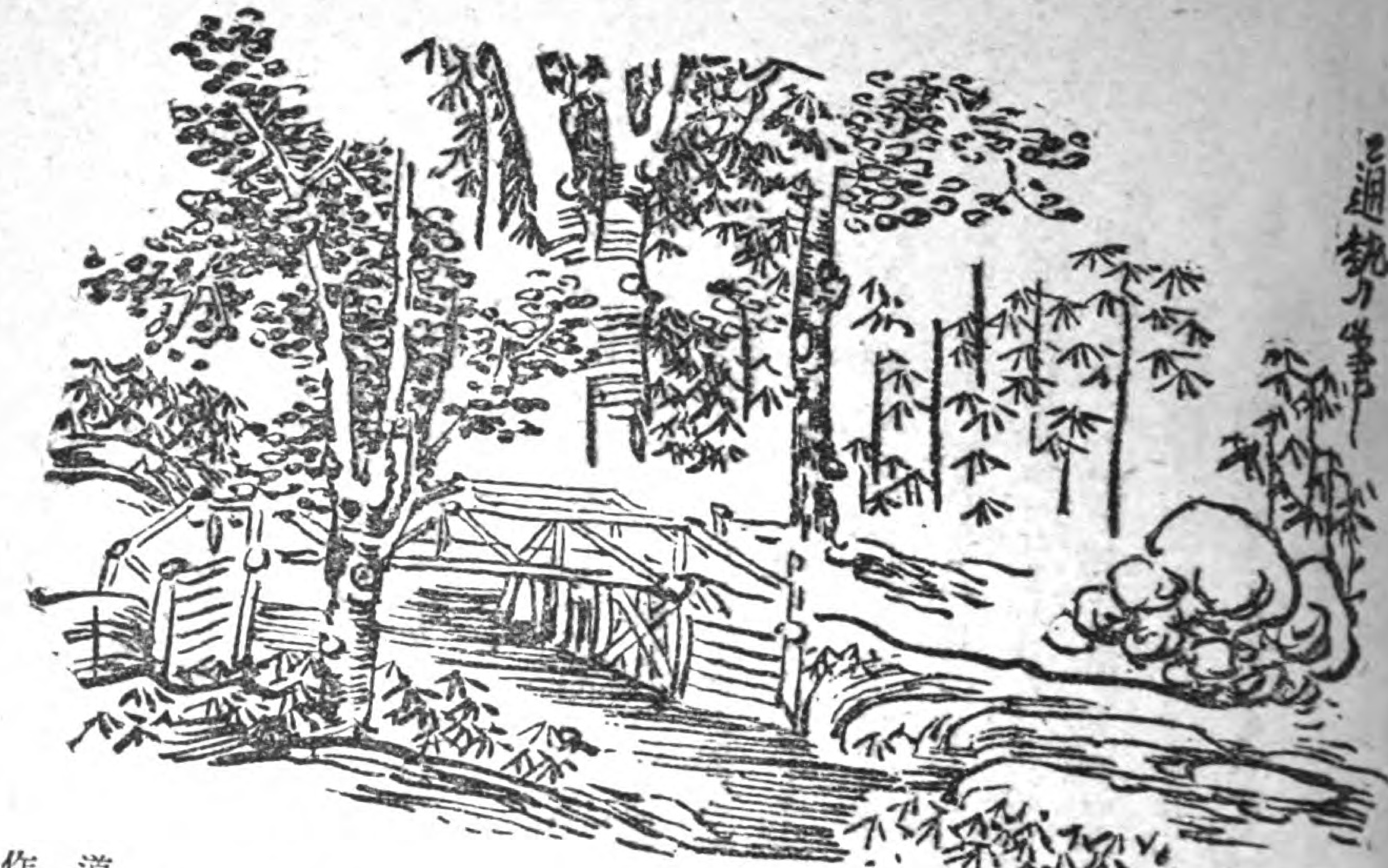
「さう。大分參つてゐるやうだね。」

「寂しさうよ。」

「さうでもないだらう。」G—は言つたが、I子の感じに偽りはなかつた。

「私なら達夫さん、あすこに置くのは可哀さうだと思ひますね。」
「そのうち又出て來るだらうさ。しかし練習もしてゐないやうだな。」
「さう。それよりか、あの人をあの家へやるのも考へものだと思ふわ。私の口を出すところぢやないんですけれど。」
「さうね。それも長いあひだ考へたことなんだけれど、どうせ學校は東京でやるんだし、あの人達は皆んな相當上品な人だから。」
「それあさうだけれど、達夫さんは初夫さんと違つて、割合ひ自己がないから、あの空氣に同化されてしまひさうだわ。達夫さんなら、巧くやるでせうけれど。」
「さうね、それに細君の話をきいても、菊作りの手傳ひに、親爺について出なければならなかつたり、何と言つたつて家にゐるやうな譯には行かないのさ。可哀さうも可哀さうさ。けれど先きへ行つてから、幸福だとおもふ。己も苦しいからね。」
「それもさうね。けど、外の子供さんが、夫々高い教育を受けて、えらくなつた時に、若し達夫さんだけが、一人はづれたとしたら、淋しく思はないでせうか。」
「さう。しかし、あの子を引揚げようとするのは、反つて可哀さうぢやないか知ら。己は今まで達夫を知らなかつたやうだ。」
……………。

今急いで決めることでもなかつた。
二人はM町の停車場へおりた。停車場は可也込んでゐた。時間前にゐた若い人達の多くの目を避けるやうにG―は急ぎ足で自動車まで歩いた。I子がおくれて乘つた。G―は數十の視線がその自動車に集つてくるのを感じた。
明るい町の灯が、二人の心を晴やかにした。
「ほう、これM市？　づゐぶん綺麗ね。」
「夜はね。」
町を離れて野に出て來た。涼しい温泉町の灯が見え出して來た。G―は二度ばかり泊つたことのある旅館へ自動車を着けさせた。
「達夫をつれて來ても可かつたんだけれど……。」G―は風呂へ入らうとして、汗ばんだ着ものをぬぎながらI子にさゝやいた。
「さう。私もさう思つたけれど。」
「やつぱりそんな事をしない方がいゝんだよ。」
二人は浴衣かけで、廊下を傳つて行つた。湯の匂ひが鼻にしみて來た。



脳の洗濯(狂言)

武者小路實篤

◇

作者。今日はよく來て下さいました。又何かお目にかけたいと思つて座員一同苦心いたしました結果、何か面白くつてためになるものをお目にかけるのがいゝといふことになり、私めに何かかけとのことで御座います。面白くつてためになるものをかけと云ふのはやさしいことですが、かくまになつては中々やさしくはありません。例によつて日が近づくまで何にもいゝ考が浮ばず、いよ／＼期日も近づきましたので、大急ぎにかきました。皆さんがよろこんで下さればいゝがと思つて居ります。例によつて出鱈目のもので御座いますが、なるべく面白いものをかいて見やうと思ひました。つまらなかつたら例によつて役者がうますぎたとお思ひ下さい。決して下手だとはお思ひ下さるな。おい、道化！

道化。なんです。(出てくる)

作者。皆様にお目通りしろ。

道化。もう引こんでもよろしいか。
作者。何かしやべれ。
道化。今日はいゝお天氣で。もうよろしいか。
作者。何かもつとしやべれ。
道化。何をしやべつたらいゝのですか。
作者。舞臺の用意が出來るまでしやべれ。しやべれなければ逆立ちでもしろ。
道化。皆さん。私はこんな風して歩いてゐますが、之でも生た人間で、腹が立てば怒りもします。しかし怒つては飯が食へませんから、この世の中を面白、おかしくくらさうと思つてゐるのですが、さて面白、をかしくくらすのは中々大へんです。皆さんは私を見てお笑ひになるが、私は心では泣いて……はおりま……す。一つ泣いてお目にかけませう。皆さんも一緒にないて下さい。(泣く眞似する)私は人間に生れなかつたらよかつた。この世の中がこんな世の中だとは思はなかつた。私は生れる前に人間と云ふものはそれは可愛い、優しい親切な動物だとおそはつた。そして人間に生れたら毎日毎日のらくらして遊んでゐて、うまいものが食へると思つてゐた。それで私はよろこんで生れて來ました。そして私はどんな目にあつたか、皆さんも御承知でせう。
作者。もう引つこんでもいゝ。
道化。もう一ことしやべらして下さい。皆さん。皆さんは人間に生れてうれしく思ひますか。私は自分の子供を見ても、子供達がよろこぶのを見ても、之からさき大へんだと思ふのです。しかし、子供達は私達よりは利口でせうから、どうにかやつてゆくと思ひます。さて皆さん。人間に生れて後悔してゐる皆さん、後悔したらさてどうしたらいゝのですか。生れない前にどうしたら歸れるのですか。それはでんぐりかへしを三遍やつてから云ふ風に後ろ向きに歩いて行くといゝのださうです。嘘だと思ふ人はやつて御らんなさい。
作者。馬鹿だな、君は。後ろへ進んだつて生れぬ前には歸れないぞ。それより前へ前へ進んでゆくのだ。地球はまるいから、前へ前へ前へ進めばいつのまにか、生れない前の世界に歸れるのだ。だが、たゞでは歸れない。又たゞ歸るのではつまらない。前へ前へ進んでゆくがいゝ。
道化。さうですか。へいへい。(前へ進む)
(虎が出て來る)
虎。食ふぞ。
道化。之は困つた。逃げろ。逃げろ。
(獅子、出てくる)

獅子。こつちにくると食ふぞう
道化。弱つた、弱つた。一たい私はどうすればいゝのです。
作者。食はれろ、食はれろ。生れぬ前に歸れるぞ。
道化。之が芝居だからいゝが、本當の獅子が出て來たら大へんだ。
作者。そんなことを云はずに食はれろ。食はれろ。
道化。いやなこつた。逃げられるだけ逃げるぞ。（腰がぬける）之は大へん腰がぬけたぞ、もうどうでも勝手にしろ。（腰がたつ）もうやぶれかぶれだ。戰ふだけ戰ふぞ。
（獅子と虎が同時にとびかゝる、道化身をさける。獅子と虎とかみあふ）
道化。しめたぞ、しめたぞ。（逃げやうとして）まてどつちが勝つか見てゐてやらう。（煙草を出してのみ始める）。虎公しつかり、獅子公まけるな。
獅子。まちな虎公。先づ人間をさきに食つちやおう。
虎。それがいゝ。
道化。大へん、大へん、逃げろ。逃げろ。
獅子と虎。逃がすものか。逃がすものか。
獅子。だがまて、あんなまづさうな人間を食ふためにあんまり走けるとそんだ。
虎。それもさうだな。
獅子。もつといゝ餌さをあさるとしやう。
虎。さうしやう。（退場）
作者。さて時間が來ましたから、始めることにいたします。

月夜

見知らぬ男。お前は何を考へてゐる。
A。別に考へてはゐないのです。この頃至つて泰平で呑氣になつてゐるのです。
見知らぬ男。あんまり呑氣でもないやうぢやないか。
A。明日迄に脚本をかゝなければならないので困つてゐるのです。
見知らぬ男。斷れないのか。
A。斷れないのです。
見知らぬ男。かけなければどうするのだ。
A。かけなければ仕方がないでせう。しかしかゝないと約束を守らないことになるので、それに僕の芝居をやると豫告迄出てゐるのですから。
見知らぬ男。亂暴だね。
A。少し亂暴です。

見知らぬ男。それで呑氣なのか。
A。えゝ、もうやむを得なければ斷るだけだときめてゐますから呑氣です。
見知らぬ男。何かかければなほいゝのだらう。
A。それはさうです。しかし明日迄では一寸困りますな。
見知らぬ男。いゝものをかく必要はないのだらう。
A。下手なものをかくと見物が承知しませんから。
見知らぬ男。見物なんて云ふものは、美しい女でも出しておけばそれでいゝのだらう。
A。さうもゆきません。
見知らぬ男。そしてしまいにおどりでもおどらせばいゝのだらう。君の脚本のやうに。まづいものを見せるお禮におどりを一つ見せると云ふのが君の芝居の常習らしいが、見物はそれで滿足するのだらう。
A。またおどりでもありませんからね。
見知らぬ男。いや、大いにおどらすがいゝよ。どうせ君のかくものは出たら目で通つてゐるのだから、始めつからしまいまで、おどらせば一番いゝのだ。いゝおどりを見るのは實にいゝものだからな。
A。それならいよ〳〵困つたらおどらしますかね。
見知らぬ男。それがいゝだらう。勝手な理窟を云はしておいて、そして退屈しさうになつたらおどらすのだね。
A。あなたは中々ずるいことを考へてゐますね。
見知らぬ男。君はとつくにそれを實行してゐるよ。
A。さうでもありませんよ。しかし人間の心の調子が高くなるとついおどりたくなるものですからね。
見知らぬ男。そしてかくことがなくなるとおどらしたくなるのだらう。
A。さうぢやありません。僕はいつでも一生懸命になつてかいてゐるのです。
見知らぬ男。處で今度はどんなものをかかうと云ふのだ。
A。まだきめてゐません。脚本をかくより畫をかく方がこの頃は好きなのですが、畫ぢや金がとれませんからね。
見知らぬ男。處で俺はたにしに來たのかね。
A。おどりに來たのぢやないのですか。
見知らぬ男。馬鹿！　さうそ、俺はこゝである女に逢ふ約束になつてゐたのだ。
A。それを忘れるのは呑氣ですね。
見知らぬ男。俺は忘れることの名人だよ。一々覺えてゐては大變だ。
A。それでよくこゝに來ましたね。
見知らぬ男。君に[illegible]したからさ。

A。それなら僕は脚本の内にあなたのことをかき上げよう。
見知らぬ男。いくらでもかくがいゝ。
(見知らぬ女登場)
見知らぬ女。随分待ちましたか。
見知らぬ男。随分待つた。
見知らぬ女。御免なさいね。
見知らぬ男。何か用か。
見知らぬ女。私、あした宮殿でおどらなければならないのよ。それであなたにおどりを教へていたゞきたいと思ふの。それで來ていたゞいたの
見知らぬ男。贅澤な奴だな。先生をこんな所によび出すなんて、
見知らぬ女。そんなことはどうでもいゝわ。おどりを教へてくれない。
見知らぬ男。それは教へてやつてもいゝさ。
見知らぬ女。私、明日は王様をすつかりおどかさうと思つてゐるの。
見知らぬ男。それはいゝだらう。
見知らぬ女。私、美少年に化けておどつて見たいの。
見知らぬ男。それもいゝだらう。
見知らぬ女。いゝおどりおしへて頂戴ね。
見知らぬ男。今すぐには一寸無理だね。
見知らぬ女。あなたならおどれるでしよ。
見知らぬ男。美少年のおどりか。一寸困るな。
見知らぬ女。どんなおどりだつてよくつてよ。時々いゝ形をして、見せさへすれば。
見知らぬ男。王様の寵愛でもとり戻したいと云ふのかい。
見知らぬ女。いやなこと、王様にすかれちや大へん。だけど、他にすかれたい人があるの。
見知らぬ男。厄介な奴だな。
見知らぬ女。一寸可愛いゝでしよ。
見知らぬ男。何が可愛いゝものか。
見知らぬ女。私、王様にすてられてよかつたと思つてゐるの。
見知らぬ男。それはあたりまいさ。
見知らぬ女。早くおどりを教へて頂戴。
見知らぬ男。さうやすつぽくは教へられない。王様にすてられて昨日まで泣いてゐた奴は誰だ。
見知らぬ女。私よ。
見知らぬ男。それで今日はもうすつかりよろこんでゐるのは誰だ。
見知らぬ女。私よ。それがどうしたの、すてられた人に未練なんか起

さすのは馬鹿よ。この世の中は廣いのですからね。そして面白いことはいくらでもあるわ。

見知らぬ男。王樣はやきもちをやくぞ。

見知らぬ女。大丈夫、そんな王樣ぢやないわ。

見知らぬ男。それ程のお前ぢやないと云ふ方が本當かも知れないね。

見知らぬ女。あとになつて見ると、なぜあんな男に夢中になつたのか。と、不思議な氣がするわ。

見知らぬ男。それでお前は幸福なのか。

見知らぬ女。幸福よ。

見知らぬ男。あの男にすてられたらどうする。

見知らぬ女。そんなことはないわ。

見知らぬ男。あつたらどうする。

見知らぬ女。あつたつてかまはない。そしたら又いゝ男をつくるから。

見知らぬ男。そんな男がゐるのかい。

見知らぬ女。さがせば、貸家と同じでいくらでもあるわ。

見知らぬ男。困つたやつだな。

見知らぬ女。悟つたのよ。もう天下泰平よ。何にも怖いものはないわ。今王樣に愛されてゐる人も、また其の内にはすてられるわ。

見知らぬ男。まだ未練があるな。

見知らぬ女。ないわ。だけど宮殿をわがもの顏してゐるのでおかしいわ。

見知らぬ男。それぢやおどりを敎へてやろかね。

見知らぬ女。えゝ、敎へて頂戴。

見知らぬ男。だがそれ迄に、お前のおどりを一つ見せてほしいものだね。

見知らぬ女。もう時間がないわ。

見知らぬ男。時間なんか消えてゆけ。

見知らぬ女。それなら一つ敎へて頂戴。

見知らぬ男。それなら面倒だが敎へてやるか。しかし敎はればすぐ逃げてしまふのだらう。

見知らぬ女。それはさうよ。

見知らぬ男。一寸待て、俺は今日用があつたかも知れない。

見知らぬ女。用があつても敎へてくれない間は逃がさない。

見知らぬ男。さうそ、今日は他に一人約束があつた。

見知らぬ女。あつたつていゝわ。

見知らぬ男。それなら早く俺がおどつて見せてあげやう。(おどる。

見知らぬ女。それでおしまい。

見知らぬ男。おしまいだ。さよなら。
見知らぬ女。さよなら。
(見知らぬ男、退場)。見知らぬ女おどりの稽古する。忘れた所を思ひださうとする。どうしても思ひ出せないので、泣き出す)
A。何をないてゐるのです。
見知らぬ女。おどりを忘れたの。之ぢやあしたおどれないので泣いてゐるの。
A。さうぢやないのですか。(おどつて見せる)
見知らぬ女。さうでした。さうでした。ありがたう。あなたはどなたです。
A。僕ですか。僕はこの家の主人です。あなたはどなたです。
見知らぬ女。私は月の世界から來たものです。
A。さうですか。どうりで見たことがないと思ひました。あしたおどるのですか。
見知らぬ女。えゝ。あなた月の世界に來たくない。
A。ゆくのは大へんでせう。
見知らぬ女。いやなんでもないのよ。もしゆきたければ私がつれていつてあげるわ。
A。歸りはどうなるのです。
見知らぬ女。歸らなければいゝぢやありませんか。
A。僕は歸れないと困るのです。
見知らぬ女。こんな世界に未練があるのですか。
A。未練がありますとも、僕はこの世界でないとぴつたり生きられないのです。
見知らぬ女。へんな方ね。あつちへ行つてごらんなさい。面白いことだらけですよ。あなたのすきなものはなんでもありますわ。
A。嘘でせう。うつかりゆくと奴隷にされるのでせう。
見知らぬ女。そんなものはないわ。それなら歸りは私が送つてあげるから、二日か三日來て御らんなさい。
A。それなら一寸うちの奴に二三日旅行をしてくるからと云つて來ますから、待つてゐて下さい。
見知らぬ女。えゝ、待つてゐますとも。
(Aかけてゆく)
見知らぬ女。あの人は馬鹿だな。しかしいゝお土産が出來た。

二

A。人を動物園の猿のやうに思つてやがる。どうかしてこのおりから逃げられないものかな。それにしても地球に歸ることは出來ない

今時分、家の奴はさぞ心配してゐるだらう。子供の奴はどうしてゐるか知らん。

（先生、學生三四人をつれて來る）

先生。之が地球の人間さ。實に不景氣な顏をしてゐるだらう。俺達にそつくりだが、不景氣な野蠻な顏をしてゐる。この人間と云ふ奴は俺達の墮落したもので、眞心を生かして生ることが出來なくなつたものだ。彼等は自然の深い意志を知らず。人間がどう生ればいゝかを知らず、自分のあさはかな智慧をもつてずるいこと許りして生きやうとしてゐる動物だ。そして動物よりも不自然で、醜い。着物と云ふものを考へだしたが、そのために肉體が退化することを忘れてゐる。君達も心がけをわるくし、天の意志を重ぜず、あさはかな自己の智慧許りをたよると、こんな顏になる。恐ろしいことぢやないか。

Ａ。俺をだましてこゝにつれて來たのは誰だ。俺達の仲間ぢやないぞ、君達の仲間だ。君達の仲間は美しい顏をしてゐるかも知れないが、嘘つきだぞ。

先生。人間の顏はあんなにまで醜く呪ひに滿ちてゐる、彼等の心には平和がない。

Ａ。ないのはあたりまいだ。こんな中に入れられておちついてゐられる馬鹿があるか。

先生。それ御らん。あゝ云ふ風に天命を安じることを知らないものが人間なのだ。君達は顏や身體が似てゐるからと云つてこんな人間に同情をもつたり、尊敬をもつたりしてはいかん。そしたらたちまち君達の心は邪氣に滅されるにちがいない。あの濁つた目をごらん。あの悲しさうな、怒つた顏をごらん。根性許りが出て、おちついた所が少しもないあの表情をごらん。そして人間と云ふものは實に死を怖がるものだ。どんなに死をこわがるものか。ためして見やうか。

Ａ。そんな殘酷なことはよしてくれ。

先生。學問のためだ、眞理のためだ。殘酷だなどと云ふ言葉を平氣でつかうのが、地球の人間だ。其處にゐる獅子をつれて來い。

Ａ。そんなことはよしてくれ。お願ひだよしてくれ。

先生。そら顏色がかはつたらう。

學生一。えゝ、本當にかはりました。

先生。あれが死の恐怖と云ふものだ。獅子をつれて來てこのおりのなかに入れて見てくれ。

學生一。こんな大事な標本を喰はしてしまつてもいゝのですか。

先生。喰ひさうにしたらとめればいゝ。

Ａ。それだけは許して下さい。許して下さい、許して下さい。（手をつ

いておちつきする）

先生。それあんな見ともない眞似まで平氣でするのが人間だ

A。なんだつて、俺達人間を輕蔑するのか。

先生。あのから元氣を見ろ。あれが地球の人間と云ふものだ。

A。そんならお前達は平氣で獅子に喰はれるか。

先生。平氣で死ねないことを自慢にしてゐる。

學生二。本當に不思議ですね。そんなに死ぬのが怖いのですかね。

A。君達は死ぬのが怖くないか。

學生二。怖がらなければ死なずにすめますかね。

A。死なずにはすまない、しかし死が恐ろしいのが事實なら仕方がない。

先生。死が恐ろしいといふのは幻想にすぎない。

A。肉體の苦痛はどうだ。

先生。肉體の苦痛は神經のいたづらにすぎない。

A。いたづらでも痛ければ仕方がない。

先生。いたくないやうにしやうと思へば出來るものだ。

A。それならお前が獅子に食はれたらいゝだらう。

先生。私達が生てゐるのは肉體の苦痛と死が怖いから許りだと思つてゐる。實に不思議な考へだ。

A。それなら君達は何のために生てゐる。

先生。生かされてゐるから生てゐる。生てゐるのは私達の都合で生てゐるのぢやない。

A。それなら君達はいつ死んでもいゝのか。

先生。死ぬ時がくればよろこんで死ぬ。死はやすらかなものだ。

A。不快なものとは思はないか。

先生。思はないね。君は本當に怖いのか。

A。それは怖い。

先生。どう怖いのだ。

A。話したつてわからない。

先生。早く獅子をつれて來い。

A。それは罪だ。

先生。罪？　地球上ではまだ罪と云ふ言葉がはやつてゐるか。

A。人をころすことはこゝでは罪となつてゐないのか。

先生。人を殺すものはない。殺す理由がないから、しかし殺されるのをいやがるものはない。死はたのしいものだから。

A。死がたのしいと云ふことはどうしてわかる。

先生。死んでゆくものが皆よろこんで死んでゆくのでわかる。そのたのしみは何とも云へないものらしい。女を抱擁するよりは死を抱擁

Aする方がよりたのしいことは誰でもが明言してゐる處だ。生てゐるのは死のよろこびをより深かく味はうためだと云つてゐるものもある。そして早く死ぬものは、そのよろこびを早く味はつたずるい奴だとも云はれてゐる。

A。それなら自殺するものが多くはないのですか。

先生。生てゐることはわるいことぢやない。生てゐることも限りなくたのしいことだ。生は實によし死は更によし、生れないのも亦惡くない。之が私達の考へだ。

A。呑氣だね。君達は。

先生。無意味に苦しむことを得意にしてゐるのが君達だ。

。そんなことを云ふならおりに入つて見るがいゝ。

先生。おりの內もわるいものぢやない。いろ／＼たのしいことを考へることが出來る。

A。僕は地球に歸りたい。

先生。何處でも居る處がいゝはづだ。君達は地球へ歸ると、地球の生活の惡口を云つてゐるのだらう。生ることは苦しい。だが死ぬのはなほいやだと。

A。その通りだ。

先生。恐ろしい。そしてくらい考へぢやないか。この點を見てもわかる。

A。こゝでは食へない人間はゐないのか。

先生。地球では食へない人間がゐるのか。食へないで生てゐるのか。

A。地球では食ふことが大へんなのだ。そしてどうかするとすぐ食へなくなるのだ。

先生。それなら地球では餓ゑ死にしてゐる人が多いのだね。

A。餓ゑ死にするのがいやなので、どんな勞働でもやるのだ。

先生。勞働はたのしいことだ。

A。地球ぢや勞働はたのしいことぢやない。

先生。地球ではすべてが苦しいのだね。結婚はどうだ。

A。結婚したものは結婚したことを後悔し、結婚しないものは結婚出來ないことを淋しがる。

先生。なんでもこゝと反對だ。それでは地球では子供を愛しないのか。

A。愛しはするが、子供を育てるのが大へんなので、多くの人は生れないことをのぞんでゐる。

先生。地球の人はそれでは愛することを本當には知らないのだな。

A。僕[illegible]

ゐない。
先生。病的な世界だな。君達はどう思ふ。之はたしかに地球の人間は脳味噌のつくり方がわるいにちがいない。一つ君の脳味噌を見せてくれないか。
A。どうかそれは許して下さい。
先生。一寸だ。三十分もかゝりはしない。
A。どうして見るのです。
先生。頭蓋骨をはがして見るのだ。又あとでくつけておくから心配なことはない。一寸眠てゐる間に、よくしてあげる。
A。いやそれは御免です。
先生。一寸調べて、そしてわるい所があつたらなほしてあげる。そしたら死ぬことなんか怖くなくなるし、生きてゐることがたのしくなる。見るもの聞くものが美しくなる。小鳥の聲をきいても生てゐるのがうれしくなるし、草の葉一つ見ても愉快になる、まして人間と話をしたり、青空を見たりすると愉快でたまらなくなる。
A。それでも頭蓋骨をはがされては困ります。
先生。すぐはがれる。
A。よして下さい。このまゝで結構です。
先生。地球の人間と云ふものはどうしてさう臆病なのだらう。だからいつまでも進歩しないのだ。そしていつも[illegible]したやうな顔をしてゐるのだ。
學生一。獅子はどうします。
先生。獅子のことは忘れた。早速つれて來い。
學生一。はい。
A。どうしても獅子に喰はれなければならないのですか。
先生。食ひはしまい。しかし死の恐怖と云ふものが、人間の表情にどうあらはれるか。一寸研究して見たい。
A。そんなことは御免です。
先生。いくぢなし、そんな心がけでゐるからいけない。死がこはくて生きてゐられるか。人間はどうせ死ぬものにきまつてゐる。
A。それでも獅子に食はれるのは閉口です。
(學生一、獅子をつれてくる。)
學生一。それでは之を入れるからさう思へ。
A。許して下さい、許して下さい。
先生。だめだ。よく表情を見てゐろ。
(獅子を入れる。Aこはがる)
先生。獅子! もつと食ふ眞似をしろ。おどかせ、おいかけろ。よろしい。もう獅子を出してやれ。

(獅子を出す)

A。あゝ、助かつた。こんな怖い思ひをしたことはない。もう二度とこんな目にあつたら死んでしまう。

先生。そんなに怖いか。

A。怖い。

先生。君達は恐怖と云ふものがどんなものか知つたらう。そして我々がその恐怖に打ちかてたことをよろこぶだらう。野蛮時代においては我々の先祖もまだこのやうに死の恐怖を味はつたのだ。私達にはもうその氣持はわからなくなつてしまつた。脳の出來がちがつてしまつた。死はたのしいものであるとしか我々には思はれなくなつてゐる。しかしこの男はまだ死の恐怖にかてない。憐れむべき狀態にゐる。あの恐ろしさうな顔は君達がまだ當つて見たことのないものだ。寫眞にとつておいたらいゝだらう。

(畫家が出てくる)

畫家。之は面白い。(寫生にかゝらうとする)

先生。いゝ處へ來ましたね。

畫家。僕はまだ人間の恐怖した時のありさまを見たことがありません。深刻なものですね。獅子もつと吠えろ、かみつく眞似をしろ。さうだ。もう少しうまくおどかせ。

先生。之で君達は死の恐怖と云ふものがいかに恐ろしいものかと云ことをまのあたり知つたらう。

學生一。知りました。

先生。どうせ死なければならない人間が、か程にまで死を恐れるのは馬鹿氣たことに思へるだらう。しかし野蛮時代の人間は死の恐怖がないと生るよろこびを味はふことが出來ないのだ。之等の人間は、死の恐怖がなくつては生てゆけない憐れな人間なのだ。畫が出來ましたか。

畫家。出來ました。

先生。見せて下さい。中々よく出來ましたね

(皆畫に見とれてゐる)

A。助けて！　助けて！

(見知らぬ女登場)

見知らぬ女。まあ可哀さうに早く獅子を出しておやりなさい。

先生。承知しました。獅子を出せ。

學生一。はい。

(獅子を出し、つれてゆく)

見知らぬ女。どうでした。

A。びつくりしました。生てゐる心地はありませんでした。

見知らぬ女。もう私が來たから大丈夫です。
A。僕はあなたを憫んでゐます。
見知らぬ女。憫まれたつて私ちつとも困りませんよ。
A。あなたの仲間は實に冷酷ですね。
見知らぬ女。あなた達は實に親切ですがね。
A。それにしたつて、獅子をほりこんだり、人間をおりに入れて見せものにしたりはしません。
見知らぬ女。あなた達は他の動物にたいしてどんなことでも平氣でするぢやありませんか。
A。人間と他の動物とはちがひます。
見知らぬ女。私達にとつては、あなたはあなたたちにとつての猿のやうなものです。
A。失禮なことを云ふものぢやない。
見知らぬ女。猿と五十歩百歩ぢやないのですか。あなた達は猿よりもおとつてゐると云ふものがあります。猿は迷はずに生てゐるが、あなたたちはどう生きたらいゝか一人も知らないつて、本當ですか。どう生るのが本當か、あなた達は知らないのですか。
A。あなたは知つてゐるのですか。
見知らぬ女。勿論、知つてゐます。
A。それならなんのために生れたのです。
見知らぬ女。太陽におきゝなさい。
A。太陽はだまつてゐます。
見知らぬ女。そんな馬鹿なことは考へないだけなのです。あるがまゝでいゝ。生れることは意味があるからいゝのではない、生れたから生れたことがいゝので、生れなかつたら生れないのがいゝ。之は理窟以上です。ね、先生。
先生。さうです。理窟で許りものを考へるものは、本質のよさを知らないものです。
A。それなら君達にとつてはすべてがいゝのか。
先生。すべてがいゝ。
A。生るのも死ぬのも。
先生。勿論。
A。働くのも働かないのも。
先生。働きたくないものは私達の仲間にはゐない。皆よろこんで働く、義務を果してあと自由をたのしむ。義務もいゝ、自由もいゝ。
A。一寸その花を見せてくれませんか。
畫家。御らんなさい。
A。こんな顏してゐましたか。

先生。その通りです。
A。この畫をくれませんか。
畫家。だめです。それは王様の處へ持つていつてお目にかけるのです。
A。困つた記念をつくつたものですね。僕にも紙と筆をかしてくれませんか。
畫家。あなたもかけるのですか。
A。一寸はかけるのです。畫がかければ退屈しませんから。
畫家。それなら之を上げますから、何かかいて見て下さい。あなたの見る通り、この花を一つかいて下さい。
A。かいて見ませう。
畫家。かけましたか。
A。えゝ。
畫家。見せて下さい。
A。恥かしいものです。
畫家。之が見た通りなのですか。
A。さうです。
畫家。、へ(如此)之を御らんなさい。この美しい花がこんなに切り見へないのださうだ。之ぢやこの花の存在がわかるわけはありませんね。
A。それならあなた一つかいて見て下さい
畫家。かいて見せませう。どうです。
A。こんなに美しく本當に見えるのですか。
畫家。それが見た通りです。
A。こんなにすべてが美しく見えたら、さぞ愉快でせう。
畫家。あたりまいです。生てゐることはよろこびです。美はいたる處にありますから、我々はいつでもよろこんで生てゆけます。
A。羨やましいことです。
畫家。あなた達でもあと一萬年もたつたらこんな風に萬物が見えるやうになるでせう。
A。一萬年？
畫家。さうです。一萬年前の我々の先祖は丁度今あなたがかいたやうな畫をかいてゐます。恐らく、目の出來も腦の出來も、一萬年たつと今の我々と同じやうになるでせう。その時、あなたは生も死も、ひとしく愛するでせう。
A。自分の愛するものが死ぬのを何とも思ひませんか。
畫家。別に何とも思ひませんよ。なすべきことをして、死んでゆくものは、幸福ですから。我々はその人とよろこびをわかつだけです。

A。そんな氣持はわかりませんね。
實家。一萬年もたつたらわかるでしよ。
A。わからない方がいゝとも思ひますね。
見知らぬ女。王樣がいらつした。
（王樣、大勢と登場）
王。之か。話の男は。
見知らぬ女。左樣で御座います。
王。面白い顏をしてゐるな。
見知らぬ女。本當に面白い顏しております。
王。こいつは馬鹿かね。
見知らぬ女。あまり利口な方ではないでせう。しかし似たりよつたりです。
王。我々より猿の方に近い。
先生。おつしやる通りです。
王。この人間について面白い實驗をして見たか。
先生。さつき死の恐怖について試驗して見ました。
王。死の恐怖？
先生。さうです、我々の先祖が味はつたと云ふ死の恐怖がどんなものかしらべて見ました。
王。それは面白かつたらう。
先生。想像以上で御座いました。
王。見たいものだな。
先生。早速御覽に入れませう。
見知らぬ女。可哀さうだからおよしなさい。
王。可哀さうと云ふ感じを俺はもう忘れてゐた。久しぶりに味はつて見たいものだ。
見知らぬ女。いゝものぢやありません。
王。昔はあはれむと云ふことは美德になつてゐた。
先生。今は憐れまれるものが一人もないことが我等の誇りです。
王。憐れまれることは不幸にちがいない。俺達の世界には不幸といふものがなくなつてしまつた。
先生。我々はすべてをよしと見ることが出來るやうになつてしまつたので、不幸は住む處がなくなつてしまいました。下界ではまだ〳〵不幸が根づよくすくつてゐるやうです。肉體の苦痛と、死の恐怖、飯の食へない心配や、生るくるしみが支配してゐるやうです。
王。面白いものが支配してゐるな。どうしてそんなに馬鹿なのかね。何か藥でものまして、やつたらよささうなものだ。
先生。腦の出來がちがつてゐるのだと思ひます。まだ本當の美とか、

よろこびとかを感じる力がないやうです。一つ明日にでも頭蓋骨をはがして、腦を調べて見たいと思ひます。そして惡い處があつたらなほして見たく思ひます。

王。それは面白いだらう。それでは腦をなほす前とあとがどんなにちがうか、一つ調べて見るといゝね。

先生。調べることにいたしませう。そして外から見た所、頭の形もよくないやうですから、頭の形もなほさうかと思つてゐます。

王。それはいゝだらう。そしたら死の愛すべきものだと云ふことも、人間は苦痛なしにたえずよろこべるものだと云ふこともわかるだらう。

先生。どうも神經中樞の出來がわるいのだと思ひます。それから色慾や食慾が少し病的に發展してゐるやうです。それからつまらぬことを心配したり、役に立たないことを考へすぎたりする處が面白くないと思ひます。それ等をすつかりなほして見るつもりです。

王。さうしたら僕達の仲間になれるかも知れない。

先生。私達の仲間になれるやうに出來るだけ骨折つて見ます。

王。それはいゝだらう。

先生。それでは明日この男の腦味噌を一度出してしらべて見ます。

A。そんなことはよして下さい。

王。なぜよしてほしいのだ。

A。頭蓋骨を生きながらはがされることは考へてもたまりません。

王。おかしなことを云ふな。腦味噌をよくしてもらうのが、なぜいやなのだ。

A。私は之れ以上利口になりたくありません。之で結構なのです。だから頭蓋骨をはがさないで下さい。

先生。王樣。之が恐怖心と云ふものです。頭蓋骨をはがされることを、大へん恐ろしいことのやうに思つてゐるのです。

王。どうも不思議な馬鹿だな。

A。それなら君達は頭蓋骨をはがされるのを何とも思つてゐないのか。

王。あたりまいさ。口をあいたりふさいだりするのと同じことだ。別に大したことぢやない。時々頭蓋骨をはがしてもらうと涼しくつて氣持のいゝものだ。一度はなすとその味は忘れられない。

A。それなら君達は自分の頭蓋骨をはがしてもらつたことがあるのか。

王。あたりまいさ。少くも年に一回は腦味噌は洗つてもらうのはこの國の習慣だ。僕なんか、月に一回はあらつてもらう。

A。それきいて少し安心しました。しかし頭の形をかへたり、腦のり

くり方をかへたりしたら、鼠は鼠でなくなつてしまいはしませんか。

王。それは餘計な心配だ。安心するがいゝ。本當にこいつの腦は少し病的だ。つまらぬことを心配するにも程がある。明日本當によくなほしてやるがいゝ。

先生。さう云ふ風にしませう。

王。それぢやあつちへ行かう。

見知らぬ女。參りませう。

三

先生。どうだ。この腦のよごれてゐることは。

學生一。本當に隨分よごれておりますね。

先生。かうよごれてゐると洗ふのはたのしみなものだ。之を見ろ。之がよくない。こゝをなほすと、つまらぬことを心配しなくなる。こゝが發展しすぎてゐる。之は一種の恐怖病だ。又この皮が厚くなりすぎてゐるのは、この男を怠惰にさせ、生々させない元因だ。こゝが發達しないから、美が十分にわからない。こゝが發育がとまつてゐるのはこの男が快活になれない證據だ。

學生二。こゝが中々發達してゐますね。

先生。それは色情だ。年が年中色情のことを考へてゐるらしい。其處はうんと少なくしておくがいゝ。それからこゝが發達してゐるのは何のためかわからない。どうも俺達に見當のつかないことを考へてゐるらしい。之で一通りなほつたわけだ。それからその頭蓋骨を一寸なほしてやらう。こゝが入こんでゐるのは面白くない。一寸カナヅチをとつてくれ。(一寸たゝき)之でいゝ。それならもと通りつぎあはせてやらう。之でこの男も、少しは足りないが、俺達の仲間入りが出來るわけだ。

(看護婦　登場)

看護婦。王樣がお見えになりました。

先生。こゝへお通しゝてくれ。

看護婦。はい。

(王樣　登場)

王樣。どうだつた。

先生。うまくゆきました。

王樣。あの男の腦味噌はどうだつた。

先生。隨分よごれておりました。しかし見かけよりは質はわるくありませんでした。あの位いの質をもつてゐるとすると、人間の内にも少しはすぐれた人も出ていゝはづです。たゞ修養の仕方を知らない

らしいのです。

王樣。よくなほしたか。

先生。なほしました。

王樣。さぞせい〳〵するだらう。

先生。せい〳〵することゝ思ひます。すつかりぬいつけたか。

學生一。ぬいつけました。もう目をさましてよう御座いますか。

先生。もう少しそのまゝにしておいたらいゝだらう。

王樣。何處が一番發達してゐた。

先生。矢張り恐怖性でせう。それから苦痛を感じる神經がいやに發達しております。それから色情も發達してゐます。一たいにさつぱりしない性質に出來てゐます。今度なほしておきましたから、快活になり、つまらぬ心配はせず、肉體の苦痛も恐れず、死の恐怖も感じなくなるでせう。

王樣。それはよかつた。

學生一。もう起しませうか。

先生。起してもいゝが、それよりそのまゝまた、おりのなかに返しておく方がいゝ。

學生一。それではさう云ふ風にします。

王樣。ついでに御苦勞だが俺の體も洗つてもらはうかね。

先生。おあらいしませう。

學生一。それではつれてゆきます。

先生。それではあとでゆく。

學生一。はい。

（Aを擔架にのせて學生二人でかついでゆく）

王樣。それでは一つあらつてもらうかね。

先生。承知しました。

四

學生一。どうです目がさめましたか。

A。さめました。

學生一。氣持はどうです。

A。大へんよろしい。こんなにすが〳〵した氣持を味はつたことはありません。實にいゝ氣持です。

學生二。さうですか。

A。悟りを開いたと云ふことはどんなものかと云ふことを今知りました。涅槃の氣持と云ふものもきつとこんな氣持でせう。こんないゝ氣持は生れて始めて味はいました。

學生一。さうですか。それは何よりです。この態を羨しく思ひます

か。

A。思ふ處ですか。實際こんな美しさがこの世にあるのには氣がつきませんでした。そして君達も實に美しい、生々してゐる。そして君達の眞心がぢかに感じられる。人間の本心と云ふものを本當に知ることが出來ます。

學生二。もう死ぬことは怖くないでせう。

A。怖いものですか。怖いと云ふ感じが空なものだと云ふことを本當に知りました。

學生一。もう獅子をつれて來ても何ともないでせう。

A。何ともありませんね。本當に生ることはいゝ。そして死ぬことはなほいゝと思ひますね。なすべきことをなして歸るよろこび之が人生に與へられた最上のよろこびだと云ふことを今知りました。

（先生と王樣登場）

先生。どうです。

A。おかげですつかりいゝ氣持になりました。

先生。あなたの腦味噌は、隨分よごれてゐましたよ。

A。さうでせう。

先生。私はあなた達の腦味噌の質のわるくないのに感心しました。それなのに地上にいろ／＼愚かなことが行はれるのは、腦味噌を清めることを知らないからだと云ふことを知りました。あなた達は從來腦味噌をわるくして生活してゐるのではないかと思ひました。

A。さう云はれると一言もありません。

先生。心を清くしては地上では生活出來ないのですかね。

A。さう一がいにも云へませんが、しかし心を清くする必要はないのです。そしてずるく働かないとすぐやつつけられるのです。

先生。どうも地上のことはよくわかりませんが、いろ／＼つまらぬことに心をつかうやうですね。つまらぬことに神經をつかうやうですね。腦味噌の使ひ方をまるで知らないやうですね。

A。さうかも知れません。今になつて見ると私達は考へないでいゝことを誤り考へてゐたやうです。そして心配しなくつていゝことに心配しすぎてゐたやうです。

先生。さうです。たしかにさうです。もつと潑剌な、せい／＼した、ほがらかな氣持で生てゆける處を、あなた達はくよ／＼して、つまらぬことを氣にし、又いやしい考へをこつそり起してゐる傾があります。

A。恥かしいことです。

先生。しかしもうすんだことです。

A。之から私は愉快に生てゆきます。

先生。王様、顔も生々して來ましたね。

王。さうだ生々して來た。

先生。もう獅子なんか怖かないでせう。

A。怖かありません。死も恐ろしくありません。肉體の苦痛も神經のいたづらだと云ふことがわかりました。あなたたちの氣持がよくわかります。この世にわるいことはないと思ひます。皆がかう云ふ氣持で生きられたら實にいゝと思ひます。

先生。本來の人間はさうつくられてゐるのです。私達は本來の人間の通りに生てゐるだけです。あなた方は自分をいびつにし、考へまちがいをし、尊敬しなければならないものを尊敬せず。そして尊敬してはならないものを尊敬し、そして頭を始終下等にしてゐるのです。不思議に思ひます。あなたの腦味噌に一つ不思議に發達した部分がありました。それは物慾によく似たものです。

A。わかりました。それは金が欲しい。金をつくりたいと云ふ根性がかたまつたのでせう。

先生。恐ろしい根性です。そんな根性はなけすてないと生々出來ません。

A。ありがたう。さう心がけます。

先生。何かあなたがたの生活には根本にまちがつた處があると思ふのです。さもないとよごれ方や、傷つき方がひどすぎます。そして大事な處があつぱくされがちです。

A。よくわかります。今になると自分の根性がまちがつてゐたことがよくわかります。御かげでさつぱりしました。之からくよくよせずに、心がけをよくして、怠けものにならず、不淨なことはなるべく考へずに、たへず、生々した、ほがらかな心で生てゆきたく思ひます。

先生。さうおしなさい。もうおりにゐるのがいやでなくなつたでせう。

A。えゝ、もう檻からやがて出られることもわかります。出られる迄、之も面白いと思ひます。

王。檻をもうとつたらいゝだらう。

先生。はい。

(見知らぬ女、他の女達と登場)

見知らぬ女。今日は。

A。今日は。

見知らぬ女。氣持はどうです。

A。すつかりよくなりました。

見知らぬ女。私をまだ恨んでゐますか。

A。もううらんではゐません。すべてがよかつたと思ひます。

見知らぬ女。生れたこともですか。
A。えゝ。
見知らぬ女。そして死ぬこともですか。
A。えゝ。
見知らぬ女。そしてもう地球には歸りたくありませんか。
A。こゝも實によろしい。いつまでもいたく思ひます。しかし地上もわるくはありません、思ひ出すとなつかしく思ひます。
王。君は地上に歸りたい時は歸り、こゝに來たい時は來られるやうにしてあげやうか。
A。さう願へれば何よりです。
王。この男に魔法の本を與へるといゝ。
先生。承知しました。
見知らぬ女。私がとつて來ます。
王。ついでに皆をよんでくるといゝ、どうだ君はうれしいか。
A。ありがたう御座います。
(音樂者や、他の人大ぜいくる)
王。皆さん。私達の仲間が一人ふへました。そのよろこびを皆さんとわかちたく思ひます。それで之から歡迎の舞踏會をしたく思ひます。それでは之から始めます。歡喜の曲をなりひびかせろ。
(曲がなりひゞく、皆がおどり出す。いゝ時に幕)
(二七、一二、一二)



老青年

佐藤春夫

一

御手紙ありがたう拜見致しました。漢口の方は如何で御座りましたか。私達五人は元氣で居ります。美子、三馬二、麗子は毎日學校に行つてゐます。御安心下され。

お父さまからのお金はまだつきません。そのお金を一日も早くまつて居ります。今まではお小使が一つもありませんでしたから、よその毛絲を編んでお小使にして居りました。又前の山本さんのをばさんに色々お世話になつて居ります。一日も早く上海に歸れることをお願ひ致します。

お父さんが上海へお歸りになつてからは、中野のをばさんも、田島のをぢさんも、少しもお賴みを聞いて下さりませんし、買物はみな現金でなければ賣つてくれません。まことにこまります。お米を言ひに行きましたら中野の方から止めてあるので、持つて來ませんでした。その日、夜の御飯をみなたべませんでした。私は泣いて居りました。前のをばさんが親切にして下さりますのでお米を一升いただきました。小さな子供が可愛さうでなりません。今はたゞお金を待つばかりで御座ります。毎日苦しい日を暮して居

ります。
それに中野の人達や田島のをぢさんも私にはかたきであります。手紙に書くことの出來ないほど色々の事を言はれて居ります。
三馬二の靴は小さくてはいりません。大島の靴も御座りません。
私もこの頃少し顔がはれて夜ねむることが出來ません。
お父さんどうぞ私をおゆるし下さりませ。母が來て居ります。お父さんのお心の內はぢゆうぶんおさつし致しますが、私としてはどうすることも出來ません。私の心も御さつし下されて私を御ゆるし下さりませ。
早く上海へ歸れますやうお願ひ致します。
お正月が近づきます、お身お大切に祈り上げます。

來年は十七になる滿子からのこの手紙をポケットに入れて、山野は勿論、心當りは一軒のこらず歩いた。直情徑行で議論などでは一歩も後へ引かぬ山野は、しかし、金を借りる段になると妙に內氣だつた。師走の風に吹きつゝあらされ水ばなをすゝり上げながら山野は、娘の手紙を悲しいと思つた。けれどもその手紙が妙によく書けてゐるのには滿足であつた。しかしまた、小娘にそんな哀切な手紙を書かせるといふのも身に餘る苦勞の果ての早熟がさせるのだと思ふと、滿足は再び苦痛に逆戻りした。よその毛絲を編んでゐるといふ滿子のかじかんだ手が、あじきなく暮れやすい夕暗のなかで彼の目に浮んだ。

『畜生！』

山野は舌鼓をうつて心のなかで罵つた。それは彼が歸つてからはなに一つ面倒を見てはくれぬといふ身內に對する憤りであるやうに思へた。「中野の人達や田島のをぢさんも私にはかたきであります」彼は滿子の文句を思ひ出してゐたのであつた。けれどもこの憤りもだんだん掘り下げて行くと結局自分のところへ歸つて來るやうに思へた。

どうしてもどうしても金の要ることだ金が出來ずば子供ら飢ゆる

子等置きて歸れば子供米なくて食はで居たりと手紙來りぬ

金借りる望は駄目とあきらめて突きさした煙草に火をつけて立つ

ただそれと打ち明け難き戀のごと金を借りるに惱むものかな

九分までのあきらめに居て悲しくも一分の望み白きベル押す

惡人であれば金の出來ること過去に幾らもありたるものを

惡人になれぬことが誇りにや悲しみにやと高く唱はん

クリスマスの花屋の花は美ししも貧しくも眺めて行かん

一番に儲かりける我がものがありやなしやと疑ふ此頃

消えにける炭團の如く姿のみ殘して去せしわが心かも

「ざま見ろ」と鏡の中の我を見て罵りたくもなりし我かな

金はなかなか出來なかつたが、その幾日か のうちに歌はいくつか出來た。巧いかまづいかを問題にして詠む歌ではないのだ。やれ文法が違ふの、言葉が粗雜のと、氣取つたネクタイをつけた若い奴等が、「たらちねの」だとか「けるかも」だとかいひさへすれば言葉が洗練されたいい歌ででもありさうな顏をしてゐるのを山野はいつも腹立たしく思つてゐた。山上憶良が今生きてゐれば俺と同じ歌を作るのだ、さう言ひ返しては、ただ出まかせに吐き出して人の意嚮は知らず、山野自らは年久しく慰められて來た。

山野は最後に石田を訪れた。年來の友人で、それに年齡も稍々外の連中より近い上に、相手が妻も子もないボヘミアンだけに山野も石田には話しやすかつた。それだけに今までにも度々さういふ相談を持ちかけたこともあつたし、またさういふ相手だから石田とても餘裕がたつぷりある身分でもない。けれども、山野はもう石田にでも話さずにはゐられなくなつたのである。山野がどもりながらの手短な說明と一緖に取り出してさしつけた蜜子の手紙を、石田は讀み終ると、十弗貸さうといつた。

「この手紙には、なけなしの金を十弗出す値うちはあるからね。あんまり子供にも苦勞させん方がいいぜ」

「そ、そ、そんなくだらん事をこの場合きかさなくとも、分つてゐるぢやないか」

「細君、やつぱり、大阪まで子供の後を慕うて行つたと見えるね」

「畜生奴、いつまでも餘計な眞似をするんだ」

氣の弱い山野はそれを隱さうとしていつも荒々しい言葉をいふが、さういふ時にこそ彼は一番やさしい心を動かしてゐた。殊に山野の子供達に對する愛情は最も深いものであつた。その山野が、しかし、細君にばかりどうしてあんなに氣が強いのだか石田には分らなかつた。いつか一度聞いて見ようとも思つてゐたが、人の言出しもしない事をわざわざ改まつて訊く程の石田でもなかつた。それに自尊心の高い山野ではあるが、しかし直情の人である彼のことだから、深い事情でもあるのなら自然と分らずにはゐないのだから、彼が細君を嫌ふのは要するにやつぱり彼の生活を理解しない妻に對する憤りなのであらうが、もう五十にもなつて、子供の五人まである古女房に理解をもへちまをも要求する山野が、石田には面白かつた。さうして誰が何んといつても妥協しようとしないところに山野の面目はあるが氣の毒なのは子供達である。この機會にそれを言ひ出さうと思つたのだが、金を借せる序に意見をするなどといふことは石田の氣質にはなかつた。

「君、西鶴は偉い。僕は感心した」

突然山野はさう言ひ出した。山野が時折りひどく誰かに感心するのは今に始まらないが、それが西鶴であつたのは石田には思ひがけなかつた。

「何んだつてそんな古くさいものに感心したんだね、今更」

「漢江へ行く船のなかで讀んだのだ。——ポケットに這入るやうな手ごろなのがあつたので、本屋に頼んで借りたのだ。面白いので讀んでゐるうちに汚くして了つた。もう返したつて賣り物にはなるまい。さうだ。あれも金を拂はなけや……」山野はちよつとさう獨り言の一句を挿んで、それから再び石田に呼びかけた。「君は、一讀、讀んだことがあるか」

「少しは讀んだよ。何んだい君のいふのは」

「萬の文反古といふ奴のなかの京にも思ふやうなる事なしといふのだがね」

「萬の文反古は西鶴ぢやないといふ説があるよ」

「そんな詮索はどうでもよろしい。面白ければいいではないか」

そこで山野は訥々と、手紙の形を取つたこの短篇の筋を話し出すのであつた。十八年前故郷の仙臺から、悋氣深い妻を置き去りに逃げ出した男が、昔の友達に寄せたその手紙には、十七年の間は二十三人の女房を持替へて、少しは持合せてゐた金銀も一切、親類に遣ひ込み今では手と身とばかりになつて了つて、もはや女房を持つ力もなく、落ぶれて都ながら櫻も見ず夕涼みにも行かず、松茸も食はず、雪のうちの鰒汁も知らず、ただ鳥羽に歸る車の音を聞いて、ここも都の片ほとりであつたかと氣づくばかりの身の上であつた。その男が、どこか知らに不滿足無しには存在しない女といふものを、今迄の女達で充分承知をしながら、それでも十八年の年月を故郷で待つてゐる筈の女房のもとへも、歸つて見ようといふ氣にもならぬから、彼女には一生歸らぬものと諦めてくれるやうにと、友達を通じて申しやつてゐるのである。

「つまりは」石田は山野のまだ續きさうな話を引き取つて言つた。「女ずきの女嫌ひとでもいふ所が、君の同感をそそつた譯けだね。何から何まで氣に入る女がありさうだなんて、そんな夢を見るのがそもそもの間違ひさ。取り柄が一つあればいいんだよ」

「ところが取り柄は何處に一つも無いのだ。みんな鍍金だからすぐに地金が剝げて了ふんだ。」

「その鍍金は、君のやうな男が勝手に鍍金してやるんだからね。自分が着せた着物を自分で引き剝すんだよ。女こそいゝ迷惑さ。女の惡口をいふのは女好きに限るよ。俺は女の惡口は一ことも云つた覺えはな

い。その代り女房なんてものは持つたことはないんだからね。女を欲しければ買ひに行くに限る。賣り物だからいつも疵は隠してあるとい ふ譯さ」

「その代りそんなことをしてゐて、とても女の眞實の姿を見るなんてことは出來ないぢやないか」

「眞實が好きなら味の悪い所を賞美するさ。そんなくだらん話はもう止めてそれぢや十弗持つて行くかね」

石田は立つて行つて押入れに放り込んであつた洋服の上着のポケットから中南銀行の札を一枚取り出して渡すと、山野は受け取りながら唯一こと「や」と云つた。言葉とも聲ともつかんこの曖昧な音のなかに山野は充分の感謝を籠めてゐたのである。感謝の辭を述べることなどには山野の唇は不手際に出來てゐた。山野は十弗の紙幣をポケットへ藏めようとしながらいつた。

「君、これは君が滿子に貸してくれた筈だつたが、此のうちで花彫半斤分だけ僕に遣はしてくれよ。酒ぐらゐは飲まずにや居られんからね」

「君の手に持てば君の金だもの好きなやうにするがいいか、老酒半斤位なら僕だつておごるぜ。さうだ、着替へる間ちよつと待ち給へ僕も出かけるから」

石田の家の中は晝でも電燈をともす程暗かつたし、それに山野の心持はいつも夜のやうに悲しかつたが、外へ出て見るとまだ日が暮れたばかりであつた。彼等はパブリツクガーデンを過ぎた。プラタナスの葉はすつかり落ちて了つてゐた。暮色の迫つた中空に對岸の浦東のドックから煙が立つて遠い鐵槌の音が寒さうに微かに響いてゐたのが止んだ。ジャンクの帆が黒い影を水の上に落して行く。大馬路の方の門から這入つて來た三人連の女達が彼等の前を斜に通り過ぎたが、この女達の重いあくどい化粧の臭ひが彼等の鼻に殘つた。黙つてこの妖しい風俗の女達を見送つてゐた石田がこの時突然口を開いた。

「君、子供といふものは可愛いかね」

山野はこの突然な分りきつた質問を發した相手の顔を暗の中で瞼すやうに一目見て、力を込めて云つた。

「可愛いさ、それや可愛いさ。なぜ、そんなことをきくんだ」

「僕にも子供があるからさ」

「ホホー」山野は口を尖からして一種特有の感嘆詞を發した。「これは初耳だな。どうしてまた……」

「ハハハ、まだあんまり誰にも話したことはないがね。ここへ來てから五六年もたたんうちだつたからもうかれこれ十五年にはなる。僕は誰も相手にしないやうな支那の女と妙なことで關係をして了つてね。

そいつが君、子供を生んで了つたんだよ。さうなると僕はもう一そう我慢がならんので、たうとうその女に寄りつかなくなつたのだが、僕の女は金には困るし、子供は持ち扱ふといふので、女の子だつたが何んでも十五弗かそこらで賣つて了つたさうだよ。呑氣なもので、女からは子供はもう賣つて了つて心配することは無くなつたからまた元通りになつてくれ、なんて云つてよこしたりしたものだ。……時々僕はへんな空想をしてね、そいつが今ではもう十五六にもなつて、ああいふ連中の中へでも這入つてゐやしないか、などと馬鹿馬鹿しい。」

石田は木立の路のなかへ消えて行く例の三人連の女の黒い後影を顎でしやくつて見せた。

「ホホー……」山野は再び特有の感嘆詞を投げたが別にそれ以上何んとも問ひはしなかつた。

四馬路の店店は、クリスマスデコレーションで輝いてゐた。玄茂源といふ酒家の樓上には酒客が一杯であつた。さうして彼等を坐らせる餘地もなかつた。やつと立ち上つた客の後の、食ひ荒した蟹の殻を積み上げたテーブルに彼等は對座した。爆魚、蝦子、茶葉蛋の小皿ものの外に蟹の雌ばかり二つ煮させた。酒を汲み交しながら石田は山野に云つた。

「もう二週間も前のことだが、猪股の所へ寄つた序でにちよつと覗いて見たら隣の例の女は、いまだに單衣と浴衣とを重ね着してゐたつけが、君あれも何んとかしてやつたらいいぢやないか」

「實にだらしのない奴だ。あんなぐうたら女の話はよせ。然し僕の生一本の紹興酒がまづくなるよ」

「だらしがないつて、君がちやんとしてやらないからぢやないか」

「ちやんとも何もない。あんな女には何もしてやらないでもよろしい。また俺には出來もしない」

それがまるで石田のせゐでもあるかのやうな口振りなので、石田は思はず笑つた。

半斤入りの酒器を四本並べてその大部分は山野が平げたのであつた。八時を過ぎるとお祭のやうに賑ひであつたここの客たちもいつの間にか少くなつた。陶然とした山野と別に醉つた風はないが顏だけは眞赤になつた石田とはそこの階段を下りると今度は青蓮閣に登つた。この茶館も玄茂源に劣らぬ馬鹿馬鹿しい賑ひであつた。

「全く、亡國の賑ひだ」山野は云つた。その雜閙のなかをケバケバしい娼婦たちが重い香を發散させながらゆるやかな目つかひで右往左往しては遊子を漁つてゐるのである。ここはかういふ娼婦たちの市場として有名な場所なのである。

「一つよく氣をつけて君の娘らしいのを搜すのだね」

山野がそんな冗談をいふと、石田はただハハハと容易な然し愉快げな聲を上げた。彼等は茶を飲んでぢきにこの家から出た。

「猪股の所へ一つ行つて見ようか」

街を出ると山野がさう云ひ出した。醉拂つた山野が女の所へ行き度くなつたのだなと石田は思ひながら兎も角も賛成した。彼等は醉つた頰を風に吹かせながらよろめいて歩いた。

「助平で、剛情で、偏窟で、……」

山野は不意に大きな聲で調子をつけて云ひ出した。行く人がこの東洋人の叫び聲に振り返つた程であつた。山野はそれに氣がついたのか急に聲をひそめて云ひ足した。

「理窟には敗けぬ、頭を下げぬ。ねえ、石田君、これではどうも出世をせん筈ぢや」

「そこへ持つて來て詩人と來てゐる」

石田は答へた。

「京にも思ふやうなることなしぢや。」

「上海にも思ふやうなることなしぢや」

「日の下には思ふやうなることなしか」

石田は生れながらの小聲であり、そこへ山野は聲をひそめたものだから、彼等はまるで何か重大な相談事のひそひそ話でもあるかの如く

そんなことを云ひ合ひながら歩い

二

山野も亦、人生を戦ふと思つて生きてゐる人人の一人であつた。彼は貧乏とも戦はなければならんし、また異性とも戦はなければならなかつた。この絶え間のない戦の最中で、彼は歌を作り句を詠みまた文章を書いた。それで名を成さうなどと云ふ子供らしい野心はいつの間にか磨滅して了つた今日でも、彼は依然として歌ふこと――といふよりも怒鳴ることを止めない。さうして彼の歌も彼の句も五十を越した今日でも、青年のやうに若若しい。歌ふことは彼に取つて必要であり本能であつた。さうしてそれに依つて彼は慰められた。かういふ惠みを與へられてゐる彼は同時に普通の人人からは理解されない異人種としての烙印を捺されてゐた。さうしてこの烙印は女達に取つては最も分りにくい印であつた。彼は決して幸福ではなかつた。然しその幸福でもない人生を彼は何人よりも愛してゐた。彼の誰も認める人のない作品集はその理由に依つて、特別な魅力を持つてゐた。それがどうして人人に知られないかといふのは、人人は藝術といふものを花屋がこしらへた細工のいい花束でなければならんと考へてゐたからである。けれども山野の作品は子供がむしり取つてくつつけ合した雑草

の花のでこぼこな畑だつた。さういふものは藝術の領域へは入れられないといふのが、教養のある物の分つた人の考へといふものであるらしい。山野は自分で教養のないことや細工の手際の惡いことは充分に承知し切つて偉い人人は尊敬し、名も無い自分を卑下して、それでも自分の感じたことは感じた通りに言はなければいけないし、また誰しも自分の出來ることより外には出來ないのだと決めてゐるから、彼は心配することなしに歌つたり書いたりした。長い年月の間かういふことをして、人の認めもしないことを續けてゐるのを人人は嗤つてゐる。また自分一人で樂しむことならば別にそれを人に見せる爲めに、全くのなけなしの金を掻き集めてそんなものを本なぞにする必要はないと人人は思つてゐる。けれども言葉といふものはその本質の中に人にきいて貰ひたいといふ性質を持つてゐるやうに、文學もまたその通りなのである。彼は理窟は分らなかつたけれども兎も角も機會ある毎に彼の作品を人にも見せ度かつた。見えや外聞をいふやうな彼ならそんなものを書いてそれを求めるよりも、藥賣りを止めた方がよかつたのだ。

運河から運河へ船を雇うて、上海近郷の所所の田舍町へ、寶丹だの千金丹だの賣藥の行商を考へついたのも、もとより口すぎの必要にかられたのではあるが、それが若し彼の詩情に適したものでなかつたとしたら、決して幾年も續く筈のものではなかつた。

それは嘉興に近い新塍鎮、王店鎮、敗城鎮、海鹽縣、鳳家橋、硤石鎮、屠甸寺店、桐鄕縣、雙林鎮、新倉鎮、沈蕩鎮、新篁里、平湖縣などといふ地方であつた。六月七月頃といふ不健康な季節を當てこんで、郷下——片田舍の人人を相手に商ひをするのであつた。炎天に照りつけられて歩き廻つて、時にはやつと四十錢や七十錢位にしかならないやうな日もあつたが、成功すれば十圓位にあたることがある。さうして彼は一錢の大蒜、三錢の茄子、四錢の干海老、五錢の燒酎、それから三錢で三つの卵などといふ質素な生活をして普段は寧ろづぼらな彼がかういふ旅の間には自分でも不思議に思ふ程けち臭くなつて了つて、子供の爲に買はうと思つた椅子と竹茣蓙との値段がほんの僅ばかり折合はぬのを、思ひ切つて土産に買つてやることさへ諦める。瞼がもう開かなくなつた程ひどく眼を病んでそれでも十錢の眼藥代を出し惜しむ吝嗇な男に、それを呉れてやらうといふ氣にさへならない程なのである。さうして八厘で十個の枇杷や一つ八厘の水蜜桃を食つたことを贅澤な間食と考へなければならぬ。さうして蠶の季節で懷加減のいい百姓たちが皆質受けの爲めにその店先で、中には二十元三十元と支拂ふものさへあるのをぼんやりとみとれてゐて、ふと物欲しげだつた自分に苦笑されたりする。四間ほどの筏を百十八もつないで流して來て、

その筏の間には船が二三艘も雜り五六人の女に雞や犬までゐる。この呑氣なものの爲めに、水上の交通は一時絶たれて、午前の商賣の汐時を外すのを怨めしがつて、氣がいら立つたりする。情けないのはかういふ旅路の雨である。濡れしをれたシミツタレた姿で、東西に南北に客を漁りに行く風態を、これが一等國民の誇るべき風態かとしみじみ自から憫んでゐる折りから、同じ日本の賣藥を持つた支那人の同業者にあちらでもこちらでも出會すと、彼等は旅慣れてゐる上に暮し方も上手だし、かけ引きが上手なだけに相手を見ては安くも高くも、濫賣をする。かういふ强敵に出會しては經驗のある商賣ではあるが、先の見込も危いやうな氣がする。さういへば以前には譯けなく十圓ばかりも賣れたやうな土地で一日中駈けずり廻つてやつとそれの半分にも及ばないことなぞ思ひ合されるのであつた。然し賑がる船頭を無理に促して銀河の光の中に帆を上げたり、船がかりした岸の楊のかげにふと新月を見つけたり、鬱々と繁つた森を浸すばかりに湛へた水や、そこに山鳩の鳴くのを聽きながら彩色を施した塔の五輪に殘月の懸るのを眺めたり、或ひはまた陸に上つて忍草の生ひ繁つた石橋を渡つて荒れ果てた空地や崩壞した土塀の上に自から徑をなした所をまるで中世の支那がその儘にあると思ひながら蟬時雨を聞いたりする時には、彼は、彼の生活が何か幸福なものであるやうな氣持がした。それに毎年同じ場所を數年も歩いてゐるうちには、いつもそこで休みなれた田舍茶屋の子供、東洋人を珍らしがつてぼんやり自分の顏を見つめてゐたその女の子が、いつの間にか少女になつて今は物影からそつと覗いて見ては輕い會釋をするまでに大人になつたのや、或ひはまた少し賑かな田舍町の娼家とも思へる樓上に目につく女がゐて、それが頭痛膏を買つてくれたと覺えてゐるのが、もう色香に衰へを見せて年増になりながらやつぱりそこに居殘つてゐるのや、さういふものを見るにつけても自然の――分けても夏の自然のいつも新しく生々と盛んなのに對して人間の「時」の過ぎ易いのを感じては、禿げて行く自分の頭の事を考へるのであつた。彼はそれらの折折の日記を樂しんで書き誌してゐるが。

支那の田舍にはまた、そこでなければ決して見られないやうなものが澤山あつた。夜廻りが餘所から來た船をたゝき起して一厘の油錢を請求する習慣。大きな眼を心地よげにつぶつて水に浸つてゐる水牛のそこだけ水から出てゐる顏に、虻のやうな大きな蠅がたかるのをうるさがつて、水牛は顏をすつぼり水の中につけると蠅はその間だけは水面から出た水牛の角に止つて待つてゐて水牛が再び顏を上げると蠅はすぐさまたちまち顏に止る。水牛はそれを何度も繰り返すが蠅もいつでも同じことをする。かういふ人事や自然の些細な事柄。さては又人

だかりがしてゐるので見に行くと、廣場に生えた木に大男が五六人も太い鎖で縛りつけられて、巡査の駐在所になつてゐる廟の二階では喇叭を無暗と吹いてゐるといふ強盗を仕置にする有様。情夫の爲めに本夫に毒を飲ました女。しかしその夫は佛の助で藥を吐いたのを、女は今度は刃物を持つて首を突いた。夫は治療を受けに醫者に連れられて來たし、女は縛られてあつた。から云ふ場合夫は女を殺して了はうと賣つて了はうと勝手だと云ふので、群集の半分は殺して了へといふし、半分は賣つて了へといふ。「わたし思ひます、殺して了ふ仕方ない。賣つて金にする、相方も宜しい」といふのが才林の判斷であつた。果して賣つてしまつたか。殺したか……。

才林といふのは山野に取つては、此の上もない得難い從僕であつた。從僕といふよりも共同に働いてくれる友達と云はなければなるまい。才林の方でも彼を主人といふよりも一個の老朋友と思つてゐる。彼が最初に才林を知つたのは十年ばかり前嘉興で偶然雇入れたのであるが、この文字を知らぬボーイは支那人には珍しい正直な人物なのを見込んで、彼はそれを上海に連れて歸り、日本人仲間にボーイ働きの周旋口をさがしてやつた。その勤め口が駄目になると才林は山野の所へまた歸つて來る。山野はまたそのうちに新しい仕事の口を索してやるといふ風であつたが、才林は貧乏人でなければ決して示せないやうな、美しい人情を山野に見せたことがあつた。それは六七年前であつたが、山野が困窮の極にゐるのを見兼ねて、この支那人は活動寫眞――一錢銅貨を投げると自働する覗きカラクリを持つて一ヶ月餘りも田舍廻りをして、その結果九弗の金を儲け殘し、彼自身は決して一文も懷にせず、山野の前にその金を積んで渡したことがあつた。活動寫眞こそ持つては行かぬが賣藥で、田舍廻りがどれ程困難かといふことを知つてゐる山野に取つては、この九弗は金額以外にどれだけ嬉しかつたか分らない。才林は姑蘇の娘々と戀仲になつて子供まである家庭を作つてゐるが、季節毎にきつと山野を思ひ出して、今でも送り物を絶やさない。この間の月見にも月見の饅頭をくれたが、正月になつたらまた支那餅をくれるだらう。あれこそ惠まれた男である。

賣藥行商の商賣も年毎に以前程賣れなくなつた所へ、國内の動亂がたうとう彼の馴染の地方にまで及んで來て、彼は夏になつても、もう商ひにも出かけることが出來なくなつた。あれはいゝ商賣だつたんだがと、山野は今でもさう回想する。賣藥に較べると正月に賑かな蘇州へ、上海ではあり振れた日本の玩具を持つて行つたのは、全くの失敗で、巧く行けば年中行事にしようと考へてゐた當てもはづれて了つた。持つて行つた玩具の飛行機がまるで飛ばなかつたのは、おかしくもあつたし悲慘でもあつた。しかしその悲慘は笑ひながら文學に書く

ことも出來た。悲慘といへばもつと悲慘なことはいくらもあつた。初めて内地から支那へ飛び出して來て、漢口の屠牛所で血のしたたつてゐる牛の生皮を擔いだ頃のことを山野ははつきりと思ひ出す。しかしその當時の彼が持ち運んでゐるその荷物が、なまなかの代物でなかつた所に却つて何か面白味をさへ——詩的なやうな氣持ちをさへ感じたものであつた。それはその後雇はれた鷄卵の會社の卵計算係りよりは、ずつと面白味のある職業であつたやうにさへ思へないではない。その卵會社では仲間とも上役とも激しい口喧嘩をして、三月とは經たぬうちに飛び出して了つた。

若しあの時大阪で巡査の試驗に合格してゐたならば、彼の生涯はどうであつたらう。一人の紳士風な年配の男が、受驗者の溜りで彼の顏を見るといきなり近づいておじぎをしながら、試驗場で何卒自分に教へてくれと懇願したものだ。少しも自信がないと山野が云つても、その男はきき入れなかつた。さうして山野の側に坐つて山野の答案を盜み見しながらその男は、試驗にはパスしたのだ。山野を訪ねて年配の男が祝酒をおごらうと云ひ出した時には、山野は呆然としたものだ。なぜかといふに、彼自身は落第してゐたからである。教へた男が不合格で教はつた男が合格だといふところを見ると、合格と不合格との差はほんの一瞬であつたと見える。さうすれば山野だつて、必ずしも落者になれないのではなかつたかも知れない。先の見込のない女房雜誌の校正係りになつたのが、彼の一生の踏み出しであつたが。十七の時に飛び出した故郷の島では、二人しかない兄弟の兄はもう死んで了つて、生き殘つた嫂はささやかな荒物屋を營んで、自分自身の家に家賃を支拂つてゐるといふ風な奇妙な有樣だ。その嫂のこと。大阪に預けて來た子供達のこと。

山野はほろ醉ひの頭の中で雜然と自分の過去の生活を遡上つて考へたのであつたが、子供達のことに思ひ及ぶと酒がさめるやうな氣がした。いつも新しい世界を開拓して、そこで生生とした道を見出し、どんな苦しい中でも生きることは樂しくないことはないと、結局考へる山野であつたが、さういふ放浪者魂はいつの間にか山野のなかで亡びて了つたやうな氣がする。ちぢむさい生活を。口喧しい古女房をたたき出して了つて、子供等は身内に預けて、一人になればまた生活の道も拓けるものと考へたのに、遠くにやつた子供のことが近くにゐるよりもひしひしと身に迫る。金を儲けることだけを人生と心得て、夫の人生の侶伴となるどころか、家の中にゐて内部の敵であつた女房が、こちらにゐる間もうるさく自分の留守をつけねらつては子供等の側に寄りつくのを罵つたり毆つたり、最後には貴樣が出て行かなければ俺が出るとまで言ひ、言ふばかりかそれを實行してたうとう追つ拂

つたと思つたものが、いつの間にか海を越えて大阪くんだりまで、子供等に影のやうに随いて行つてゐる。それを考へると、變に胸が苦しいやうな氣持がする。かういふ感情をこれ程、強く味ふのも年を取つたからであるかも知れぬ。凡ての健全なと稱する人人のなかに、放浪者魂が眠つてゐるやうに放浪者であることを喜んで認めてゐるこの自分のなかにも家畜のやうな普通人の魂が眠つてゐて、年取つて衰へたのにつけ込んでそいつがぬつくり浮き上らうとしてゐるらしい。人生の人並みの幸福なんていふものは古女房と一緒にとつくに吐出して了つた自分ではなかつたか。

山野はこんなことを自問自答しながら彼と一緒に歩いてゐる石田に氣がついた。石田もまた放浪者だつた。高等學校時代に失戀をしたといふので、長崎から家郷には手紙一本、ただ海外へ行く積りだとのみ言ひやつたまゝ、この土地へ來て了つた石田。聴けばそれにも貰つて了つた子供があるといふ。そんなことをひよつくり口に出して話す時には、石田も人並の魂に脅かされるものと見える。猪股はどうだらう。相當の商家の養子を飛び出して、廣東で石炭の荷上げ人足をした男だ。おとなしい彼は、人足でかせぎ貯めたその金でこゝへ漂つて來たと思つたら、支那の女を妻にして南京の桃の林の中で羨ましい事をやらかしてゐると思つたが、やつぱり放浪者だつた――一年とは續かなかつた。それにしてもその彼等にも、こんな悔恨とも後悔ともつかない感情がこみ上げるだらうか。

「ねえ、石田君。われわれのやうな人種はいつでも何處でも、生活の道を見出すものなのだ。さうして愚痴を言ひながらも、數奇な生涯を自慢するものなんだ。ねえ、さうだらう。」

石田には山野がつけ景氣でそんなことを言出したとは氣づかなかつた。今に何か山野らしい奇矯な意見が出るものと思つてゐたのが、不意に自分の名を呼びかけられてちよつと立止まつて相手の顔を見上げた石田は、つまらなさうな生返事をし、彼等は再び默りつゝ路次に出つた。きたならしい支那人長屋の一つの前に二人は同時に立止ると窓を見上げた。窓は暗かつた。石田は書生のやうに聲を上げて叫んだ。

「猪股君！ 居るか」

顔が一つ窓から現れた。それは彼等が立ち止つてゐた家の隣の窓だつた。

石田と山野とは默つて二三間歩くと隣の家に這入つた。石田は上手な支那語で影も見えないそこの家主に聲をかけながら、彼等はものなれた調子で暗の中の急に突つ立つた階段を手さぐりに二階へ上つて行つた。彼等の足音をききつけて階上の男は豆ランプを持つて彼等の足下を照らす爲めに出て來た。

この純然たる支那家屋の二階は、無論天井などはなく、土足で歩く床のある八疊程の部屋に、たつた三疊だけ日本風の疊が敷いてあつた。その上にちよこんとひとり坐つてゐた女は、石田や山野の來たのを見ても別に歡迎するらしい表情も言葉も出さなかつた。部屋の唯一の家具である支那風の卓子は新に適當なものであつたが、それには滿團がたたんだとも丸めたともつかぬ形で積み上げられ、卓子の側にはこれも名ばかりの腰掛がたつた一つだけ備はつてゐた。豬股は手に持つてゐた豆ランプを窓の緣に置いた序に、その腰掛を占領して了つたものだから石田と山野とは女のゐる疊の端へ、靴は脫がぬ足を床へ投げ出して腰を下した。

「何んだ。馬小舍みたやうな」と女が云つたといふのは、甚だ剴切だと石田はいつもそれを思ひ出して可笑しくなるのであつた。――この家は眞に山野の妾宅である。

三

泣かすなと言へば守でも厭ふてと最ともつともな妻の言擬かな
我の病む枕邊に來て反物の金呉れと言ふよき妻持てり
我が幸はよき妻持てる事である幸極まりて男の淚
貯み居ても貯の魁をひつ摑み心默ゆまで擲ぐりつけたし
たくましき樹木の如きもの持つて擲り仆さ[illegible]
良妻の腰骨角がありとせば一鉄槌は我れが毅く
蓋破れし行平の粥を食ふ男妻の指輪の光れる前に

かういふ歌を作りながら山野は、彼の女房を呪咀してゐたが、もともと異性崇拜者である彼には、よく知らない女は天使である代りに、接近した女はいつのまにかただの雌に見えて了ふのであつた。彼は友達も誰も知らない中にたうとう妻を追出して了つた。細君は知人の間を訴へて歩き、知人達は山野を說得したけれども山野は頭から取り合はなかつた。細君は近所に間借をして一人でどうやら口すぎをしながら、山野の留守を見計つては子供達に逢ひに行くのであつた。それを山野が見つけて罵り追ひ返すのを、知人達は見兼ねてそれぞれに山野を再び說いて見ても山野は一笑頭として受け付けなかつた。さうして山野は外へ出ては、年の若いカフエーの女などをつかまへては酔つて手を握つたり、俺の女房になれ大事にしてやるぞ、などと相手構はず云ふのを、冗談と思つて笑つてゐると案外本氣なのに氣の弱い女などは寧ろ恐怖をなし、すれつからしたのは、その禿げ頭を御覽なさいよなどときめつけるので山野もやつと我に返つては苦笑せざるを得ないのであつた。しかし、山野の禿げ頭をいひ出す女たちにしたところが山野がもう五十を越した人とは氣付かなかつた。この若々しい戀

情を持つた中老人は實際、頭の毛こそ薄かつたが四十位にしか見えず、若その氣嫌からいふと靑年に相違なかつた。かういふ山野の所へ靑島の友達から、手紙で一人の女を紹介して來たのであつた。年は三十で殖民地を巡業する劇團に女優をしてゐたのだが、上海で何か口すぎの道はあるまいかといふ話をきくと、山野には三十位だの女優をしてゐたのといふ言葉だけでもう見ぬ戀をするに充分だつた。山野は考へがあると云つてなけなしの財布を傾けて、早速その女に旅費まで送つて呼び寄せたのであつた。山野はその女の爲めに部屋を一つ求した。猪股の住んでゐる長屋續きの隣が山野には適當なものと思はれた。さすがに山野も、子供たちの手前その女を自分の家へ置くことは憚られたのであつた。食ひ詰めてゐる女には何の贅澤をいふ資格もなかつた。それに山野は實際、彼に珍しい間は心から親切を盡すのであつた。しかし女の極端なふしだらは間もなく詩人山野を顰蹙せしめずにはゐなかつた。寢床はいつも敷つ放しだし寢間著も浴衣も區別はなかつたし持つてゐた筈の帶などはどうしたのか無くなつて了つて、何時も細帶一本で暮してゐた。學校なぞも女學校の三年位は通ひ、近代戯曲のテーマ位は了解するやうな顔をしてゐたのを、眞に受けたのが山野の山野らしい所だと、石田や猪股は最初から笑つてゐた。ぼつぼつ彼自身の夢が醒めかかると、山野には女の荒れすさんだ膚も生活も我慢の出來ぬものになつて來た。その山野の感情を倍加させるものは地金を現し始めた女だつた。山野は一こと

「何んといふざまだ、その身だしなみは」

といふと、女の答はかうであつた――

「へん、身だしなみが聞いてあきれるよ、人を馬小舍のやうな所へぶち込んで置きやがつて、ここで厚化粧でもしてゐれやさぞよく似合ふことでせうよ。考へて見るがいゝや、人を自由にして置き乍ら小使の五圓と投げ出したことがあるか。一人前の口をきいてゐるよ、この助平親爺がさ」

その憎憎しげな口振りが、然し實感的なといふよりも、寧ろ場末の下手クソな新派の芝居を思はせるのであつた。それが山野には一層我慢がならなかつた。がその位の言ひ草ならまだしも何んでもなかつたけれども、山野が續いて言はうものなら、日本語の中にもかうも品の惡い言葉がそんなにどつさりあり、それをまたよくもかうまで蒐集したものだと思はれる言葉が、この全く馬小舍のやうな部屋中に充滿した。その一語一語の中にその女の魂や生活があるのかと思ふと山野は恐しくなつて部屋から逃げ出すのであつた。彼は猪股の所へ避難をしてから猪股が山野の抽象的な言ひ方には滿足せずに、もつと具體的にその言葉を言はせようとしても山野は言ふことが出來なかつた程で

程よき街だと云つて讃美するのを見るであらう。その人に向つて試に「貴方は何年此の土地にゐますか」と聞くと、「三十年程になります」と答へるであらう。朴訥で親切で然し何處かに調子はづれの所がある。彼を評する爲めには好漢といふ言葉が一番適してゐる。さうしてもう三年もしたら六十になると聞いても、彼を決して好々爺とは思はぬであらう。それは彼一癖ありげな言説と、それから不思議に輝いてゐる若さとに因る。さうしてこの好漢に對してその外の青年たちは、別に氣を兼ぬることもなく相手をやはり一個の青年として遇してゐるのを見ても不自然を感じない。この人物が即ち山野である。

石田は青年たちとは別にその土地に在住する同業者といふので、内地からの藝術家を歡待するであらう。さうした石田は山野とも連れ立つてゐる。旅客が山野といふ人物に好意ある奇異を感じて、若し石田に山野のことを尋ねると石田は答へる。

「あれは不思議な人物です。生れ乍らの詩人です。放浪者の中の放浪者です。彼の書いた土くれといふ本はなかなか立派ですよ」

「あの人は獨身ですか」

「いやいや、もう二十にもなる娘を頭に五人の子供のお父さんですがね。……その細君が僅で七年の間も別れてゐたものです。さうして誰か何んと云つてもきかなかつたのだが、近頃またその細君、うちへ歸つてゐます。山野も自分の

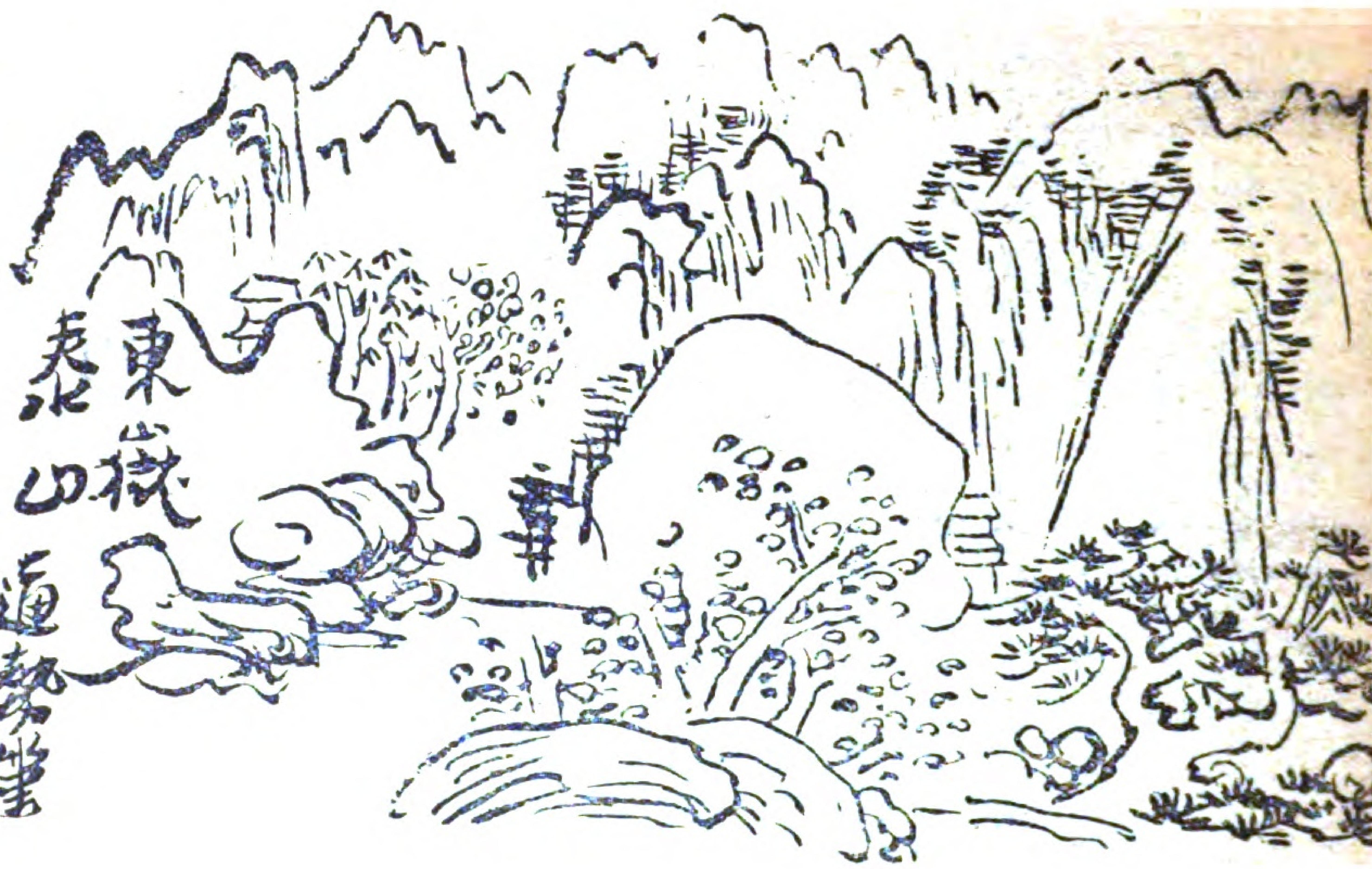
何しろいい事には相違ない。何んにしても隨分變つた

「それで、貴方は奥さんは？」

「僕ですか、いや、妻もなく子もなしですよ」

なかなか俗ばなれのした石田ではあるが、流石に面識の浅い人にまでは、むかし支那少女の情婦が赤ん坊の時に買つて了つた自分の子供がある話まではしないのである。

作者申す。この作品には所謂モデルがあります。しかしこの作品は無論、事實そのものではないのだから、作者の空想的創造がモデルに累を及ぼすやうな事のないのを希望すると同時に、作中に引用した個性鮮やかな詩歌は、私の作ではなく、別に嚴として作者があることをも一言して置きます。



漣

近松秋江

「お正月の御馳走といつたところで、定りきつたもので、格別のものもないが、まあ、かうして、熱海に家内中で來て、元日を迎へることが出來れば、吾々の身分では、難有い仕合せだと思つて滿足してゐなければならぬ。」

主人の鎌田は、貸別莊の庭内にある共同の浴室から朝湯に入つて戻つて來ると、さういつてほく〳〵しながら、茶の室の、いつもの自分の座席に坐つて、そんなことをいつてゐた。

そこへ、妻のお悅や女中達の手で、餉臺の上に種々な物が運ばれた。土地で間に合ふものは、餅から何から大概こちらで買ひ調へたのであつたが、それでも昨日鎌田が後から一人の方の女中を連れて來る時に東京から買つて持つて來たものなどもあつた。

二人の子供等は狹い座敷中を室ごと驅けまはつて、ゴムマリを投げたり、羽子をつく眞似をしたり、うるさく附纏つてゐた。

「さあ、そんなに臺處にいつて、うるさくしてゐると危い。こつちに來てお父さんの傍におとなしくして坐つて待つてゐるもんです。」

鎌田は父親といふよりも祖父といつた方が當つてゐるほど、小さい者のことなどが心配苦勞の種になつて、母親や女中の行き屆かぬところへ氣を配つたり、小言をいつたりするのであつた。とりわけ鎌田には、お悦の不行屆きなのが、眼に餘つて爲樣がなかつた。

一夜明けて、今日から、やつと、數へ歳五つと三つになつたばかりの二人の女兒は、さういはれて、父親の膝のまはりに一寸の間絡はり寄つたが、ものゝ三分間とも、そこに靜としてはゐなかつた。

鎌田は温泉の湯氣に、ぼうつと上氣した暖かさうな顏をして、彼も靜としてはゐられないやうに、火鉢の傍を起ち上つて、「おつ忘れてゐた。」と、獨り言をいつて、昨日東京から持つて來たトランクを開けて、中から一幅のお正月掛けを取り出して入側の床に持つていつて掛けた。それは、ある、まだ無名の青年畫家の描いた、淡鈍色の波に初日の出であつたが、南畫であるので、そんなに俗臭なものではなかつた。近景には、支那風の古い塔のやうな景物があつた。

彼はさも滿足したやうな顏をして、床の前を三四尺後に退りながら、それを眺めてゐた。

東の方に向いて開いてゐる九尺の硝子障子には、海の方から明るい元日の朝暉が麗かに照り映えてゐる。

「さあ、もう、そろ／＼好いんですよ。」

隣のお悦が六疊の方から呼びかけた。

「おい／＼。」彼は、そちらに背を向けたまゝ返事をしながら、こと[illegible]た。この掛物は好いだらう。」

お悦も、それと氣がついて、傍に寄つて來ながら、

「わたしには、何だかよく分りませんけれど、好い繪ですねえ。」

「恰ど、こゝで掛けるのに好いと思つて、持つて來たんだ。……しかし、よく氣を附けないと、子供が徒戯をする。……どれ、もうお雜煮の支度は出來たか。」

さういつて、鎌田は氣を換へたやうに、又六疊の方に戻つて來た。

そこで、いかにも心から今日の麗はしい元旦を悦ぶものゝやうに、今度は背後の、北に向いた六疊の窓を開いて外を眺めた。そちらには、熱海のすぐ北方に聳えてゐる十國峠の高根が、宛然眉端に迫るごとく高く見上げられた。くつきりと青磁色に晴れ渡つた大空には一點の雲翳もなく、清澄な碧空にはそちらにも、麗かな朝日の光が漲つてゐた。

「今日は何て暖いんだらう。好い元日だなあ。そして、さすがに熱海らしいお正月だ。」

彼はもう朝から幾度くり返したか知れないことを又いひながら、障子を閉めて、いよ／＼お雜煮の膳に向つた。

「さあ、屠蘇からいたゞかう。」といつて、熱海の町で、昨夜女中を走

つて買つて來させた瀬戸の屠蘇器から、お悦の注ぎ出す屠蘇を、酒盃に受けて、心よく飲んだ。

「東京の重組みを一式持つて來てもいゝと思つたが、厄介だし、そんな物は入りもせぬ。これで澤山だ。」

「えゝ、これで澤山です。」

そんなことを話しながら、鎌田は好い心地になつて幾杯かの屠蘇をひとりで重ねてゐた。

子供等はまだ小さいので、お正月らしい馳走は何にも與へられないで、いつものとほり、朝起きぬけに一合づゝの牛乳を飲んだあとは、餉臺の向側に並んで、柔い御飯に黄卵の半熟と鰹魚節の削つたのと、それにお雜煮の汁とを小さい椀にとつてもらつて、女中の一人に食べさせてもらつてゐた。

鎌田は、それを、眼の中に入れても痛くないといふやうな顔をして、じつと見ながら、

「今日は、お雜煮が濟んだら、これから、みんなと一所に梅林にいつて來ようねえ。」

それを聽くと、子供はもう、一寸も靜として居られないやうに、いきなり箸を投げ出して、

「べゝを着せてえ。」と甘えた。

「まあ〳〵、今からまだゆくんぢやありません。皆ながお雜煮が濟んでから行くの。」父親は手をとつて、子供を膝の上に抱き寄せた。

お悦は小さい方の子供と家に留守をして、鎌田と女中達二人と大きい方の子供とで梅林に出掛けた。

そこから、緩い傾斜になつた道を段々上つてゆくと、東南に扇の地紙形に開けた熱海灣の海は暖かさうに、白く煙つてゐるのが、すぐ眼の下に見えるのであつた。今日は格別海も穩かで魚見崎の汀に打ち寄する白い浪頭が、ちやうど光琳の浪の縁の如くに見えてゐる。子供も鎌田も、坂道を歩いて行くと、あんまり暖かなので、オバーを脱いだくらゐであつた。梅林までは、ものゝ五六町くらゐしかなかつた。さすがにまだ冬の最中のことゝて、ところ〴〵に一本か二本蕾を開きかけてゐるところがあつたが、見頃は半月ほど後であらうと思はれた。小高い山と山とに狹められて、深い谷底のやうになつてゐるので、そこまで入つて來ると、熱海の町よりは、ずつと氣候も寒かつた。さすがに人影も稀れであつた。たゞ、梅の樹の下に三脚を据ゑて、遊覽者を促して記念の撮影をすゝめる寫眞屋が二人ばかり暇さうに突立つてゐるばかりであつた。

「みんな寒いから、こんなところに出て來ないんでせう。」女中の一人がいふ。

ことも出來た。悲慘といへばもつと悲慘なことはいくらもあつた。初めて内地から支那へ飛び出して來て、漢口の屠牛所で血のしたたつてゐる牛の生皮を擔いだ頃のことを山野ははつきりと思ひ出す。しかしその當時の彼が持ち運んでゐるその荷物が、なまなかの代物でなかつた厭に却つて何か面白味をさへ――詩的なやうな氣持ちをさへ感じたものであつた。それはその後雇はれた鷄卵の會社の卵計算係りよりは、ずつと面白味のある職業であつたやうにさへ思へないではない。その卵會社では仲間とも上役とも激しい口喧嘩をして、三月とは經たぬうちに飛び出して了つた。

若しあの時大阪で巡査の試驗に合格してゐたならば、彼の生涯はどうであつたらう。一人の紳士風な年配の男が、受驗者の溜りで彼の顏を見るといきなり近づいておじぎをしながら、試驗場で何卒自分に敎へてくれと懇願したものだ。少しも自信がないと山野が云つても、その男はきき入れなかつた。さうして山野の側に坐つて山野の答案を盜み見しながらその男は、試驗にはパスしたのだ。山野を訪ねて年配の男が祝酒をおごらうと云ひ出した時には、山野は呆然としたものだ。なぜかといふに、彼自身は落第してゐたからである。敎へた男が不合格で敎はつた男が合格だといふところから見ると、合格と不合格との差はほんの一寸であつたと見える。さうすれば山野だつて、必ずしも巡査になれないのではなかつたかも知れない。少くの檢疫係りになつたのか、彼の一生の踏み出しであつたか。十七の時に飛び出した故郷の島では、二人しかない兄弟の兄はもう死んで了つて、生き殘つた姉はささやかな荒物屋を營んで、自分自身の家に家賃を支拂つてゐるといふ風な奇妙な有樣だ。その姉のこと。大阪に預けて來た子供達のこと。

山野はほろ醉ひの頭の中で漠然と自分の過去の生活を遡上つて考へたのであつたが、子供達のことに思ひ及ぶと醉がさめるやうな氣がした。いつも新しい世界を開拓して、そこで生生とした道を見出し、どんな苦しい中ででも生きることは難しくないことはないと、結局考へる山野であつたが、さういふ放浪者魂はいつの間にか山野のなかで亡びて了つたやうな氣がする。ぢぢむさい生活を。口喧しい古女房をたたき出して了つて、子供等は身内に預けて、一人になればまた生活の道も拓けるものと考へたのに、遠くにやつた子供のことが近くにゐるよりもひしひしと身に迫る。金を儲けることだけを人生と心得て、夫の人生の侶伴となるどころか、家の中にゐて内部の敵であつた女房が、こちらにゐる間もうるさく自分の留守をつけねらつては子供等の側に寄りづくのを罵つたり毆つたり、最後には貴樣が出て行かなければ俺が出るとまで言ひ、言ふばかりかそれを實行してたうとう追つ拂

つたと思つたものが、いつの間にか海を越えて大阪くんだりまで、子供等に影のやうに隨いて行つてゐる。それを考へると、變に胸が苦しいやうな氣持がする。かういふ感情をこれ程、强く味ふのも年を取つたからであるかも知れぬ。凡の健全なと稱する人人のなかに、放浪者魂が眠つてゐるやうに放浪者であることを喜んで認めてゐるこの自分のなかにも家畜のやうな普通人の魂が眠つてゐて、年取つて衰へたのにつけ込んでそいつがぬつくり浮き上らうとしてゐるらしい。人生の人並みの幸福なんていふものは古女房と一緒にとつくに吐出して了つた自分ではなかつたか。

　山野はこんなことを自問自答しながら彼と一緒に歩いてゐる石田に氣がついた。石田もまた放浪者だつた。高等學校時代に失戀をしたといふので、長崎から家郷には手紙一本、ただ海外へ行く積りだとのみ言ひやつたまま、この土地へ來て了つた石田。聽けばそれにも實つて了つた子供があるといふ。そんなことをひよつくり口に出して話す時には、石田も人並の魂に脅かされるものと見える。猪股はどうだらう。相當の商家の養子を飛び出して、廣東で石炭の荷上げ人足をした男だ。おとなしい彼は、人足でかせぎ貯めたその金でこゝへ漂つて來たと思つたら、支那の女を妻にして南京の桃の林の中で羨ましい事をやらかしてゐると思つたが、やつぱり放浪者だつた——一年とは續かなかつた。それにしてもその彼等にも、こんな悔恨とも後悔ともつかない感情がこみ上げるだらうか。

「ねえ、石田君。われわれのやうな人種はいつでも何處でも、生活の道を見出すものなのだ。さうして愚痴を言ひながらも、數奇な生涯を自慢するものなんだ。ねえ、さうだらう。」

　石田には山野がつけ景氣でそんなことを言出したとは氣づかなかつた。今に何か山野らしい奇矯な意見が出るものと思つてゐたのが、不意に自分の名を呼びかけられてちよつと立止まつて相手の顏を見上げた石田は、つまらなさうな生返事をし、彼等は再び默りつゝ、路次に出つた。きたならしい支那人長屋の一つの前に二人は同時に立止ると窓を見上げた。窓は暗かつた。石田は書生のやうに聲を上げて叫んだ。

「猪股君！　居るか」

顏が一つ窓から現れた。それは彼等が立ち止つてゐた家の隣の窓だつた。

　石田と山野とは默つて二三間歩くと隣の家に這入つた。石田は上手な支那語で影も見えないそこの家主に聲をかけながら、彼等はものなれた調子で暗の中の急に突つ立つた階段を手さぐりに二階へ上つて行つた。彼等の足音をききつけて階上の男は豆ランプを持つて彼等の足下を照らす爲めに出て來た。

この純然たる支那家屋の二階は、無論天井などはなく、土足で歩く床のある八疊程の部屋に、たつた三疊だけ日本風の疊が敷いてあつた。その上にちよこんとひとり坐つてゐた女は、石田や山野の來たのを見ても別に歡迎するらしい表情も言葉も出さなかつた。部屋の唯一の家具である支那風の卓子は新に適當なものであつたが、それには蒲團がたたんだとも丸めたともつかぬ形で積み上げられ、卓子の側にはこれも名ばかりの腰掛がたつた一つだけ備はつてゐた。猿股は手に持つてゐた豆ランプを窓の縁に置いた序に、その腰掛を占領して了つたものだから石田と山野とは女のゐる疊の端へ、靴は脱がぬ足を床へ投げ出して腰を下した。

「何んだ。馬小舍みたやうな」と女が云つたといふのは、甚だ剴切だと石田はいつもそれを思ひ出して可笑しくなるのであつた。――この家は實に山野の妾宅である。

三

泣かすなと言へば守でも雇ふてと殴ともつともな妻の言葉かな

我の病む枕邊に來て反物の金呉れと言ふよき妻持てり

我が幸はよき妻持てる事である幸極まりて男の涙

病み居ても鞭の跡をひつ掴み心臓ゆまで擲くりつけたし

たゝきし擲木の如きもの[illegible]

良妻の隠匿所がありとせば一[illegible]は我れが[illegible]く

蓋破れし行平の粥を食ふ[illegible]妻の指輪の光れる前に

かういふ歌を作りながら山野は、彼の女房を呪咀してゐたが、もと異性崇拝者である彼には、よく知らない女は天使である代りに、接近した女はいつのまにかただの雌に見えて了ふのであつた。彼は友達も誰も知らない中にたうとう妻を追出して了つた。細君は知人の間を訴へて歩き、知人達は山野を説得したけれども山野は頭から取り合はなかつた。細君は近所に間借をして一人でどうやら口すぎをしながら、山野の留守を見計つては子供達に逢ひに行くのであつた。それを山野が見つけて罵り追ひ返すのを、知人達は見兼ねてそれぞれに山野を再び説いて見ても山野は一[illegible]頭として受け付けなかつた。さうして山野は外へ出ては、年の若いカフェーの女などをつかまへては酔つて手を握つたり、俺の女房になれ大事にしてやるぞ、などと相手構はず云ふのを、冗談と思つて笑つてゐると案外本氣なのに氣の弱い女などは寧ろ恐をなし、すれつからしたのは、その禿げ頭を御覧なさいよなどときめつけるので山野もやつと我に返つては苦笑せざるを得ないのであつた。しかし、山野の禿げ頭をいひ出す女たちにしたところが山野がもう五十を越した人とは氣付かなかつた。この若々しい戀

情を持つた中老人は實際、頭の毛こそ薄かつたが四十位にしか見えず、若その氣噸からいふと青年に相違なかつた。かういふ山野の所へ青島の友達から、手紙で一人の女を紹介して來たのであつた。年は三十で殖民地を巡業する劇團に女優をしてゐたのだが、上海で何か口すぎの道はあるまいかといふ話をきくと、山野には三十位だの女優をしてゐたのだのといふ言葉だけでもう見ぬ戀をするに充分だつた。山野は考へがあると云つてなけなしの財布を傾けて、早速その女に旅費まで送つて呼び寄せたのであつた。山野はその女の爲めに部屋を一つ索した。猪股の住んでゐる長屋續きの隣が山野には適當なものと思はれた。さすがに山野も、子供たちの手前その女を自分の家へ置くことは憚られたのであつた。食ひ詰めてゐる女には何の贅澤をいふ資格もなかつた。それに山野は實際、彼に珍しい間は心から親切を盡すのであつた。しかし女の極端なふしだらは間もなく詩人山野を顰蹙せしめずにはゐなかつた。寝床はいつも敷つ放しだし寝間著も浴衣も區別はなかつたし持つてゐた筈の帶などはどうしたのか無くなつて了つて、何時も細帶一本で暮してゐた。學校なぞも女學校の三年位は通ひ、近代戲曲のテーマ位は了解するやうな顏をしてゐたのを、眞に受けたのが山野の山野らしい所だと、石田や猪股は最初から笑つてゐた。ぽつぽつ彼自身の夢が醒めかかると、山野には女の荒れすさんだ膚も生活も我慢の出來ぬものになつて來た。その山野の感情を倍加させるものは地金を現し始めた女だつた。山野は一こと

「何んといふざまだ、その身だしなみは」

といふと、女の答はかうであつた――

「へん、身だしなみが聞いてあきれるよ、人を馬小舍のやうな所へぶち込んで置きやがつて、ここで厚化粧でもしてゐれやさぞよく似合ふことでせうよ。考へて見るがいゝや、人を自由にして置き乍ら小使の五圓と投げ出したことがあるか。一人前の口をきいてゐるよ、この助平親爺がさ」

その憎憎しげな口振りが、然し實感的なといふよりも、寧ろ場末の下手クソな新派の芝居を思はせるのであつた。それが山野には一層我慢がならなかつた。がその位の言ひ草ならまだしも何んでも無かつたけれども、山野が續いて言はうものなら、日本語の中にもかうも品の惡い言葉がそんなにどつさりあり、それをまたよくもかうまで蒐集したものだと思はれる言葉が、この全く馬小舍のやうな部屋中に充滿した。その一語一語の中にその女の魂や生活があるのかと思ふと山野は恐しくなつて部屋から逃げ出すのであつた。彼は猪股の所へ避難をしてから猪股が山野の抽象的な言ひ方には滿足せずに、もつと具體的にその言葉を言はせようとしても山野は言ふことが出來なかつた程で

あつた。
「女といふものは恐しいもんだ。深酷なものだ。男はどんなに我を忘れても、あんなことを、平氣な面をして、やすやすとはいへん。」
山野はどもり乍ら嘆息した。

初めは
女は『只もう感謝します』と言つた
『惠まれて居ます』とも言つた
私は善人であつた

花の色も咲きながらうつらふ如く
女の感謝も日に日に失せて去つた
今は淡い色さへない白紙となつた
而して本質が鋭く醜く露はれて來た
無智　虚榮　欲求　反抗　罵詈　涙

アア厭だ厭だ
私は兩腕で頭を抱へて家を逃げだした
外に流があつて水が淸い

私の心は踊つた
すぐ襯衣を脱いで流の眞中へ飛び込んだ
冷やかい水晶の溶ろけた如な水が
醜穢に包まれて居た私の體を
淸く頭髪まで淨めてくれた
私は苦悶憤怒愛愁悲嘆から逃れた世界を見た
そして我ながらも偉さを覺ゆる爽快さを感じた
岸に上つた時
脱ぎ捨てて置いた衣が
見るも汚らはしく土の上にべつたりとしてゐるのが眼に入つた
今この爽快な心持に輝いて居る私が
再び此舊衣にさへ觸るることを厭うた
私は裸で振魔羅で新しい衣を求めに歩いた

山野は淺ましくなつて、子供たちは内地の親類にあづけ、身一つになつて生活をやりなほさうと決心をしたのであつたが、それでもそんなことを言ひ乍ら然し山野は酒に醉つた揚句などは、やつぱりその女の所へ訪ねて行つて見たりもする。
女もなかなか酒を飲んだ。さうして足も遠くなり金廻りも惡い山野

よりも、これも山野に殘らぬ醜業の媒介をせびつては、この賤人たちは「駱不舍」の中で酒盛をよくやるのであつた。

或日猪股が石田を訪問した。さうして山野の女がこの頃病氣になつて呻つてゐるのでそれを山野に通知して何んとかしてやらなければなるまいと言つたが、山野はそれは君が無暗と酒なぞを喰はせるから病氣になつたんだ。俺の知つたことではないとばかり取り合ふ樣子もない。女が頼むから救民病院へ往診を頼んだが病院ではそんな場所柄をきいてか往診は出來ないから患者を連れて來いと云ふが一體どうしたものだらうといふ。女はかうしてゐては死んで了ふから醫者を呼んでくれとあばれ狂ふ。どうしたもんだらう。猪股は石田に謀るのであつた。病院まで行くことも出來ない程の重態かと石田がいふと、決してさうではないが、寢間着と蒲團とより外には一物もないんだから、外へ出ることはならない。さればと云つてその儘捨てて置く譯にも行かぬが、餘り立ち入つた世話をしては山野の感情を害しはしないかなあ、といふのが猪股のいふ所である。仕方があるまいといふので彼等は相談の上で、女には古着屋で寄せ集めて來た着物を卷きつけさして病院へ連れ込んだ。もとより女が云ふ程の大した病氣ではなかつたのだ。

女の病氣が癒つたのを見計つて、石田は山野を促して女と別れさした。山野が女の爲めに内地へ歸る旅費を與へることになつた。山野はくだらない女の爲に馬鹿な錢を使はされたと云つて愚痴たらたらであつたし、女はまた助平爺の爲めにさんざん好きなことをされたと最後の毒舌を殘して立ち去つた。山野はその女が立ち去ると間もなく、満子や美子や三馬二や麗子や大島を自分の膝下へ呼び戻したのである。山野の憎んでゐる細君、さうして子供等は父には憚かつて愛してゐる母が、また影のやうに子供等に隨いて來たことは考へるまでもなかつた。山野の氣質を呑み込んでゐると自から信じてゐる石田は、以前山野の細君が彼に頼んだ時には到底無益と知つて試みなかつたものを、今度は誰にも頼まれないのに、山野に細君を家へ入れることを奨めた。これが絶好の機會で、若しかすると山野自身もそれを望んでゐるかのやうに石田は考へたのであつた。

しかし、山野はたゞ默つて強く首を振つた。

＊　＊　＊　＊　＊

日本から上海へ遊ぶ美術家や文學者などがあると、彼地にも若い美術愛好家の一群があつてきつと親切に、この種の旅客を歡待し案内してくれる。それ等の青年たちの間にたゞ一人外の人人程ハイカラではなく、年も先づ四十から五十までの間に見える位のしかし頭の禿げた丈の高い人物が雜つてゐて、世界の都であるこの都市を歡ひ切れぬ

程よき街だと云つて讃美するのを見るであらう。その人に向つて試に「貴方は何年此の土地にゐますか」と聞くと、「三十年程になります」と答へるであらう。朴訥で親切で然し何處かに調子はづれの所がある。彼を評する爲めには好漢といふ言葉が一番適してゐる。さうしてもう三年もしたら六十になると聞いても、彼を決して好々爺とは思はぬであらう。それは彼一癖ありげな言説と、それから不思議に輝いてゐる若さとに因る。さうしてこの好漢に對してその外の青年たちは、別に氣を兼ねることもなく相手をやはり一個の青年として遇してゐるのを見ても不自然を感じない。この人物が卽ち山野である。

石田は青年たちとは別にその土地に在住する同業者といふので、内地からの藝術家を歡待するであらう。さうした石田は山野とも連れ立つてゐる。旅客が山野といふ人物に好意ある奇異を感じて、若し石田に山野のことを尋ねると石田は答へる。

「あれは不思議な人物です。生れ乍らの詩人です。放浪者の中の放浪者です。彼の書いた土くれといふ本はなかなか立派ですよ」

「あの人は獨身ですか」

「いやいや、もう二十にもなる娘を頭に五人の子供のお父さんですがね。………その細君が纔で七年の間も別れてゐたものです。さうして誰か何んと云つてもきかなかつたのだが、近頃またその細君、うちへ歸つてゐます。山野も自分の年にでも感ずる所があつたのですかね、何しろいい事には相違ない。何んにしても隨分變つた人物で。

「それで、貴方は奥さんは？」

「僕ですか、いや、妻もなく子もなしですよ」

なかなか俗ばなれのした石田ではあるが、流石に面識の淺い人にまでは、むかし支那少女の情婦が赤ん坊の時に賣つて了つた自分の子供がある話まではしないのである。

作者申す。この作品には所謂モデルがあります。しかしこの作品は無論、事實そのものではないのだから、作者の空想的創造がモデルに累を及ぼすやうな事のないのを希望すると同時に、作中に引用した個性鮮やかな詩歌は、私の作ではなく、別に嚴として作者があることをも一言して置きます。



漣

近松秋江

「お正月の御馳走といつたところで、定りきつたもので、格別のものもないが、まあ、かうして、熱海に家内中で來て、元日を迎へることが出來れば、吾々の身分では、難有い仕合せだと思つて滿足してゐなければならぬ。」

主人の鎌田は、貸別莊の庭内にある共同の浴室から朝湯に入つて戻つて來ると、さういつてほく〳〵しながら、茶の室の、いつもの自分の座席に坐つて、そんなことをいつてゐた。

そこへ、妻のお悦や女中達の手で、餉臺の上に種々な物が運ばれた。土地で間に合ふものは、餅から何から大概こちらで買ひ調へたのであつたが、それでも昨日鎌田が後から一人の方の女中を連れて來る時に東京から買つて持つて來たものなどもあつた。

二人の子供等は狹い座敷中を室ごと驅けまはつて、ゴムマリを投げたり、羽子をつく眞似をしたり、うるさく附纏つてゐた。

「さあ、そんなに臺處にいつて、うるさくしてゐると危い。こつちに來てお父さんの傍におとなしくして坐つて待つてゐるもんです。」

鎌田は父親といふよりも祖父といつた方が當つてゐるほど、小さい者のことなどが總て苦勞の種になつて、母親や女中の行き屆かぬところへ氣を配つたり、小言をいつたりするのであつた。とりわけ鎌田には、お悦の不行屆きなのが、眼に餘つて爲樣がなかつた。

一夜明けて、今日から、やつと、數へ歳五つと三つになつたばかりの二人の女兒は、さういはれて、父親の膝のまはりに一寸の間絡はり寄つたが、ものゝ三分間とも、そこに靜としてはゐなかつた。

鎌田は溫泉の湯氣に、ぼうつと上氣した暖かさうな顏をして、彼も靜としてはゐられないやうに、火鉢の傍を起ち上つて、

「おつ忘れてゐた。」と、獨り言をいつて、昨日東京から持つて來たトランクを開けて、中から一幅のお正月掛けを取り出して八疊の床に持つていつて掛けた。それは、ある、まだ無名の青年畫家の描いた、淡彩色の波に初日の出であつたが、南畫であるので、そんなに俗惡なものではなかつた。近景には、支那風の古い塔のやうな景物があつた。

彼はさも滿足したやうな顏をして、床の前を三四尺後に退りながら、それを眺めてゐた。

東の方に向いて開いてゐる九尺の硝子障子には、海の方から明るい元日の朝暉が麗かに照り映えてゐる。

「さあ、もう、そろ／＼好いんですよ。」

妻のお悦が六疊の方から呼びかけた。

「おい／＼。」彼は、そちらに背を向けたまゝ返事をしながら、「どうだ。この掛物は好いだらう。」

お悦も、それと氣がついて、傍に寄つて來ながら、

「わたしには、何だかよく分りませんけれど、好い繪ですねえ。」

「恰ど、こゝで掛けるのに好いと思つて、持つて來たんだ。……しかし、よく氣を附けないと、子供が徒戲をする。……どれ、もうお雜煮の支度は出來たか。」

さういつて、鎌田は氣を換へたやうに、又六疊の方に戻つて來た。

そこで、いかにも心から今日の麗はしい元旦を悦ぶものゝやうに、今度は背後の、北に向いた六疊の窓を開いて外を眺めた。そちらには、熱海のすぐ北方に聳えてゐる十國峠の高根が、宛然眉端に迫るごとく高く見上げられた。くつきりと青磁色に晴れ渡つた大空には一點の雲翳もなく、清澄な碧空にはそちらにも、麗かな朝日の光が漲つてゐた。

「今日は何て暖いんだらう。好い元日だなあ。そして、さすがに熱海らしいお正月だ。」

彼はもう朝から幾度くり返したか知れないことを又いひながら、窓を閉めて、いよ／＼お雜煮の膳に向つた。

「さあ、屠蘇からいただかう。」といつて、熱海の町で、昨夜女中を運

つて買つて來させた瀨戸の屠蘇器から、お悅の注ぎ出す屠蘇を、盃に受けて、心よく飲んだ。

「東京の重組みを一式持つて來てもいゝと思つたが、厄介だし、そんな物は入りもせぬ。これで澤山だ。」

「えゝ、これで澤山です。」

そんなことを話しながら、鎌田は好い心地になつて幾杯かの屠蘇をひとりで重ねてゐた。

子供等はまだ小さいので、お正月らしい馳走は何にも與へられないで、いつものとほり、朝起きぬけに一合づゝの牛乳を飲んだあとは、餉臺の向側に並んで、柔い御飯に黄卵の半熟と鰹魚節の削つたのと、それにお雜煮の汁とを小さい椀にとつてもらつて、女中の一人に食べさせてもらつてゐた。

鎌田は、それを、眼の中に入れても痛くないといふやうな顏をして、じつと見ながら、

「今日は、お雜煮が濟んだら、これから、みんなと一所に梅林にいつて來ようねえ。」

それを聽くと、子供はもう、一寸も靜として居られないやうに、いきなり箸を投げ出して、

「べゝを着せてえ。」と甘えた。

「まあ〳〵、今からまだゆくんぢやありません。皆ながお雜煮が濟んでから行くの。」父親は手をとつて、子供を膝の上に抱き寄せた。

お悅は小さい方の子供と家に留守をして、鎌田と女中達二人と大きい方の子供とで梅林に出掛けた。

そこから、緩い傾斜になつた道を段々上つてゆくと、東南に扇の地紙形に開けた熱海灣の海は暖かさうに、白く煙つてゐるのが、すぐ眼の下に見えるのであつた。今日は格別海も穩かで魚見崎の汀に打ち寄する白い浪頭が、ちやうど光琳の浪の繪の如くに見えてゐる。子供も鎌田も、坂道を歩いて行くと、あんまり暖かなので、オバーを脱いだくらゐであつた。梅林までは、ものゝ五六町くらゐしかなかつた。さすがにまだ冬の最中のことゝて、ところ〴〵に一本か二本蕾を開きかけてゐるところがあつたが、見頃は半月ほど後であらうと思はれた。小高い山と山とに狹められて、深い谷底のやうになつてゐるので、そこまで入つて來ると、熱海の町よりは、ずつと氣候も寒かつた。さすがに人影も稀れであつた。たゞ、梅の樹の下に三脚を据ゑて、遊覽者を促して記念の撮影をすゝめる寫眞屋が二人ばかり所在なさうに突立つてゐるばかりであつた。

「みんな寒いから、こんなところに出て來ないんでせう。」女中の一人がいつた。

「さうだよ。居[illegible]機[illegible]で火鉢の傍にかじり附いてゐる方がいゝからな。……どうだ、今日の好いお元日の記念に寫眞でも撮らうぢやないか。」鐵田はさういつて、寫眞屋の勸めるまゝに、みんなで寫眞を寫したりした。そして廣い構内の中を一廻はりして、溪流に沿うた金網の中に住んでゐる白鶴に餌をくれたりして少時戯れてから、歸途に就いた。

女中の一人は東京の留守宅の方が無人なので、その日の午後歸すことになつてゐた。羽織を脱いでゐてもいゝくらゐ暖かかつた長閑な元日も午ざかりになると、妙に、清新なお正月氣分が、いさゝか崩れたやうになつた。それでもその晩夕飯には、そこからあんまり遠くないところに住んでゐる鐵田の舊師である博士の宅へ五六人の相客とゝもに招かれてゐるので、そんなことが何となくまだ樂しい正月氣分を殘してゐるのであつた。

その晩博士の宅では、食後に、そんなことの好きな博士が　いろんな畫帖などを持ち出して、何でもいゝから、記念の爲に書いてくれといつて、老博士自から先づ達筆を揮つて漢詩だの和歌などを誌した。客の中にも興に乘じて　まづい　繪を描いたり俳句を書きなぐつたりした。

二日は單調な無事な一日が過ぎた。檜葉の植込みの垣根の下の道を、構内の方へ上つてゆく避寒の客が、それでも三人五人通つていつていつたりした。海の方には、今日はいくらか風が立つてゐると思はれて、魚見崎の汀に白い浪頭が大きく打ち寄せてゐた。その晩鐵田は夕飯の席について、いつものとほり餉臺に寄つてゐたが、性分で、いろんな細かいところに氣の着く彼は、お悦のすることが、何につけ、眼に怠るくつて、堪らなかつた。そしてひとりで焦れ〳〵してゐた。實際彼女の頭は鈍かつた。三四年前に急性脳脊髓膜炎を患つて、やつと瀕死の狀態から一命だけは取留めたが、その痕跡は隨分長い年數を經過せねば全快せぬものだと聞いてゐるが、どうもその病氣のせゐばかりではなく、彼女の天稟が既にさうなのである上に、育つ時から碌な家庭の仕附けといふやうなことも勿論注意されて大きくなつたわけでもないので、起居振舞ひから不斷の言葉づかひなどが不作法で、いけ粗雜であつた。鐵田には、それが何よりも不快で耐らなかつたが、それも子供の親であることをおもへば、ちつと眼を瞑つてゐるよりほか今更どうにも爲様がなかつた。

その晩も、鐵田は餉臺に凭つて夕飯の支度の出來るのを待つてゐたが、二人の子供はもう與へられたものに箸を附けてゐたが、いつものことでそこら中食べ物を溢したり、汁を引つくり返へしたりしてゐ

た。頭の鈍い少女に、二人もの女中の手助けがあるのに、子供の世話さへ碌すつぽ出來なかつた。

子供は二人とも、何をしたのか、一度にわあッと泣き出してしまつた。鎌田はもう頭が焦れ／＼して來た。

「お前ぢや子供の世話も出來ない。お前あつちへいつて、つねのしてゐることをして、つねに子供に御飯を食べさしなさい。……おい、つね、お前こつちへ來て子供を見てやれ。」

臺所の七輪の傍で働いてゐる女中のつねを呼んだ。つねは、そこへ來て子供の食事を見てゐた。その代りにお悦が立つていつて鎌田の夕飯の支度にかゝつた。が、お悦は、今まで女中のつねのしかけてゐた膳立ての手順がすぐには呑み込めなかつた。

鎌田は、何といふ情けないことであらうかと思つた。こんなことで、今に自分が死んでしまつた後は、こんな愚かな母親の一人手で小さい二人の子供がどうなつてゆくであらうと思ふと、苦勞性の鎌田には、眼の前が眞暗になつて來るのであつた。彼は時々、そんなことをあんまり思ひ詰めて取越し苦勞をするのは愚かの至りだと思ひ返してみることもあつたが、毎日々々繰返されるお悦の不行屆きを見せつけられてゐると、やつぱり默つてはゐられなかつた。

最近に一度かういふことがあつた。まだ年孫にこちらに來ない時分であつた。小さい方の子供が風邪で消化器を惡くして一週間ばかり服藥をしてゐた。ちやうど、そこへ又鎌田が神經衰弱に罹つて、これも一週間ばかり鎮靜劑をもらつて服んでゐた。ある夕方のことであつた。鎌田は外出から歸つて來て、着物を更めて、茶の室に入つて來て食前の散服をのまうとして、茶簞笥の戸棚をあけ、そこに仕舞つてある自分の藥を取出さうとして、藥袋を手にして見ると、まだ昨日の夕方醫者からもらつて來たばかりの袋の中は空になつてゐた。

「おい、私の藥はどうしたんだらうな。一服もない。まだ澤山ある筈なんだ。」鎌田が不思議さうにいつてゐるところへ、お悦がきよとんとした顏をして傍に寄つて來て、

「あゝッ！」といつて、帶の間から、四五服の五角形に小さく包んだ散藥の包みを取り出した。

「間違へてゐた。」

それを見て鎌田の面相は、急に神經が尖つて來た。

「道子の藥とまちがへたのか。」

「まちがへたのです。」

「まちがへたのに、どうしてこれを帶の間に入れてゐたんだ。藥を帶の間に蔵つて置くといふのが分らない。どうしたんだ？」

鎌田は問ひ詰めた。

お悦は返答することが出來なかつた。

「おい、どうして帶の間に藥を入れてゐたといつて訊くんだよ。」

お悦は石のやうに默り込んで返事をしようとせぬ。

「默つてゐては分らないぢやないか。道子の藥と私の藥とを間違へたにして、この私の藥をお前の帶の間に、どういふ理由で入れてゐたんだ。」鎌田は同じことをいつて、何度も訊ひつめた。

二人の女中と、折柄丁度、鎌田の外出中に訪ねて來て、今夕飯を濟ましたばかりの鎌田の親類の學生とは、子供の對手になつてゐたが、それを聽いて聲を潜めてしまつた。

お悦はやゝあつていつた。

「道子に藥を服ませようと思つて、見るとあんまり澤山あるので、わたしも一寸不思議に思つたんです。こんなにまだあつたかなあと思つた。たしか服ませてゐた筈だのに。又、藥を服ますのを忘れてゐたといつて、叱られると思つて、それで、取つておいたんです。」お悦はおそる／＼いふのであつた。

鎌田はそれを聽いて叱つたり憤つたりするよりも、心の中で實に情けなくなつてしまつた。かういふ事では、自分一人で年中明けても暮れてもやきもき思つてゐるのも無理もない事だ。これでは、とてもやりきれたものではないと思ふと、うんざりして了ふのであつた。

「そんな馬鹿なことが考へたつて出來るものぢやない。藥は毎日分づゝもらつて來て、道子の藥はもう一昨日の晩から今度の分を服んでゐるんぢやないか。私の藥は、まだ昨日の夕方もらつて來たばかりだ。………しかし、そんな時日のことなどは、お前には覺えてゐられないだらうが、道子の藥は、お前が自分で與るか、ほかの者に與らすか、大抵食前食後に與つてゐることは、お前が自分で思つてみたつて知れてゐるだらう。それを、こんなに殘つてゐると思つたら、何より先に不審を打つて、藥袋に書いてある名前を見たらいゝぢやないか。名前くらゐは讀めるだらう。お前は餘計なところに惡い智惠がまはるぢやないか。こんなに、服ますのを忘れてまだ澤山殘つてゐるなと思つたら、何で藥袋を先づ手にとつてよく見ないんだ。」

鎌田は、同じことを、これでもまだ解らぬか、まだわからぬかといふやうに繰返して詰責した。お悦は、それに對して何とも言ふことが出來なかつた。

鎌田は、叱るといふよりも憂慮に耐へざるものゝごとく顏面の神經を層一層と曇らして、

「お前がさういふことでは、私は、半日は愚か、たゞの半時だつて、安心して家を空けて外に出ることも出來ないぢやないか。それは、藥を間違へて服なといふことは、全くないことではない。服つたことだ

お、どうかすると、なることだ。藥をまちがへて服んだといふより
も、服み殘したと思つた藥を隱して置く心持ちが間違つてゐる。……そして、藥は間違へて服ましたのか。私の鎮靜劑を道子に服ましたのか。」鐵田は、念を押して訊いた。が、お悅が、何をいつても、はきはきした返答をせぬので一層焦れるばかりであつた。

鐵田の家では、時々そんな間違へをしてゐた。三四年前にも一度そんなことがあつた。お悅が二度目の出產の――道子を產む前後の騷ぎの最中であつた。その時居つた女中の一人が自分の熱冷ましの藥を、子供に間違へて服ましたまゝ、默つて去つてしまつた。そして、その翌日の晩方になつて、ふいと、も一人の女中が、そのことをいつて聞かしたので、鐵田は始めてそれと知つて、大騷ぎをした。丁度、その日の朝お悅が產氣ついて緣板の上に子供を產み落したりして、さうなくつてさへ、朝からいゝ加減取込んでゐたところであつた。そして夕方になつて、やつと、一とほり形付いたと思つて、鐵田は、ほつとしてゐたところへ、子供に夕飯前の藥を服まさうとして、女中がそのことを思ひ出して、いつた。

鐵田は、何といふ災厄の絕えないことであらうかと、まるで、自分が、意地の惡い何者かに故意に虐められてゐるやうな氣がしてならなかつた。それで早速醫者に女中を走らせて、手當てをしてもらはうとしたが、もう、それは、二三十時間も過ぎたことで、今更ら、手當てをすることも出來ない次第であつた。幸ひにして、異狀が生じなかつたから、好かつたやうなものゝ、醫者は、「折角この頃大分好くなつて來たところを、飛んでもないことをした。」といつて、ともかくも對症劑を與へてくれた。何しろ、大人が三十八度からの下熱劑を一包み嚥下したので、心臟に故障を生じはせぬかといふ氣づかひがあつたが、遂に何の事もなくて濟んだのは仕合せであつた。

鐵田は、そのことをいひ出した。

「この前にも百合子に間違つた藥を服ましたことがあつた。私の鎮靜劑を道子に服ましたんだらう！？……飲ましたのか、まだ飲まさないのか、はつきりしたことをいひなさい。」

お悅はそれでもまだ、へどもどしてゐて、言葉を曖昧にしてゐた。鐵田は、彼女の口を信ずるよりも、彼女の顏色から眞實を觀破しようとした。けれども不安は止まなかつた。

「本當のことをいひなさい。嚥ましたのなら、すぐお醫者に手當てをしてもらはなければならぬから。私の鎮靜劑など嚥ましたら、そのまま寢入つてしまふ。」

「嚥ましやあしませんよ。」お悅は始めてはつきり言つた。

しかし鎌田は、どうも嚥まさないといふのが本當とは思へなかつた。その夕刻子供に藥を與へようとして戸棚から取り出したくらゐだから、その一包を與へて、あとを納戸の間に仕舞つておいたものとしか考へられない。鎌田は半月ばかり前に腦貧血と強烈な神經衰弱との爲に二三日倒れてから後つゞけて服藥をしてゐるのであつたが、それが、どのくらゐの程度に、又、どんな種類の藥品を用ゐてあるものか知らなかつたが、此の頃頻りに自殺する者が服用するカルモチンその他の藥品が適度に調劑してあるのではないかと思つた。それを、わづかに三歳にも滿たぬ小兒に與へたとすれば非常な危險である。

「本當に嚥まさないのなら可いけれど……」

鎌田はやゝ安心したやうにいつたが、まだ全く安心は出來なかつた。それでまた同じことを反覆して小言をいつた。「……こんなにまだ藥が殘つてゐると思ふことが、私には、どうしても考へられないことだ。誰れよりもお前自身が一番多く手に掛けて藥を與つてゐたぢやないか。その藥を與つた度數を、ざつと考へてみたつて、二日前に醫者からもらつて來たものが、そんなに殘つてゐる筈は、どうしてもないと、かう考へてみなけりやあならない。そして、それでも不審であつたら、藥袋の名前を見るのが、誰れだつて、先づ爲ることだ。それを、藥袋の名前をも更めて見ようとしないで、私の藥を道子のと思つて、私に小言をいはれるからと思つて、納戸の間に隱して置いたの は、甚だ性質の良くないことだ。今後の事のために、いつて聽かすのだ。よく注意しなさい。一體お前は今更ら始まつたことぢやないが、何かにつけて、がさつなのだ。」

鎌田は小言をいひ〳〵、それから女中が加減をした風呂に入つて、夕飯にした。その日は午前中一寸した銀行の仕事をして、午後市中に出てゆき、疲れて戻つて來たので、食後に夕刊を二三枚讀んでから、離れの六疊に入つて寢床に横はつた。すると暫くして誰れか、そうつと架燈口の襖を開けたと思つて、すこし眠りかけてゐた眼をさましてそちらを振向くと、お悦が、暗い廊下に蹲みながら「わたし、一寸細田さんにいつて來ます。」といふ。

「どうしたんだ？」

「やつぱり、今考へて見たら、道ツちやんに藥を嚥ましてゐましたから、これから細田さんにいつて訊いて來ます。」

鎌田は、とろつとしてゐた眼が、それで醒めてしまつた。そして、その瞬間、度忘れしてゐた藥のことを、さういはれて、又やつと思ひうかべた。

「そうら見なさい。やつぱり間違へて服ましたんだらう。そんなら、それで、先つき何故服ましたといはなかつたんだ。あれからもう二時

隨分長時間が過ぎてゐる。お醫者に手當をしてもらふにしても、もうそれだけ手遲れになつてゐるぢやないか。」

さういひながら、鎌田は寢床から、がばと腰まで跳ね起きた。

「そして、道子は、今、どうしてゐる。寢てゐるか。」

「えゝ寢てゐます。」

「寢てゐるのは、何時も今時分のことだから、寢るには定まつてゐるが、その寢てゐるのが、平常のとほり眠つてゐるのか、それとも藥が効いて眠つてゐるのか分りやしない。」

鎌田はもう、今更お悦に向つて小言を繰返したところで爲方がないと思つた。

「ぢや早く行つて、細田さんによく譯を話して訊いて見なさい。……

……あれほど、先刻念を押して訊いた時には嚥まさないといつて、今になつて又嚥ましたといふ。そりや服ましたのが本當だ。何故あの時さういはなかたのだ。…………どうもお前の馬鹿にも呆れ返つて物がいへない。」鎌田は又、心から慨嘆していつた。

「あの時は嚥まさなかつたと思つたんです。」

「何をいつてゐるんだい。あの時は、子供等が夕飯を濟ましてまだ一時とも經たない時分だつたぢやないか。あの時服ましたと服まさないとを忘れてしまふ筈がないぢやないか。とにかく早く行つて來い。」彼は、お悦を追つ拂ふやうにいつた。

そして彼女が醫者に出て行つたあとで彼は又寢床にごろりと仰向けに横はつて、蒲團を襟まで被りながら、凝乎と瞑目してお悦のこと、子供の將來の運命のことなどを考へて見た。そして考へれば考へるほど、心が絲のごとくに亂れて來た。

……………藥をまだ澤山服まし殘して置いたので、小言をいはれると思つて、その當子供のでもない、父親の藥をさうだと思ひ込んで、それを帶の間に隱して置くやうな、淺敢果な女智慧のまはるところを見ると、先刻あれほど念を押して訊いた時に、嚥まさないといつたのは、その實嚥ましたのを、此の上にまだ叱られると思つて、嚥ましたといはなかつたのかも知れぬ。さうだとすると、餘程暗愚な女だ。その爲に子供に異變を來すことがあるとすれば、空しく手當ての時間を遲らしただけでも取返へしのつかないことだ。そんなことを思はないで、唯自分の落度を飾らんがために、嚥まさないと白を切つたのであらうか。さうだとすれば、箸にも棒にもかゝらない。もし又、今彼女が自分でいつたとほりに、二時間前には度忘れしてゐたとしても、嚥ましたことを忘れて思ひ出さないといふのが、並はづれて常識を缺いでゐる。それが本當ならば、やつぱり三年前の嗜眠性腦膜炎の後遺が殘つてゐるためかも知れぬ。善意に解釋して、服ましたことを、

本當に忘れてゐたとしても困つたものだ。眼ました時間と、鎌田が歸宅して、それを發見した時間との間は何ばかりも經過してゐない。……こんなことでは、是れから後も又どんた間違ひを出來すか知れたものではない。鎌田は、こんなことが何か知ら、絶えず自分の家には續いて生じてゐるのだから、それで思ふやうに自分の本業の方も落着いて手が出せないのであらうとも思つてみた。

消燈した室の中で、そんなことを、あれこれと思ひめぐらしてゐたが、忽ち別室の方に眠つてゐる子供のことが氣になつて、いきなり跳ね起きてそつちへ行つてみた。子供はもう毎夜のとほり、前後も知らずに、すや〳〵小さい息の音を立てゝ無心に眠つてゐる。

その顏を、おつと覗き込んでみると、格別どこに平素と變つたこともなさゝうである。寢息の通ひも尋常であるし、そつと小さい掌頸を捉つて、脉を握つてみたが、脉膊も落着いてゐて、強い。顏の血色も惡くない。これが、一昨年の二月の廿五日に、母親が俄に産氣づいて、家の中の手洗鉢に氷が張つて居るほどの嚴寒の朝まだき、便處へ行つたかへりに緣板の上に、ことりと産み落した子供で、とても生きないであらうと思つたのが存外肥立ちが好くつて、どうやら、かうやら今日が日まで育つて來たのであつた。尤も生後八九月の間は順調に育つたが、その後の秋の半ばから隔々、母乳が不足して來たのを、追潤してゐたりして、發育不良になり、大きくなるよりも反對に凋んで來て、這ひ出すのが普通よりも一歳ばかり遲れたが、去年の初から熱海へ轉地してゐたので、又すつかり順調に回復した。それに、この方は、大きい方よりも、子供ながらに、性質がさつぱりしてゐて、泣いてもすぐ機嫌を直した。姉のやうに、いつまでも何時までも泣き止めないで、手古摺らすやうなことはなかつた。女中達にもこの方が可愛がられた。目鼻の容もこの方が少しは整つてゐた。毛蟲のやうな睫毛が、黑瞳がちの二重瞼のうへに長く翳してゐた。頰ぺたの形や、吃驚したやうな眼を見張つた恰好から、睫毛が、上に向つて跳ね返つてゐるあたりが、そつくりなので、誰れがいひ出したともなく、家の中で皆ながキユピイさんにしてしまつた。

鎌田は枕頭に坐つて、お悦が醫者から歸つて來るのを待つてゐた。

そこへ歸つて來た。

「細田さんは何といつた？」鎌田は飛びつくやうに訊ねた。

「何か吐いたかツつて、訊きましたから、いえ、何にも吐きませんといつたら、さうですかといつて、此の藥をすぐ服ませといつてくれました。これを服ますと、反對藥で前のを消すからといつてゐました。」

お悦は、赤い紙に包んだ一服を見せた。

「ちや、すぐ服んなさい。……それで腹に故障はなさゝうにいつてゐ

「別にそんなことは何にもいひませんでしたけれど、大抵大丈夫だらうといつてゐました。」

「よく、これから先きも氣を着けないと可けない。その爲に異状がないことばかりはないから。」

鐵田はさういつて置いて、又自分の寢室に戻つて來て寢た。

子供はそれつきり別條なかつた。

鐵田は、折角元日から好い機嫌になつてゐたお正月の氣分が、お悅の鈍い頭や、見るから粗野な擧止を眼の前にしてゐると、耐力もなく崩れて來た。そして、堪へられない不快が湧いて起つた。

「お前は今年で一體幾つになつたのだと思つてゐるんだ。四十になつたんだぞ。四十といへば普通の女ならば奧さん盛りぢやないか。……尤もお前は奧さんなどゝいはれる柄ではないが。」鐵田は、一杯晩酌の酒盃を手にしながら、ぶつ〳〵いつてゐた。

「だから置いてもらはなくつてもいゝんだ。」

お悅は臺處の方から食べる物を運んで來て、又そつちへ引返しながら、棄て鉢ちの口返答をした。

鐵田はその爲に不快な氣分が一層燃え付けられた。

「何だ……置く置かぬといつてゐるんぢやないぢやないか。お前ももう四十になつたら、もつと一人前にならなけりや駄目だといつてゐるんぢやないか。」

「どうしたつて、これより一人前にやなれないんです。」

「なれないことはない。ならうと心掛けないからだ。私は今更らお前に學問をしろの、容姿を作れのとはいはない。たつたこのくらゐの家で二人の子供の世話をしたり、家の内のことにもつとよく氣を配るくらゐのことは出來ないことはない筈だ。」

「これより出來ないんです。」

「ほう、呆れたものだ。これより出來なければ、一人前はおろか、半人前だ。」

「だから氣に入らなければ出せといつてゐるぢやないか。」

鐵田は、ぢつと眼を据ゑてお悅の方を見た。…………そして默つて胸の中で考へてみた。いろんなことを數へ立てれば際限もないが、いつだつたかも、鐵田がこれから急いで汽車の時間に間に合ふやうに、東京に行かなければならぬといふので、ワイシャツを取換へようとして、カフスボタンなどを取り附けさせようとすると、彼女は長いことそれをいぢくつてゐて、つひに出來なかつた。

「馬鹿め、かうするんだ。」といつて、鐵田はお悅の手からワイシャツ

を引つたくつて、自分で緩々と附け換へた。

「カフスボタンが附けられないで、どうするんだ。」

「だつて知らないものは爲方がない。」お悦は不貞々々していつた。

「何をいふ？　私が洋服を着始めたのは、何時からだと思つてゐる。お前が知つてからの事だ。私も初はネクタイを結ぶことも知らなかつた。それを五六年の間に覺えた。その私が洋服を着てゐるのに、お前がカフスボタン一つどうすることも出來ないといふのは、お前の心掛けが良くないからだ。知らなければ知らうとすればいゝぢやないか。」

そんなことは何につけ始終有りがちであつた。

少時して鐵田は又口を切つた。

「うむ、歸つてくれッ。」

「歸るとも。」

鐵田は續けて尙ほ何かいはうとしたが、兩親が荒い口をきゝ合つてゐるのを、子供が訝しさうに顔を曇らして、箸を動かしながら、ぢつと仰ぎ見てゐるのを見ると、彼はそのまゝ口を緘ぢて了つた。そして、二三杯酒盃を重ねたばかりで、後はすぐ飯を不味さうに食べて了つた。

子供等は女中に御飯を食べさしてもらふと、口と手とを拭いてもらつて、八疊の座敷に寢床をとつてもらひ、炬燵に暖めてあつた寢卷きに着換へさせられて、そのまゝ寢床に這はつたが、小さい方は、やがて滿三歳になるのであつても、後のないところから、まだ母親の乳をしやぶらなければ眠らなかつた。それを女中に何とかいつて賺かされてゐたが、お悦が膨れつ面をして、やつと一人でぼそ〳〵夕飯を濟ましてしまふと、起つて女中に入れ代つた。

鐵田は、子供が二人とも眠つた時分を見て、こちらから又お悦に聲をかけた。

「歸つてくれ！」

「あゝ歸るとも。」といひなり、お悦は添乳の枕から、むくりと跳ね起きて來た。そして後は物をもいはずに、そこだけ電燈を附けてない三疊の暗い納戸にいつて、押入れの中に頭を突込みながら、長い間こそこそ何か搔ッ探いてゐた。と思ふと又八疊の簞笥にいつて、がたこと抽斗を引き出してゐた。やがて大きな不恰好な風呂敷包を二た包みこしらへて、それから鼻をすゝりながら、一寸着の着物に着更へた。

その物音に一旦寢入つた五つになる方の子供が、ぱちりと眼を開いて不思議さうに見てゐた。そこへ女中が湯たんぽを持つて入つて來て、子供の夜具の裾の方に入れた。

「ばあちやん、お母ちやんは、東京に歸るの？」と訊いた。

「歸らないんですよ。おねんねなさい。」といつて、出ていつた。

併し子供は、あつちい向き、こつちい向き寢返りばかりしてゐた。

お悦は、濡れた手拭などを入れるイム引きの袋を手にして風呂敷包みの傍に突立つて、しくしくいつてゐた。

「歸るといふから、あゝ歸んなさいといつたのだが、その代りに道子を見たいといつても見に來てはもらふまい。」鎌田は長い沈默の後でさういつた。

「道子なんぞもう見なくつてもいゝ。」

お悦も負けずにいつた。

「さうか。……私も、いよ〳〵と覺悟をすれば、二人の小さい子供を男の一人手に育てるのは何でもない。………しかしお前はこれから今日でまだお正月の二日に東京驛に歸つて――いや東京に歸るか何處に行くか知らないが――兄弟の處に行くつもりか、どうするのか？もう九時の汽車より他にない。横濱までの汽車だ。尤も省電はまだ動いてゐるだらうが。」

「出て歸る者にそんなことを訊くのは餘計なこつた。」

「あゝ、さうか。ぢや訊かない。」

お悦は、さういひながらも、そこの柱に凭れて鼻をすゝつてゐた。

「行くならもう時間が無くなるよ。そして、そんな大きな風呂敷を俥も自動車も呼ばないで、どうして持つて行く。」

「…………」

「兄弟のところへ行つて相談するより他はまあ、ないだらう。」

「兄弟のところへなんか行きません。」

「ぢや何處へ行く。」

「奉公をします。」

「なるほど奉公するのもよからう。しかし、今更他人の處の厄介になつて、この寒中お正月早々からそれは好いお道樂だ。奉公をして、主人の氣兼ねをしてゐるよりも、こゝに居つて、そのつもりで辛抱する方が、まだしも氣樂だと思ふがな。それでもお前が行くといふなら是非にと留めはせぬ。」

突立つてゐたお悦はそこに坐つた。

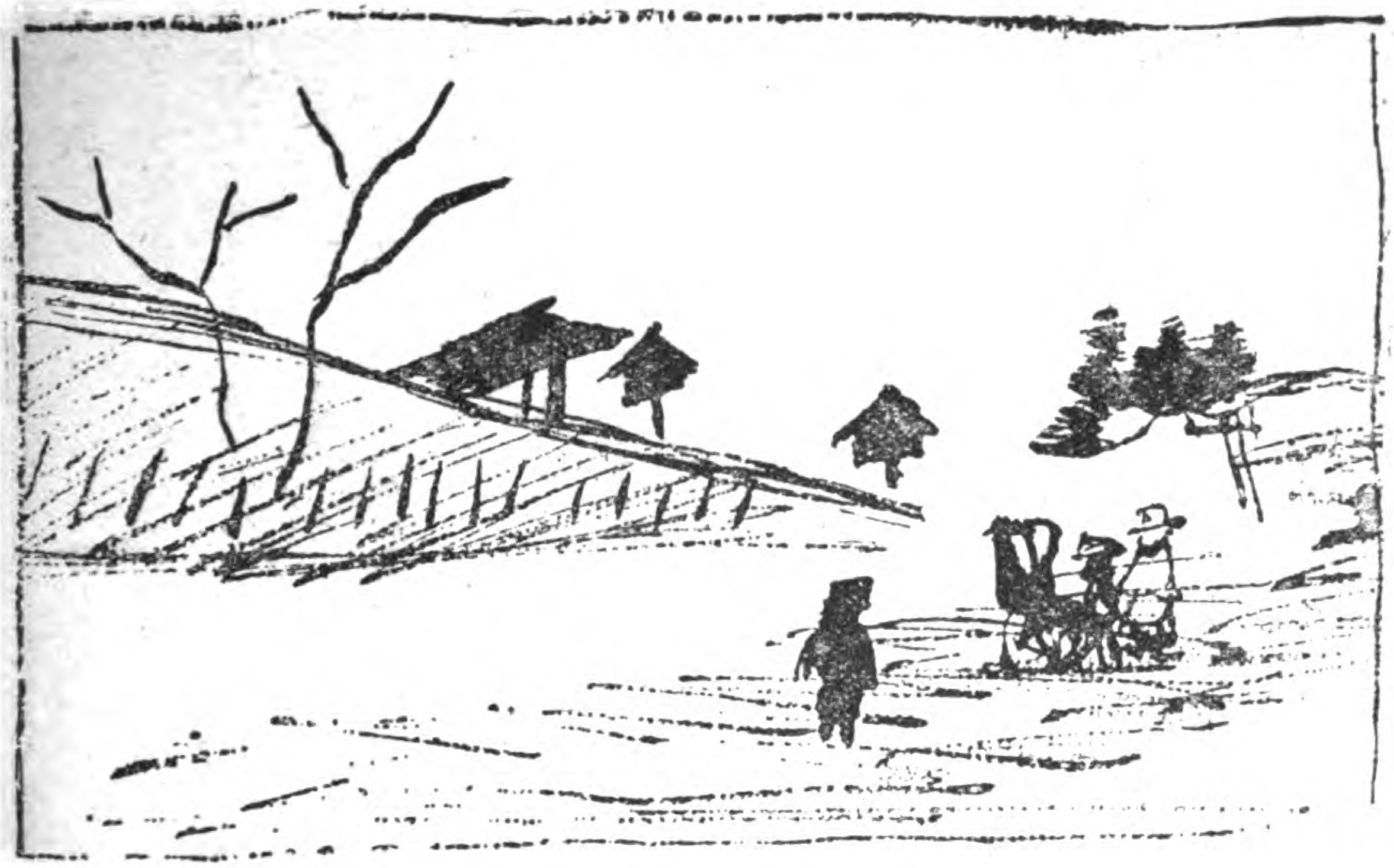
そこへまた女中が、も一つの湯たんぽをこしらへて、臺所の方から持つて來た。

「奥さん、子供のある者が歸るなんて出來るものですか。」口數の少い彼女は、たつた一と口さういつて、夜具の裾に湯たんぽを入れた。

「何かといへば、すぐ出て行けの、歸れのといふから………」後は涙に聲も濁れてしまつた。

鎌田はそれから間もなく女中に寢床を取らして入つてしまつた。折角荷づくりした二つの大きな風呂敷包みは、二三日そのまゝであつたやうだがいつの間にか解かれてしまつた。

（十二月八日）



時雨をたづねて

高濱虚子

時雨をたづねて京都に來た私と他の二人の同行者は一夜を東山の宿に明かした。

「京都の時雨に逢ひたい。」と俄に思ひ立つた私は萬事を放擲して京都に來ることになつた。私にそゝのかされて他の二人も何時の間にか同じ心もちになつて居た。そこで三人は連立つて昨日の朝東京を發つて晩に京都に着いたのである。

其朝は靜かな朝であつた。障子を明けると東山が朝靄に包まれて軟かい線を空際に見せて居た。庭の紅葉の梢にとまつてゐた雀は暫くの間一ところにぢつとしてゐた。やがておとなしく松の梢に移つた。三人はその朝の景色を眺めた。

隣りの家の物干では娘さんか女中かゞ竿を持つて何かを干してゐるやうすであつた。がその動作は明らかには見えなかつた。一面の竹垣が屋根の上に結ひ回はしてあるのではつきりと見ることは出來なかつた。

「物干しでもあらはでないところが流石京都だな。」と一人は云つた。が、やがて竿に着物の干されたのが高く竹の欄の上に現はれた。大空の日の光は喜んでその干物を受け入れる如く見えた。

「我等は時雨に逢ひに來たのだのに。」とめい〳〵の心の中に同じやうな考へが浮んだ。

昨夜私達の宿を訪ふて同行を約して歸つた此土地の人が二人あつた。其うちの一人は今日は差支があるから明日から一行に加はるといふことであつた。

私達三人に此土地の人一人を加へた同行四人は、時雨に逢ふべく先づ嵯峨へと志した。

嵯峨の停留場に降りた頃は全くの小春日和であつた。うち晴れた嵐山は我等を壓するやうに前の家の軒の上に蔽ひ被さりかゝつてゐた。

「嵐山がすぐ屋根の上にのつかつてゐるやうだ。」と一人が言つた。

「くづれかゝつて來てゐるやうに見えるね。」と他の一人も言つた。

けれども渡月橋畔に出て大堰川を距てゝ望むと稍遠退いておだやかな普通の嵐山に戻つてゐた。もう紅葉は大方散つて枯木になつてゐた。只遲い紅葉が點々と松の間に紅く殘つてゐるのが見えた。角の櫻餅屋に入つて赤い毛氈のしいてある腰掛に休むだ。

「永いことどすなあ。もう何年になりますやろか。」

其店の女中は同行者の一人を知つてゐた。

「さあ、もう六七年になるねっ」

「ほんまに。さうどすなあ。うちの若旦那の七年の年忌が去年すんだのどつせ。」

「もうさうなるかなア。早いものだなア。」と其若旦那といふのも同行者は知つて居るらしかつた。

この店へ一行の荷物を預けておいて暫くその邊を歩いて來ることにした。

嵐山の影が大堰川の上に落ちて居て、そこに繋いである遊船も寒さうに見えた。私たちは其寒さうな日陰で時雨に逢ひ度いやうな心持がした。そこでその遊船に乗り込んでしばらく川に浮んで見ることになつた。棹が水底の岩に突き當つて船がぐつと進む度に水のさや〳〵と鳴る音が心もちよく耳にひゞいた。吾らのほかに一艘の船も浮んでゐない冬枯の大堰川は物靜かであつた。山の日陰になつてゐる川の面は寒かつたが、兩岸に峙つてゐる山の間の青い空には日が輝いてゐて、なか〳〵時雨の模樣もなかつた。私たちは間もなく船を見すてゝ散紅葉してゐる岸の岩の上に突立つてゐた。

それから『ほとゝぎす』といふ料理家の前の石段を上つて龜山公園の松の間を歩いた。ほどなく龜山を過ぎて常寂光寺の石段を上つた。その常寂光寺といふのは定家卿が百人一首を撰んだところであつた。

定家卿の時雨の亭といふ古びた亭が後ろの山の上にあつた。私達は其所に上つて其の竹緣に腰をかけて休んだ。古びた竹緣は我らの重みでみし〳〵と鳴つた。

「この邊も時雨の名所なのだが、今日は駄目かな。それでも斯んな天氣でゐて俄にハラ〳〵と來るかも知れぬ。それが京都の時雨の特色だからな。」と私は言つた。

一行の人々は散紅葉を足の先で弄んだり、其亭の壁にしてある樂書を讀んだりしてゐた。

庫裡の中から四五人の婆さん連が手を引き合つて出て來た。その中には大黑天其まゝのやうな顏をした婆さんもあつた。早口の京言葉でべちやくちやしやべりながら私たちの前の坂を下りて行つた。私たちもそのあとに從つて坂の中途の竹藪のところから道を曲つた。

一行の一人が道ばたの虎落にからまつてをつた「さねかづら」の一ト蔓を引きちぎつた。その紅い實が美しく一行の眼に映つた。赤蜻蛉のつるんだのが幾匹となく私たちの行手を飛んで、往來の落葉の上に翅を休めてゐるのもあつた。私たちが歩いて行くに從つて飛び上つては又た行手の落葉の上に止つた。そんなことを際限もなく繰り返してゐた。

敷のはづれに醜い茶の花の蕾があつた。後ろの山の日影がその茶の蕾の半分ほどを蔽ふてゐた。ところ〳〵に眞つ白い新らしい茶の花が葉の間から覗いてゐた。大方は古びて黃色くなつた花が葉陰に隱れ貌であつた。

小倉山が眼の前にあつた。その中腹にある二尊院の白い壁が眼に入つた。私たちはまもなく二尊院の前の廣い道を上つた。美しい大きな紅葉が二三分方は散り殘つてゐた。掃き淨めてある二尊院の本堂の前に暫く佇んでゐた。

吾れらは又山傳ひに祇王寺へと下つた。カラ〳〵に枯れて轉がつてゐる櫟の落葉の上を飽かずに下つて行つた。

まもなく祇王寺がなだらかの坂の下に現はれた。

「今日は尼が留守ではないな。」と同行者の一人が云つた。白い襦袢と袷が木の間の物干竿に干してあるのが見えた。

四人は祇王祇女の墓の前に突立つた。一人は手に携へて居たさねかづらを墓の一つの花活けに插した。今迄は枯れかゝつてゐる花ばかりであつた中に、新たにさねかづらの紅い實が艶々しく垂れ下がつた。

祇王寺の軒下には大きな漬菜の桶があつた。その桶を眺めながら案內を乞ふた。

「木像を拜觀をしたいのですがね」と一人は云つた。背の低い尼が膝を

ついて、
「どうぞお參り下さいませ。」と云ふて引つ込んだ。そこの衝立には袈裟が無雜作にかけてあつた。尼は佛間にある木像の前に蠟燭を點もした。その蠟燭は大きな蠟燭の燃え殘りもあれば、また小さい直ぐ燃えたつてしまひさうな蠟燭もあつた。しかし祇王、祇女、祇王の母、淸盛、佛などの木像がこと〳〵照し出さるゝ位澤山の蠟燭が灯し連ねられた。やさしい祇王の顏の眼がその灯の光りに輝いて見えた。前に供へてある佛飯や林檎なども照し出された。

「あゝ淸盛の像か。」と一人はその淸盛の木像に向つて突立つた。淸盛の木像の眼は前の祇王の眼よりは數倍大きかつた。灯の光りにぎらぎらと光るやうすも祇王の眼の比ではなかつた。

「淸盛とか何氏とかいふのは僕は好きなんだ。」とその男は仍暫らく其木像の前を立ち去らなかつた。

尼は向ふの間に行つた。暫くして蕪汁の匂がした。やがて釜の御飯を御櫃に取つてゐるらしい物音もした。

「あゝあれは笹鳴きだ。」と緣側に突立つてゐた一人が云つた。皆耳をそばだてるとチチチ……と笹鳴の音がすぐ間近くきこえた。

「あの生垣傳ひにこちらへ這つてくるかも知れぬ。」と一人が云つた。けれども笹鳴は一と所に留まつてゐるらしかつた。

梢の散紅葉は、一枚二枚の葉を極めて物靜かにゆつくりと土地の上に落してゐた。土地はまたゆつたりと物靜かにその落葉をうけ取つてゐた。唯鳥の聲のほかに空山に響く何の物音もなかつた。

最前の蕪汁の匂ひで稍空腹を覺えて時計を見ると一時が近かつた。

四人はそこを出て歸路についた。竹藪の中に在る去來の墓のそばを通つたがそこには立ち寄らなかつた。落柿舍の門内に入つて柿の木を見上げて見たが其梢には一枚の柿の葉つぱも柿の實も殘つてゐなかつた。

大きな竹藪の中路を通つて野々宮の前に出た。ふと見ると一人の神主と二三人の男とが殿前に陣取つて何事をか仕てゐた。

「お祭りらしいな。」と一人はつぶやいた。四人は槻の木にもたれて其のすることを見て居つた。神主は紙を折つて三寶の上にのせてゐた。羽織を着た着流しの世話方らしい男は井戸の水を汲み上げてバケツの中へ入れてゐた。その井戸は平常蓋がしてある井戸であるのを今日半分蓋だけとつて水を汲み上げてゐるものらしかつた。車井戸の鐵の鎖のなる音が靜かな境内に響きわたつて物々しくきこえた。錫のお神酒德利が其のバケツの中に入れられて洗はれるやうすであつた。大きなお重ねの餅が大小とりまぜて五重ね並べられてあつた。

「今日は何かお祭ですか。」と一人が神主にきいた。

「今日は神嘗祭とお火焚とがあるのです。」とその神主は落着いた調子で答へた。

「神嘗祭といふと？」と一人が不審してきいた。

「伊勢の大神宮に始めて今年のお初穂を供へるのは十月十七日、即ち神嘗祭の大祭日の日ですが、この野々宮には今日お初穂を供へるのです。それに出雲に旅をしておいでになつた神さまがけふお歸りやすのを火を焚いてお迎へする、それをお火焚きいふのです。」

「お火焚きには、あの柴を燃やすのですな。」と一人は鳥居のそばに打捨つたやうに置いてある一つの柴をさして云つた。その柴は最前から吾らの眼についてゐる柴であつた。何にするのかと思つてゐたがはじめてその疑問が解けたのであつた。

神主は尚續けて云つた。

「お火焚といふことは稻荷さんでするとことでして、ほかの神さまにはあまりせなんだのが、のちにはほかの神さまも皆するやうになつたのです。」

「そのお火焚をするのは夜になつてからですか。」

「いゝえ、晝間です。もう間もなくします。」

二三人の世話人が働いてゐるばかりであつたのが、かしこの樹蔭から二三人、こゝの樹の中から二三人といふふうにだん〳〵と殖えて來た。今は七八人の人が入り亂れて働いてゐた。

「御苦勞さんでございます。」と互に腰を屈めて丁寧に挨拶をしてゐた。

かどの茶店に戻つて晝食をしたゝめた。それから自働車に乘つて高雄へと志した。

時雨のもやうは更になかつた。見る限り小春日のおだやかの空であつた。眞直に聳え立つてゐる銀杏の大樹は、また黄金色の葉を七八分方つけて大空にすき透るやうに見えてゐた。やがて自働車は廣澤の池のそばを通つた。或時は路に干してある籾莚の上をも通つた。双が岡の麓を通つて仁和寺の門前に出て、それから折れ曲つて高雄へと驅けるのであつた。

高雄の紅葉屋の前で自働車を下りて、荷持の女を一人傭ふて、高雄橋のところまで下り、それから淸瀧川に沿ふて栂の尾へと志した。

こゝの紅葉も七八分方から散つて僅かに薄紅葉か枯木の間に殘つてゐた。掛茶屋はことごとくしまつてゐた。中にはビールや正宗の旗がそのまゝに殘つてゐて番人はもう居ないのもあつた。二三人の高雄女は腰に赤い前掛を覗せて悠つくりと坂を上つてゐた。それらの景色から

ち晴れた濃紅葉の中にハツキリと描き出されてゐた。荷拵の女も二つの鞄を輕々と頭の上に載せて私たちの先に立つて歩いた。
「姉さん。お前の穿いてゐるたつゝけはずつてゐるぢやないか。もつと上へひき上げてはどうか。」と一人はからかふやうに云つた。
「ハハハ……。上げると窮屈なわいな。このまゝでえゝのぢやわいな。」と笑ひながら女は答へた。
そこへ一人の炭燒が炭を背負つて橋を渡つてやつて來た。女はその橋の方角を見やりながら、
「ようお客さんがな、この橋を間違へて向うへ御座るわいな。立札が立てゝあるのになあ。」
同行のうちの京都の一人は、
「さうだく〳〵。この橋を渡るともう丹波だ。」と笑ひながら云つた。
清瀧の清流は石に激してその橋の下を流れてゐた。大八車の轍の跡が吾らの踏んで行く路の上に同く殘つてゐた。
槇の尾の橋も過ぎた。
女はやがて、
「こちらへお出でやす。」と人家の間の細路の坂を登つて行つた。其は近路であつた。間もなく栂尾橋のほとりに出た。
栂尾橋を渡つて少し坂を上ると其所はもう高山寺の境内であつた。

『後鳥羽上皇寢殿、石水院』とある立札が私たちの眼に映つた。其處の山門を入ると正面の玄關が鎖されてゐた。が一人が庫裡の方で案内を乞ふと年とつた寺男の返事がきこえた。
やがて其の寺男は玄關の戸襖を開けて私たちを招じ入るゝのであつた。掃除の行き屆いてゐる座敷には紅い毛氈が敷きつめてあつてその上には大きな銅の火鉢が置いてあつた。寺男は炭火の大きなのを持つて來てその火鉢に入れた。縁に立つと前の山々が明らかに見えた。紅葉は大方枯木になつてゐて杉の木の間に點綴してゐた。下には清瀧川が流れてゐてその流れに沿ふて最前の道のつゞきが周山奥へと續いてゐた。
一人の尼が晩飯の膳部を運んで來た。その尼は背の低い顏の色艶の好い四十四五の尼であつた。
「一寸使ひにいてをりましてえらう失禮致しました。道で東京のお客さんがお見えといふ事で急いで歸りました。まあお珍らしい。誰方や知らん思ふて歸つて來ましたんです。ようこゝまでおいでやしておくれやした。」と云つた。
「あなたがこのお寺の住職さんですか。」
「住職はほかにあるのですが、始終京都の方のお寺に居られるのです。私が留守番を致してをります。……何んにも御馳走はありませ

ん。」と云ひながらめいめいの前に膳を置いて、
「お鉢はこゝに置いときます。」と云つてさつさと引き下つて行つた。
食事を終へてから縁側に立つて見ると、淋しい上弦の月が前山の頂きに懸つてをつて、うす靄の流れてゐるのが見えてをつた。なかなか時雨は降りさうになかつた。

昨晩寢る時分には肩のあたりから寒さが襲ふて來るやうに覺えて、堅い木綿蒲團を頭から引被つて寢たのであつたが、今朝眼が覺めて見ると案外に暖かであつた。齒磨楊子を啣へて表に出ると、筧の水が溜つてをる岩の凹みに一つの杓が置いてあつた。散紅葉がその水底に澤山沈んでをつた。尼さんがバケツに湯を汲むでそこへ持つて來て與れた。さうして金盥も持つて來て與れた。そこで顏を洗つて齒磨楊子と手拭を懷ろにねぢ込んで門前の坂を登つて行つて見た。坂の兩側には石垣がつゞいてをつて、其上は杉や檜の木立になつてをるところが多かつた。以前は十六坊とか十八坊とかこの山内にあつたとのことであるから、何れも坊の跡らしく思はれた。右側の石垣の上には明惠上人の修業をなすつたといふ御堂があつた。「尼蓮禪河堂」と書いた札が柱に掛けてあつた。此下の清瀧川を天竺の尼蓮禪河に見立てゝ此堂をさう名づけられたのであらうと思はれた。その札ももう所[illegible]定かには讀めぬ位になつてゐた。又其の上に明惠上人の御廟が拜まれた。立ちとまると只鳥の聲がしてゐるのみで何の物音もなかつた。泉石の響きも松籟の音もきこえなかつた。

歸つて見ると室は掃除がしてあつて朝飯の膳が運ばれてをつた。それから昨晩の尼が來て、直ぐ縁側傳ひに行けるやうになつてをる「石水院」の扉を開けて置いて與れた。朝飯が濟んでからその石水院に行つて見た。御鳥羽上皇の御學問所であつて神代杉で出來てをる特別保護建造物であつた。風雨に曬された周圍の木柱は殆んどぼろぼろに朽ち果てゝゐるやうに見えたが、中に入つて見ると欄などは新しく、木柱も割合に破損して居なかつた。明惠上人の附從の誡めを書かれた何十箇條の『何々すべからず』と列記してある額が殘つてゐた。

歸つて暫く尼さんと話した。此尼さんは男勝りの尼さんのやうに見受けた。

「朝暗いうちに金堂や尼蓮禪河院などに參拜して香を焚いて來るのです。」と尼さんは話した。

「今朝私たちが金堂に行つた時分に香の匂ひがしてゐたのはそのためですな。」と一人は云つた。

「あなたのお出でやした時分まだ香の匂がしてをりましたか。私の焚

いた香がまだ消えずにゐましたんですやろ。」と尼さんは云つた。

一夜の厄介になつた禮を陳べて尼さんに別れを告げた。

表に出ると昨日の寺男は散紅葉を掃き集めてそれを燃やしてゐた。めら〳〵とその紅葉の燃える音が靜かな境内に響いてゐた。私たちが一寸挨拶をするとその老人は叮嚀に腰を折つて箒を持つた手を下にさげて辭儀をしてゐた。

一丁ばかり下におりた時分に吾らを呼びとめる尼の聲がきこえた。何事であらうかと振返つて見ると尼は坂を走り下りて此方へ來るらしかつた。一人が尼の方へ走り寄つて見るとそれは昨日鞄を二個縛つて驢の上へ乘せた女の忘れもの〻細びきであつた。一人は細引をうけとつて私たちに追ひついた。

高山寺をふり返つて見ると白い土塀が紅葉の間に長く連なつてゐた。

牛や驢の重さうな材木を引いて來るそばを通つて昨日の紅葉屋のほとりに出た。そこへ丁度客を乘せて一臺の自働車が着いたので私たちはその自働車に乘つて北野まで行くことになつた。昨日の荷を持つて呉れた女はその邊に立ち働いて居た。彼の細びきは無事に女の手に返された。

天氣は少し曇つてをつた。しかしなかなか時雨さうな模樣はなかつた。尼の話に

「二三日前は夜分になるといつでも時雨れて居りました。」と言つた。が、しかし昨夜は時雨れた模樣を見ることが出來なかつた。夜中にハラハラと音がしたのは時雨の音ではなかつた。風が出て木の葉を降らした音であつた。今朝起きた時分に庭の苔や落葉は一面に濡れてゐた。がそれも時雨が降つたためではあるまい、恐らく夜露のおりたが爲めであらう、と思はれた。私たちは更に『北山時雨』のするといふ北山方面に出掛けることにした。大原の三千院のほとりにある寶泉院といふ無住寺をこゝろざして行くことにした。

北野まで自働車に乘つてそれから又他の自働車に乘り換へて京都市中を横ぎり出町柳の停留場に來た。此所で同行すべき筈の一人に電話をかけた。その電話口に出た一人の報告するところによると、意外にもその人の妻君のお母さんが危篤でその方に行つてゐて殘念ながら同行は出來さうもないとのことであつた。それで四人は八瀬行の電車に乘つた。

八瀬に着くと、そこには叡山に登るケーブルカアがあつて、其下の遊園地では小學の兒童が教師に連れられて嬉々として遊んでゐた。池に浮んでをる鷲鳥型のボートに一人の教員が乘つてオールを漕いでゐた。その前と後ろに三人四人の子供が乘つて舟が動くたびに喜びの聲を上げてゐた。これから大原の三千院に行く自働車が出るにはまだ三十分ばかり待たなければならんので、四人とも離れ〴〵になつて暫く其邊をうろついた。

やがて時間が來たので自働車に乘り込むだ。其時既に自働車に乘り込んでゐる一人の女の人があつた。その女は最前から待合所で休むでをつた三十ばかりの猫背の女であつた。病人らしい顔色をしてをつて手には一つの魚の苞と藥瓶とを持つてゐた。それが慎しやかに片隅に腰かけてゐるところに四人はドヤ〳〵と乘り込むだ。その魚の苞は自働車のドアのハンドルのところにぶら下げてあつた。

同行者の一人は沿道に見る景色を他の同行者に説明してをつた。それは丁度猫背の女の前側の腰掛に腰を掛けてゐた。

「八瀬の大橋〳〵！」とその男は云つて、自分は窓外を眺めながら他の同行者の手を探した。それは此人の窓外の景に對する注意を呼び起こさんが爲めであつた。が、その手は猫背の女の手に觸れてゐた。

「馬鹿〳〵。何をするのだ。ハハハハ……。」

その男は其れを見て噴き出して笑つた。他のものも皆笑つた。猫背の女は青ざめた顔に血の色を上らせて、淋し氣な微笑を口もとに湛へてゐた。

自働車は終點の茶店の前に止まつた。

「これは貴女のですか。」と云つて同行者の一人は魚の苞を指した。女は無言でうなづいた。同行者の一人はその魚の苞をとつてその女の手に渡してやつた、女は叮嚀にお辭儀をしてそれを受けとつた。吾ら四人が下りた後から女は寂しさうに下りた。

そこの茶店のお上さんは吾ら四人を迎へて聲高に云つた。

「貴君方あの寶泉院にお出でやすのどすか。村長さんがおいなはつて、いつお出でるか判らんさかい、お出でやしたら開けやらいふてお歸りやした。どうですやらう。村長さんを呼んで來ませうか。」

私たちは村長が來るまでこゝに休息してその間に晝飯を食べることにした。御飯を食べてゐるところへ村長さんが來た。他に一人の村人も一しよに來た。其等の人が寶泉院に案内して呉れることになつた。

私達は晝間だけ寶泉院に行つてゐて、夜分はこの茶店に歸つて寢ることに相談が纏まつた。火鉢や炭や茶や座蒲團などはこの茶店から運んで呉れることになつたのである。

村長さんたちは前の坂をそろ〳〵と上つて行つた。その後について、

私たち四人は坂を上つて行つた。

坂を上ると其所に呂川と呼ばるゝ川が流れて居つた。其川の石橋を渡ると、其處には散り殘つた紅葉の大樹が數十本あつた。そこが三千院のあるところであつた。

「あの左手にある新しい茶店が大原女の茶店ですよ。」と同行者の一人が云つた。私は大原女といふ女は十分に知らなかつた。只三千院の門前に茶店を營んでゐる若い女があることだけは聞いて居つた。私たちは歩を進めてその大原女の茶店の前に通りかゝつた。その茶店の前には小學校の生徒の一團が集つて騷いでゐた。その中にけばけばしい着物を着た白粉を白く塗つた三十前後の女がゐた。同行者の一人を見附けてその女は笑み傾けて、挨拶をしてゐた。他の三人はその前を素通りした。

三千院の石段を通り過ぎて暫く紅葉の下をさまよふた。やがて律川といふ川にかゝつてゐる石橋を渡つた。呂川律川といふ二つの川が三千院を挾んで流れてゐるのであつた。その律川の石橋を渡つて下りたところに勝林院といふ大きな御堂があつた。その御堂の前をだらだらと下つたところに寶泉院といふ無住寺はあるのであつた。

村長さんはその無住寺の玄關の障子を開けて默つて入つた。疊はこの頃取替へたとかで、新らしかつたが大へんな埃が積つてゐた。皆爪立てをして歩いた。村長さんと一しよに居つた一人の村の人は箒を持つて來て其疊の上を掃きはじめた。私たちは縁側に出て其庭を眺めた。

庭はたくさんの躑躅が或は圓く或は楕圓に或は長方形に或は扇形に美しく刈込まれてあつた。その躑躅の間にはさまざまの形をした石が面白く配置されてあつた。

「この儘では寒いな。」と一人が言つた。

「さうですなあ。襖を閉めんとお寒からう。」と村長さんと村の人とは相談し合つてゐた。それから取外してある襖を取り出して來て嵌め始めた。その襖は朱や紺の布で輪廓がとつてある立派なものであつた。がそれはなかなかたやすく嵌まらなかつた。かうでもない、あゝでもないと嵌めたり外づしたりしてゐた。

私は草履を突つ掛けて出て見た。最前から表にゐた同行者の一人は一人の婆さんと話しをしてゐた。その婆さんはやはり大原女の恰好をしてゐて門前の萩を刈束ねてゐた。

「あの婆さんは好い顔をしてゐます。さうしていろいろな事を教へて呉れます。」とその同行者の一人は笑ひ乍ら云つた。

「どんなことを教へて呉れました？」

「あのお寺の庭にある松は五葉の松かねと聞いたところが、さうですあれも五葉の松です、それからこちらの方のもやはり五葉の松です、

一寸運ふやうに見えるのはあの庭にある松の方は植木屋が手入をしたので、こちの木の方は手入れをしないのです。などゝ敎へて見れました。ハヽヽヽヽ。あのお爺さんは八十六とか云ふことです。好い顏をしてゐませう。」

「ほんたうに好い顏をしてゐますね。蕪村が好んで畫く顏ですね。」

暫く勝林院の前をうろついてゐると其處へ村長さんと一人の男はお寺から出て來て私にかう云つた。

「又後程お眼にかゝりますが、一寸歸つて來ます。それから火鉢や座蒲團を早う持つてくるやうに云ひつけます。」

私はその後を呼びかけるやうにして云つた。

「電燈の球も忘れんやうに持つて來て貰ひたいものです。」

「ハイハイ。それも申し付けて置きます。」と二人は律川の石橋を渡り三千院の方へ歸つて行つた。

御寺に歸つて見ると中の間の二方だけ襖が嵌つて居たが、他の二方は何にも嵌めてなくてガランとしたまゝであつた。それに火鉢がまだ來ないので火の氣がなかつた。仕方が無いのでまた表に出た。

勝林院の前をトボ／＼と歩いて、大原陵と呼ばれて居る順德院と後鳥羽院の御陵の前に行つた時分に、向ふから座蒲團を頭に載せた大原女の此方に來るのを認めた。近寄つて見るとそれは最前の茶店のお上さんであつた。頭に座蒲團や茶器などを載せ一手には藥罐を下げてゐた。早くも向ふから聲をかけて

「えらう、遅なはりました。皆持つてまゐりましたさかい、もうお寺にお歸りやすか。」と云つた。その外に一人の小女を連れてその小女の手にもさま／＼のものを下げてゐた。その中には二つの火鉢と炭斗に炭を入れたのなどもあつた。

「電燈の球は？」と私がきいた。

「それも持つて來ました。大きい球と思ひましたが、あんまり大きいのが無うて、これを持つて來ました。之ならたいがい明こおすやろ。」と答へながらさつさつと行き過ぎて行つた。

散り／＼ばら／＼になつてゐた四人は皆寺に集つた。さうして火を起すやら藥罐をかけるやらして俄かに一個の世帶を作りはじめた。

最前からこの無住寺の向ふの一室に力のない咳拂ひの音が聞こえた。これは私たちより以前にこの無住寺の一室を借りて病を養つてゐる人があるとの事であつた。そのことは村長さんも云つてゐた。又茶店の上さんも云つてゐた。それはどんな人かわからなかつたが只咳拂ひの聲のみがきこえた。弱さうな咳拂ひであつた。

「どんな病人であらう。」と一人が疑問を起した。

「何でも手が藍色に染まつてゐるから、それは紺屋の若主人とか職人

とか云ふやうなものであらうと、お上さんが話してゐた。」と一人は答へた。

「どうしてこんな淋しいところに一人來てゐるのであらう。」といふ疑問は誰の心にも同時に起つた。力の無い噯がまたその一室からきこえた。

「吾ら闖入者がどや／＼と來て定めて驚いてゐることであらう。」と一人は云つた。誰もそれに答へるものはなかつた。

漸く湯が沸いたので茶を入れた。それから最前茶店の隣の饅頭屋で買つて來た饅頭を喰つた。その饅頭は砂糖氣の少い水氣の多い饅頭であつた。それでも皆二つか三つづゝ立て續けに平らげた。

みな又庭に下り立つて見た。最前は躑躅と石ばかりであると思つてゐた庭に一個の老梅があるのを見出した。その枝は嵯峨として針の如く突つ立つてゐた。幹には白く苔がついてゐた。その白い苔の間に輪のやうになつて青い苔がついてゐた。ぶん／＼と音を立てゝその老梅の幹の廻りを飛びめぐつてゐるのは一匹の大きな熊蜂であつた。その熊蜂は庭の隅に隱れたやうに咲いてをる八ッ手の花の方に飛んで行つた。さうして暫らくその八ッ手の花の蘂の間に頭を突込んでゐるやうに見えた。最前から少し空の模樣が變つて來たやうに思へた。

やがて私と外の一人が室内に這入つた。室内は漸く暗くなつてゐた。其の天井からぶら下つてゐる電燈の笠の下に最前點けて忘れた電球を眺めた。俄かにパッと明るくなつたのが氣持がよかつた。障子を閉めきつて二人はその電燈の下に坐つた。火鉢の火に炭をつぎ足してその上に寄り添ふやうにした。時計を見るとまだ五時過ぎであつた。時間の割合に早く暗くなつたやうに覺えた。

其時庭傳ひに歸つて來た一人の同行者はそとから障子を開けて、

「いましがたちよつと時雨れましたよ。」と云つた。

「時雨れました？」

私は立ち上つてそのあいてゐる障子の處から外面を見た。すこしも時雨れてゐる模樣はなかつた。

「音無の瀧に行つた戻り路に坂を下つてゐるとハラ／＼と顏に落ちたものがあつた。あゝ時雨れたなと思ふうちにもう止んでしまひました。」とその一人は云つた。私はまた更めて空を見上げた。空は變つてはゐるが時雨らしいものは更に見えなかつた。

やがて表に殘て居つた二人も室内に歸つて、火鉢を抱へて電燈の明りのもとに集つた。さうして今日來べき筈であつた他の一人の噂などをして居た。一匹の大きな黑い蛾が高い天井の下を飛んでゐた。四人の眼は一やうにその蛾に集まつた。暫らく天井を飛び廻つてゐた蛾は遂に室内の一隅に止つた。蛾はいつまでもそこを動かぬやうに見え

た。四人はその蝦から眼を離して雑談に移つた。

日はとつぷりと暮れかゝつて來た。四人の話もはたと途絶えた。この無住寺の一室は寂寞として何の物音もない。隣室の咳も今は聞えない。

一人が便所に立つた。その男の聲が便所に行く廊下のあたりから聞えた。

「時雨れてゐますよ。時雨れてゐますよ。」

三人は聲に應じて立ち上つて障子を開けた。電燈の灯影が庭にさして、そこに白い雨の脚が二筋三筋眼に入つた。

「なるほど、時雨れてゐる。」と私は云つた。

「時雨れてゐる／＼。」と他の一人も云つた。早や下駄を突掛けて玄關から表に出て見るものもあつた。

「あゝ時雨れてゐる／＼。」と云ふ聲が表から聞えた。

四人ともいつか靴や下駄を突つかけて表に出てゐた。ハラ／＼と降る時雨は心もちよく顔に當つた。ぞろ／＼と連立ちながら四人は暗の中を歩いた。大空は眞つ暗で、杉の木も松も又建物も只黑い暗の中に在つた。

ふと氣がついて見ると私は帽を被らずにゐた。インバネスを羽織ることは忘れなかつたが帽を被ることは忘れてゐた。帽を被らぬ頭を快よい時雨の中に濡るゝがまゝにしてゐた。

振り返つて見ると無住寺の我等が室にはたゞ灯火ばかりがともつてゐた。其室の中には明るく灯がともつてゐるばかりで一人も人は居ないのであつた。彼の咳をする人のゐる座敷は此所からは見えなかつた。

向ふより一つの提灯の火が見えた。その提灯の火が木の間を縫ひつつだん／＼こちらに近寄つて來た。間近くなつたとき

「お迎へに參りました。」といふ男の聲がした。彼の茶店の主人が四本の雨傘を抱へて私たちを迎へに來て呉れたのであつた。

「女たちは恐いといふてよう來まへんので。」とその男は云つた。

「さうだらうな。とても女はよう來まい。」と同行者の一人は云つた。

「さうでも無いのですけれども、女達は恐がるのです。」と男は投げ出すやうにいつた。

「おぢさんこの火鉢の火はどうする。消して置くか。」と一人は云つた。

「さうやなあ。」と云つたばかりで男はどうするとも云はなかつた。一人

私はその灯籠を携へて玄關先に持つて出た。その二個の灯籠の中には蠟燭が皓々とおこつてゐた。男は不承々々にその赤い火を玄關の敷石の上に出した。

「こうやつとけば、自然に消えます。それに時雨も降つてゐるさかいに。」といつた。蠟火は紅蠟の如く玄關先の敷石の上で燃えたつてゐた。

「こゝに好いものがある。これを上にぶつかけなさい。」とさう云つて一人は草鞋を下げて來た。男はそれをとつて蠟の上にぶつかけた。

蠟燭を消して玄關の戸を閉めて一行はこの無住寺を見捨てた。男は先に立つて提灯に道を照らしながらトボ／＼歩いた。吾等四人はその提灯の光りを便りについて行つた。草履で歩るくのには道はかたり濡れてゐた。

徳女の茶屋の前に通りかゝつた時分にさつと障子が明いた。さうして灯を背にしてゐる徳女の姿が障子の外に現はれた。

「まあお草履ですか。下駄をお貸し申しませうか。」

「いえ、ようございます。」

「だつてこれから先は道が悪るうございますから。」

さう云つて奥に入つて出して來たのは紅い爪皮のついてをる足駄であつた。

「これは高すぎてあぶない。もつと低いのはありませんか。」と同行者の一人に云つた。

「低いの？」と一寸首をかしげて考へたが、直く奥に消えて行つて出たのは赤い鼻緒のついてゐる日和下駄であつた。

「それぢやこれを拝借して行くかな。」と私はその下駄に履き替へた。

「そのお草履はお預りして置きませう。後からお届け申しますから。」と徳女は雨に濡れながら地上にぬぎ捨てた私の草履を[illegible]

私たちはその雁坂を下りて茶店の方に[illegible]吾ら四人はそ[illegible]た。

私たちは茶店の二階に上、[illegible]入自動車が通ふやうに[illegible]まゝになつてゐて、から、とその村の男の[illegible]に坐つた時のやうな感[illegible]ものもだん／[illegible]殆んど食事が濟んだ頃の名物[illegible]

「徳女さんが下に[illegible]どないしまひよ[illegible]一寸ならお[illegible]れ[illegible]て云つた。私[illegible]や[illegible]な[illegible]

また盃を手にはよう通[illegible]

其處へ徳女け[illegible]

つてゐる一人は改めて德女を私たちに紹介した。
「どうして貴女はこの大原にゐらつしたのです。」と私は聞いた。
「大原女の繪を描きたい爲めにです。」と德女ははつきり答へた。
「あの茶店には貴女一人居るのですか。」
「え、一人きりです。一時は小女を置いてゐましたが今は一人きりです。箒を持つたり水仕事をしたりするのでこんなに手が荒れてゐます。」といつて手を隱す素振りをした。
「淋しくはないですか。」
「いゝえ、ちつとも。始めの間少しは淋しくも思ひましたがこの頃はちつとも。」
「この大原においでになる前には？」
「京都に。」
「あなたは東京ですか。」と私は尋ねた。
「え、東京です。生れは茨城です。霞ヶ浦の近所です。」
白粉の面テを灯火の前に晒して齒切れの好い言葉でハキハキと返事をした。
それから話がこの邊の地理のことになると德女は詳しく知つてゐた。三千院の後ろの山を魚山と云ふがこれは昔小野山と云つたところである。それから反對の側にある一帶の山を小野山と云ふのである。

彼の寂光院の[illegible]つたが帽を被ることは忘れてゐた。帽を被らぬ頭をとなどを話しつゝ濡るゝがまゝにしてゐた。
酒を飲んでふと無住寺の我等が室にはたゞ灯火ばかりがともつてた。さうすると二は明るく灯がともつてゐるばかりで一人[illegible]な
「寂光院にゐらつ[illegible]　つ
「寂[illegible]した前の翠黛山も小野山の一部分になつてゐるのだといふこ
「あ[illegible]た。
德女にゐた二人はこれから寂光院に行つて見やうと云つてゐ
「もう德女は、
と德女けつしやるのたら、私が御案内しませう。」といつた。
「先刻の草ゝ。もう尼さんは寢てゐる。」とその一人は思ひなほ
暫く雜談を、
下に降りて行る時分雨はどうでした。」と暫くしてから一人が
「一寸來て御覧なさい、
私達は呼ばるゝ儘に皆あんな時雨はよくこの邊では降ります。」
空を見ると月が出て居た。[illegible]したやうに、
少しもなかつた。さうしてハラ[illegible]ました。」と言つた。
先刻德女が說明した小野山は[illegible]

山の頂には霧が懸つてをつた。寂光院があると云ふ谷間の村はもう寝靜まつてゐるやうに見えた。振り返つて小野山の頂を見るとそこには又うち晴れた空があつた。さうして星の光りがきら〱と輝いてゐた。

「あゝ彼處も晴れてゐる。」と一人は云つた。白い雲はその晴れた空の一部分を低く往き來してをつた。

うち仰ぐ顏には時雨が心もちよく當つた。門前の櫻の枯木が黒く大空に聳え立つてゐた。その梢のあたりにも飛んでゐるかと思はるゝ雲があつた。

「月がもう隱れて見えぬ。」と一人が云つた。なる程最前見えてをつた明るい月はもう雲の中にあつた。と思ふまに又雲が切れて明らかな影を認めることが出來た。

「面白い時雨月夜だ。」と一人は叫ぶやうに云つた。

店の框には村人らしい二三人が腰をかけてゐた。お上さんも娘も庭に下りたまゝで立ち働いて居た。一人の頭を布でくるんだ老僧らしいのが又よぼ〱とその店先に入つて來た。村人らしい者が立つて席を讓つた。

「おつさん、時雨れますなあ。」と村人の一人は老僧に云つた。老僧は何か口のうちで返事をしたやうであつたがそれはきゝ取れなかつた。

四人は時雨を賞でゝ、表に突立つてゐた。

「寒むおすやらう。ちと此所へ寄つておあたりやしたらどうどすえ。」とお上さんは表をのぞいて云つた。四人はも一度時雨の空を仰いでから土間の中へ入つて行つた。

その土間には爐が切つてあつた。その爐の一隅には彼の老僧が陣取つてゐてその側には村の人二三人が手をかざしてゐた。吾ら四人はその傍らの椅子に腰をかけた。

話はいつか大原女のことになつてゐた。

「この頃は車力が通ふし、近頃は又自動車が通ふやうになつたものやさかい。前のやうに出まへん。」とその村の男の一人が云つた。

「さうすると大原女といふものもだん〱減つて來るわけですね。」

「まあさうどすな。」

「惜しいもんだ。京都の名物になつてゐるものがだん〱亡びて行くわけですね。」

「え、さうどす。けれども十貫目からのものを頭に乘せて京へいて來ても、知れたものやさかいなあ。もう自然と減りますやろ。」

「こゝのおばさんなども以前は通つたもんでせうな。」

「ハアハア。以前はよう通ははりました。なあおば。」

呼ばれた上さんは此方を見て笑つた。その鐵漿をつけてゐる齒が黒

く電燈の光に映つて見えた。

「さうやなあ。よう通ひましたなあ。十三四の時分から、長柴を頭にチンと載せて、お母あに連れられていたもんどすえ。その時分の路はこの頃のやうに良うはなつて居ず、ちよつと踏みはづさうものなら、どしんと崖から落ちさうなところがたんとあつたわいな。それに此頃のやうに平らつたい道ではなうて、ところ〳〵坂になつてゐて、歩るくだけでもずいぶん難儀やつた。」

「へえゝ、十三四から黒木を載せて行つたんですか。」

「ハア〳〵。始めは首筋が痛うて〳〵ほろ〳〵泣いてゐると、お母あがもうぢきやよつて辛棒せえ、といふて力を着けてくれても、もうどうもしようがなうてめそ〳〵泣いて……」と両手を眼のところにやつて泣く素振りをして見せて、

「かうやつて立ち止まつて泣いてると、中で力の強い嫗がわしの柴を頭からとつて、脇に抱へてずん〳〵と行きます。それがもう一月もしたら馴れてしまうて苦にならんやうになりました。しまひにはかうつんと頭の上に載せて……」と首を眞直ぐにして正面を切つて見せたときにはすつかり大原女の格好になつて見えた。

「さうして両手でその荷を支へるやうにして歩きますのんや。それでも醜うて暗んやうになるときは、頭の高さにある崖の上に其荷を下ろして休みます。その崖はちやんとところ〳〵にきまつてあります。しまひにはお母あなんか後の方にほつたらかしておいて、づん〳〵と一町も前の方を血氣にまかせて歩いて行きますのん。お母あは、お前は一人で大きいなつたんかとぼやきながら後からついて來ますのや。」

と輕快に笑ひながら話すのであつた。血氣盛りの娘の頃を思ひ出してその顔は晴々しかつた。おとなしい娘は母の後に立つて仕事の手を止めて熱心に話す母の素振りを見詰めてゐた

猶しばらく雜談が續いてゐるうちに彼の老僧はいつの間にか立去つて居なかつた。さうして爐邊の夜は更けて行つた。再び表に出て見るともう空には一點の雲も止めずに晴れ渡つてゐた。月は山の端に傾いてゐた。

翌朝朝飯の膳に坐はつた時分に汁の鍋を提げたお上さんは二階にあらはれて私たちに茶つぱの汁をよそつて呉れた。茶つぱの汁は甘味しかつた。私たちはそれを啜りながらお上さんと話を續けるのであつた。その話は膳の上に出てゐる柴漬についてゞあつた。

「この柴漬といふのは蕪ですか茶つぱですか。」

「これは茄子を輪切りにしてそれに紫蘇を交ぜて漬けるのどす。」

「なぜ柴漬といふのです。」

「それは寂光院にお出でになつた建禮門院さまがさういふ名まへをお附けになつたんやといふことどすけれど、此の邊に出來る紫蘇は大きうて、柴のやうに見えるさかいに、さういふたもんやろと思ひます。」

「大原にばかり出來るものですか。」

「この頃は京でもつくりますが紫蘇の大きいのはこの大原でなければ出來ません，そこで柴漬といふのは大原のもンときまつてゐますのや。うちでも四斗樽五十本ばかり漬けますのが皆出てしまひます。漬ける時分には裏に四斗樽を並べてそれに一々漬けます。そのときのやうすは盛んやもんやよつてに、今年も寫眞にでもとつてをいたら好えやらうといひました。」

そんな話をしてをるうちに朝飯は濟んだ。やがて一行は寂光院を訪ねて見やうといふことになつた。

表に出ると今日は昨日よりも寒かつた、日が當つてゐたが時々梢を搖がすやうな風が吹いた。其度に其梢は鳴つた。

「風も東京とは違ふな。風が吹いても音樂的だ。」と一人はその梢を見上げて云つた。風の梢を搖さぶるのも瞬く間であつた。直ぐその風は吹き靜まつてもとの如く靜かになつた。一枚二枚の散紅葉は悠々と枝を離れてその邊に遊んでゐた。

四人は田圃路に下りた。それは近路をして寂光院の方に横切らうといふのであつた。四人は暫く小寒い畝畔に沿ふて歩いた。そこを出ると日の當つてゐる刈田の中の路を通つてゐた。その時突然一人は言つた。

「あゝ時雨れてゐる。」

他の三人はまだ氣がつかなかつた。うち仰いだ空には洽い日の輝きがあつた。

暫くしてから他の一人は又

「あゝ本當に時雨れてゐる。」と云つた。そのとき私の前に立つてゐる男の外套の袖の邊に二タ筋三筋の光つてゐるものを認めた。

日が照りながら時雨れてゐる。この明るい光景の時雨こそ私は東京にゐる頃から遇ひたいと心に念じてゐるところのものであつた。空には雲があるにはあつた。白い雲がところ〴〵にあつた。時々太陽はそれ等の雲に隱れもしたがしかし直ぐに現はれた。明るい光は空中に滿ちてゐた。時雨はその太陽の光の中に輝きながら落ちて來た。そしてうち仰いでゐる私たちの前に快く當るのであつた。傍の百姓家の庭では百姓の上さん――これも大原女の一人であらう――が手拭で

頬冠りをしてたつつけを穿いて畑仕事をしてゐた。その庭にはゴム靴を穿いた女の子がポカッと立つて私たちを見てゐた。

時雨はいつの間にか止んでゐた。四人は又とぼ〳〵と田畑路を歩いたり或は人家の間を抜けて行つた。

百姓家の庭にはたいがい菊の花があつた。それは稍霜枯れて哀れに花の色をとゞめてゐた。それはたいがい紅い菊であつた。籬のそばに束ねられたまゝ立つてゐるのもあつた。又石の上に枝垂れかゝつてゐるのもあつた。菊の花のほかには南天が多かつた。或る百姓家の庭には非常に澤山の南天があつて、その紅い實で百姓家全體が赤く染つてゐる位に見えた。家鴨がよち〳〵坂を下りて來た。私たち四人が行くのを見て又よち〳〵と坂を登つて引き返して行つた。その坂の上の道の傍らには山水の迸り落ちるのが見えた。

『寂光院道』といふ石標は到るところに見えた。その字體は古い時代を物語つてゐた。

又時雨が降つて來た。こんどは前よりも稍滋く落ちて來た。四人は快よくその時雨に濡れながら歩くのであつた。

或る百姓家の軒下では女が洗濯をしてゐた。たつつけを穿いて背中に赤ン坊を蒲團でおぶつてゐるその女は、赤い手を肱の邊までまくり出して熱心に着物を洗つてゐた。既に一枚洗つてある着物はその時雨の窓の下に物干竿に干されてあつた。時雨の雨の脚はその干物の邊にも見ることが出來た。太陽はかげつたり照つたりしてその干物を照らしてゐた。女は洗濯物の手を休めずに洗つてゐた。

一方の百姓家の庭には女が鋸を持つて材木を挽いてゐた。たつつけを穿いてゐる片方の足をその材木の上に高くのせて兩手を鋸の上に置いて力を込めて挽いてゐた。

時雨の雲は近い山々を隱したり現はしたりしてゐた。しかし太陽は依然として大空に輝いてゐた。

四人は時雨の降る下に佇みながら、今や寂光院の石段を通して其の山門を見上げてゐた。さうして一歩をその石段の上にかけた。石の間に挾まつてゐる落葉——主として散紅葉——は時雨に濡れてゐた。その落葉の外に塵や芥は認められなかつた。四人はこの清潔な石段を上るにつけて又時雨の空を仰いだ。

山門を入るとそこに『汀の櫻』『岸の山吹』などの立札が池の邊りに立つてゐた。その櫻といふのは非常な古木の、殆んど朽ち果てゝ倒れるやうにたつてゐるのが、僅かに柱に支へられてゐた。『岸の山吹』とあるあたりにも枯れ朽ちた山吹らしいものが見えた。紅葉はいちめんに散り敷いて僅かに梢に紅いものを止めてゐるのもあつた。また一二本の遅紅葉の楓の木の間にあるのも認められた。暫くその境内に佇ん

だ後案內をこふた。

一人の尼は姿を現はした。時雨をよけて廂の下に佇んでゐる者もあつた。尼は一行の四人を見て、

「拜觀ですか。」と云つた。

「さうでございます。拜觀したいものです。」と一人は答へた。

尼は枝折門の上にかかつてゐる圓い竹で編むだやうなものを外して「此方へ」と導いた。四人は靴や下駄を脫ぎ捨てゝ草履に履きかへた。そして瓦廊下の上を通つて本堂の方へ行つた。

尼が先に立つて本堂に上つた。四人はその後に從つた。尼は本尊の前に膝まづいて、

「この御本尊の藥師如來は聖德太子の御作」と說明をした。本尊は慈眼を垂れてその前につくばうてゐる四人を見下ろして居られた。尼は立つて本尊のうしろに行つた。さうして一箇の蠟燭を灯して或る御厨の內を照した。其處にはお頭を白絹で包ませ給ふた建禮門院の御姿が照し出された。壇の浦の荒波に一度沈ませ給ふたのが源氏の兵に救はれてこの山里の寺に味氣ない月日を送らせ給ふた御姿と哀れに伏し拜むだ。それはお能の舞臺で見る大原御幸のシテの面影と變りない御姿に拜まれた。

尼は轉じて阿波の內侍の彫像の前に立つた。これは建禮門院が戯れに自ら作らせられた彫像であるとのことであつた。その紙は高倉の院の御宸翰で張られ給ふたとのことである。その顏は普通の像で見る顏とは違つてあまり縹緻のよくない赤ら顏の像であつた。かういふ女は巷間にもよく見るやうな顏の一つであつた。殊に上半面が大きく骨太に出來て居るやうすが何所かで見たことのある顏のやうであつた。或時は建禮門院が

「こゝの頰骨が少しまだ似て居ないやうだ。」

などゝ更に二三枚の紙を張り堅められもしたらうといふやうな事が想像されて、哀れなうちにもゆとりのある其時の輕い御心もちが思ひやられて微笑まれるのであつた。この阿波の內侍の像といふものはさういふ意味で建禮門院と吾等の心を結び付ける極めて親しみのあるものであつた。

尼は先に立つて本堂を出て私たちを庫裡に案內した。その庫裡には安德天皇の御座船の船底の板、並びに後白河法皇の大原御幸の時の御履きの御草履などゝ云ふ寶物もあつた。吾等は欄干の手すりに凭つて暫らく前面の景色を眺めた。

時雨はやはり降つてゐた。大原御幸に『翠黛の山』と歌はれたところの前面の翠黛山には日が當りながら時雨の雨が降つてゐた。

尼は茶を汲むで來て吾等にすゝめた。

「このお寺には老尼がゐられた筈ですが。」と私が尋ねた。
「ハイその老尼は十年ばかり前に亡くなりました。貴下はその老尼を御存じですか。」
「いえ。別に存じてをるといふ譯ではありませんが三十年ばかり前に來た時分にお見受したことがあるのです。其時分六十あまりの老尼であつたやうに御見受しました。」
「ハイ。丁度そんなもので御座いませう。この寺に四十年も住職をしてをられました。」
「今は貴女が住職でゐらつしやいますか。」
「左様で御座います。」
「以前はこの庫裡は建つてゐなかつたやうに思ひますが」
「左様で御座います。これは十年ばかり前に建つたので御座います。近頃は高貴の方などがお見えになりますのでこの普請をいたしました。以前御座りました建物は豐臣秀頼公が本堂の御普請をなさる時分に普請小屋として建てられたものであつたのですが大阪の陣がはじまつたので途中で御普請を止められてその儘になつてゐたのを取り繕らうて庫裡にしたものだと聞いてをります。が御承知の通りボロ〳〵になりましたのでこの庫裡を新築した譯でございます。」
私はその時分の老尼が古びた建物の一隅に哀れに淋しく栖はつてゐたやうすが物なつかしく回想された。其他一たいに境内が整頓されてゐるやうに思はれた。
翠黛山の時雨は偶日に照らされながら美しく降つてゐた。
「さつき池のほとりのお庭を拜見してゐる時分に阿波の內侍や大納言の局などの石塔の事が石に彫つてあるのを見ましたが何處にあるのですか。」
「それはあそこの小さい裏門を出まして、だら〳〵と坂を下りまして、谷に下つてから向うの急な坂を少し上つたところにあるのでございます。」
「さうでございますか。一つ行つて見ませう。」
其處で四人は立上つた。外套を着、帽子を被り靴や下駄を穿いた。尼も庭に下り立つた。
時雨の降つてをる表に四人は出た。尼も時雨に濡れながら先に立つた。裏門を出てしばらく行くと『建禮門院御庵室之跡』といふ石の柱が建つてゐた。その廻りは低く柵でとり圍まれてゐた。尼はその前に立つて、
「これが建禮門院の御庵室の跡でございます。こゝも秀頼公が御再建にならうとしたのに大阪陣が起つたゝめに御止めになつたのださうでございます。この前に生えてゐるのは大原菊と申しまして綠萼の花の

やうな花が咲くのでございます。」と云つた。その大原菊といふ名もなつかしい名であつた。花は今無かつたが葉もやさしい葉であつた。

尼はそれからまた先に立つて行かうとした。私たちは、「もう此處までゞ宜う御座います。」と辭退した。さうすると尼は行手を指して

「その坂を降りて直ぐ向ふの坂をのぼると四つお墓が並んでをります。その一番高いのが阿波の内侍、それから次に大きいのが大納言の局、あとの二つは何誰のですかお名前はわかつて居りません。」と云つた。

私たちは尼にわかれて教へられる通りの道をとつた。尼は尚其處に佇んで私たちの行く手を見て居つたが漸く踵を返してもとの路を戻つた。兩袖をかき合せて時雨の中を歸つて行く姿がしよんぼりと見えた。

私たちは教へられた通りに急な坂を上つた。十間ばかり登ると松の木の下に四つの苔蒸した小さい墓が並んでゐた。一番高いと云はれる阿波の内侍の墓ですらもが非常に小さいものであつた。懷しい四つの墓を四人は倦かず眺めた。

四人は坂を下りた。それから最前の途をしばらく後に戻つた。「大原西陵」とある建禮門院の御墓を高い段々の上に遙拜した。途中より三千院に行くべく前とは違ふ路をとつた。

道ばたにある朧の淸水といふのを見た。これは大原御幸にも出てゐる名所の一つである。石がたくさん積み重ねてある底に一掬の淸水が湧いてゐた。これも三十年前に見た時分にはこんな淸水ではなかつたやうに覺えてゐる。路ばたにある朧淸水の面影が髣髴として殘つてゐた。

時雨は小止ながら尚降りつゞけてゐた。村人も皆濡れながら歩いてゐた。一臺の荷車が坂のところに牽きわづらうてゐた。一人はその車の後を押してひき上げてやつて居た。

四人は時雨の道をトボ〳〵と歩いた。さうして一つの學校の構内を横切つた。男の子は時雨に濡れた庭でゴム毬を打つてベースボールの眞似をして居た。女の子は教室の中で手毬をついてゐた。何れも引きつめた髮に結つてゐて筒つぽの着物を着てゐた。都の子供のやうに洋服を着たり、おかつぱさんでゐるものはなかつた。何れも大原女の雛かと思はれたが又昨夜の話で大原女の上にも一大變革が來てゐることを思はしめた。

昨晩泊つたあの宿の溫柔しい娘さんなどは大原女の服裝はしてゐなかつた。

「溫柔しい宜い娘さんですねっ」と一行の一人が褒めて云つた時に宿の

ちは今夜京都に歸ることを話して置いたので村長さんは後片附けに來て與れたのであつた。私たちは厚く禮を述べてその室を引拂ふことにした。

歸りがけに德女の茶屋の前を通ると德女はまた現はれてゐた。私は昨日借用して歸つた下駄がまだ宿にぬぎ捨てたまゝになつてゐることを話すと德女はかう答へた。

「あれはあの茶店のお上さんがもう返しに來て與れました。慥かに受取りました。」

私たちは德女に別れの挨拶を交はして其處を過ぎた。坂を下つてゐる時分にゴーンと鐘の音が響いた。その鐘の音の方向は寂光院のある向ひの谷からであつた。

「寂光院の入相だな。」と私は云つた。暫くして又ゴーンと鳴つた。寂光院の石段をのぼりつめた左の方に鐘樓があつた。そこに黑い大きな鐘がぶら下つてゐた。

「あの尼があの鐘を撞いてゐるのだな。」と思はれた。暮靄はいま寂光院のある谷の人家を包むでゐた。

宿の前には一臺の自働車が止まつてゐた。昨夜の土間の爐を取り圍んで乘客がその自働車の出發の時間を待つてゐた。その乘客には二人の僧があつた。一人の尼があつた。それに料理屋のお上さんでもあらうか肥つた一人の女があつた。そのほかにインバネスに中折帽を被つた二人の人がをつた。又一人の長髮で口髭を顎にも生やした壯士風の男が居つた。けれどもその男の話す口振りは極めて物やさしくて其の風采にはそぐはなかつた。主として彼の肥つた女と口をきいてをつた。

私は京都の宿の主婦から頼まれて居つた柴漬の樽を買つた。發車の時間が來たので皆どやどやと乘り込んだ。私たちは鞄やその柴漬の樽を持つて乘り込むだ。人はぎつしりと自働車の中につまつた。

自働車の窓からは時々月が見えた。八瀨の終點に下りて自働車から見た時分には一めんに晴れ渡つた大空が頭の上にかぶさりかかつてゐた。その大空の一方には比叡の裏山が黑く突き出てゐた。

荷物を忘れて途中から引返して行つた同行者の一人があつた。その一人は次の自働車で着く筈であつた。四人はその一人を待つために待合所に入つた。その待合所の眞ん中には大きな火鉢が一つあつて其中には火がなかつた。只新聞紙が灰の上にねぢつたやうにして打捨つてあつた。四人は火の無い火鉢を取り圍んで腰を掛けた。寒さがひしひしと攻め寄せて來るやうに覺えた。こゝのお上さんは氣をきかして炭を持つて來て與れた。その炭を足でヘシ折つては爐の中に置いた。さ

うしてマッチで火をつけて新聞紙にうつした。新聞紙の火は漸くに柴に燃えうつつた。一塊の火が私たちの眼の前に燃え上がつて温かになつた。一人の人聲が表の方できこえた。

「自働車はもう八瀬の方に出ませんか。」

「え、もう五時がおしまひです。」

「困つたな。八瀬まで行きたいのですが。特別に出しては貰へまへんか。」

「出さんこともありませんが、高うなりますよつて八瀬までなら歩いておいでなさい。あまり遠うもありませんやないか。」

「なんぼなら出します。」

「五圓どす。」

その男の聲は忽ち消えた。

暫くしてから又一人の人の聲がきこえた。

「もう自働車は出ませんか。」

「もう出ません。」とうちから答へた。

「困つたなあ。」とその男の聲は消え去つた。一度燃やした柴は灰になつた。二度目に燃やした柴も灰になつた。土間に置かれた柴はみんなになつてしまつて、最後にくべた柴は今盛んに燃えつゝあつた。

「八瀬や大原に行く人はいつまでもあるものだなあ。」と一人はいつ

た。

「かうやつてこゝに待つてゐると険路の趣があるな。」と他の一人が言つた。其處へ自働車の音がきこえて其の灯が障子へさした。やがて其の中から忘れ物を抱いた一人が現はれた。

「時雨はもう来ないかな。」と其の男は大空を仰いだ。大空には月が明るくかかつてゐる許りであつた。

維新回天史の一面

久邇宮朝彦親王を中心としての考察

蘇峰 徳富猪一郎

（緒論第一） 本論の目的

維新史は、今尚ほ一半は謎として殘つてゐる。各方面から觀察し、種々の著作が出で來つてゐるが、未だ定論と云ふ程のものは、見出されない。古人も『棺を蓋ふて百年論初めて定る』と云つてゐるが、維新以來、漸く半世紀を過ぎた今日に於て、定論を見出さんとするは、餘りに性急であるかも知れない。されば、予が今回敍述する處も、敢へて自ら天下に向つて、所謂定論を、供給するものではない。

然し少くとも、その資料を提供せんとする覺悟である。

× × ×

從來、維新の歷史は、官軍、賊軍の紋切型にて描かれたものだ。即ち、薩長は官軍の主たるもの、會津、桑名は賊軍の主たるもの、所謂、官賊兩立せずと云ふ筋を立て、而して、大概ね薩長の立場から、維新史は觀察せられ、編纂せられたものだ。云はゞ從來の維新史は、薩長本位の維新史と云ふも過言ではあるまい。

如何なる場合でも、戰勝者は自ら、都合のよき位置を占むるものだ。薩長が、維新の勝利者である以上は、薩長が、自ら都合のよき位置を

苦むのに、顧慮ではあるまいか、必要ではなからう。

× ×

但た物は過ぐれば必ず反るものだ。餘りに、勤王を我物顔に專有したる結果は、又、非薩長、反薩長の反動的傾向を、生じ來るは、究に止むを得ない次第だ。

即ち近頃維新史を說く者、往々、薩長が、名を勤王に藉りて、其の私利私欲をたくましくせんとしたる陰謀を摘發し、維新史そのものが、恰も薩長彈劾史と云ふ如き、傾向を生じ來たらんとするのも、敢て不思議のことではあるまい。

×

しかも、過ぎたるは猶及ばざるが如しで、餘りに薩長の野心等を爬羅摘抉せんとすれば、かへつて維新改革本來の眞相を、沒却するの虞れが無いこともない。予は維新回天の偉業が、薩長本位者の考察よりも、若くは、反薩長論者の考察よりも、更により多く複雜してゐるものと思ふ。

即ち、維新回天の偉業を解釋せんとするには、精神的の原因もあれば、物質的の原因もある。內から生じたる力もあれば、外から加へられたる刺戟もある。これを充分に研究するには、大處、高處より觀察せなければならない。

× × ×

空間から云へば、薩長とか、會桑とか云ふばかりではない。又東北とか、九州とか云ふばかりではない。京都とか、江戶とか云ふばかりではない。世界そのものを舞臺として、考察せねばならぬ。

× ×

時間から云へば、決して嘉永安政が、維新史の始でもなければ、何ぞ況はんや、文久、元治をやだ。又何ぞ況んや、慶應、明治をやだ。少くとも、德川幕府の創立以前、織田、豐臣に遡らなければならない。否それでは充分でない。更に建武中興の時代に、遡らねばなるまい。若し、充分の注文をするならば、鎌倉時代、後鳥羽上皇承久の役を起頭として、考察せねばなるまい。

× ×

歷史は川の如きものだ。只我が眼前に展開せられたる、流域のみを見て、此の川は斯くの如しなどと、口賢く語るは、寧ろ識者の笑を招かねばなるまい。

支那の楊子江の如きは、七八月の頃、其の下流には一滴の雨さへ降らぬに、幾尺と云ふよりも、寧ろ丈餘と云ふ程の洪水が、出で來ることがある。これは、其の上流なる、西藏方面の雪が、溶け來つたのである。

×

斯の如く、歴史は繼續するものだ。

×

歴史に時代を區分するは、歴史家が勝手に、研究の都合を計つて定むるもので、歴史そのものは、限際は無い。世界に擴り、古今を貫くものである。

× ×

言はゞ眇たる五十戸乃至百戸の村の歴史さへも、その繋るところは世界であり、及ぶところは、人類生出以來である。況んや一國の一大變革の歴史に於ては、猶更のことと云はねばならぬ。

即ち、維新の歴史の如きも、あらゆる原因、あらゆる事情、あらゆる曲折を經て、出で來りたるもので、先づ第一に、如上の意義を考へ留かねば、維新の歴史を研究するわけには參らない。

× ×

然し乍ら、縮めて云へば、事を爲すは人であり、人を作るは勢であり、而して、その勢を制するが、又人である。詮じ來れば、人と勢とが、互に作り、作られ、制し、制せられ、此處に歴史は出來るものである。

或人は專ら勢に重を置き、歴史は恰も、東京驛を發したる電車が、横濱驛に着したるが如きものと、考へてゐる者もある。又或人は、花火にて打上げたる風船玉が、風のまに／＼何處ともなく、落下する如く、全く偶然から偶然に赴くものとする者もある。

或は又、人間か勝手次第に、歴史を製造し得るものと考へ、丸き玉子も、切り樣では四角となると云ふ如く、英雄豪傑は、己が思ふ通りに、世の中を切り盛りし、從つて、隨意に歴史を製造し得るものと考ふる學者もある。

× ×

然し、カーライルの如く、歴史の中樞點を人物におくのも、バックルの如く、歴史は環境の力にて成立するものと云ふものも、いづれも、餘りに偏し過ぎて居る。

云はゞ、或時には、勢が人をより多く支配し、或時には、人が勢をより多く支配するが、人と勢とは、到底相離るべきものではない。人ありての勢であり、又勢ありての人である。

× ×

例へば西郷や、大久保や、木戸が、若し元祿時代に生れたなら、彼等は、全く田舎武士として、世を終つたかも知れない。三條、岩倉なども、只一通りの、青公卿ですんだかも知れない。

× ×

併し、維新の時代に、西郷、大久保、木戸等の人物が出たから、時勢が人物を作ると云ふけれども、若し時勢が熟さなかつたならば、[illegible]山に

雑草が出來る如く、竹林に筍子が生ずる如く、何處にも彼處にも、多くの西郷、多くの大久保、多くの木戸等が出來ねばならぬか。今日でも、維新三傑など申す通り、僅に寥々たる數人に止るのをみれば、時世が人物を作ると云つても、作られる人々は、自ら定數があつて、誰れも彼も悉く皆、人物となると云ふわけではあるまい。

×

時世が人物を作るから、人物など云ふ者には、左程、感謝する必要はないと思ふ人あらば、それは大いなる間違であらう。成程、時世が信長を作り、秀吉を作つたと云ふことは、云はれないことはない。然し、安土時代、桃山時代は誰が作つたのであるか？ 我々はその時代に、大いなる信長や、秀吉の足跡を認めずして、止むあたはぬのではないか。

×

維新史も又其の通りである。

×

予は維新史に就いて、從來世人が認識したる、水戸に於ける烈公若くは藤田東湖、長州に於ける村田清風、吉田松陰、久坂、高杉、木戸、廣澤、伊藤、山縣、若くは薩摩に於て、島津齊彬、久光、西郷、大久保、小松、或は當時の大名として、松平春嶽、山内容堂、若くは識者として、佐久間象山、横井小楠、橋本左内、幕府の人物として、岩瀬忠震、勝安房、小栗上野介等、それぞれ人々の認識してゐる處に就いて、別にそれを否認せんとするものでない。否な予は或は此等の人々に就いて、世間の認識するより以上に、認識してゐるかも知れない。

×

然し乍ら、維新史の研究者が、意外にも其の中心の人物を見逃してゐる。例へば、或る御堂に行つて、仁王とか、十二神將とか、種々の脇立ての像には禮拜をしつゝ、かへつて其の正面の本尊には、脱帽するのを忘れてゐる趣きがある。

×

今少し露骨に云へば、維新歴史の研究者が、その御本尊としての孝明天皇を、殆ど忘れてゐるかの如き狀あるを、頗る遺憾とする。

×

予は維新史の中樞には、正しく孝明天皇が立たせ給ふことを、確信して居る。それは單に、天皇といふ御位に在らせられてゐたからと、云ふわけのみではない。

畏れながら、天皇御自身が、天皇の位と共に、又た天皇としての大なる個性の持主で在らせられたといふことを、認識せねばならぬ。而して當時、一切の運動が天皇から出でて、天皇に還るといふほどではなかつたとしても、少くともその傾向があつたことは、間違ひがない

見る積りである。

予が討幕運動者に同情を表したが爲に、公武合體者に對して、反感を抱くと云ふ者あらば、それは間違である。又公武合體運動者に同情したるが爲に、討幕者に對して、反感を抱くとする者あらば、それも又間違である。

富士の山は、遠近高低、至る處から眺めて趣がある如く、維新の歴史も、いづれの角度から眺めても、それ〳〵眺むべき價値がある。

（緒論第二）皇室と幕府の關係

公武合體の大立者として、朝彦親王の事を語るに際しては、一通り、皇室と幕府との關係を、心得おく必要がある。

德川幕府は、必ずしも、鎌倉、室町時代に比して より多く朝廷を蔑視したと云ふことはない。或點から云へば、朝廷の安全は、鎌倉開府以來、德川二百六十年の幕政が、最も完全に近く保障したと云つても、差支へあるまい。然乍ら、それは朝廷の安全を保障したと云ふに止まつて、朝廷の立場からは、二百六十年、未だ曾つて、一日たりとも、御滿足遊ばされた日はなかつた。

德川幕府の開祖家康は、殆ど總ての事に就いて、賴朝を手本とした。然し彼は、其の師よりも優れたる弟子であつた。家康は賴朝を學んで、賴朝の未だ至らざる處までに到達した。

家康の特色の主たる一は、徹底力であつた。而して彼は、徹底的に、朝廷と幕府の關係を、規定した。然も家康は決して、朝廷をないがしろにすることは、爲さなかつた。

彼も亦、大いなる政治家だ。政治家は、如何なる場合でも、人情を察し、民心を收めて、而して後、已が欲する處を逞しくするものだ。

我が民心が、皇室に歸向する事の、深く、且つ久しく、固く、且つ深きを知りたる家康は、決して其の一指だも、皇室に觸れる事を敢て爲なかつた。

然し彼は、皇室と國民との關係を知るが爲に、皇室が幕府政治に對して、常に一大脅威である事を、自覺し、それを豫防するに就いては、一重にも二重にも、十重にも、二十重にも、其の設備を爲した。

世に『公武法制應勅十八ヶ條』と云ふものがある。是は元和元年八月、家康が定めたるものとして、今日も存在してゐるが、果して然るや否や、それは頗る[illegible]

幸に、明治天皇の聖明の臨に、久しからずして、その厄を免かれ、晩節は平和にて、其の天年を終り給うたが、然も親王の政治的生涯は、孝明天皇の崩御と共に終つた。

× ×

予は今少しく根本資料に據りて、親王の事蹟を中心として、維新史の一面を觀察して見度いと思ふ。

其れは必ずしも、親王の事蹟を物語らん爲ばかりではない。親王の立場からして、維新史を觀察して見度いと思ふのだ。

× ×

予は西郷南洲や、大久保甲東の立場からして、しばしば維新史を觀察した。而して、その觀察の結果は、世間に發表したことも、一再ではなかつた。

今度はその立場を代へて、朝彦親王の側から、觀察して見度いと思ふ。

朝彦親王の側と云へば、先づ公武一體論の側からである。即ち武力手段ではなく、平和手段もて、維新改革の業を、完成せんとする人々の立場からである。

× ×

されば、事の親王個人に關することは、極めて省略する。事蹟と云つても、政治に關係なき事蹟は、語る必要はない。然し、親王は、その主なる力を、孝明天皇の唯一ならざれば、第一の相談相手として、政治に貢獻せられた。政治を除却して、親王の事蹟と云ふものは、有るは有るが、寧ろ、甚だ多くない。

× × ×

いづれより觀ても、親王は公武合體派の大立者であつた。又親王を考ふる時には、畏れながら、孝明天皇を考へ、孝明天皇を考ふる時には、親王を考へざるを得ざる程、孝明天皇と、親密の關係を持つてゐた御方であつた

× × ×

微を闡はし、幽を顯かにするは、歴史家の任である。予は敢へてその人でないかも知れぬが、敢て自ら揣らず、これを試みて見度いものと思ふ。但だ歴史家は裁判官であつて、辯護士ではない。然し、裁判官の最も條理を盡したるものは、一本調子の辯護士よりも、かへつて原被兩告にとつては、仕合せである。

× × ×

富士の山は、何處から見ても富士の山であるが、駿河路から見るのと、甲州路から見るのとは、自ら山の趣が異つてゐる。予が維新史の觀察も、今回は主として、討幕論者側でなく、公武合體論者側か

見る積りである。

予が討幕運動者に同情を表したが爲に、公武合體者に對して、反感を抱くと云ふ者あらば、それは間違である。又公武合體運動者に同情したるが爲に、討幕者に對して、反感を抱くとする者あらば、それも又間違である。

富士の山は、遠近高低、孰る處から眺めて趣がある如く、維新の歴史も、いづれの角度から眺めても、それ／＼眺むべき價値がある。

（緒論第二）皇室と幕府の關係

×

公武合體の大立者として、朝彥親王の事を語るに際しては、一通り、皇室と幕府との關係を、心得おく必要がある。

×

德川幕府は、必ずしも、鎌倉、室町時代に比して、より多く朝廷を虐待したと云ふことはない。或點から云へば、朝廷の安全は、鎌倉開府以來、德川二百六十年の幕政が、最も完全に近く保障したと云つても、差支へあるまい。然乍ら、それは朝廷の安全を保障したと云ふに止まつて、朝廷の立場からは、二百六十年、未だ曾つて、一日たりとも、御滿足遊ばされた日はなかつた。

×

德川幕府の開祖家康は、殆ど總ての事に就いて、賴朝を手本とした。然し彼は、其の師よりも優れたる弟子であつた。家康は賴朝を學んで、賴朝の未だ到らざる處までにも達した。

家康の特色の主なる一は、徹底力であつた。而して彼は、徹底的に、朝廷と幕府の關係を、規定した。然も家康は決して、朝廷をないがしろにすることは、爲さなかつた。

彼も又、大いなる政治家だ。政治家は、如何なる場合でも、人情を察し、民心を收めて、而して後、己が欲する處を逞ましくするものだ。

我が民心が、皇室に歸向する事の、遠く、且つ久しく、廣く、且つ深きを知りたる家康は、決して其の一指だも、皇室に觸れる事を敢て爲なかつた。

×

然し彼は、皇室と國民との關係を知るが爲に、皇室が幕府政治に對して、常に一大脅威である事を、自覺し、それを豫防するに就いては、一重にも二重にも、十重にも、二十重にも、其の設備を爲した。

世に「公武法制應勅十八ヶ條」と云ふものがある。是は元和元年八月、家康が定めたるものとして、今日まで殘つてゐるが、果して然るや否や、それには[illegible]

あし原よ茂らば茂れ己がまゝ
　とても道ある世にあらばこそ
思ふことなきだにそむく世の中に
　あはれ捨てゝも惜しからぬ身は

等の御製を拝讀すれば、幾百載の下、又た以つて、其の御胸中を察する事が出來る

× ×

其の後のことは、別に語るまでもない。要するに、如何なる場合でも、朝廷を、全く政權以外におき、單に一の小大名にも及ばざる程の、畏れながら捨扶持を差上げ、然も其の使用の方法までも、幕府にて定め、京都には、所司代、町奉行の外、禁裡附武士をおき、宮城以外は勿論、宮城の中さへも武家の勢力をもて、張り廻し、鵜の目、鷹の目もて、朝廷の御動作を看視し、窮屈と云へば、此れ以上の窮屈はないほどに、仕向けてゐた。

× ×

然し、幕府の立場から見れば、彼等は朝廷に恨みがあるでも無く、朝廷を虐待せんとする心でもなく、云はゞ、幕府自衛の爲に、止むを得ず此處に至つたもので、幕府の内情を察すれば、又實に憫れむべきものと、云はねばならぬ。

幕府の此の窮屈なる態度に、最も反抗遊ばされたのが、後光明天皇であつた。然も、天皇は二十二歳にて、崩御在した。又、天皇の天職について、最も自覺遊されたのは、桃園天皇であつた。然るに、天皇も又、二十二歳にて崩御在した。

然るに、光格天皇に至つて、天皇御自身が不世出の英主で在したると同時に、又、恰も勤王の精神が、天下に勃興する時運に際し、自ら維新中興の起原を、此の時代に遡らねばならぬことゝならしめた。

光格天皇は、後陽成天皇から、孝明天皇に至る、歴代の天皇中に於て、唯一と申上げざるも、英明なる天皇の御一人で在した。天皇は、閑院宮典仁親王の御子にして、典仁親王は、東山天皇の御子直仁親王を、御父とし給へば、實に東山天皇の曾孫に當らせ給ふ。

光格天皇は明和八年八月御降誕、安永八年十一月御踐祚、文化十四年三月御讓位、天保十一年十一月崩御あらせられた。

× ×

光格天皇は、身長六尺五寸に在した（飯田忠彦著野史）と云へば、其の聖體の魁偉に在したことも想はるゝ。御製の一に、

はへば立て立てば歩めと急ぐなり
　我身の積る老を忘れて

とあるが、如何にも能く、人情の幾微を穿つてゐる。天皇の漢學の素

至つた。

後水尾天皇には、秀忠の女和子の入内を見るに至つた。是れながら、天皇と、二代將軍とは、姻舅の關係で在した。然し其の間は頗る圓滑を缺いた。殊に、朝廷から賜つた、京都五山の僧侶の紫衣が、諸宗法度の規定に背いたとて、幕府が此れを褫奪し、之れに抗議を提出したる澤庵玉室などは、それ〳〵流竄せしめられた。

僧侶が紫衣を着るなどは、實際の政治に、何等の關係なき事であるが、然かし、朝廷が此れを賜りたるものを、みす〳〵褫奪つて、天下環視の中に於て、朝廷の威嚴を、冒瀆する等とは、隨分思ひ切つた仕方であつた。

當時江戸に在る細川忠興が、豐前に在る、其の子忠利に與へたる書中に、

『主上の御事は申すに及ばず、公家衆も、此外もの〻切れたる體と申候』とある。

もの〻切れたると云ふは、貧乏と云ふ事である。又た、

『主上御不足之一には、公家中官位御儘に不成との事』とある。

即ち、陛下は、其の左右に奉仕する公家の官位さへも、思ふやうには、選ばせ給ふ事も出來なかつたものと思へる。又た、

『大德寺、妙心寺の長老なり不屆きと、武家より仰せられ、或は衣を剝がれ、又御流しなされ候へば、口宣一度に、七八十枚も破れ申候、主上此之上之恥之有るべくや』とある。又た、

『御局衆の腹に宮樣達、如何程も出來申し候を、押し、、又は、、申候事、殊の外むごく、御無念に思召され候由候。幾人出來申し候とも、武家の御孫—即ち中宮和子の生むところ—の外は、御位には即け申され間敷に、餘りあらげなき儀と、深く思召さる由候』

とある。

細川忠興は、外樣大名の中にて、最も德川家康に、恩顧を受けたる大名である。然かし、彼が云ふ處、斯の如くであれば、如何に手荒く、幕府が、朝廷を取扱つたかは、此れにて、推察出來る。

されば、後水尾天皇が、三十五歳の御壯齡にして、八歳の皇女に、御位を讓り給ふに至つたのも、決して、尋常一樣の事ではなかつた。此れは、一口に申せば、幕府の干渉、壓迫に對する、一種の抗議であつた。

幕府と朝廷との關係は、爾後に於て、若干緩和せられないこともなかつた。然し乍ら、最後まで、後水尾天皇は、決して釋然として

は、[illegible]なかつた。

あし原よ茂らば茂れ己がまゝ
　とても道ある世にあらばこそ
思ふことなきだにそむく世の中に
　あはれ捨てゝも惜しからぬ身は

等の御製を拜讀すれば、幾百載の下、[illegible]
する事が出來る

其の後のことは、[illegible]
も、[illegible]

幕府の此の頽崩なる終止に、[illegible]
あつ[illegible]
ついて、[illegible]

叡の博厚にて在したことは、御製の詩等を拜誦すれば、察するに足る。其の御使用の印章なども、『學孔孟』或は論語の『一以貫之』とか、書經の『惟精惟一』とか『一人元良、萬邦以貞』などの文字を、御使用になつたことによつても明である。

予は東山文庫を拜觀し、其の歴代の御宸翰の數ある中に、光格天皇が、寛政十一年、御年二十九歳の時、後櫻町上皇に應へ給へる、御宸翰を拜して、如何にも感慨に堪へぬものがあつた。後櫻町上皇は、女帝に在し、光格天皇に御書を贈らせられ、人君は仁を本とすべき旨を、諭し給へるに際して、光格天皇が之に御答へ遊ばされた御宸翰である。予は今これを此處に拜寫することゝする。

返す〴〵まだ〳〵書付度候へども、あまり〳〵長文にも成存候まゝ、先々かくの如く候。何分〳〵御すい覽之事願上まゐらせ候。私いよ〳〵氣丈〳〵けふは當座にて候。用心まし〳〵御安心候。

かしこ

日々きびしき殘暑之處、ますます御機げんよく〳〵、扨て〳〵〳〵〳〵めでたく〳〵忝き〳〵御事、猶また萬々御用心〳〵の御事、專一に願上まゐらせ候。さては詠草伺置候まゝ、いつにても〳〵〳〵〳〵御機嫌しだい、御すきさまに宜しくねがひ入まゐらせ候。誠に昨夕は法樂詠草早そく返し給り、畏入存まゐらせ候。其ふし御聞中扨て〳〵〳〵〳〵御うれしく忝く〳〵存まゐらせ候。猶又已後之所願くと

〳〵有がたき御心せつ之仰とも、

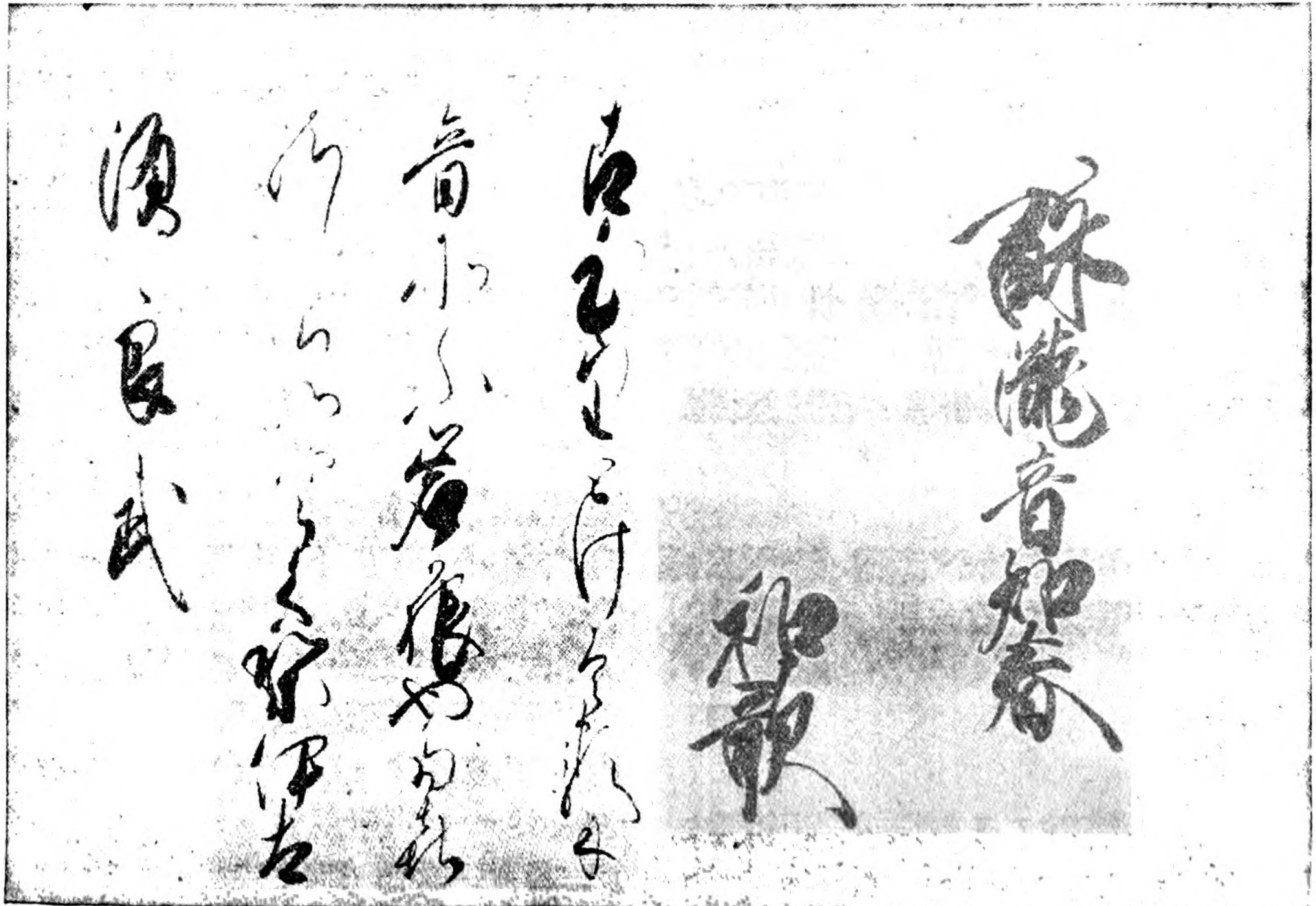
存まゐらせ候。尤仰之通、人君は仁を本といたし候事、

物にも數々有之事、仁は則孝忠、仁孝は百行の本元にて、誠に上なき事、常に私も心に忘れぬ樣、仁德の事を第一と存じまゐらせ事に候。ことに仰ども蒙り候へば猶更に存候事。とかく自身許にては、つい心もたるみ候事、か樣に有之候へば、其度ごとに心もすゝみ、實〳〵有がたき〳〵事。とかく人は身勝手に成安き物、ここは彼恕と申字の所にて、恕之字は俗に申、我みつめて人のいたさをしれと申字にて、則此恕が仁の字にも通じ、又誠と申義にも相成候事。何分仁と誠とに相極り候事、仰之通、身の欲なく、天下萬民をのみ慈悲仁惠に存じ候事、人君なる物の第一のおしへ、論語はじめ、あらゆる書物に、皆〳〵此道理を書のべ候事、則仰と少しも〳〵ちがひなき事を、扨〳〵忝く〳〵〳〵存まゐらせ候。猶更心中に、右之事ども、しばしも忘れおこたらず、仁惠を重じ候はゞ、神明冥加にもかなひ、いよ〳〵天下泰平と畏〳〵入まゐらせ候。右之通色々と書過候樣にても、中〳〵心中に存候ほどは、筆紙に不盡事にて候。何分御推さつ之事願入存候。右申候とをり、とかく折々仕りいたゞき候事、はげみに成

[illegible]、[illegible]心さつの[illegible]とも、心中にてつし[illegible]にても、[illegible]の[illegible]にて[illegible]民の[illegible]にく

[illegible]

光格天皇御宸翰



詠瀧音知レ春　和歌

氷解け春に音そふ岩が根や瀧の白絲くり出すらん

剃髮の際に一大勁龍を發想し、悉に朝廷の敗北に歸し、光格天皇も涙をのませられ給うたが、されど其の敗北や、敗北にあらずして、悉にも何にも、朝廷が其の問題の妥當、不妥當は第二におき、幕府に向つて、挑戰的態度をとらせ給うたことは、此れを以つて嚆矢とせねばなるまい。此の點に於て、此れは最も意味ある事件である。

× ×

當時、蒲生君平の著と稱する、『幕罪略』なるものがある。此れは第一、君平の著であるや否や、保證の限りではない。第二に、その中に擧げたる幕罪なるものは、幾何事實を含有するか、又、其の事實が、果して幕府の罪であるか、其れ等は詮議の限でない。悉に角光格天皇の御代に於て、斯の如く堂々と、その罪を問はんとするものが、出たと云ふ事を考へ來れば、寔に感慨に堪へないものがある。予は今左に『幕罪略』を揭げる。

幕罪略

一、慶長年中、家康將軍より、大阪追討の院宣を、後陽成天皇へ奉レ願しに、御免許なく、其子細は、秀賴卿、奉レ對二天朝一、聊かの罪なし。又秀賴と家康とは主從の儀、且縁邊の中なれば、左樣の筋なき企は、不レ宜旨被レ仰けるに、家康將軍殊の外怒りて、仙洞には秀賴に御心を寄せ玉ふなれば、大望の妨とならむ。先大阪の前に、仙洞を配所に奉レ移らんと、既に一決に及ばんとせし所、南光坊諫めて、此事止みぬ。此は北條義時の例を行ふては、子孫の斷滅せむことを恐て也。

一、此後家康將軍參內して、禁中諸法度と云條目を定めたり。朝廷には素より、式令格律の御定めあるを、武臣の身として。朝憲を亂し、朝威を輕しめ、臣權を重ふせんが爲めに、三公は親王を下にする條を立て、己は世々大臣の任に居ることに定めたり。

且つ豐公は天下を一統にせられたる功あり。其實は皇胤の人たるに依て、關白職に任ぜられたり。去ば此時賴朝以來押領せし天下を、悉く朝廷へ返納し奉り、叡慮を伺ひ、大阪を執られたる也。

然るに家康將軍の言に、秀吉卑賤より出で、關白に任じたるは、武威にほこりてなり抔と云事を口實としたると。自ら卑賤より出で、親王關白の上に居り、天下に何の功もなく。天朝より御任有しにも非ざるに、天下を押領し、私に諸侯陪臣等に領地を與へしは何事ぞや。豐公の皇胤にして、其任に在て、其任を行へると、家康將軍の其任にあらずして、天下を私し、諸人を欺くと、何れを以て是なりとし、何れを以て非なりとせん。有志の人辨知せずむば有るべからず。

此將軍の駿河に於て、古器を集めしも、朝廷再興の爲にはあら

ず、自ら朝廷の事をせんとの企なる事、前後を考へて知る可し。

一、家康将軍死して後は、天下古今無双の廟を立、剰へ、勅使を申下し、御代々の御陵をば麁略にし奉る事。

一、皇胤を滅せんとして、親王諸王方を、法體となし奉る事。

一、官家をば、領地を任せず。且皇側を守護し奉るは、兵器あらずして叶はざるを、官家の兵器を廢し、朝廷を弱らしめ奉る事。

一、官位は、重き事なるに、武家の五位は、堂上の大納言に准じ抔と、其外も其振合に定めたる不埒の事。

一、狹少なる禁中に、天皇を禁錮し奉り、二百年行幸も無レ之事。

一、關白職を、關東にて定むるも同樣之事。

一、傳奏御役被レ蒙レ仰之日、朝廷の機密は、關東へ洩し、關東の事件は、朝廷へ洩すまじき誓文を請取事。

一、秀忠将軍の女、東福門院を強て後水尾天皇の御后にし奉し事。

一、後水尾天皇は、皇子數多おはしませしに、強て東福門院の生み奉りし皇女、明正天皇を、御位に即け奉し事。

一、親王一拄を、人質にして、東叡山に置き奉る事。

一、東照宮權現の祠を仙洞御所へ建てたる事。

一、後光明天皇逝御ましまし、破却し玉へるを、不快に思ひ、承應三年、、して、、し事。

一、寛永年中秀忠、家光将軍上京の節、堂上方を我臣下の如く扱ひ、天顔を拜するに至りて自ら親王關白大臣の上席に有て、天盃を賜し時、天酌を願ひ、不埒の事。

一、正德年中、皇女八十宮を、家繼将軍へ配せむ事を暴願せり。勢止事を得ず、勅許ありしが、皇神許し玉はず、東下し玉はざる内に、将軍卒せり。

一、代々上京もせず、居ながら官位を蒙る事。

一、天下の政事は御舊典に因循して、宸慮を伺ひ、取計ふべき事なるに、私に取計ふ事。

一、賴朝、尊氏か如き賊も、皇女を申上して、妻とせんとの望はなかりしを、徳川に於て、現に如斯事。

一、寛永年中天草一揆の節、阿蘭陀人を頼み海手より攻させたる事、不埒の事。

一、神國の神民を、胡僧の宗門に繋し入れ、佛國同樣に成たる事。

右二十ヶ條者、幕罪中の千が一を擧げたる而已。其委しき事は因二幕罪録及、夢物語等一可二以見一矣

文化五年於二京師東山寓居一牘記下野國草莽無名氏

最早や、幕府は箍がゆるんで來た。鎖國の制度は、到底完全にこれを維持する事が、困難となつて來た。而して、幕府の委任政治は、到底其のまゝに執行する事が、困難となつて來た。

かゝる場合に於て、英國は印度洋支那海を經て押寄せ、米國は太平洋を渡つて、來り迫り、露國は前申す通り、北方より來り迫り、日本は、內には勤王の精神が燃え、外には開國の機運が熟し、幕府單本位、鎖國一點張りの政治は、到底これを維持するに、困難な場合となつた。

此の場合に、孝明天皇は御位に即せられた。孝明天皇は、申すまでもなく仁孝天皇の御子にて、光格天皇の御孫である。孝明天皇は御年十六、弘化三年二月御踐祚遊ばされた。

（第三）　孝明天皇御踐祚前後の形勢

孝明天皇の御踐祚は、弘化三年三月にして即ち西曆一千八百四十六年である。當時我が日本國は、內憂外患の危機に瀕したと云はんよりも、寧ろ、內解外壓の極所に近づきつゝありと云ふべき時代であつた。德川家康によりて建立せられたる、幕府制度の金城鐵壁も、徒に外觀のみ壯大にして、其の內容は殆んど土崩、瓦解せんとするの有樣であつた。概して云へば、幕府の危機は、決して一朝一夕の謂ではない。田沼時代に於て、既に內部から分解せんとするの傾向を呈してゐた。然るに田沼に代りて、一代の賢相松平定信出で來り、此處に寬政の改革を打出して、更始一新、狂瀾を既に倒れんとするに廻らした。松平定信は、如何に割引しても、幕府二百六十年間に於ける唯一の政治家と云はざる迄も、政治家中の最も完全に近き一人であつた。彼は八代將軍吉宗の孫だ。吉宗の愛子にして、最も父の性格を受け繼ぎたりと稱せらるゝ、田安宗武の子だ。吉宗が或る意味に於て、家康の雛型であつた如く、定信も亦、或る意味に於て、吉宗の雛型であつた。然も用心深き點に於ては、定信は吉宗以上であつた。

×　　×

多くの政治家は運命に支配せらる。然も、松平定信は、寧ろ、運命を支配したと云はねばならぬ。彼は七、八歲の物心つき初めてから、既に天下の大政に參與するの志を起してゐた。彼の進むは、決して偶然ではなかつた。彼は自ら進まんと欲するの意志を有し、又進むべきだけの準備を爲し、而して其の準備が出來上つた時に於て、あらゆる手段、方法をめぐらして、其の位置に達した。

もとより、彼程の賢明なる者であれば、仕事に無理もなく、其の後に、自ら奔競の痕跡などを殘すが如き、拙き事はなかつた。然も彼は自然の運命に餘儀なくされ、止むを得ずして、相位に登つたのではな

い。止むを得て登つたのだ。斯の如にして、彼は三十歳そこ〳〵で、老中首座となつた。

およそ政治家として、彼の如く天下に期待せられたる者もなく、又、彼が如く、其の期待を裏切らずして、其れに副うた者はなかつた。寛政の改革は、實に痛快であつた。彼の手は物質上より精神的に及び、思想の上にまで、其の政治的支配を及した。徳川時代に於て、幕府の治安を保つ爲に、異端を排斥した例はある。然も積極的に、正學と自ら信ずる所のものを以つて、天下を率んとしたる未だ曾て彼が如き者はなかつた。

されば彼の政治があまりに緊縮に過ぎ、餘りに周密に過ぎ、而して又、餘りに統一に過ぎたる爲に、白河の淸き流れに魚住まず、かへつて、田沼の濁流を追慕し、其れに向つて謳歌せんとする者さへも生ずるに至つた。

併し、此れは必ずしも、彼の爲に煩となすべきではあるまい。

× ×

松平定信の所謂正學とは朱子學であつた。朱子學は王を尊び、覇を卑しむにあり、朱子學は、大義名分を明にするにあり、朱子學は、夏を崇び、夷を斥くるにあり。されば彼は、其の學問上よりしても、皇室を尊崇するは當然である。此の意味に於て、彼は彼の民間から拔擢したる、柴野栗山、尾藤二洲等と同様に、又、彼等同様の稱に於て、彼自身も亦た尊王家であつた。

然も彼が尊號問題に於て、光格天皇の思召を奉ぜず、遮二無二、是れを押し潰したのは、必ずしも、光格天皇の御生父、閑院宮典仁親王に、太上天皇の尊號を奉る時に於ては、將軍家齊の生父、一橋治濟に、又前將軍の稱號を與へねばならず、斯くすれば、天に二つの天皇あり、地に二人の將軍ありと云ふその聯想からばかりでなく、彼は大義名分の上にて、未だ天皇の御位を踐み給はざる御方に、天皇の尊號を奉るのは、天壤無窮の皇位を冒瀆し奉る所以であると考へたからであらう。

而して、彼が極力これに反對したのは、單に以上述べ來つたる、大義名分論の立場からのみならず、斯くするは此の機會に乘じて、幕府の所謂、委任政治の實を全し、朝廷から彼れ此れ、干渉がましき事の出で來る漸を防ぐ所以であると考へたのであらう。卽ち所謂、關東御威光恢復の爲めとは、彼の胸中に潜んだ心機であつたらう。要するに彼は飽迄朝廷を尊ぶが、幕府の實權は、其儘保存するつもりであつた。されば公武合體論の元祖は、先づ松平定信と云はねばならぬ。同じ合體論でも、幕七公三もあれば、公七幕三もある。定信は卽ち前者に屬する合體論者であつた。

×

彼は進むにも自ら進んだが、退くにも自ら退いた。彼は相位にあること足掛け七年、寛政四年三十六歳にして、其の職を辭した。彼は實に、其の機を見ること敏かつた。彼はあらかじめ、相位についた時に、其の辭職の機會を考へてゐた。何事も用意周到にして、拔け目なきは、家康以來、德川家の家法であつた。而して、彼は其の家法を、最も完全に實行した。

彼の後には、彼の同僚松平信明その他がよく彼の遺法を守つたが、然も將軍家齊が成長すると共に、その增長我慢が加り、定信の時代には兎も角も、定信の指導に從ひたる將軍も、年と共に泰平に陶醉し、遂に天保八年には、大阪に於ける大鹽の騷を、惹き起すに至らしめた。

×　×

大鹽の騷は、事件から云へば、大鹽が大阪の金持共を、燒打ちしたと云ふだけの事にして、一切の事が殆ど一日の中に結了したので、必ずしも、此れは大事件と云ふ程の事でない。併し乍ら、慶安四年由比正雪が、久能山に據りて、亂を起さんと企てゝより以來、百姓一揆とか、若くは黨民とかいふ種類を除けば、兎も角も、幕府を相手として、直接行動を起したものは、此の事件より外はない。

されば、此の事件は、幕府亡滅の、最初の烽火を擧げたものとも、云ひ得らるゝのである。將軍家齊は、其の前年天保七年に職を辭したが、尙大御所として實權を執り、天保十二年正月に殁つて、彼は逝き、其の子家慶は、漸く名實共に將軍となつたのである。

×　×

家齊は實に德川歷代の將軍中、最も長く將軍の位に在つた。即ち足掛け五十一年に亘り、其れに大御所としての五年を加ふれば、五十六年となる。然も彼は江戶に居ながら、生存中に太政大臣に陞り、其の子家慶は、將軍の世子として內大臣となり、德川氏あつて以來の、榮耀を恣にし、其の子女五十餘人を、或は養嗣子とし、或は御守殿とし、親藩以下、外樣、譜代の諸大名に分配し、實に無類の豪勢を極めたが。然も德川の衰運は、此の時に萠したといはんよりも、寧ろ成つたと云ふべきであらう。

是の滔々たる衰運を眺めてゐた老中水野忠邦は、決して只者ではなかつた。彼も又、政治的大野心の持主であつた。家齊の全盛時代には、猫を被つて或は京都の所司代となり、或は大阪城代となり、遂に西ノ丸老中より老中に進み、御勝手掛となり、只管御機嫌を取つてゐたが、大御所家齊の薨去と同時に、彼は其の本色を暴露し、將軍家慶を說いて、改革の業に着手せしめた。

忠邦は當時の大名として、學問もあり、腕力もあり、手腕もあり、

又經綸もある。云はゞ、彼も亦、德川幕府時代を通じての、一個の政治家たるを失はない。

× ×

彼は近き松平定信を、其の標本となし、天保の末期に於て、寛政改革の政治を繰り返さんとした。然るに、彼が失敗したる所以は、何故であらう。そは寛政の初と天保の末とは、時世が異り、從つて幕府そのものゝ、天下に於ける勢力が異つてゐた。加之、定信は、久松松平家の養子とはなつたが、其の血統は八代將軍吉宗の孫である。而して彼の後援者には尾、紀、水三家があつた。殊に尾張、水戸等は、最も熱心なる推薦者であつた。又、將軍の生父一橋治濟の如きも、內實は兎も角、表面は其の推薦者、後援者の一人であつた。

而して彼の同僚は、いづれも單に同僚といふばかりでなく、概して、彼の學友、若くは親友であつた。其の屬僚などゝ云ふ者も、單に屬僚といふのみでなく、意氣投合、氣息自ら相通じてゐた。

然るに水野は、將軍家慶の信寵を得てゐたが、他に彼の後援者と云ふべきものはなかつた。加之、其の同僚の堀大和守などは、先以て彼の子分とも云ふべき者であつたが、其れもあまり當にはならなかつた。而して彼が懷刀として、最も信賴したる鳥居忠耀の如き、其の才氣、膽力愛すべき者はあつたが、寧ろ酷吏、奸吏の風ありて、決してこれを君子人と云ふべき者ではなかつた。

其の他彼が使用したる、澁川六藏とか、後藤三右衛門とか云ふ輩は、無論尋常一樣の者ではなかつたが、いづれも曲者、戲者にて、決して彼等を用ひたるが爲に、天下の信望を博する所以ではなかつた。而して彼等は何れも何時水野を反噬するかを期し難き危險人物であつた。

齊しく改革ではあつたが、松平定信は大概ね自然の趨勢を利導し、水野忠邦は、寧ろ、大勢に逆行したる傾向があつた。云はゞ前者は太陽の如く、後者は風の神の如く、只力づくにて其の目的を達せんと試みた。加之定信は專ら前政の害を除くにあつたが、忠邦は積極的に利を起さんとした。其の重なる一は、印旛沼の堀割であり、他の一は、江戶、大阪都城の十里四方の土地を回收して、幕府の直轄とすることであつた。

× ×

印旛沼の堀割は、一旦外警ある時には、奧羽の運送米が、總房の海岸から、江戶灣內を通過せずして、直に利根川尻から、江戶に輸送するの便宜を開くにあり。又、江戶、大阪十里以內を幕府の直轄となすことも、國防の上から考へても、又、幕府の中央集權制度を確實にする上から考へても、必要であつたが。然も異論百出し、極端なる儉約政治や、風俗改良の沙汰は、市井の庶民から大奧の中まで、怨嗟の聲を

發せられ、幕府直轄地變更の實行は、其の範圍內に領地を有する同僚や、若くは親藩からまで反對せられ、彼は改革に着手して足掛三年、正味二年にして、遂に失敗し去るに至つた。其の後再び暫らく起用せられたれども、彼は已に角を失つたる牛であり、牙を失つたる獅であり、寧ろ彼の殘骸に過ぎなかつた。

× ×

水野に次いで幕政を執つたのは、即ち阿部正弘である。阿部は實に、徳川末期に於ける政治家にして、彼については、今日に至るまで未だ充分なる定評なく、政治家として、彼が坐する歷史上の座位は、今尚未定であるかの如くなれども、予の見るところ、彼は實に幕府の末期に於て、極めて比類少き政治家であつたと云はねばならぬ。阿部も又、水野同樣、自ら政治家たらんと欲して、政治家になりたる者にして、決して偶然に出で來りたるものではない。彼の父阿部正精は、將軍家齊時代の老中であり、多少の學問もあり、又、西洋の事にも若干興味を持つてをり、或は水彩畫に似たる西洋畫や、若くは和蘭文字など、自ら畫いたものがある。

正弘は其の庶子にして、其の兄正寧の病によりて、其の後を繼ぎ、天保七年十八歳にして備後福山の城主となつた。斯くて天保十一年、二十二歳にして寺社奉行となり、中山村法華經寺の塔頭智泉院の僧侶に關する訴訟事件を處斷し、頗る名聲を擧げた。其れに、其の寺院に、大御所家齊の大奧に在る老女其の他の干係があつて、事大奧に關し、何人も手をつけ得なかつたのであるが、其れを公明に裁いて、其の爲に大いに評判を博した。

× ×

斯くて天保十四年、二十五歳にして老中加判の列に加つた。

彼が如何に公事につとめたかは、弘化元年五月十日、江戸城本丸の火事に際し、自ら消防指揮を勤め、當時大雨の際、滿身濡れて、衣を代へること二回、草鞋を改むる二三回に及んだと云ふ事だ。斯くて彼は本丸普請總奉行を命ぜられた。これが六月十三日の事である。而して七月二十三日には、勝手用掛を命ぜられた。勝手用掛は、大藏大臣にして、老中の中で最も權力あるものだ。

當時將軍家慶は、水野忠邦を再び用ひんとしたが、阿部は斯くては大臣の進退があまりに恒なく、忽ち黜け、忽ち進むるなどゝいふことでは、筋道が立たぬと云つて、反對し、その言が用ひられなかつた爲め、一時引籠りゐたが、將軍の懇命もだしがたく又再び出で來つた。

斯くて此の年七月、いよ〳〵世にも名高き和蘭國王の忠告書が出で來つた。此の忠告書の到來は、寔に記憶すべき一事件だ。其書は世界近來の大勢を述べ、日本も最早、鎖國の舊習より脫却せざるべからざ

ることを說き、この際自ら進んで開國をすることが、日本の平和を完し、國家を利する所以であることを述べ、若し日本が此の忠告を容るるに於ては、和蘭は誠心誠意これを實行するについての援助を、惜しまないと云ふ事を申して來た。

若し幕府が、此の忠告書を眞面目に受取り、此の忠告の意味を正しく了解し、此れによつて其の施政の方針を定めたらば、嘉永六年六月ペルリの浦賀灣の來航の時に於て、彼程の狼狽をしなかつたであらう。然るにこれを其のまゝ受取り放しとなし、其の翌弘化二年六月、即ち蘭法改め難しと云ひ、以後は斯る書翰を差出すことは無用なりと云ひて、極めてすげなき挨拶をしたのであつた。此に就ては、阿部正弘なども、實に大なる責任ありと云はねばならぬ。

× ×

水野は前に述べたる如く、弘化元年六月、再び老中に列し、首席となつたが、弘化二年二月には、更に免職せられ、實際上、阿部が首相の位置を占むるに至つた。當時彼は二十七歲。もとより彼に向つて多きを望むことは出來ないが、しかも彼ほどの人物として、斯る月並的の返書を和蘭に與へ、しかも此の警告に對して、何等の緊切なる設備をなすべく努力しなかつたのは、實に遺憾千萬である。

併しながら、彼は實に當時に於て、殆んど缺くべからざる一人であつた。彼ありしが爲に、當時の幕府は、兎も角も、其の踏み違へなかつた

（第四）久邇宮朝彦親王の御生立

いよく本題として、こゝに久邇宮朝彦親王のことを敍する。親王は伏見宮家の御分派にして、今日に於ける各宮家の大部分は、實に伏見宮家、及び其の分派の流れである。即ち皇族方として、伏見宮、山階宮、賀陽宮、久邇宮、梨本宮、朝香宮、東久邇宮、北白川宮、竹田宮、閑院宮、東伏見宮、いづれも伏見宮家の流であり、而して梨本宮、朝香宮、東久邇宮等は、いづれも久邇宮家の流れである。

伏見宮家は勿論、久邇宮家の御繁昌、殊に現代の皇后陛下も、久邇宮家より御出でましになりたる事を思へば、朝彦親王の勤王、愛國の御餘慶と申すも、差支へあるまい。そもく伏見宮家は南北朝の頃、北朝の崇光天皇より出で、その十九代を邦家親王と申した。享和二年十月二十四日の御誕生にて、文化十四年、光格天皇の御猶子とならせられ、明治五年八月五日、七十一歲にて薨去あらせられた。

× ×

朝彦親王はその第四子にて在し、文政七年正月二十八日、京都室町通鐵小路上ル、鳥居川河内介の家に誕生あらせられた。其の御生母は、

房君小路輝親の女信子と申した。

親王御年八歳の頃、京都本能寺の日慈上人伏見宮家に參殿のみぎり、當時熊千代君と稱したる親王の、御非凡なるを拜察し、己れの弟子となさしめ度く、御懇請申上げた。御父君には上人の徳望に感じ、御養育の名義にて、これを許し給ひ、これより上人の許に御移りあつて、儒佛の二書を學び給うたが、聰明にして理解よく、且つ其の英氣活潑なるに、師匠たる日慈上人も、他日は必ず大成せらるゝであらうと、御期待申上げてゐた。

×

當時の插話が今尚ほ殘つてゐる。或日上人親王を伴うて、上京寺町三池上ル上本能寺前町經師商山本彦兵衞方を訪れたるに、親王は先づ奧座敷に通り、自ら床の間の上段に座し給ひ、上人はかへつて下座に在つたとて、上人は之を見ていよ〳〵親王の豪邁なる御氣象を愛したといふことである。

×

斯くて天保七年御歳十三歳のみぎり、親王の御叔父一乘院門跡常洪親王御病氣あり、爲に内示もて、親王をして、其の弟子たらしめ給うた。これは一乘院の後住に擬せらるゝ爲であつた。抑も一乘院といふは、大乘院と共に、南都興福寺の別當職を掌る寺院にて由緒最も古く、所謂門跡寺院の一である。常洪親王は貞敬親王の御子にして、貞敬親王は、伏見宮家第十九代邦家親王の父君である。然るに常洪親王は、天保七年六月二十六日、御歳十九歳にして、遷化あらせられた。然も此の事が豫期せられ、其の以前に於て朝彦親王は、其の相續者として、附弟とならせられた。其の時の口達書は左の通りだ。

口達

此御所御弟子有故是迄御内々於其院御養育申上御成長被爲在候段、御滿悅之御事候。依今度思召ヲ以被召還候間、可被得其意候事。

五月三日

箕田大和介

田中信濃守

本能寺御坊

×

斯くて八月二十八日、仁孝天皇の御養子とならせられ、一乘院主に補せられ、天保八年十二月五日御歳十四歳にして、一乘院に入らせられ、十日親王の宣下あり、御名を成憲と改められた。斯くて翌天保九年閏四月二十三日得度あらせられ、法諱を尊應と稱し給

ふ、時に御歳十五歳。

前にも申す通り、一乘院は最も由緒尊き寺院の一だ。定昭大僧都によつて開基せられたるものにして、僧都は關白太政大臣藤原忠平の次男左大臣師尹公の子である。爾來或時には攝家より、或時には親王家より御入りあり、最近の御代にはいづれも親王家で在しました。其の知行は千四百九十二石で、御殿を橘御殿と申した。

されば、日慈上人の門弟から、一乘院の門主に補せられ給うたことは、親王にとつては、非常なる御變化と申さねばならぬ。斯くて天保十一年八月十三日、登壇受戒あらせられ、十三年三月二十五日講師に進み、興福寺別當に補せられ給うた。

興福寺は昔から、比叡山と共に僧兵があつて、武を講じてゐた。されば親王にも誦經の餘暇、南都法蔵院流の槍術を學び給ひ、又は經書や兵法等を、講ぜさせ給うたといふことである。此れも時勢の然らしめたる所であらう。

憾ふに、親王には長く南都の寺院を守つて、一生を御暮しになる積りであつたか、若くは他に大いなる御志があつたか、それは今にゝに明白に識る事は出來ないが。いづれにしても、天下の正に動かんとする氣運は、知らず覺えずの間に、聰明敏感なる親王をして、之に順應せしめたのであらう。

弘化元年七月には、和蘭の使者が來り、和

いよく\諸外國が日本に開國をせまり來る模樣であるから、

其の準備をなし、日本が自ら進んで國を開くが得策である。それに就いては、從來の關係もあるから、和蘭方で、何なりともお助けを致すであらうといふ、極めて鄭重の辭りたる書翰を齎し來つた。此れは既記の通りである

× ×

斯る場合の際であれば、親王は常に心を國事に傾け給ひ、外國の事情を摸索し、內外應接に關する文書、若くは論說、意見など、悉く儒者に命じて、これを寫さしめ給うたと云ふことである。

されば親王は、南都の大なる僧院の主であらせられ給ふ間に、他日孝明天皇の御相談相手として、國事に盡瘁し給ふ用意をされつゝあつたのであらう。親王とても、もとより將來を明白に、前知し給ふ程の事は、無かつたであらうが、しかし、あらかじめ其の緩急に應ずるだけの、御覺悟はあつたものと察せられる。

斯くて弘化三年正月二十六日、仁孝天皇は崩御あらせられ、孝明天皇は二月十三日、御年十六歳にて、踐祚あらせられた。此の弘化三年たる年は、單に皇室御代變りのみでなく、また記憶すべき事がある。其れは、朝廷から幕府に向つて、外交について御沙汰があつたこと

だ。即ち弘化三年八月二十九日左の如き御沙汰書を發せられた。

一、近年異國船所々に相見候趣、風說內々被レ聞召一候。併、文道能備り、武備全整候時節、殊に海岸防禦堅固の旨被レ聞召一候間、御安慮候得共、近頃其風聞屢々彼是被レ爲レ與二叡慮一候、倘此上武門の面々、洋蠻之事、不レ侮ニ小寇一、不レ畏二大敵一、籌策を立、神州之瑕瑾無レ之樣、御指揮候て深可レ率二安宸襟一候。
此段宜レ有二御沙汰一事

× ×

これは前にも述べたる、內外一切の事を、江戸の將軍へ御委任あせられたといふ譯から云へば、餘計なる御干渉のやうにも聞える。併しながら、如何に北條氏が政權を専にした場合なればとて、蒙古事件については、龜山天皇などは、身を以つて國難に代らんと御祈禱遊されたほどで、所謂上下相ひ協力し、擧國一致の精神を發揮した事を考へれば、外難が漸く日本に迫らんとする曉に於て、朝廷から、かゝる御沙汰のあつたことは、當然の事であり、必然の事であり、且又自然の事である。

たゞ此れが朝廷から積極的に幕府に向つて、外交上に關する御沙汰書を發せられたる始であるといふ事は、最も記憶せねばならない。當時孝明天皇は、畏れながら、御踐祚後間近で、且つ御歳十六にてあらせられたれば、もとより內外の事に就いて、宸慮を勞し給ふほどの、御經驗も、未だ積せられなかつたであらうと思ふが、兎に角、御輔弼の臣僚中に於ては、斯る御沙汰書を下し給るべき事を申上げたものであらうと思はれる。これについては、十月三日京都所司代より、それぞれ江戸老中共よりの御受書を出してゐる。

さて嘉永元年二月十八日、親王御年二十五歲の時、二品に敍せられ、一乘院はもとの如く。越えて嘉永五年正月十九日、傳奏三條大納言實萬は、左の如き內勅を傳へた。それは、當時天台座主尊超法親王御病氣につき、豫め親王をもつて、その相續者たらしめんとの思召であつた。內勅の文は左の通りである。

座主之宮御老、不レ勝之處、座主當職人體之無候間、靑蓮院、必竟御移轉可レ被二御沙汰一候

× ×

斯くて法親王は遂に起たず、三月十二日靑蓮院相續の勅あり、二十三日入室の禮を行つた。勅使廣橋前大納言光成參入、名を賜ひて尊融と改めた。四月初て參內、十一月二十四日御持僧に補せられ、十二月十四日天台座主に補せらる。

爾來、屢々參內せられた。表面のことは、もとより御祈禱の件であつたが、併し、單にそれのみならず、常に陛下の至高顧問として內外の

の御諮詢に應じ、近衛内大臣忠熙、三條大納言實萬等と同じく、宮中の内議に參せられた。

(第五) 維新史に於ける水戸

維新史に於て、如何なる場合にも、看過し難きは、水戸である。水戸は思想上から、大義名分の論を發し、尊王攘夷の大運動を惹起す、根本動機を作り、實行の上からは、或は烈公の天保度の改革となり、或はその後、櫻田の擧となり、筑波の役となり、遂に德川幕府を轉覆して、王政維新を見るに至らしめた。

其の中にも、一橋慶喜、繼嗣問題の如きは、更に内治外交の、最も困難なる場合に於ける一大葛藤であつた。されば或意味から云へば、德川氏を滅したものは、水戸であるが、他の意味から云へば、又德川氏を生かしたのも水戸である。何故なれば、幕府は倒れても、德川氏をして、臣民の最上位たる公爵に列し、百世子孫血食せしめたる所以、畢竟水戸の勤王が、其の素地を作つたものと云つても、差支へない。具體的に云へば、慶喜其人の恭順の態度宜しきを得た爲めだ。

以上の理由によつて、我等は此處に、水戸の事に就き、少しく語る必要を感ずる。

水戸の始祖賴房は、德川家康の第十一子にして、家康六十二歲の子である。彼は末子にして、最も家康に愛せられたが、同時に又彼が剛邁であつた爲に、家康は常に彼を抑損せしめた。賴房の兄が賴宣で、その兄が義直である。彼等の幼き時、家康は三人にその望を尋ねたれば、義直は大國を賜らんことを希ひ、賴宣は賢臣を得んことを願ひ、而して賴房に至つては天下を得んと云つた。此處に於て家康は、この子は油斷が出來ぬと、常にその野心を押ふることをしたといふ傳説がある。

又家康が、『阿鶴は切れ者であるから鞘ばしらざる樣氣を付けねばならぬ』と云つたとの傳説もある。阿鶴とは賴房の小字である。いづれにしても、彼は尋常一樣の公子ではなかつた。而して彼は三代將軍家光と最も相ひ得た。

家光は『親類中にて頼もしき者は、御身一人である。希くは御身と兄弟の交りをしたい』と云ふ意味の手紙を、賴房に與へた。それは今猶水戸の德川家に殘つてゐる。

賴房は豪邁ばかりでなく、又世間からみれば、いさゝか旋毛曲りのところがないでもなかつた。それは天草の役に、肥前の國主鍋島勝茂先登して手柄を顯したが、軍令に叛きたりとの故をもて、閉門申付けられた。然るに御三家の一人たる彼は自ら節を枉げて、これを慰めた。

賴房の子が即ち光圀で、所謂義公である。光圀は賴房の第三子で、若き時には隨分亂暴の漢であつた。今日から云へば、不良少年とも云ふべきものであらう。彼は色白く、丈高く、肩廣く、顏長く、額廣くして兩方に角あり、目袋長く、少し細型にみえるが、よくみれば、普通の眼より大きく、耳は長くしてしかも大に、鼻筋は通りて高く、口はそりかへつて、世の常ならず、若き時は、美男の聞え高かつたと云ふとだ。

彼は少年の時には、武藝や學問の嗜を第二にして、遊藝に耽つたらしい。彼は三味線が好きで、自ら彈いたといふことである。而して彼の風采、服裝等も、市井の遊蕩兒そのまゝであつたらしく、彼の語るところも、所謂猥談等にて、甚だ宜しくなかつたと云ふことが、彼の傳役たる、小野角右衞門の諫言書の中に特筆せられてゐる。而してその動作も、輕躁であつて、如何にも傍若無人の擧動を逞しくしてゐたといふことである。

×

彼は少年の時に、人を人とも思はず、全く我儘勝手の行動をなしてゐた。然るに十八歲に至り、史記の伯夷傳を讀み、始めて父の世嗣には、その兄賴重が立つべきが順當であるに關らず、自ら相續者となつたことの不合理なるに氣付き、大いに志を起し、斯く自覺、懺省すると同時に、彼は自らその擧動を一變して、謹嚴の士となり、その家を賴重の子に讓るの意を生じ、且つ修史に志すに至つたのだ。

×

併し、彼が人を人とも思はず、獨立獨行したことは、不良少年であつた時も、その老成人となつて西山に閑居した時も、別段相違はなかつたやうだ。彼が如何に學問に勉强したかは、十三經全部に句讀を附し、六臣註文選全部に和訓を附し、人見卜幽が附けはじめたる千金方の和訓を、過半以後は、彼代つて附けたといふ程にて、世の所謂大名學問とは、全く異つてゐた。

×

彼は畢生の力を歷史に盡した。その三十萬石に足らざる歲入の三分の一即ち八萬石を修史の費用となしたと云ふ程にて、一方に於ては、人を四方に派出して史料を集め、他方に於ては、天下の凡有る學者を集めて、その編纂に當らしめた。然も彼自らその一人として、その事に與つてゐた。彼の歷史をみれば、彼が大義名分の觀念は、最も明かである。彼は天智天皇の御子大友皇子を、弘文天皇として、天皇本紀にのぼせ、神功皇后を后妃傳にをさめた。彼は南朝を正統とし、北朝を閏位においた。

×

此等の事に就いては、世間に種々の意見があるであらうが、兎に角彼としては、一大見識といはねばならぬ。如何に彼が皇室の尊崇者で

あつたかは、彼の事毎に京都を主とする家法が、その子孫まで、繼承せられたことをもつても知られる。

要するに、彼は日本に於ける、尊王論及び國體論の唱首でなかつたとしても、最も有力なる鼓吹者であり、最も有効なる宣傳者であつた。彼は決して朝廷を尊崇するが爲に、幕府を倒すべしとする者ではなかつた。彼は只朝廷と幕府を對立せしめ、天皇と將軍とを兩本位とするものでなく、云はゞ、將軍を始めとして總て日本國民は、皆天皇の臣民であると云ふ意味に於ての尊王家だつた。即ち彼は彼の祖父たる家康の設立したる、幕府の敵でもなく、又その制度の破壞者でもなかつたが、然も朝廷に對する點に於ては、根本的に家康とは相違があつた。家康は朝廷を全く雲の上に封じ込め、人事には一切關係なからしめ、斯て將軍を第一位として、下庶民に及さしめた。然るに光圀は朝廷を第一位として、將軍を第二位とし、而して後、全國の民皆朝廷の統治の下にあるべきものとした。固より實際の政治は、御委任によりて、將軍が管掌したるも。

× ×

彼は將軍家をもつて我が親類と看做し、朝廷をもつて、我が君主と看做した。彼は君臣合體を以て、當然の事と致し、幕府を經由せずして、當に自ら朝廷と親近するを謀つた。光圀以後水戸家は、幾多の變遷があつた。然れ共、概して云へば、朝廷第一位、幕府第二位といふことに就いては、いづれも間違なかつたやうだ。

即ち第七世治紀――武公――の如きも、左の如く云つてゐる。

『公は御平生朝廷を殊の外御崇敬被レ遊けり。或時景山公子（烈公）へ御意遊されけるは、たとひ何方の養子と成候とも、御譜代大名へは參り不レ申候樣に心得可レ申候。譜代は何事か天下に大變出來候へば、將軍家に從ひをる故に、天子に向ひ奉り弓をも引かねばならぬ事也。此れは常に君として事ふまつる故に、斯くある可きことなれども、我等は將軍家いかほど御尤の事にても、天子に御向ひ弓を引かせられなば、少も將軍家には從ひ奉ることはせぬ心得なり。何程將軍家理のある事なりとも、天子を敵と遊され候ては、不義の事なれば、我は將軍に從ふことはあるまじと、仰られける。

斯の如く、文化、文政、徳川氏極盛の時代に於て、斯る思想を懷きたる程であれば、光圀の天皇第一主義、皇室中心主義が、決して一時の空論、空想でなかつたことが解る。

又最後の將軍徳川慶喜が、自ら將軍職を辭し、伏見、鳥羽の役後、江戸に還り、寛永寺の一室に閉居し、やがて又水戸に蟄居するに至りたる動機につき、公爵が澁澤男爵の問に答へたる談話の一節に、

拙者幼少にて、一橋家に養子に行かんとせし時、父なる齊昭（烈公）は拙者を膝下に招き、扨ても追々六かしき時勢となれり。今後際限の議論などに依り、公武の間に、如何なる事端を生ずるやも知れず、然れども我が水戸家は祖先以來、一意勤王を以て本旨とし、假令朝廷に御無理の義ありとも、其命令とあれば、何にても違背すべからず。若し宗家が朝廷に對して、弓を向けんとすれば、我は朝廷の爲めに、宗家を亡すの決心なかるべからず。是れ我が水戸家の家法なれば、決して此本意を忘るべからずと、懇々申渡されたる事、肝に銘じて、常に忘るゝ事なかりければ、當時に於ても、唯父の訓誡を體して、只管恭順せしまでにて、別に夫れ是れと思慮を勞せし次第に非らず。

とある。然れば光圀の主義主張は、最後までも水戸家に徹底したものと云はねばならぬ。

× ×

併し、世の中の事は、決して理想のみにて行はるゝものでない。水戸家は三親藩の一に位し、一切のことは、ほゞ尾張、紀伊と同等同格にて、唯だその位階の進級等が、やゝくだると云ふに過ぎなかつたが、しかもその財政上に於ては、最も困難なる位置にあつた。尾州、紀州兩藩は、水戸に比すれば、財政上の取得は恐らくは、水戸に倍し、若しくは夫より以上であつたであらう。然るに水戸は、其の收入は半ば以下にして、その交際は同一であるといふことであれば、結局財政上の逼迫は當然の結果といはねばならぬ。

然れば水戸は常に財政に苦しんだ。加之、彰考館などの設けあつて、他に類例なき修史の事業に費用を投じつゝあれば、その困難は更に一層と云はねばならぬ。これが爲に、幕府からしばしば合力を要することがあつた。

且つ三家中尾州、紀州は、普通の大名同樣參勤交代したが、水戸はたまたまその封地に赴くことあつても、概して定府であつた。而して何れの時から云ひ出したるか知らねども、世間では水戸家をもつて、副將軍と看做してゐた。即ち如何なる場合も、江戸に在りて、將軍家の介添役を勤めるものと、認められてゐた。即ち光圀の如きも、その隱居するや、その養子綱條は、今後は光圀のやうに旗本等を、直接に招く如きことは、相やめらるゝであらうといふ者があつたが、彼は「否とよ、水戸家は天下の副將軍で、いざと云へば、旗本を率ゐて行かねばならぬから、平生から、よくその魂膽に通じておかねばならぬ故、もとよりこれまで通りに旗本を招くべし」と答へたとある。

かゝる次第であつて、水戸家は一方に於ては、朝廷とも幕府を介せず、直接に交通し、旗本とも遠慮なく交際した。これは水戸家に

つては一概の時例と云つても然るべきかと思はるゝ。

話は飛んで烈公の時代となる。烈公は卽ち武公の子で、哀公の弟である。彼はその兄哀公卽ち第八世齊脩の時には、敬三郎と稱し部屋住みであつた。然るにその兄齊脩は、文政十二年十月四日三十三にして逝いた。當時水戸家の重臣共は、德川家より養子を貰ひ、それによつて水戸家の財政の逼迫を救ひ、且自ら利せんとしたが、江戸及水戸に於ける諸有志は、これを不可とし、威公卽ち賴房の血統を絶やすに忍びず、且つ賢明の稱ある敬三郎殿が現存するのに、かゝることを行ふべきかはと、いづれも憤慨し、四十餘名の志士は、許しをも待たず、水戸より出て大運動を起した。これが爲に遂に敬三郎は、水戸家第九世として、封を嗣ぐことゝなつた。これが卽ち文政十二年十月十七日で、彼は年三十であつた。

斯の如く齊昭の承封は、いはゞ志士運動の結果であり、彼の一代は波瀾をもつて始つたと云はねばなるまい。齊昭は三十歳まで部屋住みであり、よく重臣等の不埒、不都合なる樣を親しく見聞したれば、その封を嗣ぐや否や、直にそれ〱彼等を處分し、而して他方には又、有志者を擢上げ、これが爲に天下の耳目を聳動せしめた。

擧世滔々泰平に陶醉しつゝある際に、彼は一方に於ては儉約の令を布き、他方に於ては武備を整頓し、率先してその士民を督勵した。彼は斯くて、しば〱幕府に向つて建白をなし、或は神武天皇の山陵荒廢したるをいたみ、其の二千五百年忌に及び、これを修覆して、寶祚の無窮、武門の繁榮を祈らんことを建白した。天保十一年は、神武紀元二千五百年である。

彼は又蝦夷が日本の國防上、最も重要の地であることをしたゝめ、自ら蝦夷を賜り、その開拓の任に當らんことを乞うた。彼の改革はあらゆる方面に及んだ。一方に於ては、土地の境界を正しくすべく、土地の調査を行ひ、又は弘道館なる學校を設け、文武の業を勵し、又追鳥狩りを催し、武事の實地演習を試みた。

而してしば〱大船を製造せんことを幕府に建白し、又巨砲を鑄り、これが爲には、寺の鐘やら、佛像までも、その資料に供するに至つた。彼の天保改革は、恰も水野忠邦の、幕府に於ける天保改革の先を開いた。而して水野は或意味に於ては、彼を煩しく思ひ、他の意味に於ては、彼を敬遠せんが爲に、將軍の命を以つて、彼に當分水戸に蟄在して、江戸に來るなからしめんとした

彼は天保十四年四月、將軍家慶に從つて、日光廟に至り、五月には將軍親しく彼を召して、彼の治績の大いに擧れるを賞し、寶刀、鞍鐙

及賞金等を賜ひ、いよ〳〵老公の遺志を繼ぎ、誠忠を勵げますべしとの旨を傳へたが、その翌、弘化元年五月には、彼を江戶邸に召還し、驕慢なりとの故をもつて、隱居を命じ、駒込の邸に蟄居せしめた。

然るに彼の謹愼の事情は、やうやく將軍家慶の諒とするところとなり、弘化二年七月頃より彼と老中阿部正弘との往復は漸く行はれ、爾來彼は又阿部を通じて、種々の建白をした。

斯くて嘉永二年齊昭五十歳の時には、將軍自ら小石川の邸に臨み、此處に於て事實上彼と將軍家の間は、漸く元に復した。而して弘化四年九月には、彼の子七郎丸は、老中阿部正弘等の周旋にて、一橋家の養子となり、三卿の一人として、從來水戶家諸公子が、松平氏を稱してゐたが、德川七郎丸と稱するに至つた。

而して嘉永六年六月、ペルリーの浦賀に來るや、彼は老中阿部正弘の問に答へて、種々の建白をなし、又將軍家慶の正に逝かんとするや、外交のことは、宜しく水戶隱居の努力に俟つべしとの遺言によつて、いよ〳〵彼は公然、幕議に參するに至つた。

編輯だより

◇いやでもおうでもいよいよ普選による總選擧がここ數ヶ月の間に決行される。ただ、悔いなき一票を行使してもらひたい。無産政黨もすべての情實を排し、なるべくなら大合同をなし、それが出來ねば總選擧に對しては共同戰線を張るのが必要である。

◇朝鮮總督は山梨君にきまつてしまつたから當分沈默して御手際を拜見しよう。東京市長には西久保君の如き無能者を擧げぬことだ。財政のわかるテキハキした人物が必要である。倫敦市長がデクの棒だからとて我東京市長がデクの棒でよいと云ふ理由はない。五十歳以下の古手役人でないものが必要ではなからうか。

◇本誌新年號は意外の名篇大作が揃つた。德富蘇峰氏の「維新回天史」は本年一パイ連載される。維新史が現下のやうな轉換期にいかなる役割を遂げ得るか。蓋し論壇呼びものの随一たる大雄篇である。

◇それから茲に大衆の讀書慾をそそるのは「新世界の魅惑」である。木戸、田島、吉澤、大石、上原の各權威が一世の名文もてナイル、ニユージランド、カナダロツキイ、アマゾン、奥印度、カムチヤツカ等外界に密閉されたる祕土深境の狀態を開扉展開したのであるから、誰しも一讀すべきである。我誌が昭和三年の劈頭に於て我民衆の前に此一篇を捧げたのはその意の深いものがある。

◇また、伊藤博文公の「大津事變」を手記した珍文獻が同家の筐底から發見された。當時我國の第一の勢威者の記錄だけに彼我兩國の形勢紙上に躍動して、一氣に讀破せしむる感銘深い一篇。

◇實朝熱の高潮せんとするとき斯界の一人者齋藤茂吉君の「源實朝」の一篇は雄偉の氣魄を青年にそそぎ込む。伊豆の海やや沖たばしる等剛健な詞調が昭和に蘇りて春陽に潑剌の新彩を輝映す。

◇その他庭球界の一人者リチヤーヅが含蓄深い一文も好球子の胸を躍らすべく、鏑木清方氏の「美人畫論」の清艷なる「築地明石町」以上との好評がある。

◇論壇には福田、長谷川、帆山、猪俣、駒井氏等各快篇を寄せ、遂に文豪バルビユツスよりは「苦難十年のロシアを觀る」の得がたき寄稿があつた。

◇創作壇には高濱虚子氏十數年ぶりの快心の作を下さつたことは感謝にたへない。前田河、藤森氏は百數十枚の力作、岡本、志賀、岸田、佐藤、武者小路、藤田氏又筆陣を新にして名作を下さつたことを感謝します。

◆本篇を通じて尤もなじみ深かつた堀江歸一博士京都公會堂で講演中俄かに腦溢血の爲めに斃る。いつでも我社の無理なら何でも引き受けてくれられた。そして何事にでも思ひやりの深い財政學の權威であつたが、惜しいことをした。本誌所載の「アダム・スミスの國富論」も土方氏が執筆不能のため倉皇てお願ひしたものであつた。それが絶筆にならうとは夢想はなかつた。どうか我々の長い間の我儘であつたことを許していただきたい。

◆本誌懸賞小説は十二月卅一日〆切後の到着は斷じて受付けませんから、そのおつもりで。

◆「現代日本文學全集」の一月配本は「森鷗外集」と決定。新春早々讀者の御手許に達しますが本集の如きは氏の代表作は殘らず選入りました。九年かかつて譯せられたと云ふ「即興詩人」はじめ、「埋木」、「高瀬舟」、「キタ・セクスアリス」、「雁」、「山椒大夫」、「舞姫」、「うたかたの記」、「文づかひ」、「玉篋兩浦嶼」、「生田川」、「心中」、「阿部一族」、「日蓮聖人辻說法」、それから鷗外全集にもない「古い手帳より」等皆一粒選りです。

◆それから新春早々「改造文庫」を發行します。廉價本の完成を期する爲め第一期に於ては「現代日本文學全集」「マルクス資本論」を選びましたが、今回は一冊十錢を單位として政治、經濟、文學、哲學、思想、美術、百般に通ずる最廉價本を發行。委曲は二月號の本誌に。

◆社會科學一月號は「日本社會主義運動史」號とする。黎明期、勃興期、展開期に分ちて堂々たる內容三百頁以上の大册となります。

◆改造社のマークを募集致します。圖案は改造社の事業を表象する限り自由です。當選者には賞金貳百圓贈呈。締切は一月卅日。發表は四月の文學月報紙上。宛名は改造社出版部マーク募集掛。原稿は一切返戾致しません。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	參錢
半ケ年	參圓	郵稅不要
壹ケ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲増大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和二年十二月十八日　印刷納本
昭和三年一月一日　發行

（價壹圓）（郵稅五錢）

編輯兼發行人　東京市麹町區內幸町一ノ三 大ビルヂング　山本三生
印刷人

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二　秀英舍

發行所　東京麹町區內幸町一ノ三 大ビルヂング一階　改造社
振替東京　八四〇二
電話銀座　營業部（四五五八 五〇四六）
編輯部（一七三三 五五八）